

NetBackup™ 管理者ガイド Vol. 1

UNIX、Windows および Linux

リリース 11.2

NetBackup 管理者ガイド Vol.1

最終更新日: 2026-07-09

法的通知と登録商標

Copyright © 2026 Cohesity, Inc. All rights reserved.

© 2026 Cohesity, Inc. All Rights Reserved. Cohesity、Cohesity ロゴ、その他の Cohesity マークは、Cohesity, Inc. の米国における、および/または国際的な商標です。ここで提供される情報は、Cohesity の機密情報および専有情報であり、(a) 意図された受信者により、(b) 有効なライセンスを受けた Cohesity ソフトウェアおよびサービスと共にのみ使用することができます。Cohesity ライセンスの条項については、www.cohesity.com/agreements を参照してください。

本書は、現状のままで提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。Cohesity およびその関連会社は、本書の提供、パフォーマンスまたは使用に関連する付随的または間接的損害に対して、一切責任を負わないものとします。本書に記載の情報は、予告なく変更される場合があります。

Cohesity サポート

Cohesity サポートへのお問い合わせ

Cohesity サポートケースを作成するには、いくつかの方法があります。

- [Cohesity サポート](#) に移動してベリタスのナレッジベースで検索するか、電話で問い合わせます (米国およびカナダ: 1-855-9CO-HESI (926-4374)、オプション 2)。
- [Cohesity サポートポータル](#) にログインして、新しいケースを作成します。
- Cohesity UI の (?) アイコンをクリックし、[サポートポータル (Support Portal)] を選択します。

サポートおよびサービスアシスタンス

最初に、サービスおよびサポートを契約したサービスプロバイダにお問い合わせください。Cohesity と直接連携している場合や、製品の保証や資格、修理の価格設定、またはテクニカルサポートに関連する質問がある場合は、以下のオプションを参照してください。

- 製品の問題に対するソリューションや、提案およびベストプラクティスを見つけるには、[Cohesity ナレッジベース](#) を参照してください。
- [Cohesity サポートポータル](#) にログインして、新しいケースを作成します。
- オープン中のケースを監視するには、ポータルにログインし、ホームページの[ケース (Cases)] タブをクリックします。このページには、すべてのケースの状態と更新が表示されるはずです。個々のケースの状態を表示することもできます。

パートナーのハードウェアで実行されている Cohesity ソフトウェア

認定されたサードパーティ製ハードウェアで動作する Cohesity ソフトウェアの場合、次のサポートワークフローが適用されます。

1. ハードウェアの問題であると判断できない場合は、まず **Cohesity** サポートにお問い合わせください。

メモ: Cohesity はパートナーのハードウェアの交換要求を処理できません。

2. **Cohesity** サポートは問題の優先順位を判断します。ソフトウェアの問題の場合、**Cohesity** サポートは引き続きこの問題に取り組めます。
3. ハードウェアまたはファームウェアの問題であるかその可能性がある場合、**Cohesity** は問題に関する情報をお客様に提供し、適切なパートナーに対するサポートチケットを発行するようお客様に依頼します。
4. **Cohesity** サポートは必要に応じて、パートナーとお客様との三者通話に参加できます。
5. お客様がパートナーのケースの進捗状況を **Cohesity** サポートに通知します。

目次

第 1 部	NetBackup について	34
第 1 章	NetBackup インターフェースの概要	35
	NetBackup について	35
	NetBackup のマニュアル	37
	NetBackup 管理インターフェース	37
	NetBackup ホスト用のセキュリティ証明書について	38
	UNIX での NetBackup 管理コンソールの設定について	38
	バージョンの異なるリモートサーバーの管理	39
	NetBackup 管理コンソールへのログイン	40
	NetBackup Web UI の使用	43
第 2 部	ホストの構成	47
第 2 章	ホストプロパティの構成	48
	NetBackup の[ホストプロパティ (Host properties)]について	50
	NetBackup の構成オプションを設定する方法	50
	ホストに接続してホストプロパティを表示する	51
	複数のホストのホストプロパティの同時変更	52
	ホストプロパティのエクスポート	53
	[アクセス制御 (Access Control)]プロパティ	53
	アクセス制御プロパティの[認証ドメイン (Authentication Domain)]タブ	54
	アクセス制御プロパティの[認可サービス (Authorization Service)]タブ	55
	アクセス制御プロパティの[ネットワーク属性 (Network Attributes)]タブ	55
	[Active Directory]プロパティ	57
	[帯域幅 (Bandwidth)]プロパティ	57
	帯域幅制限の使用上の注意事項と制限	58
	[帯域幅 (Bandwidth)]プロパティの[帯域幅の設定の追加 (Add Bandwidth Settings)]ダイアログボックス	59
	バックアッププールホストのプロパティ	59
	[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]プロパティ	61

ホストプロパティでの[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]の有効化	63
[クリーンアップ (Clean up)]プロパティ	64
[クライアント名 (Client name)]プロパティ	65
[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティ	66
[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティの[全般 (General)] タブ	68
[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティの[接続オプション (Connect options)]タブ	73
[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティの[Windows Open File Backup]タブ	74
UNIX クライアントの[クライアントの設定 (Client settings)]プロパティ	77
[増分バックアップに VxFS ファイル変更ログ (FCL) を使用する (Use VxFS File Change Log (FCL) for incremental backups)]プロ パティ	79
Windows クライアントの[クライアントの設定 (Client settings)]プロパティ	81
NetBackup 環境における変更ジャーナル機能の使用の有効性を判 断する方法	84
NetBackup によって変更ジャーナル機能を使う場合のガイドライン	85
[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティ	86
[クレデンシャルアクセス (Credential access)]プロパティ	87
[データの分類 (Data Classification)]プロパティ	88
データ分類の追加	89
[デフォルトのジョブの優先度 (Default job priorities)]プロパティ	90
ジョブの優先度の設定について	91
[分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed application restore mapping)]プロパティ	92
[暗号化 (Encryption)]プロパティ	93
Windows クライアント向けのその他の暗号化方法	94
[Enterprise Vault]プロパティ	95
[Enterprise Vault ホスト (Enterprise Vault hosts)]プロパティ	96
[Exchange]プロパティ	97
クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシャルにつ いて	98
[エクスクルードリスト (Exclude list)]プロパティ	99
[エクスクルードリストへの追加 (Add to Exclude List)]と[エクスクルー ドリストへ例外を追加 (Add Exceptions to Exclude List)]ダイア ログボックスについて	101
エクスクルードリストへのエントリの追加	102
エクスクルードリストへの例外の追加	102
エクスクルードリストの構文規則	103

UNIX クライアントでのインクルードリストの作成について	105
エクスクルード対象ディレクトリの全検索	106
[ファイバートランスポート (Fibre Transport)]プロパティ	107
Linux 並列 FT 接続について	109
[ファイアウォール (Firewall)]プロパティ	110
[一般的なサーバー (General server)]プロパティ	112
リストアでの特定のサーバーの使用	114
[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ	115
並列実行ジョブの数への影響について	118
mailx 電子メールクライアントの設定	120
[ログ (Logging)]プロパティ	120
ログレベル	122
Lotus Notes プロパティ	124
[メディア (Media)]プロパティ	126
メディアの上書きが禁止された結果	131
[SCSI RESERVE の有効化 (Enable SCSI reserve)]プロパティの 推奨する使用方法	131
ネットワークのプロパティ	132
[ネットワーク設定 (Network settings)]プロパティ	133
[ホスト名の逆引き参照 (Reverse host name lookup)]プロパティ	133
[IP アドレスファミリーを使用する (Use the IP address family)]プロ パティ	135
[ポートの範囲 (Port ranges)]プロパティ	135
登録ポートと動的割り当てポート	137
[優先ネットワーク (Preferred network)]プロパティ	137
優先ネットワーク設定の追加または編集	140
どのネットワークを使うかを判断するために NetBackup で指示句を使 う方法	142
IPv6 ネットワークを使う構成	145
IPv4 ネットワークを使う構成	147
[優先ネットワーク (Preferred network)]プロパティでの指示句の処理 順序	148
優先ネットワークの情報を表示する bptestnetconn ユーティリティ	149
指定されたアドレスの使用を禁止する構成	151
指定されたアドレスを優先する構成	151
NetBackup を 1 つのアドレスセットに制限する構成	152
アドレスは制限するが、すべてのインターフェースを許可する構成	153
ホストプロパティのプロパティ設定	154
[RHV アクセスホスト (RHV access hosts)]プロパティ	154
[耐性ネットワーク (Resilient network)]プロパティ	155

クライアントの耐性の状態の表示	157
耐性ジョブについて	157
耐性が高い接続のリソース使用量	158
クライアントへの耐性のある接続の指定	159
[リソース制限 (Resource limit)] プロパティ	160
[リストアのフェールオーバー (Restore failover)] プロパティ	161
リストア用のフェールオーバーサーバーとしての代替メディアサーバー の割り当て	162
[保持期間 (Retention periods)] プロパティ	163
保持期間の変更	164
ボリュームの保持期間の特定	165
[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)] プロパティ	166
帯域幅スロットルの詳細設定	167
帯域幅スロットルの詳細設定	168
[サーバー (Servers)] プロパティ	169
サーバーリストへのサーバーの追加	171
サーバーリストからのサーバーの削除	172
NetBackup のクラスタ化されたプライマリサーバーのノード間認証の 有効化	172
信頼できるプライマリサーバーについて	173
クライアントのバックアップと復元を実行するプライマリサーバーの変更	177
[SharePoint] プロパティ	178
SharePoint Server の一貫性チェックのオプション	179
[SLP 設定 (SLP settings)] プロパティ	179
Storage Lifecycle Manager を使ったバッチ作成ログックについて	184
[スロットル帯域幅 (Throttle bandwidth)] プロパティ	185
[タイムアウト (Timeouts)] プロパティ	186
[ユニバーサル設定 (Universal settings)] プロパティ	189
[ユーザーアカウント設定 (User account settings)] プロパティ	191
NetBackup ユーザーセッションの終了	192
NetBackup ユーザーのロック解除	193
アイドル状態のセッションがタイムアウトになるタイミングを構成する	193
並列ユーザーセッションの最大数の構成	194
失敗したサインインの試行の最大数を構成する	194
ユーザーがサインインするときのバナーの表示	195
[UNIX クライアント (UNIX client)] プロパティ	196
[UNIX サーバー (Unix Server)] プロパティ	196
[VMware アクセスホスト (VMware access hosts)] プロパティ	197
[Windows クライアント (Windows client)] プロパティ	198
ホストプロパティで見つからない構成オプション	198

UNIX または Linux クライアントおよびサーバーにおけるコマンドを使用し た構成オプションの変更について	198
NetBackup サーバーの構成オプション	199
NetBackup サーバーの ALLOW_MEDIA_OVERWRITE オプション	200
NetBackup サーバーの AUTO_ADD_ALL_ALIASES_FOR_CLIENT オプション	200
NetBackup サーバーの BPBRM_VERBOSE オプション	201
NetBackup サーバーとクライアントの BPCD_ALLOWED_PATH オ プション	202
Linux プライマリサーバーの BPDBJOBS_COLDEFS オプション	203
NetBackup サーバーの BPDBM_VERBOSE オプション	206
NetBackup サーバーの BPRD_VERBOSE オプション	207
NetBackup サーバーの BPTM_VERBOSE オプション	209
NetBackup サーバーの BPEND_TIMEOUT オプション	210
NetBackup サーバーの BPSTART_TIMEOUT オプション	210
NetBackup サーバーの CHECK_RESTORE_CLIENT オプション	211
NetBackup サーバーの CLIENT_CONNECT_TIMEOUT オプショ ン	212
NetBackup サーバーとクライアントの CLIENT_PORT_WINDOW オ プション	212
NetBackup サーバーの CLIENT_READ_TIMEOUT オプション	213
NetBackup サーバーの CLOUD_AUTODISCOVERY_INTERVAL	215
クラスタ化されたプライマリサーバーの CLUSTER_ECA_CERT_PATH	215
クラスタ化されたプライマリサーバーの CLUSTER_ECA_KEY_PASSPHRASEFILE	216
クラスタ化されたプライマリサーバーの CLUSTER_ECA_PRIVATE_KEY_PATH	217
クラスタ化されたプライマリサーバーの CLUSTER_ECA_TRUST_STORE_PATH	217
NetBackup プライマリサーバーの COMPUTE_IMAGE_ENTROPY	218
NetBackup サーバーの CONNECT_OPTIONS オプション	219
NetBackup プライマリサーバーの DATAACCESS_AUDIT_INTERVAL_HOURS	221
NetBackup サーバーの DEFAULT_CONNECT_OPTIONS オプショ ン	222

NetBackup のサーバーとクライアントの DISABLE_CERT_AUTO_RENEW オプション	223
NetBackup サーバーの DISABLE_JOB_LOGGING オプション	224
NetBackup サーバーの DISABLE_STANDALONE_DRIVE_EXTENSIONS オプション	225
NetBackup サーバーの DISALLOW_BACKUPS_SPANNING_MEDIA オプション	225
NetBackup サーバーの DISALLOW_CLIENT_LIST_RESTORE オ プション	226
NetBackup サーバーの DISALLOW_CLIENT_RESTORE オプショ ン	227
NetBackup のサーバーとクライアントの DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES オプション	227
NetBackup サーバーの DTE_IGNORE_IMAGE_MODE	231
NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CERT_PATH	231
NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CRL_CHECK	235
NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CRL_PATH	236
NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CRL_PATH_SYNC_HOURS	237
NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CRL_REFRESH_HOURS	238
NetBackup サーバーとクライアントの ECA_DISABLE_AUTO_ENROLLMENT	239
NetBackup サーバーとクライアントの ECA_DR_BKUP_WIN_CERT_STORE	240
NetBackup サーバーとクライアントの ECA_KEY_PASSPHRASEFILE	241
NetBackup サーバーとクライアントの ECA_PRIVATE_KEY_PATH	241
NetBackup サーバーとクライアントの ECA_TRUST_STORE_PATH	243
NetBackup のサーバーとクライアントの EAT_VERBOSE オプション	244
NetBackup サーバーとクライアントの ECA_WIN_CERT_STORE_TIME_LAG_MINUTES	245
サーバーの ECMS_HOSTS_SECURE_CONNECT_ENABLED	246
NetBackup サーバーとクライアントの ENABLE_CRITICAL_PROCESS_LOGGING	247
サーバーの ENABLE_DIRECT_CONNECTION	248

NetBackup サーバーとクライアントの ENABLE_NBSQLADM オプション	248
NetBackup サーバーの FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVERS オプション	249
NetBackup サーバーとクライアントの FETCH_MSDP_EKMS_KEY	250
NetBackup サーバーの FORCE_RESTORE_MEDIA_SERVER オプション	251
NetBackup サーバーとクライアントの GENERATE_ENGLISH_LOGS オプション	252
NetBackup サーバーの GUI_ACCOUNT_LOCKOUT_DURATION オプション	253
NetBackup サーバーの GUI_IDLE_TIMEOUT オプション	253
NetBackup サーバーの GUI_MAX_CONCURRENT_SESSIONS オプション	254
NetBackup サーバーの GUI_MAX_LOGIN_ATTEMPTS オプション	255
NetBackup サーバーとクライアントの HOSTDB_RESYNC_INTERVAL オプション	255
NetBackup サーバーの HYPERV_WMI_CREATE_DISK_TIMEOUT オプション	256
NetBackup サーバーとクライアントの INCOMPLETE_JOB_CLEAN_INTERVAL オプション	257
NetBackup サーバーとクライアントの INITIAL_BROWSE_SEARCH_LIMIT オプション	258
サーバーの INITIATE_REVERSE_CONNECTION	258
NetBackup サーバーの IP_ADDRESS_FAMILY オプション	259
NetBackup サーバーとクライアントの JOB_PRIORITY オプション	260
NetBackup サーバーとクライアントの KEEP_LOGS_SIZE_GB	262
NetBackup プライマリサーバーの KMS_CONFIG_IN_CATALOG_BKUP	264
NetBackup サーバーの LIMIT_BANDWIDTH オプション	264
NetBackup サーバーの MALWARE_DETECTION_JOBS_PER_SCAN_HOST オプション	264
MALWARE_SCAN_OPERATION_TIMEOUT	265
NetBackup プライマリサーバーの MANAGE_WIN_CERT_STORE_PRIVATE_KEY オプション	266
NetBackup サーバーとクライアントのレガシーログに関する MAX_LOGFILE_SIZE オプション	267

NetBackup サーバーとクライアントのレガシーログに関する MAX_NUM_LOGFILES オプション	268
NetBackup サーバーの MEDIA_UNMOUNT_DELAY オプション	269
NetBackup サーバーの MEDIA_REQUEST_DELAY オプション	270
NetBackup サーバーの MEDIA_SERVER オプション	270
NetBackup サーバーの MINIMUM_DEFERRAL_CACHE_FREE_SPACE_MB オプ ション	271
NetBackup サーバーの MPX_RESTORE_DELAY オプション	272
NetBackup サーバーの MUST_USE_LOCAL_DRIVE オプション	273
サーバーの NAT_SERVER_LIST	273
NetBackup サーバーとクライアントの NB_FIPS_MODE オプション	274
NetBackup サーバーとクライアントの NBFP_CHECK オプション	275
NetBackup サーバーの NBRNTD_IDLE_TIMEOUT オプション	275
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_POLL_INTERVAL オプション	276
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_DUMP_COUNT オプション	277
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_MONITOR_CPU オプション	277
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_MONITOR_MEMORY オプション	278
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_MEMORY_UNIT オプション	279
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_MONITOR_DEADLOCK オプション	280
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_DEADLOCK_INTERVAL オプション	280
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_ALWAYS_DUMP オプション	281
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_CAPTURE_PROCESS_DUMP オプション	282
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_INCREASE_LOG_LEVEL オプション	282
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_CAPTURE_NETWORK_STAT オプション	283

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_CAPTURE_DISK_IO オプション	284
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_NUMBER_OF_READINGS オプション	284
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_READING_INTERVAL オプション	285
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_PURGE_OLD_EVIDENCE オプション	286
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_CAPTURE_WITHOUT_THRESHOLD オプション	286
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_JDK_HOME オプ ション	287
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_EVIDENCE_PATH オプション	288
NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_VERBOSE オプ ション	288
NetBackup サーバーとクライアントの NBSD_AUTO_MONITOR オ プション	289
NetBackup サーバーとクライアントの NBSD_AUTOMONITOR_CPU_THRESHOLD オプション	290
NetBackup サーバーとクライアントの NBSD_AUTOMONITOR_MEMORY_THRESHOLD オプショ ン	290
プライマリサーバーの NBSD_MONITOR_POLICY_NAME オプショ ン	291
NetBackup サーバーとクライアントの NBSD_MONITOR_SYSTEM_FOR_HOURS オプション	292
NetBackup サーバーとクライアントの NBSD_EVIDENCE_SIZE_LIMIT オプション	293
NetBackup サーバーとクライアントの NBSD_PUSH_MONITOR_DATA_TO_REMOTE オプション	293
NetBackup プライマリサーバーの NETBACKUP_NATIVE_AUDITING オプション	294
NetBackup サーバーの NOTIFY_SNOOZE_PERIOD_IN_DAYS オプション	295
NetBackup サーバーの PREFERRED_NETWORK オプション	296
NetBackup サーバーとクライアントの RANDOM_PORTS オプション	310
NetBackup サーバーの RE_READ_INTERVAL オプション	311
NetBackup サーバーの REQUIRED_NETWORK オプション	311

NetBackup サーバーの	
RESILIENT_BACKUP_JOB_DEFERRAL_CACHE_FILE_PATH	
オプション	312
NetBackup サーバーの	
RESILIENT_BACKUP_JOB_RESTART_TIMEOUT オプショ	
ン	313
NetBackup プライマリサーバーおよびクライアントの	
RESILIENT_NETWORK オプション	314
RESILIENT_RETRY_INTERVAL	315
NetBackup サーバーの	
RESUME_ORIG_DUP_ON_OPT_DUP_FAIL オプション	316
NetBackup サーバーとクライアントの REVERSE_NAME_LOOKUP	
オプション	317
NetBackup のサーバーとクライアントの	
SECURE_PROXY_CIPHER_LIST オプション	317
NetBackup サーバーの SERVER オプション	318
NetBackup サーバーの SERVER_CONNECT_TIMEOUT オプショ	
ン	321
NetBackup サーバーの SERVER_PORT_WINDOW オプション	
.....	321
NetBackup サーバーとクライアントの	
SERVER_RESERVED_PORT_WINDOW オプション	322
NetBackup サーバーの SKIP_RESTORE_TO_SYMLINK_DIR オ	
プション	323
NetBackup プライマリサーバーの SYSLOG_AUDIT_CATEGORIES	
.....	325
NetBackup プライマリサーバーの	
SYSLOG_AUDIT_USE_OCSF_FORMAT	325
NetBackup サーバーの TELEMETRY_UPLOAD オプション	326
NetBackup クライアントの IPv6 アドレスの規則	328
NetBackup サーバーの TRUSTED_PRIMARY オプション	330
NetBackup サーバーの ULINK_ON_OVERWRITE オプション	331
NetBackup サーバーとクライアントの USE_URANDOM	333
NetBackup サーバーとクライアントの VERBOSE オプション	333
NetBackup サーバーとクライアントの	
VIRTUALIZATION_CRL_CHECK	334
サーバーとクライアントの	
VIRTUALIZATION_HOSTS_SECURE_CONNECT_ENABLED	
.....	335
サーバーとクライアントの	
VIRTUALIZATION_HOSTS_CONNECT_TIMEOUT	336
NetBackup サーバーの VMWARE_AUTODISCOVERY_INTERVAL	
オプション	337

NetBackup のサーバーとクライアント用の	
VM_SNAPSHOT QUIESCE STATUS オプション	338
NetBackup サーバーとクライアントの	
VMWARE_TLS_MINIMUM_V1_2	339
NetBackup サーバーの WEB_SERVER_TUNNEL_ENABLE オプ	
ション	340
NetBackup クライアントの構成オプション	341
クライアントの ACCEPT_REVERSE_CONNECTION	341
NetBackup クライアントの APP_PROXY_SERVER オプション	342
NetBackup クライアントの BACKUP_BTRFS_SNAPSHOT オプショ	
ン	342
NetBackup クライアントの BACKUP_FIFO_FILES オプション	343
NetBackup クライアントの BPARCHIVE_POLICY オプション	344
NetBackup クライアントの BPARCHIVE_SCHED オプション	345
NetBackup クライアントの BPBACKUP_POLICY オプション	346
NetBackup クライアントの BPBACKUP_SCHED オプション	347
NetBackup クライアントの BUSY_FILE_ACTION オプション	347
NetBackup クライアントの BUSY_FILE_DIRECTORY オプション	
.....	348
NetBackup クライアントの BUSY_FILE_NOTIFY_USER オプション	
.....	349
NetBackup クライアントの BUSY_FILE_PROCESSING オプション	
.....	350
NetBackup クライアントの CLIENT_NAME オプション	350
NetBackup クライアントの COMPRESS_SUFFIX オプション	351
NetBackup クライアントの CRYPT_CIPHER オプション	352
NetBackup クライアントの CRYPT_KIND オプション	353
NetBackup クライアントの CRYPT_OPTION オプション	354
NetBackup クライアントの CRYPT_STRENGTH オプション	355
NetBackup クライアントの CRYPT_LIBPATH オプション	356
NetBackup クライアントの CRYPT_KEYFILE オプション	357
NetBackup クライアントの DO_NOT_RESET_FILE_ACCESS_TIME	
オプション	358
クライアントの DTE_CLIENT_MODE	359
クライアントの ENABLE_DATA_CHANNEL_ENCRYPTION	360
NetBackup クライアントの IGNORE_XATTR オプション	361
NetBackup クライアントの INFORMIX_HOME オプション	364
NetBackup クライアントの KEEP_DATABASE_COMM_FILE オプ	
ション	364
NetBackup クライアントの KEEP_LOGS_DAYS オプション	365
NetBackup クライアントの LIST_FILES_TIMEOUT オプション	366
NetBackup クライアントの LOCKED_FILE_ACTION オプション	367
NetBackup クライアントの MEDIA_SERVER オプション	367

	NetBackup クライアントの MEGABYTES_OF_MEMORY オプション	368
	SQL Server クライアントの MSSQL_CONFIG_LIST	369
	SQL Server クライアントの MSSQL_ODBC_ENCRYPT_CONNECTION	370
	SQL Server クライアントの MSSQL_ODBC_PREFERRED_DRIVER	371
	SQL Server クライアントの MSSQL_ODBC_TRUST_SERVER_CERTIFICATE	372
	NetBackup クライアントの NFS_ACCESS_TIMEOUT オプション	373
	NetBackup クライアントの OLD_VNETD_CALLBACK オプション	374
	NetBackup クライアントの REPORT_CLIENT_DISCOVERIES オプ ション	375
	NetBackup クライアントの RESTORE_RETRIES オプション	375
	NetBackup クライアントの RMAN_OUTPUT_DIR	376
	NetBackup クライアント側。	377
	クライアントの SUBSCRIBER_HEARTBEAT_TIMEOUT	379
	NetBackup クライアントの SYBASE_HOME オプション	379
	NetBackup クライアントの USE_CTIME_FOR_INCREMENTALS オプション	380
	NetBackup クライアントの USE_FILE_CHG_LOG オプション	381
	NetBackup クライアントの USEMAIL オプション	382
	NetBackup クライアントの WEB_SERVER_TUNNEL オプション	382
	NetBackup クライアントの WEB_SERVER_TUNNEL_USE オプショ ン	383
第 3 章	サーバーグループの構成	385
	NetBackup サーバーグループについて	385
	サーバーグループの追加	385
	サーバーグループの削除	386
第 4 章	NetBackup での NAT クライアントと NAT サーバー のサポートの有効化	388
	NetBackup での NAT サポートについて	388
	重要な注意事項	390
	NetBackup ドメイン内の NAT ホストを有効にするワークフロー	391
	NetBackup Messaging Broker サービスの構成	392
	PBX ポートを使用するための NetBackup Messaging Broker サービ スの構成	393

	NetBackup からの NAT サポートの削除	394
	NAT クライアント以外のクライアントとの通信	395
	NAT サポートのパフォーマンス特性	395
第 5 章	ホストクレデンシャルの構成	396
	クレデンシャルの構成について	396
	NetBackup でのスナップショットの管理サーバーの構成について	397
	NetBackup での Snapshot Manager サーバーの登録	397
	NetBackup での Snapshot Manager プラグインの構成	399
第 6 章	メディアサーバーの管理	401
	メディアサーバーの有効化または無効化	401
	メディアサーバーの追加	402
	メディアサーバーの登録	403
	メディアサーバーからのすべてのデバイスの削除	404
	NetBackup データベースからのデバイスホストの削除	407
	メディアサーバーの廃止について	407
	廃止の制限事項について	408
	メディアサーバーを廃止する前に	409
	廃止後の推奨事項	409
	廃止処理	410
	メディアサーバーへの参照のプレビュー	413
	メディアサーバーの廃止	414
第 3 部	ストレージの構成	417
第 7 章	ディスクストレージの構成	418
	BasicDisk ストレージの構成について	418
	ディスクプールストレージの構成について	418
	NetBackup の MSDP ディスクプールの構成	419
	NetBackup の重複排除用ディスクプールについて	419
	重複排除のディスクプールの構成	420
	メディアサーバー重複排除プールの管理	422
第 8 章	ロボットおよびテープドライブの構成	429
	NetBackup のロボット形式	430
	デバイスマッピングファイルについて	431
	デバイスマッピングファイルのダウンロード	431
	NetBackup のロボットとテープドライブの構成について	432
	デバイスの検出について	433

デバイスのシリアル化について	434
検出されないデバイスの追加について	435
ロボット制御について	435
ドライブ名規則について	436
ロボットとテープドライブのウィザードの使用による構成	437
ウィザードによるデバイス構成の更新	437
手動での NetBackup へのロボットの追加	438
ロボットのプロパティおよび構成オプション	440
ロボットの管理	443
ロボットのプロパティの変更	443
ロボットの削除	443
新しいメディアサーバーへのロボットとメディアの移動	444
手動での NetBackup へのテープドライブの追加	445
テープドライブの構成オプション	447
ドライブ名規則の構成	450
テープドライブパスの追加	451
ドライブパスの SCSI RESERVE について	452
ドライブパスのオプション	452
UNIX の非巻き戻しデバイスファイルについて	454
NetBackup 環境への共有テープドライブの追加	454
Windows ホストのテープドライブと SCSI アドレスの相関	454
UNIX ホストでのテープデバイスとデバイスファイルの関連付け	456
UNIX のデバイス相関の例	457
テープドライブの管理	457
ドライブコメントの変更	458
停止したドライブについて	458
ドライブの操作モードの変更	459
テープドライブパスの変更	459
ドライブパスのオプション	460
ドライブパスの操作モードの変更	461
テープドライブのプロパティの変更	462
テープドライブの共有ドライブへの変更	462
デバイスモニターからのテープドライブのクリーニング	463
ドライブの削除	464
ドライブのリセット	464
ドライブのマウント時間のリセット	465
ドライブをクリーニングする間隔の設定	465
ドライブの詳細の表示	466
デバイスの診断の実行	466
ロボットの診断テストの実行	466
テープドライブの診断テストの実行	467
オペレータの操作が必要な診断テスト手順の管理	468
診断テスト手順の詳細な情報の取得	469

デバイス構成の検証	469
パスの自動修正について	469
パスの自動修正の有効化	470
デバイスの交換	470
デバイスのファームウェアの更新	472
NetBackup Device Manager について	473
UNIX での NetBackup で制御されているデバイスへの外部アクセスにつ いて	473
Device Manager の停止と再起動	474

第 9 章

テープメディアの構成	475
NetBackup テープボリュームについて	476
NetBackup ボリュームプールについて	476
予約済みのボリュームのプール名の接頭辞について	477
スクラッチボリュームプールについて	478
NetBackup ボリュームグループについて	479
NetBackup のメディア形式	480
WORM メディアについて	482
WORM メディアを管理するボリュームプールの使用について	482
一意のドライブおよびメディア形式を使用した WORM メディアの管理 について	484
WORM ボリュームプール名の検証の無効化	484
WORM メディアと Quantum ドライブについて	485
サポート対象の WORM ドライブ	485
ボリュームの追加について	486
ロボットボリュームの追加について	486
スタンドアロンボリュームの追加について	486
メディア名および属性ルール構成について	487
ボリュームの追加	488
ボリュームのプロパティ	489
メディアの設定ルールについて	492
メディアの設定の構成	492
メディアの設定のオプション	494
バーコードについて	501
バーコード規則について	503
バーコード規則の構成	505
バーコード規則の設定	506
メディア ID 生成規則の作成について	507
メディア ID 生成規則の構成	508
メディア ID の生成オプション	511
メディア形式のマッピングルールについて	512
メディア形式のマッピングの構成	513

メディア形式のマッピングエントリの追加について	515
デフォルトのメディア形式と利用可能なメディア形式	515
ボリュームの管理	519
ボリュームのグループの変更	519
グループ間でボリュームを移動する規則について	520
ボリュームの所有者の変更	520
ボリュームの編集	521
ボリュームの割り当てと割り当て解除について	521
ボリュームの削除	522
ボリュームの消去	523
ボリュームの交換について	525
凍結されたメディアについて	526
ボリュームの取り込みと取り出しについて	528
バーコードの再スキャンと更新について	530
NetBackup ボリュームのラベル付けについて	532
ボリュームの移動について	533
ボリュームの再利用について	535
ボリュームの一時停止、または一時停止の解除	537
ボリュームプールの管理	537
ボリュームプールの追加	538
ボリュームプールの編集または削除	538
ボリュームプールのプロパティ	539
ボリュームグループの管理	540
ボリュームグループの移動	540
ボリュームグループの削除	541
メディア共有について	542
無制限のメディア共有の構成	543
サーバグループとのメディア共有の構成	543

第 10 章

ロボットのインベントリ	545
ロボットインベントリについて	545
ロボットのインベントリを実行するタイミング	546
ロボットの内容の表示について	549
API ロボットのインベントリ結果について	550
ロボットのメディアの表示	550
ボリューム構成とロボットの内容の比較について	551
ボリュームの構成とロボットのメディアの比較	552
ボリューム構成の変更のプレビューについて	552
ロボットのボリューム構成の変更のプレビュー表示	553
NetBackup ボリュームの構成の更新について	554
ボリュームの更新の前提条件	555
ロボットの内容に合わせた NetBackup ボリュームの構成の更新	555

ロボットインベントリオプション	556
vmphyinv 物理インベントリユーティリティについて	557
vmphyinv による物理インベントリの実行方法	559

第 11 章

ストレージユニットの構成	564
--------------------	-----

ストレージについて	564
ストレージユニットの作成	565

ストレージユニットをコピーすることによるストレージユニットの作成 ...

5

6

8

ストレージユニットの設定の編集	569
ストレージユニットの削除	570
テープストレージユニットに関する注意事項	570
ディスクストレージユニットに関する注意事項	571
NDMP ストレージユニットに関する注意事項	577
ストレージユニットの設定について	578
ストレージユニットのディレクトリへの絶対パス名またはボリューム設定 への絶対パス名	578
[密度 (Density)]ストレージユニット設定	579
[ディスク形式 (Disk type)]ストレージユニット設定	579
[ブロック共有の有効化 (Enable block sharing)]ストレージユニット設 定	580
[多重化を有効にする (Enable multiplexing)]ストレージユニット設定	580
[高水準点 (High Water Mark)]ストレージユニット設定	580
[低水準点 (Low Water Mark)]ストレージユニット設定	581
最大並列書き込みドライブ数のストレージユニット設定	582
[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]ストレージユ ニット設定	582
[ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)]ス トレージユニット設定	585
[メディアサーバー (Media Server)]ストレージユニット設定	585
NDMP[NDMP ホスト (NDMP host)]ストレージユニット設定	588
[オンデマンドのみ (On demand only)]ストレージユニット設定	588
[次のメディアサーバーのみ使用する (Only use the following media servers)]ストレージユニット設定	588
[ストレージユニットの変更 (Change Storage Units)]ダイアログボックス の[プロパティ (Properties)]オプション	589
[フラグメントサイズの縮小 (Reduce fragment size to)]ストレージユ ニット設定	591
[ロボット番号 (Robot number)]ストレージユニット設定	592
[ロボット形式 (Robot type)]ストレージユニット設定	592

[ディスクプールの選択 (Select disk pool)]ストレージユニット設定	592
[ストレージユニットの変更 (Change Storage Unit)]ダイアログ上の[ステー ジングスケジュール (Staging Schedule)]のオプション	593
ストレージユニットの[ストレージデバイス (Storage device)]設定	593
[ストレージユニット名 (Storage unit name)]設定	593
[ストレージユニット形式 (Storage unit type)]設定	594
[一時的なステージング領域を有効にします (Enable temporary staging area)]ストレージユニット設定	594
[任意のメディアサーバーを使用 (Use any available media server)] ストレージユニット設定	594
WORM 設定の使用	595
ユニバーサル共有の概要	595

第 12 章 バックアップのステージング 597

ステージングバックアップについて	597
ベーシックディスクステージングについて	598
ベーシックディスクステージングストレージユニットの作成	599
BasicDisk ストレージユニットのスケジュールの作成	601
再配置スケジュールでの複数のコピーの構成	602
ディスクステージングストレージユニットのサイズおよび容量	604
BasicDisk ディスクステージングストレージユニットにおける解放可能な領 域の検索	606
[ディスクステージングスケジュール (Disk Staging Schedule)]ダイアログ ボックス	607
再配置スケジュールの手動での開始	612

第 13 章 ストレージユニットグループの構成 613

ストレージユニットグループについて	613
バックアップのストレージユニットグループの作成	614
スナップショットのストレージユニットグループの作成	616
ストレージユニットグループの削除	618
グループでのストレージユニットの選択条件	619
メディアサーバーの負荷分散 (Media server load balancing)	620
ストレージユニットの選択条件の例外	622
ストレージユニットグループでのディスクスパンについて	622

第 4 部	ストレージライフサイクルポリシー (SLP) の構成	623
第 14 章	ストレージライフサイクルポリシーの構成	624
	ストレージライフサイクルポリシーについて	624
	ストレージライフサイクルポリシーの作成	625
	ストレージライフサイクルポリシーの操作の階層の修正	626
	ストレージライフサイクルポリシーの削除	626
	nbstlutil コマンドを使用したライフサイクル操作の管理	628
第 15 章	ストレージ操作	630
	ストレージライフサイクルポリシーに規定する操作形式	630
	SLP の[バックアップ (Backup)]操作	631
	SLP の[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作	632
	SLP の[複製 (Duplication)]操作	633
	SLP の[インポート (Import)]操作	634
	SLP の[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作	635
	[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作が いどこで実行されるかの決定	637
	SLP の[レプリケーション (Replication)]操作	638
	SLP の[スナップショット (Snapshot)]操作	640
	プライマリスナップショットのストレージユニット	641
	プライマリとレプリケーションソースのスナップショットのストレージ ユニット	641
	レプリケーションソースとレプリケーション先のスナップショットのストレ ジユニット	642
	レプリケーション先のスナップショットのストレージユニット	643
	レプリケーションソース、レプリケーション先、ミラーのスナップショットの ストレージユニット	643
	レプリケーション先とミラーのスナップショットのストレージユニット	644
	ストレージのライフサイクルのポリシーのストレージ操作の階層の作成	644
第 16 章	SLP 操作の保持形式	645
	ストレージライフサイクルポリシー操作の保持形式	645
	SLP 操作の[管理対象の容量 (Capacity managed)]保持形式	647
	[管理対象の容量 (Capacity Managed)]保持形式の使用規則およ び推奨事項	648

	[管理対象の容量 (Capacity managed)] 保持形式および SIS をサ ポートするディスク形式	648
	SLP 操作の[コピー後に期限切れにする (Expire after copy)] 保持形式	649
	SLP 操作の[固定 (Fixed)] 保持形式	649
	SLP 操作の[スナップショットの最大限度 (Maximum snapshot limit)] 保 持形式	650
	SLP 操作の[ミラー (Mirror)] 保持形式	650
	SLP 操作の[ターゲットの保持 (Target retention)] 形式	651
第 17 章	ストレージライフサイクルポリシーのオプション	652
	ストレージライフサイクルポリシーの設定	652
	SLP 設定	654
	SLP 操作の[プロパティ (Properties)] タブ	655
	[時間帯 (Window)] タブ	657
	ストレージライフサイクルポリシー操作の新しい時間帯の作成	658
	ストレージライフサイクルポリシー操作の時間帯からの曜日の除外 ... 6 5 9	
	ストレージライフサイクルポリシーの[検証レポート (Validation report)] タブ	661
第 18 章	複数のコピーを作成するストレージライフサイクル ポリシーの使用	662
	ストレージライフサイクルポリシーを使った複数コピーの書き込みについて	662
	操作順序によるコピー順序の決まり方	663
	ライフサイクルの使用による正常なコピーの確実な処理について	663
第 19 章	ストレージライフサイクルポリシーのバージョン	665
	ストレージライフサイクルポリシーのバージョンについて	665
	ストレージライフサイクルの変更およびバージョン管理	666
	ストレージライフサイクルポリシーへの変更が有効になるタイミング	667
	古いストレージライフサイクルポリシーバージョンの削除	668
第 5 部	バックアップの構成	669
第 20 章	バックアップポリシーの作成	670
	ポリシーユーティリティについて	671
	ポリシーの計画	674
	複数のポリシーの 1 つのクライアント例 (Windows)	676

クライアントがポリシーでどのようにグループ分けされるかに影響する ポリシー属性	677
Microsoft 社 DFSR バックアップおよびリストアについて	678
バックアップポリシーの作成	681
ポリシーのスケジュールの追加または変更	682
複数のポリシーの同時変更	683
自動管理ポリシーまたはストレージライフサイクルポリシーについて	684
別のポリシーへのポリシー項目のコピーまたは移動	684
ポリシーのコピーによる新しいポリシーの作成	685
同じポリシーまたは異なるポリシーへのスケジュールのコピー	686
ポリシーからのスケジュール、バックアップ対象またはクライアントの削除	687
ポリシーの[属性 (Attributes)]タブ	687
[ポリシー形式 (Policy type)] (ポリシー属性)	688
[データの分類 (Data classification)] (ポリシー属性)	694
[ポリシーストレージ (Policy storage)] (ポリシー属性)	694
[ポリシーボリュームプール (Policy volume pool)] (ポリシー属性)	698
[チェックポイントの間隔 (分) (Take checkpoints every __ minutes)] (ポリシー属性)	700
[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)] (ポリシー 属性)	704
[ジョブの優先度 (Job priority)] (ポリシー属性)	706
[メディア所有者 (Media Owner)] (ポリシー属性)	707
[開始日時の設定 (Go into effect at)] (ポリシー属性)	707
[NFS をたどる (Follow NFS)] (ポリシー属性)	708
[ネットワークドライブのバックアップ (Backup network drives)] (ポリ シー属性)	709
[クロスマウントポイント (Cross mount points)] (ポリシー属性)	712
[圧縮 (Compression)] (ポリシー属性)	715
[暗号化 (Encryption)] (ポリシー属性)	718
[Bare Metal Restore 用にディザスタリカバリ情報を収集する (Collect disaster recovery information for Bare Metal Restore)] (ポリ シー属性)	720
[True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore information)] (ポリシー属性) (移動検出を行う場合と行わない場 合)	720
[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)] (ポリシー属性)	724
複数の MSDP ノードの使用 (ポリシー属性)	728
クライアント側の重複排除 (ポリシー属性)	729
[個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)] (ポリシー属 性)	729

[アクセラレータを使用する (Use accelerator)](ポリシー属性)	730
[Windows 重複排除ボリュームの最適化バックアップを有効化 (Enable optimized backup of Windows deduplicated volumes)]	751
[キーワード句 (Keyword phrase)](ポリシー属性)	755
[Snapshot Client]および[Replication Director](ポリシー属性)	756
Block Level Incremental (BLI) バックアップを実行する (ポリシー属性)	756
レプリケーションディレクトリを使用 (ポリシー属性)	756
スナップショットバックアップを実行する (ポリシー属性)	758
[Microsoft Exchange 属性 (Microsoft Exchange Attributes)](ポリシー属性)	758
[スケジュール (Schedules)]タブ	759
スケジュールの[属性 (Attributes)]タブ	759
[名前 (Name)](スケジュール属性)	760
[バックアップ形式 (Type of backup)](スケジュール属性)	760
[合成バックアップする (Synthetic backup)](スケジュール属性)	770
[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプション (スケジュールの属性)	771
[カレンダー (Calendar)](スケジュール属性)	773
[間隔 (Frequency)](スケジュール属性)	773
[インスタントリカバリ (Instant Recovery)](スケジュール属性)	775
複数のコピー (スケジュール属性)	776
[ポリシーストレージの選択を上書きする (Override policy storage selection)](スケジュール属性)	781
[ポリシーボリュームプールを上書きする (Override policy volume pool)](スケジュール属性)	782
[メディア所有者を上書きする (Override media owner)](スケジュール属性)	782
[保持 (Retention)](スケジュール属性)	783
[メディアの多重化 (Media multiplexing)](スケジュール属性)	786
[開始時間帯 (Start Window)]タブ	793
ポリシースケジュールでの時間帯の追加、変更、削除	793
スケジュールの期間の例	795
スケジュールからの日付の除外	796
[含める日 (Include Dates)]タブ	797
[含める日 (Include Dates)]タブを使ったスケジュール一覧	798
次に動作するスケジュールを NetBackup が判断する方法	800
午前 0 時をまたぐスケジュール時間帯について	802
開放スケジュールがカレンダーを基準としたスケジュールと間隔を基準としたスケジュールに与える影響	803
NetBackup 管理コンソールでの開放スケジュールの作成	807
バックアップ間隔に影響する実行時の注意事項	808
[クライアント (Clients)]タブについて	809

ポリシー内のクライアントの追加、変更、または削除	809
Hyper-V 仮想マシンの参照	812
[バックアップ対象 (Backup Selections)] タブ	813
ポリシーへのバックアップ対象の追加	813
バックアップ対象リストの検証	822
バックアップ時間を短縮する方法	825
Windows クライアントバックアップのパス規則	826
Windows ディスクイメージ (raw) バックアップのパス規則	829
Windows レジストリバックアップのパス名規則	830
ファイルおよびディレクトリへのハードリンクについて	831
UNIX クライアントバックアップのパス名規則	834
拡張製品を実行するクライアントのパス規則	842
バックアップ対象リストの指示句について	842
デフォルトでバックアップからエクスクルードされているファイル	855
自動バックアップからのファイルのエクスクルードについて	857
Microsoft Windows Backup によってエクスクルードされるファイル	859
[ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] タブ	859
カタログバックアップポリシーの[クリティカルポリシー (Critical policies)] リストへのポリシーの追加	863
Vault ポリシーの作成	864
BigData ポリシーの作成	865
手動バックアップの実行	867
Active Directory の個別バックアップと個別リカバリ	868
Active Directory の NetBackup の個別バックアップと個別リカバリの システム要件	869
Active Directory の個別リストアを可能にするポリシーの作成	869
Active Directory オブジェクトのリストア	871
個別リストアに関する問題のトラブルシューティング	873

第 21 章

合成バックアップ	876
合成バックアップについて	876
合成バックアップとリストアの推奨事項	878
合成完全バックアップ	880
合成累積増分バックアップ	882
合成バックアップのポリシーに表示される必要があるスケジュール	884
合成バックアップ用のポリシーへのクライアントの追加	884
変更ジャーナルおよび合成バックアップ	885
True Image Restore および合成バックアップ	885
アクティビティモニターでの合成バックアップの表示	886
合成バックアップの実行時に生成されるログ	886
合成バックアップとディレクトリおよびファイルの属性	887

第 22 章

複数コピー合成バックアップ方式を使用する場合	887
複数コピー合成バックアップの構成	889
複数コピー合成バックアップの構成変数	889
複数コピー合成バックアップの構成の例	890
最適化された合成バックアップ	891
重複排除の最適化合成バックアップ	891
NetBackup カタログの保護	893
NetBackup カタログについて	893
NetBackup カタログの構成要素	894
NetBackup データベースおよび構成ファイル	895
NetBackup イメージデータベースについて	897
クラウド構成ファイルのカタログバックアップについて	899
カタログバックアップ	900
カタログバックアップ処理	900
NetBackup カタログバックアップを正常に行うための方針	901
NetBackup カタログをバックアップするための前提条件	902
カタログバックアップの構成	903
NetBackup カタログの手動バックアップ	905
カタログバックアップと他のバックアップの同時実行	905
カタログポリシースケジュールの注意事項	906
UNIX での増分カタログバックアップと標準のバックアップの相互作用	907
カタログバックアップが成功したか否かの判断	907
カタログのリカバリ	908
ディザスタリカバリ電子メールおよびディザスタリカバリファイル	908
ディザスタリカバリパッケージ	909
ディザスタリカバリ設定について	910
ディザスタリカバリパッケージを暗号化するパスフレーズの設定	911
カタログのアーカイブとカタログアーカイブからのリストア	914
インテリジェントカタログアーカイブ (ICA) を有効にして .f ファイルの 数を減らす	917
カタログアーカイブポリシーの作成	921
カタログアーカイブコマンド	922
カタログアーカイブの注意事項	924
カタログアーカイブからのイメージの抽出	925
カタログ領域の要件の見積もり	925
UNIX システムにおける NetBackup ファイルサイズの注意事項	927
イメージカタログの移動	927
イメージカタログ圧縮について	929

第 23 章	NetBackup データベースについて	933
	NetBackup データベースのインストールについて	933
	NetBackup プライマリサーバーがインストールされるディレクトリおよび ファイルについて	934
	NetBackup 構成エントリ	937
	NetBackup データベースサーバー管理	937
	NetBackup データベース環境とクラスタ環境	938
	インストール後の作業	939
	NetBackup データベースパスワードの変更	939
	インストール後のデータベースの移動	940
	NetBackup データベースのコピー	942
	手動による NBDB データベースの作成	942
	Windows での NetBackup データベース管理ユーティリティの使用	945
	NetBackup データベース管理ユーティリティの[一般 (General)]タブ	946
	NetBackup データベース管理ユーティリティの[ツール (Tools)]タブ	948
	UNIX での NetBackup データベース管理ユーティリティの使用	952
	[データベースの選択/再起動とパスワードの変更 (Select/Restart Database and Change Password)]メニューオプション	953
	[データベース領域管理 (Database Space Management)]メニュー オプション	954
	[データベースの検証チェックおよび再構築 (Database Validation Check and Rebuild)]メニューオプション	955
	[データベースの移動 (Move Database)]メニューオプション	956
	[データベースのアンロード (Unload Database)]メニューオプション	957
	[バックアップおよびリストアデータベース (Backup and Restore Database)]メニューオプション	957
第 24 章	バックアップイメージの管理	959
	カタログユーティリティについて	959
	カタログユーティリティの検索条件とバックアップイメージの詳細	960
	バックアップイメージの検証	963
	コピーのプライマリコピーへの昇格	964
	バックアップイメージの複製	965
	多重化複製の注意事項	969
	複数のコピー作成中に表示されるジョブ	970
	バックアップイメージを期限切れにする場合	970
	イメージの依存関係の期限切れのクリーンアップについて	971
	バックアップイメージのインポートについて	973
	期限切れイメージのインポートについて	973

	バックアップイメージのインポート: フェーズ I	974
	バックアップイメージのインポート: フェーズ II	975
第 25 章	NetBackup でのデータの変更不可と削除不可の設定	977
	変更不可データと削除不可データについて	977
	変更不可データと削除不可データを構成するためのワークフロー	979
	bpexptime コマンドを使用したストレージからの変更不可イメージの削除	980
	bpexptime コマンドを使用したカタログからの変更不可イメージの削除	981
第 6 部	配備の管理	983
第 26 章	配備の管理	984
	配備ポリシーユーティリティについて	984
	配備ポリシーの管理	985
	配備ポリシーのコピーによる新しい配備ポリシーの作成	990
	[配備の管理 (Deployment management)] の [属性 (Attributes)] タブ	990
	[配備の管理 (Deployment management)] の [スケジュール (Schedules)] タブ	992
	[配備の管理 (Deployment management)] の [セキュリティオプション (Security options)] タブ	993
	配備ポリシーの手動配備	994
	VxUpdate を使用したクライアントから開始するアップグレードの実行	995
	配備ジョブの状態	996
第 7 部	レプリケーションの構成	998
第 27 章	NetBackup のレプリケーションについて	999
	NetBackup レプリケーションについて	999
	NetBackup 自動イメージレプリケーションについて	1000
	1 対多の自動イメージレプリケーションモデル	1002
	自動イメージレプリケーションモデルのカスケード	1002
	複製用のドメインの関係について	1005
	自動イメージレプリケーションのレプリケーショントポロジについて	1005
	自動イメージレプリケーションのレプリケーショントポロジの表示	1007

自動イメージレプリケーションの信頼できるプライマリサーバーについて	1012
自動イメージレプリケーションに必要なストレージライフサイクルポリシーについて	1016
自動イメージレプリケーションのインポートの確認について	1020
自動イメージレプリケーションのセットアップ概要	1021
自動イメージレプリケーションのボリューム変更を解決する方法	1022
自動イメージレプリケーション構成でのレプリケーション関係の削除または置換	1026
ターゲットプライマリドメインでのバックアップからのリストアについて	1041
自動イメージレプリケーションジョブに関するレポート	1042
NetBackup Replication Director について	1043

第 8 部 監視とレポート 1045

第 28 章 NetBackup アクティビティの監視 1046

アクティビティモニターについて	1046
アクティビティモニターオプションの設定	1048
[ジョブ (Jobs)] タブについて	1050
アクティビティモニターでのジョブの詳細の表示	1051
アクティビティモニターにおける完了済みのジョブの削除	1051
アクティビティモニターにおける未完了のジョブの取り消し	1052
アクティビティモニターにおける失敗した (完了した) ジョブの再度実行	1052
アクティビティモニターにおけるジョブの一時停止および再開	1052
アクティビティモニターからのジョブの優先度の動的な変更	1053
[デーモン (Daemons)] タブについて	1054
nbrbutil ユーティリティを使用して、NetBackup Resource Broker を構成します。	1059
NetBackup デーモンの種類	1063
NetBackup デーモンの監視	1064
デーモンの起動または停止	1064
アクティビティモニターでのすべてのメディアサーバーの表示	1065
[プロセス (Processes)] タブについて	1065
[プロセスの詳細 (Process Details)] ダイアログボックスでの NetBackup プロセスの監視	1070
[ドライブ (Drives)] タブについて	1071
テープドライブの監視	1071
アクティビティモニターからのテープドライブのクリーニング	1072
[エラーログ (Error Logs)] タブについて	1072
ジョブデータベースについて	1073

	デフォルトの <code>bpdjobs_options</code> 値の変更	1074
	<code>BPDBJOBS_OPTIONS</code> 環境変数について	1075
	<code>bpdjobs</code> コマンドラインオプション	1077
	<code>bpdjobs</code> デバッグログの有効化	1077
	デバイスモニターについて	1078
	メディアマウントエラーについて	1079
	保留中の要求および操作について	1080
	ストレージユニットに対する保留中の要求について	1080
	保留中の要求の解決	1081
	保留中の操作の解決	1082
	保留中の要求の再送信	1082
	保留中の要求の拒否	1083
第 29 章	NetBackup のレポート	1084
	レポートユーティリティについて	1084
	レポートの実行	1087
	別の文書へのレポートテキストのコピー	1087
	レポートの保存またはエクスポート	1088
	レポートの印刷	1088
第 30 章	電子メール通知	1089
	失敗したバックアップについてのバックアップ管理者への通知の送信	1089
	バックアップについてホスト管理者に通知を送信する	1090
	Windows ホストでの <code>nbmail.cmd</code> スクリプトの構成	1090
	KMS 証明書の有効期限についての通知を送信	1092
第 9 部	NetBackup の管理	1093
第 31 章	管理トピック	1094
	NetBackup Client Service の構成	1094
	NetBackup で使用される測定単位	1095
	NetBackup 命名規則	1096
	NetBackup でのワイルドカードの使用	1097
第 32 章	リモートサーバーへのアクセス	1100
	リモートサーバーにアクセスするための前提条件	1100
	別のサーバーへのアクセスを許可する	1101
	一方のサーバーのユーザーがもう一方のサーバーにアクセスすること を承認する	1101
	リモートサーバーへのアクセス	1102

	リモートサーバー管理のトラブルシューティング	1103
第 33 章	NetBackup リモート管理コンソールの使用	1105
	NetBackup リモート管理コンソールについて	1105
	NetBackup 管理コンソールの実行時構成オプション	1107
	BROWSER_BINARY_PATH	1107
	DYNAMIC_STREAMING_START_CHILD_BACKUP_JOBS_TIMEOUT	1107
	FIREWALL_IN	1108
	FORCE_IPADDR_LOOKUP	1110
	INITIAL_MEMORY、MAX_MEMORY	1111
	MEM_USE_WARNING	1112
	NB_FIPS_MODE	1112
	NBJAVA_CLIENT_PORT_WINDOW	1112
	NBJAVA_CORBA_DEFAULT_TIMEOUT	1113
	NBJAVA_CORBA_LONG_TIMEOUT	1113
	NETBACKUP_API_CLIENT_CONNECTION_TIMEOUT	1114
	NETBACKUP_API_CLIENT_READ_TIMEOUT	1114
	PBX_PORT	1114
	USE_URANDOM	1114
	VNETD_PORT	1115
	NetBackup のパフォーマンスの向上について	1115
	NetBackup 管理コンソールをローカルで実行することについて	1116
	コンソールをローカルで実行してリモートサーバーを管理することにつ いて	1116
	コンソールパフォーマンスの向上	1117
	ローカルでの実行時とリモートディスプレイバック機能の使用時におけ るパフォーマンスの比較	1118
	NetBackup 管理コンソールでのタイムゾーンの調整について	1119
	NetBackup 管理コンソールまたはバックアップ、アーカイブおよびリス トアコンソールでのカスタムタイムゾーンの調整	1120
	NetBackup 管理コンソールまたはバックアップ、アーカイブおよびリス トアコンソールでのカスタムタイムゾーンの構成	1121
	タイムゾーン表	1122
第 34 章	代替サーバーを使用したリストア	1150
	代替サーバーを使用したリストアについて	1150
	代替サーバーを使用したリストアをサポートする構成について	1151
	代替サーバーを使用したリストアの実行について	1152
	NetBackup カタログの変更について	1153
	リストアでの元のサーバーの上書き	1154
	代替サーバーへの自動フェールオーバーの有効化について	1156

代替サーバーを使用したリストアにおけるメディアの期限切れおよびインポート	1157
--	------

第 35 章 クライアントのバックアップとリストアの管理 1159

サーバー主導リストア	1159
クライアントによるリダイレクトリストアについて	1161
リストアの制限について	1162
すべてのクライアントによるリダイレクトリストアの実行の許可	1162
1 つのクライアントによるリダイレクトリストアの実行の許可	1163
特定クライアントのファイルに対するリダイレクトリストアの許可	1164
リダイレクトリストアの例	1164
アクセス制御リスト (ACL) があるファイルのリストアについて	1171
UNIX でのリストア中のファイルの元の atime の設定について	1173
システム状態のリストア	1173
VxFS ファイルシステムの圧縮ファイルのバックアップとリストアについて	1175
ReFS のバックアップとリストアについて	1176

第 36 章 NetBackup サーバーの電源切断および再ブート 1178

NetBackup サーバーの停止と再起動	1178
すべての NetBackup サービスとデーモンの停止と起動	1179
NetBackup サーバーの再起動	1180
NetBackup メディアサーバーの再起動	1180

第 37 章 個別リカバリテクノロジーについて 1182

Active Directory 個別リカバリテクノロジー用 Network File System (NFS) のインストールおよび構成	1182
Network File System (NFS) 用サービスの構成について	1183
メディアサーバーでの Network File System (NFS) 用サービスの有効化	1184
クライアントでの Network File System (NFS) 用サービスの有効化	1187
メディアサーバーでの Client for NFS の無効化	1190
Server for NFS の無効化	1192
個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用するバックアップおよびリストアのための UNIX メディアサーバーおよび Windows クライアントの構成	1194
NBFSD 用の個別のネットワークポートの構成	1195

NetBackup について

- 第1章 [NetBackup インターフェースの概要](#)

NetBackup インターフェースの概要

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup について](#)
- [NetBackup のマニュアル](#)
- [NetBackup 管理インターフェース](#)
- [NetBackup Web UI の使用](#)

NetBackup について

NetBackup は、様々なプラットフォームに対して、完全かつ柔軟なデータ保護ソリューションを提供します。対象となるプラットフォームには、**Windows**、**UNIX**、**Linux** システムなどが含まれます。

NetBackup 管理者は、ネットワーク内のクライアントに対して、定期的またはカレンダーを基準として自動的な無人バックアップを実行するスケジュールを設定できます。バックアップを適切にスケジュールすることで、ネットワークの使用頻度が高い時間帯を避けて通信量を最適化しながら、一定期間にわたって計画的に完全なバックアップを実行できます。バックアップには、完全バックアップと増分バックアップがあります。完全バックアップは指定されたすべてのクライアントのファイルのバックアップを作成し、増分バックアップは前回のバックアップ以降に変更されたファイルのバックアップのみを作成します。

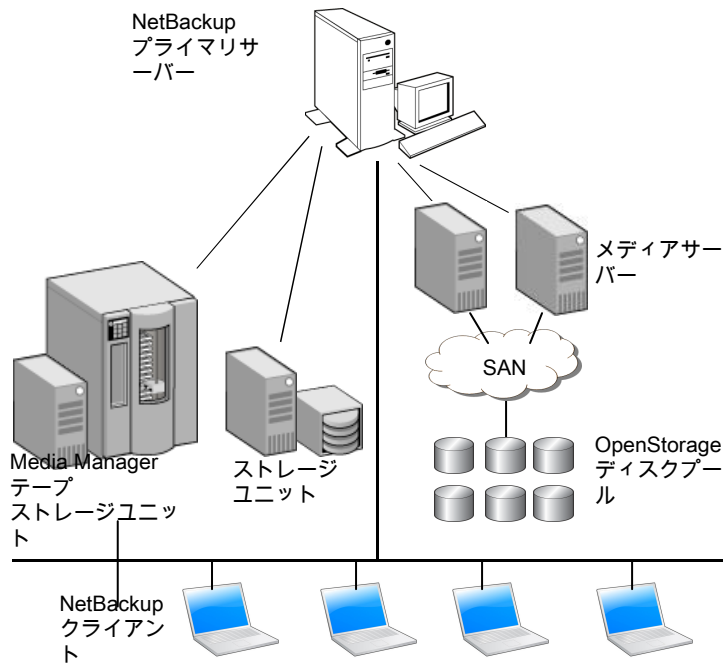
NetBackup の管理者によって許可されている場合、ユーザーは、自分のコンピュータからファイルのバックアップ、リストアまたはアーカイブを行うことができます。(アーカイブ操作では、正常にバックアップが完了すると、ファイルがローカルディスクから削除されます。)

次のように、**NetBackup** にはサーバーソフトウェアとクライアントソフトウェアの両方が含まれます。

- サーバーソフトウェアは、ストレージデバイスを管理するコンピュータにインストールします。
- クライアントソフトウェアは、バックアップを行うデータが存在するコンピュータにインストールします。(また、クライアントソフトウェアはサーバーにも含まれており、サーバーのバックアップを行うことができます。)

図 1-1 に NetBackup ストレージドメインの例を示します。

図 1-1 NetBackup ストレージドメインの例



NetBackup では、次のように、複数のサーバーが連携して動作するように、1 台の NetBackup プライマリサーバーの管理下でサーバーが制御されます。

- プライマリサーバーでは、バックアップ、アーカイブおよびリストアが管理されます。また、NetBackup で使用されるメディアおよびデバイスを選択します。通常、プライマリサーバーには NetBackup カタログが含まれます。カタログには、NetBackup のバックアップおよび構成についての情報を含む内部データベースが含まれます。
- メディアサーバーでは、接続されているストレージデバイスを NetBackup で使用可能にすることによって、追加のストレージが提供されます。また、メディアサーバーを使用すると、ネットワークの負荷を分散させることによってパフォーマンスを向上できます。メディアサーバーは、次の用語でも呼ばれます。
 - デバイスホスト (テープデバイスが存在する場合)

- ストレージサーバー (I/O がディスクに直接実行される場合)
- データムーバー (OpenStorage 装置のような独立した外部ディスクデバイスへデータを送信する場合)

バックアップまたはアーカイブ中に、クライアントは、NetBackup サーバーにネットワークを介してバックアップデータを送信します。NetBackup サーバーは、バックアップポリシーで指定された形式のストレージを管理します。

ユーザーは、リストア中に、リカバリするファイルおよびディレクトリを表示して選択できます。選択したファイルおよびディレクトリは NetBackup によって検索され、クライアントのディスクにリストアされます。

NetBackup のマニュアル

サポートされている各リリースに関する NetBackup のテクニカルマニュアルの完全なリストについては、次の URL にある NetBackup のマニュアルのランディングページを参照してください。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100040135>

マニュアルは Adobe® Portable Document Format (PDF) ファイル形式で、Adobe Acrobat Reader を使用して閲覧できます。Reader は <http://www.adobe.com> からダウンロードしてください。

Adobe Acrobat Reader のインストールおよび使用についての責任は負いません。

NetBackup 管理インターフェース

NetBackup は複数のインターフェースで管理できます。最もよい選択は、個人の好みと管理者が利用できるシステムによって異なります。

表 1-1 NetBackup 管理インターフェース

インターフェースの名前	説明
NetBackup Web ユーザーインターフェース	NetBackup Web UI (ユーザーインターフェース) を使用すると、プライマリサーバーから NetBackup のアクティビティを表示し、NetBackup 構成を管理できます。 NetBackup の Web UI を起動するには ■ ユーザーは、NetBackup RBAC でそのユーザー向けに設定された役割を持っている必要があります。 ■ Web ブラウザを開き、次の URL に移動します。https://primaryserver/webui/login

インターフェースの名前	説明
文字ベースのメニューインターフェース	tpconfig コマンドを実行して、デバイス管理のための文字ベースのメニューインターフェースを起動します。 termcap か terminfo が定義されている任意の端末 (または端末エミュレーションウィンドウ) から tpconfig インターフェースを使用します。
コマンドライン	NetBackup コマンドは Windows と UNIX の両方のプラットフォームで利用可能です。NetBackup コマンドは、システムのプロンプトで入力するか、スクリプト内で使います。 NetBackup の管理者向けプログラムとコマンドはすべて、root または管理者のユーザー権限がデフォルトで必要です。 すべての NetBackup コマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

NetBackup ホスト用のセキュリティ証明書について

NetBackup では、NetBackup ホストの認証にセキュリティ証明書を使用します。

NetBackup セキュリティ証明書は、X.509 公開鍵基盤 (PKI) 標準に適合しています。プライマリサーバーは、NetBackup 認証局 (CA) として動作し、ホストに NetBackup 証明書を発行します。

NetBackup は、ホスト ID ベースとホスト名ベースの 2 種類の NetBackup ホストセキュリティ証明書を提供します。ホスト ID ベース証明書は、各 NetBackup ホストに割り当てられる UUID (Universal Unique Identifier) に基づいています。NetBackup プライマリサーバーは、これらの識別子をホストに割り当てます。

NetBackup では、NetBackup 認証局または外部認証局が発行した証明書をホストの認証に使用します。プライマリサーバーで外部証明書を使用する場合は、インストール後のプロセスで証明書を構成します。外部証明書を使用するメディアサーバーやクライアントでは、インストール時またはアップグレード時、あるいはインストール後またはアップグレード後に外部証明書を構成できます。

インストール後の処理について詳しくは、

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100044300> を参照してください。

NetBackup での外部 CA のサポート、および外部 CA が署名した証明書について詳しくは、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

UNIX での NetBackup 管理コンソールの設定について

NetBackup は管理者が NetBackup を管理できる 2 つの Java ベース管理コンソールを提供します。コンソールは次のシステムのどちらかで実行できます。

- `/usr/opensv/java/jnbSA &` を実行することにより、サポートされる **Java** 対応の **UNIX** コンピュータで直接実行する場合。
jnbSA コマンドについては、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。
管理するサーバーと互換性があるバージョンのコンソールに接続するには、`-r` コマンドを使用します。
 - **NetBackup** 管理コンソールがインストールされている **Windows** コンピュータの場合。
インストールされている複数のバージョンのコンソールから、管理する **NetBackup** サーバーと互換性があるバージョンのコンソールを選択します。
- 起動時の手順と構成情報は、次のトピックで説明します。

バージョンの異なるリモートサーバーの管理

NetBackup Web ユーザーインターフェース (Web UI) は、**NetBackup 8.1.2** 以降のみで利用可能です。このインターフェースは、プライマリサーバー上で利用可能で、そのサーバー上の **NetBackup** のバージョンをサポートします。**NetBackup** 管理コンソールで実施するように特定のバージョンを見つけて開く必要はありません。[NetBackup Web UI](#) のマニュアルを参照してください。

NetBackup サーバーのインストールは異なるバージョンのリモートサーバーを管理できるように **NetBackup** 管理コンソールの複数のバージョンを提供します。コンソールを起動するときに、管理する **NetBackup** サーバーと互換性があるバージョンのコンソールを選択します。

またはコマンドラインで、jnbSA コマンドを `-r` オプションを付けて実行してコンソールを起動することもできます。たとえば、**8.1 UNIX** プライマリサーバーから **8.0** プライマリサーバーに接続するには、**8.1** プライマリサーバーで次のコマンドを入力します。

```
./jnbSA -r 8.0
```

インターフェースにはいくつかのバージョンが存在します。オプションを使用して、オプションを確認し、サポートされるバージョンを見つけます。-h-r

-r オプションを指定しない場合のデフォルトは、現在のプライマリサーバーの **NetBackup** バージョンになります。

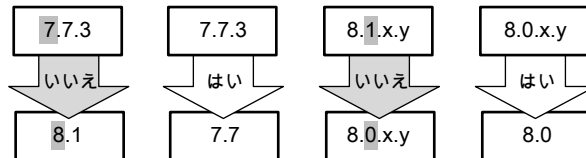
メモ: **NetBackup** 管理コンソールにログオンするには、ログオンクレデンシャルが接続するプライマリサーバーまたはメディアサーバーから認証されている必要があります。

三重ドットバージョンとの後方互換

NetBackup 管理コンソールは、1 番目と 2 番目の数字が同じである、パッチリリース (x.x.x.x) と、メジャーリリース (x.x) またはマイナーリリース (x.x.x) の間で後方互換性があります。

たとえば、8.1.x.y コンソールは 8.1 プライマリサーバーと互換性があります。ただし、NetBackup 8.1.x.y コンソールで 8.0.x.y プライマリサーバーを管理することはできません。さまざまな例については図 1-2 を参照してください。

図 1-2 サポート対象とサポート外の旧バージョンコンソール構成の例



p.1102 の「[リモートサーバーへのアクセス](#)」を参照してください。

NetBackup 管理コンソールへのログイン

NetBackup 管理コンソールを使用して、NetBackup 操作を管理および監視します。

NetBackup 管理コンソールへログインするには

- 1 NetBackup 管理コンソールがインストールされている Windows ホストで、[スタート]、[プログラム]、[Veritas NetBackup]、[NetBackup <version> 管理コンソール (NetBackup version Administration Console)] の順に選択します。

UNIX コンピュータで、jnbSA コマンドを使用します。

```
/usr/opensv/java/jnbSA &
```

ログイン画面が表示されます。

メモ: NetBackup 管理コンソールの起動時に FIPS モードが有効になっている場合は、ログイン画面のタイトルバーにそれが示されます。

- 2 NetBackup 管理コンソールのログイン画面の[ホスト名 (Host name)]フィールドに名前が表示されます。

デフォルトのホスト名は、前回正常にログインできたホストです。ドロップダウンリストには、これまでにログインした他のホストの名前が表示されます。

別のホストにログインするには、そのホストの名前を入力します。

入力するサーバーがメディアサーバーまたはクライアントの場合、メディアサーバーまたはクライアントにセキュリティ証明書がインストールされている必要があります。

p.38 の「[NetBackup ホスト用のセキュリティ証明書について](#)」を参照してください。

- 3 次のログインオプションのいずれかを選択します。
 - ユーザー名とパスワード (User name and password)

ログイン画面で、ユーザー名とパスワードを入力します。Windows サーバーにログインする場合、サーバーのドメインとユーザー名の両方を、次のように入力します。

`domain_name¥user_name`

domain_name には、NetBackup ホストのドメインを指定します。ホストがドメインのメンバーでなければ、**domain_name** は必要ありません。

メモ: ユーザーアカウントが、ターゲットホストで多要素認証用に構成されている場合は、ワンタイムパスワードをパスワードに追加する必要があります。

多要素認証について詳しくは、『NetBackup Web UI 管理者ガイド』を参照してください。

- **Windows Active Directory のログインクレデンシヤル (Windows Active Directory login credentials)**

このオプションを使用すると、ユーザー名を使う必要がある認証をバイパスしてシングルサインオン (SSO) を有効にできます。

管理者権限があるユーザーも管理者権限がないユーザーも SSO を使うことができます。管理者権限があるユーザーは、[NetBackup 管理コンソール (Administration Console)] の起動時に右クリックして [管理者として実行 (Run as administrator)] オプションを選択する必要があります。このオプションを選択すると、管理者権限でコンソールを表示できます。

SSO について次の注意点があります。

- SSO オプションは、NetBackup プライマリサーバーと NetBackup クライアントが両方とも Windows ホストである場合にのみ利用可能です。
- SSO を使用したログインが初めて成功した後も、[Active Directory のログインクレデンシヤルを使用する (Use Active Directory login credentials)] オプションは、同じクライアントの同じサーバーでの次のログイン試行で有効の状態のままになります。
- UNIX プライマリサーバー上の NetBackup 管理コンソールでは、Active Directory のクレデンシヤルを使用するためのオプションが表示されません。
- ユーザー名を使う認証で UNIX ホストからアプリケーションサーバーにログインできる

- **Web UI からシングルサインオン、証明書、スマートカードを使用 (Single sign-on, Certificates, or Smart Cards through the Web UI)**

このオプションを使用すると、シングルサインオン (SSO)、証明書、またはスマートカードを使用した認証用の NetBackup Web UI にアクセスできます。

次の情報を確認します。

- このオプションは、シングルサインオン、証明書、またはスマートカードの構成がプライマリサーバーで有効になっていない場合は無効になります。これらの構成がプライマリサーバーで利用できない場合は、メッセージが表示されます。
- このオプションを使用して認証するには、スマートカード、ユーザー証明書、または **SAML 2 FA** シングルサインオン用にプライマリサーバーが構成されていることを確認します。
[『NetBackup Web UI 管理者ガイド』](#)の「**NetBackup** のシングルサインオン (SSO) の構成」に関するトピックを参照してください。
- このオプションは、**NetBackup** クライアントとメディアサーバーではサポートされません。
- このオプションは、**NetBackup** アクセス制御 (NBAC) モードではサポートされません。
- このオプションは、スタンドアロンのリモート **Java** コンソールとプライマリサーバーで使用できます。

次のいずれかの権限を持つユーザーは、このログインオプションを使用して **NetBackup** 管理コンソールにアクセスできます。

- **RBAC** 管理者
- `auth.conf` 構成ファイルのエントリ

[**Web UI からシングルサインオン、証明書、スマートカードを使用 (Single sign-on, Certificates, or Smart Cards through the Web UI)**]オプションによるユーザー認証プロセス:

- **Web** ブラウザが自動で起動して、**NetBackup Web UI** のログインページが表示されます。
ブラウザが自動的に起動しない場合、ブラウザを起動するには、`nbj.conf` 構成ファイルで `BROWSER_BINARY_PATH` オプションを構成します。
[『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』](#)を参照してください。
- これらのオプションが構成されている場合は、証明書、スマートカード、またはシングルサインオンオプションを使用して **Web UI** で認証します。
- **Web UI** を使用して認証に成功したら、**Web** ブラウザを閉じて **NetBackup** 管理コンソールに戻り、続行できます。

- 4 [ログイン (Login)]をクリックして、指定したサーバーの、**NetBackup** アプリケーションサーバープログラムにログインします。これ以降、現行のセッションでは、インターフェースプログラムはログイン画面で指定したサーバーを介して通信を行います。

メモ: **NetBackup** 管理コンソールへのログオン時に **FIPS** モードが有効になっている場合は、**NetBackup** 管理コンソールのタイトルバーにそれが示されます。

p.191 の「[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup 管理コンソールの使用に関する注意事項

- NetBackup 管理コンソールは 1280 x 1024 以上の画面解像度で最適に表示できます。コンソールを使う場合の最小画面解像度は 1024 X 768 です。
 - NetBackup 管理コンソールは、Java のエンコードコンバータを実装しているため、ユーザー定義文字 (UDC) とベンダー定義文字 (VDC) をサポートしません。
 - 英語版以外の Windows システムと UNIX システムでは、NetBackup 管理コンソールで非 US ASCII 文字が正しく表示されないことがあります。この問題により正常に動作しなくなることがあります。
この問題は、NetBackup サーバーと NetBackup リモート管理コンソール間の文字エンコーディングの不一致に起因します。構成方法について詳しくは、次の記事を参照してください。
<https://support.cohesity.com/s/article/article-100005338>
 - Windows コンピュータで NetBackup 管理コンソールを使うには、Microsoft Windows UAC (ユーザーアクセス制御) 機能を無効にする必要があります。指示については次のリンクを参照してください。
<http://windows.microsoft.com/en-us/windows/tum-user-account-control-on-off#1TC=windows-7>
 - 複数の NetBackup サーバーがある場合、NetBackup 管理コンソールは複数のサーバーで一度に実行できます。ただし、複数の管理者が構成に変更を加えた場合の結果は予測不能です。
- p.1102 の「リモートサーバーへのアクセス」を参照してください。

NetBackup Web UI の使用

NetBackup Web UI は、管理者が NetBackup を管理するためのインターフェースを提供します。

表 1-2 NetBackup Web UI の左サイドバーのユーティリティ

項目	説明
ダッシュボード	重要な情報の概要を表示します。
アクティビティモニター (Activity monitor)	NetBackup ジョブ情報を表示し、ジョブ、サービス、プロセス、ドライブを制御できるようにします。

項目	説明
リカバリ (Recovery)	管理者は[リカバリ (Recovery)]ノードを使用して次の種類のリカバリを実行できます。 ■ 標準リカバリ - ポリシーによって保護されている資産のサーバー主導リストアを実行します。サーバー主導リストアは現在、ポリシー形式のサブセットに限定されています。特定の作業負荷のリカバリは、[作業負荷 (Workloads)]ノードから実行されます。たとえば、VMware 資産をリカバリするには、[作業負荷 (Workloads)]、[VMware]の順に移動します。 ■ NetBackup カタログリカバリ。ディザスタリカバリの状況のカタログバックアップをリカバリします。
保護 (Protection)	データ保護は、ポリシーまたは保護計画を通じて実現されます。
作業負荷 (Workloads)	作業負荷環境、資産クレデンシャル、リカバリを管理するための、NetBackup のサポート対象の作業負荷とツールが含まれます。
ストレージ (Storage)	このノードには、NetBackup がバックアップを保存するために使用する、メディアやデバイスを管理するためのユーティリティがあります。
カタログ (Catalog)	バックアップイメージを検索し、バックアップ内容の検証、バックアップイメージの複製、コピーの昇格、バックアップイメージの有効期限終了、バックアップイメージのインポートなど、さまざまな処理を実行します。
検出とレポート (Detection and reporting)	このノードには、次のツールが含まれています。 ■ 異常検出 - バックアップメタデータの異常を検出します。 ■ マルウェアの検出 - サポート対象のバックアップイメージからマルウェアを検出し、マルウェアのない良好な最新のイメージを検出します。 ■ 一時停止された保護 - NetBackup または権限を持つユーザーにデータ保護アクティビティの一時停止を許可できます。 ■ 使用状況 - 容量ライセンス用に構成されたプライマリサーバーとそれぞれの消費の詳細が表示されます。 ■ レポート - NetBackup 操作の検証、管理、トラブルシューティングの情報収集のために使用します。
クレデンシャルの管理 (Credential management)	NetBackup が保護対象のシステムと作業負荷へのアクセスに使用するクレデンシャルを一元管理します。作業負荷用とシステム用のクレデンシャル、クライアントクレデンシャル (NDMP およびディスクアレイホスト用)、外部 CMS サーバー構成を管理できます。
ホスト (Hosts)	次を管理するためのユーティリティが含まれます。 ■ 配備の管理 - クライアントまたはホストのアップグレードツールとして機能する VxUpdate の主要なコンポーネントです。 VxUpdate について詳しくは、『NetBackup アップグレードガイド』を参照してください。 ■ ホストプロパティ - NetBackup 構成オプションをカスタマイズするために使用します。
耐性 (Resiliency)	NetBackup と Veritas Resiliency Platform を統合して、ディザスタリカバリ操作を管理します。

項目	説明
セキュリティ (Security)	このノードには、セキュリティとホストの設定を管理するユーティリティがあります。 ■ アクセスキー - API キーとアクセスコードにより NetBackup インターフェースへのアクセス権を提供します。 ■ 証明書 - NetBackup 証明書を管理し、外部証明書を表示するために使用します。 ■ ホストマッピング - ホストマッピングの追加または削除、ホストのリセット、再発行トークンの生成などの NetBackup ホスト操作を実行するために使用します。 ■ マルチパーソン認証 - 認証された 2 人目のユーザーによる許可を得てから処理を実行するようにします。 ■ RBAC - NetBackup ユーザーに NetBackup へのアクセス権を提供するために、事前定義済みまたはカスタムの RBAC の役割をユーザーの組織での役割に基づいて使用します。 ■ セキュリティイベント - NetBackup ユーザーのサインインの詳細と、NetBackup に対して行われたユーザーが開始した変更を表示するために使用します。 セキュリティイベントについて詳しくは、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。 ■ トークン - NetBackup 環境内の認証トークンを管理します。 ■ ユーザーセッション - NetBackup ユーザーセッションの設定を管理し、ユーザーセッションを終了し、ユーザーのロックを解除します。
他のライセンス済みユーティリティ	NetBackup のメインノードの下に、ライセンスを保有している追加のユーティリティが表示されます。

Web UI の右上隅に次の設定があります。

表 1-3 NetBackup Web UI の上部のツールバーのユーティリティ

項目	説明
チケットアラート (Ticket alerts)	マルチパーソン認証で利用可能なチケットアラートの概略を表示します。
通知 (Notifications)	NetBackup 環境で発生した最新のイベントを表示します。
ヘルプ (Help)	このメニューには、次へのリンクが含まれています。 ■ NetBackup ヘルプファイル ■ NetBackup API ■ ログの収集。管理者が問題をトラブルシューティングするための証拠を収集するのに役立つツール。詳しくは、『NetBackup ログリファレンスガイド』を参照してください。

項目	説明
設定 (Settings)	このメニューには次の設定が含まれます。 ■ 電子メール通知 - ジョブが失敗したときに電子メール通知を送信します。 ■ グローバルセキュリティ - NetBackup ドメインのセキュリティを設定します。 ■ スマートカード認証 - ユーザー検証のためにスマートカードまたは証明書をマッピングします。 ■ Data Collector 登録 - NetBackup ドメインでの監視、管理、レポートを実行するためのメタデータを NetBackup から収集します。 ■ ライセンス管理 - NetBackup のライセンスを管理します。 ■ 誘導型セットアップ - ストレージの構成、仮想化とクラウドサーバーの検出、保護計画の追加、作業負荷の保護の手順が示されます。 ■ NetBackup カタログリカバリ - ディザスタリカバリの状況のカタログバックアップをリカバリします。
プロフィール (Profile)	プロフィールアイコンをクリックすると、次の情報が表示されます。 ■ 現在のユーザーのサインインの試行。 ■ パスワードの有効期限。 ■ サーバーの NetBackup のバージョン。 ■ [アクセス権の要求を承認する (Approve access request)] オプション。送信したアクセス要求を承認します。 ■ [多要素認証の構成 (Configure multifactor authentication)] オプション。NetBackup の多要素認証を構成します。 ■ [API キーの追加 (Add API key)] または [API キーの詳細を表示 (View my API key details)] オプション。独自の API キーを追加するか、既存の API キーの詳細を表示します。 ■ [プロフィール設定 (Profile settings)] では、通知を受信する電子メールアドレスを追加し、通知を受信するチケットイベントを選択できます。 ■ [サインアウト (Sign out)] ボタン。Web UI からサインアウトします。

ホストの構成

- [第2章 ホストプロパティの構成](#)
- [第3章 サーバグループの構成](#)
- [第4章 NetBackup での NAT クライアントと NAT サーバーのサポートの有効化](#)
- [第5章 ホストクレデンシャルの構成](#)
- [第6章 メディアサーバーの管理](#)

ホストプロパティの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup](#) の[ホストプロパティ (Host properties)]について
- [\[アクセス制御 \(Access Control\)\]](#)プロパティ
- [\[Active Directory\]](#)プロパティ
- [\[帯域幅 \(Bandwidth\)\]](#)プロパティ
- [バックアッププールホストのプロパティ](#)
- [\[ビジー状態のファイルの設定 \(Busy file settings\)\]](#)プロパティ
- [\[クリーンアップ \(Clean up\)\]](#)プロパティ
- [\[クライアント名 \(Client name\)\]](#)プロパティ
- [\[クライアント属性 \(Client attributes\)\]](#)プロパティ
- [UNIX クライアントの\[クライアントの設定 \(Client settings\)\]](#)プロパティ
- [Windows クライアントの\[クライアントの設定 \(Client settings\)\]](#)プロパティ
- [\[クラウドストレージ \(Cloud Storage\)\]](#)プロパティ
- [\[クレデンシャルアクセス \(Credential access\)\]](#)プロパティ
- [\[データの分類 \(Data Classification\)\]](#)プロパティ
- [\[デフォルトのジョブの優先度 \(Default job priorities\)\]](#)プロパティ
- [\[分散アプリケーションリストアマッピング \(Distributed application restore mapping\)\]](#)プロパティ
- [\[暗号化 \(Encryption\)\]](#)プロパティ
- [\[Enterprise Vault\]](#)プロパティ

- [Enterprise Vault ホスト (Enterprise Vault hosts)]プロパティ
- [Exchange]プロパティ
- [エクスクルーードリスト (Exclude list)]プロパティ
- [ファイバートランスポート (Fibre Transport)]プロパティ
- [ファイアウォール (Firewall)]プロパティ
- [一般的なサーバー (General server)]プロパティ
- [グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ
- [ログ (Logging)]プロパティ
- Lotus Notes プロパティ
- [メディア (Media)]プロパティ
- ネットワークのプロパティ
- [ネットワーク設定 (Network settings)]プロパティ
- [ポートの範囲 (Port ranges)]プロパティ
- [優先ネットワーク (Preferred network)]プロパティ
- ホストプロパティのプロパティ設定
- [RHV アクセスホスト (RHV access hosts)]プロパティ
- [耐性ネットワーク (Resilient network)]プロパティ
- [リソース制限 (Resource limit)]プロパティ
- [リストアのフェールオーバー (Restore failover)]プロパティ
- [保持期間 (Retention periods)]プロパティ
- [拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)]プロパティ
- [サーバー (Servers)]プロパティ
- [SharePoint]プロパティ
- [SLP 設定 (SLP settings)]プロパティ
- [スロットル帯域幅 (Throttle bandwidth)]プロパティ
- [タイムアウト (Timeouts)]プロパティ
- [ユニバーサル設定 (Universal settings)]プロパティ

- [ユーザーアカウント設定 (User account settings)] プロパティ
- [UNIX クライアント (UNIX client)] プロパティ
- [UNIX サーバー (Unix Server)] プロパティ
- [VMware アクセスホスト (VMware access hosts)] プロパティ
- [Windows クライアント (Windows client)] プロパティ
- ホストプロパティで見つからない構成オプション
- UNIX または Linux クライアントおよびサーバーにおけるコマンドを使用した構成オプションの変更について
- NetBackup サーバーの構成オプション
- NetBackup クライアントの構成オプション

NetBackup の [ホストプロパティ (Host properties)] について

[ホストプロパティ (Host Properties)] の構成オプションを使用することで、管理者は特定のサイトの作業環境や要件を満たすために NetBackup をカスタマイズできます。

他のクライアントまたはサーバーのプロパティを変更するには、サインインした NetBackup サーバーが、他のシステムの [サーバー (Servers)] リストに含まれている必要があります。

p.169 の「[サーバー (Servers)] プロパティ」を参照してください。

p.1101 の「別のサーバーへのアクセスを許可する」を参照してください。

たとえば、*server_1* にログオンし、*client_2* の設定を変更する場合は、*client_2* の [サーバー (Servers)] リストに *server_1* が含まれている必要があります。

一部のオプションは、NetBackup Web UI では構成できません。

p.198 の「ホストプロパティで見つからない構成オプション」を参照してください。

NetBackup の構成オプションを設定する方法

NetBackup 管理者は、次のいずれかの方法を使ってデフォルトの構成オプションの確認や設定を行います。

表 2-1 NetBackup の[ホストプロパティ (Host properties)]の構成方式

メソッド	説明
NetBackup Web UI インターフェース	ほとんどのプロパティは、NetBackup Web UI の[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)]に一覧表示されます。構成するホストに応じて、[プライマリサーバー (Primary server)]、[メディアサーバー (Media server)]、または[クライアント (Clients)]を選択します。
Windows レジストリ	nbgetconfigコマンドを使用して構成エントリのリストを取得し、次に nbsetconfigを使用してレジストリのエントリを変更します。
bp.conf ファイル	UNIX の場合は、nbgetconfigコマンドを使用してbp.conf ファイル内の構成エントリのリストを取得し、次に nbsetconfig を使用してそれらのエントリを変更します。 bp.conf ファイルは次の場所にあります。 <pre>/usr/opensv/netbackup/bp.conf</pre> p.198 の「UNIX または Linux クライアントおよびサーバーにおけるコマンドを使用した構成オプションの変更について」を参照してください。 p.341 の「NetBackup クライアントの構成オプション」を参照してください。
コマンドライン	nbgetconfig コマンドまたは bpgetconfig コマンドを使って、構成エントリのリストを取得します。次に、必要に応じて nbsetconfig コマンドまたは bpsetconfig コマンドを使ってオプションを変更します。 これらのコマンドは Windows (レジストリ) と UNIX (bp.conf ファイル) の両方のプライマリサーバーとクライアントの適切な設定ファイルを更新します。 ホストの一部のオプションの修正には、nbemmcmd コマンドを使います。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。
vm.conf ファイル	vm.conf ファイルには、メディアおよびデバイスの管理に対する構成エントリが含まれます。 詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』を参照してください。
クライアントの[バックアップ、アーカイブおよびリストア (Backup, Archive, and Restore)]インターフェース	管理者は NetBackup クライアントの構成オプションを指定できます。 『NetBackup バックアップ、アーカイブおよびリストアスタートガイド』を参照してください。

ホストに接続してホストプロパティを表示する

NetBackup は、[ホストプロパティ (Host Properties)]に、NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバーおよびクライアントのプロパティを表示します。

プライマリサーバー、メディアサーバー、クライアントに接続してホストプロパティを表示するには、次の手順を実行します。

プライマリサーバー、メディアサーバー、クライアントに接続してホストプロパティを表示する方法

- 1 Web UI で、[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に展開します。
- 2 プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントを選択します。
- 3 必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。
- 4 ホストの種類に応じて、次のいずれかを選択します。
 - プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)
 - メディアサーバーの編集 (Edit media server)
 - クライアントの編集 (Edit client)

複数のホストのホストプロパティの同時変更

同時に複数のホストのホストプロパティを変更できます。この操作は次のいずれかの手順で行えます。

- 「[ホストプロパティの複数のホストを変更する](#)」
- 「[ポリシーユーティリティの複数のホストを変更する](#)」

メモ: クラスタ環境では、クラスタの各ノードでホストプロパティを個別に指定する必要があります。

ホストプロパティの複数のホストを変更する

複数のホストのプロパティを変更する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (Management)]>[ホストプロパティ (Host Properties)]を展開します。
- 2 [プライマリサーバー (Primary server)]、[メディアサーバー (Media Server)]または[クライアント (Clients)]を選択します。
- 3 右ペインで、ホストを選択します。Shift キーを押したまま、別のホストを選択します。
- 4 複数のホストが選択されている状態で、[処理 (Actions)]>[プロパティ (Properties)]を選択します。
 [プロパティ (Properties)]ダイアログボックスには、選択しているホストの名前が表示されます。これらのホストが、以降のホストプロパティの変更によって影響を受けます。
- 5 必要に応じて変更を加えます。
- 6 [OK]をクリックします。

ポリシーユーティリティの複数のホストを変更する

[すべてのポリシーの概略 (Summary of All Policies)]から複数のホストのプロパティを変更する方法

- 1 [NetBackup 管理コンソール (NetBackup Administration Console)]の、中央ペインで[ポリシー (Policies)]、[すべてのポリシーの概略 (Summary of All Policies)]に移動します。
- 2 [すべてのポリシーの概略 (Summary of All Policies)]の下で、[クライアント (Clients)]を展開します。
- 3 右ペインで、Shift キーを押したまま複数のクライアントを選択します。
- 4 複数のホストを選択したままの状態で、[ホストプロパティ (Host Properties)]を右クリックして選択します。
- 5 ダイアログボックスでクライアントのプロパティを変更します。
- 6 [OK]をクリックします。

ホストプロパティのエクスポート

ホストのプロパティをエクスポートするには、次の手順を使います。

ホストのプロパティをエクスポートする方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]、[ホストプロパティ (Host Properties)]、[プライマリサーバー (Primary servers)]、[メディアサーバー (Media Servers)]、[クライアント (Clients)]のいずれかを展開します。
- 2 ホストを選択します。複数のホストを選択する場合は、Shift キーを押したまま、別のホストを選択します。
- 3 [ファイル (File)]>[エクスポート (Export)]をクリックします。
- 4 [エクスポート (Export)]ダイアログボックスで、ファイルに名前を付け、それを保存するディレクトリに移動し、[保存 (Save)]をクリックします。

[アクセス制御 (Access Control)]プロパティ

NetBackup アクセス制御 (NBAC) は、NetBackup 向けの従来のアクセス制御方法であるため、更新されなくなりました。Web UI では、役割に基づくアクセス制御 (RBAC) を使用することをお勧めします。『[NetBackup Web UI 管理者ガイド](#)』を参照してください。

NetBackup の認証と認可を構成するには、NetBackup 管理コンソールの [アクセス制御 (Access Control)] ホストプロパティを使います。このプロパティは、現在選択されているプライマリサーバー、メディアサーバー、およびクライアントに適用されます。

どのタブが選択されているかにかかわらず、[NetBackup Product Authentication and Authorization]プロパティが表示されます。このプロパティによって、ローカルシステムでアクセス制御が使用されるかどうかと、その使用方法が決定します。

[NetBackup Product Authentication and Authorization]プロパティは次のオプションを含んでいます。

表 2-2 [NetBackup Product Authentication and Authorization]プロパティのオプション

オプション	説明
必須 (Required)	ローカルシステムが、NetBackup Product Authentication and Authorization を使用しているリモートシステムからの要求だけを受け入れるように指定します。NetBackup Authentication and Authorization を使用していないリモートシステムからの接続は拒否されます。最大のセキュリティが必要な場合は、[必須 (Required)]を選択します。
禁止 (Prohibited)	ローカルシステムが NetBackup 製品の認証と認可を使うすべてのリモートシステムからの接続を拒否する必要があることを指定します。ネットワークが閉じており、パフォーマンスを最適化する必要がある場合、[禁止 (Prohibited)]を選択します。
自動 (Automatic)	ローカルシステムが、NetBackup Authentication and Authorization を使用するかどうかをリモートシステムとネゴシエートするように指定します。ネットワークに異なるバージョンの NetBackup が混在している場合、[自動 (Automatic)]を選択します。

NetBackup へのアクセスの制御について詳しくは、『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。

アクセス制御プロパティの[認証ドメイン (Authentication Domain)]タブ

[認証ドメイン (Authentication Domain)]タブには、コンピュータが使用する認証ブローカーを決定するプロパティが表示されます。NetBackup Product Authentication and Authorization を使用するプライマリサーバーでは、1 つ以上の認証ドメインエントリを指定する必要があります。

メディアサーバーまたはクライアントで認証ドメインが定義されていない場合は、プライマリサーバーの認証ドメインが使用されます。

[アクセス制御 (Access Control)]ダイアログボックスの[認証ドメイン (Authentication Domain)]タブには次のプロパティが表示されます。

表 2-3 [認証ドメイン (Authentication Domain)]タブのプロパティ

プロパティ	説明
利用可能なブローカー (Available Brokers)	ブローカーを選択し、次に利用可能なすべての認証ドメインをリストするために[検索 (Find)]をクリックします。

プロパティ	説明
[利用可能な認証ドメイン (Available Authentication Domains)]リスト	利用可能な認証ドメインのリスト。
[追加 (Add)]ボタン	ホストが使用できる認証ドメインを選択して、[追加 (Add)]をクリックします。
[選択した認証ドメイン (Selected Authentication Domains)]リスト	ホストが使うことができるように選択された認証ドメインのリスト。
[削除 (Remove)]ボタン	今後は使用しない認証ドメインを選択して、[削除 (Remove)]をクリックします。

アクセス制御プロパティの[認可サービス (Authorization Service)]タブ

[認可サービス (Authorization Service)]タブではローカル NetBackup サーバーが使う認可サービスを指定します。[認可サービス (Authorization Service)]タブは、クライアントのプロパティとしては表示されません。

[認可サービス (Authorization Service)]タブには、プライマリサーバーまたはメディアサーバーに対して設定できる以下のプロパティが含まれます。

表 2-4 [認可サービス (Authorization Service)]プロパティのオプション

オプション	説明
ホスト名 (Host name)	認可サービスのホスト名または IP アドレスを指定します。
認可サービスのポートをカスタマイズする (Customize port of the authorization service)	標準外のポート番号を指定します。[ポート番号のカスタマイズ (Customize the port number)]を選択し、認可サービスのポート番号を入力します。

メモ: このタブをメディアサーバー用に構成してアクセス制御を使用する場合は、認可を行うホストを定義します。

アクセス制御プロパティの[ネットワーク属性 (Network Attributes)]タブ

[ネットワーク属性 (Network Attributes)]タブには、ローカルシステムとの間で NetBackup Product Authentication and Authorization の使用を許可 (または禁止) されているネットワークのリストが表示されます。

[アクセス制御 (Access Control)]ダイアログボックスの[ネットワーク属性 (Network Attributes)]タブには次のプロパティが表示されます。

ネットワーク (Networks) [ネットワーク (Networks)]プロパティは、特定のネットワークがローカルシステムとの間で NetBackup の認証と認可を使うことができるかどうかを示します。リストの名前は[アクセス制御 (Access Control)]ダイアログボックスの[NetBackup Product Authentication and Authorization]プロパティが[自動 (Automatic)]か[必須 (Required)]に設定されている場合にのみ関連します。

クライアントでアクセス制御を構成するまで、プライマリサーバーの[NetBackup Product Authentication and Authorization]プロパティを[自動 (Automatic)]に設定することをお勧めします。クライアントの構成後、プライマリサーバーの[NetBackup Product Authentication and Authorization]プロパティを[必須 (Required)]に変更してください。

メディアサーバーまたはクライアントで NetBackup Product Authentication and Authorization ネットワークが定義されていない場合は、プライマリサーバーのネットワークが使用されます。

[NetBackup Product Authentication and Authorization]プロパティ

このタブの[NetBackup Product Authentication and Authorization]プロパティは、選択したネットワークがアクセス制御を使うかどうか、そしてネットワークがそれをどのように使うかを決定します。

p.53 の「[アクセス制御 (Access Control)]プロパティ」を参照してください。

[ネットワークの追加 (Add Network)]ダイアログボックス

[ネットワークの追加 (Add Network)]ダイアログボックスには次のプロパティが表示されます。

表 2-5 [ネットワークの追加 (Add Network)]ダイアログボックスのプロパティ

プロパティ	説明
ホストドメイン (Host/Domain)	追加するネットワークが、ホスト名であるかドメイン名であるかを指定します。
ホストの詳細 (Host Details)	ネットワークがホストの場合に次の項目のいずれかを入力する必要があることを指定します。 - リモートシステムのホスト名。(host.domain.com) - リモートシステムの IP アドレス。(10.0.0.29)
ドメインの詳細 (Domain Details)	- ドメイン名または IP アドレス (Domain Name/IP) ドットの後にはリモートシステムのインターネットドメイン名を入力します。(domain) またはリモートシステムのネットワークの後にドットを指定します。(10.0.0.) - ドメインが IP によって指定されている場合は次のいずれかの項目を選択します。 - ビット数 (Bit count) マスクをビット数で表記します。1 から 32 までの数値から選択します。 たとえば、192.168.10.10/16 というマスクは、192.168.10.10:255.255.0.0 というサブネットマスクと同じ意味になります。 - サブネットマスク (Subnet mask) IP アドレスと同じ形式でサブネットマスクを入力する場合に選択します。

[Active Directory]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。Windows クライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。次に、[Windows クライアント (Windows Client)]、[Active Directory]の順に選択します。

[Active Directory]プロパティは現在選択されている Windows Server クライアントのバックアップに適用されます。[Active Directory]プロパティは Active Directory の個別リストアを可能にするバックアップがいかに行われるかを決定します。

p.869 の「[Active Directory の個別リストアを可能にするポリシーの作成](#)」を参照してください。

[Active Directory]ホストプロパティには次の設定が含まれます。

表 2-6 [Active Directory]プロパティ

プロパティ	説明
Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) スナップショットプロバイダの使用時は、バックアップ前に一貫性チェックを実行する (Perform consistency check before backup when using Microsoft Volume Shadow Copy Service (VSS) snapshot provider)	データ破損がないかスナップショットを調べます。Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) が実行するスナップショットにのみ適用されます。 壊れたデータがあり、このオプションが選択されていなければ、ジョブは失敗します。 p.74 の「 [クライアント属性 (Client attributes)]プロパティの[Windows Open File Backup]タブ 」を参照してください。
一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続ける (Continue with backup if consistency check fails)	一貫性チェックが失敗してもバックアップジョブを続行します。 一貫性チェックが失敗してもジョブを続行するにはそれが望ましいことがあります。たとえば、現在の状態のデータベースのバックアップはバックアップを全然行わないよりもよいことがあります。または、ごく小さい問題の場合は、大きいデータベースのバックアップを続行することが望ましいことがあります。

[帯域幅 (Bandwidth)]プロパティ

選択したプライマリサーバーの NetBackup クライアントのネットワーク帯域幅制限を指定するには、[帯域幅 (Bandwidth)]プロパティを使用します。

メモ: [帯域幅 (Bandwidth)]プロパティは IPv4 ネットワークにのみ適用されます。IPv6 ネットワークを制限するために[帯域幅スロットル (Throttle Bandwidth)]プロパティを使います。

p.185 の「[\[スロットル帯域幅 \(Throttle bandwidth\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

実際の制限は、バックアップ接続のクライアント側で発生します。この機能では、バックアップ中の帯域幅だけが制限されます。デフォルトでは、帯域幅は制限されません。

[帯域幅 (Bandwidth)]プロパティは、現在選択されているプライマリサーバーに適用されます。

[帯域幅 (Bandwidth)]エントリを管理するためには、次のいずれかのボタンを選択します。

追加 (Add) 選択した各クライアントの帯域幅の表にエントリを追加します。

変更 (Change) 選択した各クライアントの帯域幅の表のエントリを変更します。

削除 (Remove) 選択したエントリを帯域幅の表から削除します。

バックアップの開始時に、NetBackup は [帯域幅 (Bandwidth)] ホストプロパティで指定されている帯域幅制限の設定を読み取ります。その後、NetBackup は適切な帯域幅の値を決定してクライアントに渡します。NetBackup は、IP 範囲で現在実行しているジョブの数に基づいて、新しい各ジョブの帯域幅を計算します。また、NetBackup によって行われる計算にはローカルバックアップは含まれません。

NetBackup クライアントソフトウェアによって、帯域幅の制限が適用されます。ネットワークにバッファの書き込みが行われる前に、クライアントソフトウェアによって現在の値 (KB/秒) が計算され、必要に応じて転送速度が調整されます。

帯域幅制限の使用上の注意事項と制限

[帯域幅 (Bandwidth)] ダイアログボックスの帯域幅制限の設定にはいくつかの使用上の制限が適用されます。次の表に、制限事項、および考慮が必要になる場合がある特定の動作を示します。

表 2-7 帯域幅制限の使用上の注意事項と制限

クライアントまたは操作	帯域幅制限の動作または制限
■ 標準 (Standard) ■ MS-Windows	帯域幅制限は主として標準ポリシーと MS-Windows ポリシーを使用してファイルシステムのバックアップを行うためのものです。これは多くの他のポリシー形式およびクライアント形式では実装されていません。
ローカルバックアップ	サーバーがクライアントでもあり、データがネットワークを介して移動しない場合、帯域幅制限はローカルバックアップには影響しません。

クライアントまたは操作	帯域幅制限の動作または制限
必要な帯域幅の設定	帯域幅の制限はネットワークの最大使用量を制限するもので、必要な帯域幅を示すものではありません。たとえば、あるクライアントの帯域幅の制限を 500 KB/秒に設定する場合、クライアントはその制限範囲内の帯域幅を使用できます。このクライアントに 500 KB/秒の帯域幅が必要であるという意味ではありません。
実行中のバックアップの作業負荷の分散	帯域幅の制限を使用して、NetBackup に利用可能な最大のネットワークセグメントを選択させることによって、実行中のバックアップのバックアップ作業負荷を分散することはできません。NetBackup では、構成された帯域幅の制限に基づいて次のクライアントが選択されることはありません。

[帯域幅 (Bandwidth)] プロパティの [帯域幅の設定の追加 (Add Bandwidth Settings)] ダイアログボックス

[帯域幅の設定の追加 (Add Bandwidth Settings)] と [帯域幅の設定の変更 (Change Bandwidth Settings)] ダイアログボックスは次のプロパティを含んでいます。

開始ホスト (From Host)	このエントリが適用されるクライアントとネットワークの IP アドレス範囲の最初のアドレスを指定します。たとえば、10.1.1.2 と入力します。
終了ホスト (To Host)	このエントリが適用されるクライアントとネットワークの IP アドレス範囲の最後のアドレスを指定します。たとえば、10.1.1.9 と入力します。
帯域幅 (KB/秒) (Bandwidth (KB/Sec))	KB/秒で表される帯域幅の制限を指定します。0 (ゼロ) を指定すると、個々のクライアントまたはこのエントリに設定されている範囲の IP アドレスに対して、制限が無効になります。たとえば、200 は 200 KB/秒を表します。

バックアッププールホストのプロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で [ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)] の順に選択します。プライマリサーバーを選択します。必要に応じて [接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)] の順に選択します。[バックアップホストプール (Backup host pools)] をクリックします。

[バックアップホストプール (Backup host pools)] プロパティは、現在選択されているプライマリサーバーのバックアップに適用されます。バックアップホストプールは、NetBackup のバックアップ処理でアクセスできるようにボリュームのスナップショットがスレージングされる、ホストのグループです。これらのホストには NetBackup のクライアント、メディアサーバー、またはプライマリサーバーを指定できます。さまざまなバージョンの NetBackup ホストを使用してバックアップホストプールを作成できます。

バックアップホストプールに追加したホストのボリュームは、バックアップの目的でバックアップホスト上に分散されます。この構成により、バックアップのパフォーマンスが向上します。

次の重要な点に注意してください。

- バックアップホストプールには、Linux ホストと Windows ホストのいずれかのみを含めることができます。両方のプラットフォームを持つホストはサポートされません。
- バックアップホストプール内のすべてのホストは、同じ OS バージョンである必要があります。これにより、各ホストは同じバージョンの NFS を持ち、バックアップの一貫性を確保できます。
- 複数 NIC 設定のバックアップホストの場合は、NetBackup プライマリサーバーですでに使用されているホスト名を追加します。バックアップホストプールにエイリアス名や他のホスト名を追加しないようにしてください。

バックアップホストプールの追加

バックアップホストプールを追加する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)] の順に選択します。
- 3 プライマリサーバーを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)] をクリックします。次に、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)] をクリックします。
- 4 [バックアップホストプール (Backup host pools)] をクリックします。
- 5 [追加 (Add)] をクリックします。
- 6 [バックアップホストプール名 (Backup host pool name)] に入力します。
- 7 [リストに追加するホスト名を入力 (Enter hostname to add to list)] ボックスに名前を入力し、[リストに追加 (Add to list)] をクリックします。
- 8 プールには Linux または Windows のホストを含めることができます。リスト内のバックアップホストをフィルタ処理するには、[OS 形式 (OS type)] リストから Windows または Linux を選択します。
- 9 プールに追加するホストをリストから選択します。
- 10 [保存 (Save)] をクリックします。

バックアップホストプールに対するホストの追加または削除

バックアップホストプールに対してホストを追加または削除する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。
- 3 プライマリサーバーを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]をクリックします。
- 4 [バックアップホストプール (Backup host pools)]をクリックします。
- 5 プールを見つけ、[処理 (Actions)]、[編集 (Edit)]の順に選択します。
- 6 プールには Linux または Windows のホストを含めることができます。リスト内のバックアップホストをフィルタ処理するには、[OS 形式 (OS type)]リストから Windows または Linux を選択します。
- 7 プールに含めるホストを選択します。または、プールから削除するホストの選択を解除します。
- 8 [保存 (Save)]をクリックします。

バックアップホストプールの削除

バックアップホストプールがポリシーの一部である場合、そのプールは削除できません。最初に、ポリシー内の別のプールを選択する必要があります。

バックアップホストプールに対してホストを追加または削除する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。
- 3 プライマリサーバーを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]をクリックします。
- 4 [バックアップホストプール (Backup host pools)]をクリックします。
- 5 プールを見つけ、[処理 (Actions)]、[削除 (Delete)]、[削除 (Delete)]の順に選択します。

[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。UNIX クライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[UNIX クライ

アント (UNIX client)]、[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]をクリックします。

[ビジー状態のファイルの設定 (Busy File Settings)]プロパティは、UNIX クライアントのバックアップ中にビジー状態のファイルが検出された場合の NetBackup の動作を定義します。

[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]ホストプロパティには次の設定が含まれます。

表 2-8 [ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]プロパティ

プロパティ	説明
作業ディレクトリ (Working directory)	ビジー状態のファイルの作業ディレクトリへのパスを指定します。UNIXクライアントでは、ユーザーの \$HOME/bp.conf ファイルに値が存在する場合、その値が優先されます。デフォルトでは、NetBackup によって busy_files ディレクトリに /usr/opensv/netbackup ディレクトリが作成されます。
管理者の電子メールアドレス (Administrator email address)	操作が[電子メールの送信 (Send email)]に設定されている場合に、ビジー状態のファイルの通知メッセージの受信者を指定します。デフォルトでは、管理者が電子メールを受信します。UNIXクライアントでは、ユーザーの \$HOME/bp.conf ファイルに値が存在する場合、その値が優先されます。デフォルトでは、BUSY_FILE_NOTIFY_USER は bp.conf file ファイルには存在しないため、メール受信者は root ユーザーです。
ビジー状態のファイルを処理する (Process busy files)	ホストプロパティの設定に従ってビジー状態のファイルを処理できます。NetBackup では、バックアップ実行中にファイルが変更されたと判断されると、[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]に従って処理が行われます。デフォルトでは、[ビジー状態のファイルを処理する (Process busy files)]は有効でないため、NetBackup ではビジー状態のファイルは処理されません。 ビジー状態のファイル処理について詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』を参照してください。
[ファイルの処理 (File action)]ファイルリスト	ビジー状態のファイルの絶対パスおよびファイル名を指定します。ファイル名またはファイル名の一部のパターン一致に、メタ文字 (*、?、[]、[-]) を使用できます。
追加 (Add)	新しいファイルエントリを追加します。ファイルおよびパスを直接入力するか、またはファイルを参照して選択します。
すべてに追加 (Add to All)	現在選択されているすべてのクライアントに新しいファイルエントリを追加します。ファイルおよびパスを直接入力するか、またはファイルを参照して選択します。
[処理 (Actions)]>[削除 (Delete)]	選択したファイルをファイルの処理リストから削除します。
再試行回数 (Retry Count)	バックアップの試行回数を指定します。デフォルトの試行回数は 1 回です。

プロパティ	説明
ビジー状態のファイルの処理 (Busy file action)	次のオプションは、ビジー状態のファイルの処理が有効になっている場合に適用される処理を指定します。UNIX クライアントでは、ユーザーの <code>\$HOME/bp.conf</code> ファイルに値が存在する場合、その値が優先されます。 ■ [電子メールの送信 (Send email)]は、[管理者の電子メールアドレス (Administrator email address)]で指定されたユーザーにビジー状態のファイル通知メッセージを送信します。 ■ [バックアップの再試行 (Retry the backup)]は、指定されたビジー状態のファイルのバックアップを再試行します。[再試行回数 (Retry Count)]の値によって、NetBackup によるバックアップの試行回数が決定します。 ■ [無視 (Ignore)]は、ビジー状態のファイルの処理からビジー状態のファイルを除外します。ファイルのバックアップが行われ、[すべてのログエントリ (All log entries)]レポートにビジー状態であったことを示すログエントリが表示されます。[すべてのログエントリ (All log entries)]レポートは NetBackup Web UI でも利用できます。

ホストプロパティでの[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]の有効化

[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]ホストプロパティの設定を有効にするには、次の手順を実行します。

[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]を有効にする方法

- 1 次の場所にある `bpend_notify_busy` スクリプトをコピーします。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/goodies/bpend_notify_busy
```

コピー先のパスは次のとおりです。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bpend_notify
```

- 2 グループなどが `bpend_notify` を実行できるようにファイルへのアクセス権を設定します。
- 3 ユーザーバックアップスケジュールが指定されたポリシーがビジー状態のファイルバックアップに使用されるように構成します。

このポリシーは、`actions` ファイルの `repeat` オプションによって生成されるバックアップ要求を処理します。ポリシー名は重要です。デフォルトでは、ユーザーバックアップスケジュールが設定されていてバックアップ処理時間帯が表示されているポリシーのうち、最初の利用可能なポリシーが NetBackup によってアルファベット順で検索されます。たとえば、`AAA_busy_files` という名前のポリシーは、`B_policy` の前に選択されます。

[クリーンアップ (Clean up)] プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[クリーンアップ (Clean up)]をクリックします。

[クリーンアップ (Clean up)] プロパティは、様々なログや未完了のジョブを保持する期間を管理します。[クリーンアップ (Clean up)] プロパティは、プライマリサーバーに適用されます。

[クリーンアップ (Clean up)] ホストプロパティには、次の設定が含まれます。

表 2-9 [クリーンアップ (Clean up)] プロパティ

プロパティ	説明
True Image Restore (TIR) 情報を保持する (Keep true image restoration (TIR) information)	ディスク上に True Image Restore 情報を保持する日数を指定します。指定した日数が経過すると、イメージは削除されます。NetBackup によって True Image Restore 情報が収集されるすべてのポリシーに適用されます。デフォルトは 1 日です。 NetBackup によって True Image Backup が実行される場合、バックアップメディアには次のイメージが格納されます。 ■ バックアップされたファイル ■ True Image Restore 情報 NetBackup はまた、ディスク上の次のディレクトリにも True Image Restore 情報を格納します。 Windows の場合: <pre>install_path\NetBackup\db\images</pre> UNIX の場合: <pre>/usr/opensv/netbackup/db/images</pre> この情報は、このプロパティに指定された日数まで NetBackup によって保持されます。 ディスク上に情報を保持すると、リストアが高速になります。情報がディスクから削除された後に、ユーザーが True Image Restore を要求した場合、NetBackup によってその情報がメディアから取り出されます。ユーザーが認識できる違いは、リストアの合計時間がわずかに増加することだけです。翌日、NetBackup によって追加情報がディスクから再度削除されます。

プロパティ	説明
リストアジョブを未完了状態から完了状態に変更する (Move restore job from incomplete state to done state)	失敗したリストアジョブを未完了の状態として保持できる日数を示します。この期間が経過すると、ジョブはアクティビティモニターで[完了 (Done)]と表示されます。デフォルトは 7 日です。最大設定は 365 日です。リストアの「チェックポイントから再開」機能が使用されている場合、[リストアの再試行回数 (Restore retries)]プロパティで、失敗したリストアジョブが自動的に再試行されるように設定できます。 p.189 の「[ユニバーサル設定 (Universal settings)]プロパティ」を参照してください。 p.703 の「リストアジョブでの「チェックポイントから再開」機能」を参照してください。
バックアップジョブを未完了状態から完了状態に変更する (Move backup job from incomplete state to done state)	失敗したバックアップジョブを未完了の状態として保持できる最大時間数を示します。この期間が経過すると、ジョブはアクティビティモニターで[完了 (Done)]と表示されます。設定の最小値は 1 時間です。設定の最大値は 72 時間です。デフォルトは 3 時間です。 実行中のジョブでエラーが発生すると、ジョブは未完了状態になります。未完了状態では、管理者は、エラーの原因となっている状態を修正できます。未完了状態のジョブが正常に完了せずに完了状態に移行した場合、ジョブはエラー状態のままです。 メモ: 再開されたジョブでは同じジョブ ID が再利用されますが、再度実行されたジョブには新しいジョブ ID が割り当てられます。ジョブの詳細では、ジョブが再開または再度実行されたことが示されます。 メモ: このプロパティは、一時停止中のジョブには適用されません。一時停止中のジョブは、ジョブの保持期間に達してイメージが期限切れになる前に手動で再開する必要があります。保持期間がすぎたから一時停止中のジョブを再開してもそのジョブは失敗し、完了状態に移行されます。
イメージのクリーンアップの間隔	イメージのクリーンアップが実行されるまでの最大間隔を指定します。イメージのクリーンアップは、すべての正常なバックアップセッション (つまり、1 つ以上のバックアップが正常に実行されたセッション) の後に実行されます。バックアップセッションがこの最大間隔を超えると、イメージのクリーンアップが開始されます。
カタログクリーンアップの待機時間 (Catalog cleanup wait time)	イメージのクリーンアップが実行されるまでの最小間隔を指定します。前回のイメージのクリーンアップからこの最小間隔が経過しないと、正常なバックアップセッションの後にイメージのクリーンアップは実行されません。

[クライアント名 (Client name)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。クライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[クライアント名 (Client name)]をクリックします。

[クライアント名 (Client name)]プロパティでは、選択したクライアントの **NetBackup** クライアント名を指定します。名前は、クライアントのバックアップを行うポリシーで使用される名前と一致する必要があります。唯一の例外はリダイレクトリストアです。この場合、名前は、ファイルのリストアが行われるクライアントの名前と一致している必要があります。クライアント名は、インストール時に初期設定されます。

ここに入力する名前は、プライマリサーバーの[クライアント属性 (Client Attributes)]のクライアント名とも一致している必要があります。一致しない場合は、クライアントは自身のバックアップを参照できません。

メモ: ポリシーのクライアント名として **IPv6** アドレスを使うと、バックアップが失敗する可能性があります。IPv6 アドレスの代わりにホスト名を指定してください。

p.66 の「[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティ」を参照してください。

値が指定されていない場合、**NetBackup** では次の場所で設定されている名前が使用されます。

- **Windows** クライアントの場合
コントロールパネルのネットワークアプリケーションで設定された名前。
- **UNIX** クライアントの場合
hostname コマンドで設定された名前。
この名前は、**UNIX** クライアント上の `$HOME/bp.conf` ファイルにも追加できます。ただし、この方法による名前の追加は、通常、リダイレクトリストアのためだけに行います。`$HOME/bp.conf` ファイルに値が存在する場合、その値が優先されます。

[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティ

この設定にアクセスするには、**Web UI** で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[クライアント属性 (Client attributes)]をクリックします。

[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティは、現在選択されているプライマリサーバーのクライアントに適用されます。

次の表に示すように上書きされないかぎり、[グローバルクライアント属性 (Global client attributes)]プロパティはすべてのクライアントに適用されます。

表 2-10 グローバルクライアント属性

属性	説明
クライアントによる参照を許可する (Allow client browse)	リストア対象ファイルの参照をすべてのクライアントに許可します。特定のクライアントに対して、[全般 (General)]タブの[参照およびリストアの許可 (Browse and Restore ability)]オプションが[両方を拒否する (Deny both)]に設定されている場合、この属性は無効になります。
クライアントによるリストアを許可する (Allow client restore)	ファイルのリストアをすべてのクライアントに許可します。[全般 (General)]タブの[参照およびリストアの許可 (Browse and Restore ability)]オプションが[参照のみを許可する (Allow browse only)]または[両方を拒否する (Deny both)]に設定されている場合、この属性は無効になります。
	現在選択されているプライマリサーバー上のクライアントデータベース内に存在するクライアントのリストを指定します。[クライアント属性 (Client attributes)]でクライアントプロパティを変更するには、クライアントがクライアントデータベース内に存在する必要があります。 クライアントデータベースは、次に示すディレクトリ内のディレクトリとファイルで構成されます。 Windows の場合: <code>install_path¥NetBackup¥db¥client</code> UNIX の場合: <code>/usr/opensv/netbackup/db/client</code> クライアントリストにクライアントが表示されていない場合、[追加 (Add)]をクリックしてクライアントデータベースにクライアントを追加します。クライアント名をテキストボックスに入力するか、クライアントを選択します。次に[追加 (Add)]をクリックします。 ここに入力する名前は、その特定のクライアントの[クライアント名 (Client name)]プロパティと一致している必要があります。一致しない場合は、クライアントは自身のバックアップを参照できません。 p.65 の「[クライアント名 (Client name)]プロパティ」を参照してください。 動的アドレス割り当て (DHCP) を使用している場合、bpclient コマンドを実行してクライアントをクライアントデータベースに追加します。 ビジー状態のファイル処理について詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』を参照してください。 UNIX の場合、次のディレクトリに存在する bpclient コマンドを使用して、クライアントエントリを作成、更新、一覧表示、削除することもできます。 <code>/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd</code>
[一般 (General)]タブ	選択した Windows プライマリサーバー (クライアント) を構成する方法を指定します。 p.68 の「[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティの[全般 (General)]タブ」を参照してください。

属性	説明
[接続オプション (Connect options)]タブ	NetBackup サーバーと NetBackup クライアントの間の接続の構成方法を指定します。 p.73 の「[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティの[接続オプション (Connect options)]タブ」を参照してください。
[Windows オープンファイルバックアップ (Windows open file backup)]タブ	クライアントが Windows Open File Backup を使用するかどうかを指定します。また、スナップショットプロバイダとして[Volume Snapshot Provider]または[ボリュームシャドウコピーサービス (Volume Shadow Copy Service)]のどちらを使用するかも指定します。 p.74 の「[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティの[Windows Open File Backup]タブ」を参照してください。

[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティの[全般 (General)]タブ

このタブにアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。Windows プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[クライアント属性 (Client attributes)]をクリックします。次に、[一般 (General)]タブをクリックします。

[全般 (General)]タブのプロパティは、選択した Windows プライマリサーバーに適用されます。タブは[クライアント属性 (Client attributes)]ページに表示されます。

[全般 (General)]タブには次のプロパティが表示されます。

表 2-11 [一般 (General)]タブのプロパティ

プロパティ	説明
バックアップ無効化の期限 (Disable backups until):	指定した日時まで[全般 (General)]タブで指定されたクライアントをバックアップに使用できないようにします。デフォルトでは、クライアントはオンラインに設定されており、リストされているポリシーに含まれています。 クライアントに対して[バックアップ無効化の期限 (Disable backups until)]が選択されているときは、そのクライアントに対してジョブはスケジュールされません。クライアントはどのジョブにも含まれないため、そのクライアントのバックアップ状態はリストに表示されません。 クライアントがオフライン化されると、クライアントを含んでいてすでに実行されているジョブは完了することを許可されます。 バックアップまたはリストアジョブがオフラインになっているクライアントに対して手動で送信されると、アクティビティモニターはジョブを、状態コード 1000 (クライアントがオフラインです) で失敗したものとして表示します。 メモ: このプロパティへの変更は監査レポートには表示されません。 クライアントをオフラインにする機能はいくつかの状況で有用です。 p.71 の「オフラインオプションの使用上の注意事項と制限」を参照してください。
リストア無効化の期限 (Disable restores until):	指定した日時まで[全般 (General)]タブで指定されたクライアントをリストアに使用できないようにします。デフォルトでは、クライアントはオンラインで、リストアに利用可能です。

プロパティ	説明
データストリームの最大数を設定する (Maximum data streams)	選択されている各クライアントに対して許可される、一度に実行可能なジョブの最大数を指定します。(この値は、複数ストリームが使用されていない場合も、クライアントのジョブ数に適用されます。) この設定を変更するには、[データストリームの最大数を設定する (Maximum data streams)]を選択します。値をスクロールまたは入力します (最大 99)。 [データストリームの最大数を設定する (Maximum data streams)]プロパティには、[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]および[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)]と次の相互関係があります。 ■ [データストリームの最大数を設定する (Maximum data streams)]プロパティが設定されていない場合は、[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]プロパティか[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)]プロパティによって示される値のうちいずれか小さい方が限度となります。 ■ [データストリームの最大数を設定する (Maximum data streams)]プロパティが設定されている場合、NetBackup は[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]プロパティを無視します。NetBackup は [データストリームの最大数を設定する (Maximum data streams)]と[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)]のうちで小さい方の値を使用します。 p.115 の「[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ」を参照してください。 p.704 の「[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)](ポリシー属性)」を参照してください。(ポリシー属性)
参照およびリストア	バックアップおよびアーカイブを参照およびリストアするクライアント権限を指定します。[クライアント属性 (Client attributes)]の[一般 (General)]タブでクライアントを選択し、[参照およびリストア (Browse and restore)]プロパティを選択します。 [グローバルクライアント属性 (Global client attribute)]の設定を使用するには、[グローバル設定を使用する (Use global settings)]を選択します。 ■ 選択したクライアントのユーザーに、参照およびリストアを許可するには、[両方を許可する (Allow both)]を選択します。 ■ 選択したクライアントのユーザーに、参照だけを許可する場合は、[参照のみを許可する (Allow browse only)]を選択します。 ■ 選択したクライアントのユーザーに、参照およびリストアを禁止する場合は、[両方を拒否する (Deny both)]を選択します。

プロパティ	説明
スケジュールバックアップの参照およびリストア (Browse and restore scheduled backups)	クライアントがスケジュールバックアップを表示し、スケジュールバックアップからリストアできるかどうかを指定します。(この設定は、ユーザーバックアップおよびユーザーアーカイブには影響しません。) クライアントにログオンしている Windows 以外の管理者または root 以外のユーザーに許可される権限に適用されます。このプロパティは、バックアップ権限およびリストア権限を持たないユーザーにも適用されます。 Windows の管理者とルートユーザーは、[スケジュールバックアップの参照およびリストア (Browse and restore scheduled backups)] の設定に関係なく、ユーザーバックアップの場合と同様にスケジュールバックアップの参照とリストアを実行できます。
重複排除 (Deduplication)	NetBackup Data Protection Optimization Option を使用している場合、クライアントに対する重複排除処理を指定します。 クライアント側の重複排除オプションとその処理の説明については、次を参照してください。 p.72 の「重複排除の場所」を参照してください。

オフラインオプションの使用上の注意事項と制限

クライアントをオフラインにする機能はいくつかの状況で有用です。たとえば、計画された停止か保守の場合に、不必要なエラーを管理者が調査するのを避けるために、クライアントシステムをオフラインにできます。また、このオプションはシステムの新しいクライアントを予期して対応するために使うことができます。ポリシーには追加できますが、実際に適用され、使用できる状態になるまではオフラインとして設定します。

クライアントがオフラインの場合、次の処理が可能です。

表 2-12 オフラインオプションの処理

ジョブまたは操作の形式	処理または制限
クライアントはオフラインであり、ジョブはすでに進行中である。	オフラインクライアントは、すべてのジョブに引き続き含まれます。
クライアントはオフラインであり、クライアントがオフラインになる前にジョブの再試行が開始された。	ジョブの再試行は通常どおり続行されます。
ストレージライフサイクルポリシーとオフラインクライアントに関連付けられている任意の複製ジョブ。	完了するまで引き続き実行されます。
リストアジョブ	オフラインクライアントに対して実行できます。

ジョブまたは操作の形式	処理または制限
ユーザーがオフラインクライアントの手動バックアップを試みる。	バックアップは状態コード 1000 ([クライアントがオフラインです (Client is offline)]) で失敗します。ユーザーは、クライアントが再びオンラインになるまで待つか、クライアントを手動でオンラインにできます。この処理は、NetBackup Web UI か bpclient コマンドを使用して、手動ジョブを再発行する前に行ってください。
アーカイブバックアップ	オフラインクライアントでは許可されていません。
管理者がジョブを再度実行するか、または再開する。	オフラインクライアントでは許可されていません。

注意: プライマリサーバーがオフラインの場合、ホットカタログバックアップを実行できません。

重複排除の場所

NetBackup Data Protection Optimization Option を使用している場合、[重複排除 (Deduplication)] プロパティでクライアントに対する重複排除処理を指定します。クライアント側の重複排除オプションについて詳しくは、次を参照してください。

p.73 の 表 2-13 を参照してください。

プライマリサーバーと (自身のデータを重複排除する) クライアントは、同じ名前を使用してストレージサーバーを解決する必要があります。名前は、NetBackup 重複排除エンジンのクレデンシアルを作成したホスト名である必要があります。同じ名前を使わないと、バックアップが失敗します。一部の環境では、クライアントとプライマリサーバーがストレージサーバーに同じ名前を使うように慎重に構成する必要がある場合があります。そのような環境の中には、VLAN へのタグ付けを使う環境や、マルチホームホストを使う環境などがあります。

NetBackup のクライアント側の重複排除では、以下はサポートされません。

- NetBackup バックアップポリシーで構成されるジョブごとの複数コピー。複数のコピーを指定するジョブでは、バックアップイメージはストレージサーバーに送信され、そこで重複排除できます。
- NDMP ホスト。NDMP ホストにクライアント側の重複排除を使うとバックアップジョブは失敗します。

表 2-13 クライアント側の重複排除オプション

オプション	説明
常にメディアサーバーを使用 (Always use the media server) (デフォルト)	メディアサーバー上のデータを常に重複排除します。デフォルトのオプションです。 次のいずれかに該当する場合、ジョブは失敗します。 ■ ストレージサーバーの重複排除サービスが無効である。 ■ 重複排除プールが停止しています。
クライアント側の重複排除を優先して使用 (Prefer to use client-side deduplication)	クライアント上のデータを重複排除してから、ストレージサーバーに直接送信します。 NetBackup は、まずストレージサーバーがアクティブかどうかを判断します。アクティブな場合、クライアントはバックアップデータの重複を排除し、ディスクに書き込むストレージサーバーにそのデータを送信します。アクティブでない場合、クライアントはデータの重複を排除するメディアサーバーにバックアップデータを送信します。
常にクライアント側の重複排除を使用 (Always use client-side deduplication)	クライアント上のバックアップデータを常に重複排除してから、ストレージサーバーに直接送信します。 ジョブが失敗しても、NetBackup はジョブを再試行しません。

バックアップポリシーの[クライアント側の重複排除を使用する (Prefer to use client-side deduplication)]または[常にクライアント側の重複排除を使用する (Always use client-side deduplication)]ホストプロパティを上書きできます。

p.729 の「[クライアント側の重複排除 \(ポリシー属性\)](#)」を参照してください。

クライアントの重複排除について詳しくは、『[NetBackup 重複排除ガイド](#)』を参照してください。

[クライアント属性 (Client attributes)] プロパティの [接続オプション (Connect options)] タブ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。サーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[クライアント属性 (Client attributes)]をクリックします。[接続オプション (Connect Options)]タブをクリックします。

[接続オプション (Connect options)]タブのプロパティでは、NetBackup サーバーから NetBackup クライアントへの接続方法を示します。タブは[クライアント属性 (Client attributes)]ページに表示されます。

[接続オプション (Connect options)]タブには次のオプションが表示されます。

表 2-14 [接続オプション (Connect options)]タブのプロパティ

プロパティ	説明
BPCD コネクトバック (BPCD connect back)	デーモンが NetBackup Client デーモン (BPCD) にコネクトバックする方法を指定し、次のオプションを含みます。 ■ デフォルト接続オプションを使用 (Use default connect options) クライアントの NetBackup サーバーの[ファイアウォール (Firewall)]ホストプロパティに定義されている値を使用します。 p.110 の「[ファイアウォール (Firewall)]プロパティ」を参照してください。 ■ ランダムポート (Random port) 許容範囲の空きポートから、NetBackup によってランダムに 1 つのポートが選択され、レガシーコネクトバック方式が実行されます。 ■ VNETD ポート (VNETD port) NetBackup は、コネクトバック方式で vnetd ポート番号を使用します。
ポート (Ports)	選択されたクライアントがサーバーに接続するために使用する方法を指定します。次のオプションを含んでいます。 ■ デフォルト接続オプションを使用 (Use default connect options) クライアントの NetBackup サーバーの[ファイアウォール (Firewall)]ホストプロパティに定義されている値を使用します。 p.110 の「[ファイアウォール (Firewall)]プロパティ」を参照してください。 ■ 予約済みポート (Reserved ports) 予約済みのポート番号を使用します。 ■ 予約されていないポート (Non-reserved ports) 予約されていないポート番号を使用します。

[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティの[Windows Open File Backup]タブ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。Windows プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[クライアント属性 (Client attributes)]をクリックします。次に、[Windows オープンファイルバックアップ (Windows open file backup)]タブをクリックします。

このタブの設定は、デフォルト設定を変更する場合にのみ使用します。

デフォルトでは、NetBackup はすべての Windows クライアントに対して Windows Open File Backup を使用します。([クライアント属性 (Client attributes)]ページにクライアントは表示されません) サーバーは、すべての Windows クライアントに対して次のデフォルト設定を使用します。

- Windows Open File Backup はクライアントで有効になっています。

- Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS)。
- スナップショットは、一度にすべてのドライブ ([グローバルドライブのスナップショット (Global drive snapshot)]) でとられるのではなく、ドライブごと ([各ドライブのスナップショット (Individual drive snapshot)]) にとられます。
- エラー発生時には、スナップショットは終了されます ([エラー発生時にバックアップを中止する (Abort backup on error)])。

スナップショットはソースボリュームの特定時点でのビューです。NetBackup はバックアップジョブの間にビジー状態かアクティブ状態のファイルにアクセスするのにスナップショットを使います。スナップショットプロバイダを使用しない場合、使用中のファイルにアクセスしてバックアップすることはできません。

表 2-15 [Windows Open File Backup] タブのプロパティ

プロパティ	説明
追加 (Add)	Windows Open File Backup のデフォルト設定を変更するときのみ NetBackup クライアントを追加します。
削除 (Delete)	リストからクライアントを削除します。
選択したクライアントに対して Windows Open File Backup を有効にする (Enable Windows open file backup for the selected client)	選択したクライアントで Windows Open File Backup を使用することを指定します。 このオプションは、Snapshot Client のライセンス取得時に利用できる[スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)]ポリシーオプションから独立して機能します。 クライアントが含まれているポリシーで[スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)]ポリシーオプションが無効になっていて、かつスナップショットが不要な場合、そのクライアントに対して[このクライアントに対して Windows Open File Backup を有効にする (Enable Windows open file backups for this client)]プロパティも無効にする必要があります。両方のオプションが無効になっていないと、管理者の意図に反してスナップショットが作成されます。
スナップショットプロバイダ (Snapshot Provider)	選択したクライアントのスナップショットプロバイダを選択します。 ■ Veritas Volume Snapshot Provider (VSP) を使用する (Use Veritas Volume Snapshot Provider (VSP)) このオプションは NetBackup の旧バージョンでのみ使用できます。これらのクライアントバージョンのサポートは終了しました。 ■ Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) を使用する (Use Microsoft Volume Shadow Copy Service (VSS)) 選択したクライアントのボリュームと論理ドライブのボリュームスナップショットを作成するために VSS を使用します。 VSS 使用時の Active Directory 個別リストアの実行方法について詳しくは、次のトピックを参照してください。 p.57 の「[Active Directory] プロパティ」を参照してください。

プロパティ	説明
スナップショットの使用方 法 (Snapshot usage)	メモ: [各ドライブのスナップショット (Individual drive snapshot)]プロパティおよび[グローバルドライブのスナップショット (Global drive snapshot)]プロパティは、Windows Open File Backup を使用し、複数ストリームが許可されていないバックアップだけに適用されます。すべての複数ストリームバックアップジョブでは、複数ストリームポリシー内のボリューム用に同じボリュームスナップショットが共有されます。また、ボリュームスナップショットはグローバル方式でとられます。 選択したクライアントのスナップショットを作成する方法を選択します。 ■ 各ドライブのスナップショット (Individual drive snapshot) 各ドライブのスナップショットをとるように指定します (デフォルト)。このプロパティを有効にすると、スナップショットの作成およびファイルのバックアップは、ボリュームごとに順次行われます。たとえば、ドライブ C とドライブ D のバックアップを行うと想定します。 [各ドライブのスナップショット (Individual drive snapshot)]プロパティを選択した場合、NetBackup はドライブ C のスナップショットをとり、ドライブのバックアップを行った後、スナップショットを破棄します。NetBackup は、続いてドライブ D のスナップショットをとり、ドライブのバックアップを行った後、スナップショットを破棄します。 ボリュームスナップショットは、同時に 1 台のドライブだけで有効で、これはどのドライブのバックアップが行われるかによって異なります。このモードは、異なるドライブに存在するファイル間の関連を保持する必要がない場合に有効です。 ■ グローバルドライブのスナップショット (Global drive snapshot) グローバルドライブのスナップショットをとるように指定します。バックアップジョブ (複数ストリームのバックアップの場合はストリームグループ) でスナップショットが必要なすべてのボリュームで、スナップショットが一度にとられます。スナップショットの作成が成功しない場合は、[各ドライブのスナップショット (Individual drive snapshot)]オプションを使用します。 たとえば、ドライブ C とドライブ D のバックアップを行うと想定します。 この場合、NetBackup は C と D のスナップショットをとります。次に、NetBackup ドライブ C のバックアップを行い、ドライブ D のバックアップを行います。 その後、NetBackup は C と D のスナップショットを破棄します。 このプロパティを指定すると、異なるボリュームのファイル間でファイルの一貫性が保持されます。バックアップに含まれるすべてのボリュームについて、ある特定の時点にとられた同じスナップショットがバックアップに使用されます。

プロパティ	説明
スナップショットのエラー制御 (Snapshot error control)	スナップショットエラーが発生した場合に実行する処理を決定します。 ■ エラー発生時にバックアップを中止する (Abort backup on error) (スナップショットの作成後に) バックアップジョブ中にエラーが発生すると、バックアップを停止します。 スナップショット作成後、そのスナップショットを使用したバックアップの実行中に発生する問題の最も一般的な原因は、キャッシュ容量の不足です。[エラー発生時にバックアップを中止する (Abort backup on error)]プロパティを選択すると(デフォルト)、バックアップでスナップショットの問題が検出された場合に、スナップショットエラー状態でバックアップジョブがキャンセルされます。 このプロパティは、スナップショットの作成には適用されません。バックアップジョブに対してスナップショットが正常に作成されたかどうかに関係なく、バックアップジョブは続行されます。 ■ スナップショットを無効にしてバックアップを続行する (Disable snapshot and continue) バックアップ中にスナップショットが無効になった場合に、ボリュームスナップショットを破棄します。バックアップは、Windows Open File Backup を無効にして続行されます。 バックアップ中に問題が発生したファイルは、バックアップジョブによってバックアップされていない可能性があります。このようなファイルはリストアできない場合があります。 メモ: 通常、ボリュームスナップショットに割り当てられたキャッシュ容量が不十分な場合、バックアップの実行中にボリュームスナップショットが無効になります。クライアントのインストールに最適な構成になるように、Windows Open File Backup スナップショットプロバイダのキャッシュストレージ構成を再構成します。

UNIX クライアントの[クライアントの設定 (Client settings)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。UNIX クライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[UNIX クライアント (UNIX client)]、[クライアントの設定 (Client settings)]をクリックします。

UNIX の[クライアントの設定 (Client settings)]プロパティは、現在選択されている、UNIX プラットフォームで実行されている NetBackup クライアントに適用されます。

UNIX の[クライアントの設定 (Client settings)]ホストプロパティには、次の設定が含まれています。

表 2-16 UNIX の[クライアントの設定 (Client settings)]プロパティ

プロパティ	説明
ロックされたファイルに対する処理 (Locked file action)	ファイルモードで強制ロックが有効になっているファイルのバックアップを行う場合の、NetBackup の処理を指定します。 次のオプションのいずれかを選択します。 ■ 待機 (Wait) デフォルトでは、NetBackup はファイルのロックが解除されるまで待機します。待機時間が、プライマリサーバーで構成されている[クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)]ホストプロパティを超えると、バックアップは失敗し、状態コード 41 が表示されます。 p.186 の「[タイムアウト (Timeouts)]プロパティ」を参照してください。 ■ スキップ (Skip) NetBackup は他のプロセスによって強制ロックが設定されているファイルがスキップされます。ファイルをスキップする必要がある場合、メッセージがログに書き込まれます。
ファイル圧縮メモリ (File compression memory)	バックアップの実行中にファイルを圧縮する場合に、クライアント上で利用可能なメモリの量を指定します。圧縮を選択している場合、クライアントソフトウェアでは、この値を使用して圧縮テーブルに必要なメモリ領域が判断されます。コードを圧縮するのに利用可能なメモリを増やすと、圧縮率が高くなり、コンピュータのリソース消費率も高くなります。他のプロセスにもメモリが必要な場合は、過剰なスワッピングを回避するために、コンピュータに搭載されている実際の物理メモリの半分の値を使います。 デフォルトは 0 (ゼロ) です。このデフォルトは適切であるため、問題が発生した場合にのみ変更します。
ファイルのアクセス時刻をバックアップ前の値にリセット (Reset file access time to the value before backup)	ファイルのアクセス時刻 (atime) にバックアップ時刻を表示することを指定します。デフォルトでは、NetBackup によってアクセス時刻がバックアップ前の値にリセットされ、アクセス時刻が保持されます。 メモ: この設定は、ファイルのアクセス時刻を検証するソフトウェアおよび管理スクリプトに影響します。 メモ: NetBackup アクセラレータを使用してバックアップを実行する場合には、この設定は無視されます。アクセラレータはバックアップするファイルの atime の記録とリセットを行いません。 p.734 の「アクセラレータの注意と要件」を参照してください。
ユーザー主導バックアップ、アーカイブおよびリストアの状態を保持する期間 (Keep status of user-directed backups, archives, and restores)	進捗レポートが削除されるまでに保持される日数を指定します。デフォルトは 3 日間 です。最小値は 0 (ゼロ) です。最大値は 9,999 日 です。 ユーザー主導の操作のログは、クライアントシステムの次のディレクトリに格納されます。 <pre>install_path¥NetBackup¥logs¥user_ops¥loginID¥logs</pre>

プロパティ	説明
増分バックアップに VxFS ファイル変更ログ (FCL) を使用する (Use VxFS File Change Log (FCL) for incremental backups)	NetBackup が VxFS クライアントでファイル変更ログを使用するかどうかを指定します。 デフォルトでは、使用されません。 p.79 の「[増分バックアップに VxFS ファイル変更ログ (FCL) を使用する (Use VxFS File Change Log (FCL) for incremental backups)]プロパティ」を参照してください。
スナップショットのデフォルトのキャッシュデバイスパス (Default cache device path for snapshots)	この設定はコピーオンライト処理で利用可能な raw パーティションを識別します。この raw パーティションは、スナップショット方式として nbu_snap または VxFS_Snapshot のいずれかが選択されている場合に使用されます。このパーティションは、ポリシーに含まれているすべてのクライアントに存在している必要があります。
追加 (Add)	圧縮しないファイル拡張子のリストに、ファイル拡張子を追加します。[追加 (Add)]をクリックし、ファイル拡張子を入力します。[追加 (Add)]をクリックすると、拡張子がリストに追加されます。
次のファイル拡張子を持つファイルは圧縮しない (Do not compress files ending with these file extensions)	ファイル拡張子のリストを指定します。これらの拡張子が付いたファイルはすでに圧縮形式になっている可能性があるため、バックアップの実行中、NetBackup によってこれらのファイルは圧縮されません。 これらの拡張子の指定にワイルドカードは使用しないでください。たとえば、.A1 は指定できますが、.A* や .A[1-9] は指定できません。 すでに圧縮済みのファイルを再び圧縮すると、サイズがわずかに大きくなります。UNIX クライアント上に固有のファイル拡張子が付いた圧縮済みのファイルが存在する場合、その拡張子をリストに追加して圧縮からエクスクルードします。 bp.conf ファイルへの COMPRESS_SUFFIX =.suffix オプションの追加に対応します。

[増分バックアップに VxFS ファイル変更ログ (FCL) を使用する (Use VxFS File Change Log (FCL) for incremental backups)]プロパティ

[増分バックアップに VxFS ファイル変更ログ (FCL) を使用する (Use VxFS File Change Log (FCL) for incremental backups)]プロパティは、VxFS ファイルシステムが FCL をサポートするすべてのプラットフォームとバージョンでサポートされます。

次の VxFS ファイルシステムは FCL をサポートします。

- VxFS 4.1 以降を実行している Solaris SPARC プラットフォーム
- VxFS 5.0 以降を実行している AIX
- VxFS 5.0 以降を実行している HP 11.23
- VxFS 4.1 以降を実行している Linux

ファイル変更ログ (FCL) は、ファイルシステムのファイルおよびディレクトリへの変更のトラッキングを行います。変更には次のものが含まれます: ファイル作成、リンク、リンク解除、ファイル名の変更、データの追加、データの上書き、データの切り捨て、拡張属性の変更、データの破損、ファイルプロパティの更新。

NetBackup では、FCL を使用して、どのファイルを増分バックアップに選択するとファイルシステムでの不要な処理を省略できるかを判断できます。各クライアントに保存されている FCL 情報には、各バックアップのバックアップ形式、FCL オフセットおよびタイムスタンプが含まれます。

このプロパティを使用して効果があるかどうかは、主に、ファイルシステムのサイズに対するファイルシステムの変更の数に依存します。増分バックアップのパフォーマンスに対する影響は、ファイルシステムのサイズおよび使用状況によって大幅に異なります。

たとえば、サイズが非常に大きく、比較的变化の少ないファイルシステム上のクライアントに対して、このプロパティを有効にします。ポリシーは、FCL を読み込むだけでクライアントでバックアップする必要があるオブジェクトを判断できるため、クライアントの増分バックアップのほうがより早く完了する可能性があります。

1 つのファイルに対して多くの変更が加えられた場合、または多くのファイルに対して複数の変更が加えられた場合、時間はあまり短縮されない可能性があります。

p.813 の「[\[バックアップ対象 \(Backup Selections\)\]タブ](#)」を参照してください。

[増分バックアップに VxFS ファイル変更ログ (FCL) を使用する (Use VxFS File Change Log (FCL) for incremental backups)]プロパティが機能するには、次の条件が満たされている必要があります。

- NetBackup で FCL を使用するすべてのクライアントで、[増分バックアップに VxFS ファイル変更ログ (FCL) を使用する (Use VxFS File Change Log (FCL) for incremental backups)]プロパティが有効である。
- VxFS クライアントで FCL が有効である。
VxFS クライアントで FCL を有効にする方法については、Arctera Storage Foundation のマニュアルを参照してください。
- 最初の完全バックアップ時に、クライアントで[増分バックアップに VxFS ファイル変更ログ (FCL) を使用する (Use VxFS File Change Log (FCL) for incremental backups)]プロパティが有効である。後続の増分バックアップを同期化するには、この完全バックアップが必要である。
- ポリシーのバックアップ対象リストに VxFS マウントポイントが次のいずれかの方法で指定されている。
 - ALL_LOCAL_DRIVES を指定する。
 - 実際の VxFS マウントポイントを指定する。
 - オプション[クロスマウントポイント (Cross mount points)]を有効にした状態で、VxFS マウントポイントより上位のディレクトリを指定する。

p.712 の「[\[クロスマウントポイント \(Cross mount points\)\] \(ポリシー属性\)](#)」を参照してください。

ポリシーで[True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore information)]が有効になっている場合、または[True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore information)]とともに[移動検出を行う (with move detection)]を選択している場合、クライアントの[増分バックアップに VxFS ファイル変更ログ (FCL) を使用する (Use VxFS File Change Log (FCL) for incremental backups)]プロパティは無視されます。

次の表は、VxFS ファイル変更ログ機能で利用可能な追加オプションについて説明しています。

表 2-17 VxFS ファイル変更ログ機能のオプション

オプション	説明
アクティビティ 모니터のメッセージ	バックアップ中にファイル変更ログが使用されていることを示す次のメッセージが表示されます。 Using VxFS File Change Log for backup of <i>pathname</i> 完全バックアップと増分バックアップが同期化されていない場合にもメッセージが表示されます。
データファイルと FCL の同期状態の保持	このプロパティが機能するには、データファイルと FCL が同期化されている必要があります。VxFS クライアント上でデータファイルと FCL の同期状態を保持するために、FCL をオフにして再度オンにしないでください。 メモ: FCL の処理中にエラーが発生した場合、NetBackup では、通常のファイルシステムのスキャンに切り替えられます。切り替えが行われると、アクティビティモニターに表示されます。
VxFS の管理	FCL を管理するための追加の VxFS コマンドについては、Arctera Storage Foundation のマニュアルを参照してください。

Windows クライアントの[クライアントの設定 (Client settings)]プロパティ

これらの設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。[Windows クライアント (Windows client)]を選択して[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[Windows クライアント (Windows client)]、[クライアントの設定 (Client settings)]の順に選択します。

Windows の[クライアントの設定 (Client settings)]プロパティは、現在選択されている Windows クライアントに適用されます。

[Windows クライアント (Windows client)]、[クライアントの設定 (Client settings)]ホストプロパティには次の設定が含まれます。

表 2-18 Windows クライアントの[クライアントの設定 (Client settings)]プロパティ

プロパティ	説明
一般レベル (General level)	bpnetd、bpbkar、tar、nbwin のログを有効にします。ログレベルを高くすると、書き込まれる情報が増加します。デフォルトは[最小ログ (Minimum logging)]です。
アーカイブビットを消去するまでの待機時間 (Wait time before clearing archive bit)	クライアントが、差分増分バックアップのアーカイブビットを消去するまでに待機する時間を指定します。設定可能な最小値は、300 秒 (デフォルト) です。クライアントは、バックアップが正常に終了したことがサーバーから通知されるまで待機します。この時間内にサーバーからの応答がない場合、アーカイブビットは消去されません。 このオプションは、差分増分バックアップだけに適用されます。累積増分バックアップでは、アーカイブビットが消去されません。
Windows 変更ジャーナルを使用する (Use Windows change journal)	メモ: [Windows 変更ジャーナルを使用する (Use Windows change journal)]オプションは Windows クライアントだけに適用されます。 このオプションは、[アクセラレータを使用する (Use accelerator)]ポリシーの属性と[アクセラレータによって強制される再スキャン (Accelerator forced rescan)]スケジュール属性とともに機能します。 p.733 の「アクセラレータおよび Windows の変更ジャーナル」を参照してください。 p.730 の「[アクセラレータを使用する (Use accelerator)](ポリシー属性)」を参照してください。 p.771 の「[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプション (スケジュールの属性)」を参照してください。
オーバーラップ時間 (Time overlap)	日付を基準としたバックアップを使用している場合に、増分バックアップの日付範囲に追加する時間 (分) を指定します。この値を設定すると、NetBackup クライアントとサーバー間のクロックスピードの差を補正できます。デフォルトは 60 分です。 この値は、アーカイブビットを使用した増分バックアップやフォルダの作成日時の検証の際に使用されます。この比較は、日付を基準としたバックアップと同様に、アーカイブビットに基づくバックアップでも行われます。
通信バッファサイズ (Communications buffer size)	NetBackup サーバーとクライアント間のデータ転送に NetBackup が使う TCP/IP バッファのサイズを KB 単位で指定します。たとえば、バッファサイズを 10 KB にするには 10 を指定します。設定可能な最小値は 2 で、設定可能な最大値はありません。デフォルトは 128 KB です。

プロパティ	説明
ユーザー主導のタイムアウト (User-directed timeouts)	ユーザーがバックアップまたはリストアを要求してからその操作が開始されるまでの時間を秒数で指定します。ここで指定した時間内に操作が開始されないと、その操作は行われません。 このプロパティには最小値および最大値の制限はありません。デフォルトは 60 秒です。
リストアするバックアップイメージのデフォルト検索を実行する (Perform default search for restore)	NetBackup にバックアップイメージのデフォルトの範囲を自動的に検索するように指示します。[リストア (Restore)] ウィンドウが開いている場合は常に、バックアップが行われたフォルダおよびファイルが表示されます。 [リストアするバックアップイメージのデフォルト検索を実行する (Perform default search for restore)] チェックボックスのチェックを外すと、初期検索が無効になります。このプロパティが無効になっている場合、NetBackup の[リストア (Restore)] ウィンドウを開いたときに、ファイルおよびフォルダは表示されません。デフォルトでは、このオプションは有効になっています。
TCP レベル (TCP level)	TCP のログを有効にします。 次の利用可能なログレベルのいずれかまでスクロールします。 ■ 0 追加ログなし (デフォルト) ■ 1 基本 TCP/IP 関数のログ ■ 2 すべての TCP/IP 関数のログ ■ 3 各読み込み/書き込みの内容のログ メモ: [TCP レベル (TCP level)] を 2 または 3 に設定すると、状態レポートのサイズが非常に大きくなります。バックアップおよびリストア処理の速度が低下する場合があります。

プロパティ	説明
増分 (Incrementals)	■ タイムスタンプベース ファイルが最後に変更された日付に基づいて、バックアップに選択されたファイル。[変更ジャーナルを使用する (Use Change Journal)]を選択すると、[タイムスタンプベース (Based on timestamp)]が自動的に選択されます。 ■ アーカイブビットベース メモ: アーカイブビットに基づいて増分バックアップを行う場合、同じ Windows ポリシー内で、差分増分バックアップと累積増分バックアップの組み合わせを使用しないことをお勧めします。 NetBackup は、アーカイブビットが設定されているファイルだけを増分バックアップに含めます。システムは、ファイルが変更された場合にこのアーカイブビットを設定します。このビットは、通常、NetBackup によって消去されるまで設定されたままになります。 完全バックアップでは、アーカイブビットは常に消去されます。差分増分バックアップでは、ファイルのバックアップが正常に行われると、アーカイブビットが消去されます。差分増分バックアップは、[アーカイブビットを消去するまでの待機時間 (Wait time before clearing archive bit)]プロパティで指定した時間 (秒) 内に行われる必要があります。累積増分バックアップまたはユーザーバックアップでは、アーカイブビットは影響を受けません。 ファイルをインストールしたり、他のコンピュータからコピーした場合、新しいファイルでも元のタイムスタンプが保持されます。ファイルの元の日付が、このコンピュータの最後のバックアップ日付より古い場合、新しいファイルのバックアップは次の完全バックアップまで行われません。
1 つの問題に対するエラーメッセージの最大数	NetBackup クライアントから NetBackup サーバーに同じエラーメッセージを送信できる回数を定義します。たとえば、あるファイルのアーカイブビットをリセットできない場合、このプロパティによってサーバー上のログに表示されるエラーメッセージの回数が制限されます。デフォルトは 10 です。
ユーザー主導バックアップ、アーカイブおよびリストアの状態を保持 (Keep status of user-directed backups, archives, and restores)	NetBackup によって自動的に削除されるまでに進捗レポートがシステムに保持される日数を指定します。デフォルトは 3 日間です。

NetBackup 環境における変更ジャーナル機能の使用の有効性を判断する方法

NetBackup による変更ジャーナルオプションを使用すると効果的なのは、ボリュームは大きい、変更が比較的少ない場合だけです。

NetBackup によって変更ジャーナルオプションを有効にすると効果がある場合:

- NTFS ボリュームに 1,000,000 を超えるファイルおよびフォルダが存在し、増分バックアップ間で変更されるオブジェクトの数が少ない (100,000 未満) 場合、このボリュームに対して **NetBackup** の変更ジャーナルオプションを有効にすると、効果的です。

NetBackup によって変更ジャーナルオプションを有効にしても効果がない場合:

- 変更ジャーナルのサポートは、ボリュームの変更ジャーナルから収集される情報を使用して、増分バックアップでのスキャン時間を短縮することが目的です。したがって、ボリューム上のファイルシステムに存在するファイルおよびフォルダが比較的少数 (たとえば、ファイルおよびフォルダの数が数十万程度) の場合は、**NetBackup** の変更ジャーナル機能を有効にしないことをお勧めします。このような条件下では、通常のファイルシステムのスキャンが適切です。
- ボリュームでの変更の合計数がオブジェクトの合計の 10% から 20% を超える場合は、そのボリュームに対して **NetBackup** の変更ジャーナルオプションを有効にしても、効果はありません。
- ウイルススキャンソフトウェアは、変更ジャーナルの使用に影響する場合があることに注意してください。いくつかのリアルタイムウイルススキャンプログラムは、ファイルを捕捉し読み取りのために開いてウイルスをスキャンし、その後、アクセス時間をリセットします。その結果、スキャンされたすべてのファイルに対して、変更ジャーナルのエントリが作成されます。

NetBackup によって変更ジャーナル機能を使う場合のガイドライン

次に、**NetBackup** によって変更ジャーナル機能を使用する場合に考慮すべきガイドラインを示します。

- ユーザー主導バックアップでは、変更ジャーナルのサポートは提供されません。永続レコード内の完全バックアップと増分バックアップの **USN** スタンプは、変更されません。
- **NetBackup** による変更ジャーナル機能は、リストアでの「チェックポイントから再開」とともに機能します。
p.703 の「[リストアジョブでの「チェックポイントから再開」機能](#)」を参照してください。
- 変更ジャーナルのサポートは、いくつかの **NetBackup** オプションでは提供されていません。

次のオプションまたは製品を使用している場合、[**Windows** 変更ジャーナルを使用する (Use Windows change journal)]を有効にしても、設定は有効になりません。

- True Image Restore (TIR) または移動検出を使用した True Image Restore
p.720 の「[\[True Image Restore 情報を収集する \(Collect true image restore information\)\]](#)(ポリシー属性) (移動検出を行う場合と行わない場合)」を参照してください。
- 合成バックアップ
p.876 の「[合成バックアップについて](#)」を参照してください。
- Bare Metal Restore (BMR)
詳しくは、『**NetBackup Bare Metal Restore 管理者ガイド UNIX、Windows および Linux**』を参照してください。

p.84 の「[NetBackup 環境における変更ジャーナル機能の使用の有効性を判断する方法](#)」を参照してください。

[クラウドストレージ (Cloud Storage)] プロパティ

メモ: これらのプロパティにアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択し、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]をクリックします。次に、[クラウドストレージ (Cloud Storage)]をクリックします。

NetBackup の[クラウドストレージ (Cloud Storage)]プロパティは、現在選択されているプライマリサーバーに適用されます。

この[クラウドストレージ (Cloud Storage)]リストに表示されるホストは、ストレージサーバーを構成するときに選択できます。[サービスプロバイダ (Service provider)]タイプのクラウドベンダーは、サービスホストが利用可能または必要かどうかを判断します。

NetBackup は、一部のクラウドストレージプロバイダのサービスホストを備えています。[サービスプロバイダ (Service provider)]のタイプで可能であれば、新規ホストを[クラウドストレージ (Cloud Storage)]リストに追加できます。ホストを追加する場合は、ホストのプロパティを変更するかまたはホストを[クラウドストレージ (Cloud Storage)]リストから削除できます (NetBackup に含まれている情報を削除することはできません)。

この[クラウドストレージ (Cloud Storage)]リストにサービスホストを追加しない場合は、ストレージサーバーを構成するときにサービスホストを追加できます。クラウドベンダーの[サービスプロバイダ (Service provider)]タイプによって、[サービスのホスト名 (Service host name)]が利用可能または必要かどうかが決まります。

[クラウドストレージ (Cloud Storage)]ホストのプロパティには以下のプロパティが含まれます。

表 2-19 クラウドストレージ

プロパティ	説明
クラウドストレージ	NetBackup がサポートするさまざまなクラウドサービスプロバイダに対応するクラウドストレージが、ここに一覧表示されます。 クラウドストレージを[クラウドストレージ (Cloud Storage)]リストに追加するには、[追加 (Add)]をクリックします。 追加したクラウドストレージのプロパティを変更するには、[クラウドストレージ (Cloud Storage)]リストでクラウドストレージを選択し、[変更 (Change)]をクリックします。 追加したクラウドストレージを削除するには、[クラウドストレージ (Cloud Storage)]リストでクラウドストレージを選択し、[削除 (Remove)]をクリックします。
次の関連付けられたクラウドストレージサーバー: (Associated cloud storage servers for <host>)	選択したクラウドストレージに対応するクラウドストレージサーバーが表示されます。 クラウドストレージサーバーのプロパティを変更するには、[関連付けられたストレージサーバー (Associated Storage Servers for)]リストでストレージサーバーを選択し、[変更 (Change)]をクリックします。

NetBackup Cloud Storage について詳しくは、『[NetBackup クラウド管理者ガイド](#)』を参照してください。

[クレデンシャルアクセス (Credential access)]プロパティ

メモ: これらの設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択し、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]をクリックします。次に、[クレデンシャルアクセス (Credential access)]をクリックします。

ポリシーでクライアントとして名前を指定していない特定の NetBackup ホストには、NDMP またはディスクアレイクレデンシャルへのアクセスを可能にする必要があります。NetBackup ホストの名前を入力するには、[クレデンシャルアクセス (Credential access)]プロパティを使用します。

[クレデンシャルアクセス (Credential access)]ホストプロパティには、次の設定が含まれます。

表 2-20 [クレデンシャルアクセス (Credential access)]ホストプロパティ

プロパティ	説明
[NDMP クライアント (NDMP Clients)]リスト	NDMP クライアントを[NDMP クライアント (NDMP clients)]リストに追加するには、[追加 (Add)]をクリックします。ポリシーでクライアントとして名前が付けられていない NDMP ホストの名前を入力します。
[ディスククライアント (Disk clients)]リスト	ディスククライアントを[ディスククライアント (Disk clients)]リストに追加するには、[追加 (Add)]をクリックします。次の基準のすべてを満たす NetBackup ホストの名前を入力します。 ■ ホストは代替クライアントによるバックアップのオフホストバックアップホストとしてポリシーで指定されている必要があります。 ■ オフホストバックアップコンピュータとして指定されているホストは、いずれの NetBackup ポリシーでも[クライアント (Clients)]タブでクライアントとして名前を付けられていない必要があります。 ■ オフホストバックアップのポリシーは、EMC 社の CLARiiON、HP 社の EVA、または IBM 社のディスクアレイのディスクアレイスナップショット方式のいずれかを使うように構成されている必要があります。 メモ: ディスクアレイまたは NDMP ホストのクレデンシャルは、NetBackup Web UI で指定します。[クレデンシャルの管理 (Credential management)]をクリックした後で、[クライアントのクレデンシャル (Client credentials)]タブをクリックします。 メモ: オフホストの代替クライアントによるバックアップは、ライセンスが別途必要な NetBackup Snapshot Client の機能です。NetBackup for NDMP 機能は NetBackup for NDMP のライセンスを必要とします。

[データの分類 (Data Classification)]プロパティ

これらの設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。サーバーを選択し、[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]または[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]をクリックします。[データの分類 (Data classification)]をクリックします。

[データの分類 (Data classification)]プロパティは、現在選択されているプライマリサーバーまたはメディアサーバーに適用されます。

ストレージライフサイクルポリシーを構成するには、データの分類を[データの分類 (Data classification)]ホストプロパティで構成する必要があります。

p.694 の「[データの分類 (Data classification)](ポリシー属性)」を参照してください。

メモ: データの分類は削除できません。ただし、名前、説明およびランクは変更できます。分類 ID は変更されません。

[データの分類 (Data classification)]ページは次のプロパティを含んでいます。

表 2-21 [データの分類 (Data classification)] プロパティ

プロパティ	説明
[ランク (Rank)] 列	[ランク (Rank)] 列にはデータの分類のランクが表示されます。データの分類の順序によって、リスト内のその他の分類に対するその分類のランクが決まります。番号が最小のランクが、最も優先度が高くなります。 [上へ (Up)] ボタンと [下へ (Down)] ボタンを使用して、リスト内で分類を上または下に移動させます。 新しいデータの分類を作成するには、[追加 (Add)] をクリックします。新しいデータの分類は、リストの下部に追加されます。
[名前 (Name)] 列	[名前 (Name)] 列にはデータの分類の名前が表示されます。データの分類は削除できませんが、データの分類の名前は変更できます。 NetBackup には、デフォルトで次のデータの分類があります。 ■ プラチナ (デフォルトで最も高いランク) ■ ゴールド (デフォルトで 2 番目に高いランク) ■ シルバー (デフォルトで 3 番目に高いランク) ■ ブロンズ (デフォルトで最も低いランク)
[説明 (Description)] 列	[説明 (Description)] には、データの分類のわかりやすい説明を入力します。説明は変更できます。
データの分類 ID (Data Classification ID)	[データの分類 ID (Data classification ID)] は、データの分類を識別するための GUID 値であり、新しいデータの分類が追加され、ホストプロパティが保存されたときに生成されます。 データの分類 ID は、ポリシーの [データの分類 (Data classification)] 属性を設定することで、バックアップイメージと関連付けられます。ID はイメージヘッダーに書き込まれます。ストレージライフサイクルポリシーは、この ID を使用して分類に関連付けられたイメージを識別します。 ID 値はイメージヘッダーに無期限に存在する可能性があるため、データの分類は削除できません。名前、説明およびランクは、データの分類 ID を変更することなく変更できます。

データ分類の追加

データの分類を作成または変更するには、次の手順を使います。

データ分類を追加する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)] の順に選択します。
- 3 [データの分類 (Data classification)] をクリックします。
- 4 [追加 (Add)] をクリックします。
- 5 名前と説明を追加します。

6 [追加 (Add)]をクリックします。

メモ: データの分類は削除できません。

7 分類の優先度を変更するには、行を選択し、[上へ (Up)]または[下へ (Down)]オプションをクリックします。

[デフォルトのジョブの優先度 (Default job priorities)]プロパティ

これらの設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択し、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]をクリックします。次に、[デフォルトのジョブの優先度 (Default job priorities)]をクリックします。

[デフォルトのジョブの優先度 (Default job priorities)]ホストプロパティを使用すると、管理者は各種のジョブ形式のデフォルトのジョブ優先度を設定できます。

ジョブの優先度は次のユーティリティのジョブそれぞれに設定できます。

- キューに投入されたジョブまたは実行中のジョブ用には[アクティビティモニター (Activity monitor)]の[ジョブ (Jobs)]タブ。
p.1053 の「[アクティビティモニターからのジョブの優先度の動的な変更](#)」を参照してください。
- 検証ジョブ、複製ジョブ、インポートジョブ用には[カタログ (Catalog)]ユーティリティ。
- メディアの内容レポートジョブ用には[レポート (Reports)]ユーティリティ。
- リストアジョブ用にはクライアントの バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェース。

[デフォルトのジョブの優先度 (Default job priorities)]ページには、次のプロパティが含まれています。

表 2-22 [デフォルトのジョブの優先度 (Default job priorities)]プロパティ

プロパティ	説明
ジョブの形式 (Job type)	ジョブの形式。

プロパティ	説明
ジョブの優先度 (Job priority)	他のジョブとの間でバックアップリソースの競合が発生した場合のジョブの優先度。指定可能な値の範囲は 0 から 99999 です。数値が大きいほど、ジョブの優先度が高くなります。 新しい優先度設定はホストプロパティが変更された後で作成されるすべてのポリシーに影響します。 優先度が高くても、優先度が低いジョブの前にそのジョブがリソースを受け取ることは保証されません。NetBackup は優先度が低いジョブの前に優先度が高いジョブを評価します。 ただし、次の要因により優先度が高いジョブの前に優先度が低いジョブが実行される場合があります。 ■ ドライブを最大限利用するために、現在ロードされているドライブを使える場合は優先度が低いジョブを最初に実行することがあります。ドライブのアンロードが必要な優先度が高いジョブは待機することになります。 ■ 優先度が低いジョブを多重化グループに追加できる場合、その優先度が低いジョブを最初に実行することがあります。優先度が高いジョブを多重化グループに追加できない場合、その優先度が高いジョブは待機することがあります。 ■ NetBackup Resource Broker (nbrb) は、評価サイクルの実行中にジョブ要求を受け取った場合、ジョブの優先度に関係なく、次のサイクルが開始されるまでそのジョブを考慮しません。

ジョブの優先度の設定について

NetBackup は[ジョブの優先度 (Job priority)]設定を参考にします。優先度が高い方の要求が、必ずしも優先度が低い方の要求の前にリソースを受け取るとはかぎりません。

NetBackup は要求を順次評価し、次の基準に従ってソートします。

- 要求の 1 番目の優先度。
- 要求の 2 番目の優先度。
- 発生時刻 (**Resource Broker** が要求を受信した時刻)。

1 番目の優先度は 2 番目の優先度よりも重く考慮され、2 番目の優先度は発生時刻よりも重く考慮されます。

キューのリストでは優先度の高い方の要求が優先度の低い方の要求よりも先になるため、優先度の高い方の要求が先に評価されます。優先度の高い方の要求が先にリソースを受け取る可能性は高いものの、必ずそうなるとはかぎりません。

次のシナリオは、優先度の低い方の要求が、優先度の高い方の要求よりも先にリソースを受け取る可能性のある状況です。

- 優先度の高い方のジョブは、ロードされたメディアの保持レベル (またはメディアプール) がこのジョブの要件と異なるために、ドライブ内のメディアをアンロードする必要があります。優先度の低い方のジョブは、ドライブにすでにロードされているこのメディア

を使用できます。ドライブの利用率を最大限に高めるため、**Resource Broker** はロードされたメディアとドライブのペアを、優先度の低い方のジョブに与えます。

- 優先度の高い方のジョブは既存の多重化グループに追加できませんが、優先度の低い方のジョブは多重化グループに追加できます。ドライブを継続的に最大効率で動作させるために、優先度の低い方のジョブが多重化グループに追加され、実行されます。
- **Resource Broker** はジョブのリソース要求を受け取り、その要求を処理する前にキューに投入します。新しいリソース要求はソートされ、5 分おきに評価されます。一部の外部イベント(新しいリソースの要求またはリソースの解放など)によって、評価が開始されることもあります。評価サイクルで要求を処理中に **Resource Broker** が要求を受け取った場合、どの優先度の要求であっても、次の評価サイクルが開始されるまでこの要求の評価は行われません。

[分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed application restore mapping)] プロパティ

これらの設定にアクセスするには、**Web UI** で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed application restore mapping)]をクリックします。

SharePoint、Exchange、SQL Server のようなアプリケーションは、複数のホストにデータを配布して、レプリケートします。または、構成に、複数のノード間の通信が行われるクラスタが含まれています。[分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed application restore mapping)]を使用して、データベース環境内のホストをマッピングすることで、**NetBackup** が正常にデータベースをリストアできるようになります。詳しくは、データベースエージェントの管理者ガイドを参照してください。

たとえば、SharePoint ファームに 2 つのアプリケーションサーバー (App1 と App2)、1 つのフロントエンドサーバー (FE1)、1 つの SQL データベース (SQLDB1) があるとします。この SharePoint サーバーの分散アプリケーションリストアマッピングは次のようになります。

アプリケーションホスト	コンポーネントホスト
App1	SQLDB1
App2	SQLDB1
FE1	SQLDB1

[分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed application restore mapping)] ページには次のプロパティが含まれます。

表 2-23 [分散アプリケーションリストアマッピング (Distributed application restore mapping)] プロパティ

プロパティ	説明
追加 (Add)	このオプションは、SharePoint、Exchange、または SQL Server アプリケーションホストでのリストアの実行が認可されているコンポーネントホストを追加します。 SharePoint の場合、NetBackup では、フロントエンドサーバー名の下のバックアップイメージがカタログ化されます。NetBackup によってファーム内の適切なホストに SQL Server のバックエンドデータベースをリストアできるようにするには、SharePoint ホストのリストを指定する必要があります。 Exchange の場合、Exchange 仮想ホスト名と物理ホスト名のリストを指定することは、個別リカバリテクノロジー (GRT) を使うすべての操作で必要になります。オフホストクライアントと個別プロキシホストも含める必要があります。 SQL Server では、この構成は SQL Server クラスタまたは SQL Server 可用性グループ (AG) のリストアに必要です。 メモ: SharePoint、Exchange、または SQL Server を保護する VMware バックアップとリストアの場合、バックアップを参照するホスト、またはリストアを実行するホストのみを追加する必要があります。[VM ホスト名 (VM hostname)] の値以外に [プライマリ VM 識別子 (Primary VM Identifier)] の値を使用する場合は、マッピングを設定することも必要です。詳しくは、データベースエージェントの管理者ガイドを参照してください。 メモ: クライアントの短縮名または完全修飾ドメイン名 (FQDN) を使います。リストの両方の名前を指定する必要はありません。 詳しくは、次を参照してください。 『NetBackup for SharePoint Server 管理者ガイド』 『NetBackup for Exchange Server 管理者ガイド』 『NetBackup for SQL Server 管理者ガイド』
[処理 (Actions)] > [編集 (Edit)]	現在選択されているマッピングのアプリケーションホストまたはコンポーネントホストを編集します。
[処理 (Actions)] > [削除 (Delete)]	マッピングを削除します。

[暗号化 (Encryption)] プロパティ

これらの設定にアクセスするには、Web UI で [ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)] の順に選択します。クライアントを選択します。必要に応じて、[接続

[Connect]]をクリックし、[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[暗号化 (Encryption)]をクリックします。

[暗号化 (Encryption)] プロパティは、現在選択されているクライアントでの暗号化を制御します。

詳しくは、『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。

[暗号化の権限 (Encryption permissions)] プロパティには、選択された NetBackup クライアントの暗号化設定がプライマリサーバーで指定されているとおりに示されます。

表 2-24 [暗号化の権限 (Encryption permissions)] の選択項目

プロパティ	説明
禁止 (Not allowed)	クライアントが暗号化されたバックアップを許可しないように設定します。サーバーが暗号化されたバックアップを要求した場合、バックアップジョブは、エラーが発生して終了します。
許可 (Allowed)	クライアントが、暗号化されたバックアップまたは暗号化されていないバックアップを許可するように設定します。[許可 (Allowed)] は、暗号化に対して構成されていないクライアントのデフォルト設定です。
必須 (Required)	クライアントが暗号化されたバックアップを要求するように設定します。サーバーが暗号化されていないバックアップを要求した場合、バックアップジョブは、エラーが発生して終了します。

暗号化プロパティを選択します。

表 2-25 [暗号化 (Encryption)] プロパティ

プロパティ	説明
標準暗号化を使用する (Use standard encryption)	128 ビットおよび 256 ビットの NetBackup Encryption オプションに適用されます。
クライアントの暗号 (Client cipher)	AES-256-CFB および AES-128-CFB の暗号形式を使用できます。 デフォルトは AES-128-CFB です。 暗号ファイルについて詳しくは、『 NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド 』を参照してください。

Windows クライアント向けのその他の暗号化方法

NetBackup のクライアントとサーバーのデータ暗号化に加えて、Microsoft Windows クライアントは元のディスクのデータを暗号化する方法も利用できます。

次の方法のそれぞれに独自の長所と短所があります。**NetBackup** は、**Microsoft Windows** クライアントを保護するための各方法をサポートしています。

暗号化ファイルシステム

Microsoft Windows の暗号化ファイルシステム (**EFS**) は、ファイルシステムレベルで暗号化を行います。**EFS** は、個々のファイルまたはディレクトリがファイルシステム自体によって暗号化される暗号化方式です。

この技術は、コンピュータへの物理アクセスを行う攻撃者から秘密のデータを保護するために、ファイルを透過的に暗号化します。ユーザーは、ファイルごと、ディレクトリごと、またはドライブごとのベースで暗号化を有効にできます。**Windows** ドメイン環境のグループポリシーは、**EFS** 設定の一部を委任することもできます。

NetBackup の設定は、これらの暗号化オブジェクトの保護には関与しません。暗号化ファイルシステム属性を持つオブジェクトは、自動的にバックアップされ、暗号化された状態でリストアされます。

BitLocker ドライブ暗号化

BitLocker ドライブ暗号化は、**Microsoft** 社の **Windows** デスクトップとサーバーのバージョンに搭載された完全ディスク暗号化機能です。

ディスクの暗号化は、権限がない個人には容易に解読できない読み取り不能なコードに変換することで情報を保護する技術です。ディスクの暗号化では、ディスク暗号化ソフトウェアまたはハードウェアを使用して、ディスクまたはディスクボリュームに書き込まれるすべてのデータビットを暗号化します。

EFS と同様、**NetBackup** の設定は **BitLocker** を使った暗号化に何ら関与しません。**EFS** と異なるのは、暗号化層が **NetBackup** に不可視で、データがオペレーティングシステムによって自動的に復号および暗号化されることです。

NetBackup は暗号化処理の管理をまったく行わないので、暗号化していないデータをバックアップおよびリストアします。

メモ: **BitLocker** の暗号化が有効にされている **Windows** コンピュータを回復する場合は、リストアした後に **BitLocker** の暗号化を再び有効にする必要があります。

オフホストバックアップは、**Windows BitLocker** ドライブ暗号化を実行するボリュームに対応していません。

[Enterprise Vault] プロパティ

この設定にアクセスするには、**Web UI** で [ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)] の順に選択します。**Windows** クライアントを選択します。必要に応じて、[接

続 (Connect)]をクリックし、[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[Windows クライアント (Windows Client)]、[Enterprise Vault]の順に選択します。

[Enterprise Vault] プロパティは現在選択されているクライアントに適用されます。

バックアップおよびリストアを実行するには、Enterprise Vault サーバーへのログオン、および Enterprise Vault SQL データベースとの通信に使用されるアカウントのユーザー名およびパスワードが、NetBackup で認識される必要があります。ユーザーは、Enterprise Vault コンポーネントのバックアップおよびリストア操作を実行するすべての NetBackup クライアントにログオンアカウントを設定する必要があります。

[Enterprise Vault]ホストのプロパティには次の設定があります。

表 2-26 [Enterprise Vault]プロパティ

プロパティ	説明
ユーザー名 (User name)	Enterprise Vault へのログオンに使用するアカウントのユーザー ID (DOMAIN¥user name) を指定します。
パスワード (Password)	アカウントのパスワードを指定します。
バックアップ前の一貫性チェック (Consistency check before backup)	NetBackup のバックアップ操作が開始される前に SQL Server のデータベースで実行する一貫性チェックの種類を選択します。
一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する (Continue with backup if consistency check fails)	一貫性チェックが失敗してもバックアップジョブを続行します。 一貫性チェックが失敗してもジョブを続行するにはそれが望ましいことがあります。たとえば、現在の状態のデータベースのバックアップはバックアップを全然行わないよりもよいことがあります。または、ごく小さい問題の場合は、大きいデータベースのバックアップを続行することが望ましいことがあります。

[Enterprise Vault ホスト (Enterprise Vault hosts)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。

[Enterprise Vault ホスト (Enterprise Vault hosts)]をクリックします。

[Enterprise Vault ホスト (Enterprise Vault hosts)]プロパティは、現在選択されているプライマリサーバーに適用されます。

NetBackup で、SQL データベースを Enterprise Vault ファーム内の正しいホストにリストアできるようにするには、特別な構成が必要です。[Enterprise Vault ホスト (Enterprise Vault hosts)]プライマリサーバープロパティでは、ソースホストと宛先ホストを指定します。そうすることにより、宛先ホストでリストアを実行できるソースホストを指定します。

[Enterprise Vault ホスト (Enterprise Vault hosts)] ページには次のプロパティが含まれています。

表 2-27 [Enterprise Vault ホスト (Enterprise Vault Hosts)] プロパティ

オプション	説明
追加 (Add)	Enterprise Vault 構成内にソースホストと宛先ホストを追加します。[ソースホスト (Source host)] の名前と [宛先ホスト (Destination host)] の名前を指定する必要があります。
[処理 (Actions)] > [編集 (Edit)]	ソースホストと宛先ホストを変更します。
[処理 (Actions)] > [削除 (Delete)]	エントリを削除します。

[Exchange] プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で [ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)] の順に選択します。Windows クライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)] をクリックし、[クライアントの編集 (Edit client)] をクリックします。[Windows クライアント (Windows Clients)]、[Exchange] の順に選択します。

[Exchange] プロパティは、現在選択されている Windows クライアントに適用されます。クラスター環境またはレプリケートされた環境では、すべてのノードで同じ設定を構成します。仮想サーバー名の属性を変更する場合は、DAG ホストサーバーのみ更新されます。

これらのオプションについて詳しくは、『[NetBackup for Exchange Server 管理者ガイド](#)』を参照してください。

[Exchange] ホストプロパティには、次の設定が含まれます。

表 2-28 [Exchange] プロパティ

プロパティ	説明
完全バックアップ中のログファイルのバックアップオプション (Backup option for log files during full backups)	メモ: このプロパティは、[MS-Exchange-Server] バックアップポリシーのみに適用されます。 スナップショットバックアップに含めるログを選択します。 ■ コミットされていないログファイルのみをバックアップ (レプリケーション環境には非推奨) (Back up only uncommitted log files (not recommended for replication environments)) ■ すべてのログファイルをバックアップ (コミットされたログファイルを含む) (Backup all log files (including committed log files))

プロパティ	説明
Exchange 個別リストア用プロキシホスト (Exchange granular proxy host)	メモ: このプロパティは、個別リカバリテクノロジー (GRT) を使うバックアップを複製または参照するときに適用されます。 GRT を使用するバックアップ (bplist を使用して) を複製または参照する場合、別の Windows システムをソースクライアントのプロキシとして機能するように指定することもできます。ソースクライアントに影響を与えないようにする場合、またはソースクライアントが利用できない場合は、プロキシを使用します。
インスタントリカバリバックアップが正常に終了した後で Exchange ログファイルを切り捨てる (Truncate Exchange log files after successful Instant Recovery backup)	メモ: このプロパティは、[MS-Exchange-Server] バックアップポリシーのみに適用されます。 インスタントリカバリのバックアップが正常に完了した後でトランザクションログを削除するには、このオプションを有効にします。デフォルトでは、スナップショットのみである完全インスタントリカバリバックアップのトランザクションログは削除されません。
Microsoft ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) を使用するバックアップの前に一貫性チェックを実行する (Perform consistency check before backup with Microsoft Volume Shadow Copy Service (VSS))	DAG バックアップの実行時に一貫性チェックを実行しない場合は、このオプションを無効にします。[一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する (Continue with backup if consistency check fails)] を選択した場合、NetBackup は一貫性チェックに失敗してもバックアップを続行します。
Exchange クレデンシヤル (Exchange credentials)	このプロパティについて、次の点に注意してください。 ■ このプロパティは、Exchange のリカバリを含む MS-Exchange-Server および VMware のバックアップポリシーに適用されます。 ■ GRT を使用する場合は、このプロパティを構成する必要があります。 NetBackup Exchange 操作のアカウントのクレデンシヤルを指定します。このアカウントには、Exchange のリストア操作の実行に必要な権限が必要です。必要なアクセス権はお使いの Exchange バージョンに依存します。アカウントには、「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限も必要です。

クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシヤルについて

クライアントのホストプロパティにおける Exchange クレデンシヤルは、Exchange リストアの実行に必要なアクセス権を持つアカウントを示します。必要なアクセス権はお使いの Exchange バージョンに依存します。

次の点に注意してください。

- クレデンシヤルは CMS (Credential Management System) に格納されます。
- GRT を使うには、すべての個別クライアントに Exchange クレデンシヤルを設定します。

また、リストアを実行する個別クライアントのみで Exchange クレデンシャルを設定できます。この場合、全体のドメインで、「表示専用の Organization Management」役割グループに「Exchange Server」を追加します。Exchange Administration Center (EAC) または Active Directory でこの設定を実行します。詳しくは、次の Microsoft 社の記事を参照してください。

<http://technet.microsoft.com/en-us/library/jj657492>

- Exchange クレデンシャル用に設定したアカウントには、「プロセスレベルトークンの置き換え」の権限も必要です。
- VMware のバックアップからデータベースをリストアするためには、提供する Exchange クレデンシャルに VM ファイルをリストアする権限がなければなりません。
- Replication Director で作成された VMware のスナップショットのコピーからリストアする場合、次の操作を行います。
 - Exchange クレデンシャルを[ドメイン¥ユーザー名 (Domain¥User name)]および[パスワード (Password)]フィールドに入力します。
 - NetApp ディスクアレイで作成される CIFS の共有にアクセスするアカウントと NetBackup Client Service を設定してください。
- クライアントホストプロパティで Exchange クレデンシャルの最小構成の NetBackup アカウントを指定する場合、NetBackup では Exchange データベースのアクティブコピーのバックアップのみを作成できます。ポリシーを作成するとき、[Exchange データベースバックアップソース (Exchange database backup source)]フィールドで [パッシブコピーのみ (Passive copy only)]を選択すると、どのバックアップも失敗します。このエラーが発生するのは、Microsoft Active Directory サービスインターフェースでは最小構成のアカウントのデータベースコピーリストが提供されないからです。

[エクスクルードリスト (Exclude list)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。Windows クライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[Windows クライアント (Windows client)]、[エクスクルードリスト (Exclude list)]の順に選択します。

[エクスクルードリスト (Exclude list)]ホストプロパティを使用して、Windows クライアントのエクスクルードリストを作成および変更できます。エクスクルードリストは、バックアップから除外するファイルとディレクトリの名前を列挙したものです。

UNIX クライアントのエクスクルードリストの作成について詳しくは、次のトピックを参照してください。

p.857 の「自動バックアップからのファイルのエクスクルードについて」を参照してください。

1 つのクライアントに複数のエクスクルードリストまたはインクルードリストが存在する場合、**NetBackup** ではそのクライアントにその目的が最も明確なリストだけが使用されます。

たとえば、クライアントに次のエクスクルードリストがあるとします。

- ポリシーおよびスケジュールに対するエクスクルードリスト。
- ポリシーに対するエクスクルードリスト。
- クライアント全体に対するエクスクルードリスト。このリストには、ポリシーまたはスケジュールが指定されていません。

この場合、**NetBackup** では、その目的が最も明確な、最初の (ポリシーおよびスケジュールに対する) エクスクルードリストが使用されます。

エクスクルードリストとインクルードリストは、バックアップジョブを開始するかどうかを **NetBackup** が判断するとき、ドライブ全体をエクスクルードするかどうかは判断しません。

通常、問題は発生しません。ただし、ポリシーが複数ストリームを使い、ドライブまたはマウントポイントがエクスクルードされている場合、そのジョブの完了時にエラー状態が報告されます。この状況を避けるため、ポリシーや、ポリシーとスケジュールのリストを使用してボリューム全体をエクスクルードすることはしないでください。

[エクスクルードリスト (Exclude list)] ホストプロパティには、次の設定が含まれます。

表 2-29 [エクスクルードリスト (Exclude list)] プロパティ

プロパティ	説明
エクスクルードリスト (Exclude list)	エクスクルードされたファイルとディレクトリ、およびそれらが適用されるポリシーとスケジュールを表示します。 p.102 の「 エクスクルードリストへのエントリの追加 」を参照してください。
エクスクルードリストで大文字/小文字を区別する (Use case-sensitive exclude list)	エクスクルードするファイルとディレクトリで大文字と小文字が区別されるように指定します。
エクスクルードリストの例外 (Exceptions to exclude list)	エクスクルードリストの例外、およびそれらが適用されるポリシーとスケジュールを表示します。 このリストにあるポリシーが実行されると、[エクスクルードリストの例外 (Exceptions to the exclude list)] のファイルおよびディレクトリがバックアップされます。例外の追加は、1 ファイルを除くディレクトリ内のすべてのファイルを除外する場合に便利です。 p.102 の「 エクスクルードリストへの例外の追加 」を参照してください。 たとえば、バックアップを作成する項目のファイルリストに /foo が含まれていて、エクスクルードリストに /foo/bar が含まれる場合、例外リストに /fum を追加すると、/fum ディレクトリはバックアップされません。ただし、fum を例外リストに追加すると、/foo/bar 内で発生した fum (ファイルまたはディレクトリ) はすべてバックアップされます。

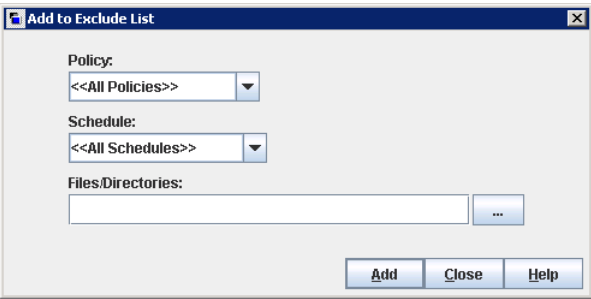
[エクスクルードリストへの追加 (Add to Exclude List)]と[エクスクルードリストへ例外を追加 (Add Exceptions to Exclude List)]ダイアログボックスについて

[エクスクルードリストへの追加 (Add to Exclude List)]ダイアログボックスと[エクスクルードリストへ例外を追加 (Add Exceptions to Exclude List)]ダイアログボックスには、次のフィールドが表示されます。

表 2-30 [エクスクルードリストへの追加 (Add to Exclude List)]ダイアログボックス

フィールド	説明
ポリシー (Policy)	エクスクルードまたはエクスクルードの例外とするファイルとディレクトリを含むポリシー名。ドロップダウンメニューからポリシー名を選択することもできます。すべてのポリシーから特定のファイルまたはディレクトリのバックアップをエクスクルードまたはエクスクルードの例外とする場合は、[すべてのポリシー (All Policies)]を選択します。
スケジュール (Schedule)	エクスクルードまたはエクスクルードの例外とするファイルとディレクトリに関連付けられているスケジュール名。ドロップダウンメニューからスケジュール名を選択することもできます。すべてのスケジュールから特定のファイルまたはディレクトリのバックアップをエクスクルードまたはエクスクルードの例外とする場合は、[すべてのスケジュール (All Schedules)]を選択します。
ファイル/ディレクトリ (Files/Directories)	エクスクルードまたはエクスクルードの例外とするファイルおよびディレクトリへのフルパス。

図 2-1 [エクスクルードリストへの追加 (Add to Exclude List)]プロパティ



エクスクルードリストへのエントリの追加

1つのポリシーまたはすべてのポリシーのエクスクルードリストにエントリを追加するには、次の手順を実行します。エクスクルードリストのポリシーが実行されると、リストで指定されているファイルとディレクトリはバックアップされません。

エントリをエクスクルードリストに追加する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host Properties)]の順にクリックします。
- 3 クライアントを選択します。
- 4 必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。
- 5 [Windows クライアント (Windows clients)]、[エクスクルードリスト (Exclude list)]の順に選択します。
- 6 エクスクルードリストで、[追加 (Add)]をクリックします。
- 7 デフォルトでは、ファイル、ディレクトリ、またはパスは、[すべてのポリシー (All policies)]から除外されます。または、特定のポリシーから項目を除外するポリシーの名前を入力します。
- 8 デフォルトでは、ファイル、ディレクトリ、またはパスは、[すべてのスケジュール (All schedules)]から除外されます。または、特定のポリシーのスケジュールから項目を除外するスケジュールの名前を入力します。
- 9 バックアップから除外するファイル名、ディレクトリまたはパスを入力します。
- 10 [追加 (Add)]をクリックします。

エクスクルードリストへの例外の追加

ポリシーのエクスクルードリストに例外を追加するには、次の手順を実行します。

例外をエクスクルードリストに追加する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host Properties)]の順にクリックします。
- 3 クライアントを選択します。
- 4 必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。
- 5 [Windows クライアント (Windows clients)]、[エクスクルードリスト (Exclude list)]の順に選択します。

- 6 [エクスクルードリストの例外 (Exceptions to exclude list)]を展開します。次に[追加 (Add)]をクリックします。
- 7 デフォルトでは、ファイル、ディレクトリ、またはパスは、[すべてのポリシー (All policies)]の例外です。または、特定のポリシーに例外を追加するポリシーの名前を入力します。
- 8 デフォルトでは、[すべてのスケジュール (All schedules)]のファイル、ディレクトリ、またはパスです。または、特定のポリシースケジュールに例外を追加するスケジュールの名前を入力します。
- 9 バックアップから除外するファイル名、ディレクトリまたはパスを入力します。
- 10 [追加 (Add)]をクリックします。

エクスクルードリストの構文規則

自動マウントされるディレクトリおよび CD-ROM ファイルシステムは、常にエクスクルードリストに指定することをお勧めします。指定しないと、バックアップ時にこれらのディレクトリがマウントされない場合、**NetBackup** はタイムアウトを待機することになります。

エクスクルードリストには、次の構文規則が適用されます。

- 1 行に 1 つのパターンだけを入力できます。
- **NetBackup** では標準的なワイルドカードが認識されます。
p.1097 の「**NetBackup** でのワイルドカードの使用」を参照してください。
p.1096 の「**NetBackup** 命名規則」を参照してください。
- バックアップ対象リスト内のすべてのファイルがエクスクルードされている場合、**NetBackup** はインクルードリストでフルパス名によって指定されている対象だけをバックアップします。ファイルは、/ または *、あるいはその両方 (*) を使用してエクスクルードできます。
- 空白は有効な文字と見なされます。余分な空白は、ファイル名の一部でないかぎり、含めないでください。
たとえば、次の名前を持つファイルをエクスクルードすると想定します。
C:¥testfile (末尾に余分な空白文字なし)
一方、エクスクルードリストエントリは次のとおりです。
C:¥testfile (末尾に余分な空白文字あり)
NetBackup では、ファイル名の末尾から余分な空白が削除されないかぎり、このファイルが検出されません。
- ファイルパスを ¥ で終わらせると、そのパス名を持つディレクトリだけがエクスクルードされます (C:¥users¥test¥ など)。パス名が ¥ で終わらない場合 (C:¥users¥test など)、**NetBackup** ではそのパス名を持つファイルとディレクトリの両方がエクスクルードされます。

- 特定の名前を持つすべてのファイルをエクスクルードするには、ファイルのディレクトリパスに関係なく、その名前を入力します。次に例を示します。

```
test
```

次のように入力しないでください。

```
C:¥test
```

この例は、ファイルパターンに次のような接頭辞を付けることと同じです。

```
¥
```

```
¥*¥
```

```
¥*¥*¥
```

```
¥*¥*¥*¥
```

以降も同様です。

次の構文規則は、UNIX クライアントだけに適用されます。

- 名前にリンクを含むパターンを使用しないでください。たとえば、/home は /usr/home へのリンクであり、/home/doc がエクスクルードリストに含まれていると想定します。この場合、実際のディレクトリパスである /usr/home/doc がエクスクルードリストエントリの /home/doc と一致しないため、このファイルはバックアップされます。
- 空白行、またはシャープ記号 (#) で始まる行は無視されます。

Windows クライアントのエクスクルードリストの例

[エクスクルードリスト (Exclude list)]ホストプロパティのエクスクルードリストに次のエントリが含まれているとします。

```
C:¥users¥doe¥john
```

```
C:¥users¥doe¥abc¥
```

```
C:¥users¥*¥test
```

```
C:¥*¥temp
```

```
core
```

このエクスクルードリストの例では、次のファイルおよびディレクトリが自動バックアップからエクスクルードされます。

- C:¥users¥doe¥john という名前のファイルまたはディレクトリ
- ディレクトリ C:¥users¥doe¥abc¥ (エクスクルードエントリが ¥ で終わっているため)
- ドライブ C 上の users よりも 2 階層下の、test という名前のすべてのファイルまたはディレクトリ
- ドライブ C 上のルートディレクトリよりも 2 階層下の、temp という名前のすべてのファイルまたはディレクトリ

- あらゆるドライブ上のすべての階層の、core という名前のすべてのファイルまたはディレクトリ

UNIX エクスクルードリストの例

この UNIX エクスクルードリストの例では、リストに次のエントリが含まれています。

```
# this is a comment line
/home/does/john
/home/does/abc/
/home/*/test
/*/temp
core
```

このエクスクルードリストの例では、次のファイルおよびディレクトリが自動バックアップからエクスクルードされます。

- /home/does/john という名前のファイルまたはディレクトリ
- ディレクトリ /home/does/abc (エクスクルードリストが / で終わっているため)
- home よりも 2 階層下の、test という名前のすべてのファイルまたはディレクトリ
- ルートディレクトリよりも 2 階層下の、temp という名前のすべてのファイルまたはディレクトリ
- すべての階層の、core という名前のすべてのファイルまたはディレクトリ

UNIX クライアントでのインクルードリストの作成について

エクスクルードリストによって排除したファイルをバックアップに追加するには、/usr/opensv/netbackup/include_list ファイルを作成します。エクスクルードリストの場合と同じ構文規則が適用されます。

メモ: エクスクルードリストおよびインクルードリストは、ユーザーバックアップおよびユーザーアーカイブには適用されません。

前述の例を使用して、インクルードリストの使用方法を示します。例で挙げたエクスクルードリストを使用すると、**NetBackup** によって、/home/*/test の下のすべてのディレクトリから **test** という名前のすべてのファイルまたはディレクトリが省かれます。

この場合、クライアント上に include_list ファイルを作成することによって、/home/jdoe/test というファイルを再度バックアップに追加します。次のパス名を include_list ファイルに追加します。

```
# this is a comment line
/home/jdoe/test
```

特定のポリシー、またはポリシーとスケジュールの組み合わせに対するインクルードリストを作成するには、`.policyname` または `.policyname.schedulename` という接尾辞を使います。というスケジュールを含む というポリシーに対する 2 つのインクルードリスト名の例を次に示します。**wkstationsfulls**

```
/usr/opensv/netbackup/include_list.workstations  
/usr/opensv/netbackup/include_list.workstations.fulls
```

最初のファイルは、`wkstations` というポリシーに含まれるすべてのスケジュールバックアップに影響します。2 番目のファイルは、スケジュールの名前が `fulls` である場合にのみバックアップに影響します。

NetBackup では、特定のバックアップに対しては、その目的が最も明確な名前の付いた 1 つのインクルードリストだけが使用されます。次の 2 つのファイルがあるとします。

```
include_list.workstations  
include_list.workstations.fulls
```

NetBackup では、`include_list.workstations.fulls` だけがインクルードリストとして使用されます。

エクスクルード対象ディレクトリの全検索

クライアントでエクスクルードリストよりインクルードリストが優先して使用される場合に、あるディレクトリがエクスクルードリストで指定されていることがあります。**NetBackup** では、クライアントのインクルードリストの要件を満たすために、エクスクルード対象となっているディレクトリが必要に応じて全検索されます。

Windows クライアントが次のような設定であると想定します。

- バックアップポリシーのバックアップ対象リストで `ALL_LOCAL_DRIVES` が指定されている。スケジュールバックアップが実行されると、クライアント全体のバックアップが行われます。
また、バックアップ対象リストが `/` だけで構成されている場合も、クライアント全体のバックアップが行われます。
- クライアントのエクスクルードリストが「*」だけで構成されている。
「*」のエクスクルードリストは、バックアップからすべてのファイルがエクスクルードされることを示します。
- ただし、**Windows** クライアントのインクルードリストに `C:\$WINNT` が含まれているため、`C:\$WINNT` のバックアップを行うためにエクスクルード対象ディレクトリが全検索される。
インクルードリストにエントリが含まれない場合、ディレクトリは全検索されません。

次の例では、**UNIX** クライアントが次のような設定であると想定します。

- **UNIX** クライアントのバックアップ対象リストが `/` で構成されている。

- UNIX クライアントのエクスクルーードリストが / で構成されている。
- UNIX クライアントのインクルードリストが次のディレクトリで構成されている。

```
/data1  
/data2  
/data3
```

エクスクルーードリストではすべてのパスがエクスクルーードされていても、インクルードリストでフルパスが指定されているため、バックアップ対象リストは **NetBackup** によってクライアントのインクルードリストに置き換えられます。

[ファイバートランスポート (Fibre Transport)] プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。ホストを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]、[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]、または[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[ファイバートランスポート (Fibre Transport)]をクリックします。

[ストレージ (Storage)]、[SAN クライアント (SAN Clients)]で個々の SAN クライアントに対して構成した使用設定により、[ホストプロパティ (Host properties)]で構成する[ファイバートランスポート (Fibre Transport)]プロパティが上書きされることに注意してください。

NetBackup の[ファイバートランスポート (Fibre Transport)]プロパティでは、ファイバートランスポートメディアサーバーと SAN クライアントがバックアップとリストアでファイバートランスポートサービスを使用する方法を制御します。[ファイバートランスポート (Fibre Transport)]プロパティは選択するホスト形式に次のように適用されます。

表 2-31 ファイバートランスポートプロパティのホスト形式

ホストの種類 (Host type)	説明
プライマリサーバー	すべての SAN クライアントに適用されるグローバルの[ファイバートランスポート (Fibre Transport)]プロパティ。
メディアサーバー	[ファイバートランスポート (Fibre Transport)]の[最大並列ファイバートランスポート接続 (Maximum concurrent FT connections)]プロパティは、選択したファイバートランスポートメディアサーバーに適用されます。
クライアント	[ファイバートランスポート (Fibre Transport)]プロパティは、選択した SAN クライアントに適用されます。クライアントのデフォルト値はプライマリサーバーのグローバルプロパティの設定です。クライアントプロパティは[ファイバートランスポート (Fibre Transport)]のグローバルプロパティを強制変更します。

[ファイバートランスポート (Fibre Transport)]プロパティには、次の設定が含まれます。すべてのプロパティがすべてのホストで利用できるわけではありません。この表では、ファイバートランスポートデバイスはファイバートランスポートメディアサーバーの HBA ポートです。ポートはバックアップとリストアのトラフィックを搬送します。1 つのメディアサーバーに複数のファイバートランスポートデバイスが存在する場合があります。

表 2-32 [ファイバートランスポート (Fibre Transport)]プロパティ

プロパティ	説明
最大並列ファイバートランスポート接続 (Maximum concurrent Fibre Transport connections) 最大並列 FT 接続 (Maximum concurrent FT connections)	このプロパティは、ファイバートランスポートメディアサーバーを選択した場合にのみ表示されます。 このプロパティは選択したメディアサーバー (複数可) に許可するファイバートランスポート接続の数を指定します。1 つの接続は 1 つのジョブに相当します。 値が設定されない場合には、NetBackup は次のデフォルトを使います。 ■ NetBackup Appliance モデル 5330 とそれ以降の場合: 32 ■ NetBackup Appliance モデル 5230 とそれ以降の場合: 32 ■ NetBackup ファイバートランスポートメディアサーバーの場合: メディアサーバー上の速い HBA ポート数の 8 倍に加えて遅い HBA ポートの数の 4 倍が使われます。速いポートは 8 GB 以上、遅いポートは 8 GB 未満です。 サーバーまたはメディアサーバーを使うには次の最大接続数まで入力できます: ■ Linux ファイバートランスポートメディアサーバーホストの場合: 40。 Linux における同時接続の推奨設定は 32 以下です。 Linux ホストの場合には、NetBackup touch ファイル (NUMBER_DATA_BUFFERS_FT) の設定によってその最大値を大きくできます。 p.109 の「Linux 並列 FT 接続について」を参照してください。 ■ NetBackup Appliance モデル 5330 とそれ以降の場合: 40 ■ NetBackup Appliance モデル 5230 とそれ以降の場合: 40 ■ Solaris ファイバートランスポートメディアサーバーホストの場合: 64 NetBackup では、ファイバートランスポート用に 1 台のメディアサーバーに対して 644 バッファがサポートされます。各接続で使われるバッファ番号を決定するには、入力した値で 644 を割ります。接続ごとのバッファがある場合、各接続のパフォーマンスが改善します。
プライマリサーバー構成のデフォルトを使用 (Use defaults from the primary server configuration)	このプロパティは、クライアントを選択した場合にのみ表示されます。 このプロパティは、プライマリサーバーで構成されているプロパティにクライアントが従うように指定します。
優先 (Preferred)	分単位で構成された待機期間内に FT デバイスが利用可能である場合、FT デバイスを使用するように指定します。待機期間の経過後に FT デバイスが利用できない場合、NetBackup は LAN 接続を使用して操作を行います。 プライマリサーバーで指定したグローバルプロパティの場合、デフォルトは[優先 (Preferred)]です。

プロパティ	説明
常時 (Always)	SAN クライアントのバックアップおよびリストアに対して NetBackup では常に FT デバイスが使用されるように指定します。NetBackup は、操作を開始する前に FT デバイスが利用可能になるまで待機します。 ただし、FT デバイスは動作している必要があります。そうでない場合、NetBackup は LAN を使います。すべての FT デバイスが実行されていない、設定されていない、または SAN クライアントのライセンスが期限切れであるなどの理由で、FT デバイスが存在しない場合があります。
失敗 (Fail)	FT デバイスが動作していない場合に NetBackup がジョブを失敗するように指定します。FT デバイスが動作していてもビジーの場合には、NetBackup はデバイスが利用可能になるまで待機してから、デバイスに次のジョブを割り当てます。すべての FT デバイスが動作していない、設定されていない、または SAN クライアントのライセンスが期限切れであるなどの理由で、FT デバイスが存在しない場合があります。
使用しない (Never)	SAN クライアントのバックアップおよびリストアに対して NetBackup では、ファイバートランспортパイプを使用しないように指定します。NetBackup では、バックアップとリストアに LAN 接続が使用されます。 プライマリサーバーに[使用しない (Never)]を指定した場合、ファイバートランспортは NetBackup 環境で無効になります。[使用しない (Never)]を選択すれば、クライアントごとにファイバートランспортの使用方法を構成できます。 SAN クライアントに[使用しない (Never)]を指定すれば、ファイバートランспортはクライアントで無効になります。

NetBackup では、ファイバートランспортに、より詳細な詳細度が 1 つ用意されています。SAN クライアント使用設定は、[ホストプロパティ (Host properties)]で設定する FT プロパティよりも優先されます。

NetBackup ファイバートランспортについて詳しくは、『[NetBackup SAN クライアントおよびファイバートランспортガイド](#)』を参照してください。

Linux 並列 FT 接続について

NetBackup では、[ファイバートランспорт (Fibre transport)]ホストプロパティの[最大並列 FT 接続 (Maximum concurrent FT connections)]設定を使用して、ホストごとに許可される、ファイバートランспортメディアサーバーへの同時接続数の合計を設定します。

p.107 の「[\[ファイバートランспорт \(Fibre Transport\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

Linux での同時接続の合計数が目的よりも少ない場合、同時接続の合計数を増やすことができます。その結果、各クライアントのバックアップまたはリストアジョブが使用するバッファが減ります。この場合、バッファが少ないために各ジョブが遅くなります。同時接続数を増やすには、接続ごとのバッファ数を減らしてください。そのためには、次のファイルを作成し、[表 2-33](#) のサポートされている値の 1 つをファイルに含めます。

/usr/opensv/netbackup/db/config/NUMBER_DATA_BUFFERS_FT

表 2-33 に NetBackup で NUMBER_DATA_BUFFERS_FT ファイルに対してサポートされる値を示します。NetBackup では、ファイバートランスポート用に 1 台のメディアサーバーに対して 644 パッファがサポートされます。

表 2-33 1 つの FT 接続のパッファに対してサポートされる値

NUMBER_DATA_BUFFERS_FT	同時接続の総数: NetBackup 5230 と 5330 以降のアプライアンス	同時接続の総数: Linux FT メディアサーバー
16	40	40
12	53	53
10	64	64

必要に応じて、[ファイバートランスポート (Fibre transport)] ホストプロパティの [最大並列 FT 接続 (Maximum concurrent FT connections)] 設定を使用して、メディアサーバーの接続数を制限できます。

[ファイアウォール (Firewall)] プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で [ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)] の順に選択します。プライマリサーバーまたはメディアサーバーを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)] をクリックし、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)] または [メディアサーバーの編集 (Edit media server)] をクリックします。[ファイアウォール (Firewall)] をクリックします。

[ファイアウォール (Firewall)] プロパティは、選択したプライマリサーバーとメディアサーバーがその NetBackup ホストで実行しているレガシーサービスに接続する仕組みを決定します。

サーバーは [ファイアウォール (Firewall)] プロパティの [ホスト (Hosts)] リストに追加されます。クライアントに対してポートの使用を構成するには、[クライアント属性 (Client attributes)] プロパティを参照してください。

p.66 の「[クライアント属性 (Client attributes)] プロパティ」を参照してください。

[ファイアウォール (Firewall)] ホストプロパティには次の設定が含まれます。

表 2-34 [ファイアウォール (Firewall)] プロパティ

プロパティ	説明
デフォルト接続オプション (Default connect options)	デフォルトでは、[デフォルト接続オプション (Default connect options)]には、ファイアウォールに適した接続オプション (開けるポートを最小限にするなど) が含まれます。 [選択されたホストの属性 (Attributes for selected hosts)]の設定を使用すると、サーバーまたはクライアントごとに異なるデフォルトオプションを設定できます。 選択されているサーバーまたはクライアントに対するデフォルト接続オプションを変更するには、[編集 (Edit)]をクリックします。 これらのプロパティは DEFAULT_CONNECT_OPTIONS 構成オプションに対応します。
ホスト (Hosts)	このリストに表示されるホストに、異なるデフォルト接続オプションを設定できます。 ■ [追加 (Add)]をクリックして、[ホスト (Hosts)]リストにホストを追加します。 ホストに対して異なる設定を構成する前に、リストにホスト名を追加する必要があります。 サーバーは自動的にホストリストに表示されません。 ■ ホストに異なる設定を構成するには、[ホスト (Hosts)]リストにあるホスト名を選択します。 次に、[選択されたホストの属性 (Attributes for selected hosts)]セクションで接続オプションを選択します。 ■ ホストをリストから選択するには、リスト内にある対象のホスト名を見つけます。次に、[削除 (Delete)]をクリックします。
選択されたホストの属性 (Attributes for selected hosts)	このセクションには、選択したサーバーの接続オプションが表示されます。サーバーの接続オプションを変更するには、最初に[ホスト (Hosts)]リストでホスト名を選択します。 これらのプロパティは CONNECT_OPTIONS 構成オプションに対応します。
BPCD コネクトバック (BPCD connect back)	このプロパティで、デーモンが NetBackup クライアントデーモン (BPCD) にコネクトバックする方法を指定します。 ■ [デフォルト接続オプションを使用 (Use default connect options)](個々のホストのオプション) [デフォルト接続オプション (Default Connect Options)]で指定された方法を使用します。 ■ ランダムポート (Random port) NetBackup は許容範囲からランダムに空きポートを選択して、従来のコネクトバック方法を実行します。 ■ VNETD ポート (VNETD port) この方法はコネクトバックが不要です。Cohesity ネットワークデーモン (vnetd) は、サーバー間の通信およびサーバーとクライアント間の通信中の NetBackup に関するファイアウォールの効率を拡張するように設計されています。サーバーによってすべての bpcd ソケット接続が開始されます。 メディアサーバーの bpbrm が、初めてクライアントの bpcd と接続する場合を例に考えてみます。この場合、bpbrm では主なプロトコルで使用する PBX または vnetd ポートを使用しているため、ファイアウォールの問題が発生することはありません。

プロパティ	説明
ポート (Ports)	該当のホスト名への接続に、予約済みポート番号または予約されていないポート番号のどちらを使用するかを選択します。 ■ [デフォルト接続オプションを使用 (Use default connect options)](個々のホストのオプション) [デフォルト接続オプション (Default Connect Options)]で指定された方法を使用します。 ■ 予約済みポート (Reserved ports) 予約済みポート番号を使用して該当のホスト名に接続します。 ■ 予約されていないポート (Non-reserved ports) 予約されていないポート番号を使用して該当のホスト名に接続します。 クライアントに対してポートの使用を構成するには、[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティを参照してください。

[一般的なサーバー (General server)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーまたはメディアサーバーを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]または[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]をクリックします。[一般的なサーバー (General server)]をクリックします。

[一般的なサーバー (General server)]プロパティは、選択されているプライマリサーバーおよびメディアサーバーに適用されます。

[一般的なサーバー (General server)]ページには次のプロパティが含まれます。

表 2-35 [一般的なサーバー (General server)]プロパティ

プロパティ	説明
多重化リストアの遅延 (Delay on multiplexed restores)	このプロパティは、同じテープ上の多重化イメージに対して、サーバーが追加のリストア要求を待機する時間を指定します。この遅延期間内に受け取ったすべてのリストア要求は、同一のリストア操作に含まれます (テープに 1 回の操作で渡されます)。 デフォルトの遅延は 30 秒です。
ディスクストレージユニットの容量を確認する間隔 (Check the capacity of disk storage units every)	このプロパティは、6.0 メディアサーバーのディスクストレージユニットだけに適用されます。以降のリリースでは、内部的方法を使用して、より頻繁にディスクの空き容量を監視します。

プロパティ	説明
必ずローカルドライブを使用する (Must use local drive)	このプロパティはプライマリサーバーだけに表示されますが、すべてのメディアサーバーにも同様に適用されます。このプロパティは、NDMP ドライブには適用されません。 クライアントがメディアサーバーまたはプライマリサーバーでもある場合に、[必ずローカルドライブを使用する (Must use local drive)] が選択されていると、そのクライアントのバックアップにはローカルドライブが使用されます。すべてのローカルドライブが停止している場合は、別のドライブが使用されることがあります。 このプロパティによって、バックアップはネットワークを経由して送信されるのではなくローカルで実行されるため、パフォーマンスが向上します。たとえば、SAN 環境では、SAN メディアサーバーごとにストレージユニットを作成できます。さらに、そのメディアサーバーのクライアントと、利用可能ないずれかのストレージユニットを使用するポリシー内の他のクライアントを混在させることができます。SAN メディアサーバーであるクライアントのバックアップを開始すると、バックアップはそのサーバー上の SAN 接続されたドライブに実行されます。
NDMP リストアにダイレクトアクセスリカバリを使用する (Use direct access recovery for NDMP restores)	NetBackup for NDMP は、デフォルトで、NDMP リストア中にダイレクトアクセスリカバリ (DAR) を使用するように構成されています。DAR では、要求されたファイルのデータが記録されているテープの場所を NDMP ホストで特定できるようにすることで、ファイルのリストアにかかる時間を短縮します。読み込まれるデータは、そのファイルに必要なデータだけです。 すべての NDMP リストアで DAR を無効にするには、このチェックボックスのチェックを外します。DAR を無効にすると、1 つのリストアファイルだけが必要な場合でも、NetBackup はバックアップイメージ全体を読み込みます。
個別リカバリテクノロジーを使用する Exchange イメージを複製するときにメッセージレベルのカatalogを有効にする (Enable message-level cataloging when duplicating Exchange images that use Granular Recovery Technology)	このオプションは、個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用する Exchange バックアップイメージをディスクからテープに複製する場合にメッセージレベルのカatalog化を実行します。複製をより迅速に実行するために、このオプションは無効にできます。ただし、この場合、ユーザーはテープに複製されたイメージで個々の項目を参照できなくなります。 『NetBackup for Exchange 管理者ガイド』を参照してください。

プロパティ	説明
[メディアホストの上書き (Media Host Override)] リスト	このリストにより、ファイルのバックアップを実行したサーバー以外でも、リストアを実行するサーバーとして指定できます。(両方のサーバーは、同一のプライマリサーバーおよびメディアサーバーのクラスタ内に配置されている必要があります)。たとえば、メディアサーバー A 上でファイルのバックアップが行われた場合、リストア要求で強制的にメディアサーバー B を使用させることができます。 次に、サーバーを指定する機能が役に立つ場合について説明します。 ■ 複数のサーバーがロボットを共有し、各サーバーにドライブが接続されている。リストアは、サーバーの 1 つが一時的に利用できないか、バックアップ処理中でビジー状態である場合に要求される。 ■ メディアサーバーが NetBackup の構成から削除され、利用できない。 [メディアホストの上書き (Media Host Override)] リストにホストを追加するには、[追加 (Add)] をクリックします。 リストのエントリを変更するには、ホスト名を選択してから [処理 (Actions)]、[編集 (Edit)] の順に選択します。 次のオプションを構成します。 ■ 元のバックアップサーバー (Original backup server) データのバックアップが実行された元のサーバーの名前を入力します。 ■ リストアサーバー (Restore server) 今後のリストア要求を処理するサーバーの名前を入力します。

リストアでの特定のサーバーの使用

リストアで特定のサーバーが使われるようにするには、次の手順を使います。

リストアで特定のサーバーが使われるようにする方法

- 1 必要に応じて、メディアをリストア要求に応答するホストに物理的に移動し、NetBackup データベースを更新して移動を反映します。
- 2 プライマリサーバー上の NetBackup 構成を変更します。
 - NetBackup Web UI を開き、プライマリサーバーにサインインします。
 - 左側で、[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)] の順に選択します。
 - プライマリサーバーを選択します。
 - 必要に応じて、[接続 (Connect)] をクリックします。次に、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)] をクリックします。
 - [一般的なサーバー (General server)] をクリックします。

- [メディアホストの上書き (Media host override)]リストに元のバックアップメディアサーバーおよびリストアサーバーを追加します。
- 3 プライマリサーバー上で、NetBackup Request デーモン (bprd) を停止して、再起動します。
- この処理は、元のバックアップサーバー上のすべてのストレージユニットに適用されます。[元のバックアップサーバー (Original backup server)]のすべてのストレージユニットに対するリストアが、[リストアサーバー (Restore server)]に表示されているサーバーに送信されます。
- 今後のリストアのために構成を元に戻すには、[メディアホストの上書き (Media Host Override)]リストからエントリを削除します。

[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[グローバル属性 (Global attributes)]をクリックします。

[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティは、現在選択されているプライマリサーバーに適用されます。これらのプロパティは、すべてのポリシーおよびクライアントに対するすべての操作に影響します。ほぼすべてのインストールでデフォルト値が適切です。

[グローバル属性 (Global attributes)]ページには次のプロパティが含まれます。

表 2-36 [グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ

プロパティ	説明
ジョブの再試行の遅延 (Job retry delay)	このプロパティでは、NetBackup によるジョブの再試行間隔を指定します。デフォルトは 10 分です。最大値は 60 分、最小値は 1 分です。

プロパティ	説明
最大ジョブ数 (秒単位) (Maximum jobs per second)	このプロパティは、1 秒あたりに[キューへ投入済み (Queued)]状態から[有効 (Active)]状態に移行できるバックアップジョブの最大数のスロットルを指定します。デフォルトでは、このプロパティの値は 0 (スロットル調整を行わない) です。 1 秒以内にジョブの最大数に達すると、それ以降のジョブは[キューへ投入済み (Queued)]状態のままになります。次の秒で、ジョブは、最大ジョブ数の値に再び達するまで、またはすべてのスロットル済みジョブまたは新しいジョブがアクティブになるまで、[キューへ投入済み (Queued)]状態から先入れ先出し順に解放されます。 このプロパティを使用して、リソース使用率の曲線を滑らかにできます。特に、バックアップの処理時間帯が開始し、多数のジョブが短期間で開始されるようにスケジュールされている場合に便利です。 この値は、次の場所にある DBM_NEW_IMAGE_DELAY 構成値より優先されます。 https://support.cohesity.com/s/article/article-100047119 DBM_NEW_IMAGE_DELAY が構成されていて、1 秒あたりの最大ジョブ数のスロットルがデフォルト値の場合、DBM_NEW_IMAGE_DELAY は同等の 1 秒あたりのジョブ数に変換されます。これにより、構成が変更されることはありません。 たとえば、DBM_NEW_IMAGE_DELAY が 333ms に設定されている場合、NetBackup Job Manager は、1 秒あたりの最大ジョブ数のスロットルとして 3 を使用します。その後、ユーザーが 1 秒あたりの最大ジョブ数のスロットルを 2 に構成しても、構成された DBM_NEW_IMAGE_DELAY は無視されます。 メモ: このスロットルは、NetBackup Job Manager が 1 秒間に開始できるバックアップジョブの数にのみ影響します。リストア、アーカイブ、複製、レプリケーションなどの他のジョブ形式には影響しません。並列実行ジョブの最大数には影響しません。
1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)	このプロパティで、NetBackup クライアントが並列して実行可能なバックアップジョブおよびアーカイブジョブの最大数を指定します。デフォルトは 1 つのジョブです。 NetBackup では、次の場合だけ、同じクライアント上の異なるポリシーから並列実行バックアップジョブを処理できます。 ■ 複数の利用可能なストレージユニットが存在する場合 ■ 利用可能なストレージユニットの 1 つが、並列して複数のバックアップを実行可能な場合 p.118 の「並列実行ジョブの数への影響について」を参照してください。
ポリシーの更新間隔 (Policy update interval)	このプロパティはポリシーの変更後、NetBackup がポリシーを処理するまで待機する時間を指定します。NetBackup 管理者は、この時間を利用して、ポリシーに複数の変更を行うことができます。デフォルトは 10 分です。最大値は 1440 分、最小値は 1 分です。
カタログ圧縮の間隔 (Compress catalog interval)	バックアップ後にイメージカタログファイルが圧縮されるまで NetBackup が待機する期間を指定します。

プロパティ	説明
スケジュールバックアップの試行回数	NetBackup はポリシーのエラー履歴を考慮して、スケジュールバックアップジョブを実行するかどうかを判断します。[スケジュールバックアップの試行回数 (Schedule backup attempts)] プロパティは、NetBackup による検査の時間枠を設定します。 このプロパティは各ポリシーの次の特性を判断します。 ■ NetBackup が、別のバックアップ試行 (再試行) を許可するかどうかを判断するために検査する過去の時間数。デフォルトでは、NetBackup は過去 12 時間を検査します。 ■ 時間枠内でバックアップを再試行できる回数。NetBackup では、デフォルトで 2 回試行できます。試行には、自動的に開始されるスケジュールバックアップや、ユーザーが開始するスケジュールバックアップが含まれます。 12 時間ごとに 2 回試行するというデフォルトの設定を使用して、次の例を考えてみます。 ■ Policy_A を午後 6 時に実行し、Schedule_1 は失敗します。 ■ Policy_A が午後 8 時にユーザーによって開始され、Schedule_2 は失敗します。 ■ 午後 11 時に NetBackup が過去 12 時間を調査します。NetBackup は午後 6 時の 1 回の試行と、午後 8 時の 1 回の試行を確認します。[スケジュールバックアップの試行回数 (Schedule backup attempts)] の設定の 2 回に達しているため、NetBackup は再試行しません。 ■ 翌朝の午前 6 時 30 分に NetBackup が過去 12 時間を調査します。NetBackup は午後 8 時の 1 回の試行のみを確認します。[スケジュールバックアップの試行回数 (Schedule backup attempts)] の設定の 2 回に達していないため、NetBackup は再試行します。この時点でスケジュール時間帯をすぎている場合、NetBackup は時間帯になるまで待機します。 メモ: この属性は、ユーザーバックアップおよびユーザーアーカイブには適用されません。
Vault ジョブの最大数 (Maximum vault jobs)	プライマリサーバーで実行可能な Vault ジョブの最大数を指定します。Vault ジョブの最大数が大きいほど、使用されるシステムリソースが増加します。 実行中の Vault ジョブが上限に達した場合、後続の Vault ジョブはキューに投入され、アクティビティモニターに[キューへ投入済み (Queued)]と状態表示されます。 複製ジョブまたは取り出しジョブを待機している場合、アクティビティモニターに[実行中 (Active)]と状態表示されます。

プロパティ	説明
[管理者の電子メールアドレス (Administrator email address)]プロパティ	このプロパティは、スケジュールバックアップまたは管理者主導の手動バックアップの通知を、NetBackup が送信するアドレスを指定します。 複数の管理者に情報を送信するには、次のように複数の電子メールアドレスをカンマで区切ります。 <code>useraccount1@company.com,useraccount2@company.com</code> 電子メール通知の構成要件について詳しくは、以下を参照してください。 p.1089 の「失敗したバックアップについてのバックアップ管理者への通知の送信」を参照してください。

並列実行ジョブの数への影響について

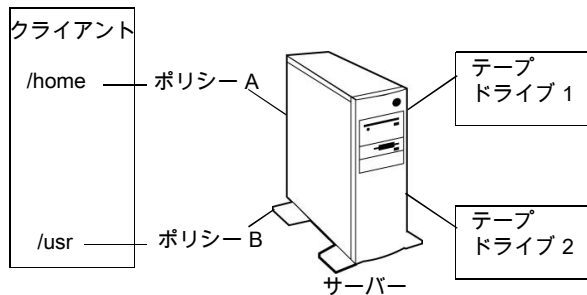
並列実行ジョブの数は、次の制約の範囲内で任意に指定します。

表 2-37 並列実行ジョブの制約

制約	説明
ストレージデバイスの数	NetBackup では、異なるストレージユニットまたはストレージユニット内の複数のドライブへ並列してバックアップを実行できます。たとえば、1 台の Media Manager のストレージユニットでは、そのユニットに存在するドライブと同じ数の並列実行バックアップがサポートされます。ディスクストレージユニットはディスク上のディレクトリであるため、ジョブの最大数はシステムの性能によって異なります。

制約	説明
サーバーおよびクライアントの 処理速度	個々のクライアントに過度の並列実行バックアップが集中すると、そのクライアントのパフォーマンスが低下します。最適な設定は、ハードウェア、オペレーティングシステムおよび実行中のアプリケーションによって異なります。 [1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]プロパティは、すべてのポリシーのすべてのクライアントに適用されます。 処理能力が低いクライアント (並列して実行可能なジョブの数が少ないクライアント) に対応するには、次のいずれかの方法を使用することを検討してください。 ■ 処理能力が低いクライアントに合わせて[データストリームの最大数を設定する (Maximum data streams)]プロパティを設定します。(プライマリサーバーのホストプロパティを開きます。次に、[クライアント属性 (Client attributes)]、[全般 (General)]タブの順に選択します。) p.68 の「[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティの[全般 (General)]タブ」を参照してください。 ■ [ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)]ポリシー設定をクライアント固有のポリシーで使します(クライアント固有のポリシーとは、すべてのクライアントがこの設定を共用しているポリシーです)。 p.704 の「[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)](ポリシー属性)」を参照してください。
ネットワークの負荷	利用可能なネットワーク帯域幅は、並列して実行可能なバックアップの数に影響します。負荷が 1 つのイーサネットには大きすぎる場合があります。負荷に関する問題が発生した場合、複数のネットワークによるバックアップまたは圧縮を検討してください。 サーバーでもあるクライアントをバックアップする場合は例外です。ネットワークは使用されないため、ネットワークの負荷を考慮する必要はありません。ただし、クライアントおよびサーバーの負荷は考慮する必要があります。

図 2-2 1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)



メモ: カタログバックアップは他のバックアップと並列して実行できます。

これを行うには、[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]を、プライマリサーバーのカタログポリシーに構成されている[最大ストリーム数 (Maximum number of streams)]より大きい値に設定します。たとえば、[最大ストリーム数 (Maximum number of streams)]が 4 に設定されている場合、[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]は 5 以上の値に設定する必要があります。

mailx 電子メールクライアントの設定

NetBackup は mailx クライアントを使用した電子メール通知の設定をサポートしています。

mailx 電子メールクライアントを設定するには

- 1 /etc/mail.rc の場所に移動します。
- 2 ファイルを編集して、SMTP サーバーの設定を追加します。

たとえば、次のように設定します。

```
smtp=<Your_SMTP_Server_Hostname>:<SMTP_SERVER_PORT>
```

[ログ (Logging)] プロパティ

[ログ (Logging)] プロパティにアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]、[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]、または[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[ログ (Logging)]をクリックします。

ログの設定によって、プライマリサーバー、メディアサーバー、クライアントでの NetBackup によるログ記録の動作が決まります。

- NetBackup のすべてのプロセスに対する全体的なログレベルまたはグローバルログレベル
- レガシーログを使用する特定のプロセスの上書き
- 統合ログ機能を使用するサービスのログレベル
- 重要なプロセスのログ
- クライアントの場合は、データベースアプリケーションのログレベル
- NetBackup と NetBackup Vault (インストールされている場合) のログ保持の設定

NetBackup のすべてのプロセスは統合ログまたはレガシーログを使います。特定のプロセスとサービスに対して、グローバルまたは一意のログレベルを設定できます。保持レベルにより、ログファイルのサイズや (プライマリサーバーの場合は) ログの保持日数を制限

できます。**NetBackup Vault** を使用する場合は、そのオプションのログ保持の設定を個別に選択できます。

ログ記録について詳しくは、『**NetBackup ログリファレンスガイド**』を参照してください。

表 2-38 [ログ (Logging)]プロパティ

プロパティ	説明
グローバルログレベル (Global logging level)	この設定は、[グローバルと同じ (Same as global)]に設定されているすべてのプロセスのグローバルログレベルを確立します。 [グローバルログレベル (Global logging level)]は、サーバーまたはクライアントのすべてのNetBackup プロセスのレガシーおよび統合ログレベルに影響します。この設定は、次のログプロセスには影響しません。 ■ PBX のログ PBX ログにアクセスする方法について詳しくは『NetBackup トラブルシューティングガイド』を参照してください。 ■ メディアおよびデバイスの管理のログ (vmd、ltid、avrd、ロボットデーモン、Media Manager コマンド)
プロセス固有の上書き (Process-specific overrides)	これらの設定により、レガシーログを使用する特定のプロセスのログレベルを上書きできます。
NetBackup サービスのデバッグログレベル (Debug logging levels for NetBackup services)	これらの設定により、統合ログを使用する特定のサービスのログレベルを管理できます。
重要なプロセスのログ (Logging for critical processes)	このオプションでは、重要なプロセスのログを有効化できます。 ■ プライマリサーバープロセス: bprd および bpdsm。 ■ メディアサーバープロセス: bpbrm、bptm、bpdm。 ■ クライアントプロセス: bpfis 次の点に注意してください。 ■ [重要なプロセスのログ (Logging for critical processes)]を有効にする場合は、[最大ログサイズ (Maximum log size)]オプションも有効にします。このオプションを無効にすると、NetBackup の操作に悪影響を及ぼす可能性があります。 ■ このオプションを指定すると、ログの保持がデフォルトのログサイズに設定されます。 ■ [デフォルトに戻す (Restore to defaults)]をクリックしても、[重要なプロセスのログ (Logging for critical processes)]または[最大ログサイズ (Maximum log size)]オプションは変更されません。 ■ 重要なプロセスのログを無効にするには、これらのプロセスのログレベルを変更します。

プロパティ	説明
保持期間 (Retention period)	NetBackup が、エラーカタログ、ジョブカタログおよびデバッグログの情報を保持する期間 (日数) を指定します。NetBackup はエラーカタログからレポートを生成する点に注意してください。 ログは大量のディスク領域を使用するため、ログを必要以上に保持しないでください。デフォルトは 28 日です。 注意: この設定は、Cloud Scale には適用できません。
最大ログサイズ (Maximum log size)	保持する NetBackup ログのサイズを指定します。NetBackup ログのサイズがこの値まで増加すると、古いログが削除されます。 ■ プライマリサーバーとメディアサーバーの場合、推奨値は 25 GB 以上です。 ■ クライアントの場合、推奨値は 5 GB 以上 注意: この設定は、Cloud Scale には適用できません。
Vault ログの保持期間 (Vault logs retention period)	NetBackup Vault がインストールされている場合、Vault セッションディレクトリを保存する日数を選択するか、[無期限 (Forever)] を選択します。

ログレベル

すべての **NetBackup** プロセスに同じログレベルを適用することを選択できます。または、特定のプロセスまたはサービスのログレベルを選択できます。

表 2-39 ログレベルの説明

ログレベル	説明
グローバルと同じ	この処理では、グローバルログレベルと同じログレベルが使用されます。
[ログなし (No logging)]	プロセスに対してログは作成されません。
[最小ログ (Minimum logging)] (デフォルト)	プロセスに対して少量の情報が記録されます。 Cohesity Technical Support から指示されないかぎり、この設定を使用してください。他の設定では、ログに大量の情報が蓄積される可能性があります。
レベル 1 から 4 まで	プロセスに対してレベルに合わせて情報が記録されます。
[5 (最大) (5 (Maximum))]	プロセスに対して最大量の情報が記録されます。

グローバルログレベル (Global logging level)

この設定は、すべてのプロセスと、[グローバルと同じ (Same as global)] に設定されているプロセスのログレベルを制御します。一部の **NetBackup** プロセスのログレベルは個別に制御できます。

p.123 の「レガシーログレベルの上書き」を参照してください。

p.123 の「プライマリサーバーの統合ログレベル」を参照してください。

レガシーログレベルの上書き

これらのログ記録レベルは、レガシープロセスのログに適用されます。表示されるログレベルは、ホストの種類 (プライマリ、メディア、クライアント) によって異なります。

表 2-40 レガシープロセスに対するログレベルの上書き

サービス	説明	プライマリ サーバー	メディア サーバー	クライアン ト
BPBRM のログレベル (BPBRM logging level)	NetBackup Backup Restore Manager。	X	X	
BPDM のログレベル (BPDM logging level)	NetBackup Disk Manager。	X	X	
BPTM のログレベル (BPTM logging level)	NetBackup Tape Manager。	X	X	
BPJOBDB のログレベル (BPJOBDB logging level)	NetBackup Jobs Database Management デーモン。この設定はプライマリサーバーでのみ利用可能です。	X		
BPDBM のログレベル (BPDBM logging level)	NetBackup Database Manager。	X		
BPRD のログレベル (BPRD logging level)	NetBackup Request デーモン。	X		
データベースログレベル (Database logging level)	データベースエージェントのログのログレベル。作成および参照するログについて詳しくは、特定のエージェントのマニュアルを参照してください。			X

プライマリサーバーの統合ログレベル

これらのログレベルは、NetBackup サービスログに適用され、プライマリサーバーでのみ利用可能です。

表 2-41 NetBackup サービスのログレベル

サービス	説明
Policy Execution Manager	Policy Execution Manager (NBPEM) はポリシーおよびクライアントタスクを作成し、ジョブの実行予定時間を決定します。ポリシーが変更されていたり、イメージの期限が切れていた場合は、NBPEM に通知され、適切なポリシーおよびクライアントタスクが更新されます。
Job Manager	Job Manager (NBJM) は、Policy Execution Manager が送信したジョブを受け取り、必要なリソースを取得します。
Resource Broker	Resource Broker (NBRB) は、ストレージユニット、テープドライブおよびクライアントを予約するための割り当てを行います。

レジストリ、bp.conf ファイル、統合ログのログの値

Windows レジストリ、bp.conf ファイル、または統合ログのログの値を設定することもできます。

表 2-42 ログレベルとその値

ログレベル	レガシーログ - Windows レジストリ	レガシーログ - bp.conf	統合ログ
最小のログ	0xffffffff の 16 進値。	VERBOSE = 0 (グローバル) processname_VERBOSE = 0 グローバルな VERBOSE の値が 0 以外の値に設定されている場合、個々の処理は値 -1 を使って減らすことができます。たとえば、processname_VERBOSE = -1 を指定します。	1
[ログなし (No logging)]	0xffffffffe の 16 進値。	VERBOSE=-2 (グローバル) processname_VERBOSE = -2	0

Lotus Notes プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。クライアントを選択して[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。次に、[Windows クライアント (Windows clients)]、[Lotus Notes]または[UNIX クライアント (UNIX client)]、[Lotus Notes]をクリックします。

[Lotus Notes]プロパティは、現在選択されている、NetBackup for Domino を実行するクライアントに適用されます。

詳しくは、『[NetBackup for HCL Domino 管理者ガイド](#)』を参照してください。

UNIX サーバーの場合: Domino サーバーの複数のインストールがある場合、クライアントプロパティの値は、1 つのインストールにのみ適用されます。他のインストールでは、バックアップポリシーの `LOTUS_INSTALL_PATH` および `NOTES_INI_PATH` 指示句を使用してインストールパスおよび `notes.ini` ファイルの場所を指定します。

表 2-43 Lotus Note クライアントのホストプロパティ

クライアントのホストプロパティ	説明
リストアするログの最大数 (Maximum number of logs to restore)	リカバリ時に 1 つのリストアジョブでプリフェッチできるログの最大数。1 より大きい値を指定します。 この値が 1 以下の場合、リカバリ時にトランザクションログを収集しません。ジョブごとに 1 つのトランザクションログエクステン트가 Domino サーバーのログディレクトリにリストアされます。
トランザクションログの キャッシュパス (Transaction log cache path)	リカバリ時に、プリフェッチされたトランザクションログを NetBackup が一時的に格納できるパス。パスを指定しない場合、NetBackup は、リカバリ時に Domino サーバーのトランザクションログディレクトリへログをリストアします。 次の点に注意してください。 ■ 指定したパスが存在しない場合、パスはリストア中に作成されます。 ■ ユーザーにはフォルダに対する書き込み権限が必要です。 ■ パスが指定されない場合、トランザクションログは、元の場所である Domino トランザクションログディレクトリにリストアされます。 ■ [リストアするログの最大数 (Maximum number of logs to restore)]の値が 1 以下の場合、このパスは無視されます。ログはプリフェッチされず、ジョブごとに 1 つのトランザクションログが Domino サーバーのログディレクトリにリストアされます。 ■ 指定された数のログをリストアするのに十分な領域がない場合、NetBackup は、対応できる数のログのみのリストアを試行します。
INI パス (INI path)	Notes データベースのバックアップおよびリストアに使用する、Domino パーティションサーバーに関連付けられた <code>notes.ini</code> ファイル。この設定は、非パーティションサーバーには該当しません。 ■ Windows の場合: <code>notes.ini</code> ファイルがデフォルトディレクトリにない場合は、場所を指定してください。 ■ UNIX の場合: <code>notes.ini</code> ファイルが[パス (Path)]で指定したディレクトリに存在しない場合は、その場所をこのディレクトリに指定します。 ディレクトリおよび <code>notes.ini</code> ファイル名を含めてください。

クライアントのホストプロパティ	説明
パス (Path)	Notes プログラムファイルが存在するクライアント上のパス。NetBackup では、バックアップおよびリストア処理を実行するために、これらのファイルの場所が認識される必要があります。 ■ Windows の場合: nserver.exe が存在するプログラムディレクトリへのパス。 ■ UNIX の場合: Domino データディレクトリ、Notes プログラムディレクトリ、Notes リソースディレクトリを含むパス。

[メディア (Media)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。サーバーを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]または[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]をクリックします。[メディア (Media)]をクリックします。

[メディア (Media)]ホストプロパティには、次の設定が含まれます。

表 2-44 [メディア (Media)] プロパティ

プロパティ	説明
[メディアの上書きを許可 (Allow media overwrite)] プロパティ	このプロパティは特定のメディア形式に対して、NetBackup の上書き禁止を無視します。通常、NetBackup では、特定のメディア形式は上書きされません。上書き禁止を無効にするには、表示されている 1 つ以上のメディア形式のチェックボックスをチェックします。 たとえば、[CPIO] チェックボックスをチェックすると、NetBackup で cpio 形式を上書きできます。 デフォルトでは、リムーバブルメディア上に存在するすべての形式は上書きされません。上書きが試行された場合、NetBackup によってエラーがログに書き込まれます。この形式を認識するには、メディア上の最初の可変長ブロックが 32 KB 以下である必要があります。 リムーバブルメディア上の次のメディア形式を上書きするように選択できます。 ■ [ANSI] が有効になっている場合は、ANSI ラベル付きメディアを上書きできます。 ■ [TAR] が有効になっている場合は、TAR メディアを上書きできます。 ■ [DBR] が有効になっている場合は、DBR メディアを上書きできます。(DBR バックアップ形式は現在使用されていません。) ■ Remote Storage MTF1 メディア形式。[RS-MTF1] が有効になっている場合は、Remote Storage MTF1 メディア形式を上書きできます。 ■ [CPIO] が有効になっている場合は、CPIO メディアを上書きできます。 ■ [AOS/VS] が有効になっている場合は、AOS/VS メディアを上書きできます。(AOS/VS は Data General 社の AOS/VS バックアップフォーマットです。) ■ [MTF] が有効になっている場合は、MTF メディアを上書きできます。[MTF] だけをチェックしている場合、他のすべての MTF 形式を上書きできます。(Backup Exec MTF (BE-MTF1) および Remote Storage MTF (RS-MTF1) メディア形式は例外です。これらの形式は上書きされません。) ■ [BE-MTF1] が有効になっている場合は、Backup Exec MTF メディアを上書きできます。 p.131 の「メディアの上書きが禁止された結果」を参照してください。

プロパティ	説明
SCSI RESERVE の有効化 (Enable SCSI reserve)	このプロパティは、テープドライブの排他アクセス保護を有効にします。アクセス保護が設定されていると、予約されている間は他のホストバスアダプタでコマンドを発行してドライブを制御することはできません。 SCSI RESERVE によって、NetBackup Shared Storage Option 環境またはドライブが共有されている他のすべてのマルチニシエータ環境を保護できます。 保護設定では、オプションを構成するメディアサーバーから、すべてのテープドライブのアクセス保護を構成します。メディアサーバーからのドライブパスについて、そのメディアサーバー設定を上書きできます。 p.131 の「[SCSI RESERVE の有効化 (Enable SCSI reserve)] プロパティの推奨する使用方法」を参照してください。 p.460 の「ドライブパスのオプション」を参照してください。 次に、保護のオプションを示します。 ■ SCSI Persistent RESERVE オプションでは、SCSI デバイスに SCSI Persistent RESERVE 保護を提供します。デバイスは、SCSI Primary Commands - 3 (SPC-3) 規格に準拠している必要があります。 ■ SPC-2 SCSI RESERVE オプション (デフォルト) は SCSI デバイスに SPC-2 SCSI RESERVE 保護を提供します。デバイスは、SCSI Primary Commands - 2 規格の RESERVE/RELEASE 管理方法に準拠している必要があります。 ■ テープドライブへのアクセス保護を行わずに NetBackup を操作するには、[SCSI RESERVE の有効化 (Enable SCSI reserve)] プロパティのチェックを外します。チェックを外すと、他の HBA がコマンドを送信できるため、テープドライブのデータが損失する可能性があります。 メモ: 使用しているすべてのハードウェアが SCSI Persistent RESERVE コマンドを正しく処理することを確認してください。使用しているすべてのハードウェアには、ファイバーチャネルブリッジが含まれます。ハードウェアで SCSI Persistent RESERVE コマンドが正しく処理されない場合、SCSI Persistent RESERVE コマンドを使用するように NetBackup が構成されていても、保護は実行されません。
1 つのメディアに対する複数の保持設定を許可する (Allow multiple retentions per media)	このプロパティは、テープボリューム上での保持レベルを混在させます。NetBackupこれは、ロボットのドライブおよび非ロボットのドライブ内の両方のメディアに適用されます。デフォルトでは、このチェックボックスのチェックは外されています。各ボリュームには、1 つの保持レベルのバックアップだけを含めることができます。
テープメディアをまたがったバックアップを許可する (Allow backups to span tape media)	チェックされている場合、複数のテープメディアにまたがったバックアップが行われます。このプロパティによって、NetBackup は、別のボリュームを使用して次のフラグメントを開始します。複数のボリューム上にバックアップのデータフラグメントが保持されることになります。このプロパティはデフォルトでチェックされており、メディアをまたがったバックアップを実行できます。 メディアの空きがなくなった場合に、このプロパティが選択されていないと、そのメディアは空きなしに設定され、操作は異常終了します。これは、ロボットのドライブおよび非ロボットのドライブの両方に適用されます。

プロパティ	説明
ディスクボリュームをまたいだバックアップを許可する (Allow backups to span disk volumes)	このプロパティは 1 つのディスクボリュームに空きがなくなった場合に、ディスクボリュームをまたがったバックアップを行うようにします。デフォルトでは、このプロパティは有効です。 [ディスクボリュームをまたいだバックアップを許可する (Allow backups to span disk volumes)]プロパティは AdvancedDisk または OpenStorage ストレージユニットには適用されません。自動的にディスクプール内のディスクボリュームをまたがったバックアップが行われます。 次の宛先では、ディスクをまたぐことができます。 ■ BasicDisk ストレージユニットにまたがる BasicDisk ストレージユニット。ユニットは、ストレージユニットグループ内に存在する必要があります。 ■ ディスクプール内の別のボリュームにまたがる OpenStorage または AdvancedDisk ボリューム。 ディスクをまたぐ場合は、次の条件を満たしている必要があります。 ■ ストレージユニットは、同じメディアサーバーを共有している必要があります。 ■ ストレージユニットをまたぐ場合の多重化レベルは、同じである必要があります。レベルに違いがあると、ターゲットユニットのレベルが高くなる場合があります。 p.580 の「[多重化を有効にする (Enable multiplexing)]ストレージユニット設定」を参照してください。 ■ ディスクスレーシングストレージユニットは、別のストレージユニットをまたぐことはできません。また、ディスクスレーシングストレージユニットをまたぐことも望ましくありません。 ■ NFS では、ディスクをまたぐことはできません。
スタンドアロンドライブ拡張機能を有効にする (Enable standalone drive extension)	このプロパティは、非ロボットのドライブ内で検出された任意のラベル付きメディアおよびラベルなしメディアが NetBackup によって使用されるようにします。[スタンドアロンドライブ拡張機能を有効にする (Enable standalone drive extension)]プロパティは、デフォルトで有効になります。
ジョブのログを有効にする (Enable job logging)	このプロパティによって、ジョブ情報のログが有効になります。このログ機能は NetBackup アクティビティモニターが使用する情報と同じです。デフォルトでは、ジョブのログは実行されません。

プロパティ	説明
すべてのメディアサーバーに対して無制限のメディア共有を有効化 (Enable unrestricted media sharing for all media servers)	このプロパティは次のようにメディア共有を制御します。 ■ NetBackup 環境のすべての NetBackup メディアサーバーおよび NDMP ホストで書き込み用のメディアを共有できるようにするには、このプロパティを有効にします。メディアの共有には、サーバーグループを構成しないでください。 ■ 特定のサーバーグループにメディア共有を制限するには、このプロパティのチェックを外します。次に、メディア共有を使うメディアサーバーグループとバックアップポリシーを構成します。 ■ メディア共有を無効にするには、このプロパティのチェックを外します。メディアサーバーグループを構成しないでください。 デフォルトでは、メディア共有は無効になっています。(このプロパティのチェックは外されており、サーバーグループは構成されていません。) p.385 の「NetBackup サーバーグループについて」を参照してください。
メディア ID の接頭辞 (非ロボット) (Media ID prefix (non-robotic))	このプロパティは、非ロボットのドライブ内にラベルなしメディアがある場合に使用する、メディア ID の接頭辞を指定します。接頭辞は、1 文字から 3 文字の英数字である必要があります。NetBackup によって数字が追加されます。デフォルトでは、NetBackup は A を使用して、A00000、A00001 のようにメディア ID を割り当てます。 たとえば FEB と指定すると、残りの数字は NetBackup によって追加されます。割り当てられたメディア ID は、FEB000、FEB001 のようになります。
メディアのマウント解除の遅延 (Media unmount delay)	要求された操作の完了後、メディアのアンロードを遅延するように指定します。ユーザー操作 (NetBackup for Oracle を実行しているクライアントなどの、データベースエージェントクライアントのバックアップおよびリストアを含む) だけに適用されます。この遅延によって、短い間隔でメディアが再度要求された場合に、そのメディアの不要なマウントの解除および配置が削減されます。 遅延は、0 秒から 1800 秒の範囲で設定できます。デフォルトは 180 秒です。0 (ゼロ) を指定すると、要求された操作の完了後、すぐにメディアのマウントが解除されます。1800 より大きい値を設定した場合、1800 に設定されます。
メディア要求遅延 (非ロボット) (Media request delay (non-robotic))	このプロパティは、NetBackup が非ロボットのドライブでメディアを待機する時間を指定します。 遅延期間中、NetBackup によって、ドライブの準備が完了したかどうか が 60 秒ごとに確認されます。ドライブの準備が完了すると、NetBackup によってそのドライブが使用されます。準備が完了していない場合、NetBackup はさらに 60 秒間待機し、再度確認します。遅延の合計が 60 の倍数でない場合、残りの秒数が最後の待機秒数です。遅延が 60 秒未満の場合、NetBackup によって遅延の終わりに確認されます。 たとえば、遅延を 150 秒に設定します。NetBackup は 60 秒間待機し、準備が完了したかどうかを確認されます。さらに 60 秒間待機し、確認が行われます。最後に 30 秒間待機して確認が行われます。遅延が 50 秒だった場合 (短い遅延は推奨されません)、NetBackup は 50 秒後に確認を行います。

メディアの上書きが禁止された結果

保護された形式を含むメディアに対して、メディアの上書きを禁止する場合、NetBackupによって次の操作が実行されます。

- | | |
|---|--|
| ボリュームがバックアップ用に割り当てられていない場合 | <ul style="list-style-type: none">■ ボリュームの状態を[凍結 (FROZEN)]に設定します。■ 他のボリュームを選択します。■ エラーをログに書き込みます。 |
| ボリュームが、NetBackup のメディアカタログ内に存在し、バックアップ用に選択されていた場合 | <ul style="list-style-type: none">■ ボリュームの状態を[一時停止 (SUSPENDED)]に設定します。■ 要求されたバックアップを中断します。■ エラーをログに書き込みます。 |
| ボリュームが NetBackup カタログのバックアップ用にマウントされている場合 | バックアップは中断され、エラーがログに書き込まれます。このエラーは、ボリュームが上書きできないことを示します。 |
| ボリュームがファイルのリストアまたはメディアの内容の一覧表示用にマウントされている場合 | NetBackup によって要求が中断され、エラーがログに書き込まれます。このエラーは、ボリュームに NetBackup 形式が含まれていないことを示します。 |

[SCSI RESERVE の有効化 (Enable SCSI reserve)] プロパティの推奨する使用方法

すべてのテープドライブおよびブリッジのベンダーは、SPC2- SCSI RESERVE および RELEASE 方法をサポートしています。NetBackup では SPC-2 SCSI RESERVE を NetBackup 3.4.3 から使用しており、NetBackup のデフォルトの予約方法になっています。SPC-2 SCSI RESERVE はほとんどの NetBackup 環境で有効です。

SCSI Persistent RESERVE 方法は、デバイス状態と修正を示し、次の環境でより効果的なことがあります。

- NetBackup メディアサーバーをクラスタ環境で使用する場合。
NetBackup では、フェールオーバー後に予約済みのドライブをリカバリし、使用することができます (NetBackup が予約を所有している場合)。(SPC-2 SCSI RESERVE では、予約の所有者が機能しないため、通常、ドライブのリセットが必要です。)
- ドライブが高可用性を備えている場合。
NetBackup では、NetBackup のドライブ予約の競合を解決し、ドライブの高可用性を維持できます。(SPC-2 SCSI RESERVE ではドライブの状態検出のための方法がありません。)

ただし、SCSI Persistent RESERVE 方法は、デバイスベンダーによって、サポートされていないか、正しくサポートされていないことがあります。そのため、環境を詳細に分析し

て、環境内のすべてのハードウェアが **SCSI Persistent RESERVE** を正しくサポートしていることを確認してください。

[**SCSI RESERVE** の有効化 (**Enable SCSI reserve**)]を使用する前に、次のすべての要因を十分に検討することをお勧めします。

- **SCSI Persistent RESERVE** をサポートしているのは、ごく限られたテープドライブベンダーだけです。
- **SCSI Persistent RESERVE** は、すべてのファイバーチャネルブリッジベンダーでサポートされていないか、正しくサポートされていません。ブリッジで正しくサポートされていないと、アクセス保護は行われません。したがって、環境でブリッジを使う場合は、**SCSI Persistent RESERVE** を使わないでください。
- パラレル **SCSI** バスを使用している場合は、**SCSI Persistent RESERVE** の使用を十分に検討します。通常、パラレルドライブは共有されないため、**SCSI Persistent RESERVE** による保護は必要ありません。また、通常、パラレルドライブはブリッジ上にあり、ブリッジは **SCSI Persistent RESERVE** を正しくサポートしていません。したがって、環境でパラレル **SCSI** バスを使う場合は、**SCSI Persistent RESERVE** を使わないでください。
- **SCSI Persistent RESERVE** を使用するために、オペレーティングシステムのテープドライブを大幅に構成する必要がある場合があります。たとえば、テープドライブが **SPC-3 Compatible Reservation Handling (CRH)** をサポートしていない場合は、オペレーティングシステムで **SPC-2 RESERVE** および **RELEASE** コマンドが発行されないようにする必要があります。

ハードウェアのいずれかが **SCSI Persistent RESERVE** をサポートしていない場合は、**SCSI Persistent RESERVE** を使用しないことをお勧めしています。

ネットワークのプロパティ

この設定にアクセスするには、**Web UI** で[**ホスト (Host)**]、[**ホストプロパティ (Host properties)**]の順に選択します。クライアントを選択します。必要に応じて、[**接続 (Connect)**]をクリックし、[**クライアントの編集 (Edit client)**]をクリックします。[**Windows クライアント (Windows client)**]、[**ネットワーク (Network)**]の順に選択します。

クライアントとプライマリサーバー間の通信要件を構成するには、[**ネットワーク (Network)**]プロパティを使用します。これらのプロパティは、現在選択されている **Windows** クライアントに適用されます。

[**ネットワーク (Network)**]ホストプロパティには、次の設定が含まれます。

表 2-45 Windows クライアントの[ネットワーク (Network)]プロパティ

プロパティ	説明
NetBackup Client サービスポート (BPCD) (NetBackup client service port (BPCD))	このプロパティには、NetBackup クライアントが NetBackup サーバーとの通信に使うポートを指定します。デフォルトは 13782 です。 メモ: このポート番号を変更する場合、相互に通信するすべての NetBackup サーバーおよびクライアントでこの値を同じにする必要があります。
NetBackup Request サービスポート (BPRD)	このプロパティには、クライアントが NetBackup サーバー上の NetBackup Request サービス (bprd プロセス) に要求を送信する場合に使うクライアントのポートを指定します。デフォルトは 13720 です。 メモ: このポート番号を変更する場合、相互に通信するすべての NetBackup サーバーおよびクライアントでこの値を同じにする必要があります。
DHCP 間隔を通知する (Announce DHCP interval)	このプロパティには、異なる IP アドレスを使うことを通知するまでにクライアントが待機する時間 (分) を指定します。クライアントが最後に通知してから指定した時間が経過し、そのアドレスが変更された場合だけ、通知が行われます。

[ネットワーク設定 (Network settings)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。サーバーまたはクライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]、[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]、または[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[ネットワーク設定 (Network settings)]をクリックします。

[ネットワーク設定 (Network settings)]ホストプロパティは、プライマリサーバー、メディアサーバー、およびクライアントに適用されます。

[ネットワーク設定 (Network settings)]ページは[ホスト名の逆引き参照 (Reverse host name lookup)]と[IP アドレスファミリーを使用する (Use the IP address family)]のプロパティを含んでいます。

p.133 の「[\[ホスト名の逆引き参照 \(Reverse host name lookup\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

p.135 の「[\[IP アドレスファミリーを使用する \(Use the IP address family\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

[ホスト名の逆引き参照 (Reverse host name lookup)]プロパティ

ドメインネームシステム (DNS) のホスト名の逆引き参照は、指定した IP アドレスによって示されるホストおよびドメイン名を確認するために使用します。

管理者によっては、ホスト名の逆引き参照用に DNS サーバーを構成できない場合や構成しない場合があります。これらの環境のために、NetBackup では、ホスト名の逆引き参照を許可、制限または禁止する[ホスト名の逆引き参照 (Reverse host name lookup)]プロパティを使用できます。

管理者は各ホストの[ホスト名の逆引き参照 (Reverse host name lookup)]プロパティを構成できます。

表 2-46 [ホスト名の逆引き参照 (Reverse host name lookup)]プロパティの設定

プロパティ	説明
許可 (Allowed)	[許可 (Allowed)]プロパティは、認識可能なサーバーからの接続を確認するために、ホストでホスト名の逆引き参照が機能していることが必要であることを意味します。 デフォルトでは、ホストは逆引き参照を実行することによって、接続しているサーバーの IP アドレスをホスト名に解決します。 IP アドレスのホスト名への変換が失敗した場合、接続は失敗します。 成功した場合、ホストはホスト名を既知のサーバーのホスト名のリストと比較します。一致する名前が存在しなかった場合、ホストはサーバーを拒否し、接続は失敗します。
制限あり (Restricted)	[制限あり (Restricted)]プロパティは、NetBackup ホストが最初にホスト名の逆引き参照の実行を試みることを意味します。NetBackup のホストは、接続しているサーバーの IP アドレスからのホスト名への解決 (逆引き参照) に成功すると、そのホスト名を既知のサーバーホスト名のリストと比較します。 IP アドレスがホスト名に解決されなかった場合 (逆引き参照が失敗した場合)、[制限あり (Restricted)]設定に基づいて、ホストは既知のサーバーリストのホスト名を IP アドレスに変換します (前方参照を使用)。ホストは、接続しているサーバーの IP アドレスを既知のサーバーの IP アドレスのリストと比較します。 比較が失敗すると、ホストはサーバーからの接続を拒否し、接続は失敗します。
禁止 (Prohibited)	[禁止 (Prohibited)]プロパティは、NetBackup ホストがホスト名の逆引き参照を試行しないことを意味します。ホストは、前方参照を使用して、既知のサーバーリストのホスト名からの IP アドレスへの解決を行います。 次に、NetBackup のホストは接続しているサーバーの IP アドレスを既知のサーバーの IP アドレスのリストと比較します。 比較が失敗すると、NetBackup のホストはサーバーからの接続を拒否し、接続は失敗します。

管理コンソールを使わないホスト名の逆引き参照の変更

場合によっては、プライマリサーバーの NetBackup 管理コンソールで、メディアサーバーまたはクライアントのホストプロパティを表示できない場合があります。NetBackup ユー

ザーの DNS のホスト名の逆引き参照の設定が、[ホストプロパティ (Host Properties)] を表示できない理由の 1 つである可能性があります。

NetBackup の[ホスト名を逆引き参照 (Reverse Host Name Lookup)] ホストプロパティを変更するには [ホストプロパティ (Host Properties)] が表示可能である必要があるため、この場合は、別の方法を使用して変更を行う必要があります。

nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用して REVERSE_NAME_LOOKUP オプションを設定します。nbsetconfig コマンドで、Windows および UNIX のプライマリサーバーとクライアントでオプションを設定します。

p.50 の「[NetBackup の構成オプションを設定する方法](#)」を参照してください。

REVERSE_NAME_LOOKUP エントリは次の形式を使います。

```
REVERSE_NAME_LOOKUP = ALLOWED | RESTRICTED | PROHIBITED
```

たとえば、

```
REVERSE_NAME_LOOKUP = PROHIBITED
```

ALLOWED、RESTRICTED および PROHIBITED の値は、[ネットワーク設定 (Network Settings)]ホストプロパティにおける値と同じ意味を表します。

[IP アドレスファミリーを使用する (Use the IP address family)]プロパティ

IPv4 と IPv6 の両方のアドレスを使うホストで、使うアドレスファミリーを指定するために [IP アドレスファミリーを使用する (Use the IP address family)]プロパティを使います。

- IPv4 のみ (IPv4 only) (デフォルト)
- IPv6 のみ
- IPv4 と IPv6 の両方 (Both IPv4 and IPv6)

[IP アドレスファミリーを使用する (Use the IP address family)]プロパティが IP アドレスへのホスト名の解決方法を制御し、[優先ネットワーク (Preferred network)]プロパティが NetBackup によるアドレスの使用方法を制御します。

[ポートの範囲 (Port ranges)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。サーバーまたはクライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]、[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]、または[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[ポートの範囲 (Port ranges)]をクリックします。

ホストが互いにどのように接続するかを決定するには、[ポートの範囲 (Port ranges)]プロパティを使います。これらのプロパティは、選択されているプライマリサーバー、メディアサーバーまたはクライアントに適用されます。

[ポートの範囲 (Port ranges)]ホストプロパティには、次の設定が含まれます。

表 2-47 [ポートの範囲 (Port ranges)]ホストプロパティ

プロパティ	説明
ランダムポート割り当てを使用する (Use random port assignments)	他のコンピュータの NetBackup と通信するときに、選択したコンピュータがポートをどのように選択するかを指定します。このプロパティを有効にすると、許可される範囲内の空きポートから NetBackup がランダムにポートを選択できます。たとえば、範囲が 1023 から 5000 である場合は、この範囲内の番号からランダムに選択されます。 このプロパティが有効になっていない場合、NetBackup は番号をランダムではなく順番に選択します。NetBackup は許容範囲内の利用可能な番号のうち最も大きい番号から開始します。たとえば、範囲が 1023 から 5000 の場合、NetBackup によって 5000 が選択されます。5000 が使用中の場合、ポート 4999 が選択されます。 デフォルトではこのプロパティは有効です。
クライアントのポートウィンドウ (Client port window)	どの予約されていないポートを使用するかを、オペレーティングシステムによって決定されるようにするには、[OS で自動的に選択された、予約されていないポートを使用する (Use OS selected non-reserved port)]を選択します。 または、選択したコンピュータで、予約されていないポートの範囲を選択します。NetBackup は別のコンピュータの NetBackup と通信するときに送信元ポートとしてこの範囲内の利用可能なポートを使用できます。
サーバーのポートウィンドウ (Server port window)	このプロパティでは、主なプロトコルで使用するポートに接続しない場合に、このコンピュータの NetBackup プロセスで NetBackup からの接続を受け入れる、予約されていないポートの範囲を指定します。このプロパティは主に、接続オプションで <code>vnetd</code> が無効になっていて、ローカルホスト名に予約されていないポートを構成している場合の <code>bpcd</code> のコールバックに適用されます。 このプロパティは、NDMP のようなサードパーティプロトコルが使われる状況にも適用されます。このサーバーが他のコンピュータから NetBackup 接続を受け入れる、予約されていないポートの範囲を指定します。デフォルトの範囲は 1024 から 5000 です。 ポートの範囲を示す代わりに[OS で自動的に選択された、予約されていないポートを使用する (Use OS selected non-reserved port)]を有効にすると、どの予約されていないポートを使用するかを、オペレーティングシステムによって決定されるようにすることができます。 この設定は、選択したプライマリサーバーやメディアサーバーに適用されます。

プロパティ	説明
サーバーの予約済みポートウィンドウ (Server reserved port window)	このエントリは、主なプロトコルで使用するポートに接続しない場合に、このコンピュータが NetBackup からの接続を受け入れる、ローカルの予約済みポートの範囲を指定します。このプロパティは主に、ローカルホスト名の接続オプションで <code>vnetd</code> が無効になっている場合の <code>bpcd</code> のコールバックに適用されます。 ポートの範囲を示す代わりに [OS で自動的に選択された、予約されていないポートを使用する (Use OS selected non-reserved port)] を有効にすると、どの予約されていないポートを使用するかを、オペレーティングシステムによって決定されるようにすることができます。

登録ポートと動的割り当てポート

NetBackup では、登録ポートと動的割り当てポートの組み合わせを使ってコンピュータ間の通信が行われます。

登録ポート

これらのポートは、**NetBackup** サービスとして割り当てられ、**Internet Assigned Numbers Authority (IANA)** へ恒久的に登録されています。たとえば、**NetBackup Client** デーモン (`bpcd`) のポートは **13782** です。

次のシステム構成ファイルは各サービスのデフォルトポート番号を上書きするために使うことができます。

Windows の場合: `%systemroot%\system32\drivers\etc\services`

UNIX の場合: `/etc/services`

メモ: PBX に関連付けられているポート番号 (**1556** と **1557**) は変更しないことをお勧めします。

動的割り当てポート

これらのポートは、**NetBackup** サーバーおよびクライアントの [ポートの範囲 (Port ranges)] ホストプロパティの構成可能な範囲から、必要に応じて割り当てられます。

番号の範囲に加えて、**NetBackup** がポート番号をランダムに選択するか、範囲の先頭から開始して利用可能な最初のポートを使うかを指定できます。

[優先ネットワーク (Preferred network)]プロパティ

この設定にアクセスするには、**Web UI** で [ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)] の順に選択します。サーバーまたはクライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)] をクリックし、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]、

[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]、または[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[優先ネットワーク (Preferred network)]をクリックします。

[優先ネットワーク (Preferred network)]プロパティを使用して、選択したホストからの発信 NetBackup トラフィックに使用するネットワークまたはインターフェースを NetBackup に指定します。これらのプロパティは、現在選択されているプライマリサーバー、メディアサーバーまたはクライアントに適用されます。

メモ: NetBackup の[優先ネットワーク (Preferred network)]設定は、個別リカバリテクノロジー (GRT) 機能と VMware インスタントリカバリ機能には適用されません。これらの機能の通信中には、オペレーティングシステムで構成されているネットワーク設定が使用されます。

オペレーティングシステムが解決およびルーティングを正しく行える IP アドレスのホスト名を使用して NetBackup が構成されている場合、[優先ネットワーク (Preferred network)]のエントリは必要ありません。

外部の制約によって環境の修正が妨げられているときは、次のような状況で[優先ネットワーク (Preferred network)]のエントリが役立つ場合があります。

- NetBackup が特定の宛先アドレスに接続するのを防ぐために使用する
- NetBackup が特定の宛先アドレスだけに接続するようにする
- アウトバウンド接続を確立するときにソースバインドのためのローカルインターフェースのサブセットを要求するために使用する

注意: ソースバインドに使用するとき、NetBackup が提供するソースバインドリストにオペレーティングシステムが従わない場合があります。オペレーティングシステムが、弱いホストモデルを実装すると、非対称のネットワークルーティングが発生する可能性があります。非対称のルーティングが発生すると、リモートホストが、強力なホストモデルを実装している場合にインバウンド接続を拒否することがあります。同様に、ステートフルネットワークデバイスが、非対称の接続を切断することがあります。特定のリモートホストまたはネットワークに対し、特定のアウトバウンドインターフェースを使用するため、OS の名前解決とルーティング設定が正しいことを確認し、必要に応じて静的ホストルートを作成してください。すべてのネットワークドライバが、IP および TCP ネットワークプロトコルを正しく実装していることを確認してください。

ローカルの[優先ネットワーク (Preferred network)]エントリは、CORBA 接続の初期セットアップ時にローカルホストがリモートホストに返す転送プロファイルには影響しません。これには、ローカルに設定されたすべてのインターフェースが含まれます。ただし、リモートプロセスに含まれるエンドポイント選択アルゴリズムは、以降の CORBA 接続に対する宛先を選択するときに、ローカルの[優先ネットワーク (Preferred network)]エントリを使用してプロファイルを評価します。

ソースバインドに関して、[優先ネットワーク (Preferred network)]プロパティには、[ユニバーサル設定 (Universal settings)]プロパティの[指定したネットワークインターフェースを使用 (Use specified network interface)]プロパティよりも高い柔軟性があります。[指定したネットワークインターフェースを使用 (Use specified network interface)]プロパティは、アウトバウンドコールに使う NetBackup 用の単一インターフェースを指定するためにのみ使うことができます。[優先ネットワーク (Preferred network)]プロパティは、複数の個別ネットワークまたはネットワークの範囲に適用されるより詳細で限定された指示を管理者が与えることができるように導入されました。たとえば、管理者は 1 つのネットワークを除くすべてのネットワークを使うようにホストを構成できます。両方のプロパティを指定する場合、[指定したネットワークインターフェースを使用 (Use specified network interface)]が[優先ネットワーク (Preferred network)]を上書きします。

メモ: ホストが他のどのホストとも通信できなくなるような誤った構成を行わないでください。意図したようにホストが通信しているかどうかを確認するには、bptestnetconn ユーティリティを使用します。

p.149 の「[優先ネットワークの情報を表示する bptestnetconn ユーティリティ](#)」を参照してください。

[優先ネットワーク (Preferred network)]ホストプロパティは、ネットワークのリストと各ネットワーク用に構成された指示句を含んでいます。

表 2-48 優先ネットワークホストのプロパティ

プロパティ	説明
NetBackup 通信のネットワーク指定のリスト (List of network specifications for NetBackup communications)	優先ネットワークのリストは次の情報を含んでいます。 ■ [ターゲット (Target)]列は、特定の指示句が指定されているネットワーク (またはホスト名や IP アドレス) をリストします。ネットワークがターゲットとして具体的に表示されていない場合、または一連のアドレスにそのターゲットが含まれていない場合、NetBackup はそのターゲットが選択可能であると見なします。 - 同じネットワークに関する注意事項がすべてのホストあてはまる場合、指示句のリストは NetBackup 環境内のすべてのホストに同一である可能性があります。特定のホストに適用されないアドレスを指示句が含んでいる場合、そのホストはそのアドレスを無視します。たとえば、IPv4 のみのホストは IPv6 の指示句を無視し、IPv6 のみのホストは IPv4 の指示句を無視します。この処理により、管理者は NetBackup 環境のすべてのホストに同一の[優先ネットワーク (Preferred network)]構成を使用できます。 ■ [指定名 (Specified as)]列は、[一致 (Match)]、[禁止 (Prohibited)]または[単独 (Only)]というネットワークの指示句を示します。 ■ [ソース (Source)]列は、アドレスをフィルタ処理するために使うソースバインド情報をリストします。[ソース (Source)]プロパティは省略可能な構成プロパティです。

プロパティ	説明
順序の矢印 (Ordering arrows)	リスト内のネットワークを選択し、上矢印または下矢印をクリックしてリスト内のネットワークの順序を変更します。この順序は、NetBackup が選択するネットワークに影響する場合があります。 p.148 の「[優先ネットワーク (Preferred network)]プロパティでの指示句の処理順序」を参照してください。
追加 (Add)	[優先ネットワーク (Preferred network)]プロパティにネットワークを追加するには、[追加 (Add)]をクリックします。次に、ネットワークの指示句を構成します。 p.141 の 表 2-49 を参照してください。
[処理 (Actions)]>[編集 (Edit)]	リスト内のネットワークを見つけ、[処理 (Actions)]、[編集 (Edit)]の順にクリックして、[優先ネットワーク (Preferred network)]プロパティを変更します。 p.140 の「優先ネットワーク設定の追加または編集」を参照してください。
[処理 (Actions)]>[削除 (Delete)]	リスト内のネットワークを見つけ、[処理 (Actions)]、[削除 (Remove)]の順にクリックして、優先ネットワークのリストからそのネットワークを削除します。

優先ネットワーク設定の追加または編集

優先ネットワーク設定を追加または編集する場合は、次の設定を参照してください。

表 2-49 優先ネットワーク設定の構成

プロパティ	説明
ターゲット (Target)	ネットワークアドレスまたはホスト名を入力します。 ■ NetBackup はアドレスとして次のワイルドカードエントリを認識します: ■ 0.0.0.0 任意の IPv4 アドレスと一致します。 ■ 0::0 任意の IPv6 アドレスと一致します。 ■ 0/0 任意のファミリーのアドレスと一致します。 ■ ターゲットが 1 つ以上の IP アドレスに解決されるホスト名の場合は、最初の IP アドレスのみが使われます。 ■ サブネットを指定しない場合、デフォルトでは、アドレスがゼロ以外の場合は /128、アドレスがゼロの場合は /0 になります。これは、[ターゲット (Target)] と [ソース (Source)] の両方のプロパティに適用されます。 /0 のサブネットは、アドレス内のビットをすべて無効にし、ターゲットまたはソースがすべてのアドレスと一致することになるため、ゼロ以外のアドレスでは使用できません。たとえば、0/0 です。 メモ: 0/32、0/64 または 0/128 などの不正な形式のエントリをワイルドカードとして使わないでください。スラッシュの左側は正当な IP アドレスである必要があります。ただし、前述のとおり、0/0 は使用できません。
一致 (Match)	[一致 (Match)] 指示句には、次の特徴があります。 ■ [ターゲット (Target)] が宛先アドレスの場合に適用されます。 ■ 指定したネットワーク、アドレス、ホスト名が、選択したホストとの通信で優先されることを示します。 ■ 他のネットワーク、アドレス、ホスト名が一致しなくても、それらが選択されることを拒否しません。([単独 (Only)] 指示句は、適切でないターゲットが一致しない場合はそれらを拒否します。) ■ [禁止 (Prohibited)] か [単独 (Only)] 指示句の後に使用すると有効です。他の指示句とともに使用する場合、[一致 (Match)] は NetBackup に適切な一致が見つかったためルールの処理を停止するように指示します。 ■ [ソース (Source)] プロパティとともに使用して、ソースバインドを示すことができます。

プロパティ	説明
禁止 (Prohibited)	指定したネットワーク、アドレス、ホスト名の使用を除外または阻止するには、[禁止 (Prohibited)]指示句を使用します。 [ターゲット (Target)]は送信元アドレスと宛先アドレスの両方に適用されます。[ソース (Source)]が指定されて[禁止 (Prohibited)]が示されている場合、ソースは無視されますがターゲットは禁止されたままになります。 一致したアドレスが宛先アドレスの場合、評価は停止します。これが唯一の潜在的な宛先であった場合、接続は試みられません。追加の潜在的な宛先がある場合は、最初のエントリから再び評価が行われます。 一致したアドレスが送信元アドレスの場合は、ソースバインドのリストから削除されます。 警告: 一部のプラットフォームでは、ローカルインターフェースを禁止すると、リモートホストに接続するときに予期しない結果が起きる場合があります。ローカルインターフェースを禁止しても、ホストへの内部的な接続には影響しません。
単独 (Only)	[単独 (Only)]指示句には、次の特徴があります。 ■ 宛先アドレスに適用されます。 ■ 選択したホストとの通信に使用する、指定したネットワーク、アドレス、またはホスト名が、指定したネットワーク内に存在する必要があることを示します。 [単独 (Only)]で指定されたネットワーク以外のネットワークが考慮されないようにするには、[単独 (Only)]指示句を使用します。 ■ 評価中のアドレスがターゲットと一致しない場合、そのアドレスは使われず、評価が停止します。評価されるアドレスが唯一の潜在的な宛先であった場合、接続は試みられません。追加の潜在的な宛先がある場合は、最初のエントリから再び評価が行われます。 ■ [ソース (Source)]プロパティとともに使用して、ソースバインドを示すことができます。
ソース (Source)	[一致 (Match)]または[単独 (Only)]指示句とともにこのプロパティを使用して、ソースバインドに使うことができるローカルホスト名、IP アドレス、ネットワークを識別します。 サブネットを指定しない場合、デフォルトは /128 です。 このホストに[ソース (Source)]と一致する IP アドレスがある場合、宛先に接続するときにこの IP アドレスがソースとして使われます。[ソース (Source)]は、このホストに対して有効でない場合は無視されます。

どのネットワークを使うかを判断するために NetBackup で指示句を使う方法

各ホストは優先ネットワークの規則を記載した内部表を備えており、NetBackup は、他のホストとの通信に使用するネットワークインターフェースを選択する前に、この表を参照します。この表は、選択したホストで利用可能なインターフェースと IP アドレスのすべての組み合わせを含んでいます。この表は、[優先 (Preferred)]NetBackup 指示句に基づき、ホストに対して特定ネットワークの使用を許可するかどうかを NetBackup に指示します。

この項では、図 2-3 に示すように 2 つのマルチホームサーバー (Server_A と Server_B) の例を使います。Server_A は、Server_A に [優先ネットワーク (Preferred network)] の指示句が構成されていることから、Server_B へのアクセスにどのアドレスを使用できるかを考慮します。

ターゲットに制限を設定するために [優先ネットワーク (Preferred network)] の指示句を使う場合、それらの指示句は接続を確立するサーバーの観点から追加されます。Server_A の指示句は、Server_A がどの Server_B アドレスを使用できるかに関する設定に影響します。

図 2-3 マルチホームサーバーの例

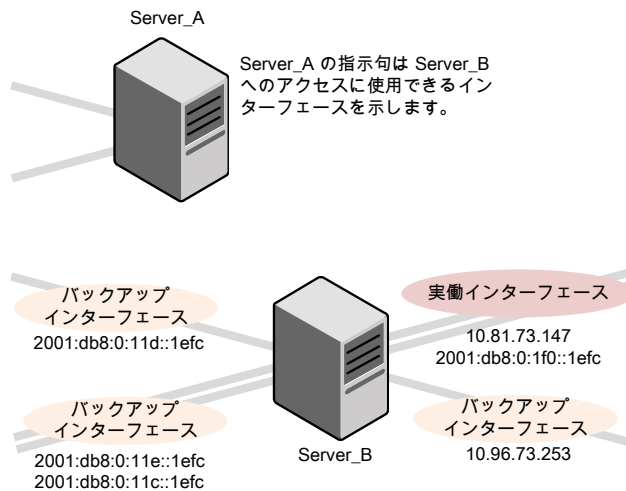


図 2-4 は Server_B の表を示します。Server_B には複数のネットワークインターフェースがあり、そのうちのいくつかには複数の IP アドレスがあります。表のはいは、NetBackup はネットワーク IP の組み合わせをソースとして利用可能であることを意味します。この例では、ホストの指示句は作成されていません。[優先ネットワーク (Preferred network)] プロパティにネットワークがリストされていないので、ネットワークと IP の任意の組み合わせを通信に使うことができます。

メモ: 次のトピックは、この構成例で出力される `bptestnetconn` を示します。

p.149 の「優先ネットワークの情報を表示する `bptestnetconn` ユーティリティ」を参照してください。

図 2-4 Server_A の観点から: Server_A で指示句を指定しない場合に Server_B で利用可能な IP アドレス

ネットワークインターフェース	IP アドレス	
	IPv4	IPv6
2001:0db8:0:1f0::1efc	---	はい
10.80.73.147	はい	---
2001:0db8:0:11c::1efc	---	はい
2001:0db8:0:11d::1efc	---	はい
2001:0db8:0:11e::1efc	---	はい
10.96.73.253	はい	---

図 2-5 は同じホスト (Server_B) の表を示しています。これで [優先ネットワーク (Preferred network)] プロパティは、すべての IPv4 アドレスを NetBackup の選択対象から除外するように構成されました。今後、すべての NetBackup のトラフィックは IPv6 アドレスのみを使います。

図 2-5 Server_A の観点から: Server_A で IPv6 アドレスのみを使用する指示句を指定した場合に Server_B で利用可能な IP アドレス

ネットワークインターフェース	IP アドレス	
	IPv4	IPv6
2001:0db8:0:1f0::1efc	---	はい
10.80.73.147	いいえ	---
2001:0db8:0:11c::1efc	---	はい
2001:0db8:0:11d::1efc	---	はい
2001:0db8:0:11e::1efc	---	はい
10.96.73.253	いいえ	---

次の項では、さまざまな構成について説明します。

- p.145 の「IPv6 ネットワークを使う構成」を参照してください。
- p.147 の「IPv4 ネットワークを使う構成」を参照してください。
- p.151 の「指定されたアドレスの使用を禁止する構成」を参照してください。
- p.151 の「指定されたアドレスを優先する構成」を参照してください。

- p.152 の「[NetBackup を 1 つのアドレスセットに制限する構成](#)」を参照してください。
- p.153 の「[アドレスは制限するが、すべてのインターフェースを許可する構成](#)」を参照してください。

IPv6 ネットワークを使う構成

次の[優先ネットワーク (Preferred network)]構成では、現在選択しているホストのアウトバウンドコールのターゲットとして IPv6 アドレスのみを使用するよう、NetBackup に指示します。これらの構成は、すべてのバックアップ通信が IPv6 ネットワークを使い、他の通信は他のネットワークを使うトポロジーを満たしています。

ある構成は[禁止 (Prohibited)]指示句 (図 2-6) を使い、ある構成は[一致 (Match)]指示句 (図 2-7) を使います。

1 つのアドレスファミリー (この場合は IPv6) をより効率的に指定する方法は、IPv4 を禁止する方法です。[一致 (Match)]指示句の動作は、[禁止 (Prohibited)]ほど排他的ではありません。この場合、[一致 (Match)]は必ずしも他のアドレスファミリーを除外しないことがあります。

図 2-6 では、ワイルドカードを伴った[禁止 (Prohibited)]指示句を使い、いかなる IPv4 アドレスも使用しないよう NetBackup に指示しています。この場合、NetBackup は IPv6 アドレスを使う必要があります。

メモ: デフォルト構成では、NetBackup は IPv4 アドレスのみを使います。

[ネットワーク設定 (Network settings)]、[IP アドレスファミリーを使用する (Use the IP Address Family)]オプションを、以前に[IPv4 と IPv6 の両方 (Both IPv4 and IPv6)]または[IPv6 のみ (IPv6 only)]に変更していない場合、すべての IPv4 アドレスを禁止する指示句を作成すると、サーバーはミュート状態になります。

p.135 の「[\[IP アドレスファミリーを使用する \(Use the IP address family\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

p.133 の「[\[ネットワーク設定 \(Network settings\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

図 2-6 ターゲットとしての IPv4 アドレスの禁止

Add preferred network settings

Target
0.0.0.0

Specified as

☐ Match (The above network is preferred for communication)

☒ Prohibited (The above network is not used for communication)

☐ Only (Only target addresses in the above network is used for communication)

Source

Cancel Add and add another Add

図 2-7 では、ワイルドカードを伴った[一致 (Match)]指示句を使い、IPv6 アドレスを優先するよう NetBackup に指示しています。この場合、NetBackup は IPv6 アドレスの使用を試みますが、必要に応じ IPv4 アドレスの使用を考慮します。

図 2-7 ターゲットとしての IPv6 アドレスの一致

Add preferred network settings

Target
0::0

Specified as

☒ Match (The above network is preferred for communication)

☐ Prohibited (The above network is not used for communication)

☐ Only (Only target addresses in the above network is used for communication)

Source

Cancel Add and add another Add

図 2-8 は、NetBackup が複数の IPv6 ネットワークから選択することを可能にする別の構成を示します。

このマルチホームの構成例では、指示句には次の意味があります。

- 4 つの IPv6 ネットワーク (fec0:0:0:fe04 から fec0:0:0:fe07) がターゲットとして示されます。

- これらのネットワーク上にあるすべてのアドレスには、ホスト名 *host_fred* の IP アドレスから導かれたソースバインドアドレスが使われます。

p.142 の「どのネットワークを使うかを判断するために NetBackup で指示句を使う方法」を参照してください。

図 2-8 IPv6 ネットワークの範囲の指定

The screenshot shows a dialog box titled "Add preferred network settings". It has a close button (X) in the top right corner. The "Target" field is filled with the IPv6 address "fec0:0:0:fe04::/62". Below this, under the heading "Specified as", there are three radio button options: "Match (The above network is preferred for communication)", "Prohibited (The above network is not used for communication)", and "Only (Only target addresses in the above network is used for communication)". The "Only" option is selected. Below the radio buttons is a section labeled "Source" with a text field containing "host_fred". At the bottom of the dialog are three buttons: "Cancel", "Add and add another", and "Add".

IPv4 ネットワークを使う構成

次の[優先ネットワーク (Preferred network)]構成では、現在選択しているホストのアウトバウンドコールのターゲットとして IPv4 アドレスのみを使用するよう、NetBackup に指示します。これらの構成は、すべてのバックアップ通信が IPv4 ネットワークを使い、他の通信は他のネットワークを使うトポロジーを満たしています。

ある構成は[禁止 (Prohibited)]指示句 (図 2-9) を使い、ある構成は[一致 (Match)]指示句 (図 2-10) を使います。

1 つのアドレスファミリー (この場合は IPv4) をより効率的に指定する方法は、IPv6 を禁止する方法です。[一致 (Match)]指示句の動作は、[禁止 (Prohibited)]ほど排他的ではありません。この場合、[一致 (Match)]は必ずしも他のアドレスファミリーを除外しないことがあります。

図 2-9 では、ワイルドカードを伴った[禁止 (Prohibited)]指示句を使い、いかなる IPv6 アドレスも使用しないよう NetBackup に指示しています。この場合、NetBackup は IPv4 アドレスを使う必要があります。

図 2-9 ターゲットとしての IPv6 アドレスの禁止

Add preferred network settings

Target
0::0

Specified as

☐ Match (The above network is preferred for communication)

☒ Prohibited (The above network is not used for communication)

☐ Only (Only target addresses in the above network is used for communication)

Source

Cancel Add and add another Add

図 2-10 では、ワイルドカードを伴った[一致 (Match)]指示句を使い、IPv4 アドレスを優先するよう NetBackup に指示しています。この場合、NetBackup は IPv4 アドレスの使用を試みますが、必要に応じ IPv6 アドレスの使用を考慮します。

図 2-10 ターゲットとしての IPv4 アドレスの一致

Add preferred network settings

Target
0.0.0.0

Specified as

☒ Match (The above network is preferred for communication)

☐ Prohibited (The above network is not used for communication)

☐ Only (Only target addresses in the above network is used for communication)

Source

Cancel Add and add another Add

[優先ネットワーク (Preferred network)]プロパティでの指示句の処理順序

NetBackup はすべての指示句を[ターゲット (Target)]のサブネットの長さの降順にソートし、完全なホスト名や IP アドレスなど、より範囲の狭いネットワーク指定条件が最初にマッチするようにします(たとえば、[ターゲット (Target)]が /24 のサブネットは、[ターゲッ

ト (Target)] が /16 のサブネットの前に処理されます)。これにより、NetBackup は、ホスト固有の上書きを優先できます。

複数の指示句に同じ長さのサブネットがある場合、NetBackup は、それらの指示句が表示される順序を確認します。

指示句の順序を変更するには、リストの右にある上矢印と下矢印を使います。

NetBackup は、指示句と比較して、解決済みの各宛先アドレスと予測される各送信元アドレスを処理します。どのホストにも適用されないアドレスを含んでいる指示句は無視されます。

優先ネットワークの情報を表示する bptestnetconn ユーティリティ

bptestnetconn ユーティリティは、ホストの接続をテストおよび分析するために管理者が利用できます。サーバーリスト上のホストの前方参照情報とともに優先ネットワーク構成に関する情報を表示するために優先ネットワークオプション (--prefnet または -p) を使います。

たとえば、bptestnetconn -v6 -p -s -H host1 では、NetBackup の処理順で指示句が表示されます。これは、指示句の構成順ではない場合があります。

- bptestnetconn コマンドについては、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』で説明されています。
- 次の記事には、bptestnetconn コマンドを使用するためのベストプラクティスが含まれます。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100009286>

図 2-11 は、Server_A 上で実行した場合の Server_B の bptestnetconn 出力を示しています。つまり、bptestnetconn は Server_A の観点から実行されます。Server_B を対象として Server_A で構成されている指示句に基づいて、bptestnetconn は Server_B の利用可能な IP アドレスを示します。この例では、Server_A では指示句が構成されていません。

図 2-11 指示句がリストされていない Server_B の bptestnetconn

```
[root@Server_A netbackup]# bptestnetconn -f --prefnet -H Server_B
-----
FL: Server_B -> 10.81.73.147 : 11 ms SRC: ANY
FL: Server_B -> 10.96.73.253 : 11 ms SRC: ANY
FL: Server_B -> 2001:db8:0:11d::1efc : 11 ms SRC: ANY
FL: Server_B -> 2001:db8:0:11e::1efc : 11 ms SRC: ANY
FL: Server_B -> 2001:d8b:0:1f0::1efc : 11 ms SRC: ANY
FL: Server_B -> 2001:db8:0:11c::1efc : 11 ms SRC: ANY
-----
Total elapsed time: 0 sec
```

参照対象のホスト

Server_B で利用可能な
ネットワークのリスト

任意のソースが接続に
利用可能

次の指示句が、Server_A の[優先ネットワーク (Preferred networks)]プロパティに追加されます。

設定ファイルでは、指示句は次のように表示されます。

PREFERRED_NETWORK = 2001:0db8:0:11c::/62 ONLY

この指示句では、NetBackup に情報を与えてアドレスをフィルタし、:11c、:11d、:11e、:11f ネットワークと一致する対象とのみ通信することを選択します。[単独 (Only)]指示句と一致しないアドレスは、bptestnetconn 出力に示されているように、禁止されます。

図 2-12 は、指示句が指定された場合の Server_B の bptestnetconn 出力を示しています。

図 2-12 指示句が指定された Server_B の bptestnetconn

```
[root@Server_A netbackup]# bptestnetconn -f --prefnet -H Server_B
-----
FL: Server_B -> 10.81.73.147          :      11 ms TGT PROHIBITED
FL: Server_B -> 10.96.73.253          :      11 ms TGT PROHIBITED
FL: Server_B -> 2001:db8:0:11d::1efc   :      11 ms SRC: ANY
FL: Server_B -> 2001:db8:0:11e::1efc   :      11 ms SRC: ANY
FL: Server_B -> 2001:d8b:0:1f0::1efc   :      11 ms TGT PROHIBITED
FL: Server_B -> 2001:db8:0:11c::1efc   :      11 ms SRC: ANY
-----
Total elapsed time: 0 sec
```

Server_B
で利用可能なネットワーク
のリスト

指示句によって一部の
ターゲットが Server_B
で利用できない

指定されたアドレスの使用を禁止する構成

図 2-13 は、NetBackup に対し指定されたアドレス (この場合は複数) の使用を禁止する設定を示します。

図 2-13 禁止されたターゲットの例

指定されたアドレスを優先する構成

図 2-14 は、NetBackup が宛先アドレスの特定の範囲を、他の利用できる可能性のあるアドレスよりも優先的に使用する構成を示しています。

その他の利用可能な宛先アドレスは、次のいずれかが **true** の場合にのみ使用されます。

- この範囲内に宛先アドレスがない、または

- より大きなサブネットマスクを使用してこれらのアドレスに対して[一致 (Match)]が指定されている、または
- サブネットマスクの長さが同じで、この指示句より前の順番になっているアドレスに対して[一致 (Match)]が指定されている。

この範囲内のアドレスの使用を防ぐには、[禁止 (Prohibited)]指示句を使用できます。[禁止 (Prohibited)]指示句では、より長いサブネットマスクを使用するか、長さが同じサブネットマスクで[一致 (Match)]指示句が[禁止 (Prohibited)]指示句より前の順番になっている必要があります。追加の[一致 (Match)]指示句を使って、許可される追加のバックアップネットワークを示すことも可能です。

図 2-14 ソースでの[一致 (Match)]ネットワークの選択

The screenshot shows a dialog box titled "Add preferred network settings". It has a close button (X) in the top right corner. The "Target" field contains the text "192.168.100.0/24". Below this, under the heading "Specified as", there are three radio button options: "Match (The above network is preferred for communication)" which is selected, "Prohibited (The above network is not used for communication)", and "Only (Only target addresses in the above network is used for communication)". Below these options is a "Source" field which is currently empty. At the bottom of the dialog are three buttons: "Cancel", "Add and add another", and "Add".

NetBackup を 1 つのアドレスセットに制限する構成

図 2-15 は、NetBackup が指定された範囲の宛先アドレスのみを使用するように構成します。許可される送信元アドレスも、同じ範囲にある必要があります。唯一の例外は、より大きなサブネットを持つ他の指示句がある場合や、長さは同じでもこれより前の順番になっている指示句がある場合です。

図 2-15 同じソースバインドアドレスでの[単独 (Only)]ネットワークの選択

Add preferred network settings

Target
192.168.100.0/24

Specified as

☐ Match (The above network is preferred for communication)

☐ Prohibited (The above network is not used for communication)

☒ Only (Only target addresses in the above network is used for communication)

Source
192.168.100.0/24

Cancel Add and add another Add

[単独 (Only)]指示句が指定されたホストは、192.168.100.0 サブネットのターゲットアドレスのみを考慮します。さらに、ローカルインターフェースへのソースバインドは 192.168.100.0 サブネット上で実行する必要があります。

アドレスは制限するが、すべてのインターフェースを許可する構成

図 2-16 は、指定された接頭辞で始まるアドレスのみの考慮が許可される構成を示します。ソースバインドが指定されていないため、任意のインターフェースを使用できます。

図 2-16 ソースバインドなしのアドレスの制限

Add preferred network settings

Target
fec0:0:1::/48

Specified as

☐ Match (The above network is preferred for communication)

☐ Prohibited (The above network is not used for communication)

☒ Only (Only target addresses in the above network is used for communication)

Source

Cancel Add and add another Add

ホストプロパティのプロパティ設定

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。サーバーまたはクライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]、[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]、または[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[プロパティ (Properties)]をクリックします。

ホストプロパティの [プロパティ (Properties)]には、選択したホストに関する次の情報が含まれます。

表 2-50 ホストのプロパティ情報

プロパティ名	説明
ホスト (Host)	ホストの NetBackup クライアント名。
オペレーティングシステム (Operating system)	ホストにインストールされているオペレーティングシステムと、OS バージョン。
OS 形式 (OS Type)	OS の種類。
ホストの種類 (Host type)	ホストの種類: プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアント。
IP アドレス (IP address)	ホストの IP アドレス。

[RHV アクセスホスト (RHV access hosts)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[RHV アクセスホスト (RHV access hosts)]をクリックします。

これらの設定は、Web UI の[作業負荷 (Workloads)]、[RHV] からでも構成できます。次に、[RHV 設定 (RHV settings)]、[アクセスホスト (Access hosts)]の順に選択します。

[RHV アクセスホスト (RHV access hosts)]を使用して、RHV アクセスホストと呼ばれる特別なホストを構成します。このホストは、仮想マシンの代わりにバックアップを実行する NetBackup クライアントです。これらのプロパティは、現在選択されているプライマリサーバー に適用されます。

詳しくは、『[NetBackup Red Hat Virtualization 管理者ガイド](#)』を参照してください。

[耐性ネットワーク (Resilient network)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。サーバーまたはクライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]、[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]、または[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[耐性ネットワーク (Resilient network)]をクリックします。

メディアサーバーとクライアントの場合、[耐性ネットワーク (Resilient network)]のプロパティは読み取り専用です。ジョブが実行されると、プライマリサーバーは現在のプロパティでメディアサーバーとクライアントを更新します。

[耐性ネットワーク (Resilient network)]のプロパティで、バックアップとリストアに耐性のあるネットワーク接続を使用するように NetBackup を構成できます。耐性のある接続はクライアントと NetBackup メディアサーバー間のバックアップと復元トラフィックが WAN などの高遅延、低帯域幅ネットワークで効果的に機能できるようにします。データは WAN 経由で中央のデータセンターのメディアサーバーに移動します。

NetBackup はリモートクライアントと NetBackup メディアサーバー間のソケット接続を監視します。可能であれば、NetBackup は切断された接続を再確立し、データストリームを再同期します。また、NetBackup は遅延したデータストリームを維持するために遅延の問題を解決します。耐性のある接続は 80 秒までのネットワーク割り込みを存続できます。耐性のある接続は 80 秒以上、割り込みを存続させることがあります。

NetBackup Remote Network Transport Service はコンピュータ間の接続を管理します。Remote Network Transport Service はプライマリサーバー、クライアント、そしてバックアップまたはリストアジョブを処理するメディアサーバー上で実行されます。接続が割り込まれたり、失敗したりすると、サービスは接続を再確立し、データを同期しようとします。

NetBackup は、NetBackup Remote Network Transport Service (nbrntd) が作成するネットワークソケット接続のみを保護します。サポートされない接続の例は次のとおりです：

- 自身のデータをバックアップするクライアント (重複排除クライアントおよび SAN クラ イアント)
- Exchange Server や SharePoint Server 用の個別リカバリテクノロジー (GRT)
- NetBackup nbfsd プロセス

NetBackup は確立された後の接続のみを保護します。ネットワークの問題のために NetBackup が接続を作成できない場合、何も保護されません。

耐性のある接続はクライアントと NetBackup メディアサーバーの間で適用され、メディアサーバーとして機能する場合は、プライマリサーバーを含みます。耐性のある接続はメディアサーバーに対してクライアントおよびバックアップデータとして機能する場合、プライマリサーバーまたはメディアサーバーには適用されません。

耐性のある接続はすべてのクライアントまたはクライアントのサブセットに適用されます。

メモ: クライアントがサーバーのサブドメインとは異なる場所にある場合、クライアントの `hosts` ファイルにサーバーの完全修飾ドメイン名を追加してください。たとえば、`india.domain.org` は `china.domain.org` とは異なるサブドメインです。

クライアントのバックアップまたはリストアジョブが開始されると、**NetBackup** は[耐性ネットワーク (Resilient network)]リストを上から下に検索して、クライアントを見つけます。**NetBackup** がクライアントを見つけると、**NetBackup** はクライアントとジョブを実行するメディアサーバーの耐性のあるネットワーク設定を更新します。次に **NetBackup** は耐性が高い接続を使用します。

表 2-51 耐性ネットワークのプロパティ

プロパティ	説明
FQDN または IP アドレス (FQDN or IP address)	ホストの完全修飾ドメイン名または IP アドレス。アドレスは IP アドレスの範囲にもできるため、一度に複数のクライアントを構成できます。IPv4 のアドレスおよび範囲を IPv6 のアドレスおよびサブネットと混在させることができます。 ホストを名前で指定する場合、ペリタスは完全修飾ドメイン名を使うことをお勧めします。 耐性のあるネットワークのリストの項目を上または下に移動するには、ペインの右側の矢印ボタンを使用します。
耐性 (Resiliency)	[耐性 (Resiliency)] は、[オン (On)]または[オフ (Off)]です。

メモ: 順序は耐性ネットワークのリストの項目にとって重要です。クライアントがリストに複数回ある場合、最初的一致で耐性のある接続の状態が判断されます。たとえば、クライアントを追加して、クライアントの IP アドレスを指定し、[耐性 (Resiliency)]に [オン (On)]を指定するとします。また、IP アドレスを[オフ (Off)]として追加し、クライアントの IP アドレスがその範囲内にあるとします。クライアントの IP アドレスがアドレス範囲の前に表示されれば、クライアントの接続には耐性があります。逆に IP アドレス範囲が最初に表示される場合、クライアントの接続には耐性がありません。

他の **NetBackup** のプロパティは **NetBackup** がネットワークアドレスを使う順序を制御します。

NetBackup の耐性のある接続は **SOCKS** プロトコルバージョン 5 を使います。

耐性が高い接続のトラフィックは暗号化されません。バックアップを暗号化することをお勧めします。重複排除バックアップの場合、重複排除ベースの暗号化を使用してください。他のバックアップの場合、ポリシーベースの暗号化を使用してください。

耐性のある接続はバックアップ接続に適用されます。したがって、追加のネットワークポートやファイアウォールポートを開かないでください。

メモ: 複数のバックアップストリームを同時に動作する場合、Remote Network Transport Service は多量の情報をログファイルに書き込みます。このような場合、Remote Network Transport Service のログレベルを 2 以下に設定することをお勧めします。統合ログを構成する手順は別のガイドに記載されています。

クライアントの耐性の状態の表示

ポリシーの [クライアント (Clients)] タブ、またはクライアントのホストプロパティで、クライアントの耐性の状態を表示できます。

p.155 の「[\[耐性ネットワーク \(Resilient network\)\] プロパティ](#)」を参照してください。

ポリシーにあるクライアントの耐性の状態を表示する方法

- 1 NetBackup Web UI で、ポリシーを開きます。
- 2 [クライアント (Clients)] タブを選択します。
- 3 [耐性 (Resiliency)] 列にポリシーの各クライアントの状態が表示されます。

ホストプロパティにあるクライアントの耐性の状態を表示する方法

- 1 NetBackup Web UI で、[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)] の順に選択します。
- 2 クライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)] をクリックし、[クライアントの編集 (Edit client)] をクリックします。
- 3 [耐性ネットワーク (Resilient network)] を選択します。
[耐性 (Resiliency)] 列にクライアントの状態が表示されます。

耐性ジョブについて

耐性ジョブの機能により、プライマリサーバーのサービスが中断されてもメディアサーバーおよびクライアントのジョブ処理が継続して実行されます。

ジョブに耐性があるかどうかを判断するには、ジョブの詳細で「job is resilient」というテキストを検索します。このテキストが見つかった場合、ジョブは耐性ジョブです。

耐性ジョブの機能はデフォルトで有効になっています。この機能は一部のポリシー形式でのみ利用可能です。次の必要条件と制限事項を確認します。

- 耐性機能は有効か無効のいずれかです。バックアップジョブは耐性が有効な場合にのみ耐性ジョブとして実行されます。
- 耐性ジョブは、Windows、標準、Oracle、および MS-SQL-Server ポリシー形式でのみサポートされます。
- バックアップは多重化できません。

- バックアップに親階層と子階層を含めることはできません。アクティビティモニターに、親と子の関係が表示されます。
Windows および標準ポリシー形式のバックアップジョブには、親階層と子階層を含めることはできません。
ただし、Oracle および MS-SQL-Server ポリシー形式のバックアップジョブでは、親階層と子階層がサポートされます。
アクティビティモニターに、親と子の関係が表示されます。
- プライマリサーバーでエラーが発生した場合は、耐性ジョブがサポートされます。ただし、何らかの理由で、メディアサーバーまたはクライアントでエラーが発生した場合、耐性ジョブはサポートされません。

メモ: メディアサーバーまたはクライアントでもあるプライマリサーバーでエラーが発生した場合、ジョブに耐性はありません。

- ジョブの耐性は、ジョブが耐性ありとしてマーク付けされている場合にのみ適用されます。
ジョブが耐性ありとしてマーク付けされていない場合、バックアップ中にメディアサーバープロセスによってネットワークの中断が検出されると、ジョブは失敗します。
- 何らかの理由で、クライアントでエラーが発生した場合、耐性ジョブの機能はサポートされません。
- バックアップがアクティブな間にプライマリサーバーがアップグレードされた場合、バックアップには耐性がありません。
- メディアサーバーでの耐性ジョブのサポートは、ポリシー形式によって異なります。
 - Windows および標準ポリシー形式のバックアップジョブの場合、NetBackup メディアサーバーとクライアントは 10.1.1 以降である必要があります。
 - Oracle および MS-SQL-Server ポリシー形式のバックアップジョブの場合、NetBackup メディアサーバーとクライアントは 11.2 以降である必要があります。
- 複数ストリームのバックアップジョブは、Windows および標準ポリシー形式のバックアップジョブではサポートされません。
- ファイバートランスポートメディアサーバー (FTMS) 環境はサポートされません。
- クライアントによって開始された MS SQL Server バックアップ中にプライマリサーバーのサービスが再起動した場合、バックアップジョブの実行中は親ジョブに状態コード 50 が表示されます。
バックアップジョブが完了すると、親ジョブの最終状態が更新されます。

耐性が高い接続のリソース使用量

耐性が高い接続は次のとおり、通常の接続より多くのリソースを消費します。

- データストリームごとに、より多くのソケットの接続が必要になります。メディアサーバーとクライアントの両方で動作する **Remote Network Transport Service** に対応するには **3** ソケットの接続が必要です。耐性が高くない接続には **1** ソケットの接続しか必要ありません。
- メディアサーバーとクライアント上で開いているソケット数が増加します。**3** つのソケットを開く必要があります。耐性が高くない接続では **1** つしか開く必要がありません。開いたソケットの数が増加すると、ビジー状態のメディアサーバーで問題が発生することがあります。
- メディアサーバーとクライアント上で実行されるプロセス数が増加します。通常は、複数の接続があっても、増える処理はホスト **1** 台に **1** つだけです。
- 耐性が高い接続の保持に必要な処理では、パフォーマンスがわずかに減少することがあります。

クライアントへの耐性のある接続の指定

NetBackup クライアントに耐性のある接続を指定するには次の手順に従ってください。

p.155 の「[\[耐性ネットワーク \(Resilient network\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

または、`resilient_clients` スクリプトを使用して、クライアントに耐性のある接続を指定できます。

- Windows の場合: `install_path\NetBackup\bin\admincmd\resilient_clients`
- UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/resilient_clients`

クライアントに耐性のある接続を指定するには

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順にクリックします。
- 3 プライマリサーバーを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]をクリックします。
- 4 [耐性ネットワーク (Resilient network)]をクリックします。
- 5 次の操作を実行できます。

設定の追加 **ホストまたは IP アドレスの設定を追加するには**

- 1 [追加 (Add)]をクリックします。
- 2 クライアントのホスト名または IP アドレスを入力します。
クライアントホストを名前指定する場合、ベリタスは完全修飾ドメイン名を使うことをお勧めします。
- 3 [オン (On)]オプションが選択されていることを確認します。
- 4 [追加してさらに追加 (Add and add another)]をクリックします。
- 5 各設定を追加するまで、この手順を繰り返します。
- 6 ネットワーク設定の追加を終了したら、[追加 (Add)]をクリックします。

設定の編集 **ホストまたは IP アドレスの設定を編集するには**

- 1 クライアントのホスト名または IP アドレスを見つけます。
- 2 [処理 (Actions)]、[編集 (Edit)]の順にクリックします。
- 3 目的の[耐性 (Resiliency)]の設定を選択します。
- 4 [保存 (Save)]をクリックします。

設定の削除 **ホストまたは IP アドレスの設定の削除**

- 1 クライアントのホスト名または IP アドレスを見つけます。
- 2 [処理 (Actions)]、[削除 (Delete)]の順に選択します。

上矢印、下矢印 **項目の順序を変更します**

- 1 クライアントのホスト名または IP アドレスを選択します。
- 2 上または下のボタンをクリックします。
リストの項目の順序は重要です。
p.155 の「[\[耐性ネットワーク \(Resilient network\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

この設定は、通常のNetBackup ホスト間通信を介して影響を受けるホストに反映されます。この処理は、最大で15分かかる場合があります。

- 6 バックアップをすぐに開始する場合は、プライマリサーバーで NetBackup サービスを再起動します。

[リソース制限 (Resource limit)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続

[Connect])、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[リソース制限 (Resource limits)]をクリックします。

[リソース制限 (Resource limits)]プロパティは、特定のリソース形式上で実行可能なバックアップの同時実行数を制御します。これらの設定は、現在選択しているプライマリサーバーのすべてのポリシーに適用されます。

メモ: [リソース制限 (Resource limit)]プロパティは、仮想マシンの自動選択 (ポリシーの問い合わせビルダー) を使用するポリシーにのみ適用されます。仮想マシンを手動で選択すると、[リソース制限 (Resource limit)]プロパティは有効となりません。

利用可能なリソース制限のプロパティについて詳しくは、作業負荷またはエージェントのそれぞれのガイドを参照してください。

[リストアのフェールオーバー (Restore failover)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[リストアのフェールオーバー (Restore failover)]をクリックします。

[リストアのフェールオーバー (Restore failover)]プロパティは、NetBackup がどのように NetBackup メディアサーバーへの自動フェールオーバーを実行するかを制御します。リストア操作を実行するのに通常のメディアサーバーが一時的にアクセス不能であった場合、フェールオーバーサーバーが必要になる場合があります。自動フェールオーバーには、管理者が介入する必要がありません。デフォルトでは、NetBackup は自動フェールオーバーを実行しません。これらのプロパティは、現在選択されているプライマリサーバーに適用されます。

[リストアのフェールオーバー (Restore failover)]ホストプロパティには、次の設定が含まれます。

表 2-52

プロパティ	説明
メディアサーバー (Media server)	リストアがフェールオーバーによって保護されている NetBackup メディアサーバーが表示されます。
リストア用のフェールオーバーサーバー (Failover restore servers)	フェールオーバー保護を提供するサーバーが表示されます。NetBackup は、リストアを実行できる別のサーバーを検出するまで列内を上から下へ検索します。

NetBackup メディアサーバーは[メディアサーバー (Media Server)]列に 1 回しか出現できませんが、他の複数のメディアサーバーのフェールオーバーサーバーとして機能できます。保護されたサーバーとフェールオーバーサーバーは、同一のプライマリサーバーおよびメディアサーバーのクラスタ内に配置されている必要があります。

リストアのフェールオーバー機能は、次のような場合に使用します。

- 複数のメディアサーバーがロボットを共有し、各サーバーにドライブが接続されている。リストアが要求されたときに、サーバーの 1 つが一時的にアクセス不能である。
- 複数のメディアサーバーに同じ形式のスタンドアロンドライブがある。リストアが要求されたときに、サーバーの 1 つが一時的にアクセス不能である。

これらの場合において、アクセス不能とは、プライマリサーバー上の bprd とメディアサーバー上の bptm (bpcd を経由) の接続が失敗したことを意味します。

失敗の原因として、次のことが考えられます。

- メディアサーバーが停止している。
- メディアサーバーは稼働しているが、bpcd が応答しない。(たとえば、接続が拒否されている場合やアクセスが許可されていない場合。)
- メディアサーバーが稼働し、bpcd は実行中であるが、bptm に問題がある。(たとえば、bptm で必要なテープが検出されない場合。)

リストア用のフェールオーバーサーバーとしての代替メディアサーバーの割り当て

メディアサーバーのリストア用フェールオーバーサーバーとして機能する別のメディアサーバーを割り当てることができます。メディアサーバーがリストアの間に利用できない場合、リストア用のフェールオーバーサーバーが代わりに使われます。

リストア用のフェールオーバーサーバーとして代替メディアサーバーを割り当てする方法

- 1 NetBackupWeb UI で、[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。
- 2 プライマリサーバーを選択します。
- 3 必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]をクリックします。
- 4 [リストアのフェールオーバー (Restore failover)]をクリックします。
- 5 [追加 (Add)]をクリックします。
- 6 [メディアサーバー (Media Server)]フィールドに、フェールオーバーによって保護するメディアサーバーを指定します。

- 7 [リストア用のフェールオーバーサーバー (Failover restore servers)]フィールドに、[メディアサーバー (Media Server)]フィールドで指定したサーバーが利用できなくなった場合に使用するメディアサーバーを指定します。複数のサーバーの名前を指定する場合は、名前を 1 つの空白で区切ります。
- 8 [追加 (Add)]をクリックします。
- 9 [保存 (Save)]をクリックします。

変更が反映される前に、構成が変更されたプライマリサーバーの NetBackup Request デーモンを停止し、再起動する必要があります。

p.1156 の「[代替サーバーへの自動フェールオーバーの有効化について](#)」を参照してください。

[保持期間 (Retention periods)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[保持期間 (Retention periods)]をクリックします。

各保持レベルの期間を定義するには、[保持期間 (Retention periods)]プロパティを使用します。0 から 100 までの保持レベルから選択できます。

ポリシーの保持期間によって、スケジュールに従って作成されるバックアップまたはアーカイブが NetBackup で保持される期間が決まります。これらのプロパティは、選択されているプライマリサーバーに適用されます。

デフォルトでは、NetBackup によって、同じ保持レベルのバックアップがすでに含まれているボリュームに、各バックアップが格納されます。ただし、NetBackup ではそのレベルに対して定義されている保持期間が確認されません。レベルの保持期間が再定義されると、同じボリュームを共有する一部のバックアップが異なる保持期間を持つようになる場合があります。

たとえば、保持レベル 3 を 1 カ月から 6 カ月に変更すると、NetBackup によって、同じボリュームに新しいレベル 3 のバックアップが格納されます。つまり、バックアップは、保持期間が 1 カ月のレベル 3 のバックアップが存在するボリュームに配置されます。

変更前と変更後の保持期間がほぼ同じ値である場合は問題ありません。ただし、保持期間を大幅に変更する場合は、その保持レベルに使用されていたボリュームを一時停止してください。

p.165 の「[ボリュームの保持期間の特定](#)」を参照してください。

p.537 の「[ボリュームの一時停止、または一時停止の解除](#)」を参照してください。

[保持期間 (Retention periods)]ホストプロパティには、次の設定が含まれます。

表 2-53 [保持期間 (Retention periods)] ページのプロパティ

プロパティ	説明
保持レベル (Retention level)	保持レベル数 (0 から 100)。 値 (Value) 保持レベルの設定に数値を割り当てます。 単位 (Units) 保持期間の時間単位を指定します。このリストには、最小単位として[時間 (Hours)]、特別な単位として[無制限 (Infinite)]および[ただちに期限切れにする (Expires immediately)]も含まれています。
保持期間 (Retention period)	選択可能な保持レベルの現在の定義のリスト。デフォルトでは、レベル 9 から 100 (レベル 25 を除く) は[無制限 (Infinite)]に設定されます。保持レベル 9 は変更できず、保持期間は常に[無制限 (Infinite)]に設定されます。保持レベル 25 も変更できず、保持期間は常に、ただちに期限切れになるように設定されます。 デフォルトのままにすると、たとえば、保持レベル 12 と保持レベル 20 には違いがありません。 あるレベルの保持期間を変更した場合、変更はそのレベルを使用しているすべてのスケジュールに反映されます。 [変更の保留 (Changes pending)]列では、アスタリスク (*) を使用して、期間が変更されても適用されていないことを示します。NetBackup は管理者が変更を受け入れるか、または適用するまで実際の構成を変更しません。
スケジュール件数 (Schedule count)	現在選択されている保持レベルを使うスケジュールの数をリストします。
変更の保留 (Changes pending)	この列では、期間が変更されても適用されていないことを示すアスタリスク (*) が表示されます。NetBackup は管理者が変更を受け入れるか、または適用するまで実際の構成を変更しません。
この保持レベルを使用しているスケジュール (Schedules using this retention level)	保持レベルを使う現在のポリシー名とスケジュール名のリストを表示します。
影響レポート (Impact report)	変更が既存のスケジュールにどのように影響するかについての概要を表示します。リストには、保持期間が間隔より短いすべてのスケジュールが表示されます。

保持期間の変更

保持期間を変更するには、次の手順を使います。

保持期間を変更する方法

- 1 Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。
- 3 プライマリサーバーを選択します。
- 4 必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[処理 (Actions)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順にクリックします。
- 5 [保持期間 (Retention periods)]をクリックします。
- 6 変更する保持レベルを特定し、[編集 (Edit)]をクリックします。

デフォルトでは、レベル 9 から 100 (レベル 25 を除く) は[無制限 (Infinite)]に設定されます。レベルをデフォルトのままにした場合、保持レベル 12 と保持レベル 20 に違いはありません。レベル 9 は変更できず、保持期間は常に[無制限 (Infinite)]に設定されます。保持レベル 25 も変更できず、保持期間は常に、ただちに期限切れになるように設定されます。

NetBackup に選択されている保持レベルを使用するすべてのスケジュールの名前および各スケジュールが属するポリシーが表示されます。

- 7 [値 (Value)]ボックスに、新しい保持期間を入力します。
- 8 [単位 (Units)]ドロップダウンリストから、期間の単位 ([日 (Days)]、[週 (Weeks)]、[月 (Months)]、[年 (Years)]、[無制限 (Infinite)]、[ただちに期限切れにする (Expires immediately)]) を選択します。

値または期間の単位を変更すると、[変更の保留 (Changes pending)]列に、期間が変更されたことを示すアスタリスク (*) が表示されます。NetBackup は管理者が変更を受け入れるか、または適用するまで実際の構成を変更しません。

- 9 [影響レポート (Impact report)]をクリックします。

ポリシー影響リストには、ポリシーと新しい保持期間が間隔より短いスケジュールの名前が表示されます。バックアップの対象となる期間の差をなくすには、スケジュールの保持期間を再定義するか、スケジュールの保持または間隔を変更します。

ボリュームの保持期間の特定

ボリュームの保持期間を特定するには次の手順を使います。

ボリュームの保持期間を特定する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。
- 3 [ボリューム (Volumes)]タブをクリックします。リスト上のボリュームを見つけ、[保持期間 (Retention period)]列の値を調べます。

同じ保持期間を持つすべてのボリュームを参照するには、保持期間ごとにボリュームをソートするために[保持期間 (Retention period)]列ヘッダーをクリックします。

[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)] プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。[メディアサーバー (Media Server)]を選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]をクリックし、[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]をクリックします。[拡張性のあるストレージ (Scalable storage)]をクリックします。

[拡張性のあるストレージ (Scalable Storage)] プロパティには、暗号化、測定、帯域幅の調整、NetBackup ホストとクラウドストレージプロバイダの間のネットワーク接続に関する情報が含まれます。これらのプロパティは、ホストがクラウドストレージでサポートされている場合にのみ表示されます。該当リリースの『NetBackup Enterprise Server and Server - Hardware and Cloud Storage Compatibility List』については、次の URL を参照してください。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100040093>

[拡張性のあるストレージ (Scalable storage)] プロパティは、現在選択されているメディアサーバーに適用されます。

[拡張性のあるストレージ (Scalable storage)] ホストプロパティには、次の設定が含まれます。

表 2-54 [拡張性のあるストレージ (Scalable storage)] ホストプロパティ

プロパティ	説明
Key Management Server (KMS) 名 (Key Management Server (KMS) name)	キーマネージメントサービス (KMS) サーバーを設定した場合は、KMS サーバーに要求を送信するプライマリサーバーの名前がここに表示されます。
測定間隔 (Metering interval)	NetBackup がレポート用に接続情報を収集する頻度を決めます。値は秒単位で設定されます。デフォルト設定は 300 秒 (5 分) です。この値を 0 に設定すると、測定は無効になります。
合計利用可能帯域幅 (Total available bandwidth)	この値は、クラウドへの接続の速度を指定するために使用します。値は、KB/秒で指定されます。デフォルト値は 102,400 KB/秒です。
サンプリング間隔 (Sampling interval)	帯域幅使用状況の測定間隔 (秒)。この値を大きくするほど、NetBackup が使用帯域幅を調べる頻度が少なくなります。 この値が 0 (ゼロ) の場合は、スロットル調整は無効です。

プロパティ	説明
詳細設定 (Advanced settings)	[詳細設定 (Advanced settings)]を展開して、スロットル調整の追加設定を構成します。 p.167 の「帯域幅スロットルの詳細設定」を参照してください。 p.168 の「帯域幅スロットルの詳細設定」を参照してください。
最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)	メディアサーバーがクラウドストレージサーバーで実行できるデフォルトの最大並行実行ジョブ数。 この値は、クラウドストレージサーバーではなくメディアサーバーに適用されます。クラウドストレージサーバーに接続できるメディアサーバーが複数ある場合、各メディアサーバーで異なる値を持つ場合があります。したがって、クラウドストレージサーバーへの接続の合計数を判断するには、各メディアサーバーからの値を追加してください。 NetBackup が接続数よりも多いジョブ数を許可するように設定されている場合、NetBackup は接続の最大数に達した後で開始されたジョブでは失敗します。ジョブにはバックアップジョブとリストアジョブの両方が含まれています。 ジョブ数の制限は、バックアップポリシーごと、ストレージユニットごとに設定できます。 p.704 の「[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)] (ポリシー属性)」を参照してください。(ポリシー属性) p.582 の「[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] ストレージユニット設定」を参照してください。 メモ: NetBackup はジョブを開始するときに、同時並行ジョブの数、メディアサーバーごとの接続の数、メディアサーバーの数、ジョブの負荷分散ロジックなどの多くの要因を明らかにする必要があります。したがって、NetBackup は正確な最大接続数でジョブを失敗しない場合もあります。NetBackup は、接続数が最大数よりもわずかに少ない場合、正確に最大数の場合、最大数よりもわずかに多い場合にジョブを失敗することがあります。 値 100 は通常は不要です。

帯域幅スロットルの詳細設定

帯域幅スロットルの詳細設定では、NetBackup のホストとクラウドストレージプロバイダ間の接続のさまざまな面を制御できます。

p.166 の「[\[拡張性のあるストレージ \(Scalable Storage\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

帯域幅スロットルの詳細設定を行うには

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。
- 3 [メディアサーバー (Media Server)]を選択します。

- 4 必要に応じて、[接続 (Connect)] をクリックします。次に、[メディアサーバーの編集 (Edit media server)] をクリックします。
 - 5 [拡張性のあるストレージ (Scalable storage)] をクリックします。
 - 6 [詳細設定 (Advanced settings)] を展開します。
 - 7 設定を構成し、[保存 (Save)] をクリックします。
- p.168 の「[帯域幅スロットルの詳細設定](#)」を参照してください。

帯域幅スロットルの詳細設定

次の表で、帯域幅スロットルの詳細設定を説明します。

表 2-55 スロットルの詳細設定

プロパティ	説明
読み取り帯域幅 (Read bandwidth)	このフィールドを使用して、読み取り操作が使用できる総帯域幅の割合を指定します。0 から 100 までの値を指定します。不正な値を入力すると、エラーが生成されます。 数分内に指定された量のデータを伝送するために帯域幅が不足する場合、タイムアウトによりリストアエラーまたはレプリケーションエラーが発生することがあります。 必要な帯域幅を計算する際は、複数のメディアサーバーでの同時実行ジョブの合計負荷を考慮してください。 デフォルト値: 100 指定可能な値: 0 - 100
書き込み帯域幅 (Write bandwidth)	このフィールドを使用して、書き込み操作が使用できる総帯域幅の割合を指定します。0 から 100 までの値を指定します。不正な値を入力すると、エラーが生成されます。 数分内に指定された量のデータを伝送するために帯域幅が不足する場合、タイムアウトによりバックアップエラーが発生することがあります。 必要な帯域幅を計算する際は、複数のメディアサーバーでの同時実行ジョブの合計負荷を考慮してください。 デフォルト値: 100 指定可能な値: 0 - 100

プロパティ	説明
作業時間 (Work time)	クラウド接続の作業時間とみなされる時間間隔を指定します。 開始時刻と終了時刻を指定します。 クラウド接続で使用できる帯域幅を[割り当て帯域幅 (Allocated bandwidth)]フィールドに示します。この値によって、利用可能な帯域幅のうちどのくらいがこの時間帯のクラウド操作に使用されるかが決まります。値はパーセントまたは KB/秒で表示されます。
オフ時間 (Off time)	このフィールドを使用して、クラウド接続のオフ時間とみなされる時間間隔を指定します。 開始時刻と終了時刻を指定します。 クラウド接続で使用できる帯域幅を[割り当て帯域幅 (Allocated bandwidth)]フィールドに示します。この値によって、利用可能な帯域幅のうちどのくらいがこの時間帯のクラウド操作に使用されるかが決まります。値はパーセントまたは KB/秒で表示されます。
週末 (Weekend)	週末の開始時間と終了時間を指定します。 クラウド接続で使用できる帯域幅を[割り当て帯域幅 (Allocated bandwidth)]フィールドに示します。この値によって、利用可能な帯域幅のうちどのくらいがこの時間帯のクラウド操作に使用されるかが決まります。値はパーセントまたは KB/秒で表示されます。
読み取り帯域幅 (KB/秒) (Read Bandwidth (KB/s))	このフィールドには、それぞれのリストアジョブでクラウドのストレージサーバーから NetBackup のメディアサーバーに転送するのに、どのくらいの帯域幅が利用可能かが示されます。値は、KB/秒で表示されます。
書き込み帯域幅 (KB/秒) (Write Bandwidth (KB/s))	このフィールドには、それぞれのバックアップジョブで NetBackup のメディアサーバーからクラウドのストレージサーバーに転送するのに、どのくらいの帯域幅が利用可能かが示されます。値は、KB/秒で表示されます。

[サーバー (Servers)] プロパティ

この設定にアクセスするには、**NetBackup Web UI** で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。サーバーまたはクライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]、[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]、または[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[サーバー (Servers)]をクリックします。

[サーバー (Servers)]プロパティには、選択したプライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントの **NetBackup** サーバーリストが表示されます。サーバーリストには、ホストが認識している **NetBackup** サーバーが表示されます。

[プライマリサーバー (Primary server)]フィールドには、選択したホストのプライマリサーバーの名前が表示されます。(選択されているホストの名前がタイトルバーに表示されず。)

[サーバー (Servers)]ページには次の設定が含まれます。

表 2-56 [サーバー (Servers)]プロパティ

タブ	説明
[追加サーバー (Additional servers)]タブ	このタブには、[プライマリサーバー (Primary server)]として指定されたサーバーにアクセスできる追加のサーバーが表示されます。 NetBackup のインストール時に、プライマリサーバーは、サーバーソフトウェアがインストールされているシステム名に設定されます。NetBackup では、プライマリサーバーの値を使用して、サーバーからクライアントへのアクセスが検証されます。また、プライマリサーバーの値は、ファイルの一覧表示およびリストアを行えるように、クライアントが接続する必要があるサーバーを判断するためにも使用されます。 メモ: VLAN 用に複数のネットワークインターフェースを備えているファイバートランспорт (FT) メディアサーバーの場合、その FT メディアサーバーのホストとして、その他のいずれのインターフェース名よりも前に FT サーバーのプライマリホスト名が表示されていることを確認してください。 詳しくは、『NetBackup SAN クライアントおよびファイバートランспортガイド』を参照してください。
[メディアサーバー (Media servers)]タブ	このタブには、メディアサーバーであるホストだけが表示されます。メディアサーバーとして一覧表示されるホストは、クライアントのバックアップおよびリストアを行うことができますが、管理権限は制限されています。 [メディアサーバー (Media servers)]タブと[追加サーバー (Additional servers)]タブの両方にメディアサーバーを追加した場合は、この処理により予期しない結果が生じる可能性があります。コンピュータがプライマリサーバーとメディアサーバーの両方として定義されている場合、メディアサーバーの管理者に完全なプライマリサーバー権限が付与されます。メディアサーバーの管理者に意図した以上の権限が付与される可能性があります。

タブ	説明
[信頼できるプライマリサーバー (Trusted primary servers)]タブ	このタブは、NetBackup CA が署名した証明書または外部 CA が署名した証明書を使用して信頼したリモートプライマリサーバーを追加したり、信頼済みのプライマリサーバーを表示したりするために使用します。 p.1012 の「自動イメージレプリケーションの信頼できるプライマリサーバーについて」を参照してください。 p.175 の「信頼できるプライマリサーバーの追加」を参照してください。 メモ: ソースまたはリモートプライマリサーバーがクラスタ化されている場合、クラスタ内のすべてのノードでノード間通信を有効にする必要があります。この操作は、信頼できるプライマリサーバーを追加する前に行います。 p.172 の「NetBackup のクラスタ化されたプライマリサーバーのノード間認証の有効化」を参照してください。 自動イメージレプリケーションおよびストレージライフサイクルポリシーについての情報が利用可能です。 ユーザーアカウントが、ターゲットホストで多要素認証用に構成されている場合は、ワンタイムパスワードをパスワードに追加してください。 p.1000 の「NetBackup 自動イメージレプリケーションについて」を参照してください。 p.624 の「ストレージライフサイクルポリシーについて」を参照してください。

サーバーリストへのサーバーの追加

選択したタブに応じて、[追加サーバー (Additional servers)]タブまたは[メディアサーバー (Media servers)]タブのサーバーリストに、プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントを追加できます。

サーバーリストにサーバーを追加する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。
- 3 ホストを選択します。
- 4 必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]、[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]、または[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。
- 5 [サーバー (Servers)]をクリックします。
- 6 変更するサーバーリストを含むタブを選択します。
- 7 [追加 (Add)]をクリックします。

- 8 新しいサーバーの名前を入力します。
- 9 [追加 (Add)]をクリックします。

メモ: メディアサーバーを追加する場合は、`nbemmcmd -addhost` を実行して、プライマリサーバーの NetBackup データベースにある EMM (Enterprise Media Manager) にメディアサーバーを追加します。

サーバーリストからのサーバーの削除

[追加サーバー (Additional servers)]リストまたは[メディアサーバー (Media servers)]リストから、プライマリサーバーまたはメディアサーバーを削除できます。

サーバーリストからサーバーを削除する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。
- 3 ホストを選択します。
- 4 必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]、[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]、または[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。
- 5 [サーバー (Servers)]をクリックします。
- 6 [追加サーバー (Additional Servers)]タブまたは[メディアサーバー (Media servers)]タブをクリックします。
- 7 リスト内でサーバーを見つけます。
- 8 [処理 (Actions)]、[削除 (Delete)]の順に選択します。

NetBackup のクラスタ化されたプライマリサーバーのノード間認証の有効化

NetBackup にはクラスタ内のプライマリサーバーでのノード間の認証が必要です。認証では、クラスタのすべてのノード上で認証証明書をプロビジョニングする必要があります。証明書は、NetBackup ホスト間で SSL 接続を確立するために利用されます。

p.175 の「[信頼できるプライマリサーバーの追加](#)」を参照してください。

ノード間認証によって、次の NetBackup 機能が可能になります。

NetBackup Web UI

プライマリサーバークラスタの NetBackup Web UI は、正常な機能を得るために NetBackup の認証証明書を必要とします。

ターゲット型 A.I.R. (自動イメージレプリケーション) プライマリサーバーがクラスタにある自動イメージレプリケーションでは、そのクラスタ内のホストでノード間認証が必要です。

NetBackup の認証証明書は適切な信頼関係を確立する手段となります。

信頼できるプライマリサーバーを追加する前に、クラスタホスト上で証明書をプロビジョニングする必要があります。この必要条件は、クラスタ化されたプライマリサーバーがレプリケーション操作のソースかターゲットかにかかわらず、適用されます。

p.1012 の「自動イメージレプリケーションの信頼できるプライマリサーバーについて」を参照してください。

NetBackup のクラスタ化されたプライマリサーバーのノード間認証を有効にする方法

- ◆ NetBackup プライマリサーバークラスタのアクティブノードで、次の NetBackup コマンドを実行します：

- Windows の場合: `install_path\NetBackup\bin\admincmd\bpnbaz -setupat`

- UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpnbaz -setupat`

NetBackup によって、プライマリサーバークラスタの各ノードに証明書が作成されます。

次に出力例を示します。

```
# bpnbaz -setupat
You will have to restart Netbackup services on this machine after

the command completes successfully.
Do you want to continue(y/n)y
Gathering configuration information.
Please be patient as we wait for 10 sec for the security services

to start their operation.
Generating identity for host 'bit1.remote.example.com'
Setting up security on target host: bit1.remote.example.com
nbatd is successfully configured on Netbackup Primary Server.
Operation completed successfully.
```

信頼できるプライマリサーバーについて

NetBackup ドメイン間の信頼関係によって、次の操作を実行できます。

- レプリケーションのターゲットとして特定のドメインを選択します。この種類の自動イメージレプリケーションは「対象設定された A.I.R (Targeted A.I.R)」として知られます。

信頼関係がないと、**NetBackup** は、定義されたすべてのターゲットストレージサーバーにレプリケートします。メディアサーバー重複排除プールと **PureDisk** 重複排除プールをターゲットストレージにする場合、信頼関係の確立は省略できます。**CloudCatalyst** ストレージサーバーを使用するには、信頼関係が必要です。

- 複数のプライマリサーバーの使用状況レポートを含めます。

プライマリサーバーは、**NetBackup** 認証局 (CA) 証明書または外部 CA 証明書を使用できます。**NetBackup** は、ソースドメインとターゲットドメインで使用する CA を判断し、サーバー間の通信に使用する適切な CA を選択します。両方の CA の種類に対してターゲットプライマリサーバーが設定されている場合は、**NetBackup** によって使用する CA の選択を求められます。

信頼できるプライマリサーバーを追加するときに使用する証明書について

ソースプライマリサーバーまたはターゲットプライマリサーバーは、**NetBackup** CA が署名した証明書 (ホスト ID ベースの証明書) または外部 CA が署名した証明書を使用する場合があります。

NetBackup のホスト ID ベースの証明書と外部 CA のサポートについて詳しくは、[『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』](#)を参照してください。

ソースプライマリサーバーとターゲットプライマリサーバー間で信頼を確立するため、**NetBackup** は次を確認します。

外部 CA が署名した 外部 CA の構成オプション (ECA_CERT_PATH、証明書を使用して ECA_PRIVATE_KEY_PATH、ECA_TRUST_STORE_PATH) が、ソースプライマリサーバーの **NetBackup** 構成ファイルで定義されている場合は、外部サーバーが信頼を確立できると確認します。

Windows 証明書のトラストストアの場合、ECA_CERT_PATH オプションのみが定義されます。

ターゲットプライマリサーバーは、外部 CA、**NetBackup** CA、またはその両方をサポートする可能性があります。使用する認証局 (CA) はどちらか。

次の表は、CA のサポートに関するシナリオ、およびソースプライマリサーバーとターゲットプライマリサーバー間で信頼を確立するために使用する証明書を示しています。この手順では、構成に **NetBackup** Web UI を使用することを前提としています。

表 2-57 信頼の設定に使用する証明書

プライマリサーバーが外部証明書を使用できるかどうか。	ターゲットプライマリサーバーが使用する CA はどれか。	信頼の設定に使用する証明書
はい	外部 CA	外部 CA
ソースプライマリサーバーは、リモートプライマリサーバーとの通信に、NetBackup CA と外部 CA を使用できます。	NetBackup CA	NetBackup CA
	外部 CA と NetBackup CA	NetBackup が、信頼の設定に使用する CA の選択を求めるメッセージを表示します。
いいえ	外部 CA	信頼は確立されません。
	NetBackup CA	NetBackup CA
	外部 CA と NetBackup CA	NetBackup CA

信頼できるプライマリサーバーの追加

レプリケーション操作では、異なるドメインの NetBackup サーバー間で信頼関係が確立されている必要があります。両方が NetBackup CA または外部 CA を使用するプライマリサーバー間の信頼関係を作成できます。

始める前に、次の情報を確認してください。

- RBAC システム管理者の役割または同様の権限の役割を持っていることを確認します。または、ソフトウェアバージョン 3.1 以降のアプライアンスの場合は、NetBackup CLI ユーザーに対する権限が必要です。
- リモートの Windows プライマリサーバーの場合は、ユーザーのドメインが認証サービスのドメインと同じではない場合があります。この場合、vssat addldapdomain コマンドを使用して LDAP でドメインを追加する必要があります。
- NetBackup CA が署名した証明書の場合、サーバーを認証するために推奨される方法は、[信頼できるプライマリサーバーの認証トークンを指定 (Specify authentication token of the trusted primary server)]オプションです。
- [信頼できるプライマリサーバーのクレデンシャルを指定 (Specify credentials of the trusted primary server)]オプションを使用すると、その方法によってセキュリティ違反が発生する可能性があります。制限付きアクセスを提供し、両方のホスト間で安全な通信を許可できるのは、認証トークンのみです。NetBackup プライマリアプライアンス 3.1 との信頼を確立するには、NetBackup CLI クレデンシャルを使用します。

信頼できるプライマリサーバーを追加するには

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 ソースサーバーとターゲットサーバーのそれぞれで、インストールされている NetBackup バージョンと使用されている証明書の種類を識別します。
両方のサーバーで同じ証明書の種類を使用する必要があります。
- 3 NetBackup CA (認証局) を使用するサーバーの場合は、リモートサーバーの認証トークンを取得します。
- 4 NetBackup CA (認証局) を使用するサーバーの場合は、各サーバーの指紋を取得します。
- 5 右上で、[設定 (Settings)]、[グローバルセキュリティ (Global security)] の順に選択します。
- 6 [信頼できるプライマリサーバー (Trusted primary servers)] タブを選択します。
- 7 [追加 (Add)] ボタンを選択します。
- 8 リモートプライマリサーバーの完全修飾ホスト名を入力し、[認証局の検証 (Validate Certificate Authority)] を選択します。
- 9 ウィザードに表示されるプロンプトに従います。
- 10 リモートプライマリサーバーでこの手順を繰り返します。

詳細情報

NetBackup での外部 CA の使用について詳しくは、『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。

信頼できるプライマリサーバーの削除

信頼できるプライマリサーバーを削除できます。これにより、プライマリサーバー間の信頼関係が削除されます。次の点に注意してください。

- 信頼関係を必要とするレプリケーション操作はすべて失敗します。
- 信頼関係を削除した後、リモートプライマリサーバーはどの使用状況レポートにも含まれなくなります。

信頼できるプライマリサーバーを削除するには、ソースサーバーとターゲットサーバーの両方で次の手順を実行する必要があります。

信頼できるプライマリサーバーを削除するには

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 ターゲットプライマリサーバーへのすべてのレプリケーションジョブが完了していることを確認します。

- 3 宛先として信頼できるプライマリを使用するすべてのストレージライフサイクルポリシー (SLP) を削除します。SLP を削除する前に、ストレージに SLP を使うバックアップポリシーまたは保護計画がないことを確認します。
- 4 右上で、[設定 (Settings)]、[グローバルセキュリティ (Global security)]の順に選択します。
- 5 [信頼できるプライマリサーバー (Trusted primary servers)]タブを選択します。
- 6 削除するサーバーを特定します。
- 7 [操作 (Actions)]、[削除 (Remove)]の順に選択します。
- 8 [信頼を削除 (Remove trust)]を選択します。

メモ: 複数の NIC を使用する場合に、複数のホスト NIC を使用して信頼を確立し、いずれかのホスト NIC との信頼関係を削除すると、それ以外のすべてのホスト NIC との信頼関係が失われます。

クライアントのバックアップと復元を実行するプライマリサーバーの変更

クライアントのバックアップと復元を実行するプライマリサーバーを変更するには、[プライマリにする (Make primary)]オプションを使用します。このオプションは、ホストをプライマリサーバーに変更しません。

メモ: また、クライアントのプライマリサーバーは、[バックアップ、アーカイブ、およびリストア (Backup, Archive, and Restore)]インターフェースで、[処理 (Actions)]、[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)]の順に選択して変更できます。このダイアログで、バックアップとリストアに使用するプライマリサーバーを選択します。

このオプションは、ディザスタリカバリの状況、または自動イメージレプリケーションを設定する NetBackup 環境で役立ちます。たとえば、ソースドメインのクライアントを選択してから、[プライマリにする (Make primary)]オプションを使用すると、クライアントを一時的に対象のドメインのプライマリサーバーにポイントできます。プライマリサーバーを変更した後、対象のドメインからの復元を開始できます。

クライアントがバックアップと復元のために使うプライマリサーバーを変更する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。
- 3 クライアントを選択します。
- 4 必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。

- 5 [サーバー (Servers)]をクリックします。
- 6 [追加サーバー (Additional servers)]タブで、サーバーを見つけます。
- 7 [処理 (Actions)]、[プライマリにする (Make primary)]の順に選択します。
- 設定ファイルでは、この新しいプライマリサーバーがリストの最初のサーバーエントリとして表示されます。
- プライマリサーバーを変更しても、前のプライマリサーバーがクライアントのバックアップを開始することを妨げません。そのサーバーがクライアントのサーバーリストに存在するかぎり、プライマリサーバーはバックアップを実行できます。

[SharePoint]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。Windows クライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[SharePoint]をクリックします。

[SharePoint]プロパティは、SharePoint Server インストールを保護し、現在選択されている Windows クライアントに適用します。

これらのオプションについて詳しくは、[『NetBackup for Microsoft SharePoint Server 管理者ガイド』](#)を参照してください。

[SharePoint]ホストプロパティには、次の設定が含まれます。

表 2-58 [SharePoint]ホストプロパティ

プロパティ	説明
Domain¥Username	SharePoint へのログオンに使用するアカウントのドメインとユーザー名を指定します (DOMAIN¥user name)。
パスワード (Password)	アカウントのパスワードを指定します。
バックアップ前の一貫性チェック (Consistency check before backup)	NetBackup のバックアップ操作が開始される前に SQL Server のデータベースで実行する一貫性チェックを指定します。このチェックは、サーバー主導バックアップとユーザー主導バックアップの両方で実行されます。 一貫性チェックの実行を選択した場合、[一貫性チェックに失敗した場合もバックアップを続行する (Continue with backup if consistency check fails)]を選択できます。その場合、NetBackup は一貫性チェックに失敗した場合にバックアップを続行します。

プロパティ	説明
SharePoint 個別リストア用プロキシホスト (SharePoint granular restore proxy host)	結合 SharePoint 構成を保護する VMware バックアップのために、バックエンド SQL サーバーの名前を指定します。このサーバーは、カタログホスト (ファームのフロントエンドサーバー) の個別リストア用プロキシホストとして機能します。

SharePoint Server の一貫性チェックのオプション

SharePoint Server のバックアップ前に、次の一貫性チェックを実行できます。

表 2-59 一貫性チェックのオプション

オプション	説明
なし (None)	一貫性チェックを実行しません。
インデックスを含まない完全チェック (Full check, excluding indexes)	一貫性チェックにインデックスを含まない場合に選択します。インデックスをチェックしない場合、一貫性チェックの実行速度は大幅に向上しますが、完全にはチェックされません。一貫性チェックでは、各ユーザー表のデータページおよびクラスタ化インデックスページだけが対象となります。クラスタ化されていないインデックスページの一貫性はチェックされません。
インデックスを含む完全チェック (Full check, including indexes)	一貫性チェックにインデックスを含めます。エラーはログに記録されます。

[SLP 設定 (SLP settings)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[SLP 設定 (SLP settings)]をクリックします。また、[ストレージ (Storage)]、[ストレージライフサイクルポリシー (SLP) (Storage lifecycle policies)]、[SLP 設定 (SLP settings)]から SLP 設定を構成することもできます。

[SLP 設定 (SLP settings)]プロパティにより、管理者は、どのように SLP (ストレージライフサイクルポリシー) の保守し、SLP ジョブを実行するかをカスタマイズできます。これらのプロパティは、現在選択されているプライマリサーバーの SLP に適用されます。

表 2-60 では、SLP で利用可能なプロパティについて説明します。また、コマンドラインによる方法を使う場合の構文もリストします。

サイズまたは時間の測定単位を変更するには、[単位 (Units)]列のリストを使用します。

表 2-60 SLP 設定

プロパティ	説明
複製ジョブあたりの最小サイズ (Minimum size per duplication job)	単一の複製ジョブとして実行できるバッチの最小サイズ。バッチの最小サイズを満たす十分なイメージが集まるか、[小さいジョブの強制実行間隔 (Force interval for small job)]で指定された時間に達するまでこのジョブは実行されません。最小サイズ: 1 KB、最大サイズなし。デフォルト: 8 GB。 構成オプションのデフォルト: SLP.MIN_SIZE_PER_DUPLICATION_JOB = 8 GB
複製ジョブあたりの最大サイズ (Maximum size per duplication job)	単一の複製ジョブとして実行できるバッチの最大サイズ。最小サイズ: 1 KB、最大サイズなし。デフォルト: 100 GB。 構成エントリのデフォルト: SLP.MAX_SIZE_PER_DUPLICATION_JOB = 100 GB
A.I.R. レプリケーションジョブあたりの最大サイズ (Maximum size per A.I.R. replication job)	自動イメージレプリケーションの単一のジョブとして実行できるバッチの最大サイズ。最小サイズ: 1 KB、最大サイズなし。デフォルト: 100 GB。 構成エントリのデフォルト: SLP.MAX_SIZE_PER_BACKUP_REPLICATION_JOB = 100 GB
スナップショットのレプリケーションジョブあたりの最大イメージ (Maximum images per snapshot replication job)	単一のジョブとして動作できる単一バッチ内のイメージの最大数。デフォルト: 50 イメージ (最小値と最大値なし)。 このパラメータは、ディスクプールの各ボリュームで同時に実行できるジョブの数を制限する[I/O ストリーム数を制限 (Limit I/O streams)]ディスクプールオプションとともに使用します。 構成エントリのデフォルト: SLP.MAX_IMAGES_PER_SNAPSHOT_REPLICATION_JOB = 50
A.I.R. インポートジョブあたりの最小イメージ (Minimum images per A.I.R. Import job)	自動イメージレプリケーションのインポートジョブとして動作できる単一バッチ内のイメージの最小数。ジョブは、最小サイズに達するか、[小さいジョブの強制実行間隔 (Force interval for small job)]に示す時間に達するまで実行されません。最小: 1 イメージ、イメージの最大数なし。デフォルト: 1 つのイメージ。 構成エントリのデフォルト: SLP.MIN_IMAGES_PER_IMPORT_JOB = 1
A.I.R. インポートジョブあたりの最大イメージ (Maximum images per A.I.R. Import job)	自動イメージレプリケーションのインポートジョブとして動作できる単一バッチ内のイメージの最大数。最小: 1 つのジョブ、イメージの最大数なし。デフォルト: 250 のイメージ。 構成エントリのデフォルト: SLP.MAX_IMAGES_PER_IMPORT_JOB = 250

プロパティ	説明
小さいジョブの強制実行間隔 (Force interval for small job)	パッチが複製ジョブとして送信されるまでに、パッチの最も古いイメージが達している必要のある経過時間。この値により、多くの小さい複製ジョブが同時に実行されたり、高頻度で実行されたりするのを防ぎます。また、NetBackup で小さいジョブを送信するまでに時間がかかりすぎないようにします。デフォルト: 30 分 (最小値と最大値なし)。 構成エントリのデフォルト: SLP.MAX_TIME_TIL_FORCE_SMALL_DUPLICATION_JOB = 30 MINUTES
ジョブの発行間隔 (Job submission interval)	すべての操作のジョブ発行頻度を示します。最小間隔または最大間隔はありません。デフォルト: 5 分。 デフォルトでは、さらにジョブが送信される前にすべてのジョブが処理されます。NetBackup ですべてのジョブが処理される前にさらにジョブを送信するには、この間隔を大きくします。パッチにまとめてジョブとして提出できる利用可能なイメージのリストをスキャンする間隔を設定します。間隔を短くすると応答がすばやくなりますが、処理が増加するのでシステムへの作業負荷が高くなります。 構成エントリのデフォルト: SLP.JOB_SUBMISSION_INTERVAL = 5 MINUTES
イメージ処理の間隔 (Image processing interval)	イメージ処理セッションどうしの間の分数。新しく作成されたイメージが認識され、SLP 処理のためにセットアップされる間隔を設定します。デフォルト: 5 分。 構成エントリのデフォルト: SLP.IMAGE_PROCESSING_INTERVAL = 5 MINUTES
クリーンアップの間隔 (Cleanup interval)	ジョブが終了してから、NetBackup が完了したジョブのジョブアーティファクトを削除するまでの時間。最小間隔または最大間隔はありません。デフォルト: 24 時間。 構成エントリのデフォルト: SLP.CLEANUP_SESSION_INTERVAL = 24 HOURS
拡張されたイメージの再試行間隔 (Extended image retry interval)	失敗した操作を遅延後に最初に実行するジョブに追加するまで待機する時間。(この動作はすべての SLP ジョブに適用されます)。予備の時間を設定すると、ジョブの完了を妨げている問題を管理者が解決するための時間を増やすことができます。最小間隔または最大間隔はありません。デフォルト: 2 時間。 構成エントリのデフォルト: SLP.IMAGE_EXTENDED_RETRY_PERIOD = 2 HOURS
未使用の SLP 定義バージョンのクリーンアップ遅延 (Unused SLP definition version cleanup delay)	より新しいバージョンが存在する場合のストレージライフサイクルポリシーバージョンの削除に関連します。この設定によって、NetBackup がバージョンを削除するまでに、そのバージョンを非アクティブにしておく期間を制御します。デフォルト: 14 日。 構成エントリのデフォルト: SLP.VERSION_CLEANUP_DELAY = 14 DAYS p.668 の「古いストレージライフサイクルポリシーバージョンの削除」を参照してください。

プロパティ	説明
テープリソースのマルチプライア (Tape resource multiplier)	単一のテープメディアストレージユニットにアクセスできる有効な並行複製ジョブの数を、利用可能なドライブの数に xx を掛けた数に制限します。Resource Broker の負荷を避けるために調整できます。ただし、デバイスがアイドル状態にならないようにします。最小乗数または最大乗数はありません。デフォルト: 2 (書き込みドライブへのアクセスに 2 を掛ける)。 構成エントリのデフォルト: SLP.TAPE_RESOURCE_MULTIPLIER = 2
ディスクリソースのマルチプライア (Disk resource multiplier)	単一のディスクストレージユニットにアクセスできる有効な並行複製ジョブの数を、利用可能なドライブの数に xx を掛けた数に制限します。Resource Broker の負荷を避けるために調整できます。ただし、デバイスがアイドル状態にならないようにします。最小乗数または最大乗数はありません。デフォルト: 2 (書き込みドライブへのアクセスに 2 を掛ける)。 構成エントリのデフォルト: SLP.DISK_RESOURCE_MULTIPLIER = 2
SLP にわたるグループイメージ (Group images across SLPs)	このパラメータを[はい (Yes)] (デフォルト) に設定すると、同じ優先度の複数の SLP を同じジョブで処理できます。[いいえ (No)] の場合、単一の SLP 内のみでバッチ処理が行われます。 構成エントリのデフォルト: SLP.DUPLICATION_GROUP_CRITERIA = 1 構成エントリを[いいえ (No)]にすると、バッチ処理が許可されません: SLP.DUPLICATION_GROUP_CRITERIA = 0
時間帯終了バッファタイム (Window close buffer time)	ある時間帯を、NetBackup でその時間帯を使う新しいジョブが送信されないときに終了するまでの時間を設定します。最小 2 分、最大 60 分。デフォルト: 15 分。 構成エントリのデフォルト: SLP.WINDOW_CLOSE_BUFFER_TIME = 15 MINUTES
遅延複製オフセットの時間 (Deferred duplication offset time)	延期された操作で、ソースコピーが期限切れになる前にジョブが x 時間提出されます。デフォルト: 4 時間。 構成エントリのデフォルト: SLP.DEFERRED_DUPLICATION_OFFSET_TIME = 4 HOURS
A.I.R. インポート SLP を自動作成 (Auto create A.I.R. Import SLP)	自動イメージレプリケーションで使用する、SLP がターゲットドメインで設定されていない場合にそこでインポート操作を含む SLP を自動的に作成するかどうかを指示します。デフォルト: [はい (Yes)] (SLP がターゲットドメインで作成される)。 構成エントリのデフォルト: SLP.AUTO_CREATE_IMPORT_SLP = 1
失敗した A.I.R. インポートジョブを再試行する期間の長さ (How long to retry failed A.I.R. import jobs)	NetBackup がレコードを停止して削除するまでにインポートジョブを再試行する期間。最初の 4 回の試行の後、再試行の頻度は低くなります。デフォルト: 0 (最初の 4 回の試行の後、再試行しない)。 構成エントリのデフォルト: SLP.REPLICA_METADATA_CLEANUP_TIMER = 0 HOURS

プロパティ	説明
保留中の A.I.R. のインポートしきい値 (Pending A.I.R import threshold)	自動イメージレプリケーションコピーのインポートがまだ保留中の状態にあるという通知を生成するまでに NetBackup が待機する時間の長さ。自動イメージレプリケーションコピーがレプリケートされた後、NetBackup ではソースコピーのインポートが保留中の状態になります。このしきい値で設定した期間にコピーのインポートが保留中の状態の場合、NetBackup は通知を生成します。通知は NetBackup エラーログに出力されるとともに[問題 (Problems)]レポートに表示されます。電子メールアドレスに通知を出力するように指定することもできます。デフォルト: 24 時間。 構成エントリのデフォルト: SLP.PENDING_IMPORT_THRESHOLD = 24 HOURS p.1020 の「自動イメージレプリケーションのインポートの確認について」を参照してください。
通知を受信する電子メールアドレス (Email address to receive notifications)	保留中の A.I.R のインポートに関する通知を受信する電子メールアドレス。デフォルト: なし 構成エントリの形式: SLP.NOTIFICATIONS_ADDRESS = <i>user@company.com</i>

コマンドラインを使用した SLP パラメータの変更

コマンドラインを使ってパラメータを変更することもできます。

コマンドラインによる方法でデフォルトを変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。これらのコマンドについて詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

SLP パラメータのコマンドラインの測定単位

測定単位の省略形は大文字と小文字を区別しません。

次の省略形はサイズが示される場所で使用されます。

bytes	kb	kilobyte	kilobyte(s)	kilobytes	mb	megabyte
megabyte(s)	megabytes	gb	gigabyte	gigabyte(s)	gigabytes	tb
terabyte	terabyte(s)	terabytes	pb	petabyte	petabyte(s)	petabytes

次の省略形は時間の単位が示される場所で使用されます。

sec	second	second(s)	seconds	min	minute	minute(s)	minutes
hour	hour(s)	hours	day	day(s)	days	mon	month
month(s)	months	week	week(s)	weeks	year	year(s)	years

nbcl.conf ファイル

ストレージライフサイクルポリシーパラメータがデフォルトから変更されるたび、その変更から nbcl.conf 構成ファイルが作成されます。

このファイルは、以下の場所で確認できます。このファイルが存在するのは、何らかのパラメータがデフォルトから変更された場合のみです。

- Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥var¥global¥nbcl.conf
```

- UNIX の場合:

```
/usr/opensv/var/global/nbcl.conf
```

Storage Lifecycle Manager を使ったバッチ作成ロジックについて

Storage Lifecycle Manager サービス (nbstserv) はストレージライフサイクルポリシーの複製ジョブ作成を担当します。複製ジョブ作成の一部にはバックアップ (またはソース) ジョブのバッチへのグループ化が含まれます。

メモ: SLP のあらゆる操作のための基本のストレージへ変更を加えた後で nbstserv を再起動してください。

バッチロジックの目的の 1 つは、仮想テープライブラリ (VTL) などの、テープ操作のメディア競合を防ぐことです。

バッチロジックはディスクとテープの両方に適用されます。(ただし、ディスクのメディア競合を回避する方法はディスクプールを使ってディスクプールへの I/O ストリームを制限することです。)

バッチロジックは、各評価サイクルで、nbstserv が次に実行する複製ジョブを判断するときにすべての完了済みのソースジョブを考慮することを必要とします。デフォルトでは、nbstserv は 5 分ごとに 1 回評価を実行します。

nbstserv は、ジョブで **Resource Broker** (nbrb) キューに過大な負荷がかかるのを回避します。キューに入っているジョブが多すぎると **Resource Broker** の処理が困難になり、システムパフォーマンスが低速になります。

デフォルトでは、nbstserv はここで SLP パラメータホストプロパティの SLP にわたるグループイメージパラメータに基づいてグループを作成します。デフォルトでは、同じ優先度の複数のストレージライフサイクルポリシーを一緒にバッチ処理できます。

p.179 の「[SLP 設定 (SLP settings)]プロパティ」を参照してください。

このバッチロジックの変更によって、複製ジョブがアクティビティモニターでどのように表示されるかが影響を受けます。1 つのジョブに組み合わせたストレージライフサイクルポリシーは単一のポリシー名 SLP_MultipleLifecycles で表示されます。ストレージライフ

サイクルポリシーが別のものと組み合わせられていなければ、名前は、SLP_nameとしてアクティビティモニターに表示されます。

実行中でも、読み書きするリソースがないためにデータを複製しない複製ジョブが存在する場合があります。これらのジョブは、ジョブを完了するリソースを受信するまで動作し続けます。

複製ジョブの優先度によってグループ化をオフにするには、SLP パラメータホストプロパティのSLP にわたるグループイメージパラメータにいいえを設定します。

[スロットル帯域幅 (Throttle bandwidth)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[スロットル帯域幅 (Throttle bandwidth)]をクリックします。

NetBackup クライアントがネットワーク上で使用するネットワーク帯域幅や転送速度を制限するには、[スロットル帯域幅 (Throttle bandwidth)]プロパティを使用します。実際の制限は、バックアップ接続のクライアント側で発生します。これらのプロパティはバックアップのみを制限します。リストアには影響しません。デフォルトでは、帯域幅は制限されません。

[スロットル帯域幅 (Throttle bandwidth)]プロパティは、[帯域幅 (Bandwidth)]ホストプロパティに類似していますが、IPv6 環境ではより高い柔軟性を提供します。

スロットル帯域幅設定を追加、編集、または削除する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順にクリックします。
- 3 プライマリサーバーを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]をクリックします。
- 4 [スロットル帯域幅 (Throttle bandwidth)]をクリックします。

設定の追加 ネットワークまたはホスト設定を追加する方法

- 1 [追加 (Add)]をクリックします。
- 2 スロットルが適用されるネットワークまたはホストの名前を入力します。
- 3 指定したネットワークまたはホストの帯域幅を選択します。値 0 は、IPv6 アドレスのスロットル調整を無効にします。

この値は、KB/秒で表す転送速度です。値 0 は、IPv6 アドレスのスロットル調整を無効にします。
- 4 [追加 (Add)]をクリックします。

設定の編集 ネットワークまたはホスト設定を編集する方法

- 1 ネットワークまたはホストの名前を見つけます。
- 2 [処理 (Actions)]、[編集 (Edit)]の順にクリックします。
- 3 必要な変更を加えます。
- 4 [保存 (Save)]をクリックします。

設定の削除 ネットワークまたはホスト設定を削除する方法

- 1 ネットワークまたはホストの名前を見つけます。
- 2 [処理 (Actions)]、[削除 (Delete)]の順に選択します。

5 [保存 (Save)]をクリックします。

p.57 の「[帯域幅 \(Bandwidth\)プロパティ](#)」を参照してください。

[タイムアウト (Timeouts)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。サーバーまたはクライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]、[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]、または[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[タイムアウト (Timeouts)]をクリックします。

[タイムアウト (Timeouts)]プロパティは、選択されているプライマリサーバー、メディアサーバーまたはクライアントに適用されます。

表 2-61 [タイムアウト (Timeouts)]ホストプロパティ

プロパティ	説明
クライアント接続のタイムアウト (Client connect timeout)	このプロパティは、現在選択されているサーバーに適用されます。 サーバーが、クライアントへの接続でタイムアウトするまでに待機する時間 (秒数) を指定します。デフォルトは 300 秒です。

プロパティ	説明
バックアップ開始の通知タイムアウト (Backup start notify timeout)	このプロパティは、現在選択されているサーバーに適用されます。 クライアント上で <code>bpstart_notify</code> スクリプトが完了するまでにサーバーが待機する時間 (秒数) を指定します。デフォルトは 300 秒です。 メモ: <code>bpstart_notify</code> スクリプトを使用する場合、クライアントの読み込みタイムアウト (<code>CLIENT_READ_TIMEOUT</code> オプション) は [バックアップ開始の通知タイムアウト (Backup start notify timeout)] (<code>BPSTART_TIMEOUT</code> オプション) 以上である必要があります。[クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)] が [バックアップ開始の通知タイムアウト (Backup start notify timeout)] より小さい場合、ジョブは <code>bpstart_notify</code> スクリプトの実行中にタイムアウトできます。
メディアサーバー接続のタイムアウト (Media server connect timeout)	このプロパティは、現在選択されているサーバーに適用されます。 プライマリサーバーが、リモートメディアサーバーへの接続でタイムアウトするまでに待機する時間 (秒数) を指定します。デフォルトは 30 秒です。
クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)	このプロパティは、現在選択されているサーバーまたはクライアントに適用されます。 操作が失敗するまでに NetBackup がクライアントからの応答を待機する時間 (秒数) を指定します。このタイムアウトは NetBackup プライマリサーバー、リモートメディアサーバー、またはデータベース拡張クライアント (NetBackup for Oracle など) に適用できます。デフォルトは 300 秒です。 [クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)] の時間内にサーバーがクライアントからの応答を取得しない場合、バックアップ操作やリストア操作が失敗する場合があります。 p.188 の「[クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)] の推奨事項」を参照してください。 次に、データベース拡張クライアント上での処理の順序を示します。 ■ データベース拡張クライアント上の NetBackup によって、そのクライアントのクライアントの読み込みタイムアウトが読み込まれ、初期値が検出されます。このオプションが設定されていない場合、標準のデフォルトである 5 分が設定されます。 ■ データベース拡張 API にサーバーの値が渡され、その値がクライアントの読み込みタイムアウトとして使用されます。
バックアップ終了の通知タイムアウト (Backup end notify timeout)	このプロパティは、現在選択されているサーバーに適用されます。 クライアント上で <code>bpend_notify</code> スクリプトが完了するまでにサーバーが待機する時間 (秒数) を指定します。デフォルトは 300 秒です。 メモ: このタイムアウトを変更する場合、[クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)] がこの値以上に設定されていることを確認してください。

プロパティ	説明
OS 依存のタイムアウトを使用する (Use OS dependent timeouts)	このプロパティは、現在選択されているサーバーまたはクライアントに適用されます。 次のように、クライアントが、ファイルの一覧表示時にオペレーティングシステムで定義された時間待機するように指定します。 ■ Windows クライアントの場合: 300 秒 ■ UNIX クライアントの場合: 1800 秒 ファイル参照のタイムアウト (File browse timeout) ファイルの一覧表示時に NetBackup プライマリサーバーからの応答をクライアントが待機する時間を指定します。この制限を超えると、ユーザーは[ソケットの読み込みに失敗しました (socket read failed)]というエラーを受信します。サーバーが要求を処理している間でも、タイムアウトを超過することがあります。 メモ: UNIX クライアントの \$HOME/bp.conf ファイルに値が存在する場合、その値が優先されます。
メディアのマウントタイムアウト (Media mount timeout)	このプロパティは、現在選択されているプライマリサーバーに適用されます。 要求されたメディアのマウントおよび配置が行われ、バックアップ、リストアおよび複製の準備ができるまでに NetBackup が待機する時間を指定します。 このタイムアウトを使用して、メディアを手動でマウントしている間の過剰な待機を回避します。(たとえば、ロボットメディアがそのロボットの外またはオフサイトに存在する場合など。)

[クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)]の推奨事項

次の状況でタイムアウト値を増やすことをお勧めします。

- データベース拡張クライアントにクライアントの読み込みタイムアウトを追加するのは特別なケースです。これらのクライアントは、他のクライアントより最初の準備に時間がかかります。時間が多くかかるのは、データベースバックアップユーティリティによって頻繁に複数のバックアップジョブが同時に開始されることにより、CPU の速度が低下するためです。多くのインストールでは、15 分が適切です。
- MSDP クラウドストレージサーバーへの直接バックアップ。プライマリサーバーとメディアサーバーの両方の値が増加しない場合、ジョブの詳細に次のメッセージで失敗したジョブが表示されます。

```
Error bpbrm (pid=119850) socket read failed: errno = 62 - Timer expired
```

ストレージライフサイクルポリシーを使用して最初に MSDP ストレージサーバーにバックアップし、最適化複製操作で MSDP クラウドストレージサーバーにデータを複製する場合は、タイムアウトを大きくする必要はありません(これは推奨される操作方法です)。

メモ: bpstart_notifyスクリプトを使用する場合、クライアントの読み込みタイムアウト (CLIENT_READ_TIMEOUT オプション) は[バックアップ開始の通知タイムアウト (Backup start notify timeout)] (BPSTART_TIMEOUT オプション) 以上である必要があります。[クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)]が[バックアップ開始の通知タイムアウト (Backup start notify timeout)]より小さいと、ジョブはbpstart_notifyスクリプトが動作している間タイムアウトする場合があります。

[ユニバーサル設定 (Universal settings)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。サーバーまたはクライアントを選択します。必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックし、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]、[メディアサーバーの編集 (Edit media server)]、または[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。[ユニバーサル設定 (Universal settings)]をクリックします。

バックアップおよびリストアの特定の設定を構成するには、[ユニバーサル設定 (Universal settings)]プロパティを使用します。これらのプロパティは、選択されているプライマリサーバー、メディアサーバーまたはクライアントに適用されます。

[ユニバーサル設定 (Universal settings)]ホストプロパティには、次の設定が含まれます。

表 2-62 [ユニバーサル設定 (Universal settings)]プロパティ

プロパティ	説明
リストアの再試行回数 (Restore retries)	この設定は、選択したサーバーやサーバーに適用されます。 クライアントがエラーの後でリストアを試行する回数を指定します。(デフォルトは 0 です。クライアントはリストアを再試行しません。クライアントは 3 回まで試行できます)。[リストアの再試行回数 (Restore retries)]は、問題が発生した場合だけ変更してください。 再試行の最大数を超えてもジョブが失敗する場合、ジョブは未完了の状態になります。ジョブは、[リストアジョブを未完了状態から完了状態に変更する (Move restore job from incomplete state to done state)]プロパティで定義されたように、未完了の状態として保持されます。 p.64 の「[クリーンアップ (Clean up)]プロパティ」を参照してください。 チェックポイントが設定されたジョブは、ジョブの最初からではなく、最後にチェックポイントが設定されたファイルの先頭から再試行されます。 リストアジョブの[チェックポイントから再開 (Checkpoint Restart)]機能を使用すると、NetBackup 管理者は、失敗したリストアジョブをアクティビティモニターから再開できます。 p.700 の「[チェックポイントの間隔 (分) (Take checkpoints every __ minutes)](ポリシー属性)」を参照してください。

プロパティ	説明
リストアの参照期間を設定する (Browse timeframe for restores)	この設定は、選択したサーバーと、すべての NetBackup サーバーに適用されます。 リストアするファイルの検索に NetBackup が使用する期間を指定します。デフォルトでは、NetBackup は、最後の完全バックアップからクライアントの直近のバックアップまでのファイルを含めます。 ■ 期間 (Timeframe)。NetBackup によってリストアが行われるファイルがどれくらいさかのぼって検索されるかを指定します。たとえば、参照範囲を現在の日付から 1 週間前までに制限するには、[期間 (Timeframe)]を選択して[7]を指定します。 ■ 最後の完全バックアップ (Last full backup)。NetBackup の参照範囲に、前回正常に実行された完全バックアップ以降のすべてのバックアップを含めるかどうかを指定します。デフォルトではこのオプションは有効です。クライアントが複数のポリシーに属している場合、最後に実行された一連の完全バックアップのうち、最も古いものから参照が開始されます。
指定したネットワークインターフェースを使用 (Use specified network interface)	この設定は、選択したサーバーやサーバーに適用されます。 他の NetBackup クライアントまたはサーバーに接続する場合に NetBackup で使用するネットワークインターフェースを指定します。NetBackup クライアントおよびサーバーでは、複数のネットワークインターフェースを使用できます。NetBackup を強制的に特定のネットワークインターフェースに接続させるには、このエントリを使用してインターフェースのネットワークホスト名を指定します。デフォルトでは、使用するインターフェースはオペレーティングシステムによって決定されます。
サーバーによるファイルの書き込みを許可する (Allow server file writes)	この設定は、選択したサーバーやサーバーに適用されます。 NetBackup サーバーが NetBackup クライアント上にファイルを作成したり、クライアント上のファイルを変更したりできるか指定します。たとえば、このプロパティを無効にすると、サーバー主導リストアや、リモートでのクライアントプロパティの変更が回避されます。 [サーバーによるファイルの書き込みを許可する (Allow server file writes)]プロパティを適用後に解除するには、クライアントの構成を変更する必要があります。デフォルトでは、サーバーによる書き込みが許可されています。

プロパティ	説明
管理者 (Administrator)	この設定は、選択したサーバーやサーバーに適用されます。 サーバーまたはクライアントが電子メールを送信するかどうかを指定します。 ■ サーバーが電子メールを送信する (Server sends mail) このオプションを使用すると、サーバーは、[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティに指定したアドレスに電子メールを送信します。このプロパティは、クライアントが電子メールを送信できないときに電子メール通知を行う場合に有効にします。デフォルトでは、このプロパティは無効です。 p.115 の「[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ」を参照してください。 ■ クライアントが電子メールを送信する (Client sends mail) このオプションを使用すると、クライアントは、[ユニバーサル設定 (Universal settings)]プロパティに指定したアドレスに電子メールを送信します。クライアントがメールを送信できない場合は、[サーバーが電子メールを送信する (Server sends mail)]を使用します。デフォルトでは、このプロパティは有効です。
クライアント管理者の電子メールアドレス (Client administrator's email)	クライアントの管理者の電子メールアドレスを指定します。このアドレスには、クライアントのバックアップ状態のレポートが NetBackup から送信されます。デフォルトでは、電子メールは送信されません。複数のアドレスまたは電子メールのエイリアスを入力する場合、エントリをカンマで区切ります。

[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]をクリックします。

[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]プロパティを使用して、ユーザーセッション、ユーザーアカウントロックアウト、サインインバナーの設定をカスタマイズします。

表 2-63 [ユーザーアカウント設定 (User account settings)]プロパティ

プロパティ	説明
セッションアイドルタイムアウト (Session idle timeout)	指定した期間にアクティビティがない場合、ユーザーセッションからログアウトします。 p.193 の「アイドル状態のセッションがタイムアウトになるタイミングを構成する」を参照してください。
最大並列セッション数 (Maximum concurrent sessions)	ユーザーが同時にオープンできるセッションの数が制限されます。 p.194 の「並列ユーザーセッションの最大数の構成」を参照してください。

プロパティ	説明
ユーザーアカウントのロックアウト (User account logout)	指定した回数のサインイン試行に失敗した後、アカウントをロックアウトします。 p.194 の「失敗したサインインの試行の最大数を構成する」を参照してください。
サインインバナーの構成 (Sign-in banner configuration)	ユーザーが NetBackup Web UI にサインインするたびに表示されるサインインバナーを構成できます。異なるバナーをプライマリサーバーに構成できます。 p.195 の「ユーザーがサインインするときのバナーの表示」を参照してください。

NetBackup ユーザーセッションの終了

セキュリティまたはメンテナンスの目的で、1 つ以上の **NetBackup** ユーザーセッションを終了できます。アイドル状態のユーザーセッションを自動的に終了させるように **NetBackup** を構成するには、次のトピックを参照してください。

p.193 の「[アイドル状態のセッションがタイムアウトになるタイミングを構成する](#)」を参照してください。

メモ: ユーザーの役割の変更は、**Web UI** にすぐには反映されません。変更が有効になるには、管理者がアクティブなユーザーセッションを終了する必要があります。または、ユーザーがサインアウトして、再びサインインする必要があります。

ユーザーセッションをサインアウトするには

- 1 **Web UI** を開きます。
- 2 左側で[セキュリティ (Security)]、[ユーザーセッション (User sessions)]の順に選択します。
- 3 右上で[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]をクリックします。
- 4 [有効なセッション (Active sessions)]タブに移動します。
- 5 サインアウトするユーザーセッションを選択します。
- 6 [セッションを終了する (Terminate session)]を選択します。

すべてのユーザーセッションをサインアウトするには

- 1 **Web UI** を開きます。
- 2 左側で[セキュリティ (Security)]、[ユーザーセッション (User sessions)]の順に選択します。
- 3 右上で[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]をクリックします。

- 4 [有効なセッション (Active sessions)]タブに移動します。
- 5 [すべてのセッションを終了する (Terminate all sessions)]を選択します。

NetBackup ユーザーのロック解除

現在 NetBackup でロックされているユーザーアカウントを表示して、1 人以上のユーザーのロックを解除できます。

デフォルトでは、ユーザーのアカウントは 24 時間だけロックされたままになります。[ユーザーセッション (User sessions)]、[ユーザーアカウント設定 (User Account Settings)]、[ユーザーアカウントのロックアウト (User account lockout)]設定の順に移動して調整することで、この時間を変更できます。

p.194 の「失敗したサインインの試行の最大数を構成する」を参照してください。

ロックされたユーザーアカウントのロックを解除するには

- 1 Web UI を開きます。
- 2 左側で[セキュリティ (Security)]、[ユーザーセッション (User sessions)]の順に選択します。
- 3 右上で[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]をクリックします。
- 4 [ロックされたユーザー (Locked users)]タブに移動します。
- 5 ロックを解除するユーザーアカウントを選択します。
- 6 [ロック解除 (Unlock)]を選択します。

ロックされたすべてのユーザーアカウントのロックを解除するには

- 1 Web UI を開きます。
- 2 左側で[セキュリティ (Security)]、[ユーザーセッション (User sessions)]の順に選択します。
- 3 右上で[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]をクリックします。
- 4 [ロックされたユーザー (Locked users)]タブに移動します。
- 5 [すべてのユーザーのロックを解除する (Unlock all users)]を選択します。

アイドル状態のセッションがタイムアウトになるタイミングを構成する

ユーザーセッションがタイムアウトしてユーザーが自動的にサインアウトされるタイミングをカスタマイズできます。選択した設定は、NetBackup Web UI に適用されます。コマンドラインからこの設定を構成するには、nbsetconfig を使用して、GUI_IDLE_TIMEOUT オプションを設定します。

アイドル状態のセッションがタイムアウトになるタイミングを構成するには

- 1 Web UI を開きます。
- 2 左側で[セキュリティ (Security)]、[ユーザーセッション (User sessions)]の順に選択します。
- 3 右上で[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]をクリックします。
- 4 [セッションアイドルタイムアウト (Session idle timeout)]を有効にし、[編集 (Edit)]をクリックします。
- 5 時間を分単位で選択し、[保存 (Save)]をクリックします。
アクティブなユーザーの場合、次回ユーザーがサインインしたときに更新が適用されます。

並列ユーザーセッションの最大数の構成

この設定によって、ユーザーがアクティブにできる並列実行 API セッションの数が制限されます。この設定は、API キーセッションや、NetBackup のバックアップ、アーカイブ、リストインターフェースなどのその他のアプリケーションには適用されません。

コマンドラインからこの設定を構成するには、nbsetconfig を使用して、GUI_MAX_CONCURRENT_SESSIONS オプションを設定します。

並列ユーザーセッションの最大数を構成するには

- 1 Web UI を開きます。
- 2 左側で[セキュリティ (Security)]、[ユーザーセッション (User sessions)]の順に選択します。
- 3 右上で[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]をクリックします。
- 4 [最大並列セッション数 (Maximum concurrent sessions)]を有効にし、[編集 (Edit)]をクリックします。
- 5 [ユーザーあたりの並列セッション数 (Number of concurrent sessions per user)]を選択し、[保存 (Save)]をクリックします。
アクティブなユーザーの場合、次回ユーザーがサインインしたときに更新が適用されます。

失敗したサインインの試行の最大数を構成する

ユーザーが失敗したサインインの試行の最大数を超えた場合は、自動的にユーザーアカウントをロックできます。アカウントのロックアウト期間が過ぎるまで、そのユーザーアカウントはロックされたままになります。

すぐに NetBackup にアクセスする必要がある場合、管理者はアカウントのロックを解除できます。

p.193 の「[NetBackup ユーザーのロック解除](#)」を参照してください。

失敗した NetBackup へのサインインの試行の最大数をカスタマイズできます。選択した設定は、NetBackup Web UI のみに適用されます。コマンドラインからこの設定を構成するには、nbsetconfig を使用して、GUI_MAX_LOGIN_ATTEMPTS と GUI_ACCOUNT_LOCKOUT_DURATION オプションを設定する必要があります。

失敗したサインインの試行の最大数を構成するには

- 1 Web UI を開きます。
 - 2 左側で[セキュリティ (Security)]、[ユーザーセッション (User sessions)]の順に選択します。
 - 3 右上で[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]をクリックします。
 - 4 [ユーザーアカウントのロックアウト (User account logout)]を有効にし、[編集 (Edit)]をクリックします。
 - 5 アカウントがロックされる前に許容される、サインイン試行失敗の回数を選択します。
 - 6 一定時間の経過後にロックされたアカウントをロック解除するには、[次の経過後にロックされたアカウントをロック解除する (Unlock locked accounts after)]の分単位の時間を選択します。
 - 7 [保存 (Save)]を選択します。
- アクティブなユーザーの場合、次回ユーザーがサインインしたときに更新が適用されます。

ユーザーがサインインするときのバナーの表示

ユーザーが NetBackup Web UI にサインインするたびに表示されるサインインバナーを構成できます。異なるバナーをプライマリサーバーに構成できます。このバナーでは、ユーザーがサインインする前に、利用規約への同意もユーザーに要求できます。

ユーザーがサインインするときにバナーを表示するには

- 1 Web UI を開きます。
- 2 左側で[セキュリティ (Security)]、[ユーザーセッション (User sessions)]の順に選択します。
- 3 右上で[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]をクリックします。
- 4 [サインインバナーの構成 (Sign-in banner configuration)]を有効にし、[編集 (Edit)]をクリックします。
- 5 メッセージの見出しと本文に使用するテキストを入力します。

- 6 ユーザーに利用規約への同意を要求する場合は、[[同意する]および[同意しない]ボタンをサインインバナーに含める (Include "Agree" and "Disagree" buttons on the sign-in banner)]を選択します。
- 7 [保存 (Save)]を選択します。
アクティブなユーザーの場合、次回ユーザーがサインインしたときに更新が適用されます。

サインインバナーを削除する方法

- 1 Web UI を開きます。
- 2 左側で[セキュリティ (Security)]、[ユーザーセッション (User sessions)]の順に選択します。
- 3 右上で[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]をクリックします。
- 4 [サインインバナーの構成 (Sign-in banner configuration)]をオフ
- 5 [保存 (Save)]を選択します。
アクティブなユーザーの場合、次回ユーザーがサインインしたときに更新が適用されます。

[UNIX クライアント (UNIX client)]プロパティ

UNIX プラットフォームで実行されているクライアントのプロパティを定義するには、[UNIX クライアント (UNIX client)]プロパティを使用します。

p.61 の「[\[ビジー状態のファイルの設定 \(Busy file settings\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

p.77 の「[\[UNIX クライアントの\[クライアントの設定 \(Client settings\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

p.124 の「[\[Lotus Notes プロパティ\]](#)」を参照してください。

[UNIX サーバー (Unix Server)]プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。Linux プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。次に、[UNIX サーバー (UNIX server)]をクリックします。

[NFS アクセスのタイムアウト (NFS access timeout)]プロパティを変更するには、[UNIX サーバー (UNIX Server)]プロパティを使用します。このプロパティは、NFS ファイルシス

テムが利用できないことを認識するまでに、バックアップがマウントテーブルの処理を待機する時間を指定します。デフォルトは 5 秒です。

これらのプロパティは、選択されている Linux プライマリサーバーに適用されます。

p.708 の「[NFS をたどる (Follow NFS)] (ポリシー属性)」を参照してください。

[VMware アクセスホスト (VMware access hosts)] プロパティ

この設定にアクセスするには、Web UI で[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。プライマリサーバーを選択します。必要に応じて[接続 (Connect)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]の順に選択します。[VMware アクセスホスト (VMware access hosts)]をクリックします。

この設定には、[作業負荷 (Workloads)]、[VMware]、[VMware 設定 (VMware settings)]、[アクセスホスト (Access hosts)]を選択してアクセスすることもできます。

VMware バックアップホストを追加または削除するには、[VMware アクセスホスト (VMware access hosts)]ホストプロパティを使用します。これらのプロパティは、現在選択されているプライマリサーバーに適用されます。

これらのプロパティは、NetBackup Enterprise クライアントライセンスがインストールされている場合に表示されます。

バックアップホストは、仮想マシンの代わりにバックアップを実行する NetBackup クライアントです。(このホストは、以前は VMware バックアッププロキシサーバーと呼ばれていました)。バックアップホストは、NetBackup クライアントソフトウェアがインストールされている唯一のホストです。オプションとして、バックアップホストを NetBackup プライマリサーバーまたはメディアサーバーとして構成することもできます。

バックアップホストは、リストアを実行する場合はリカバリホストと呼ばれます。

アクセスホストリストにサーバーを追加したり、アクセスホストリストからサーバーを削除できます。

追加 (Add) [追加 (Add)]をクリックし、バックアップホストの完全修飾ドメイン名を入力してください。

削除 (Remove) リストのバックアップホストを特定し、[削除 (Remove)]をクリックします。

詳しくは、『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。

[Windows クライアント (Windows client)]プロパティ

Windows クライアント用の特定の NetBackup プロパティを構成するには、[Windows クライアント (Windows client)]プロパティを使用します。

p.81 の「[Windows クライアントの\[クライアントの設定 \(Client settings\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

p.124 の「[Lotus Notes プロパティ](#)」を参照してください。

p.97 の「[\[Exchange\]プロパティ](#)」を参照してください。

p.178 の「[\[SharePoint\]プロパティ](#)」を参照してください。

p.57 の「[\[Active Directory\]プロパティ](#)」を参照してください。

p.95 の「[\[Enterprise Vault\]プロパティ](#)」を参照してください。

ホストプロパティで見つからない構成オプション

NetBackup のほとんどの構成オプションは、NetBackup Web UI の[ホストプロパティ (Host properties)]にあります。ただし、一部のオプションには[ホストプロパティ (Host properties)]でアクセスすることができません。

[ホストプロパティ (Host properties)]にないオプションのデフォルト値を変更するには、最初に nbgetconfig コマンドを使用して構成オプションのリストを取得します。次に、必要に応じて nbsetconfig コマンドを使ってオプションを変更します。

これらのコマンドについて詳しくは、次のリソースを参照してください。

- 『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』
- p.198 の「[UNIX または Linux クライアントおよびサーバーにおけるコマンドを使用した構成オプションの変更について](#)」を参照してください。

使用できる構成オプションについて詳しくは、次のトピックを参照してください。

- p.199 の「[NetBackup サーバーの構成オプション](#)」を参照してください。
- p.341 の「[NetBackup クライアントの構成オプション](#)」を参照してください。

UNIX または Linux クライアントおよびサーバーにおけるコマンドを使用した構成オプションの変更について

コマンド (nbsetconfig または bpsetconfig) を使用して UNIX または Linux で NetBackup サーバーまたはクライアントの構成オプションを変更するとき、コマンドによって適切な構成ファイルが変更されます。

ほとんどのオプションは次の設定ファイルにあります。

```
/usr/opensv/netbackup/bp.conf
```

1 つの **UNIX** または **Linux** システムがクライアントとサーバーの両方として稼働している場合、bp.conf ファイルにはクライアントとサーバーの両方のオプションが含まれます。

bp.conf ファイルは次の構文に従います。

- 行のコメントアウトには、**#** 記号を使用します。
- **=** 記号の両側に、任意の数の空白またはタブを使用できます。
- 空白行を使用できます。
- 行頭に、任意の数の空白またはタブを使用できます。

UNIX または **Linux** クライアント上の **root** 以外の各ユーザーは、ホームディレクトリにユーザー固有の bp.conf ファイルも設定できます。

```
$HOME/bp.conf
```

ユーザー固有の bp.conf ファイルのオプションは、ユーザー操作だけに適用されます。ユーザー操作中、**NetBackup** によって、/usr/opensv/netbackup/bp.conf ファイルの前に \$HOME/bp.conf ファイルが確認されます。

root ユーザーには、固有の bp.conf ファイルは存在しません。**NetBackup** は、**root** ユーザーの /usr/opensv/netbackup/bp.conf ファイルを使用します。

Linux プライマリサーバー上の bp.conf ファイルに変更を加えた後、サーバー上のすべての **NetBackup** デーモンとユーティリティを停止して、再起動します。この操作によって **NetBackup** のすべての処理で新しい bp.conf 値が使われます。クライアント上の bp.conf ファイルまたはプライマリサーバー上の \$HOME/bp.conf ファイルに変更を加える場合、この操作は必要ありません。

SERVER オプションは、すべての **NetBackup** の **UNIX** または **Linux** サーバーおよびクライアント上の /usr/opensv/netbackup/bp.conf ファイルに存在する必要があります。インストール時に、**NetBackup** は **SERVER** オプションを、ソフトウェアがインストールされているプライマリサーバーの名前に設定します。このオプションは、bp.conf ファイルに必要な唯一のオプションです。**NetBackup** では、**SERVER** を除く bp.conf ファイルのすべてのオプションに対して、内部ソフトウェアのデフォルトが使用されます。

SERVER エントリは、プライマリサーバーおよびメディアサーバーのクラスタ内に存在するすべてのサーバー上で同じである必要があります。他のすべてのエントリも、すべてのサーバー上で一致させることをお勧めします。(CLIENT_NAME オプションは例外です。)

NetBackup サーバーの構成オプション

次のトピックでは、**NetBackup** サーバーの構成オプションについて説明します。これらのオプションのほぼすべては、**NetBackup** Web UI の[ホスト (Host)]でも設定できます。

メモ: Windows プラットフォームの場合、NetBackup はセキュリティ固有の構成オプションで指定するファイルパスについて、7 ビットの ASCII 文字をサポートします。

NetBackup サーバーの ALLOW_MEDIA_OVERWRITE オプション

このオプションによって、リムーバブルメディア上のさまざまなメディア形式に対する NetBackup の上書き禁止は無視されます。

表 2-64 ALLOW_MEDIA_OVERWRITE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>ALLOW_MEDIA_OVERWRITE = media_format</pre> このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	プライマリサーバー（および必要に応じてメディアサーバー）で、cpio 形式の上書きを許可するために、次のエントリを追加します。 <pre>ALLOW_MEDIA_OVERWRITE = CPIO</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)] > [ホストプロパティ (Host properties)] > サーバーを選択 > [メディア (Media)] > [メディアの上書きを許可 (Allow media overwrite)]。 p.126 の「[メディア (Media)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの AUTO_ADD_ALL_ALIASES_FOR_CLIENT オプション

このオプションを使用すると、bpdbm がバックアップポリシー内に新しいクライアントを検出した場合に、NetBackup データベースにエイリアスを自動的に追加できます。

表 2-65 AUTO_ADD_ALL_ALIASES_FOR_CLIENT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	デフォルトでは、構成ファイルに <code>AUTO_ADD_ALL_ALIASES_FOR_CLIENT</code> は記述されていません。<code>AUTO_ADD_ALL_ALIASES_FOR_CLIENT</code> が存在しないとき、オプションは有効になっています。つまり、<code>bpdbm</code> はクライアントのエイリアスを自動的に追加できます。 オプションを表示、追加、変更するには、<code>nbgetconfig</code> コマンドと <code>nbsetconfig</code> コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>AUTO_ADD_ALL_ALIASES_FOR_CLIENT = YES NO</pre> このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	次のエントリは、<code>bpdbm</code> が自動的にクライアントエイリアスを追加しないようにします。 <pre>AUTO_ADD_ALL_ALIASES_FOR_CLIENT = NO</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	NetBackup Web UI ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの BPBRM_VERBOSE オプション

`BPBRM_VERBOSE` オプションはデバッグのために使われます。NetBackup が `bpbrm` デバッグログに含む情報量を制御します。

表 2-66 BPBRM_VERBOSE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	デフォルトでは、<code>BPBRM_VERBOSE</code> が <code>VERBOSE</code> オプション ([グローバルログレベル (Global logging level)]) と同じ値になっています。<code>BPBRM_VERBOSE</code> オプションは、設定ファイルの <code>VERBOSE</code> オプションより優先されます。 オプションを表示、追加、変更するには、<code>nbgetconfig</code> コマンドと <code>nbsetconfig</code> コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>BPBRM_VERBOSE = -1 0 1 2 3 4 5</pre> このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。

使用方法	説明
例	■ VERBOSE オプションと同じ値を使用するには、次を入力します。 BPBRM_VERBOSE = 0 このオプションは、[ログ (Logging)]ホストプロパティの[BPBRM のログレベル (BPBRM logging level)]を[グローバルと同じ (Same as global)]に設定することと同じです。 ■ 記録される情報の量を最小にするには、次を入力します。 BPBRM_VERBOSE = -1 このオプションは、[ログ (Logging)]ホストプロパティの[BPBRM のログレベル (BPBRM logging level)]を 0 に設定することと同じです。 ■ 記録される情報の量を増加するには、1 から 5 の値を入力します。次に例を示します。 BPBRM_VERBOSE = 1 このオプションは、[ログ (Logging)]ホストプロパティの[BPBRM のログレベル (BPBRM logging level)]を 1 に設定することと同じです。 ■ 記録される情報の量を最大にするには、次を入力します。 BPBRM_VERBOSE = 5 このオプションは、[ログ (Logging)]ホストプロパティの[BPBRM のログレベル (BPBRM logging level)]を 5 に設定することと同じです。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> サーバーを選択 >[ログ (Logging)]>[BPBRM のログレベル (BPBRM logging level)]。 デバッグログについて詳しくは、『 NetBackup ログリファレンスガイド 』を参照してください。 p.120 の「 [ログ (Logging)]プロパティ 」を参照してください。

NetBackup サーバーとクライアントの BPCD_ALLOWED_PATH オプション

NetBackup は、パスがデフォルト以外のパスの場合に、NetBackup 操作に対して指定されているファイルへのアクセスを拒否します。たとえば、ファイル名の変更または進捗ログに指定されているパスです。

デフォルト以外のカスタムパスへのアクセスを許可するには、BPCD_ALLOWED_PATH オプションを使用する必要があります。

表 2-67 BPCD_ALLOWED_PATH の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>BPCD_ALLOWED_PATH = Absolute pathname to the directory</pre>
例	次に NetBackup サーバーまたはクライアント上のエントリの例を示します。 <pre>BPCD_ALLOWED_PATH = directory1</pre> <pre>BPCD_ALLOWED_PATH = directory2</pre> ディレクトリごとに別のエントリを作成します。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

Linux プライマリサーバーの BPDBJOBS_COLDEFS オプション

bpdbjobs プロセスの出力をカスタマイズするには BPDBJOBS_COLDEFS エントリを使用します。出力に含めるすべての列に BPDBJOBS_COLDEFS オプションを追加します。

BPDBJOBS_COLDEFS エントリを bp.conf ファイルに追加することによって、bpdbjobs プロセスの出力をカスタマイズします。

表 2-68 BPDBJOBS_COLDEFS の情報

使用方法	説明
使用する場所	Linux NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	/usr/opensv/netbackup/bp.conf ファイルに BPDBJOBS_COLDEFS を追加します。 次の形式を使ってすべての列にエントリを追加し、出力に含めます。 <pre>BPDBJOBS_COLDEFS = COLDEFS_ENTRY [minimum_size [true false]]</pre> 次の変数が定義されています。 ■ COLDEFS_ENTRY は、出力に含める列の名前です。 ■ minimum_size は、列の最小の幅です。指定しない場合、デフォルトの幅は 5 です。 ■ true を指定すると、必要に応じて列が拡張されます。指定しない場合、デフォルトは true です。 ■ false を指定すると、minimum_size 以内で列が拡張されます。

使用方法	説明
例	エントリの順序によって、列ヘッダーが表示される順序が決定されます。 <pre>BPDBJOBS_COLDEFS = JOBID 5 true BPDBJOBS_COLDEFS = TYPE 4 true BPDBJOBS_COLDEFS = STATE 5 true BPDBJOBS_COLDEFS = STATUS 6 true BPDBJOBS_COLDEFS = POLICY 6 true BPDBJOBS_COLDEFS = SCHEDULE 8 true BPDBJOBS_COLDEFS = CLIENT 6 true BPDBJOBS_COLDEFS = DSTMEDIA_SERVER 12 true BPDBJOBS_COLDEFS = ACTPID 10 true</pre> bp.conf ファイルに BPDBJOBS_COLDEFS エントリがある場合は、次のような影響があります。 ■ BPDBJOBS_COLDEFS オプションを 1 つでも追加すると、すべてのデフォルトの列は無効になります。 ■ ローカルシステムのすべてのユーザーに対して、bp.conf ファイルに指定された列だけが表示されます。
同等のホストプロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

表 2-69 は、利用可能な COLDEFS エントリと各エントリによって作成される列を示します。

表 2-69 COLDEFS エントリ

COLDEFS エントリ	列名
ACTIVEELAPSED	動作経過 (Active Elapsed)(経過した動作時間)
ACTPID	有効な PID (Active PID) (ジョブの PID)
ATTEMPT	試行 (Attempt)
BACKUPTYPE	バックアップ形式 (Backup Type)
CLIENT	クライアント (Client)
COMPLETION	完了 (Completion)(完了した割合)
COMPRESSION	圧縮 (Compression) ([はい (yes)] または [いいえ (no)])
COMPRESSION_SPACE_RATIO	圧縮領域 (Compression Space)
DEDUPRATIO	重複排除率 (Dedupe Ratio) (bpdbjobs コマンドの出力に重複排除率を示します)

COLDEFS エントリ	列名
DEDUP_SPACE_RATIO	重複排除領域 (Dedupe Space)
DSTMEDIA_SERVER	宛先メディアサーバー (Dest Media Svr)(書き込み先のメディアサーバー)
DSTMEDIAID	宛先メディア ID (Dest Media ID)(書き込み先のメディア ID)
DSTSTORAGE_UNIT	宛先ストレージユニット (Dest StUnit)(書き込み先のストレージユニット)
ELAPSED	経過時間 (Elapsed)(経過時間)
ENDED	終了 (Ended)
ESTFILE	推定ファイル (Est File)(推定ファイル数)
ESTKB	推定 KB (Est KB)(推定 KB 数)
FILES	ファイル (Files)
GROUP	グループ (Group)
JOBID	ジョブ ID (JobID)
KBPERSEC	KB/秒 (KB Per Sec)
KILOBYTES	KB (Kilobytes)
LASTBACKUP	最終バックアップ (Last Backup) (日時)
MAINPID	メイン PID (Main PID) (存在する場合、ジョブを生成する PID)
NUMTAPESEJECT	取り出すメディア (Media to Eject)(取り出すテープ数。Vault のみ)
OPERATION	操作 (Operation)(現在の操作)
OWNER	所有者 (Owner)
PATHNAME	パス名 (Pathname)
PARENTJOBID	親ジョブ ID (Parent JobID)
POLICY	ポリシー (Policy)
POLICYTYPE	ポリシー形式 (Policy Type)
PRIORITY	優先度 (Priority)

COLDEFS エントリ	列名
PROFILE	プロフィール (Profile)(Vault のみ)
RETENTION	保持 (Retention) (保持期間)
RESUMABLE	再開可能 (Resumable)
ROBOT	ロボット (Robot)(Vault のみ)
RQSTPID	要求 PID (Request PID) (存在する場合、ジョブを要求する PID)
SCHEDULE	スケジュール (Schedule)
SCHEDULETYPE	スケジュール形式 (Schedule Type)
SESSIONID	セッション ID (Session ID)(Vault のみ)
SRCMEDIA_SERVER	ソースメディアサーバー (Src Media Svr)
SRCMEDIAID	ソースメディア ID (Src Media ID)
SRCSTORAGE_UNIT	ソースストレージユニット (Src StUnit)
STARTED	開始 (Started)
STATE	状態 (State)
STATUS	状態 (Status)
STREAMNUMBER	ストリーム番号 (Stream Number)
SUSPENDABLE	一時停止可能 (Suspendable)
TYPE	形式 (Type)(ジョブ形式)
VAULT	Vault (Vault のみ)

NetBackup サーバーの BPDBM_VERBOSE オプション

BPDBM_VERBOSE オプションはデバッグのために使われます。NetBackup が bpdbm デバッグログに含む情報量を制御します。

表 2-70 BPDBM_VERBOSE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	デフォルトでは、BPDBM_VERBOSE が VERBOSE オプション ([グローバルログレベル (Global logging level)]) と同じ値になっています。BPDBM_VERBOSE オプションは、設定ファイルの VERBOSE オプションより優先されます。 オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>BPDBM_VERBOSE = -1 0 1 2 3 4 5</pre> このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	- VERBOSE オプションと同じ値を使用するには、次を入力します。<pre>BPDBM_VERBOSE = 0</pre>このオプションは、[ログ (Logging)] ホストプロパティの [BPDBM のログレベル (BPDBM logging level)] を [グローバルと同じ (Same as global)] に設定することと同じです。 - 記録される情報の量を最小にするには、次を入力します。<pre>BPDBM_VERBOSE = -1</pre>このオプションは、[ログ (Logging)] ホストプロパティの 0 を 5 に設定することと同じです。 - 記録される情報の量を増加するには、1 から 5 の値を入力します。次に例を示します。<pre>BPDBM_VERBOSE = 1</pre>このオプションは、[ログ (Logging)] ホストプロパティの 1 を 5 に設定することと同じです。 - 記録される情報の量を最大にするには、次を入力します。<pre>BPDBM_VERBOSE = 5</pre>このオプションは、[ログ (Logging)] ホストプロパティの 5 を 5 に設定することと同じです。 次に、2 つのエントリの例を示します。この例では、bpdbm のデバッグファイルの増加率を最小限に抑えながら、ログを有効にできます。 <pre>VERBOSE = 5</pre> <pre>BPDBM_VERBOSE = -1</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)] > [ホストプロパティ (Host properties)] > サーバーを選択 > [ログ (Logging)] > [BPDBM のログレベル (BPDBM logging level)]。 デバッグログについて詳しくは、『NetBackup ログリファレンスガイド』を参照してください。 p. 120 の「[ログ (Logging)] プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの BPRD_VERBOSE オプション

デバッグ目的で使います。BPRD_VERBOSE オプションは、NetBackup が bprd のデバッグログで含む情報量を制御します。

表 2-71 BPRD_VERBOSE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	デフォルトでは、値は VERBOSE オプション ([グローバルログレベル (Global logging level)])と同じです。BPRD_VERBOSE オプションは、設定ファイルの VERBOSE オプションより優先されます。 オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 BPRD_VERBOSE = -1 0 1 2 3 4 5 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	- VERBOSE オプションと同じ値を使用するには、次を入力します。 BPRD_VERBOSE = 0 このオプションは、[ログ (Logging)]ホストプロパティの[BPRD のログレベル (BPRD logging level)]を[グローバルと同じ (Same as global)]に設定することと同じです。 - 記録される情報の量を最小にするには、次を入力します。 BPRD_VERBOSE = -1 このオプションは、[ログ (Logging)]ホストプロパティの[BPRD のログレベル (BPRD logging level)]を 0 に設定することと同じです。 - 記録される情報の量を増加するには、1 から 5 の値を入力します。次に例を示します。 BPRD_VERBOSE = 1 このオプションは、[ログ (Logging)]ホストプロパティの[BPRD のログレベル (BPRD logging level)]を 1 に設定することと同じです。 - 記録される情報の量を最大にするには、次を入力します。 BPRD_VERBOSE = 5 このオプションは、[ログ (Logging)]ホストプロパティの[BPRD のログレベル (BPRD logging level)]を 5 に設定することと同じです。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> サーバーを選択 >[ログ (Logging)]>[BPRD のログレベル (BPRD logging level)]。 デバッグログについて詳しくは、『NetBackup ログリファレンスガイド』を参照してください。 p.120 の「[ログ (Logging)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの BPTM_VERBOSE オプション

BPTM_VERBOSE オプションはデバッグのために使われます。NetBackup が bptm デバッグログに含む情報量を制御します。

表 2-72 BPTM_VERBOSE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	デフォルトでは、BPTM_VERBOSE が VERBOSE オプション ([グローバルログレベル (Global logging level)]) と同じ値になっています。BPTM_VERBOSE オプションは、設定ファイルの VERBOSE オプションより優先されます。 オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 BPTM_VERBOSE = -1 0 1 2 3 4 5 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	- VERBOSE オプションと同じ値を使用するには、次を入力します。 BPTM_VERBOSE = 0 このオプションは、[ログ (Logging)] ホストプロパティの [BPTM のログレベル (BPTM logging level)] を [グローバルと同じ (Same as global)] に設定することと同じです。 - 記録される情報の量を最小にするには、次を入力します。 BPTM_VERBOSE = -1 このオプションは、[ログ (Logging)] ホストプロパティの [BPTM のログレベル (BPTM logging level)] を 0 に設定することと同じです。 - 記録される情報の量を増加するには、1 から 5 の値を入力します。次に例を示します。 BPTM_VERBOSE = 1 このオプションは、[ログ (Logging)] ホストプロパティの [BPTM のログレベル (BPTM logging level)] を 1 に設定することと同じです。 - 記録される情報の量を最大にするには、次を入力します。 BPTM_VERBOSE = 5 このオプションは、[ログ (Logging)] ホストプロパティの [BPTM のログレベル (BPTM logging level)] を 5 に設定することと同じです。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)] > [ホストプロパティ (Host properties)] > サーバーを選択 > [ログ (Logging)] > [BPTM のログレベル (BPTM logging level)]。 デバッグログについて詳しくは、『NetBackup ログリファレンスガイド』を参照してください。 p.120 の「[ログ (Logging)] プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの BPEND_TIMEOUT オプション

BPEND_TIMEOUT オプションは、クライアント上で bpend_notify スクリプトが完了するまでに待機する時間 (秒数) を指定します。

表 2-73 BPEND_TIMEOUT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>BPEND_TIMEOUT = seconds</pre> デフォルトのタイムアウトは 300 秒 (5 分) です。 メモ: このオプションを変更する場合、CLIENT_READ_TIMEOUT オプションがこのオプション以上の値に設定されていることを確認してください。 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 > [タイムアウト (Timeouts)]>[バックアップ終了の通知タイムアウト (Backup end notify timeout)]。 p.186 の「[タイムアウト (Timeouts)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの BPSTART_TIMEOUT オプション

BPSTART_TIMEOUT オプションは、クライアント上で bpstart_notify スクリプトが完了するまでに待機する時間 (秒数) を指定します。

表 2-74 BPSTART_TIMEOUT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup メディアサーバー

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>BPSTART_TIMEOUT = seconds</pre> デフォルトのタイムアウトは 300 秒 (5 分) です。 メモ: bpstart_notify スクリプトを使用する場合、クライアントの読み込みタイムアウト (CLIENT_READ_TIMEOUT オプション) は Backup start notify timeout (BPSTART_TIMEOUT オプション) 以上である必要があります。[クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)] が [バックアップ開始の通知タイムアウト (Backup start notify timeout)] より小さいと、ジョブは bpstart_notify スクリプトが動作している間タイムアウトする場合があります。 このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)] > [ホストプロパティ (Host properties)] > メディアサーバーを選択 > [タイムアウト (Timeouts)] [バックアップ開始の通知タイムアウト (Backup start notify timeout)]。 p.186 の「[タイムアウト (Timeouts)] プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの CHECK_RESTORE_CLIENT オプション

リストアを開始する前にリストア対象のクライアントを確認するように指定します。
CHECK_RESTORE_CLIENT 応答のないクライアントによって、同じテープ上にデータを持つ他のクライアントのリストア速度が低下する場合があります。

表 2-75 CHECK_RESTORE_CLIENT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等のホストプロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの CLIENT_CONNECT_TIMEOUT オプション

このオプションは、サーバーがクライアントに接続するときに待機する時間 (秒数) を指定します。サーバーは、指定した時間より長く待機する必要がある場合、タイムアウトします。

表 2-76 CLIENT_CONNECT_TIMEOUT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>CLIENT_CONNECT_TIMEOUT = seconds</pre> デフォルトのタイムアウトは 300 秒 (5 分) です。 このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 > [タイムアウト (Timeouts)]>[クライアント接続のタイムアウト (Client connect timeout)]。 p.186 の「[タイムアウト (Timeouts)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーとクライアントの CLIENT_PORT_WINDOW オプション

このオプションは、他のコンピュータの NetBackup に接続する際に送信元ポートとして使用される、このコンピュータ上の予約されていないポートの範囲を指定します。この設定はサーバーやクライアントホストへのデーモン接続またはサービスソケット接続と、からのコールバックに適用されます。bpcd

表 2-77 CLIENT_PORT_WINDOW の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーとクライアント。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>CLIENT_PORT_WINDOW = start_port_rangeend_port_range</pre> 最初の数字に 0 (ゼロ) を指定すると (デフォルト)、使用する予約されていないポートがオペレーティングシステムによって決定されます。 このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	次の例では、ポート番号 4800 から 5000 の使用が許可されます。 <pre>CLIENT_PORT_WINDOW = 4800 5000</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> サーバーまたはクライアントを選択>[ポートの範囲 (Port ranges)]>[クライアントのポートウィンドウ (Client port window)]。 p.135 の「[ポートの範囲 (Port ranges)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの CLIENT_READ_TIMEOUT オプション

CLIENT_READ_TIMEOUT オプションは、操作が失敗するまでに NetBackup がクライアントからの応答を待機する時間 (秒数) を指定します。たとえば、CLIENT_READ_TIMEOUT の時間内にプライマリサーバーがクライアントからの応答を取得しない場合、バックアップ操作やリストア操作が失敗します。

表 2-78 CLIENT_READ_TIMEOUT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>CLIENT_READ_TIMEOUT = seconds</pre> デフォルトでは、CLIENT_READ_TIMEOUT はサーバーまたはデータベースエージェントにはありません。また、クライアント読み込みのタイムアウトは 300 秒 (5 分) です。この時間は適切なデフォルトです。問題が発生した場合にのみ変更します。 データベースエージェントは他のクライアントより最初の準備に時間がかかるため、これらのクライアント上に CLIENT_READ_TIMEOUT を追加するのは特別な場合です。データベースのバックアップユーティリティによって頻繁に複数のバックアップジョブが同時に開始されると、CPU の速度が低下する場合があります。 次に、データベースエージェント上での処理の順序を示します。 ■ データベースエージェント上の NetBackup によって、そのクライアントの CLIENT_READ_TIMEOUT が読み込まれ、最初に使う値が検出されます。このオプションが設定されていない場合、標準のデフォルトである 5 分 が使用されます。 ■ データベースエージェントの API にサーバーの値が渡され、その値が CLIENT_READ_TIMEOUT として使用されます。 次の状況でプライマリサーバーとメディアサーバーのタイムアウト値を増やすことをお勧めします。 ■ データベースエージェントの場合、多くのインストールでは 15 分 の設定が適切です。 ■ MSDP クラウドストレージサーバーへの直接バックアップ。値が増加しない場合、ジョブが失敗して、ジョブの詳細に次のメッセージが表示されることがあります。 <pre>Error bpbrrm (pid=119850) socket read failed: errno = 62 - Timer expired</pre> ストレージライフサイクルポリシーを使用して最初に MSDP ストレージサーバー にバックアップし、最適化複製操作で MSDP クラウドストレージサーバー または MSDP クラウド LSU にデータを複製する場合は、タイムアウトを大きくする必要はありません(これは推奨される操作方法です)。 メモ: bpstart_notifyスクリプトを使用する場合、クライアントの読み込みタイムアウト (CLIENT_READ_TIMEOUT オプション) は[バックアップ開始の通知タイムアウト (Backup start notify timeout)] (BPSTART_TIMEOUT オプション) 以上である必要があります。[クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)]が[バックアップ開始の通知タイムアウト (Backup start notify timeout)]より小さいと、ジョブは bpstart_notify スクリプトが動作している間タイムアウトする場合があります。
例	次の例ではクライアントの読み込みタイムアウトを 15 分 に構成しています。 <pre>CLIENT_READ_TIMEOUT = 900</pre>

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーまたはメディアサーバーを選択 >[タイムアウト (Timeouts)]>[クライアントの読み込みタイムアウト (Client read timeout)]。 p.186 の「[タイムアウト (Timeouts)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの CLOUD_AUTODISCOVERY_INTERVAL

このオプションは、NetBackup がクラウド資産を検出して NetBackup に表示するために、Snapshot Manager サーバーをスキャンする頻度を制御します。

表 2-79 CLOUD_AUTODISCOVERY_INTERVAL 情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 メモ: これらのコマンドでは、NetBackup プライマリサーバーの管理者権限が必要です。詳しくは、NetBackup 管理者にお問い合わせください。 デフォルトは 2 時間です。最小値は 2 時間で、最大値は 1 年です。 次の形式を使用します。 CLOUD_AUTODISCOVERY_INTERVAL = 秒数 例: CLOUD_AUTODISCOVERY_INTERVAL = 100000 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 メモ: このオプションを変更した後、NetBackup サービスを停止して再起動します。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

クラスタ化されたプライマリサーバーの CLUSTER_ECA_CERT_PATH

CLUSTER_ECA_CERT_PATH オプションは、クラスタ化されたプライマリサーバーに固有のオプションです。仮想名の外部 CA が署名した証明書のパスを指定します。

表 2-80 CLUSTER_ECA_CERT_PATH の情報

使用方法	説明
使用する場所	クラスタ化されたプライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 CLUSTER_ECA_CERT_PATH = <i>Path to the certificate of the virtual identity</i>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

クラスタ化されたプライマリサーバーの CLUSTER_ECA_KEY_PASSPHRASEFILE

CLUSTER_ECA_KEY_PASSPHRASEFILE オプションは、クラスタ化されたプライマリサーバーに固有のオプションです。仮想名証明書の秘密鍵のパスフレーズが格納されているテキストファイルのパスを指定します。

CLUSTER_ECA_KEY_PASSPHRASEFILE は省略可能です。仮想名証明書の秘密鍵が暗号化されている場合は、このオプションを定義する必要があります。

p.217 の「[クラスタ化されたプライマリサーバーの CLUSTER_ECA_PRIVATE_KEY_PATH](#)」を参照してください。

表 2-81 CLUSTER_ECA_KEY_PASSPHRASEFILE の情報

使用方法	説明
使用する場所	クラスタ化されたプライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 CLUSTER_ECA_KEY_PASSPHRASE_FILE = <i>Path to the passphrase file</i>

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

クラスタ化されたプライマリサーバーの CLUSTER_ECA_PRIVATE_KEY_PATH

CLUSTER_ECA_PRIVATE_KEY_PATH オプションは、クラスタ化されたプライマリサーバーに固有のオプションです。仮想名の外部 CA が署名した証明書の秘密鍵のパスを指定します。

仮想名証明書の秘密鍵が暗号化されている場合は、CLUSTER_ECA_KEY_PASSPHRASEFILE オプションを定義する必要があります。

p.216 の「[クラスタ化されたプライマリサーバーの CLUSTER_ECA_KEY_PASSPHRASEFILE](#)」を参照してください。

表 2-82 CLUSTER_ECA_PRIVATE_KEY_PATH の情報

使用方法	説明
使用する場所	クラスタ化されたプライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 次の形式を使用します。 CLUSTER_ECA_PRIVATE_KEY_PATH = <i>Path to the private key of the external certificate</i>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

クラスタ化されたプライマリサーバーの CLUSTER_ECA_TRUST_STORE_PATH

CLUSTER_ECA_TRUST_STORE_PATH オプションは、クラスタ化されたプライマリサーバーに固有のオプションです。PEM 形式の信頼できるすべてのルート CA 証明書を含む証明書バンドルファイルへのファイルパスを指定します。

表 2-83 CLUSTER_ECA_TRUST_STORE_PATH の情報

使用方法	説明
使用する場所	クラスタ化されたプライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 CLUSTER_ECA_TRUST_STORE_PATH = <i>Path to the external CA certificate</i>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup プライマリサーバーの COMPUTE_IMAGE_ENTROPY

COMPUTE_IMAGE_ENTROPY オプションを使用して、NetBackup - Helios 環境でのサイバーレジリエンスを強化するエントロピーとファイル属性の計算を NetBackup で有効にします。

エントロピーメトリックは、潜在的な悪意のあるアクティビティを検出するのに役立つ、Helios の異常検出に使用されます。

表 2-84 COMPUTE_IMAGE_ENTROPY の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>COMPUTE_IMAGE_ENTROPY = Value</pre> COMPUTE_IMAGE_ENTROPY オプションには、次のいずれかの値を指定できます。 ■ ALWAYS - エントロピーとファイル属性の計算は常に有効になります。これはデフォルト値です。 ■ NEVER - エントロピーとファイル属性の計算は常に無効になります。 ■ IF_MANAGED_BY_ALTA - エントロピーとファイル属性の計算は、Helios が関連する NetBackup プライマリサーバーを管理する場合に有効になります。Helios がプライマリサーバーを管理しない場合、計算は無効になります。 メモ: NetBackup プライマリサーバーが Helios サーバーに登録されると、エントロピーとファイル属性の計算は、24 時間以内に新しいバックアップジョブで開始されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの CONNECT_OPTIONS オプション

CONNECT_OPTIONS は、次のようにローカルホストへの接続にのみ適用されます。リモートホストへの接続には適用されません。

- ホストとの後続のコールバック接続に、従来のコールバック方式を使用するか、vnetd を使用するか、あるいは PBX または vnetd 転送接続を使用するか。
- host への接続に、予約済みの送信元ポートを使用するか、予約されていない送信元ポートを使用するか。

表 2-85 CONNECT_OPTIONS の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはメディアサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>CONNECT_OPTIONS = host [0 1 2] [0 1 2]</pre> 次の変数が定義されています。 ホストは、このホストにローカルなホスト名です。構成に複数の CONNECT_OPTIONS エントリを持ち、localhost が他のローカルホスト名を上書きすることがあります。 CONNECT_OPTIONS エントリでローカルホスト名が指定されていない場合、DEFAULT_CONNECT_OPTIONS オプションの値が使用されます。 p.222 の「NetBackup サーバーの DEFAULT_CONNECT_OPTIONS オプション」を参照してください。
	最初の設定値は、<i>host</i> のサービスデーモンに接続するために送信元ポートとして使用するポートの種類を示します。 0 = このコンピュータの接続には予約済みの送信元ポート番号が使用されます。 1 = このコンピュータの接続には CLIENT_PORT_WINDOW の範囲から選択された予約されていない送信元ポート番号が使用されます(デフォルトは 1)。 NetBackup Web UI で、メディアサーバーのホストプロパティを開き、[ユニバーサル設定 (Universal settings)]を選択します。 2 = DEFAULT_CONNECT_OPTIONS 構成オプションで定義した方式を使用します。 p.189 の「[ユニバーサル設定 (Universal settings)]プロパティ」を参照してください。
	2 番目の設定値は、<i>host</i> とともに使用するコールバック方式を示します。(この方式は、bpcd にポート 1556 または 13724 を使用して接続できなかった場合に適用されます) 0 = 従来のコールバック方式を使用します。<i>host</i> は、このコンピュータが SERVER_RESERVED_PORT_WINDOW の範囲または最初の設定で指定された SERVER_PORT_WINDOW の範囲から選択したランダムなポート番号にコネクトバックします。 1 = 非コールバック方式である vnetd を使用します。ランダムなポートではなく vnetd に接続します。vnetd への接続を試行する前にポート 1556 への接続を試行します。 2 = DEFAULT_CONNECT_OPTIONS 構成オプションで定義した方式を使用します (デフォルト)。

使用方法	説明
例 1	構成ファイルには、ローカルホスト名の CONNECT_OPTIONS の設定が含まれている場合があります。 <pre>CONNECT_OPTIONS = localhost 0 0</pre> この例では、ローカルホスト shark 上のデーモンへのローカル接続は、ポート 1556 の使用を試みます。前の試行が成功しなかった場合、接続は vnetd を試行します。接続がポート 1556 または vnetd を使用して正常に完了した場合、両方の設定は無視されます。 <pre>\$ bptestbpcd -host shark 0 0 10.82.105.11:40402 -> 10.82.105.11:1556 10.82.105.11:40404 -> 10.82.105.11:1556</pre>
例 2	<pre>CONNECT_OPTIONS = host 0 1</pre> この例では、次のとおり表示されます。 ■ コールバック接続はこのコンピュータの vnetd に対して行われます。 ■ デーモン接続の送信元ポートは予約済みのポート番号の範囲からバインドされます。
例 3	<pre>CONNECT_OPTIONS = host 1 1</pre> この例では、次のとおり表示されます。 ■ コールバック接続はこのコンピュータの vnetd に対して行われます。 ■ デーモン接続の送信元ポートは予約されていないポート番号の範囲からバインドされます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)]、プライマリサーバーまたはメディアサーバーを選択、[ファイアウォール (Firewall)]。 p.110 の「[ファイアウォール (Firewall)] プロパティ」を参照してください。

NetBackup プライマリサーバーの DATAACCESS_AUDIT_INTERVAL_HOURS

DATAACCESS_AUDIT_INTERVAL_HOURS オプションを使用して、イメージの参照 (bplist) 操作の監査レコードを定期的に NetBackup データベースに追加する間隔を設定します。

たとえば、次の例を考えてみます。

この DATAACCESS_AUDIT_INTERVAL_HOURS オプションは 2 時間に設定されています。bplist 操作のすべての監査レコードは、2 時間キャッシュされます。多数の類似した bplist 監査レコードのいずれか 1 つが識別され、2 時間ごとにデータベースに追加さ

れます。このオプションは、bplist 監査レコードによってデータベースサイズが急激に増加するのを防ぎます。

すべての bplist 監査レコードをキャッシュから NetBackup データベースに追加するには、プライマリサーバーで次のコマンドを実行します。

```
nbcertcmd -postAudit -dataAccess
```

表 2-86 DATAACCESS_AUDIT_INTERVAL_HOURS の情報

使用方法	説明
使用する場所	プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 次の形式を使用します。 GENERIC_KEY_VAL_LIST = (DATAACCESS_AUDIT_INTERVAL_HOURS) (time in hours) デフォルトの間隔は 1 時間です。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの DEFAULT_CONNECT_OPTIONS オプション

DEFAULT_CONNECT_OPTIONS オプションは CONNECT_OPTIONS 構成オプションのデフォルト値を指定します。CONNECT_OPTIONS オプションでホスト名が指定されていない場合、DEFAULT_CONNECT_OPTIONS オプションの値が使用されます。

メモ: DEFAULT_CONNECT_OPTIONS はローカルホストへの接続にのみ適用されます。リモートホストへの接続には適用されません。

p.219 の「[NetBackup サーバーの CONNECT_OPTIONS オプション](#)」を参照してください。

表 2-87 DEFAULT_CONNECT_OPTIONS の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはメディアサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>DEFAULT_CONNECT_OPTIONS = [0 1][0 1]</pre> デフォルト値は 0 1 です。 このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
	最初の設定値は、ローカルホストの bpcd デーモンポートに接続する際に接続元ポートとして使用するポートの種類を示します。従来のコールバック方式を使用している場合には、サーバーポートの種類も示します。 0 = このコンピュータの接続には予約済みのポート番号が使用されます。従来のコールバック方式を使用している場合には、SERVER_RESERVED_PORT_WINDOW の範囲から選択されます。 1 = このコンピュータの接続には予約されていないポート番号を使用します。従来のコールバック方式を使用している場合には、接続元ポートの CLIENT_PORT_WINDOW の範囲と SERVER_PORT_WINDOW の範囲から接続が選択されます。
	2 番目の設定値は、使用するコールバック方式を示します。(この設定は、bpcd にポート 1556 または 13724 を使用して接続できなかった場合に適用されます) 0 = 従来のコールバック方式を使用します。送信先ホストはこのコンピュータが SERVER_RESERVED_PORT_WINDOW の範囲または最初の設定で指定された SERVER_PORT_WINDOW の範囲から選択したランダムなポート番号にコネクトバックします。 1 = 非コールバック方式である vnetd を使用します。ランダムなポートではなく vnetd に接続します。vnetd への接続を試行する前にポート 1556 への接続を試行します。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)]、プライマリサーバーまたはメディアサーバーを選択、[ファイアウォール (Firewall)]。 p.110 の「[ファイアウォール (Firewall)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup のサーバーとクライアントの DISABLE_CERT_AUTO_RENEW オプション

このオプションは、ホスト ID ベースの証明書の自動更新を無効にします。

ホスト ID ベースの証明書の自動更新について詳しくは、『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。

表 2-88 DISABLE_CERT_AUTO_RENEW の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーおよびクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>DISABLE_CERT_AUTO_RENEW = 1</pre> このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの DISABLE_JOB_LOGGING オプション

このオプションで、NetBackup のアクティビティモニターに必要なジョブ情報のログを無効にします。

表 2-89 DISABLE_JOB_LOGGING の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>DISABLE_JOB_LOGGING</pre> デフォルトではこのオプションが構成ファイルになく、ジョブのログが実行されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 >[ジョブのログの有効化 (Enable job logging)]。 p.126 の「[メディア (Media)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの DISABLE_STANDALONE_DRIVE_EXTENSIONS オプション

このオプションは、非ロボットのドライブ操作を無効にします。バックアップの間に、NetBackup は自動的に非ロボットドライブのスタンドアロンボリュームの使用を試みます。

表 2-90 DISABLE_STANDALONE_DRIVE_EXTENSIONS の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションの変更には、nbemmcmd コマンドを使います。例： nbemmcmd -changesetting -DISABLE_STANDALONE_DRIVE_EXTENSIONS no これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
例	次のコマンドは、非ロボットのドライブ操作を有効にします。 nbemmcmd -changesetting -DISABLE_STANDALONE_DRIVE_EXTENSIONS no
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 >[メディア (Media)]>[スタンドアロンドライブ拡張機能を有効にする (Enable standalone drive extension)]。デフォルトでは、このオプションは有効になっています。 p.126 の「 メディア (Media) プロパティ 」を参照してください。

NetBackup サーバーの DISALLOW_BACKUPS_SPANNING_MEDIA オプション

このオプションは、バックアップが複数のメディアにまたがらないようにします。

表 2-91 DISALLOW_BACKUPS_SPANNING_MEDIA の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>DISALLOW_BACKUPS_SPANNING_MEDIA</pre> デフォルトではこのエントリが構成ファイルになく、バックアップは複数のメディアにまたがることができます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 >[メディア (Media)]>[テープメディアをまたがるバックアップを許可する (Allow backups to span tape media)]。 p.126 の「[メディア (Media)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの DISALLOW_CLIENT_LIST_RESTORE オプション

すべてのクライアントに対する一覧表示要求およびリストア要求を拒否します。このオプションが存在する場合、クライアントはこのプライマリサーバーを介してバックアップしたファイルの一覧表示またはリストアを行うことができません。

表 2-92 DISALLOW_CLIENT_LIST_RESTORE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>DISALLOW_CLIENT_LIST_RESTORE</pre> デフォルトではこのエントリが設定ファイルになく、クライアントはファイルの一覧表示とリストアを行うことができます。 メモ: 個々のクライアントの list_restore の設定を変更して、そのクライアントの DISALLOW_CLIENT_LIST_RESTORE オプションより個々のクライアントを優先できます。

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 >[クライアント属性 (Client attributes)]>[クライアントによるリストアを許可する (Allow client restore)]。 p.66 の「[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの DISALLOW_CLIENT_RESTORE オプション

すべてのクライアントに対するリストア要求を拒否します。このオプションが存在する場合、クライアントはこのプライマリサーバーを介してバックアップしたファイルのリストアを行うことができません。

表 2-93 DISALLOW_CLIENT_RESTORE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 DISALLOW_CLIENT_RESTORE デフォルトではこのエントリが設定ファイルになく、クライアントはファイルのリストアを行うことができます。 メモ: 個々のクライアントの list_restore の設定を変更して、そのクライアントの DISALLOW_CLIENT_RESTORE オプションより優先できます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 >[クライアント属性 (Client attributes)]>[クライアントによる参照を許可する (Allow client browse)]。 p.66 の「[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup のサーバーとクライアントの DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES オプション

DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES エントリによって、NetBackup サーバーによって NetBackup サーバーまたはクライアント上でファイルが作成されないようにします。このエントリは、NetBackup サーバーによってリモートでのリストアが実行またはリモートでのクライアント構成が変更されないようにします。

次の表に記載されているコマンドについて詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

表 2-94 DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES の情報

使用する場所	使用方法	ローカルホストで使用する 場合の注意事項	リモートで使用する場 合の注意事項	デフォルトの動作
NetBackup Web UI	[ホスト (Hosts)]>[ホスト プロパティ (Host properties)]> ホストを選 択 >[ユニバーサル設定 (Universal settings)]> [サーバーによるファイル の書き込みを許可する (Allow server file writes)]	[サーバーによるファイル の書き込みを許可する (Allow server file writes)]は、プライマリ サーバー、メディアサー バー、およびクライアント が含まれるオールインワ ン型のホスト上で設定で きます。 メディアサーバーとクライ アントがプライマリサー バー上にない場合は、メ ディアサーバーまたはク ライアントで DISALLOW_ SERVER_FILE_WRITES エントリを使用する必要が あります。	[サーバーによるファイル の書き込みを許可する (Allow server file writes)]は、NetBackup Web UI からは設定でき ません。メディアサーバー またはクライアントで、 DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES エントリを使用します。 表 2-96 を参照してくださ い。	サーバーによる書き込み が許可されます。
NetBackup バック アップ、アーカイ ブおよびリストア Windows クライ アントインターフェ ース	[ファイル (File)] > [NetBackup クライアント のプロパティ (Client Properties)] > [サー バー主導リストアを許可 する (Allow server-directed restores)]	[サーバー主導リストアを 許可する (Allow server-directed restores)]は、Windows コンピュータからのみ使 用できます。	[サーバー主導リストアを 許可する (Allow server-directed restores)]は、リモートで は使用できません。メディ アサーバーまたはクライ アントで、 DISALLOW_ SERVER_FILE_WRITES エントリを使用します。 表 2-96 を参照してくださ い。	サーバー主導リストアが 許可されます。

使用する場所	使用方法	ローカルホストで使用する 場合の注意事項	リモートで使用する場 合の注意事項	デフォルトの動作
bpsetconfig ま たは bpgetconfig (プライマリサー バーまたはメデ ィアサーバーでの み使用) nbsetconfig ま たは nbgetconfig (プライマリサー バー、メディア サーバーまたはク ライアントで使用)	コマンド例は、表 2-95 お よび表 2-96 を参照してく ださい。	DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES を有効または無効にでき ます。	bpsetconfig および bpgetconfig は、プラ イマリサーバーまたはメ ディアサーバーからのみ 実行できます。 メモ: bpsetconfig ま たは nbsetconfig を 使用して DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES = No をリモートで設定す ることはできません (ロー カルでのみ設定できま す)。	DISALLOW_SERVER_ FILE_WRITES = No

表 2-95 ローカルホストの bpsetconfig および nbsetconfig の例

コマンド	ローカルホストのコマンドの例
bpsetconfig	ローカルプライマリサーバーまたはメディアサーバーから Windows の場合: install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd>bpsetconfig bpsetconfig> DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES = Yes bpsetconfig> <ctl-Z> UNIX の場合: /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpsetconfig bpsetconfig> DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES = Yes bpsetconfig> <ctl-D>

コマンド	ローカルホストのコマンドの例
nbsetconfig	ローカルプライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントから Windows の場合: <pre>install_path¥NetBackup¥bin>nbsetconfig</pre> <pre>nbsetconfig> DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES = Yes</pre> <pre>nbsetconfig> <ctl-Z></pre> UNIX の場合: <pre>/usr/opensv/netbackup/bin/nbsetconfig</pre> <pre>nbsetconfig> DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES = Yes</pre> <pre>nbsetconfig> <ctl-D></pre>

表 2-96 リモートホストの bpsetconfig および nbsetconfig の例

コマンド	リモートホストのコマンドの例
bpsetconfig	リモートプライマリサーバーまたはメディアサーバーから Windows の場合: <pre>install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd>bpsetconfig -h host</pre> <pre>bpsetconfig> DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES = Yes</pre> <pre>bpsetconfig> <ctl-Z></pre> UNIX の場合: <pre>/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpsetconfig -h host</pre> <pre>bpsetconfig> DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES = Yes</pre> <pre>bpsetconfig> <ctl-D></pre>
nbsetconfig	リモートプライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントから Windows の場合: <pre>install_path¥NetBackup¥bin>nbsetconfig -h host</pre> <pre>nbsetconfig> DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES = Yes</pre> <pre>nbsetconfig> <ctl-Z></pre> UNIX の場合: <pre>/usr/opensv/netbackup/bin/nbsetconfig -h host</pre> <pre>nbsetconfig> DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES = Yes</pre> <pre>nbsetconfig> <ctl-D></pre>

NetBackup サーバーの DTE_IGNORE_IMAGE_MODE

バックアップイメージの移動中のデータの暗号化 (DTE) モードが有効になっていても、データを暗号化しない場合は、DTE_IGNORE_IMAGE_MODE オプションを使用します。

DTE_IGNORE_IMAGE_MODE オプションはすべてのバックアップイメージに適用されます。

表 2-97 DTE_IGNORE_IMAGE_MODE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバー側
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>DTE_IGNORE_IMAGE_MODE = NEVER ALWAYS WHERE_UNSUPPORTED</pre> DTE_IGNORE_IMAGE_MODE オプションのデフォルト値は NEVER です。 ■ NEVER - 移動中のデータの暗号化をイメージの DTE モードに基づいて実行するように指定するには、このオプションを使用します。 ■ ALWAYS - NetBackup ホストが暗号化をサポートしているかどうかに関係なく、移動中のデータの暗号化中にイメージの DTE モードを常に無視するように指定するには、このオプションを使用します。移動中のデータの暗号化は、グローバル DTE モードとクライアント DTE モードに基づいて実行されます。 ■ WHERE_UNSUPPORTED - 環境内に 9.1 より前の NetBackup ホストがあり、DTE モードがイメージに対して有効になっている場合にこれらのホストに対するジョブでエラーが発生しないようにするには、このオプションを使用します。この構成では、移動中のデータの暗号化は、グローバルおよびクライアントの DTE モード設定に基づいて行われます。イメージの DTE モードは無視されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CERT_PATH

ECA_CERT_PATH オプションでは、ホストの外部 CA が署名した証明書のパスを指定します。このオプションは必須です。

NetBackup は、ホストの証明書に次の証明書ソースをサポートしています。

- Windows 証明書ストア

メモ: Windows 証明書ストアは、クラスタ化されたプライマリサーバーではサポートされません。

- ファイルベースの証明書

証明書ファイルでの証明書の順序

証明書ファイルには、証明書との証明書チェーンが正しい順序で含まれている必要があります。チェーンはサーバー証明書 (リーフ証明書とも呼ばれる) から始まり、ゼロ個以上の中間証明書が続きます。チェーンには、ルートCA証明書までのすべての中間証明書が含まれている必要がありますが、ルートCA証明書そのものは含まれていません。チェーン内の各証明書がチェーン内の前の証明書に署名するように、チェーンが作成されます。

証明書ファイルは、次のいずれかの形式である必要があります。

- 指定された順序で証明書が含まれた、DER または PEM エンコードされた PKCS #7 または P7B ファイル
- 指定された順序で結合された PEM 証明書を持つファイル

表 2-98 ECA_CERT_PATH の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 ファイルベースの証明書では、次の形式を使用します。 <pre>ECA_CERT_PATH = Path to the external certificate of the host</pre> 例: c:\¥server.pem Flex Appliance アプリケーションインスタンスでこのオプションを使用する場合、パスは /mnt/nbdata/hostcert/ である必要があります。 Windows 証明書ストアの場合は、次の形式を使用します。 <pre>ECA_CERT_PATH = Certificate store name¥Issuer name¥Subject name</pre> 複数の証明書ストアに関する選択の問い合わせをカンマ区切りの形式で指定できます。 <pre>ECA_CERT_PATH = Store name1¥Issuer name1¥Subject name1,Store name2¥Issuer name2¥Subject name2</pre> p.233 の「ECA_CERT_PATH の Windows 証明書ストアの指定」を参照してください。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

ECA_CERT_PATH の Windows 証明書ストアの指定

NetBackup は、Windows ホスト上のローカルマシン証明書ストアから証明書を選択します。

Windows 証明書ストアの場合、ECA_CERT_PATH はカンマ区切りの句のリストです。

各句の形式は、「ストア名¥発行者¥サブジェクト」です。句の各要素には、問い合わせが含まれています。

\$hostname は、ホストの完全修飾ドメイン名に置換されるキーワードです。実際のパス内に ¥ がある場合は二重引用符を使用します。たとえば、
MY¥Veritas¥"NetBackup¥\$hostname" のようにします。

\$shorthostname は、ホストの短縮名に置換されるキーワードです。実際のパス内に ¥ がある場合は二重引用符を使用します。たとえば、
MY¥Veritas¥"NetBackup¥\$shorthostname" のようにします。

「ストア名」には、証明書が存在するストアの正確な名前が必要です。たとえば、「MY」のようにします。

「発行者」は省略可能です。このオプションを指定すると、NetBackup は、指定された部分文字列が発行者 DN に含まれる証明書を選択します。

「サブジェクト」は必須です。NetBackup は、指定された部分文字列がサブジェクト DN に含まれる証明書を選択します。

次を確認する必要があります。

- **Windows** 証明書ストアの信頼できるルート認証局またはサードパーティのルート認証局にルート証明書を追加します。
- 中間 CA が存在する場合、**Windows** 証明書ストアの中間認証局にそれらの証明書を追加します。

例: WHERE 句を使用した証明書の場所

- `My¥Veritas¥$hostname, My¥ExampleCompany¥$hostname`
この場合 (証明書ストアは MY、発行者 DN に Veritas が含まれ、サブジェクト DN に \$hostname が含まれる) または (証明書ストア名は MY、発行者 DN に ExampleCompany が含まれ、サブジェクト DN に \$hostname が含まれる)
- `MY¥Veritas¥"NetBackup¥$hostname"`
この場合、証明書ストア名は MY、発行者 DN に Veritas が含まれ、サブジェクト DN に NetBackup¥\$hostname が含まれる
- `MY¥¥$hostname`
この場合、証明書ストア名は MY、任意の発行者 DN、サブジェクト DN に \$hostname が含まれる
- `MY¥¥$shorthostname`
この場合、証明書ストア名は MY、任意の発行者 DN、サブジェクト DN に \$shorthostname が含まれる
- `MY¥Veritas¥NetBackup $hostname`
この場合、証明書ストア名は MY、発行者 DN に Veritas が含まれ、サブジェクト DN に NetBackup \$hostname が含まれる

単語の間にスペースを指定すると、有効な文字と見なされます。

例: 無効なデータを含む証明書の場所

- `MY¥¥`
サブジェクト DN には値が必要です。
- `My¥$hostname`
サブジェクト DN には値が必要です。

- `¥¥$hostname`
証明書ストア名には、証明書が存在するストアの正確な値が必要です。
- `MY¥CN=Veritas¥CN=$hostname`
サブジェクト DN と発行者 DN に「=」や、「CN=」などの特定のタグを含めることはできません。

NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CRL_CHECK

ECA_CRL_CHECK オプションを使用すると、ホストの外部証明書の失効の確認レベルを指定できます。外部証明書の失効の確認を無効にすることもできます。確認に基づいて、ホストとの通信時に、証明書失効リスト (CRL) に対して証明書の失効状態が検証されます。

構成ファイル (UNIX または Windows レジストリの `bp.conf`) または CRL 配布ポイント (CDP) の `ECA_CRL_PATH` 構成オプションで指定されたディレクトリから CRL を使用するように選択することもできます。

p.236 の「[NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CRL_PATH](#)」を参照してください。

表 2-99 ECA_CRL_CHECK の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、<code>nbgetconfig</code> コマンドと <code>nbsetconfig</code> コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>HADOOP_CRL_CHECK = CRL check</pre> 次のいずれかを指定できます。 ■ DISABLE (または 0) - 失効の確認を無効にします。ホストとの通信時に、CRL で証明書の失効状態は検証されません。これはデフォルト値です。 ■ LEAF (または 1) - CRL でリーフ証明書の失効状態が検証されます。 ■ CHAIN (または 2) - CRL で証明書チェーンの証明書すべての失効状態が検証されます。
同等の Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CRL_PATH

ECA_CRL_PATH オプションは、ECA (外部認証局) の CRL (証明書失効リスト) が保存されているディレクトリパスを指定します。

これらの CRL は、NetBackup CRL キャッシュにコピーされます。CRL キャッシュの CRL で外部証明書の失効状態が検証されます。

CRL キャッシュ内の CRL は、ECA_CRL_PATH に指定された場所にある CRL で、ECA_CRL_PATH_SYNC_HOURS オプションに基づいて定期的に更新されます。

ECA_CRL_CHECK または HADOOP_CRL_CHECK オプションが DISABLE (または 0) に設定されておらず、ECA_CRL_PATH オプションが指定されていない場合、NetBackup は CRL 配布ポイント (CDP) で指定された URL から CRL をダウンロードし、それらを使用してピアホストの証明書の失効状態を検証します。

メモ: 仮想化サーバー証明書の失効状態の検証には、VIRTUALIZATION_CRL_CHECK オプションを使用します。

p.334 の「[NetBackup サーバーとクライアントの VIRTUALIZATION_CRL_CHECK](#)」を参照してください。

Hadoop サーバー証明書の失効状態の検証には、HADOOP_CRL_CHECK オプションを使用します。

表 2-100 ECA_CRL_PATH の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。 VMware、Red Hat Virtualization サーバー、Nutanix AHV、または Hadoop に対して証明書の検証が必要な場合、NetBackup がホストの通信に使用する認証局 (NetBackup CA または外部 CA) に関係なく、NetBackup プライマリサーバーとそれぞれのアクセスホストまたはバックアップホストでこのオプションを設定する必要があります。 VMware、Red Hat Virtualization サーバー、または Hadoop に対して証明書の検証が必要な場合、NetBackup がホストの通信に使用する認証局 (NetBackup CA または外部 CA) に関係なく、NetBackup プライマリサーバーとそれぞれのアクセスホストまたはバックアップホストでこのオプションを設定する必要があります。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用して、CRL ディレクトリのパスを指定します。 <pre>ECA_CRL_PATH = Path to the CRL directory</pre> 次に例を示します。 <pre>ECA_CRL_PATH = /usr/eca/crl/eca_crl_file.crl</pre> Flex Appliance アプリケーションインスタンスでこのオプションを使用する場合、パスは /mnt/nbdata/hostcert/crl である必要があります。
同等の UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CRL_PATH_SYNC_HOURS

ECA_CRL_PATH_SYNC_HOURS オプションは、NetBackup CRL (証明書失効リスト) キャッシュの CRL を ECA_CRL_PATH 構成オプションに指定されているディレクトリの CRL に更新する間隔 (時間単位) を指定します。

p.236 の「[NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CRL_PATH](#)」を参照してください。

CDP が CRL に使用されている場合、ECA_CRL_PATH_SYNC_HOURS オプションは適用されません。

デフォルトでは、キャッシュ内の CRL は 1 時間ごとに更新されます。

ホストとの通信時に、CRL キャッシュの CRL で外部証明書の失効状態が検証されます。

表 2-101 ECA_CRL_PATH_SYNC_HOURS の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 ECA_CRL_PATH_SYNC_HOURS = <i>Number of hours</i> 指定可能な最小時間数: 1 時間 指定可能な最大時間数: 720 時間 デフォルト値は 1 時間です。
同等の UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CRL_REFRESH_HOURS

ECA_CRL_REFRESH_HOURS オプションは、ピアホスト証明書の CRL 配布ポイント (CDP) で指定した URL から CRL をダウンロードする間隔 (時間単位) を指定します。

ECA_CRL_REFRESH_HOURS オプションは、CDP を CRL に使用するときに応用されます。

p.236 の「[NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CRL_PATH](#)」を参照してください。

指定した時間間隔が経過すると、認証局の CRL が、CDP で利用可能な URL からダウンロードされます。

デフォルトでは、24 時間ごとに CDP から CRL がダウンロードされます。

表 2-102 ECA_CRL_REFRESH_HOURS の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 ECA_CRL_REFRESH_HOURS = <i>Number of hours</i> 指定可能な最小時間数: 0 時間。CDP からの CRL が定期的にダウンロードされないことを示します。 指定可能な最大時間数: 4380 時間 このオプションのデフォルト値は 24 時間です。 メモ: ECA_CRL_REFRESH_HOURS オプションで設定した時間間隔とは関係なく、CRL は CRL キャッシュで期限切れまたは利用不能になると、ホストとの通信中に CDP からダウンロードされます。
同等の UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの ECA_DISABLE_AUTO_ENROLLMENT

外部 CA が署名した証明書を使用するように NetBackup が設定されている場合、そのような証明書はホストの通信中にプライマリサーバーに自動的に登録されます。そのような証明書の自動登録を無効にする場合は、ECA_DISABLE_AUTO_ENROLLMENT を「1」に設定します。

自動登録が無効になっている場合は、nbcertcmd -enrollCertificate コマンドを使用して外部証明書を手動で登録できます。

証明書をホストとの通信に使用するには、事前にプライマリサーバーに証明書を登録する必要があります。

デフォルトでは、証明書の自動登録は有効になっています。

表 2-103 ECA_DISABLE_AUTO_ENROLLMENT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 次の形式を使用します。 ECA_DISABLE_AUTO_ENROLLMENT = 1
同等の UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの ECA_DR_BKUP_WIN_CERT_STORE

ECA_DR_BKUP_WIN_CERT_STORE オプションでは、カタログバックアップ時に Windows 証明書ストアの情報のバックアップを作成するかどうかを指定します。

デフォルトでは、カタログバックアップ時に Windows 証明書ストアの情報のバックアップが作成されます。

メモ: Windows 証明書ストアの情報をエクスポートできない場合、カタログのバックアップ中にはバックアップを作成できません。

表 2-104 ECA_DR_BKUP_WIN_CERT_STORE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 カタログバックアップ操作で Windows 証明書ストアの情報のバックアップを作成しない場合は、次の形式を使用します。 ECA_DR_BKUP_WIN_CERT_STORE = NO
同等の UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの ECA_KEY_PASSPHRASEFILE

ECA_KEY_PASSPHRASEFILE オプションでは、外部証明書の秘密鍵のパスフレーズが格納されているテキストファイルのパスを指定します。

証明書の秘密鍵が暗号化されている場合にのみ、ECA_KEY_PASSPHRASEFILE オプションを指定する必要があります。

p.241 の「[NetBackup サーバーとクライアントの ECA_PRIVATE_KEY_PATH](#)」を参照してください。

メモ: Windows 証明書ストアを使用する場合、ECA_KEY_PASSPHRASEFILE オプションを指定しないでください。

p.231 の「[NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CERT_PATH](#)」を参照してください。

メモ: MSDP ダイレクトクラウド階層化に使用される MSDP サーバーでは ECA_KEY_PASSPHRASEFILE を使用しないでください。これは MSDP ダイレクトクラウド階層化でサポートされないためです。

表 2-105 ECA_KEY_PASSPHRASEFILE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 次の形式を使用します。 ECA_KEY_PASSPHRASEFILE = <i>Path to the passphrase file</i>
同等の UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの ECA_PRIVATE_KEY_PATH

ECA_PRIVATE_KEY_PATH オプションでは、ホストの外部 CA が署名した証明書の秘密鍵のファイルパスを指定します。

このオプションは、ファイルベースの証明書で必須です。

証明書の秘密鍵が暗号化されている場合は、ECA_KEY_PASSPHRASEFILE オプションを指定する必要があります。

p.241 の「[NetBackup サーバーとクライアントの ECA_KEY_PASSPHRASEFILE](#)」を参照してください。

NetBackup は、プレーンテキストまたは暗号化された PKCS #1 と PKCS #8 形式の秘密鍵をサポートします。これらは、PEM または DER でエンコードされている場合があります。ただし、PKCS #1 で暗号化されている場合は、PEM でエンコードされている必要があります。

暗号化された秘密鍵の場合、NetBackup は次の暗号化アルゴリズムをサポートしています。

- DES、3DES、AES (秘密鍵が PKCS #1 形式の場合)
- DES、3DES、AES、RC2、RC4 (秘密鍵が PKCS #8 形式の場合)

メモ: ECA_CERT_PATH オプションに Windows 証明書ストアを指定している場合、ECA_PRIVATE_KEY_PATH オプションは指定しないでください。

p.231 の「[NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CERT_PATH](#)」を参照してください。

表 2-106 ECA_PRIVATE_KEY_PATH の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 ECA_PRIVATE_KEY_PATH = <i>Path to the private key of the external certificate</i> 例: c:\¥key.pem Flex Appliance アプリケーションインスタンスでこのオプションを使用する場合、パスは /mnt/nbdata/hostcert/ である必要があります。
同等の UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの ECA_TRUST_STORE_PATH

ECA_TRUST_STORE_PATH オプションでは、信頼できるすべてのルート CA 証明書を含む証明書バンドルファイルへのファイルパスを指定します。

この証明書ファイルには、PEM 形式の 1 つ以上の証明書が必要です。

Windows 証明書ストアを使用する場合、ECA_TRUST_STORE_PATH オプションを指定しないでください。

トラストストアは次の形式の証明書をサポートします。

- 信頼できるルート認証局の、バンドルされている証明書を持つ PKCS #7 または P7B ファイル。このファイルは、PEM または DER でエンコードされている場合があります。
- 信頼できるルート認証局の PEM エンコードされた証明書が連結されて含まれるファイル。

このオプションは、ファイルベースの証明書で必須です。

Cloudera ディストリビューションのルート CA 証明書は、Cloudera 管理者から取得できます。Hadoop クラスタで手動 TLS 構成または自動 TLS が有効になっている場合があります。いずれの場合も、NetBackup では管理者からのルート CA 証明書が必要になります。

セキュア (SSL) クラスタの場合、Hadoop クラスタのルート CA 証明書を使用してすべてのノードの証明書を検証し、NetBackup でバックアップおよびリストアプロセスを実行できます。このルート CA 証明書は、このようなすべてのノードに対して発行された証明書のバンドルです。

自己署名 CA 環境、サードパーティ CA 環境、ローカル/中間 CA 環境の場合、ECA_TRUST_STORE_PATH でルート CA の証明書を構成する必要があります。たとえば、自動 TLS が有効な Cloudera 環境では、通常、cm-auto-global_cacerts.pem という名前のルート CA ファイルが /var/lib/cloudera-scm-agent/agent-cert のパスに置かれています。詳しくは、Cloudera のマニュアルを参照してください。

表 2-107 ECA_TRUST_STORE_PATH の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。 VMware、Red Hat Virtualization サーバー、Nutanix AHV に対して証明書の検証が必要な場合、NetBackup がホストの通信に使用する認証局 (NetBackup CA または外部 CA) に関係なく、NetBackup プライマリサーバーとそれぞれのアクセスホストでこのオプションを設定する必要があります。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>ECA_TRUST_STORE_PATH = Path to the external CA certificate</pre> 例: c:\¥rootCA.pem Flex Appliance アプリケーションインスタンスでこのオプションを使用する場合、パスは /mnt/nbdata/hostcert/ である必要があります。
同等の UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup のサーバーとクライアントの EAT_VERBOSE オプション

デバッグの目的で使われる EAT_VERBOSE オプションは、NetBackup によって NetBackup プロセスに関連する認証サービス (AT) クライアントのログに含められる情報の量を制御します。

表 2-108 EAT_VERBOSE 情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>EAT_VERBOSE = [0 1 2 3 4]</pre> デフォルトではこのエントリが構成ファイルにありません。 デフォルトのログ記録レベルに基づいて、エラーのみを報告する NetBackup プロセスの AT ログが生成されます。 AT サービスを使用する NetBackup プロセスのいくつかを次に示します。 ■ bpnbat ■ bpnbaz ■ nbcertcmd ■ nbsl EAT_VERBOSE エントリが構成ファイルに存在する場合は、NetBackup プロセスに対する AT ログの詳細度は EAT_VERBOSE オプションに基づきます。AT ログはそれぞれのプロセスログファイルに格納されます。 NetBackup プロセスに対する AT ログ記録を無効にするには、構成ファイルの EAT_VERBOSE オプションを -2 に設定します。 次の形式を使用します。 <pre>EAT_VERBOSE = -2</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの ECA_WIN_CERT_STORE_TIME_LAG_MINUTES

ECA_WIN_CERT_STORE_TIME_LAG_MINUTES オプションを使用して、サーバーのシステム時刻とクライアントのシステム時刻が一致しない場合に発生する可能性がある通信エラーの問題を回避します。この時差によりセキュリティ証明書がまだ有効になっていないことがあるため、通信する 2 つのホスト間で安全な接続を確立できない場合があります。現在のシステム時刻は、選択した証明書の[次から有効 (Valid from)]の時間よりも遅れている可能性があります。

表 2-109 ECA_WIN_CERT_STORE_TIME_LAG_MINUTES の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>GENERIC_KEY_VAL_LIST = (ECA_WIN_CERT_STORE_TIME_LAG_MINUTES) (time in minutes)</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

サーバーの ECMS_HOSTS_SECURE_CONNECT_ENABLED

ECMS_HOSTS_SECURE_CONNECT_ENABLED オプションは、SSL 接続中の外部 CMS サーバーのホスト名の検証を有効または無効にします。このオプションを有効にする前に、『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』の外部クレデンシャルの構成に関するセクションを確認してください。

デフォルトでは、ECMS_HOSTS_SECURE_CONNECT_ENABLED オプションは YES (有効) に設定されています。有効な場合、外部 CMS サーバー (CyberArk サーバーなど) に配備された証明書には、外部 CMS サーバーのホスト名と一致する一般名またはサブジェクトの別名が必要です。これらがないと、サーバーへの SSL 接続は失敗します。ホスト名の検証は、ECMS_HOSTS_SECURE_CONNECT_ENABLED オプションの値を NO または FALSE に設定することで無効にできます。

メモ: クライアントが正しいサーバーに接続しており、中間者攻撃によってリダイレクトされていないことを確認するため、ホスト名の検証にはサーバー ID の確認が含まれます。この確認では、サーバーから送信された証明書の表示と、証明書の `subjectAltName` フィールドの `dnsName` が、要求に使用される URL のホスト部分と一致することが検証されます。

表 2-110 ECMS_HOSTS_SECURE_CONNECT_ENABLED の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 外部 CMS サーバーの証明書検証を無効にするには、次の形式を使用します。 <pre>ECMS_HOSTS_SECURE_CONNECT_ENABLED = NO</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの ENABLE_CRITICAL_PROCESS_LOGGING

ENABLE_CRITICAL_PROCESS_LOGGING オプションを使うと、重要な NetBackup プロセスを自動的にログできます。このオプションを[ログ (Logging)]ホストプロパティで有効にすると、重要なプロセスのログディレクトリが作成され、ログが開始されます。

表 2-111 ENABLE_CRITICAL_PROCESS_LOGGING の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 初期状態では、bp.conf ファイルに ENABLE_CRITICAL_PROCESS_LOGGING エントリはありません。 重要なプロセスのログを有効にした後、対応するエントリが次のように bp.conf ファイルに追加されます。 <pre>ENABLE_CRITICAL_PROCESS_LOGGING = YES</pre> メモ: ENABLE_CRITICAL_PROCESS_LOGGING パラメータは変更するべきではありません。重要なプロセスのログを無効にするには、これらのプロセスのログレベルを変更します。

使用方法	説明
同等の Web UI ホストプロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]>ホストを選択>[ログ (Logging)]>[重要なプロセスのログ (Logging for critical processes)]。 p.120 の「 ログ (Logging) プロパティ 」を参照してください。

サーバーの ENABLE_DIRECT_CONNECTION

NAT クライアントを配備すると、NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバーはクライアントからの通信要求のみを受け入れるように構成されます。

サーバーは、クライアントと直接通信できません。ENABLE_DIRECT_CONNECTION オプションを使用して、必要に応じてサーバーとクライアント間の直接接続を確立できます。

サーバーがクライアントに直接接続する必要があるシナリオの例を次に示します。

- ファイアウォールがない、またはゲートウェイを使用していないクライアントによって NetBackup ドメインが構成されているとき
- 以前のバージョンのクライアントで NetBackup ドメインが構成されているとき

デフォルトでは、サーバーとクライアント間の直接接続は無効です。

表 2-112 ENABLE_DIRECT_CONNECTION の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバー側
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 サーバーとクライアント間の直接接続を有効にするには、次の形式を使用します。 ENABLE_DIRECT_CONNECTION = TRUE
同等の NetBackup Web UI ホストプロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの ENABLE_NBSQLADM オプション

このオプションは nbsqladm コマンドを有効または無効にします。T

表 2-113 ENABLE_NBSQLADM の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示または変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>ENABLE_NBSQLADM = value</pre> デフォルトの値は 1 です。 このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
例	サーバーまたはクライアントで、次のようにエントリを編集してコマンドを無効にします。 <pre>ENABLE_NBSQLADM = 0</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVERS オプション

このオプションは、サーバーがリストアで一時的にアクセス不能になった場合に、自動フェールオーバーのメディアサーバーを使うことを指定します。フェールオーバーには、管理者が介入する必要がありません。

表 2-114 FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVERS の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVERS = failed_host host1 host2 ... hostN</pre> ■ failed_host は、操作できないサーバーです。 ■ host1 ... hostN は、フェールオーバー機能を提供するサーバーです。 デフォルトでは、NetBackup は自動フェールオーバーを実行しません。 サーバーに自動フェールオーバーが必要な場合、NetBackup によって、関連付けられた FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVERS リストの全範囲が左から右に検索されます。検索は、リストアを実行可能なサーバーが検出されると停止します。 メモ: 設定ファイルには複数の FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVERS エントリを含めることができ、各エントリは複数のサーバーをリストできます。ただし、failed_host として NetBackup サーバーを指定できるのは、1 つのオプションだけです。 FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVERS オプションの追加後、構成を変更するプライマリサーバー上の NetBackup Request デーモンを停止してから、再起動します。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 >[リストアのフェールオーバー (Restore failover)]。 p.161 の「[リストアのフェールオーバー (Restore failover)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーとクライアントの FETCH_MSDP_EKMS_KEY

NetBackup 11.1 以降、KMIP 暗号化/復号化操作は、外部 KMS サーバーとの通信に使用することが推奨されます。KMS サーバーが暗号化/復号化操作をサポートしていない場合、NetBackup は自動的に GetKey 操作を使用して KMS サーバーと通信を開始します。

GetKey 操作では、キーが KMS サーバーから NetBackup プライマリサーバーに転送されるため、セキュリティの問題が発生する可能性があります。

KMS サーバーから NetBackup プライマリサーバーへのキーの転送を無効にするには、FETCH_MSDP_EKMS_KEY 構成オプションを「0」または「False」に設定します。

表 2-115

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 KMS サーバーから NetBackup プライマリサーバーへのキーの転送を無効にするには、次の形式を使用します。 <pre>FETCH_MSDP_EKMS_KEY = 0</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	Web UI に同等のプロパティはありません。

NetBackup サーバーの FORCE_RESTORE_MEDIA_SERVER オプション

ファイルがバックアップされている場所にかかわらず、リストアを特定のサーバー上で実行します。

表 2-116 FORCE_RESTORE_MEDIA_SERVER の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>FORCE_RESTORE_MEDIA_SERVER = from_host to_host</pre> ここで、from_host は最初のバックアップを行ったサーバー、to_host はリストアに使用するサーバーです。 FORCE_RESTORE_MEDIA_SERVER オプションの追加後、プライマリサーバー上の NetBackup Request デーモンを停止してから、再起動します。リストアを試行する前に、メディアを to_host に物理的に移動します。Media Manager のボリュームデータベースを更新して移動を反映します。 この設定は、元のサーバー上のすべてのストレージユニットに適用されます。from_host 上のすべてのストレージユニットに対するリストアが、to_host に移動します。今後のリストアのために構成を元に戻すには、オプションを削除します。

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 > [一般的なサーバー (General server)]>[メディアホストの上書き (Media host override)]. p.112 の「[一般的なサーバー (General server)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーとクライアントの GENERATE_ENGLISH_LOGS オプション

英語のエラーログの生成を有効にします。また、bparchive、bpbackup、bpduplicate、bpimport、bprestore コマンドに対して、英語のトレースログの生成を有効にします。このオプションは、異なるロケールでさまざまな言語を含むログが作成される分散環境において有効です。

英語のエラーログ (`_en` という接尾辞で示される) が次のディレクトリに作成されます。

- Windows の場合: `Install_path\NetBackup\db\error`
- UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/db/error`

表 2-117 GENERATE_ENGLISH_LOGS の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 GENERATE_ENGLISH_LOGS このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 また、GENERATE_ENGLISH_LOGS オプションを設定し、bparchive、bpbackup、bpduplicate、bpimport、bprestore コマンドの実行時に進捗ログ (-L) を指定すると、引数 <code>-en</code> が強制的に追加されます。 接尾辞 <code>_en</code> は、英語の進捗ログであることを示します。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの GUI_ACCOUNT_LOCKOUT_DURATION オプション

この設定は、ユーザーが失敗したログオン試行の最大数を超えた後にユーザーアカウントがロックアウトされる期間を決定します。この期間が過ぎると、アカウントのロックが解除されます。

表 2-118 GUI_ACCOUNT_LOCKOUT_DURATION の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>GUI_ACCOUNT_LOCKOUT_DURATION = minutes</pre> デフォルト値は 15 分です。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 >[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]>[次の経過後にロックされたアカウントをロック解除する (Unlock locked accounts after)]。 [セキュリティ (Security)]>[ユーザーセッション (User sessions)]>[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]>[次の経過後にロックされたアカウントをロック解除する (Unlock locked accounts after)]。

NetBackup サーバーの GUI_IDLE_TIMEOUT オプション

この設定では、指定した期間に GUI が操作されない場合、ユーザーセッションからのログアウトを実行します。

表 2-119 GUI_IDLE_TIMEOUT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>GUI_IDLE_TIMEOUT = minutes</pre> GUI_IDLE_TIMEOUT は、デフォルトでは無効になっています。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 >[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]>[セッションアイドルタイムアウト (Session idle timeout)]。 [セキュリティ (Security)]>[ユーザーセッション (User sessions)]>[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]>[セッションアイドルタイムアウト (Session idle timeout)]。

NetBackup サーバーの GUI_MAX_CONCURRENT_SESSIONS オプション

この設定によって、ユーザーがアクティブにできる並列実行 API セッションの数が制限されます。API セッションは NetBackup 管理コンソールの一部のアプリケーションで使用されます。この設定は、API キーセッションや、NetBackup のバックアップ、アーカイブ、リストアインターフェースなどのその他のアプリケーションには適用されません。

表 2-120 GUI_MAX_CONCURRENT_SESSIONS の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>GUI_MAX_CONCURRENT_SESSIONS = number of sessions</pre> ここで、[セッション数 (<i>number of sessions</i>)] は、ユーザーが同時に開くことができるセッション数を示します。 GUI_MAX_CONCURRENT_SESSIONS は、デフォルトでは無効になっています。

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 > [ユーザーアカウント設定 (User account settings)]>[最大並列セッション数 (Maximum concurrent sessions)]。 [セキュリティ (Security)]>[ユーザーセッション (User sessions)]>[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]>[最大並列セッション数 (Maximum concurrent sessions)]。

NetBackup サーバーの GUI_MAX_LOGIN_ATTEMPTS オプション

この設定はログオン試行失敗の回数を決定し、この回数を超えると NetBackup Web UI に対してアカウントがロックされます。

表 2-121 GUI_MAX_LOGIN_ATTEMPTS の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 次の形式を使用します。 <code>GUI_MAX_LOGIN_ATTEMPTS = number of attempts</code> ここで、 <i>number of attempts</i> は、ユーザーアカウントをロックするまでのログオンの試行回数を示します。 デフォルト値は 5 です。 デフォルトでは、このオプションは無効になっています。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 > [ユーザーアカウント設定 (User account settings)]>[サインイン試行失敗の許容回数 (Number of failed sign-in attempts allowed)]。 [セキュリティ (Security)]>[ユーザーセッション (User sessions)]>[ユーザーアカウント設定 (User account settings)]>[サインイン試行失敗の許容回数 (Number of failed sign-in attempts allowed)]。

NetBackup サーバーとクライアントの HOSTDB_RESYNC_INTERVAL オプション

HOSTDB_RESYNC_INTERVAL オプションでは、ホストの情報を NetBackup プライマリサーバーのホストデータベースと同期させる時間間隔を指定します。

表 2-122 HOSTDB_RESYNC_INTERVAL 情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>HOSTDB_RESYNC_INTERVAL = hours</pre> デフォルト値は 24 時間 (1 日) です。 このオプションの最大値は 168 時間 (7 日間) です。このオプションの最小値は 0 です。 このオプションを 0 に設定すると、ホストデータベースへの定期的な更新が無効になります。また、bpcd サービスの再起動後にホストデータベースへの更新が無効にします。 このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	次の例では、ホストデータベースとのデータ同期を可能にする間隔を 72 時間 (3 日間) に設定します。 <pre>HOSTDB_RESYNC_INTERVAL = 72</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの HYPERV_WMI_CREATE_DISK_TIMEOUT オプション

このオプションは、WMI 方式でバックアップを作成した Hyper-V VM のリストア時に仮想ディスクを作成する場合のタイムアウト期間を指定します。

表 2-123 HYPERV_WMI_CREATE_DISK_TIMEOUT 情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	bpsetconfig コマンドまたは nbsetconfig コマンドを使用して HYPERV_WMI_CREATE_DISK_TIMEOUT を変更します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 デフォルトは 24 時間 です。このオプションの範囲は 0 時間から 240 時間 です。値が 0 の場合、仮想ディスクの作成中にリストアジョブがタイムアウトになることはありません。

使用方法	説明
例	次のエントリは、NetBackup リストアジョブに対して、Hyper-V 仮想ディスクの作成のために 48 時間待機するよう指示します。 <pre>HYPERV_WMI_CREATE_DISK_TIMEOUT = 48</pre> この構成オプションについて詳しくは、『NetBackup for Hyper-V 管理者ガイド』を参照してください。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの INCOMPLETE_JOB_CLEAN_INTERVAL オプション

失敗したリストアジョブが、未完了の状態として保持される日数を示します。この日数が経過した後、ジョブは完了状態に移行します。

表 2-124 INCOMPLETE_JOB_CLEAN_INTERVAL の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>INCOMPLETE_JOB_CLEAN_INTERVAL = number_of_days</pre> デフォルトは 7 日です。 ここで、x は、0 から 365 の範囲の値です。値を 0 (ゼロ) にすると、失敗した未完了のジョブは自動的に完了状態に移行しません。 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーまたはクライアントを選択 >[クリーンアップ (Cleanup)]>[リストアジョブを未完了状態から完了状態に変更する (Move restore job from incomplete state to done state)]。 p.64 の「クリーンアップ (Clean up)プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーとクライアントの INITIAL_BROWSE_SEARCH_LIMIT オプション

このオプションで、NetBackup でリストアのファイルを検索するためにさかのぼる日数を指定します。多数のバックアップを実行する場合に、パフォーマンスを改善できます。

表 2-125 INITIAL_BROWSE_SEARCH_LIMIT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>INITIAL_BROWSE_SEARCH_LIMIT = number_of_days</pre> デフォルトでは、NetBackup に最後の完全バックアップからクライアントの最後のバックアップまでのファイルが含まれます。クライアントが複数のポリシーに属している場合、最後に実行された一連の完全バックアップのうち、最も古いものから参照が開始されます。 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 このオプションが UNIX クライアント上で指定された場合、そのクライアントだけに適用されます。このオプションを指定すると、検索ウィンドウのサイズをサーバーで指定したサイズより小さくすることができます (クライアントの設定では、ウィンドウを大きくできません)。
例	次の例では参照範囲を現在の日付から 7 日前までに制限します。 <pre>INITIAL_BROWSE_SEARCH_LIMIT = 7</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーまたはクライアントを選択 >[ユニバーサル設定 (Universal settings)]>[リストアの参照期間を設定する (Browse timeframe for restores)]。 p.189 の「[ユニバーサル設定 (Universal settings)]プロパティ」を参照してください。

サーバーの INITIATE_REVERSE_CONNECTION

INITIATE_REVERSE_CONNECTION オプションを使用すると、プライマリサーバーまたはメディアサーバーが NAT クライアントまたは NAT サーバー (または NAT ホスト) と通信中に、Message Queue Broker にメッセージを発行できます。

表 2-126 INITIATE_REVERSE_CONNECTION の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバー側
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 NAT ホストとの逆方向の接続を開始するには、次の形式を使用します。 <pre>INITIATE_REVERSE_CONNECTION = TRUE</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの IP_ADDRESS_FAMILY オプション

IP_ADDRESS_FAMILY オプションは、このホストの NetBackup が IPv4 のみをサポートするか、IPv4 と IPv6 の両方をサポートするかを示します。

SERVER エントリのうちのいずれかが IPv4 をサポートしていない場合、NetBackup は IPv4 と IPv6 の両方を指定する設定を使用します。

表 2-127 IP_ADDRESS_FAMILY の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。

使用方法	説明
使用方法	IPv4 と IPv6 の両方を使用するホストで、使用するアドレスファミリーを指定するためにこのオプションを使用します。 オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>IP_ADDRESS_FAMILY = AF_INET AF_INET6 AF_UNSPEC</pre> AF_INET はホストが IPv4 のみをサポートすることを示します。 AF_INET6 はホストが IPv6 のみをサポートすることを示します。 AF_UNSPEC はホストが IPv4 と IPv6 の両方をサポートすることを示します。 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> ホストを選択 >[ネットワーク設定 (Network settings)]。 p.133 の「[ネットワーク設定 (Network settings)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーとクライアントの JOB_PRIORITY オプション

このオプションを使用してジョブの形式の優先度を設定します。

表 2-128 JOB_PRIORITY の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはクライアント上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>JOB_PRIORITY = P1 P2 P3 P4 P5 P6 P7 P8 P9 P10 P11 P12 P13 P14 P15 P16 P17 P18 P19 P20 P21 P22 P23 P24</pre> 変数 P1、P2 などは、各バックアップ形式の優先度を示しています。 表 2-129 にデフォルトの優先度値を示します。 このオプションの実際のデフォルト値は、次のとおりです。 <pre>JOB_PRIORITY = 0 0 90000 90000 90000 90000 85000 85000 80000 80000 80000 80000 75000 75000 70000 70000 50000 50000 0 0 0 0 0 0</pre> このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	バックアップジョブに 50000、複製ジョブに 30000 の優先度を与えるには、JOB_PRIORITY エントリを次のように変更します。 <pre>JOB_PRIORITY = 50000 0 90000 90000 90000 90000 85000 85000 80000 80000 80000 80000 75000 75000 70000 70000 30000 50000 0 0 0 0 0 0</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーまたはクライアントを選択 >[デフォルトのジョブの優先度 (Default job priorities)]>[ジョブの優先度 (Job priority)]。 p.90 の「[デフォルトのジョブの優先度 (Default job priorities)]プロパティ」を参照してください。

[表 2-129](#) に、ジョブ形式の優先度と各種ジョブ形式のデフォルトを示します。

表 2-129 ジョブ形式のデフォルトの優先度

フィールド	処理の内容	デフォルト
P1	バックアップの実行	0
P2	データベースのバックアップの実行 (カタログバックアップ)	0
P3	リストアの実行	90000

フィールド	処理の内容	デフォルト
P4	カタログのリカバリ	90000
P5	ステージング操作の実行	90000
P6	Vault が開始した複製ジョブの実行	90000
P7	イメージのクリーンアップ	85000
P8	イメージのインポート	85000
P9	テープの要求	80000
P10	テープのクリーニング	80000
P11	テープのフォーマット	80000
P12	デバイスの診断の実行	80000
P13	イメージの検証	75000
P14	メディアの内容レポートの実行	75000
P15	テープメディアのラベル付け	70000
P16	メディアの消去	70000
P17	複製ジョブの実行	50000
P18	インベントリの実行	50000
P19	このフィールドは現在使用されていません	0
P20	このフィールドは現在使用されていません	0
P21	このフィールドは現在使用されていません	0
P22	このフィールドは現在使用されていません	0
P23	このフィールドは現在使用されていません	0
P24	このフィールドは現在使用されていません	0

NetBackup サーバーとクライアントの KEEP_LOGS_SIZE_GB

KEEP_LOGS_SIZE_GB オプションでは、保持する NetBackup ログのサイズを指定します。NetBackup ログのサイズがこの設定値まで増加すると、古いログが削除されます。

表 2-130 KEEP_LOGS_SIZE_GB の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 初期状態では、bp.conf ファイルに KEEP_LOGS_SIZE_GB エントリはありません。 ログの保持を GB 単位で設定するには、NetBackup 管理コンソールの [ログ (Logging)] ダイアログボックスで [次までログを保持する: GB (Keep logs up to GB)] オプションを有効にします。対応のエントリが次のように bp.conf ファイルに追加されます。 <pre>KEEP_LOGS_SIZE_GB = 25</pre> [次までログを保持する: GB (Keep logs up to GB)] オプションを無効にすると、bp.conf ファイルで対応のエントリが次のように表示されます。 <pre>KEEP_LOGS_SIZE_GB = 0</pre> 異なる値に設定するには、nbsetconfig コマンドを利用して bp.conf ファイルを更新します。 次の形式を利用すると、KEEP_LOGS_SIZE_GB を bp.conf ファイル内で新しい値に設定できます。 <pre>KEEP_LOGS_SIZE_GB = X</pre> 「X」はログサイズを GB 単位で示します。 メモ: NetBackup サーバーの場合、KEEP_LOGS_SIZE_GB オプションの推奨値は 25 GB 以上です。 NetBackup クライアントの場合、KEEP_LOGS_SIZE_GB オプションの推奨値は 5 GB 以上です。 このエントリは、bp.conf 設定ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)] > [ホストプロパティ (Host properties)] サーバーを選択 > [ログ (Logging)] > [最大ログサイズ (Maximum log size)]。 p.120 の「[ログ (Logging)] プロパティ」を参照してください。

NetBackup プライマリサーバーの KMS_CONFIG_IN_CATALOG_BKUP

カタログバックアップ時に、KMS 構成をディザスタリカバリ (DR) パッケージの一部として含めるには、KMS_CONFIG_IN_CATALOG_BKUP オプションを使用します。

表 2-131

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 デフォルトでは、KMS_CONFIG_IN_CATALOG_BKUP オプションは「0」(ゼロ) に設定されています。 カタログバックアップ時に、KMS 構成をディザスタリカバリ (DR) パッケージの一部として含めるには次の形式を使用します。 KMS_CONFIG_IN_CATALOG_BKUP = 1
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの LIMIT_BANDWIDTH オプション

ネットワーク上の複数の NetBackup クライアントで使用する、ネットワーク帯域幅の制限を指定します。実際の制限は、バックアップ接続のクライアント側で発生します。このオプションでは、バックアップだけが制限されます。リストアには影響しません。デフォルトでは、帯域幅は制限されません。

メモ: LIMIT_BANDWIDTH は IPv4 ネットワークにのみ適用されます。IPv6 ネットワークを制限するには、オプションを使います。THROTTLE_BANDWIDTH

p.185 の「[\[スロットル帯域幅 \(Throttle bandwidth\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

NetBackup サーバーの MALWARE_DETECTION_JOBS_PER_SCAN_HOST オプション

MALWARE_DETECTION_JOBS_PER_SCAN_HOST パラメータを使用して、各スキャンホストで許可される並列スキャンの数を設定します。

表 2-132 MALWARE_DETECTION_JOBS_PER_SCAN_HOST オプションの情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 MALWARE_DETECTION_JOBS_PER_SCAN_HOST = 5 デフォルト値: ■ スキャンホストごとの並列スキャン数の限度は 3 です。 ■ サポートされる最小値は 1 です。 ■ サポートされる最大値は 10 です。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

MALWARE_SCAN_OPERATION_TIMEOUT

MALWARE_SCAN_OPERATION_TIMEOUT パラメータを使用すると、タイムアウトになる前に実行できるスキャン操作の期間を設定できます。

バックアップイメージのスキャン操作は、バックアップサイズやバックアップ内のファイル数などの要因によっては、時間がかかる場合があります。デフォルトでは、スキャン操作は 2 日後にタイムアウトします。タイムアウト値は、1 時間から 30 日までの範囲で設定できます。

表 2-133 MALWARE_SCAN_OPERATION_TIMEOUT オプションの情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup メディアサーバー上で

使用方法	説明
使用方法	タイムアウト値を表示、追加、または変更するには、nbgetconfig または nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 ScanManager (nbcs) が開始される MSDP メディアサーバーで構成キーを設定します。複数の MSDP メディアサーバーの場合は、各サーバーに構成キーを設定します。 次の形式を使用します。 MALWARE_SCAN_OPERATION_TIMEOUT = 120 デフォルトでは、スキャン操作のタイムアウト値は 2,880 分 (2 日) です。サポートされる最小値は 60 分 (1 時間) で、最大値は 43,200 分 (30 日) です。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup プライマリサーバーの MANAGE_WIN_CERT_STORE_PRIVATE_KEY オプション

MANAGE_WIN_CERT_STORE_PRIVATE_KEY オプションを使用して、Windows 証明書ストアにある証明書の秘密鍵に対する権限の自動管理を無効にできます。

このオプションは、NetBackup サービスがローカルサービスアカウントのコンテキストで実行されている場合にのみ、Windows 証明書ストアに適用されます。

NetBackup サービスがローカルサービスアカウントのコンテキストで実行されている場合、サービスには Windows 証明書ストアで証明書の秘密鍵を読み取る権限が付与されている必要があります。

MANAGE_WIN_CERT_STORE_PRIVATE_KEY オプションを Automatic に設定すると、特権ユーザーアカウントのコンテキストで実行されている NetBackup サービスは、必要に応じてその他すべての NetBackup サービスに秘密鍵を読み取るためのアクセス権を付与します。

デフォルトでは、秘密鍵の権限は自動で管理されます。

MANAGE_WIN_CERT_STORE_PRIVATE_KEY オプションを Disabled に設定すると、秘密鍵の権限を手動で管理する必要があります。

メモ: MANAGE_WIN_CERT_STORE_PRIVATE_KEY オプションを Disabled に設定することはお勧めしません。

このオプションが Disabled の場合に権限を手動で更新するには、次のコマンドを実行します。

```
nbcertcmd -setWinCertPrivKeyPermissions -reason audit reason -force
```

コマンドラインオプションについて詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

表 2-134 MANAGE_WIN_CERT_STORE_PRIVATE_KEY の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 次の形式を使用します。 MANAGE_WIN_CERT_STORE_PRIVATE_KEY = Automatic
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントのレガシーログに関する MAX_LOGFILE_SIZE オプション

MAX_LOGFILE_SIZE オプションによって、ログファイルに設定する最大サイズが指定されます。NetBackup のログファイルのサイズが MAX_LOGFILE_SIZE の設定と一致する場合には、次のログが新しいログファイルに格納されます。

表 2-135 MAX_LOGFILE_SIZE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig (または bpgetconfig) および nbsetconfig (または bpsetconfig) コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 bp.conf ファイル内で、次の形式を使用して MAX_LOGFILE_SIZE に新しい値を設定します。 <pre>MAX_LOGFILE_SIZE = X</pre> 「X」は NetBackup ログファイルの最大サイズを示します (MB 単位)。 メモ: MAX_LOGFILE_SIZE は、「0」(ゼロ) よりも大きい整数に設定する必要があります。MAX_LOGFILE_SIZE は、0 や -100 などの無効な値に設定されると、自動的にデフォルト値 (500 MB) に設定されます。 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントのレガシーログに関する MAX_NUM_LOGFILES オプション

MAX_NUM_LOGFILES オプションによって、NetBackup ログディレクトリ内に保持されるログファイルの最大数が指定されます。ディレクトリのログファイル数が MAX_NUM_LOGFILES の設定に一致すると、最も古いログファイルが削除されます。

表 2-136 MAX_NUM_LOGFILES の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig (または bpgetconfig) および nbsetconfig (または bpsetconfig) コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 bp.conf ファイル内で、次の形式を使用して MAX_NUM_LOGFILES に新しい値を設定します。 <pre>MAX_NUM_LOGFILES = X</pre> 'X' はログディレクトリに作成される NetBackup ログファイルの最大数を示します。 MAX_NUM_LOGFILES は、1 より大きい数に設定する必要があります。MAX_NUM_LOGFILES は、0 や 1 などの無効な値に設定すると、自動的にデフォルト値、無限に設定されます。ただし、bp.conf ファイルで、MAX_NUM_LOGFILES エントリは次のように表示されます。 <pre>MAX_NUM_LOGFILES = 0</pre> 0 (ゼロ) を指定すると、無限の値を示します。 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの MEDIA_UNMOUNT_DELAY オプション

MEDIA_UNMOUNT_DELAY が指定されると、要求された操作の完了後、指定された秒数だけメディアのアンロードが遅延されます。(ユーザーによる操作だけに適用。)

表 2-137 MEDIA_UNMOUNT_DELAY の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>MEDIA_UNMOUNT_DELAY = seconds</pre> デフォルトのメディアのマウントの遅延は 180 秒です。 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。

使用方法	説明
例	次の例では、遅延は 120 秒に設定されます。 <code>MEDIA_UNMOUNT_DELAY = 120</code>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 >[メディア (Media)]>[メディアのマウント解除の遅延 (Media unmount delay)]。 p.126 の「 [メディア (Media)]プロパティ 」を参照してください。

NetBackup サーバーの MEDIA_REQUEST_DELAY オプション

このオプションは、NetBackup が非ロボットのドライブの準備が完了するまでに待機する時間 (秒数) を指定します。

表 2-138 MEDIA_REQUEST_DELAY の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	nbemmcmd コマンドを使用して MEDIA_REQUEST_DELAY を変更します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 デフォルトでは、NetBackup は非ロボットのドライブが準備完了になるまで待機しません。 このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	次のコマンドで、非ロボットのドライブが使える状態になるまで NetBackup が 150 秒待機するよう指定します。 <code>nbemmcmd -changesetting -MEDIA_REQUEST_DELAY 150</code>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 >[メディア (Media)]>[メディア要求遅延 (Media request delay)]。 p.126 の「 [メディア (Media)]プロパティ 」を参照してください。

NetBackup サーバーの MEDIA_SERVER オプション

このオプションは オプションに類似しています。SERVER

MEDIA_SERVER として表示されたホストは、クライアントに対してバックアップおよびリストアを実行できます。ただし、そのホストが SERVER として指定されていない場合、そのホストの管理機能は制限されます。

表 2-139 MEDIA_SERVER の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>MEDIA_SERVER = media_server_name</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 >[サーバー (Servers)]>[メディアサーバー (Media servers)]。 p.169 の「[サーバー (Servers)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの MINIMUM_DEFERRAL_CACHE_FREE_SPACE_MB オプション

耐性が高いバックアップのこの高水準点は、ディスク上で保持する空き領域の量を指定します。プライマリサーバーとの通信の再確立を待機しているバックアップジョブは、メタデータをキャッシュできないと一時停止します。値は **MB** 単位で指定します。最小値は **0** (ゼロ) で、これは利用可能なすべてのディスク容量を使用することを意味します。

RESILIENT_BACKUP_JOB_DEFERRAL_CACHE_FILE_PATH と MINIMUM_DEFERRAL_CACHE_FREE_SPACE_MB の値の関係に注意してください。キャッシュ情報の書き込み先を指定するには、RESILIENT_BACKUP_JOB_DEFERRAL_CACHE_FILE_PATH を使用します。確保する空きディスク容量のサイズを指定するには、MINIMUM_DEFERRAL_CACHE_FREE_SPACE_MB を使用します。

表 2-140

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup メディアサーバー上で

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>MINIMUM_DEFERRAL_CACHE_FREE_SPACE_MB = number</pre> このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 MINIMUM_DEFERRAL_CACHE_FREE_SPACE_MB のデフォルト値は 5000 MB です。
例	メディアサーバーで、次のエントリを追加して、ディスク上で保持する空き領域の量を指定します。 <pre>MINIMUM_DEFERRAL_CACHE_FREE_SPACE_MB = 100</pre>

NetBackup サーバーの MPX_RESTORE_DELAY オプション

このオプションは多重リストアに適用されます。MPX_RESTORE_DELAY は、ファイルと raw パーティションに対して、サーバーがリストア要求を待機する時間を指定します。この場合、オプションは同じテープ上の多重化イメージセット内に存在するファイルと raw パーティションに適用されます。この遅延期間内に受け取ったすべてのリストア要求は、同一のリストア操作に含まれます (テープに 1 回の操作で渡されます)。

表 2-141 MPX_RESTORE_DELAY の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>MPX_RESTORE_DELAY = seconds</pre> デフォルトは 30 秒です。 このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	次の例ではサーバーの待機時間を 15 分に構成しています。 <pre>MPX_RESTORE_DELAY = 900</pre>

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 > [一般的なサーバー (General server)]>[多重化リストアの遅延 (Delay on multiplexed restores)]。 p.112 の「[一般的なサーバー (General server)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの MUST_USE_LOCAL_DRIVE オプション

このオプションで、クライアントがメディアサーバーでもあり、このオプションが存在する場合、このクライアントのバックアップを常にローカルドライブで実行するように NetBackup に指示します。すべてのローカルドライブが停止している場合は、別のドライブが使用されることがあります。クライアントがメディアサーバーでない場合、このオプションは無効です。

表 2-142 MUST_USE_LOCAL_DRIVE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションの変更には、nbemmcmd コマンドを使います。例： nbemmcmd -changesetting -MUST_USE_LOCAL_DRIVE yes これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 > [一般的なサーバー (General server)]>[必ずローカルドライブを使用する (Must use local drive)]。 p.112 の「[一般的なサーバー (General server)]プロパティ」を参照してください。

サーバーの NAT_SERVER_LIST

NAT_SERVER_LIST オプションは、パブリックネットワーク内の NetBackup サーバーがリバース接続を確立できる NAT サーバーを指定するために使用されます。このオプションが構成されていない場合、NetBackup サーバーは同一ネットワーク内にあると見なされます。

表 2-143 NAT_SERVER_LIST の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバー側

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>NAT_SERVER_LIST = NAT server 1 NAT server 2</pre> NAT サーバーの名前は、スペースで区切って指定する必要があります。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの NB_FIPS_MODE オプション

NB_FIPS_MODE オプションを使用して、NetBackup ドメインで FIPS モードを有効にします。

表 2-144 NB_FIPS_MODE 情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 デフォルトでは、NB_FIPS_MODE オプションは無効になっています。 このオプションを有効にするには、次の形式を使用します。 <pre>NB_FIPS_MODE = ENABLE</pre> このオプションを無効にするには、次の形式を使用します。 <pre>NB_FIPS_MODE = DISABLE</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの NBFP_CHECK オプション

NBFP_CHECK オプションを使用して、NetBackup ファイルの権限と所有権を検証、修正、Web UI に報告するかどうかを制御します。

表 2-145

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 NBFP_CHECK 構成オプションには、次の値を設定できます。 FIX – ファイルの権限と所有権を修正します。 FIX_NOTIFY – ファイルの権限と所有権を修正し、結果を NetBackup Web UI に送信します。 VERIFY – ファイルの権限と所有権を検証します。 VERIFY_NOTIFY – 権限と所有権を検証し、結果を NetBackup Web UI に送信します。 このオプションを無効にするには、次の形式を使用します。 NBFP_CHECK = OFF
同等の NetBackup Web UI プロパティ	NetBackup Web UI に、相当する機能は存在しません。

NetBackup サーバーの NBRNTD_IDLE_TIMEOUT オプション

NBRNTD_IDLE_TIMEOUT オプションは Remote Network Transport Service (nbrntd) が停止するまでに待機する秒数を指定します。Remote Network Transport Service は耐性ネットワーク接続を提供します。シャットダウン後に、バックアップまたはリストア用に新たに耐性のある接続が必要になった場合、NetBackup はサービスを再起動する必要があります。

表 2-146 NBRNTD_IDLE_TIMEOUT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>NBRNTD_IDLE_TIMEOUT = seconds</pre> デフォルトのタイムアウトは 300 秒 (5 分) です。 デフォルトでは、設定ファイルにはこのエントリは存在しません。
例	次の例では、Remote Network Transport Service は 15 分後に停止します。 <pre>NBRNTD_IDLE_TIMEOUT = 900</pre>

p.314 の「[NetBackup プライマリサーバーおよびクライアントの RESILIENT_NETWORK オプション](#)」を参照してください。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_POLL_INTERVAL オプション

この NBSD_POLL_INTERVAL オプションは、サービスが登録済みプロセスの状態を確認する間隔を秒で指定します。デフォルト値は 600 です。

表 2-147 NBSD_POLL_INTERVAL の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>NBSD_POLL_INTERVAL = seconds</pre> 例: <pre>NBSD_POLL_INTERVAL = 20</pre> デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_DUMP_COUNT オプション

NBSD_DUMP_COUNT オプションは、登録されたプロセスについて収集されるプロセスダンプの最大数を指定します。1 から 10 の間の値を指定できます。デフォルト値は 3 です。

表 2-148 NBSD_DUMP_COUNT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>NBSD_DUMP_COUNT = numbers</pre> 例: <pre>NBSD_DUMP_COUNT = 3</pre> デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_MONITOR_CPU オプション

NBSD_MONITOR_CPU オプションは CPU 使用率をパーセントで監視するプロセスを指定します。

メモ: パーセントを (%) の記号で指定しないでください。

表 2-149 NBSD_MONITOR_CPU の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: PROC_NAME1:CPU_percent, PROC_NAME2:CPU_percent, PROC_NAME3:CPU_percent NBSD_MONITOR_CPU = bpdbrm:40, bpbmr:50 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_MONITOR_MEMORY オプション

NBSD_MONITOR_MEMORY オプションはメモリ使用率を監視するプロセスを指定します。

メモ: 値は一重引用符または二重引用符で囲まないでください。

表 2-150 NBSD_MONITOR_MEMORY の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: PROC_NAME1:MEM_SIZE1, PROC_NAME2:MEM_SIZE2, PROC_NAME3:MEM_SIZE3 NBSD_MONITOR_MEMORY = nbsl:8196, bpdbm:4096 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_MEMORY_UNIT オプション

NBSD_MEMORY_UNIT オプションでは、システムメモリの合計からプロセスで使用されるメモリ計算の単位を指定します。単位が **PERCENT** の場合、メモリのパーセントに基づいて計算されます。単位が **ABSOLUTE** の場合、MB 単位の絶対値に基づいて計算されます。デフォルト値は **ABSOLUTE** です。

メモ: 値は一重引用符または二重引用符で囲まないでください。

表 2-151 NBSD_MEMORY_UNIT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: NBSD_MEMORY_UNIT = <i>ABSOLUTE</i> デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_MONITOR_DEADLOCK オプション

NBSD_MONITOR_DEADLOCK オプションはデッドロックを監視するプロセスを指定します。CPU とメモリ使用率は、デッドロックと見なされる頻繁な長い間隔です。デフォルト値は 60 分ですが、ケースに基づいて値を設定できます。

メモ: 値は一重引用符または二重引用符で囲まないでください。

表 2-152 NBSD_MONITOR_DEADLOCK の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: PROC_NAME1, PROC_NAME2, PROC_NAME3 NBSD_MONITOR_DEADLOCK = nbwmc, adminconsole, nbsl デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_DEADLOCK_INTERVAL オプション

NBSD_DEADLOCK_INTERVAL は、プロセスが非アクティブと見なされる間隔です。デフォルト値は 60 です。

表 2-153 NBSD_DEADLOCK_INTERVAL の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>NBSD_DEADLOCK_INTERVAL = minutes</pre> 例: <pre>NBSD_DEADLOCK_INTERVAL = 60</pre> デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_ALWAYS_DUMP オプション

NBSD_ALWAYS_DUMP オプションは、CPU がしきい値を超えたときにサービスで常にダンプするように、または以前の読み取り値の平均に基づいてサービスで論理的に管理するように指定します。デフォルト値は 0 です。

表 2-154 NBSD_ALWAYS_DUMP の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: <pre>NBSD_ALWAYS_DUMP = 0</pre> デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_CAPTURE_PROCESS_DUMP オプション

NBSD_CAPTURE_PROCESS_DUMP オプションは、プロセスダンプをキャプチャするかどうかを指定します。しきい値に達したときにプロセスダンプを取得するには、この値を 1 に設定します。デフォルト値は 1 です。

表 2-155 NBSD_CAPTURE_PROCESS_DUMP の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: <pre>NBSD_CAPTURE_PROCESS_DUMP = 0</pre> デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_INCREASE_LOG_LEVEL オプション

NBSD_INCREASE_LOG_LEVEL オプションでは、**VXUL** プロセスのログレベルを自動的に上げて、**nblog.conf** ファイルを変更するように指定します。レガシープロセスのログは、多数のレベルにつながる可能性があるため変更されません。

表 2-156 NBSD_INCREASE_LOG_LEVEL の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 例: NBSD_INCREASE_LOG_LEVEL = 1 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_CAPTURE_NETWORK_STAT オプション

イベント時のネットワーク接続を監視する場合は、NBSD_CAPTURE_NETWORK_STAT オプションで値を 1 に設定するようにします。デフォルト値は 1 です。

表 2-157 NBSD_CAPTURE_NETWORK_STAT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 例: NBSD_CAPTURE_NETWORK_STAT = 1 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_CAPTURE_DISK_IO オプション

イベントの時点でのシステムディスクの IO 統計をキャプチャする場合は、NBSD_CAPTURE_DISK_IO オプションの値を 1 に設定します。デフォルト値は 1 です。

表 2-158 NBSD_CAPTURE_DISK_IO の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: <pre>NBSD_CAPTURE_DISK_IO = 1</pre> デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_NUMBER_OF_READINGS オプション

NBSD_NUMBER_OF_READINGS オプションは、しきい値イベントでキャプチャする読み取り数を指定します。デフォルト値は 50 です。

表 2-159 NBSD_NUMBER_OF_READINGS の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: <pre>NBSD_NUMBER_OF_READINGS = 50</pre> デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_READING_INTERVAL オプション

NBSD_READING_INTERVAL オプションは特定の間隔で読み取りを行うように指定します。デフォルト値は **5** です。

表 2-160 NBSD_READING_INTERVAL の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: <pre>NBSD_READING_INTERVAL = 5</pre> デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_PURGE_OLD_EVIDENCE オプション

NBSD_PURGE_OLD_EVIDENCE オプションは、NBSD_EVIDENCE_PATH で指定されたディレクトリにある古い証拠をパージします。古い証拠が失われる前にコピーする必要があります。デフォルト値は 0 です。

表 2-161 NBSD_PURGE_OLD_EVIDENCE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: NBSD_PURGE_OLD_EVIDENCE = 0 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_CAPTURE_WITHOUT_THRESHOLD オプション

NBSD_CAPTURE_WITHOUT_THRESHOLD オプションは、登録済みプロセスのしきい値なしで証拠セットをキャプチャするように指定します。これはすべてのしきい値フラグよりも優先されます。しきい値イベントなしで一定の間隔で証拠を収集する必要がある場合に必要です。デフォルト値は 0 です。

表 2-162 NBSD_CAPTURE_WITHOUT_THRESHOLD の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 例: NBSD_CAPTURE_WITHOUT_THRESHOLD = 1 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_JDK_HOME オプション

NBSD_JDK_HOME オプションは、JDK ホームフォルダへのパスを指定します。このパスは、Java プロセスで JSTACK を実行するために必要です。たとえば、JDK が c:\jdk にインストールされている場合、JAVA_HOME は c:\jdk に設定する必要があります。

メモ: 値は一重引用符または二重引用符で囲まないでください。

表 2-163 NBSD_JDK_HOME の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 例: NBSD_JDK_HOME = c:\jdk1.8 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_EVIDENCE_PATH オプション

NBSD_EVIDENCE_PATH オプションでは、生成された証拠を格納するフォルダのパスを指定します。これは必須の値です。値が指定されていない場合、nbperfmon は実行されません。フォルダにログを収集するための十分な容量があることを確認してください。

メモ: 値は一重引用符または二重引用符で囲まないでください。

表 2-164 NBSD_EVIDENCE_PATH の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: NBSD_EVIDENCE_PATH = c:\¥temp デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーおよびクライアントの NBSD_VERBOSE オプション

NBSD_VERBOSE オプションは、NBSD (NetBackup Smart Diagnosis) のパフォーマンスについて詳細ログを有効にするように指定します。デフォルト値は 0 です。

表 2-165 NBSD_VERBOSE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 例: NBSD_VERBOSE = 1 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの NBSD_AUTO_MONITOR オプション

NBSD_AUTO_MONITOR オプションでは、デフォルトの CPU とメモリのしきい値を使用して NetBackup ホスト上のすべての NetBackup プロセスを監視できます。デフォルトの CPU しきい値は 90% で、デフォルトのメモリしきい値は 60% です。

デフォルトのしきい値を変更するには、NBSD_AUTOMONITOR_CPU_THRESHOLD および NBSD_AUTOMONITOR_MEMORY_THRESHOLD の構成パラメータを参照してください。

メモ: NBSD_AUTO_MONITOR が「1」に設定されているときは、NBSD_CAPTURE_WITHOUT_THRESHOLD パラメータは無視されます。

表 2-166 NBSD_AUTO_MONITOR の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 例: NBSD_AUTO_MONITOR = 0 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの NBSD_AUTOMONITOR_CPU_THRESHOLD オプション

NBSD_AUTOMONITOR_CPU_THRESHOLD オプションでは、デフォルトの CPU とメモリのしきい値を使用して NetBackup ホスト内のすべての NetBackup プロセスを監視できます。この値はパーセント (1 から 100 の間) で指定できます。

表 2-167 NBSD_AUTOMONITOR_CPU_THRESHOLD の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: NBSD_AUTOMONITOR_CPU_THRESHOLD = 90 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの NBSD_AUTOMONITOR_MEMORY_THRESHOLD オプション

NBSD_AUTOMONITOR_MEMORY_THRESHOLD オプションでは、すべての NetBackup プロセスの監視に使用するメモリのしきい値を定義します。この値は、メモリプロセス全体に対するメモリ使用率の割合を示します。この値はしきい値の意思決定の際に考慮されます。この値はパーセント (1 から 100 の間) で指定できます。

表 2-168 NBSD_AUTOMONITOR_MEMORY_THRESHOLD の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: NBSD_AUTOMONITOR_MEMORY_THRESHOLD = 60 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

プライマリサーバーの NBSD_MONITOR_POLICY_NAME オプション

NBSD_MONITOR_POLICY_NAME オプションでは、CPU、メモリ、デッドロックのしきい値を監視するポリシーを指定します。ポリシーの実行後に起動されるプロセスが、デフォルトのしきい値での監視対象として自動的に追加されます。

このパラメータはプライマリサーバーにのみ適用できます。このパラメータの値は、監視するポリシーのカンマ区切りリストです。NBSD_MONITOR_POLICY_NAME=Policy1, Policy2, Policy3.

メモ: 値を引用符で囲まないでください。

デフォルトの CPU しきい値は **90%**、デフォルトのメモリしきい値は **60%** です。

デフォルトのしきい値を変更するには、NBSD_AUTOMONITOR_CPU_THRESHOLD および NBSD_AUTOMONITOR_MEMORY_THRESHOLD の構成パラメータを参照してください。

メモ: ポリシーに記載されているクライアントのみが監視対象とされ、これらのポリシークライアントでポリシーの実行後に起動されたプロセスが監視対象となります。

NBSD_MONITOR_POLICY_NAME が設定されている場合は、NBSD_CAPTURE_WITHOUT_THRESHOLD パラメータは無視されます。

表 2-169 NBSD_MONITOR_POLICY_NAME の情報

使用方法	説明
使用する場所	プライマリサーバーのみ。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: NBSD_MONITOR_POLICY_NAME = Policy1 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの NBSD_MONITOR_SYSTEM_FOR_HOURS オプション

NBSD_MONITOR_SYSTEM_FOR_HOURS オプションでは、nbsdiag プロセスが自動的に停止するまでの時間数を定義します。デフォルトでは、サービスは 7 日間 (168 時間) 実行されると停止します。値が 0 の場合、プロセスが永続的に実行されます。

表 2-170 NBSD_MONITOR_SYSTEM_FOR_HOURS の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: NBSD_MONITOR_SYSTEM_FOR_HOURS = 168 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの NBSD_EVIDENCE_SIZE_LIMIT オプション

NBSD_EVIDENCE_SIZE_LIMIT オプションは、証拠フォルダのサイズ制限を GB 単位で定義します。値が 0 の場合は、サイズの制限がないことを意味します。

メモ: 証拠がキャプチャされる前のサイズが設定されたサイズより小さい場合、証拠はキャプチャされ、途中でサイズを超えた場合でも停止されません。次の証拠はキャプチャされません。

表 2-171 NBSD_EVIDENCE_SIZE_LIMIT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 例: NBSD_EVIDENCE_SIZE_LIMIT = 0 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの NBSD_PUSH_MONITOR_DATA_TO_REMOTE オプション

NBSD_PUSH_MONITOR_DATA_TO_REMOTE オプションを使用すると、nbsmartdiag はポリシーの実行中にデフォルトのしきい値を持つ特定のプロセスのリストをそれぞれのクライアントまたはメディアサーバーにプッシュできます。

このオプションは、ユーザーがポリシー名を NBSD_MONITOR_POLICY_NAME に指定するときに効果的です。

表 2-172 NBSD_PUSH_MONITOR_DATA_TO_REMOTE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアントサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 例: NBSD_PUSH_MONITOR_DATA_TO_REMOTE = 0 デフォルトでは、構成ファイルにこのエントリは存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup プライマリサーバーの NETBACKUP_NATIVE_AUDITING オプション

NETBACKUP_NATIVE_AUDITING オプションを使用して、NetBackup データベースへの NetBackup 監査イベントの格納を停止します。

デフォルトでは、この NETBACKUP_NATIVE_AUDITING オプションは有効になっており、NetBackup 監査イベントは NetBackup データベースに格納されます。このオプションを無効にすると、nbauditreport コマンド、NetBackup 管理コンソール、NetBackup Web UI で監査イベントが表示されなくなります。

この NETBACKUP_NATIVE_AUDITING オプションを無効にすることは推奨されません。

表 2-173 NETBACKUP_NATIVE_AUDITING の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 NetBackup データベースへの NetBackup 監査イベントの格納を停止するには、次の形式を使用します。 NETBACKUP_NATIVE_AUDITING = 0 この設定は推奨されません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの NOTIFY_SNOOZE_PERIOD_IN_DAYS オプション

NetBackup 管理者は、NetBackupドメインで特定のタスクを実行するために、No.Restrictions や NOexpire などの特定のファイルを一時的に必要とする場合があります。

必要なタスクが完了したら、このようなファイルを削除する必要があります。これらのファイルが削除されない場合、通知が生成され、7 日ごとに NetBackup Web UI に表示されます。

NOTIFY_SNOOZE_PERIOD_IN_DAYS オプションを使用すると、これらの通知の頻度をデフォルト値から 1 から 90 までの任意の値に変更できます。

No.Restrictions ファイル

NetBackup 管理者は、クライアントによるリダイレクトリストアの実行を許可できます。No.Restrictions ファイルの方法を使用することで、すべての NetBackup クライアントが、他のクライアントに属するバックアップをリストアできるようになります。

p.1162 の「[すべてのクライアントによるリダイレクトリストアの実行の許可](#)」を参照してください。

注意: セキュリティ上の理由から、No.Restrictions ファイルの方法は使用しないことを強くお勧めします。

NOexpire ファイル

保守ウィンドウなどの特定のシナリオでイメージの自動期限切れを一時的に停止する必要がある場合、NetBackup 管理者による NOexpire ファイルの使用が必要になる場合があります。

注意: セキュリティ上の理由から、イメージデータベースでバックアップイメージの自動期限切れを再開するには、プライマリサーバーから NOexpire ファイルを削除することを強くお勧めします。

表 2-174 NOTIFY_SNOOZE_PERIOD_IN_DAYS オプション

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバー上

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 https://support.cohesity.com/s/article/article-100040135 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 このオプションのデフォルト値は 7 です。値を変更し、1 から 90 の値に設定できます。 次の形式を使用します。 <pre>NOTIFY_SNOOZE_PERIOD_IN_DAYS = Number of days</pre> 次の例では、スヌーズ期間を 5 日に構成します。 <pre>NOTIFY_SNOOZE_PERIOD_IN_DAYS = 5</pre>
同等の UI プロパティ	同等の UI プロパティはありません。

NetBackup サーバーの PREFERRED_NETWORK オプション

NetBackup が適切なホスト名で構成されている場合は、PREFERRED_NETWORK オプションは環境では必要ありません。オペレーティングシステムが正しい IP アドレスに解決され、そのアドレスを正しくルーティングする必要があります。

外部の制約によって環境の修正が妨げられているときは、次の状況において PREFERRED_NETWORK エントリが役立つ場合があります。

- NetBackup が特定の宛先アドレスに接続するのを防ぐ
- NetBackup が特定の宛先アドレスだけに接続するようにする
- 外部接続が行われた場合にソースバインドのためのローカルインターフェースのサブセットを要求する

注意: ソースバインドに使用するとき、NetBackup が提供するソースバインドリストにオペレーティングシステムが従わない場合があります。オペレーティングシステムが、弱いホストモデルを実装すると、非対称のネットワークルーティングが発生する可能性があります。非対称のルーティングが発生すると、リモートホストが、強力なホストモデルを実装している場合にインバウンド接続を拒否することがあります。同様に、ステートフルネットワークデバイスが、非対称の接続を切断することがあります。特定のリモートホストまたはネットワークに対し、特定のアウトバウンドインターフェースを使用するため、OS の名前解決とルーティング設定が正しいことを確認し、必要に応じて静的ホストルートを作成してください。すべてのネットワークドライバが、IP および TCP ネットワークプロトコルを正しく実装していることを確認してください。

ローカルの PREFERRED_NETWORK エントリは、CORBA 接続の初期設定時にローカルホストがリモートホストに返す転送プロファイルには影響しません。これには、plumb されたローカルのすべてのインターフェースが含まれます。ただし、リモートプロセス内のエンドポイント選択アルゴリズムは、後続の CORBA 接続の宛先を選択するときに、その PREFERRED_NETWORK ローカルエントリを使用してプロファイルを評価します。

表 2-175 PREFERRED_NETWORK の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 このオプションでは、次の構文を使います。 <pre>PREFERRED_NETWORK = target[/subnet]directive[source[/subnet]]</pre> メモ: source オプションは、PROHIBITED 指示句では許可されません。 PREFERRED_NETWORK エントリは複数指定できます。評価中、エントリはターゲットサブネットの長さでソートされます。最も大きい (精度が高い) サブネットのエントリが、より短い (精度が低い) サブネットと比較されます。両方のエントリでサブネットの指定が同じ場合、これらのエントリは、リストの上から下の設定順序で比較されます。 サブネットが指定されていない場合、デフォルトは、アドレスがゼロ以外の場合は /128、アドレスが /0 の場合は 0 です。これは、target アドレスと source アドレスの両方に適用されます。 /0 のサブネットは、アドレス内のすべてのビットを効果的に無効化し、target または source がすべてのアドレスと一致するようにするため、ゼロ以外のアドレスでは使用できません。例: 0/0 次のトピックでは、各オプションの詳細について説明します。 ■ p.298 の「target[/subnet]」を参照してください。 ■ p.299 の「指示句」を参照してください。 ■ p.299 の「source[/subnet]」を参照してください。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> ホストを選択 >[優先ネットワーク (Preferred network)]。 p.137 の「[優先ネットワーク (Preferred network)]プロパティ」を参照してください。

p.301 の「[PREFERRED_NETWORK の例](#)」を参照してください。

target[/subnet]

target[/subnet] オプションは、評価中の予測送信元アドレスまたは宛先アドレスと比較されるホスト名またはアドレスの範囲を示します。ターゲットまたはサブネット示す方法の例を次に示します。

ホスト名	myserver.domain
IP アドレス	10.82.105.11

サブネットのあるネットワーク	10.82.105.0/21
任意の IPv4 アドレス	0.0.0.0
任意の IPv6 アドレス	0::0
任意のアドレス	0/0

解決できないホスト名またはネットワーク名の場合、*target* は無視されます。ただし、関連付けられている *source* はソースバインドのリストに追加されます。

指示句

directive オプションは、評価中の送信元アドレスおよび宛先アドレス、またはその両方を *target* と比較する方法を決定します。次の指示句を使用できます。

- MATCH** 宛先アドレスに適用されます。
- 評価中のアドレスが *target* と一致する場合、そのアドレスが使用のためにすぐ
に選択され、評価が停止します。*target* と一致しない場合、次のエントリの評価
に続きます。
- ONLY** 宛先アドレスに適用されます。
- 評価中のアドレスが *target* と一致しない場合、そのアドレスは使われず、評価
が停止します。これが唯一の潜在的な宛先であった場合、接続は試みられませ
ん。追加の潜在的な宛先がある場合は、最初のエントリから再び評価が行われま
す。
- PROHIBITED** *target* はソースアドレスと宛先アドレスの両方に適用されます。**source** が指定
されている場合は無視され、*target* は禁止されます。
- 一致したアドレスが宛先アドレスの場合、評価は停止します。これが唯一の潜在
的な宛先であった場合、接続は試みられません。追加の潜在的な宛先がある場
合は、最初のエントリから再び評価が行われます。
- 一致したアドレスがソースアドレスの場合は、バインドのリストから削除されます。
ただし、*source* エントリがある場合、短縮されたバインドリストは使われないこと
があります。(p.299 の「[source\[/subnet\]](#)」を参照してください。)
- 警告: 一部のプラットフォームでは、ローカルインターフェイスを禁止すると、リモート
ホストに接続するときに予期しない結果が起きる場合があります。ローカルイン
ターフェイスを禁止しても、ホストへの内部的な接続には影響しません。

source[/subnet]

source[/subnet] は任意に指定し、*target* のアドレスにアウトバウンド接続するための
ローカルインターフェイスとして使うために要求されるホスト名または IP アドレス範囲を
示します。

`source[/subnet]` は、指示句 `ONLY` と `MATCH` に適用されますが、`PROHIBITED` には適用されません。

注意:

- オペレーティングシステムは **source** 要求に従わない場合があります。
- **NetBackup** では、すでに `PROHIBITED` である `source` は要求しません。
- 解決できない、つまりホストのローカルでないホスト名やネットワーク名は無視されますが、`target` の評価状態は使用済みのままです。

ソースバインドの評価

予測されるソースバインドのリストはオペレーティングシステムによって提供されます。これは、ループバック (`127.0.0.0/8, ::1`) やリンクローカル (`169.254.0.0/16, fe80::/64`) 以外の、ローカルに設定されたすべてのインターフェースによって構成されます。

次に、`PREFERRED_NETWORK` エントリが長いサブネットから順にソートされた順序で評価され、サブネットが等しいときは位置で評価されます。`source` エントリに一致するローカルインターフェースで、まだ最初のリストに残っているものがある場合は、**2 番目のリスト**に移動されます。`target PROHIBITED` エントリと一致するローカルインターフェースで、まだ **2 番目のリスト**に移動されていないものがある場合は、最初のリストから削除されます。

ローカルインターフェースが **2 番目のリスト**に移動されると、そのリストは一時的なバインドリストになります。**2 番目のリスト**が空で、最初のリストからインターフェースが削除された場合、短縮された最初のリストが仮のバインドリストになります。

`source` を持つエントリの `target` に宛先が一致する場合、仮のバインドリストで `source` エントリへの最初の一致が検索されます。一致が見つかったら、そのインターフェースが、**NetBackup** がアウトバウンド接続用に要求するソースになります。

一致が見つからず、仮のバインドリストが短縮された最初のリストの場合、これがアウトバウンド接続のソースバインドリストになります。

それ以外の場合は、`ANY` がアウトバウンド接続のソースバインドリストになります。

メモ: ソースバインドリストが `ANY` でない場合、ほとんどのオペレーティングシステムは、アプリケーションによって提供されるリストの最初のインターフェースを任意に使用します。この動作のため、ローカルインターフェースには `PROHIBITED` を使わず、`source` エントリの使用を最小限にすることをお勧めします。

PREFERRED_NETWORK の例

表 2-176 基本的な例

説明	エントリ
12.34.0.0 から 12.34.255.255 までに解決されるホスト名への接続を可能にします。アウトバウンドインターフェースの選択には影響しません。	PREFERRED_NETWORK = 12.34.0.0/16 MATCH
12.34.56.78 に解決されるホスト名への接続を可能にし、オペレーティングシステムでアウトバウンドインターフェースとして 98.76.54.32 を使うように要求します。	PREFERRED_NETWORK = 12.34.56.78 MATCH 98.76.54.32
すべての IPv4 と IPv6 アドレスに対して Host_A のインターフェース IP を使うようにホストに指示します。	PREFERRED_NETWORK = 0/0 MATCH Host_A
NetBackup が 12.34.56.0 から 12.34.56.255 までの範囲内にない宛先アドレスに接続するのを防ぎます。1 つ以上が PROHIBITED でないかぎり、ソースインターフェースは ANY になります。	PREFERRED_NETWORK = 12.34.56.78/24 ONLY
NetBackup が 12.34.56.0 から 12.34.56.255 までの範囲内にない宛先アドレスに接続するのを防ぎます。オペレーティングシステムでアウトバウンドインターフェースとして 98.76.54.32 を使うように要求します。	PREFERRED_NETWORK = 12.34.56.78/24 ONLY 98.76.54.32
NetBackup が、指定の IPv6 サブネット以外の宛先アドレスに接続するのを防ぎます。1 つ以上が PROHIBITED でないかぎり、ソースインターフェースは ANY になります。	PREFERRED_NETWORK = 2001:1234:1efc::/48 ONLY
NetBackup が接続用のソースまたは宛先として 12.34.0.0 から 12.34.255.255 までのアドレスを使うのを防ぎます。 ローカルインターフェースと一致する場合は、他のエントリが source を指定していないときのアウトバウンドインターフェースのソースバインドリストとして、残りのインターフェースのソートされたリストが NetBackup によって提供されます。 PROHIBITED は、ローカルインターフェースと併用しないことをお勧めします。詳しくは、次のトピックを参照してください。 p.299 の「指示句」を参照してください。	PREFERRED_NETWORK = 12.34.56.78/16 PROHIBITED
ホストが IPv4 アドレスを使用するのを防ぎます。	PREFERRED_NETWORK = 0.0.0.0 PROHIBITED
ホストが IPv6 アドレスを使用するのを防ぎます。	PREFERRED_NETWORK = 0::0 PROHIBITED
ホストが production_server. のアドレスを使うのを防ぎます。	PREFERRED_NETWORK = production_server PROHIBITED

bplocaladdrs を使用したトラブルシューティング

bplocaladdrs コマンドを使用すると、オペレーティングシステムが NetBackup に提供するローカルインターフェースと、それらが提供される順序を確認できます。

bplocaladdrs は、次のトピックの例にあるホスト (bob) に対して次の出力を返します。

```
$ bplocaladdrs
10.82.105.11
10.82.105.8
10.82.10.10
```

bptestnetconn を使用したトラブルシューティング

bptestnetconn コマンドを使用すると、エントリが評価される順序と、その評価結果を確認できます。TGT または SRC は、宛先が許可されるかどうか、およびどのソースバインドリストを NetBackup がオペレーティングシステムに提供するかを示します。ANY の値は、アウトバウンドインターフェースが NetBackup の制約を受けないことを示します。

```
$ bptestnetconn -asp -v6
...
FL: myprimary -> 10.82.105.14 : 5 ms FAST (< 5 sec) TGT PROHIBITED
FL: mymedia -> 10.81.40.61 : 6 ms FAST (< 5 sec) SRC:
10.82.10.10
...
```

PREFERRED_NETWORK ルールは次の順序で適用されます。

```
[0] PREFERRED_NETWORK = 10.82.105.14 PROHIBITED
[1] PREFERRED_NETWORK = 10.81.40.0/24 MATCH 10.82.10.10
```

```
$ bptestnetconn -asp -v6 -H myclient
...
FL: myclient -> 10.81.40.127 : 6 ms FAST (< 5 sec) SRC: ANY
```

PREFERRED_NETWORK ルールは次の順序で適用されます。

```
[0] PREFERRED_NETWORK = 10.82.105.15/32 MATCH 10.82.105.0/24
[1] PREFERRED_NETWORK = 10.82.105.0/29 PROHIBITED
[2] PREFERRED_NETWORK = 10.82.104.0/24 MATCH 10.82.105.5
```

複雑な例

次に、より複雑な例を示します。ここでは、次のネットワークインターフェースを使用する NetBackup サーバー (bob) を使用します。

```
eri0: flags=1000843<UP,BROADCAST,RUNNING,MULTICAST,IPv4> mtu 1500
index 2
```

```
inet 10.82.105.11 netmask fffff800 broadcast 10.82.111.255

eri0:1: flags=1000843<UP,BROADCAST,RUNNING,MULTICAST,IPv4> mtu 1500
index 2
inet 10.82.105.8 netmask fffff800 broadcast 10.255.255.255

eri1: flags=1000843<UP,BROADCAST,RUNNING,MULTICAST,IPv4> mtu 1500
index 3
inet 10.82.10.10 netmask fffff800 broadcast 10.82.15.255
```

次の4つのホスト(billcat、muzzy、beetle、lilo)への通常のアウトバウンド接続では、最初のインターフェースを使用します。内部接続では、ソースインターフェースとして宛先インターフェースを使用します。

```
$ bptestbpcd -host billcat
10.82.105.11:54129 -> 10.82.105.15:13724

$ bptestbpcd -host muzzy
10.82.105.11:54152 -> 10.82.105.14:13724

$ bptestbpcd -host beetle
10.82.105.11:54135 -> 10.82.104.249:13724

$ bptestbpcd -host lilo
10.82.105.11:54139 -> 10.82.56.79:1556
$ bptestbpcd -host 10.82.105.11
10.82.105.11:54144 -> 10.82.105.11:1556
$ bptestbpcd -host 10.82.105.8
10.82.105.8:52148 -> 10.82.105.8:1556
```

例 1

ローカルインターフェースを MATCH エントリの target として使用しても影響はありません。この例で、ソースインターフェースはローカル MATCH エントリによる影響を受けません。

```
PREFERRED_NETWORK = 10.82.105.8/32 MATCH

$ bptestbpcd -host billcat

10.82.105.11:54202 -> 10.82.105.15:13724

$ bptestbpcd -host muzzy
10.82.105.11:54206 -> 10.82.105.14:13724
```

```
$ bptestbpcd -host beetle
10.82.105.11:54300 -> 10.82.104.249:13724
```

```
$ bptestbpcd -host lilo
10.82.105.11:54302 -> 10.82.56.79:1556
$ bptestbpcd -host 10.82.105.11
10.82.105.11:54306 -> 10.82.105.11:1556
$ bptestbpcd -host 10.82.105.8
10.82.105.8:54309 -> 10.82.105.8:1556
```

例 2

「例 1」と同じく、ローカルインターフェースを ONLY エントリの target として使用してもソースバインドには影響しません。ただし、宛先アドレスへの接続は阻止されます (宛先への MATCH の程度がより高い他の指示句がない場合)。ホスト内部への接続に影響はありません。

```
PREFERRED_NETWORK = 10.82.105.8/32 ONLY
```

```
$ bptestbpcd -host billcat
<16> bptestbpcd main: ConnectToBPCD(billcat) failed:
25 cannot connect on socket
```

```
$ bptestbpcd -host muzzy
<16> bptestbpcd main: ConnectToBPCD(muzzy) failed:
25 cannot connect on socket
```

```
$ bptestbpcd -host beetle
<16> bptestbpcd main: ConnectToBPCD(beetle) failed:
25 cannot connect on socket
```

```
$ bptestbpcd -host lilo
<16> bptestbpcd main: ConnectToBPCD(lilo) failed:
25 cannot connect on socket
```

```
$ bptestbpcd -host 10.82.105.11
10.82.105.11:54306 -> 10.82.105.11:1556
```

```
$ bptestbpcd -host 10.82.105.8
10.82.105.8:54309 -> 10.82.105.8:1556
```

例 3

MATCH エントリを使用して、特定のホストまたはネットワークへのアウトバウンド接続をデフォルトより優先されるようにできます。この例では、2 番目のアウトバウンドネットワークイ

ンターフェースを使用するため、特定のホストおよび別のネットワークへの接続が要求されます。

```
PREFERRED_NETWORK = 10.82.105.15/32 MATCH 10.82.105.8  
PREFERRED_NETWORK = 10.82.104.0/24 MATCH 10.82.105.8
```

```
$ bptestbpcd -host billcat (最初のエントリにより優先)
```

```
10.82.105.8:54192 -> 10.82.105.15:13724
```

```
$ bptestbpcd -host muzzy (デフォルトを使用して暗黙的に許可)
```

```
10.82.105.11:54196 -> 10.82.105.14:13724
```

```
$ bptestbpcd -host beetle (2 番目のエントリにより優先)
```

```
10.82.105.8:54200 -> 10.82.104.249:13724
```

```
$ bptestbpcd -host lilo (デフォルトを使用して暗黙的に許可)
```

```
10.82.105.11:54202 -> 10.82.56.79:1556
```

例 4

ONLY エントリを追加すると、指定したネットワーク上に存在しない、または前のエントリにより一致した他のホストへの接続が阻止されます。

```
PREFERRED_NETWORK = 10.82.105.15/32 MATCH 10.82.105.8  
PREFERRED_NETWORK = 10.82.104.0/24 MATCH 10.82.105.8  
PREFERRED_NETWORK = 10.82.56.0/24 ONLY
```

```
$ bptestbpcd -host billcat (最初のエントリにより優先)
```

```
10.82.105.8:54209 -> 10.82.105.15:13724
```

```
<16> bptestbpcd -host 10.82.105.14 (1 または 2 に一致せず、3 によって除外)
```

```
<16> bptestbpcd main: ConnectToBPCD(muzzy) failed: 25 cannot connect  
on socket
```

```
$ bptestbpcd -host beetle (2 番目のエントリにより優先)
```

```
10.82.105.8:54214 -> 10.82.104.249:13724 (3 番目のエントリにより必須)
```

```
10.82.105.11:54216 -> 10.82.56.79:1556
```

例 5

ONLY を PROHIBITED に変更すると、それらの宛先ホストとの接続が明示的に除外され、指定されていないホストへの接続が暗黙的に許可されます。PROHIBITED ネットワークはローカルでなく、ソースバインドには影響しません。

```
PREFERRED_NETWORK = 10.82.105.15/32 MATCH 10.82.105.8
PREFERRED_NETWORK = 10.82.104.249/32 MATCH 10.82.105.8
PREFERRED_NETWORK = 10.82.56.0/24 PROHIBITED

$ bptestbpcd -host billcat (最初のエントリにより優先)
10.82.105.8:54224 -> 10.82.105.15:13724

$ bptestbpcd -host muzzy (暗黙的に許可)
10.82.105.11:54228 -> 10.82.105.14:13724

$ bptestbpcd -host beetle (2 番目のエントリにより優先)
10.82.105.8:54232 -> 10.82.104.249:13724

$ bptestbpcd -host 10.82.56.79 (1 または 2 に一致せず、3 によって除外)

<16> bptestbpcd main: ConnectToBPCD(lilo) failed: 25 cannot connect
on socket
```

例 6

反対に、ONLY をリストの先頭に移動しても、MATCH のエントリが評価対象から除外されることはありません。これは、ONLY が対象とする IP 範囲が MATCH エントリよりも広いからです。これらのホストについては、後者が先に評価されます。

```
PREFERRED_NETWORK = 10.82.104.0/24 ONLY
PREFERRED_NETWORK = 10.82.105.15/32 MATCH 10.82.105.11
PREFERRED_NETWORK = 10.82.104.249/32 MATCH 10.82.105.8

$ bptestbpcd -host billcat (2 番目のエントリにより優先)
10.82.105.11:54392 -> 10.82.105.15:13724

$ bptestbpcd -host 10.82.105.14 (2 または 3 に一致せず、1 によって除外)

<16> bptestbpcd main: ConnectToBPCD(muzzy) failed: 25 cannot connect
on socket

$ bptestbpcd -host beetle (1 で必須になる前に 3 で優先)
10.82.105.8:54396 -> 10.82.104.249:13724

$ bptestbpcd -host 10.82.56.79 (2 または 3 に一致せず、1 によって除外)

<16> bptestbpcd main: ConnectToBPCD(lilo) failed: 25 cannot connect
on socket
```

例 7

この ONLY エントリのサブネットは billcat と muzzy の両方に一致しますが、ONLY が送信元アドレスのフィルタリングではなく宛先アドレスのフィルタリングに使用されていること

が確認された場合、アウトバウンドインターフェースには影響しません。それ以外の場合、10.82.105.11と10.82.105.8の両方のローカルインターフェースがそのサブネットに含まれないため、すべての接続が失敗します。

```
PREFERRED_NETWORK = 10.82.105.14/31 ONLY
PREFERRED_NETWORK = 10.82.105.15/32 MATCH 10.82.105.8

$ bptestbpcd -host billcat (2 番目のエントリにより優先)

10.82.105.8:54209 -> 10.82.105.15:13724

$ bptestbpcd -host muzzy (最初のエントリにより優先)

10.82.105.11:45662 -> 10.82.105.14:13724

$ bptestbpcd -host 10.82.104.249 (最初のエントリにより除外)

<16> bptestbpcd main: ConnectToBPCD(beetle) failed: 25 cannot connect
on socket
```

例 8

ここでは、3つのリモートホストすべてに接続できますが、10.82.105.11がPROHIBITEDになった後にソースインターフェースが残っている点に注目してください。これは、billcatに対する明示的なターゲットのMATCHを含みますが、sourceに事前にPROHIBITEDが適用されているため、実際には一致しません。内部接続はPROHIBITEDの影響を受けません。

```
PREFERRED_NETWORK = 10.82.105.11/32 PROHIBITED
PREFERRED_NETWORK = 10.82.105.15/32 MATCH 10.82.105.11

$ bptestbpcd -host billcat (2 番目で一致するが、1 番目でそのソースは禁止済み)

10.82.105.8:54202 -> 10.82.105.15:13724

$ bptestbpcd -host muzzy (暗黙的な一致と削除されたソース)

10.82.105.8:54206 -> 10.82.105.14:13724

$ bptestbpcd -host beetle (暗黙的な一致と削除されたソース)

10.82.105.8:54300 -> 10.82.104.249:13724

$ bptestbpcd -host 10.82.105.11 (最初のエントリによる影響を受けない)

10.82.105.11:54306 -> 10.82.105.11:1556
$ bptestbpcd -host 10.82.105.8
10.82.105.8:54309 -> 10.82.105.8:1556
```

例 9

この例では、禁止されていないインターフェースの代わりに ANY インターフェースが使用される結果となる、ソースバインド評価の 2 つの細かい違いを示します。2 番目のエントリは、3 番目のエントリが処理されて source が使用できなくなる前に、ソースバインドリストから 10.82.10.10 のローカルインターフェースを削除します。最初のエントリの source により、2 番目のエントリによって作成された短縮リストが、すべての評価で無視されます。

```
PREFERRED_NETWORK = 10.82.104.249 MATCH 10.82.105.0/24
PREFERRED_NETWORK = 10.82.10.10 PROHIBITED
PREFERRED_NETWORK = 10.82.56.0/24 MATCH 10.82.10.10
```

FL: billcat -> 10.82.105.15 ... SRC: ANY (最初のソースが 2 番目のターゲットを暗黙的に無効化)

FL: muzzy -> 10.82.105.14 ... SRC: ANY (最初のソースが 2 番目のターゲットを暗黙的に無効化)

FL: beetle -> 10.82.104.249 ... SRC: 10.82.105.11 (範囲内で最初に一致し、使用される)

FL: lilo -> 10.82.56.79 ... SRC: ANY (2 番目のターゲットが 3 番目のソースを明示的に無効化)

「例 8」で、最初のエントリの source は 2 つのローカルインターフェースに一致します。10.82.105.8 ではなく、10.82.105.11 インターフェースが beetle への接続時のソースとして選択されました。これは、この例の bplocaladdr 出力に示すように、このインターフェースがオペレーティングシステムによって最初に返されたためです。(p.302 の「bplocaladdr を使用したトラブルシューティング」を参照してください。)

例 10

この例では、ローカルインターフェースの禁止によって、バインドリストがどのように短縮されるかを示します。ANY がデフォルトのソースバインドリストだったときに、これらの宛先に対するアウトバウンドインターフェースは 10.82.105.11 でした。(p.303 の「例 1」を参照してください。) 別のローカルインターフェースを禁止することで、NetBackup はリストを短縮し、オペレーティングシステムは送信元 IP として 10.82.10.10 を選択します。このオペレーティングシステムでは強力なホストモデルを使用するため、このインターフェースはこれらの宛先 IP に対して無効になり、接続の試行は失敗します。

```
PREFERRED_NETWORK = 10.82.105.8 PROHIBITED
```

```
FL: billcat -> 10.82.105.15 ... SRC: 10.82.10.10,10.82.105.11
FL: lilo -> 10.82.56.79 ... SRC: 10.82.10.10,10.82.105.11
```

```
$ bptestbpcd -host billcat
```

```
<16> bptestbpcd main: ConnectToBPCD(billcat) failed:
```



```
25 cannot connect on socket
$ bptestbpcd -host lilo
<16> bptestbpcd main: ConnectToBPCD(lilo) failed:
25 cannot connect on socket
```

オペレーティングシステムが弱いホストモデルに変更されると、各接続の **TCP SYN** がデフォルトインターフェース (10.10.82.105.11) から 10.82.104.0 ネットワークに送出されますが、送信元 IP は 10.82.10.10 になります。10.82.104.0 ネットワークから宛先ホストへのネットワークルートがある場合、**SYN** は宛先に到達します。しかし、応答が成功するのは、宛先ホストから 10.82.8.0 ネットワークに非対称のルートがある場合のみです。**TCP SYN** パケットが実際に送信されたネットワークを反映していない偽装された送信元 IP アドレスが、成功した接続に含まれる点に注目してください。

```
$ bptestbpcd -host billcat
<16> bptestbpcd main: ConnectToBPCD(billcat) failed:
25 cannot connect on socket
$ bptestbpcd -host lilo
10.82.10.10:52842 -> 10.82.56.79:1556
```

互換性

既存の必須インターフェース、または必須ネットワーク構成は、内部的に「優先ネットワーク」の表現に自動変換されます。

前のトピックで説明したプライマリサーバー bob を例にとります。(p.301 の「**PREFERRED_NETWORK** の例」を参照してください。)

```
REQUIRED_INTERFACE = bob
```

このエントリは、**IPv4** の次のエントリと同等です。

```
PREFERRED_NETWORK = 0/0 MATCH 10.82.105.11
```

IPv6 が有効な場合は、**IP_ADDRESS_FAMILY = AF_UNSPEC** を使用した **IPv6** の次のエントリと同等です。

```
PREFERRED_NETWORK = 0/0 MATCH fc44:53f9:cb30:201:250:56ff:febc:e85f
```

どちらも、すべてのアウトバウンド接続に対し、指定したソースインターフェースをバインドします。**0/0** はすべての宛先に一致するためです。ただし、サブネットの長さ (**/0**) に注目してください。同様に、**IPv4** と **IPv6** の例の両方でサブネットの長さが同じであるため、両方が構成されている場合は、**2** つのうち最初のものだけが有効になります。

同様に、必須ネットワークが次のように構成されているとします。

```
REQUIRED_NETWORK = 10.82.105/21
```

これは、次のように変換されます。

```
PREFERRED_NETWORK = 10.82.105/21 ONLY
```

これは、ソースインターフェースの選択に影響を与えずに、宛先アドレスを指定したネットワークに制限します。

注意:

- REQUIRED_INTERFACE と PREFERRED_NETWORK の両方が指定されていて、それらが競合する場合は、REQUIRED_INTERFACE が優先されます。
- REQUIRED_INTERFACE とは異なり、PREFERRED_NETWORK は、ユーザー主導の要求の requesting_client または destination_client フィールドを、イメージリストまたはリストアの bprd に変更しません。

NetBackup サーバーとクライアントの RANDOM_PORTS オプション

このオプションで、他のコンピュータ上の NetBackup と通信するためにポート番号が要求された場合、NetBackup がポート番号をランダムに選択するか、または順に選択するかを指定します。

表 2-177 RANDOM_PORTS の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 ■ RANDOM_PORTS = YES (デフォルト) を設定した場合、NetBackup によって、許容範囲内の空きポートからポート番号がランダムに選択されます。たとえば、範囲が 1024 から 5000 である場合、NetBackup によってこの範囲内の番号からランダムに選択されます。 ■ RANDOM_PORTS = NO を設定した場合、NetBackup によって、許容範囲内の利用可能な番号のうち最も大きい番号から順に選択されます。たとえば、範囲が 1024 から 5000 である場合、NetBackup によって 5000 が選択されます (この番号が空きであると想定します)。5000 を使用できない場合、ポート 4999 が選択されます。 デフォルトでは、構成ファイルにこのオプションは存在せず、NetBackup によってランダムにポート番号が選択されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> ホストを選択 >[ポートの範囲 (Port ranges)]>[ランダムポート割り当てを使用する (Use random port assignments)]。 p. 135 の「[ポートの範囲 (Port ranges)] プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの RE_READ_INTERVAL オプション

RE_READ_INTERVAL オプションで、NetBackup はディスクストレージユニットの利用可能な領域が確認される間隔を決定します。

表 2-178 RE_READ_INTERVAL の情報

使用方法	説明
使用場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>RE_READ_INTERVAL = seconds</pre> デフォルトは 300 秒 (5 分) です。 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	次の例では再読み込みの間隔が 15 分に変更されます。 <pre>RE_READ_INTERVAL = 900</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 >[一般的なサーバー (General Server)]>[ディスクストレージユニットの容量を確認する間隔 (Check the capacity of disk storage units every)]。 p.112 の「[一般的なサーバー (General server)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの REQUIRED_NETWORK オプション

オプションは、ネットワーク通信を分離している環境内でバックアップの通信に必要なルートを指定します。REQUIRED_NETWORK

たとえば、環境内には、本番用のネットワーク 145.21.14.0 およびバックアップ用のネットワーク 192.132.28.0 が存在する場合があります。

表 2-179 REQUIRED_NETWORK の情報

使用方法	説明
使用場所	NetBackup プライマリサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>REQUIRED_NETWORK = IP_address</pre> このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 メモ: 変数が設定されているときにそのネットワークが利用できない場合、すべての接続は失敗し、バックアップは実行されません。
例	次の例では、必要なネットワークは 192.132.28.0 に設定されます。 <pre>REQUIRED_NETWORK = 192.132.28.0</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 >[優先ネットワーク (Preferred network)]>[単独 (Only)]。 p.137 の「[優先ネットワーク (Preferred network)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの RESILIENT_BACKUP_JOB_DEFERRAL_CACHE_FILE_PATH オプション

このディレクトリパスは、メディアサーバーのプロセスがジョブ遅延キャッシュを書き込む場所を指定します。遅延キャッシュファイルはデフォルトで、/usr/opensv/tmp (Linux の場合) または `install_path\NetBackup\temp` (Windows の場合) に書き込まれます。Flex Appliance の場合、遅延キャッシュファイルのパスは /mnt/nbstage/usr/opensv/tmp に設定されます。

NetBackup のバックアップでは、バックアップされるデータ量に関連するメタデータが生成されます。メディアサーバーで多数のアクティブなバックアップが並行して実行されている場合、NetBackup によって大量のデータが遅延キャッシュファイルに書き込まれる可能性があります。

RESILIENT_BACKUP_JOB_DEFERRAL_CACHE_FILE_PATH と MINIMUM_DEFERRAL_CACHE_FREE_SPACE_MB の値の關係に注意してください。キャッシュ情報の書き込み先を指定するには、RESILIENT_BACKUP_JOB_DEFERRAL_CACHE_FILE_PATH を使用します。確保する空きディスク容量のサイズを指定するには、MINIMUM_DEFERRAL_CACHE_FREE_SPACE_MB を使用します。

表 2-180

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup メディアサーバー上で
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>RESILIENT_BACKUP_JOB_DEFERRAL_CACHE_FILE_PATH = path</pre> このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	メディアサーバーで次のエントリを追加して、メディアサーバーがジョブ遅延キャッシュを書き込む場所を指定します。 <pre>RESILIENT_BACKUP_JOB_DEFERRAL_CACHE_FILE_PATH = /var/cache</pre>

NetBackup サーバーの RESILIENT_BACKUP_JOB_RESTART_TIMEOUT オプション

このタイムアウト値は、メディアサーバーおよびクライアントのプロセスが、プライマリサーバーとの通信を失った後にジョブの再確立を待機する時間を指定します。プライマリサーバーがこの期間内にメディアサーバープロセスとの通信を再確立しない場合、バックアップは失敗します。値は分単位で指定されます。デフォルト値は 60 分です。

表 2-181

使用方法	説明
使用する場所	Windows および標準ポリシー形式のバックアップジョブの場合は、NetBackup プライマリサーバーおよびメディアサーバー上。 Oracle および MS-SQL-Server ポリシー形式のバックアップジョブの場合は、NetBackup プライマリサーバー上のみ。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>RESILIENT_BACKUP_JOB_RESTART_TIMEOUT = number</pre> このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。

使用方法	説明
例	メディアサーバーで次のエントリを追加して、メディアサーバーのプロセスがジョブの再確立を待機する時間を指定します。 <pre>RESILIENT_BACKUP_JOB_RESTART_TIMEOUT = 30</pre>

NetBackup プライマリサーバーおよびクライアントの RESILIENT_NETWORK オプション

RESILIENT_NETWORK オプションはバックアップと復元に耐性のある接続を使う必要があるコンピュータを指定します。

表 2-182 RESILIENT_NETWORK の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式のいずれかを使用します。 <pre>RESILIENT_NETWORK = hostname ON OFF</pre> <pre>RESILIENT_NETWORK = ip_address ON OFF</pre> <pre>RESILIENT_NETWORK = network address/network_mask ON OFF</pre> IPv4 のアドレスおよび範囲を IPv6 のアドレスおよびサブネットと混在させることができます。 デフォルトでは、設定 RESILIENT_NETWORK ファイルには は存在しません。
例	このエントリに有効な形式の例を次に示します。 <pre>RESILIENT_NETWORK = client.veritas.org ON</pre> <pre>RESILIENT_NETWORK = 192.0.2.0 ON</pre> <pre>RESILIENT_NETWORK = 192.0.2.0/26 OFF</pre> <pre>RESILIENT_NETWORK = 2001:db8:0:0:0:0:0:0 ON</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーまたはクライアントを選択 >[耐性ネットワーク (Resilient network)]。 p.159 の「クライアントへの耐性のある接続の指定」を参照してください。

メモ: 順序は耐性ネットワークのリストの項目にとって重要です。クライアントがリストに複数回ある場合、最初の一致で耐性のある接続の状態が判断されます。たとえば、クライアントを追加して、クライアントの IP アドレスを指定し、[耐性 (Resiliency)]に [オン (On)]を指定するとします。また、IP アドレスを[オフ (Off)]として追加し、クライアントの IP アドレスがその範囲内にあるとします。クライアントの IP アドレスがアドレス範囲の前に表示されれば、クライアントの接続には耐性があります。逆に IP アドレス範囲が最初に表示される場合、クライアントの接続には耐性がありません。

p.275 の「[NetBackup サーバーの NBRNTD_IDLE_TIMEOUT オプション](#)」を参照してください。

RESILIENT_RETRY_INTERVAL

この設定では、再試行の間隔が最大になります。この値により、ネットワークエラーが発生した後に、アクティブなバックアップジョブとの通信の再確立の試行を NetBackup が処理する頻度が決まります。プロセスでネットワークエラーが発生すると、プロセスにより指定された時間だけ待機してから通信の再確立が試行されます。時間は秒単位で指定します。デフォルト値は 120 (2 分) です。最小値は 1 で、最大値は 3600 (1 時間) です。

RESILIENT_BACKUP_JOB_RESTART_TIMEOUT と RESILIENT_RETRY_INTERVAL の関係に注意してください。

たとえば、RESILIENT_BACKUP_JOB_RESTART_TIMEOUT が 10 分に、また RESILIENT_RETRY_INTERVAL が 2 分に設定されている場合、NetBackup プロセスはバックアップジョブへの再接続を 5 回試行します。

プライマリサーバーが再接続できない場合、プライマリサーバーはバックアップジョブを終了します。

表 2-183

使用方法	説明
使用する場所	Windows および標準ポリシー形式のバックアップジョブの場合は、NetBackup プライマリサーバーおよびメディアサーバー上。 Oracle および MS-SQL-Server ポリシー形式のバックアップジョブの場合は、NetBackup プライマリサーバー上のみ。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>RESILIENT_RETRY_INTERVAL = number</pre> このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	プライマリサーバーで、次のエントリを追加して、耐性が高くなるように保護された要求を再試行する最小時間を指定します。 <pre>RESILIENT_RETRY_INTERVAL = 360</pre>

NetBackup サーバーの RESUME_ORIG_DUP_ON_OPT_DUP_FAIL オプション

オプションで、OpenStorage の最適化された複製が失敗した場合に が通常の複製を実行するように指定します。RESUME_ORIG_DUP_ON_OPT_DUP_FAILNetBackup

表 2-184 RESUME_ORIG_DUP_ON_OPT_DUP_FAIL の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>RESUME_ORIG_DUP_ON_OPT_DUP_FAIL = TRUE FALSE</pre> デフォルトでは、このエントリが存在せず、NetBackup は最適化された複製が失敗しても通常の複製を実行しません。 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの REVERSE_NAME_LOOKUP オプション

このオプションは、管理者がホスト名の逆引き参照を許可、制限、禁止できるようにします。

表 2-185 REVERSE_NAME_LOOKUP の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>REVERSE_NAME_LOOKUP = ALLOWED RESTRICTED PROHIBITED</pre> このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> ホストを選択 >[ネットワーク設定 (Network settings)]>[ホスト名の逆引き参照 (Reverse host name lookup)]。 p.133 の「[ネットワーク設定 (Network settings)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup のサーバーとクライアントの SECURE_PROXY_CIPHER_LIST オプション

SECURE_PROXY_CIPHER_LIST オプションは、NetBackup が vnetd ネットワークデーモンを介した通信の暗号化のために OpenSSL で使用する暗号を設定します。

SECURE_PROXY_CIPHER_LIST オプションは、許可される OpenSSL 暗号文字列のコロンで区切られたリストです。許可される暗号文字列、必要条件、制限事項については、[OpenSSL 暗号のマニュアル](#)を参照してください。

このオプションを使用して、NetBackup が使用する暗号を変更できます。このオプションを使用する場合、NetBackup は、設定された暗号文字列に関するメッセージを vnetdnbpxyhelper VxUL ログに書き込みます。次に例を示します。

```
"Using user configured cipher list: cipher_string: cipher_string:...
```

警告: SECURE_PROXY_CIPHER_LIST オプションを設定するときは注意してください。許可される OpenSSL 下位プリミティブが、認証や暗号化を行わない暗号とオーバーラップする可能性があります。暗号リストに共通の暗号を持たないホストは相互に通信できません。

表 2-186 SECURE_PROXY_CIPHER_LIST 情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー、メディアサーバー、またはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>SECURE_PROXY_CIPHER_LIST = cipher_string:cipher_string:cipher_string:...</pre> <i>cipher_string</i> を許可される OpenSSL 暗号文字列で置き換えます。 デフォルトでは、SECURE_PROXY_CIPHER_LIST オプションは構成ファイル内に存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの SERVER オプション

bp.conf ファイルの最初の SERVER オプションとして bp.conf オプションが存在するプライマリサーバーが指定されている必要があります。インストール時に、SERVER は、NetBackup プライマリサーバーソフトウェアがインストールされているシステムの名前に自動的に設定されます。

表 2-187 SERVER の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバー上。 メモ: VLAN のネットワークインターフェースが複数あるファイバートランспорт (FT) メディアサーバーについて、その FT サーバーのプライマリホスト名が、その FT メディアサーバーホストのどのインターフェース名より前に表示されていることを確認します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup SAN クライアントおよびファイバートランспортガイド』を参照してください。

使用方法	説明
使用方法	SERVER オプションのエントリは、すべての NetBackup サーバーとクライアント上の設定ファイルに存在する必要があります。これは必要な唯一の NetBackup オプションです。このオプションは、クライアント上の <code>\$HOME/bp.conf</code> ファイルでは使用されません。 オプションを表示、追加、変更するには、<code>nbgetconfig</code> コマンドと <code>nbsetconfig</code> コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 メモ: この項では、サーバーの <code>bp.conf</code> エントリについて説明します。ただし、クライアントの <code>bp.conf</code> ファイルのすべての SERVER オプションは、NetBackup プライマリサーバーまたはメディアサーバーである必要があります。すなわち、SERVER として表示されている各システムには、NetBackup プライマリサーバーソフトウェアまたはメディアサーバーソフトウェアのいずれかがインストールされている必要があります。クライアント名が誤ってサーバーとしてリストに表示されている場合、そのクライアント上のクライアントサービスは起動されません。 NetBackup メディアサーバーをプライマリサーバーに構成する場合、そのプライマリサーバー上の <code>bp.conf</code> ファイルに、各メディアサーバーに対する SERVER エントリまたは <code>MEDIA_SERVER</code> エントリを含める必要があります。前述のとおり、リストの最初の SERVER エントリとして、プライマリサーバー自身を指定します。SERVER エントリまたは <code>MEDIA_SERVER</code> エントリは、自身を参照する最初のオプションの後に追加する必要があります。 NetBackup プライマリサーバーは、NetBackup クライアントとして、他のクラスタに属するサーバーによってバックアップできます。この場合、プライマリサーバー上の <code>bp.conf</code> ファイルには、それらのサーバーに対する SERVER エントリも必要です。

使用方法	説明
例	プライマリサーバーのエントリの例を次に示します。 <pre>SERVER = Primary_server (このプライマリサーバー 自体)</pre> <pre>SERVER = NB_server (別のクラスタのプライマリサーバー)</pre> <pre>SERVER = Media_server_#1</pre> <pre>MEDIA_SERVER = Media_server_#2</pre> ・ ・ ・ すべてのメディアサーバー上の最初の SERVER エントリに、これらのメディアサーバーのプライマリサーバーを指定する必要があります。1 つのメディアサーバーに設定できるプライマリサーバーは 1 つのみです。ただし、メディアサーバーは、NetBackup クライアントとして、他のクラスタに属するサーバーによってバックアップできます。この場合、メディアサーバー上の構成ファイルには、それらのサーバーに対する SERVER エントリも必要です。 次に、メディアサーバー上のエントリの例を示します。 <pre>SERVER = Primary_server (このメディアサーバー)</pre> <pre>SERVER = NB_server (別のクラスタのプライマリサーバー)</pre> <pre>SERVER = Media_server_#1</pre> <pre>MEDIA_SERVER = Media_server_#2</pre> ・ ・ ・ SERVER エントリは、プライマリサーバーおよびメディアサーバーのクラスタ内に存在するすべてのサーバー上で同じである必要があります。 SERVER エントリがプライマリサーバーの bp.conf ファイルで追加または修正されたら、NetBackup が変更を認識するように bprd と bpdbm を停止し、再起動します。(NetBackup Request デーモンと NetBackup Database Manager。) メモ: メディアサーバー上の最初の SERVER エントリ (プライマリサーバー) を変更する場合、NetBackup データベースも更新する必要があります。nbemmcmd -updatehost を実行して、メディアサーバーのプライマリサーバーを変更します。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> サーバーを選択 >[サーバー (Servers)]。 p.169 の「[サーバー (Servers)]プロパティ」を参照してください。 p.249 の「NetBackup サーバーの FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVERS オプション」を参照してください。

NetBackup サーバーの SERVER_CONNECT_TIMEOUT オプション

SERVER_CONNECT_TIMEOUT は、プライマリサーバーがメディアサーバーへの接続でタイムアウトするまでに待機する時間 (秒数) を指定します。

表 2-188 SERVER_CONNECT_TIMEOUT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>SERVER_CONNECT_TIMEOUT = seconds</pre> デフォルトのタイムアウトは 30 秒です。 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	この例では、60 秒のタイムアウトが許可されます。 <pre>SERVER_CONNECT_TIMEOUT = 60</pre>

NetBackup サーバーの SERVER_PORT_WINDOW オプション

SERVER_PORT_WINDOW オプションで、インバウンド接続が一般的なポートに対して行われていない場合に、このコンピュータ上の NetBackup が別のコンピュータ上の NetBackup から接続を受け入れる、予約されていないポートの範囲を指定します。これは主に、接続オプションでリモート bpcd サーバーまたはクライアントに対して vnetd が無効になっていて、そのホストが予約されていないポートに対して構成されている場合に NetBackup コールバックに適用されます。また、リモート NDMP バックアップ中のメディアサーバーに対する NDMP コールバックにも適用されます。

表 2-189 SERVER_PORT_WINDOW の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはメディアサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>SERVER_PORT_WINDOW = start_portend_port</pre> デフォルトの範囲は 1024 から 5000 です。 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	次の例では、ポート番号 4900 から 5000 の使用が許可されます。 <pre>SERVER_PORT_WINDOW = 4900 5000</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> サーバーを選択 >[ポートの範囲 (Port ranges)]>[サーバーのポートウィンドウ (Server port window)]。 p.135 の「[ポートの範囲 (Port ranges)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーとクライアントの SERVER_RESERVED_PORT_WINDOW オプション

このオプションは、インバウンド接続が一般的なポートに対して行われていない場合に、このコンピュータが別のコンピュータ上の NetBackup からの接続を受け入れる、ローカルの予約済みポートの範囲を指定します。これは主に、リモートの NetBackup サーバーまたはクライアントの接続オプションで vnetd が無効になっている場合の bpcd のコールバックに適用されます。

SERVER_RESERVED_PORT_WINDOW オプションは、サーバーが予約済みポートのみ受け入れるように構成されたクライアントに接続する場合に適用されます。このオプションは、通常、クライアント上では有効ではありません。

表 2-190 SERVER_RESERVED_PORT_WINDOW の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはメディアサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>SERVER_RESERVED_PORT_WINDOW = start_portend_port</pre> デフォルトの範囲は 512 から 1023 です。 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	次の例では、ポート番号 900 から 1023 の使用が許可されます。 <pre>SERVER_RESERVED_PORT_WINDOW = 900 1023</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> サーバーを選択 >[ポートの範囲 (Port ranges)]>[サーバーの予約済みポートウィンドウ (Server reserved port window)]。 p.135 の「[ポートの範囲 (Port ranges)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの SKIP_RESTORE_TO_SYMLINK_DIR オプション

SKIP_RESTORE_TO_SYMLINK_DIR オプションで、ファイルのリストア先になる UNIX クライアント上で、すべてのディレクトリを NetBackup が確認するように強制します。シンボリックリンクが設定されているディレクトリ内にリストア対象のファイルが存在する場合、NetBackup はそのファイルのリストアを実行しません。

表 2-191 SKIP_RESTORE_TO_SYMLINK_DIR の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 たとえば、UNIX クライアントによって /home/user/.cshrc のリストアが要求され、/home/user がシンボリックリンクである場合、NetBackup では .cshrc のリストアは実行されません。 SKIP_RESTORE_TO_SYMLINK_DIRを追加すると、root 権限でリストアが実行されている場合に、セキュリティ問題およびデータ損失の問題が発生する可能性を最小限に抑えることができます。bp.conf ファイルに SKIP_RESTORE_TO_SYMLINK_DIR が含まれない場合、NetBackup では、シンボリックリンクが設定されているすべてのディレクトリをたどり、その場所にファイルがリストアされます。 メモ: このオプションを使用すると、リストアジョブのパフォーマンスが低下します。 SKIP_RESTORE_TO_SYMLINK_DIRとUNLINK_ON_OVERWRITEの両方が指定されている場合、互いに影響を与えることはありません。ただし、次の場合は例外です。 次のオプションが有効になる場合 ■ [既存のファイルの上書き (Overwrite existing files)]オプション ■ SKIP_RESTORE_TO_SYMLINK_DIR ■ UNLINK_ON_OVERWRITE リストアジョブがシンボリックリンクをたどると、そのリンクはジョブによる確認の前にリンクを解除され、ファイルおよびディレクトリのリストアが実行されます。 たとえば、/home/user/ ディレクトリ全体がバックアップされており、リストア時に、これがああるディレクトリへのシンボリックリンクであるとしします。 このような設定では次のような結果となります。 ■ SKIP_RESTORE_TO_SYMLINK_DIRを設定 (および[既存のファイルの上書き (Overwrite existing files)]を指定) すると、シンボリックリンクが指すディレクトリへのファイルのリストアは実行されません。シンボリックリンクは保持されます。 ■ UNLINK_ON_OVERWRITEとSKIP_RESTORE_TO_SYMLINK_DIRの両方を設定 (および[既存のファイルの上書き (Overwrite existing files)]を指定) すると、シンボリックリンクが設定されているディレクトリは、リンクを解除されます。元のディレクトリはリストアされ、そのディレクトリ内のすべてのファイルもリストアされます。 ■ どちらのオプションも設定しない場合 (ただし、[既存のファイルの上書き (Overwrite existing files)]は指定)、NetBackup はシンボリックリンクをたどり、シンボリックリンクが指すディレクトリにすべてのファイルをリストアします。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 >[ポートの範囲 (Port ranges)]>[サーバーの予約済みポートウィンドウ (Server reserved port window)]。 p.135 の「[ポートの範囲 (Port ranges)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup プライマリサーバーの SYSLOG_AUDIT_CATEGORIES

SYSLOG_AUDIT_CATEGORIES オプションを使用して、NetBackup 監査イベントをシステムログに送信します。システムログ内の NetBackup 監査イベントを表示できます。たとえば Windows システムでは、Windows イベントマネージャを使用して NetBackup 監査イベントを表示します。

表 2-192 SYSLOG_AUDIT_CATEGORIES の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>SYSLOG_AUDIT_CATEGORIES = audit_category1, audit_category2</pre> たとえば、ポリシーとジョブの監査カテゴリのイベントをシステムログに送信するには、次の形式を使用します。 <pre>SYSLOG_AUDIT_CATEGORIES = POLICY, JOB</pre> ポリシーとジョブのすべての監査カテゴリのイベントをシステムログに送信するには、次の形式を使用します。 <pre>SYSLOG_AUDIT_CATEGORIES = ALL</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[セキュリティ (Security)]>[セキュリティイベント (Security events)]>[セキュリティイベント (Security event)]設定>[監査イベントをシステムログに送信する (Send the audit events to the system logs)]。

NetBackup プライマリサーバーの SYSLOG_AUDIT_USE_OCSF_FORMAT

デフォルトでは、NetBackup はネイティブ形式でシステムログに監査イベントを送信します。

SYSLOG_AUDIT_USE_OCSF_FORMAT オプションを使用して、OCSF (Open CyberSecurity Schema Framework) 形式のシステムログに NetBackup 監査イベントを送信します。

システムログで NetBackup 監査イベントを表示できます。たとえば Windows システムでは、Windows イベントマネージャを使用して NetBackup 監査イベントを表示します。

表 2-193 SYSLOG_AUDIT_USE_OCSF_FORMAT

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 次の形式を使用します。 SYSLOG_AUDIT_USE_OCSF_FORMAT = TRUE
同等の NetBackup Web UI プロパティ	Web UI に同等のプロパティはありません

NetBackup サーバーの TELEMETRY_UPLOAD オプション

TELEMETRY_UPLOAD を使って、NetBackup 製品が NetBackup 環境でどのように使われているかについてのデータを収集できます。情報は、継続的な品質向上プログラム (NetBackup Product Improvement Program) の一部に組み込まれます。この情報を参考に、NetBackup を開発し、お客様が NetBackup 製品をどのように構成、配置、使用しているかをサポートチームが把握します。このデータは、会社の製品開発および問題分析の目的にのみ使用されます。

遠隔測定収集エージェントは、すべての NetBackup サーバーで動作します。遠隔測定収集エージェントは、NetBackup クライアントでは動作しません。

メモ: Cohesity Alta がサーバーを管理している場合、この値は無視されます。

表 2-194 TELEMETRY_UPLOAD 情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>TELEMETRY_UPLOAD = YES NO</pre> デフォルトは YES です。 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。

NetBackup クライアントの IPv6 アドレスの規則

IPv6 アドレスの範囲には、個々のクライアントまたはサブネット全体を指定できます。

- IPv6 アドレスは次の形式を取ることができます。
 - a.b.c.d.
ここで、a、b、c および d は、0 から ffff の範囲の 16 進の整数です。
 - a
ネットワークのバイト順序で完全な IP アドレスを表す 32 ビットの整数。(最上位バイトから順番に格納されるビッグエンディアン。)
- 16 進数として IPv6 アドレスを入力します。
- IPv6 アドレスのサブネット部分またはホスト部分を 0 (ゼロ) に設定することはできません。
- 通常の IPv6 アドレスのみが受け入れられます。
- 同じ範囲の IPv6 アドレスを指定する複数のエントリを作成しないでください。複数のエントリが作成された場合、NetBackup は最後に検出したエントリを使います。次の例では、NetBackup では 2 番目のエントリが使用されます。

```
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110::/48 500  
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110::/48 200
```

この規則は、1 つの完全なクライアントアドレスを指定する複数のエントリにも適用されます。次に例を示します。

```
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110:0:0:0:8b72::/128 200  
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110:0:0:0:8b72::/128 100
```

- IPv6 アドレスの範囲を指定するときは、範囲を重複させないでください。

たとえば、次の範囲を指定するとします。

```
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110::/48 500  
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110::/48 500
```

この場合、範囲が重複しており、帯域幅の制限の結果が予測できなくなります。

- 1つのエントリでアドレスの範囲を指定し、別のエントリで特定のクライアントのアドレスを指定します。

あるクライアントが、そのクライアントの完全な IPv6 アドレスを指定するエントリで指定され、一定の範囲の IPv6 アドレスを指定するエントリでも指定されている場合、NetBackup では、そのクライアントの完全な IP アドレスを指定するエントリに設定されている帯域幅の値が使用されます。

次のエントリでは、IPv6 アドレスの範囲に帯域幅が設定されています。

```
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110::/48 500
```

次のエントリでは、範囲内の特定のアドレスに帯域幅が設定されています。

```
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110:0:0:0:8b72::/128 200
```

この場合、NetBackup はアドレスが 2001:db8:1:110:0:0:0:8b72 であるクライアントに対して特定のエントリ (帯域幅 200) を使用します。この機能を使用して、特定のクライアントを帯域幅の制限からエクスクルードすることもできます。bp.conf ファイルでの範囲および特定のアドレスのエントリの順序は、重要ではありません。

NetBackup クライアントの IPv6 アドレスの規則

IPv6 アドレスの範囲には、個々のクライアントまたはサブネット全体を指定できます。

- IPv6 アドレスは次の形式を取ることができます。
 - a.b.c.d.
ここで、a、b、c および d は、0 から ffff の範囲の 16 進の整数です。
 - a
ネットワークのバイト順序で完全な IP アドレスを表す 32 ビットの整数。(最上位バイトから順番に格納されるビッグエンディアン。)
- 16 進数として IPv6 アドレスを入力します。
- IPv6 アドレスのサブネット部分またはホスト部分を 0 (ゼロ) に設定することはできません。
- 通常の IPv6 アドレスのみが受け入れられます。
- 同じ範囲の IPv6 アドレスを指定する複数のエントリを作成しないでください。複数のエントリが作成された場合、NetBackup は最後に検出したエントリを使います。
次の例では、NetBackup では 2 番目のエントリが使用されます。

```
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110::/48 500  
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110::/48 200
```

この規則は、1つの完全なクライアントアドレスを指定する複数のエントリにも適用されます。次に例を示します。

```
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110:0:0:0:8b72::/128 200  
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110:0:0:0:8b72::/128 100
```

- **IPv6 アドレスの範囲を指定するときは、範囲を重複させないでください。**
たとえば、次の範囲を指定するとします。

```
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110::/48 500  
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110::/48 500
```

この場合、範囲が重複しており、帯域幅の制限の結果が予測できなくなります。

- **1つのエントリでアドレスの範囲を指定し、別のエントリで特定のクライアントのアドレスを指定します。**

あるクライアントが、そのクライアントの完全な **IPv6** アドレスを指定するエントリで指定され、一定の範囲の **IPv6** アドレスを指定するエントリでも指定されている場合、**NetBackup** では、そのクライアントの完全な **IP** アドレスを指定するエントリに設定されている帯域幅の値が使用されます。

次のエントリでは、**IPv6** アドレスの範囲に帯域幅が設定されています。

```
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110::/48 500
```

次のエントリでは、範囲内の特定のアドレスに帯域幅が設定されています。

```
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110:0:0:0:8b72::/128 200
```

この場合、**NetBackup** はアドレスが **2001:db8:1:110:0:0:0:8b72** であるクライアントに対して特定のエントリ (帯域幅 **200**) を使用します。この機能を使用して、特定のクライアントを帯域幅の制限からエクスクルードすることもできます。bp.conf ファイルでの範囲および特定のアドレスのエントリの順序は、重要ではありません。

NetBackup クライアント用の帯域幅の値を設定するためのルール

個々のクライアントの帯域幅を、次のいずれかの値に設定します。

- **0 (ゼロ)** (帯域幅を制限しない)
- クライアントの **IP** アドレスを含む **IPv6** アドレスの範囲に設定された値以下の値
たとえば、次の設定は有効です。

```
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110:0:0:0:8b72::/64 500  
LIMIT_BANDWIDTH = 2001:db8:1:110:0:0:0:8b72::/128 300
```

帯域幅を設定範囲よりも高くクライアントに設定した場合、**NetBackup** は個々の設定を無視します。その代わり、**NetBackup** はその範囲の値を使います。この場合、クライアントはネットワークに指定された帯域幅を共有します。

クライアントに対する帯域幅の制限が範囲の値以下の場合、クライアントは次のうち小さい方の値を使用します。

- 共有するネットワークの帯域幅の値。
- 個々の帯域幅の値。

NetBackup によってクライアントに対して使用される帯域幅の値は、常に 1 KB/秒以上になります。

NetBackup サーバーの TRUSTED_PRIMARY オプション

TRUSTED_PRIMARY オプションにより、管理者はターゲットプライマリサーバードメイン内で特定のストレージライフサイクルポリシーを示し、自動イメージレプリケーションを構成します。(特定のターゲットドメイン SLP にレプリケートする機能は、の MSDP ストレージサーバーと PDDO ストレージサーバー間でサポートされます。)

表 2-195 TRUSTED_PRIMARY の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはメディアサーバー上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 ソースドメイン内のプライマリサーバーとターゲットドメイン内のプライマリサーバーに、TRUSTED_PRIMARY を追加します。
例	ソースドメインのプライマリサーバーで、ターゲットプライマリサーバーの名前を入力します。 TRUSTED_PRIMARY = Target_Server_Name ターゲットドメインのプライマリサーバーで、ソースプライマリサーバーの名前を入力します。 TRUSTED_PRIMARY = Source_Server_Name

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> サーバーを選択 >[サーバー (Servers)]>[信頼できるプライマリサーバー (Trusted primary servers)]タブ。 [設定 (Settings)]>[グローバルセキュリティ (Global security)]>[信頼できるプライマリサーバー (Trusted primary servers)] p.169 の「[サーバー (Servers)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーの ULINK_ON_OVERWRITE オプション

UNIX クライアントでリストアオプションとして[既存のファイルの上書き (Overwrite existing files)]が指定されている場合、UNLINK_ON_OVERWRITE オプションは NetBackup に次の処理を実行させます。

- リストアするファイルの存在を確認します。
- ファイルがある場合はそのファイルのリンクを解除します。
- ファイルのリストアを行います。

ファイルには、通常のファイル、シンボリックリンク、ハードリンクまたは空のディレクトリを指定できます。

UNLINK_ON_OVERWRITE を追加すると、既存のシンボリックリンクをたどることによって、セキュリティ問題およびデータ損失の問題が発生する可能性を最小限に抑えることができます。また、ファイルがバックアップ時の状態と同じ状態にリストアされることが保証されます。

表 2-196 ULINK_ON_OVERWRITE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 メモ: このオプションを使用すると、リストアジョブのパフォーマンスが低下します。 UNLINK_ON_OVERWRITE オプションを <code>bp.conf</code> ファイルで指定しない場合、[既存のファイルの上書き (Overwrite existing files)] オプションが指定されていると、シンボリックリンクをリストアするときに NetBackup の動作が異なります。(または、オプションが [NO] に設定されている場合。) NetBackup はシンボリックリンク、ハードリンク、また特殊ファイル (CHR、BLK、FIFO) をリストアするときに既存のファイルまたは空のディレクトリのリンクを解除します。 ただし、NetBackup は通常のファイルまたはディレクトリをリストアする場合はリンクを解除しません。これによって問題が発生する可能性があります。NetBackup はシンボリックリンクをたどり、シンボリックリンクが指すファイルを作成するか、置換します。または、シンボリックリンクが指すディレクトリを置換します。 SKIP_RESTORE_TO_SYMLINK_DIR と UNLINK_ON_OVERWRITE の両方が指定されている場合、互いに影響を与えることはありません。ただし、次の場合は例外です。 次のオプションが有効になる場合 ■ [既存のファイルの上書き (Overwrite existing files)] オプション ■ SKIP_RESTORE_TO_SYMLINK_DIR ■ UNLINK_ON_OVERWRITE リストアジョブがシンボリックリンクをたどると、そのリンクはジョブによる確認の前にリンクを解除され、ファイルおよびディレクトリのリストアが実行されます。
例	たとえば、ディレクトリとして <code>/home/user/</code> パスがバックアップされており、これがあるディレクトリへのシンボリックリンクである場合、リストア時に次の操作が行われます。 ■ SKIP_RESTORE_TO_SYMLINK_DIR を設定 (および[既存のファイルの上書き (Overwrite existing files)]を指定) すると、シンボリックリンクが指すディレクトリへのファイルのリストアは実行されません。シンボリックリンクは保持されます。 ■ UNLINK_ON_OVERWRITE と SKIP_RESTORE_TO_SYMLINK_DIR の両方を設定 (および[既存のファイルの上書き (Overwrite existing files)]を指定) すると、シンボリックリンクが設定されているディレクトリは、リンクを解除されます。元のディレクトリはリストアされ、そのディレクトリ内のすべてのファイルもリストアされます。 ■ どちらも設定しない場合 (ただし、[既存のファイルの上書き (Overwrite existing files)] は指定)、NetBackup はシンボリックリンクをたどり、シンボリックリンクが指すディレクトリにすべてのファイルがリストアされます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの USE_URANDOM

コンピューティングでのエントロピーとは、オペレーティングシステムまたはアプリケーションが、暗号化や、ランダムデータを必要とするその他の用途で使用するために収集するランダム性です。

NetBackup 環境で暗号上安全なランダム出力を提供する文字型デバイスとして /dev/urandom オプションを指定するには、USE_URANDOM を有効にします。

表 2-197 USE_URANDOM の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup サーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 USE_URANDOM オプションのデフォルト値は 0 です。 USE_URANDOM オプションにデフォルト値が設定されている場合、使用される文字型デバイスは、NB_FIPS_MODE オプションの値に基づきます。NB_FIPS_MODE が有効な場合は、dev/random が使用されます。NB_FIPS_MODE が無効な場合は、dev/urandom が使用されます。 p.274 の「NetBackup サーバーとクライアントの NB_FIPS_MODE オプション」を参照してください。 USE_URANDOM オプションを有効にするには、次の形式を使用します。 <pre>USE_URANDOM = 1</pre> USE_URANDOM が 2 に設定されている (または無効になっている) 場合は、暗号上安全なランダム出力を提供するために dev/random 文字型デバイスが使用されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの VERBOSE オプション

デバッグ目的で使います。VERBOSE オプションは、NetBackup によってレガシーログに含められる情報の量を制御します。

表 2-198 VERBOSE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはクライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>VERBOSE = [0 1 2 3 4 5]</pre> デフォルトでは、このオプションは無効に設定されています。 このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> サーバーまたはクライアントを選択 >[ログ (Logging)]>[グローバルログレベル (Global logging level)]。 p.120 の「[ログ (Logging)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup サーバーとクライアントの VIRTUALIZATION_CRL_CHECK

VIRTUALIZATION_CRL_CHECK オプションを使用すると、仮想化サーバーの外部証明書の失効の確認レベルを指定できます。確認に基づいて、ホストとの通信時に、証明書失効リスト (CRL) に対して仮想化サーバー証明書の失効状態が検証されます。

デフォルトでは、VIRTUALIZATION_CRL_CHECK は無効になっています。証明書失効リスト (CRL) に対して仮想化サーバー証明書の失効状態を検証する場合は、オプションを別の値に設定します。

ECA_CRL_PATH 構成オプションまたは CRL 配布ポイント (CDP) で指定されているディレクトリの CRL を使用できます。

p.236 の「[NetBackup サーバーとクライアントの ECA_CRL_PATH](#)」を参照してください。

表 2-199 VIRTUALIZATION_CRL_CHECK の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはすべてのアクセスホスト上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>VIRTUALIZATION_CRL_CHECK = CRL check</pre> 次のいずれかを指定できます。 ■ DISABLE (または 0) - 失効の確認を無効にします。ホストとの通信時に、CRL で証明書の失効状態は検証されません。これはデフォルト値です。 ■ LEAF (または 1) - CRL でリーフ証明書の失効状態が検証されます。 ■ CHAIN (または 2) - CRL で証明書チェーンの証明書すべての失効状態が検証されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

サーバーとクライアントの VIRTUALIZATION_HOSTS_SECURE_CONNECT_ENABLED

`VIRTUALIZATION_HOSTS_SECURE_CONNECT_ENABLED` オプションを指定すると、仮想化サーバー証明書をルートまたは中間の認証局 (CA) 証明書を使用して検証できます。

このオプションを有効にする前に、『[NetBackup for VMware 管理者ガイド](#)』の「NetBackup での VMware 仮想化サーバー証明書の検証」セクションの手順を確認してください。

デフォルトでは、`VIRTUALIZATION_HOSTS_SECURE_CONNECT_ENABLED` オプションは `UNDEFINED` に設定されています。

セキュリティ証明書検証は Red Hat Virtualization および Nutanix AHV サーバーでは有効になりますが、VMware サーバーでは無効になります。

メモ: 1 つの外部 CA を 1 台の仮想サーバーに構成でき、それ以外には構成できない場合は、2 台の別々のバックアップホストを使用する必要があります。外部 CA を構成できるバックアップホストに対しては、VIRTUALIZATION_HOSTS_SECURE_CONNECT_ENABLED オプションを YES に設定する必要があります。外部 CA を構成できるバックアップホストに対しては、VIRTUALIZATION_HOSTS_SECURE_CONNECT_ENABLED を YES に設定する必要があります。他のバックアップホストでは、このオプションを NO に設定する必要があります。

表 2-200 VIRTUALIZATION_HOSTS_SECURE_CONNECT_ENABLED の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはすべてのアクセスホスト上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 デフォルトでは、HADOOP_SECURE_CONNECT_ENABLED は YES に設定されています。 Hadoop の証明書検証を有効にするには、次の形式を使用します。 <pre>HADOOP_SECURE_CONNECT_ENABLED = YES</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

サーバーとクライアントの VIRTUALIZATION_HOSTS_CONNECT_TIMEOUT

VIRTUALIZATION_HOSTS_CONNECT_TIMEOUT オプションでは、NetBackup と vCloud Director サーバー間の接続が終了するまでの時間を秒単位で指定できます。

表 2-201

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはすべてのアクセスホスト上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 デフォルトでは、VIRTUALIZATION_HOSTS_CONNECT_TIMEOUT オプションは 60 秒に設定されています。 タイムアウト値を指定するには、次の形式を使用します。 <pre>VIRTUALIZATION_HOSTS_CONNECT_TIMEOUT = Time-out value in seconds</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの VMWARE_AUTODISCOVERY_INTERVAL オプション

このオプションは、NetBackup が仮想マシンを検出して NetBackup Web UI に表示するために、vCenter Server をスキャンする頻度を制御します。

NetBackup による自動検出は、最初に前回検出に成功したホストで試行されます。そのホストで自動検出に失敗すると、NetBackup による他のホストへの再試行が、次の順序で行われます。

- NetBackup プライマリサーバー
- アクセスホスト、クライアント、プロキシサーバー
- メディアサーバー

表 2-202 VMWARE_AUTODISCOVERY_INTERVAL 情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバー上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 メモ: これらのコマンドでは、NetBackup プライマリサーバーの管理者権限が必要です。詳しくは、NetBackup 管理者にお問い合わせください。 このオプションは、NetBackup 構成 API でも表示、追加、変更できます。詳しくは、SORT の NetBackup API ドキュメントを参照してください。 デフォルトは 8 時間です。最小値は 5 分で、最大値は 1 年です。0 に設定すると、自動検出がすべての VMware サーバーに対して無効になります。 次の形式を使用します。 <pre>VMWARE_AUTODISCOVERY_INTERVAL = number of seconds</pre> 次に例を示します。 <pre>VMWARE_AUTODISCOVERY_INTERVAL = 100000</pre> このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 メモ: このオプションを変更した後、NetBackup サービスを停止して再起動します。VM の検出の場合、NetBackup Discovery Framework サービスが実行中である必要があります。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[作業負荷 (Workloads)]、[VMware]、[VMware 設定 (VMware settings)]、[自動検出 (Autodiscovery)]

NetBackup のサーバーとクライアント用の VM_SNAPSHOT_QUIESCE_STATUS オプション

NetBackup には、ターゲット VMware 仮想マシンの静止が失敗した場合に、「静止フェールオーバー」を実行し、静止解除されたスナップショットを実行するオプションが用意されています。デフォルトでは、スナップショットジョブは状態 0 (成功) として報告します。

VM_SNAPSHOT_QUIESCE_STATUS オプションは、ターゲット VMware 仮想マシンの静止が失敗したときに、スナップショットジョブの状態を 0 から 1 (部分的な成功) に変更する機能を提供します。

表 2-203 VM_SNAPSHOT_QUIESCE_STATUS 情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup メディアサーバーおよびバックアップホスト。

使用方法	説明
使用方法	デフォルトでは、このオプションは構成ファイルまたはレジストリにはありません。この場合、ターゲット VMware 仮想マシンの静止が失敗すると、静止解除されたスナップショットのスナップショットジョブの状態は 0 (成功) になります。 オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 メモ: これらのコマンドでは、NetBackup プライマリサーバーの管理者権限が必要です。詳しくは、NetBackup 管理者にお問い合わせください。 このオプションは、NetBackup 構成 API でも表示、追加、変更できます。詳しくは、SORT の NetBackup API ドキュメントを参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>VM_SNAPSHOT_QUIESCE_STATUS = policyname1, policyname2, policyname3</pre> 次に例を示します。 <pre>VM_SNAPSHOT_QUIESCE_STATUS = vmware1, vmware2</pre> このエントリは、構成ファイルまたはレジストリで一度のみ表示されるはずです。 メモ: このオプションを変更した後、NetBackup サービスを停止して再起動します。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーとクライアントの VMWARE_TLS_MINIMUM_V1_2

VMWARE_TLS_MINIMUM_V1_2 オプションを使用すると、NetBackup と VMware サーバー間の通信に使用するトランスポート層セキュリティ (TLS) のバージョンを指定できます。

表 2-204

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup プライマリサーバーまたはすべてのアクセスホスト上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>VMWARE_TLS_MINIMUM_V1_2 = YES NO</pre> デフォルトでは、VMWARE_TLS_MINIMUM_V1_2 オプションは YES に設定されています。 このオプションが YES に設定されている場合、TLS 1.2 のバージョンと次の暗号スイートが VMware サーバーとの通信に使用されます。 <pre>TLS_ECDHE_ECDSA_WITH_AES_256_GCM_SHA384、 TLS_ECDHE_RSA_WITH_AES_256_GCM_SHA384、 TLS_DHE_RSA_WITH_AES_256_GCM_SHA384、 TLS_DHE_DSS_WITH_AES_256_GCM_SHA384、 TLS_ECDHE_ECDSA_WITH_AES_128_GCM_SHA256、 TLS_ECDHE_RSA_WITH_AES_128_GCM_SHA256、 TLS_DHE_RSA_WITH_AES_128_GCM_SHA256、 TLS_DHE_DSS_WITH_AES_128_GCM_SHA256、 TLS_RSA_WITH_AES_256_GCM_SHA384、 TLS_RSA_WITH_AES_128_GCM_SHA256</pre> このオプションが NO に設定されている場合、デフォルトの暗号スイートの TLS 1.2 以前のバージョンが NetBackup と VMware サーバー間の通信に使用されます。暗号スイートは、それぞれの VMware サーバーに設定されている TLS および暗号スイートの構成に基づいて使用されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup サーバーの WEB_SERVER_TUNNEL_ENABLE オプション

非武装地帯 (DMZ) では、クライアントは直接プライマリとの通信を試みます。接続が失敗した場合は、メディアサーバーで HTTP トンネルを使用して通信を試みます。

WEB_SERVER_TUNNEL_ENABLE オプションを使用して、特定のメディアサーバーの HTTP トンネルを無効にできます。メディアサーバーが DMZ 内にないクライアントのバックアップを取る場合は、このオプションを使うことができます。

詳しくは、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』で、非武装地帯の NetBackup クライアントと HTTP トンネルを経由するプライマリサーバー間の通信に関するセクションを参照してください。

表 2-205 WEB_SERVER_TUNNEL_ENABLE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup メディアサーバー上で
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>WEB_SERVER_TUNNEL_ENABLE = 1 0</pre> このオプションでは、次のパラメータを使用します。 ■ 1 は HTTP トンネルを使用します。この値は、デフォルトと見なされます。 ■ 0 は、HTTP トンネルを使用する通信を無効にします。この値は、HTTP トンネル プロセスが開始されないようにします。 デフォルトでは、WEB_SERVER_TUNNEL_ENABLE オプションは構成ファイル内に存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの構成オプション

次の各項では NetBackup クライアントの構成オプションについて説明しています。これらのオプションのほぼすべては、NetBackup Web UI の[ホスト (Host)]でも設定できます。

クライアントの ACCEPT_REVERSE_CONNECTION

ACCEPT_REVERSE_CONNECTION オプションを使用すると、NAT クライアントまたは NAT サーバーでサブスクリバサービスを開始できます。

このオプションを有効にすると、クライアントサービスを再起動する必要があります。

表 2-206 ACCEPT_REVERSE_CONNECTION の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 次の形式を使用します。 ACCEPT_REVERSE_CONNECTION = TRUE
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの APP_PROXY_SERVER オプション

APP_PROXY_SERVER エントリは、許可されたリストに載せるバックアップホストとしてのクライアントの名前を指定します。

表 2-207 APP_PROXY_SERVER の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 次の形式を使用します。 APP_PROXY_SERVER = <i>clientname</i>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの BACKUP_BTRFS_SNAPSHOT オプション

このオプションは、BTRFS ファイルシステム (BTRFS) のスナップショットの内容がバックアップ対象であることを示します。

表 2-208 BACKUP_BTRFS_SNAPSHOT 情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	デフォルトでは、構成ファイルに BACKUP_BTRFS_SNAPSHOT は記述されていません。オプションが有効でないと、BTRFS サブボリュームのバックアップのみが作成され、BTRFS スナップショットのバックアップは作成されません。 このオプションが記述されている場合は、有効にすると (1)、クライアントの BTRFS スナップショットの内容のバックアップが作成されます。 次の形式を使用します。 <pre>BACKUP_BTRFS_SNAPSHOT = 1</pre> このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	次の形式を使用すると、BTRFS スナップショットの内容のバックアップが作成されます。 <pre>BACKUP_BTRFS_SNAPSHOT = 1</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。
追加情報	このオプションは BTRFS にのみ適用されます。デフォルトでは、BTRFS スナップショットの内容のバックアップは作成されません。スナップショットのパスを無視するには、libbtrfsutil パッケージ (バージョン 4.17 以降) がクライアントコンピュータに存在する必要があります。クライアントコンピュータに libbtrfsutil パッケージ存在しない場合、読み取り専用スナップショットまたはサブボリュームのバックアップは無視されます。

NetBackup クライアントの BACKUP_FIFO_FILES オプション

このオプションは、名前付きパイプの内容がバックアップ対象であることを示します。FIFO と呼ばれる名前付きパイプは、ファイルシステムインターフェースを使ってデータを転送するプロセス間通信の手法です。

表 2-209 BACKUP_FIFO_FILES 情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 デフォルトでは、構成ファイルに BACKUP_FIFO_FILES は記述されていません。このオプションが有効でないと、名前付きパイプのファイルのメタデータのみがバックアップされ、ファイル内のデータはバックアップされません。 このオプションが存在し、有効化されると (1)、クライアント上の名前付きパイプのファイルの内容がバックアップされます。 次の形式を使用します。 <pre>BACKUP_FIFO_FILES = 1</pre> このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
例	次の形式を使用すると、クライアント上の名前付きパイプのファイルの内容がバックアップされます。 <pre>BACKUP_FIFO_FILES = 1</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。
追加情報	バックアップするファイルの内容については、書き込みプロセスでパイプを閉じる必要があります。データがパイプを通過する間は、バックアップが継続します。 名前付きパイプのファイルに書き込むサードパーティプロセスでパイプが閉じられない場合、NetBackup ではゼロ以外の状態コード (通常は 13 または 41) でバックアップジョブが失敗します。それにより、サーバーリソースを別のジョブに割り当てられるようになります。リストアジョブの場合は、状態コード 2800 で失敗します。どちらの場合も、クライアントプロセスは終了されるまで待機し続けます。 名前付きパイプへの書き込みを行うスクリプトまたは実行可能ファイルをバックアップするには、名前付きパイプのファイルではなくプログラムファイルを[バックアップ対象 (Backup selections)]リストに追加します。名前付きパイプのバックアップは回避するが、他のパイプの内容は読み取る場合は、名前付きパイプをエクスクルードリストに追加するか、[バックアップ対象 (Backup selections)]リスト内のファイルを完全に除外します。

NetBackup クライアントの BPARCHIVE_POLICY オプション

ユーザーアーカイブに使用するポリシーの名前を指定します。BPARCHIVE_POLICY

表 2-210 BPARCHIVE_POLICY の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>BPARCHIVE_POLICY = policy_name</pre> デフォルトでは、設定BPARCHIVE_POLICYファイルには存在しません。デフォルトでは、NetBackup ではクライアントとユーザーアーカイブスケジュールが設定されていることが最初に検出されたポリシーが使用されます。 使用される場合、このオプションは設定ファイルで一度のみ表示されます。 ユーザーの \$HOME/bp.conf ファイルに値が存在する場合、その値が優先されます。 p.760 の「[バックアップ形式 (Type of backup)](スケジュール属性)」を参照してください。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの BPARCHIVE_SCHED オプション

ユーザーアーカイブのスケジュールの名前を指定します。

表 2-211 BPARCHIVE_SCHED の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>BPARCHIVE_SCHED = schedule_name</pre> デフォルトでは、設定BPARCHIVE_SCHEDファイルには は存在しません。デフォルトでは、NetBackup ではこのクライアントが設定されていることを最初に検出されたポリシーの最初のアーカイブスケジュールが使用されます。 使用される場合、このオプションは設定ファイルで一度のみ表示されます。 ユーザーの \$HOME/bp.conf ファイルに値が存在する場合、その値が優先されます。 p.768 の「ユーザースケジュールについての考慮事項」を参照してください。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの BPBACKUP_POLICY オプション

ユーザーバックアップに使用するポリシーの名前を指定します。

表 2-212 BPBACKUP_POLICY の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>BPBACKUP_POLICY = policy_name</pre> デフォルトでは、設定BPBACKUP_POLICYファイルには は存在しません。デフォルトでは、NetBackup では、クライアントとユーザーバックアップスケジュールの両方が設定されていることが最初に検出されたポリシーが使用されます。 存在する場合、このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 ユーザーの \$HOME/bp.conf ファイルに値が存在する場合、その値が優先されます。 p.760 の「[バックアップ形式 (Type of backup)](スケジュール属性)」を参照してください。

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの BPBACKUP_SCHEDULE オプション

ユーザーバックアップに使用するスケジュールの名前を指定します。

表 2-213 BPBACKUP_SCHEDULE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>BPBACKUP_SCHEDULE = schedule_name</pre> デフォルトでは、設定BPBACKUP_SCHEDULEファイルには存在しません。デフォルトでは、NetBackup では、クライアントとユーザーバックアップスケジュールの両方が設定されていることが最初に検出されたポリシーが使用されます。 存在する場合、このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 ユーザーの \$HOME/bp.conf ファイルに値が存在する場合、その値が優先されます。 p.768 の「ユーザースケジュールについての考慮事項」を参照してください。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの BUSY_FILE_ACTION オプション

BUSY_FILE_ACTION エントリによって、ビジー状態のファイルの処理が有効になっている場合、ビジー状態のファイルに対して NetBackup によって実行される操作を指定します。

表 2-214 BUSY_FILE_ACTION の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 <pre>BUSY_FILE_ACTION = filename_template action_template</pre> ■ filename_template ビジー状態のファイルの絶対パス名およびファイル名です。シェル言語のメタ文字 (*、?、[]、[-]) は、ファイル名またはファイル名の一部のパターン一致に使用できます。 ■ action_template 次のいずれかのパラメータを使用します。 ■ MAIL mail BUSY_FILE_NOTIFY_USER オプションによって指定されたユーザーにビジー状態のファイル通知メッセージを電子メールで送信するように NetBackup を設定します。 ■ REPEAT repeat [repeat_count] 指定したビジー状態のファイルのバックアップが再試行されるように NetBackup を設定します。繰り返し回数を指定して、バックアップの試行回数を制御できます。デフォルトの繰り返し回数は 1 です。 ■ IGNORE ignore ビジー状態のファイルが処理から除外されるように NetBackup を設定します。 複数の BUSY_FILE_ACTION エントリを指定できます。 ユーザーの \$HOME/bp.conf ファイルに値が存在する場合、その値が優先されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]>クライアントを選択 >[クライアントの編集 (Edit client)]>[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]。 p.61 の「[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup クライアントの BUSY_FILE_DIRECTORY オプション

ビジー状態のファイルの処理が有効になっている場合、ビジー状態のファイルの作業ディレクトリへのパスを指定します。BUSY_FILE_DIRECTORY

表 2-215 BUSY_FILE_DIRECTORY の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>BUSY_FILE_DIRECTORY = pathname</pre> デフォルトでは、設定BUSY_FILE_DIRECTORYファイルには存在しません。デフォルトでは、NetBackup によって /usr/opensv/netbackup に busy_files ディレクトリが作成されます。 存在する場合、このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 ユーザーの \$HOME/bp.conf ファイルに値が存在する場合、その値が優先されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]>クライアントを選択>[クライアントの編集 (Edit client)]>[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]。 p.61 の「[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup クライアントの BUSY_FILE_NOTIFY_USER オプション

BUSY_FILE_NOTIFY_USER エントリは BUSY_FILE_ACTION エントリが MAIL に設定される場合の通知の受信者を指定します。

表 2-216 BUSY_FILE_NOTIFY_USER の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>BUSY_FILE_NOTIFY_USER = email</pre> デフォルトでは、設定BUSY_FILE_NOTIFY_USERファイルには存在しません。デフォルトでは、root ユーザーが電子メールを受信します。 存在する場合、このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 ユーザーの \$HOME/bp.conf ファイルに値が存在する場合、その値が優先されます。

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]>クライアントを選択 >[クライアントの編集 (Edit client)]>[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]。 p.61 の「 [ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]プロパティ 」を参照してください。

NetBackup クライアントの BUSY_FILE_PROCESSING オプション

BUSY_FILE_PROCESSING エントリは、バックアップ処理中にファイルが変更された場合に NetBackup が行う処理を管理者が制御できるようにします。

表 2-217 BUSY_FILE_PROCESSING の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 次の形式を使用します。 BUSY_FILE_PROCESSING = yes デフォルトでは、設定BUSY_FILE_PROCESSINGBUSY_FILE_PROCESSING は存在しないため、ビジー状態のファイルの処理は行われません。 存在する場合、このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]>クライアントを選択 >[クライアントの編集 (Edit client)]>[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]。 p.61 の「 [ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]プロパティ 」を参照してください。

NetBackup クライアントの CLIENT_NAME オプション

CLIENT_NAME エントリによって、NetBackup に認識されるクライアントの名前を指定します。

表 2-218 CLIENT_NAME の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>CLIENT_NAME = clientname</pre> このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 複数のエントリが表示されている場合、NetBackup はこのオプションで表示された最後の CLIENT_NAME エントリのみに従います。クライアントをバックアップするポリシーのクライアント名は、CLIENT_NAME で指定されているクライアント名と一致する必要があります。 メモ: ポリシーのクライアント名として IP アドレスを使わなければ、バックアップが失敗する可能性があります。代わりにホスト名を指定してください。 プライマリサーバーの bp.conf では、CLIENT_NAME = primary server name としてのプライマリサーバー以外に、他のクライアントの追加を必要としません。この名前はデフォルトで追加されます。 リストア時に、デフォルトでは、バックアップに使われたポリシー内に指定されたクライアントへのリストアが行われます。代替クライアントにリストアをリダイレクトするには、[宛先クライアント (Destination client)] フィールドにターゲットクライアントの名前を指定します。 bprestore コマンドを使うために、宛先クライアントを示すパラメータを bprestore に指定できます。 クライアントのインストール手順では、CLIENT_NAME がインストールスクリプトの ftp_to_client コマンドまたは install_client コマンドに指定されている値に自動的に設定されます。 bp.conf ファイルに値が存在しない場合、NetBackup では、gethostname() ライブラリ関数によって戻される値が使用されます。 p.65 の「[クライアント名 (Client name)]プロパティ」を参照してください。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> クライアントを選択 >[クライアント名 (Client name)]。

NetBackup クライアントの COMPRESS_SUFFIX オプション

COMPRESS_SUFFIX ファイル拡張子のリストを指定します。これらの拡張子が付いたファイルはすでに圧縮形式になっている可能性があるため、バックアップの実行中、**NetBackup** によってこれらのファイルは圧縮されません。

表 2-219 COMPRESS_SUFFIX の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>COMPRESS_SUFFIX = .suffix</pre> デフォルトでは、bp.conf ファイルには COMPRESS_SUFFIX は存在しません。このオプションには適切なデフォルトが設定されています。問題が発生したときのみ変更します。 複数の COMPRESS_SUFFIX エントリを指定できます。 これらの拡張子の指定にワイルドカードは使用しないでください。A* または A [1-9] は指定しないでください (たとえば、A1などを指定してください)。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> クライアントを選択 >[クライアントの編集 (Edit client)]>[UNIX クライアント (UNIX client)]>[クライアントの設定 (Client settings)]>[次のファイル拡張子を持つファイルは圧縮しない (Do not compress files with these file extensions)]。 p.77 の「UNIX クライアントの[クライアントの設定 (Client settings)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup クライアントの CRYPT_CIPHER オプション

CRYPT_CIPHER エントリは、NetBackup Encryption オプションがインストールされているクライアントに適用されます。

表 2-220 CRYPT_CIPHER の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>CRYPT_CIPHER = value</pre> value には、次のいずれかを指定します。 ■ AES-128-CFB (方法が指定されていない場合のデフォルト) ■ AES-256-CFB ■ BF-CFB ■ DES-EDE-CFB このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> クライアントを選択 >[クライアントの編集 (Edit client)]>[暗号化 (Encryption)]。 p.93 の「[暗号化 (Encryption)]プロパティ」を参照してください。 NetBackup Encryption について詳しくは、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

NetBackup クライアントの CRYPT_KIND オプション

クライアントの CRYPT_KIND エントリは、バックアップで標準暗号化とレガシー暗号化のどちらを使用するかを決定します。通常、CRYPT_KIND は自動的に設定されます。

CRYPT_KIND エントリは、NetBackup Encryption オプションがインストールされているクライアントに適用されます。

『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。

表 2-221 CRYPT_KIND の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>CRYPT_KIND = type</pre> 入力できる値は、次のとおりです。 ■ NONE クライアントで暗号化を使用しません (デフォルト)。 ■ LEGACY レガシーは、40 ビットおよび 56 ビットのデータ暗号化規格 (DES) に適用されます。レガシー暗号化は推奨されません。 ■ STANDARD 標準は、128 ビットと 256 ビットの暗号化 (AES、3DES、Blowfish の暗号) に適用されます。標準の暗号化を推奨します。 このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]>クライアントを選択 >[クライアントの編集 (Edit client)]>[暗号化 (Encryption)]。 p.93 の『[暗号化 (Encryption)]プロパティ』を参照してください。

NetBackup クライアントの CRYPT_OPTION オプション

CRYPT_OPTION エントリは NetBackup クライアント上での暗号化オプションを指定します。NetBackup は UNIX クライアントの /usr/openv/netbackup/bp.conf ファイルで bpinst_crypt コマンドが NetBackup プライマリサーバーで動作するときに、このエントリを自動的に作成します。

CRYPT_OPTION エントリは、NetBackup Encryption オプションがインストールされているクライアントに適用されます。

これらのコマンドについて詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

誤って削除してしまった場合を除き、このエントリを変更することや、手動で作成することのないようにしてください。

表 2-222 CRYPT_OPTION の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>CRYPT_OPTION = type</pre> 入力できる値は、次のとおりです。 ■ DENIED denied クライアントが暗号化されたバックアップを許可しないように設定します。サーバーが暗号化されたバックアップを要求すると、エラーであると判断されます。このオプションは、暗号化用に構成されていないクライアントのデフォルトです。 ■ ALLOWED allowed クライアントが、暗号化されたバックアップまたは暗号化されていないバックアップを許可するように設定します。 ■ REQUIRED required クライアントが暗号化されたバックアップを要求するように設定します。この値が指定され、サーバーが暗号化されていないバックアップを要求した場合、エラーが発生します。 このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> クライアントを選択 >[クライアントの編集 (Edit client)]>[暗号化 (Encryption)]。 p.93 の「[暗号化 (Encryption)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup クライアントの CRYPT_STRENGTH オプション

CRYPT_STRENGTH エントリは、NetBackup クライアントでの暗号化の強度を指定します。NetBackup Encryption オプションがインストールされているクライアントに適用されます。『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。

表 2-223 CRYPT_STRENGTH の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>CRYPT_STRENGTH = value</pre> 指定可能な値は次のとおりです。 ■ DES_40 des_40 40 ビットの DES 暗号化を指定します。暗号化に対して構成されていないクライアントのデフォルト値は 40 ビットです。 ■ DES_56 des_56 56 ビットの DES 暗号化を指定します。 NetBackup は、bpinst_crypt コマンドが NetBackup プライマリサーバーで実行されると、UNIX クライアントでこのエントリを自動的に作成します。このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 誤って削除してしまった場合を除き、このエントリを変更することや、手動で作成することのないようにしてください。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。標準の暗号化オプションについては、次のトピックを参照してください。 p.93 の「[暗号化 (Encryption)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup クライアントの CRYPT_LIBPATH オプション

CRYPT_LIBPATH エントリは NetBackup クライアントの暗号化ライブラリが含まれているディレクトリを指定します。NetBackup は UNIX クライアントの /usr/opensv/netbackup/bp.conf ファイルで bpinst_crypt コマンドが NetBackup プライマリサーバーで動作するときに、このエントリを自動的に作成します。

CRYPT_LIBPATH エントリは、NetBackup Encryption オプションがインストールされているクライアントに適用されます。誤って削除してしまった場合を除き、このエントリを変更することや、手動で作成することのないようにしてください。このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。

『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。

表 2-224 CRYPT_LIBPATH の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>CRYPT_LIBPATH = directory</pre> 必要に応じて、次の場所にエントリを作成します。 ■ Windows システムのデフォルト値は <code>install_path¥NetBackup¥bin¥</code> です。 ここで、<code>install_path</code> は、NetBackup がインストールされているディレクトリを示します。デフォルトは <code>C:¥Program Files¥Cohesity NetBackup</code> です。 ■ UNIX システムのデフォルト値は <code>/usr/opensv/lib/</code> です。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)] > [ホストプロパティ (Host properties)] > クライアントを選択 > [クライアントプロパティの編集 (Edit client properties)] > [暗号化 (Encryption)]。 p. 93 の「[暗号化 (Encryption)] プロパティ」を参照してください。

NetBackup クライアントの CRYPT_KEYFILE オプション

CRYPT_KEYFILE エントリは NetBackup のクライアントの暗号化キーが含まれているファイルを指定します。NetBackup は UNIX クライアントの `/usr/opensv/netbackup/bp.conf` ファイルで `bpinst_crypt` コマンドが NetBackup プライマリサーバーで動作するときに、このエントリを自動的に作成します。

『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。

表 2-225 CRYPT_KEYFILE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	CRYPT_KEYFILE エントリは、NetBackup Encryption オプションがインストールされているクライアントに適用されます。誤って削除してしまった場合を除き、このエントリを変更することや、手動で作成することのないようにしてください。 オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>CRYPT_KEYFILE = directory</pre> デフォルトの値は、次のとおりです。 ■ Windows システムの場合 <code>install_path¥bin¥keyfile.dat</code> ここで、<i>install_path</i> は、NetBackup がインストールされているディレクトリを示します。デフォルトは C:¥Program Files¥Cohesity NetBackup です。 ■ UNIX システムの場合 <code>/usr/opensv/netbackup/keyfile</code> このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。標準の暗号化オプションについては、次のトピックを参照してください。 p.93 の「[暗号化 (Encryption)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup クライアントの DO_NOT_RESET_FILE_ACCESS_TIME オプション

DO_NOT_RESET_FILE_ACCESS_TIME ファイルのバックアップが行われると、ファイルのアクセス時刻 (atime) にそのファイルのバックアップが行われた時刻が表示されるように指定します。デフォルトでは、NetBackup によってアクセス時刻がバックアップ前の値にリセットされ、アクセス時刻が保持されます。

表 2-226 DO_NOT_RESET_FILE_ACCESS_TIME の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>DO_NOT_RESET_FILE_ACCESS_TIME</pre> このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 メモ: DO_NOT_RESET_FILE_ACCESS_TIME は USE_CTIME_FOR_INCREMENTALS が有効な場合は有効にする必要があります。これらのオプションを設定すると、ファイルのバックアップを行うたびにファイルのアクセス時刻 (atime) が変更されます。atime が更新されると、ファイルが最近使用されたものとして表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]>クライアントを選択>[クライアントの編集 (Edit client)][UNIX クライアント (UNIX client)]>[クライアントの設定 (Client settings)]>[ファイルのアクセス時刻をバックアップ前の値にリセット (Reset file access time to the value before backup)]。 メモ: プロパティのラベルまたは説明は、構成設定の逆です。したがって、このプロパティが有効になっていると、DO_NOT_RESET_FILE_ACCESS_TIME は無効になります。同様に、このプロパティが無効になっていると、DO_NOT_RESET_FILE_ACCESS_TIME は有効になります。 このプロパティは、USE_CTIME_FOR_INCREMENTALS が有効になっている場合は無効のままにする必要があります。 p.77 の「UNIX クライアントの[クライアントの設定 (Client settings)]プロパティ」を参照してください。

クライアントの DTE_CLIENT_MODE

DTE_CLIENT_MODE オプションでは、NetBackup クライアントで設定されている移動中のデータの暗号化 (DTE) モードを指定します。

表 2-227 DTE_CLIENT_MODE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>DTE_CLIENT_MODE = AUTOMATIC ON OFF</pre> デフォルトでは、9.1 クライアントの DTE モードは OFF に設定され、10.0 以降のクライアントでは AUTOMATIC に設定されます。 ■ この DTE_CLIENT_MODE オプションが AUTOMATIC に設定されている場合、クライアントはグローバルレベルで設定されている DTE モード (Enforced、Preferred On、または Preferred Off) に従います。 ■ このオプションが ON に設定されている場合、移動中のデータの暗号化はクライアントで有効になります。 ■ このオプションが OFF に設定されている場合、移動中のデータの暗号化はクライアントで無効になります。グローバル DTE モードが Preferred On に設定されている場合、この設定を使用してクライアントを暗号化から除外できます。 メモ: グローバル DTE モードが Enforced に設定されている場合、DTE_CLIENT_MODE オプションが「Off」に設定されている NetBackup クライアントと 9.1 より前のホストに対するジョブは失敗します。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。 グローバル設定は、[設定 (Settings)]>[グローバルセキュリティ (Global security)]>[安全な通信 (Secure communication)]>[移動中のデータの暗号化 (Data-in-transit encryption)]で構成されます。

クライアントの ENABLE_DATA_CHANNEL_ENCRYPTION

ENABLE_DATA_CHANNEL_ENCRYPTION オプションは、NAT クライアントおよび NAT サーバー (または NAT ホスト) との通信でデータチャネルの暗号化を有効にするかどうかを指定します。

NAT ホストが NetBackup ドメインで設定されている場合、デフォルトでは、データチャネルの暗号化が有効になっています。

表 2-228 ENABLE_DATA_CHANNEL_ENCRYPTION の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 データチャネルの暗号化を無効にするには、次の形式を使用します。 <pre>ENABLE_DATA_CHANNEL_ENCRYPTION = FALSE</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの IGNORE_XATTR オプション

デフォルトでは、拡張ファイル属性 (Solaris 9 以上) と名前付きデータストリームは、バックアップされます。IGNORE_XATTR を使用して、拡張属性と名前付きデータストリームをバックアップ対象から除外します (IGNORE_XATTR は旧名 IGNORE_XATTR_SOLARIS)。

表 2-229 IGNORE_XATTR の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>IGNORE_XATTR</pre> NetBackup は、IGNORE_XATTR エントリが bp.conf ファイルに存在する場合、拡張属性または名前付きデータストリームを確認しません。 このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 p.839 の「拡張ファイル属性および名前付きデータストリームのバックアップおよびリストアについて」を参照してください。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

GPFS ボリュームの ACL、拡張属性、およびメタデータ属性のバックアップとリストア

NetBackup は、General Parallel File System ファイルおよびフォルダのアクセス制御リスト、拡張属性、およびメタデータ属性を認識します。デフォルトでは、NetBackup は GPFS ボリュームですべてのバックアップおよび復元を行います。追加の設定は必要ありません。

AIX または RHEL 以外のオペレーティングシステムまたは GPFS 以外のファイルシステムに GPFS 拡張属性を使用してファイルをリストアするとエラーが生成されたり、ジョブに失敗したりすることがあります。リストア対象がメタデータを認識しないことが原因でエラーが起きます。

GPFS ボリュームの ACL および拡張属性のバックアップまたは復元の防止

- GPFS 拡張属性のバックアップを防ぐ方法

IGNORE_XATTR エントリをクライアントの `bp.conf` ファイルに追加します。

```
/usr/opensv/netbackup/bp.conf
```

このエントリに値を設定する必要はありません。エントリは IGNORE_XATTR のみです。

- GPFS ACL のバックアップを防ぐ方法

クライアントに IGNORE_ACL touch ファイルを追加します。

```
/usr/opensv/netbackup/IGNORE_ACL
```

メモ: 拡張属性のバックアップを許可している場合、IGNORE_ACL touch ファイルの有無にかかわらず、ACL もバックアップされます。

- GPFS 拡張属性の復元を防ぐ方法 (最初にバックアップされた場合)

クライアントに IGNORE_XATTR touch ファイルを追加します。

```
/usr/opensv/netbackup/IGNORE_XATTR
```

- GPFS ACL の復元を防ぐ方法 (最初にバックアップされた場合)

クライアントに IGNORE_ACL touch ファイルを追加します。

```
/usr/opensv/netbackup/IGNORE_ACL
```

メモ: 拡張属性の復元を許可している場合、IGNORE_ACL touch ファイルの有無にかかわらず、ACL もバックアップされます。

GPFS 拡張属性をバックアップ、リストアする場合の注意事項

- ACL または拡張属性を含むファイルまたはフォルダのリストアでは、最初に ACL と拡張属性のバックアップを作成した場合は ACL と拡張属性もリストアされます。ただし、

リストアジョブが中断した場合に処理中の最後のファイルはリストアジョブを再開したときにスキップされることがあります。その場合は、そのファイルの ACL と拡張属性、以降のすべてのファイルはリストアされません。

- IGNORE_XATTR オプションは、拡張属性があるファイルやフォルダのバックアップを作成するときに拡張属性を無視するように NetBackup に指示します。NetBackup アクセラレータの初回バックアップでは、IGNORE_XATTR を bp.conf ファイルやレジストリに追加し、以降のバックアップで削除する場合は [アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] オプションを有効にしてバックアップを実行します。p.771 の「[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] オプション (スケジュールの属性)」を参照してください。
- バックアップを実行した後で ACL インターフェースを使用して ACL パーミッションを変更する場合は、リストア時に ACL が保存されない場合もあります。

GPFS メタデータ属性 (storage pools、metadata replicatoin、および data replication) のサポート

NetBackup には GPFS メタデータ属性 (storage pools、metadata replicatoin、および data replication) のバックアップと復元のサポートが追加されました。デフォルトでは、NetBackup は GPFS ボリュームの ACL、拡張属性、およびこれらの追加メタデータ属性をバックアップおよび復元します。追加の設定は必要ありません。

ファイルの復元後にファイルの状態に illplaced フラグまたは illreplicated フラグが表示される場合は、次の情報を参照してください。(ファイルの状態を表示するには、GPFS mmlsattr コマンドを使用します)。

illplaced フラグは、ファイルがバックアップ時の場所とは別の GPFS ストレージプールに復元された場合に表示されます。この変更は、GPFS ファイル配置ポリシーにおける作成ルールの変更または移行ルールの結果に起因する場合があります。または、GPFS 管理者が mmchatrr コマンドを使用してファイルを別のストレージに移動している場合があります。

illreplicated フラグは、復元されたファイルのあるストレージプールにあるエラーグループがデータレプリケーション設定に定める数よりも少ない場合、またはシステムプールにあるエラーグループがメタデータレプリケーション設定よりも少ない場合に表示されます。

GPFS 管理者は、関連するファイル数とネットワークトラフィックに応じて次の 2 つのコマンドのいずれかを実行することで、ファイルのレプリケーション係数を再調整して illplaced フラグまたは illreplicated フラグを解決できます。

- 単一ファイルの場合: mmrestripefile
- ファイルシステム全体の場合: mmrestripefs

メモ: GPFS 属性と ACL を持つファイルを代替プラットフォームに復元した場合、メタデータ属性または ACL が復元されません。この復元では「不正なシステム呼び出し」などのエラーが発生する場合があります。(ただし拡張属性は代替プラットフォームに復元可能です。)

NetBackup クライアントの INFORMIX_HOME オプション

エントリによって、クライアントが for Informix を使用している場合に必要、Informix のホームディレクトリへのパスを指定します。INFORMIX_HOME

表 2-230 INFORMIX_HOME の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 INFORMIX_HOME このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの KEEP_DATABASE_COMM_FILE オプション

KEEP_DATABASE_COMM_FILE エントリによって、NetBackup でデータベースエージェントのログが 7 日間保持されるように設定します。デフォルトでは、NetBackup はデータベースエージェントのログが保持される期間は 1 日間だけです。

表 2-231 KEEP_DATABASE_COMM_FILE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>KEEP_DATABASE_COMM_FILE</pre> たとえば、NetBackup for Informix を実行するクライアントに追加します。 このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの KEEP_LOGS_DAYS オプション

KEEP_LOGS_DAYS エントリによって、[バックアップ、アーカイブおよびリストア (Backup, Archive, and Restore)]のジョブおよび進捗ログを保持する期間を指定します。デフォルトは 3 日間です。

NetBackup は次のディレクトリ内にこれらのファイルを書き込みます。

- /usr/opensv/netbackup/logs/user_ops/username/jobs
- /usr/opensv/netbackup/logs/user_ops/username/logs

[バックアップ、アーカイブおよびリストア (Backup, Archive, and Restore)]コンソールを使用するユーザーごとにディレクトリが存在します。

NetBackup Java を実行可能なプラットフォーム上では、NetBackup Java インターフェースのログファイルが、nbjlogs サブディレクトリに書き込まれます。KEEP_LOGS_DAYS オプションでは、このディレクトリからログファイルは削除されません。管理者は、組織の要件に従ってこのディレクトリに存在するこれらのログをクリーンアップできます。

表 2-232 KEEP_LOGS_DAYS の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションファイルを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 KEEP_LOGS_DAYS このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)]、クライアントを選択、[Windows クライアント (Windows Client)]、[クライアントの設定 (Client settings)]、[ユーザー主導バックアップ、アーカイブおよびリストアの状態を保持する期間 (Keep status of user-directed backups, archives and restores)] [ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host properties)]、クライアントを選択、[UNIX クライアント (UNIX Client)]、[クライアントの設定 (Client settings)]、[ユーザー主導バックアップ、アーカイブおよびリストアの状態を保持する期間 (Keep status of user-directed backups, archives and restores)]

NetBackup クライアントの LIST_FILES_TIMEOUT オプション

クライアントユーザーインターフェースまたはを使用してファイルを一覧表示する場合に、サーバーからの応答を待機する時間を指定します。LIST_FILES_TIMEOUTbp_{list}この時間を超過すると、サーバーがユーザーの要求を処理中である場合でも、ユーザーは [ソケットの読み込みに失敗しました socket read failed] というエラーを受け取ります。デフォルトでは、ファイルには が存在せず、NetBackup では 30 分が使用されません。LIST_FILES_TIMEOUTbp.conf

表 2-233 LIST_FILES_TIMEOUT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 LIST_FILES_TIMEOUT このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 \$HOME/bp.conf ファイルに値が存在する場合、その値が優先されます。

使用方法	説明
同等の Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> クライアントを選択 >[クライアントの編集 (Edit client)]>[タイムアウト (Timeouts)]。 p.186 の「 [タイムアウト (Timeouts)]プロパティ 」を参照してください。

NetBackup クライアントの LOCKED_FILE_ACTION オプション

LOCKED_FILE_ACTION エントリによって、ファイルモードで強制ロックが有効になっているファイルのバックアップを行う場合の、NetBackup の動作を指定します。(chmod(1) を参照。) このエントリが SKIP に設定されている場合、他のプロセスにより強制ロックが設定されているファイルは NetBackup によりスキップされます。スキップしたことは NetBackup にメッセージとして記録されます。

表 2-234 LOCKED_FILE_ACTION の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup の UNIX または Linux クライアント上。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 次の形式を使用します。 LOCKED_FILE_ACTION = SKIP このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 メモ: SKIP は、このエントリの唯一の有効な値です。デフォルトでは、NetBackup はファイルのロックが解除されるまで待機します。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> クライアントを選択 > [クライアントの編集 (Edit client)] >[UNIX クライアント (UNIX client)]>[クライアントの設定 (Client settings)]。 p.77 の「 [UNIX クライアントの[クライアントの設定 (Client settings)]プロパティ 」を参照してください。

NetBackup クライアントの MEDIA_SERVER オプション

一覧表示されているコンピュータがメディアサーバーであることを指定します。
MEDIA_SERVER メディアサーバーとして一覧表示されるコンピュータは、クライアントのバックアップおよびリストアを行うことができますが、管理権限は制限されています。

表 2-235 MEDIA_SERVER の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>MEDIA_SERVER = media_server_name</pre> このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> クライアントを選択 >[クライアントの編集 (Edit client)]>[サーバー (Servers)]。 p.318 の「NetBackup サーバーの SERVER オプション」を参照してください。

NetBackup クライアントの MEGABYTES_OF_MEMORY オプション

バックアップの実行中にファイルを圧縮するために、クライアント上で利用可能なメモリ量を指定します。MEGABYTES_OF_MEMORY 圧縮を選択している場合、クライアントソフトウェアでは、この値を使用して圧縮テーブルに必要なメモリ領域が判断されます。コードを圧縮するのに利用可能なメモリを増やすと、圧縮率が高くなります。コンピュータのリソース消費率も高くなります。他のプロセスにもメモリが必要な場合は、過剰なスワッピングを回避するために、コンピュータに搭載されている実際の物理メモリの半分の値を使用してください。

表 2-236 MEGABYTES_OF_MEMORY の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>MEGABYTES_OF_MEMORY = memory_value</pre> デフォルトでは NetBackup は、0 MB の値を想定します。 このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 メモ: MEGABYTES_OF_MEMORY エントリには適切なデフォルトが設定されています。問題が発生した場合だけ変更してください。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> クライアントを選択 > [クライアントの編集 (Edit client)]>[UNIX クライアントの設定 (UNIX client settings)]。 p.77 の「UNIX クライアントの[クライアントの設定 (Client settings)]プロパティ」を参照してください。

SQL Server クライアントの MSSQL_CONFIG_LIST

MSSQL_CONFIG_LIST オプションは、非表示になっている読み取り不可能なセカンダリインスタンスをサポートします。プライマリから NetBackup へのポート番号を提供するセカンダリの構成がないため、NetBackup ユーザーが提供する必要があります。

表 2-237 MSSQL_CONFIG_LIST の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup SQL Server クライアント。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、bpgetconfig コマンドと bpsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 プライマリのポート番号を追加するには、次の形式を使用します。 <pre>MSSQL_CONFIG_LIST = "hostname¥instance,port"</pre> 次に例を示します。 <pre>MSSQL_CONFIG_LIST = "myhost¥SQL2K22,1633"</pre>

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。 必要な RBAC 権限を持つユーザーは、hostProperties API エンドポイントを使用してこの設定を行うこともできます。詳しくは、『NetBackup for Microsoft SQL Server 管理者ガイド』を参照してください。

複数のノードのポートを設定するには

- 1 最初のノードで host¥instance,port を設定します。

```
C:¥Program Files¥Cohesity
NetBackup¥NetBackup¥bin¥admincmd>bpsetconfig -h host16vm5
bpsetconfig> MSSQL_CONFIG_LIST=host16vm5¥SQL2K22,1633
bpsetconfig> MSSQL_CONFIG_LIST=host16vm6¥SQL2K22,1634
bpsetconfig> ^Z
```

- 2 ファイルに設定をコピーするために bpgetconfig を使用します。

```
F:¥Program Files¥Cohesity
NetBackup¥NetBackup¥bin¥admincmd>bpgetconfig -M host16vm5 |
findstr MSSQL_CONFIG_LIST > settings.out
```

- 3 このファイルを使用して、他のすべてのノードで構成を設定します。

```
C:¥Program Files¥Cohesity
NetBackup¥NetBackup¥bin¥admincmd>bpsetconfig -h host16vm6
settings.out
```

- 4 設定を検証するために bpgetconfig を使用します。

```
F:¥Program Files¥Cohesity
NetBackup¥NetBackup¥bin¥admincmd>bpgetconfig -M host16vm6 |
findstr MSSQL_CONFIG_LIST
MSSQL_CONFIG_LIST = host16vm5¥SQL2K22,1633
MSSQL_CONFIG_LIST = host16vm6¥SQL2K22,1634
```

SQL Server クライアントの MSSQL_ODBC_ENCRYPT_CONNECTION

MSSQL_ODBC_ENCRYPT_CONNECTION オプションは、TLS を使用してターゲット SQL Server クライアントへの接続を暗号化するかどうかを決定します。10.4 以降に更新され

た NetBackup SQL Server クライアントの場合、クライアントからターゲット SQL Server インスタンスへの SQL Server ODBC 接続はデフォルトで暗号化されます。

表 2-238 MSSQL_ODBC_ENCRYPT_CONNECTION の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup SQL Server クライアント。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 データチャネルの暗号化を無効にするには、次の形式を使用します。 <pre>MSSQL_ODBC_ENCRYPT_CONNECTION = NO</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。 必要な RBAC 権限を持つユーザーは、hostProperties API エンドポイントを使用してこの設定を行うこともできます。詳しくは、『NetBackup for Microsoft SQL Server 管理者ガイド』を参照してください。

詳細情報

p.372 の「[SQL Server クライアントの MSSQL_ODBC_TRUST_SERVER_CERTIFICATE](#)」を参照してください。

p.371 の「[SQL Server クライアントの MSSQL_ODBC_PREFERRED_DRIVER](#)」を参照してください。

SQL Server クライアントの MSSQL_ODBC_PREFERRED_DRIVER

接続中に使用するサポート対象の SQL Server ODBC ドライバの名前。

表 2-239 MSSQL_ODBC_PREFERRED_DRIVER の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup SQL Server クライアント。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 デフォルト値は OLDEST です。セキュリティポリシーが厳格で、懸念をお持ちのお客様は、NEWEST ドライバまたは自社で認定されているバージョンを使用する必要があります。 最も古いドライバまたは最新のドライバを自動的に選択するには、次の形式を使用します。 <pre>MSSQL_ODBC_PREFERRED_DRIVER = OLDEST NEWEST</pre> 特定のドライバ名に対して、ドライバ名ごとに個別のエントリを作成します。 <pre>MSSQL_ODBC_PREFERRED_DRIVER = ODBC Driver 18 for SQL Server MSSQL_ODBC_PREFERRED_DRIVER = ODBC Driver 17 for SQL Server</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。 必要な RBAC 権限を持つユーザーは、hostProperties API エンドポイントを使用してこの設定を行うこともできます。詳しくは、『NetBackup for Microsoft SQL Server 管理者ガイド』を参照してください。

詳細情報

- p.370 の「[SQL Server クライアントの MSSQL_ODBC_ENCRYPT_CONNECTION](#)」を参照してください。
- p.372 の「[SQL Server クライアントの MSSQL_ODBC_TRUST_SERVER_CERTIFICATE](#)」を参照してください。

SQL Server クライアントの
MSSQL_ODBC_TRUST_SERVER_CERTIFICATE

- MSSQL_ODBC_TRUST_SERVER_CERTIFICATE オプションは、ターゲット SQL Server インスタンスの証明書を信頼するかどうかを決定します。
- 10.3.1 以降のクライアントの場合、アップグレード時に予期しない接続エラーが発生しないように、MSSQL_ODBC_TRUST_SERVER_CERTIFICATE はデフォルトで NO に設定されています。

表 2-240 MSSQL_ODBC_TRUST_SERVER_CERTIFICATE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup SQL Server クライアント。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 ターゲットインスタンスの証明書の信頼を無効にするには、次の形式を使用します。 MSSQL_ODBC_TRUST_SERVER_CERTIFICATE = NO
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。 必要な RBAC 権限を持つユーザーは、hostProperties API エンドポイントを使用してこの設定を行うこともできます。詳しくは、『NetBackup for Microsoft SQL Server 管理者ガイド』を参照してください。

詳細情報

p.370 の「[SQL Server クライアントの MSSQL_ODBC_ENCRYPT_CONNECTION](#)」を参照してください。

p.372 の「[SQL Server クライアントの MSSQL_ODBC_TRUST_SERVER_CERTIFICATE](#)」を参照してください。

NetBackup クライアントの NFS_ACCESS_TIMEOUT オプション

NFS_ACCESS_TIMEOUT エントリはバックアップ処理が NFS マウントテーブルの処理中に待機する時間 (秒数) を指定します。この時間を超過すると、NFS ファイルシステムは利用できないと見なされます。

表 2-241 NFS_ACCESS_TIMEOUT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>NFS_ACCESS_TIMEOUT = seconds</pre> デフォルトでは、NFS_ACCESS_TIMEOUT は 5 秒に設定されます。 このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの OLD_VNETD_CALLBACK オプション

OLD_VNETD_CALLBACK エントリは、クライアントが NetBackup メディアサーバーの bptm プロセスではなく、クライアント主導リストアパスを使用することを指定します。クライアント主導リストアパスは、リストアジョブについて NetBackup メディアサーバーをバイパスします。メディアサーバー重複排除プールストレージサーバーから直接データを受信する場合は、NetBackup クライアントでこのエントリを構成します。

メディアサーバー重複排除プールをホストするメディアサーバーを廃止する前に、そのメディアサーバー上の MSDP を非アクティブ化する必要があります。該当リリースの『[NetBackup 重複排除ガイド](#)』を参照してください。

表 2-242 OLD_VNETD_CALLBACK の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>OLD_VNETD_CALLBACK = YES</pre> このエントリは、設定ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの REPORT_CLIENT_DISCOVERIES オプション

デフォルトでは、NetBackup Discovery Service (nbdisco) は、NetBackup 環境のすべてのクライアントで実行されます。このサービスは、アプリケーションのインスタンス (Oracle など) を発見するとプライマリサーバーに報告することで、インテリジェントなポリシーの構築を容易にします。

表 2-243 REPORT_CLIENT_DISCOVERIES 情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	デフォルトでは、設定REPORT_CLIENT_DISCOVERIESファイルにはは存在しません。REPORT_CLIENT_DISCOVERIES が存在しないとき、NetBackup Discovery Service は有効になります。 オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>REPORT_CLIENT_DISCOVERIES = TRUE FALSE</pre> このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 ■ エントリが FALSE に設定されている場合、そのクライアントの nbdisco プロセスはプライマリサーバーへの発見報告を停止します。FALSE に設定後 10 分以内にサービスは終了し、停止したままとなります。 ■ Discovery Service を再開するには、クライアントのエントリをREPORT_CLIENT_DISCOVERIES = TRUE に変更するか、オプション全体を削除します。それから、クライアントで bp.start_all を実行し、サービスを再起動します。 ■ クライアントでこの値をリモート設定するには、プライマリサーバーから次のコマンドを実行します。<pre>nbsetconfig -h clientname</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの RESTORE_RETRIES オプション

RESTORE_RETRIES エントリはリストアが失敗した場合の再試行回数を指定します。

表 2-244 RESTORE_RETRIES の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>RESTORE_RETRIES = number_of_retries</pre> デフォルトは 0 (ゼロ) であり、再試行されません。 このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 メモ: RESTORE_RETRIES エントリには適切なデフォルトが設定されています。問題が発生した場合だけ変更してください。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]>クライアントを選択>[クライアントの編集 (Edit client)][ユニバーサル設定 (Universal settings)]>[リストアの再試行 (Restore retries)]。 p.189 の「[ユニバーサル設定 (Universal settings)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup クライアントの RMAN_OUTPUT_DIR

RMAN_OUTPUT_DIR は、Oracle インテリジェントポリシーのバックアップ用に RMAN 入出力をローカルに配置する、クライアント上のディレクトリを指定します。NetBackup はログファイルをクリーンアップしないため、Oracle ユーザーはログファイルを手動でクリーンアップする必要があります。ログは、Oracle インテリジェントポリシーを使用してバックアップを実行するときのみ作成されます。Windows 環境では、クライアントあたり 1 つのみの RMAN_OUTPUT_DIR エントリが許可されます。UNIX 環境では、RMAN_OUTPUT_DIR エントリを \$HOME/bp.conf ファイルに追加することによって、各ユーザーが出力を異なる場所に配置できます。\$HOME/bp.conf ファイルに値が存在する場合、その値が優先されます。

RMAN_OUTPUT_DIR エントリの例を次に示します。

Windows: `install_path\oracle\oracle_logs\RMAN`

UNIX: `/oracle/oracle_logs/rman`

RMAN_OUTPUT_DIR について詳しくは、『[NetBackup for Oracle 管理者ガイド](#)』を参照してください。

表 2-245 RMAN_OUTPUT_DIR 情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>RMAN_OUTPUT_DIR = directory_name</pre> directory_name は、Oracle ユーザーが書き込み権限を持つディレクトリです。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアント側。

SERVER エントリによって、NetBackup クライアントにアクセス可能な NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバーのリストを定義します。クライアントのインストール時に、SERVER は、そのクライアントのプライマリサーバーの名前に自動的に設定されます。

このクライアントの他のプライマリサーバーおよびメディアサーバーに対して、SERVER エントリを追加する必要があります。クライアントは、サーバーと通信するために、すべてのプライマリサーバーからの証明書を保持する必要があります。クライアントが証明書を取得するには、すべての接続済みプライマリサーバーのエントリがクライアントの `bp.conf` ファイルにある必要があります。

表 2-246 SERVER の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 メモ: クライアントの bp.conf ファイルのすべての SERVER エントリは、NetBackup プライマリサーバーまたはメディアサーバーである必要があります。すなわち、SERVER として表示されている各システムには、NetBackup プライマリサーバーソフトウェアまたはメディアサーバーソフトウェアのいずれかがインストールされている必要があります。クライアント名が誤ってサーバーとしてリストに表示されている場合、そのクライアント上のクライアントサービスは起動されません。 メディアサーバーを構成する場合、各メディアサーバーには、クライアントの bp.conf ファイルに SERVER エントリか MEDIA_SERVER エントリが必要です。
例	次に、クライアント上の bp.conf ファイルの例を示します。 <pre>SERVER = Primary_server (デフォルトのプライマリサーバー) SERVER = NB_server (他のプライマリサーバー) SERVER = Media_server_#1 MEDIA_SERVER = Media_server_#2 . . .</pre> 最初の SERVER エントリは、クライアントが任意の要求のためにデフォルトで接続するプライマリサーバーを示します。(たとえば、ファイルのバックアップ、リスト表示、リストアなど)。SERVER エントリは、すべての UNIX クライアント上の /usr/opensv/netbackup/bp.conf ファイルに存在する必要があります。SERVER エントリは、クライアントの bp.conf ファイルに必要な唯一のエントリです。SERVER エントリは、\$HOME/bp.conf ファイルでは使用されません。NetBackup の UNIX サーバー上では、SERVER エントリはクライアントおよびサーバーの両方に適用されます。 p.316 の「NetBackup サーバーの RESUME_ORIG_DUP_ON_OPT_DUP_FAIL オプション」を参照してください。 p.367 の「NetBackup クライアントの MEDIA_SERVER オプション」を参照してください。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> クライアントを選択 >[クライアントの編集 (Edit client)]>[サーバー (Servers)]。 p.318 の「NetBackup サーバーの SERVER オプション」を参照してください。

クライアントの SUBSCRIBER_HEARTBEAT_TIMEOUT

SUBSCRIBER_HEARTBEAT_TIMEOUT オプションを使用すると、NAT クライアント上のサブスクライバサービスが、プライマリサーバーと通信するためのハートビート(または信号)を送信できます。

このオプションの値は秒単位で定義します。

表 2-247 SUBSCRIBER_HEARTBEAT_TIMEOUT の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 このオプションがゼロ以外の値に設定されていると、サブスクライバサービスはハートビートを送信します。 ハートビートを無効にするには、次の形式を使用します。 <pre>SUBSCRIBER_HEARTBEAT_TIMEOUT = 0</pre>
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの SYBASE_HOME オプション

SYBASE_HOME エントリは Sybase ホームディレクトリへのパスを指定します。このエントリは、NetBackup が Sybase を使って Sybase データベースをバックアップする場合に必要です。

表 2-248 SYBASE_HOME の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup for Sybase クライアント上。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>SYBASE_HOME = path_to_Sybase_home_directory</pre> デフォルトでは、SYBASE_HOME は設定ファイルに存在しません。 このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。 コマンドについて詳しくは、『NetBackup for Sybase 管理者ガイド』を参照してください。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	ホストプロパティには、このエントリに相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの USE_CTIME_FOR_INCREMENTALS オプション

USE_CTIME_FOR_INCREMENTALS エントリは、ファイルが変更されているかどうかを NetBackup が判断する方法を変更します。増分バックアップの実行中、クライアントソフトウェアで変更時刻および i ノード変更時刻の両方 (および) を使用して、ファイルが変更されたかどうかを判断します。mtimectime

表 2-249 USE_CTIME_FOR_INCREMENTALS の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。

使用方法	説明
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 USE_CTIME_FOR_INCREMENTALS このオプションは、設定ファイルで一度のみ表示されます。 デフォルトでは、NetBackup はmtime だけが使用されます。 メモ: USE_CTIME_FOR_INCREMENTALS を指定する場合、DO_NOT_RESET_FILE_ACCESS_TIME も指定する必要があります。これらのオプションを設定すると、ファイルのバックアップを行うたびにファイルのアクセス時刻 (atime) が変更されます。atime が更新されると、ファイルが最近使用されたものとして表示されます。 p.358 の「NetBackup クライアントの DO_NOT_RESET_FILE_ACCESS_TIME オプション」を参照してください。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの USE_FILE_CHG_LOG オプション

USE_FILE_CHG_LOG エントリによって、NetBackup で VxFS クライアント上のファイル変更ログを使用するかどうかを指定します。デフォルトでは、使用されません。

表 2-250 USE_FILE_CHG_LOG の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 USE_FILE_CHG_LOG このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。

使用方法	説明
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> クライアントを選択 >[クライアントの編集 (Edit client)] [UNIX クライアント (UNIX client)]>[クライアントの設定 (Client settings)]>[増分バックアップに VxFS ファイル変更ログを使用する (Use VxFS File Change Log for incremental backups)]。 p.79 の「[増分バックアップに VxFS ファイル変更ログ (FCL) を使用する (Use VxFS File Change Log (FCL) for incremental backups)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup クライアントの USEMAIL オプション

USEMAIL エントリによって、UNIX クライアントに対する操作の結果が NetBackup によって送信される電子メールアドレスを指定します。

表 2-251 USEMAIL の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup UNIXクライアント。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>USEMAIL = name1@xxx.com,name2@xxx.com,name3@xxx.com</pre> メモ: カンマを使って複数の電子メールアドレスを区切ります。空白を挿入しないでください。 次のように USEMAIL を追加します。 ■ USEMAIL でアドレスを指定すると、NetBackup によって、そのアドレスに自動バックアップと手動バックアップの状態が送信されます。 ■ \$HOME/bp.conf ファイルでアドレスを指定すると、NetBackup によって、そのアドレスにユーザー操作の成功または失敗の状態も送信されます。 このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	[ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> クライアントを選択 >[クライアントの編集 (Edit client)]>[ユニバーサル設定 (Universal settings)]。 p.189 の「[ユニバーサル設定 (Universal settings)]プロパティ」を参照してください。

NetBackup クライアントの WEB_SERVER_TUNNEL オプション

特定のプライマリサーバーに接続するための HTTP トンネルを作成する特定のメディアサーバーを使用するには、WEB_SERVER_TUNNEL オプションを追加します。このオ

プションでは、Web サービスの接続要求を送信するためにクライアント上で自動的に生成されるメディアサーバーおよびプライマリサーバーのリストが上書きされます。

詳しくは、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』で、非武装地帯の NetBackup クライアントと HTTP トンネルを経由するプライマリサーバー間の通信に関するセクションを参照してください。

表 2-252 WEB_SERVER_TUNNEL の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>WEB_SERVER_TUNNEL = <primary><media></pre> このオプションでは、次のパラメータを使用します。 ■ <i>primary</i> は、Web サービスの接続要求の受信者にする必要のあるホスト名または IP アドレスまたはプライマリサーバーの FQDN です。 ■ <i>media</i> は、HTTP トンネル経由の接続を設定するホスト名または IP アドレスまたはメディアサーバーの FQDN です。 複数ドメインを設定する場合は、別々の行に複数のエントリを追加できます。これらのエントリには、単一のプライマリサーバーおよび異なるメディアサーバー、または IP アドレス、ホスト名、完全修飾ドメイン名 (FQDN) などのメディアサーバーの異なる識別情報を含めることができます。 次に例を示します。 <pre>WEB_SERVER_TUNNEL=<primary> <media></pre> <pre>WEB_SERVER_TUNNEL=<primary1> <media1></pre> <pre>WEB_SERVER_TUNNEL=<primary1> <media1_IP address></pre> デフォルトでは、WEB_SERVER_TUNNEL オプションは構成ファイル内に存在しません。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

NetBackup クライアントの WEB_SERVER_TUNNEL_USE オプション

非武装地帯 (DMZ) では、クライアントは、プライマリサーバーとの通信を設定するために一連の手順を使用します。デフォルトでは、クライアントは直接プライマリとの通信を試みます。接続が失敗した場合は、メディアサーバーで HTTP トンネルを使用して通信を試

みます。WEB_SERVER_TUNNEL_USE オプションを使用するとデフォルトの動作を変更することができます。

詳しくは、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』で、非武装地帯の NetBackup クライアントと HTTP トンネルを経由するプライマリサーバー間の通信に関するセクションを参照してください。

表 2-253 WEB_SERVER_TUNNEL_USE の情報

使用方法	説明
使用する場所	NetBackup クライアント側。
使用方法	オプションを表示、追加、変更するには、nbgetconfig コマンドと nbsetconfig コマンドを使用します。 これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。 次の形式を使用します。 <pre>WEB_SERVER_TUNNEL_USE = AUTO ALWAYS NEVER</pre> このオプションでは、次のパラメータを使用します。 ■ AUTO は、自動ルーティングアルゴリズムを使用するデフォルト値です。 ■ ALWAYS は、接続に常に HTTP トンネルを使用することを定義します。DMZ 内の NetBackup クライアントにこのオプションを使用できます。 ■ NEVER は、接続に HTTP トンネルを使用しないことを定義します。DMZ 内には NetBackup クライアントにこのオプションを使用できません。 デフォルトでは、WEB_SERVER_TUNNEL_USE オプションは構成ファイル内に存在しません。 このオプションは、構成ファイルで一度のみ表示されます。
同等の NetBackup Web UI プロパティ	相当するエントリは存在しません。

サーバーグループの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup サーバーグループについて](#)
- [サーバーグループの追加](#)
- [サーバーグループの削除](#)

NetBackup サーバーグループについて

サーバーグループは、共通の用途で使用する NetBackup サーバーのグループです。

NetBackup の[メディアの共有 (Media sharing)]グループは、書き込み (バックアップ) 用のテープメディアを共有するサーバーグループです。[メディアの共有 (Media sharing)]サーバーグループのすべてのメンバーは、同じ NetBackup プライマリサーバーを使用している必要があります。

[メディアの共有 (Media sharing)]グループには、次のサーバーを含めることができます。

- NetBackup プライマリサーバー
- NetBackup メディアサーバー
- NDMP テープサーバー

p.542 の「[メディア共有について](#)」を参照してください。

p.543 の「[サーバーグループとのメディア共有の構成](#)」を参照してください。

サーバーグループの追加

サーバーグループは、共通の用途で使用する NetBackup サーバーのグループです。サーバーは、複数のグループに属することができます。

注意: NetBackup ではメディアサーバーの名前と同じサーバーグループ名を使用できません。混乱を避けるために、サーバーグループとメディアサーバーに同じ名前を使わないでください。

サーバーグループを追加する方法

- 1 左側で [ストレージ (Storage)]、[メディアサーバー (Media servers)] の順に選択します。
- 2 [サーバーグループ (Server groups)] をクリックします。
- 3 [サーバーグループの追加 (Add server group)] をクリックします。
- 4 サーバーグループの情報を入力します。

サーバーグループ名 (Server group name)	サーバーグループの一意の名前を入力します。既存のメディアサーバーまたは他のホストの名前は使用しないでください。既存のサーバーグループの名前は変更できません。
サーバーグループ形式 (Server Group Type)	サーバーグループの形式を選択します。
状態 (State)	[有効 (Active)]: サーバーグループは利用できます。 [無効 (Inactive)]: サーバーグループは利用できません。
説明 (Description)	グループの説明を入力します。

- 5 グループにサーバーを追加するには、[追加 (Add)] をクリックし、サーバーを選択してから [追加 (Add)] をクリックします。
グループからサーバーを削除するには、サーバーを選択して [削除 (Remove)] をクリックします。
- 6 [保存 (Save)] をクリックします。

サーバーグループの削除

使用なくなったサーバーグループは削除できます。または、グループ内でサーバーの目的が変更された場合などです。

サーバグループを削除する方法

- 1 左側で [ストレージ (Storage)]、[メディアサーバー (Media servers)] の順に選択します。
- 2 [サーバグループ (Server groups)] をクリックします。
- 3 削除するグループを選択します。次に、[削除 (Delete)]、[削除 (Delete)] の順にクリックします。

NetBackup での NAT クライアントと NAT サーバーのサポートの有効化

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup での NAT サポートについて](#)
- [重要な注意事項](#)
- [NetBackup ドメイン内の NAT ホストを有効にするワークフロー](#)
- [NetBackup Messaging Broker サービスの構成](#)
- [NetBackup からの NAT サポートの削除](#)
- [NAT クライアント以外のクライアントとの通信](#)
- [NAT サポートのパフォーマンス特性](#)

NetBackup での NAT サポートについて

NetBackup は、ネットワークアドレス変換 (NAT) を実行するデバイスを介してパブリックネットワーク内の NetBackup サーバーに接続された、プライベートネットワーク内の NetBackup クライアントをサポートしています。このマニュアルでは、そのような NetBackup クライアントとサーバーを、それぞれ NAT クライアントと NAT サーバーと呼びます。

NAT クライアントと NAT サーバーは、合わせて NAT ホストと呼ばれます。

NetBackup は、次の条件を満たすネットワークポロジィで NAT クライアントと NAT サーバー (または NAT ホスト) をサポートしています。

1. NAT ホストは、パブリックネットワークに配備された NetBackup サーバーのホスト名を解決し、それらのサーバーへの接続を開始できる必要があります。NetBackup サーバーが NAT ホストへの接続を開始できる必要はありません。
2. NAT ホストに割り当てられたホスト名は、プライベートネットワークで解決できる必要があります。パブリックネットワーク内の NetBackup サーバーが、NAT ホストのホスト名を解決できる必要はありません。
3. プライマリサーバーとすべてのメディアサーバー間で双方向接続が存在する必要があります。
4. NAT の背後にあるメディアサーバーとクライアント間で双方向の接続が必要です。
5. NAT をサポートするには、このマニュアルの説明に従って、NetBackup サーバーおよび NAT ホスト上の NetBackup ソフトウェアを構成する必要があります。

NAT ホストと連携する場合、すべてのネットワーク接続が NAT クライアントからパブリックネットワーク内の NetBackup サーバーに対して開始されることを NetBackup ソフトウェアが確認します。つまり、NetBackup サーバーから NAT ホストへの直接接続は開始されません。NAT ホストのサポートは、プライマリサーバーの新しい NetBackup Messaging Broker (nbmqbroker) サービスと、各 NAT ホストでプライマリサーバーの Messaging Broker サービスとの固定接続を維持するサブスクリバサービスに依存します。これにより、NetBackup サーバーはメッセージングサービスを介して NAT ホストにコマンドを送信できます。NetBackup サーバーが NAT クライアントに接続する必要がある場合 (たとえば、バックアップを実行するため)、プライマリサーバーを介して NAT ホストに「逆接続要求」メッセージを送信します。このメッセージを受信すると、NAT クライアントは要求元の NetBackup サーバーへの接続を開始します。

メディアサーバーと NAT クライアント間の接続の仕組みは次のとおりです。

1. NAT サポートが有効な場合、プライマリサーバーで NetBackup Messaging Broker (nbmqbroker) サービスが開始されます。
2. ホストで NAT サポートが有効な場合、NAT ホストでその他のクライアントサービスとともにサブスクリバサービスが開始され、プライマリサーバーの nbmqbroker サービスにサブスクライブします。
3. メディアサーバーが NAT クライアントに接続する必要がある、またはプライマリサーバーが NAT サーバーに接続する必要がある場合、サーバーは、プライマリサーバーに存在するメッセージブローカーに対して、NAT ホストの逆接続要求メッセージを発行します。
4. メッセージブローカーが NAT ホストのサブスクリバサービスにメッセージを配信します。
5. サブスクリバサービスが、NAT ホストから要求元の NetBackup サーバーへの接続を開始します。
6. メディアサーバーはこの接続を使用して NAT クライアントと通信します。または、プライマリサーバーはこの接続を使用して NAT サーバーと通信します。

p.391 の「[NetBackup ドメイン内の NAT ホストを有効にするワークフロー](#)」を参照してください。

NetBackup でのクライアントで開始された接続のサポート

NetBackup クライアントから NetBackup サーバーへのすべての接続を開始することが望ましい、または必須である次の非 NAT 環境でも、NetBackup の NAT サポートを使用できます。

- 受信接続を許可しないように構成されたファイアウォールの内側にクライアントまたはサーバーが存在する
- NetBackup サーバーからクライアントまたはサーバーのホスト名を IP アドレスに解決できない (例: 動的 DNS がない DHCP クライアント)
- 何らかの理由で、メディアサーバーまたはプライマリサーバーがクライアントまたはサーバーに直接接続できない

重要な注意事項

次に示す、NetBackup で NAT ホストのサポートを有効にするときの注意事項を確認してください。

- レプリケーションターゲットホストにソースメディアサーバーから到達可能である必要があります。
- パブリックネットワークのメディアサーバーからプライベートネットワークへの重複排除はサポートされていませんが、その逆方向はサポートされています。
- 最適化複製は、NAT メディアサーバーとパブリックネットワーク内のメディアサーバー間の通信には機能しません。これは重複排除エンジンが逆方向の接続をサポートしていないためです。

ただし、NAT ホストが両方のメディアサーバーのレプリケーションターゲットホストとして使用されている場合、最適化複製が機能します。

- Windows プラットフォームの場合、NetBackup プライマリサーバーソフトウェアがインストールされているボリュームに対して、8dot3 名前ファイルの設定が有効になっていることを確認します。この fsutil コマンドは、必要なファイル設定を有効にするために使用されます。

次の記事を参照してください。[Fsutil 8dot3name](#)

- NAT ホストに NetBackup 証明書を配備するときは、プライマリサーバーで設定されている証明書の配備のセキュリティレベルに関係なく、認証トークンを指定する必要があります。プライマリサーバーは証明書配備要求の一部であるクライアントホスト名を、要求の発信元である NAT デバイスの IP アドレスに解決できないため、この処理が必要です。

- ホスト ID からホスト名の自動マッピングは、NAT ホストでは無効です。ホスト ID にすでに割り当てられているホスト名を使用して、バックアップポリシーと NetBackup コマンドで NAT ホストを参照する必要があります。NetBackup 証明書の配備または外部証明書の登録時に、ホストのホスト名への最初のマッピングが確立されます。NAT ホストで接続に代替名を使用する場合は、[セキュリティ (Security)]、[ホストマッピング (Host mappings)] ノードを使用して必要なホスト名を手動でマッピングする必要があります。
- SharePoint、Microsoft Exchange Server、Application Clusters などのアプリケーションホストで構成される NetBackup ドメインでは、アプリケーションホストやデータ可用性グループ (DAG) の名前が NetBackup のインストール時に使用される名前と異なる場合があります。NetBackup のインストール時には、場合によってはホストの完全修飾ドメイン名 (FQDN) が使用されます。そのため、NetBackup サーバーとクライアント (またはアプリケーションホスト) の間の接続が失敗する可能性があります。この問題を解決するには、[セキュリティ (Security)]、[ホストマッピング (Host mappings)] ノードを使用して NetBackup クライアントの両方の名前をマッピングします。

セキュリティ証明書と証明書配備レベルについては、『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。

NetBackup ドメイン内の NAT ホストを有効にするワークフロー

次の表に、NetBackup ドメイン内の NAT ホストを有効にするワークフローを示します。

NetBackup のインストールまたはアップグレード	プライマリサーバー、メディアサーバー、クライアントコンピュータに NetBackup をインストールするか、既存のソフトウェアをサポート対象バージョンの NetBackup にアップグレードします。
-----------------------------	---

NAT サポート用の プライマリサーバー の準備	次を実行します。
--------------------------------	----------

- 1 NetBackup Messaging Broker (または nbmqbroker) サービスを構成します。

p.392 の「[NetBackup Messaging Broker サービスの構成](#)」を参照してください。
- 2 nbsetconfig コマンドを使用し、プライマリサーバーの INITIATE_REVERSE_CONNECTION 構成オプションを TRUE に設定します。
- 3 プライマリサーバーサービスを再起動します。

NAT サポート用の
ピアプライマリサー
バーの準備

この構成は A.I.R. 設定に適用されます。

次を実行します。

- NAT が有効なプライマリサーバーホストで、nbsetconfig コマンドを使用して構成ファイル (UNIX または Windows レジストリの bp.conf) の SERVER フィールドにピアプライマリサーバーの名前を追加します。
- プライマリサーバーサービスを再起動します。

NAT サポート用の
メディアサーバーの
準備

次の手順を実行します。

- 1 nbsetconfig コマンドを使用し、メディアサーバーの INITIATE_REVERSE_CONNECTION 構成オプションを TRUE に設定します。
- 2 メディアサーバーのサービスを再起動します。

NAT サポート用の
NetBackup クライ
アントの準備

次の手順を実行します。

- 1 nbsetconfig コマンドを使用し、クライアントの ACCEPT_REVERSE_CONNECTION 構成オプションを TRUE に設定します。
- 2 クライアントのサービスを再起動します。

サイレントインストールの場合、すべてのクライアントに対して構成が同時に実行されるように、応答ファイルで ACCEPT_REVERSE_CONNECTION オプションを一度だけ設定する必要があります。

UNIX の場合、ACCEPT_REVERSE_CONNECTION オプションを使用して、NBInstallAnswer.conf ファイルが更新されたことを確認します。

Windows の場合、silentclient.cmd スクリプトで、ACCEPT_REVERSE_CONNECTION オプションに関する必要な情報が記載されていることを確認します。

サイレントインストールについて詳しくは、『NetBackup インストールガイド』を参照してください。

NetBackup Messaging Broker サービスの構成

NetBackup プライマリサーバーの NAT クライアントと NAT サーバーのサポートを有効にするには、プライマリサーバーで NetBackup Messaging Broker (nbmqbroker) サービスを構成する必要があります。このサービスは、NAT ホストと NetBackup サーバーの間の接続を開始するために必要です。

サービスを構成するには

- ◆ プライマリサーバーで `configureMQ -defaultPorts` コマンドを実行します。
コマンドについて詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。
クラスタ構成の場合、`configureMQ` コマンドはアクティブノードでのみ実行します。
次のコマンドを実行し、**NetBackup** クラスタグループに追加した `nbmqbroker` サービスの監視をクラスタで有効にします。

```
configureMQ -enableCluster  
  
configureMQ -defaultPorts
```

PBX ポートを使用するための NetBackup Messaging Broker サービスの構成

必要に応じて、プライマリサーバーと **NetBackup** クライアント間の通信に **PBX** ポート通信機能を使用できます。

PBX 通信を設定するために必要な手順を次に示します。

プライマリサーバー:

- 次のコマンドを使用して **mqbroker** サービスを停止 (またはすべてのサービスを停止) します。
 - **Linux** の場合: `/usr/opensv/mqbroker/bin/nbmqbroker terminate`
 - **Windows** の場合: `C:\Program Files\Veritas\NetBackup\mqbroker\bin\mqbroker.exe -stop`
- 次の各コマンドを使用して **mqbroker** を構成します。
 - **Linux** の場合: `/usr/opensv/mqbroker/bin/install/configureMQ -defaultPorts`
 - **Windows** の場合: `C:\Program Files\Veritas\NetBackup\mqbroker\bin\install\configureMQ.bat -defaultPorts`

前述のコマンドで、`-defaultPorts` は外部ポートと内部ポートのデフォルトポート値を次のように設定します。

デフォルトの外部ポート: **13781**

デフォルトの内部ポート: **13780、13779、13778**

デフォルト値以外のポート値を設定するには、次のコマンドを実行してオプションを参照してください。

Linux の場合: `/usr/opensv/mqbroker/bin/install/configureMQ --help`

Windows の場合: C:¥Program

Files¥Veritas¥NetBackup¥mqbroker¥bin¥install¥configureMQ --help

- 上記の構成済み外部ポートを構成ファイルに追加します。
デフォルト: 13781
NB_MQBROKER_PORT = 13781
Linux の場合、bp.conf ファイルにエントリを追加します。
Windows の場合、レジストリエディタに DWORD エントリを追加します。
- 次のコマンドを使用して mqbroker サービスを開始 (またはすべてのサービスを開始) します。
 - Linux の場合: /usr/opensv/mqbroker/bin/nbmqbroker start
 - Windows の場合: C:¥Program
Files¥Veritas¥NetBackup¥mqbroker¥bin>nbmqbroker.exe -start

NetBackup クライアントの場合:

- すべてのサービスを停止します。
 - PBX ポートを使用するには、bp.conf ファイルにエントリを追加します。
NetBackup_CLIENT_VIA_PBX = 1
Linux の場合、bp.conf ファイルにエントリを追加します。
Windows の場合、レジストリエディタに DWORD エントリを追加します。
 - すべてのサービスを起動します。
- configureMQ コマンドを 2 回実行した場合は、次の手順を使用して問題を修正します。
- /usr/opensv/var/global/mqbroker/mqhome/.erlang.cookie ファイルを削除します。
 - 前述の手順を使用して PBX 接続を再度構成します。

NetBackup からの NAT サポートの削除

このセクションを使用して、NetBackup から NAT サポートを削除します。

NAT サポートを削除するには

- 1 NetBackup ドメイン内に NAT ホストが存在しないことを確認します。
- 2 プライマリサーバーとメディアサーバーで、nbsetconfig コマンドを使用して、INITIATE_REVERSE_CONNECTION 構成オプションを FALSE に設定します。

NAT クライアント以外のクライアントとの通信

NetBackup サーバーで NAT サポートが有効な場合、サーバーのデフォルトの動作では、プライマリサーバー上の NetBackup Messaging Broker サービスを介して、すべてのクライアント接続が実行されます。そのためには、サーバーが通信するすべてのクライアントで NAT サポートが有効になっている必要があります。このデフォルトの構成では、NAT サポートが無効になっているすべてのクライアント、または NAT サポートがない NetBackup のバージョンを実行するクライアントとサーバーの通信は失敗します。

ENABLE_DIRECT_CONNECTION オプションを TRUE に設定すると、このようなクライアントとの直接接続を試行するようにサーバーを設定できます。このオプションを設定すると、NetBackup サーバーは (逆接続を使用して) NAT が有効になっているクライアントと連携し、(直接接続を使用して) NAT が無効になっているクライアントと連携できます。

A.I.R. セットアップで、ソースとターゲットの両方のプライマリサーバーの直接接続を有効にする必要があります。

NAT サポートのパフォーマンス特性

インターネットのような安全でないネットワークで NetBackup クライアントをバックアップおよびリストアする場合に NAT サポートを使用できるため、デフォルトでは、NAT クライアントおよびサーバー (または NAT ホスト) との通信でデータチャネルの暗号化が有効になっています。これは、「デフォルトで安全」な原理に従っています。

現在 NetBackup では、NAT サポートが無効なホストに対してはデータチャネルの暗号化を提供していません。データチャネルの暗号化では、NAT ホストと NetBackup サーバー間の転送中のデータをセキュリティで保護します。保存されているデータは暗号化しません。データチャネルは、安全な通信のインフラを使用して保護されます。

データチャネルの暗号化の現在の実装では、重大なパフォーマンスのオーバーヘッドが発生します。安全でないネットワーク経由で NetBackup サーバーと通信しない NAT ホストに対しては、データチャネルの暗号化を無効にできます。

データチャネルの暗号化を無効にするには、NAT ホストの

ENABLE_DATA_CHANNEL_ENCRYPTION 構成オプションを FALSE に設定します。

データチャネルの暗号化を無効にすると、NAT ホストのバックアップとリストアのパフォーマンスは、NAT サポートを無効にしているホストと同様になります。

ホストクレデンシャルの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [クレデンシャルの構成について](#)
- [NetBackup でのスナップショットの管理サーバーの構成について](#)

クレデンシャルの構成について

[クレデンシャル (Credentials)]は、外部のクレデンシャルが必要な機能のライセンスを取得済みの場合だけ表示されます。

次のログオンクレデンシャルを管理するために[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[クレデンシャル (Credentials)]を使用します。

- クラウドストレージのクレデンシャル。
ストレージサーバーを構成するときにクレデンシャルを作成します。
[『NetBackup クラウド管理者ガイド』](#)を参照してください。
- NetBackup Deduplication Engine クレデンシャル。
ストレージサーバーを構成するときにクレデンシャルを作成します。
[『NetBackup Deduplication ガイド』](#)を参照してください。
- NDMP ホスト。
[『NetBackup for NDMP 管理者ガイド』](#)を参照してください。
- OpenStorage ストレージサーバー。
ストレージサーバーを構成するときにクレデンシャルを作成します。
[『ディスクの NetBackup OpenStorage ソリューションガイド』](#)を参照してください。
[『NetBackup Replication Director ソリューションガイド』](#)を参照してください。
- 仮想マシンサーバーのクレデンシャル
[『NetBackup for VMware 管理者ガイド』](#)を参照してください。
- WebSocket サーバーのクレデンシャル

『[NetBackup WebSocket サービス \(NBWSS\) リファレンスガイド](#)』を参照してください。

- Nutanix Acropolis クラスタのクレデンシャル

NetBackup でのスナップショットの管理サーバーの構成について

Snapshot Manager サーバーは、スナップショット管理サーバーとして構成できます。NetBackup で Snapshot Manager サーバーを構成するには、Snapshot Manager サーバーのクレデンシャルを追加する必要があります。

次のいずれかで Snapshot Manager サーバーを構成できます。

- NetBackup 管理コンソール
- `tpconfig` コマンドライン。『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。
- NetBackup Web UI。『[NetBackup™ Web UI クラウド管理者ガイド](#)』を参照してください。

NetBackup での Snapshot Manager サーバーの登録

Snapshot Manager サーバーを NetBackup でスナップショット管理サーバーとして登録するには、Snapshot Manager サーバーのクレデンシャルを追加する必要があります。NetBackup から Snapshot Manager サーバーを追加、更新、または削除することを推奨します。

Snapshot Manager サーバーを登録するには

- 1 NetBackup Web UI にログインします。
- 2 左側のナビゲーションペインで、[作業負荷 (Workloads)]、[クラウド (Cloud)]、[Snapshot Manager]の順に移動します。
[Snapshot Manager]ペインが表示されます。
- 3 [追加 (Add)]をクリックします。
- 4 DNS サーバーが構成されている場合は、Snapshot Manager の IP アドレスまたは FQDN を指定します。
- 5 [ポート (Port)]の詳細を指定します。ポートのデフォルト値は **443** です。
- 6 [保存 (Save)]をクリックします。

メモ: ホスト名のアドレスは DNS で解決できる必要があります。

Snapshot Manager サーバーをオンプレミスに登録するには

- 1 NetBackup Web UI にログインします。
- 2 左側のナビゲーションペインで、[ストレージ (Storage)]、[Snapshot Manager] の順に移動します。
[Snapshot Manager] ペインが表示されます。
- 3 [追加 (Add)] をクリックします。
- 4 DNS サーバーが構成されている場合は、Snapshot Manager の IP アドレスまたは FQDN を指定します。
- 5 [ポート (Port)] の詳細を指定します。ポートのデフォルト値は 443 です。
- 6 [保存 (Save)] をクリックします。

メモ: ホスト名のアドレスは DNS で解決できる必要があります。

Snapshot Manager サーバーのクレデンシャルを更新するには

- 1 NetBackup 管理コンソールにログインします。
- 2 左のナビゲーションペインで、[メディアおよびデバイスの管理] > [クレデンシャル] > [スナップショット管理サーバー] の順に移動します。
[スナップショットサーバーの管理] ペインが表示されます。
- 3 [ホスト名] 列で、更新するサーバーで右クリックします。
- 4 メニューで、[変更] をクリックします。
- 5 [Snapshot Manager サーバーの変更 (Change Snapshot Manager Server)] ダイアログボックスで、クレデンシャルを更新します。
- 6 Snapshot Manager サーバーのユーザー名とパスワードを入力します。
- 7 Snapshot Manager サーバーに関連付けるクラウドプロバイダを選択します。
オンプレミス配備の場合は、[なし (None)] を選択します。

メモ: サーバーには複数のプロバイダに関連付けることができますが、複数のサーバーを同じプロバイダに関連付けることはできません。

- 8 [OK] をクリックします。
成功メッセージが表示されます。
- 9 [OK] をクリックします。

NetBackup での Snapshot Manager プラグインの構成

Snapshot Manager サーバーにインストールした Snapshot Manager プラグインを、NetBackup で関連する Snapshot Manager サーバーに登録して構成する必要があります。

Snapshot Manager プラグインを登録する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールにログインします。
- 2 左のナビゲーションペインで、[メディアおよびデバイスの管理] > [クレデンシャル] > [スナップショット管理サーバー]の順に移動します。
[スナップショットサーバーの管理] ペインが表示されます。
- 3 プラグインを追加するサーバーをクリックします。[Snapshot Manager プラグイン (Snapshot Manager plugins)]ペインが更新されます。
- 4 [Snapshot Manager プラグイン (Snapshot Manager plugins)]ペインで、空白行を右クリックします。
- 5 メニューで、[新しい Snapshot Manager プラグイン (New Snapshot Manager plugin)]をクリックします。
- 6 [新しいプラグインの追加]ダイアログボックスで、[使用可能なプラグイン]リストから、追加するプラグインを選択します。
- 7 [次へ]をクリックします。
- 8 [CloudPlugin の構成]ダイアログボックスで、プラグイン ID を入力します。

メモ: プラグイン ID は一意である必要があり、A-Z、a-z、0-9、+、.、_、- の文字で構成されている必要があります。

- 9 クレデンシャルの詳細を入力します。

メモ: フィールドは、プラグインの種類によって異なります。プラグインとそのパラメータについて詳しくは、『Snapshot Manager インストール/アップグレードガイド』を参照してください。

- 10 [OK]をクリックします。
成功メッセージが表示されます。
- 11 [OK]をクリックします。
新しく追加されたプラグインが[Snapshot Manager プラグイン (Snapshot Manager plugins)]ペインに一覧表示されます。

Snapshot Manager プラグインのクレデンシャルを変更する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールにログインします。
- 2 左のナビゲーションペインで、[メディアおよびデバイスの管理] > [クレデンシャル] > [スナップショット管理サーバー]の順に移動します。
[スナップショットサーバーの管理] ペインが表示されます。
- 3 プラグインの追加先のサーバーをクリックします。[Snapshot Manager プラグイン (Snapshot Manager plugins)] ペインに、関連するすべてのプラグインが表示されます。
- 4 変更する Snapshot Manager プラグインを右クリックします。
- 5 メニューで、[プラグインの変更]をクリックします。
- 6 [選択されている CloudPlugin]ダイアログボックスで、クレデンシャルの詳細を更新します。

メモ: プラグインの種類とプラグイン ID は変更できません。

警告: 間違ったクレデンシャルを入力すると、Snapshot Manager 内で利用可能な既存のスナップショットに関連する情報は失われ、リストアの失敗を招く可能性があります。この情報は、正しいクレデンシャルを入力し直すと再生成できます。

- 7 [OK]をクリックします。

メディアサーバーの管理

この章では以下の項目について説明しています。

- [メディアサーバーの有効化または無効化](#)
- [メディアサーバーの追加](#)
- [メディアサーバーの登録](#)
- [メディアサーバーからのすべてのデバイスの削除](#)
- [NetBackup データベースからのデバイスホストの削除](#)
- [メディアサーバーの廃止について](#)
- [メディアサーバーへの参照のプレビュー](#)
- [メディアサーバーの廃止](#)

メディアサーバーの有効化または無効化

メディアサーバーを有効にすると、メディアサーバーを使用して **NetBackup** のバックアップジョブとリストアジョブを実行できるようになります。メディアサーバーを無効にすることができます。これを行う一般的な理由はメンテナンスを実行するためです。メディアサーバーを無効にすると、**NetBackup** はメディアサーバーにジョブの要求を送信しません。

メディアサーバーを無効化すると、次のことが起きます。

- 現在のジョブは完了されます。
- ホストが共有ドライブ構成の一部である場合、ホストによってドライブがスキャンされません。

メディアサーバーを有効または無効にする方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で [ストレージ (Storage)]、[メディアサーバー (Media servers)] の順に選択します。次に、[メディアサーバー (Media servers)] タブをクリックします。
- 3 有効または無効にするメディアサーバーを選択します。
- 4 [有効化 (Activate)] または [無効化 (Deactivate)] をクリックします。

メディアサーバーの追加

次の表に、既存の NetBackup の環境にメディアサーバーを追加する方法の概要を示します。

メモ: NetBackup EMM サービスは、メディアサーバーが追加されるとき、デバイスとボリュームが構成されるとき、クライアントがバックアップまたはリストアされるときに、有効である必要があります。

表 6-1 メディアサーバーの追加

手順	手順	項
手順 1	新しいメディアサーバーホストで、デバイスを接続し、ストレージデバイスの駆動に必要なすべてのソフトウェアをインストールします。	詳しくは、ベンダーのマニュアルを参照してください。
手順 2	新しいメディアサーバーのホストで、ホストのオペレーティングシステムを準備します。	『 NetBackup デバイス構成ガイド 』を参照してください。
手順 3	プライマリサーバーで、プライマリサーバーの [メディアサーバー (Media servers)] リストに新しいメディアサーバーを追加します。また、新しいメディアサーバーがバックアップするクライアントの [追加サーバー (Additional servers)] リストに新しいメディアサーバーを追加します。 新しいメディアサーバーがサーバーグループに含まれる場合、グループのすべてのメディアサーバーの [追加サーバー (Additional servers)] リストに新しいメディアサーバーを追加します。 メモ: NetBackup で使用する名前が TCP/IP 構成のホスト名と同じであることを確認します。	p.169 の「 [サーバー (Servers)] プロパティ 」を参照してください。
手順 4	NetBackup のメディアサーバーソフトウェアを新しいホストにインストールします。	『 NetBackup インストールガイド 』を参照してください。

手順	手順	項
手順 5	プライマリサーバーで、メディアサーバーに接続するドライブとロボットを構成します。	p.437 の「 ロボットとテープドライブのウィザードの使用による構成 」を参照してください。
手順 6	プライマリサーバーで、ボリュームを構成します。	p.486 の「 ボリュームの追加について 」を参照してください。
手順 7	プライマリサーバーで、メディアサーバーにストレージユニットを追加します。常に、メディアサーバーをストレージユニットのメディアサーバーとして指定してください。 [デバイスの構成ウィザード (Device Configuration Wizard)] はロボットとドライブを構成するときにストレージユニットを作成できます。したがって、ストレージユニットをすでに作成した場合は、この手順をスキップします。	p.565 の「 ストレージユニットの作成 」を参照してください。
手順 8	プライマリサーバーで、メディアサーバー上で構成したストレージユニットを使用する NetBackup ポリシーおよびスケジュールを構成します。	p.671 の「 ポリシーユーティリティについて 」を参照してください。
手順 9	スケジュールを使用してメディアサーバー上のストレージユニットを指定するユーザーバックアップまたは手動バックアップを行い、構成をテストします。	p.867 の「 手動バックアップの実行 」を参照してください。

メディアサーバーの登録

メディアサーバーのインストール時にプライマリサーバーが実行されていない場合、メディアサーバーは登録されません。そのメディアサーバーのデバイスを検出、構成および管理することはできません。メディアサーバーをプライマリサーバーに登録する必要があります。

メディアサーバーを登録する方法

- 1 プライマリサーバー上で EMM サービスを起動します。
- 2 プライマリサーバーで次のコマンドを実行します。*(hostname* には、メディアサーバーのホスト名を使います)。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbemmcmd -addhost -machinename  
hostname -machinetype media -masterserver server_name  
-operatingsystem os_type -netbackupversion  
level.major_level.minor_level
```

UNIX の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/nbemmcmd -addhost -machinename  
hostname -machinetype media -masterserver server_name  
-operatingsystem os_type -netbackupversion  
level.major_level.minor_level
```

メモ: NetBackup で使用する名前が TCP/IP 構成のホスト名と同じであることを確認します。

nbemmcmd コマンドの使用方法について詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

メディアサーバーからのすべてのデバイスの削除

メディアサーバーからすべてのデバイスを削除できます。メディアサーバーの状態は、起動、停止、または失敗して回復不能のいずれかです。すべてのデバイスはロボット、ドライブとディスクプールを含んでいます。

すべてのロボットとドライブを削除する手順と、ディスクプールを削除する手順の 2 つの手順があります。

メディアサーバーからすべてのロボットとドライブを削除する方法

- ◆ プライマリサーバーで次のコマンドを入力します。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbemmcmd -deletealldevices  
-machinename server_name -machinetype media
```

UNIX の場合:

```
/usr/openv/netbackup/bin/admincmd/nbemmcmd -deletealldevices  
-machinename server_name -machinetype media
```

server_name をメディアサーバーの名前に置き換えます。

ディスクプールをメディアサーバーから削除する方法

- 1 メディアサーバーにディスクプールが構成されている場合は、それらのディスクプールを使うストレージユニットからメディアサーバーを削除します。各ストレージユニットに対して、プライマリサーバーで次のコマンドを実行します。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpsturep -label  
storage_unit_label -delhost host_name
```

UNIX の場合:

```
/usr/openv/netbackup/bin/admincmd/bpsturep -label  
storage_unit_label -delhost host_name
```

storage_unit_label をストレージユニットの名前に、**host_name** をメディアサーバーの名前に置き換えます。

- 2 メディアサーバーがディスクプールの唯一のストレージサーバーの場合は、ディスクプールの状態を **DOWN** に変更します。そうするには、各ディスクプールのプライマリサーバーで次のコマンドを入力します。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbdevconfig -changestate  
-stype server_type -dp disk_pool_name -state DOWN
```

UNIX の場合:

```
/usr/openv/netbackup/bin/admincmd/nbdevconfig -changestate -stype  
server_type -dp disk_pool_name -state DOWN
```

server_type をストレージサーバーの形式 (**AdvancedDisk**、**PureDisk** または **OpenStorage** サーバー形式を識別するベンダーの文字列) に置き換えます。

disk_pool_name をディスクプールの名前に置き換えます。

- 3 各ディスクプールに対して、次を実行します。

- プライマリサーバーで次のコマンドを入力して、ディスクプールアクセスからメディアサーバーを削除します。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbdevconfig -changedp -dp  
-disk_pool_name -stype server_type -del_storage_servers  
storage_server
```

UNIX の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/nbdevconfig -changedp -dp  
disk_pool_name -stype server_type -del_storage_servers  
storage_server
```

disk_pool_name をディスクプールの名前に置き換えます。

server_type をストレージサーバーの形式 (**AdvancedDisk**、**PureDisk** または **OpenStorage** サーバー形式を識別するベンダーの文字列) に置き換えます。

storage_server をメディアサーバーの名前に置き換えます。

- メディアサーバーでのみ利用可能なディスクストレージ上にあるディスクプールが必要なくなった場合は、次のようにディスクプールを削除します。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbdevconfig -deletedp -dp  
disk_pool_name -stype server_type
```

UNIX の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/nbdevconfig -deletedp -dp  
disk_pool_name -stype server_type
```

期限内のバックアップイメージがあるディスクプールは削除できません。次のように、最初にイメージを期限切れにして、イメージフラグメントを削除する必要があります。

- 次のように、イメージを期限切れにします。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpexpdate -dp  
disk_pool_name -stype server_type -nodelete
```

UNIX の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpexpdate -dp  
disk_pool_name -stype server_type -nodelete
```

- 次のように、ディスクプールのメディアの ID を特定します。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpimmedia -dp  
disk_pool_name -stype server_type -nodelete
```

UNIX の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpimmedia -dp  
disk_pool_name -stype server_type
```

- 次のように、ディスクプールの各メディア ID を削除します。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥nbdelete -dt disk_type -media_id  
name
```

UNIX の場合:

```
/usr/openv/netbackup/bin/nbdelete -dt disk_type -media_id  
name
```

NetBackup データベースからのデバイスホストの削除

NetBackup データベースからデバイスホストを削除するには次の手順を使用します。

NetBackup データベースからデバイスホストを削除する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[メディアサーバー (Media servers)]の順に選択します。
- 3 サーバーを選択します。
- 4 [デバイスホストの削除 (Delete device host)]、[削除 (Delete)]の順に選択します。

メディアサーバーの廃止について

NetBackup の nbdecommission を使うと、メディアサーバーを廃止できます。コマンドは廃止の処理手順を示すテキストベースのウィザードを起動します。ウィザードは NetBackup ドメインからメディアサーバーへの参照を取り除きます。(一部の参照を手動で取り除かなければならないことがあります、ウィザードはほとんどの場合その指示を提供します。)

nbdecommission コマンドは次の場合に役立ちます。

- 不要になったサーバーを破棄する場合。古いサーバーのバックアップイメージすべてが期限切れになった後、nbdecommission を使うと、NetBackup 環境から古いサーバーを削除できます。
- 新しいサーバーによって古いサーバーを置換し、同じストレージを保ちます。新しいサーバーから古いサーバーのストレージとバックアップイメージすべてにアクセスが必要です。
- 古いサーバーは壊れ、新しいサーバーによってそれを置換する必要があります。
- メディアサーバーを手動で廃止しようとし、それへの参照がまだ残っている場合。ウィザードは残っている参照をクリーンアップします。

このマニュアルでは、廃止されるべきメディアサーバーを古いサーバーと呼びます。

警告: `nbdecommission` コマンドを使うときは注意してください。コマンドによってイメージが期限切れになることがあるのでデータ損失が起きることがあります。したがって、コマンドを使う前に、コマンドが実行することを完全に理解する必要があります。メディアサーバーへの参照を廃止する前に最初にそれらをすべてプレビューすることをお勧めします。

p.413 の「[メディアサーバーへの参照のプレビュー](#)」を参照してください。

次のトピックは詳細情報を提供し、プロセス全体のガイダンスを提供します。

p.408 の「[廃止の制限事項について](#)」を参照してください。

p.409 の「[メディアサーバーを廃止する前に](#)」を参照してください。

p.410 の「[廃止処理](#)」を参照してください。

p.409 の「[廃止後の推奨事項](#)」を参照してください。

p.413 の「[メディアサーバーへの参照のプレビュー](#)」を参照してください。

p.414 の「[メディアサーバーの廃止](#)」を参照してください。

廃止の制限事項について

次は `nbdecommission` コマンドの制限事項です。

- クラスタ化されたメディアサーバーを廃止しません。**NetBackup** フェールオーバーメディアサーバーまたはアプリケーションクラスタを含みます。
- メディアサーバー重複排除プールを処理しません。
メディアサーバー重複排除プールをホストするメディアサーバーを廃止する前に、そのメディアサーバー上の **MSDP** を非アクティブ化する必要があります。
詳しくは、『[NetBackup Deduplication ガイド](#)』を参照してください。
- 使用環境の **NetBackup** サーバーの `vm.conf` ファイルを更新しません。したがって、古いサーバーは **NetBackup** サーバーの `vm.conf` ファイルに残ることがあります。
- クライアントの設定ファイルを更新しません。したがって、古いサーバーはクライアントのサーバーリストに残ることがあります。新しいサーバーによって古いサーバーを置換すれば、新しいサーバーは新しいクライアントのサーバーリストに追加されません。
- **NetBackup Vault** プロファイルを処理しません。古いサーバーのストレージユニットを参照する **NetBackup Vault** プロファイルが存在したら、**Vault** プロファイルを手動で更新します。
- 孤立したリソースについて通知しません。
- 廃止が影響する他のサーバーのデーモンとサービスを再起動しません。
- 廃止された後古いサーバーのすべてのデーモンとサービスを停止するように要求します。

- 新しいサーバーのデバイスを手動で再設定することを必要とします (必要な場合)。
- どのジョブが古いサーバーで動作しているか把握していることを必要とします。廃止の処理を実行する前にそれらを強制終了するか完了するまで実行する必要があります。
- `-list_ref` オプションは明示的に削除する参照についてのみ報告します。コマンドはある項目を暗黙のうちに削除し、それらを報告しません。たとえば、ホストエイリアスとホストクレデンシャルは削除されますが、報告されません。
- 古いサーバーに存在するメディア ID の生成規則を移動することを必要とします。ロボットインベントリを実行するメディアサーバーにそれらを手動で移動する必要があります。
- 新しいジョブが開始されないように古いサーバーを管理一時停止状態にします。ただし、**NetBackup** はまだベーシックディスクのバックアップとリストアジョブを開始できます。それらは他のストレージの宛先に対するジョブと異なる方式でリソースを入手します。また、`nbdecommission` コマンドはイメージを期限切れにするために管理一時停止を解除することがあります (ウィザードへの応答に応じて)。ジョブはこの期間に開始することがあります。

メディアサーバーを廃止する前に

メディアサーバーを廃止する前に、次を行うことをお勧めします。

- `nbdecommission` コマンドの処理をプレビューします。
p.413 の「[メディアサーバーへの参照のプレビュー](#)」を参照してください。
コマンドが古いサーバーへのすべての参照をキャプチャすることを確認するためにプレビュー操作の出力を分析します。キャプチャしなかった場合は、コマンドがカバーしない項目のリストを作成し、後で手動で修正します。
- 始める前に **NetBackup** カタログをバックアップします。何かうまくいかない場合、または廃止を中止しなければならない場合に廃止前の状態に環境を戻すためにそれを使うことができます。
- **NetBackup** 環境の負荷が最小である保守時間帯にコマンドを実行します。

廃止後の推奨事項

`nbdecommission` コマンドを実行した後、次の処理を実行することをお勧めします。

- コマンドが提供するすべての指示に従います。
コマンドはコマンドが実行できない処理を実行するための指示を提供することがあります。たとえば、それは古いサーバーでアクティブであるバックアップジョブを取り消す指示を提供することがあります。
- 物理ストレージを (必要な場合) 移動し、次にそれらのデバイスの再設定と再インベントリを行います。

- 使用環境のすべての **NetBackup** サーバーの `vm.conf` ファイルを検査します。古いサーバーへの参照を取り除き、必要な箇所に新しいサーバーへの参照を追加します。
- 古いサーバーをクライアントのサーバーリストから削除し、必要な箇所に新しいサーバーを追加します。
nbdecommission コマンドは古いサーバーを参照するクライアントのリストを出力します。
- 古いサーバーが正しく削除されたこと検証します。古いサーバーの参照が削除されたことを確認するために各種の論理コンポーネント (バックアップポリシー、ストレージユニットなど) を検査します。
- **NetBackup** カタログをできるだけ早くバックアップします。
- メディアサーバーから **NetBackup** をアンインストールするか、そのメディアサーバーを環境から削除します。この構成の変更後、メディアサーバーデーモンにプライマリサーバーと通信する権限がなくなり、開始されなくなります。

廃止処理

nbdecommission コマンドはサーバー上の **NetBackup** データベース、**NetBackup** のイメージカタログと構成ファイルから古いサーバーの構成を削除します。

次の表に、メディアサーバーを参照するコンポーネントに対して実行する処理を示します。表はコマンドがコンポーネントを処理する順序で編成されています。

表 6-2 nbdecommission コマンドの処理

コンポーネント	処理
ストレージユニット - テープ	次のテープストレージユニットを削除します。 ■ [ストレージデバイス (Storage device)] 属性に古いサーバーがロボット制御ホストであるロボットが指定されているもの。 ■ [メディアサーバー (Media server)] 属性に古いサーバーが指定されているもの。 ■ [メディアサーバー (Media server)] 属性に [任意 (Any Available)] が指定されており、ストレージユニットにアクセスできる唯一のサーバーが古いサーバーであるもの。
テープドライブ	古いサーバーに接続されている各テープドライブのテープドライブパスを削除します。古いサーバーのパスが唯一のパスなら、テープドライブも削除します。 ドライブへのパスが複数のメディアサーバーに存在すれば、テープドライブは使用不能になることがあります。テープドライブを異なるメディアサーバーに接続し、次に NetBackup で再設定しなければならないことがあります。たとえば、古いサーバーが共有ドライブのスキャンホストなら、NetBackup は他のホストがスキャンできなければそのドライブを使うことができません。

コンポーネント	処理
ロボットライブラリ	古いサーバーに接続するロボットライブラリすべてを削除します。 古いサーバーが共有ライブラリのロボット制御ホストなら、ドライブとメディアはスタンドアロンとなり、使用不能になります。ライブラリの再設定と再インベントリを行う必要があります。
テープメディア	次のテープメディアを、期限切れにするか、または別のメディアサーバーに移動するかを指定します。 ■ 古いサーバーに割り当て済みのもの。 ■ 古いサーバーがグループの唯一のメンバーであるメディア共有グループが所有するもの。 ■ 特定の[メディア所有者 (Media owner)]がなく、最終書き込みホストが古いサーバーと同じであるもの。
ストレージユニット - BasicDisk	イメージがストレージユニットに存在しなければ、ストレージユニットを削除します。イメージが存在すれば、ウィザードは次のいずれかのオプションを選択できるようにします。 ■ イメージを期限切れにし、ストレージユニットを削除します。 ■ 新しいサーバーにイメージを移動します。ウィザードはまたストレージユニットの[メディアサーバー (Media server)]フィールドを更新します。 BasicDisk ストレージは共有する必要があり、同じディスクパスが新しいサーバーで利用可能である必要があります。
ストレージユニット - AdvancedDisk	ストレージユニットの宛先であるディスクプールに複数のメディアサーバーがアクセスできる場合に、次の処理を実行するように指定します。 ■ ストレージユニットの[メディアサーバー (Media Servers)]リストから古いサーバーを削除します。 ■ ストレージサーバーとしての古いサーバーを削除します。 古いサーバーがディスクプールにアクセスできる唯一のサーバーなら、ウィザードは次のいずれかを選択することを可能にします。 ■ ストレージとイメージを新しいサーバーに移動し、ストレージサーバーとしての古いサーバーを削除します。 ディスクボリュームは古いサーバーと同じパスで新しいサーバーで利用可能である必要があります。 ■ イメージを期限切れにして (もし存在すれば)、ディスクプールを参照するストレージユニットを削除し、ディスクプールを削除し、ストレージサーバーを削除します。(たとえば、ディスクプールがストレージユニットの[ディスクプールの選択 (Select disk pool)]設定に表示される場合です。)

コンポーネント	処理
ストレージユニット - OpenStorage	ストレージユニットの宛先であるディスクプールに複数のメディアサーバーがアクセスできる場合に、次の処理を実行するように指定します。 ■ ストレージユニットの[メディアサーバー (Media Servers)]リストから古いサーバーを削除します。 ■ OpenStorage ストレージサーバーとしてのメディアサーバーを削除します。 古いサーバーがディスクプールにアクセスできる唯一のサーバーなら、ウィザードは次のいずれかを選択することを可能にします。 ■ クレデンシャルを新しいサーバーに転送し、必要であればストレージユニットの[メディアサーバー (Media server)]フィールドを更新します。 ■ イメージを期限切れにして (もし存在すれば)、ディスクプールを参照するストレージユニットを削除し、ディスクプールを削除します。(たとえば、ディスクプールがストレージユニットの[ディスクプールの選択 (Select disk pool)]設定に表示される場合です。)
ストレージユニットグループ (Storage unit group)	nbdecommission コマンドがストレージユニットグループのストレージユニットすべてを削除する場合に、ストレージユニットグループも削除するように指定します。ストレージユニットグループを削除すると、バックアップポリシーとストレージライフサイクルポリシーにも影響することがあります。 この表の「バックアップポリシーおよびスケジュール」と「ストレージライフサイクルポリシー」を参照してください。
バックアップポリシーおよびスケジュール	ストレージの宛先がコマンドによる削除対象のストレージユニットとして (直接的または間接的に) 設定されているバックアップポリシーを無効にします。具体的には、次の条件を満たすバックアップポリシーを無効にします。 ■ 宛先が nbdecommission コマンドが削除したストレージユニットの場合。 ■ 宛先が 1 つのストレージユニットのみを含んでいるストレージユニットグループであり、そのストレージユニットが nbdecommission コマンドで削除された場合。 ■ 宛先がストレージライフサイクルポリシーであり、ストレージライフサイクルポリシーのnbdecommission 操作対象であるストレージユニットが nbdecommission コマンドで削除された場合。
ストレージライフサイクルポリシー (Storage lifecycle policy)	コマンドによって削除されたストレージユニットを複数の操作が使用するストレージライフサイクルポリシーごとに、次の処理を実行するように指定します。 ■ SLP 制御対象のイメージが処理中または未処理の場合は、SLP ジョブを取り消すコマンドを表示し、終了します。ジョブを取り消した後 (またはジョブが完了するまで待機した後)、廃止を続行するために nbdecommission コマンドを再実行します。 ■ SLP 制御対象のイメージすべてが処理されれば、ストレージライフサイクルポリシーを無効にします。 ■ 削除されたストレージユニットが[バックアップ (Backup)]または[スナップショット (Snapshot)]操作によって使用されていた場合は、ストレージライフサイクルポリシーのすべてのバックアップポリシーを宛先として無効にします。
ファイバートランスポートメディアサーバー	FT メディアサーバーとしての古いサーバーを削除するのに必要なコマンドを表示し、終了します。 FT メディアサーバーとしての古いサーバーを削除した後、廃止を続行するために nbdecommission コマンドを再実行します。

コンポーネント	処理
bp.conf ファイル	UNIX 版 NetBackup サーバーで、次の bp.conf ファイルエントリから古いサーバーを削除します。 ■ SERVER ■ MEDIA_SERVER ■ CLIENT_NAME ■ BROWSER UNIX プライマリサーバーでも、FORCE_RESTORE_MEDIA_SERVER と FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVERS エントリから古いサーバーを削除します。
Windows レジストリ	Windows 版 NetBackup サーバーで、次のレジストリキーから古いサーバーを削除します。 ■ SERVER ■ MEDIA_SERVER ■ CLIENT_NAME ■ BROWSER Windows プライマリサーバーでも、FORCE_RESTORE_MEDIA_SERVER と FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVERS キーから古いサーバーを削除します。
クライアント	古いサーバーがサーバーリストに表示されるクライアントをリストします。古いサーバーへの参照を手動で取り除く必要があります。

メディアサーバーへの参照のプレビュー

廃止したいメディアサーバーへの関連付けと参照をプレビューするために次の手順を使います。メディアサーバーへの参照を廃止する前にそれをプレビューすることをお勧めします。

古いサーバーは起動され、応答可能である必要はありません。

p.407 の「[メディアサーバーの廃止について](#)」を参照してください。

p.414 の「[メディアサーバーの廃止](#)」を参照してください。

メディアサーバーへの参照をプレビューする方法

- 1 プライマリサーバーまたはメディアサーバーで `nbdecommission` コマンドを実行します。コマンドの構文は次のとおりです。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbdecommission -list_ref  
-oldserver OldServer > file.txt
```

UNIX の場合:

```
/usr/openv/netbackup/bin/admincmd/nbdecommission -list_ref  
-oldserver OldServer > file.txt
```

廃止されるホストの名前で **OldServer** を置換します。内容か目的を示す名前で **file** を置換します。

- 2 コマンドが古いサーバーへのすべての参照をキャプチャすることを確認するためにプレビュー操作の出力を分析します。キャプチャしなかった場合は、コマンドがカバーしない項目のリストを作成し、後で手動で修正します。

メディアサーバーの廃止

このトピックは **NetBackup** メディアサーバーの使用停止についての情報を提供するトピックグループの一部です。

p.407 の「[メディアサーバーの廃止について](#)」を参照してください。

`nbdecommission` ウィザードでの手順はウィザードのプロンプトに応答する方法によって決まります。使用環境およびプロンプトにどのように応答するかに応じて、ウィザードは処理を実行し、終了するように指示します。ウィザードを続行するには、指示された処理を実行した後でウィザードを再び実行する必要があります。ウィザードを数回終了し、再実行する場合があります。

実行中のジョブがメディアサーバーに存在すれば、コマンドがメディアサーバーを廃止し始める前にそれらを取り消す必要があります。または、それらが終わるまで待つことができます。

OldServer は起動され、応答可能である必要はありません。

メディアサーバーを廃止する前にメディアサーバーの参照をプレビューすることを推奨します。

p.413 の「[メディアサーバーへの参照のプレビュー](#)」を参照してください。

`nbdecommission` コマンドは標準の **NetBackup** 管理者コマンドログディレクトリにログを記録します。

次の 2 つの手順があります。

古いメディアサーバーを新しいメディアサーバーによって置換 [p.415 の「古いメディアサーバーを新しいメディアサーバーによって置換する方法」](#)を参照してください。

メディアサーバーの廃止 [p.416 の「メディアサーバーを廃止する方法」](#)を参照してください。

古いメディアサーバーを新しいメディアサーバーによって置換する方法

- 1 プライマリサーバーまたはこの操作の対象ではないメディアサーバーで `nbdecommission` コマンドを実行します。コマンドの構文は次のとおりです。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbdecommission -oldserver  
OldServer [-newserver NewServer] [-file decom_ops.txt]
```

UNIX の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/nbdecommission -oldserver  
OldServer [-newserver NewServer] [-file decom_ops.txt]
```

廃止されるホストの名前で **OldServer** を置換します。

`-newserver` は省略可能です。新しいサーバーを指定すれば、新しいサーバーは置換操作のデフォルトのメディアサーバーになります。新しいサーバーを指定しなければ、ウィザードは有効なバックアップイメージを含んでいる各ストレージ形式に対して新しいサーバーの入力を求めます。この方式は異なるメディアサーバーにバックアップイメージを移動したい場合には有効です。たとえば、テープストレージから 1 つのメディアサーバーにバックアップイメージを移動し、ディスクストレージから別のメディアサーバーにバックアップイメージを移動できます。

`-file` は省略可能です。それは指定ファイルにコマンド操作を書き込みます。目的か内容を示す名前で **decom_ops.txt** を置換します。コマンド操作の記録を保持するために `-file` オプションの使用を推奨します。

- 2 プロンプトに従い、要求された処理を実行します。

たとえば、コマンドはプライマリサーバーと複数のメディアサーバーに変更を加えることがあります。変更が反映されるようにそれらのサーバーで **NetBackup** サービスを再起動する必要があることがあります。

メディアサーバーを廃止する方法

- 1 プライマリサーバーまたはこの操作の対象ではないメディアサーバーで次のコマンドを実行します。**OldServer** は起動され、応答可能である必要はありません。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbdecommission -oldserver  
OldServer
```

UNIX の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/nbdecommission -oldserver  
OldServer
```

廃止されるホストの名前で **OldServer** を置換します。

- 2 プロンプトに従い、要求された処理を実行します。

ストレージの構成

- [第7章 ディスクストレージの構成](#)
- [第8章 ロボットおよびテープドライブの構成](#)
- [第9章 テープメディアの構成](#)
- [第10章 ロボットのインベントリ](#)
- [第11章 ストレージユニットの構成](#)
- [第12章 バックアップのステージング](#)
- [第13章 ストレージユニットグループの構成](#)

ディスクストレージの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [BasicDisk ストレージの構成について](#)
- [ディスクプールストレージの構成について](#)
- [NetBackup の MSDP ディスクプールの構成](#)

BasicDisk ストレージの構成について

BasicDisk 形式のストレージユニットは、ローカルに接続されたディスクまたはネットワークに接続されたディスクのディレクトリで構成されます。ディスクストレージはファイルシステムとして NetBackup メディアサーバーに公開されます。NetBackup は、指定されたディレクトリにバックアップデータを格納します。

特別な構成は BasicDisk ストレージでは必要ありません。ストレージユニットを設定するときにストレージのディレクトリを指定します。

p.565 の「[ストレージユニットの作成](#)」を参照してください。

ディスクプールストレージの構成について

ディスクプールを使う NetBackup 機能のライセンスがあればディスクプールを構成できます。

詳しくは、次のガイドを参照してください。

- 『NetBackup AdvancedDisk ストレージソリューションガイド』
- 『NetBackup クラウド管理者ガイド』
- 『NetBackup Deduplication ガイド UNIX、Windows および Linux』
- 『ディスクの NetBackup OpenStorage ソリューションガイド』

- 『NetBackup Replication Director ソリューションガイド』

NetBackup の MSDP ディスクプールの構成

NetBackup メディアサーバー重複排除プール重複排除のディスクプールを構成して管理できます。

p.419 の「[NetBackup の重複排除用ディスクプールについて](#)」を参照してください。

p.420 の「[重複排除のディスクプールの構成](#)」を参照してください。

p.422 の「[メディアサーバー重複排除プールの管理](#)」を参照してください。

NetBackup の重複排除用ディスクプールについて

NetBackup 重複排除のディスクプールは、重複排除されたバックアップデータのストレージを表します。NetBackup サーバーまたは NetBackup クライアントは、重複排除ディスクプールに格納されているバックアップデータを重複排除します。

重複排除のプールには次の 2 つの形式があります。

- NetBackup の[メディアサーバー重複排除プール (Media Server Deduplication Pool)]は、NetBackup メディアサーバーに接続されているディスクストレージを表します。NetBackup は、データの重複を排除し、ストレージをホスティングします。NetBackup では、重複排除プールを構成するディスクリソースの所有権が排他的である必要があります。これらのリソースを他のユーザーと共有した場合、NetBackup では重複排除プールの容量またはストレージのライフサイクルポリシーを正しく管理できません。

いくつの重複排除プールを構成するかは、ストレージ要件に依存します。次の表に示すように、最適化複製またはレプリケーションを使うかどうかにも依存します。

表 7-1 複製またはレプリケーションのための重複排除プール

形式	要件
同じ NetBackup ドメイン内での最適化複製	同じドメインの最適化複製では以下の重複排除プールが必要になります。 ■ バックアップストレージ用に少なくとも 1 つのディスクプール。これが複製操作のソースになります。ソース重複排除プールは 1 つの重複排除ノードにあります。 ■ バックアップイメージのコピーを保存するためにもう 1 つのディスクプール。これが複製操作のターゲットになります。ターゲット重複排除プールは異なる重複排除ノードにあります。

形式	要件
異なる NetBackup ドメインへの自動イメージレプリケーション	自動イメージレプリケーションの重複排除プールはレプリケーションソースにもレプリケーションターゲットにもなれます。レプリケーションのプロパティは重複排除プールの目的を示します。重複排除プールはボリュームからレプリケーションのプロパティを継承します。 p.1005 の「自動イメージレプリケーションのレプリケーショントポロジについて」を参照してください。 自動イメージレプリケーションでは以下の重複排除プールが必要になります。 ■ レプリケーションソースのドメインに、少なくとも 1 つのレプリケーションソース重複排除プール。レプリケーションソース重複排除プールはバックアップの送信先となる重複排除プールです。ソース重複排除プールのバックアップイメージは 1 つまたは複数のリモートドメインの重複排除プールにレプリケートされます。 ■ 1 つまたは複数のリモートドメインに、少なくとも 1 つのレプリケーションターゲットの重複排除プール。レプリケーションターゲット重複排除プールはレプリケートソースのドメインで実行される複製操作のターゲットです。 p.1000 の「NetBackup 自動イメージレプリケーションについて」を参照してください。

p.423 の「[メディアサーバー 重複排除プールのプロパティの変更](#)」を参照してください。

p.426 の「[メディアサーバー 重複排除プールの属性の設定](#)」を参照してください。

重複排除のディスクプールの構成

NetBackup ディスクプールを構成するには、あらかじめ NetBackup 重複排除ストレージサーバーが存在している必要があります。

p.419 の「[NetBackup の重複排除用ディスクプールについて](#)」を参照してください。

重複排除ディスクプールを構成するときに、次を指定します。

- プールに使うディスクストレージを問い合わせるための重複排除ストレージサーバー。
- プールに含めるディスクボリューム。
NetBackup は単一のボリュームとしてストレージを表示します。
- ディスクプールのプロパティ。

Cohesity ディスクプールの名前は、企業全体にわたって一意にすることをお勧めします。

重複排除ディスクプールを構成する方法

- 1 左側で[ストレージ (Storage)]、[ディスクストレージ (Disk storage)]の順に選択します。[ディスクプール (Disk pools)]タブをクリックし、[追加 (Add)]をクリックします。
ディスクプールを作成するための別の方法として、ストレージサーバーを作成した後、画面の上部にある[ディスクプールの作成 (Create disk pool)]をクリックします。
- 2 [ディスクプールオプション (Disk pool options)]で必要なすべての情報を入力します。
ストレージサーバーを選択するには、[変更 (Change)]をクリックします。
[I/O ストリーム数を制限 (Limit I/O streams)]オプションをオフにすると、デフォルト値は[無制限 (Unlimited)]になり、パフォーマンスの問題が発生する可能性があります。
[次へ (Next)]をクリックします。
- 3 [ボリューム (Volume)]で、[ボリューム (Volume)]ドロップダウンを使用してボリュームを選択するか、新しいボリュームを追加します。新しいディスクプールボリュームを追加する場合は、[ボリュームの追加 (Add volume)]オプションを使用します。
クラウドストレージを使用するように MSDP ストレージサーバーを構成できます。既存のクラウドボリュームを選択するか、MSDP ストレージサーバーに新しいボリュームを作成します。

メモ: サーバー側の暗号化を有効にした場合は、AWS のカスタム管理キーを構成できます。これらのキーは、一度 NetBackup で使用されたら削除できません。各オブジェクトはアップロード中にキーで暗号化されます。AWS からキーを削除すると、NetBackup でリストアのエラーが発生します。

メモ: FortKnox は、複数のオプションをサポートしています。FortKnox Amazon および Amazon Government オプションと、FortKnox Azure および Azure Government の場合。Web UI について、クレデンシャルが必要な場合や、質問がある場合は、Cohesity NetBackup のアカウントマネージャにお問い合わせください。

環境と配備について詳しくは、[FortKnox for NetBackup](#) に関する説明を参照してください。

FortKnox の Amazon のオプションおよび FortKnox の Azure のオプションについて詳しくは、『[NetBackup 重複排除ガイド](#)』を参照してください。

選択内容に応じて必要なすべての情報を入力し、[次へ (Next)]をクリックします。

- 4 [レプリケーション (Replication)] で、[追加 (Add)] をクリックしてディスクプールにレプリケーションターゲットを追加します。

この手順では、信頼できるプライマリサーバーを選択または追加できます。NetBackup 認証局 (NBCA)、ECA、ECA と NBCA の両方をサポートするプライマリサーバーを追加できます。

レプリケーションは MSDP でのみサポートされます。

レプリケーションターゲットに対して入力されたすべての情報を確認し、[次へ (Next)] をクリックします。

- 5 [確認 (Review)] ページで、すべての設定と情報が正しいことを確認します。[完了 (Finish)] をクリックします。

ウィンドウを閉じると、ディスクプールの作成とレプリケーション構成がバックグラウンドで続行されます。クレデンシャルとレプリケーションの構成の検証に問題がある場合は、[変更 (Change)] オプションを使用して設定を調整できます。

メモ:すでに専用のディスクプールが作成されているイメージ共有サーバーは、NetBackup がイメージ共有用の新しいディスクプールを作成している間は利用できません。

p.425 の「[メディアサーバー重複排除プールの属性の表示](#)」を参照してください。

メディアサーバー重複排除プールの管理

NetBackup 重複排除を構成した後、重複排除ディスクプールを管理する各種作業を実行できます。

p.423 の「[メディアサーバー重複排除プールの表示](#)」を参照してください。

p.423 の「[メディアサーバー重複排除プールのプロパティの変更](#)」を参照してください。

p.423 の「[メディアサーバー重複排除プールの状態の判断](#)」を参照してください。

p.423 の「[MSDP ディスクボリュームの状態の判断](#)」を参照してください。

p.424 の「[MSDP ディスクボリュームの状態の変更](#)」を参照してください。

p.425 の「[メディアサーバー重複排除プールの属性の表示](#)」を参照してください。

p.426 の「[メディアサーバー重複排除プールの属性の設定](#)」を参照してください。

p.427 の「[メディアサーバー重複排除プールの属性の消去](#)」を参照してください。

p.428 の「[MSDP ストレージパーティションのサイズ調整](#)」を参照してください。

p.428 の「[メディアサーバー重複排除プールの削除](#)」を参照してください。

メディアサーバー重複排除プールの表示

構成されたディスクプールを表示できます。

ディスクプールを表示する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[ディスクストレージ (Disk storage)]の順に選択します。
- 3 [ディスクプール (Disk pools)]タブをクリックします。

メディアサーバー重複排除プールのプロパティの変更

重複排除ディスクプールのプロパティを変更できます。

ディスクプールのプロパティを変更する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[ディスクストレージ (Disk storage)]の順に選択します。
- 3 [ディスクプール (Disk pools)]タブをクリックします。
- 4 ディスクプールの名前をクリックします。
- 5 [詳細 (Details)]タブをクリックします。
- 6 [編集 (Edit)]をクリックし、必要な変更を加えます。
- 7 [保存 (Save)]をクリックします。

メディアサーバー重複排除プールの状態の判断

ディスクプールの状態は、起動または停止です。

ディスクプールの状態を判断する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[ディスクストレージ (Disk storage)]の順に選択します。
- 3 [ディスクプール (Disk pools)]タブをクリックします。
- 4 [状態 (Status)]列を確認します。

MSDP ディスクボリュームの状態の判断

NetBackup の `nbdevquery` コマンドを使用して、重複排除ディスクプールのボリュームの状態を判断します。NetBackup は単一ボリュームである `PureDiskVolume` として

MSDP のストレージすべてを開示します。このコマンドは `PureDiskVolume` のプロパティと属性を示します。

MSDP ディスクボリュームの状態を判断する方法

- ◆ 次のコマンドを使用してボリュームの状態を表示します。

UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/nbdevquery -listdv -stype PureDisk -U -dp disk_pool_name`

Windows の場合: `install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbdevquery -listdv -stype PureDisk -U -dp disk_pool_name`

state には、**UP** または **DOWN** のいずれかを指定します。

次に出力例を示します。

```
Disk Pool Name      : MSDP_Disk_Pool
Disk Type           : PureDisk
Disk Volume Name    : PureDiskVolume
Disk Media ID       : @aaaab
Total Capacity (GB) : 49.98
Free Space (GB)     : 43.66
Use%                : 12
Status              : UP
Flag                : ReadOnWrite
Flag                : AdminUp
Flag                : InternalUp
Num Read Mounts     : 0
Num Write Mounts    : 1
Cur Read Streams   : 0
Cur Write Streams  : 0
```

p.424 の「[MSDP ディスクボリュームの状態の変更](#)」を参照してください。

MSDP ディスクボリュームの状態の変更

ディスクボリュームの状態は、[起動 (UP)]または[停止 (DOWN)]です。NetBackup は単一ボリュームである `PureDiskVolume` として MSDP のストレージすべてを開示します。

状態を[停止 (DOWN)]に変更するには、ボリュームが存在するディスクプールがビジー状態でない必要があります。バックアップジョブがディスクプールに割り当てられている場合、状態の変更は失敗します。バックアップジョブを取り消すか、ジョブが完了するまで待機します。

MSDP ディスクボリュームの状態を変更する方法

- ◆ ディスクボリュームの状態を変更します。コマンドの構文は次のとおりです。

UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/nbdevconfig`
`-changestate -stype PureDisk -dp disk_pool_name -dv PureDiskVolume`
`-state state`

Windows の場合: `install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbdevconfig`
`-changestate -stype PureDisk -dp disk_pool_name -dv PureDiskVolume`
`-state state`

`-state` には、[起動 (UP)] または [停止 (DOWN)] を指定します。

p.423 の「[MSDP ディスクボリュームの状態の判断](#)」を参照してください。

メディアサーバー重複排除プールの属性の表示

重複排除プールの属性を表示するには、NetBackup のコマンドを使います。nbdevquery

MSDP プールの属性を表示する方法

- ◆ 次は重複排除プールの属性を表示するコマンドの構文です。NetBackup プライマリサーバーまたは重複排除ストレージサーバーで、このコマンドを実行します。

UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/nbdevquery -listdp -dp pool_name -stype PureDisk -U`

Windows の場合: `install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbdevquery -listdp -dp pool_name -stype PureDisk -U`

次に出力例を示します。

```
Disk Pool Name      : MediaServerDeduplicationPool
Disk Pool Id       : MediaServerDeduplicationPool
Disk Type          : PureDisk
Status             : UP
Flag               : OpenStorage
Flag               : AdminUp
Flag               : InternalUp
Flag               : LifeCycle
Flag               : CapacityMgmt
Flag               : OptimizedImage
Raw Size (GB)      : 235.76
Usable Size (GB)   : 235.76
Num Volumes        : 1
High Watermark     : 98
Low Watermark      : 80
Max IO Streams     : -1
Storage Server     : DedupeServer.example.com (UP)
```

この出力例は短縮されています。実際の出力にはこれより多くのフラグが表示されることがあります。

メディアサーバー重複排除プールの属性の設定

既存のメディアサーバーの重複排除プールの属性を設定する場合があります。たとえば、ストレージサーバーの属性を設定する場合、既存の重複排除ディスクプールの同じ属性を設定する必要があることがあります。

MSDP ディスクプールの属性を設定する方法

- 1 次は重複排除プールの属性を設定するコマンドの構文です。プライマリサーバーまたはストレージサーバーでコマンドを実行します。

```
nbdevconfig -changedp -dp pool_name -stype PureDisk -setattribute attribute
```

次に、ドメインに固有の引数を必要とするオプションについて説明します。

`-changedp` ディスクプールの名前。
`pool_name`

`-setattribute` **attribute** は、新しい機能を表す引数の名前です。
`attribute` たとえば、**OptimizedImage** は、最適化された合成バックアップ方式を環境がサポートするように指定します。

nbdevconfig コマンドへのパスは次のとおりです。

- UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd`
- Windows の場合: `install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd`

2 確認するには、ディスクプールの属性を表示します。

p.425 の「[メディアサーバー重複排除プールの属性の表示](#)」を参照してください。

p.419 の「[NetBackup の重複排除用ディスクプールについて](#)」を参照してください。

メディアサーバー重複排除プールの属性の消去

既存のメディアサーバーの重複排除プールの属性を消去しなければならないことがあります。

[メディアサーバー重複排除プール (Media Server Deduplication Pool)]属性を消去する方法

- ◆ 次は重複排除プールの属性を消去するコマンドの構文です。プライマリサーバーまたはストレージサーバーでコマンドを実行します。

```
nbdevconfig -changedp -dp pool_name -stype PureDisk  
-clearattribute attribute
```

次に、入力が必要とするオプションについて説明します。

`-changedp` ディスクプールの名前。
`pool_name`

`-setattribute` **attribute** は、新しい機能を表す引数の名前です。
`attribute`

nbdevconfig コマンドへのパスは次のとおりです。

- UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd`
- Windows の場合: `install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd`

MSDP ストレージパーティションのサイズ調整

重複排除ストレージを含んでいるボリュームが動的にサイズ調整をされたら、ストレージサーバーの NetBackup サービスを再起動します。NetBackup がサイズ調整されたパーティションを正しく使うことができるようにサービスを再起動してください。サービスを再起動しなければ、NetBackup は容量に空きがなくなる前に、空きがないと報告します。

MSDP ストレージをサイズ調整する方法

- 1 ディスクパーティションのサイズを変更するストレージのすべての NetBackup ジョブを停止し、ジョブの終了を待ちます。
- 2 ストレージサーバーをホストするメディアサーバーを無効にします。
- 3 ストレージサーバーの NetBackup サービスを停止します。
必ずすべてのサービスが停止するのを待ちます。
- 4 動的に重複排除ストレージ領域を増やすか、または減らすためにオペレーティングシステムまたはディスクマネージャツールを使います。
- 5 NetBackup サービスを再起動します。
- 6 ストレージサーバーをホストするメディアサーバーを有効にします。
- 7 重複排除ジョブを再開します。

メディアサーバー重複排除プールの削除

有効な NetBackup バックアップイメージかイメージのフラグメントを含んでいない場合は、ディスクプールを削除できます。その場合は、最初にそれらのイメージまたはフラグメントを期限切れにして削除する必要があります。期限切れのイメージフラグメントがディスクに残っている場合は、それも削除する必要があります。

ディスクプールを削除すると、NetBackup によってそのディスクプールが構成から削除されます。

ディスクプールがストレージユニットの宛先ストレージである場合は、最初にストレージユニットを削除する必要があります。

MSDP ディスクプールを削除する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[ディスクストレージ (Disk storage)]の順に選択します。
- 3 ディスクプールを選択します。
- 4 [削除 (Delete)]、[はい (Yes)]の順に選択します。

ロボットおよびテープドライブの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup](#) のロボット形式
- [デバイスマッピングファイルについて](#)
- [デバイスマッピングファイルのダウンロード](#)
- [NetBackup](#) のロボットとテープドライブの構成について
- [ロボットとテープドライブのウィザードの使用による構成](#)
- [ウィザードによるデバイス構成の更新](#)
- [手動での NetBackup へのロボットの追加](#)
- [ロボットの管理](#)
- [手動での NetBackup へのテープドライブの追加](#)
- [ドライブ名規則の構成](#)
- [テープドライブパスの追加](#)
- [NetBackup 環境への共有テープドライブの追加](#)
- [Windows ホストのテープドライブと SCSI アドレスの相関](#)
- [UNIX ホストでのテープデバイスとデバイスファイルの関連付け](#)
- [テープドライブの管理](#)
- [デバイスの診断の実行](#)

- デバイス構成の検証
- パスの自動修正について
- パスの自動修正の有効化
- デバイスの交換
- デバイスのファームウェアの更新
- NetBackup Device Manager について
- UNIX での NetBackup で制御されているデバイスへの外部アクセスについて
- Device Manager の停止と再起動

NetBackup のロボット形式

ロボットは、テープドライブからテープボリュームを出し入れする周辺機器です。NetBackup は、ロボット制御ソフトウェアを使用してロボットファームウェアと通信します。

NetBackup では、次の 1 つ以上の特徴に従ってロボットが分類されます。

- ロボット制御ソフトウェアで使用される通信方法。SCSI および API が 2 つの主な方法です。
- ロボットの物理的な特徴。ライブラリは、スロット容量またはドライブ数の点で、大きいロボットを指します。
- そのクラスのロボットで一般的に使用されるメディア形式。メディア形式の例には、HCART (1/2 インチのカートリッジテープ) があります。

次の表に、リリース 11.2 でサポートされている NetBackup のロボット形式を、各形式のドライブ数とスロット数の制限と一緒に示します。

使用するロボットのモデルに該当するロボット形式を判断するには、お使いのリリースに対応する [NetBackup Enterprise Server](#) および [Server - ハードウェア](#)および [Cloud Storage](#) の[互換性リスト](#)を参照してください。

表 8-1 NetBackup のロボット形式リリース 11.2

ロボット形式	説明	ドライブ数の制限	スロット数の制限	備考
ACS	自動カートリッジシステム	1680	制限なし	API 制御。ドライブ数の制限は ACS ライブラリソフトウェアホストで決まります。
TLD	DLT テープライブラリ	制限なし	32000	SCSI 制御。

メモ: NetBackup のユーザーインターフェースには、そのリリースでサポートされていない周辺機器のための構成オプションが表示される場合があります。これらの機器は以前のリリースでサポートされている可能性があり、NetBackup プライマリサーバーは以前の NetBackup バージョンを実行するホストを管理できます。そのため、そのようなデバイスに関する構成情報をユーザーインターフェースに表示する必要があります。NetBackup のマニュアルにもそのようなデバイスに関する構成情報が記載されている場合があります。どのバージョンの NetBackup でどの周辺機器がサポートされているかを確認するには、[NetBackup Enterprise Server および Server - ハードウェアおよび Cloud Storage 互換性リスト](#)を参照してください。

デバイスマッピングファイルについて

NetBackup はストレージデバイスと通信するために使うプロトコルと設定を判断するために複数のファイルを使います。NetBackup はデバイスの検出中と構成中にもそのファイルを使います。

デバイスマッピングファイルは次の URL からダウンロードできます。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100040093>

ダウンロードパッケージには次のファイルが含まれます。

- external_robotics.txt
- external_types.txt
- Readme.txt

リリース更新が提供される前に、新しいまたはアップグレードされたデバイスのサポートを追加できる場合があります。これを行うには、[Cohesity Technical Support Web](#) サイトから最新のデバイスマッピングファイルパッケージをダウンロードし、そのファイルを使用するように NetBackup を構成します。手順については、デバイスマッピングファイルパッケージに付属の Readme.txt を参照してください。

メモ: このデバイスマッピングファイルの内容では、デバイスの認識および自動構成だけが可能で、デバイスのサポートが指示されるわけではありません。

p.431 の「[デバイスマッピングファイルのダウンロード](#)」を参照してください。

p.432 の「[NetBackup のロボットとテープドライブの構成について](#)」を参照してください。

デバイスマッピングファイルのダウンロード

次の手順を使用して、現在のデバイスマッピングファイルをダウンロードし、その情報で NetBackup データベースを更新します。

p.431 の「[デバイスマッピングファイルについて](#)」を参照してください。

最新のデバイスマッピングファイルをダウンロードする方法

- 1 次の URL に移動します。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100040093>

- 2 表の「NetBackup デバイスマッピングファイル」の行で、目的のオペレーティングシステムのリンクを選択します。

インストール手順とデバイスマッピングのアーカイブファイルが含まれる、ナレッジベースの記事が表示されます。

- 3 オペレーティングシステムに応じて、.tar または .zip のアーカイブファイルをダウンロードします。
- 4 アーカイブに含まれる Readme.txt ファイルの指示に従ってデバイスマッピングを更新します。Readme.txt ファイルは Windows と UNIX のオペレーティングシステム両方の指示を含んでいます。

NetBackup のロボットとテープドライブの構成について

NetBackup のロボットとテープドライブは、設定する前にコンピュータに接続し、オペレーティングシステムで認識される必要があります。NetBackup でサポートされているサーバープラットフォームでは、デバイスを検出できるようにするためにオペレーティングシステムの構成の変更が必要になる場合があります。

NetBackup でサポートされているシステムのデバイスドライバを構成する方法については、『[NetBackup デバイス構成ガイド](#)』を参照してください。

次のように NetBackup でロボットとテープドライブを構成します。

デバイスの構成ウィザード NetBackup で次の形式のデバイスを追加、構成、および更新する場合は、[デバイスの構成ウィザード (Device Configuration Wizard)]を使用することをお勧めします。

- ロボット (NDMP ホストに接続されているものを含む)
- テープドライブ (NDMP ホストに接続されているものを含む)
- 共有ドライブ (NetBackup Shared Storage Option 構成の場合のみ)

p.437 の「[ロボットとテープドライブのウィザードの使用による構成](#)」を参照してください。

ウィザードはメディアサーバーに接続されているデバイスを検出し、それらを構成する場合に役立ちます。

p.432 の「[NetBackup のロボットとテープドライブの構成について](#)」を参照してください。

手動

または、次のようにロボットとドライブを手動で追加します。

- NetBackup 管理コンソールのメニューオプションを使用します。
p.438 の「[手動での NetBackup へのロボットの追加](#)」を参照してください。
p.445 の「[手動での NetBackup へのテープドライブの追加](#)」を参照してください。
- NetBackup コマンドを使用します。
詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

手動方式はデバイスの検出を使いません。

ロボットとドライブを追加するには、まずロボットを追加し、次にロボット内のドライブを追加します。

ロボットとドライブを構成する前に、次のトピックを参照してプロセスを理解してください。

p.434 の「[デバイスのシリアル化について](#)」を参照してください。

p.435 の「[検出されないデバイスの追加について](#)」を参照してください。

p.435 の「[ロボット制御について](#)」を参照してください。

p.436 の「[ドライブ名規則について](#)」を参照してください。

p.456 の「[UNIX ホストでのテープデバイスとデバイスファイルの関連付け](#)」を参照してください。

p.454 の「[Windows ホストのテープドライブと SCSI アドレスの関連](#)」を参照してください。

デバイスの検出について

デバイスの検出は、ホストから検出可能な周辺機器を判断するための検索方法です。検出は物理的な接続 (SCSI、ファイバーチャネルなど) とデバイスの状態 (起動状態で応答あり、または停止状態で応答なし) によって異なります。検出はホストのオペレーティングシステムのデバイス層の設定によっても異なります。

デバイスの検出の目的は、NetBackup で使用する周辺機器の、完全または部分的な自動構成を行うための情報を提供することです。デバイスの検出では、複数のホスト間で相互接続されているデバイスどうしや、同じホスト上の複数のホストバスアダプタどうしを関連付けるデータが提供されます。

デバイスを検出するために、NetBackup はオペレーティングシステムのデバイスファイル (UNIX) または API (Windows) によって SCSI パススルーコマンドを発行します。ストレージデバイスはコンピュータに接続され、オペレーティングシステムによって認識される必要があります。デバイスへのパススルーパスがある必要があります。

NetBackup がサポートするオペレーティングシステムは、デバイスの検出を許可するために設定変更が必要であることがあります。

NetBackup でサポートされているシステムのデバイスドライバを構成する方法については、『[NetBackup デバイス構成ガイド](#)』を参照してください。

NetBackup では、次の形式のデバイスを検出できます。

- SCSI ベースのロボットライブラリ
- SCSI ベースのテープドライブ
- ネイティブパラレル SCSI、ファイバーチャネルプロトコル (FCP) および FC-AL (ループ) 接続
- SCSI over IP
- ACS ロボットのような API 形式のロボット
- NDMP バージョン 3 以上を実行する NDMP デバイス

p.470 の「[パスの自動修正の有効化](#)」を参照してください。

デバイスのシリアル化について

デバイスのシリアル化は、デバイスの識別および構成を可能にするファームウェアの機能です。一意のシリアル番号によってデバイスが識別されます。

NetBackup では、デバイスの関係を、同じデバイスを参照する複数のソースのシリアル番号を比較することで判断します。ロボットライブラリとドライブの両方でシリアル化が完全にサポートされている場合、NetBackup ではロボットライブラリ内のドライブの位置 (アドレス) を判断できます。

ほとんどのロボットおよびドライブでは、デバイスのシリアル化がサポートされています。

デバイスがシリアル化をサポートしている場合、NetBackup によってデバイスの問い合わせが行われると、次の処理が行われます。

- 各ロボットおよびドライブによって一意のシリアル番号が戻されます。
- また、各ロボットでは、ロボット内の各ドライブのドライブ数とシリアル番号が戻されます。NetBackup はこの情報を使用して、ロボット内の各ドライブの正しいドライブ番号を判断します。

デバイスでシリアル化がサポートされていない場合は、シリアル番号を戻す新しいファームウェアバージョンについてベンダーにお問い合わせください。適切なファームウェアを使用している場合でも、デバイスによっては、そのデバイスのシリアル化を有効にするためにベンダーが他の処置を行うことが必要な場合があります。

デバイスでシリアル化がサポートされていないことがわかっている場合、そのデバイスで許可されている最大構成の制限に従っていることを確認してください。また、デバイスファイルか SCSI アドレスに合わせてドライブを調整して、それらを正しく設定してください。

p.454 の「[Windows ホストのテープドライブと SCSI アドレスの相関](#)」を参照してください。

p.456 の「UNIX ホストでのテープデバイスとデバイスファイルの関連付け」を参照してください。

シリアル化をサポートしないデバイスが構成内に多いほど、[デバイスの構成ウィザード (Device Configuration Wizard)]の使用による設定の問題が多く発生します。

検出されないデバイスの追加について

NetBackup は自動的に検出できない一部のデバイスをサポートします。NetBackup は検出プロセスの間にユーザーの介入が必要である一部のデバイスもサポートします。これらのデバイスを追加して構成するには、NetBackup Web UI で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]を選択するか、tpconfig コマンドを使用します。

NetBackup が検出できないか、またはシリアル番号がないデバイスの場合、デバイスパスの自動修正は制限されます。

ロボット制御について

NetBackup にロボットを手動で追加するとき、ロボットがどのように制御されるか設定する必要があります。

p.441 の「[ロボット制御 (Robot control)](ロボット構成オプション)」を参照してください。

次の表はロボット制御形式 (ローカル、NDMP、リモート) を構成するために必要な情報を示しています。必要な情報はロボット形式とメディアサーバー形式によって異なります。

表 8-2 ロボット制御情報

ロボット形式	メディアサーバー形式	ロボット制御	構成に必要な情報
ACS	Windows、Solaris SPARC、および Linux (Linux64 を除く)	NDMP	NDMP ホスト名およびロボットデバイス
ACS	すべて	リモート	ACSL S ホスト
TLD	UNIX の場合	ローカル	ロボットデバイスファイル
TLD	Windows の場合	ローカル	ロボットデバイスまたは SCSI 座標
TLD	Windows、Solaris SPARC、および Linux (Linux64 を除く)	NDMP	NDMP ホスト名およびロボットデバイス
TLD	すべて	リモート	ロボット制御ホスト

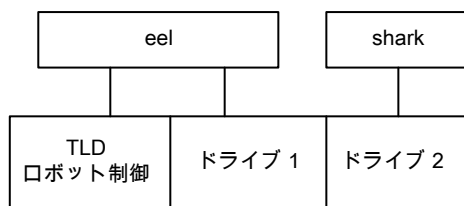
ライブラリ共有の例

図 8-1 に、ライブラリ共有の例として、同じ TLD ロボット内の 2 台のドライブが 2 つのサーバーで使用されている場合を示します。

ロボットは、eel という名前のホストで制御されます。ロボット内の 1 つのドライブはホスト eel に接続され、もう一方のドライブはホスト shark に接続されています。

ホスト eel は、ロボット制御ホストです。ホスト eel でこのロボットを構成するには、[ロボットは、このデバイスホストによってローカルで制御される (Robot is controlled locally by this device host)] を選択します。ホスト shark でこのロボットを構成するには、[ロボット制御はリモートホストによって処理される (Robot control is handled by a remote host)] を選択します。次に、[ロボット制御ホスト (Robot control host)] で eel と入力します。

図 8-1 ロボット制御ホストの例



TLD ロボット (HP EML E-Series)

ドライブ名規則について

ドライブ名規則は NetBackup がドライブの名前を付けるために使う規則を定義します。

デフォルトのグローバルドライブ名規則では、次の形式で名前が作成されます。

ベンダー ID. プロダクト ID. インデックス

Quantum DLT8000 ドライブを追加する際にデフォルトのグローバル規則を使用すれば、ドライブは次のように名前が付けられます。追加する 1 つ目は QUANTUM.DLT8000.000、2 つ目は QUANTUM.DLT8000.001 などのように名前が付けられます。

デフォルトのグローバルドライブ名規則は更新できます。

また、特定のデバイスホストで使用するドライブ名規則を作成できます (デバイスホストごとに専用の規則を構成できます)。ホスト固有の規則は、指定したホストに接続されているデバイスのグローバル規則より優先されます。

グローバル規則は 1 つだけ存在することができ、接続されているすべてのデバイスホストで使用されます。ホスト固有の規則またはローカル規則が指定されていない場合、ドライブ名にはグローバル規則が使用されます。

ドライブ名は、48 文字に制限されています。

ドライブ名規則の一部として、次のいずれかのドライブの属性を使用します。

- ホスト名 (host name)
- ロボット番号 (robot number)
- ロボット形式 (Robot type)
- ドライブ位置 (Drive position)
ドライブの位置情報は、ロボット形式によって異なります。ドライブの位置情報には、ACS の座標またはロボットドライブ番号を使用できます。
- ドライブ形式 (Drive type)
- シリアル番号 (Serial number)
- ベンダー ID (Vendor ID)
- 製品 ID (Product ID)
- インデックス (Index)

また、[カスタムテキスト (Custom Text)]フィールドに、ドライブ名で利用可能な任意の文字を入力することもできます。

p.450 の「[ドライブ名規則の構成](#)」を参照してください。

ロボットとテープドライブのウィザードの使用による構成

NetBackup の[デバイスの構成ウィザード (Device Configuration Wizard)]を使用してロボットとドライブを構成することをお勧めします。ただし、ロボットとドライブを手動で追加できます。

ロボットとドライブをウィザードの使用によって構成する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]をクリックします。
- 2 右ペインで、[ストレージデバイスの構成 (Configure Storage Devices)]をクリックし、ウィザードの指示に従います。

構成できるプロパティは、ロボット形式、ホスト形式、およびロボット制御によって決まります。

ウィザードによるデバイス構成の更新

ハードウェアを変更するとき、NetBackup のデバイス構成を更新するためにデバイス構成ウィザードを使うことをお勧めします。

すべてのストレージデバイスの変更に対して構成を更新します。たとえば、ロボットまたはドライブを追加または削除するか、またはホストの新しい SCSI アダプタを追加したら、構成を更新します。

バックアップまたはリストアの実行中は、デバイス構成を更新しないでください。

ウィザードによってデバイス構成を更新する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[デバイス (Devices)]を選択します。
- 2 詳細ペインのウィザードのリストから[ストレージデバイスの構成 (Configure Storage Devices)]をクリックして、ウィザードの指示に従います。

手動での NetBackup へのロボットの追加

ロボットを手動で追加するとき、ロボットがどのように制御されるか指定する必要があります。

p.430 の「[NetBackup のロボット形式](#)」を参照してください。

p.435 の「[ロボット制御について](#)」を参照してください。

ロボットを追加した後、ロボットのドライブを追加する必要があります。

p.445 の「[手動での NetBackup へのテープドライブの追加](#)」を参照してください。

メモ: テープストレージデバイスを追加および更新する場合は、[デバイスの構成ウィザード (Device Configuration Wizard)]を使用することをお勧めします。

ロボットを[処理 (Actions)]メニューを使って追加する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[デバイス (Devices)]を展開します。
- 2 [処理 (Actions)]メニューで[新規 ()]>[新しいロボット (New Robot)]を選択します。

- 3 ロボットのプロパティを指定します。

構成できるプロパティは、ロボット形式、ホスト形式、およびロボット制御によって決まります。

p.440 の「ロボットのプロパティおよび構成オプション」を参照してください。

- 4 [OK]をクリックします。

[Media Manager Device デーモンの停止/再起動 (Stop/Restart Media Manager Device Daemon)]ダイアログボックスが表示されます。

- 5 その他の変更を行う場合は、[キャンセル (Cancel)]をクリックします。最終的な変更を行った後、Device Manager または Device デーモンを再起動できます。

デバイスの変更が完了したら、[OK]をクリックして device デーモンを再起動します。

device デーモンを再起動すると、実行中のすべてのバックアップ、アーカイブまたはリストアも停止する場合があります。

ロボットのプロパティおよび構成オプション

このトピックでは、ロボットのプロパティについて説明します。

デバイスホスト (Device host)

デバイスの接続先ホスト。

ロボット形式 (Robot type)

ロボットの形式。特定のベンダーとモデルに使用するロボット形式を検索するには、[NetBackup Enterprise Server](#) および [Server - ハードウェア](#) および [Cloud Storage](#) の [互換性リスト](#)を参照してください。

ロボット番号 (Robot number)

ロボットライブラリに対する一意の論理的な ID 番号。この番号 (TLD(21) など) によって、リスト内でロボットライブラリが識別されます。また、ロボットのメディアを追加する場合も、この番号を使用します。

次の点に注意してください。

- ロボット形式またはロボットを制御するホストにかかわらず、ロボット番号は、構成に含まれるすべてのホスト上のすべてのロボットに対して一意である必要があります。たとえば、2 つのロボットが存在する場合、これらのロボットが異なるホストによって制御されていても、異なるロボット番号を使用します。
- ロボットを制御するホストと、ドライブが存在するホストが異なる場合、そのライブラリに対するすべての参照先に同じロボット番号を指定します。ロボット制御を行うホスト上でも、ドライブが存在するホスト上でも、同じロボット番号を使用します。DLT テープライブラリロボットなどでは、ロボットを制御するホストとドライブのホストを別々に構成できます。

例については、『[NetBackup デバイス構成ガイド](#)』を参照してください。

ロボット制御 (Robot control)

構成できるロボット構成プロパティは、ロボットがどのように制御されるかによって決まります。

p.441 の「[ロボット制御 (Robot control)](ロボット構成オプション)」を参照してください。

[ロボット制御 (Robot control)](ロボット構成オプション)

プロンプトの[ロボット制御 (Robot control)]セクションは、ロボット制御の形式を指定します。構成するオプションはロボット形式とメディアサーバーの形式によって決まります。

表 8-3 ロボット構成プロパティ

プロパティ	説明
ロボットはこのデバイスホストにローカルで制御される (Robot is controlled locally by this device host)	ロボットが接続されているホストでロボットを制御するように指定します。 他のオプションを (ロボット形式とデバイスホスト形式に応じて) 構成する必要があります。
ロボットはリモートホストによって処理されます (Robot is handled by a remote host)	デバイスホスト以外のホストでロボットを制御するように指定します。 他のオプションを (選択したロボット形式とデバイスホストのプラットフォームに基づいて) 構成します。
ロボット制御は NDMP ホストに接続される (Robot control is attached to an NDMP host)	NDMP ホストでロボットを制御するように指定します。 他のオプションを (ロボット形式とデバイスホスト形式に応じて) 構成する必要があります。
ACSLS ホスト (ACSLS host)	Sun StorageTek ACSLS ホストの名前を指定します (ACS ライブラリソフトウェアは ACSLS ホストに存在します)。UNIX サーバプラットフォームの種類によっては、このホストは、メディアサーバーである場合もあります。 ACS ライブラリソフトウェアコンポーネントは次のいずれかです。 ■ 自動カートリッジシステムライブラリソフトウェア (ACSLS) 例については、『NetBackup デバイス構成ガイド』を参照してください。 ■ STK Library Station ■ StorageNet 6000 Storage Domain Manager (SN6000) この STK ハードウェアは、他の ACS ライブラリソフトウェアコンポーネント (ACSLS など) のプロキシとして動作します。 メモ: ACS ロボット制御のドライブが存在するデバイスホストが Windows サーバーである場合、STK LibAttach ソフトウェアもインストールしておく必要があります。STK から適切な LibAttach ソフトウェアを入手してください。 互換性情報については、『NetBackup Enterprise Server and Server - Hardware and Cloud Storage Compatibility List』を参照してください。 https://support.cohesity.com/s/article/article-100040093

プロパティ	説明
NDMP ホスト名 (NDMP host name)	ロボットが接続されている NDMP ホストの名前を指定します。
ロボット制御ホスト (Robot control host)	ロボットを制御するホストを指定します。 TLD ロボットのロボット情報が定義されるホストの名前。
ロボットデバイス (Robot device)	次は Windows デバイスホストにのみ適用されます。ロボットデバイスの名前を指定します。 [参照 (Browse)]を選択し、[デバイス (Devices)]が表示されたプロンプトリストからロボットを選択します。 検出処理でロボットが見つからない場合は、[手動で追加 (Add manually)]を選択します。続いて表示されるプロンプトで、[ポート (Port)]、[バス (Bus)]、[ターゲット (Target)]および[LUN]に番号を入力するか、デバイス名を入力します。参照操作が何らかの理由で失敗した場合は、必要な情報を指定するように求められます。 Windows 管理ツールを使ってポート、バス、ターゲット、LUN 番号を見つけます。 参照操作で接続されたロボットが見つからない場合は、情報の指定を求めるメッセージが表示されます。
ロボットデバイスファイル (Robotic device file)	UNIX デバイスホストのみ。SCSI 接続で使用するデバイスファイルを指定します。デバイスファイルは、デバイスホスト上の /dev ディレクトリツリーに存在します。 ロボットデバイスファイルを指定するには、[参照 (Browse)]を選択し、リストからロボットデバイスファイルを選択します。 デバイスファイルのリストが表示されます。適切なファイルを選択し、[選択 (Select)]ボタンを選択します。 [参照 (Browse)]ボタンによる操作では、接続されたすべてのロボットを表示できない場合、[手動で追加 (Add manually)]をクリックします。[ロボットデバイスファイル (Robotic device file)]フィールドに、デバイスファイルのパスを入力して、[選択 (Select)]ボタンを選択します。 参照操作で接続されたロボットが見つからない場合は、情報の指定を求めるメッセージが表示されます。 デバイスファイルを追加する方法について詳しくは、『NetBackup デバイス構成ガイド』を参照してください。
ロボットデバイスパス (Robot device path)	NDMP ホストのみ。NDMP ホストに接続するロボットデバイスの名前を指定します。
ポート (Port)、バス (Bus)、ターゲット (Target)、LUN	Windows ホストのみ。ロボットデバイスのポート、バス、ターゲット、LUN の SCSI 座標。デバイスの SCSI 座標を指定するには、ポート、バス、ターゲットおよび LUN を入力します。

ロボットの管理

ロボットを管理する各種のタスクを実行できます。

p.443 の「[ロボットのプロパティの変更](#)」を参照してください。

p.443 の「[ロボットの削除](#)」を参照してください。

ロボットのプロパティの変更

ロボットの設定情報を変更するために次の手順を使います。

ロボットのロボット制御プロパティを変更するには

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に[ロボット (Robots)]タブをクリックします。
- 3 ロボットを選択し、[編集 (Edit)] をクリックします。
- 4 必要に応じてロボット制御プロパティを変更します。

変更できるプロパティはロボット形式、ホスト形式、ロボット制御の選択によって決まります。

p.443 の「[ロボットのプロパティの変更](#)」を参照してください。

- 5 [保存 (Save)]をクリックします。

Device Manager または Device デーモンを再起動すると、実行中のすべてのバックアップ、アーカイブまたはリストアも停止する場合があります。

ロボットの削除

メディアサーバーが動作中のときにロボットを削除するには次の手順を使います。

削除したロボット上に構成されていたすべてのドライブは、スタンドアロンドライブに変更されます。

また、削除されたロボット内のすべてのメディアは、スタンドアロンに移動されます。メディアがもはや使用可能または有効でなければ、NetBackup の構成からそれを削除します。

p.522 の「[ボリュームの削除](#)」を参照してください。

ロボットを削除する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。[ロボット (Robots)]タブをクリックします。

- 3 削除するロボットを選択します。
- 4 [削除 (Delete)], [削除 (Delete)]の順にクリックします。

メモ: ロボットの削除が Web UI に反映されるまでには数分かかる場合があります。
Media Manager Device デーモンの再起動を促すメッセージが表示されます。

新しいメディアサーバーへのロボットとメディアの移動

1 つのサーバー (*old_server*) から異なるメディアサーバー (*new_server*) にロボットとメディアを移動するために次の処理を使います。

表 8-4 新しいサーバーへのロボットとメディアの移動の概要

作業	手順
<i>old_server</i> のどのテープに期限が切れていない NetBackup イメージが含まれているかを判断します。	次の <code>bpmedialist</code> コマンドを実行します。 <code>bpmedialist -mlist -l -h old_server</code> <code>-l</code> オプションを指定すると、各テープに対して 1 行の出力が表示されます。
<i>old_server</i> に接続されているロボットのテープを非ロボットの状態 (スタンドアロン) に移動します。	p.535 の「 [処理 (Action)]メニューを使用したボリュームの移動 」を参照してください。
<i>old_server</i> から <i>new_server</i> にメディアを論理的に移動します。	<i>old_server</i> と <i>new_server</i> が両方とも NetBackup 6.0 またはそれ以降であれば、次のコマンドを実行します。 <code>bpmedia -movedb -allvolumes -oldserver old_server -newserver new_server</code> どちらかのサーバーがバージョン 6.0 よりも前の NetBackup を実行していたら、アクティブなイメージがある各ボリュームに対して次のコマンドを実行します。 <code>bpmedia -movedb -ev media_ID -oldserver old_server -newserver new_server</code> アクティブなイメージがあるメディアについては、この処理の最初のステップの <code>bpmedialist</code> コマンド出力を参照してください。
リストア要求が <i>new_server</i> に送信されるように NetBackup を構成します。	p.114 の「 リストアでの特定のサーバーの使用 」を参照してください。
<i>old_server</i> と <i>new_server</i> を両方シャットダウンします。	詳しくは、ベンダーのマニュアルを参照してください。
<i>old_server</i> からロボットを接続解除します。	詳しくは、ベンダーのマニュアルを参照してください。

作業	手順
<i>new_server</i> にロボットを接続します。新しいメディアサーバーのオペレーティングシステムによって、ロボットが認識されていることを確認します。	詳しくは、ベンダーのマニュアルを参照してください。
適切な NetBackup ストレージユニットを作成します。	p.565 の「 ストレージユニットの作成 」を参照してください。
<i>new_server</i> に接続されているロボットをインベントリ処理します。このインベントリによって、ロボット内のすべてのテープの場所が更新されます。	p.555 の「 ロボットの内容に合わせた NetBackup ボリュームの構成の更新 」を参照してください。

手動での NetBackup へのテープドライブの追加

テープドライブを手動で追加するには、次の手順を実行します。

メモ: テープストレージデバイスを追加および更新する場合は、[デバイスの構成ウィザード (Device Configuration Wizard)]を使用することをお勧めします。

ドライブを[処理 (Actions)]メニューを使って追加する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[デバイス (Devices)]を展開します。
- 2 [処理 (Actions)]メニューで[新規 ()]>[新しいテープドライブ (New Tape Drive)]を選択します。

- 3 ドライブ名については、次のいずれかの操作を実行します。
 - [ドライブ名 (Drive name)]フィールドにドライブの名前を入力します。
p.447 の「[ドライブ名 \(Drive name\) \(テープドライブの構成オプション\)](#)」を参照してください。
 - [ドライブ名規則を使用する (Use drive name rules)]を選択します。このオプションは規則を使ってドライブに自動的に名前を付けます。
p.436 の「[ドライブ名規則について](#)」を参照してください。
p.450 の「[ドライブ名規則の構成](#)」を参照してください。
- 4 ホストとパス情報を構成するには、ダイアログボックスの[ホストおよびパスの情報 (Host and path information)]領域で[追加 (Add)]をクリックします。
p.448 の「[\[ホストおよびパスの情報 \(Host and path information\)\] \(テープドライブの構成オプション\)](#)」を参照してください。

- 5 ダイアログボックスの[ドライブ情報 (Drive information)]領域では、ドライブのプロパティを構成します。
プロパティは、ドライブ形式およびホストのサーバー形式によって異なります。
p.448 の「[ドライブ情報 \(テープドライブ構成オプション\)](#)」を参照してください。
- 6 プロパティすべてを構成した後、[OK]をクリックします。
- 7 デバイスの変更が完了したら、[Device Manager の再起動 (Restart Device Manager)]ダイアログボックスまたは[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]ダイアログボックスで[はい (Yes)]を選択することによって Device Manager または Device デーモンを再起動します。
他のデバイスの変更を行う場合は、[いいえ (No)]をクリックします。最終的な変更を行った後、Device Manager または Device デーモンを再起動できます。
Device Manager または Device デーモンを再起動すると、実行中のすべてのバックアップ、アーカイブまたはリストアも停止する場合があります。

テープドライブの構成オプション

テープドライブの追加やドライブのプロパティの変更を行う場合は、プロパティを指定できます。指定可能なプロパティは、ドライブ形式、サーバープラットフォームまたは NetBackup サーバー形式によって異なります。

ドライブ名 (Drive name) (テープドライブの構成オプション)

ドライブ名を指定します。各ドライブ名は一意である必要があります。説明的な名前を使用することをお勧めします。ドライブ名は、48 文字に制限されています。

または、ドライブ名のシードを使用して一意のドライブ名を作成します。

ドライブ名規則を使用する (Use drive name rules) (テープドライブの構成オプション)

ドライブのみを追加します。ドライブ名規則を使用して、ドライブに自動的に名前を割り当てる場合に選択します。

ドライブ名規則を構成するには、[構成 (Configure)]をクリックします。

p.436 の「[ドライブ名規則について](#)」を参照してください。

p.450 の「[ドライブ名規則の構成](#)」を参照してください。

[**ホストおよびパスの情報 (Host and path information)**](**テープドライブの構成オプション**)

[**ホストおよびパスの情報 (Host and path information)**]グループボックスを使用して、ドライブへのパスを追加または変更します。同じ物理デバイスに対して複数のパスを指定できます。1 つのドライブに複数のパスを指定すると、そのドライブは共有ドライブになります。

ドライブパスを追加するには、[追加 (Add)]をクリックします。

ドライブパスを変更するには、[変更 (Change)]をクリックします。

ドライブパスを削除するには、[削除 (Remove)]をクリックします。

p.452 の「[ドライブパスの SCSI RESERVE について](#)」を参照してください。

p.452 の「[ドライブパスのオプション](#)」を参照してください。

ドライブ情報 (テープドライブ構成オプション)

[**ドライブ情報 (Drive information)**]グループボックスにはドライブのプロパティが含まれています。指定可能なプロパティは、ドライブ形式、サーバープラットフォーム、および NetBackup サーバー形式によって異なります。

次の表に、テープドライブの構成オプションを示します。

表 8-5 テープドライブの構成オプション

オプション	説明
ドライブ形式 (drive type)	ドライブの形式を指定します。次に有効なドライブ形式を示します。 ■ DLT (DLT カートリッジ) ■ DLT2 (DLT カートリッジ 2) ■ DLT3 (DLT カートリッジ 3) ■ HCART (1/2 インチカートリッジ) ■ HCART2 (1/2 インチカートリッジ 2) ■ HCART3 (1/2 インチカートリッジ 3)
ドライブは、ロボットライブラリに存在する (Drive is in a robotic library)	ドライブがロボット内に存在することを指定します。ドライブがスタンドアロンドライブの場合 (ロボット内に存在しない場合) には、このオプションを選択しないでください。 このオプションを選択する場合は、[ロボットライブラリ (Robotic library)]および[ロボットドライブ番号 (Robot drive number)]フィールドを構成します。

オプション	説明
クリーニングの間隔 (Cleaning Frequency)	ドライブに対して、間隔に基づくクリーニングを指定します。NetBackup は一部のロボット形式のドライブクリーニングをサポートしません。 間隔を基準としたクリーニングスケジュールをドライブに設定する場合、ドライブクリーニング間のマウント時間数を設定します。ドライブを追加したり、マウント時間を 0 (ゼロ) にリセットすると、そのドライブへのボリュームのマウント時間が NetBackup によって記録されます。デフォルトの間隔は 0 (ゼロ) です。 次の条件を満たしている場合、累積マウント時間がクリーニングの間隔に指定した時間を超えると、ドライブクリーニングが起きます。 ■ ドライブが、ドライブクリーニングをサポートしているロボットライブラリ内に存在する ■ そのロボットライブラリにクリーニングカートリッジが定義されている ■ クリーニングカートリッジが、クリーニングを必要とするドライブに対応したものである ■ クリーニングカートリッジの残りのクリーニング数が 0 (ゼロ) ではない ドライブがクリーニングされると、NetBackup によってマウント時間がリセットされます。 ドライブのクリーニングは、デバイスモニターからも実行できます。 クリーニングの間隔を指定しない場合でも、TapeAlert 機能を使用して自動ドライブクリーニングを実行できます。 TapeAlert のドライブクリーニングについて詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』を参照してください。
ドライブの状態 (Drive Status)	UNIX のみ。 ドライブの可用性を指定します。 ドライブを追加すると、そのドライブはデフォルトで起動状態になります。これは、ドライブが利用可能であることを意味します。ドライブが起動状態である場合、デフォルトのモードは AVR (自動ボリューム認識) です。 ドライブの状態を変更するには、[起動 (UP)]または[停止 (DOWN)]をクリックします。 デバイスモニターの[処理 (Actions)]メニューのコマンドを実行して、ドライブの状態を変更することもできます。
シリアル番号 (Serial Number)	ドライブのシリアル番号が表示される読み取り専用フィールド。
ロボットライブラリ (Robotic library)	ドライブを制御するロボットを指定します。ドライブを制御できる構成されたロボットを選択できます。

オプション	説明
ロボットドライブ番号 (Robot drive number)	ドライブのロボット内での物理的な場所を指定します。ロボットに複数のドライブを追加する場合、物理ドライブを任意の順序で追加できます。たとえば、ドライブ 1 の前にドライブ 2 を追加できます。 メディアを適切にマウントして使用するためには、正しいロボットドライブ番号が必要です。ロボット内で、論理デバイス名 (Windows の場合) またはデバイスファイル (UNIX の場合) がいずれの物理ドライブを識別しているかを特定する必要があります。ドライブのシリアル番号とロボットからのドライブのシリアル番号情報を次のように関連付ける必要があります。 ■ Windows の場合、ロボットのどの物理ドライブが論理デバイスの名前によって識別されるかを決定する必要があります。 p.454 の「Windows ホストのテープドライブと SCSI アドレスの相関」を参照してください。 ■ UNIX の場合、ロボットのどの物理ドライブがデバイスファイル名によって識別されるかを決定する必要があります。 p.456 の「UNIX ホストでのテープデバイスとデバイスファイルの関連付け」を参照してください。 構成中に不適切なドライブ番号を割り当てた場合、割り当て時には NetBackup で検出されませんが、NetBackup によってこのドライブに対するメディアのマウントが試行されるとエラーが発生します。 メモ: API ロボットにドライブを追加する場合、[ロボットドライブ番号 (Robot drive number)] プロパティは適用されません。NetBackup では、API ロボットは ACS 形式です。
ACS、LSM、パネル (Panel)、ドライブ (Drive)	ACS ロボット内のドライブの場所を指定します。 次の情報は ACS ロボットドライブにのみ適用されます。[ACS] プロパティはロボット内のドライブの物理的な場所を指定します。インストールの間、ロボットの物理ドライブと以前指定したデバイスファイルの間の相関が示されます。この関連付けは、インストール時に設定します。 ドライブの場所のプロパティは次のとおりです。 ■ [ACS 番号 (ACS Number)] - そのドライブが存在するロボットを識別するインデックス (ACS ライブラリソフトウェアの用語) を指定します。 ■ [LSM 番号 (LSM Number)] - そのドライブが存在するライブラリストレージモジュールを指定します。 ■ [PANEL 番号 (PANEL Number)] - そのドライブが存在するロボットパネルを指定します。 ■ [ドライブ番号 (Drive Number)] - ドライブの物理的な番号 (ACS ライブラリソフトウェアの用語) を指定します。

ドライブ名規則の構成

NetBackup がテープドライブの名前を付けるために使用する規則を構成するには、次の手順を実行します。これらの規則は[ドライブおよびロボットの構成 (Configure drives and robots)]ウィザードで定義します。

ドライブ名規則を構成する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。
- 3 右上で[処理 (Actions)]、[ストレージデバイスの構成 (Configure storage devices)]の順に選択します。
- 4 ウィザードの[デバイスホスト (Device hosts)]の手順で、[構成されたドライブ名規則 (Configured drive name rules)]セクションに移動します。
- 5 新しい規則を作成するには、[追加 (Add)]を選択します。
- 6 グローバル規則を置き換えるか、ローカル規則を作成できます。
 - グローバル規則を置き換えるには、[グローバル規則 (Global rule)]チェックボックスにチェックマークを付けます。
グローバル規則は常に存在する必要があり、1つのグローバル規則のみが存在できます。既存のグローバル規則を上書きする場合は、別のグローバル規則を作成して置き換えることができます。
 - ローカル規則を作成するには、[追加 (Add)]を選択し、デバイスホストの名前を入力または選択します。
- 7 [次へ (Next)]を選択します。
- 8 ドライブに名前を付けるための規則を構成します。
 - ドライブ名に使用するフィールドを選択するには、[フィールドの追加 (Add field)]を選択します。次に、ドロップダウンリストからフィールドを選択します。
規則にホスト名を使用していて、対象のドライブが共有ドライブである場合、ホスト名の部分には、ドライブを最初に検出したホストの名前が使用されます。共有ドライブの名前は、ドライブを共有するすべてのサーバーで同じである必要があります。
 - ドライブ名規則にカスタムテキストを追加するには、[カスタムテキストの追加 (Add custom text)]を選択します。次に、カスタムテキストを入力します。
 - ドライブ名に使用するフィールドの順序を変更するには、[処理 (Actions)]、[上に移動 (Move up)]または[処理 (Actions)]、[下に移動 (Move down)]の順に選択します。
- 9 [作成 (Create)]を選択して、規則を確定します。

テープドライブパスの追加

通常、NetBackup にドライブを追加するとき、テープドライブパスを追加します。ドライブパスを追加するには、次の手順を実行します。

テープドライブパスを追加する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[デバイス (Devices)]>[ドライブ (Drives)]を展開します。
- 2 [新しいドライブの追加 (Add a New Drive)]を選択します。ダイアログボックスで、[追加 (Add)]をクリックします。
- 3 [パスの追加 (Add Path)]ダイアログボックスで、ドライブパスのプロパティを構成します。

指定可能なプロパティは、ドライブ形式、サーバープラットフォームまたは NetBackup サーバー形式によって異なります。

p.452 の「[ドライブパスの SCSI RESERVE について](#)」を参照してください。

p.452 の「[ドライブパスのオプション](#)」を参照してください。

ドライブパスの SCSI RESERVE について

NetBackup では、テープドライブに排他的なアクセス保護を構成し、この予約中は他のホストバスアダプタ (HBA) からドライブを制御できないようにすることができます。[SCSI RESERVE の有効化 (Enable SCSI Reserve)]ホストプロパティは、各メディアサーバーにこのような保護を構成します。

p.126 の「[メディア \(Media\) プロパティ](#)」を参照してください。

NetBackup のドライブ予約について詳しくは、『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』を参照してください。

ドライブパスのオプション

次の表に、ドライブパスを追加するためのオプションを示します。

表 8-6 ドライブパスの追加オプション

オプション	説明
ホスト名 (Host name) (Windows) デバイスホスト (Device host) (UNIX)	ドライブのデバイスホストを指定します。
ホストパスの有効化 (Enable host path)	パスを有効にして、NetBackup でバックアップおよびリストアにこのパスを使用できるように指定します。
NDMP ホスト (NDMP host)	デバイスの NDMP ホストを指定します (NetBackup 環境に NDMP ホストが構成されている場合)。 NDMP ドライブについて詳しくは、『 NetBackup for NDMP 管理者ガイド 』を参照してください。

オプション	説明
SCSI RESERVE 設定を上書き (Override SCSI Reserve settings)	ドライブパスの SCSI RESERVE の上書き設定を指定します。 ■ [サーバーのデフォルト (Server Default)]。メディアサーバーに構成されている SCSI RESERVE の保護設定を使用します。メディアサーバーの既定で保護設定が行われていない場合、他の HBA がコマンドを送信できるため、テープドライブへのデータが損失する可能性があります。 ■ [SPC-2 SCSI RESERVE]。このオプションを使用すると、予約と解放の管理方法に準拠した SCSI RESERVE/RELEASE の保護が、SCSI デバイスに提供されます。この方法は、SCSI Primary Commands - 2 (SPC-2) 規格で定義されています。 ■ [SCSI Persistent RESERVE]。このオプションを使用すると、SCSI Primary Commands - 3 (SPC-3) 規格に準拠した SCSI Persistent RESERVE IN/OUT の保護が、SCSI デバイスに提供されます。 グローバルな SCSI RESERVE のプロパティは[メディア (Media)]ホストプロパティで構成されます。 p.126 の「[メディア (Media)]プロパティ」を参照してください。
パス (Path)	UNIX ホストの場合。 指定されているホスト上の文字型の非巻き戻しデバイスファイルのパスを指定します。 ホスト上の既存のデバイスを、入力または参照して 1 つ選択します。[参照 (Browse)]ボタンは[このパスをネットワーク接続ストレージデバイス用に使用する (This path is for a Network Attached Storage Device)]オプションが選択されている場合は使用できません。 p.454 の「UNIX の非巻き戻しデバイスファイルについて」を参照してください。 デバイスファイルは、UNIX ホスト上の /dev ディレクトリに存在します。エントリが存在しない場合は、『NetBackup デバイス構成ガイド』でエントリの詳しい作成方法について参照してください。
ポート、バス、ターゲットおよび LUN	Windows ホストの場合。 ホスト上の既存のデバイスを、参照して 1 つ選択します。デバイスを選択すると、ポート、バス、ターゲットと LUN が自動入力されます。[参照 (Browse)]ボタンは[このパスをネットワーク接続ストレージデバイス用に使用する (This path is for a Network Attached Storage Device)]オプションが選択されている場合は使用できません。 デバイスの SCSI 座標を指定するには、ポート、バス、ターゲットおよび LUN を入力します。 Windows システム上のデバイスの属性は、NetBackup の操作中には変更できません。
このパスをネットワーク接続ストレージデバイス用に使用する (This path is for a Network Attached Storage Device)	パスがネットワーク接続ストレージ (NAS) デバイスであることを指定します。

UNIX の非巻き戻しデバイスファイルについて

通常、巻き戻しデバイスファイルとクローズ時非巻き戻しデバイスファイルの両方が利用可能ですが、**NetBackup** では、非巻き戻しデバイスファイルだけが必要です。非巻き戻しデバイスにクローズ操作を行うと、現在の位置のままになります。**UNIX** の一部のバージョンでは、デバイスファイル名の先頭または末尾に、**n** という文字が付く場合があります。

デバイスファイルは、**UNIX** ホスト上の `/dev` ディレクトリに存在します。エントリが存在しない場合は作成する必要があります。

詳しくは、『[NetBackup デバイス構成ガイド](#)』を参照してください。

NetBackup 環境への共有テープドライブの追加

共有ドライブを追加、構成、および更新する場合は、[ドライブおよびロボットの構成 (Configure drives and robots)] ウィザードを使用することをお勧めします。このウィザードは、**Shared Storage Option** 構成に共有ドライブを追加する最も簡単な方法です。

Shared Storage Option について詳しくは、『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』を参照してください。

Windows ホストのテープドライブと SCSI アドレスの相関

テープドライブでデバイスのシリアル化がサポートされていない場合は、物理ドライブに一致する論理デバイス名または **SCSI** アドレスを特定することが必要となる場合があります。テープドライブを手動で追加した場合にも、これを行うことが必要な場合があります。

Windows ホストのテープドライブと SCSI アドレスを関連付ける方法

- 1 ドライブの **SCSI** ターゲットを書き留めます。
- 2 ロボットのインターフェースパネルを使用して、**SCSI** ターゲットをドライブアドレスに関連付けます。または、テープドライブの後部パネルにあるインジケータを確認します。
- 3 ロボットのラベルを確認して、物理ドライブアドレス (ドライブ番号など) を判断します。
- 4 **NetBackup** でロボットを構成し、ドライブを追加します。

ドライブを追加する場合、各 **SCSI** 座標セットに正しいドライブアドレスを割り当てていることを確認します。

必要に応じて、適切な **NetBackup** のロボットテストユーティリティを使用して構成を検証します。

ロボットテストユーティリティについて詳しくは、『[NetBackup トラブルシューティングガイド](#)』を参照してください。

Windows のデバイス相関を検証する方法

- 1 NetBackup Device Manager (ltid) を停止します。
- 2 ltid を再起動することによって、自動ボリウム認識プロセス (avrd) を起動します。ltid を停止して再起動し、現在のデバイスの構成がアクティブになることを確認します。

ロボットがこのホストのローカル以外で制御されている場合、リモートロボット制御デーモンも起動します。
- 3 ロボットのテストユーティリティを使用して、ドライブ上にテープをマウントします。
- 4 NetBackup デバイスマニターを使用して、適切なロボットドライブに対してテープがマウントされていることを検証します。

この例は、Windows ホスト専用です。

TLD ロボットに次の SCSI アドレスの 3 つのドライブが含まれるとします。

ドライブ 1	5,0,0,0
ドライブ 2	5,0,1,0
ドライブ 3	5,0,2,0

Windows のデバイス相関の例

またドライブ 1 にテープがマウントされるように要求したと想定します。

ドライブの SCSI 座標が正しく構成されている場合、管理コンソールのデバイスマニターはテープがドライブ 1 にマウントされていることを示します。

デバイスマニターに、テープが別のドライブにマウントされていると示された場合は、そのドライブの SCSI 座標が正しく構成されていません。たとえば、デバイスマニターに、そのテープがドライブ 2 にマウントされていると示された場合は、ドライブ 1 の SCSI 座標が正しくありません。ドライブ 1 の SCSI 座標 (5,0,0,0) を、ドライブ 2 の正しい SCSI 座標 (5,0,1,0) に置き換えます。この場合、ドライブ 2 の SCSI 座標も正しくないことがわかります。これは、構成中に SCSI 座標を取り違えた可能性があります。

ロボットテストユーティリティを使用して、ドライブ 1 からテープをアンロードし、マウント解除します。各ドライブについてテストを繰り返します。

テープがマウントされるドライブへのデータパスがロボット制御ホストにない場合は、ドライブをアンロードする場合があります。アンロードするには、別のホストでコマンドを使うか、ドライブの前面パネルを使います。

UNIX ホストでのテープデバイスとデバイスファイルの関連付け

テープドライブでデバイスのシリアル化がサポートされていない場合は、物理ドライブに一致するデバイスファイルまたは **SCSI** アドレスを特定することが必要となる場合があります。テープドライブを手動で追加した場合にも、これを行うことが必要な場合があります。

各ドライブにデバイスファイルを作成する場合、デバイスファイルを物理ドライブに関連付けます。

UNIX でテープデバイスとデバイスファイルに関連付ける方法

- 1 各ドライブの、ロボットライブラリ内での物理的な場所を特定します。場所は、通常、ドライブへのコネクタまたは各ベンダーが提供するマニュアルに示されています。
- 2 ドライブを、ホストの **SCSI** アダプタへ物理的に接続します。
- 3 各ドライブを接続したアダプタおよび **SCSI** アドレスをメモに記録します。
- 4 ドライブとアダプタの **SCSI** アドレスを使用して、各ドライブにデバイスファイルを作成します。

前述の手順のメモを使用して、デバイスファイルを追加し、デバイスファイルと物理的なドライブ場所の関連付けを完了します。

- 5 **NetBackup** でロボットを構成し、ドライブを追加します。

ドライブを追加する場合、各デバイスのパスに正しいドライブアドレス (ロボットのドライブ番号など) を割り当てていることを確認します。

必要に応じて、適切な **NetBackup** のロボットテストユーティリティを使用して構成を検証します。

ロボットテストユーティリティについて詳しくは、『[NetBackup トラブルシューティングガイド](#)』を参照してください。

UNIX のデバイス相関を検証する方法

- 1 **NetBackup Device** デーモン (`ltid`) を停止します。
- 2 `ltid` を起動することによって、自動ボリューム認識デーモン (`avrd`) を起動します。`ltid` を停止して再起動し、現在のデバイス構成がアクティブになることを確認します。

ロボットがこのホストのローカル以外で制御されている場合、リモートロボット制御デーモンも起動します。
- 3 ロボットのテストユーティリティを使用して、ドライブ上にテープをマウントします。
- 4 **NetBackup** 管理コンソールのデバイスモニターを使用して、適切なロボットドライブに対してテープがマウントされていることを検証します。

UNIX のデバイス関連の例

UNIX のみ。

TLD ロボットに 3 つのドライブが含まれ、オペレーティングシステムに次のデバイスパスが含まれるとします。

ドライブ 1 /dev/rmt/0cbn

ドライブ 2 /dev/rmt/1cbn

ドライブ 3 /dev/rmt/3cbn

またドライブ 1 にテープがマウントされるように要求したと想定します。

ドライブのデバイスパスが正しく構成されていれば、デバイスモニターにテープがドライブ 1 にマウントされていると示されます。

デバイスモニターに、テープが別のドライブにマウントされていると示された場合は、そのドライブのデバイスパスが正しく構成されていません。たとえば、デバイスモニターに、そのテープがドライブ 2 にマウントされていると示された場合は、ドライブ 1 のデバイスパスが正しくありません。ドライブ 2 の正しいデバイスパス (/dev/rmt/0cbn) でドライブ 1 のデバイスパス (/dev/rmt/1cbn) を置き換えます。ドライブ 2 のデバイスパスも正しくないことがわかります。これは、構成中にデバイスパスを取り違えた可能性があります。

ロボットテストユーティリティを使用して、ドライブ 1 からテープをアンロードし、マウント解除します。各ドライブについてテストを繰り返します。

テープがマウントされているドライブまでのパスが、ロボットを直接制御するホスト上に存在しない場合、追加の操作が必要になります。その場合、他のホストまたはドライブのフロントパネルからコマンドを実行して、ドライブをアンロードする必要がある場合があります。

テープドライブの管理

テープドライブを管理する各種のタスクを実行できます。

テープドライブを管理するには、NetBackup Web UI を開きます。次に、左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。

p.445 の「[手動での NetBackup へのテープドライブの追加](#)」を参照してください。

p.458 の「[ドライブコメントの変更](#)」を参照してください。

p.458 の「[停止したドライブについて](#)」を参照してください。

p.459 の「[ドライブの操作モードの変更](#)」を参照してください。

p.459 の「[テープドライブパスの変更](#)」を参照してください。

- p.461 の「[ドライブパスの操作モードの変更](#)」を参照してください。
- p.462 の「[テープドライブのプロパティの変更](#)」を参照してください。
- p.462 の「[テープドライブの共有ドライブへの変更](#)」を参照してください。
- p.463 の「[デバイスモニターからのテープドライブのクリーニング](#)」を参照してください。
- p.464 の「[ドライブの削除](#)」を参照してください。
- p.464 の「[ドライブのリセット](#)」を参照してください。
- p.465 の「[ドライブのマウント時間のリセット](#)」を参照してください。
- p.467 の「[テープドライブの診断テストの実行](#)」を参照してください。
- p.465 の「[ドライブをクリーニングする間隔の設定](#)」を参照してください。
- p.466 の「[ドライブの詳細の表示](#)」を参照してください。

ドライブコメントの変更

ドライブと関連付けられているコメントを変更できます。

ドライブコメントを変更する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に[デバイスモニター (Device monitor)]タブを選択します。
- 3 ドライブを選択します。
- 4 [処理 (Actions)]、[ドライブコメントの変更 (Change drive comment)]の順に選択します。
- 5 コメントを追加するか、現在のドライブコメントを変更します。
p.1096 の「[NetBackup 命名規則](#)」を参照してください。
- 6 [保存 (Save)]をクリックします。

停止したドライブについて

NetBackup は、時間帯内にしきい値を超える読み込みまたは書き込みエラーが発生した場合に、自動的にドライブを停止します。デフォルトのドライブエラーのしきい値は 2 です。つまり、デフォルトの時間帯 (12 時間) 以内に 3 回目のドライブエラーが発生すると、NetBackup によってドライブは停止されます。

書き込みが失敗する一般的な原因には、書き込みヘッドが汚れていたり、メディアが古くなっていることなどがあります。これらの操作の理由は、NetBackup のエラーカタログに記録されます ([メディアのログ (Media Logs)]レポートまたは[すべてのログエントリ (All Log Entries)]レポートで参照できます)。デバイスが NetBackup によって停止された場合、システムログに記録されます。

-drive_error_threshold と -time_window オプションとともに **NetBackup** の nbermmcmd コマンドを併用して、デフォルト値を変更できます。

nbermmcmd について詳しくは、『**NetBackup コマンドリファレンスガイド**』を参照してください。

p.459 の「**ドライブの操作モードの変更**」を参照してください。

ドライブの操作モードの変更

通常、ドライブの操作モードを変更する必要はありません。ドライブを追加するとき、**NetBackup** は自動ボリューム認識 (AVR) モードでドライブの状態を起動に設定します。その他の操作モードの設定は、特別な目的のために使用します。

ドライブの操作モードは[デバイスモニター (Device monitor)]タブで表示、変更できます。

ドライブのモードを変更する方法

- 1 **NetBackup Web UI** を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。[デバイスモニター (Device monitor)]タブをクリックします。
- 3 1 台または複数のドライブを選択します。
- 4 ドライブに適用する操作モードを選択します。たとえば、ドライブの状態を[停止 (Down)]に変更するには、[ドライブの停止 (Down drive)]を選択します。
[オペレータの制御によるドライブの起動 (Up Drive, Operator Control)]は、スタンバイドライブだけに適用されることに注意してください。
- 5 ドライブが複数のデバイスパスで構成されるか、共有ドライブ (Shared Storage Option) である場合、ドライブへのすべてのデバイスパスのリストが含まれる画面が表示されます。変更対象のパスを選択します。

テープドライブパスの変更

ドライブパスを変更するには、次の手順を実行します。

p.461 の「**ドライブパスの操作モードの変更**」を参照してください。

ドライブパスを変更する方法

- 1 **NetBackup 管理コンソール**で、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]、[デバイス (Devices)]、[ドライブ (Drives)]の順に展開します。変更するドライブをダブルクリックします。
- 2 [テープドライブの変更 (Change Tape Drive)]ダイアログボックスで、[ホストおよびパスの情報 (Host and Path information)]のリストに含まれるドライブのパスを選択します。[Change]をクリックします。

- 3 [パスの変更 (Change Path)]ダイアログボックスで、ドライブパスのプロパティを構成します。
- 変更可能なプロパティは、ドライブ形式、サーバープラットフォームまたは NetBackup サーバー形式によって異なります。
- p.452 の「ドライブパスの SCSI RESERVE について」を参照してください。
- p.452 の「ドライブパスのオプション」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックして、変更を保存します。

ドライブパスのオプション

次の表に、ドライブパスを追加するためのオプションを示します。

表 8-7 ドライブパスの追加オプション

オプション	説明
ホスト名 (Host name) (Windows) デバイスホスト (Device host) (UNIX)	ドライブのデバイスホストを指定します。
ホストパスの有効化 (Enable host path)	パスを有効にして、NetBackup でバックアップおよびリストアにこのパスを使用できるように指定します。
NDMP ホスト (NDMP host)	デバイスの NDMP ホストを指定します (NetBackup 環境に NDMP ホストが構成されている場合)。NDMP ドライブについて詳しくは、『NetBackup for NDMP 管理者ガイド』を参照してください。
SCSI RESERVE 設定を上書き (Override SCSI Reserve settings)	ドライブパスの SCSI RESERVE の上書き設定を指定します。 [サーバーのデフォルト (Server Default)]。メディアサーバーに構成されている SCSI RESERVE の保護設定を使用します。メディアサーバーの既定で保護設定が行われていない場合、他の HBA がコマンドを送信できるため、テープドライブへのデータが損失する可能性があります。 [SPC-2 SCSI RESERVE]。このオプションを使用すると、予約と解放の管理方法に準拠した SCSI RESERVE/RELEASE の保護が、SCSI デバイスに提供されます。この方法は、SCSI Primary Commands - 2 (SPC-2) 規格で定義されています。 [SCSI Persistent RESERVE]。このオプションを使用すると、SCSI Primary Commands - 3 (SPC-3) 規格に準拠した SCSI Persistent RESERVE IN/OUT の保護が、SCSI デバイスに提供されます。 グローバルな SCSI RESERVE のプロパティは[メディア (Media)]ホストプロパティで構成されます。 p.126 の「[メディア (Media)]プロパティ」を参照してください。

オプション	説明
	UNIX ホストの場合。 指定されているホスト上の文字型の非巻き戻しデバイスファイルのパスを指定します。 ホスト上の既存のデバイスを、入力または参照して 1 つ選択します。[参照 (Browse)]ボタンは[このパスをネットワーク接続ストレージデバイス用に使用する (This path is for a Network Attached Storage Device)]オプションが選択されている場合は使用できません。 p.454 の「UNIX の非巻き戻しデバイスファイルについて」を参照してください。 デバイスファイルは、UNIX ホスト上の /dev ディレクトリに存在します。エントリが存在しない場合は、『NetBackup デバイス構成ガイド』でエントリの詳しい作成方法について参照してください。
ポート、バス、ターゲットおよび LUN	Windows ホストの場合。 ホスト上の既存のデバイスを、参照して 1 つ選択します。デバイスを選択すると、ポート、バス、ターゲットと LUN が自動入力されます。[参照 (Browse)]ボタンは[このパスをネットワーク接続ストレージデバイス用に使用する (This path is for a Network Attached Storage Device)]オプションが選択されている場合は使用できません。 デバイスの SCSI 座標を指定するには、ポート、バス、ターゲットおよび LUN を入力します。 Windows システム上のデバイスの属性は、NetBackup の操作中には変更できません。
このパスをネットワーク接続ストレージデバイス用に使用する (This path is for a Network Attached Storage Device)	パスがネットワーク接続ストレージ (NAS) デバイス用であることを指定します。

ドライブパスの操作モードの変更

デバイスモニターには、次のようなドライブのパス情報が表示されます。

- ドライブに複数の (冗長な) パスが構成されている場合
- 共有ドライブ (Shared Storage Option) として構成されたドライブが存在する場合

ドライブパスの操作モードを変更する方法

- 1 Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。[デバイスモニター (Device monitor)]タブをクリックします。
- 3 ドライブ名をクリックすると、ドライブのプロパティが表示されます。次に、[パス (Paths)]タブをクリックします。
- 4 1 つまたは複数のパスを選択します。
- 5 [処理 (Actions)]をクリックし、パスの処理を行う次のコマンドを選択します。

- パスの起動 (Up path)
- パスの停止 (Down path)
- パスのリセット (Reset path)

テープドライブのプロパティの変更

ドライブの設定情報を変更するために次の手順を使います。

ドライブのプロパティを変更する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[デバイス (Devices)]>[ドライブ (Drives)]を展開します。
- 2 詳細ペインで、変更するドライブを選択します。
- 3 [編集 (Edit)]、[変更 (Change)]の順に選択します。
- 4 ドライブのプロパティを変更します。

プロパティは、ドライブ形式およびホストのサーバー形式によって異なります。

p.447 の「[テープドライブの構成オプション](#)」を参照してください。

- 5 デバイスの変更が完了したら、[はい (Yes)]を選択して Device Manager または Device デーモンを再起動します。

他のデバイスの変更を行う場合は、[いいえ (No)]をクリックします。最終的な変更を行った後、Device Manager または Device デーモンを再起動できます。

Device Manager または Device デーモンを再起動すると、実行中のすべてのバックアップ、アーカイブまたはリストアも停止する場合があります。

ドライブの初期状態は起動状態であるため、device デーモンを再起動するとすぐに利用可能になります。

- 6 プロパティを変更したら、[OK]をクリックします。

テープドライブの共有ドライブへの変更

現在構成されているドライブにパスを追加して、ドライブを共有ドライブに変更します。

共有ドライブを構成して使用するには、プライマリサーバーおよびメディアサーバーごとに Shared Storage Option ライセンスが必要です。

ドライブを共有ドライブに変更する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[デバイス (Devices)]を展開します。
- 2 ツリーペインで、[ドライブ (Drives)]を選択します。
- 3 [ドライブ (Drives)]ペインで、変更するドライブを選択します。

- 4 [編集 (Edit)]>[変更 (Change)]をクリックします。
- 5 [追加 (Add)]をクリックします。
- 6 ドライブを共有するホストおよびパスのプロパティを構成します。

デバイスモニターからのテープドライブのクリーニング

NetBackup にドライブを追加するとき、間隔に基づく自動クリーニング間隔を構成できます。

また、クリーニングの間隔またはドライブの累積マウント時間に関係なく、オペレータによるクリーニングを、ドライブに対して実行することもできます。ただし、適切なクリーニングメディアを NetBackup に追加する必要があります。

ドライブをクリーニングした後、マウント時間をリセットします。

p.465 の「[ドライブのマウント時間のリセット](#)」を参照してください。

ドライブクリーニング機能は、アクティビティモニターからも実行できます。

p.1072 の「[アクティビティモニターからのテープドライブのクリーニング](#)」を参照してください。

テープドライブのクリーニングを実行する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。[デバイスモニター (Device monitor)]タブを選択します。
- 3 クリーニングを実行するドライブを選択します。
- 4 [処理 (Actions)]、[ドライブクリーニング (Drive cleaning)]、[今すぐクリーニング (Clean now)]の順に選択します。NetBackup はクリーニングの間隔や累積マウント時間に関係なくドライブのクリーニングを開始します。

[今すぐクリーニング (Clean now)]オプションを選択すると、マウント時間は 0 (ゼロ) にリセットされます。クリーニングの間隔の値は変更されません。ドライブがスタンドアロンドライブで、クリーニングテープが挿入されている場合は、NetBackup からマウント要求が発行されます。
- 5 共有ドライブ (Shared Storage Option) の場合は、次の操作を実行します。

ドライブを共有するホストのリストで、機能が適用されるホストを 1 つだけ選択します。
- 6 [今すぐクリーニング (Clean now)]を選択します。

[今すぐクリーニング (Clean now)]機能の完了には数分間かかる場合があるため、クリーニング情報がすぐには更新されないことがあります。

ドライブの削除

メディアサーバーが動作中のときにドライブを削除するには次の手順を使います。

メディアサーバーが停止して、またはホストが壊れてリカバリできない場合、異なる手順でドライブを削除できます。

p.404 の「[メディアサーバーからのすべてのデバイスの削除](#)」を参照してください。

ドライブを削除する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。[デバイスモニター (Device monitor)]タブを選択します。
- 3 必要なドライブを選択します。
- 4 [削除 (Delete)]を選択します。

注意: ドライブの削除が Web UI に反映されるまでには数分かかる場合があります。
Media Manager Device デーモンの再起動を促すメッセージが表示されます。

ドライブのリセット

ドライブをリセットすると、ドライブの状態が変更されます。

通常は、ドライブの状態が不明な場合にドライブをリセットします。このような状態は、**NetBackup** 以外のアプリケーションによってドライブが使用された場合に発生します。ドライブをリセットすると、ドライブは **NetBackup** で使用する前の認識された状態に戻されます。ドライブが **SCSI RESERVE** 状態の場合、その予約を所有しているホストからリセット操作を実行することで、**SCSI RESERVE** 状態を解除できることがあります。

ドライブが **NetBackup** によって使用中の場合、リセットの処理は失敗します。ドライブが **NetBackup** によって使用中でなければ、**NetBackup** はドライブをアンロードし、実行時の属性をデフォルト値に設定しようとします。

ドライブのリセットでは、**SCSI** バスまたは **SCSI** デバイスのリセットは実行されないことに注意してください。

ドライブをリセットする方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。[デバイスモニター (Device monitor)]タブを選択します。
- 3 リセットするドライブを見つけてみます。次に、[処理 (Actions)]、[ドライブのリセット (Reset drive)]の順に選択します。
- 4 ドライブが **NetBackup** によって使用中でリセットできない場合、ドライブを解放するために **NetBackup Job Manager (nbjm)** を再起動します。

- 5 ドライブを制御しているジョブ (つまり、ドライブの書き込みまたは読み込みを実行しているジョブ) を特定します。
左側で、[アクティビティモニター (Activity monitor)]を選択します。次に、[ジョブ (Jobs)]タブでジョブを取り消します。
- 6 [アクティビティモニター (Activity monitor)]で、NetBackup Job Manager を再起動して、進行中のすべての NetBackup のジョブを取り消します。

ドライブのマウント時間のリセット

ドライブのマウント時間をリセットできます。手動クリーニングを実行した後は、マウント時間を 0 (ゼロ) にリセットしてください。

マウント時間をリセットする方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。[デバイスモニター (Device monitor)]タブをクリックします。
- 3 ドライブを選択します。
- 4 [処理 (Actions)]、[ドライブクリーニング (Drive cleaning)]、[マウント時間のリセット (Reset mount time)]の順に選択します。選択したドライブのマウント時間が 0 (ゼロ) に設定されます。
- 5 共有ドライブ (Shared Storage Option) を使用する場合は、次の操作を実行します。
ドライブを共有するホストのリストで、機能が適用されるホストを 1 つだけ選択します。
- 6 [マウント時間のリセット (Reset mount time)]をクリックします。

ドライブをクリーニングする間隔の設定

NetBackup にドライブを追加するとき、間隔に基づく自動クリーニング間隔を構成します。[デバイスモニター (Device monitor)]から、ドライブを追加したときに構成したクリーニングの間隔を変更できます。

クリーニングの間隔を設定する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。[デバイスモニター (Device monitor)]タブをクリックします。
- 3 ドライブを選択します。
- 4 [処理 (Actions)]、[ドライブクリーニング (Drive cleaning)]、[クリーニングの間隔の設定 (Set cleaning frequency)]の順に選択します。

- 5 ドライブクリーニング間のマウント時間数を入力します。

間隔に基づくクリーニングをサポートしていないドライブの場合、[クリーニング間隔の設定 (Set cleaning frequency)] オプションは利用できません。この機能は、共有ドライブに使用することはできません。

ドライブのクリーニング間隔は、[ドライブ (Drive)] プロパティに表示されます。
- 6 [保存 (Save)] をクリックします。

ドライブの詳細の表示

ドライブクリーニング、ドライブのプロパティ、ドライブの状態、ホスト、ロボットライブラリの情報など、ドライブ (または共有ドライブ) の詳細な情報を取得できます。

ドライブの詳細を表示する方法

- 1 Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)] の順に選択します。[デバイスモニター (Device monitor)] タブを選択します。
- 3 このタブには多くのドライブの詳細が表示されます。詳しくは、ドライブ名のリンクを選択します。

共有ドライブを使用している場合、ドライブの[制御 (Control)] モードおよびドライブを共有している各ホストの[ドライブインデックス (Drive index)] を表示できます。ドライブを共有するホストのリストを表示するには、[共有ドライブホスト (Shared drive hosts)] タブをクリックします。

デバイスの診断の実行

診断機能を使用すると、ドライブおよびロボットの診断テストを実行および管理できます。診断は一定の順序で実施され、ハードウェアデバイスの機能が検証されます。これらのテストは、ドライブまたはロボットの問題のトラブルシューティングを行う場合に有効です。

ロボットの診断テストの実行

TLD ロボットライブラリの診断テストは、次の手順に従って実行します。

テストを行うライブラリが、NetBackup で使用するために適切に構成されていることを確認します。テストには、既存の NetBackup ロボット制御デーモンまたはプロセスが使用されます。

メモ: NetBackup API 接続されているロボットテープライブラリおよび SCSI 接続されている他の形式のライブラリの診断テストはサポートされていません。

ロボットの診断テストを実行する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]、[デバイス (Devices)] の順に展開します。
- 2 [処理 (Actions)] メニューで [ロボットの診断 (Robot Diagnostics)] を選択します。
- 3 [ロボットの診断 (Robot Diagnostics)] ダイアログボックスで、テストを行うロボットのデバイスホストになっているメディアサーバーを選択します。
- 4 [ロボット名 (Robot Name)] フィールドで、診断するロボットを選択します。
- 5 [開始 (Start)] をクリックして診断テストを開始します。

[結果 (Results)] ウィンドウにテストの各手順の結果が表示されます。

[結果 (Results)] ウィンドウの [状態 (State)] 列に待機中を示す [待機しています (Waiting)] が表示されている場合、オペレータの操作が必要です。たとえば、テストを続行する前に、新しいテープをドライブにロードするように求められる場合があります。

- 6 オペレータの介入が必要になったら、[結果 (Results)] ウィンドウのテスト手順を選択し、必要な処理を特定するために [詳細 (Details)] をクリックします。要求された操作タスクを完了し、テストを再開するために [テスト手順の詳細 (Test Details)] ダイアログボックスの [続行 (Continue)] をクリックします。

テストを停止し、デバイスを変更する方法

- 1 [停止 (Stop)] をクリックします。

テストは、必要なクリーンアップ作業を実行した後に終了し、テスト実行が停止したことを反映するためにテストレコードを更新します。
- 2 [デバイスホスト (Device Host)] と [ロボット名 (Robot Name)] フィールドで、テストしたいロボットとホストを選択します。
- 3 [開始 (Start)] をクリックして診断テストを再開します。

テープドライブの診断テストの実行

NetBackup の診断機能では、診断テストを実行し、管理することができます。診断は一定の順序で実施され、ハードウェアデバイスの機能が検証されます。これらのテストは、ドライブの問題のトラブルシューティングを行う場合に有効です。

テープドライブの診断テストを実行する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)] > [デバイス (Devices)] を展開します。
- 2 [処理 (Actions)] メニューで [ドライブの診断 (Drive Diagnostics)] を選択します。
- 3 [ドライブの診断 (Drive Diagnostics)] ダイアログボックスの [デバイスホスト (Device Host)] ボックスで、テストを行うドライブが存在するメディアサーバーを選択します。

- 4 [ドライブ名 (Drive Name)]ボックスでドライブを選択します。
- 5 [開始 (Start)]をクリックして診断テストを開始します。
ロボットドライブの場合、テストメディアは自動的にロードされます。
スタンドアロンドライブの場合、[結果 (Results)]ウィンドウの[手順情報 (Step Information)]列に表示されている事前にラベル付けされたテストテープを挿入します。
[結果 (Results)]ウィンドウにテストの各手順の結果が表示されます。
- 6 オペレータの操作が必要な場合は、[結果 (Results)]ウィンドウの[状態 (State)]列に待機中を示す[待機しています (Waiting)]が表示されます。たとえば、テストを続行する前に、新しいテープをドライブにロードする必要がある場合があります。
操作を完了したら、次に[続行 (Continue)]をクリックします。
[結果 (Results)]ウィンドウのテスト手順を選択し、必要な処理を特定するために[詳細 (Details)]をクリックします。要求された操作タスクを完了し、テストを再開するために[テスト手順の詳細 (Test Details)]ダイアログボックスの[続行 (Continue)]をクリックします。

テストを停止し、デバイスを変更する方法

- 1 [停止 (Stop)]をクリックします。
テストは、必要なクリーンアップ作業を実行した後に終了し、テスト実行が停止したことを反映するためにテストレコードを更新します。
- 2 [デバイスホスト (Device Host)]と[ドライブ (Drive)]フィールドで、テストしたいドライブとホストを選択します。
- 3 [開始 (Start)]をクリックして診断テストを再開します。

オペレータの操作が必要な診断テスト手順の管理

[結果 (Results)]の[状態 (Status)]列に待機中を示す[待機しています (Waiting)]が表示されている場合、オペレータの操作が必要です。たとえば、テストを続行する前に、新しいテープをドライブにロードするように求められる場合があります。

診断手順を管理する方法

- 1 要求された操作タスクを完了します。
- 2 テストを再開するために[続行 (Continue)]をクリックします。
オペレータの操作が必要なテスト手順で[詳細 (Details)]をクリックした場合、[テスト手順の詳細 (Test Details)]ダイアログボックスの[続行 (Continue)]をクリックできます。

診断テスト手順の詳細な情報の取得

テスト時にテスト手順の情報をいつでも取得できます。

診断テスト手順の詳細な情報を取得する方法

- 1 [結果 (Results)] でテスト手順を選択します。
- 2 [詳細 (Details)] をクリックします。手順の情報を示すダイアログボックスが表示されます。

情報には特定の手順によって実行されるチェックの簡単な説明と、手動操作が必要な手順に関する指示が含まれています。たとえば、診断セッションを続行する前に、新しいテープをテープドライブにロードするように求められる場合があります。

- 3 [閉じる (Close)] をクリックして、[デバイスの診断 (Device Diagnostics)] ダイアログボックスに戻ります。

デバイス構成の検証

[ドライブおよびロボットの構成 (Configure drives and robots)] ウィザードを実行することによってデバイス構成を検証します。ただし、デバイス構成の詳細を検証するために、テープのマウントを試行することが必要となる場合があります。テープをマウントしてその構成を検証するために **NetBackup** の `robtest` ユーティリティを使います。

ロボットとドライブをウィザードの使用によって検証する方法

- 1 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。
- 2 右上で[処理 (Actions)]、[ストレージデバイスの構成 (Configure storage devices)]の順に選択し、ウィザードの指示に従います。

パスの自動修正について

デバイスを変更したかどうかを **NetBackup** のパスの自動修正によって認識されます。これは新しいデバイスのシリアル番号は古いデバイスと異なるためです。**NetBackup** はデバイスの構成を自動的に更新します。

NetBackup は次の場合にデバイスの変更を認識します。

- **NetBackup Device Manager** (`ltid`) によってパスの自動修正が実行されるとき。
p.473 の「[NetBackup Device Manager について](#)」を参照してください。
- **Windows Plug-n-Play** 機能によってシリアル番号のチェックが実行されるとき。

デフォルトでは、**Windows** と **Linux** システムはパスの自動修正が構成されています。他のオペレーティングシステムでは、この機能を有効にする必要があります。

p.470 の「[パスの自動修正の有効化](#)」を参照してください。

状況によっては、**NetBackup** は少数のテープドライブとロボットライブラリの正しいシリアル番号を判断できない場合があります。たとえば、**NetBackup** はシリアル化されたデバイスをシリアル化されていないものとして構成したり、間違ったシリアル番号でデバイスを構成することがあります。その場合、デバイスは使用できなくなる (テープドライブが停止するなど) 可能性があります。

そのような問題を解決するには、次のいずれかの処理を実行します。

- [ドライブおよびロボットの構成 (Configure drives and robots)] ウィザードで新しいデバイスを構成します。
サーバーのオペレーティングシステムは、**NetBackup** で設定する前にデバイスを認識する必要があります。デバイスの構成では、再マッピング、再検出、および (場合によっては) オペレーティングシステムの再起動が必要となる場合があります。
詳しくは、『**NetBackup デバイス構成ガイド**』を参照してください。
- `vm.conf` ファイルの `AUTO_PATH_CORRECTION` オプションを使用して、自動化されたデバイスの検出を無効にします。

パスの自動修正の有効化

NetBackup のデバイスパスの自動修正を有効化できます。これを行うには、次の手順を実行します。

p.469 の「[パスの自動修正について](#)」を参照してください。

パスの自動修正を構成する方法

- 1 テキストエディタを使用して次のファイルを開きます。

Windows の場合:

```
install_path¥Cohesity¥Volmgr¥vm.conf
```

UNIX の場合:

```
/usr/opensv/volmgr/vm.conf
```

- 2 ファイルに次の `AUTO_PATH_CORRECTION` エントリを追加します。

```
AUTO_PATH_CORRECTION = YES
```

これがすでに存在し、**NO** に設定されていたら、**YES** に値を変更します。

- 3 ファイルを保存し、テキストエディタを終了します。

デバイスの交換

デバイスの交換には、次の 2 つの方法があります。

- 1 つのホスト上のデバイスを交換するp.471 の 表 8-8 を参照してください。
- 共有デバイスを交換するp.471 の 表 8-9 を参照してください。

表 8-81 つのホスト上のデバイスを交換する方法

作業	手順の詳細
デバイスがドライブの場合は、ドライブの状態を停止に変更します。	p.459 の「 ドライブの操作モードの変更 」を参照してください。
デバイスを交換します。新しいデバイスに古いデバイスと同じ SCSI ID を指定します。	詳しくは、ベンダーのマニュアルを参照してください。
デバイスがドライブの場合は、ドライブの状態を起動に変更します。	p.459 の「 ドライブの操作モードの変更 」を参照してください。
次のいずれかが該当する場合は、[ドライブおよびロボットの構成 (Configure drives and robots)]ウィザードを使用して、新しいデバイスを構成します。 - 異なるドライブ形式のドライブに交換した。 - シリアル化されたドライブをシリアル化されていないドライブに交換した。	『 NetBackup Web UI 管理者ガイド 』を参照してください。

表 8-9共有デバイスを交換する方法

作業	手順の詳細
デバイスがドライブの場合は、ドライブの状態を停止に変更します。	p.459 の「 ドライブの操作モードの変更 」を参照してください。
デバイスを交換します。新しいデバイスに古いデバイスと同じ SCSI ID を指定します。	詳しくは、ベンダーのマニュアルを参照してください。
新しいハードウェアおよび存在しないハードウェアのリストを生成します。	次のコマンドを実行すると、新しいハードウェアがスキャンされ、新しいハードウェアおよび交換したハードウェアを示すレポートが生成されます。 Windows の場合: <code>install_path¥Cohesity¥Volmgr¥bin¥tpautoconf -report_disc</code> UNIX の場合: <code>/usr/opensv/volmgr/bin/tpautoconf -report_disc</code>

作業	手順の詳細
新しいデバイスを共有しているすべてのサーバーが起動しており、すべての NetBackup サービスが実行中であることを確認します。	NetBackup デーモンの監視方法について詳しくは、『 NetBackup Web UI 管理者ガイド 』を参照してください。
新しいデバイスからシリアル番号を読み込み、 NetBackup データベースを更新します。	デバイスがロボットの場合は、次のコマンドを実行します。 Windows の場合： <pre>install_path¥Cohesity¥Volmgr¥bin¥tpautoconf -replace_robot robot_number -path robot_path</pre> UNIX の場合： <pre>/usr/opensv/volmgr/bin/tpautoconf -replace_robot robot_number -path robot_path</pre> デバイスがドライブの場合は、次のコマンドを実行します。 Windows の場合： <pre>install_path¥Cohesity¥Volmgr¥bin¥tpautoconf -replace_drive drive_name -path path_name</pre> UNIX の場合： <pre>/usr/opensv/volmgr/bin/tpautoconf -replace_drive drive_name -path path_name</pre>
新しいデバイスがシリアル化されていないドライブの場合、そのドライブを共有するすべてのサーバーで、[ドライブおよびロボットの構成 (Configure drives and robots)]を実行します。 新しいデバイスがロボットの場合、ロボット制御ホストであるサーバーで、[ドライブおよびロボットの構成 (Configure drives and robots)]を実行します。	『 NetBackup Web UI 管理者ガイド 』を参照してください。
デバイスがドライブの場合は、ドライブの状態を起動に変更します。	p.459 の「 ドライブの操作モードの変更 」を参照してください。

デバイスのファームウェアの更新

デフォルトでは、デバイスのファームウェアを更新したかどうかは **NetBackup** によって認識されます。

次の表に、デバイスファームウェアを更新する方法の概要を示します。

表 8-10 デバイスのファームウェアを更新する方法

作業	手順の詳細
デバイスがドライブの場合は、ドライブの状態を停止に変更します。	p.459 の「ドライブの操作モードの変更」を参照してください。
ファームウェアを更新します。	詳しくは、ベンダーのマニュアルを参照してください。
デバイスがドライブの場合は、ドライブの状態を起動に変更します。	p.459 の「ドライブの操作モードの変更」を参照してください。

NetBackup Device Manager について

NetBackup Device Manager (ltid) は NetBackup のロボットおよびテープ処理を管理します。Device Manager は、ロボット制御プロセスを介して、ロボット制御されたデバイスでのテープのマウント要求およびマウント解除要求を処理します。NetBackup はストレージデバイスが構成されているホストで ltid を起動します。Device Manager は、必要に応じて、Volume Manager (vmd)、自動ボリューム認識プロセス (avrd)、およびすべてのロボットプロセスを起動します。

NetBackup Web UI で、NetBackup Device Manager は次のように表示されます。

[アクティビティモニター (Activity Monitor)] の場合	ltid として表示されます。
[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)] の場合	[処理 (Actions)] メニューの [Media Manager Device デーモンの停止/再起動 (Stop/Restart media manager device daemon)] メニュー項目。

メモ: Device Manager を停止して再起動すると、実行中のすべてのバックアップ、アーカイブおよびリストアは失敗する可能性があります。

UNIX での NetBackup で制御されているデバイスへの外部アクセスについて

UNIX ホストの NetBackup Device Manager では、ドライブのデバイスファイルの権限を変更することによって、それらのUP状態にあるドライブへのアクセスが制限されます。Device Manager では、起動時に権限は 0600 に変更され、停止時に元の設定に戻されます。また、ドライブの状態がDOWN状態に変更された場合も、権限は元の設定に戻されます。

p.473 の「[NetBackup Device Manager について](#)」を参照してください。

Device Manager が動作中の場合、これらのデバイスファイルの権限を変更しないでください。自動ボリューム認識プロセス (avrd) によって、UP で現在割り当てられていない NetBackup 状態のドライブのメディアが定期的に巻き戻され、データが読み込まれます。

操作の信頼性を確保するため、Device Manager によって制御されている UP 状態のドライブでは、テープおよびドライブの UNIX コマンドを使用しないでください。ユーザーは、これらのドライブで、NetBackup の tpreq および tpunmount コマンドと、drive_mount_notify および drive_unmount_notify スクリプトを使用できます。

詳しくは、『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』の「[NetBackup 通知スクリプト](#)」を参照してください。

Device Manager の停止と再起動

NetBackup Device Manager を停止し、再起動するには次の手順を使います。

p.473 の「[NetBackup Device Manager について](#)」を参照してください。

Device Manager を起動または停止する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)] > [デバイス (Devices)] を展開します。
- 2 [処理 (Actions)] メニューで、[Media Manager Device デーモンの停止/再起動 (Stop/Restart Media Manager Device Daemon)] を選択します。
- 3 [Media Manager device デーモンの停止/再起動 (Stop/Restart Media Manager Device Daemon)] ダイアログボックスで次の操作を行います。

- 1 [デバイスホスト (Device host)] リストで、再起動するメディアサーバーを選択します。
- 2 [処理 (Actions)]: [起動 (Start)]、[停止 (Stop)] または [停止/再起動 (Stop/Restart)] を選択します。
利用可能である処理は Device Manager またはデーモンの状態によって決まります。
- 3 目的の [オプション (Options)]: [スタンドアロンドライブからのメディアの取り出し (Eject media from standalone drive(s))] または [詳細ログの有効化 (Enable verbose logging)] を選択します。
- 4 次の結果に応じて、[適用 (Apply)] または [OK] をクリックします。
 - [適用 (Apply)] をクリックしてもダイアログボックスは閉じないため、複数のデバイスホストに対してデバイスホストと処理を選択できます。
 - [OK] をクリックすると、ダイアログボックスが閉じられます。

テープメディアの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup テープボリュームについて](#)
- [NetBackup ボリュームプールについて](#)
- [NetBackup ボリュームグループについて](#)
- [NetBackup のメディア形式](#)
- [WORM メディアについて](#)
- [ボリュームの追加について](#)
- [メディア名および属性ルールの構成について](#)
- [ボリュームの追加](#)
- [ボリュームのプロパティ](#)
- [メディアの設定ルールについて](#)
- [メディアの設定の構成](#)
- [バーコードについて](#)
- [バーコード規則の構成](#)
- [メディア ID 生成規則の作成について](#)
- [メディア ID 生成規則の構成](#)
- [メディア形式のマッピングルールについて](#)
- [メディア形式のマッピングの構成](#)
- [ボリュームの管理](#)

- ボリュームプールの管理
- ボリュームグループの管理
- メディア共有について
- 無制限のメディア共有の構成
- サーバーグループとのメディア共有の構成

NetBackup テープボリュームについて

テープボリュームはデータストレージテープまたはクリーニングテープです。NetBackup は各ボリュームに属性を割り当て、それらをボリュームを追跡し、管理するために使います。属性には、メディア ID、ロボットホスト、ロボット形式、ロボット番号およびスロット場所が含まれます。

NetBackup は次のように、2 つのボリューム形式を使います。

ロボットボリューム	ロボット内にあるボリューム。 ロボットライブラリは、必要に応じて、ロボットドライブにボリュームを移動したり、ロボットドライブからボリュームを移動したりします。
スタンドアロンボリューム	ロボット内にないドライブに割り当てられたボリューム。 スタンドアロンドライブにボリュームをロードしたり、スタンドアロンドライブからボリュームを取り出したりする場合に、オペレータの操作が必要となります。

NetBackup は、使用方法によって編成されたボリュームに対してボリュームプールを使用します。

p.476 の「[NetBackup ボリュームプールについて](#)」を参照してください。

ボリューム情報は NetBackup データベースに格納されます。

NetBackup ボリュームプールについて

ボリュームプールは使用方法によって一組のボリュームを識別します。ボリュームプールは、権限を所有していないユーザー、グループまたはアプリケーションによるアクセスからボリュームを保護します。NetBackup にメディアを追加するとき、ボリュームプールにメディアを割り当てます (またはプールの割り当てなしで、スタンドアロンボリュームとしてメディアを割り当てます)。

デフォルトでは、NetBackup は次のボリュームプールを作成します。

NetBackup	すべてのバックアップイメージが書き込まれるデフォルトのプールです (特別な指定がある場合を除く)。
DataStore	DataStore で使用。
CatalogBackup	NetBackup カタログバックアップで使用。 カタログバックアップボリュームは NetBackup の特別な形式ではありません。それらは [CatalogBackup] ボリュームプールに割り当てるデータストレージボリュームです。NetBackup カタログバックアップを追加するには、任意のボリューム追加方式を使います。カタログバックアップに使用するボリュームプールにボリュームを割り当てる必要があります。ボリュームを追加した後、NetBackup カタログバックアップウィザードを使用して、カタログバックアップポリシーを構成します。
None	プールに割り当てられないボリュームに適用。

他のボリュームプールを追加することもできます。たとえば、使用している各ストレージアプリケーション用のボリュームプールを追加できます。その後、アプリケーションとともに使用するボリュームを追加するときに、そのボリュームをアプリケーションのボリュームプールに割り当てます。また、ボリュームをプール間で移動することもできます。

また、利用可能なボリュームがボリュームプールに存在しない場合、スクラッチプールを構成すると、NetBackup にそのスクラッチプールからボリュームを転送させることができます。

ボリュームプールの概念は、テープストレージユニットのみに関連し、ディスクストレージユニットには適用されません。

ボリュームプールの名前には、承認済みの文字であればどれでも使用できます。

NetBackup はボリュームプール名に複数の特別な接頭辞を使用します。

ボリュームプールの使用例は、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』にあります。

予約済みのボリュームのプール名の接頭辞について

NetBackup は、特定の目的のためメディアを含むボリュームプールの名前に次の接頭辞を(大文字/小文字の区別がある)予約します。

ENCR	NetBackup がデータを暗号化したボリュームの場合。この名前の接頭辞を使用するボリュームプールのボリュームは、テープドライブの暗号化の対照である必要があります。
------	---

『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

- WENCR NetBackup がデータを暗号化した WORM ボリュームの場合。この名前の接頭辞を使用するボリュームプールのボリュームは、テープドライブの暗号化の対照である必要があります。
- p.718 の「[NetBackup の暗号化オプションについて](#)」を参照してください。
- 『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。
- 『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。
- WORM WORM ボリュームの場合。NetBackup はデータを暗号化しません。
- p.482 の「[WORM メディアを管理するボリュームプールの使用について](#)」を参照してください。

NetBackup は、特別な目的ボリュームプールであるか判断するためにボリュームプール名を確認します。ボリュームプール名が特別な接頭辞の 1 つから始まる場合、NetBackup はそのプールの必要条件に従ってそのプールのメディアを処理します。そうでない場合、NetBackup はそのボリュームプールのメディアに特別な処理を使用しません。

これらのいずれかの目的のためにボリュームプールを作成する場合、大文字を使用してください。読みやすくするために、たとえば、WORM_ または ENCR_ など接頭辞の後でアンダースコア文字を使用することは便利な場合があります。

スクラッチボリュームプールについて

スクラッチプールは NetBackup が他のプールに必要に応じて割り当てることができるメディアを含んでいるオプションのプールです。スクラッチプールを構成すると、スクラッチプールから利用可能なボリュームが存在しないプールへ、NetBackup によってボリュームが移動されます。

1 つのスクラッチプールのみ割り当てることができます。すでにスクラッチプールが存在する場合、追加することはできません。

NetBackup プールまたは DataStore プールをスクラッチボリュームプールに変更することはできません。

スクラッチプールを作成する場合は、次のことに注意してください。

- スクラッチプールに割り当てられているボリュームが存在する場合、それらのボリュームはスクラッチプール内に残ります。
割り当てられていないボリュームの場合と異なり、割り当てられているボリュームは NetBackup によって他のプールへ移動されません。
- ボリュームがスクラッチプールに存在する間は、そのボリュームは NetBackup によって割り当てられません。
たとえば、NetBackup のポリシーまたはスケジュールによってスクラッチプールが指定された場合、それらのボリュームへのすべての要求が拒否されます。

- 期限切れのメディアは、**NetBackup** によってスクラッチボリュームプールに自動的に戻されます (戻されるのは、同じスクラッチプールに含まれていたメディアだけです)。
- **NetBackup** をボリュームプールへのボリュームの割り当てを管理するために使うためには、次を実行します。
 - 必要に応じてボリュームプールを作成します。ただし、そのプールにはボリュームを追加しないでください。
 - スクラッチプールを定義し、これにボリュームすべてを追加します。**NetBackup** は他のプールにボリュームが必要であるときにボリュームを移動します。

p.476 の「**NetBackup** ボリュームプールについて」を参照してください。

p.492 の「メディアの設定ルールについて」を参照してください。

NetBackup ボリュームグループについて

ボリュームグループは物理的に同じ場所に存在するボリュームのセットを識別します。この場所は、ボリュームがあるロボット、スタンドアロン、オフサイト (**NetBackup Vault** オプションを使用している場合) のいずれかです。

NetBackup にメディアを追加するとき、**NetBackup** はそのロボットのボリュームグループにロボットのすべてのボリュームを割り当てます。また、異なるグループにメディアを割り当てることができます。

ボリュームグループは、ボリュームがオフサイトに移動された場合などに、ボリュームの場所を追跡するのに便利です。ボリュームグループにより、各ボリュームの個々のメディア ID ではなく、グループ名を指定して、一連のボリュームに対して操作を実行できます。操作には、ロボットライブラリとスタンドアロンの間の移動や **NetBackup** からの削除などがあります。

ボリュームを物理的に移動する場合は、それを論理的にも移動する必要があります。論理的な移動とは、新しい場所を示すようにボリュームの属性を変更することを意味します。

ボリュームグループの割り当て規則を次に示します。

- 1つのグループ内のすべてのボリュームは、同じメディア形式である必要があります。ただし、同じボリュームグループに、メディア形式と対応するクリーニングメディア形式が存在することは可能です (DLT と DLT_CLN など)。
- ロボットライブラリ内のすべてのボリュームは、1つのボリュームグループに属する必要があります。
グループを指定するか、または **Media Manager** を使用してグループの名前を生成しないかぎり、ロボットライブラリにボリュームを追加することはできません。
- ボリュームグループ名を消去する唯一の方法は、スタンドアロンにボリュームを移動し、ボリュームグループを指定しないことです。
- 複数のボリュームグループで同じ場所を共有できます。

たとえば、1 つのロボットライブラリに複数のボリュームグループのボリュームが存在したり、複数のスタンドアロンボリュームグループが存在することも可能です。

- グループ内のすべてのボリュームは、同じロボットライブラリに存在するか、またはスタンドアロンである必要があります。
つまり、グループがすでに他のロボットライブラリに存在する場合、ロボットライブラリにそのグループ (またはグループの一部) を追加できません。

ボリュームグループの使用方法の例が利用可能です。

ボリュームグループの使用例は、『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』にあります。

NetBackup のメディア形式

NetBackup では、メディア形式を使用して、異なる物理的な特性を持つメディアが区別されます。各メディア形式は特定の物理メディア形式を表すこともできます。

NetBackup のメディア形式は、Media Manager のメディア形式とも呼ばれます。

次の表は NetBackup のメディア形式を記述したものです。

表 9-1 NetBackup のメディア形式

メディア形式	説明
DLT	DLT カートリッジテープ
DLT_CLN	DLT クリーニングテープ
DLT2	DLT カートリッジテープ 2
DLT2_CLN	DLT クリーニングテープ 2
DLT3	DLT カートリッジテープ 3
DLT3_CLN	DLT クリーニングテープ 3
HCART	1/2 インチカートリッジテープ
HCART2	1/2 インチカートリッジテープ 2
HCART3	1/2 インチカートリッジテープ 3
HC_CLN	1/2 インチクリーニングテープ
HC2_CLN	1/2 インチクリーニングテープ 2
HC3_CLN	1/2 インチクリーニングテープ 3

NetBackup が新しいバックアップイメージをメディアに追加する前に、NetBackup は位置の検証が可能な形式でメディアに書き込みます。

メモ: NetBackup のユーザーインターフェースには、そのリリースでサポートされていないメディア形式のための構成オプションが表示される場合があります。これらの形式は以前のリリースでサポートされている可能性があり、NetBackup プライマリサーバーは以前の NetBackup バージョンを実行するホストを管理できます。そのため、そのような形式に関する構成情報をユーザーインターフェースに表示する必要があります。NetBackup のマニュアルにもそのような形式に関する構成情報が記載されている場合があります。どのバージョンの NetBackup でどのメディア形式がサポートされているかを確認するには、『NetBackup Enterprise Server and Server - Hardware and Cloud Storage Compatibility List』を参照してください。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100040093>

NetBackup の代替メディア形式

代替メディア形式は同じライブラリでテープの複数の形式を定義することを可能にします。異なる物理的カートリッジの間で区別するために代替形式を使うことができます。

代替メディア形式の例を次に示します。

- DLT、DLT2、DLT3
- HCART、HCART2、HCART3

たとえば、1 つのロボットに DLT4000 および DLT7000 ドライブが存在している場合、次のメディア形式を指定できます。

- DLT4000 のテープに DLT メディア形式
- DLT7000 のテープに DLT2 メディア形式

この場合、NetBackup では、DLT4000 ドライブで書き込まれたテープは DLT7000 ドライブにロードされず、DLT7000 ドライブで書き込まれたテープは DLT4000 ドライブにロードされません。

ドライブを構成するとき適切なデフォルトのメディア形式を使用してください。(NetBackup でドライブを構成する場合は、各ドライブ形式で使用するデフォルトのメディア形式を指定します。)

ロボットでは、(特定ベンダーのメディア形式の) すべてのボリュームで、NetBackup のメディア形式が同じである必要があります。たとえば、3490E メディアを含む ACS ロボットでは、そのメディアに NetBackup の HCART、HCART2 または HCART3 のいずれかのメディア形式を割り当てることができます。一部のメディアに HCART を割り当て、別のメディアに HCART2 (または HCART3) を割り当ててはできません。

詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』の「メディア形式」を参照してください。

WORM メディアについて

WORM (Write Once Read Many) メディアは、不要な変更から重要なデータを保護したり、法規制を満たすために使用できます。

NetBackup は WORM メディアの QIC/WORM テープ形式を使います。この形式では NetBackup は WORM テープにイメージを追記できます。

「メディア形式」について詳しくは、『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』を参照してください。

WORM メディアでは、テープエラーのリカバリは無効になっています。NetBackup には、ジョブ再開ロジックが備わっており、中断されたジョブ (ファイバーチャネルでの中断など) の再開を試行します。ただし、NetBackup は WORM メディアを使用したジョブは失敗するため、その失敗したジョブが再試行されます。チェックポイントを使用してバックアップを再開することをお勧めします。

bplabel コマンドを実行すると、LTO-3 WORM テープだけがラベル付けされます。このラベルはメディアの使用時に上書きできないため、その他のすべての WORM メディアにラベル付けすることができません。

次は WORM テープの制限事項です。

- WORM メディアでは、サードパーティコピーのバックアップはサポートされていません。
- NetBackup は WORM テープで再開ロジックをサポートしません。NetBackup は WORM メディアを使うジョブに失敗し、失敗したジョブを再試行します。代わりに、チェックポイントと再開が使われた場合、NetBackup は最新のチェックポイントからジョブを再開します。チェックポイントを使用してバックアップを再開することをお勧めします。

NetBackup では、次のように WORM メディアを管理する 2 つの方法が提供されます。

- WORM ボリュームプール名に予約接頭辞を割り当てます。
WORM ボリューム名にピリオド (.) を含めることはできません。
p.482 の「[WORM メディアを管理するボリュームプールの使用について](#)」を参照してください。
- WORM のすべてのドライブに特定のドライブ形式、すべての WORM メディアに特定のメディア形式を割り当てます。
p.484 の「[一意のドライブおよびメディア形式を使用した WORM メディアの管理について](#)」を参照してください。

WORM メディアを管理するボリュームプールの使用について

ボリュームプールを WORM メディア専用にできます。この方法では、WORM 対応テープドライブを使用して、標準メディアおよび WORM メディアのバックアップおよびリストア

を実行できます。**NetBackup** は、プールのボリュームが **WORM** ドライブのためであると示す、予約された 2 つのボリュームプールの接頭辞を次のとおり使用します。

- **WORM** (大文字) は、**WORM** メディアを意味します。
- **WENCR** (大文字) は、**NetBackup** がデータを暗号化する必要がある **WORM** メディアを意味します。

p.477 の「[予約済みのボリュームのプール名の接頭辞について](#)」を参照してください。

メディアでのデータ暗号化について詳しくは、『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。

WORM メディアにボリュームプールを作成する場合は、プール名の最初の文字として予約接頭辞の 1 つを指定してください。**NetBackup** は、予約接頭辞から始まるか判断するためにボリュームプール名を確認します。読みやすくするために、たとえば、**WORM_** など、接頭辞の後でアンダースコア文字を使用することは便利な場合があります。

p.538 の「[ボリュームプールの追加](#)」を参照してください。

p.538 の「[ボリュームプールの編集または削除](#)」を参照してください。

次の場合に注意してください。

- ドライブに存在する **WORM** メディアが **WORM** ボリュームプールに含まれている場合、**NetBackup** ではそのメディアは **WORM** として書き込まれます。
- ドライブに存在する **WORM** メディアが **WORM** ボリュームプールに含まれていない場合、**NetBackup** ではそのメディアは凍結されます。
- ドライブに存在する標準メディアが **WORM** ボリュームプールに含まれている場合、**NetBackup** ではそのメディアは凍結されます。
- ドライブに **Quantum** メディアが存在し、このメディアが一度も使用されていないか、このメディアのすべての **NetBackup** イメージの期限が切れている場合、**NetBackup** ではこのメディアが使用されます。

p.483 の「[WORM のスクラッチプールの使用について](#)」を参照してください。

p.482 の「[WORM メディアについて](#)」を参照してください。

p.484 の「[一意のドライブおよびメディア形式を使用した WORM メディアの管理について](#)」を参照してください。

WORM のスクラッチプールの使用について

サポートされているすべての **WORM** 対応ドライブ (**Quantum** ドライブを除く) では、1 つの形式のメディアだけがスクラッチプールに含まれます。最も頻繁に使用されるメディアをスクラッチプールに追加することをお勧めします。たとえば、多くの **NetBackup** ジョブで標準メディアが使用される場合は、スクラッチプールに標準メディアを含めます。

スクラッチプールに標準のメディアが含まれている場合は、バックアップジョブの完了に必要なメディアが **WORM** ボリュームプールで不足しないようにしてください。

WORM ボリュームプールでメディアが不足すると、NetBackup は次の処理を実行します。

- 標準のメディアをスクラッチプールから WORM プールに移動する。
- 標準のメディアを WORM 対応ドライブにロードする。
- メディアを凍結する。

NetBackup では、この処理は、スクラッチプール内のすべての標準メディアが凍結するまで繰り返されます。

これと逆の場合もあります。標準ボリュームプールでメディアが不足し、スクラッチプール内に WORM メディアが存在する場合、適切なメディアを利用できないため、標準バックアップが失敗する場合があります。

一意のドライブおよびメディア形式を使用した WORM メディアの管理について

すべての WORM ドライブおよびメディアに、異なるドライブおよびメディア形式を割り当てることができます。たとえば、標準ドライブおよびメディアを HCART および WORM 対応ドライブとして構成したり、メディアを HCART2 として構成します。

この方法では、ドライブ形式に対して正しいメディア形式が NetBackup によって選択されるため、スクラッチプールに両方の形式のメディアを追加できます。

ただし、各ドライブは特定のメディア形式を使用したバックアップとリストアに制限されるため、ドライブを最適に使用できないことがあります。たとえば、WORM バックアップが実行されていないくても、WORM 対応ドライブは標準メディアによるバックアップでは使用できません。

Quantum ドライブでは 1 つのメディア形式だけが使用されるため、WORM メディアの管理にこの方法を使用する必要はありません。

p.485 の「[WORM メディアと Quantum ドライブについて](#)」を参照してください。

一意のドライブとメディアタイプを使用して WORM メディアを管理する場合は、WORM ボリュームプール名の検証を無効にします。

p.484 の「[WORM ボリュームプール名の検証の無効化](#)」を参照してください。

WORM ボリュームプール名の検証の無効化

一意のドライブとメディアタイプを使用して WORM メディアを管理する場合は、NetBackup ボリュームプール名の検証を無効にします。WORM ボリュームプール名の検証が使われるのは、WORM ボリュームプールにおける WORM メディアの管理方式のみです。

p.484 の「[一意のドライブおよびメディア形式を使用した WORM メディアの管理について](#)」を参照してください。

p.482 の「[WORM メディアを管理するボリュームプールの使用について](#)」を参照してください。

ボリュームプール名の検証を無効にするには

- ◆ WORM ドライブのメディアサーバー上に次のタッチファイルを作成します:

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥db¥config¥DISABLE_WORM_POOLCHECK
```

UNIX の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/db/config/DISABLE_WORM_POOLCHECK
```

WORM メディアと Quantum ドライブについて

Quantum ドライブを使用している場合、標準メディアまたは WORM メディアとして使用できるメディアは 1 つの形式だけです。

WORM ボリュームプールでメディアが不足すると、メディアはスクラッチボリュームプールから WORM プールに移動します。NetBackup は、メディアが標準メディアまたは WORM メディアのどちらとして構成されているかを判断します。標準メディアボリュームの場合、NetBackup はテープラベルを読み込み、そのメディアが未使用であることまたはすべてのイメージの期限が切れていることを検証します。また、NetBackup は現在そのメディアがサーバーに割り当てられていないことを検証します。検証が終わると、NetBackup はメディアを WORM メディアとして構成し、NetBackup ジョブを続行します。

サポート対象の WORM ドライブ

NetBackup で WORM テープドライブを使うには SCSI のパススルードライバが必要です。NetBackup はドライブが WORM 対応であること、そしてドライブのメディアが WORM メディアであることを検証するためにドライブに問い合わせします。SCSI パススルーパスは、NetBackup でサポートされているサーバープラットフォームで提供されています。SCSI パススルーパスでは、オペレーティングシステムの特別な構成の変更が必要になる場合があります。

NetBackup で WORM メディア用にサポートされるドライブについて詳しくは、次の URL にある『NetBackup Enterprise Server and Server - Hardware and Cloud Storage Compatibility List』を参照してください。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100040093>

Quantum を除くすべてのベンダーでは、特殊な WORM メディアを使用する必要があります。

Quantum の場合は、NetBackup で標準のテープメディアを WORM メディアに変換できます。Quantum の WORM メディア用ドライブを Solaris システムで使用するには、`st.conf` ファイルを変更します。

非標準テープドライブを構成する方法と `st.conf` ファイルを編集する方法について詳しくは、『[NetBackup デバイス構成ガイド](#)』を参照してください。

ボリュームの追加について

ボリュームを追加することは物理メディアに **NetBackup** の属性を割り当てる論理操作です。メディアはすでにストレージデバイスにあるものを使用できます。また、メディアを **NetBackup** に追加するときにストレージデバイスに追加することもできます。ボリュームをどのように追加するかは、ボリュームの種類がロボットかスタンドアロンかによって決まります。

p.486 の「[ロボットボリュームの追加について](#)」を参照してください。

p.486 の「[スタンドアロンボリュームの追加について](#)」を参照してください。

NetBackup ボリュームには規則に基づいて名前と属性が割り当てられます。

ロボットボリュームの追加について

ロボットボリュームはロボットテープライブラリで見つかるボリュームです。次の表はロボットボリュームを追加するための方法を記述したものです。

表 9-2 ロボットボリュームを追加する方式

方式	説明
手動によるボリュームの追加	p.488 の「 ボリュームの追加 」を参照してください。
ロボットのインベントリ	p.545 の「 ロボットインベントリについて 」を参照してください。 p.554 の「 NetBackup ボリュームの構成の更新について 」を参照してください。
NetBackup コマンド	『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。

スタンドアロンボリュームの追加について

スタンドアロンボリュームはロボット内にはないドライブに存在するボリューム、またはスタンドアロンドライブに割り当てられたボリュームです。

それらを使うまで **NetBackup** はボリュームをラベル付けしないので、ドライブに存在しないのにボリュームを追加できます。追加したボリュームは、ドライブに空きがなくなった場合、またはドライブが使用不能になった場合に利用できます。たとえば、スタンドアロンドライブのボリュームの空きがなくなったか、またはエラーが原因で使用できない場合、**NetBackup** ではボリュームが(論理的に)取り出されます。他のスタンドアロンボリューム

を追加すると、NetBackup はそのボリュームを要求します。NetBackup は out of media エラーを生成しません。

DISABLE_STANDALONE_DRIVE_EXTENSIONS コマンドの nbemmcmd オプションを指定すると、スタンドアロンボリュームの自動使用を解除できます。

表 9-3 スタンドアロンボリュームを追加する方式

方式	説明
手動によるボリュームの追加	p.488 の「 ボリュームの追加 」を参照してください。
NetBackup コマンド	『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。

メディア名および属性ルールの構成について

NetBackup はデフォルトの設定とルールを使用して、新しいリムーバブルメディアに名前を付け、属性を割り当てます。NetBackup は、次を実行するときにこれらのルールを使います。

- 新しいメディアを追加します。
新しいメディアを追加するには、[ドライブおよびロボットの構成 (Configure drives and robots)]ウィザードを実行します。左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に[処理 (Actions)]、[ストレージデバイスの構成 (Configure storage devices)]の順に選択します。
- ロボットのインベントリを実行します。
ロボットのインベントリを実行するには、左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に、[ロボット (Robots)]タブを選択します。ロボットを選択し、[ロボットのインベントリ (Inventory robot)]を選択します。
NetBackup がロボットの新しいメディアを検出した場合は、そのメディアを NetBackup に追加します。

デフォルトの設定は、ほぼすべての構成で正常に機能します。ただし、NetBackup が使うデフォルトの設定とルールは変更できます。特別なハードウェア要件または使用要件があるときのみ設定を変更します。[ドライブおよびロボットの構成 (Configure drives and robots)]または[ロボットのインベントリ (Inventory robot)]設定で設定を変更できます。

次の表に、構成できるルールを示します。

表 9-4 メディアの属性

内容	ここで示された文字列については、次のとおりです。
メディアの設定	p.492 の「 メディアの設定ルールについて 」を参照してください。 p.492 の「 メディアの設定の構成 」を参照してください。
バーコード規則	p.501 の「 バーコードについて 」を参照してください。 p.505 の「 バーコード規則の構成 」を参照してください。
メディア ID の生成規則	p.507 の「 メディア ID 生成規則の作成について 」を参照してください。 p.508 の「 メディア ID 生成規則の構成 」を参照してください。
API ロボットのメディアのマッピング	p.512 の「 メディア形式のマッピングルールについて 」を参照してください。 p.513 の「 メディア形式のマッピングの構成 」を参照してください。

ボリュームの追加

次の手順に従い、新しいボリュームを追加します。

プロパティの指定には注意が必要です。メディアの ID や形式など、一部のプロパティは後で変更することができません。これらのプロパティを誤って指定した場合は、ボリュームを削除して追加し直す必要があります。

ボリュームを追加する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。
- 3 [ボリューム (Volumes)]タブを選択します。
- 4 [ボリュームの追加 (Add volume)]を選択します。
- 5 ボリュームのプロパティを指定します。
表示されるプロパティはボリュームの種類によって変わることがあります。
p.489 の「[ボリュームのプロパティ](#)」を参照してください。
- 6 [保存 (Save)]を選択します。

ロボットがバーコードリーダーを備えている場合、**NetBackup** は次の操作を実行します。

- 指定されたメディア ID を使用して、**EMM** データベースにボリュームを追加します。
- 新しい各ボリュームのバーコードを読み込みます。
- **EMM** データベースに属性としてバーコードを追加します。

ボリュームのプロパティ

ボリュームのプロパティに、**NetBackup** でのボリュームのためのプロパティの説明を示します。プロパティは、ボリュームの追加、変更、移動のいずれを行っているかに左右されます。

プロパティはアルファベット順に配列されます。

表 9-5 ボリュームのプロパティ

プロパティ	説明	操作
デバイスホスト (Device host)	ロボットが接続されている NetBackup メディアサーバーの名前。	追加、移動
有効期限 (Expiration date)	以下はクリーニングテープには適用されません。 この日付の後はボリュームが古く信頼性がなくなります。 有効期限を過ぎても、 NetBackup ではボリューム上のデータを読み込むことはできますが、ボリュームをマウントして書き込むことはできません。新しいボリュームのためにそれを交換する必要があります。 新しいボリュームを追加するとき、 NetBackup は有効期限を設定しません。 有効期限と、ボリューム上のバックアップデータの保持期間は異なります。データの保持期間はバックアップポリシーで指定します。	変更
最初のメディア ID (First media ID)	このプロパティは、ボリュームの数が複数の場合のみ表示されます。 一連のボリュームの最初のボリューム ID。メディア ID は、6 文字ちょうどである必要があります。一連のボリュームを追加するときのみ有効です。 [メディア ID の命名規則 (Media ID naming style)]ボックスで選択したものと同じ形式を使用します。 NetBackup はこの形式を使用して数字を増やし、残りのボリュームに名前を付けます。 NetBackup では、名前に特定の文字を使用できます。	追加 (Add)

プロパティ	説明	操作
最初のスロット番号 (First slot number)	ボリュームの範囲が存在するロボットの最初のスロットの数。複数のメディアを追加または移動する場合は、 NetBackup により残りのスロット番号が順番に割り当てられます。 メモ: API ロボットのボリュームの場合、スロットの情報を入力することはできません。API ロボット形式の場合は、ロボットのベンダーによって、スロットの場所のトラッキングが実行されます。	追加、移動
最大クリーニング数 (Maximum cleanings)	NetBackup がボリュームをマウントするか、クリーニングテープを使う最大回数。 使用する最大マウント数を判断するには、各ベンダーが提供するマニュアルに記載されている、ボリュームの予想寿命を参照してください。	追加
最大マウント数 (Maximum mounts)	次の項はクリーニングテープに適用されません。 [最大マウント数 (Maximum mounts)] プロパティは選択したボリュームをマウントできる回数を指定します。 制限値に達しても、 NetBackup ではボリューム上のデータを読み込めますが、ボリュームをマウントして書き込めません。 0 (ゼロ) を指定すること (デフォルト) と、[無制限 (Unlimited)] を選択することは同じです。 最大マウント数を判断するには、各ベンダーが提供するマニュアルに記載されている、ボリュームの予想寿命を参照してください。	追加、変更
メディアの説明 (Media description)	メディアの説明 (最大 25 文字)。 NetBackup では、名前に特定の文字を使用できます。	追加、変更
メディア ID (Media ID)	このプロパティはボリューム番号が 1 であるときのみ表示されます。 新しいボリュームの ID。メディア ID は、6 文字ちょうどである必要があります。 API ロボットのメディア ID は、メディアのバーコードと一致している必要があります (API ロボットの場合、 NetBackup では、6 文字のバーコードがサポートされています)。そのため、ボリュームを追加する前に、バーコードのリストを取得します。この情報は、ロボットインベントリまたはロボットベンダーのソフトウェアから取得します。 NetBackup では、名前に特定の文字を使用できます。	追加、変更
メディア ID の命名規則 (Media ID naming style)	一連のボリュームの命名に使用する形式。メディア ID の長さは、6 文字ちょうどである必要があります。 NetBackup はこの形式を使用して数字を増やし、残りのボリュームに名前を付けます。 API ロボットに対する NetBackup メディア ID は、メディアのバーコードと一致している必要があります。API ロボットの場合、 NetBackup では、1 文字から 6 文字のバーコードがサポートされています。そのため、ボリュームを追加する前に、バーコードのリストを取得します。この情報は、ロボットインベントリまたはロボットベンダーのソフトウェアから取得します。 NetBackup では、名前に特定の文字を使用できます。	追加 (Add)

プロパティ	説明	操作
メディア形式 (Media type)	追加するボリュームのメディア形式。 ドロップダウンリストから形式を選択します。	追加 (Add)
ボリュームの数 (Number of volumes)	追加するボリュームの数。ロボットライブラリの場合、ボリュームに対して十分なスロットがある必要があります。	追加
ロボット (Robot)	ボリュームの追加先または移動先となるロボットライブラリ。 他のロボットにボリュームを追加する場合は、ドロップダウンリストからロボットを選択します。リストには、選択したメディア形式のボリュームが存在可能な、選択したホスト上のロボットが表示されます。	追加、移動
ボリュームグループ (Volume group)	ロボットを指定している場合、そのロボットに構成してあるボリュームグループから選択します。また、ボリュームグループの名前を入力することもできます。該当するボリュームグループがない場合、NetBackup はこのボリュームグループを作成し、そこにボリュームを追加します。 ボリュームグループを指定しなかった (ボリュームグループを空白のままにした) 場合は、次のような結果になります。 ■ スタンドアロンボリュームはボリュームグループに割り当てられません。 ■ NetBackup はロボット番号およびロボット形式を使用して、ロボットボリュームの名前を生成します。たとえば、ロボット形式が TLD でロボット番号が 50 の場合、グループの名前は 000_00050_TLD となります。 p.479 の「NetBackup ボリュームグループについて」を参照してください。 p.520 の「グループ間でボリュームを移動する規則について」を参照してください。	追加、移動
ボリュームはロボットライブラリに存在します (Volume is in a robotic library)	ボリュームを追加するとき: ■ ボリュームがロボット内にある場合は、[ボリュームはロボットライブラリに存在します (Volume is in a robotic library)]を選択します。 ■ ボリュームがスタンドアロンボリュームの場合は、[ボリュームはロボットライブラリに存在します (Volume is in a robotic library)]を選択しないでください。 ボリュームを移動するとき: ■ ロボットライブラリにボリュームを取り込むには、[ボリュームはロボットライブラリに存在します (Volume is in a robotic library)]を選択します。次に、ボリュームのためのロボットとスロット番号 ([最初のスロット番号 (First slot number)]) を選択します。 ■ ロボットからボリュームを取り出すには、[ボリュームはロボットライブラリに存在します (Volume is in a robotic library)]のチェックを外します。	追加、移動

プロパティ	説明	操作
ボリュームプール (Volume pool)	ボリュームを割り当てるプールです。 作成済みのボリュームプール、または次のいずれかの標準 NetBackup プールを選択します。 ■ [None]。 ■ [NetBackup]は、NetBackup のデフォルトのプール名です。 ■ [DataStore]は、データストアのデフォルトのプール名です。 ■ [CatalogBackup]は、ポリシー形式 NBU-Catalog の NetBackup カタログバックアップに使用されるデフォルトのプール名です。 ボリュームがスクラッチプールから割り当てられている場合、ボリューム上のイメージが期限切れになると、NetBackup はこのボリュームをスクラッチボリュームプールに戻します。 p.476 の「NetBackup ボリュームプールについて」を参照してください。	追加、変更
移動するボリューム (Volumes to move)	ダイアログボックスの[移動するボリューム (Volumes to move)]セクションには、移動対象として選択したボリュームのメディア ID が表示されます。	移動

メディアの設定ルールについて

NetBackup メディアの設定ルールは、次によって決まります。

- 既存のメディアの場合は、そのボリュームが属するボリュームグループ。
- 新しいメディアの場合は、メディア ID 接頭辞、メディア形式、ボリュームが割り当てられるプール。

デフォルトのルールは変更できます。

p.492 の「[メディアの設定の構成](#)」を参照してください。

p.494 の「[メディアの設定のオプション](#)」を参照してください。

メディアの設定の構成

この手順では、既存のメディアと新しいメディアの属性を構成する方法について説明します。

p.492 の「[メディアの設定ルールについて](#)」を参照してください。

メディアの設定を構成する方法

- 1 **NetBackup Web UI** を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。

- 3 右上で[処理 (Actions)]、[ロボットのインベントリの実行 (Inventory robots)]の順に選択します。
- 4 [デバイスホスト (Device host)]を選択します。
- 5 ロボットを選択します。
- 6 [ボリューム構成の変更をプレビュー表示 (Preview volume configuration change)]または[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)]のいずれかをクリックします。
- 7 [詳細オプション (Advanced options)]をクリックします。次に、[メディアの設定 (Media settings)]をクリックします。
- 8 次のように設定します。
 - a. [ロボットから取り外されたメディアを割り当てるボリュームグループ (Media which have been removed from the robot should be assigned to the volume group)]リストで、ロボットから削除するメディアのボリュームグループを選択します。
 - b. [ロボット内へ移動したメディア、またはロボット内で移動したメディアを割り当てるボリュームグループ (Media which have been moved into or within the robot should be assigned to the volume group)]リストで、ロボットに存在するか、ロボットに追加するメディアのボリュームグループを選択します。
 - c. ロボットライブラリでバーコードがサポートされていて、ボリュームに読み込み可能なバーコードが付いている場合は、**NetBackup** がバーコードからメディア ID を自動的に作成します。接頭辞を設定する必要はありません。

ただし、ロボットライブラリのメディアのバーコードを読み込むことができないか、またはロボットでバーコードがサポートされていない場合は、**NetBackup** がデフォルトのメディア ID の接頭辞を割り当てます。

[デフォルト (Default)]以外のメディア ID の接頭辞を使用するには、[使用するメディア ID の接頭辞 (Use the following Media ID prefix)]フィールドをクリックします。次に、メディア ID の接頭辞を指定または選択します。
 - d. バーコードの規則を使用して新しいボリュームに属性を割り当てるには、[バーコード規則を使用する (Use barcode rules)]を選択します。
 - e. ロボットライブラリの新しいメディアのバーコード規則を上書きするには、リストからメディア形式を選択します。
 - f. ロボットライブラリの新しいメディアのデフォルトボリュームプールを上書きするには、リストからボリュームプールを選択します。
- 9 [保存 (Save)]をクリックします。

メディアの設定のオプション

NetBackup のボリューム構成に追加するロボットの新しいメディアに対する設定を次に示します。

ロボットから取り外されたメディアを割り当てるボリュームグループ (既存のメディアの設定)

ボリュームの構成にすでにあるメディアに対して、メディアがロボットから削除された場合にボリュームグループを指定できます。[ロボットから取り外されたメディアを割り当てるボリュームグループ (Media which have been removed from the robot should be assigned to the volume group)]。

[ロボットから取り外されたメディアを割り当てるボリュームグループ (Media which have been removed from the robot should be assigned to the volume group)]ド롭ダウンリストには次の選択項目が含まれています。

- 自動生成
(AUTO-GENERATE)

NetBackup 新しいボリュームグループが自動的に生成されます。
- デフォルト
(DEFAULT)

ボリュームと互換性のある位置情報を持つ既存のグループが存在する場合、ボリュームはそのグループに追加されます。該当するボリュームグループが存在しない場合、NetBackup によって新しいボリュームグループ名が生成されます。
- ボリュームグループなし (NO VOLUME GROUP)

メディアはボリュームグループに割り当てられません。

ダイアログボックスの[新しいメディア (New media)]セクションの[メディア形式 (Media type)]フィールドの設定に応じて、他の対象項目が次のように利用できる場合があります。

- [メディア形式 (Media type)]フィールドが[デフォルト (DEFAULT)]の場合

[ロボットから取り外されたメディアを割り当てるボリュームグループ (Media which have been removed from the robot should be assigned to the volume group)]ド롭ダウンリストには、ロボットのデフォルトのメディア形式で有効なボリュームグループが含まれています。
- [メディア形式 (Media type)]フィールドが[デフォルト (DEFAULT)]以外の場合

[ロボットから取り外されたメディアを割り当てるボリュームグループ (Media which have been removed from the robot should be assigned to the volume group)]ド롭ダウンリストには、指定されたメディア形式で有効なボリュームグループが含まれています。

[デフォルト (DEFAULT)]以外のボリュームグループを指定する場合は、ボリュームグループ名を入力するか、リストから選択します。

p.498 の「メディア形式 (Media type) (新しいメディアの設定)」を参照してください。

ロボットに移動された、またはロボット内で移動されたメディア... (既存のメディア設定)

ロボットに移動された、またはロボット内で移動された既存のメディアに対して、ボリュームグループを指定できます。

ロボットに挿入した (またはロボット内の新しい場所に移動した) 既存のメディアに対して割り当てるボリュームグループ。

[ロボット内へ移動したメディア、またはロボット内で移動したメディアを割り当てるボリュームグループ (Media which have been moved into or within the robot should be assigned to the volume group)] ドロップダウンリストには次の選択項目が含まれています。

自動生成 (AUTO-GENERATE) NetBackup 新しいボリュームグループが自動的に生成されます。

デフォルト (DEFAULT) ボリュームと互換性のある位置情報を持つ既存のグループが存在する場合、ボリュームはそのグループに追加されます。該当するボリュームグループが存在しない場合、NetBackup によって新しいボリュームグループ名が生成されます。

ダイアログボックスの[新しいメディア (New media)]セクションの[メディア形式 (Media type)]フィールドの設定に応じて、次に示すように、他の対象項目が利用できる場合があります。

[メディア形式 (Media type)]フィールドが[デフォルト (DEFAULT)]の場合 [ロボット内へ移動したメディア、またはロボット内で移動したメディアを割り当てるボリュームグループ (Media which have been moved into or within the robot should be assigned to the volume group)] ドロップダウンリストには、ロボットのデフォルトのメディア形式で有効なボリュームグループが含まれています。

[メディア形式 (Media type)]フィールドが[デフォルト (DEFAULT)]以外の場合 [ロボット内へ移動したメディア、またはロボット内で移動したメディアを割り当てるボリュームグループ (Media which have been moved into or within the robot should be assigned to the volume group)] ドロップダウンリストには、指定されたメディア形式で有効なボリュームグループが含まれています。

[デフォルト (DEFAULT)]以外のボリュームグループを指定する場合は、ボリュームグループ名を入力するか、リストから選択します。

ロボットライブラリに複数のメディア形式がある場合は[デフォルト (DEFAULT)]に設定することをお勧めします。ボリュームグループを指定しており、異なるメディア形式のボリュームがロボットに移動されたか、またはロボット内で移動された場合、新しい更新は失敗しま

す。1 つのボリュームグループに異なるメディア形式のボリュームを含めることはできません。

p.498 の「メディア形式 (Media type) (新しいメディアの設定)」を参照してください。

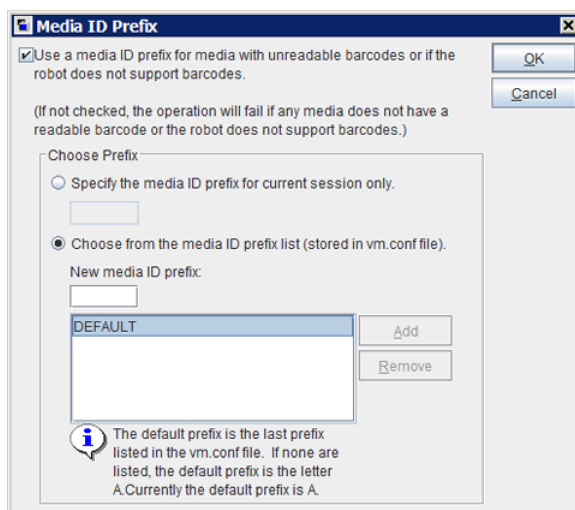
使用するメディア ID の接頭辞 (Use the following Media ID prefix) (新しいメディアの設定)

メディアのバーコードを読み込むことができないか、ロボットでバーコードがサポートされていない場合、デフォルトでは、次のように NetBackup によってメディア ID の接頭辞が割り当てられます。

- MEDIA_ID_PREFIX エントリが `vm.conf` ファイルで定義されている場合、NetBackup によって最後の MEDIA_ID_PREFIX エントリがメディア ID の接頭辞として割り当てられます。
- MEDIA_ID_PREFIX エントリが `vm.conf` ファイルで定義されていない場合、NetBackup によって文字 **A** がメディア ID の接頭辞として使用されます。

デフォルト以外のメディア ID の接頭辞を使用するように NetBackup を構成するには、[ロボットインベントリの詳細オプション (Advanced Robot Inventory Options)] ダイアログボックスの [使用するメディア ID の接頭辞 (Use the following Media ID prefix)] フィールドを選択し、[参照 (Browse)] をクリックします。[メディア ID の接頭辞 (Media ID Prefix)] ダイアログボックスが表示されます。

図 9-1 [メディア ID の接頭辞 (Media ID Prefix)] ダイアログボックス



ダイアログボックスで構成できる代わりに NetBackup メディア ID の割り当ての動作は、次のとおりです。

メディア ID の接頭辞を使わない場合	[ロボットがバーコードをサポートしない場合や読み取り不可能なバーコード付きのメディアには、メディア ID 接頭辞を使用します (Use a media ID prefix for media with unreadable barcodes or if the robot does not support barcodes)]オプションの選択を解除します。
メディア ID の接頭辞を使用する方法	[ロボットがバーコードをサポートしない場合や読み取り不可能なバーコード付きのメディアには、メディア ID 接頭辞を使用します (Use a media ID prefix for media with unreadable barcodes or if the robot does not support barcodes)]オプションを選択します。
現在の操作に対してのみ特定のメディア ID の接頭辞を使用する方法	[現在のセッション専用のメディア ID 接頭辞を指定します (Specify the media ID prefix for current session only)]オプションを選択してから、メディア ID の接頭辞を入力します。接頭辞は 1 文字から 5 文字の英数字で指定できます。NetBackup によって、残りの数字部分が割り当てられ、6 文字のメディア ID になります。 NetBackup は現在の操作にのみ接頭辞を使用します。
現在の操作と今後の操作に対してメディア ID の接頭辞を構成する方法	[メディア ID 接頭辞のリストから選択します (vm.conf) (Choose from the Media ID prefix list (stored in vm.conf file))]オプションを選択してから、リストから接頭辞を選択します。
新しいメディア ID を vm.conf ファイルに追加する方法	[メディア ID 接頭辞のリストから選択します (vm.conf) (Choose from the Media ID prefix list (stored in vm.conf file))]オプションを選択してから、[新しいメディア ID 接頭辞 (New media ID prefix)]フィールドに接頭辞を入力します。[追加 (Add)]をクリックします。
メディア ID の接頭辞を vm.conf ファイルから削除する方法	[メディア ID 接頭辞のリストから選択します (vm.conf) (Choose from the Media ID prefix list (stored in vm.conf file))]オプションを選択してから、リストから接頭辞を選択し、[削除 (Remove)]をクリックします。

vm.conf ファイルについて詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』を参照してください。

バーコード規則を使用する (Use bar code rules) (新しいメディアの設定)

バーコード規則を使用して新しいメディアに属性を割り当てるかどうかを指定します。

API ロボットでバーコード規則を使用するには、vm.conf ファイルに API_BARCODE_RULES エントリを追加します。

p.501 の「[バーコードについて](#)」を参照してください。

p.505 の「[バーコード規則の構成](#)」を参照してください。

vm.conf ファイルについて詳しくは、『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』を参照してください。

メディア形式 (Media type) (新しいメディアの設定)

ロボットに追加する新しいメディアの形式を指定します。リストには、ロボットに対して有効なメディア形式が表示されます。

NetBackup がどのように新しいメディア形式を決定するかは、[バーコード規則を使用する (Use barcode rules)] の設定によって以下のように異なります。

- [バーコード規則を使用する (Use barcode rules)] が選択されている場合。
p.498 の「[バーコード規則を使う場合のメディア形式](#)」を参照してください。
- [バーコード規則を使用する (Use barcode rules)] が選択されていない場合。
p.500 の「[バーコード規則を使わない場合のメディア形式](#)」を参照してください。

メモ: API ロボットの場合、[メディア形式 (Media type)] は常に [デフォルト (DEFAULT)] に設定されます。API ロボットにメディア形式を指定するには、ダイアログボックスの [メディア形式のマッピング (Media Type Mappings)] タブを使います。

p.513 の「[メディア形式のマッピングの構成](#)」を参照してください。

バーコード規則を使う場合のメディア形式

NetBackup でバーコード規則を使う場合は、次のいずれかを選択します。

デフォルト
(DEFAULT)

NetBackup は割り当てるメディア形式を判断するためにバーコード規則を使います。

追加する各メディア形式にはバーコード規則が必要です。たとえば、1 回の更新操作で DLT と 1/2 インチカートリッジを TLD ロボットに追加すると想定します。最初に、DLT と 1/2 インチカートリッジに個別のバーコード規則を作成し、バーコード規則の作成時にそれぞれのメディア形式を選択します。最後に、タブで [デフォルト (DEFAULT)] を選択します。DEFAULT 正しいメディア形式が各メディアに割り当てられます。

タブおよびバーコード規則で [デフォルト (DEFAULT)] を選択すると、によってロボットのデフォルトのメディア形式が割り当てられます。

DEFAULTDEFAULTNetBackup

リストの特定のメディア形式 1 つのバーコード規則で複数の形式のメディアを追加できます。たとえば、DLT カートリッジと 1/2 インチカートリッジ (HCART) を TLD ロボットに追加できます。最初に、[メディアの設定 (Media Settings)] タブで特定のメディア形式を選択します。次に、バーコード規則の作成時に、バーコード規則のメディア形式として DEFAULT を選択します。これによって、DLT カートリッジおよび 1/2 インチカートリッジに対する更新操作を実行でき、正しいメディア形式をバーコード規則で割り当てることができます。

DEFAULT 以外の値を指定する場合、バーコード規則のメディア形式がメディアと同じであるか、DEFAULT である必要があります。この指定を行わないと、バーコード規則とメディアが一致しません (クリーニングメディアを除く)。

表 9-6 に、TLD (API 以外) ロボットにおける、[メディアの設定 (Media Settings)] タブのメディア形式とバーコード規則のメディア形式の組み合わせを示します。また、メディアがボリュームの構成に追加された結果も示します。

表 9-6 メディア形式とバーコード規則の組み合わせの例

[メディアの設定 (Media Settings)] タブのメディア形式	バーコード規則のメディア形式	規則の一致	ボリューム構成に追加されるメディア形式
DLT	デフォルト (DEFAULT)	はい	DLT
HCART	デフォルト (DEFAULT)	はい	HCART
DLT	DLT	はい	DLT
DLT	DLT_CLN	はい	DLT_CLN
DLT_CLN	DLT	いいえ	DLT_CLN
DLT_CLN	DLT_CLN	はい	DLT_CLN
DLT_CLN	デフォルト (DEFAULT)	はい	DLT_CLN
DLT	HCART	なし	DLT
デフォルト (DEFAULT)	デフォルト (DEFAULT)	はい	DLT
デフォルト (DEFAULT)	DLT	はい	DLT
デフォルト (DEFAULT)	DLT_CLN	はい	DLT_CLN

[メディアの設定 (Media Settings)] タブのメディア形式	バーコード規則のメディア形式	規則の一致	ボリューム構成に追加されるメディア形式
デフォルト (DEFAULT)	HCART	なし	ロボット形式によって異なる

表の 4 行目には、1 回の更新操作でクリーニングカートリッジと標準のボリュームがどのように追加されるかが示されています。

次の条件がすべて満たされている必要があります。

- [メディアの設定 (Media Settings)] タブのメディア形式が通常のメディア (この例では DLT) である。
- バーコードがバーコードタグに一致する。
- バーコード規則のメディア形式がクリーニングメディア (この例では DLT_CLN) である。

別の例を参照できます。

この表の 6 行目と 7 行目には、クリーニングテープのみを追加する方法が示されています。6 行目では、[メディアの設定 (Media Settings)] タブおよびバーコード規則でクリーニングメディア形式を指定しています。7 行目では、[メディアの設定 (Media Settings)] タブでクリーニングメディアを指定し、バーコード規則の構成時にはデフォルトを指定しています。

p.505 の「[バーコード規則の構成](#)」を参照してください。

バーコード規則を使わない場合のメディア形式

NetBackup でバーコード規則が使われない場合は、次のいずれかを選択します。

デフォルト (DEFAULT) 次の場合は、ドライブに構成されているメディア形式が NetBackup で使用されます。

- ロボットのドライブがロボット制御ホスト上で構成されている
- すべてのドライブの形式が同じである
- ロボット制御ホスト上で少なくとも 1 つのドライブが構成されている

異なる形式のドライブがある場合、ロボットのデフォルトのメディア形式が NetBackup で使用されます。

特定のメディア形式 ロボットで複数のメディア形式がサポートされていて、デフォルトのメディア形式を使用しない場合は、特定の形式を指定します。

ドライブがロボット制御ホスト上で構成されておらず、ドライブがロボットのデフォルトのメディア形式でない場合、特定のメディア形式を指定します。

次の表に、ロボット制御ホスト上にドライブが構成されていない場合のロボットのデフォルトのメディア形式を示します。

表 9-7 API 以外のロボットのデフォルトのメディア形式

ロボット形式	デフォルトのメディア形式
DLT テープライブラリ (TLD)	DLT カートリッジテープ。 次の形式もサポートされています。 ■ DLT カートリッジテープ 2 および 3、1/2 インチカートリッジテープ ■ 1/2 インチカートリッジテープ 2 および 1/2 インチカートリッジテープ 3

ボリュームプール (Volume pool) (新しいメディアの設定)

新しいメディアのボリュームプール。メディア属性の割り当てにバーコード規則を使用するかどうかによって、次のように処理が異なります。

デフォルト (DEFAULT)	[デフォルト (DEFAULT)]。[デフォルト (DEFAULT)]を選択すると、次の処理が行われます。 ■ バーコード規則を使用している場合、新しいボリュームが割り当てられるボリュームプールはバーコード規則で決定されます。 ■ バーコード規則を使用していない場合、NetBackup では、データテープがNetBackup プールに割り当てられますが、クリーニングテープはボリュームプールに割り当てられません。
特定のボリュームプール	バーコード規則を使用している場合でも、このボリュームプール設定が常に規則に優先して適用されます。

バーコードについて

ロボットライブラリにバーコードリーダーが存在する場合、メディアのバーコードに対してスキャンが実行され、結果が保存されます。その結果によって、スロット番号およびバーコードが、そのスロット内のメディアに関連付けられます。**NetBackup** はロボットライブラリからバーコードとスロット情報を入手します。

ロボットにバーコードリーダーが存在する場合、**NetBackup** によってバーコードの検証が行われ、ロボットが正しいボリュームをロードしているかどうかを確認されます。

ボリュームのバーコードが **NetBackup** データベースのバーコードと一致しない場合、**NetBackup** は次のいずれかを実行します。

- 要求に保留状態を割り当てる (リストアなどのメディア固有のジョブの場合)
- 別のボリュームを使用する (バックアップジョブまたは複製ジョブの場合)

要求されたボリュームがロボット内に存在しない場合、デバイスモニターに保留中の要求メッセージが表示されます。

その場合、オペレータはそのボリュームを検索して、次のいずれかの操作を実行する必要があります。

- デバイスモニターを確認して、適切なドライブを見つけ、要求されたボリュームをそのドライブにマウントします。
- ボリュームをロボット内に移動して、メディアの正しい場所を反映させるためにボリュームの構成を更新します。次に、要求を再送信します。

ボリュームがラベル付けされている場合、自動ボリューム認識デーモンによってラベルが読み込まれ、ドライブが要求に割り当てられます。ボリュームがラベル付けされておらず、ロボットに関連付けられていない場合、オペレータが手動でドライブを要求に割り当てる必要があります。

バーコードの利点

NetBackup は、バーコードを使用するかどうかにかかわらず正常に動作します。ただし、バーコードを読み込めるロボットではバーコード付きメディアの使用をお勧めします。

バーコードを使用する利点は次のとおりです。

- メディア ID の自動割り当て
ロボットに新しいメディアを追加する場合、**NetBackup** によって、指定した条件に従ってメディア ID が割り当てられます。
- より正確なボリューム場所のトラッキング
ロボットインベントリの更新によって、ロボット内のボリュームを判断できます。
- パフォーマンスの向上
バーコードを使用しない場合、一部のロボットでパフォーマンスが低下する可能性があります。バーコードを読み込むロボットでは、テープが移動されるたびにスキャンが実行されます。ロボットによって、正しいバーコードがメモリに格納され、保存済みのバーコードが検証されます。ただし、テープにバーコードが付いていない場合、ロボットによってスキャンが複数回試行されるため、パフォーマンスが低下します。

バーコード推奨する実施例

ボリュームのバーコードを選択するとき次のことを考慮します。

- 通常、バーコードは、テープボリュームの外側に付けたラベルに表示されます。
- **NetBackup** によってサポートされるバーコードの最大長は、ロボットの形式によって異なります。
詳しくは、『**NetBackup デバイス構成ガイド**』を参照してください。
- **NetBackup** 用にバーコードラベルを購入するとき、常に、ロボットライブラリベンダーの推奨に従ってください。
バーコードの文字数が正しいことを確認します。

- バーコードは、任意の英数字の組み合わせで表現できますが、サポートされるバーコードの長さはロボットによって異なります。
特定のロボット形式に対する要件を判断するには、各ロボットベンダーが提供するマニュアルを参照してください。
- バーコードには、空白 (先頭、末尾または文字間) を含めないでください。
空白を含めると、ロボットまたは **NetBackup** で正確に読み取れないことがあります。
- API ロボットのボリュームには、実際のバーコードまたは論理バーコードが付いています。
このボリューム識別子は、**NetBackup** のメディア ID として使用されます。このボリューム識別子は、**ACS** ロボットのボリュームのシリアル番号です。
- API ロボットでは、ボリュームのバーコードが **NetBackup** のメディア ID と一致している必要があります。
メディア ID と同じシリーズのカスタムラベルを使用することによって、バーコードをメディア ID と一致させます。たとえば、AA0000 から ZZ9999 のメディアの集合体と一致させるには、そのシリーズのバーコードラベルを使用します。
- ロボットライブラリが複数のメディア形式を含む場合、異なるメディア形式に対してバーコードに特定の文字を割り当ててください。メディア ID の生成規則を使用して行います。
また、バーコードを使用して、データテープとクリーニングテープの区別や、複数のボリュームプールの区別を行います。

バーコード規則について

バーコード規則は、ロボット内の新しいボリュームに属性を割り当てる条件を指定します。**NetBackup** はロボットライブラリが提供するボリュームのバーコードとバーコード規則を使うことによってこれらの属性を割り当てます。

NetBackup で、ユーザーは、ロボットのインベントリ更新操作の設定時に、バーコード規則を使用するかどうかを選択します。バーコード規則は、プライマリサーバーに格納されます。

メモ: ボリュームですでにバーコードが使用されている場合、**NetBackup** はバーコード規則を使用しません。

NetBackup でのバーコードの処理について

ロボットのインベントリ更新操作で **NetBackup** のバーコード規則を使用する場合、ロボットで新しいバーコードが検出されると、**NetBackup** によって次の操作が実行されます。

- 規則のリストの先頭から末尾に向かって、新しいバーコードと一致する規則が検索されます。

- バーコードが規則と一致する場合、**NetBackup** では規則のメディア形式が更新オプションのメディア形式と互換性があるかどうかを検証されます。
- メディア形式が一致する場合、**NetBackup** では規則の属性がボリュームに割り当てられます。属性には、メディア形式、ボリュームプール、最大マウント数 (または最大クリーニング数) および説明が含まれます。

バーコード規則の例

次の表には、いくつかのバーコード規則の例が示されています。規則は、最初にバーコードタグの文字数に従ってソートされ、次に追加した順にソートされます。例外として、**<NONE>** 規則および **<DEFAULT>** 規則は、常にリストの最後に表示されます。

表 9-8 バーコード規則の例

バーコードタグ	メディア形式	ボリュームプール	最大マウント数とクリーニング数	説明
DLT	DLT	d_pool	200	DLT バックアップ
CLD	DLT_CLN	なし	30	DLT クリーニング
<NONE>	デフォルト (DEFAULT)	なし	0	バーコードなし
<DEFAULT>	デフォルト (DEFAULT)	NetBackup	0	他のバーコード

TLD ロボットの新しい HCART ボリュームの更新操作で、次のようなメディアの設定 (更新オプション) を選択すると想定します。

メディア形式 = HCART

ボリュームグループ (Volume Group): 00_000_TLD

バーコード規則を使用する (Use barcode rules): YES

ボリュームプール (Volume Pool): DEFAULT

このロボットライブラリ内の新しいボリュームのバーコードが TLD00001 である場合、**NetBackup** によってバーコードタグ TLD の規則が使用されます。**NetBackup** はボリュームに次の属性を割り当てます。

- メディア ID (Media ID): 800001 (バーコードの末尾 6 文字)
- ボリュームグループ (Volume Group): 00_000_TLD
- ボリュームプール (Volume Pool): t_pool
- 最大マウント数 (Maximum mounts): 0 (無制限)

新しいボリュームのバーコードが TL000001 である場合、NetBackup によってバーコードタグ TL の規則が使用されます。NetBackup はボリュームに次の属性を割り当てます。

- メディア ID (Media ID): 000001 (バーコードの末尾 6 文字)
- ボリュームグループ (Volume Group): 00_000_TLD
- ボリュームプール (Volume Pool): None
- 最大マウント数 (Maximum mounts): 0 (無制限)

バーコード規則の構成

ロボットのインベントリの[詳細オプション (Advanced options)]にある[バーコード規則 (Barcode rules)]設定を使用して、ロボットに追加された新しいボリュームに属性を割り当てるための規則を構成します。[メディアの設定 (Media settings)]で[バーコード規則を使用する (Use barcode rules)]を選択すると、NetBackup によってバーコードが割り当てられます。

API ロボットでバーコード規則を使用するには、vm.conf ファイルに API_BARCODE_RULES エントリを追加します。

ロボット形式は別のトピックで記述されています。

p.430 の「[NetBackup のロボット形式](#)」を参照してください。

vm.conf ファイルについて詳しくは、『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』を参照してください。

p.501 の「[バーコードについて](#)」を参照してください。

バーコード規則を構成する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。
- 3 右上で[処理 (Actions)]、[ロボットのインベントリの実行 (Inventory robots)]の順に選択します。
- 4 [デバイスホスト (Device host)]を選択します。
- 5 ロボットを選択します。
- 6 [ボリューム構成の変更をプレビュー表示 (Preview volume configuration change)]または[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)]のいずれかを選択します。
- 7 [詳細オプション (Advanced options)]を選択してメニューを開きます。次に [バーコード規則 (Barcode rules)]を選択します。

8 規則を構成するには、次のいずれかの操作を実行します。

- 規則の追加 [追加 (Add)]を選択し、規則を構成します。
- 規則の編集 規則を見つけ、[編集 (Edit)]を選択し、規則を変更します。
- 規則の削除 規則を見つけ、[削除 (Delete)]を選択します。

p.506 の「[バーコード規則の設定](#)」を参照してください。

9 規則の構成が完了したら、[保存 (Save)]を選択します。

バーコード規則の設定

次の表では、バーコード規則のために構成できる設定について説明します。**NetBackup** は新しいメディアにバーコードを割り当てるためにこれらの規則を使います。

表 9-9 バーコード規則の設定

バーコード規則の設定	説明
バーコードタグ (Barcode tag)	メディアの形式を識別する一意のバーコード文字列。 たとえば、次が該当する場合は、バーコード規則のバーコードタグとして DLT を使用します。 ■ バーコードで DLT を使用して DLT テープを識別している ■ DLT がロボット内の他のバーコードで使用されていない 同様に、CLND を DLT クリーニングメディアに使用している場合は、DLT クリーニングメディアの規則のバーコードタグとして CLND を使用します。 バーコードタグには、1 文字から 16 文字を含めることができますが、空白を含めることはできません。 次の特殊なバーコード規則は、バーコードタグ内の特殊文字と一致させることができます。 ■ なし 規則が使用され、ボリュームに読み込みできないバーコードが付いているか、またはロボットでバーコードがサポートされていない場合に一致します。 ■ デフォルト (DEFAULT) バーコードが付いているボリュームに対して、他のバーコードタグが一致しない場合にこのタグが一致します。ただし、[デフォルト (DEFAULT)]の規則におけるメディア形式と[メディアの設定 (Media Settings)]タブのメディア形式の間で互換性が必要です。 バーコード規則のバーコードタグを変更することはできません。代わりに、まず古い規則を削除してから、新しいバーコードタグを含む規則を追加します。 [メディアの設定 (Media Settings)]タブを使用して、ロボット更新の条件を設定します。 p.492 の「メディアの設定の構成」を参照してください。
説明 (Description)	バーコード規則の説明です。1 文字から 25 文字の説明を入力します。

バーコード規則の設定	説明
最大マウント数 (Maximum mounts)	ボリュームに許可されるマウント (またはクリーニング) の最大数です。 データボリュームの場合、値を 0 (ゼロ) に設定するとボリュームをマウントできる回数は無制限になります。 クリーニングテープの場合、ゼロはクリーニングテープが使われないことを意味します。データメディアのバーコードと混同されないクリーニングメディアのバーコードを使用することをお勧めします。そうすることによって、クリーニングテープに対して 0 の値を避けることができます。
[メディア形式 (Media Type)] オプション	メディアに割り当てるメディア形式です。 [メディアの設定 (Media Settings)] タブで指定されたメディア形式は、バーコード規則のメディア形式より常に優先されます。DEFAULT タブで [デフォルト (DEFAULT)] 以外の値を指定する場合、バーコード規則のメディア形式にメディアと同じ形式または DEFAULT を指定する必要があります。この指定を行わないと、バーコード規則とメディアが一致しません (クリーニングメディアを除く)。 p.498 の「バーコード規則を使う場合のメディア形式」を参照してください。 メモ: メディア形式を選択すると、最大マウント数の値が、指定したメディア形式のデフォルト値に戻される場合があります。たとえば、クリーニングメディア以外のメディア形式を選択すると、無制限を示す 0 (ゼロ) に戻される場合があります。 p.480 の「NetBackup のメディア形式」を参照してください。
ボリュームプール	新しいメディアのボリュームプール。メディア属性の割り当てにバーコード規則を使用するかどうかによって、処理が異なります。 次から選択します。 ■ デフォルト (DEFAULT) [デフォルト (DEFAULT)] が選択されれば、NetBackup は次の処理を実行します。 ■ バーコード規則を使用している場合、新しいボリュームが割り当てられるボリュームプールはバーコード規則で決定されます。 ■ バーコード規則を使用していない場合、NetBackup では、データテープが NetBackup プールに割り当てられますが、クリーニングテープはボリュームプールに割り当てられません。 ■ 特定のボリュームプール このボリュームプールの設定は、常にバーコード規則よりも優先されます。

メディア ID 生成規則の作成について

メディア ID の生成規則は、NetBackup で使用されるメディア ID のデフォルトの命名方法より優先されます。デフォルトの方法では、ロボットによって指定されるバーコードの末尾 6 文字を使用してメディア ID が生成されます。

メモ: メディア ID の生成規則を使用するには、ロボットでバーコード機能がサポートされており、ロボット形式が API 以外である必要があります。メディア ID の生成規則は、Media Manager 構成ファイル (vm.conf) に保存されます。ファイルについて詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』を参照してください。

vm.conf<https://support.cohesity.com/s/article/article-100040135>

たとえば、2 つの 8 文字のバーコードが s00006L1 および 000006L1 であるとします。メディア ID の生成規則がない場合、メディア ID を生成するために、NetBackup はバーコードの最後の 6 文字を使用します。この例では、2 つのバーコードに対して同じメディア ID が作成されます (0006L1)。

規則を使用して、メディア ID に使用されるバーコードの文字を指定することによって、NetBackup のメディア ID の作成方法を制御します。または、ID に挿入する英数字を指定します。

ロボットとバーコード長に対応する複数の規則を定義します。特定のロボットと、異なる数字または文字のバーコードを持つ各バーコード形式に対して規則を定義します。複数の規則を使用することで、複数のメディア形式をサポートするロボットに対する柔軟性を確保できます。

メディア ID 生成規則の構成

API 以外のロボット専用。ロボット形式は別のトピックで記述されています。

p.430 の「[NetBackup のロボット形式](#)」を参照してください。

NetBackup の[ロボットインベントリの詳細オプション (Advanced Robot Inventory Options)]ダイアログボックスの[メディア ID の生成 (Media ID Generation)]タブを使って、デフォルトの命名方法を上書きする規則を設定します。メディア ID の生成規則を使用するには、ロボットでバーコード機能がサポートされており、ロボット形式が API 以外である必要があります。

p.507 の「[メディア ID 生成規則の作成について](#)」を参照してください。

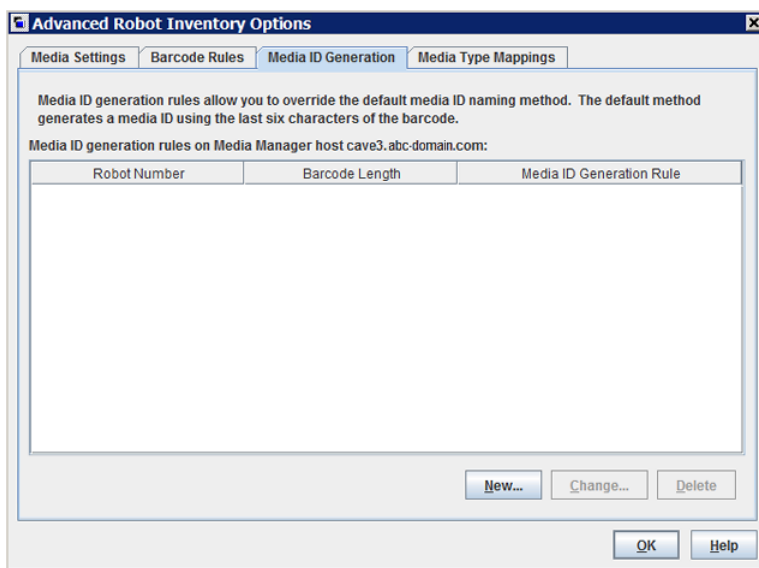
メディア ID の生成規則を構成する方法

- 1 次のように、[ロボットインベントリの詳細オプション (Advanced Robot Inventory Options)]ダイアログボックスを開きます。

- [ロボットのインベントリ (Robot Inventory)] ダイアログボックスから
- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)] > [ロボット (Robots)] を展開します。
 - 2 インベントリを実行するロボットを選択します。
 - 3 [処理 (Actions)] メニューから [ロボットのインベントリ (Inventory Robot)] を選択します。
 - 4 [ボリューム構成の変更をプレビュー表示 (Preview volume configuration changes)] か [ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)] のいずれかをクリックします。
 - 5 [詳細オプション (Advanced Options)] をクリックします。

- ボリュームの構成ウィザードから
- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[デバイス (Devices)]を展開します。
 - 2 右ペインのウィザードのリストで、[ボリュームの構成 (Configure Volumes)]をクリックして、ウィザードの指示に従います。
 - 3 ボリュームの構成ウィザードの[ロボットのインベントリ (Robot Inventory)]パネルで、[詳細オプション (Advanced Options)]をクリックします。

- 2 [ロボットインベントリの詳細オプション (Advanced Robot Inventory Options)]ダイアログボックスで、[メディア ID の生成 (Media ID Generation)]タブをクリックします。



3 規則を構成するには、次のいずれかの操作を実行します。

- | | |
|----------|--|
| 規則を追加する | [新規 (New)]をクリックしてから、ダイアログボックスで規則を構成します。 |
| 規則を変更する | 規則を選択して[変更 (Change)]をクリックしてから、ダイアログボックスで規則を変更します。

規則のロボット番号またはバーコード長を変更することはできません。これらのプロパティを変更するには、まず古い規則を削除してから、新しい規則を追加します。 |
| ルールを削除する | 規則を選択して[削除 (Delete)]をクリックし、確認のダイアログボックスで [OK]をクリックします。1 回の操作で複数の規則を選択して削除することができます。 |

p.511 の「[メディア ID の生成オプション](#)」を参照してください。

4 規則の構成が完了したら、[OK]をクリックします。

メディア ID の生成オプション

NetBackup はロボットのメディア ID を生成する規則を使います。デフォルトの規則では、テープからバーコードラベルの末尾 6 文字を使用します。

デフォルトの規則よりも優先されるようにメディア ID の生成規則を構成できます。メディア ID に使用されるバーコードラベルの文字を指定する規則を定義することによって、NetBackup のメディア ID の作成方法を制御します。

次の項はメディア ID の生成規則のオプションを記述します。

次のリストは、メディア ID の生成規則のオプションを示します。

- バーコード長 (Barcode length)
[バーコード長 (Barcode length)]はロボットのテープのバーコードの文字数です。規則のバーコード長を変更することはできません。代わりに、最初にルールを削除し、次に新しいルールを追加します。
- メディア ID の生成規則
[メディア ID の生成規則 (Media ID generation rule)]はコロンで区切られた最大 6 つのフィールドで構成されます。数値によって、バーコードから抽出される文字の位置が定義されます。たとえば、フィールドに 2 を指定すると、バーコードの (左から) 2 番目の文字が抽出されます。任意の順序で数値を指定できます。
生成されたメディア ID に特定の文字を挿入するには、シャープ記号 (#) を文字の前に付けます。メディア ID に有効な英数字を指定する必要があります。
規則を使用してさまざまな形式のメディア ID を作成できます。ただし、メディアのラベルと生成されたメディア ID が異なると、メディアの管理が困難になることがあります。
次の表に、規則とその結果生成されるメディア ID の例を示します。

テープ上のバーコード	メディア ID の生成規則	生成されたメディア ID
032945L1	1:2:3:4:5:6	032945
032945L1	3:4:5:6:7	2945L
032945L1	#N:2:3:4:5:6	N32945
543106L1	#9:2:3:4	9431
543106L1	1:2:3:4:#P	5431P

- ロボット番号 (Robot number)

規則を適用するロボットの番号です。

規則のロボット番号は変更できません。代わりに、最初にルールを削除し、次に新しいルールを追加します。

メディア形式のマッピングルールについて

API ロボットにのみ適用されます。ロボット形式は別のトピックで記述されています。

p.430 の「[NetBackup のロボット形式](#)」を参照してください。

API ロボットの場合、NetBackup にはベンダーのメディア形式から NetBackup のメディア形式へのデフォルトのマッピングが含まれています。API ロボットは ACS のロボット形式です。

デフォルトのマッピングを変更できます。変更は、現在行っているボリューム構成の更新だけに適用されます。

またメディア形式のマッピングを追加できます。

p.515 の「[メディア形式のマッピングエントリの追加について](#)」を参照してください。

p.515 の「[デフォルトのメディア形式と利用可能なメディア形式](#)」を参照してください。

p.480 の「[NetBackup のメディア形式](#)」を参照してください。

メモ: ベンダーのメディア形式と互換性のないメディア形式を含むバーコード規則を書き込むことができます。ただし、ロボットインベントリの更新時に、ベンダーのメディア形式と対応しない NetBackup のメディア形式が割り当てられることがあります。この問題を回避するには、バーコード規則をメディア形式別にグループ化します。

メディア形式のマッピングの構成

API ロボットにのみ適用されます。ロボット形式は別のトピックで記述されています。

p.430 の「[NetBackup のロボット形式](#)」を参照してください。

既存および新規のメディアの属性を設定するには、NetBackup の[ロボットインベントリの詳細オプション (Advanced Robot Inventory Options)]ダイアログボックスの[メディア形式のマッピング (Media Type Mappings)]タブを使用します。

p.512 の「[メディア形式のマッピングルールについて](#)」を参照してください。

メディア形式のマッピングを構成する方法

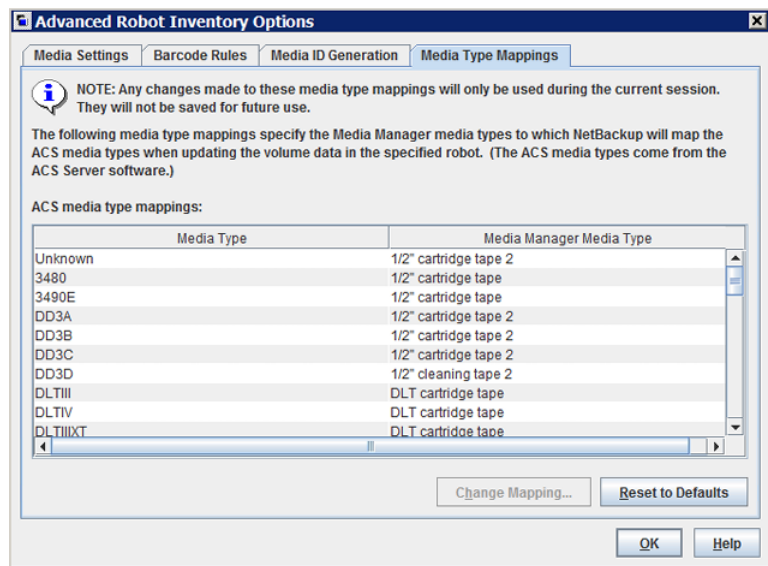
- 1 次のように、[ロボットインベントリの詳細オプション (Advanced Robot Inventory Options)]ダイアログボックスを開きます。

[ロボットのインベントリ (Robot Inventory)]ダイアログボックスから

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[ロボット (Robots)]を展開します。
- 2 インベントリを実行するロボットを選択します。
- 3 [処理 (Actions)]メニューから[ロボットのインベントリ (Inventory Robot)]を選択します。
- 4 [ボリューム構成の変更をプレビュー表示 (Preview volume configuration changes)]か[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)]のいずれかをクリックします。
- 5 [詳細オプション (Advanced Options)]をクリックします。

- 1 ボリュームの構成ウィザードから
NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[デバイス (Devices)]を展開します。
- 2 右ペインのウィザードのリストで、[ボリュームの構成 (Configure Volumes)]をクリックして、ウィザードの指示に従います。
- 3 ボリュームの構成ウィザードの[ロボットのインベントリ (Robot Inventory)]パネルで、[詳細オプション (Advanced Options)]をクリックします。

- 2 [ロボットインベントリの詳細オプション (Advanced Robot Inventory Options)]ダイアログボックスで、[メディア形式のマッピング (Media Type Mappings)]タブをクリックします。



インベントリの実行対象として選択したロボット形式のマッピングのみが表示されます。デフォルトのマッピングと追加または変更したマッピングが表示されます。

- 3 変更するロボットベンダーのメディア形式のマッピングが表示されている行を選択し、[マッピングを変更 (Change Mapping)]をクリックします。

- 4 [メディアのマッピングの変更 (Change Media Mapping)] ダイアログボックスで、選択可能な項目のリストからメディア形式を選択します。
- 5 [OK] をクリックします。
マッピングをデフォルトにリセットするには、[デフォルトにリセット (Reset to Defaults)] をクリックします。

メディア形式のマッピングエントリの追加について

API ロボットにのみ適用されます。ロボット形式は別のトピックで記述されています。

p.430 の「[NetBackup のロボット形式](#)」を参照してください。

[メディア形式のマッピング (Media Type Mappings)] のデフォルト設定には、目的のマッピングがない場合があります。目的のマッピングがない場合は、**NetBackup Web UI** を実行しているホストの `vm.conf` ファイルに、ロボット固有のメディアのマッピングを追加します。

`vm.conf` ファイルについて詳しくは、『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』を参照してください。

表 9-10 ロボット固有のメディアマッピングの例

vm.conf エントリ	結果	vm.conf エントリが存在しない場合のロボットのデフォルト
ACS_3490E = HCART2	ACS メディア形式 3490E が HCART2 メディア形式にマッピングされます。	HCART
ACS_DLTIV = DLT2	ACS メディア形式 DLTIV が DLT2 メディア形式にマッピングされます。	DLT (DLTIV などのすべての ACS DLT メディア形式に適用)

デフォルトのメディア形式と利用可能なメディア形式

API ロボットにのみ適用されます。ロボット形式は別のトピックで記述されています。

p.430 の「[NetBackup のロボット形式](#)」を参照してください。

デフォルトのメディア形式は、各ロボットベンダーによって提供されます。

表 9-11 には、API ロボットのデフォルトのメディア形式と使用可能なメディア形式が含まれています。

以下の項目では表を理解するために役立つ情報を提供します。

- 表の 1 列目は、ベンダーのメディア形式を示しています。
- 表の 2 列目は、**NetBackup** のデフォルトのメディア形式を示しています。

- 3 列目は、デフォルトのメディア形式をマップできるメディア形式を示しています。この操作を行うには、まず利用可能なマッピングエントリを `vm.conf` ファイルに追加します。

一部のマッピングエントリは使用できません。たとえば、ACS ロボットに対して次のマッピングエントリは指定できません。

```
ACS_DD3A = DLT
ACS_DD3A = HCART4
```

表 9-11 ACS ロボットのデフォルトのメディア形式および利用可能なメディア形式

ACS メディア形式	デフォルトのメディア形式	マッピングによって指定可能なメディア形式
3480	1/2 インチカートリッジ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3
3490E	1/2 インチカートリッジ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3
DD3A	1/2 インチカートリッジテープ 2 (HCART2)	HCART、HCART2、HCART3
DD3B	1/2 インチカートリッジテープ 2 (HCART2)	HCART、HCART2、HCART3
DD3C	1/2 インチカートリッジテープ 2 (HCART2)	HCART、HCART2、HCART3
DD3D	1/2 インチカートリッジクリーニングテープ 2 (HC2_CLN)	HC_CLN、HC2_CLN、HC3_CLN
DLTIII	デジタルリニアテープ (DLT)	DLT、DLT2、DLT3
DLTIIIXT	デジタルリニアテープ (DLT)	DLT、DLT2、DLT3
DLTIV	デジタルリニアテープ (DLT)	DLT、DLT2、DLT3
EECART	1/2 インチカートリッジ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3
JLABEL	1/2 インチカートリッジ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3
KLABEL	1/2 インチカートリッジ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3

ACS メディア形式	デフォルトのメディア形式	マッピングによって指定可能なメディア形式
LTO_100G	1/2 インチカートリッジ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_10GB	1/2 インチカートリッジ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_200G	1/2 インチカートリッジ (HCART2)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_35GB	1/2 インチカートリッジ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_400G	1/2 インチカートリッジテープ 3 (HCART3)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_400W	1/2 インチカートリッジテープ 3 (HCART3)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_50GB	1/2 インチカートリッジテープ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_800G	1/2 インチカートリッジテープ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_800W	1/2 インチカートリッジテープ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_1_5T	1/2 インチカートリッジテープ 2 (HCART2)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_1_5W	1/2 インチカートリッジテープ 2 (HCART2)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_2_5T	1/2 インチカートリッジテープ 3 (HCART3)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_2_5W	1/2 インチカートリッジテープ 3 (HCART3)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_6_4T	1/2 インチカートリッジテープ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_6_4W	1/2 インチカートリッジテープ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3
LTO_CLN1	1/2 インチカートリッジクリーニングテープ (HC_CLN)	HC_CLN、HC2_CLN、HC3_CLN

ACS メディア形式	デフォルトのメディア形式	マッピングによって指定可能なメディア形式
LTO_CLN2	1/2 インチカートリッジクリーニングテープ (HC_CLN)	HC_CLN、HC2_CLN、HC3_CLN
LTO_CLN3	1/2 インチカートリッジクリーニングテープ (HC_CLN)	HC_CLN、HC2_CLN、HC3_CLN
LTO_CLNU	1/2 インチカートリッジクリーニングテープ (HC_CLN)	HC_CLN、HC2_CLN、HC3_CLN
SDLT	デジタルリニアテープ 3 (DLT3)	DLT、DLT2、DLT3
SDLT_2	デジタルリニアテープ (DLT)	DLT、DLT2、DLT3
SDLT_4	デジタルリニアテープ (DLT)	DLT、DLT2、DLT3
SDLT_S1	デジタルリニアテープ 2 (DLT2)	DLT、DLT2、DLT3
SDLT_S2	デジタルリニアテープ (DLT)	DLT、DLT2、DLT3
SDLT_S3	デジタルリニアテープ (DLT)	DLT、DLT2、DLT3
SDLT_S4	デジタルリニアテープ (DLT)	DLT、DLT2、DLT3
STK1R	1/2 インチカートリッジ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3
STK1U	1/2 インチカートリッジクリーニングテープ (HC_CLN)	HC_CLN、HC2_CLN、HC3_CLN
STK1Y	1/2 インチカートリッジクリーニングテープ (HC_CLN)	HC_CLN、HC2_CLN、HC3_CLN
STK2P	1/2 インチカートリッジテープ 2 (HCART2)	HCART、HCART2、HCART3
STK2W	1/2 インチカートリッジクリーニングテープ 2 (HC2_CLN)	HC_CLN、HC2_CLN、HC3_CLN
T10000CC	1/2 インチカートリッジテープ 3 (HCART3)	HCART、HCART2、HCART3
T10000CL	1/3 インチカートリッジクリーニングテープ 3 (HC2_CLN)	HC_CLN、HC2_CLN、HC3_CLN
T10000CT	1/2 インチカートリッジテープ 3 (HCART3)	HCART、HCART2、HCART3

ACS メディア形式	デフォルトのメディア形式	マッピングによって指定可能なメディア形式
T10000T1	1/2 インチカートリッジテープ 3 (HCART3)	HCART、HCART2、HCART3
T10000T2	1/2 インチカートリッジテープ 3 (HCART3)	HCART、HCART2、HCART3
T10000TS	1/2 インチカートリッジテープ 3 (HCART3)	HCART、HCART2、HCART3
T10000TT	1/2 インチカートリッジテープ 3 (HCART3)	HCART、HCART2、HCART3
UNKNOWN (不明な ACS メディア形式に使用)	1/2 インチカートリッジテープ 2 (HCART2)	HCART、HCART2、HCART3、DLT、DLT2、DLT3
VCART	1/2 インチカートリッジテープ (HCART)	HCART、HCART2、HCART3
VIRTUAL	1/2 インチカートリッジテープ 2 (HCART2)	HCART、HCART2、HCART3

ボリュームの管理

次のセクションはボリュームを管理する手順を記述します。

ボリュームのグループの変更

ボリュームを物理的に別のロボットに移動した場合、ボリュームのグループを変更して移動を反映します。

p.520 の「[グループ間でボリュームを移動する規則について](#)」を参照してください。

ボリュームのグループを変更する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。
- 3 [ボリューム (Volumes)]タブを選択します。
- 4 ボリュームグループの割り当てを変更するボリュームを選択します。
- 5 [ボリュームグループの変更 (Change volume group)]を選択します。

- 6 [ボリュームグループ (Volume group)]の場合は、新しいボリュームグループの名前を入力します。または、リストから名前を選択します。
- 7 [確認 (Confirm)]を選択します。

選択したボリュームに対するボリュームリストのエントリに、名前の変更が反映されます。新しいボリュームグループを指定した場合、新しいボリュームグループが作成され、[ボリュームグループ (Volume groups)]の下にグループが表示されます。

グループ間でボリュームを移動する規則について

グループ間でボリュームを移動するための規則を次に示します。

- ターゲットのボリュームグループは移動元ボリュームグループと同じメディア形式を含む必要があります。ターゲットのボリュームグループが空の場合、そのボリュームグループに追加する連続的なボリュームは、それに最初に追加するメディアの形式と一致する必要があります。
- ロボットライブラリ内のすべてのボリュームは、1つのボリュームグループに属している必要があります。グループを指定しない場合、NetBackupはロボット番号と形式を使用して新しいボリュームグループの名前を生成します。
- 複数のボリュームグループで同じ場所を共有できます。たとえば、1つのロボットライブラリに複数のボリュームグループのボリュームが存在したり、複数のスタンドアロンボリュームグループが存在することも可能です。
- グループのすべてのメンバーは、同じロボットライブラリに存在するか、またはスタンドアロンである必要があります。つまり、ボリュームグループが別のロボットライブラリにすでに存在すれば、ロボットライブラリにそれ（またはその一部を）追加できません。

p.479 の「[NetBackup ボリュームグループについて](#)」を参照してください。

p.533 の「[ボリュームの移動について](#)」を参照してください。

ボリュームの所有者の変更

ボリュームを所有するメディアサーバーまたはサーバーグループを変更できます。

p.385 の「[NetBackup サーバーグループについて](#)」を参照してください。

p.542 の「[メディア共有について](#)」を参照してください。

ボリュームの所有者を変更する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[メディア (Media)]を展開します。
- 2 [ボリューム (Volume)]リストで、変更するボリュームを選択します。
- 3 [処理 (Actions)]メニューで[メディア所有者の変更 (Change Media Owner)]を選択します。

4 [メディア所有者 (Media Owner)] フィールドで、次のいずれかを選択します。

任意 (Any) (デフォルト)	NetBackup がメディアの所有者を選択するようにします。 NetBackup はメディアサーバーかサーバーグループ (構成されている場合) を選択します。
なし	メディアにイメージを書き込むメディアサーバーをそのメディアの所有者として指定します。メディアサーバーを明示的に指定しなくても、メディアサーバーがメディアを所有するように設定されます。
サーバーグループ (Server group)	サーバーグループを指定します。サーバーグループを指定すると、このポリシーのバックアップイメージの書き込み先メディアに対して書き込みできるのが、グループ内のサーバーのみになります。ドロップダウンメニューには、NetBackup 環境で構成したすべてのサーバーグループが表示されます。

5 [OK]をクリックします。

ボリュームの編集

ボリュームプールなど、一部のボリュームプロパティを変更できます。

ボリュームのプロパティを変更する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。
- 3 [ボリューム (Volumes)]タブを選択します。
- 4 ボリュームを特定して選択します。[編集 (Edit)]を選択します。
- 5 ボリュームのプロパティを変更します。
p.489 の「[ボリュームのプロパティ](#)」を参照してください。
- 6 [更新 (Update)]を選択します。

ボリュームの割り当てと割り当て解除について

割り当て済みのボリュームは NetBackup による排他的な使用のために予約されているボリュームです。ボリュームはいずれかのアプリケーションでデータを初めて書き込まれるとき、割り当て状態に設定されます。[ボリューム (Volumes)]タブの該当するボリュームの[割り当て日時 (Time assigned)]列に割り当ての時間が表示されます。ボリュームが割り当てられている場合、このボリュームのボリュームプールを削除または変更することはできません。

ボリュームは **NetBackup** によって割り当て解除されるまで割り当て済みのままになります。

NetBackup によってボリュームの割り当てが解除されるのは、次のようにデータが不要になった場合だけです。

- 通常のバックアップボリュームでは、ボリューム上のすべてのバックアップに対する保持期間が経過した場合。
- カタログバックアップボリュームでは、ボリュームをカタログバックアップ用に使用することを停止した場合。

ボリュームの割り当てを解除するには、ボリューム上のイメージを期限切れにします。ボリュームが期限切れになると、**NetBackup** はそのボリュームの割り当てを解除し、そのボリューム上のバックアップはトラッキングされません。**NetBackup** はボリュームを再利用できます。このボリュームは削除でき、ボリュームプールを変更できます。

p.970 の「[バックアップイメージを期限切れにする場合](#)」を参照してください。

ボリュームの状態（凍結、一時停止など）に関係なく、バックアップイメージを期限切れにできます。

NetBackup は期限切れのボリュームのイメージを消しません。（ボリュームが上書きされていない場合）イメージを **NetBackup** にインポートすると、ボリューム上のデータは引き続き使用できます。

p.973 の「[バックアップイメージのインポートについて](#)」を参照してください。

メモ: **NetBackup** ボリュームを割り当て解除しないことをお勧めします。割り当てを手動で解除する場合、ボリュームに重要なデータが格納されていないことを確認してください。重要なデータが格納されているかどうか不明な場合、ボリュームの割り当てを解除する前に他のボリュームにイメージをコピーしてください。

ボリュームの削除

NetBackup の構成からボリュームを削除できます。たとえば、次のような場合にボリュームの削除が必要になる場合があります。

- ボリュームが不要になり、そのボリュームに異なるメディア ID でラベル付けして再利用する場合
- メディアエラーが繰り返し発生するため、ボリュームを使用できない場合
- 有効期限を過ぎているか、またはマウントの回数が著しく多く、ボリュームを新しいボリュームと交換する場合
- ボリュームが失われたため、**NetBackup** データベースから消去する場合

削除したボリュームは、廃棄したり、同じまたは異なるメディア ID で再度追加したりできます。

p.521 の「[ボリュームの割り当てと割り当て解除について](#)」を参照してください。

ボリュームを削除する方法

- 1 ボリュームを削除して再利用または廃棄する前に、重要なデータが格納されていないかどうかを確認します。割り当てられている場合、NetBackup ボリュームは削除できません。
- 2 NetBackup Web UI を開きます。
- 3 [ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)] の順に選択します。
- 4 [ボリューム (Volumes)] タブをクリックします。
- 5 ボリュームのリストから必要なボリュームを選択して、[削除 (Delete)]、[削除 (Delete)] の順に選択します。
- 6 削除されたボリュームを、ストレージデバイスから取りはずします。

ボリュームの消去

次が該当する場合は、ボリュームのデータを消すことができます。

- ボリュームは割り当て済みではありません。
- ボリュームは有効な NetBackup イメージを含んでいません。

NetBackup がメディアを消した後、NetBackup はメディアのラベルを書き込みます。

メディアを消去すると、NetBackup ではメディア上のデータをリストアまたはインポートできなくなります。

ボリュームが有効な NetBackup イメージを含んでいる場合は、ボリュームを割り当て解除し、NetBackup がラベル付けできるようにします。

p.521 の「[ボリュームの割り当てと割り当て解除について](#)」を参照してください。

次の表に、消去の形式を示します。

表 9-12 消去の形式

消去の形式	説明
SCSI 完全消去	メディアが巻き戻され、特定のデータパターンでデータが上書きされます。 SCSI 完全消去は、記録されたデータを完全に消去するため、セキュリティ消去とも呼ばれます。 メモ: 完全消去は、非常に時間のかかる操作であり、2 時間から 3 時間かかる場合もあります。たとえば、スタンドアロンドライブの 1 本の 4MM テープを消去するには、約 45 分かかります。

消去の形式	説明
SCSI クイック消去	メディアが巻き戻され、メディアに消去記号が記録されます。この記号の形式はドライブにより異なります。データの終わり (EOD) のマークの場合や、ドライブがデータとして認識できないよう記録されたパターンの場合などがあります。 ドライブによっては、クイック消去がサポートされていません (QUANTUM DLT7000 など)。クイック消去をサポートしていないドライブでは、書き込まれた新しいテープヘッダーが、アプリケーション固有のクイック消去として機能します。

メモ: NetBackup では、NDMP ドライブでの消去機能はサポートされていません。

ボリュームを消去する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[メディア (Media)]を展開します。
- 2 右ペインの[ボリューム (Volumes)]リストで、消去するボリュームを選択します。
複数のボリュームを選択する場合、そのすべてが同一のロボット内にある必要があります。
- 3 [処理 (Actions)]>[クイック消去 (Quick Erase)]または[処理 (Actions)]>[完全消去 (Long Erase)]を選択します。
- 4 消去ダイアログボックスで、消去操作を開始するためにメディアサーバーの名前を指定します。
メディアにある既存のラベルを上書きする場合は、[操作を実行する前に、メディアラベルを検証する (Verify media label before performing operation)]を選択しないでください。
- 5 [OK]をクリックします。
この操作は元に戻せないことを警告するダイアログボックスが表示されます。
- 6 消去操作を開始する場合、[OK]をクリックします。
[アクティビティモニター (Activity Monitor)]を使用して、操作の進捗状況および状態を表示できることを通知するダイアログボックスが表示されます。(多くのドライブ形式では、ラベル付けジョブやメディア消去ジョブを[アクティビティモニター (Activity Monitor)]から取り消せない場合があります)。[OK]をクリックします。
[操作を実行する前に、メディアラベルを検証する (Verify media label before performing operation)]が選択されていて、実際のボリュームラベルが想定されているラベルと一致しない場合、メディアは消去されません。

ボリュームの交換について

次のいずれかの場合、ボリュームを交換する (ボリュームを他のボリュームに置き換える) 必要があります。

- ボリュームの空き領域がなくなった場合 (この場合、ボリュームを交換するには、ボリュームをロボットテープライブラリから取り外します。
- ボリュームの最大マウント数を超えた場合
- ボリュームが古くなった (有効期限を過ぎた) 場合
- ボリュームが使用できなくなった場合 (メディアエラーが繰り返し発生する、など)

古いメディア ID を再利用するかどうかによって、次のサブセクションにあるいずれかのボリューム交換処理に従います。

新しいメディア ID を使用したボリューム交換

次が該当する場合は、この手順を使います。

- ボリュームに現在有効な NetBackup イメージが含まれている。
- 追加のバックアップ、複製、Vault 処理または他の目的でロボットライブラリにスロットが必要である。

次の表に、新しいメディア ID を使用してボリュームを交換する手順を示します。

表 9-13 新しいメディア ID を使用したボリューム交換

手順	作業	手順の詳細
手順 1	ボリュームを他の場所に移動します。 ボリュームがロボットライブラリ内に存在する場合、そのボリュームをロボットライブラリから取り外し、スタンドアロングループに移動します。	p.533 の「 ボリュームの移動について 」を参照してください。
手順 2	新しいボリュームを追加するか、取り外したボリュームの代わりに既存のボリュームを移動します。 新しいボリュームを追加する場合は、新しいメディア ID を指定します。その他の属性 (ロボットの位置情報、ボリュームプール、メディア形式など) については、取り外したボリュームと同じ値を指定します。	p.486 の「 ボリュームの追加について 」を参照してください。
手順 3	古いボリュームを物理的に交換します。 ボリュームのデータを取り込む必要がある場合は、古いボリュームを削除しないでください。	NetBackup マニュアルの対象外です。

古いメディア ID を使用したボリューム交換

ボリュームを交換し、同じメディア ID を再利用できます。これは場合によっては便利なことがあります。

メディア ID の再利用は、古いボリューム上のデータが必ずしもすべて必要でなく、ボリュームを再利用または破棄する場合にだけ行うようにしてください。

警告: 有効期限が切れていないバックアップイメージがあるボリュームのメディア ID を交換すると、重大な操作上の問題やデータの損失が発生する場合があります。

次の表に、古いメディア ID を使用してボリュームを交換する手順を示します。

表 9-14 古いメディア ID を使用したボリューム交換

手順	作業	手順の詳細
手順 1	ボリュームを削除します。	p.522 の「 ボリュームの削除 」を参照してください。
手順 2	古いボリュームをストレージデバイスから取り外します。ストレージデバイスに新しいボリュームを物理的に追加します。	p.528 の「 ボリュームの取り込みと取り出しについて 」を参照してください。
手順 3	NetBackup のボリューム構成に新しいボリュームを追加し、古いボリュームと同じ属性 (古いメディア ID など) を指定します。	p.486 の「 ボリュームの追加について 」を参照してください。
手順 4	そのボリュームの新しい有効期限を設定します。	p.521 の「 ボリュームの編集 」を参照してください。
手順 5	必要に応じて、ボリュームのラベルを付けます。ボリュームのラベル付けは必須ではありませんが、ラベルを付けるとメディアが認識された状態になります。外部メディアラベルと記録されたメディアラベルが一致し、モードがロボットライブラリのドライブと互換性があることが認識されます。	p.532 の「 ボリュームのラベル付け 」を参照してください。

凍結されたメディアについて

凍結されたメディアは NetBackup がバックアップのために使わないメディアです。

NetBackup は凍結されたメディアをバックアップとアーカイブの対象にしません。

NetBackup はメディア上のすべてのバックアップの保持期間が終了しても凍結されたメディア ID を NetBackup のメディアカタログから削除しません。NetBackup は凍結されたボリュームの割り当てをバックアップイメージが期限切れになったときに NetBackup ボリュームプールから解除しません。

凍結されたメディア上に存在する期限が切れていないすべてのバックアップイメージは引き続きリストアに利用可能です。

NetBackup は次のとおりテープボリュームを各種の理由で凍結します。

- NetBackup は読み込みまたは書き込みエラーが時間帯内のしきい値を超えたときにボリュームを凍結します。デフォルトのメディアエラーのしきい値は 2 です。つまり、デフォルトの時間帯 (12 時間) 以内に 3 回目のメディアエラーが発生すると、NetBackup によってメディアは凍結されます。

書き込みが失敗する一般的な原因には、書き込みヘッドが汚れていたり、メディアが古くなっていることなどがあります。これらの操作の理由は、NetBackup のエラーカタログに記録されます ([メディアのログ (Media Logs)] レポートまたは [すべてのログエントリ (All Log Entries)] レポートで参照できます)。

`-media_error_threshold` と `-time_window` オプションとともに NetBackup の `nbemmcmd` コマンドを併用して、デフォルト値を変更できます。

`nbemmcmd` コマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

- NetBackup は書き込みエラーが今後のテープの位置付けの信頼性を低くする場合にボリュームを凍結します。
- NetBackup はカタログのリカバリ中にカタログボリュームを凍結します。
- NetBackup は Write Once Read Many (WORM) メディアまたは WORM 対応のドライブがある場合にボリュームを凍結することがあります。
p.482 の「WORM メディアを管理するボリュームプールの使用について」を参照してください。

凍結されたボリュームを手動で解冻できます。

p.527 の「ボリュームの凍結または解冻」を参照してください。

ボリュームの凍結または解冻

NetBackup は状況によってボリュームを凍結します。

手動でボリュームを凍結または解冻するには次の手順を実行します。

メディアを凍結および解冻する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)] > [メディア (Media)] を展開します。
- 2 右ペインの [ボリューム (Volumes)] リストで、凍結または解冻するボリュームを選択します。
- 3 [処理 (Actions)] メニューで [凍結 (Freeze)] または [解冻 (Unfreeze)] を選択します。
- 4 ダイアログボックスで [OK] をクリックします。

ボリュームの取り込みと取り出しについて

メディアアクセスポート (MAP) 機能はロボットライブラリによって異なります。多くのライブラリでは、**NetBackup** が必要に応じて **MAP** の開閉を行います。ただし、一部のライブラリに実装されているフロントパネルからの取り込みおよび取り出し機能は、**NetBackup** でのメディアアクセスポートの使用と競合します。また、**NetBackup** では、メディアアクセスポートを使用するときにフロントパネルによる対話型の操作が必要なライブラリもあります。

ライブラリの操作マニュアルを参照して、メディアアクセスポートの機能について理解してください。あるライブラリは、正しく処理されないと、**NetBackup** の取り込みと取り出し機能との互換性が不完全になる場合があります。また、互換性がないライブラリが存在する場合もあります。

ロボットへのボリュームの取り込み

メディアアクセスポートを含んでいるロボットにボリュームを取り込むことができます。

取り込むボリュームは、操作が開始される前にメディアアクセスポート内に存在する必要があります。ポート内にボリュームが存在しない場合でも、メディアアクセスポート内にボリュームを配置するように指示するメッセージは表示されることなく、更新操作は継続されます。

MAP 内の各ボリュームが、ロボットライブラリに移動されます。**MAP** に複数のボリュームがある場合、**MAP** が空になるか、またはすべてのスロットの空きがなくなるまで、ロボットライブラリの空のスロットにボリュームが移動されます。

1 つまたは複数のボリュームが移動された後、**NetBackup** ではボリューム構成が更新されます。

一部のロボットでは、メディアアクセスポートが利用可能であることのみが表示されます。そのため、メディアアクセスポートがない一部のロボットでは、[更新する前にメディアアクセスポートを空にする (Empty media access port prior to update)] オプションが利用できる場合があります。

メディアアクセスポートを含んでいるロボットにボリュームを取り込むには

- 1 **MAP** にボリュームをロードします。
- 2 ロボットのインベントリを実行します。
p.555 の「[ロボットの内容に合わせた NetBackup ボリュームの構成の更新](#)」を参照してください。
- 3 [更新する前にメディアアクセスポートを空にする (Empty media access port prior to update)] を選択します。

ボリュームの取り出し

単一か複数のボリュームを取り出すことができます。

複数のロボットに存在している場合、1 つの操作で複数のボリュームを取り出すことはできません。

選択したすべてのボリュームを取り出すために十分な大きさのメディアアクセスポートが、ロボットライブラリに存在しない場合だけ、オペレータの操作が必要です。これらのロボット形式では、**NetBackup** は取り出し操作を継続するために、メディアアクセスポートからメディアを取り外すように要求します。

p.529 の「[メディア取り出しタイムアウト期間](#)」を参照してください。

ボリュームを取り出す方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に、[ボリューム (Volumes)]タブを選択します。
- 3 取り出す 1 つ以上のボリュームを選択します。
- 4 [ロボットから取り出し (Eject from robot)]をクリックします。
- 5 次のいずれかの処理を実行します。

ACS ロボット 取り出しに使用するメディアアクセスポートを選択し、[取り出し (Eject)]を選択します。

TLD ロボット [取り出し (Eject)]をクリックします。

選択したすべてのボリュームを取り出すために十分な大きさのメディアアクセスポートが、ロボットライブラリに存在しない場合もあります。多くのロボット形式では、残りのボリュームの取り出し操作を継続するために、メディアアクセスポートからメディアを取り外すように求められます。

p.430 の「[NetBackup のロボット形式](#)」を参照してください。

メディア取り出しタイムアウト期間

メディア取り出し期間 (エラー状態が発生するまでの時間) は、各ロボットの能力によって異なります。

次の表に、ロボットの取り出しタイムアウト期間を示します。

表 9-15 メディア取り出しタイムアウト期間

ロボット形式	タイムアウト期間
自動カートリッジシステム (ACS)	1 週間
DLT テープライブラリ (TLD)	30 分。

メモ: メディアが取り外されず、タイムアウト状態が発生した場合、メディアはロボットに戻され (取り込まれ) ます。ロボットのインベントリを実行し、その後、ロボットに戻されたメディアを取り出します。

メディアアクセスポートが存在しないロボットもあります。これらのロボットでは、オペレータがロボットからボリュームを手動で取り外す必要があります。

メモ: メディアの追加または取り外しを手動で行った場合は、**NetBackup** でロボットのインベントリを実行します。

バーコードの再スキャンと更新について

ロボットのメディアを再スキャンし、そのメディアのバーコードで **NetBackup** を更新できます。

ある特定の状況でのみ再スキャンし、更新する必要があります。

メモ: バーコードの再スキャンおよび更新は、**API** ロボット形式のボリュームには適用されません。

p.430 の「**NetBackup** のロボット形式」を参照してください。

バーコードの再スキャンと **NetBackup** データベースにないバーコードを追加する場合にのみ更新を行う場合 バーコードを再スキャンして更新します。

たとえば、新しいボリュームを追加するが、ロボットにテープを挿入しない場合、**NetBackup** はデータベースにバーコードを追加しません。このコマンドを使用すると、テープをロボットライブラリに挿入した後でバーコードを追加できます。

バーコードの再スキャンと更新を行わない場合 間違ったスロット内のメディア ID が示されているレポートを修正するために、再スキャンして更新しないでください。

その問題を修正するには、次の処理の 1 つを実行します。

- ボリュームを選択し、[処理 (Actions)]メニューで[移動 (Move)]を選択して、ボリュームを論理的に移動します。
- ボリュームの構成を更新することによってボリュームを論理的に移動します。

p.555 の「[ロボットの内容に合わせた NetBackup ボリュームの構成の更新](#)」を参照してください。

- ボリュームを物理的に正しいスロットへ移動します。

データベースのバーコード情報を更新しないでロボットのインベントリを入手するには、ロボットをインベントリ処理し、[内容の表示 (Show contents)]オプションを使います。

p.550 の「[ロボットのメディアの表示](#)」を参照してください。

バーコードの再スキャンと更新

バーコードを使用して、ロボットのメディアを再スキャンし、NetBackup を更新するには次の手順を使います。

メモ: バーコードの再スキャンおよび更新は、API ロボット形式のボリュームには適用されません。

p.430 の「[NetBackup のロボット形式](#)」を参照してください。

バーコードを再スキャンし、NetBackup データベースを更新する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[メディア (Media)]>[ロボット (Robots)]を展開します。
- 2 スキャンおよび更新するボリュームを含むロボットライブラリを選択します。
- 3 右ペインの[ボリューム (Volumes)]リストで、ボリュームを選択します。
- 4 [処理 (Actions)]メニューで[バーコードの再スキャン/更新 (Rescan/Update Barcodes)]を選択します。
- 5 [開始 (Start)]をクリックします。

更新の結果はダイアログボックスの出力セクションに表示されます。

NetBackup ボリュームのラベル付けについて

NetBackup はボリュームをラベル付けするとき、ボリュームの磁気テープにレコードを書き込みます。レコード (ラベル) は NetBackup メディア ID を含んでいます。

通常、NetBackup はボリュームのラベル付けを制御します。ほとんどの場合、NetBackup はバックアップのために最初に使われる時にボリュームをラベル付けします。

ボリュームラベルはメディアにバーコードがあるかどうかによって、次のように異なります。

- ロボットがバーコードをサポートし、メディアにバーコードがある場合、NetBackup はメディア ID のバーコードの最後の 6 文字を使います。
このデフォルトの操作を変更するには、メディア ID の生成規則に従い、特定の文字を指定および選択します。
p.508 の「[メディア ID 生成規則の構成](#)」を参照してください。
- バーコードのないボリュームの場合、デフォルトでは NetBackup はボリュームにメディア ID を割り当てるときに A という文字を接頭辞に使用します (たとえば、A00001)。
デフォルトの接頭辞を変更するには、vm.conf ファイルで構成オプション MEDIA_ID_PREFIX を使用します。
vm.conf ファイルについて詳しくは、『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』を参照してください。

メディアは以下の場合、自動的にラベル付けされません。

- NetBackup カタログバックアップで最後に使用されている。
それらがカタログバックアップのために使われない場合は、カタログバックアップボリュームをラベル付けしないでください。
- NetBackup 以外の認識されているアプリケーションのデータが含まれていて、その形式のメディアへの上書きを禁止するよう NetBackup が構成されている。

これらのメディア形式をラベル付けするには、次が該当する必要があります。

- NetBackup がメディアを割り当て済みでない
- メディアが有効な NetBackup イメージを含んでいない

ボリュームのラベル付け

ボリュームが有効な NetBackup のイメージを含んでいる場合は、ラベル付けできるようにボリュームを割り当て解除します。

p.521 の「[ボリュームの割り当てと割り当て解除について](#)」を参照してください。

メディアのラベル付けと、特定のメディア ID の割り当て (NetBackup による ID の割り当てではない) を行うには、bplabel コマンドを使用します。

メモ: ボリュームのラベル付けを行うと、その後は、メディアにあったデータを NetBackup ではリストアまたはインポートできなくなります。

メモ: 多くのドライブ形式では、ラベル付けジョブをアクティビティモニターから取り消すことができない場合があります。

p.532 の「[NetBackup ボリュームのラベル付けについて](#)」を参照してください。

ボリュームをラベル付けする方法

- 1

NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[メディア (Media)]を展開します。
- 2

右ペインの[ボリューム (Volumes)]リストで、ラベル付けするボリュームを選択します。

複数のボリュームを選択する場合、そのすべてが同一のロボット内にある必要があります。
- 3

[処理 (Actions)]メニューから[ラベル付け (Label)]を選択します。
- 4

[ラベル (Label)]ダイアログボックスで、次のラベル付け操作のプロパティを指定します。

メディアサーバー (Media server)	ラベルの書き込みを行うドライブを制御するメディアサーバーの名前を入力します。
操作を実行する前に、メディアラベルを検証する (Verify media label before performing operation)	このオプションを選択すると、ドライブ内のメディアが想定されているメディアであるかどうか検証されます。 メディアにある既存のラベルを上書きする場合は、[操作を実行する前に、メディアラベルを検証する (Verify media label before performing operation)]を選択しないでください。

- 5

[OK]をクリックします。
- 6

警告ダイアログボックスで[OK]をクリックします。

[操作を実行する前に、メディアラベルを検証する (Verify media label before performing operation)]が選択されていて、実際のボリュームラベルが想定されているラベルと一致しない場合、メディアのラベルの付け直しは実行されません。

ボリュームの移動について

ボリュームをロボットライブラリ内またはロボットライブラリ外に移動する場合、またはあるロボットから他のロボットに移動する場合は、次のように、物理的および論理的にボリュームを移動します。

- ボリュームを挿入または取り外して、ボリュームを物理的に移動します。一部のロボット形式では、**NetBackup** の取り込みオプションと取り出しオプションを使います。
- **NetBackup** を使用してボリュームを論理的に移動します。これによって **NetBackup** データベースが更新され、ボリュームが新しい場所に表示されます。

ボリュームをロボットライブラリ間で移動する場合は、次の操作を実行します。

- 一度スタンドアロンにボリュームを移動する。
- ボリュームを新しいロボットライブラリに移動する。

次の形式の論理的な移動が利用可能です。

- 1 つのボリュームの移動
- 複数のボリュームの移動
- 1 つのボリュームと複数のボリュームを組み合わせた移動
- ボリュームグループの移動

無効な場所にボリュームを移動することはできません。

移動を行う場合は、一度に 1 つの形式のメディアだけを選択し、移動先の指定も 1 カ所にするをお勧めします。

ボリュームを論理的に移動する場合の例を次に示します。

- ロボットライブラリのボリュームに空きがなく、さらにロボットライブラリの新しいボリュームに利用できるスロットがない場合。空きがないボリュームをスタンドアロンに移動して、ロボットからこのボリュームを取り外し、その後で空のスロットに新しいボリュームを構成するか、既存のボリュームをそのスロットに移動します。欠陥のあるボリュームを交換する場合も、同様の処理を実行します。
- ロボットライブラリから保管場所へ、または保管場所からロボットライブラリへボリュームを移動する場合。テープを保管場所に移動する場合、テープをスタンドアロンに移動します。
- あるロボットライブラリから他のロボットライブラリへボリュームを移動する場合 (ライブラリが停止している場合など)。
- 1 つまたは複数のボリュームのグループを変更する場合。

ロボットインベントリ更新オプションを使用したボリュームの移動

次の場合にこの手順を使います。

ボリュームをロボット内で移動します。	ロボットにバーコードリーダーが存在し、ボリュームに読み込み可能なバーコードが付いている必要があります。
--------------------	---

ボリュームをロボットから取り外します。	ボリュームがバーコードを含まない場合またはロボットがリーダーを備えていない場合も、この手順を使います。
---------------------	---

ロボットインベントリの更新を使用してボリュームを移動する方法

- 1 ボリュームを新しい場所に物理的に移動します。
 - 2 [処理 (Actions)]メニューから[ロボットのインベントリ (Inventory Robot)]を選択します。
 - 3 [ロボットのインベントリ (Robot Inventory)]ダイアログボックスで[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)]を選択します。
 - 4 その他のオプションも必要に応じて選択します。
- p.545 の「[ロボットインベントリについて](#)」を参照してください。

[処理 (Action)]メニューを使用したボリュームの移動

バーコードリーダーが存在するロボットライブラリにボリュームを移動すると、NetBackup によって NetBackup データベースが正しいバーコードで更新されます。

[処理 (Actions)]メニューを使用してボリュームを移動する方法

- 1 ボリュームを新しい場所に物理的に移動します。
- 2 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[メディア (Media)]を展開します。
- 3 右ペインの[ボリューム (Volumes)]リストで、移動するボリュームを選択します。
- 4 [処理 (Actions)]メニューから[移動 (Move)]を選択します。
- 5 [ボリュームの移動 (Move Volumes)]ダイアログボックスで、移動に関するプロパティを指定します。

1 つのボリュームを移動する場合、ダイアログボックスのエントリには、ボリュームの現在の場所が表示されます。

p.489 の「[ボリュームのプロパティ](#)」を参照してください。

ボリュームの再利用について

ボリュームを再利用する場合、メディア ID は既存のものを使用することも、新しく設定することもできます。

注意: ボリューム上のすべての NetBackup データが不要になった場合、またはボリュームが破損して使用できなくなった場合だけ、ボリュームを再利用してください。それ以外の場合は、操作に重大な問題が発生し、データが損失する可能性があります。

ボリュームの再利用と既存のメディア ID の使用

NetBackup では、ボリューム上の最後の有効なイメージが期限切れになると、ボリュームを再利用してボリュームのローテーションに戻します。

期限切れになっていないバックアップイメージがあるボリュームを再利用するには、ボリュームの割り当てを解除する必要があります。

p.521 の「[ボリュームの割り当てと割り当て解除について](#)」を参照してください。

新しいメディア ID を使用したボリュームの再利用

ボリュームの再利用は、そのボリュームが同じメディア ID を持つ他のボリュームの複製である場合に実行できます。また、ボリュームの命名規則を変更し、かつボリュームのバーコードを一致させる場合も、ボリュームを再利用できます。

次の表に、新しいメディア ID を使用してボリュームを再利用する手順を示します。

表 9-16 新しいメディア ID を使用したボリュームの再利用

手順	処理	説明
手順 1	ボリュームをストレージデバイスから物理的に取り外します。	p.528 の「 ボリュームの取り出し 」を参照してください。
手順 2	ボリュームがロボットライブラリにある場合は、スタンドアロンに移動します。	p.533 の「 ボリュームの移動について 」を参照してください。
手順 3	ボリュームの現在のマウント数および有効期限を記録します。	NetBackup Web UI で、[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]、[ボリューム (Volumes)] の順に移動します。
手順 4	ボリュームエントリを削除します。	p.522 の「 ボリュームの削除 」を参照してください。
手順 5	新しいボリュームエントリを追加します。	p.488 の「 ボリュームの追加 」を参照してください。 NetBackup は新しいボリュームエントリに対するマウント数を 0 (ゼロ) に設定するため、以前のマウント数を反映するには値を調整する必要があります。 最大マウント数を、次の値以下に設定します。 製造元が推奨するマウント数から以前に記録した値を引きます。
手順 6	ストレージデバイスにボリュームを物理的に追加します。	p.528 の「 ロボットへのボリュームの取り込み 」を参照してください。

手順	処理	説明
手順 7	マウント数を構成します。	次のコマンドを実行して、マウント数を以前に記録した値に設定します。 Windows ホストの場合: <code>install_path¥Vlmgr¥bin¥vmchange -m media_id -n number_of_mounts</code> UNIX のホスト: <code>/usr/openv/vlmgr/bin/vmchange -m media_id -n number_of_mounts</code>
手順 8	有効期限を以前に記録した日時に設定します。	p.521 の「 ボリュームの編集 」を参照してください。

ボリュームの一時停止、または一時停止の解除

ボリュームに含まれるすべてのバックアップの保持期間が切れるまで、一時停止中のボリュームをバックアップに使用することはできません。この場合、一時停止中のボリュームは NetBackup によって NetBackup のメディアカタログから削除され、NetBackup から割り当てが解除されます。

一時停止されたボリュームをリストアに利用することはできます。バックアップの期限が切れている場合、最初にバックアップをインポートします。

メディアを一時停止および一時停止解除する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[メディア (Media)]を選択します。
- 2 右ペインの[ボリューム (Volumes)]リストで、一時停止するボリュームまたは一時停止を解除するボリュームを選択します。
- 3 [処理 (Actions)]メニューで[一時停止 (Suspend)]または[一時停止の解除 (Unsuspend)]を選択します。
- 4 ダイアログボックスで[OK]をクリックします。

ボリュームプールの管理

次の項では、ボリュームプールを管理するために実行できる操作について説明します。

p.538 の「[ボリュームプールの追加](#)」を参照してください。

p.538 の「[ボリュームプールの編集または削除](#)」を参照してください。

ボリュームプールの追加

次の手順に従い、新しいボリュームを追加します。

ボリュームプールを追加する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に、[ボリュームプール (Volume pools)]タブを選択します。
- 3 [ボリュームプールを追加します (Add volume pool)]ボタンを選択します。
- 4 ボリュームプールのプロパティを指定します。
p.539 の「[ボリュームプールのプロパティ](#)」を参照してください。
- 5 次の方法でプールにボリュームを追加できます。
 - 新しいボリュームを NetBackup に追加します。
 - 既存のボリュームのプールを変更します。

ボリュームプールの編集または削除

ボリュームプールの編集

次の手順に従い、ボリュームプールのプロパティを変更します。変更できるプロパティには、プール形式 (スクラッチプールまたはカタログバックアッププール) などがあります。

ボリュームプールを編集するには

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に、[ボリュームプール (Volume pools)]タブを選択します。
- 3 [ボリュームプール (Volume Pools)]リストでプールを選択します。
- 4 [編集 (Edit)]を選択します。
- 5 ボリュームプールの属性を変更します。
p.539 の「[ボリュームプールのプロパティ](#)」を参照してください。
- 6 [更新 (Update)]を選択します。

ボリュームプールの削除

次のプールは削除できません。

- ボリュームが存在するボリュームプール
- NetBackup ボリュームプール

- None ボリュームプール
- デフォルトの CatalogBackup ボリュームプール
- DataStore ボリュームプール

ボリュームプールを削除する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に、[ボリュームプール (Volume pools)]タブを選択します。
- 3 削除するボリュームプールを見つけます。このボリュームプールが空であることを確認します。プールが空になっていない場合、プール内のすべてのボリュームのプール名を変更します。
- 4 ボリュームプールを選択します。
- 5 [削除 (Delete)]を選択します。
- 6 [確認 (Confirm)]を選択します。

ボリュームプールのプロパティ

ボリュームプールのさまざまなプロパティを指定できます。

次の表に示すのは、新しいプールの追加または既存のプールの変更を行う場合に、ボリュームプールに対して構成できるプロパティです。

表 9-17 ボリュームプールのプロパティ

プロパティ	説明
カタログバックアッププールにする (Catalog backup pool)	このオプションを選択すると、このボリュームプールはカタログバックアップに使用されます。このチェックボックスにチェックマークを付けると、NBU-Catalog ポリシーで使われるカタログバックアップ専用のプールが作成されます。専用のカタログボリュームプールを使用すると、カタログのリストア時間が短縮されます。 複数のカタログバックアップボリュームプールを使用できます。
説明 (Description)	ボリュームプールの簡潔な説明。

プロパティ	説明
部分的に使用されているメディアの最大数 (Maximum number of partially full media)	このプロパティは None プール、カタログバックアッププール、スクラッチボリュームプールには適用されません。 ボリュームプールにおける次の項目の一意の各組み合わせに対して、そのプールで部分的に使用できるメディアの数を指定します。 ■ ロボット ■ ドライブ形式 (Drive type) ■ 保持レベル (Retention level) デフォルト値は 0 (ゼロ) です。デフォルト値では、プールで許可される空きのないメディアの数は制限されません。
スクラッチへのスパンを優先 (Prefer span to scratch)	テープメディア操作が複数のメディアにまたがる場合に、NetBackup が追加メディアをどのように選択するかを指定します。このパラメータを yes (デフォルト) に設定すると、ジョブが新しいメディアにまたがる場合に、NetBackup はスクラッチプールからメディアを選択します。NetBackup は、バックアップボリュームプールから部分的に使用されているメディアを使用する代わりに、この処理を実行します。このパラメータを no に設定すると、NetBackup はバックアップボリュームプールから部分的に使用されているメディアを選択して、指定の操作を完了しようとします。no の設定で、NetBackup は常にスクラッチテープにまたがるのではなく、バックアップボリュームプールの部分的に使用されているメディアを使用できます。 <code>vmppool -create</code> または <code>vmppool -update</code> コマンドを使用して、[部分的に使用されているメディアの最大数 (Maximum number of partially full media)] オプションを設定します。
プール名 (Pool name)	[プール名 (Pool name)] は新しいボリュームプールの名前です。ボリュームプールの名前は 大文字/小文字の区別があり、20 文字まで 指定できます。
スクラッチプールにする (Scratch pool)	プールがスクラッチプールであることを指定します。 プールにはわかりやすい名前を使用し、その説明には <code>scratch pool</code> と入力することをお勧めします。 発生する可能性があるすべてのスクラッチメディア要求に対応する十分な形式と量のメディアをスクラッチプールに追加します。NetBackup は、既存のボリュームプールのメディアが使用のために割り当てられると、スクラッチメディアを要求します。 NetBackup で許可されるのは、1 つのスクラッチプールのみです。このオプションは、他のプールがスクラッチプールとして割り当てられていない場合にのみ利用可能です。

ボリュームグループの管理

ボリュームグループを管理する次のタスクを実行できます。

ボリュームグループの移動

ロボットライブラリからスタンドアロンストレージ、またはスタンドアロンストレージからロボットライブラリにボリュームグループを移動できます。

ボリュームグループを移動すると、NetBackup データベース内の位置情報だけが変更されます。ボリュームを新しい場所に物理的に移動する必要があります。

ボリュームグループを移動する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]、[メディア (Media)]の順に展開します。
- 2 右ペインで、移動するボリュームグループを選択します。
- 3 [処理 (Actions)]メニューから[移動 (Move)]を選択します。
- 4 [ボリュームグループの移動 (Move Volume Group)]ダイアログボックスで、移動に関するプロパティを指定します。

指定できるのは、移動の形式に関するプロパティのみです。

プロパティ	説明
-------	----

宛先 (Destination)	移動先は次のとおりです。
------------------	--------------

- ボリュームグループをロボットライブラリから移動する場合、宛先として[スタンドアロン (Standalone)]が選択されます。
- ボリュームグループをスタンドアロンから移動する場合、宛先として[ロボット (Robot)]が選択されます。

デバイスホスト (Device host)	ロボットライブラリを制御するホストです。
-----------------------	----------------------

ロボット (Robot)	宛先のロボットライブラリです。
--------------	-----------------

ボリュームグループ (Volume group)	移動するボリュームグループです。 スタンドアロンボリュームを移動する場合は「---」が表示されます。
--------------------------	---

- 5 ボリュームグループを論理的に移動した後で、ボリュームを新しい場所に物理的に移動します。

ボリュームグループの削除

ボリュームグループを削除するには、次の手順を実行します。

ボリュームグループを削除する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]>[メディア (Media)]を展開します。
- 2 ボリュームのリストで、グループ内のすべてのボリュームの割り当てが解除されていることを確認します。アプリケーションがボリュームの割り当てを解除するまでグループを削除できません。[割り当て日時 (Time Assigned)]列に値が表示されている場合は、ボリュームが割り当てられています。
p.521 の「[ボリュームの割り当てと割り当て解除について](#)」を参照してください。
- 3 右ペインでボリュームグループを選択します。
- 4 [編集 (Edit)]メニューで、[削除 (Delete)]を選択します。
- 5 確認のダイアログボックスで、処理の確認を行います。
- 6 削除されたボリュームを、ストレージデバイスから取り外します。

メディア共有について

メディア共有によって、メディアサーバーは書き込み (バックアップ) 用のメディアを共有できます。

メディアの共有には、次のような利点があります。

- 部分的に使用されるメディアの数が減少するため、メディアの使用効率が向上します。
- 必要なテープボリュームの数、および Vault 処理 (NetBackup Vault オプション) されるテープボリュームの数が減るため、メディア関連のコストを削減できます。
- ロボットライブラリに取り込むスクラッチメディアの数が減るため、管理負荷が低減されます。
- テープのマウント回数が減るため、メディアの寿命が長くなります。異なるメディアサーバーによる書き込み操作中に、メディアが再配置されたり、マウントが解除されることはありません。

メディアのマウント回数を減らすには、メディアを共有するメディアサーバーと、そのメディアへの書き込みが実行可能なドライブ間で、ハードウェアが適切に接続されている必要があります。適切に接続する必要があるハードウェアには、ファイバーチャネルハブやスイッチ、SCSI マルチプレクサ、SCSI とファイバー間のブリッジなどが含まれます。

次のメディア共有を構成できます。

- 無制限のメディア共有
p.543 の「[無制限のメディア共有の構成](#)」を参照してください。
- サーバークラスタとのメディアのメディア共有
p.543 の「[サーバークラスタとのメディア共有の構成](#)」を参照してください。¥

メモ: Sun StorageTek ACSLS によって制御されるロボットのアクセス制御機能は、メディアの共有に対応していません。メディアの共有では、要求元のホストの IP アドレスによってボリュームへのアクセスが制限されます。ACSLs 環境でメディアの共有を実装する場合は注意が必要です。

無制限のメディア共有の構成

制限がないメディア共有は NetBackup 環境のすべての NetBackup メディアサーバーと NDMP ホストが書き込み用のメディアを共有できることを意味します。

メモ: 無制限のメディア共有もメディア共有サーバーグループも使わないでください。両方とも使用した場合、NetBackup の動作は定義されません。

無制限のメディア共有を構成する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)] の順に選択します。
- 3 プライマリサーバーを選択します。
- 4 必要に応じて、[接続 (Connect)] を選択します。次に、[処理 (Actions)]、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)] の順に選択します。
- 5 [メディア (Media)] を選択します。
- 6 [すべてのメディアサーバーに対して無制限のメディア共有を有効化 (Enable Unrestricted Media Sharing for All Media Servers)] を選択します。

NetBackup 環境で無制限のメディア共有を有効にする場合は、メディア共有グループを作成する必要はありません。
- 7 [保存 (Save)] を選択します。

サーバーグループとのメディア共有の構成

サーバーグループとのメディア共有はグループのメンバーとの共有を制限します。

p.385 の「[NetBackup サーバーグループについて](#)」を参照してください。

表 9-18 に、サーバーグループとのメディア共有を構成するプロセスの概要を示します。

メモ: 無制限のメディア共有もメディア共有サーバーグループも使わないでください。両方とも使用した場合、NetBackup の動作は定義されません。

表 9-18 サーバーグループとのメディア共有の構成プロセスの概要

手順	処理	説明
手順 1	メディアサーバー、ロボット、ドライブどうしの接続、およびメディアサーバー、ロボット、ドライブ間の接続が適切に行われていることを確認します。	NetBackup マニュアルの対象外です。
手順 2	メディア共有サーバーグループを構成します。	p.385 の「 サーバーグループの追加 」を参照してください。
手順 3	任意で、メディア共有のボリュームプールを構成します。	それらのプールに[部分的に使用されているメディアの最大数 (Maximum number of partially full media)]プロパティを設定します。 p.538 の「 ボリュームプールの追加 」を参照してください。 p.538 の「 ボリュームプールの編集または削除 」を参照してください。
手順 4	ボリュームプールとメディア共有グループを使うバックアップポリシーを構成します。	バックアップポリシーの[ポリシーボリュームプール (Policy volume pool)]および[メディア所有者 (Media owner)]プロパティを設定します。 p.681 の「 バックアップポリシーの作成 」を参照してください。

ロボットのインベントリ

この章では以下の項目について説明しています。

- [ロボットインベントリについて](#)
- [ロボットのインベントリを実行するタイミング](#)
- [ロボットの内容の表示について](#)
- [ロボットのメディアの表示](#)
- [ボリューム構成とロボットの内容の比較について](#)
- [ボリュームの構成とロボットのメディアの比較](#)
- [ボリューム構成の変更のプレビューについて](#)
- [ロボットのボリューム構成の変更のプレビュー表示](#)
- [NetBackup ボリュームの構成の更新について](#)
- [ロボットの内容に合わせた NetBackup ボリュームの構成の更新](#)
- [ロボットインベントリオプション](#)
- [vmphinyinv 物理インベントリユーティリティについて](#)

ロボットインベントリについて

ロボットインベントリはメディアの存在を検証する論理操作です。(ロボットインベントリはメディアのデータをインベントリ処理しません。)

ロボット内のボリュームの追加、取り外しまたは移動を物理的に行った後、ロボットのインベントリを使用して **NetBackup** のボリューム構成を更新します。

次の表に、バーコードリーダーを含み、バーコード化されたメディアを含むロボットライブラリのロボットインベントリオプションを示します。

表 10-1 ロボットインベントリオプション

インベントリオプション	説明
内容の表示 (Show contents)	ロボットの内容を問い合わせ、選択したロボットライブラリにあるメディアを表示します。 NetBackup データベースの確認や変更は行いません。 p.549 の「ロボットの内容の表示について」を参照してください。 バーコードリーダーなしのロボットライブラリまたはバーコードなしのメディアを含むロボットライブラリについて、ロボットの内容のみを示すことができます。ただし、メディアの管理を自動化するには、より詳細な情報が必要です。そのようなロボットをインベントリ処理するために <code>vmphyinv</code> 物理インベントリユーティリティを使います。 p.557 の「vmphyinv 物理インベントリユーティリティについて」を参照してください。
内容とボリュームの構成の比較 (Compare contents with volume configuration)	ロボットの内容を問い合わせ、ロボットの内容と NetBackup データベースの内容を比較します。データベースを変更しません。 p.551 の「ボリューム構成とロボットの内容の比較について」を参照してください。
ボリューム構成の変更をプレビュー表示 (Preview volume configuration changes)	ロボットの内容を問い合わせ、ロボットの内容と NetBackup データベースの内容を比較します。一致しない場合は、NetBackup のボリューム構成を変更することをお勧めします。 p.552 の「ボリューム構成の変更のプレビューについて」を参照してください。
ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)	ロボットの内容を問い合わせ、必要に応じて、データベースを更新してロボットの内容と一致させます。ロボットの内容が NetBackup データベースと同じなら、変更は行われません。 p.554 の「NetBackup ボリュームの構成の更新について」を参照してください。

ロボットのインベントリを実行するタイミング

次の表に、ロボットのインベントリを実行するタイミングと、インベントリに使用するオプションを決定する条件を示します。

表 10-2 ロボットのインベントリの条件

処理	使用するインベントリオプション
ロボットの内容特定する	[内容の表示 (Show contents)] オプションを使用して、ロボット内のメディアと、可能であればバーコード番号を特定します。 p.550 の「ロボットのメディアの表示」を参照してください。

処理	使用するインベントリオプション
ボリュームがロボット内で物理的に移動されているかどうかを判別する	バーコードリーダーを備えたロボットと、バーコード付きのメディアが存在するロボットに対して、[内容とボリュームの構成の比較 (Compare contents with volume configuration)]オプションを使用します。 p.552 の「ボリュームの構成とロボットのメディアの比較」を参照してください。
新しいボリューム (NetBackup メディア ID がないボリューム) をロボットに追加する	NetBackup でサポートされているロボットに対して、[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)]オプションを使用します。 更新すると、(バーコードまたは指定した接頭辞に基づいて) メディア ID が作成されます。 p.555 の「ロボットの内容に合わせた NetBackup ボリュームの構成の更新」を参照してください。
新しいメディアを NetBackup に追加する前に、そのメディアにバーコードがあるかどうかを判別する	[ボリューム構成の変更をプレビュー表示 (Preview volume configuration changes)]オプションを使用して、ロボットの内容と NetBackup のボリューム構成情報を比較します。 結果を確認したら、必要に応じて[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)]オプションを使用し、ボリュームの構成を更新します。 p.555 の「ロボットの内容に合わせた NetBackup ボリュームの構成の更新」を参照してください。
既存のボリューム (すでに NetBackup メディア ID があるボリューム) をロボットに挿入する	ロボットでバーコードがサポートされていて、ボリュームに読み込み可能なバーコードが付いている場合、[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)]オプションを使用します。NetBackup によって位置情報が更新され、新しいロボット場所が表示されます。また、NetBackup によってロボットホスト、ロボット形式、ロボット番号およびスロット場所も更新されます。ボリュームが割り当てられているボリュームグループを指定します。 p.555 の「ロボットの内容に合わせた NetBackup ボリュームの構成の更新」を参照してください。 ロボットがバーコードをサポートしていないか、またはボリュームが読み込み可能なバーコードを含まない場合は、ボリュームを移動するか、または物理インベントリユーティリティを使います。 p.533 の「ボリュームの移動について」を参照してください。 p.557 の「vmphyinv 物理インベントリユーティリティについて」を参照してください。
ロボットとスタンドアロンの間で既存のボリューム (すでに NetBackup メディア ID があるボリューム) を移動する	ロボットライブラリでバーコードがサポートされていて、ボリュームに読み込み可能なバーコードが付いている場合、[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)]オプションを使用します。NetBackup によって位置情報が更新され、新しいロボット場所またはスタンドアロン場所が表示されます。 p.555 の「ロボットの内容に合わせた NetBackup ボリュームの構成の更新」を参照してください。

処理	使用するインベントリオプション
既存のボリューム (すでに NetBackup メディア ID があるボリューム) をロボット内で移動する	ロボットでバーコードがサポートされていて、ボリュームに読み込み可能なバーコードが付いている場合、[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)] オプションを使用します。NetBackup によって位置情報が更新され、新しいスロット場所が表示されます。 p.555 の「ロボットの内容に合わせた NetBackup ボリュームの構成の更新」を参照してください。 ロボットがバーコードをサポートしていないか、またはボリュームが読み込み可能なバーコードを含まない場合は、ボリュームを移動するか、または物理インベントリユーティリティを使います。 p.533 の「ボリュームの移動について」を参照してください。 p.557 の「vmphyinv 物理インベントリユーティリティについて」を参照してください。
ロボット間で既存のボリューム (すでに NetBackup メディア ID があるボリューム) を移動する	ロボットライブラリでバーコードがサポートされていて、ボリュームに読み込み可能なバーコードが付いている場合、[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)] オプションを使用します。NetBackup は NetBackup ボリューム構成情報を更新します。 p.555 の「ロボットの内容に合わせた NetBackup ボリュームの構成の更新」を参照してください。 ロボットがバーコードをサポートしていないか、またはボリュームが読み込み可能なバーコードを含まない場合は、ボリュームを移動するか、または物理インベントリユーティリティを使います。 p.533 の「ボリュームの移動について」を参照してください。 p.557 の「vmphyinv 物理インベントリユーティリティについて」を参照してください。 いずれの操作でも、次の更新を実行します。 ■ 最初にボリュームをスタンドアロンに移動 ■ 次にボリュームを新しいロボットに移動 両方の更新を行わないと、NetBackup ではエントリが更新されず、[更新に失敗しました (Update failed)] というエラーが記録されます。
既存のボリューム (すでに NetBackup メディア ID があるボリューム) をロボットから取り外す	NetBackup でサポートされているロボットに対して、[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)] オプションを使用し、NetBackup のボリューム構成情報を更新します。 p.555 の「ロボットの内容に合わせた NetBackup ボリュームの構成の更新」を参照してください。

ロボットの内容の表示について

[内容の表示 (Show contents)]は選択したロボットライブラリをインベントリ処理し、レポートを生成します。この操作は **NetBackup** データベースを調べたり変更したりしません。このオプションはロボットの内容の特定に使用します。

表示される内容はロボット形式によって決まります。

次の表はレポートの内容を記述したものです。

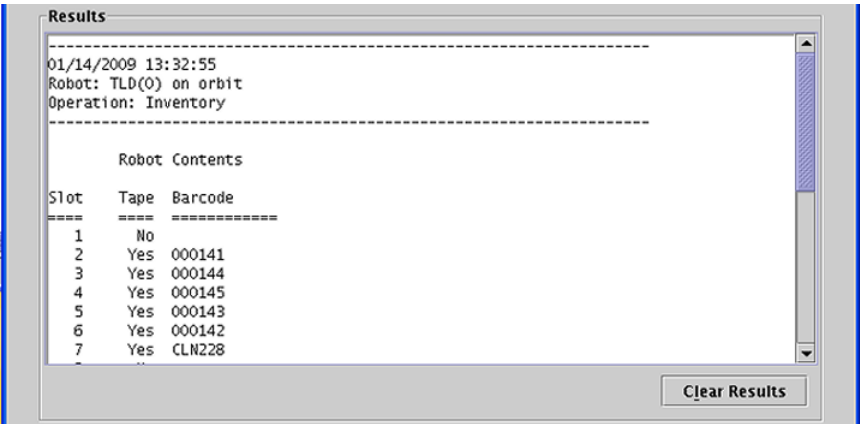
メモ: UNIX の場合: ボリュームがドライブ内にマウントされている場合、インベントリレポートには、ボリュームをドライブに移動したスロットが表示されます。

表 10-3 [内容の表示 (Show contents)]の説明

ロボットとメディア	レポートの内容
バーコードリーダーを備え、バーコード付きのメディアが存在するロボット	各スロットにメディアが存在するかどうかと、そのメディアのバーコードが表示されます。
バーコードリーダーを備えていないロボットまたはバーコードがないメディアが存在するロボット	各スロットにメディアが存在するかどうかが表示されます。
API ロボット	ロボット内のボリュームのリストが表示されます。 p.550 の「API ロボットのインベントリ結果について」 を参照してください。

次の図はレポートの例を示します。

図 10-1 [内容の表示 (Show contents)]レポート



p.550 の「ロボットのメディアの表示」を参照してください。

API ロボットのインベントリ結果について

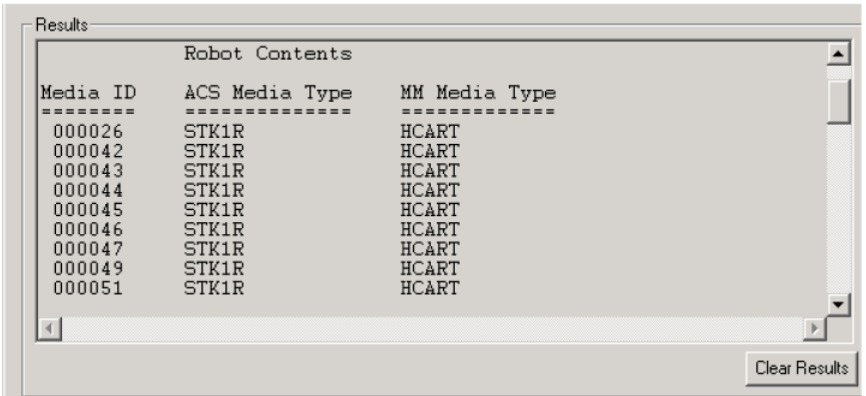
次の表に、API ロボットのロボットインベントリの内容を示します。

表 10-4 API ロボットレポートの内容

ロボット形式	レポートの内容
ACS	ACS ライブラリソフトウェアから受信した結果には、次の内容が表示されます。 ■ ACS ライブラリソフトウェアのボリューム ID。NetBackup メディア ID は ACS ライブラリソフトウェアのボリューム ID に対応します。 ■ ACS のメディア形式。 ■ NetBackup Media Manager のメディア形式。 ■ ACS ライブラリソフトウェアのメディア形式と、対応する NetBackup Media Manager のメディア形式間のマッピング (任意のバーコード規則は考慮されません)。

次の図に、ACS ロボットの結果を示します。他の API ロボットの結果も同様です。

図 10-2 [内容の表示 (Show contents)]レポート (API ロボット)



Results		
Robot Contents		
Media ID	ACS Media Type	MM Media Type
000026	STK1R	HCART
000042	STK1R	HCART
000043	STK1R	HCART
000044	STK1R	HCART
000045	STK1R	HCART
000046	STK1R	HCART
000047	STK1R	HCART
000049	STK1R	HCART
000051	STK1R	HCART

ロボットのメディアの表示

ロボットにあるメディアを示すために次の手順を使います。

p.545 の「ロボットインベントリについて」を参照してください。

p.556 の「ロボットインベントリオプション」を参照してください。

ロボットのメディアを表示する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に、[ロボット (Robots)]タブを選択します。
- 3 インベントリを実行するロボットを選択します。
- 4 [ロボットのインベントリ (Inventory robot)]を選択します。
- 5 [インベントリ操作 (Inventory operation)]設定に移動して、[内容の表示 (Show contents)]を選択します。
- 6 [開始 (Start)]を選択してインベントリを開始します。

ボリューム構成とロボットの内容の比較について

[内容とボリュームの構成の比較 (Compare contents with volume configuration)]は NetBackup データベースの内容とロボットライブラリの内容を比較します。結果に関係なく、データベースは変わりません。

表 10-5 内容比較の説明

ロボットとメディア	レポートの内容
ロボットはバーコードを読み込むことができます	レポートはロボットと NetBackup データベースの違いを示します
ロボットはバーコードを読み込むことができません	レポートはスロットがボリュームを含んでいるかどうかのみ示します メディアがバーコードを崩している場合、この操作はボリュームがロボット内で物理的に移動されているかどうかを判別するために有用です。
API ロボットの場合	NetBackup データベース内のメディア ID およびメディア形式が、ベンダーのロボットライブラリソフトウェアから受信した情報と比較されます。

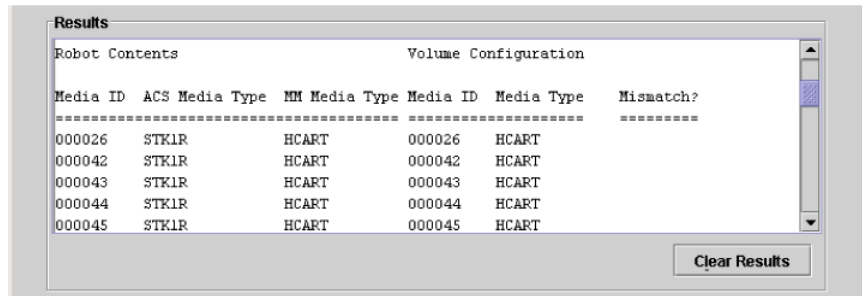
NetBackup データベースがロボットライブラリの内容と一致しないことが表示された場合、次の操作を実行します。

- ボリュームを物理的に移動します。
- NetBackup データベースを更新します。[移動 (Move)]を使用するか、[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)]オプションを使用します。

p.554 の「[NetBackup ボリュームの構成の更新について](#)」を参照してください。

次の図にサンプルの比較レポートを示します。

図 10-3 [内容とボリュームの構成の比較 (Compare contents with volume configuration)]レポート (API ロボット)



Robot Contents			Volume Configuration		
Media ID	ACS Media Type	MM Media Type	Media ID	Media Type	Mismatch?
000026	STKLR	HCART	000026	HCART	
000042	STKLR	HCART	000042	HCART	
000043	STKLR	HCART	000043	HCART	
000044	STKLR	HCART	000044	HCART	
000045	STKLR	HCART	000045	HCART	

Clear Results

p.552 の「ボリュームの構成とロボットのメディアの比較」を参照してください。

ボリュームの構成とロボットのメディアの比較

NetBackup データベースとロボットのメディアを比較するために次の手順を使用します。

p.545 の「ロボットインベントリについて」を参照してください。

p.556 の「ロボットインベントリオプション」を参照してください。

ボリュームの構成とロボットのメディアを比較する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に、[ロボット (Robots)]タブを選択します。
- 3 [処理 (Actions)]メニューから[ロボットのインベントリ (Inventory robot)]を選択します。
- 4 インベントリを実行する[デバイスホスト (Device host)]と[ロボット (Robot)]を選択します。
- 5 [内容とボリュームの構成の比較 (Compare contents with volume configuration)]を選択します。
- 6 [開始 (Start)]を選択してインベントリを開始します。

ボリューム構成の変更のプレビューについて

NetBackup データベースを更新する前に変更をプレビューするためにこのオプションを使用します。このオプションを使用すると、NetBackup データベースに新しいメディアを追加する前に、すべての新しいメディアにバーコードが付いているかどうかを確認できます。

メモ: 構成の変更をプレビューした後に **NetBackup** データベースを更新すると、更新の結果がプレビュー操作の結果と一致しない場合があります。この場合、プレビューした時点と更新した時点の間に変更が発生していることが考えられます。ここで変更が発生していると考えられる箇所には、ロボットの状態、**NetBackup** データベース、バーコード規則などがあります。

```
-----  
September 26, 2024 15:31:45 GMT  
Robot: TLD(1) on server.domain.com  
Operation: Preview of inventory and update  
Total 1 robot inventory volume config results  
-----  
  
Generating list of recommended changes ...  
  
Proposed Change(s) to Update the Volume Configuration  
=====
```

Logically move media ID 1A007B (barcode 001A007B) from standalone to slot 264.

p.555 の「[ロボットの内容に合わせた NetBackup ボリュームの構成の更新](#)」を参照してください。

ロボットのボリューム構成の変更のプレビュー表示

ロボットのボリューム構成の変更をプレビュー表示するには、このトピックの手順を使います。

p.552 の「[ボリューム構成の変更のプレビューについて](#)」を参照してください。

p.556 の「[ロボットインベントリオプション](#)」を参照してください。

ロボットのボリューム構成の変更をプレビュー表示するには

- 1 必要に応じて、ロボットライブラリに新しいボリュームを挿入します。
- 2 **NetBackup Web UI** を開きます。
- 3 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に、[ロボット (Robots)]タブを選択します。
- 4 インベントリを実行するロボットを選択します。
- 5 [ロボットのインベントリ (Inventory robot)]を選択します。
- 6 インベントリを実行するデバイスホストとロボットを選択します。

- 7 [ボリューム構成の変更をプレビュー表示 (Preview volume configuration changes)]を選択します。

メモ: 構成の変更をプレビューした後に NetBackup データベースを更新すると、更新の結果がプレビュー操作の結果と一致しない場合があります。この場合、プレビューした時点と更新した時点の間に変更が発生していることが考えられます。ここで変更が発生していると考えられる箇所には、ロボットの状態、NetBackup データベース、バーコード規則などがあります。

- 8 NetBackup が新しいメディアに名前を付け、属性を割り当てるために使用するデフォルトの設定と規則を変更するには、[詳細オプション (Advanced options)]で設定を調整します。
p.487 の「[メディア名および属性ルールの構成について](#)」を参照してください。
- 9 プレビュー表示の操作の前にメディアアクセスポートにある任意のメディアを取り込むには、[更新する前にメディアアクセスポートを空にする (Empty media access port prior to update)]を選択します。
- 10 [開始 (Start)]を選択してインベントリのプレビューを開始します。

NetBackup ボリュームの構成の更新について

[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)]ロボットインベントリオプションは、ロボットの内容と一致するようにデータベースを更新します。ロボットの内容が NetBackup データベースと同じなら、変更は行われません。

NetBackup メディア ID がない新しいボリュームの場合、更新はメディア ID を作成します。メディア ID は指定した規則によって決まります。

p.556 の「[ロボットインベントリオプション](#)」を参照してください。

API ロボットの場合、ボリュームのシリアル番号またはメディア ID にサポートされていない文字が含まれていると、更新によってエラーが戻されます。

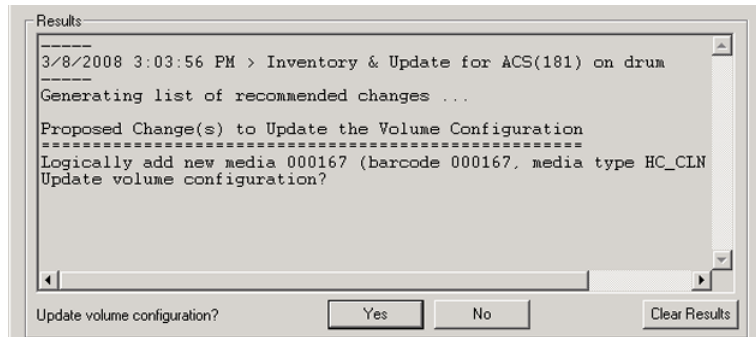
バーコードリーダーのないロボットの場合、新しいメディア ID は指定するメディア ID 接頭辞に基づきます。同様に、読み込み可能なバーコードのないボリュームの場合、新しいメディア ID は指定するメディア ID 接頭辞に基づきます。

図 10-4 は ACS ロボットの例です。他の API ロボットでの結果も同様です。

ロボットインベントリの更新は、API ロボットのボリュームシリアル番号またはメディア識別子にサポートされていない文字を見つけた場合エラーを戻します。

p.555 の「[ボリュームの更新の前提条件](#)」を参照してください。

図 10-4 [ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)]レポート (API ロボット)



p.555 の「[ロボットの内容に合わせた NetBackup ボリュームの構成の更新](#)」を参照してください。

ボリュームの更新の前提条件

次はボリューム構成を更新するためのロボットの前提条件とメディアの前提条件です。

- ロボットライブラリはバーコードを読み込む必要があります。
- ライブラリのボリュームには読み込み可能なバーコードが必要です。

ロボットの内容と **NetBackup** のボリュームの構成を比較して、ロボットライブラリおよびボリュームのバーコード機能を確認できます。

p.552 の「[ボリュームの構成とロボットのメディアの比較](#)」を参照してください。

ロボットライブラリでバーコードがサポートされていない場合、またはボリュームに読み込み可能なバーコードが付いていない場合は、比較操作の結果を保存します。[詳細オプション (Advanced Options)]ダイアログボックスの[メディアの設定 (Media Settings)]タブで接頭辞が割り当てられている場合、この結果を使用してメディア ID の接頭辞を判別できます。

ロボットの内容に合わせた **NetBackup** ボリュームの構成の更新

ロボットの内容に合わせて **NetBackup** データベースを更新するために、この項の手順を使用します。

p.554 の「[NetBackup ボリュームの構成の更新について](#)」を参照してください。

p.556 の「[ロボットインベントリオプション](#)」を参照してください。

ロボットの内容に合わせてボリュームの構成を更新する方法

- 1

必要に応じて、ロボットライブラリに新しいボリュームを挿入します。
- 2

NetBackup Web UI を開きます。
- 3

左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に、[ロボット (Robots)]タブを選択します。
- 4

[処理 (Actions)]、[ロボットのインベントリ (Inventory robot)]の順に選択します。
- 5

インベントリを実行するデバイスホストとロボットを選択します。
- 6

[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)]を選択します。

メモ: 構成の変更をプレビューした後に NetBackup データベースを更新すると、更新の結果がプレビュー操作の結果と一致しない場合があります。この場合、プレビューした時点と更新した時点の間に変更が発生していることが考えられます。ここで変更が発生していると考えられる箇所には、ロボットの状態、NetBackup データベース、バーコード規則などがあります。

- 7

NetBackup が新しいメディアに名前を付け、属性を割り当てるために使用するデフォルトの設定と規則を変更するには、[詳細オプション (Advanced options)]を選択します。
- p.487 の「[メディア名および属性ルールの構成について](#)」を参照してください。
- 8

更新操作の前に、メディアアクセスポート内に存在するメディアを取り込むには、[更新する前にメディアアクセスポートを空にする (Empty media access port prior to update)]を選択します。
- 9

[開始 (Start)]を選択してインベントリの更新を開始します。

ロボットインベントリオプション

次の表に、ロボットインベントリオプションを示します。

表 10-6 ロボットインベントリオプション

オプション	説明
詳細オプション (Advanced Options)	[詳細オプション (Advanced options)]メニューは、[ボリューム構成の変更をプレビュー表示 (Preview volume configuration changes)]か[ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)]が選択されると利用可能になります。 このメニューには、追加の構成オプションが含まれています。 p.487 の「メディア名および属性ルールの構成について」を参照してください。

オプション	説明
デバイスホスト (Device host)	[デバイスホスト (Device host)] オプションはロボットを制御するホストです。
更新する前にメディアアクセスポートを空にする (Empty media access port prior to update)	[更新する前にメディアアクセスポートを空にする (Empty media access port prior to update)] は、この機能をサポートしているロボットに対してのみ有効です。 更新を開始する前に、ロボットのメディアアクセスポート内に存在するボリュームをロボットに取り込むには、[更新する前にメディアアクセスポートを空にする (Empty media access port prior to update)] を選択します。 取り込むボリュームは、操作が開始される前にメディアアクセスポート内に存在する必要があります。[更新する前にメディアアクセスポートを空にする (Empty media access port prior to update)] を選択した場合は、メディアアクセスポートが空でも、メディアアクセスポート内にボリュームを配置するように指示するメッセージは表示されません。 メモ: NetBackup を使用してロボットからボリュームを取り出した場合、取り込み操作を開始する前にメディアアクセスポートからボリュームを取り外します。これを行わないと、取り込みポートと取り出しポートが同じ場合は、取り出したボリュームがロボットライブラリに再度取り込まれる可能性があります。
ロボット (Robot)	インベントリ処理するロボットを選択するには、[ロボット (Robot)] オプションを使います。
内容の表示 (Show contents)	選択したロボットライブラリにあるメディアを表示します。NetBackup データベースの確認や変更は行いません。 p.549 の「ロボットの内容の表示について」を参照してください。
内容とボリュームの構成の比較 (Compare contents with volume configuration)	ロボットライブラリの内容と NetBackup データベースの内容が比較されますが、データベースの変更は行われません。 p.551 の「ボリューム構成とロボットの内容の比較について」を参照してください。
ボリューム構成の変更をプレビュー表示 (Preview volume configuration changes)	ロボットライブラリの内容と NetBackup データベースの内容が比較されます。一致しない場合は、NetBackup のボリューム構成を変更することをお勧めします。 p.552 の「ボリューム構成の変更のプレビューについて」を参照してください。
ボリュームの構成の更新 (Update volume configuration)	データベースをロボットの内容と一致するように更新します。ロボットの内容が NetBackup データベースと同じなら、変更は行われません。 p.554 の「NetBackup ボリュームの構成の更新について」を参照してください。

vmphyinv 物理インベントリユーティリティについて

次のロボットライブラリでは、NetBackup はメディアの存在のみを報告します。

- バーコードリーダーのないロボット
- バーコードがないメディアを含んでいるロボット

メディアの管理を自動化するには、より詳細な情報が必要です。そのようなロボットに対して vmphyinv 物理インベントリユーティリティを使います。

vmphyinv 物理インベントリユーティリティは、バーコードのないテープライブラリのインベントリに使用します。このユーティリティは次の操作を実行します。

- 各テープのマウント
 - テープヘッダーの読み込み
 - 各スロットのテープの識別
 - **NetBackup** のボリューム構成の更新
- vmphyinv -verbose オプションを使用すると、推奨する変更の詳細情報を表示できます。-verbose オプションを指定すると、利用可能なドライブの数、それぞれのテープの内容、メディアがカタログテープかどうかの情報が表示されます。(NetBackup カatalogテープの場合、概略情報のメディア形式列に[NetBackup database]と表示されます。)
- この詳細情報は、標準エラー出力 (stderr) に書き込まれます。情報を保存するには、stderr をファイルにリダイレクトします。

vmphyinv はコマンドラインユーティリティです。vmphyinv コマンドの構文についての追加情報を参照できます。

詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

表 10-7 vmphyinv の機能、要件、制限、いつ使うか

項目	説明
vmphyinv の機能	vmphyinv ユーティリティの機能は次のとおりです。 ■ 任意のプライマリサーバー、メディアサーバー、または SAN メディアサーバーから実行できます。 ■ バーコード付きのテープが存在するライブラリでも使用できます。このユーティリティではメディアの内容を検証できるためです。 ■ NetBackup テープ形式をサポートします。 ■ リモート管理をサポートします。ドライブが接続されているホストから vmphyinv を実行する必要はありません。 ■ ロボット内のドライブが異なるホストに接続されている場合でも、ロボット内の複数のドライブの使用を試行します。 ■ 共有ドライブでも動作します (NetBackup Shared Storage Option の場合)。 ■ すべてのサポート対象の SCSI ベースのロボット形式をサポートします。 ■ スタンドアロンドライブでは、1 つのメディアのインベントリを実行するために使用できます。ドライブの指定には -u オプションまたは -n オプションを使用します。ドライブにメディアがあることと、ドライブが利用可能であることが必要です。

項目	説明
vmphyinv の要件と制限	vmphyinv ユーティリティの要件および制限事項は、次のとおりです。 ■ アプリケーションの種類に基づいてボリュームレコードを区別することはできません。 ■ メディアをロボットドライブからスタンドアロンドライブに移動すると、そのメディアに新しいボリュームグループを指定することはできません。
vmphyinv を使用する場合	次の場合は、vmphyinv を使用して、NetBackup の NetBackup データベースを更新します。 ■ バーコードリーダーを備えていないロボットまたはバーコードが付いていないメディアが存在するロボットのインベントリを実行する場合。 ■ ロボットライブラリに新しいメディアを挿入したが、このメディアに対応する NetBackup のボリュームレコードが存在しない場合。vmphyinv のスロットの範囲またはリストオプションを使用して、インベントリ操作を実行します。ボリュームレコードを NetBackup データベースに追加する必要はありません。 ■ 不明なメディア ID があるメディアまたはグローバル一意識別子 (GUID) があるメディアがロボットに挿入されている場合。 たとえば、スロット 11 から 20 に異なるテープライブラリのメディアを 10 個挿入します。これらのテープの ID が不明であると想定します。vmphyinv のスロットの範囲またはリストオプションを使用して、インベントリ操作を実行します。vmphyinv ユーティリティでは、メディアをマウントし、テープヘッダーを読み込むことによって、メディア ID を判別し、メディアのレコードを NetBackup データベースに追加します。 ■ 不適切な場所に配置されているメディアが存在し、NetBackup データベースにこれらのメディアの物理的な場所が正しく反映されていない場合。vmphyinv のオプションを使用して、ロボットのインベントリ、またはロボット内のメディアのサブセットのインベントリを実行します。

vmphyinv による物理インベントリの実行方法

物理インベントリの場合、vmphyinv ユーティリティによって次の順序で操作が行われます。

- メディアをマウントするドライブのリストの取得
p.560 の「[ドライブの vmphyinv リストについて](#)」を参照してください。
- マウントするメディアのリストの取得
p.560 の「[vmphyinv でマウントするメディアについて](#)」を参照してください。
- メディアのマウントおよびテープヘッダーの読み込み
p.561 の「[vmphyinv のメディアのマウント方法とテープヘッダーの読み込み方法](#)」を参照してください。
- NetBackup データベースの更新
p.563 の「[vmphyinv による NetBackup データベースの更新方法](#)」を参照してください。

ドライブの vmphyinv リストについて

vmphyinv ユーティリティがメディアのマウントに使用するドライブのリストは、NetBackup データベースから取得されます。このドライブは、ローカルに構成されている必要はありません。

使用するドライブは指定できません。ただし、使用するドライブの最大数は指定できます。これにより、NetBackup によるバックアップ操作またはリストア操作で使用するドライブを確保できます。ドライブ数は、`-drv_cnt drive_count` オプションを使用して指定します。

vmphyinv でマウントするメディアについて

vmphyinv コマンドは、次のように、マウントするメディアに対して複数のオプションを受け入れます。

- **NetBackup ロボット番号** (`-rn robot_number`)。
vmphyinv ユーティリティは、そのロボットのボリュームレコードのリストを取得し、リスト内の各メディアのインベントリを実行します。
このオプションを使用するには、NetBackup データベースにあるそのロボットの番号に対応するボリュームレコードが、NetBackup の構成に含まれている必要があります。
- フィルタオプションが設定されている NetBackup ロボット番号。
ロボット内の一部のメディアだけについてインベントリを実行する場合は、フィルタオプションを使用してメディアのサブセットを指定します。フィルタオプションには、ボリュームプール、ボリュームグループ、スロット範囲などがあります。これらのオプションを使用するには、NetBackup ボリュームレコードが存在する必要があります。
次にフィルタリングの例を示します。

vmphyinv -rn 4 -pn bear	ロボット 4 にあり、ボリュームプール bear に存在するメディアのみをマウントします。
vmphyinv -rn 2 -v moon	ロボット 2 にあり、ボリュームグループ moon に存在するメディアをマウントします。
vmphyinv -rn 1 -rc1 2 -number 3	ロボット 1 にあり、スロット範囲 2 から 4 に存在するメディアをマウントします。
vmphyinv -rn 5 -pn NetBackup -v mars -rc1 2 -number 6	ロボット 5 およびスロット範囲 2 から 7 にあり、ボリュームグループ mars および NetBackup ボリュームプールに存在するメディアをマウントします。

- **NetBackup のロボット番号および特定のロボットに属するメディアのリスト。**
たとえば、`-rn robot_number` および `-ml A00001:A00002:A00003` オプションを指定した場合、指定した 3 つのメディアだけのインベントリが実行されます。これらの

いずれかのメディアが、指定されたロボットに属していない場合、そのメディアはスキップされ、インベントリは実行されません。このオプションを使用するには、**NetBackup** ボリュームレコードが存在する必要があります。

- **NetBackup** のロボット番号、およびスロット範囲またはリスト。
 別のロボットや他のソースからのメディアがロボットに移動されたため、テープのメディア ID が不明である場合があります。このような場合は、スロット範囲オプションまたはリストオプションを指定します。
 これらのオプションを使用する場合、**NetBackup** ボリュームレコードが **NetBackup** データベースに存在する必要はありません。ただし、密度の指定は必要です (-d オプション)。

メモ: 複数のメディア形式をサポートしているロボットの場合には、密度の指定には注意してください。密度を誤って指定すると、**vmphyinv** によるマウントが完了できなくなり、永続的なドライブ障害が発生する場合があります。

次にフィルタリングの例を示します。

```
vmphyinv -rn 1 -slot_range 2 10  ロボット 1 のスロット範囲 2 から 10 に存在す
-d dlt                             るメディアをマウントします。

vmphyinv -rn 0 -slot_list 3:4:5  ロボット 0 のスロット 3、4 および 5 に存在する
-d dlt                             メディアをマウントします。

vmphyinv -rn 2 -slot_range 2 4   ロボット 2 のスロット 2、3、4、5、6 および 7 に
-slot_list 5:6:7 -d dlt         存在するメディアをマウントします。
```

p.557 の「**vmphyinv** 物理インベントリユーティリティについて」を参照してください。

vmphyinv のメディアのマウント方法とテープヘッダーの読み込み方法

次に、マウント処理を操作の順に説明します。

- The **vmphyinv** ユーティリティがローカルホストまたはリモートホストのいずれか (ドライブの接続先によって決定される) の **NetBackup Volume Manager (vmd)** に接続します。
- **NetBackup Volume Manager** が処理 (oprd) を開始します。
- The **vmphyinv** ユーティリティから oprd に通信が行われ、マウント要求が oprd に送信されます。要求を受信すると、oprd から ltid にマウント要求が発行されます。
- The **vmphyinv** ユーティリティでは、テープヘッダーを読み込むことによって、記録されたメディア ID またはグローバル一意識別子 (GUID) が判断されます。

メモ: マウントにおけるデフォルトのタイムアウトは 15 分です。mount_timeout オプションを使用して異なるマウント時間を指定します。

p.562 の「[vmphyinv が認識しないメディアについて](#)」を参照してください。

p.562 の「[vmphyinv がクリーニングメディアを処理する方法](#)」を参照してください。

vmphyinv が認識しないメディアについて

メディアが NetBackup メディアでない場合、メディアはマウント解除され、次のメディアがマウントされます。vmphyinv は NetBackup データベースに新しいレコードを生成しません。このメディアのボリュームレコードを生成するには、vmupdate コマンドを使用します。

vmphyinv がクリーニングメディアを処理する方法

次の条件がすべて該当する場合、vmphyinv はそのメディアをマウントしようとせず、リストの次のメディアがマウントされます。

- vmphyinv でスロット範囲またはリストのオプションが指定されていない。
- ロボットにクリーニングメディアが存在する。
- ボリュームレコードで、メディア形式がクリーニングメディア (hcart2_clean、dlt_clean など) に指定されている。

クリーニングメディアがロボット内に存在し、次のいずれかの条件に該当する場合、vmphyinv によって、メディアがクリーニングメディアかどうか判断されます。

- スロット範囲またはリストのオプションは使用されているが、NetBackup データベースのボリュームレコードのメディア形式がクリーニングメディア形式でない。
- スロット範囲またはリストのオプションは使用されているが、クリーニングメディアに対応するボリュームレコードが NetBackup データベースにない。
- スロット範囲とリストのオプションが使用されておらず、クリーニングメディアに対応するボリュームレコードが NetBackup データベースにない。

vmphyinv は、メディアがクリーニングメディアであるかどうかの判断を試行します。このユーティリティは、ロボットから戻された SCSI パラメータ (センスキー、テープアラートフラグおよび物理 (SCSI) メディア形式) を使用します。メディアがクリーニングメディアかどうかを判断できない場合、マウント要求でタイムアウトが発生するまで、vmphyinv によってそのメディアのマウントが試行されます。

メモ: NetBackup では、すべてのドライブでクリーニングメディアの存在を検出できるわけではありません。ドライブによっては、NetBackup で認識できない方法でクリーニングメディアの存在が報告されます。

vmphyinv による NetBackup データベースの更新方法

すべてのメディアがマウントされ、テープヘッダーが読み込まれると、推奨する変更のリストが vmphyinv によって表示されます。変更を受け入れるか、または拒否します。変更を受け入れると、vmphyinv によって NetBackup データベースが更新されます。

表 10-8 vmphyinv の条件と処理

条件または処理	説明
vmphyinv の更新条件	有効なメディア形式に対して、vmphyinv は次の処理を実行します。 ■ NetBackup メディアレコードの位置情報フィールドおよび説明フィールドがメディアヘッダーと一致しない場合、これらのフィールドを変更します。 ■ 割り当てられていない NetBackup ボリュームレコードのメディア形式を条件付きで変更します。メディア形式が変更されるのは、新しいメディア形式が、古いメディア形式と同じファミリーに属している場合だけです。たとえば、メディア形式 DLT は、DLT2 または DLT3 だけに更新されます。 ■ 割り当てられたレコードのボリュームプール、メディア形式および ADAMM_GUID は変更しません。 ■ 割り当て済みの NetBackup ボリュームの割り当ては解除しません。
vmphyinv が NetBackup メディアをどのように更新するか	vmphyinv ユーティリティは、NetBackup データベースの検索を行います。これによって、テープのメディア ID が NetBackup データベースのいずれかのレコードのメディア ID フィールドに存在するかどうかを確認されます。メディア ID が存在する場合、vmphyinv はそのメディア ID に対応する NetBackup ボリュームレコードを更新します。メディア ID が存在しない場合、vmphyinv は NetBackup メディアに対応する NetBackup ボリュームレコードを新規作成します。
vmphyinv のエラーの状況	次の場合、vmphyinv ユーティリティによって NetBackup データベースが正しく更新されないことがあります。このような状況はエラーとして報告されます。 次のいずれかの状況が発生した場合、続行するには手動操作が必要です。 ■ 重複するメディア ID が検出された場合。 同じロボット内の複数のメディアが、同じメディア ID を持っています。 ■ 異なるロボットに属する NetBackup ボリュームレコードが検出された場合。 含まれているメディア ID が、テープヘッダーから読み込まれたメディア ID と同じです。 ■ 割り当てられたボリュームレコードで、メディア形式、メディア GUID またはボリュームプールの変更が必要な場合。 ■ 既存のボリュームレコードのバーコードを変更する必要がある場合。

ストレージユニットの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [ストレージについて](#)
- [ストレージユニットの作成](#)
- [ストレージユニットの設定について](#)
- [ユニバーサル共有の概要](#)

ストレージについて

NetBackup ジョブから生成されるデータは NetBackup が認識するストレージの形式に記録されます。

NetBackup は[ストレージ (Storage)]で構成される次のすべてのストレージの構成を認識します。

ストレージユニット

ストレージユニットとは、NetBackup によって物理ストレージに関連付けられるラベルです。ラベルでは、ロボット、ボリュームへのパス、またはディスクプールを識別することができます。ストレージユニットはストレージユニットグループまたはストレージライフサイクルポリシーの一部として含めることができます。

p.565 の「[ストレージユニットの作成](#)」を参照してください。

ストレージユニットグループ

ストレージユニットグループを使用すると、単一のグループに属する複数のストレージユニットを識別できます。NetBackup 管理者は、バックアップまたはスナップショットジョブが動作する場合のストレージユニットがグループ内でどのように選択されるかを構成します。

p.613 の「[ストレージユニットグループについて](#)」を参照してください。

ストレージライフサイクルポリシー

ストレージライフサイクルポリシーにより、管理者はバックアップまたはスナップショットのデータすべてのストレージ計画を作成できるようになります。

p.624 の「[ストレージライフサイクルポリシーについて](#)」を参照してください。

ストレージユニットの作成

ストレージユニットとは、NetBackup によって物理ストレージに関連付けられるラベルです。ラベルでは、ロボット、ボリュームへのパス、またはディスクプールを識別できます。

ストレージユニットの作成はその他のウィザードの一部です。ただし、[ストレージ(Storage)]ユーティリティからストレージユニットを直接作成することもできます。

[図 11-1](#) は、異なるストレージユニット形式と必要に応じてインストールする必要があるオプションを示しています。

図 11-1 ストレージユニット形式

Media Manager	NDMP	ディスク
ロボットまたは スタンドアローン ドライブを指定	NDMP ホストを指定 (NDMP オプション)	AdvancedDisk ディスクプールを指定 (メディアサーバーに直接接続 されたストレージ)。 (データ保護最適化オプション) BasicDisk ディレクトリを指定。 クラウドストレージ (VendorName) VendorName で指定された種類のディスクプールを指定します。 ここで VendorName はクラウド ストレージプロバイダの名前にできます。 OpenStorage (StorageName) StorageName で指定された種類のディスクプールを 指定します。 (OpenStorage ディスクオプション) PureDisk ディスクプールを指定 (データ保護最適化オプション)

ストレージユニットを作成する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで[ストレージ (Storage)]ユーティリティを選択します。
一部のストレージユニット形式は、NetBackup Web UI でも作成できます。左側で[ストレージ (Storage)]、[ストレージユニット (Storage units)]の順に選択します。
- 2 [処理 (Actions)]>[新規 (New)]>[新しいストレージユニット (New Storage Unit)]を選択します。
- 3 [ストレージユニット名 (Storage unit name)]を入力します。
p.1096 の「[NetBackup 命名規則](#)」を参照してください。
- 4 [ストレージユニット形式 (Storage unit type)]を選択します。この選択により、ストレージユニットが使うストレージの形式を指定します。[Media Manager]、[ディスク (Disk)]、または[NDMP]。
- 5 ディスクストレージユニットの場合
 - [ディスク形式 (Disk type)] ドロップダウンメニューからディスクの形式を選択します。
[ディスク形式 (Disk type)] は宛先ストレージユニットの形式を識別します。

AdvancedDisk 宛先は、ディスクプールです。
ストレージ
ユニット

BasicDisk スト 宛先は、ホストのボリュームへのパスです。
レージユニット

クラウドストレージ ユニット 宛先は、**VendorName** 文字列を含む形式のディスクプールです。
VendorName はクラウドストレージプロバイダの名前にできます。
これらの値には、**_crypt** の接尾辞を含めることもできます (たとえば、**Amazon_crypt**)。**_crypt** 接尾辞は暗号化のストレージを示します。

NDMP ストレージ 宛先は、NDMP ホストです。NDMP プロトコルは、バックアップおよびリカバリの実行に使用されます。

OpenStorage 宛先は、**VendorName** 文字列を含む形式のディスクプールです。
ストレージ **StorageName** 文字列はベンダーによって提供されます。
ユニット **DataDomain** の場合は、ディスクの **WORM** プロパティを使用できます。

WORM は、Write Once Read Many の略語です。[**WORM** を使用 (Use WORM)] オプションが設定されている場合、データは関連メディアに一度だけ書き込めますが、複数回読み込めます。

PureDisk スト 宛先はメディアサーバー重複排除プールです。
レージユニット 『[NetBackup 重複排除ガイド](#)』を参照してください。

- このストレージユニットのディスクプールを選択します。
p.592 の「[\[ディスクプールの選択 \(Select disk pool\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。
 - [メディアサーバー (Media server)]ドロップダウンメニューからメディアサーバーを選択します。選択内容により、ストレージユニットに対する書き込み権限がメディアサーバーに設定されていることが指定されます。
 - [ディレクトリへの絶対パス名 (Absolute pathname to directory)] または [ボリュームへの絶対パス名 (Absolute pathname to volume)]設定
p.578 の「[ストレージユニットのディレクトリへの絶対パス名またはボリューム設定への絶対パス名](#)」を参照してください。
 - 最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)
p.582 の「[\[最大並列実行ジョブ数 \(Maximum concurrent jobs\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。
 - フラグメントサイズの縮小 (Reduce fragment size)
p.591 の「[\[フラグメントサイズの縮小 \(Reduce fragment size to\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。
 - 高水準点 (High Water Mark)
p.580 の「[\[高水準点 \(High Water Mark\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。
 - 低水準点 (Low Water Mark)
p.581 の「[\[低水準点 \(Low Water Mark\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。
 - ブロック共有の有効化 (Enable Block Sharing)
p.580 の「[\[ブロック共有の有効化 \(Enable block sharing\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。
 - 一時的なステージング領域を有効にする (Enable Temporary staging area)
p.594 の「[\[一時的なステージング領域を有効にします \(Enable temporary staging area\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。
- 6 Media Manager** ストレージユニットの場合には、データはテープロボットとスタンダードアロンのテープドライブに書き込まれます。
- [ストレージデバイス (Storage Device)]ドロップダウンメニューからストレージデバイスを選択します。
 - [メディアサーバー (Media server)]ドロップダウンメニューからメディアサーバーを選択します。選択内容により、ストレージユニットに対する書き込み権限がメディアサーバーに設定されていることが指定されます。
 - 最大並列書き込みドライブ数 (Maximum concurrent write drives)

p.582 の「[最大並列書き込みドライブ数のストレージユニット設定](#)」を参照してください。

- 多重化を有効にする (Enable multiplexing)
p.580 の「[\[多重化を有効にする \(Enable multiplexing\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。
- フラグメントサイズの縮小 (Reduce fragment size)
p.591 の「[\[フラグメントサイズの縮小 \(Reduce fragment size to\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。

7 [OK] をクリックして、ストレージユニットの構成を保存します。

ストレージユニットをコピーすることによるストレージユニットの作成

ストレージユニットをコピーして、同じ設定で新しいストレージユニットを作成できます。このオプションは OST ストレージ形式では利用できません。

p.568 の「[ディスクストレージユニットのコピー](#)」を参照してください。

p.569 の「[テープストレージユニットのコピー](#)」を参照してください。

ディスクストレージユニットのコピー

ディスクストレージユニットをコピーするには

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[ストレージユニット (Storage units)]の順に選択します。[ストレージユニット (Storage units)]タブを選択します。
- 3 コピーするストレージユニットを選択し、[ストレージユニットのコピー (Copy storage unit)]ボタンを選択します。
- 4 新しいストレージユニットの一意の名前を入力します。たとえば、ストレージ形式の説明です。この名前を使用して、ポリシーおよびスケジュールでストレージユニットを指定します。

p.1096 の「[NetBackup 命名規則](#)」を参照してください。

- 5 必要に応じて他のプロパティとディスクプールを編集します。

p.578 の「[ストレージユニットの設定について](#)」を参照してください。

- 6 変更を確認したら、[保存 (Save)]ボタンを選択します。

テープストレージユニットのコピー

テープストレージユニットをコピーするには

- 1 左側で[ストレージ (Storage)]、[ストレージユニット (Storage units)]の順に選択します。
- 2 コピーするテープストレージユニットを選択し、[ストレージユニットのコピー (Copy storage unit)]ボタンを選択します。
ストレージユニット名に「_Copy」が追加されています。
- 3 必要に応じて変更を加え、[保存 (Save)]ボタンを選択します。

ストレージユニットの設定の編集

バックアップアクティビティが予定されていない期間にのみ、ストレージユニットに変更を加えるようにします。このようにすることで、影響を受けるストレージユニットを使用するポリシーまたは保護計画について、バックアップが影響を受けなくなります。

ストレージユニットの設定を編集するには

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[ストレージユニット (Storage units)]の順に選択します。[ストレージユニット (Storage units)]タブを選択します。
- 3 編集するストレージユニットを選択します。
- 4 [編集 (Edit)]をクリックし、必要な変更を加えます。

p.578 の「[ストレージユニットの設定について](#)」を参照してください。

たとえば、次の設定を編集できます。

- ストレージユニットの基本プロパティ
- 追加のプロパティ
- メディアサーバー
- ステージングスケジュール

テープストレージユニットを編集するには

- 1 左側で[ストレージ (Storage)]、[ストレージユニット (Storage units)]の順に選択します。
- 2 テープストレージユニットのリストで、編集するテープストレージユニットを選択します。
- 3 [編集 (Edit)]をクリックし、必要な変更を加えます。変更を行ったら[保存 (Save)]をクリックします。

ストレージユニットの削除

NetBackup 構成からストレージユニットを削除するということは、NetBackup によって物理ストレージと関連付けられたラベルを削除するということです。

ストレージユニットを削除しても、そのストレージユニットに書き込まれていたファイルがリストアされることは防止されません。(ストレージが物理的に削除されておらず、バックアップイメージの期限が切れていない限り)。

ストレージユニットを削除するには

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 [カタログ (Catalog)]ユーティリティを使用して、ストレージユニットに存在する任意のイメージを期限切れにします。この操作により、NetBackup カタログからイメージが削除されます。

p.970 の「[バックアップイメージを期限切れにする場合](#)」を参照してください。

- ストレージユニットから手動でイメージを削除しないでください。
- イメージの期限が切れると、イメージがインポートされないかぎり、リストアできません。

p.973 の「[バックアップイメージのインポートについて](#)」を参照してください。

NetBackup は、ディスクストレージユニットまたはディスクプールから任意のイメージフラグメントを自動的に削除します。この削除は、一般に、イメージの期限が切れてから数秒以内に行われます。ただし、すべてのフラグメントが削除されたことを確認するために、ストレージユニットのディレクトリが空であることを確認してください。

- 3 左側で[ストレージ (Storage)]、[ストレージユニット (Storage units)]の順に選択します。[ストレージユニット (Storage units)]タブを選択します。
- 4 削除するストレージユニットを選択します。
- 5 [削除 (Delete)]、[はい (Yes)]の順に選択します。
- 6 削除したストレージユニットを使用するすべてのポリシーを、他のストレージユニットを使用するように変更します。

ストレージユニットがディスクプールを指す場合、ディスクプールに影響を与えずにストレージユニットを削除できます。

テープストレージユニットに関する注意事項

テープロボットまたはスタンドアロンのテープドライブのストレージユニットを作成するには、ストレージユニットを追加するときに、[ストレージ形式 (Storage type)]として[ドライブおよびロボット (Drives and robots)]を選択します。

p.578 の「[ストレージユニットの設定について](#)」を参照してください。

NetBackup がテープストレージユニットにジョブを送信すると、ドライブのボリュームのマウントが要求されます。

スタンドアロンドライブにメディアが存在しない場合、または要求されたボリュームがロボットに対して利用可能でない場合、[保留中の要求 (Pending requests)]にマウント要求が表示されます。(NetBackup Web UI で、[テープストレージ (Tape storage)]、[デバイスモニター (Device monitor)]を開きます。) オペレータは、ボリュームを検索し、手動でマウントし、ドライブに割り当てることができます。

ドライブおよびロボットのストレージユニットを追加する場合は、次の項目を考慮に入れます。

- このストレージユニットを追加する場所は、NetBackup のバージョンによって異なります。
 - ストレージユニットをプライマリサーバーに追加します。ドライブが接続されているメディアサーバーを指定します。
 - NetBackup サーバーを使用している場合は、ストレージユニットをドライブが接続されているプライマリサーバーに追加します。ロボット制御もそのサーバーに接続されている必要があります。
- ロボットに作成する必要があるストレージユニットの数は、ロボットのドライブ構成によって異なります。
 - 同一の密度を持つドライブは、同じメディアサーバーの同じストレージユニットを共有する必要があります。ロボット内の 2 台のドライブが、同じ密度で同じメディアサーバー上に存在する場合、そのロボットに対してはストレージユニットを 1 つだけ追加します。[最大並列書き込みドライブ数 (Maximum concurrent write drives)]設定を 2 に設定してください。
p.582 の「[最大並列書き込みドライブ数のストレージユニット設定](#)」を参照してください。
 - 密度が異なるドライブは、別々のストレージユニットに存在する必要があります。DLT テープライブラリ (TLD) として構成された STK SL500 ライブラリを考えてみます。このライブラリは、1/2 インチカートリッジと DLT ドライブの両方を使用できます。この場合、それぞれの密度のドライブについてストレージユニットを定義する必要があります。
 - ロボットのドライブとロボット制御が、別々の NetBackup サーバーに接続されている場合、ドライブが接続されているサーバーをメディアサーバーとして指定します。ドライブに指定するロボット番号には、ロボット制御で使用されるロボット番号と同じ番号を常に指定してください。

ディスクストレージユニットに関する注意事項

NetBackup では、作成できるディスクストレージユニットの数に制限はありません。

表 11-1 では、NetBackup がディスクメディアとして使うことができる各種ディスク形式について説明します。

表 11-1 ディスクメディアの説明

ディスクストレージユニットの形式	説明
メディアサーバー重複排除プール	メディアサーバー重複排除プールのディスク形式のストレージユニットは、MSDP (メディアサーバー重複排除プール)、MSDP クラウド、または MVG (MSDP ボリュームグループ) の重複排除データに使用されます。
	AdvancedDisk ディスク形式のストレージユニットは、NetBackup メディアサーバーに直接接続された専用のディスクに使用されます。AdvancedDisk は、Data Protection Optimization Option のライセンスを取得済みの場合だけ利用可能です。 NetBackup では、AdvancedDisk ディスクプールを構成するディスクリソースに対する排他的な所有権を前提とします。リソースが他のユーザーと共有される場合、NetBackup はディスクプールの容量またはストレージライフサイクルポリシーを正しく管理できません。 AdvancedDisk では、NetBackup メディアサーバーはデータムーバーとストレージサーバーの両方として機能します。 『NetBackup AdvancedDisk ストレージソリューションガイド』を参照してください。
クラウドストレージ	クラウドストレージディスク形式のストレージユニットは、通常サードパーティベンダーによって提供され、クラウドのストレージに使われます。ディスク形式の実際の名前は、クラウドストレージベンダーによって異なります。クラウドストレージは、Data Protection Optimization Option のライセンスを取得済みの場合だけ利用可能です。 ストレージベンダーパートナーによって提供されたクラウドストレージは、API を介して NetBackup と統合されます。 インターネット上のベンダーホストは、ストレージサーバーです。NetBackup メディアサーバーは、データムーバーとして機能します。 『NetBackup クラウド管理者ガイド』を参照してください。
	OpenStorage ディスク形式のストレージユニットは、通常サードパーティベンダーによって提供され、ディスクストレージに使われます。ディスク形式の実際の名前は、ベンダーによって異なります。OpenStorage は、OpenStorage Disk Option のライセンスを取得済みの場合だけ利用可能です。 ストレージベンダーパートナーによって提供されたストレージは、API を介して NetBackup と統合されます。 ストレージホストはストレージサーバーです。NetBackup メディアサーバーは、データムーバーとして機能します。ストレージベンダーのプラグインはデータムーバーとして機能する各メディアサーバーにインストールする必要があります。各メディアサーバーでストレージサーバーへのログオンクレデンシャルが構成されている必要があります。 『ディスクの NetBackup OpenStorage ソリューションガイド』を参照してください。

ディスクストレージユニットの形式	説明
クラウドコネクタ	クラウドコネクタのディスク形式のストレージユニットは、重複排除なしでクラウドオブジェクトストレージへのバックアップに使用されます。 『 NetBackup クラウドオブジェクトストア管理者ガイド 』を参照してください。
BasicDisk	BasicDisk 形式のストレージユニットは、ファイルシステムとして NetBackup メディアサーバーに公開されている、ローカルに接続されたディスクまたはネットワークに接続されたディスクのディレクトリで構成されます。NetBackup は、指定されたディレクトリにバックアップデータを格納します。 BasicDisk 形式のストレージユニットに関する注意事項 ■ 複数の BasicDisk ストレージユニットに、同じボリュームまたはファイルシステムを含めないでください。 ■ BasicDisk ストレージユニットをストレージライフサイクルポリシーで使用することはできません。

各ディスクストレージユニット形式で、これらのすべての設定が利用可能なわけではありません。

p.578 の「[ストレージユニットの設定について](#)」を参照してください。

メモ: NetBackup がディスクストレージユニットに使用するすべてのファイルシステム上では、クォータを設定しないようにしてください。ファイルシステムでクォータが機能していると、NetBackup の一部の機能が正しく動作しない可能性があります。(たとえば、ストレージライフサイクルポリシーにおける容量管理対象保持期間の選択や、ストレージユニットへのステージングなど。)

ディスクストレージモデルについて

ディスクストレージの NetBackup モデルはすべての Enterprise Disk Option に対応します。つまり、このモデルは BasicDisk 形式を除くすべてのディスク形式に対応するモデルです。

ディスクストレージモデルのコンポーネントについて次に説明します。

データムーバー

プライマリストレージ (NetBackup クライアント) とストレージサーバーの間でデータを移動するエンティティ。NetBackup メディアサーバーはデータムーバーとして機能します。

Disk Option に応じて、NetBackup メディアサーバーはストレージサーバーとしても機能することもできます。

ストレージサーバー

ディスクストレージに対してデータの読み書きを行うエンティティ。ストレージサーバーは、ストレージ上のファイルシステムにマウントがあるエンティティです。

NetBackup オプションに応じて、ストレージサーバーは次のいずれかになります。

- ストレージをホストするコンピュータ。このコンピュータは、ストレージデバイスに組み込まれている場合があります。
- ストレージベンダーのインターネット上のホスト。このホストは、クラウドストレージを **NetBackup** に開示します。また、プライベートクラウドストレージを、プライベートネットワーク内にホストすることが可能です。
- ストレージをホストする **NetBackup** メディアサーバー。

ディスクプール

エンティティとして管理されるディスクボリュームの集まり。**NetBackup** では、バックアップに使用できるストレージのプール (ディスクプール) にディスクボリュームが集約されます。

ディスクプールは、**NetBackup** のストレージ形式の一種です。ストレージユニットを作成するときは、ディスク形式を選択し、次に特定のディスクプールを選択します。

CIFS ストレージおよびディスクストレージユニットの **NetBackup** サービスクレデンシャルの構成

AdvancedDisk と **BasicDisk** ストレージユニットを備えた CIFS (Common Internet File System) ストレージの場合、Windows コンピュータ上の **NetBackup Client Service** サービスと **NetBackup Remote Manager and Monitor Service** サービスで同じアカウントクレデンシャルを使用している必要があります。アカウントクレデンシャルが適切に構成されていない場合、**NetBackup** は UNC の命名規則を使用するすべての CIFS の **AdvancedDisk** と **BasicDisk** ストレージユニットに停止とマーク付けします。

CIFS ストレージおよびディスクストレージユニットのサービスクレデンシャルを構成するには

- 1 CIFS のストレージにファイルシステムのマウントがあるメディアサーバー上で、アカウントとクレデンシャルを構成します。

このアカウントは、CIFS 共有に読み書きアクセスするために Windows オペレーティングシステムで使用されるものと同じアカウントにする必要があります。

- 2 Windows で、**NetBackup Client Service** と **NetBackup Remote Manager and Monitor Service** の両方を、手順 1 で作成したのと同じ Windows ユーザーアカウントで実行されるように構成します。

サービスのアカウントを構成する方法について詳しくは、Windows のマニュアルを参照してください。

ストレージライフサイクルポリシーにおけるディスクストレージユニット

図 11-2 は、ストレージユニットが参照するディスクプールのボリュームとストレージライフサイクルポリシーが対話する方法の例を示しています。

2 つのバックアップポリシーは次のように作成されます。

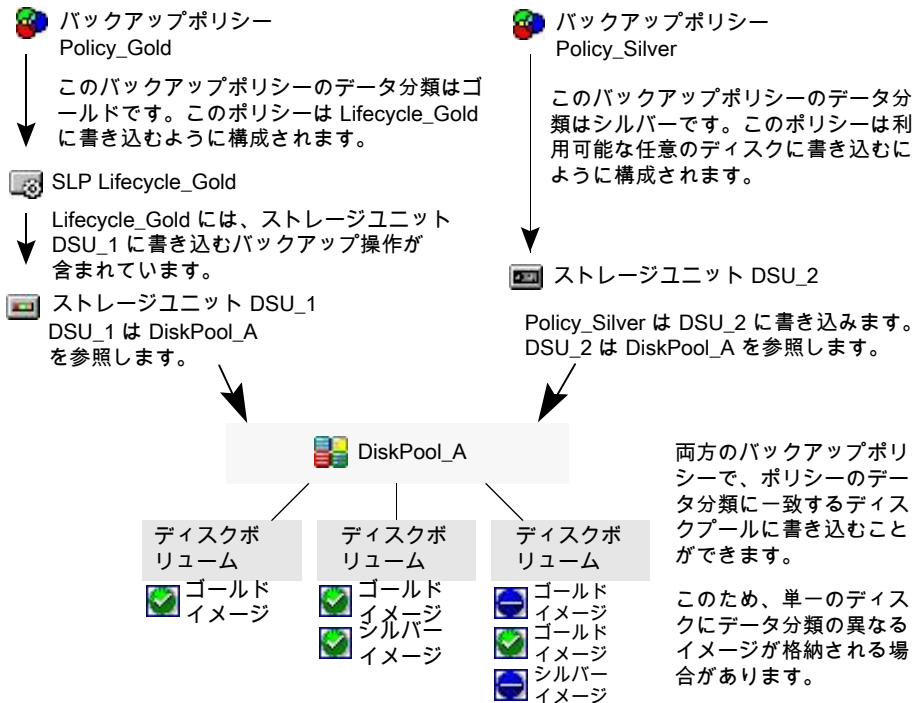
- **Policy_gold** という名前のバックアップポリシーは、ゴールド分類です。ストレージ用に、ゴールドデータ分類が設定された **Lifecycle_Gold** という名前の SLP を使用するように構成されています。
- **Policy_silver** という名前のバックアップポリシーは、シルバー分類です。ストレージ用に、[任意 (**Any Available**)]を使用するように構成されています。つまり、シルバー分類が設定された任意のストレージユニット、または任意の SLP を使用できるということです。

どちらのバックアップポリシーでも次の 2 つのストレージユニットが利用可能です。

- **DSU_1** は、**Lifecycle_Gold** の操作対象であり、**DiskPool_A** を参照します。
- **DSU_2** は SLP に含まれていませんが、**DiskPool_A** を参照します。

DiskPool_A には、3 つのディスクボリュームが含まれます。ゴールドイメージとシルバーイメージの両方をプール内の任意のディスクボリュームに書き込むことができます。

図 11-2 ディスクプールを参照するストレージライフサイクルポリシーおよびディスクストレージユニット



p.624 の「[ストレージライフサイクルポリシーについて](#)」を参照してください。

ディスクストレージユニットの空きディスク容量の維持

空き領域がなくなってバックアップが失敗することを防ぐために、ディスクストレージユニットを管理できます。

次の方法で、より多くのイメージ用の領域をディスクストレージユニットに作成します。

- 新しいディスク領域を追加します。
- [高水準点 (High Water Mark)] に、環境のバックアップイメージのサイズに対して最適な値を設定します。
p.580 の「[\[高水準点 \(High Water Mark\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。

ベーシックディスクステージングストレージユニットの領域を次のように確保します。

- 再配置スケジュールの頻度を高めます。または、すべてのイメージを最終的な宛先ストレージユニットに適時にコピーできるように、リソースを追加します。
- nb_updatedssu スクリプトを実行します。

NetBackup のインストールまたはアップグレード時に、nb_updatedssu スクリプトが実行されます。このスクリプトでは、再配置されたデータのポインタとして以前のリリースで使用された .ds ファイルが削除されます。現在のリリースでは、再配置されたデータは異なる方法で追跡されるため、.ds ファイルは不要になりました。場合によっては、インストール時またはアップグレード時に .ds ファイルが削除されないことがあります。その場合は、スクリプトを再実行してください。

Windows の場合: `install_path¥NetBackup¥bin¥goodies¥nb_updatedssu`

UNIX の場合: `/usr/openv/netbackup/bin/goodies/nb_updatedssu`

- 潜在的な空き容量を判断します。
p.606 の「[BasicDisk ディスクスレージングストレージユニットにおける解放可能な領域の検索](#)」を参照してください。
- [ディスクストレージユニットの容量を確認する間隔 (Check the capacity of disk storage units)]ホストプロパティを有効にすることによってディスク領域を監視します。
[一般的なサーバー (General Server)]ホストプロパティで、6.0 のディスクストレージユニットの利用可能な容量が確認される間隔を決定します。[Distinction about 6.0 storage units from Poonam Shanbhag in 2/14/07 email]:NetBackup 以降のリリースでは、内部的方法を使用して、より頻繁にディスクの空き容量を監視します。
p.112 の「[\[一般的なサーバー \(General server\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

NDMP ストレージユニットに関する注意事項

ストレージユニットとしてホストを使うために、NetBackup for NDMP のライセンスをメディアサーバーにインストールする必要があります。Media Manager は、NDMP ストレージユニットを制御しますが、ユニットは NDMP ホストに接続されています。

p.578 の「[ストレージユニットの設定について](#)」を参照してください。

NDMP ストレージユニットの作成は、NAS ファイラに直接接続されているドライブに対して行います。NetBackup メディアサーバーに接続されているドライブは、NDMP バックアップに使用されている場合でも、Media Manager ストレージユニットと見なされます。

メモ: リモート NDMP ストレージユニットが、以前のリリースからのメディアサーバーで構成済みである可能性があります。メディアサーバーのアップグレード時に、これらのストレージユニットが自動的に Media Manager ストレージユニットに変換されます。

詳しくは、『[NetBackup for NDMP 管理者ガイド](#)』を参照してください。

ストレージユニットの設定について

次の項では、すべての形式のストレージユニットで表示される設定について説明します。設定は、アルファベット順に示します。表示される設定は、ストレージユニット形式によって異なります。

ストレージユニットのディレクトリへの絶対パス名またはボリューム設定への絶対パス名

[ディレクトリへの絶対パス名 (Absolute pathname to directory)]または[ボリュームへの絶対パス名 (Absolute pathname to volume)]は、ディスクプールに基づかないストレージユニットで使用できます。

この設定では、ディスクへのバックアップに使用できるファイルシステムまたはボリュームへの絶対パスを指定します。フィールドにパスを直接入力し、[追加 (Add)]をクリックします。利用可能な領域が十分にある、ディスク上の任意の場所を使用できます。

ドライブの指定では、プラットフォーム固有のファイルパスセパレータ (/ と ¥) およびコロン (:) を使用してください。

[プロパティ (Properties)] ボタンはディレクトリまたはボリュームのプロパティを表示します。

p.589 の「[ストレージユニットの変更 (Change Storage Units)] ダイアログボックスの [プロパティ (Properties)] オプション」を参照してください。

同じボリュームまたはファイルシステムを使用するように、複数の **BasicDisk** ストレージユニットを構成しないでください。ストレージユニットで領域の競合が発生するだけでなく、[低水準点 (Low Water Mark)] の設定が異なると、不適切な動作の原因となる場合があります。

BasicDisk ストレージユニットがディスクステージングストレージユニットとして使用される場合、専用のディスクパーティションまたはファイルシステムを用意することをお勧めします。専用の領域によって、ディスクステージングの容量を管理する機能が正しく動作します。または、**AdvancedDisk** ストレージユニットを定義することを検討してください。

AdvancedDisk ストレージユニットでは、ディスクバックアップ専用のファイルシステムであるディスクボリュームで構成されたディスクプールを使用します。

p.1096 の「**NetBackup 命名規則**」を参照してください。

p.581 の「[低水準点 (Low Water Mark)] ストレージユニット設定」を参照してください。

ストレージユニットの[このディレクトリは、ルートファイルシステムまたはシステムディスク上に存在できます]。

この設定によって、ユーザーは [ディレクトリへの絶対パス名 (Absolute pathname to directory)] フィールドでルートファイルシステム (UNIX) またはシステムドライブ (Windows) 上のディレクトリを指定できます。

この設定にチェックマークを付けると、自動的にディレクトリが作成されます。ストレージユニットをドライブ c で構成し、このオプションにチェックマークが付いていない場合、バックアップはエラーコード 12 (ファイルを開けませんでした) で失敗します。

メモ: この設定にチェックマークを付けると、ルートファイルシステムまたはシステムドライブの空きがなくなる場合があります。

次の条件に該当する場合、ジョブは失敗します。

- この設定にチェックマークが付いておらず、ディレクトリがルートファイルシステムまたはシステムドライブにすでに存在している場合。
- この設定にチェックマークが付いておらず、要求されたディレクトリがルートファイルシステムまたはシステムドライブに作成される場合。

p.578 の「[ストレージユニットのディレクトリへの絶対パス名またはボリューム設定への絶対パス名](#)」を参照してください。

[密度 (Density)]ストレージユニット設定

メディアの[密度 (Density)]は、[ストレージデバイス (Storage device)]の選択項目によって決定されます。この設定は、Media Manager および NDMP ストレージユニットのみで表示されます。

[ディスク形式 (Disk type)]ストレージユニット設定

[ディスク形式 (Disk type)]ストレージユニット設定は、ストレージユニットの形式を識別します。

ディスクストレージユニットは、次のいずれかの形式です。

- AdvancedDisk (NetBackup Data Protection Optimization Option が必要)
- BasicDisk
- クラウドストレージ (NetBackup Data Protection Optimization Option が必要)
- OpenStorage (ベンダー) (OpenStorage Disk オプションが必要)NetBackup
- PureDisk (Data Protection Optimization Option が必要)NetBackup

メモ: [null_stu]ストレージユニット形式は、Cohesity Technical Supportがデータ転送に関する障害を識別、隔離するために NullOST プラグインを使用するときのみ利用可能です。[null_stu]ストレージユニット形式を利用するのは、トラブルシューティングのときだけです。ストレージユニットの形式として[null_stu]を選択しないでください。選択すると、ヌルストレージに書き込まれたデータをリストアできなくなります。

[ブロック共有の有効化 (Enable block sharing)]ストレージユニット設定

[ブロック共有の有効化 (Enable block sharing)]ストレージユニット設定を使用すると、あるバックアップから次のバックアップまでの間に変更されていないデータブロックを共有することができます。データブロックを共有すると、ストレージユニットのディスク領域を大幅に節約できます。

[多重化を有効にする (Enable multiplexing)]ストレージユニット設定

[多重化を有効にする (Enable multiplexing)]ストレージユニット設定によって、複数のバックアップをストレージユニットの 1 台のドライブに対して多重化できます。

注意: MS-SQL-Server ポリシーの場合、複数のストライプを使用したバックアップにも構成されるスケジュールの多重化を有効にしないでください。多重化を 1 つ以上のストライプを使用するスケジュールで有効にすると、リストアに失敗します。

[高水準点 (High Water Mark)]ストレージユニット設定

[高水準点 (High water mark)]ストレージユニット設定は[BasicDisk]ストレージユニットとディスクプールのみに適用されます。

メモ: [高水準点 (High water mark)]は、クラウドストレージディスクプールには適用されません。この値はストレージ容量から導出されます。クラウドプロバイダからは取得できません。

[高水準点 (High water mark)]設定 (デフォルトは 98%) は、次の処理をトリガするしきい値です。

- 基礎となるストレージの個々のディスクボリュームが[高水準点 (High water mark)]に達すると、**NetBackup** はボリュームに空きがないと見なします。**NetBackup** は、バックアップイメージを書き込む、基礎となるストレージの異なるボリュームを選択します。
- 基礎となるストレージのすべてのボリュームが[高水準点 (High water mark)]に達すると、[BasicDisk]ストレージは空きがないと見なされます。**NetBackup** は、基礎となるストレージに空きがないストレージユニットに割り当てられているバックアップジョブに失敗します。また、**NetBackup** は、基礎となるストレージに空きがない **BasicDisk** ストレージユニットには、新しいジョブを割り当てません。
- **NetBackup** は、ボリュームが[高水準点 (High water mark)]に達するとイメージのクリーンアップを始めます。イメージのクリーンアップは、もはや有効ではないイメージを期限切れにします。**NetBackup** は、イメージのクリーンアップによってディスクボリュームの容量が[高水準点 (High water mark)]より少なくなると、再びジョブをストレージユニットに割り当てます。

ストレージユニットが容量管理対象ストレージライフサイクルポリシーにあれば、他の要因がイメージのクリーンアップに影響します。

p.647 の「SLP 操作の[管理対象の容量 (Capacity managed)]保持形式」を参照してください。

p.582 の「[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]ストレージユニット設定」を参照してください。

詳しくは、次のガイドを参照してください。

- 『NetBackup Deduplication ガイド』
- 『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』

[低水準点 (Low Water Mark)]ストレージユニット設定

[低水準点 (Low water mark)]設定は、管理対象の容量保持形式を使用してバックアップがストレージライフサイクルポリシーによって書き込まれないかぎり効果がありません。ET1446308 - 1/21/09NetBackup は、期限切れのイメージを最終的な宛先ストレージユニットにコピーして空き容量を確保します。

メモ: [低水準点 (Low water mark)]は、クラウドストレージディスクプールには適用されません。この値はストレージ容量から導出されます。クラウドプロバイダからは取得できません。

[高水準点 (High Water Mark)]に到達すると、[低水準点 (Low Water Mark)]になるまでディスクストレージユニット上で領域が作成されます。デフォルト設定は 80% です。

p.647 の「SLP 操作の[管理対象の容量 (Capacity managed)]保持形式」を参照してください。

[低水準点 (Low Water Mark)]設定は、[高水準点 (High Water Mark)]設定を上回ることはいけません。

ディスクプールを参照するディスクストレージユニットの場合、低水準点がディスクプールに適用されます。

メモ: ベーシックディスクステージングストレージユニットが、以前のリリースのメディアサーバーで構成済みである可能性があります。アップグレード時に、[低水準点 (Low Water Mark)]が 100% としてディスクストレージユニットが設定されます。アップグレードしたストレージユニットを最も効果的に使用できるように水準点を調整してください。

詳しくは、次を参照してください。

- 『NetBackup Deduplication ガイド』
- 『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』

最大並列書き込みドライブ数のストレージユニット設定

[最大並列書き込みドライブ数 (Maximum concurrent write drives)] ストレージユニット設定では、このストレージユニットへのジョブで、**NetBackup** によって一度に使用されるテープドライブ数を指定します。利用可能なテープドライブの数は、ストレージデバイス内のテープドライブの最大数に制限されます。ジョブに複数のコピーが含まれる場合、各コピーが [最大並列書き込みドライブ数 (Maximum concurrent write drives)] の数にカウントされます。

[最大並列書き込みドライブ数 (Maximum concurrent write drives)] の値を選択する場合、次のガイドラインに従います。

- スタンドアロンのテープドライブのみを含むストレージユニット
ストレージユニット内にあるテープドライブの数以下の数を指定します。
- ロボット
ストレージユニットの **NetBackup** メディアサーバーに接続されているテープドライブの数以下の数を指定します。

同じ密度のスタンドアロンドライブが 2 台存在するときに、1 を指定した場合を想定します。両方のテープドライブが **NetBackup** で使用できますが、バックアップに利用可能なドライブは 1 台だけです。他のテープドライブは、リストアとバックアップ以外の他の操作に利用可能です。(たとえば、インポート、検証、ソースとしてのバックアップの複製です。)

メモ: [最大並列書き込みドライブ数 (Maximum concurrent write drives)] 設定に 0 (ゼロ) を指定すると、ストレージユニットは使用できなくなります。

[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] ストレージユニット設定

[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] ストレージユニット設定では、**NetBackup** によって一度にディスクストレージユニットに送信できるジョブの最大数を指定します。デフォルト設定は 1 つのジョブです。

NetBackup が並列実行できる最大ジョブ数は、複数の要因に基づいており、この設定のみでは規制されません。これらの要因としては、ディスクの空き領域不足状況になるリスク、スケジュールや容量ポーリングのオーバーヘッド、メディアサーバーの I/O 帯域幅、ディスクストレージのさまざまな特性などがあります。特定のシステムで重要な制限がいつ超過するかを予測できる絶対的な方法はありません。

メモ: [最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] 設定に 0 (ゼロ) を指定すると、ストレージユニットは使用できなくなります。

たとえば、ストレージユニットに 3 つのバックアップジョブを送信する準備ができている場合、[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] が 2 に設定されていると、最初の 2 つのジョブが開始され、3 つ目のジョブは待機します。ジョブに複数のコピーが含まれる場合、各コピーが [最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] の数にカウントされます。

メモ: ストレージユニットをカタログバックアップおよびカタログ以外のバックアップに使用している場合、[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] 設定を大きくします。この設定を大きくすることにより、通常のバックアップ処理の実行中でも、カタログバックアップが確実に実行されます。ディスクプールが使用されるときに、ストレージユニット内に複数のサーバーがある場合は、設定を大きくします。

[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] 設定の使用および依存関係は次のとおりです。

- ディスクストレージユニット間の負荷を分散するために使うことができます。値を高くする (並列実行ジョブの数が多い) ほど、ジョブの数が少ないように値が設定されている場合に比べて、ディスクはビジー状態になりやすくなります。
メディアサーバーの負荷分散ロジックでは、すべてのストレージユニットとすべての動作を考慮します。ストレージユニットは、3 つのメディアサーバーを指定できます。[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] が 3 に設定され、メディアサーバーのうち 2 つがビジーまたは停止している場合、3 番目のメディアサーバーに 3 つのジョブすべてが割り当てられます。
- この設定は、利用可能なディスク領域、および複数のバックアップ処理を実行するサーバーの性能によって異なります。ディスクプールが使用される場合は、ストレージユニット内のメディアサーバーの数によっても設定が異なります。
複数のストレージユニットが同じディスクプールを参照する場合、プールにアクセスできる並列実行ジョブの数は、すべてのディスクストレージユニットの [最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] 設定の合計です。この設定は、ディスクプールではなく、ストレージユニットに適用されます。そのためジョブの負荷は、ストレージユニットの構成で示されるメディアサーバーに自動的に分散されます。
- 複数の同時並行ジョブの Windows システムで、完了するジョブに必要な時間は他の要因によって決まります。
 - 同時に開始される他のジョブの数。
 - ジョブが開始されたシーケンス。
 - 各ジョブを完了するために必要となる時間。

p.584 の「[2 つのディスクストレージユニットが 1 つのディスクプールを参照する場合の影響](#)」を参照してください。

2 つのディスクストレージユニットが 1 つのディスクプールを参照する場合の影響

図 11-3 は、2 つのディスクストレージユニットが 1 つのディスクプールを共有する場合に [最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] 設定が組み合わせられる方法を示しています。

この例では、DSU_1 は次のように構成されます。

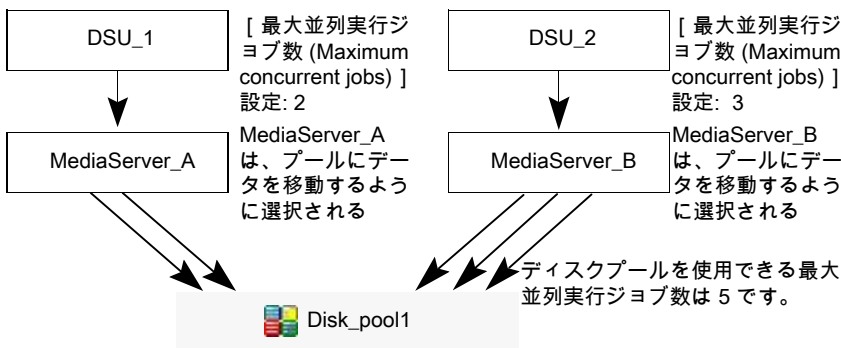
- MediaServer_A を使用する
- [最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] 設定に 2 を指定する
- Disk_pool1 を参照する

DSU_2 は次のように構成されます。

- MediaServer_B を使用する
- [最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] 設定に 3 を指定する
- Disk_pool1 を参照する

両方のストレージユニットが同じディスクプールを参照します。ストレージユニットを組み合わせると、[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)] 設定は 5 です。ただし、並列実行できるジョブは、MediaServer_A では 2 つだけ、MediaServer_B では 3 つだけです。

図 11-3 複数のディスクストレージユニットが 1 つのディスクプールと異なるメディアサーバーを使用する場合の影響



ストレージユニットが両方のメディアサーバーを使用するように構成された場合、メディアサーバーは 5 つの並列実行ジョブ (2 つは DSU_1 から、3 つは DSU_2 から) を実行できます。

p.578 の「[ストレージユニットの設定について](#)」を参照してください。

[ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)] ストレージユニット設定

NetBackup [ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)] ストレージユニット設定で、が 1 台のドライブに対して多重化することができる、複数のクライアントの並列実行バックアップの最大数を指定します。範囲は 2 から 32 です。

p.786 の「[メディアの多重化 (Media multiplexing)] (スケジュール属性)」を参照してください。

[メディアサーバー (Media Server)] ストレージユニット設定

[メディアサーバー (Media server)] ストレージユニット設定は次のいずれかを指定します。

- ストレージユニットのドライブが接続される NetBackup メディアサーバー。
- ディスクストレージユニットを制御する NetBackup メディアサーバー。
- ディスクプールとの間でデータを読み書きできる NetBackup メディアサーバー。
- ディスクプールとの間でデータを移動できる NetBackup メディアサーバー。
- 重複排除サーバーとして機能する NetBackup メディアサーバー。

すべてのメディアサーバーでストレージユニットを利用可能にするには (デフォルト)、[任意 (Any_available)] を選択します。これによって、ポリシーの実行時に、NetBackup はメディアサーバーを動的に選択します。

ストレージの形式によって次のことを考慮します。

表 11-2 [メディアサーバー (Media Server)] 設定の詳細

ストレージユニット形式	注意事項
BasicDisk	ディスクストレージユニットを構成するには、1 つのメディアサーバーを選択します。
AdvancedDisk	[メディアサーバー (Media server)] 設定では、ディスクプールとの間で読み書きできる NetBackup メディアサーバーを指定します。 ストレージサーバーとして構成されたメディアサーバーが、メディアサーバーのリストに表示されます。ディスクストレージは、ストレージサーバーとして構成されたメディアサーバーに直接接続する必要があります。 NetBackup では、ポリシーの実行時にメディアサーバーを選択します。

ストレージユニット形式	注意事項
クラウドストレージ	[メディアサーバー (Media Server)] 設定では、クラウドベンダーストレージサーバーとの間でデータを移動できる NetBackup メディアサーバーを指定します。 メディアサーバーリストの任意のメディアサーバーがストレージサーバーにデータを送信できるようにするには、[任意のメディアサーバーを使用 (Use any available media server)] にチェックマークを付けます。 ストレージサーバーにデータを送信できるメディアサーバーを制限するには、[次のメディアサーバーのみを使用 (Only use the following media servers)] にチェックマークを付けます。次に、データを送信できるメディアサーバーを選択します。 リストのどのメディアサーバーもストレージサーバーからデータを受信できます。選択する必要がありません。メディアサーバーはリストアジョブとストレージの監視を目的としてデータを受信します。 ストレージサーバークレデンシャルが構成されているメディアサーバーだけが、メディアサーバーリストに表示されます。サーバーが表示されない場合は、ソフトウェアプラグインがインストールされていて、そのメディアサーバー用にログインクレデンシャルが構成されていることを検証します。 NetBackup では、ポリシーの実行時にメディアサーバーを選択します。
NDMP	[メディアサーバー (Media server)] 設定では、NDMP ホストをバックアップするメディアサーバーの名前を指定します。指定した NDMP ストレージデバイスと通信が可能なメディアサーバーだけがドロップダウンメニューに表示されます。 1 つの NDMP ホストを複数のメディアサーバーで認証できます。[任意 (Any_available)] を選択すると、ポリシーの実行時に、メディアサーバーおよびストレージユニットが NetBackup によって選択されます。

ストレージユニット形式	注意事項
OpenStorage	[メディアサーバー (Media Server)] 設定では、ストレージサーバーとの間でデータを移動できる NetBackup メディアサーバーを指定します。 メディアサーバーリストの任意のメディアサーバーがストレージサーバーにデータを送信できるようにするには、[任意のメディアサーバーを使用 (Use any available media server)] にチェックマークを付けます。 ストレージサーバーにデータを送信できるメディアサーバーを制限するには、[次のメディアサーバーのみを使用 (Only use the following media servers)] にチェックマークを付けます。次に、データを送信できるメディアサーバーを選択します。 リストのどのメディアサーバーもストレージサーバーからデータを受信できます。選択する必要がありません。メディアサーバーはリストアジョブとストレージの監視を目的としてデータを受信します。 データを送受信する各メディアサーバーは次の要件を満たす必要があります。 ■ ベンダーのソフトウェアプラグインがインストールされていること。 ■ ストレージサーバーへのログインクレデンシャルが構成されていること。 ストレージサーバークレデンシャルが構成されているメディアサーバーだけが、メディアサーバーリストに表示されます。サーバーが表示されない場合は、ソフトウェアプラグインがインストールされていて、そのメディアサーバー用にログインクレデンシャルが構成されていることを検証します。 メモ: tpconfig コマンドラインユーティリティをメディアサーバーで直接実行して、クレデンシャルを構成および検証します。 NetBackup では、ポリシーの実行時にメディアサーバーを選択します。
PureDisk (メディアサーバーの重複排除プール)	リスト内の任意のメディアサーバーでデータを重複排除できるようにするには、[任意のメディアサーバーを使用 (Use Any Available Media Server)] を選択します。 データを重複排除できるメディアサーバーを制限するには、[次のメディアサーバーのみ使用する (Only Use The Following Media Servers)] を選択します。次に、データを重複排除できるメディアサーバーを選択します。 各メディアサーバーは重複排除メディアサーバーとして構成する必要があります。 『NetBackup 重複排除ガイド』を参照してください。

p.594 の「[任意のメディアサーバーを使用 (Use any available media server)] ストレージユニット設定」を参照してください。

p.588 の「[次のメディアサーバーのみ使用する (Only use the following media servers)] ストレージユニット設定」を参照してください。

NDMP[NDMP ホスト (NDMP host)]ストレージユニット設定

[NDMP ホスト (NDMP host)]ストレージユニット設定では、データをテープに書き込むために使用されるNDMP テープサーバーを指定します。ドロップダウンメニューからホスト名を選択するか、[追加 (Add)]をクリックしてホストを追加します。

[オンデマンドのみ (On demand only)]ストレージユニット設定

[オンデマンドのみ (On demand only)]ストレージユニット設定は、ストレージユニットがオンデマンドで排他的に利用可能かどうかを指定します。つまり、ポリシーまたはスケジュールがこのストレージユニットを使うように明示的に構成されているときにのみ利用可能かどうかを指定します。すべてのポリシーまたはスケジュールでストレージユニットを利用可能にするには、[オンデマンドのみ (On demand only)]のチェックマークを外します。

メモ: すべてのストレージユニットで[オンデマンドのみ (On demand only)]を選択した場合は、それぞれのポリシーまたはスケジュールに特定のストレージユニットを指定する必要があります。指定しなかった場合、NetBackup は使用するストレージユニットを検出できません。

[次のメディアサーバーのみ使用する (Only use the following media servers)]ストレージユニット設定

[次のメディアサーバーのみ使用する (Only use the following media servers)]ストレージユニット設定は、ストレージ用としてマークされるメディアサーバーを制限します。この設定にチェックマークを付けて、使いたいメディアサーバーを選択します。

次の表に、各ストレージ形式のメディアサーバー機能を示します。

表 11-3 メディアサーバーの機能

メディアサーバー形式	機能
AdvancedDisk ストレージメディアサーバー	このメディアサーバーは、ストレージサーバーでもあり、データムーバーでもあります。ストレージサーバーおよびデータムーバーとして構成されたメディアサーバーが、メディアサーバーのリストに表示されます。
クラウドストレージメディアサーバー	クラウドストレージに実装するデータムーバーとして構成されたメディアサーバーが、メディアサーバーのリストに表示されます。(クラウドストレージの場合、NetBackup メディアサーバーはデータムーバーとして機能します。)

メディアサーバー形式	機能
OpenStorage メディアサーバー	OpenStorage に実装するデータサーバーとして構成されたメディアサーバーが、メディアサーバーのリストに表示されます。(OpenStorage では、NetBackup メディアサーバーはデータサーバーとして機能します)。メディアサーバーがリストに表示されない場合は、ソフトウェアプラグインがインストールされていて、ログオンクレデンシャルが作成されていることを検証します。 ストレージにアクセスする各メディアサーバーは次の要件を満たす必要があります。 ■ ベンダーのソフトウェアプラグインがインストールされていること。 ■ ストレージサーバーへのログインクレデンシャルが構成されていること。
PureDisk メディアサーバー (メディアサーバーの重複排除プール)	このメディアサーバーは、重複排除サーバーとして機能します。 NetBackup 重複排除を構成する必要があります。

p.594 の「[\[任意のメディアサーバーを使用 \(Use any available media server\)\] ストレージユニット設定](#)」を参照してください。

p.588 の「[\[次のメディアサーバーのみ使用する \(Only use the following media servers\)\] ストレージユニット設定](#)」を参照してください。

[ストレージユニットの変更 (Change Storage Units)] ダイアログボックスの [プロパティ (Properties)] オプション

[プロパティ (Properties)] をクリックすると、ボリュームまたはディスクプールに関する情報が次のように表示されます。

メモ: 利用可能な領域 (Available space)、容量 (Capacity)、高水準点 (High Water Mark)、低水準点 (Low Water Mark)、最大物理容量 (Raw size)、利用可能サイズ (Usable size) の各プロパティは、クラウドストレージディスクプールには適用されません。これらすべての値はストレージ容量から導出され、クラウドプロバイダから取得することはできません。

表 11-4 ストレージユニットのプロパティ

プロパティ	説明
利用可能な領域 (Available space)	この値は、ディスクストレージユニット上のストレージの空き領域を示します。次の式によって利用可能な領域が決定されます。 利用可能な領域 = 空き容量 + 潜在的な空き容量 - コミットされた領域 df コマンドを使用すると、利用可能な領域の値をレポートできます。この値は、次の nbdevquery コマンドの結果として表示される実際の空き容量の値とは若干異なります。 <pre>nbdevquery -listdv -stype server_type -dp disk_pool</pre> df コマンドで表示される利用可能な領域には、オペレーティングシステムが予約する領域が含まれません。NetBackup は root として実行されるため、nbdevquery コマンドでは予約済み領域が利用可能な領域の式に含まれます。
容量 (Capacity)	[容量 (Capacity)]の値は、ディスクストレージユニットまたはプールの領域の合計量 (使用済み領域と未使用領域の合計) を示します。
ディスクプールのコメント (Disk pool comments)	ディスクプールに関連付けられたコメントです。
高水準点 (High Water Mark)	ディスクプールの高水準点は、プールの個々のディスクボリュームとディスクプールの両方に適用されます。 ■ 個々のボリューム ディスクボリュームが高水準点に達すると、新しいジョブはボリュームに割り当てられません。この動作は、BasicDisk ステージングストレージユニットを除くすべてのディスク形式で発生します。高水準点イベントは、再配置されたイメージの削除をトリガして、低水準点にディスクボリュームの使用済み容量を低下させようとします。 ■ ディスクプール すべてのボリュームが高水準点に達すると、ディスクプールの空きがなくなります。ディスクプールが高水準点に達すると、NetBackup によって、プールに対する書き込みが許可されているジョブの数が削減されます。 NetBackup では、ディスクプールの空きがないと見なされたストレージユニットには、新しいジョブは割り当てられません。デフォルト設定は 99% です。
低水準点 (Low Water Mark)	ディスクプールの低水準点です。ディスクボリュームが高水準点に達すると、NetBackup は、ディスクボリュームの使用済み容量を低水準点まで低下させるのに十分な量の再配置済みイメージを削除しようとします。[低水準点 (Low Water Mark)]設定は、[高水準点 (High Water Mark)]設定を上回ることはできません。 メモ: [低水準点 (Low water mark)]設定は、管理対象の容量の保持形式を使用してバックアップがストレージライフサイクルポリシーによって書き込まれない限り効果がありません。
名前 (Name)	ディスクプールの名前。
ボリューム数 (Number of volumes)	ディスクプールのディスクボリュームの数。

プロパティ	説明
% 使用済み (% full)	ボリュームで現在使用しているストレージの割合。 df コマンドでは、[% 使用済み (% full)]の値とは別の使用済みの割合 ([Use%]) の値がレポートされることがあります。(表示される値が異なる理由については、前述の[利用可能なストレージ (Available Storage)]の説明を参照してください。)
raw サイズ (Raw size)	ディスクプールのストレージのフォーマットされていない raw サイズ。
利用可能サイズ (Usable size)	ディスクプールの利用可能ストレージの容量。

[フラグメントサイズの縮小 (Reduce fragment size to)]ストレージユニット設定

NetBackup[フラグメントサイズの縮小 (Reduce fragment size)]ストレージユニット設定では、バックアップの格納時に で作成可能な最大フラグメントサイズを指定します。

バックアップでエラーが発生すると、バックアップ全体が破棄されます。バックアップは、エラーが発生したフラグメントからではなく、先頭から再度実行されます。(ただし、[チェックポイントから再開]機能が有効になっているバックアップは除きます。その場合、最後のチェックポイント以前のフラグメントは保持されますが、最後のチェックポイントより後のフラグメントは破棄されます。)

Media Manager ストレージユニットの最大フラグメントサイズ

Media Manager ストレージユニットのデフォルトの最大フラグメントサイズは、1000 GB です。デフォルト以外の最大フラグメントサイズを指定するには、[フラグメントサイズの縮小 (Reduce fragment size)]にチェックマークを付けます。それから 50 MB から 1,048,575 MB までの値を入力します。

フラグメント処理された多重化テープバックアップからはリストアを高速に実行できます。フラグメントにより NetBackup では、ファイルの検索を開始する前に、特定のフラグメントにスキップできます。一般に、NetBackup は多重化バックアップの先頭から開始し、ファイルが見つかるまで tar ヘッダーを読み込みます。

ディスクストレージユニットの最大フラグメントサイズ

ディスクストレージユニットのデフォルトの最大フラグメントサイズは、524,288 MB です。デフォルト以外の最大フラグメントサイズを指定する場合、20 MB から 524,288 MB までの値を入力します。

メディアサーバーの重複排除プールの場合、20 MBから 51200 MB までの値を入力できます。

ディスクへのバックアップは、バックアップがファイルシステムの最大利用可能サイズを上回ることがないようにするために、通常はフラグメント化されます。

[フラグメントサイズの縮小 (Reduce fragment size to)] 設定では、主にディスク形式のストレージユニット上に存在するサイズの大きいバックアップイメージを格納するために使用されます。

メモ: OpenStorage のベンダーによっては、最大フラグメントサイズについて特別な要件がある場合があります。詳しくは、ベンダーのマニュアルを参照してください。

メモ: 異なる最大フラグメントサイズが設定されたベーシックディスクステージングユニットが、以前のリリースのメディアサーバーで構成済みである可能性があります。アップグレード時に、ディスクストレージユニットでは、新しいデフォルト値の **524,288 MB** まで自動的に増加されません。アップグレードしたストレージユニットを最も効果的に使用できるように、アップグレードしたストレージユニットの最大フラグメントサイズを増やしてください。

[ロボット番号 (Robot number)] ストレージユニット設定

[ロボット番号 (Robot number)] ストレージユニット設定は、ストレージユニットが含んでいるロボットの番号を示します。[ロボット番号 (Robot number)] は、[ストレージデバイス (Storage device)] の選択項目によって決定されます。Media Manager 構成で使用されるロボット番号と同じロボット番号です。

[ロボット形式 (Robot type)] ストレージユニット設定

[ロボット形式 (Robot type)] ストレージユニット設定は、ストレージユニットに含まれるロボット (存在する場合) の形式を示します。[ロボット形式 (Robot type)] は、[ストレージデバイス (Storage device)] の設定によって決定されます。

NetBackup ロボット形式については別のトピックに記述されています。

p.430 の「[NetBackup のロボット形式](#)」を参照してください。

[ディスクプールの選択 (Select disk pool)] ストレージユニット設定

[ディスクプールの選択 (Select disk pool)] ストレージユニット設定により、ストレージユニットのディスクプールが指定されます。

次の表で、どのディスクプールがドロップダウンリストに表示されるかを説明します。

AdvancedDisk の場合	すべての NetBackup ディスクプールが [ディスクプール (Disk pool)] リストに表示されます。
クラウドストレージの場合	クラウドストレージベンダーが開示するディスクプールのみがリストに表示されます。

OpenStorage の場合

OpenStorage ベンダーが開示するディスクプールのみがリストに表示されます。

PureDisk の場合

メディアサーバーの重複排除プールがリストに表示されます。

[ストレージユニットの変更 (Change Storage Unit)] ダイアログ上の [ステージングスケジュール (Staging Schedule)] のオプション

[ステージングスケジュール (Staging Schedule)] オプションをクリックすると、このストレージユニットの再配置スケジュールを構成できます。スケジュールとは、ディスクストレージユニットをベーシックディスクステージングストレージユニットにするためのものです。再配置スケジュール中に、バックアップイメージが一時的なステージング領域から最終的な宛先ストレージユニットに複製されます。

p.607 の「[\[ディスクステージングスケジュール \(Disk Staging Schedule\)\] ダイアログボックス](#)」を参照してください。

p.594 の「[\[一時的なステージング領域を有効にします \(Enable temporary staging area\)\] ストレージユニット設定](#)」を参照してください。

p.598 の「[ベーシックディスクステージングについて](#)」を参照してください。

p.597 の「[ステージングバックアップについて](#)」を参照してください。

ストレージユニットの [ストレージデバイス (Storage device)] 設定

[ストレージデバイス (Storage device)] リストには、利用可能なすべてのストレージデバイスが含まれます。ストレージユニットは、リストに表示されているデバイスだけに作成できます。

メディアの [密度 (Density)] は、[ストレージデバイス (Storage device)] の選択項目によって決定されます。この設定は、Media Manager および NDMP ストレージユニットのみで表示されます。

[ストレージユニット名 (Storage unit name)] 設定

[ストレージユニット名 (Storage unit name)] 設定は、新しいストレージユニットの一意の名前を定義します。名前ですトレージ形式を示すことができます。[ストレージユニット名 (Storage unit name)] は、ポリシーやスケジュール用のストレージユニットを指定するために使用する名前です。

ストレージユニット名は、作成後に変更できません。[ストレージユニット名 (Storage unit name)] はストレージユニットの設定を変更するとアクセス不能になります。

p.1096 の「[NetBackup 命名規則](#)」を参照してください。

[ストレージユニット形式 (Storage unit type)] 設定

[ストレージユニット形式 (Storage unit type)] 設定では、ストレージユニットが使用するストレージ形式を次のように指定します。

ディスク	p.571 の「 ディスクストレージユニットに関する注意事項 」を参照してください。
Media Manager	p.570 の「 テープストレージユニットに関する注意事項 」を参照してください。
NDMP	p.577 の「 NDMP ストレージユニットに関する注意事項 」を参照してください。

[一時的なステージング領域を有効にします (Enable temporary staging area)] ストレージユニット設定

[一時ステージング領域を有効にします。 (Enable temporary staging area)] ストレージユニット設定によって、ストレージユニットを一時ステージング領域として使用できます。
[一時的なステージング領域を有効にします。 (Enable Temporary Staging Area)] にチェックマークを付け、次にステージングのスケジュールを構成します。

p.593 の「[\[ストレージユニットの変更 \(Change Storage Unit\)\] ダイアログ上の \[ステージングスケジュール \(Staging Schedule\)\] のオプション](#)」を参照してください。

[ストレージユニット (Storage Units)] 詳細ペインの [ステージング (Staging)] 列では、ストレージユニットをベーシックディスクステージングの一時的なステージング領域として使用するかどうかが表示されます。デフォルトでは、すべての列が表示されているわけではありません。

p.598 の「[ベーシックディスクステージングについて](#)」を参照してください。

p.593 の「[\[ストレージユニットの変更 \(Change Storage Unit\)\] ダイアログ上の \[ステージングスケジュール \(Staging Schedule\)\] のオプション](#)」を参照してください。

[任意のメディアサーバーを使用 (Use any available media server)] ストレージユニット設定

チェックマークを付けた場合は、[任意のメディアサーバーを使用 (Use any available media server)] ストレージユニット設定によって、メディアサーバーリスト内のすべてのメディアサーバーがストレージにアクセスできます (デフォルト)。

次の表に、各ストレージ形式のメディアサーバー機能を示します。

表 11-5 メディアサーバーの機能

ストレージユニット形式	機能
AdvancedDisk ストレージメディアサーバー	このメディアサーバーは、ストレージサーバーでもあり、データムーバーでもあります。ストレージサーバーおよびデータムーバーとして構成されたメディアサーバーが、メディアサーバーのリストに表示されます。
クラウドストレージメディアサーバー	クラウドストレージに実装するデータムーバーとして構成されたメディアサーバーが、メディアサーバーのリストに表示されます。(クラウドストレージの場合、 NetBackup メディアサーバーはデータムーバーとして機能します。)
OpenStorage メディアサーバー	OpenStorage に実装するデータムーバーとして構成されたメディアサーバーが、メディアサーバーのリストに表示されます。(OpenStorage では、NetBackup メディアサーバーはデータムーバーとして機能します)。メディアサーバーがリストに表示されない場合は、ソフトウェアプラグインがインストールされていて、ログオンクレデンシャルが作成されていることを検証します。 ストレージにアクセスする各メディアサーバーの要件を次に示します。 ■ ベンダーのソフトウェアプラグインがインストールされていること。 ■ ストレージサーバーへのログインクレデンシャルが構成されていること。
PureDisk メディアサーバー (メディアサーバー 重複排除プール)	このメディアサーバーは、重複排除サーバーとして機能します。 NetBackup 重複排除を構成する必要があります。

WORM 設定の使用

[WORM を使用 (Use WORM)] オプションが、WORM 対応のストレージユニットに対して有効になっています。[WORM のロック解除時間 (WORM Unlock Time)]まで、このストレージユニットのバックアップイメージを変更不可および削除不可にする場合は、このオプションを選択します。

メモ: [WORM を使用 (Use WORM)]オプションが選択されている場合は、常に[オンデマンドのみ (On Demand Only)]オプションも選択する必要があります。

WORM は、Write Once Read Many の略語です。

ユニバーサル共有の概要

ユニバーサル共有機能は、NFS または CIFS (SMB) 共有を使用して既存の **NetBackup** 重複排除プール (MSDP) またはサポート対象の **Cohesity** アプライアンスにデータを取り込みます。

ユニバーサル共有と MSDP の両方で、重複排除と圧縮を使用します。

スペース効率は、このデータを既存の **NetBackup** ベースのメディアサーバー重複排除プールに直接格納することで実現されます。

ユニバーサル共有について詳しくは、『[NetBackup 重複排除ガイド](#)』を参照してください。

バックアップのステージング

この章では以下の項目について説明しています。

- [ステージングバックアップについて](#)
- [ベーシックディスクステージングについて](#)
- [ベーシックディスクステージングストレージユニットの作成](#)
- [再配置スケジュールでの複数のコピーの構成](#)
- [ディスクステージングストレージユニットのサイズおよび容量](#)
- [BasicDisk ディスクステージングストレージユニットにおける解放可能な領域の検索](#)
- [\[ディスクステージングスケジュール \(Disk Staging Schedule\)\]ダイアログボックス](#)
- [再配置スケジュールの手動での開始](#)

ステージングバックアップについて

ステージングされたバックアップ処理では、**NetBackup** はストレージユニットにバックアップを書き込み、次にそれを 2 つ目のストレージユニットに複製します。多くのバックアップに領域が必要になると、初期ストレージユニットで適切なバックアップが削除されます。

この 2 段階の処理によって、**NetBackup** 環境では、リカバリ時にディスクを使用したバックアップの短期的な利点を活かすことができます。

ステージングは次のような目標にも適合します。

- ディスクからより高速にリストアを行える。
- テープドライブの台数が不十分な場合にバックアップを行える。
- イメージを多重化せずにデータをテープにストリーミングできる。

NetBackup には、バックアップをステージングする次の方法があります。

表 12-1 バックアップをステージングするための方式

ステージング方式	説明
ベーシックディスクステージング	ベーシックディスクステージングは、2 つのステージで構成されます。まず、データが初期ストレージユニット (ディスクステージングストレージユニット) に格納されます。次に、構成可能な再配置スケジュールに従って、データが最終的な場所にコピーされます。最終的な宛先ストレージユニットにイメージが置かれることにより、必要に応じてディスクステージングストレージユニットで領域が解放されます。 p.598 の「ベーシックディスクステージングについて」を参照してください。 ベーシックディスクステージングでは、BasicDisk、テープというストレージユニット形式が利用できます。
[ストレージライフサイクルポリシー (Storage lifecycle policies)]ユーティリティを使用したステージング	[ストレージライフサイクルポリシー (Storage lifecycle policies)]ユーティリティ内で構成されたステージングされたバックアップも、2 つのステージで構成されます。ステージングストレージユニットのデータは最終的な宛先にコピーされます。ただし、データは特定のスケジュールに従ってコピーされるわけではありません。代わりに、管理者は、固定保持期間に達するまで、ディスクで追加領域が必要になるまで、またはデータが最終的な宛先に複製されるまで、データをストレージユニットに残しておくように構成できます。 BasicDisk またはディスクステージングストレージユニットは SLP で使うことができません。 p.624 の「ストレージライフサイクルポリシーについて」を参照してください。

ベーシックディスクステージングについて

ベーシックディスクステージングは、次に示す段階で実行されます。

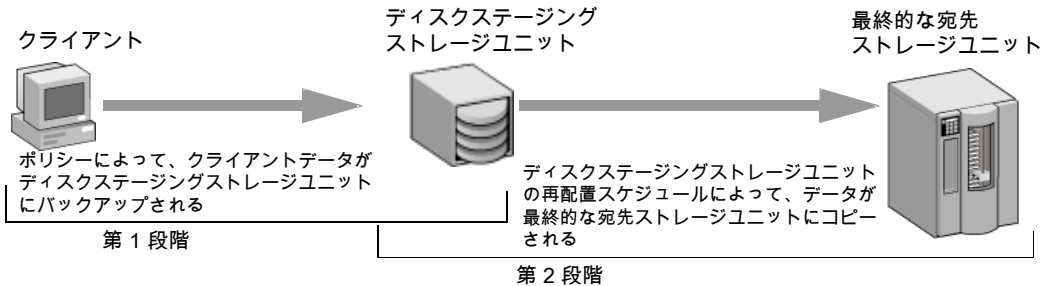
表 12-2 バーシックディスクステージング

段階	説明
第 1 段階	ポリシーによってクライアントがバックアップされます。ポリシーの[ポリシーストレージ (Policy storage)]は、再配置スケジュールが構成されているストレージユニットを示します。スケジュールはステージングスケジュールの設定で構成されます。
第 2 段階	イメージが第 1 段階のディスクステージングストレージユニットから第 2 段階のストレージユニットにコピーされます。ディスクステージングストレージユニットの再配置スケジュールによって、イメージが最終的な宛先にコピーされるタイミングが決定されます。最終的な宛先ストレージユニットにイメージが置かれることにより、必要に応じてディスクステージングストレージユニットで領域が解放されます。

イメージは、イメージの期限が切れるまで、またはディスクストレージユニットの領域が必要になるまで、ディスクステージングストレージユニットと最終的な宛先ストレージユニットの両方に保持されます。

図 12-1 に、ベーシックディスクステージングの段階を示します。

図 12-1 ベーシックディスクステージングの第 1 段階と第 2 段階



再配置スケジュールが実行されると、**NetBackup** によってデータ管理ジョブが作成されます。このジョブでは、ディスクステージングストレージユニットから最終的な宛先にコピー可能なデータが検索されます。アクティビティ 모니터のジョブの詳細で、そのジョブがベーシックディスクステージングと関連付けられたジョブとして識別されます。ジョブリストでは、ジョブの[データ移動 (Data movement)]フィールドに[ディスクステージング (Disk Staging)]と表示されます。

NetBackup によって空きのないディスクステージングストレージユニットが検出されると、バックアップが一時停止されます。次に、**NetBackup** は最終的な宛先に正常にコピーしたストレージユニットの最も古いイメージを検索します。**NetBackup** はディスクステージングストレージユニットでそれらのイメージを期限切れとし、領域を作成します。

メモ: ベーシックディスクステージング方式では、複数のディスクストレージユニットにまたがるバックアップイメージは、サポートされていません。

複数のストレージユニットにまたがることを防ぐには、複数のディスクステージングストレージユニットが含まれるストレージユニットグループに書き込みを行うバックアップポリシーで、[チェックポイントから再開 (Checkpoint Restart)]を使用しないようにします。

p.700 の「[チェックポイントの間隔 (分) (Take checkpoints every __ minutes)](ポリシー属性)」を参照してください。

ベーシックディスクステージングストレージユニットの作成

ディスクステージングを使用して **BasicDisk** ストレージユニットを構成すると、データは初期ストレージユニット (ディスクステージングストレージユニット) に格納されます。次に、構成可能な再配置スケジュールに従って、データが最終的な場所にコピーされます。最終的な宛先ストレージユニットにイメージが置かれることにより、必要に応じてディスクステージングストレージユニットで領域が解放されます。

ディスクステージングを使用して **BasicDisk** ストレージユニットを作成するには

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 [ストレージ (Storage)]、[ストレージユニット (Storage units)]の順に選択します。
- 3 [追加 (Add)]を選択します。
- 4 [BasicDisk]を選択します。次に、[開始 (Start)]をクリックします。
- 5 ストレージユニットのプロパティを選択します。

ストレージユニットの[名前 (Name)]を入力します。 p.593 の「[ストレージユニット名 (Storage unit name)]設定」を参照してください。

このストレージユニットに対して一度に書き込み可能な[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]を入力します。 p.582 の「[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]ストレージユニット設定」を参照してください。

[高水準点 (High Water Mark)]の値を入力します。 高水準点は BasicDisk ディスク形式では異なります。NetBackup は指定された高水準点を超えている場合でも、新しいジョブを BasicDisk ディスクステージングストレージユニットに割り当てます。BasicDisk の場合、高水準点は再配置されたイメージの削除を促すために使われます。

メモ: [低水準点 (Low water mark)]設定は、ディスクステージングストレージユニットに適用されません。

- 6 [次へ (Next)]を選択します。
- 7 ステージングスケジュールの場合、[一時的なステージング領域を有効にします (Enable temporary staging area)]オプションを選択します。
- 8 [ステージングスケジュール (Staging schedule)]セクションで、[追加 (Add)]を選択します。
スケジュール名は、デフォルトでストレージユニット名になります。
スケジュール設定を行います。
p.607 の「[ディスクステージングスケジュール (Disk Staging Schedule)]ダイアログボックス」を参照してください。
- 9 [保存 (Save)]をクリックして、ディスクステージングスケジュールを保存します。
- 10 [次へ (Next)]をクリックします。

- 11 メディアサーバーを選択します。
p.585 の「[\[メディアサーバー \(Media Server\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。
- 12 ストレージに使用するディレクトリへの絶対パスを参照または指定します。
p.578 の「[ストレージユニットのディレクトリへの絶対パス名またはボリューム設定への絶対パス名](#)」を参照してください。
- 13 このディレクトリがルートファイルシステムまたはシステムディスク上に存在できるかどうかを選択します。
p.578 の「[ストレージユニットの\[このディレクトリは、ルートファイルシステムまたはシステムディスク上に存在できます。\]](#)」を参照してください。
- 14 [次へ (Next)]をクリックします。
- 15 ストレージユニットの設定を確認し、[保存 (Save)]をクリックします。

BasicDisk ストレージユニットのスケジュールの作成

ディスクステージングを使用して **BasicDisk** ストレージユニットを構成すると、データは初期ストレージユニット (ディスクステージングストレージユニット) に格納されます。次に、構成可能な再配置スケジュールに従って、データが最終的な場所にコピーされます。最終的な宛先ストレージユニットにイメージが置かれることにより、必要に応じてディスクステージングストレージユニットで領域が解放されます。

BasicDisk ステージングストレージユニットのスケジュールを作成する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[ストレージユニット (Storage units)]の順に選択します。次に、スケジュールを追加する **BasicDisk** ストレージユニットをクリックします。
- 3 [ステージングスケジュール (Staging schedule)]の右側にある[編集 (Edit)]をクリックします。
- 4 [一時的なステージング領域を有効にします。(Enable a temporary staging area.)]を選択します。
スケジュール名は、デフォルトでストレージユニット名になります。
- 5 [このスケジュールから開始された再配置ジョブの優先度 (Priority of relocation job started from this schedule)]の設定を構成します。この設定は、他の形式のジョブと比較した再配置ジョブの優先度を制御します。
p.607 の「[\[ディスクステージングスケジュール \(Disk Staging Schedule\)\]ダイアログボックス](#)」を参照してください。

- 6 コピーを複数作成するかどうかを選択します。[コピーを複数作成する (Multiple copies)] 属性を選択した場合、NetBackup によって最大 4 つのバックアップのコピーを同時に作成できます。
p.776 の「複数のコピー (スケジュール属性)」を参照してください。
- 7 再配置時にこのストレージユニットからのイメージが含まれるようにするには、[最終的な宛先ストレージユニット (Final destination storage unit)]を選択します。
- 8 再配置時にこのストレージユニットからのイメージが含まれるようにするには、[最終的な宛先ボリュームプール (Final destination volume pool)]を選択します。
- 9 再配置時にこのストレージユニットのイメージを所有するメディア所有者を制御する [最終的な宛先メディアの所有権 (Final destination media ownership)]設定を選択します。
- 10 [スケジュール形式 (Schedule type)]を選択します。
- 11 再配置時にこのストレージユニットからのイメージで[代替読み込みサーバーを使用する (Use alternate read server)]かどうかを選択します。
- 12 [保存 (Save)]をクリックして、ディスクステージングスケジュールを保存します。

再配置スケジュールでの複数のコピーの構成

複数のコピーを作成するようにベーシックディスクステージング用の再配置スケジュールを構成するには、次の手順を実行します。

複数のコピーを作成するベーシックディスクステージング用の再配置スケジュールを構成する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 編集するストレージユニットを開きます。次に、[ステージングスケジュール (Staging schedule)]を編集します。
- 3 [属性 (Attributes)]タブで、[コピーを複数作成する (Multiple copies)]を選択します。
- 4 [コピー (Copies)]フィールドに、同時に作成するコピーの数を指定します。数字は 1 から 4 の間である必要があります。
- 5 フィールド[このスケジュールから開始された再配置ジョブの優先度 (Priority of relocation jobs started from this schedule)]で優先度 (0 から 99999) を指定します。

- 6 作成するコピーごとに、コピーの設定を選択します。コピー 1 はプライマリコピーです。コピー 1 が正常に生成されなかった場合、正常に生成された最初のコピーがプライマリコピーです。

p.777 の「[\[複数コピーの構成 \(Configure Multiple Copies\)\]](#)ダイアログボックス」を参照してください。

p.777 の「[複数のコピーの構成について](#)」を参照してください。
- 7 各コピーが格納されるストレージユニットを指定します。Media Manager ストレージユニットに複数のドライブが含まれている場合、そのユニットをソースと宛先の両方に使用できます。
- 8 各コピーが格納されるボリュームプールを指定します。
- 9 [このコピーに失敗した場合 (If this copy fails)]リストから次のいずれかを選択します。

続行 (continue)

残りのコピーの作成を続行します。

メモ: 注意: [チェックポイントの間隔 (分) (Take checkpoints every __ minutes)]がこのポリシーに対して選択されている場合、チェックポイントが設定されている、最後に失敗したコピーだけを再開できます。

p.700 の「[\[チェックポイントの間隔 \(分\) \(Take checkpoints every __ minutes\)\]](#)(ポリシー属性)」を参照してください。

すべてのコピー処理に失敗 (Fail all copies) ジョブ全体が失敗します。

- 10** テープメディアの場合、**NetBackup** によってイメージが書き込まれるメディアの所有者を指定します。

任意 (Any)	NetBackup によって、メディアサーバーまたはサーバーグループのいずれかからメディア所有者が選択されます。
なし (None)	メディアに書き込みを行うメディアサーバーをそのメディアの所有者として指定します。メディアサーバーを明示的に指定しなくても、メディアサーバーがメディアを所有するように設定されます。
サーバーグループ (Server group)	メディアサーバーグループで、このポリシーのバックアップイメージの書き込み先メディアに対して書き込みできるのが、グループ内のメディアサーバーのみになるように指定します。 NetBackup 環境に構成されているすべてのメディアサーバーグループが、リストに表示されます。

この設定は、ディスク上に存在するイメージには影響しません。1 つのメディアサーバーは共有ディスクに存在するイメージを所有しません。ディスクの共有プールにアクセス可能なすべてのメディアサーバーがイメージにアクセスできます。

- 11** [追加 (Add)]または[保存 (Save)]をクリックします。

ディスクステージングストレージユニットのサイズおよび容量

ベーシックディスクステージングを利用するには、**NetBackup** 管理者は、第 1 段階ストレージユニットのイメージの保持期間を知っておく必要があります。

第 2 段階ストレージユニットにコピーされる前のイメージの保持期間は、第 1 段階ストレージユニットのファイルシステムのサイズと使用状況に直接影響を受けます。ディスクステージングストレージユニットごとに専用のファイルシステムを使用することをお勧めします。

たとえば、次の例を考えて見ます。**NetBackup** 管理者は、増分バックアップをディスク上に 1 週間保持すると想定します。

増分バックアップは月曜日から土曜日まで実行され、日曜日には完全バックアップが実行されます。完全バックアップはテープに直接送信され、ベーシックディスクステージングは使用されません。

毎晩の増分バックアップは、ディスクステージングストレージユニットに送信され、その合計サイズは平均して 300 MB から 500 MB です。場合によっては、バックアップのサイズは 700 MB になります。各バックアップの翌日に、再配置スケジュールがディスクステージングストレージユニットで実行され、前夜の増分バックアップが最終的な宛先である **Media Manager** (テープ) ストレージユニットにコピーされます。

次に、ベーシックディスクステージングストレージユニットのディスクサイズの決定について詳しく説明します。

最小ディスクサイズ

最小ディスクサイズは、ディスクステージング処理を正常に行うのに必要な最小サイズです。

最小サイズは、ディスクステージングスケジュールが次に実行されるまでにストレージユニットに置かれるバックアップを合計した最大サイズ以上にする必要があります。(この例では、ディスクイメージはディスクに 1 週間保持されます。)

この例では、再配置スケジュールが毎晩実行され、毎晩のバックアップの最大サイズは **700 MB** です。再配置スケジュールの実行時に起こり得る問題に対応できるように、この値を倍にすることをお勧めします。値を倍にすることによって、管理者は、予備のスケジュールサイクル (1 日) を問題の修正に充てることができます。

次の式を使用して、この例のストレージユニットの最小サイズを計算します。

最小サイズ = サイクルあたりの最大データ × (1 サイクル + 予備の 1 サイクル)

例: 1.4 GB = 700 MB × (1+1)

平均ディスクサイズ

平均ディスクサイズは、最小サイズと最大サイズの間程度の値です。

この例では、毎晩のバックアップの平均サイズが **400 MB** で、NetBackup 管理者はこのイメージを 1 週間保持するとします。

次の式を使用して、この例のストレージユニットの平均サイズを計算します。

平均サイズ = サイクルあたりの平均データ × (データを保持するサイクル数 + 予備の 1 サイクル)

2.8 GB = 400 MB × (6 + 1)

最大ディスクサイズ

最大ディスクサイズは、目的のサービスレベルを達成するために必要な推奨サイズです。この例では、目的のサービスレベルは、ディスクイメージをディスク上に 1 週間保持することです。

次の式を使用して、この例のストレージユニットの最大サイズを計算します。

最大サイズ = サイクルあたりの最大データ × (データを保持するサイクル数 + 予備の 1 サイクル)

例: 4.9 GB = 700 MB × (6 + 1)

BasicDisk ディスクステージングストレージユニットにおける解放可能な領域の検索

解放可能な領域とは、ボリュームで追加の領域が必要になったときに NetBackup によって解放可能な、ディスクステージングストレージユニット上の領域のことです。領域は、有効期限の切れたイメージと、ボリュームで削除準備のできたイメージの合計サイズです。

BasicDisk ストレージユニットで解放可能な領域を検索するには、bpstulist コマンドおよび nbdevquery コマンドを次のように使用します。

- ディスクプール名を検索するには、bpstulist -label を実行します。
ストレージユニットとディスクプールの名前は、大文字と小文字を区別します。BasicDisk ストレージユニットでのディスクプール名は、BasicDisk ストレージユニットの名前と同じです。次の例では、ストレージユニットの名前は **NameBasic** です。

```
bpstulist -label basic
NameBasic 0 server1 0 -1 -1 1 0 "C:¥" 1 1 524288 *NULL* 0 1 0 98 80 0 NameBasic server1
```

- nbdevquery コマンドを実行すると、解放可能な領域とともに、ディスクプールの状態が表示されます。
次のオプションを使用します。

-stype server_type	ストレージサーバー形式を指定するベンダー固有の文字列を指定します。BasicDisk ストレージユニットの場合は、BasicDisk と入力します。
-dp	ディスクプール名を指定します。ベーシックディスク形式の場合、ディスクプール名は、BasicDisk ストレージユニットの名前です。

このため、完全なコマンドは次のようになります。

```
nbdevquery -listdv -stype BasicDisk -dp NameBasic -D
```

値は、potential_free_space として示されます。

```
Disk Volume Dump
name           : <Internal_16>
id             : <C:¥>
diskpool       : <NameBasic::server1::BasicDisk>
disk_media_id  : <@aaaaaf>
total_capacity : 0
free_space     : 0
potential_free_space: 0
```

```
committed_space      : 0
precommitted_space    : 0
nbu_state              : 2
sts_state              : 0
flags                  : 0x6
num_read_mounts        : 0
max_read_mounts        : 0
num_write_mounts       : 1
max_write_mounts       : 1
system_tag             : <Generic disk volume>
```

[ディスクステージングスケジュール (Disk Staging Schedule)]ダイアログボックス

[ステージングスケジュール (Staging Schedule)]をクリックすると、[ディスクステージングスケジュール (Disk Staging Schedule)]ダイアログボックスが表示されます。このダイアログボックスは、ポリシーを構成するときに表示されるスケジュール設定用のダイアログボックスと類似しています。

ディスクステージングストレージユニット用に作成されたスケジュールは、NetBackup 管理コンソールの[ポリシー (Policies)]ユーティリティの[スケジュール (Schedules)] には表示されません。

次の設定は、ディスクステージングスケジュールを作成するときに利用可能です。

表 12-3 [属性 (Attributes)]タブ設定

属性	説明
名前 (Name)	スケジュールの[名前 (Name)]は、デフォルトでストレージユニットの名前になります。
このスケジュールから開始された再配置ジョブの優先度 (Priority of relocation jobs started from this schedule)	[このスケジュールから開始された再配置ジョブの優先度 (Priority of relocation jobs started from this schedule)]フィールドは、NetBackup がこのポリシーで再配置ジョブに割り当てる優先度を示します。範囲は、0 (デフォルト) から 99999 (最も高い優先度) です。表示されるデフォルト値は、[ステージング (Staging)]ジョブの形式の[デフォルトのジョブの優先度 (Default job priorities)]ホストプロパティで設定される値です。 p.90 の「[デフォルトのジョブの優先度 (Default job priorities)]プロパティ」を参照してください。

属性	説明
複数のコピー (Multiple copies)	バックアップの複数のコピーを作成します。NetBackup はバックアップの 4 つまでのコピーを同時に作成できます。 この設定を有効にすると、[最終的な宛先ボリュームプール (Final destination volume pool)] と [最終的な宛先メディアの所有権 (Final destination media ownership)] が無効になります。 p.776 の「複数のコピー (スケジュール属性)」を参照してください。
最終的な宛先ストレージユニット (Final destination storage unit)	スケジュールが再配置スケジュールである場合、[最終的な宛先ストレージユニット (Final destination storage unit)] を指定する必要があります。(再配置スケジュールは、ベーシックディスクステージングストレージユニットの構成の一部として作成されます)。[最終的な宛先ストレージユニット (Final destination storage unit)] は、再配置ジョブによるコピー後にイメージが存在するストレージユニットの名前です。 テープにイメージをコピーする場合、NetBackup では、[最終的な宛先ストレージユニット (Final destination storage unit)] で利用可能なすべてのドライブが使用されます。ただし、そのストレージユニットの[最大並列書き込みドライブ数 (Maximum concurrent write drives)] の設定は、ドライブ数を反映するように設定される必要があります。この設定により、再配置ジョブを処理するために起動される複製ジョブの数が決まります。 NetBackup は、領域の開放を [低水準点 (Low Water Mark)] に達するまで続行します。 p.581 の「[低水準点 (Low Water Mark)] ストレージユニット設定」を参照してください。 p.582 の「最大並列書き込みドライブ数のストレージユニット設定」を参照してください。 p.597 の「ステージングバックアップについて」を参照してください。
最終的な宛先ボリュームプール (Final destination volume pool)	スケジュールが再配置スケジュールである場合、[最終的な宛先ボリュームプール (Final destination volume pool)] を指定する必要があります。(再配置スケジュールは、ベーシックディスクステージングストレージユニットの構成の一部として作成されます)。[最終的な宛先ボリュームプール (Final destination volume pool)] は、ベーシックディスクステージングストレージユニット上のボリュームプールからイメージが移動される宛先ボリュームプールです。 p.597 の「ステージングバックアップについて」を参照してください。 メモ: ベーシックディスクステージングストレージユニット用に作成された再配置スケジュールは、NetBackup 管理コンソールの [ポリシー (Policies)] ユーティリティの [スケジュール (Schedules)] には表示されません。

属性	説明
最終的な宛先メディアの所有者 (Final destination media owner)	スケジュールが再配置スケジュールである場合、[最終的な宛先メディアの所有者 (Final destination media owner)]を指定する必要があります。(再配置スケジュールは、ベーシックディスクステージングストレージユニットの構成の一部として作成されます)。[最終的な宛先メディアの所有者 (Final destination media owner)]は、再配置ジョブによるコピー後にイメージが存在するメディアの所有者です。 次のいずれかを指定します。 ■ [任意 (Any)]は、NetBackup でメディアの所有者を選択します。NetBackup はメディアサーバーかサーバーグループ (構成されている場合) を選択します。 ■ なし (None): メディアにイメージを書き込むメディアサーバーがそのメディアの所有者として指定されます。メディアサーバーを明示的に指定しなくても、メディアサーバーがメディアを所有するように設定されます。 ■ サーバーグループ: サーバーグループを指定すると、このポリシーのバックアップイメージの書き込み先メディアに対して書き込みできるのが、グループ内のサーバーのみになります。[最終的な宛先メディアの所有者 (Final destination media owner)] ドロップダウンメニューには、NetBackup 環境に構成されているすべてのサーバーグループが表示されます。
スケジュール形式 (Schedule Type)	カレンダー (Calendar) p.773 の「[カレンダー (Calendar)](スケジュール属性)」を参照してください。 間隔 (Frequency) p.773 の「[間隔 (Frequency)](スケジュール属性)」を参照してください。 ディスクステージングストレージユニットを使うバックアップが予想以上の頻度で作動するときは、[間隔 (Frequency)] の設定と保持レベル 1 の設定を比較します。内部的には、NetBackup はディスクステージングのストレージユニットとのスケジュールの目的の保持レベル 1 の設定を使います。 バックアップ頻度の期間は、保持レベル 1 の設定より高い頻度でバックアップが実行されるように設定されていることを確認してください。(デフォルトは 2 週間です。) たとえば、頻度が「1 日」、保持レベル 1 が「2 週間」で十分機能します。保持レベルは [保持期間 (Retention periods)] のホストプロパティで構成されます。 p.163 の「[保持期間 (Retention periods)]プロパティ」を参照してください。

属性	説明
代替読み込みサーバーの使用 (Use alternate read server)	代替読み込みサーバーは、異なるメディアサーバーによって書き込まれたバックアップイメージを読み込むことができます。 ディスクまたはディレクトリのパスは、ディスクにアクセスする各メディアサーバーで一致している必要があります。 バックアップイメージがテープ上に存在する場合、メディアサーバーが同じテープライブラリを共有するか、またはオペレータがメディアを検索する必要があります。 バックアップイメージが共有されていないロボットまたはスタンドアロンドライブに存在する場合、メディアを新しい場所に移動する必要があります。管理者は、メディアを移動し、新しいロボット内のメディアに対してインベントリを行った後、<code>bpmedia -oldserver -newserver</code> を実行するか、またはフェールオーバーメディアサーバーを割り当てる必要があります。 複製中にデータがネットワークを介して送信されることを回避するには、次の条件に一致する代替読み込みサーバーを指定します。 ■ 元のバックアップ (ソースボリューム) が存在するストレージデバイスに接続されている。 ■ 最終的な宛先ストレージユニットが存在するストレージデバイスに接続されている。 最終的な宛先ストレージユニットが代替読み込みサーバーに接続されていない場合、データはネットワークを介して送信されます。
コピー (Copies)	同時に作成するコピーの数を指定します。範囲は 1 から 4 です。
複製ジョブの優先度 (Priority of duplication job)	このポリシーの複製ジョブに NetBackup が割り当てる優先度を示します。範囲は、0 (デフォルト) から 99999 (最も高い優先度) です。

属性	説明
コピー # (Copy #)	作成するコピーごとに、コピーの設定を選択します。コピー 1 はプライマリコピーです。コピー 1 が正常に生成されなかった場合、正常に生成された最初のコピーがプライマリコピーです。 ストレージユニット (Storage Unit) 各コピーが格納されるストレージユニットを指定します。Media Manager ストレージユニットに複数のドライブが含まれている場合、そのユニットをソースと宛先の両方に使用できます。 ボリュームプール (Volume pool) 各コピーが格納されるボリュームプールを指定します。 このコピーに失敗した場合 (If this copy fails) ■ 続行 (continue) 残りのコピーの作成を続行します。 メモ: 注意: [チェックポイントの間隔 (分) (Take checkpoints every __ minutes)]がこのポリシーに対して選択されている場合、チェックポイントが設定されている、最後に失敗したコピーだけを再開できます。 p.700 の「[チェックポイントの間隔 (分) (Take checkpoints every __ minutes)](ポリシー属性)」を参照してください。 ■ すべてのコピー処理に失敗 (Fail all copies) ジョブ全体が失敗します。 メディア所有者 (Media Owner) テープメディアの場合、NetBackup によってイメージが書き込まれるメディアの所有者を指定します。 この設定は、ディスク上に存在するイメージには影響しません。1 つのメディアサーバーは共有ディスクに存在するイメージを所有しません。ディスクの共有プールにアクセス可能なすべてのメディアサーバーがイメージにアクセスできます。 ■ 任意 (Any) NetBackup によって、メディアサーバーまたはサーバーグループのいずれかからメディア所有者が選択されます。 ■ なし (None) メディアに書き込みを行うメディアサーバーをそのメディアの所有者として指定します。メディアサーバーを明示的に指定しなくても、メディアサーバーがメディアを所有するように設定されます。 ■ サーバーグループ (Server group) メディアサーバーグループで、このポリシーのバックアップイメージの書き込み先メディアに対して書き込みできるのが、グループ内のメディアサーバーのみになるように指定します。NetBackup 環境に構成されているすべてのメディアサーバーグループが、リストに表示されます。

再配置スケジュールの手動での開始

スケジュールの実行前に最終的な宛先にイメージをコピーするために、再配置スケジュールを手動で開始することができます。

再配置スケジュールを開始する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (Management)]>[ストレージ (Storage)]>[ストレージユニット (Storage Units)] を選択します。
- 2 右ペインで、ベーシックディスクステージングストレージユニットを選択します。
- 3 [処理 (Actions)]>[手動での再配置 (Manual Relocation)]または[最終的な宛先への手動での再配置 (Manual Relocation to Final Destination)]を選択してスケジュールを開始します。

再配置スケジュールによってコピー可能なデータが検出された場合、最終的な宛先ストレージユニットにデータをコピーする複製ジョブが NetBackup によって作成されます。

これで、ディスクステージング (第 1 段階) ストレージユニットの空きがなくなり、古いイメージが削除されるまで、イメージが両方のストレージユニットに存在します。

p.576 の「[ディスクストレージユニットの空きディスク容量の維持](#)」を参照してください。

ストレージユニットグループの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [ストレージユニットグループについて](#)
- [バックアップのストレージユニットグループの作成](#)
- [スナップショットのストレージユニットグループの作成](#)
- [ストレージユニットグループの削除](#)
- [グループでのストレージユニットの選択条件](#)
- [ストレージユニットグループでのディスクスパンについて](#)

ストレージユニットグループについて

ストレージユニットグループを使用すると、特定のストレージユニットをグループとして識別できます。ストレージユニットグループ名は、個別のストレージユニットを指定する場合と同様に、一定のポリシーに従うストレージとして指定できます。ストレージユニットグループを指定するとき、ポリシーは指定グループのそれらのストレージユニットにだけバックアップかスナップショットを指示します。

ストレージユニットグループの形式は、次のいずれかです。

- [バックアップ用ストレージユニットグループ](#)
バックアップ用ストレージユニットグループは、バックアップを保存するストレージユニットのみで構成されます。さらに、メディアサーバーの重複排除のプールおよびサードパーティのディスクのアプライアンス (OpenStorage) のストレージのために、グループのすべてのストレージユニットはストレージの同じ種類である必要があります。
p.614 の「[バックアップのストレージユニットグループの作成](#)」を参照してください。

- スナップショット用ストレージユニットグループ
スナップショット用ストレージユニットグループは、スナップショットを保存するストレージユニットのみで構成されます。グループのすべてのストレージユニットは、同じディスク形式 (Disk Type) を選択していなければなりません。
p.616 の「[スナップショットのストレージユニットグループの作成](#)」を参照してください。
- NetBackup は、次のユースケースのストレージユニットグループはサポートしていません。
- 最適化された複製の対象として。
重複排除されたデータの最適化複製の宛先としてストレージユニットグループを使うと、NetBackup は通常の複製を使います。
 - 自動イメージレプリケーションのソースまたはターゲットとして。
 - 最適化された合成バックアップのターゲットとして。
NetBackup が、最適化された合成バックアップを生成できない場合、NetBackup はよりデータの移動に特化した合成バックアップを作成します。
 - OpenStorage のダイレクトテープ操作のターゲットとして。
『[NetBackup ディスクの OpenStorage のソリューションガイド](#)』を参照してください。

バックアップのストレージユニットグループの作成

バックアップを保持できるストレージユニットで構成されるストレージユニットグループを作成する手順を次に説明します。

ストレージユニットグループを作成する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (Management)]>[ストレージ (Storage)]を展開します。
- 2 [ストレージユニットグループ (Storage Unit Groups)]を右クリックして[新しいストレージユニットグループ (New Storage Unit Group)]を選択します。
- 3 新しいストレージユニットグループのストレージユニットグループ名を入力します。ストレージユニットグループ名では、大文字と小文字が区別されます。
p.1096 の「[NetBackup 命名規則](#)」を参照してください。
- 4 バックアップ保存先のストレージユニットグループを選択するには、ドロップダウンメニューから[バックアップ (Backup)]を選択します。
- 5 選択したグループにバックアップストレージユニットを追加するか、グループからユニットを削除します。
 - ストレージユニットをグループに追加するには、[このグループに属さないストレージユニット (Storage units not in the group)]のリストからストレージユニットを選択し、[追加 (Add)]をクリックします。

- ストレージユニットをグループから削除するには、[このグループに属するストレージユニット (Storage units in the group)] リストからストレージユニットを選択し、[削除 (Remove)] をクリックします。
- ストレージユニットの優先度を変更するには、ストレージユニットを選択して[上に移動 (Move Up)]または[下に移動 (Move Down)]をクリックします。リストの一番上にあるユニットが、グループ内で最も優先度が高いユニットです。

メモ: メディアサーバーの重複排除のプールおよびサードパーティのディスクのアプリケーション (OpenStorage) のストレージのために、グループのすべてのストレージユニットはストレージの同じ種類である必要があります。

6 ストレージユニットグループでのストレージユニットの選択方法を指定します。

- [優先 (Prioritized)]。リストの中で、ビジー状態や停止状態ではない十分なメディアを持つ最初のストレージユニットを選択します。
- [フェールオーバー (Failover)]。リストの中で、停止状態ではない十分なメディアを持つ最初のストレージユニットを選択します。
フェールオーバーを各種のストレージ、AdvancedDisk、メディアサーバー重複排除プール (Media Server Deduplication Pool)、OpenStorage (ベンダー名) に選択することをお勧めします。
- [ラウンドロビン (Round Robin)]。選択されていない期間が最も長いストレージユニットをリストから選択します。
- [メディアサーバーの負荷分散 (Media server load balancing)]。容量管理アプローチに基づいてストレージユニットを選択します。
ストレージユニットグループ内のディスクステージングストレージユニットに[メディアサーバーの負荷分散 (Media server load balancing)]条件を設定することをお勧めします。
p.620 の「[メディアサーバーの負荷分散 \(Media server load balancing\)](#)」を参照してください。

p.619 の「[グループでのストレージユニットの選択条件](#)」を参照してください。

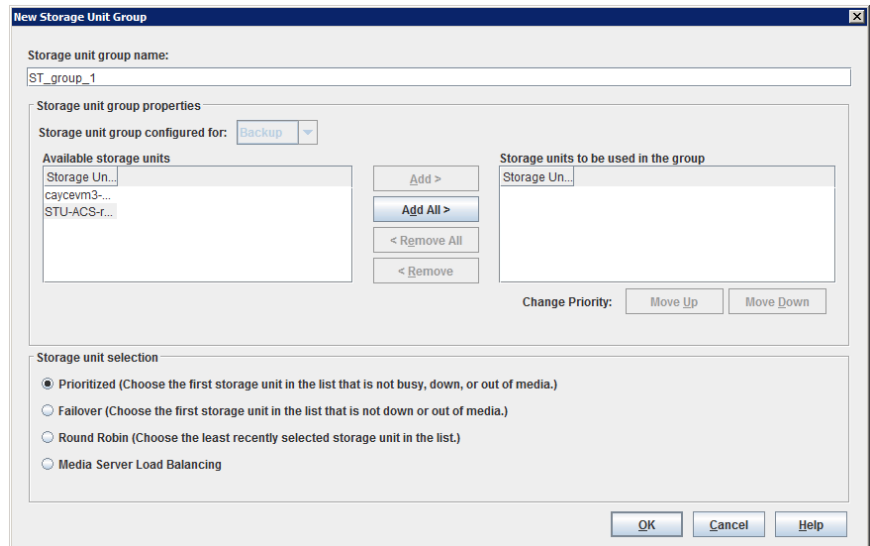
選択条件の唯一の例外は、メディアサーバーを兼ねたクライアントにストレージユニットがローカル接続されている場合です。

p.622 の「[ストレージユニットの選択条件の例外](#)」を参照してください。

7 [OK] をクリックします。

p.613 の「[ストレージユニットグループについて](#)」を参照してください。

図 13-1 バックアップストレージユニットグループ設定用のダイアログボックス



スナップショットのストレージユニットグループの作成

ストレージユニットグループの作成は省略可能です。スナップショットのストレージユニットグループはプロパティが同じストレージユニットで構成されている必要があります。

次の手順は、スナップショットを含められるストレージユニットから構成されるストレージユニットグループを作成する方法を示しています。

スナップショットのストレージユニットグループを作成する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (Management)]>[ストレージ (Storage)]を展開します。
- 2 [ストレージユニットグループ (Storage Unit Groups)]を右クリックして[新しいストレージユニットグループ (New Storage Unit Group)]を選択します。
- 3 新しいストレージユニットグループのストレージユニットグループ名を入力します。ストレージユニットグループ名では、大文字と小文字が区別されます。
p.1096 の「NetBackup 命名規則」を参照してください。
- 4 ストレージユニットグループにスナップショットを含めるには、ドロップダウンメニューで[スナップショット (Snapshot)]を選択します。
- 5 ストレージユニットグループには同様のプロパティを共有するストレージユニットのみを含めることができます。NetBackup は、1 つのストレージユニットグループに異な

るストレージユニットが組み合わせられないように、選択するストレージユニットにフィルタ処理を行います。

メモ: 基になるストレージユニットのプロパティは読み取り専用です。このダイアログボックスからストレージユニットのプロパティを変更できません。

リストのストレージユニットをフィルタ処理するために、1 つ以上のプロパティを選択してください。選択されたプロパティを備えているストレージユニットのみが表示されます。たとえば、レプリケーションソースとレプリケーションターゲットを選択すると、レプリケーションソースとレプリケーションターゲットの両方として機能するように構成されたストレージユニットのみが表示されます。

次のプロパティのストレージユニットをフィルタ処理してください。

- **プライマリ (Primary)**
[プライマリ (Primary)]を有効にして、プライマリデータの初回スナップショットを含むストレージユニットを表示します。
- **レプリケーションソース (Replication source)**
[レプリケーションソース (Replication source)]を有効にして、レプリケートスナップショットのソースとして機能するストレージユニットを表示します。
- **レプリケーションターゲット (Replication target)**
[レプリケーションターゲット (Replication target)]を有効にして、レプリケーションソースからレプリケートスナップショットを受信できるストレージユニットを表示します。
 - **ミラー (Mirror)**
任意で、[ミラー (Mirror)]を有効にして、ミラー化されたレプリケーションターゲットとして機能するストレージユニットを表示します。(例: NetApp SnapMirror)。
 - **独立 (Independent)**
任意で、[独立 (Independent)]を有効にして、ミラーレプリケーションターゲット (SnapMirror) または非ミラーレプリケーションターゲット (SnapVault) として機能できるストレージユニットを表示します。

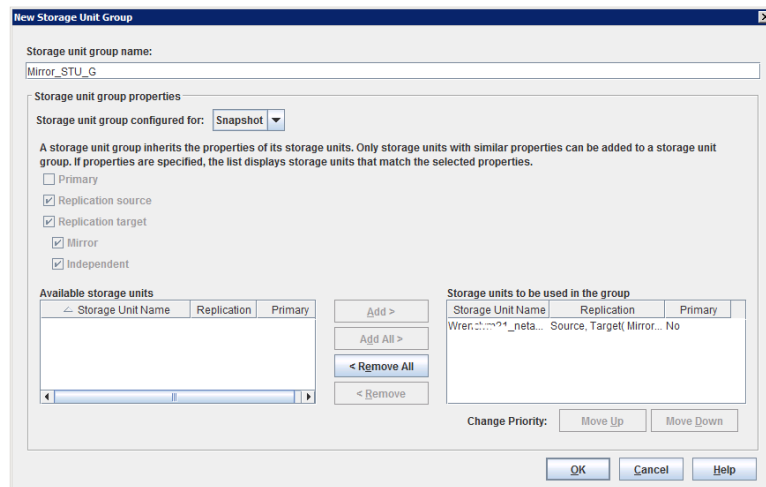
スナップショットのプロパティについて詳しくは、『[NetBackup Replication Director ソリューションガイド](#)』を参照してください。

- 6 ストレージユニットグループに対してストレージユニットの追加または削除を行います。
 - ストレージユニットをグループに追加するには、[利用可能なストレージユニット (Storage units not in the group)] のリストからストレージユニットを選択し、[追加 (Add)] をクリックします。

- ストレージユニットをグループから削除するには、[グループに使用されるストレージユニット (Storage units to be used in the group)] のリストからストレージユニットを選択し、[削除 (Remove)] をクリックします。
- ストレージユニットの優先度を変更するには、ストレージユニットを選択して[上に移動 (Move Up)]または[下に移動 (Move Down)]をクリックします。リストの一番上にあるユニットが、グループ内で最も優先度が高いユニットです。

7 [OK] をクリックして保存し、このダイアログボックスを閉じます。

図 13-2 スナップショットのストレージユニットグループの構成のダイアログボックス



ストレージユニットグループの削除

次の手順はストレージユニットグループを削除する方法を示しています。

ストレージユニットグループを削除する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (Management)]>[ストレージ (Storage)]>[ストレージユニットグループ (Storage Unit Groups)]を選択します。
- 2 右ペインのストレージユニットグループのリストから、削除するストレージユニットグループを選択します。複数のストレージユニットを選択するには、Ctrl キーまたは Shift キーを押しながら選択します。
- 3 [編集 (Edit)]>[削除 (Delete)]を選択します。
- 4 [OK]をクリックします。

グループでのストレージユニットの選択条件

ストレージユニットの選択条件はストレージユニットがストレージユニットグループ内で選択される順序を決定します。

選択条件オプションでの唯一の相違はストレージユニットが選択される順序です。

次のいずれかの選択条件を選択します。

選択項目	説明
優先 (Prioritized)	[優先 (Prioritized)] オプションを選択すると、NetBackup は、リストから次に利用可能なストレージユニットを選択します。[優先 (Prioritized)] は、デフォルトの選択です。 ストレージユニットが利用不能な場合、NetBackup は利用可能なユニットを見つけるまで次のストレージユニットを調べます。
フェールオーバー (Failover)	[フェールオーバー (Failover)] オプションが選択されている場合、ジョブはストレージユニットを待機する必要があるときに、グループ内の別のストレージユニットを試行するのではなくキューで待機します。
ラウンドロビン (Round robin)	[ラウンドロビン (Round robin)] オプションを選択すると、NetBackup は、新しいジョブが開始されるたびに、リストから最近の選択回数が最も少ないストレージユニットを選択します。 ストレージユニットが利用不能な場合、NetBackup は利用可能なユニットを見つけるまで次のストレージユニットを調べます。
メディアサーバーの負荷分散 (Media server load balancing)	[メディアサーバーの負荷分散 (Media server load balancing)] オプションを選択すると、NetBackup は、容量管理アプローチに基づいてストレージユニットを選択します。NetBackup のようにして、NetBackup は、ビジー状態のメディアサーバーへのジョブの送信を回避します。 ストレージユニットが利用不能な場合、NetBackup は利用可能なユニットを見つけるまで次のストレージユニットを調べます。 p.620 の「メディアサーバーの負荷分散 (Media server load balancing)」を参照してください。

ストレージユニットが利用不能である場合、そのストレージユニットに対するキューが形成されます。

次にストレージユニットが利用不能と見なされる理由を示します。

- ストレージユニットがビジー状態である。
- ストレージユニットが停止している。
- ストレージユニットにメディアがない。

- ストレージユニットに利用可能な領域がない。
 - ストレージユニットが[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]設定に達している。
p.582 の「[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]ストレージユニット設定」を参照してください。
- p.622 の「ストレージユニットの選択条件の例外」を参照してください。

メディアサーバーの負荷分散 (Media server load balancing)

[メディアサーバーの負荷分散 (Media server load balancing)]オプションは、NetBackup が容量管理アプローチに基づいてストレージユニットを選択することを示します。このようにして、NetBackup は、ビジー状態のメディアサーバーへのジョブの送信を回避します。

ストレージユニットが利用不能な場合、NetBackup は利用可能なユニットを見つけるまで次のストレージユニットを調べます。

次の要因に基づいて選択されます。

- メディアサーバーのランク。
NetBackup は、各 CPU で実行中のプロセス数および各サーバーのメモリのしきい値を考慮し、メディアサーバーのランクを決定します。空きメモリが所定のしきい値を下回ったり、CPU あたりの実行プロセス数が所定のしきい値を上回った場合は、そのメディアサーバーの総合ランクが下がります。
- メディアサーバー上のジョブの数。
NetBackup は、各メディアサーバーでスケジュールされたジョブの数を考慮します。
- イメージの概算サイズに対応できるだけのディスク領域がメディアサーバーにあるかどうか。(物理テープおよび仮想テープはこの要件を無視します。)
NetBackup は各メディアサーバー上の新しいジョブまたは現在のジョブのサイズを推定します。次に、指定のボリュームにジョブが適合するかどうかを判断します。
NetBackup は、以前のバックアップの履歴に基づいて、ジョブに必要な領域の量を見積もります。利用可能な履歴が存在しない場合は、ストレージユニットの高水準点が目安になります。

[メディアサーバーの負荷分散 (Media server load balancing)]は、BasicDisk ストレージユニットを含むストレージユニットグループに対しては選択できません。また、BasicDisk ストレージユニットは、[メディアサーバーの負荷分散 (Media server load balancing)]が有効な既存のストレージユニットグループに含めることはできません。

メモ: ストレージユニットグループ内のディスクステージングストレージユニットには、[メディアサーバーの負荷分散 (Media server load balancing)]を選択することをお勧めします。

次の方法も、バックアップの作業負荷の分散に使用できます。

メディアサーバー上のバックアップ負荷を調整します。	■ メディアサーバーに送信される 1 つ以上のポリシーに対して、ポリシー属性の「[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)]」を変更します。下限を指定すると、特定のネットワークセグメントのメディアサーバーの作業負荷が減少します。 p.704 の「[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)] (ポリシー属性)」を参照してください。 ■ 他のメディアサーバー上のストレージユニットを使用するためにポリシーまたはスケジュールを再構成します。 ■ 1 つ以上のクライアントでホストプロパティの「帯域幅 (Bandwidth)」を変更することを検討します。 p.619 の「グループでのストレージユニットの選択条件」を参照してください。
使用頻度が高い期間のメディアサーバー上のバックアップ負荷を分散します。	負荷を処理できるメディアサーバーのストレージユニットにバックアップを書き込むようにポリシースケジュールを再設定します (マスターサーバーおよびメディアサーバーが異なるホスト上にある必要があります)。
クライアントのバックアップ負荷を調整します。	グローバル属性の「1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)」を変更します。たとえば、「1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)」の制限を大きくすると、任意のクライアントが処理できる並列実行ジョブの数が増えるため、負荷も増えます。 p.619 の「グループでのストレージユニットの選択条件」を参照してください。
クライアントのバックアップにかかる時間を削減します。	クライアントが並列して実行できるジョブの数を増やすか、または多重化を使用します。または、クライアントのバックアップを行っているポリシーに対して、メディアサーバーが並列して実行できるジョブの数を増やします。
ポリシーに優先度を指定します。	優先するポリシーの「[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)]」属性値を、他のポリシーよりも大きくします。または、ポリシーに対する優先度を上げます。 p.704 の「[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)] (ポリシー属性)」を参照してください。
高速ネットワークと低速ネットワーク間の負荷を調整します。	高速ネットワーク上で実行されるポリシーおよびクライアントの「[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)]」および「1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)」を増やします。低速ネットワーク上で実行されるこれらの数を減らします。また、帯域幅を制限する NetBackup の機能を使用することもできます。 p.704 の「[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)] (ポリシー属性)」を参照してください。 p.619 の「グループでのストレージユニットの選択条件」を参照してください。
デバイスの使用を最大化します。	多重化を使用します。サーバー、クライアントまたはネットワークのパフォーマンスに問題を発生させることなく、ストレージユニット、ポリシーおよびクライアントごとの並列実行ジョブを可能なかぎり多く使用できるようにします。

バックアップによるテープデバイスの独占を回避します。

- 一部のドライブを停止状態にしたり、特定のストレージユニットで並列して使用されるドライブの数を制限します。たとえば、ロボットに 4 台のドライブが存在する場合、2 台だけを並列して使用できるようにします。
- すべてのデバイスを **Media Manager** の制御下に配置しないようにしてください。

ストレージユニットの選択条件の例外

ストレージユニット選択条件の順序の唯一の例外は、メディアサーバーを兼ねたクライアントにストレージユニットがローカル接続されている場合です。ローカル接続で利用可能なストレージユニットは、ストレージユニットのグループ内で定義された順序より優先して使用されます。

ストレージユニットを[オンデマンドのみ (On demand only)]に設定することもできます。ユニットがポリシーに必要なストレージユニットグループに含まれる場合、[オンデマンドのみ (On demand only)]オプションが適用され、このデバイスが使用されます。

p.588 の「[\[オンデマンドのみ \(On demand only\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。

p.619 の「[グループでのストレージユニットの選択条件](#)」を参照してください。

ストレージユニットグループでのディスクスパンについて

空き領域のないディスクを検出した場合は、バックアップはストレージユニットをまたがることがあります。ストレージユニットどうしが同じストレージユニットグループ内にある場合は、バックアップが **BasicDisk** ストレージユニット間をまたがる場合があります。また、ストレージユニットは同じメディアサーバーを共有する必要があります。

p.619 の「[グループでのストレージユニットの選択条件](#)」を参照してください。

ストレージライフサイクルポリシー (SLP) の構成

- [第14章 ストレージライフサイクルポリシーの構成](#)
- [第15章 ストレージ操作](#)
- [第16章 SLP 操作の保持形式](#)
- [第17章 ストレージライフサイクルポリシーのオプション](#)
- [第18章 複数のコピーを作成するストレージライフサイクルポリシーの使用](#)
- [第19章 ストレージライフサイクルポリシーのバージョン](#)

ストレージライフサイクルポリシーの構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [ストレージライフサイクルポリシーについて](#)
- [ストレージライフサイクルポリシーの作成](#)
- [ストレージライフサイクルポリシーの削除](#)
- [nbstutil コマンドを使用したライフサイクル操作の管理](#)

ストレージライフサイクルポリシーについて

ストレージライフサイクルポリシー (SLP) は、一連のバックアップのストレージ計画です。SLP は、[ストレージライフサイクルポリシー (Storage lifecycle policies)] ユーティリティで構成します。SLP はストレージ操作の形式の手順を含み、バックアップポリシーによってバックアップされるデータに適用されます。操作は SLP に追加され、データがどのように保存、コピー、レプリケート、保持されるかを決定します。NetBackup は必要に応じて、すべてのコピーが作成されるようにコピーを再実行します。

SLP によって、ユーザーはポリシーレベルでデータに分類を割り当てられるようになります。データの分類は、一連のバックアップ要件を表します。データの分類を使用すると、さまざまな要件でデータのバックアップを簡単に構成できるようになります。たとえば、電子メールデータと財務データなどがあります。

SLP はステージングされたバックアップ動作を行うように設定できます。SLP に含まれるすべてのバックアップイメージに所定の操作を適用することでデータ管理が簡略化されます。この処理によって、NetBackup 管理者は、ディスクを使用したバックアップの短期的な利点を活かすことができます。また、テープを使用したバックアップの長期的な利点を活かすこともできます。

[SLP 設定 (SLP settings)]ホストプロパティにより、管理者は、SLP の保守方法や SLP ジョブの実行方法をカスタマイズできます。

SLP についてのベストプラクティスの情報は、次に挙げるドキュメントに記載されています。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100009913>

ストレージライフサイクルポリシーの作成

ストレージライフサイクルポリシー (SLP) は、一連のバックアップのストレージ計画です。SLP の操作はデータのバックアップ指示です。複数のストレージ操作を含んでいる SLP を作成するには、次の手順を使います。

ストレージ操作をストレージライフサイクルポリシーに追加する方法

- 1 左側で[ストレージ (Storage)]、[ストレージライフサイクルポリシー (Storage lifecycle policy)]の順に選択します。
- 2 [追加 (Add)]をクリックします。
- 3 ストレージライフサイクルポリシー名を入力します。
p.652 の「[ストレージライフサイクルポリシーの設定](#)」を参照してください。
- 4 SLP に 1 つ以上の操作を追加します。操作は、SLP がバックアップポリシーで従い、適用する手順です。
これが SLP に追加される最初の操作であれば、[追加 (Add)]をクリックします。
子操作を追加するには、操作を選択して[子の追加 (Add child)]をクリックします。
- 5 操作の種類を選択します。子操作を作成している場合、SLP は選択した親操作に基づいて有効である操作だけを表示します。
p.630 の「[ストレージライフサイクルポリシーに規定する操作形式](#)」を参照してください。
- 6 操作のプロパティを設定します。
- 7 [時間帯 (Window)]タブには、[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]、[複製 (Duplication)]、[インポート (Import)]、[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]および[レプリケーション (Replication)]の操作形式が表示されます。セカンダリ操作をいつ実行するかを制御したい場合は、操作の時間帯を作成します。
- 8 [プロパティ (Properties)]タブで、[詳細 (Advanced)]に移動して展開します。時間帯が終了した後に NetBackup でアクティブなイメージを処理するかどうかを選択します。
- 9 [作成 (Create)]を選択して、操作を作成します。

- 10 必要に応じて、追加の操作を SLP に追加します。(手順 4 を参照してください。)
- 11 必要に応じて、SLP の操作の階層を変更します。
- 12 [作成 (Create)]を選択して、SLP を作成します。SLP は、最初に作成したときと変更するたびに NetBackup によって検証されます。
- 13 バックアップポリシーを設定し、ストレージライフサイクルポリシーを Policy storage として選択します。

p.681 の「[バックアップポリシーの作成](#)」を参照してください。

ストレージライフサイクルポリシーの操作の階層の修正

場合により、SLP に含まれる操作の階層を修正できます。矢印を使用して階層に移動します。

メモ: 自動管理ストレージライフサイクルポリシーは変更しないことをお勧めします。ユーザーが自動管理 SLP の変更を開始すると、その後起こり得る事象について警告するダイアログが表示されます。

p.684 の「[自動管理ポリシーまたはストレージライフサイクルポリシーについて](#)」を参照してください。

SLP が保存されるときは操作順序は、次回 SLP が開かれるときとは異なることがあります。NetBackup は操作を記録し、カタログ設定ファイルに保存します。ただし、階層の動作は変更されず、親子関係は保持されます。

必要に応じて、リスト内の操作の順序を変更します。順序を変更しても、選択された操作のソースは変更されません。また、順序の変更は操作の子を移動し、子と選択された操作との関係を保持します。

- 階層内で操作を上下に移動するには、[編集 (Edit)]、[上へ (Up)]または[編集 (Edit)]、[下へ (Down)]を選択します。
- 選択した操作を親操作の兄弟または兄弟操作の子にするには、[編集 (Edit)]、[昇格 (Promote)]または[編集 (Edit)]、[降格 (Demote)]を選択します。[バックアップ (Backup)]操作または[スナップショット (Snapshot)]操作を昇格または降格することはできません。

ストレージライフサイクルポリシーの削除

ストレージライフサイクルポリシーを削除するには、次の手順を実行します。SLP を削除すると、SLP のすべてのバージョンが削除されることに注意してください。

メモ: 自動管理ストレージライフサイクルポリシーは変更または削除しないことをお勧めします。ユーザーが自動管理 SLP の変更または削除を開始すると、その後起こり得る事象について警告するダイアログが表示されます。

p.684 の「[自動管理ポリシーまたはストレージライフサイクルポリシーについて](#)」を参照してください。

ストレージライフサイクルポリシーを削除する方法

- 1 新しいバックアップジョブが SLP に書き込みをしないように、すべてのバックアップポリシーから SLP を削除してください。
- 2 アクティビティモニターまたはコマンドラインを使って進行中の SLP へのすべてのバックアップジョブが完了または中止されるまで待ちます。
- 3 新しいジョブ、または既存の複製ジョブが SLP に書き込むのを防ぐために、次のコマンドを実行してください:

```
nbstlutil cancel -lifecycle name
```

- 4 アクティビティモニター を使って、SLP を使用する実行中のジョブをキャンセルしてください。
- 5 すべての操作を完了したら、次のいずれかの方法で SLP を削除します。

- NetBackup 管理コンソール

- [ストレージ (Storage)]>[ストレージライフサイクルポリシー (Storage Lifecycle Policies)]を展開します。
- SLP の名前を選択します。
- [編集 (Edit)]>[削除 (Delete)]を選択します。
- [ストレージライフサイクルポリシーの削除 (Delete Storage Lifecycle Policies)]ダイアログボックスで、SLP の名前を選択し、[OK]をクリックします。

- nbstl コマンド

```
nbstl storage_lifecycle_name -delete
```

管理者が有効なイメージのある SLP を削除しようすると、状態コード 1519 (イメージは処理中です) が表示されます。エラーが表示されなくなるまで数分間待ってから、もう一度 SLP を削除します。

メモ: システムエラーにより孤立したイメージが検出された場合、NetBackup はそのイメージが存在することをログに記録し、状況に対処するよう管理者にアラートを表示します。

nbstlutil コマンドを使用したライフサイクル操作の管理

NetBackup ストレージライフサイクルポリシーユーティリティのコマンド (nbstlutil) を使用すると、管理者は保留中の SLP 操作に介入できます。特に、nbstlutil コマンドを使用して、既存の SLP 管理対象イメージの処理の取り消し、無効化、有効化を行うことができます。

nbstlutil は、現在実行中またはキューに投入されているジョブには影響しません。実行中またはキューに投入されているジョブに介入するには、アクティビティモニターを使用します。

表 14-1 nbstlutil の詳細

nbstlutil の情報	詳細
存在する場所	このコマンドは、次の場所に存在します。 Windows の場合: <pre>install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥nbstlutil</pre> UNIX の場合: <pre>/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/nbstlutil</pre> メモ: NetBackup 10.3 以降では、nbstlutil バイナリは NetBackup プライマリサーバーにのみ存在します。プライマリサーバー以外のサーバーに nbstlutil バイナリを移植しないでください。
使用方法	nbstlutil を使用して、次の管理操作を実行します。 ■ SLP 管理対象イメージの状態をリストします。SLP 処理されたイメージの状態を印刷できます。SLP の問題のトラブルシューティングを行うために、サポート担当者からこの情報を要求される場合があります。 ■ 選択したイメージまたはイメージのコピーに対して、保留中の複製操作をキャンセルします。複製が取り消されると、NetBackup は、そのイメージ (またはイメージコピー) は SLP を完了したとみなします。バックアップイメージのコピーの作成をそれ以上試行しません。 ■ 選択したイメージまたはイメージのコピーに対して、保留中または将来の SLP 操作を無効化 (一時停止) します。NetBackup はこれらのイメージ情報を保持しますので、管理者は後で処理操作を再開できます。 ■ 選択したイメージまたはイメージのコピーに対して、一時停止された SLP 操作を有効化 (再開) します。 nbstlutil で利用可能なすべてのオプションの説明については、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

nbstlutil の情報	詳細
使用する状況	NetBackup は 5 分間隔で複製セッションを開始し、バックアップ操作から複製操作にデータをコピーします。5 分は、SLP パラメータホストプロパティのイメージ処理の間隔 (Image processing interval) パラメータのデフォルトの頻度です。 コピーが失敗すれば、次の 3 つの複製セッションによってコピーが再試行されます。コピーが 3 回とも失敗した場合は、正常に終了するまで 2 時間間隔でコピーが再試行されます。2 時間は、SLP パラメータホストプロパティの拡張イメージの再試行間隔のデフォルトの頻度です。 解決に 15 分より長い時間が必要なハードウェアの問題が発生した場合は、nbstlutil コマンドを使用します。つまり、この問題の解決には、複製セッションを 5 分間隔で 3 回実行するよりも時間がかかります。 たとえば、ライブラリにハード障害があるために複製ジョブが失敗するとします。ライブラリを修復するために 2 時間以上かかることがあります。管理者は複製ジョブを 2 時間ごとに開始したくない場合があります。ライブラリが修復されている間 SLP を非アクティブにするには nbstlutil コマンドを使います。準備ができれば SLP を有効化することができ、複製ジョブが開始可能になります。 メモ: ジョブの再アクティブ化後、管理者は一時的に 拡張イメージの再試行間パラメータを 1 時間に変更して複製ジョブを早く開始することもできます。

ストレージ操作

この章では以下の項目について説明しています。

- [ストレージライフサイクルポリシーに規定する操作形式](#)
- [SLP の\[バックアップ \(Backup\)\]操作](#)
- [SLP の\[スナップショットからのバックアップ \(Backup From Snapshot\)\]操作](#)
- [SLP の\[複製 \(Duplication\)\]操作](#)
- [SLP の\[インポート \(Import\)\]操作](#)
- [SLP の\[スナップショットからのインデックス \(Index From Snapshot\)\]操作](#)
- [SLP の\[レプリケーション \(Replication\)\]操作](#)
- [SLP の\[スナップショット \(Snapshot\)\]操作](#)
- [ストレージのライフサイクルのポリシーのストレージ操作の階層の作成](#)

ストレージライフサイクルポリシーに規定する操作形式

[操作 (Operation)]を選択すると、ストレージライフサイクルポリシーの説明に移行します。次のトピックは各操作の目的を記述します。

- p.632 の「[SLP の\[スナップショットからのバックアップ \(Backup From Snapshot\)\]操作](#)」を参照してください。
- p.633 の「[SLP の\[複製 \(Duplication\)\]操作](#)」を参照してください。
- p.635 の「[SLP の\[スナップショットからのインデックス \(Index From Snapshot\)\]操作](#)」を参照してください。
- p.638 の「[SLP の\[レプリケーション \(Replication\)\]操作](#)」を参照してください。
- p.640 の「[SLP の\[スナップショット \(Snapshot\)\]操作](#)」を参照してください。

SLP の[バックアップ (Backup)]操作

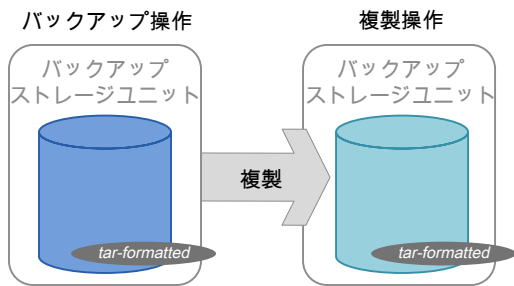
ストレージライフサイクルポリシーで[バックアップ (Backup)]操作を使用して、バックアップを作成します。単一のストレージライフサイクルポリシーにある[バックアップ (Backup)]操作は、すべて同じメディアサーバー上にある必要があります。

[バックアップ (Backup)]操作は、tar 書式付きのイメージを生成します。スナップショットイメージを生成するには、[スナップショット (Snapshot)]操作を選択します。

表 15-1 バックアップ操作の特性

特性	説明
宛先ストレージ (Destination storage)	選択は、バックアップストレージユニットまたはバックアップストレージユニットグループである必要があります (次の注意を参照)。 選択は、スナップショットのストレージユニットまたはスナップショットのストレージユニットグループではいけません。 メモ: 自動イメージレプリケーションのための SLP を作成している場合は、ストレージユニットグループを選択しないでください。自動イメージレプリケーションは、ストレージユニットグループからのレプリケートをサポートしません。つまり、ソースコピーはストレージユニットグループにはありません。 p.1000 の「NetBackup 自動イメージレプリケーションについて」を参照してください。
子	[バックアップ (Backup)]操作は、他のどの操作の子としても機能しません。
コピー元	[バックアップ (Backup)]操作は、[複製 (Duplication)]操作のコピー元になることができます。(図 15-1 を参照してください)。
階層の注意	[バックアップ (Backup)]操作が SLP 内に表示される場合、それが最初の操作である必要があります。 SLP には、最大 4 つの[バックアップ (Backup)]操作が含まれます。
ジョブ形式 (Job type)	[バックアップ (Backup)]操作により、アクティビティモニターに[バックアップ (Backup)]ジョブが生成されます。
時間帯 (Window)	[バックアップ (Backup)]操作には SLP ウィンドウを作成するオプションはありません。 p.657 の「[時間帯 (Window)]タブ」を参照してください。

図 15-1 バックアップ操作を含む SLP



SLP の[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作

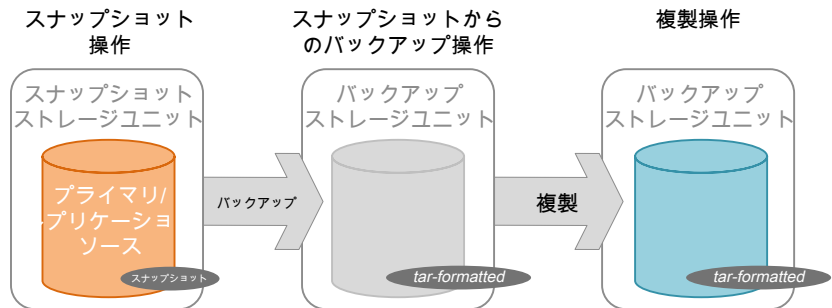
スナップショットの tar 書式付きのコピーを作成するには、[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作を使用します。新しいコピーはバックアップコピーです。この処理を *snappedupe* ジョブと呼ぶこともあります。

表 15-2 スナップショットからのバックアップ操作の特性

特性	説明
宛先ストレージ (Destination storage)	選択は、バックアップストレージユニットまたはバックアップストレージユニットグループである必要があります。 選択は、スナップショットのストレージユニットまたはスナップショットのストレージユニットグループではいけません。
子	[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作は、[スナップショット (Snapshot)]操作をソースとして使用する必要があります。
コピー元	[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作は[複製 (Duplication)]操作のソースになることができます。(図 15-2 を参照してください)。
階層の注意	SLP は、複数の[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作を含むことがあります。最初の[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作が修復不能なエラーによって失敗すると、NetBackupはこの操作の 2 回目を実行しません。 メモ: SLP が NDMP ポリシー (または NDMP データムーバーを有効にした標準ポリシー、MS-Windows ポリシー) で使用される場合、SLP に含まれる[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作は 1 つだけであることもあります。

特性	説明
ジョブ形式 (Job type)	[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作によって、アクティビティモニターにバックアップジョブが生成されます。 [スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作に起因するバックアップジョブは、SLP マネージャによって制御されます。SLP 時間帯が設定されている場合、バックアップジョブは設定された SLP 時間帯で実行されます。SLP 時間帯が 1 つも設定されていない場合、バックアップジョブは任意の時間 (バックアップポリシーで設定されたバックアップ処理時間帯以外など) に実行されます。ユーザーは、NetBackup がスナップショットにアクセスする間、クライアントまたはクライアントのストレージデバイスのわずかなパフォーマンス低下に気づく場合があります。
時間帯 (Window)	SLP ウィンドウは [スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)] 操作のために作成できます。 p.657 の「[時間帯 (Window)]タブ」を参照してください。

図 15-2 スナップショットからのバックアップ操作を含む SLP



SLP の[複製 (Duplication)]操作

[複製 (Duplication)]操作を使用して、[バックアップ (Backup)]、[スナップショットからのバックアップ (Backup from Snapshot)]操作や、他の[複製 (Duplication)]操作のコピーを作成します。メディアサーバーは、この操作を実行しコピーを書き込みます。

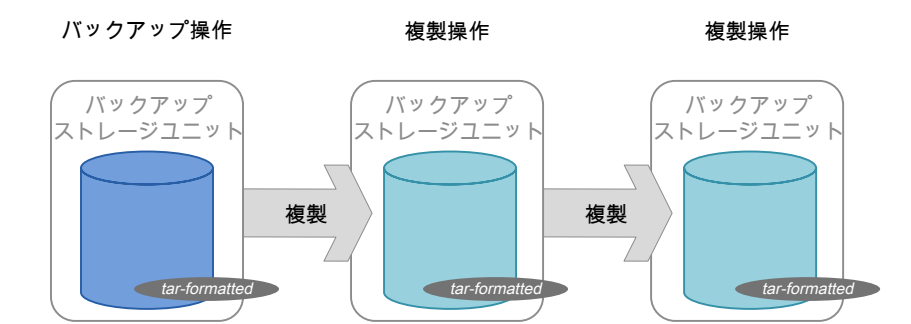
メモ: [レプリケーション (Replication)]操作を使用し、[スナップショット (Snapshot)]操作のコピーを作成します。

p.638 の「SLP の[レプリケーション (Replication)]操作」を参照してください。

表 15-3 複製操作の特性

特性	説明
宛先ストレージ (Destination storage)	選択は、バックアップストレージユニットまたはバックアップストレージユニットグループである必要があります。 選択は、スナップショットのストレージユニットまたはスナップショットのストレージユニットグループではいけません。
子	[複製 (Duplication)]操作は、次の操作の子になることができます。 ■ [バックアップ (Backup)]操作 ■ [スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作 ■ [複製 (Duplication)]操作
コピー元	[複製 (Duplication)]操作は[複製 (Duplication)]操作のソースになることができます。(図 15-3を参照してください)。
ジョブ形式 (Job type)	[複製 (Duplication)]操作によって、アクティビティモニターに[複製 (Duplication)]ジョブが生成されます。
時間帯	SLP 時間帯は[複製 (Duplication)]操作のために作成できます。 p.657 の「[時間帯 (Window)]タブ」を参照してください。

図 15-3 1 つのバックアップ操作と 2 つの複製操作を含む SLP



SLP の[インポート (Import)]操作

[インポート (Import)]操作を、自動イメージレプリケーションの一部として使用します。SLP での[インポート (Import)]操作は、SLP が自動的にターゲットのプライマリドメインにイメージをインポートすることを示します。[インポート (Import)]操作を含む SLP はインポート SLP と言われます。

表 15-4 インポートの運用特性

特性	説明
宛先ストレージ (Destination storage)	[インポート (Import)]操作はバックアップストレージユニットかバックアップストレージユニットグループからのみインポートできます。スナップショットストレージユニットまたはスナップショットストレージユニットグループからはインポートできません。
子	[インポート (Import)]操作は他のどの操作の子としても機能できません。
コピー元 (Source for)	[インポート (Import)]操作は[複製 (Duplication)]操作元である場合があります。 SLP 内の 1 つ以上の操作で[ターゲットの保持 (Target retention)]保持形式を使う必要があります。
階層の注意	SLP に[インポート (Import)]操作が含まれている場合、必ず操作リストの最初の操作であり、唯一の[インポート (Import)]操作となります。
ジョブ形式	[インポート (Import)]操作はアクティビティモニターで[インポート (Import)]ジョブを生成します。
時間帯 (Window)	SLP 時間帯は[インポート (Import)]操作のために作成できます。 p.657 の「[時間帯 (Window)]タブ」を参照してください。

[ジョブの優先度を上書き (Override job priority)]オプションを選択できます。この SLP を使う任意のインポートジョブに管理者がジョブ優先度を指定できるようにします。

SLP の[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作

[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作は、既存のスナップショットの内容をインデックス付けします。NetBackup がスナップショットにインデックスを付けると、各スナップショットの NetBackup カタログにイメージカタログファイル (.if) が作成されます。このファイルの存在により、表 15-5 で説明されているように、スナップショットからファイルを復元する必要がある場合にユーザーを支援します。

[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作によっても、イメージカタログファイルが作成されます。[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]が各自の環境における復元の必要性に対して十分な頻度で実行されていれば、[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]が必要にならない場合があります。たとえば、[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]が 1 週間に一度実行されても、ファイルの復元が毎日必要な場合は、[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]の使用を考慮してください。

スナップショットの実際の復元には、[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]が実行されたかどうかに関係なく、スナップショットをマウントする必要があります。

表 15-5 リストア操作

リストアの形式	説明	要件
ライブ参照リストア	ユーザーはディレクトリ構造をナビゲートし、復元するファイルを見つけて選択します。	.f ファイルが NetBackup カタログに存在する必要はありません。 ライブ参照リストア中に、NetBackup は、ユーザーがスナップショットに含まれているファイルを確認できるように、自動的にスナップショットをマウントします。スナップショットのマウントとマウント解除には時間がかかることがあります。

表 15-6 [スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作の特性

特性	説明
宛先ストレージ (Destination storage)	[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作は、ストレージユニットにデータを書き込みません。ただし、スナップショットへのアクセスに使用するメディアサーバーを選択するために、宛先ストレージの選択は必要です。ベストプラクティスとして、[スナップショット (Snapshot)]操作または[レプリケーション (Replication)]操作から得られるこの操作のソースであるストレージユニットを使用してください。
子	[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]は、[スナップショット (Snapshot)]または[レプリケーション (Replication)]操作の子です。
コピー元	[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作が操作元でない可能性がある場合も、[レプリケーション (Replication)]操作はその操作を追従します。
階層の注意	[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作はシステムリソースを消費する場合があります、.f ファイルを作成するために各スナップショットをマウントする必要があります。 p.637 の「[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作がいつどこで実行されるかの決定」を参照してください。
ジョブ形式 (Job type)	[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作は、アクティビティモニターに[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]ジョブを生成します。
時間帯 (Window)	SLP 時間帯は[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作のために作成できます。

[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作を使用する前に、以下の項目に留意してください。

- [スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作は、レプリケーションディレクタ構成でのみサポートされます。
- [標準 (Standard)]、[MS-Windows]、[NDMP]、[VMware] バックアップポリシー形式では、[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作を含んでいるストレージライフサイクルポリシーの使用がサポートされます。
ただし、[標準 (Standard)]または[MS-Windows]ポリシーで NDMP データムーバーが有効になっている場合はサポートされません。
- [スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作は完全または増分スケジュールから実行できます。いずれかのスケジュールの .f ファイルに追加されたファイルエントリは、すべてのファイルをそのスナップショットからリストアできるため完全なファイルセットになります。これによりリストアは最も効率的になりますが、.f ファイルによって NetBackup カタログで消費される領域は増加します。

[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作がいつどこで実行されるかの決定

[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作を含めるとシステムリソースを消費し、追加の実行時間が必要になる場合があるため、いくつかの注意事項があります。たとえば、操作を実行するとスナップショットがマウントされる必要がある場合や、カタログを入力するために NetBackup がファイルシステムから内容の詳細を収集する必要がある場合があります。

操作で必要となる追加のリソースと時間を軽減するために、システム管理者は[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作をいつどこで実行するかを制御できます。

- [時間帯 (Window)]タブを使用して、[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作をいつ実行できるかをスケジュールします。他のジョブの妨げになる可能性が最も低いときに操作が実行されるようにスケジュールします。
p.657 の「[時間帯 (Window)]タブ」を参照してください。
- 以下の点から、SLP の操作リストで、どこに[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作を配置するかを決めます。
 - NetBackup の環境ごとに、特定の SLP でこの操作が最も機能を発揮するのはどこかを判断する必要があります。操作リストで[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作の位置がリストの上位に寄りすぎていると、リストアの機能が不要なときに時間を浪費する原因となります。操作リストでこの操作の位置がリストの末尾側に寄っていると、前のスナップショットまたはレプリケーションが完了するまで管理者によるリストアが遅れる原因となります。
 - SLP の[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作を、1 回のみ使用します。1 つのイメージ .f ファイルが作成された後、リストアを任意のスナップショットから実行できます。

- [スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作を含むどの操作リストにも、[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作は必要ありません。[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作により、イメージ .f ファイルが作成されます。唯一の例外は、[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作を実行する前にリストアにインデックスが必要な場合です。
- [スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作は依存関係を持ってません。SLP は、子をとまなう[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作を検証できません。
有効な SLP 設定については、表 15-7と表 15-8を参照してください。
[レプリケーション (Replication)]操作は[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作に続きます。ただし、この操作は[スナップショット (Snapshot)]操作の子であり、[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作の子ではありません。
[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作の後に[レプリケーション (Replication)]操作を追加するには、[スナップショット (Snapshot)]操作を選択し、次に[追加 (Add)]をクリックします。

表 15-7 [スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作の有効な配置の例 1

スナップショット	STU_Primary1
レプリケーション	STU_2
スナップショットからのインデックス	任意 (Any available)

表 15-8 [スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作の有効な配置の例 2

スナップショット	STU_Primary1
スナップショットからのインデックス	任意 (Any available)
レプリケーション	STU_2

SLP の[レプリケーション (Replication)]操作

次の形式のレプリケーションには、[レプリケーション (Replication)]操作を使用します。

- NetBackup レプリケーションディレクトは、スナップショットをレプリケートします。

- p.1043 の「[NetBackup Replication Director について](#)」を参照してください。
- NetBackup 自動イメージレプリケーションでのバックアップのレプリケート。
p.1016 の「[自動イメージレプリケーションに必要なストレージライフサイクルポリシーについて](#)」を参照してください。

表 15-9 レプリケーションの運用特性

特性	説明
レプリケーションターゲット (Replication target)	宛先ストレージの属性の下: ■ レプリケーションディレクトタに対しては、レプリケートされたスナップショットを含むように構成される[ストレージ (Storage)]を選択します。 core;webuiadmin ■ 自動イメージレプリケーションに対しては、次のいずれかを選択します。 ■ すべてのターゲット NetBackup のドメインのストレージサーバーにバックアップをレプリケートします。 ■ 特定のドメインの特定のマスターサーバーにバックアップをレプリケートします。この種類の自動イメージレプリケーションは「ターゲット型 A.I.R (Targeted A.I.R)」として知られます。
子	[レプリケーション (Replication)]操作は、次の任意の操作の子になることができます。 ■ スナップショットをレプリケートするための NetBackup レプリケーションディレクトタの[スナップショット (Snapshot)]操作。 ■ もう 1 つの[レプリケーション (Replication)]操作 ■ NetBackup 自動イメージレプリケーションのための[バックアップ (Backup)]操作。
コピー元	[レプリケーション (Replication)]操作は、次の操作元である場合があります。 ■ レプリケーション ■ スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot) p.632 の「SLP の[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作」を参照してください。
ジョブ形式	[レプリケーション (Replication)]操作はアクティビティモニターに[レプリケーション (Replication)]ジョブを生成します。
時間帯	SLP ウィンドウは[複製 (Replication)]操作のために作成できます。 p.657 の「[時間帯 (Window)]タブ」を参照してください。

SLP の[スナップショット (Snapshot)]操作

[スナップショット (Snapshot)]操作は、ある特定の時点のデータの読み取り専用のディスクベースコピーを作成します。**NetBackup** では、スナップショットが発生するデバイスに応じて、複数の形式のスナップショットを提供します。

NetBackup レプリケーションディレクタ構成では、ストレージライフサイクルポリシーの最初の操作として[スナップショット (Snapshot)]操作を使用します。

表 15-10 スナップショット操作の運用特性

特性	説明
宛先ストレージ (Destination storage)	次のトピックでは、スナップショット操作のストレージとして使うことができるスナップショットストレージユニットの形式を説明します。 ■ p.641 の「プライマリスナップショットのストレージユニット」を参照してください。 ■ p.641 の「プライマリとレプリケーションソースのスナップショットのストレージユニット」を参照してください。 ■ p.642 の「レプリケーションソースとレプリケーション先のスナップショットのストレージユニット」を参照してください。 ■ p.643 の「レプリケーション先のスナップショットのストレージユニット」を参照してください。 ■ p.643 の「レプリケーションソース、レプリケーション先、ミラーのスナップショットのストレージユニット」を参照してください。 [ストレージユニット (Storage unit)]は、以下の場合に必ず選択します。 ■ [スナップショット (Snapshot)]が、以降の[レプリケーション (Replication)]操作によって使用される場合。[スナップショット (Snapshot)]操作に指定されているストレージユニットは、プライマリストレージに相当するスナップショット可能なストレージユニットである必要があります。 ■ SLP に 1 つのみ含まれる操作が[スナップショット (Snapshot)]操作である場合、ストレージユニットを指定します。NetBackup はそのストレージユニットを使用することで、どのメディアサーバーを使用しスナップショットジョブを起動するかを判断します。 上記のいずれも SLP に該当しない場合、管理者は[ストレージユニットなし (No storage unit)]を選択できます。NetBackup は、[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作のために選択されるストレージユニットを使用します。
子	[スナップショット (Snapshot)]操作は、他のどの操作の子としても機能しません。
コピー元	[スナップショット (Snapshot)]操作は次の操作元ではある場合があります。 ■ スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot) ■ スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot) ■ レプリケーション操作 (Replication operation)

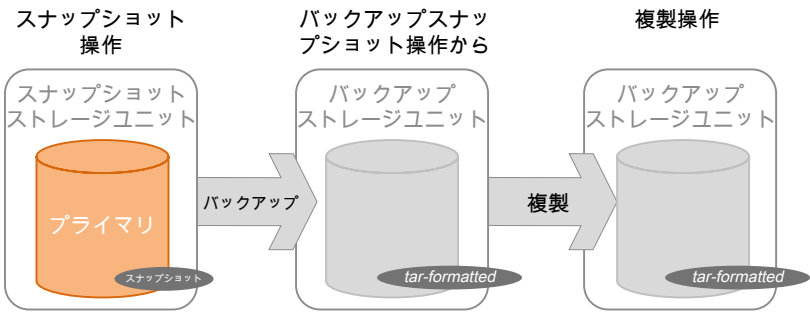
特性	説明
階層の注意	[スナップショット (Snapshot)]操作が SLP に表示される場合、必ず操作リストの最初の項目となります。
ジョブ形式	[スナップショット (Snapshot)]操作はアクティビティモニターに[スナップショット (Snapshot)]ジョブを生成します。
時間帯	[スナップショット (Snapshot)]操作には SLP 時間帯を作成するオプションはありません。 p.657 の「[時間帯 (Window)]タブ」を参照してください。

プライマリスナップショットのストレージユニット

スナップショット操作では、[プライマリ (Primary)]スナップショットのストレージユニットを使用できます。つまり、ストレージユニットは[プライマリ (Primary)]のプロパティセットのみがあるボリュームを含むディスクプールを表します。

図 15-4 には、1 つのプライマリのみの[スナップショット (Snapshot)]操作、1 つの[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作、および 1 つの[複製 (Duplication)]操作を含む SLP が示されます。[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作は、プライマリのみの[スナップショット (Snapshot)]操作のスナップショットから、バックアップを作成するのに使用されます。バックアップが作成された後に、[複製 (Duplication)]操作に複製されます。

図 15-4 スナップショット操作、スナップショットからのバックアップ操作、および複製操作を含む SLP



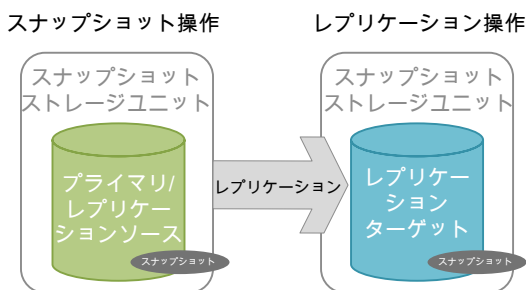
プライマリとレプリケーションソースのスナップショットのストレージユニット

SLP 操作では、[プライマリ (Primary)]と[レプリケーションソース (Replication source)]のスナップショットのストレージユニットを使用できます。つまり、ストレージユニットは[プライマリ (Primary)]と[レプリケーションソース (Replication source)]の両方を含むボリュームを含むディスクプールを表します。

イマリ (Primary)]のプロパティと[レプリケーションソース (Replication source)]のプロパティセットの両方があるボリュームを含む、ディスクプールを表します。

図 15-5 には、[プライマリ (Primary)]と[レプリケーションソース (Replication source)]のスナップショットのストレージユニットを 1 つの操作として、および 1 つの[レプリケーションターゲット (Replication target)]スナップショットのストレージユニットをもう 1 つの操作として含む、SLP が示されます。[プライマリ (Primary)]と[レプリケーションソース (Replication source)]のストレージユニットは、[レプリケーションターゲット (Replication target)]のストレージユニットにレプリケートできます。

図 15-5 スナップショット操作とレプリケーション操作を含む SLP

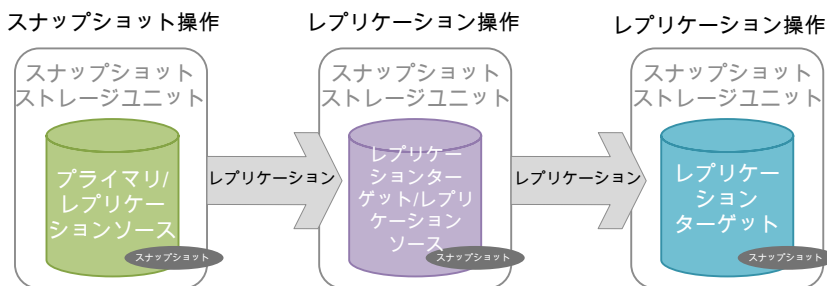


レプリケーションソースとレプリケーション先のスナップショットのストレージユニット

SLP 操作では、[レプリケーションソース (Replication source)]および[レプリケーションターゲット (Replication target)]のプロパティを持つボリュームを含むディスクプールを表す、スナップショットのストレージユニットを使用できます。

これらのプロパティを持つスナップショットのストレージユニットは、SLP 内の別の操作の[レプリケーションソース (Replication source)]と SLP 内の別の操作の[レプリケーションターゲット (Replication target)]の両方として機能します。

図 15-6 スナップショット操作と 2 つのレプリケーション操作を含む SLP

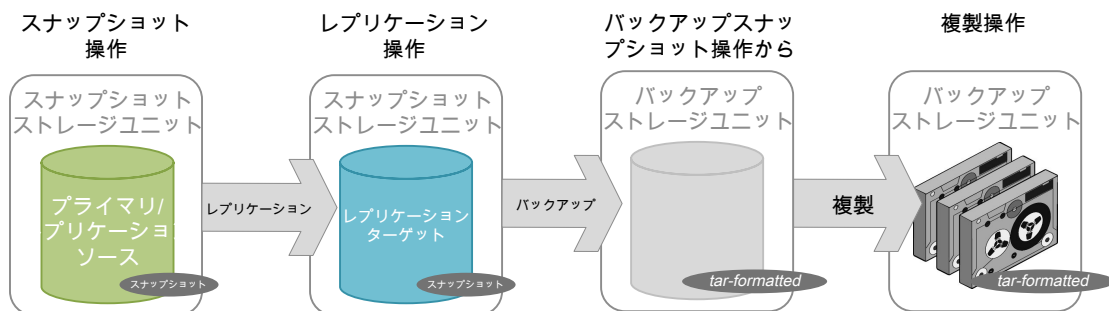


レプリケーション先のスナップショットのストレージユニット

SLP 操作では、[レプリケーションターゲット (Replication target)]のプロパティセットのみがあるボリュームを含むディスクプールを表す、スナップショットのストレージユニットを使用できます。

このプロパティを持つ操作は、SLP 内の別の操作用の[レプリケーションターゲット (Replication target)]としてのみ機能します。それはレプリカのソースとしては機能しませんが、[複製 (Duplication)]操作のソースとしては機能します。

図 15-7 スナップショット操作、レプリケーション操作、スナップショットからのバックアップ操作、および複製操作を含む SLP



レプリケーションソース、レプリケーション先、ミラーのスナップショットのストレージユニット

SLP では、[レプリケーションソース (Replication source)]、[レプリケーションターゲット (Replication target)]、[ミラー (Mirror)]のプロパティを持つボリュームを含むディスクプールを表す、スナップショットのストレージユニットを使用できます。

これらのプロパティを持つ操作は両方として機能します。

- カスケード構成の[レプリケーションソース (Replication source)]。
- カスケード構成のミラー化[レプリケーションターゲット (Replication target)]。ミラー化[レプリケーションターゲット (Replication target)]には、強制的な[ミラー (Mirror)]保持形式が必要です。

レプリケーション先とミラーのスナップショットのストレージユニット

SLP では、[レプリケーションターゲット (Replication target)]および[ミラー (Mirror)]のプロパティを持つボリュームを含むディスクプールを表す、スナップショットのストレージユニットを使用できます。

ミラー化[レプリケーションターゲット (Replication target)]には、強制的な[ミラー (Mirror)]保持形式が必要です。

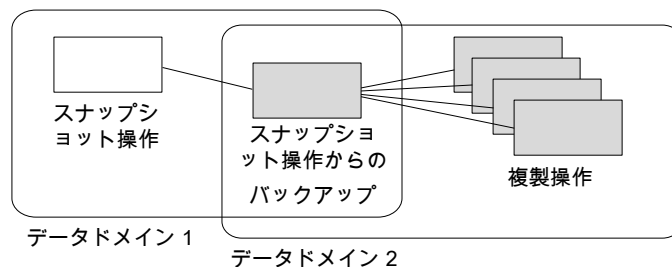
ストレージのライフサイクルのポリシーのストレージ操作の階層の作成

ストレージライフサイクルポリシーの操作リストは、SLP が保護するデータについての NetBackup への指示リストとして機能します。1 つの操作が別の操作に依存する場合もあります。たとえば、スナップショットはレプリケーションのソースとして機能する場合があります。あるいは、バックアップは複製元として機能することがあります。

SLP の操作階層は、親と子の関係を表します。

1 つのコピーは他の多くのコピーのソースである場合もあります。図 15-8 は最初のコピーが作成された後、それ以降のすべてのコピーがネットワークリソースを使わずに、どのようにそのソースからローカルに作成できるかを示しています。

図 15-8 階層的な操作



階層で操作の場所を変更すると、以降のコピーのソースとなるストレージユニットが変更されます。階層を変更しても操作の形式を変更できません。(たとえば、バックアップ操作を複製操作にするなど。)

SLP 操作の保持形式

この章では以下の項目について説明しています。

- ストレージライフサイクルポリシー操作の保持形式
- SLP 操作の[管理対象の容量 (Capacity managed)]保持形式
- SLP 操作の[コピー後に期限切れにする (Expire after copy)]保持形式
- SLP 操作の[固定 (Fixed)]保持形式
- SLP 操作の[スナップショットの最大限度 (Maximum snapshot limit)]保持形式
- SLP 操作の[ミラー (Mirror)]保持形式
- SLP 操作の[ターゲットの保持 (Target retention)]形式

ストレージライフサイクルポリシー操作の保持形式

ストレージライフサイクルポリシー内のストレージ操作の[保持形式 (Retention type)]によって、ストレージメディアにデータが保持される期間が決まります。

表 16-1 では、各種操作に対する有効な保持形式を説明します。

表 16-1 操作と保持形式の構成

保持形式	バックアップ操作	スナップショット操作	レプリケーション操作	スナップショットからのバックアップ操作	複製操作
固定 (Fixed)	有効	有効	有効	有効	有効
コピー後に期限切れにする (Expire after copy)	有効	有効	有効	有効	有効

保持形式	バックアップ操作	スナップショット操作	レプリケーション操作	スナップショットからのバックアップ操作	複製操作
スナップショットの最大限度 (Maximum Snapshot limit)	無効	有効。SLP はポリシーの設定を優先します。	無効	無効	無効
ミラー (Mirror)	無効	無効	スナップショットストレージに対してのみ有効。	無効	スナップショットストレージに対してのみ有効。
ターゲットの保持 (Target retention)	無効	無効	SLP の最初の操作がインポートで、ストレージがバックアップ形式の場合に有効。	無効	SLP の最初の操作がインポートの場合に有効。
管理対象の容量 (Capacity managed)	有効。AdvancedDisk のデフォルト。ストレージサーバーでの設定。	無効	無効	無効	有効。AdvancedDisk のデフォルト。ストレージサーバーでの設定。

メモ: [スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)] 操作ではコピーが作成されないため、この操作に保持は関連付けられていません。

保持の形式の混在

管理対象の容量のイメージと固定保持期間のイメージを、ディスクストレージユニットの同じボリューム上に書き込まないことをお勧めします。ボリュームが固定保持期間のイメージでいっぱいになり、領域を管理する機能が想定どおりに動作しない可能性があります。

SLP の操作を構成する場合、またはポリシーのデータ格納場所を選択する場合は、次の点に注意してください。

- ディスクストレージユニットのボリュームに書き込むすべての SLP は、同じ保持形式 (固定または管理対象の容量) のイメージを書き込む必要がある
- SLP に含まれるディスクストレージユニットのボリュームと、ストレージユニット単位で同じボリュームの両方に、ポリシーから直接イメージを書き込まない
- SLP で使用されるすべてのディスクストレージユニットに[オンデマンドのみ (On demand only)]とマーク付けする

- すべてのストレージユニットグループについて、固定保持期間のイメージおよび管理対象の容量のイメージが、ディスクストレージユニットの同じボリュームに書き込まれないことを確認する

SLP 操作の[管理対象の容量 (Capacity managed)]保持形式

[管理対象の容量 (Capacity managed)]操作は、各ボリュームの[高水準点 (High water mark)]の設定に基づいて、ストレージ上の空き容量が NetBackup によって自動的に管理されることを意味します。テープの容量は無制限と見なされるため、[管理対象の容量 (Capacity managed)]はテープストレージユニットでは利用できません。

ディスクストレージユニットまたはディスクプールの[高水準点 (High water mark)]設定および[低水準点 (Low Water Mark)]設定によって、領域の管理方法が決まります。

p.580 の「[\[高水準点 \(High Water Mark\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。

p.581 の「[\[低水準点 \(Low Water Mark\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。

[管理対象の容量 (Capacity Managed)]の保持によるイメージコピーは、依存コピーが作成されるまで期限切れの対象になりません。

新しいイメージのために領域が必要な場合は、NetBackup は次のように 2 つの方法で、管理対象のディスクボリュームから期限切れのバックアップイメージを削除します。

方法 1 NetBackup は[指定キャッシュ期間 (Desired cache period)]の設定を過ぎているすべてのバックアップイメージを削除します。NetBackup は、低水準点に達するか、[指定キャッシュ期間 (Desired cache period)]を過ぎているすべてのイメージが削除されるまでイメージを削除します。

方法 2 方法 1 の処理結果が次のいずれかなら方法 2 の処理は開始されます。

- ディスクプールが高水準点より高いままです。
- ディスクプール内の高水準点未満であるボリュームの数が、ディスクプールにアクセスするメディアサーバーの数よりも少ないです。

NetBackup は、低水準点に達するか、[指定キャッシュ期間 (Desired cache period)]を過ぎているすべてのイメージが削除されるまでイメージを削除します。

イメージはストレージライフサイクルポリシーの一部の操作に複製されていない場合、削除されることがあります。オペレーティングシステムの日時がイメージの最長保持期間と一致する日付を過ぎている場合、イメージは削除の対象となります。

ストレージが低水準点の値に達するタイミングを正確に確認することは困難です。有効期限のある処理が発生したと同時にバックアップが発生する可能性があります。バックアップの完了後、低水準点が最低値をわずかに上回る場合があります。

固定保持期間用であるため、管理対象容量のストレージでは、この保持期間は保証されません。[指定キャッシュ期間 (Desired cache period)]は、保持の目標値になります。NetBackup 領域が不要な場合は、バックアップデータが[指定キャッシュ期間 (Desired cache period)]で指定したよりも長くストレージに残る可能性があります。

[管理対象の容量 (Capacity Managed)] 保持形式の使用規則および推奨事項

ストレージ操作を設定するとき、またはポリシーのストレージ場所を選択するとき、以下の推奨事項および規則に準じます。

- [管理対象の容量 (Capacity Managed)]のイメージと[固定 (Fixed)]保持期間のイメージを、ディスクストレージユニットの同じボリューム上に書き込まないことをお勧めします。ボリュームが固定保持期間のイメージでいっぱいになり、領域を管理する機能が想定どおりに動作しない可能性があります。
- ディスクストレージユニットのボリュームに書き込むすべてのライフサイクルは、必ず同じ保持形式 ([固定 (Fixed)]または[管理対象の容量 (Capacity Managed)]) のイメージを書き込む
- ストレージライフサイクルポリシーに含まれるディスクストレージユニットのボリュームと、ストレージユニット単位で同じボリュームの両方に、ポリシーから直接イメージを書き込まない
- SLP で使用されるすべてのディスクストレージユニットに[オンデマンドのみ (On demand only)]とマーク付けする
- すべてのストレージユニットグループについて、固定保持期間のイメージおよび管理対象の容量のイメージが、ディスクストレージユニットの同じボリュームに書き込まれないことを確認する

[管理対象の容量 (Capacity managed)] 保持形式および SIS をサポートするディスク形式

[管理対象の容量 (Capacity managed)]は、SLP で使用可能な任意のディスクストレージユニットに対して選択できます。ただし、単一インスタンス記憶域 (SIS) をサポートするディスク形式に対しては、[管理対象の容量 (Capacity managed)]が機能する割合は様々です。[管理対象の容量 (Capacity managed)]を機能させるには、バックアップイメージが使用する領域の量を、NetBackup が把握しておく必要があります。ストレージユニットで SIS を有効にすると、NetBackup では特定のバックアップイメージが使用する領域の量を正確に把握できません。

次のストレージユニット構成では、SIS を使用します。

- [メディアサーバー重複排除プール (Media Server Deduplication Pool)]ストレージユニット

- 一部の OpenStorage ストレージユニット (ベンダーの特性による)

SLP 操作の[コピー後に期限切れにする (Expire after copy)]保持形式

[コピー後に期限切れにする (Expire after copy)]の保持を指定すると、イメージのディレクト(子)コピーがすべて他のストレージに正常に複製された後に、このストレージのデータが期限切れになります。後続のコピーが構成されないので、SLP の最後の操作で[コピー後に期限切れにする (Expire after copy)]の保持形式を使うことができません。このため、この保持形式の操作には子が必要です。

アクセラレータまたは合成バックアップのいずれかの SLP と共に使用されるあらゆるストレージユニットに対して、[コピー後に期限切れにする (Expire after copy)]の保持を有効にしないことをお勧めします。[コピー後に期限切れにする (Expire after copy)]の保持を指定することにより、バックアップの実行中にイメージが期限切れになることがあります。新しい完全バックアップを合成するには、SLP バックアップで以前のバックアップイメージが必要になります。以前のイメージがバックアップの間に期限切れになった場合、バックアップは失敗します。

メモ: 合成バックアップではストレージライフサイクルポリシーを使うことができますが、複数コピー合成バックアップ方法では SLP を使うことができません。

バックアップに SLP を使用するようにポリシーを構成している場合は、SLP に指定されている保持が使用される値になります。スケジュールの[保持 (Retention)]属性は使用されません。

[コピー後に期限切れにする (Expire after copy)]の保持のイメージコピーは、子のディレクトコピーがすべて正常に作成されるとすぐに期限切れになります。どのミラー化された子でもまた期限切れの対象になる必要があります。

SLP 操作の[固定 (Fixed)]保持形式

[固定 (Fixed)]の保持を指定すると、ストレージのデータが指定した期間保持され、その期間が過ぎるとバックアップまたはスナップショットが期限切れになります。

[固定 (Fixed)]の保持のイメージコピーは、次の条件がすべて満たされると期限切れの対象になります。

- [固定 (Fixed)]のコピーが保持される期間が期限切れになりました。
- 子のコピーはすべて作成されました。
- ミラーコピーである子のコピーすべてが、期限切れの対象になります。

[固定 (Fixed)]の保持期間は、イメージの元のバックアップ時間から常にマーク付けされます。たとえば、テープデバイスが停止し、これにより、重複したテープコピーの作成に 2 日間の遅延が発生した場合、重複したコピーの有効期限がこの 2 日間の遅延が原因で異なることはありません。重複したコピーの有効期限は、元のバックアップが完了した時間からまだ x 日あります。いつコピーが作成されたかは関係ありません。

SLP 操作の[スナップショットの最大限度 (Maximum snapshot limit)]保持形式

[スナップショットの最大限度 (Maximum snapshot limit)]は、特定のポリシーおよびクライアントペアのために格納できるスナップショットの最大数を決定します。

最大数に達すると、新しいスナップショットが作成されるたびに一番古いジョブ完了スナップショットから順に削除されます。スナップショットジョブは、構成されているすべての依存コピーが完了した場合に完了したと見なされます。(依存コピーは、[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]操作、[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]操作、または[レプリケーション (Replication)]操作の結果として作成されます)。この保持形式はスナップショットだけに適用され、バックアップには適用されません。

たとえば、ポリシー P1 には C1 と C2 の 2 つのクライアントが含まれています。ポリシーを 4 回実行すると、C1 用に 4 つのスナップショットイメージが作成され、C2 用に 4 つのイメージが作成されます。[スナップショットの最大限度 (Maximum snapshot limit)]を 4 に設定し、ポリシーを 5 回実行すると、NetBackup は、5 番目のスナップショットの領域を確保するために、C1 と C2 の両方で作成された最初のスナップショットを削除します。

[最大スナップショット数 (Maximum Snapshots)]パラメータは、スナップショットの最大数を指定します。この設定を構成するには、バックアップポリシーの[スナップショットオプション (Snapshot options)]を選択します。

p.756 の「[[Snapshot Client](#)]および[[Replication Director](#)](ポリシー属性)」を参照してください。

SLP 操作の[ミラー (Mirror)]保持形式

スナップショットのミラーのレプリカは、次のときにすぐ期限切れの対象となります。

- すべての即時の子のコピーは正常に作成されます。
- ミラーであるすべての即時の子のコピーが期限切れの対象です。

[ミラー (Mirror)]の保持を選択することは、NetApp ボリュームの SnapMirror をレプリケーション方式として使うことを示します。[固定 (Fixed)]や[コピー後に期限切れにする (Expire after copy)]などのミラー以外の保持形式が[レプリケーション (Replication)]操作に対して選択された場合、NetApp SnapVault レプリケーション方式が使われます。

ミラーのレプリケーションでは、レプリカのコピーはコピー元の存在に依存しています。(コピー元は元のスナップショットまたは別のレプリカである可能性があります)。このため、レプリカの保持はコピー元の保持によって決まります。コピー元が削除されれば、ミラーは自動的に削除されます。

非ミラーのレプリケーションでは、レプリカはコピー元から独立し、独立した保持を持つ場合があります。コピー元が削除されれば、非ミラーのレプリカは影響を受けずに、コピー元よりも長く使うことができます。または、レプリカが最初に削除されれば、再作成されず、コピー元はレプリカより長く保持できる可能性があります。

SLP 操作の[ターゲットの保持 (Target retention)]形式

この設定は、インポートストレージライフサイクルポリシーの自動イメージレプリケーションで使用されます。すべてのインポート SLP には、[ターゲットの保持 (Target retention)]を持つ 1 つ以上の操作が必要です。

[ターゲットの保持 (Target retention)]は、ターゲットドメインで適用されますが、実際の保持はソースドメインの管理者によって指定されます。

[ターゲットの保持 (Target retention)]は、イメージとともにインポートされた有効期限をターゲットマスターのデータが使用することを示します。コピーには固定保持が必要なため、日付は修正されます。

[固定 (Fixed)]の保持と同様に、次の条件のすべてが満たされると、[ターゲットの保持 (Target retention)]の保持を伴うイメージコピーは期限切れの対象となります。

- [固定 (Fixed)]のコピーが保持される期間が期限切れになりました。
- 子のコピーはすべて作成されました。
- ミラーコピーである子のコピーすべてが、期限切れの対象になります。

p.1000 の「[NetBackup 自動イメージレプリケーションについて](#)」を参照してください。

ストレージライフサイクルポリシーのオプション

この章では以下の項目について説明しています。

- [ストレージライフサイクルポリシーの設定](#)
- [SLP 設定](#)
- [ストレージライフサイクルポリシーの\[検証レポート \(Validation report\)\]タブ](#)

ストレージライフサイクルポリシーの設定

次の表に、ストレージライフサイクルポリシーの設定を示します。

図 17-1 [ストレージライフサイクルポリシー (Storage lifecycle policy)]タブ

Storage Lifecycle Policy

Storage lifecycle policy Validation report

Storage lifecycle policy name: SLP_1_snapshot

Data classification: No data classification

Priority for secondary operations: 0

A higher number is greater priority.

Operation	Storage	Storage type	Volume pool	Media owner	Retention type	Retention period
☐ Snapshot	No Storage Unit				Maximum Snapshot Limit	
☐ Backup From Snapshot	stu_adv	AdvancedDisk			Fixed	2 weeks

2 Records

State of secondary operation processing

To find impact on policies associated with this SLP due to change in configuration click here.

Cancel Create

表 17-1 [ストレージライフサイクルポリシー (Storage lifecycle policy)] タブ

設定	説明
ストレージライフサイクルポリシー名 (Storage lifecycle policy name)	[ストレージライフサイクルポリシー名 (Storage lifecycle policy name)] は、SLP の説明です。SLP が作成された後は、名前は変更できません。
データの分類 (Data classification)	[データの分類 (Data classification)] は、SLP が処理できるデータのレベルや分類を定義します。ドロップダウンメニューには定義済みの分類がすべて表示され、そこには SLP に固有の[任意 (Any)]の分類も含まれます。 [任意 (Any)]を選択すると、データの分類に関係なく、提出されるすべてのイメージを保存するよう SLP に指示します。この設定は、SLP 構成のみに利用可能で、バックアップポリシーの構成には使用できません。 マスターサーバードメインが異なるバージョンの NetBackup を実行する自動イメージレプリケーション構成については、次のトピックにある特別な考慮事項を参照してください。 p.1016 の「自動イメージレプリケーションに必要なストレージライフサイクルポリシーについて」を参照してください。 データ分類 は省略可能な設定です。 1 つのデータ分類は各 SLP に割り当て可能で、SLP のすべての操作に適用されます。 [任意 (Any)]以外のデータの分類を選択すると、SLP は、その分類に設定されたポリシーに含まれるイメージのみを格納します。データの分類を指定しない場合は、SLP はすべての分類のイメージおよび分類が設定されていないイメージを受け入れます。 [データの分類 (Data classification)]を使用すると、NetBackup 管理者は相対的な重要度に基づいてデータを分類できます。分類は、一連のバックアップ要件を表します。データがさまざまなバックアップ要件を満たす必要がある場合は、さまざまな分類の割り当てを検討します。 たとえば、電子メールバックアップデータをシルバーのデータの分類に割り当て、財務データのバックアップをプラチナの分類に割り当てる場合があります。 バックアップポリシーは、バックアップデータをデータ分類と関連付けます。ポリシーデータは同じデータの分類の SLP でのみ保存できます。 データが SLP でバックアップされたら、データは SLP の構成に従って管理されます。SLP によって、最初のバックアップからイメージの最後のコピーが期限切れになるまでに行われるデータへの処理が定義されます。
セカンダリ操作の優先度 (Priority for secondary operations)	[セカンダリ操作の優先度 (Priority for secondary operations)] オプションは、他のすべてのジョブに対する、セカンダリ操作からのジョブの優先度です。優先度は、バックアップ操作とスナップショット操作を除くすべての操作から派生するジョブに適用されます。範囲は、0 (デフォルト) から 99999 (最も高い優先度) です。 たとえば、データの分類にゴールドが指定されたポリシーの[セカンダリ操作の優先度 (Priority for secondary operations)]を、データの分類にシルバーが指定されたポリシーよりも高く設定できます。 バックアップジョブの優先度は、[属性 (Attributes)] タブのバックアップポリシーで設定されます。

設定	説明
操作 (Operation)	SLP の操作のリストを作成するには、[子の追加 (Add child)]、[編集 (Edit)]、および[削除 (Delete)]オプションを使います。SLP は 1 つ以上の操作を含む必要があります。複数の操作は複数コピーが作成されることを意味します。 リストには、各操作の情報を表示する列もあります。デフォルトでは、すべての列が表示されているわけではありません。
移動 (Move)	コピーごとにソースの階層を変更するには、移動オプションを使用します。1 つのコピーは他の多くのコピーのソースである場合もあります。
二次操作処理の状態 (State of Secondary Operation Processing)	[有効 (Active)]と[延期 (Postponed)]オプションは、SLP におけるすべての複製操作の処理を対象とします。 メモ: これらのオプションは、tar 書式付きのイメージを作成するすべての複製操作に適用されます。たとえば、bpduplicate で作成されるイメージなどです。これらのオプションは、OpenStorage の最適化複製または NDMP の結果として複製されるイメージには影響を与えません。また、1 つ以上の宛先ストレージユニットがストレージユニットグループの一部として指定されている場合にも影響を与えません。 ■ できるだけ早くセカンダリ操作を続行するには、[有効 (Active)]を有効にします。ある操作が[延期 (Postponed)]から[有効 (Active)]に変更された場合、NetBackup はセカンダリ操作が無効になったときに中断した位置からイメージの処理を再開します。 ■ [延期 (Postponed)]を有効にして、SLP 全体でセカンダリ操作を延期します。[延期 (Postponed)]は複製ジョブの作成は延期しませんが、イメージの作成を延期します。複製ジョブは作成され続けますが、セカンダリ操作が再度有効になるまで実行されません。 SLP のすべてのセカンダリ操作は、管理者が[有効 (Active)]を選択するか、[終了 (Until)]オプションが選択され、有効化する日付が指定されるまで無期限に無効のままです。
[バックアップポリシーの競合の確認 (Check for conflicts with backup policies)]オプション	このオプションを選択すると、この SLP への変更がこの SLP と関連付けられているポリシーにどのように影響するかを確認できます。このオプションによりレポートが生成され、[検証レポート (Validation report)]タブに表示されます。 このオプションを nbstl コマンドと一緒に使用すると、-conflict オプションと同じ検証を実行します。

SLP 設定

ストレージ操作を作成または編集する場合は、次のタブを利用できます。

- [プロパティ (Properties)]タブ
次のトピックでは、[プロパティ (Properties)]タブのオプションについて説明します。
[p.655 の「SLP 操作の\[プロパティ \(Properties\)\]タブ」](#)を参照してください。
- [時間帯 (Window)]タブ
セカンダリ操作を実行できる時間帯を作成してください。次のトピックでは、[時間帯 (Window)]タブのオプションについて説明します。

p.657 の「[時間帯 (Window)]タブ」を参照してください。

SLP 操作の[プロパティ (Properties)]タブ

表 17-2 では、ストレージライフサイクルポリシーでさまざまな操作を設定する際に使用できるオプションについて説明します。すべてのオプションが各操作に使えるわけではありません。

表 17-2 SLP 操作の[プロパティ (Properties)]タブ

設定	説明
ソースストレージ (Source storage)	操作のソースであるストレージユニットを示します。 [ソースストレージ (Source storage)]が表示される操作形式には、[スナップショットからのバックアップ (Backup From Snapshot)]、[レプリケーション (Replication)]、[複製 (Duplication)]、[スナップショットからのインデックス (Index From Snapshot)]があります。
操作 (Operation)	[操作 (Operation)]を選択することで、どのオプションを表示するかを決定します。 p.630 の「ストレージライフサイクルポリシーに規定する操作形式」を参照してください。 p.662 の「ストレージライフサイクルポリシーを使った複数コピーの書き込みについて」を参照してください。
宛先ストレージ (Destination storage)	使用する宛先ストレージを選択します。ストレージユニットグループには、BasicDisk またはディスクステージングストレージユニットが含まれていない場合があります。ストレージライフサイクルポリシーでは、BasicDisk ストレージユニットを含むストレージユニットグループを指定することもできます。ただし、NetBackup はライフサイクルポリシー用のストレージグループから BasicDisk ストレージユニットは選択しません。 ストレージユニットまたはストレージユニットグループは、複数のライフサイクルに表示される場合があります。ストレージユニットまたはストレージユニットグループは、スタンドアロンユニットとして使われている場合でもストレージライフサイクルで使われることがあります。
宛先ストレージの属性 (Destination storage attributes)	イメージのコピーを、異なるプライマリサーバーで作成することを示します。 すべてのレプリケーションターゲットストレージサーバー (All replication target storage servers) すべてのレプリケーションターゲットストレージサーバーにバックアップを送信します。 ターゲットプライマリサーバー (Target primary server) ターゲットプライマリサーバーは、イメージがコピーされるストレージを管理します。このオプションを[レプリケーション (Replication)]操作に選択すると、その操作は[自動イメージレプリケーション (Auto Image Replication)]の操作になります。
ボリュームプール (Volume pool)	[ボリュームプール (Volume pool)]オプションはテープストレージユニットか仮想テープライブラリ (VTL) のために有効になります。

設定	説明
メディア所有者 (Media owner)	[メディア所有者 (Media owner)]は、共通の目的に使用される NetBackup サーバーのグループです。 [メディア所有者 (Media owner)]を指定して、それらのメディアサーバーのみに、ポリシーのバックアップイメージが書き込まれるメディアへの書き込みを許可します。
保持形式 (Retention type)	次のオプションから[保持形式 (Retention type)]を選択します。 ■ p.647 の「SLP 操作の[管理対象の容量 (Capacity managed)]保持形式」を参照してください。 ■ p.649 の「SLP 操作の[コピー後に期限切れにする (Expire after copy)]保持形式」を参照してください。 ■ p.649 の「SLP 操作の[固定 (Fixed)]保持形式」を参照してください。 ■ p.650 の「SLP 操作の[スナップショットの最大限度 (Maximum snapshot limit)]保持形式」を参照してください。 ■ p.650 の「SLP 操作の[ミラー (Mirror)]保持形式」を参照してください。 ■ p.651 の「SLP 操作の[ターゲットの保持 (Target retention)]形式」を参照してください。 p.645 の「ストレージライフサイクルポリシー操作の保持形式」を参照してください。
保持期間 (Retention period)	NetBackup がバックアップまたはコピーを保持する期間を指定します。保持期間を設定するには、リストから保持期間 (またはレベル) を選択します。保持期間が満了すると、NetBackup は期限が切れたバックアップまたはコピーに関する情報を削除します。期限が切れると、ファイルはリストアに使用できなくなります。たとえば、保持期間が 2 週間に設定されている場合、そのスケジュールがバックアップ後 2 週間に実行するバックアップからデータをリストアできます。 p.163 の「[保持期間 (Retention periods)]プロパティ」を参照してください。
複製 (Duplication)	代替読み込みサーバー (Alternate read server) このオプションは、異なるメディアサーバーによって書き込まれたバックアップイメージを読み込むことができるサーバーの名前を指定します。このオプションは[複製 (Duplication)]操作にのみ使用できます。
多重化を維持する (Preserve multiplexing)	[多重化を維持する (Preserve multiplexing)]オプションは、テープメディアまたは仮想テープライブラリ (VTL) を使う複製操作で利用可能です。複製するバックアップが多重化され、多重化されたまま残す場合は、このオプションを選択します。 多重化を維持すると、複製ジョブのパフォーマンスが著しく向上します。これはイメージごとに書き込み側の複製メディアを要求する必要がなくなるためです。
ジョブの優先度を上書き (Override job priority)	[ジョブの優先度を上書き (Override job priority)]オプションは、[インポート (Import)]操作に利用可能です。表示されるジョブ優先度は、このストレージライフサイクルポリシーを使う任意のインポートジョブのジョブ優先度です。

設定	説明
[ソースコピーが期限切れになりそうになるまで、このコピーの作成を延期します (Postpone creation of this copy until the source copy is about to expire)]	このオプションを有効にして、複製のソースの期限が切れそうになるまで、ジョブを遅延させます。このオプションが有効になると、ソースが期限切れになる 4 時間前にジョブが開始します。[SLP パラメータ (SLP Parameters)] ホストプロパティの[遅延された複製オフセット (Deferred duplication offset)]を変更することで、このデフォルト値を変更できます。 p.179 の「[SLP 設定 (SLP settings)] プロパティ」を参照してください。
[詳細 (Advanced)] 設定	時間帯終了動作 (Windows close behavior) 時間帯が終了しても SLP のジョブが完了しなかった場合には、NetBackup は処理中のイメージを中断します。次の時間帯になると、NetBackup は中断したところからそれらのジョブを再開します。 一部のイメージは一時停止できません。対象は、複製のソースとターゲットの両方が AdvancedDisk または Media Manager ストレージユニットのいずれかに存在する複製ジョブによるイメージにかぎります。 さらに、複製ジョブは次の条件を満たす必要があります。 ■ ストレージユニットはストレージユニットグループの一部であってはなりません。 ■ 複製は、最適化された複製、NDMP の複製、または OpenStorage の複製を使用して作成されませんでした。 p.633 の「[SLP の複製 (Duplication)] 操作」を参照してください。 メモ: 時間帯の終了によって、一部のジョブの予備操作は停止しません。たとえば、時間帯が終了した後も、NetBackup は引き続き Exchange の個別リカバリに関するカタログを拡張します。 その他のすべての操作 (レプリケーション操作など) によるイメージは一時停止されません。 [時間帯終了動作 (Windows close behavior)] オプションを表示するには、[詳細 (Advanced)] ドロップダウンリストを選択します。選択は、NetBackup が自動的に中断しないイメージに適用されます。 時間帯が終了する時間までにイメージが完了していない場合、およびイメージが中断できない場合に NetBackup が何を実行するかを選択します。 ■ 有効なイメージの処理を完了 (Finish processing the active images) 時間帯は終了しますが、NetBackup は実行中のイメージの処理が完了するまで継続して処理します。NetBackup では、次の時間帯になるまで他のイメージの処理は開始されません。 ■ 有効なイメージの処理をキャンセル (Cancel the processing of the active images) 時間帯が終了し、NetBackup は実行中のイメージの処理をすぐに停止します。次の時間帯になると、NetBackup は中断したところからイメージの処理を再開します。

[時間帯 (Window)] タブ

[時間帯 (Window)] タブは、ストレージライフサイクルポリシーのセカンダリ操作のために表示されます。

セカンダリ操作の時間帯を作成するのは任意です。ただし、時間帯を作成することで、操作のジョブを実行するタイミングをより正確に定義できます。このようにすると、二次操作からのジョブは、バックアップジョブなどの優先順位がより高いジョブと干渉しません。時間帯を定義しなくても、操作のジョブは、曜日や時刻に関係なく、いつでも実行できます。

表 17-3 [時間帯 (Window)] タブ

設定	説明
[時間帯オプション (Windows options)] ドロップダウンリスト:	既存の時間帯を操作に割り当てるか、新しい時間帯を操作に作成できます。 既存の時間帯を使用するには、[保存した時間帯から選択 (Select from saved windows)] を選択し、時間帯名のリストから時間帯を選択します。 この操作を使うための新しい時間帯を作成するには、[新規作成 (Create new)] を選択します。その後、新しい時間帯の名前を入力します。
影響レポート (Impact report)	このパネルは、現在、時間帯を使用しているストレージライフサイクルポリシーの名前をリストします。影響レポートには、時間帯を使う操作、その操作のソース、宛先ストレージもリストします。
[開始時間帯 (Start window)] タブ	[Default_24x7_Window] が選択された場合、[開始時間帯 (Start window)] グリッドがグレー表示になり、変更できません。 [開始時間帯 (Start window)] グリッドは、保存された時間帯を選択するか新しい時間帯を作成すると有効になります。 [開始時間帯 (Start window)] グリッドが保存された時間帯に合わせて変更された場合は、[影響レポート (Impact report)] オプションをクリックして、その時間帯を使う他の SLP の他の操作についての情報を表示します。 p.658 の「ストレージライフサイクルポリシー操作の新しい時間帯の作成」を参照してください。
[除外日 (Exclude dates)] タブ	時間帯から特定の日付を除外するには、[除外日 (Exclude dates)] タブを使います。 p.659 の「ストレージライフサイクルポリシー操作の時間帯からの曜日の除外」を参照してください。

ストレージライフサイクルポリシー操作の新しい時間帯の作成

SLP 操作の新しい時間帯を作成する方法

- 1 [ストレージ操作 (Storage Operation)] ダイアログボックスの [時間帯 (Window)] タブで、[新規作成 (Create new)] を有効にします。
- 2 [開始時間帯 (Start Window)] タブを選択します。

- 3 曜日はグリッドの左側に表示されます。時刻は 24 時間制の時間グリッドの最上部に表示されます。

開始時刻か終了時刻を選択するために利用可能な増分を変更するには、[間隔 (Resolution)] フィールドの値を変更します。

- 4 各曜日の時間帯の開始時刻と終了時刻を指定します。次のリストに、この指定を行う方法を示します。

- 時間帯を開始し、終了する各曜日の[開始時間帯 (Start window)]グリッドにカーソルをドラッグします。
- ドロップダウンメニューを使用して[開始日 (Start day)]および[終了曜日 (End day)]を選択します。次に、[開始時刻 (Start time)]および[終了時刻 (End time)]を選択します。
- ドロップダウンメニューを使用して、その時間帯の[開始日 (Start day)]および[期間 (日数) (Duration days)]を選択します。環境に合わせて[開始時刻 (Start time)]を調整します。

複数の時間帯を作成するには、次の操作を実行します。

- 最初に、時間帯を 1 つ作成します。
- [複製 (Duplicate)]を選択します。
時間帯は既存のスケジュールのない任意の曜日に複製されます。複製は、時間帯がすでに含まれている曜日に到達すると停止します。
- 時間帯を開始する必要がない曜日で、時間帯を選択し、[削除 (Delete)]を選択します。

- 5 次の操作を実行できます。

開始時刻か終了時刻を変更する方法 [開始時刻 (Start time)]または[終了時刻 (End time)]を調整します。

時間帯を削除する方法 時間帯を選択し、[削除 (Delete)]をクリックします。

すべての時間帯を削除する方法 [消去 (Clear)]をクリックします。

最後の操作を取り消す方法 [元に戻す (Undo)]をクリックします。

- 6 時間帯および操作を保存するには、[OK]をクリックします。

ストレージライフサイクルポリシー操作の時間帯からの曜日の除外

時間帯から特定の曜日を除外するには、[除外日 (Exclude dates)]タブを使います。時間帯から曜日が除外されると、ジョブはその曜日には実行されません。タブは連続した 3

カ月のカレンダーを表示します。表示される最初の月または年を変更するには、カレンダー上部のリストを使用します。

ストレージライフサイクルポリシーの時間帯から曜日を除外する方法

- 1 [時間帯 (Window)] タブで、ドロップダウンメニューから既存の時間帯の名前を選択します。
- 2 [除外日 (Exclude dates)] タブを選択します。
- 3 次のいずれか、または複数の方法を使用して、除外する曜日を指定します。
 - 除外する曜日を 3 カ月カレンダーで選択します。月または年を変更するには、カレンダーの上部にあるドロップダウンリストを使います。
 - [曜日指定 (Recurring week days)] を設定するには:
 - 毎年のも月のすべての曜日を選択するには、[すべてを選択 (Select all)] を選択します。
 - 既存のすべての選択を削除するには、[すべて消去 (Deselect all)] を選択します。
 - 毎月の特定の曜日を除外するように選択するには、マトリックスのボックスを選択します。
 - 毎月の特定の曜日を除外するには、曜日の列ヘッダーを選択します。
 - 毎月の特定の週を除外するには、[1 番目 (1st)]、[2 番目 (2nd)]、[3 番目 (3rd)]、[4 番目 (4th)]、または[最終週 (Last)] の行ラベルを選択します。
 - [日付指定 (Recurring days of the month)] を設定するには:
 - 毎月のもすべての曜日を選択するには、[すべてを選択 (Select all)] を選択します。
 - 既存のすべての選択を削除するには、[すべて消去 (Deselect all)] を選択します。
 - 毎月の特定の曜日を除外するように選択するには、マトリックスのボックスを選択します。
 - 毎月のも最終日を除外するには、[最終日 (Last day)] を選択します。
 - [特定日指定 (Specific dates)] を設定するには:
 - [追加 (Add)] を選択します。[日付の選択 (Date selection)] に月、日および年を入力します。
その日付が[特定日指定 (Specific dates)] リストに表示されます。
 - 日付を削除するには、リストの日付を選択します。[削除 (Delete)] を選択します。
- 4 必要に応じてさらに日付を追加し、[保存 (Save)] を選択します。

ストレージライフサイクルポリシーの[検証レポート (Validation report)]タブ

SLP は、最初に作成したときと変更するたびに NetBackup によって検証されます。[検証レポート (Validation report)]タブには、ストレージライフサイクルポリシーの操作への提案された変更と SLP を使うバックアップポリシー間の競合がリストされます。

同様に、ポリシーのストレージとして SLP を指定するポリシーを作成すると、類似の検証レポートが表示される可能性があります。レポートは、ポリシーと指定した SLP の間の競合をリストします。

リストに表示された競合は、SLP を参照するジョブを正しく実行するために解決する必要があります。SLP の競合に起因する共通の状態コードのリストについては、このタブのオンラインヘルプか[トラブルシュータ (Troubleshooter)]を使用してください。

メモ: Request has timed outメッセージは、ビジー状態のサーバーがある環境で表示されることがあります。

接続遅延の原因となるタイムアウトを増やすには、次のファイルの NBJAVA_CORBA_DEFAULT_TIMEOUT 値を増やします。

Windows: setconf.bat 構成ファイル (*install_path*¥java¥setconf.bat)。

UNIX: nbj.conf 構成ファイル (/usr/opensv/java/nbj.conf)。

レポートは選択した SLP とそれを使うバックアップポリシー間の次の競合を調べます。

- ストレージライフサイクルポリシーのデータ分類が参照バックアップポリシーのデータ分類と一致しません。
- SLP に[スナップショット (Snapshot)]操作が含まれていますが、参照バックアップポリシーで[スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)]が有効になっていません。
- SLP に[スナップショット (Snapshot)]操作が含まれていませんが、参照バックアップポリシーで[スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)]が有効になっています。
- SLP に[スナップショット (Snapshot)]操作が含まれていますが、参照バックアップポリシーで[インスタントリカバリ用にスナップショットを保持する (Retain snapshots for Instant Recovery)] オプションを有効にできません。
- ポリシーは[NBU-カタログ (NBU-Catalog)]のバックアップ形式ですが、SLP の構成は[CatalogBackup]ボリュームプールを示しません。
- ポリシーは[NBU-カタログ (NBU-Catalog)]バックアップ形式ではありませんが、SLP の構成は[CatalogBackup]ボリュームプールを示します。

複数のコピーを作成するストレージライフサイクルポリシーの使用

この章では以下の項目について説明しています。

- [ストレージライフサイクルポリシーを使った複数コピーの書き込みについて](#)
- [操作順序によるコピー順序の決まり方](#)
- [ライフサイクルの使用による正常なコピーの確実な処理について](#)

ストレージライフサイクルポリシーを使った複数コピーの書き込みについて

ストレージライフサイクルポリシーは、バックアップとスナップショットの複数コピーを作成するのに使うことができます。

NetBackup では複数のコピーを作成する方法を一度に 1 つのみ使用できます。次のうち 1 つの方法のみを実行します。

- ポリシーの構成で、[複数のコピー (Multiple copies)] オプションを有効にします。ポリシーで [複数のコピー (Multiple copies)] オプションが有効になっていると、ポリシーでは ポリシーストレージ としてストレージライフサイクルポリシーを選択できません。
p.776 の「[複数のコピー \(スケジュール属性\)](#)」を参照してください。
- SLP の操作リストに複数の[バックアップ (Backup)]の操作か、1 つ以上の[複製 (Duplication)]または[レプリケーション (Replication)]操作を追加してください。
p.654 の「[SLP 設定](#)」を参照してください。

コピーを作成するための同じ条件が両方の方式に適用されます。

次のトピックでは、ストレージライフサイクルポリシーを使用して複数のコピーを作成する際の注意事項を示します。

操作順序によるコピー順序の決まり方

ストレージライフサイクルポリシーに表示される操作の順序によって、コピー番号が決まります。

たとえば、次のライフサイクルは 3 つのコピーを作成するように構成されています。

- 2 つのバックアップ操作に含まれる 2 つのコピー。
- 1 つの複製操作に含まれる 1 つのコピー。

コピー 1 を確実にディスクに書き込むために、ディスクストレージユニットに書き込む[バックアップ (Backup)]操作を、テープストレージユニットに書き込む[バックアップ (Backup)]操作の前に置きます。

図 18-1 操作の順序がコピーの順序を決定

	+ Add	
	☐	Operation Storage
Copy 1 on disk	☐	Backup Disk_1
Copy 2 on tape	☐	Duplication Tape_1
Copy 3 on disk	☐	Backup Disk_2

ライフサイクルの使用による正常なコピーの確実な処理について

ストレージライフサイクルポリシーの一部としてコピーを作成する処理は、ポリシーの設定としてコピーを作成する処理とは異なります。ポリシーの[複数コピーの構成 (Configure multiple copies)]設定には、[すべてのコピー処理に失敗 (fail all copies)]オプションがあります。このオプションでは、1 つのコピーが失敗した場合に、残りのコピーを続行するか失敗させるかを設定できます。

SLP では、コピーをすべて完了する必要があります。SLP はまず、コピー作成を 3 回試行します。コピーが作成されない場合、NetBackup は引き続き試行しますが、試行間隔は長くなります。

SLP ではすべてのコピー操作が完了する前にコピーの期限が切れてはならないので、コピーが確実に完了することが重要となります。NetBackup は、すべてのコピーが作成

されるまでコピーの保持期間を[無制限 (Infinity)]に変更します。すべてのコピーが完全した後、保持はポリシー設定のレベルに戻ります。

コピーを正常に作成するために、[バックアップ (Backup)]操作により、別の[バックアップ (Backup)]操作のストレージユニットにバックアップを複製することが必要な場合があります。

たとえば、次の例を考えてみます。SLP の操作リストには、は 2 つのストレージユニット (BU_1、BU_2) への[バックアップ (Backup)]操作、および 3 つの[複製 (Duplication)]操作が含まれます。

BU_1 へのバックアップは正常に終了しましたが、BU_2 へのバックアップは正常に終了しませんでした。

BU_2 でのバックアップを完了するために、BU_1 から BU_2 への複製ジョブが NetBackup によって作成されます。この複製ジョブは、3 つの複製操作に対して実行されるジョブに追加されます。

複製ジョブは、nbstlutil コマンドで制御できます。

p.628 の「[nbstlutil コマンドを使用したライフサイクル操作の管理](#)」を参照してください。

ストレージライフサイクルポリシーのバージョン

この章では以下の項目について説明しています。

- [ストレージライフサイクルポリシーのバージョンについて](#)
- [ストレージライフサイクルの変更およびバージョン管理](#)
- [ストレージライフサイクルポリシーへの変更が有効になるタイミング](#)
- [古いストレージライフサイクルポリシーバージョンの削除](#)

ストレージライフサイクルポリシーのバージョンについて

ストレージライフサイクルポリシーは、構成されると単一の構成が定義に従って実行されます。定義は、開始後の操作と処理中のイメージのコピーの両方に影響します。

SLP バージョンを作成する機能を使用すると、管理者は SLP と関連付けられたすべてのコピーが完全に処理するまで待機せずに、定義を安全に変更できます。SLP が管理する各コピーは、SLP 名と SLP バージョン番号でタグ付けされます。これらの 2 つの属性は NetBackup イメージカタログのイメージヘッダーに書き込まれます。管理者が SLP を作成または変更するときにはいつでも、NetBackup は新しいバージョン (0 ~ n) を作成します。新しいジョブでは最新の SLP バージョンを使います。

新しいジョブがアクティビティモニターに送信されると、そのジョブは最新の SLP バージョン番号でタグ付けされます。バージョンと関連付けられているコピーの処理は SLP 定義のバージョンに応じて固定されたままになります。管理者が既存のバージョンを修正する `nbstl` コマンドを使わない限り、この処理はジョブ時に固定され、変わりません。

SLP バージョンは、バージョンを参照する未完了のイメージがある限り残ります。

ストレージライフサイクルの変更およびバージョン管理

管理者は、次のいずれかの方法でストレージライフサイクルポリシーに変更を加えることができます。

- **NetBackup Web UI** を使用。
管理者が **NetBackup Web UI** を使用して **SLP** に加えるどのような変更によっても、新しい **SLP** バージョンが作成されます。新しいバージョンは **SLP** への変更がコミットされるか保存されると作成されます。**NetBackup Web UI** は最新バージョンを常に表示します。
- **nbstl** コマンドを使用。
SLP を変更するために管理者が **nbstl** を使用すると、**nbstl** はデフォルトで新しいバージョンを作成します。
ただし **nbstl** コマンドには、異なるバージョンを表示し、新バージョンを作成せずに既存の **SLP** バージョンの定義を修正するためのオプションが含まれています。オプションは次のとおりです。

<code>-all_versions</code>	これを使うと SLP 定義のすべてのバージョンを表示できます。このオプションを指定しないと、デフォルトでは最新のバージョンのみが表示されます。
<code>-version 番号</code>	これを使うと特定のバージョンを表示できます。
<code>-modify_current</code>	大半の nbstl 設定オプションとともに使用し、新バージョンを作成することなく現行の SLP バージョンに変更を加えることができます。このオプションを使う場合には現在のバージョン番号を知っている必要はありません。
<code>-modify_version</code> <code>-version 番号</code>	ほとんどの nbstl 設定オプションとともに使われ、新しいバージョンを作成しないで特定のバージョンに変更を加えます。

次の設定オプションを変更するには `-modify_current` か `-modify_version` を使います。

<code>-dp</code>	複製の優先度。
<code>-residence</code>	各操作に使われるストレージユニット。
<code>-pool</code>	各操作のボリュームプール。
<code>-server_group</code>	各操作のサーバーグループ。
<code>-r1</code>	各操作の保持レベル。
<code>-as</code>	各操作の代替読み込みサーバー。

-mpx 複製コピーの多重化維持オプション。

フィールドによっては、SLP の全操作の値を必要とします。フィールドに指定する値の数が既存の操作の数と一致することを確認してください。

たとえば、3 つの操作を含んでいる SLP で 1 つの値を変更するためには、3 つのすべての操作に値を指定する必要があります。3 つすべての操作の値が置き換わることに注意してください。2 つ目の操作の値を変更するには、1 つ目と 3 つ目の操作に既存の値を入力します。

一部の設定オプションは -modify_current または -modify_version を使用して変更できません。次のいずれかのオプションを変更するには、まったく新しい SLP バージョンを作成する必要があります。

-uf	操作の形式。
-managed	操作の保持形式: 固定、管理対象の容量、コピー後に期限切れにする。
-source	主に階層的な SLP の設定に使用される操作のソース。
-dc	既存バージョンのデータ分類。
	操作の数。SLP 定義には操作を追加できず、また SLP 定義から操作を削除できません。

p.625 の「[ストレージライフサイクルポリシーの作成](#)」を参照してください。

新しいバージョンが優先されるため、以前のバージョンの構成に従うように SLP に指示することはできません。以前のバージョンの動作に戻すには、以前の定義と一致するように定義を変更します。変更によって、以前のバージョンと同じ内容で新しいバージョン番号が付くバージョンが作成されます。

ストレージライフサイクルポリシーへの変更が有効になるタイミング

変更がジョブのバックログで有効になるようにするには、適用可能なジョブの取り消しが必要な場合があります。

既存のストレージライフサイクルポリシーのバージョンを変える nbstl コマンドが使われる場合、それらの変更はすぐに有効にならないことがあります。変更された SLP バージョンによって管理されるイメージは、アクティビティモニターに表示されるように、有効なジョブまたはキューへ投入済みのジョブにすでに属していることがあります。いったんジョブがキューに登録されると、特性 (SLP 属性) はそのジョブ用に修正され、以降の定義に加えらる変更には影響しません。ジョブのバックログに加えた変更を有効にするには、複製

ジョブを取り消します。ストレージライフサイクルポリシーマネージャは構成への変更を使ってそれらのイメージの新しい複製ジョブを作成して送信します。

次に示すのは既存のストレージライフサイクルポリシーバージョンへの変更がすぐに有効にならない条件です。

- [バックアップ (Backup)] 操作への変更は、バックアップジョブがすでに進行中か完了しているので影響しません。
- [複製 (Duplication)] 操作への変更は、以前の複製ジョブが作成したコピーに影響しません。
- 有効であるかキューへ投入済みであるかにかかわらず、現在アクティビティモニターに複製ジョブと表示されており、すでに送信されているコピーには、[複製 (Duplication)] 操作への変更は影響しません。有効な複製ジョブに変更を適用する場合は、適用可能な複製ジョブを取り消します。ジョブがいったん取り消されると、nbstserv は SLP の該当するバージョンへの変更を利用し、これらのコピーの新しい複製ジョブを再作成し、再送信します。
- [複製 (Duplication)] 操作への変更は、まだ作成されず、まだ送信されてもいないコピーに影響します。(つまり、まだアクティビティモニターに複製ジョブと表示されていません。) 変更は次の複製セッションに有効になります。nbstserv が新しいセッションを始める時はいつでも、指示を処理するために定義を再読します。
- 複製ジョブが正常に完了しなければ、ジョブの未完了のイメージは新しいジョブの一部として送信されます。バージョンへの変更は再送信されたジョブに影響します。

古いストレージライフサイクルポリシーバージョンの削除

ストレージライフサイクルポリシーのバージョンがアクティブな (または最新の) バージョンではなくなった場合、そのバージョンは削除の対象になります。NetBackup は、非アクティブなバージョンを、それを参照しているすべてのイメージでの処理完了後に自動的に削除します。コピーが完了すると、それらは SLP が完全と見なされます。

デフォルトでは、NetBackup は 14 日後に非アクティブな SLP バージョンを削除します。

[SLP 設定 (SLP settings)] ホストプロパティの次のパラメータは、バージョンの削除に適用されます。

- クリーンアップ間隔 (SLP.CLEANUP_SESSION_INTERVAL)
- 未使用バージョンの SLP 定義のクリーンアップの遅延 (SLP.VERSION_CLEANUP_DELAY)

p.179 の「[SLP 設定 (SLP settings)] プロパティ」を参照してください。

バックアップの構成

- [第20章 バックアップポリシーの作成](#)
- [第21章 合成バックアップ](#)
- [第22章 NetBackup カタログの保護](#)
- [第23章 NetBackup データベースについて](#)
- [第24章 バックアップイメージの管理](#)
- [第25章 NetBackup でのデータの変更不可と削除不可の設定](#)

バックアップポリシーの作成

この章では以下の項目について説明しています。

- [ポリシーユーティリティについて](#)
- [ポリシーの計画](#)
- [バックアップポリシーの作成](#)
- [ポリシーのスケジュールの追加または変更](#)
- [複数のポリシーの同時変更](#)
- [自動管理ポリシーまたはストレージライフサイクルポリシーについて](#)
- [別のポリシーへのポリシー項目のコピーまたは移動](#)
- [ポリシーのコピーによる新しいポリシーの作成](#)
- [同じポリシーまたは異なるポリシーへのスケジュールのコピー](#)
- [ポリシーからのスケジュール、バックアップ対象またはクライアントの削除](#)
- [ポリシーの\[属性 \(Attributes\)\]タブ](#)
- [\[スケジュール \(Schedules\)\]タブ](#)
- [スケジュールの\[属性 \(Attributes\)\]タブ](#)
- [\[開始時間帯 \(Start Window\)\]タブ](#)
- [スケジュールからの日付の除外](#)
- [\[含める日 \(Include Dates\)\]タブ](#)
- [次に動作するスケジュールを NetBackup が判断する方法](#)
- [午前 0 時をまたぐスケジュール時間帯について](#)

- 開放スケジュールがカレンダーを基準としたスケジュールと間隔を基準としたスケジュールに与える影響
- [\[クライアント \(Clients\)\]タブ](#)について
- [\[バックアップ対象 \(Backup Selections\)\]タブ](#)
- [\[ディザスタリカバリ \(Disaster Recovery\)\]タブ](#)
- Vault ポリシーの作成
- BigData ポリシーの作成
- 手動バックアップの実行
- [Active Directory](#) の個別バックアップと個別リカバリ

ポリシーユーティリティについて

バックアップポリシーは、NetBackup がクライアントをバックアップするときに従う指示を提供します。ポリシーユーティリティを使用して、バックアップに関する次の指示を提供します。

バックアップ対象のクライアントの種類。	p.687 の「 ポリシーの[属性 (Attributes)]タブ 」を参照してください。
バックアップをどこに保存するか。	p.687 の「 ポリシーの[属性 (Attributes)]タブ 」を参照してください。
バックアップを実行するタイミングと頻度。	p.759 の「 [スケジュール (Schedules)]タブ 」を参照してください。
バックアップ対象のクライアント。	p.809 の「 [クライアント (Clients)]タブ について」を参照してください。
バックアップ対象のクライアントのファイルとディレクトリ。	p.813 の「 [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブ 」を参照してください。

ポリシーユーティリティの処理

ポリシーユーティリティの処理を実行する方法

- 1 左側で[\[保護 \(Protection\)\]](#)、[\[ポリシー \(Policies\)\]](#)の順に選択します。
- 2 次の情報を確認します。

ポリシーを開く方法

[\[ポリシー \(Policies\)\]](#)タブを選択します。ポリシーのリンクを選択します。

特定の構成情報を表示する方法

適切なタブを選択して、ポリシーの構成領域を表示します。

- [クライアント (Clients)] - ポリシーにあるすべてのクライアントを表示します。
- [スケジュール (Schedules)] - ポリシーにあるすべてのスケジュールを表示します。
- [バックアップ対象 (Backup Selections)] - ポリシーにあるすべてのバックアップ対象リストを表示します。

メモ: 表示されるポリシーの「[\[バックアップ対象 \(Backup selection\)\]タブに関する注意事項](#)」を参照してください。

現在のプライマリサーバーにあるすべてのポリシーについての情報を表示する方法 [ポリシー (Policies)]タブを選択します。

複数のポリシーのポリシー属性を編集する方法

[ポリシー (Policies)]タブで、次の手順を実行します。

- 変更するポリシーを選択します。
- [編集 (Edit)]を選択します。

クライアントのホストプロパティを編集する方法

[クライアント (Clients)]タブで、次の手順を実行します。

- クライアントを選択します。
- [ホストプロパティ (Host Properties)]を選択します。

クライアントの耐性状態をフェッチする方法

[クライアント (Clients)]タブで、次の手順を実行します。

- クライアントを選択します。
- [耐性状態をフェッチする (Fetch resiliency status)]を選択します。

手動バックアップを実行する方法

[ポリシー (Policies)]、[クライアント (Clients)]、または[スケジュール (Schedules)]

- 手動バックアップを実行するポリシー、クライアント、またはスケジュールを選択します。
- [手動バックアップ (Manual backup)]を選択します。

詳しくは、次のトピックを参照してください。

[バックアップ対象 (Backup selection)]タブに関する注意事項

- すでにバックアップ対象が構成されているポリシーのバックアップ対象のみが表示されます。
- バックアップ対象がないポリシーは、このタブに表示されません。
- バックアップ対象は、クライアントごとではなく、ポリシーごとに表示されます。

- ポリシーに複数のバックアップ対象が含まれている場合、各バックアップ対象は同じポリシーの個別の行として表示されます。
- ユーザーがポリシーのバックアップ対象を表示するには、ユーザーに、そのポリシーの表示権限が必要です。
- ポリシーキャッシュの同期タスクの実行後に、ポリシーの既存のバックアップ対象が表示されます。
- キャッシュの更新間隔が原因で、バックアップ対象の変更がすぐに反映されない場合があります。
- タブは読み取り専用モードです。

ポリシーの概略から除外されるバックアップ対象

次のポリシー形式のバックアップ対象は、[ポリシー (Policies)] 画面のバックアップ対象の概略に表示されません。

- Cloud
- Cloud-IaaS
- Cloud-PaaS
- Cloud-Object-Store
- Hypervisor
- KVM
- MS-SQL-Server
- Oracle
- VMware
- Nutanix-AHV
- OLVM-RHV
- NAS-Data-Protection
- Deployment
- Kubernetes
- MSDP-Object-Store
- Epic-Large-File
- Hyper-V
- SAP
- NDMP

■ NBU-Catalog Vault

これらのポリシー形式は、特殊なワークフローを通じてバックアップ対象を管理するため、概略の表示から除外されます。

ポリシーの計画

ポリシーの構成は **NetBackup** 環境のすべてのクライアントの各種の必要性を満たすのに十分に柔軟です。この柔軟性を利用するには、ポリシーユーティリティでポリシー構成を開始する前に時間をかけて計画を立てます。

次の表は、ポリシー構成から最適な結果を確実に得るために行う手順の概要を説明したものです。

表 20-1 ポリシーの計画の手順

手順	処理	説明
手順 1	クライアント情報の収集	各クライアントについて次の情報を収集します。 ■ クライアント名。 ■ 各クライアントのバックアップ対象ファイルのおおよその数。 ■ ファイルの典型的なファイルサイズ。 1 つのクライアントが大量のデータを含んでいるファイルサーバーで、他のクライアントがワークステーションである場合があります。バックアップ時間が長くなることを防ぐために、ファイルサーバーを 1 つのポリシーに含め、ワークステーションは別のポリシーに含めます。ファイルサーバーに複数のポリシーを作成すると便利な場合があります。
手順 2	バックアップ要件に基づくクライアントのグループ分け	クライアントを、さまざまなバックアップおよびアーカイブ要件に応じてグループ分けします。 グループは、クライアントが実行する作業の種類に基づいている場合があります。類似の作業に使われるクライアントには一般に類似のバックアップ要件があります。たとえば、技術部門の多くのクライアントは、同じ種類のファイルを同様の重要度で作成します。場合によっては、各クライアントグループに 1 つのポリシーを作成します。また、クライアントをさらに分割し、バックアップ要件に基づいた個別のポリシーに含める場合もあります。 1 つのバックアップポリシーを 1 つ以上のクライアントに適用できます。各クライアントは、バックアップされるために少なくとも 1 つのバックアップポリシーに含める必要があります。

手順	処理	説明
手順 3	格納要件の考慮	NetBackup 環境には、バックアップポリシーで対応する必要がある特別な格納要件があることがあります。 ストレージユニットおよびボリュームグループの設定は、ポリシーによってバックアップされるすべてのファイルに適用されます。ファイルに特別な格納要件がある場合、スケジュールなどの他の要素が同じである場合でも、それらのファイル用に個別のポリシーを作成します。 いくつかのファイルのバックアップを別のメディアに保存する必要がある場合、それらのバックアップ用に別のボリュームグループを指定するポリシーを作成します。作成後、そのボリュームグループ用のメディアを追加します。 p.676 の「複数のポリシーの 1 つのクライアント例 (Windows)」を参照してください。
手順 4	バックアップスケジュールの考慮	1 つのポリシーのスケジュールがすべてのクライアントおよびファイルに対応していない場合、追加のバックアップポリシーを作成します。 追加のポリシーを作成することにした場合、次の要因を考慮します。 ■ バックアップを行う最適な時間帯。 異なるスケジュールで異なるクライアントをバックアップするには、異なるタイムスケジュールの追加のポリシーが必要になることがあります。たとえば、夜間に稼働するクライアントと昼間に稼働するクライアント用に別々のポリシーを作成します。 ■ ファイルの変更頻度。 一部のファイルが他のファイルよりも高頻度で変更される場合、その違いは、異なるバックアップ頻度の別のポリシーを作成するのに十分に値することがあります。 ■ バックアップを保持する期間。 各スケジュールには、そのスケジュールによってバックアップされるファイルが NetBackup によって保持される期間を決定する値が設定されています。スケジュールはバックアップ対象リスト内のすべてのファイルをバックアップするため、すべてのファイルの保持要件が類似している必要があります。ファイルの完全バックアップを永久に保持する必要がある場合、そのファイルを完全バックアップが 4 週間しか保存されないポリシーに含めないでください。
手順 5	共通の属性によるクライアントのグループ分け	類似するポリシー属性設定を必要とするクライアント用に個別のポリシーを作成します。 p.677 の「クライアントがポリシーでどのようにグループ分けされるかに影響するポリシー属性」を参照してください。

手順	処理	説明
手順 6	多重化されたバックアップの最大限の利用	多重化されたバックアップを最大限利用するために、必要に応じて個別のポリシーを作成します。 ドライブを最大限利用するために、小規模なバックアップを実行する低速なクライアントを多重化します。大規模なバックアップを実行する高パフォーマンスのクライアントの場合、ドライブが最大限活用されている可能性が高く、多重化による効果はありません。 p.786 の「[メディアの多重化 (Media multiplexing)](スケジュール属性)」を参照してください。
手順 7	バックアップ時間の検証	各スケジュールのバックアップの合計時間を検証し、ポリシーをさらに分割して、バックアップ時間を許容水準まで短縮します。 たとえば UNIX client1 の /usr、/h001、/h002/projects のバックアップに時間がかかりすぎる場合は、/h002/projects 用に新しいポリシーを作成します。 個別のポリシーを利用すると、各ポリシーのバックアップ時間だけでなく、サーバーのバックアップの合計時間も短縮できます。NetBackup は、バックアップ対象リスト内のファイルを、バックアップ対象リスト内で出現する順に処理します。ただし、十分なドライブが利用可能であり、[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]ホストプロパティが並列処理を許可するように設定されている場合、個別のポリシーが並列して処理されます。 p.115 の「[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ」を参照してください。 また、多重化機能および[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)]ポリシー属性を使用した場合も、バックアップポリシーが並列して処理されます。 p.724 の「[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)](ポリシー属性)」を参照してください。

p.671 の「[ポリシーユーティリティについて](#)」を参照してください。

p.687 の「[ポリシーの\[属性 \(Attributes\)\]タブ](#)」を参照してください。

複数のポリシーの 1 つのクライアント例 (Windows)

次の表は 1 つのクライアントの 2 つの異なるサブディレクトリのファイルを 2 つの異なる場所に保存できることを示したものです。

- Policy1 は E:\¥h002¥projects のバックアップを DLT ストレージに送信します。
- Policy2 は E:\¥h002¥DevExp と E:\¥h002¥DesDoc のバックアップを DLT ストレージに送信します。

表 20-2 複数のポリシーの 1 つのクライアント

ポリシー	クライアント	ファイル	ストレージ
Policy1	client1	C:¥ D:¥User D:¥h001 E:¥h002¥Projects	DLT
Policy2	client1 client2	E:¥h002¥DevExp E:¥h002¥DesDoc	DLT

クライアントがポリシーでどのようにグループ分けされるかに影響するポリシー属性

次の表はどのクライアントが同じポリシーでグループ分けされるか判断できる属性をリストしたものです。

表 20-3 クライアントがポリシーでどのようにグループ分けされるかに影響するポリシー属性

属性	説明
ポリシー形式 (Policy Type)	各クライアントは正しいポリシー形式のポリシーにある必要があります。たとえば、Windows クライアントは MS-Windows ポリシー形式のポリシーにある必要があります。 p.688 の「 [ポリシー形式 (Policy type)] (ポリシー属性) 」を参照してください。
宛先 (Destination)	ポリシーが生成するデータすべてはポリシーで示される同じ宛先に送信されます。データは同じ [データの分類 (Data Classification)]、[ポリシーストレージ (Policy storage)]、[ポリシーボリュームプール (Policy volume pool)]を共有する必要があります。 p.694 の「 [データの分類 (Data classification)](ポリシー属性) 」を参照してください。 p.694 の「 [ポリシーストレージ (Policy storage)] (ポリシー属性) 」を参照してください。 p.698 の「 [ポリシーボリュームプール (Policy volume pool)] (ポリシー属性) 」を参照してください。
ジョブの優先度 (Job Priority)	この属性はポリシーのクライアントすべてのバックアップの優先度を判断します。 p.706 の「 [ジョブの優先度 (Job priority)](ポリシー属性) 」を参照してください。
NFS をたどる	UNIX クライアントにバックアップ対象の NFS マウントしたファイルが存在する場合、この属性を設定します。NFS に関連する問題が他のクライアントに影響しないように、これらのクライアントに個別のポリシーを設定することを検討します。 p.708 の「 [NFS をたどる (Follow NFS)](ポリシー属性) 」を参照してください。

属性	説明
クロスマウントポイント	この属性は NetBackup がポリシーのすべてのクライアントのファイルシステム境界を超えることができるようにします。 p.712 の「 [クロスマウントポイント (Cross mount points)] (ポリシー属性) 」を参照してください。
ネットワークドライブのバックアップ (Backup network drives)	この属性は、ポリシーのすべてのクライアントがネットワークドライブで保存するファイルを NetBackup がバックアップすることを可能にします。(MS-Windows ポリシー形式にのみ適用されます。) p.709 の「 [ネットワークドライブのバックアップ (Backup network drives)] (ポリシー属性) 」を参照してください。
圧縮 (Compression)	この属性はポリシーのすべてのクライアントがバックアップをサーバーに送信する前に圧縮することを示します。圧縮によってバックアップ時間が長くなる可能性があるため、この属性をすべてのクライアントに使用することが適切でない場合があることに注意してください。それらのクライアントに異なるポリシーを作成することを考慮します。 p.715 の「 [圧縮 (Compression)] (ポリシー属性) 」を参照してください。

Microsoft 社 DFSR バックアップおよびリストアについて

NetBackup は、独立した DFSR サーバーと DFSR データに関連付けられているデータベースを保護します。

DFSR がある環境では、**NetBackup** で以下の 2 つの変更が発生します。

- データ整合性を維持するために、共有レプリカ DFSR データをホストするフォルダは、**NetBackup** によって通常のファイルシステムバックアップから自動的に除外されます。
- 最上位の DFSR 共有フォルダは、シャドウコピーコンポーネントの一部になります。このため、各バックアップの前に Windows ボリュームシャドウコピーサービス (VSS) によって常にデータのスナップショットがとられます。

VSS ライターは、DFS レプリケーションサービスを自動的に停止および再開します。低いアクティビティの期間になるようにバックアップをスケジュールします。(レプリケーションサービスを手動で停止すると、Microsoft 社の変更ジャーナルの問題が発生する場合があります。特に、更新シーケンス番号 (USN) ジャーナルラップの原因となります。)

デフォルトでは、すべての Windows クライアントが Windows オープンファイルバックアップ向けに構成されます。DFSR サーバーは、このオプション向けに構成する必要があります。

p.74 の「[\[クライアント属性 \(Client attributes\)\] プロパティの \[Windows Open File Backup\] タブ](#)」を参照してください。

DFSR データのバックアップ方法について詳しくは、[表 20-4](#)を参照してください。

表 20-4 Microsoft 社 DFSR バックアップの推奨事項

データ量	推奨事項
50 GB 未満	以下のように、1 つのポリシーを構成します。 ■ クライアントとして DFSR サーバーホストを選択します。 p.809 の「ポリシー内のクライアントの追加、変更、または削除」を参照してください。 ■ ポリシーでは、[バックアップ対象 (Backup Selections)]の[指示句 (Directive)]として [ALL_LOCAL_DRIVES]を選択します。 [ALL_LOCAL_DRIVES]指示句には、Shadow Copy Components:¥ が自動的に含まれます。 p.813 の「ポリシーへのバックアップ対象の追加」を参照してください。 1 つのポリシーは、適切な時間帯内にデータをバックアップできます。

データ量	推奨事項
50 GB 以上	DFSР サーバーごとに 1 つのバックアップポリシーを設定し、そのポリシーでレプリケーションのフォルダのみを指定します。各ホストのレプリケーションデータのポリシーにより、DFSР データを適切な時間帯内に確実にバックアップします。 DFSР サーバーホストごとに、以下を実行します。 ■ [すべてのポリシー (All Policies)] および [すべてのスケジュール (All Schedules)] のグローバルなエクスクルードリストを作成します。以下の DFSР 最上位フォルダを除外します。 シャドウコピーコンポーネント: ¥User Data¥Distributed File System Replication¥DfsrReplicatedFolder グローバルなエクスクルードリストによって、クライアントの他のバックアップポリシーにより DFSР コンポーネントが誤ってバックアップされないようにします。 p.99 の「[エクスクルードリスト (Exclude list)] プロパティ」を参照してください。 ■ 以下のように、DFSР データのバックアップポリシーを作成します。 ■ クライアントでは、DFSР サーバーホストを指定します。クラスタでホストされるサーバーでは、ローカルホスト名ではなく DFSР クラスタ名を指定します。 p.809 の「ポリシー内のクライアントの追加、変更、または削除」を参照してください。 ■ ポリシーの[バックアップ対象 (Backup Selections)]では、そのホストの最上位 DFSР フォルダごとに絶対パスを指定します。以下にパス例を示します。 シャドウコピーコンポーネント: ¥User Data¥Distributed File System Replication¥DfsrReplicatedFolders¥folder_name ヒント: [バックアップ、アーカイブおよびリストア (Backup, Archive, and Restore)] インターフェースを使用し、[DfsrReplicatedFolders] フォルダのシャドウコピーコンポーネントを参照します。インターフェースには、バックアップ選択対象として入力する各 DFSР フォルダへのパスが表示されます。 p.813 の「ポリシーへのバックアップ対象の追加」を参照してください。 ■ バックアップポリシーでは、エクスクルードリストに例外を作成し、最上位 DFSР ディレクトリを指定します (以下を参照)。 シャドウコピーコンポーネント: ¥User Data¥Distributed File System Replication¥DfsrReplicatedFolders 例外の[ポリシー (Policy)]では、DFSР データのバックアップポリシーを指定します。また、[スケジュール (Schedule)]の[すべてのスケジュール (All Schedules)]を指定します。 DFSР がクラスタでホストされる場合は、クラスタの各ホストの例外を作成します。 例外によって、NetBackup がグローバルなエクスクルードリストを処理した後、シャドウコピーコンポーネントの DFSР パスがバックアップに必ず含まれるようにします。 p.102 の「エクスクルードリストへの例外の追加」を参照してください。

バックアップの間に、Windows は DFSР ホストのアプリケーションイベントログに、以下のイベント ID メッセージを書き込みます。

```
Event ID=1102
Severity=Informational
The DFS Replication service has temporarily stopped replication
because another application is performing a backup or restore
```

operation. Replication will resume after the backup or restore operation has finished.

Event ID=1104

Severity=Informational

The DFS Replication service successfully restarted replication after a backup or restore operation.

DFSR のリストア

DFSR データをリストアするには、NetBackup の[バックアップ、アーカイブおよびリストア (Backup, Archive and Restore)]クライアントインターフェースを使用し、[シャドウコピー コンポーネント (Shadow Copy Components)]でリストアするファイルまたはフォルダを参照します。

シャドウコピーコンポーネント: ¥User Data¥Distributed File System
Replication¥DfsrReplicatedFolders¥folder_name

リストアを実行する場合は、DFSR データに加えて DFSR データベースもリストアに含め必要があるかどうかを慎重に考慮してください。DFSR サーバーは、レプリケートされた各ボリュームの DFSR データベースごとに、グローバルに一意的なバージョン番号 (GVSN) を保持します。DFSR サーバーを以前のデータベースバージョンにリストアすると、他のサーバーは古いバージョン番号を認識しません。その場合、レプリケーションは実行できず、問題が修正されるまで停止します。

詳細情報

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100038589>

DFSR の管理と使用についての詳細は、Microsoft 社のマニュアルを参照してください。

バックアップポリシーの作成

次の手順を使用してバックアップポリシーを作成します。

ポリシーを作成するには

- 1 NetBackup Web UI で、[保護 (Protections)]、[ポリシー (Policies)]の順に選択します。
- 2 [追加 (Add)]をクリックします。
- 3 ポリシー名を入力します。
- 4 新しいポリシーの属性、スケジュール、クライアントとバックアップ対象を構成します。

ポリシーのスケジュールの追加または変更

ポリシーの変更は、対象となるポリシーおよびクライアントのバックアップ処理が予定されていないときにだけ行うようにしてください。バックアップ開始前に調整を行い、ある構成から他の構成へ円滑に移行できるようにします。

ポリシーを変更すると、**NetBackup** はポリシーの実行時刻を再計算します。

メモ: 自動管理ポリシーは変更しないことをお勧めします。ユーザーが自動管理ポリシーの変更を開始すると、その後起こり得る事象について警告するダイアログが表示されます。

p.684 の「[自動管理ポリシーまたはストレージライフサイクルポリシーについて](#)」を参照してください。

NetBackup の既存ポリシーのスケジュールを追加または変更するには次の手順を実行します。

ポリシーのスケジュールを追加または変更する方法

- 1 **NetBackup** 管理コンソール の左ペインで、[**NetBackup** の管理]> [ポリシー (Policies)] を展開します。
- 2 中央ペインでポリシー名を展開し、[スケジュール (Schedules)]を選択します。
- 3 次のいずれかの操作を実行します。

スケジュールを追加する

新しいスケジュールを追加する場合、[処理 (Actions)]、[新規 (New)]、[スケジュール (Schedule)]の順に選択します。

スケジュールをコピーし、別のポリシーに貼り付ける

- コピーするスケジュールをポリシーを展開します。
- 右ペインで、スケジュールを右クリックし、[コピー (Copy)]を選択します。
- スケジュールを貼り付けるポリシーを展開します。
- 右ペインで、スケジュール領域の任意の場所を右クリックし、[貼り付け (Paste)]を選択します。

既存のスケジュールを変更する スケジュール名をダブルクリックします。

- 4 [属性 (Attributes)]タブ、[開始時間帯 (Start Window)]タブ、[日のエクスクルード (Exclude Days)]タブ、[含める日 (Include Dates)]タブのエントリを設定します (該当する場合)。

p.759 の「[スケジュールの\[属性 \(Attributes\)\]タブ](#)」を参照してください。

p.793 の「[\[開始時間帯 \(Start Window\)\]タブ](#)」を参照してください。

p.796 の「[スケジュールからの日付の除外](#)」を参照してください。

p.797 の「[\[含める日 \(Include Dates\)\]タブ](#)」を参照してください。
- 5 [OK]をクリックします。

複数のポリシーの同時変更

複数の NetBackup ポリシーを一度に変更するには次の手順を実行します。

メモ: 自動管理ポリシーは変更しないことをお勧めします。ユーザーが自動管理ポリシーの変更を開始すると、その後起こり得る事象について警告するダイアログが表示されます。

p.684 の「[自動管理ポリシーまたはストレージライフサイクルポリシーについて](#)」を参照してください。

メモ: 複数のポリシーの[属性 (Attributes)]、[クライアント (Clients)]、[スケジュール (Schedules)]を一度に変更できます。ただし、複数のポリシーの[バックアップ対象 (Backup Selections)]を一度に変更することはできません。

複数のポリシーを変更する方法

- 1 [NetBackup管理]を展開し、[ポリシー]を選択します。
- 2 中央ペインで、[すべてのポリシーの概略 (Summary of All Policies)]を展開し、変更するノードを選択します。
- 3 編集するポリシーを選択します。

メモ: 異なるポリシーにわたる異なるスケジュールを一度に変更できます。ポリシーの種類が異なる複数のスケジュールを変更する場合、[属性 (Attributes)]タブは無効になります。選択した複数のポリシーの異なる値がある属性のトライステートが表示されます。

- 4 [編集 (Edit)]>[変更 (Change)]を選択します。
 - 5 必要な変更を行います。
- p.687 の「ポリシーの[属性 (Attributes)]タブ」を参照してください。
- p.759 の「スケジュールの[属性 (Attributes)]タブ」を参照してください。
- p.809 の「[クライアント (Clients)]タブについて」を参照してください。

自動管理ポリシーまたはストレージライフサイクルポリシーについて

作業負荷管理者が保護計画に資産をサブスクライブすると、NetBackup は自動管理ポリシーと自動管理 SLP (ストレージライフサイクルポリシー) の作成も行います。NetBackup Web UI で、自動管理ポリシーまたは SLP には、保護計画名の後に GUID を含む接尾辞を付加した構成で名前が付けられます。(保護計画の作成時にカスタム接頭辞オプションを使用した場合、自動管理ポリシーの名前には代わりにその接頭辞が反映されます。) NetBackup 管理コンソールでは、自動管理ポリシーまたは SLP 名では接頭辞 SLO_ENGINE_MANAGED+ が使用されます。

NetBackup Web UI では、ユーザーは自動管理ポリシーまたは SLP を変更または削除できません。自動管理ポリシーまたは SLP の詳細の表示のみを行います。

警告: NetBackup 管理コンソールやコマンドラインを使用した、自動管理ポリシーまたはストレージライフサイクルポリシー (SLP) の変更や削除しないことをお勧めします。ユーザーが NetBackup 管理コンソールを使用して自動管理ポリシーや SLP の変更または削除を開始すると、その後起こり得る事象について警告するダイアログが表示されます。

- 変更を続行する場合、ユーザーは、ポリシーまたは SLP が、保護計画で定義されているサービスレベル目標をその後も満たすようにする必要があります。
- ポリシーまたは SLP の削除を続行する場合、ユーザーは、サービスレベル目標を満たす別の保護計画に資産が追加されるようにする必要があります。

別のポリシーへのポリシー項目のコピーまたは移動

あるポリシーから別のポリシーにポリシー全体、属性、スケジュール、クライアントおよびバックアップ対象をコピーするか、または移動できます。次の手順では、コピーまたは移動できるポリシー項目について説明します。

あるポリシーから別のポリシーまたはサーバーに項目をコピーまたは移動する方法

- 1 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]> [ポリシー (Policies)]を展開します。
- 2 中央ペインで、コピーまたは移動するポリシーの[属性 (Attributes)]、[スケジュール (Schedules)]、[クライアント (Clients)]、[バックアップ対象 (Backup Selections)]のいずれかを選択します。
- 3 右ペインで、前の手順での選択項目に基づいて、コピーまたは移動するポリシーの属性、スケジュール、クライアント、バックアップ対象を選択します。
- 4 次のいずれかを実行します。

項目をコピーする方法	[編集 (Edit)]メニューで、[コピー (Copy)]をクリックします。
項目を移動する方法	■ [編集 (Edit)]メニューで、[切り取り (Cut)]をクリックします。 ■ 選択した項目をポリシーから削除するかどうか尋ねられた場合は[はい (Yes)]をクリックします。

- 5 中央ペインで、コピーした項目を貼り付けるポリシー項目を選択します。
- 6 [編集 (Edit)]メニューから、[貼り付け (Paste)]をクリックします。

同じ名前の項目を貼り付けるときには、コピーして既存の項目を置換する、コピーしても既存の項目を維持する、コピーしないのいずれかのオプションが NetBackup によって提供されます。

メモ: スケジュールがポリシー形式と一致しない場合には、スケジュールはコピーされません。操作はダイアログボックスに表示されます。

属性を貼り付けるときには、ポリシーの既存の属性が常に置換されます。これに対して、バックアップ対象を貼り付けるときには、バックアップ対象は常にポリシーにコピーされ、置換はされません。

コピーまたは移動機能はインスタンス、Oracle のインスタンスグループ、バックアップポリシーの SQL 形式にも適用可能です。

ポリシーのコピーによる新しいポリシーの作成

ポリシーを作成する時間を節約するために[新しいコピー先 (Copy To New)]オプションを使います。このオプションは、多数の同じポリシー属性、スケジュール、クライアント、またはバックアップ対象を含んでいるポリシーの場合に特に有用です。

ポリシーをコピーして新しいポリシーを作成する方法

- 1 NetBackup 管理コンソール の左ペインで、[NetBackup の管理]> [ポリシー (Policies)] を展開します。
- 2 中央ペインで、コピーするポリシーを選択します。
- 3 [編集 (Edit)]メニューで、[新しいコピー先 (Copy to New)]をクリックします。
- 4 [ポリシーのコピー (Copy a Policy)]ダイアログボックスで、コピーするポリシーの名前を入力します。選択したポリシーとは別のポリシーを指定できます。
- 5 新しいポリシーの名前を入力します。
- 6 [OK]をクリックします。新しいポリシーとコピーされたポリシーの唯一の違いは名前です。

同じポリシーまたは異なるポリシーへのスケジュールのコピー

スケジュールを作成する時間を節約するために[新しいコピー先 (Copy to New)]オプションを使います。同じポリシーか異なるポリシーにスケジュールをコピーするためにこのオプションを使います。

スケジュールをコピーして新しいスケジュールを作成する方法

- 1 NetBackup 管理コンソール の左ペインで、[NetBackup の管理]> [ポリシー (Policies)] を展開します。
- 2 中央ペインで、ポリシーを展開し、コピーするスケジュールを含んでいる[スケジュール (Schedules)]ノードを選択します。
- 3 右ペインで、コピーするスケジュールを選択します。
- 4 [編集 (Edit)]メニューで、[新しいコピー先 (Copy to New)]をクリックします。
- 5 [スケジュールのコピー (Copy Schedule)]ダイアログボックスで、新しいスケジュールの名前を入力します。
- 6 スケジュールを貼り付けるポリシーの名前を選択するにはメニューを使います。同じポリシーか異なるポリシーにスケジュールを貼り付けることができます。
- 7 [OK]をクリックします。新しいスケジュールの[スケジュールの変更 (Change Schedule)]ダイアログボックスが開きます。

ポリシーからのスケジュール、バックアップ対象またはクライアントの削除

NetBackup ポリシーからスケジュール、バックアップ対象またはクライアントを削除するために次の手順を実行します。

メモ: 自動管理ポリシーは変更または削除しないことをお勧めします。ユーザーが自動管理ポリシーの変更または削除を開始すると、その後起こり得る事象について警告するダイアログが表示されます。

p.684 の「[自動管理ポリシーまたはストレージライフサイクルポリシーについて](#)」を参照してください。

ポリシーからスケジュール、バックアップ対象またはクライアントを削除する方法

- 1 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]> [ポリシー (Policies)]を展開します。
- 2 中央ペインでポリシー名を展開し、[属性 (Attributes)]、[スケジュール (Schedules)]、[バックアップ対象 (Backup Selections)]、または[クライアント (Clients)]を選択します。
- 3 右ペインで、削除する項目を選択します。
- 4 [編集 (Edit)]メニューで、[削除 (Delete)]をクリックします。
- 5 選択した項目をポリシーから削除するかどうか尋ねられた場合は[はい (Yes)]をクリックします。

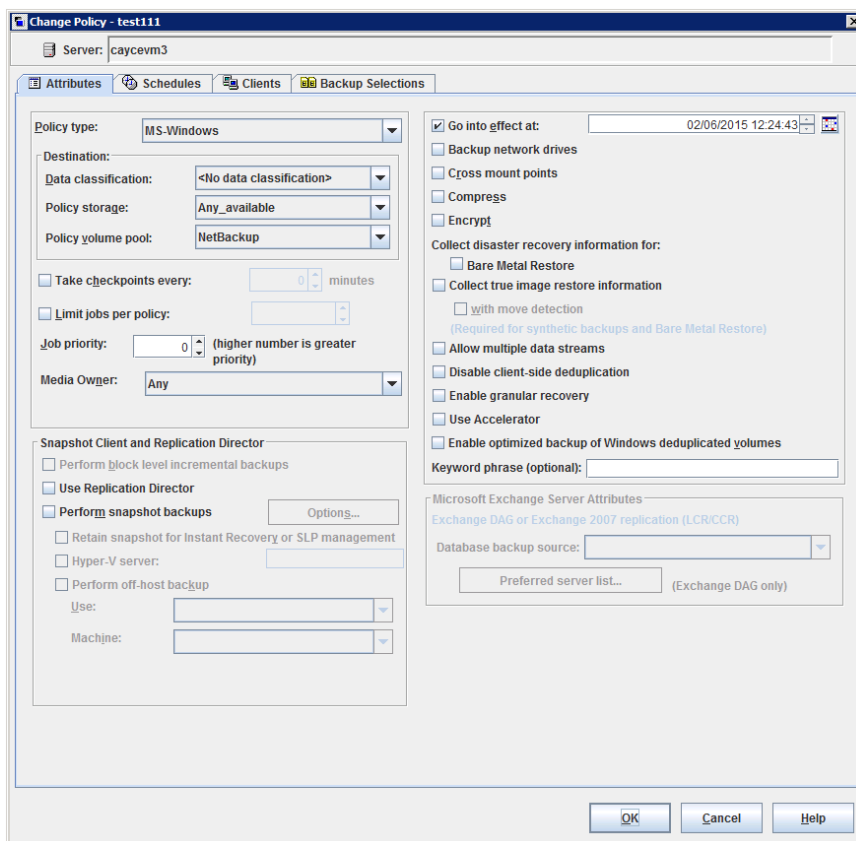
クライアントリストからクライアントを削除しても、NetBackup クライアントソフトウェアは、クライアントから削除されたり、アンインストールされません。そのクライアントのバックアップは、バックアップが期限切れになるまではリカバリできます。また、バックアップ対象リストからファイルを削除した場合も、実際のファイルはクライアントから削除されません。

ポリシーの[属性 (Attributes)]タブ

新しいポリシーを追加するか、または既存のポリシーを変更する場合は、ポリシーの[属性 (Attributes)]タブを使用してバックアップ設定を構成します。ポリシーを作成するとき、ポリシーに名前を与え、ポリシー形式を選択します。通常、選択するポリシー形式はバックアップしたいクライアントの種類によって決まります。利用可能なポリシー形式の数は、どの NetBackup オプションがインストールされているかによって変わります。各ポリシー形式に属性の一意的組み合わせがあります。すべての属性が、すべてのポリシー形式に適用されるわけではありません。ポリシー形式を選択するとき、そのポリシー形式に適用される属性はアクティブです。利用不能な属性はグレー表示されます。

 **図 20-1** は、NetBackup ポリシーの [属性 (Attributes)]タブを示しています。

図 20-1 ポリシーの[属性 (Attributes)]タブ



次のトピックでは、ポリシーの[属性 (Attributes)]タブの設定について説明します。

[ポリシー形式 (Policy type)] (ポリシー属性)

[ポリシー形式 (Policy type)]属性では、ポリシーの目的を決定します。リストからポリシー形式を選択します。通常、選択するポリシー形式は、バックアップするクライアントの種類によって決まります。一部のポリシー形式はクライアントバックアップに使われません。たとえば、**NBU-Catalog** はクライアントバックアップでは使われません。

ポリシー形式のリストは、インストールされている **NetBackup** オプションによって変わります。各ポリシー形式に属性の一意の組み合わせがあります。ポリシー形式を選択するとき、そのポリシー形式に適用される属性だけがアクティブです。

既存のポリシーのポリシー形式を変更できます。ただし、ポリシーのスケジュールは無効になることがあります。スケジュールが無効になれば、**NetBackup** は警告メッセージを表示し、無効なスケジュールを削除するか、同等の形式にスケジュールを変更します。

既存ポリシーのポリシー形式を変更すると、他のポリシー選択またはポリシー機能が無効になる場合があります。

表 20-5 では、**NetBackup Web UI** で利用可能な **NetBackup** ポリシー形式について説明します。

表 20-5 NetBackup ポリシー形式

ポリシー形式	説明
BigData	データの大きなアプリケーションのジョブをスケジュールして実行するためのポリシー形式として使用します。たとえば、Hadoop 分散ファイルシステム (HDFS) または Nutanix Acropolis Hypervisor です。このポリシー形式には Enterprise Client ライセンスが必要です。 p.865 の「BigData ポリシーの作成」を参照してください。 NetBackup がサポートするプラグインについて詳しくは、次を参照してください。これらはダウンロードおよびインストールして利用可能です。 https://support.cohesity.com/s/article/article-100040155
Cloud	このポリシー形式は、NetBackup Web UI でのみ利用可能です。 クラウド内の作業負荷をバックアップするポリシーに使用します。たとえば、アマゾンウェブサービス (AWS)、Azure、Microsoft Azure、Azure Stack Hub、Google Cloud Platform (GCP)、Oracle Cloud Infrastructure (OCI) の資産です。互換性のあるクラウド内の作業負荷の完全なリストについては、NetBackup ハードウェア互換性リスト (HCL) を参照してください。
Cloud-Object-Store	このポリシー形式は、NetBackup Web UI でのみ利用可能です。 クラウドオブジェクトストアをバックアップするポリシーに使用します。たとえば、Azure Blob Storage、AWS S3、Google Cloud Storage (GCS)、Hitachi Cloud Platform などです。互換性のあるオブジェクトストアの完全なリストについては、NetBackup ハードウェア互換性リスト (HCL) を参照してください。
DataTools-SQL-BackTrack (UNIX のみ)	このポリシー形式は、NetBackup 管理コンソールでのみ利用可能です。 NetBackup for SQL-BackTrack エージェントがインストールされているクライアントのみがあるポリシーに使用します。このポリシー形式の設定方法については、そのオプション用のマニュアルを参照してください。
DataStore	このポリシー形式は、バックアップまたはアーカイブの目的で NetBackup がオープンバックアップサービス (XBSA) を使用するデータベースアプリケーションに使用されます。
DB2	NetBackup for DB2 エージェントがインストールされているクライアントのみがあるポリシーに使用します。このポリシー形式の設定方法については、そのオプション用のマニュアルを参照してください。

ポリシー形式	説明
Enterprise-Vault	Enterprise Vault ジョブをスケジュールして実行するためのポリシー形式として使用します。
FlashBackup (UNIX のみ)	raw パーティションバックアップの処理速度に、個々のファイルのリストアを実行する機能を組み合わせたものです。 このポリシー形式は UNIX クライアントのみに適用されます。Enterprise Client ライセンスが必要です。 このポリシー形式の設定方法について詳しくは、『NetBackup NAS 管理者ガイド』および『NetBackup Snapshot Manager for Data Center 管理者ガイド』を参照してください。
FlashBackup-Windows (Windows のみ)	raw パーティションバックアップの処理速度に、個々のファイルのリストアを実行する機能を組み合わせたものです。このポリシー形式は Windows クライアントのみに適用されます。Enterprise Client ライセンスが必要です。 このポリシー形式の設定方法について詳しくは、『NetBackup NAS 管理者ガイド』および『NetBackup Snapshot Manager for Data Center 管理者ガイド』を参照してください。

ポリシー形式	説明
オンホストバックアップまたはオフホストバックアップによって Windows Hyper-V サーバーに存在する仮想マシンをバックアップするために使用します。このポリシー形式には Enterprise Client ライセンスが必要です。 関連するポリシーを Hyper-V ポリシー形式にアップグレードするには、次のいずれかの方法で行います。 ■ ポリシー形式は、NetBackup Web UI または NetBackup 管理コンソールで変更します。NetBackup 管理コンソールで、一度に 1 つのポリシーの形式を変更します。 ■ 次の場所にある btplconvert スクリプトを使用して、複数のポリシーのポリシー形式を一度に変更します。 Windows の場合: <code>install_path\NetBackup\bin\goodies</code> UNIX の場合: <code>usr/openw/netbackup/bin/goodies</code> このポリシー形式の設定については、『NetBackup for Hyper-V ガイド』を参照してください。	
Kubernetes	Kubernetes クラスタを保護するために使用します。
Informix-On-BAR (UNIX のみ)	NetBackup for Informix エージェントがインストールされているクライアントのみがあるポリシーに使用します。このポリシー形式の設定方法については、そのオプション用のマニュアルを参照してください。
Lotus-Notes	NetBackup for Lotus Notes エージェントがインストールされているクライアントのみがあるポリシーに使用します。このポリシー形式の設定方法については、そのオプション用のマニュアルを参照してください。

ポリシー形式	説明
MongoDB Ops Manager	MongoDB Ops Manager エージェントの NetBackup がインストールされているクライアントのみがあるポリシーに使用します。このポリシー形式の設定方法については、そのオプション用のマニュアルを参照してください。
MS-Exchange-Server (Windows のみ)	NetBackup for Exchange Server エージェントがインストールされているクライアントのみがあるポリシーに使用します。このポリシー形式の設定方法については、そのオプション用のマニュアルを参照してください。 このポリシー形式は Windows クライアントのみに適用されます。
MS-SharePoint (Windows のみ)	NetBackup for SharePoint Server のポリシーを構成する場合に使用します。 このポリシー形式は Windows クライアントのみに適用されます。
MS-SQL-Server	NetBackup for SQL Server エージェントがインストールされているクライアントのみがあるポリシーに使用します。このポリシー形式の設定方法については、そのオプション用のマニュアルを参照してください。
MS-Windows	サポート対象の Windows オペレーティングシステムレベルの Windows クライアントのみを含んでいるポリシーに使用します。 Standard ポリシー形式と MS-Windows ポリシー形式でのみ次のオプションがサポートされます。 ■ バックアップまたはリストアの「チェックポイントから再開」 p.700 の「[チェックポイントの間隔 (分) (Take checkpoints every __ minutes)] (ポリシー属性)」を参照してください。 ■ 合成バックアップ p.688 の「[ポリシー形式 (Policy type)] (ポリシー属性)」を参照してください。 ■ Bare Metal Restore 用にディザスタリカバリ情報を収集する (Collect disaster recovery information for Bare Metal Restore) p.720 の「[Bare Metal Restore 用にディザスタリカバリ情報を収集する (Collect disaster recovery information for Bare Metal Restore)] (ポリシー属性)」を参照してください。
NAS-Data-Protection	NAS 作業負荷の動的データストリーミングを構成する場合にこのポリシーを使用します。 このポリシー形式の設定方法について詳しくは、『NetBackup NAS 管理者ガイド』および『NetBackup Snapshot Manager for Data Center 管理者ガイド』を参照してください。
NBU-Catalog	カタログバックアップジョブの場合に使用します。
NDMP	NetBackup NDMP オプションがインストールされているクライアントだけが含まれるポリシーに使用します。このポリシー形式は、NetBackup NDMP がインストールされ、ライセンスを取得済みの場合だけ使用できます。このポリシー形式の設定方法については、そのオプション用のマニュアルを参照してください。

ポリシー形式	説明
Nutanix-AHV	NetBackup Web UI は、Nutanix-AHV 資産をバックアップするためのポリシーをサポートします。 NetBackup Web UI で[保護 (Protection)]、[ポリシー (Policies)]の順に選択します。[追加 (Add)]をクリックし、[ポリシー形式 (Policy type)]として[Nutanix-AHV]を選択します。 メモ: このポリシー形式には Enterprise Client ライセンスが必要で、Web UI でのみ利用可能です。 詳しくは、『NetBackup Nutanix AHV 管理者ガイド』の「AHV 仮想マシンの保護」で、ポリシーを使用した AHV VM またはインテリジェントグループのバックアップに関するセクションを参照してください。
Oracle	NetBackup for Oracle エージェントがインストールされているクライアントのみがあるポリシーに使用します。このポリシー形式の設定方法については、そのオプション用のマニュアルを参照してください。
SAP	NetBackup SAP エージェントがインストールされているクライアントのみがあるポリシーに使用します。このポリシー形式の設定方法については、そのオプション用のマニュアルを参照してください。
Standard	Oracle などの特定製品のポリシーが設定可能なクライアントを除く UNIX クライアント (サポートされている Mac クライアントを含む) に使用します。 Standard ポリシー形式と MS-Windows ポリシー形式でのみ次のオプションがサポートされます。 ■ バックアップまたはリストアの「チェックポイントから再開」 ■ 合成バックアップ ■ Bare Metal Restore 用にディザスタリカバリ情報を収集する (Collect disaster recovery information for Bare Metal Restore)
Sybase	NetBackup for Sybase エージェントがインストールされているクライアントのみがあるポリシーに使用します。このポリシー形式の設定方法については、そのオプション用のマニュアルを参照してください。
Universal-Share	ユニバーサル共有内のデータを保護するジョブをスケジュールして実行するためのポリシー形式として使用します。ユニバーサル共有は、NetBackup ストレージ API または NetBackup Web UI を使用して、指定した MSDP ストレージサーバーに作成する必要があります。
Vault	このポリシー形式は、NetBackup 管理コンソールでのみ利用可能です。 Vault ジョブをスケジュールして実行するためのポリシー形式として使用します。このポリシー形式は Vault にライセンスがあるときにのみ利用可能です。

ポリシー形式	説明
VMware	VMware vSphere サーバーに存在する仮想マシンのオフホストバックアップによるバックアップに使用します。このポリシー形式には Enterprise Client ライセンスが必要です。 関連するポリシーを VMware ポリシー形式にアップグレードするには、次のいずれかの方法で行います。 ■ ポリシー形式は、NetBackup Web UI または NetBackup 管理コンソールで変更します。NetBackup 管理コンソールで、一度に 1 つのポリシーの形式を変更します。 ■ 次の場所にある btplconvert スクリプトを使用して、複数のポリシーのポリシー形式を一度に変更します。 Windows の場合: <code>install_path¥NetBackup¥bin¥goodies</code> UNIX の場合: <code>usr/openv/netbackup/bin/goodies</code> このポリシー形式の設定については、『NetBackup for VMware ガイド』を参照してください。

オフホストバックアップについて詳しくは、『[NetBackup NAS 管理者ガイド](#)』および『[NetBackup Snapshot Manager for Data Center 管理者ガイド](#)』を参照してください。

[データの分類 (Data classification)] (ポリシー属性)

[データの分類 (Data Classification)] 属性は、バックアップを保存するストレージライフサイクルポリシーの分類を指定します。たとえば、ゴールド分類のバックアップはゴールドデータ分類のストレージユニットに送信する必要があります。デフォルトでは、NetBackup には 4 つのデータ分類 (プラチナ、ゴールド、シルバー、ブロンズ) があります。

この属性は省略可能で、バックアップがストレージライフサイクルポリシーへ書き込まれる場合のみ適用されます。リストに [データの分類なし (No data classification)] が表示される場合、ポリシーは [ポリシーストレージ (Policy storage)] リストに表示されるストレージ選択を使います。データの分類を選択しているポリシーでは、作成されるすべてのイメージは分類 ID でタグ付けされます。

p.652 の「[ストレージライフサイクルポリシーの設定](#)」を参照してください。

p.88 の「[\[データの分類 \(Data Classification\)\] プロパティ](#)」を参照してください。

p.89 の「[データ分類の追加](#)」を参照してください。

p.624 の「[ストレージライフサイクルポリシーについて](#)」を参照してください。

[ポリシーストレージ (Policy storage)] (ポリシー属性)

[ポリシーストレージ (Policy storage)] 属性は、ポリシーのデータのストレージの宛先を指定します。リストから特定のストレージユニット、ストレージライフサイクルポリシー、またはストレージユニットグループを選択します。

NetBackup は、利用可能なストレージユニットを検索するとき、次の要件を満たす最初のストレージユニットを選択します。

- ストレージユニットが[オンデマンドのみ (On demand only)]に指定されていません。
- ストレージユニットに利用可能なドライブが存在します。
- ストレージユニットに、必要なボリュームプールで利用可能なメディアが存在します。

ただし、メディアサーバーを兼ねたクライアントにストレージユニットがローカル接続されている場合は例外です。NetBackupその場合、NetBackup はローカル接続されたストレージユニットを最初を選択します。

p.597 の「[ステージングバックアップについて](#)」を参照してください。

ストレージユニット (Storage Unit)

ポリシーデータの保存先となるストレージユニットの名前を選択します。ディスクベースまたはテープベースのいずれでも可能です。

設定によっては、ポリシーに使用するディスクステージング形式はストレージユニットで判定されます。

p.565 の「[ストレージユニットの作成](#)」を参照してください。

ストレージライフサイクルポリシー (Storage lifecycle policy)

ポリシーデータのストレージ宛先となるストレージライフサイクルポリシーの名前を選択します。

ドロップダウンメニューには、ポリシーと同じデータ分類を備えたライフサイクルのみが表示されます。たとえば、「ゴールド」バックアップイメージを「シルバー」ストレージライフサイクルに送信することはできません。特定のデータの分類に属するイメージを、分類されていないストレージライフサイクルに送信することはできません。データ分類は省略可能です。

p.115 の「[\[グローバル属性 \(Global attributes\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

設定によっては、ポリシーに使用するディスクステージング形式はストレージライフサイクルポリシーで判定されます。

レプリケーションディレクタを使用してスナップショットのレプリケーションを設定する場合は、スナップショット対応ストレージユニットを含むストレージライフサイクルポリシーを選択してください。

p.624 の「[ストレージライフサイクルポリシーについて](#)」を参照してください。

ストレージユニットグループ (Storage unit group)

ポリシーデータの保存先となるストレージユニットグループの名前を選択します。

p.613 の「[ストレージユニットグループについて](#)」を参照してください。

任意 (Any Available)

[任意 (Any Available)] オプションを選択した場合、NetBackup はまず、ローカル接続されているストレージユニットにデータの保存を試行します。NetBackup にローカル接続されたドライブだけを強制的に使用させるようにするには、[一般的なサーバー (General Server)] プロパティの[必ずローカルドライブを使用 (Must use local drive)]を選択します。ローカルデバイスが存在しない場合、または[必ずローカルドライブを使用 (Must use local drive)]が選択されていない場合、NetBackup では、利用可能なストレージユニットの検索がアルファベット順に試行されます。

[任意 (Any Available)] を選択している場合、NetBackup は null_stu ストレージユニットを選択しません。null_stu ストレージユニットは、Cohesity Technical Support がデータ転送に関する障害を識別、隔離するために NullOST プラグインを使用するときのみ作成されます。

図 20-2 ストレージの形式を示すアイコン

-  ストレージユニット (テープデバイス)
-  ストレージユニット (ディスク)
-  ストレージユニットグループ
-  ストレージライフサイクルポリシー

メモ: [スケジュールの属性 (Schedule Attributes)] タブ 上の [ポリシーストレージの選択を上書きする (Override policy storage)] オプションで別のストレージを選択すると、その選択内容によって [ポリシーストレージ (Policy storage)] の属性が上書きされます。

p.781 の「[ポリシーストレージの選択を上書きする (Override policy storage selection)] (スケジュール属性)」を参照してください。

p.696 の「ポリシーストレージの宛先選択の注意事項」を参照してください。

ポリシーストレージの宛先選択の注意事項

ポリシーの[属性 (Attributes)] タブの[ポリシーストレージ (Policy storage)] リストから宛先を選択する前に次のシナリオを考慮します。

表 20-6

シナリオ	処理
サイトにストレージユニットが 1 つ存在する、または特定のストレージユニットを指定する必要がない。	次のいずれかを実行します。 ■ [ポリシーストレージ (Policy storage)] 属性に[任意 (Any_available)]を指定します。 ■ スケジュールではストレージユニットを指定しないでください。 p.781 の「[ポリシーストレージの選択を上書きする (Override policy storage selection)](スケジュール属性)」を参照してください。 ■ すべてのストレージユニットを[オンデマンドのみ (On demand only)]に設定しないでください。NetBackup バックアップに利用可能なストレージユニットが検出されない場合があります。 p.569 の「ストレージユニットの設定の編集」を参照してください。 p.588 の「[オンデマンドのみ (On demand only)]ストレージユニット設定」を参照してください。
特定のストレージユニットが指定されているが、そのユニットが利用不能である。	そのユニットを必要とするポリシーおよびスケジュールでバックアップを実行できないため、[任意 (Any Available)]に宛先を変更することを検討します。
[任意 (Any Available)]が選択されている。	ストレージグループに割り当てられていないすべてのベーシックディスクストレージユニットは、ディスクスパンに利用可能と見なされます。 p.126 の「[メディア (Media)]プロパティ」を参照してください。

シナリオ	処理
ポリシーで利用可能なストレージユニットを制限する。	次のいずれかを実行します。 ■ ポリシーで使用するユニットのみを含んでいるストレージユニットグループを選択します。 ■ 次をすることによってストレージユニットを制限します。 ■ 特定のストレージユニットだけが利用可能なボリュームを含むボリュームプールを作成します。ボリュームプールで[スクラッチプールにする (Scratch pool)]を無効にします。[スクラッチプールにする (Scratch pool)]を有効にすると、すべてのストレージユニットがそのボリュームプールのボリュームにアクセスできるようになります。 p.538 の「ボリュームプールの追加」を参照してください。 p.538 の「ボリュームプールの編集または削除」を参照してください。 p.478 の「スクラッチボリュームプールについて」を参照してください。 ■ 目的のポリシーで、[ポリシーボリュームプール (Policy volume pool)]を、前の手順で定義したボリュームプールに設定します。 ■ すべてのポリシーで、[ポリシーストレージ (Policy storage)]属性を[任意 (Any_available)]に設定します。 ■ ポリシーがストレージユニットグループを指定している場合、ポリシーの要件を満たすために[オンデマンドのみ (On demand only)]にグループ内のストレージユニットを設定します。 p.569 の「ストレージユニットの設定の編集」を参照してください。 p.588 の「[オンデマンドのみ (On demand only)]ストレージユニット設定」を参照してください。

[ポリシーボリュームプール (Policy volume pool)] (ポリシー属性)

[ポリシーボリュームプール (Policy volume pool)]属性は、ポリシーのバックアップを格納するデフォルトのボリュームプールを指定します。ボリュームプールは、1 つのアプリケーションで使用するためにグループ化されたメディアのセットです。ボリュームプールは、他のアプリケーションおよびユーザーによるアクセスから保護されます。

利用可能なボリュームプールはリストに表示されます。新しいボリュームが必要になると、指定されたボリュームプールから新しいボリュームが割り当てられます。

[スケジュール (Schedule)]タブでボリュームプールを選択すれば、その選択によって[属性 (Attributes)]タブの[ポリシーボリュームプール (Policy volume pool)]の選択が上書きされます。

p.781 の「[\[ポリシーストレージの選択を上書きする \(Override policy storage selection\)\] \(スケジュール属性\)](#)」を参照してください。

p.699 の「[ポリシーボリュームプールを上書きする例](#)」を参照してください。

次の表は NetBackup が定義するデフォルトのボリュームプールを記述したものです。

表 20-7 NetBackup によって定義済みのデフォルトのボリュームプール

ボリュームプール	説明
なし	NetBackup 以外のアプリケーションのデフォルトのプール。
DataStore	DataStore のデフォルトのプールです。
NetBackup	ポリシーで別の名前を指定しないかぎり、すべてのバックアップで NetBackup プールのメディアが使用されます。1 つの例外は NBU-Catalog ポリシー形式です。
CatalogBackup	このプールは、NBU-Catalog ポリシー形式の場合にデフォルトで選択されます。このプールは、カタログバックアップ専用です。カタログを 1 つの専用プールに書き出すと、カタログのリストア時間が短縮されます。

次の表は、作成すると便利な追加のボリュームプールを記述したものです。

表 20-8 追加のボリュームプール

ボリュームプール	説明
Scratch ボリュームプール	別のボリュームプールに利用可能なメディアがないときに、NetBackup によって自動的にボリュームを転送させることができます。
Auto ボリュームプール	自動バックアップで使われます。
User ボリュームプール	ユーザーバックアップで使われます。

Media Manager ストレージデバイスの場合、メディアはボリュームプールに割り当てられます。ディスク形式のストレージデバイスは、ボリュームプールに割り当てられません。

p.476 の「[NetBackup ボリュームプールについて](#)」を参照してください。

p.538 の「[ボリュームプールの追加](#)」を参照してください。

p.538 の「[ボリュームプールの編集または削除](#)」を参照してください。

p.478 の「[スクラッチボリュームプールについて](#)」を参照してください。

ポリシーボリュームプールを上書きする例

次の例にポリシーの[スケジュール (Schedule)]タブからポリシーボリュームプールを上書きする方法を示します。この例では、**Backup-Archive** という名前のポリシーを変更します。今まではポリシーのすべてのスケジュールで **Backups** ボリュームプールを使用していました。ユーザーアーカイブスケジュールが **Archive** プールを代わりに使うようにポリシーを変更します。

[ポリシーボリュームプール (Policy volume pool)]属性を上書きする方法

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (Management)]>[ポリシー (Policies)]を展開します。
- 2 左ペインで、**Backup-Archive** ポリシーを選択し、[編集 (Edit)]メニューの[変更 (Change)]をクリックします。
- 3 ポリシーの[属性 (Attributes)]タブの[ポリシーボリュームプール (Policy volume pool)]リストで、**Backups** を選択します。
- 4 [スケジュール (Schedules)]タブをクリックします。
- 5 **Backups** ボリュームプールを使うスケジュールを選択し、[プロパティ (Properties)]をクリックします。
- 6 [ポリシーボリュームプールを上書きする (Override policy volume pool)]のチェックマークがはずされていることを確認し、スケジュールの変更を保存するために[OK]をクリックします。
- 7 **Archive** ボリュームプールに割り当てるユーザーアーカイブスケジュールを選択し、[プロパティ (Properties)]をクリックします。
- 8 [ポリシーボリュームプールを上書きする (Override policy volume pool)]にチェックマークを付けます。
- 9 チェックボックスの下からのリストから **Archive** を選択します。
- 10 [OK]をクリックして、スケジュールの変更を保存します。
- 11 [OK]をクリックして、ポリシーの変更を保存します。

[チェックポイントの間隔 (分) (Take checkpoints every __ minutes)] (ポリシー属性)

バックアップの間にチェックポイントを設定することによって、バックアップが失敗した場合に時間を節約できます。バックアップ中にチェックポイントを定期的に設定すると、**NetBackup** は失敗したバックアップを最後のチェックポイントの先頭から再開できます。この処理は、多くの場合、ジョブ全体を再開するよりも早く完了します。

チェックポイントの間隔とは、バックアップ時に **NetBackup** によってチェックポイントが作成される間隔を示します。デフォルトは 15 分です。管理者は、チェックポイントの間隔をポリシーごとに判断します。チェックポイントの間隔を選択する場合は、失敗したバックアップが再開するときに発生する可能性のある時間損失と、高頻度のチェックポイントによるパフォーマンス低下とのバランスを考慮します。設定したチェックポイントの間隔によってパフォーマンスに影響がある場合は、次のチェックポイントまでの時間を長くします。

チェックポイントはファイルとファイルの間の境界で保存され、リスト内の次のファイルを指します。「チェックポイントから再開」機能は **MS-Windows**、**NAS-Data-Protection**、または **Standard** ポリシー形式でのみ利用可能です。「チェックポイントから再開」機能を有効

にするには、[チェックポイントの間隔 (分) (Take checkpoints every __ minutes)]にチェックマークを付けます。ボックスにチェックマークを付けると、NetBackup は指定された頻度でバックアップジョブの間にチェックポイントを設定します。ボックスのチェックマークを外すと、チェックポイントは設定されず、失敗したバックアップはジョブの始めから再開されます。「チェックポイントから再開」機能はリストアジョブにも使うことができます。

p.703 の「リストアジョブでの「チェックポイントから再開」機能」を参照してください。

[グローバル属性 (Global Attributes)]プロパティの[スケジュールバックアップの試行回数 (Schedule backup attempts)]は、失敗したバックアップの再開が NetBackup によって試行される回数を示します。

p.115 の「[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ」を参照してください。

メモ: チェックポイントはファイルとファイルの間の境界で保存され、バックアップされる、リスト内の次のファイルを指します。チェックポイントはファイルの途中で設定されることはありません。ファイルのバックアップ後、チェックポイントは保存されます。

メモ: チェックポイントは、ユーザーアーカイブバックアップでは設定されません。ユーザーアーカイブバックアップが再開される場合は、最初から再開されます。

以下の場合、NetBackup は未完了のジョブを再開する代わりに新しいジョブを開始します。

- 新しいジョブを実行する予定がある場合。または、カレンダーを基準としたスケジュールで別の実行日になった場合。
- 最後の未完了のバックアップ以降に経過した時間が、そのポリシーに含まれるいずれかのスケジュールの最短間隔よりも長い場合。
- [クリーンアップ (Clean-up)]プロパティの[バックアップジョブを未完了状態から完了状態に変更する (Move backup job from incomplete state to done state)]で指定された時間が経過した場合。

次の表は「チェックポイントから再開」機能の、各種ポリシー属性、ストレージおよびクライアントのサポートレベルを記述したものです。リストにないエージェントまたはオプションについては、そのエージェントまたはオプションのマニュアルを参照してください。

表 20-9 「チェックポイントから再開」機能のサポート

項目	説明
ベーシックディスクステージング	「チェックポイントから再開」機能は第 1 段階でサポートされます。「チェックポイントから再開」機能は第 2 段階ではサポートされません。 p.598 の「ベーシックディスクステージングについて」を参照してください。 p.597 の「ステージングバックアップについて」を参照してください。

項目	説明
MS-Windows (ポリシー形式)	次は Windows クライアントに関係します。 ■ 「チェックポイントから再開」機能は UNC パスがあるバックアップ対象ではサポートされません。 ■ システム状態のバックアップ中にチェックポイントは設定されません。 ■ Windows ディスクイメージ (raw) のバックアップ中にチェックポイントは設定されません。 ■ NetBackup によって単一インスタンスストア (SIS) が検出されると、残りのバックアップではチェックポイントが設定されません。 増分バックアップが再開され、正常に完了した場合、ジョブの再開後にバックアップされたファイルのアーカイブビットは消去されます。ただし、再開前にバックアップされたファイルのアーカイブビットは消去されません。アーカイブビットが残るため、バックアップ再開前にバックアップされたファイルは、次の増分バックアップで再度バックアップされます。
[コピーを複数作成する (Multiple copies)](スケジュール属性)	「チェックポイントから再開」機能は、複数のバックアップコピーを作成するように構成されているポリシーで使用できます。 p.776 の「複数のコピー (スケジュール属性)」を参照してください。 チェックポイントが設定されている最後に失敗したコピーは再開できます。コピーが失敗した後でチェックポイントが発生したときに、他のコピーでジョブを続行するように、別のコピーを構成する必要があります。
Snapshot Client (ポリシー属性)	「チェックポイントから再開」機能は、ローカルバックアップまたは代替クライアントによるバックアップと併用できます。ただし、次のポリシー属性はサポートされません。 ■ ブロックレベルの増分バックアップ ■ インスタントリカバリバックアップ p.756 の「[Snapshot Client]および[Replication Director](ポリシー属性)」を参照してください。
Standard (ポリシー形式)	「チェックポイントから再開」機能は UNIX クライアントでサポートされます。
合成バックアップ (スケジュール属性)	「チェックポイントから再開」機能はサポートされません。 p.770 の「[合成バックアップする (Synthetic backup)](スケジュール属性)」を参照してください。

項目	説明
NAS-Data-Protection (ポリシー形式)	「チェックポイントから再開」動作は、ボリュームレベルで適用できます。ボリュームのバックアップジョブを一時停止または再開できます。ポリシーに対して構成されているチェックポイントの間隔は、子バックアップジョブがボリュームの内容のバックアップを開始するときに適用されます。 1 手動によるジョブの一時停止および再開: スナップショットジョブ (親ジョブまたは子ジョブ)からのバックアップを一時停止すると、そのボリュームのジョブ階層全体が一時的に停止状態になります。 スナップショットジョブ (親ジョブまたは子ジョブ) からのバックアップを再開すると、そのボリュームのジョブ階層全体が有効状態になります。 2 未完了状態: スナップショットジョブからの子バックアップが何らかの理由で失敗した場合、そのボリュームのジョブ階層全体が未完了状態になります。失敗状態を修正した後、未完了のバックアップジョブを再開できます。スナップショットジョブ (親ジョブまたは子ジョブ) からいずれかのバックアップを再開すると、そのボリュームのジョブ階層全体が有効状態になります。 NAS-Data-Protection ポリシーについて詳しくは、『NetBackup NAS 管理者ガイド』を参照してください。

リストアジョブでの「チェックポイントから再開」機能

リストアジョブの「チェックポイントから再開」機能は **NetBackup** に失敗したリストアジョブを再開させることによって時間を節約します。ジョブは、リストアジョブ全体の先頭から開始するのではなく、最後にチェックポイントが設定されたファイルの先頭から自動的に再開されます。**NetBackup** チェックポイントは、リストアジョブの実行中、1 分間に 1 回自動的に設定されます。

次のホストプロパティはリストアジョブの「チェックポイントから再開」機能に影響します。

リストアジョブを未完了状態から完了状態に変更する (Move restore job from incomplete state to done state)	[クリーンアップ (Clean-up)]ホストプロパティは、失敗したリストアジョブを未完了の状態として保持できる日数を示します。 p.64 の「[クリーンアップ (Clean up)]プロパティ」を参照してください。
リストアの再試行回数 (Restore retries)	この[ユニバーサル設定 (Universal Setting)]ホストプロパティで、クライアントがエラーの後でリストアする試行回数を指定します。 p.189 の「[ユニバーサル設定 (Universal settings)]プロパティ」を参照してください。

リストアジョブの「チェックポイントから再開」機能に次の制限事項があります。

- リストアは、ファイルの途中からではなく、最後にチェックポイントが設定されたファイルの先頭から再開されます。
- **MS-Windows** か標準 (Standard) のポリシー形式を使用して作成されるバックアップのみサポートされます。
- 標準 (Standard) ポリシー形式を使用したサードパーティコピーおよびメディアサーバーコピーのイメージはサポートされています。ただし、バックアップイメージのブロックが変更された場合は、そのイメージを一時停止したり、再開することはできません。

NetBackup 管理者は、チェックポイントが設定されたリストアジョブを一時停止し、後でそのジョブを再開することもできます。たとえば、リストアジョブが開始されて数時間後に、管理者が 2 番目のリストア要求を受け取ったとします。この要求は優先度がより高く、1 番目のジョブで使用中的のリソースを必要とします。このとき、管理者は、1 番目のジョブを一時停止して 2 番目のリストアジョブを開始し、2 番目のジョブを先に完了させることができます。管理者はその後、アクティビティモニターから 1 番目のジョブを再開し、完了できます。

チェックポイントが設定された、終了日がないリストアが中断され、再開される状況を考慮してください。再開が開始される前に新しいバックアップが実行される場合、新しいバックアップからのファイルはリストアに含まれます。たとえば、ユーザーがディレクトリのリストアを要求します。リストアは始まりますが、中断されます。ディレクトリの別のバックアップが実行された後、リストア要求が翌日に再開されたとします。このとき、ファイルは最新のバックアップからリストアされます。

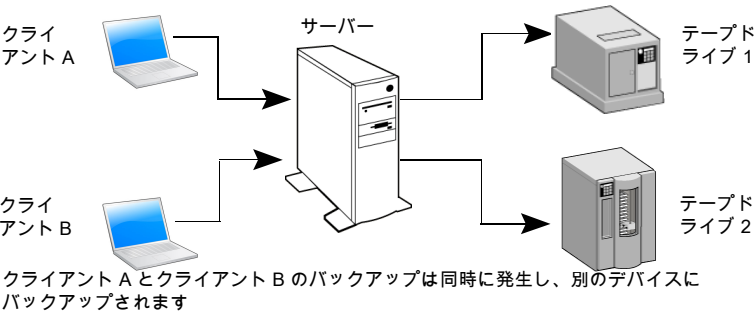
p.700 の「[\[チェックポイントの間隔 \(分\) \(Take checkpoints every __ minutes\)\]](#)」(ポリシー属性)を参照してください。

[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)](ポリシー属性)

[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)]属性は、ポリシーの実行時に **NetBackup** によって並列して実行されるジョブの数を制限します。デフォルトでは、このチェックボックスのチェックははずされており、**NetBackup** が同時に実行するバックアップジョブの数に制限はありません。ジョブ数は、他のリソース設定によって制限される場合があります。

構成内に含まれるデバイス数が多い場合、パフォーマンスに悪影響を及ぼすほど多くの並列実行バックアップが実行される可能性があります。それより低い上限を指定するには、このチェックボックスをチェックして、1 から 999 の値を指定します。

図 20-3 [ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)]属性



この属性は、ポリシーが仮想マシンをどのように選択するかによって、異なる方式で VMware のポリシーのために動作します。

詳しくは、『[NetBackup for VMware 管理者ガイド](#)』を参照してください。

表 20-10 は NetBackup が実行できる並列実行バックアップジョブの数に影響する要因を記述します。

表 20-10 並列実行バックアップジョブの数に影響する要因

項目	説明
異なるポリシーからのジョブ	ジョブのポリシーが異なる場合、限度は並列実行ジョブに適用されません。 たとえば、3 つのポリシーで並列実行ジョブが 2 つに制限されている場合、NetBackup はポリシーごとに 2 つのジョブを開始できます。この場合、一度に合計 6 つのジョブが実行される可能性があります。
多重化	多重化を使用する場合、制限に、所定の多重化レベルに対して十分な値を設定します。 この値が低いと、ポリシー内に異なるスケジュールによるジョブが存在する場合、そのポリシー内の多重化が制限される可能性があります。たとえば、制限が 2 に設定され、増分バックアップスケジュールが 4 つのクライアントに対して実行される予定であるとしします。この場合、多重化の設定に関係なく、一度に 2 つのクライアントだけがバックアップされます。
ネットワークの負荷	並列して実行可能なバックアップの数は、利用可能なネットワーク帯域幅によって異なります。負荷に関する問題が発生した場合、複数のネットワークによるバックアップを検討してください。または、バックアップポリシーで[圧縮 (Compression)]属性を使用するように構成します。 p.715 の「[圧縮 (Compression)](ポリシー属性)」 を参照してください。 バックアップされるクライアントがサーバーも兼ねている場合は例外です。この場合、ネットワークを使用しないため、ネットワークの負荷を考慮する必要はありません。ただし、クライアントおよびサーバーの負荷は考慮する必要があります。

項目	説明
利用可能なストレージデバイスの数および多重化の制限	一度に複数のバックアップジョブを処理するには、構成に次のいずれかが含まれている必要があります。 ■ 複数のストレージユニット ■ 一度に複数のバックアップが実行可能な十分な数のドライブを持つ 1 つのストレージユニット ■ 多重化用に構成されているストレージユニット テープドライブなどのリムーバブルメディアデバイスでは、並列実行ジョブの数は、ストレージユニット内のデバイスの合計数によって異なります。ディスクストレージでは、ストレージデバイスはファイルパスとして定義され、利用可能なパスの数は利用可能なディスク領域によって異なります。
親ジョブと子ジョブ	親ジョブ数は制限されません。子ジョブ数のみ制限されます。 以下は、親ジョブおよび子供ジョブを生成するジョブの例です。 ■ 複数ストリームのジョブ ■ カタログバックアップ ■ Snapshot Client スナップショット ■ Bare Metal Restore ジョブ p.1050 の「[ジョブ (Jobs)]タブについて」を参照してください。 この属性は、ポリシーが仮想マシンをどのように選択するかによって、異なる方式で VMware のポリシーのために動作します。 詳しくは、『NetBackup for VMware 管理者ガイド』を参照してください。
サーバーの速度	並列実行バックアップの数が多すぎると、サーバーのパフォーマンスが低下します。最適な並列実行バックアップ数は、ハードウェア、オペレーティングシステムおよび実行中のアプリケーションによって異なります。

[ジョブの優先度 (Job priority)](ポリシー属性)

[ジョブの優先度 (Job priority)]属性には、他のポリシーとの間でリソースが競合した場合の、ポリシーの優先度を指定します。0 から 99999 までの値を入力します。数値が大きいほど、ジョブの優先度が高くなります。NetBackup は、最も優先度が高いポリシーに最初の利用可能なリソースを割り当てます。

[デフォルトのジョブの優先度 (Default Job Priorities)]ホストプロパティでは、ジョブ形式でジョブの優先度のデフォルトを設定できます。

p.90 の「[\[デフォルトのジョブの優先度 \(Default job priorities\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

[メディア所有者 (Media Owner)](ポリシー属性)

[メディア所有者 (Media Owner)]属性は、そのポリシーのバックアップイメージが書き込まれるメディアを所有するメディアサーバーまたはサーバーグループを指定します。

この属性は、次の条件を満たしている場合にアクティブです。

- **Media Manager** ストレージユニットが使われている。
- [ポリシーストレージ (Policy storage)]属性が[任意 (Any Available)]に設定されている。

[メディア所有者 (Media Owner)]には、次の値を指定できます。

[任意 (Any)](デフォルト) **NetBackup** によってメディア所有者が選択されます。**NetBackup** によって、メディアサーバーまたはサーバーグループ (構成されている場合) が選択されます。

なし (None) メディアにイメージを書き込むメディアサーバーをそのメディアの所有者として指定します。メディアサーバーを明示的に指定しなくても、メディアサーバーがメディアを所有するように設定されます。

サーバーグループ (Server group) このポリシーのバックアップイメージの書き込み先メディアに対して書き込みできるのが、グループ内のサーバーのみになります。構成されているすべてのサーバーグループがリストに表示されます。

p.542 の「[メディア共有について](#)」を参照してください。

p.385 の「[サーバーグループの追加](#)」を参照してください。

[開始日時の設定 (Go into effect at)](ポリシー属性)

[開始日時の設定 (Go into effect at)]属性では、バックアップのスケジュールをこのポリシーによって開始できる日時を指定します。たとえば、今日が月曜日であり、水曜日の午前 0 時を指定した場合、ポリシーはその日時になるまで実行されません。この属性を使用すると、一連のポリシーを有効にする前にそれらのポリシーを構成できます。

ポリシーを有効にするには、[開始日時の設定 (Go into effect at)]にチェックマークを付けます。**NetBackup** でポリシーを使うには、そのポリシーを有効にしておく必要があります。

ポリシーを無効にするには、チェックボックスのチェックを外します。無効なポリシーは、**NetBackup** [管理コンソール] で使用できなくなります。無効なポリシーは、**NetBackup** [管理コンソール] の左ペインにあるポリシーのリストに残ります。バックアップを再開するには、ボックスを再度チェックします。日時が、バックアップを再開する日時に設定されていることを確認します。

スケジュールをカタログアーカイブに使用する場合は、ポリシーが無効である必要があります。ポリシーを無効にするにはチェックボックスのチェックを外します。

p.921 の「[カタログアーカイブポリシーの作成](#)」を参照してください。

[NFS をたどる (Follow NFS)](ポリシー属性)

[NFS をたどる (Follow NFS)](ネットワークファイルシステム) 属性は、NFS マウントされたファイルを NetBackup がバックアップまたはアーカイブするかどうかを指定します。これらのファイルは、ユーザーバックアップかアーカイブの場合に、バックアップ対象リストで指定されるか、ユーザーによって指定されます。このチェックボックスのチェックを外すと、NFS マウントされたファイルのバックアップやアーカイブが行われません。

メモ: この属性は、特定のポリシー形式に含まれる UNIX クライアントだけに適用されます。NetBackup では、該当するポリシーが選択された場合のみ、この属性を選択できます。

この属性を選択すると、ファイルが存在するシステムの場所を確認し、そのシステムにログオンする必要がなくなります。ファイルが NetBackup クライアントにマウントされている場合、その NetBackup クライアントからファイルのバックアップ、アーカイブ、リストア操作を行うことができます。NFS マウントに対する必要な権限を所有している必要があります。この機能を使うと、NetBackup クライアントソフトウェアによってサポートされていないシステムをバックアップできます。

原則として、NetBackup クライアントのバックアップは NFS を介して行わないでください。ファイルは、ファイルが物理的に存在する NFS サーバー上でバックアップおよびアーカイブを行うようにします。NFS バックアップを行うと、パフォーマンスが低下し、問題が発生する場合もあります。[NFS をたどる (Follow NFS)]を選択する場合、NFS を介したバックアップまたはアーカイブ対象のファイルおよびクライアントだけに、そのポリシーを使用することもできます。

メモ: [NFS をたどる (Follow NFS)]を選択していない場合、バックアップ処理では、クライアントのマウントテーブルを読み込み、テーブル内の各項目を検証します。すべてのリンクは、NetBackup によって実際のパスに解決されます。リンクの解決は、NFS マウントされたファイルシステムに存在するファイルのバックアップを NetBackup が正しく回避できるようにするために必要です。

NetBackup は、マウントテーブルを検証するときに NFS (Network File System) にアクセスできなかった場合、そのファイルシステムを利用できないと見なします。(ファイルシステムにアクセスするデフォルトの時間は 5 秒です)。デフォルトを変更するには、UNIX プライマリサーバーのホストプロパティ `NFS_ACCESS_TIMEOUT` を `usr/openv/netbackup/bp.conf` ファイル内で変更します。

メモ: [NFS をたどる (Follow NFS)]と[クロスマウントポイント (Cross mount points)]が有効な場合でも、マッピングされたディレクトリは、NetBackup によって除外されます。マッピングされたディレクトリをバックアップするには、そのディレクトリをファイルリストに含めます。

この属性を有効にする前に次を考慮します。

表 20-11 [NFS をたどる (Follow NFS)]に影響する問題

項目	説明
[クロスマウントポイント (Cross mount points)](ポリシー属性)	[NFS をたどる (Follow NFS)]の動作は、[クロスマウントポイント (Cross mount points)]と組み合わせるとどのように使われるかによって変わることがあります。 p.714 の「[クロスマウントポイント (Cross mount points)]と[NFS をたどる (Follow NFS)]を組み合わせる例」を参照してください。 p.712 の「[クロスマウントポイント (Cross mount points)] (ポリシー属性)」を参照してください。
raw パーティション	この属性は raw パーティションに影響をもたらしません。raw パーティションにマウントした NFS (Network File Systems) はバックアップされません。また、NFS マウントを使用して他のコンピュータから raw パーティションにアクセスし、それらの raw パーティションのバックアップを行うことはできません。他のコンピュータ上では、NFS を介してそれらのデバイスにアクセスできません。 メモ: NetBackup では、フォーマットされていないパーティションでの raw パーティションのバックアップはサポートされていません。
自動マウントされるディレクトリ	この属性によって、自動マウントファイルシステム内のファイルがバックアップされます。自動マウントしたディレクトリをエクスクルードして他の NFS マウントのバックアップを実行できます。これを行うには、オートマウンタのマウントディレクトリのエントリをクライアントのエクスクルードリストに追加します。

[ネットワークドライブのバックアップ (Backup network drives)](ポリシー属性)

[ネットワークドライブのバックアップ (Backup Network Drives)]属性は、シングルユーザーシステムの Windows 95、Windows 98、Windows ME で使うための属性です。これらのオペレーティングシステムは、今回のバージョンの NetBackup でサポートされていません。NetBackup クライアント以外のコンピュータの場合、データをバックアップするには、UNC パスを使うことをお勧めします。UNC パスを使用すると、より正確にバックアップを実行できます。

[ネットワークドライブのバックアップ (Backup Network Drives)]または UNC パスを使う場合、ネットワークドライブは、NetBackup Client Service がスタートアップ時にログオンするサービスアカウントで利用可能である必要があります。デフォルトでは、スタートアップ

ブアカウントは **System** に設定されます。別のコンピュータと共有しているデータのバックアップを行う各 **Windows** クライアント上で、このアカウントを変更する必要があります。

この属性は **CD-ROM** ドライブにバックアップするポリシーの場合は有効にする必要があります。スケジュールバックアップでは、ファイルリストで、少なくともバックアップ対象となるフォルダの最上位階層を指定する必要があります。たとえば、D:¥とだけ指定するのではなく、D:¥Folder1 と指定します。

メモ: マッピングされたドライブ文字のバックアップは実行できません。バックアップを参照しても、バックアップ、アーカイブおよびリストアコンソールにドライブ文字は表示されません。

UNC パスの使用による共有フォルダのバックアップ例

次の例は **UNC** パスを使用して共有フォルダをバックアップするための手順を示したものです。この手順では、*win_client* 経由で *win_PC* 上の *TestData* フォルダをバックアップします。例を確認する前に次の説明を参照してください。

- primary1*NetBackup プライマリサーバー
- win_client*Windows NetBackup クライアント
- win_PC*Windows コンピュータ (必ずしも NetBackup クライアントではない)
- TestData**win_PC* 上の共有フォルダ

表 20-12UNC パスの使用による win_PC 上の共有フォルダのバックアップ

手順	処理	説明
手順 1	ポリシーを作成します。	<i>primary1</i> で <i>win_client</i> のポリシーを作成します。
手順 2	ポリシーにフォルダ名を追加します。	ポリシーのファイルリストに ¥¥win_PC¥TestData を追加します。この手順は、ポリシーをユーザー主導バックアップだけに使用する場合は不要です。
手順 3	NetBackup Client Service を構成します。	次の処理を実行します。 ■ <i>win_client</i> の NetBackup Client Service で[スタートアップ]または[ログオン]を選択し、バックアップを実行するユーザーと同じアカウントを指定します。このユーザーアカウントは、バックアップされる共有フォルダに対する読み込み権限を所有している必要があります。また、リストアを行うには、アカウントに書き込み権限が必要です。 ■ NetBackup Client Service を停止し、再度開始して、新しいアカウントを有効にします。 p.1094 の「NetBackup Client Service の構成」を参照してください。

手順	処理	説明
手順 4	バックアップを実行します。	スケジュールに従ってバックアップが実行されます。または、手動バックアップを実行します。 p.867 の「 手動バックアップの実行 」を参照してください。

[ネットワークドライブのバックアップ (Backup Network Drives)] (ポリシー属性) の使用による共有フォルダのバックアップ例

次の例は[ネットワークドライブのバックアップ (Backup Network Drives)]ポリシー属性を使用して共有フォルダをバックアップするための手順を示したものです。この手順では、*win_client* 経由で *win_PC* 上の *share* フォルダをバックアップします。例を確認する前に次の説明を参照してください。

<i>primary1</i>	NetBackup プライマリサーバー
<i>win_client</i>	Windows NetBackup クライアント
<i>win_PC</i>	Windows コンピュータ (必ずしも NetBackup クライアントではない)
<i>share</i>	<i>win_PC</i> 上の共有フォルダ

表 20-13 [ネットワークドライブのバックアップ (Backup Network Drives)]の
使用による *win_PC* 上の共有フォルダのバックアップ

手順	処理	説明
手順 1	ポリシーを作成します。	<i>primary1</i> で <i>win_client</i> のポリシーを作成し、ポリシーの[属性 (Attributes)]タブで[ネットワークドライブのバックアップ (Backup Network Drives)]にチェックマークを付けます。
手順 2	NetBackup Client Service を構成します。	次の処理を実行します。 ■ <i>win_client</i> の NetBackup Client Service で[スタートアップ]または[ログオン]を選択し、バックアップを実行するユーザーと同じアカウントを指定します。このユーザーアカウントは、バックアップされる共有フォルダに対する読み込み権限を所有している必要があります。また、リストアを行うには、アカウントに書き込み権限が必要です。 ■ NetBackup Client Service を停止し、再度開始して、新しいアカウントを有効にします。 p.1094 の「 NetBackup Client Service の構成 」を参照してください。

手順	処理	説明
手順 3	パッチファイルを作成します。	次を実行するパッチファイル <code>bpstart_notify.bat</code> を作成します。 ■ <code>%%win_PC%share</code> に <code>%win_PC%share</code> のドライブをマッピングします。 ■ 次のコマンドを含めます (ここで、X: はマッピングされるドライブ文字です)。<pre>net use X: %win_PC%share</pre>
手順 4	バックアップを実行します。	スケジュールに従ってバックアップが実行されます。または、手動バックアップを実行します。 p.867 の「 手動バックアップの実行 」を参照してください。

[クロスマウントポイント (Cross mount points)] (ポリシー属性)

[クロスマウントポイント (Cross mount points)]属性は、選択したパスのすべてのファイルとディレクトリをバックアップまたはアーカイブするために **NetBackup** がファイルシステムの境界を越えるかどうかを制御します。たとえば、UNIX システム上でルート (/) をファイルパスとして指定した場合、ルート (/) とツリー内でルートの下に存在するすべてのファイルとディレクトリのバックアップが行われます。**/NetBackup/**

この属性が無効になっている場合、選択したファイルパスと同じファイルシステムにあるファイルのみがバックアップされます。また、無効にすると、**NetBackup** がマウントポイントを越えず、ルートにマウントされているすべてのファイルシステムをバックアップせずに、ルート (/) をバックアップできます。(たとえば、と。) `/usr/home`

場合によっては、マウントポイントを越えるバックアップと越えないバックアップのポリシーを個別に作成することを検討してください。たとえば、あるポリシーで、[クロスマウントポイント (Cross mount points)]を無効にし、バックアップ対象リストにルート (`root (/)`)を含めます。その結果、ルートファイルシステムだけがバックアップされ、ルートにマウントされているファイルシステムはバックアップされません。別のポリシーで、[クロスマウントポイント (Cross mount points)]を有効にし、バックアップ対象リストにルート (`root (/)`)を含めます。その結果、クライアントのすべてのデータがバックアップされます。

メモ: [NFS をたどる (Follow NFS)]と[クロスマウントポイント (Cross mount points)]が有効な場合でも、マッピングされたディレクトリは、**NetBackup** によって除外されます。マッピングされたディレクトリをバックアップするには、そのディレクトリをファイルリストに含めます。

次の表はこのポリシー属性を使うときに考慮する項目をリストしたものです。

表 20-14 [クロスマウントポイント (Cross mount points)](ポリシー属性) についての考慮事項

項目	説明
[NFS をたどる (Follow NFS)] (ポリシー属性)	[クロスマウントポイント (Cross mount points)]の動作は、[NFS をたどる (Follow NFS)]と組み合わせてどのように使われるかによって変わることがあります。 p.714 の「[クロスマウントポイント (Cross mount points)]と[NFS をたどる (Follow NFS)]を組み合わせて使用する例」を参照してください。 p.708 の「[NFS をたどる (Follow NFS)](ポリシー属性)」を参照してください。
バックアップ対象のエントリ	次のバックアップ対象のエントリは、[クロスマウントポイント (Cross mount points)]属性が使われる場合、Windows コンピュータと UNIX コンピュータで次のように動作します。 ■ / UNIX クライアントの場合に有効です。Windows クライアントの場合、スラッシュで ALL_LOCAL_DRIVES が展開されます。 ■ :¥ Windows クライアントの場合に有効です。UNIX クライアントの場合、このエントリは状態 69 ([ファイルリストの指定が無効です (invalid filelist specification)])を作成します。 ■ *:¥ Windows クライアントの場合に有効です。UNIX クライアントの場合、このエントリは状態 69 ([ファイルリストの指定が無効です (invalid filelist specification)])を作成します。
UNIX raw パーティション	この属性は UNIX の raw パーティションに影響をもたらしません。raw パーティションがルートパーティションであり、他のファイルシステムへのマウントポイントを含んでいる場合、[クロスマウントポイント (Cross mount points)]属性を有効にすると、他のファイルシステムのバックアップは実行されません。
ALL_LOCAL_DRIVES 指示句	バックアップ対象リストで 指示句を使う UNIX コンピュータのポリシーでは、[クロスマウントポイント (Cross mount points)]を使わないでください。ALL_LOCAL_DRIVES [クロスマウントポイント (Cross mount points)]を有効にすると、マウントされたボリュームの複数のバックアップが発生することがあります。 ファイルシステムの境界を越えたバックアップを必要とする場合は、UNIX クライアントで ALL_LOCAL_DRIVES バックアップ対象指示句を使用しないでください。代わりに、ポリシーバックアップ対象リスト内でスラッシュ (/) を指定し、ポリシーの[属性 (Attributes)]で[クロスマウントポイント (Cross mount points)]が選択されていることを確認します。
ディスクストレージへのマウントポイント	バックアップイメージが含まれるディスクストレージへのマウントポイントを使用するメディアサーバーをバックアップするには、マウントポイントを越えないように設定します。マウントポイントを越えるようにポリシーを設定すると、そのディスクストレージ上に存在する NetBackup のバックアップイメージがバックアップされます。NetBackup ディスクストレージユニット形式は、ディスクストレージのマウントポイントを使用します。

[クロスマウントポイント (Cross mount points)]と[NFS をたどる (Follow NFS)]を組み合わせて使用する例

[クロスマウントポイント (Cross mount points)]と[NFS をたどる (Follow NFS)]を組み合わせて使うことによって、さまざまな結果が得られます。表 20-15 は可能な結果の概略を示します。

表 20-15 [クロスマウントポイント (Cross mount points)]と[NFS をたどる (Follow NFS)]を組み合わせて使用した結果

クロスマウントポイント	NFS をたどる	結果
無効	無効	マウントポイントを越えません (デフォルト)。
無効	有効	ファイルパスが NFS マウント (またはその一部) である場合、その NFS ファイルのバックアップを行います。
有効	無効	ローカルマウントポイントは越えますが、NFS マウントは越えません。
有効	有効	ファイルシステムが存在する位置に関係なく、指定されたパスをマウントポイントを越えてたどり、ファイルおよびディレクトリ (NFS を含む) のバックアップを行います。

メモ: [NFS をたどる (Follow NFS)]と[クロスマウントポイント (Cross mount points)]が有効な場合でも、マッピングされたディレクトリは、NetBackup によって除外されます。マッピングされたディレクトリをバックアップするには、そのディレクトリをファイルリストに含めます。

例 1 と例 2 では図 20-4 に示すとおりクライアントディスクがパーティション化されていると想定します。

図 20-4 クライアントディスクの構成例

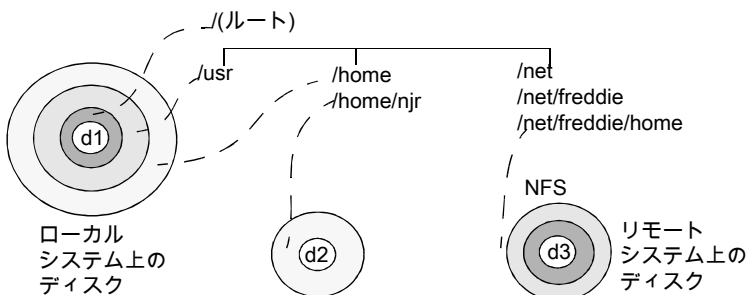


表 20-16 凡例

ディスク	説明
d1	別々のパーティションに / (ルート)、/usr および /home を含んでいます。
d2	/home/njr という名前のファイルシステムを含んでいます。d1 のパーティションである /home にマウントされています。
d3	/net/freddie に NFS マウントされた /net/freddie/home というディレクトリが存在します。

例 1:

- [クロスマウントポイント (Cross mount points)] および [NFS をたどる (Follow NFS)] を選択していません。
- バックアップ対象リストは次のエントリを含んでいます。
/usr/home
- この場合、NetBackup では、バックアップ対象リストのエントリと同じファイルシステム内に存在するディレクトリとファイルのみが操作の対象となります。/home/njr や /net/freddie/home のバックアップは行われません。

例 2:

- [クロスマウントポイント (Cross mount points)] および [NFS をたどる (Follow NFS)] を選択しています。
- バックアップ対象リストはスラッシュのみを含んでいます。
/
- この場合、と の下階層に含まれるファイルとディレクトリを含め、ツリー内のすべてのファイルとディレクトリのバックアップが実行されます。
NetBackup/home/njr/net/freddie/home

/usr の下階層および / 直下の指定された個別のファイルだけをバックアップするには、/ をバックアップ対象リストに含めず、必要なファイルおよびディレクトリを個別にリストに含めます。次に例を示します。

```
/usr
/individual_files_under_root
```

[圧縮 (Compression)](ポリシー属性)

[圧縮 (Compression)]属性は、ポリシー形式に基づいて、可能なソフトウェア圧縮をバックアップに使用するとき指定します。圧縮を有効にするにはチェックボックスをチェックします。デフォルトでは、圧縮は無効にされています。

メモ: [圧縮 (Compression)] 属性は VxFS 圧縮状態に依存しません。

p.1175 の「**VxFS ファイルシステムの圧縮ファイルのバックアップとリストアについて**」を参照してください。

圧縮によってバックアップ内のファイルのサイズが縮小されるため、そのバックアップのサイズが縮小します。バックアップのサイズが縮小することで、格納に必要なメディアの数が減少します。また、圧縮を使用すると、ネットワーク上のデータ転送量が減り、ネットワークの負荷も軽減されます。ただし、圧縮を使用すると、クライアント上の計算オーバーヘッドが増加するとともに、ファイル圧縮に要する時間のためにバックアップ時間が増加します。クライアント上での圧縮によって転送速度が低下するため、一部のテープデバイスではデータをストリームする性能が低下します。転送速度の低下によって、それらのデバイスの損耗が増大します。

圧縮にはメディアおよびネットワークリソースが節約されるという利点があるため、バックアップの合計時間やクライアントの計算リソースが問題にならないかぎり、圧縮を使用することをお勧めします。バックアップの合計時間が問題である場合、多重化を検討します。**NetBackup** の多重化機能ではクライアントのバックアップが並列して行われるため、バックアップの合計時間が短縮されます。

p.786 の「**[メディアの多重化 (Media multiplexing)] (スケジュール属性)**」を参照してください。

ファイルを圧縮可能な割合は、データの種類によって異なります。通常、1 回のバックアップには複数の種類のデータが関係します。たとえば、ストリップされたバイナリ、ストリップされていないバイナリ、**ASCII**、繰り返される一意でない文字列などがあります。より圧縮に適しているデータの種類もあります。

メモ: 圧縮を使用しない場合、クライアントに存在する領域よりもサーバーで受信するデータ量の方が多くなる場合があります。この差は、クライアントのディスクフラグメンテーションおよびクライアントで追加されるファイルヘッダーが原因です。(ファイルで使用するディスク領域を確認するには、**du** コマンドを実行します。利用可能な空きディスク領域を確認するには、**df** コマンドを実行します)。

表 20-17 は [圧縮 (Compression)] を使うように選択した場合に考慮するさまざまな要素を記述します。

表 20-17 圧縮に関する注意事項

項目	説明
圧縮率の高いデータの 種類	プログラム、 ASCII ファイルおよびストリップされていないバイナリ (通常、元のサイズの 40%)。 圧縮率の最も高いデータの種類のうち、繰り返される文字列で構成されるファイルは、元のサイズの 1% まで圧縮できる場合があります。

項目	説明																																
圧縮率の低いデータの 種類	ストリップされたバイナリ (通常、元のサイズの 60%)。 圧縮率の最も低いデータの種類の、すでに圧縮済みのファイルを再び圧縮すると、サイズがわずかに大きくなります。																																
ファイルサイズの影響	ファイルサイズは圧縮量に影響しません。ただし、 1 つの大きいファイルより多数の小さいファイルの方が圧縮に時間がかかります。																																
必要なクライアントリソース	圧縮にはクライアントの CPU 処理時間、および管理者が設定するだけのメモリ容量が必要です。																																
クライアントのパフォーマンスへの影響	圧縮には利用可能な CPU が使用されるため、 CPU を必要とする他のアプリケーションに悪影響を及ぼします。ただし、高速な CPU を使用する場合は、 CPU の処理速度ではなく I/O が制限要素となります。																																
圧縮されないファイル	NetBackup は、次のファイルを圧縮しません。 ■ 512 バイト以下のファイル (512 バイトが tar ブロックサイズであるため)。 ■ UNIX クライアントの場合、次の拡張子が付いているファイル。<table><tr><td>.arc</td><td>.gz</td><td>.iff</td><td>.sit.bin</td></tr><tr><td>.arj</td><td>.hqx</td><td>.pit</td><td>.tiff</td></tr><tr><td>.au</td><td>.hqx.bin</td><td>.pit.bin</td><td>.Y</td></tr><tr><td>.cpt</td><td>.jpeg</td><td>.scf</td><td>.zip</td></tr><tr><td>.cpt.bin</td><td>.jpg</td><td>.sea</td><td>.zom</td></tr><tr><td>.F</td><td>.lha</td><td>.sea.bin</td><td>.zoo</td></tr><tr><td>.F3B</td><td>.lzh</td><td>.sit</td><td>.z</td></tr><tr><td>.gif</td><td>.pak</td><td></td><td></td></tr></table> ■ UNIX クライアント上で、圧縮済みのファイルに固有の拡張子が付いている場合、[クライアントの設定 (Client Settings)](UNIX) プロパティでその拡張子を追加して、そのファイルを圧縮からエクスクルードします。	.arc	.gz	.iff	.sit.bin	.arj	.hqx	.pit	.tiff	.au	.hqx.bin	.pit.bin	.Y	.cpt	.jpeg	.scf	.zip	.cpt.bin	.jpg	.sea	.zom	.F	.lha	.sea.bin	.zoo	.F3B	.lzh	.sit	.z	.gif	.pak		
.arc	.gz	.iff	.sit.bin																														
.arj	.hqx	.pit	.tiff																														
.au	.hqx.bin	.pit.bin	.Y																														
.cpt	.jpeg	.scf	.zip																														
.cpt.bin	.jpg	.sea	.zom																														
.F	.lha	.sea.bin	.zoo																														
.F3B	.lzh	.sit	.z																														
.gif	.pak																																
SIS 機能を備えたストレージユニットでの使用の影響	圧縮されたデータが、単一インスタンス記憶域 (SIS) 機能を備えたストレージユニットに書き込まれる場合、そのストレージユニットでは、圧縮または暗号化されたデータに対してデータの重複排除を実行できない場合があります。データの重複排除では、ファイルの 1 つのインスタンスだけが格納されます。そのファイルの後続のインスタンスは、格納済みの単一のファイルを参照します。																																

メモ: 圧縮されたデータが、重複排除機能を備えたストレージユニットに書き込まれる場合、そのストレージユニットでは、データを重複排除できない場合があります。

[暗号化 (Encryption)](ポリシー属性)

[暗号化 (Encryption)]属性は、クライアントがバックアップを暗号化するかどうかを決定します。サーバーがバックアップを開始するときに、バックアップ要求で[暗号化 (Encryption)]ポリシー属性がクライアントに通知されます。

クライアントは、[暗号化 (Encryption)]ポリシー属性をクライアントの[暗号化 (Encryption)]ホストプロパティと比較します。クライアントの[暗号化の権限 (Encryption permissions)]が[必須 (Required)]または[許可 (Allowed)]に設定されている場合、そのポリシーで、このクライアントのバックアップを暗号化できます。

p.93 の「[暗号化 (Encryption)]プロパティ」を参照してください。

暗号化の構成について詳しくは、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

メモ: 暗号化されたデータが、重複排除機能を備えたストレージユニットに書き込まれる場合、そのストレージユニットでは、暗号化されたデータを重複排除できない場合があります。

NetBackup の暗号化オプションについて

NetBackup は、次の表で記述されているようにバックアップを暗号化する複数の方法を提供します。

表 20-18 NetBackup 暗号化オプション

オプション	説明
クライアントの暗号化	NetBackup クライアントの暗号化オプションはクライアントのデータを暗号化するソフトウェアベースのソリューションです。データは送信および格納中に暗号化されます。各クライアントは自身の暗号化キーを管理します。 クライアントの暗号化を可能にするには、バックアップポリシーの暗号化属性を選択します。 p.718 の「[暗号化 (Encryption)](ポリシー属性)」を参照してください。

オプション	説明
テープドライブの暗号化	ハードウェアベースのテープドライブの暗号化で、暗号化テープドライブがデータを暗号化します。データは格納中にのみ暗号化されます。 プライマリサーバーで構成されているキーマネージメントサービス (KMS) サーバーは、暗号化キーを管理します。NetBackup KMS (NBKMS) または外部 KMS のいずれかを指定できます。 『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』の「格納するデータのキーマネージメント」の章を参照してください。 ハードウェアベースのテープ暗号化のボリュームを管理する 1 つの方法は、ボリュームプール名に予約接頭辞を使用することです。ストレージデバイスは暗号化のテープドライブが必要です。ストレージユニットは暗号化のテープドライブがあるストレージデバイスを指定する必要があります。バックアップポリシーは正しいストレージユニットおよびボリュームプールを指定する必要があります。 p.477 の「予約済みのボリュームのプール名の接頭辞について」を参照してください。
AdvancedDisk の暗号化	NetBackup OpenStorage スタックのプラグインは、データを暗号化します。データは格納中にのみ暗号化されます。 プライマリサーバーで構成されているキーマネージメントサービス (KMS) サーバーは、暗号化キーを管理します。NetBackup KMS (NBKMS) または外部 KMS のいずれかを指定できます。 『NetBackup AdvancedDisk ストレージソリューションガイド』を参照してください。
クラウドストレージの暗号化	NetBackup OpenStorage スタックのプラグインは、データを暗号化します。データは格納中にのみ暗号化されます (デフォルトでは、NetBackup は読み込み操作および書き込み操作に SSL を使用します)。 プライマリサーバーで構成されているキーマネージメントサービス (KMS) サーバーは、暗号化キーを管理します。NetBackup KMS (NBKMS) または外部 KMS のいずれかを指定できます。 『NetBackup クラウド管理者ガイド』を参照してください。
メディアサーバー重複排除プールの暗号化	MSDP 重複排除プラグインがデータを暗号化します。データは送信中および格納中または格納中にのみ暗号化されます。NetBackup 重複排除プラグインは暗号化キーを管理します。 『NetBackup 重複排除ガイド』を参照してください。

[Bare Metal Restore 用にディザスタリカバリ情報を収集する (Collect disaster recovery information for Bare Metal Restore)](ポリシー属性)

[Bare Metal Restore 用にディザスタリカバリ情報を収集する (Collect disaster recovery information for Bare Metal Restore)]属性は、各クライアントで BMR クライアントエージェントを実行するかどうかを指定します。この属性を有効にすると、各バックアップの前に BMR クライアントエージェントが実行され、クライアントの構成情報が保存されます。アクティビティモニターには、この動作がバックアップとは別のジョブとして表示されます。

MS-Windows ポリシー形式 (Windows クライアント用) および標準 (Standard) ポリシー形式 (UNIX クライアント用) だけで、このポリシー属性がサポートされています。この属性は、BMR のライセンスを取得したプライマリサーバーでポリシーを作成するためにこれらのポリシー形式の 1 つが使われると、デフォルトで有効になります。

詳しくは、『[Bare Metal Restore 管理者ガイド](#)』を参照してください。

[True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore information)](ポリシー属性) (移動検出を行う場合と行わない場合)

[True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore information)]属性は、ポリシーで、True Image Restore の実行に必要な情報を収集するかどうかを指定します。True Image Restore (TIR) は増分か完全バックアップ時のディレクトリの内容を反映するためにディレクトリの内容をリストアします。バックアップの実行前に削除されたファイルのリストアは実行されません。

この属性を有効にすると、増分バックアップに基づくリストアには、最後の完全バックアップ以降にバックアップされたすべてのファイルが含まれます。また、このリストアには、その期間中に削除されたファイルも含まれます。

NetBackup では、そのポリシーによる次の完全バックアップまたは増分バックアップから、True Image Restore 情報の収集が開始されます。True Image Restore 情報は、ファイルが変更されたかどうかに関係なく、クライアントごとに収集されます。

NetBackup では、ユーザーバックアップまたはユーザーアーカイブの実行時に基づく True Image Restore は提供されません。ただし、ユーザーバックアップが最後の自動完全バックアップまたは自動増分バックアップ以降に行われている場合、NetBackup はそのユーザーバックアップを使用して True Image Restore を実行します。

True Image の増分バックアップの場合、移動されたファイル、名前を変更されたファイル、または新しくディレクトリに追加されたファイルを含めるには、[移動検出を行う (with move detection)]を有効にします。これらは tar か zip アーカイブからのファイルである場合があります。(ファイルのパッケージ化の方法および追加方法によっては、新しく追加されたファイルの TIR 以外の増分バックアップが実行されない場合があります。)

NetBackup は、パス名と i ノード番号を前回の完全バックアップまたは増分バックアップのものと比較することによって変更を検出します。パス名または i ノード番号が新しいかまたは変更されている場合、そのファイルまたはディレクトリはバックアップされます。

NetBackup では、そのポリシーによる次の完全バックアップまたは増分バックアップから、移動検出の情報の収集が開始されます。属性設定後の最初のバックアップでは、増分バックアップの場合でも、常にすべてのファイルがバックアップされます。

メモ: [移動検出を行う (with move detection)]は合成バックアップを作成する場合に有効にする必要があります。

p.770 の「[合成バックアップする (Synthetic backup)](スケジュール属性)」を参照してください。

移動検出を行って、ファイルをバックアップする例を次に示します。移動検出を行わない場合、これらのファイルはバックアップされません。

■ Windows の場合:

- C:\pub\doc というファイルを C:\spec\doc に移動するかインストールします。アーカイブビットは変わりませんが、C:\spec\doc は C:\spec\ディレクトリ内では新しいファイルであるため、バックアップされます。
- C:\security\dev というディレクトリの名前を C:\security\devices に変更します。アーカイブビットは変わりませんが、C:\security\devices は新しいディレクトリであるため、バックアップされます。

■ UNIX の場合:

- /home/pub/doc というファイルを /home/spec/doc に移動します。/home/spec/doc の更新日時は変わりませんが、このファイルは /home/spec/ディレクトリ内では新しいファイルであるため、バックアップが行われます。
- /etc/security/dev というディレクトリの名前を /etc/security/devices に変更します。/etc/security/devices の更新日時は変わりませんが、これは新しいディレクトリであるため、バックアップされます。
- /home/pub/doc というファイルを UNIX の tar ファイルから抽出してインストールします。更新日時は最後のバックアップ実行時より前です。ファイルは /home/pub/ ディレクトリでは新しいためバックアップされます。
- docA というファイルを削除し、docB というファイルの名前を docA に変更します。docA というファイル名は変わりませんが、i ノード番号が変わったため、このファイルはバックアップされます。

NetBackup では、そのポリシーによる次の完全バックアップまたは増分バックアップから、移動検出に必要な情報の収集が開始されます。属性設定後の最初のバックアップでは、増分バックアップの場合でも、常にすべてのファイルがバックアップされます。

移動ファイルの検出にはクライアント上の領域が使用されるため、十分なディスク領域を利用できない場合、バックアップが正常に実行されない可能性があります。

True Image Restore の例

次の表に、12/01/2015 から 12/04/2015 に実行された一連のバックアップにおいて UNIX クライアントの /home/abc/doc/ ディレクトリ内でバックアップされたファイルを示します。バックアップを実行したポリシーの[True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore information)]は有効になっていました。

表 20-19 True Image Restore の前に実行されたバックアップの例

日付	バックアップ形式	/home/abc/doc 内でバックアップされたファイル
2015 年 12 月 1 日	完全	file1 file2 dirA/fileA dirB/fileB file3
2015 年 12 月 2 日	増分	file1 file2 dirA/fileA -----
2015 年 12 月 3 日	増分	file1 file2 dirA/fileA -----
2015 年 12 月 4 日	ユーザーバックアップ	file1 file2 dirA/fileA ----- dirC/fileC file4
2015 年 12 月 4 日	増分	file1 file2 ----- file4

メモ: 破線 (-----) は、そのファイルがそのバックアップより前に削除されたことを意味します。

/home/abc/doc/ ディレクトリの 12/04/2015 バージョンのリストアは次のような結果になります。

通常のリストアの後

リストア後のディレクトリには、次に示す、12/01/2015 (最後の完全バックアップ) から 12/04/2015 の間に /home/abc/doc/ 内に存在していたすべてのファイルおよびディレクトリが含まれます。

file1
file2
dirA/fileA
dirB/fileB
file3
dirC/fileC
file4

True Image Restore の リストアされたディレクトリには、増分バックアップ時に存在したディレクトリとファイルのみが含まれます。

```
file1  
file2  
file4
```

NetBackup 2015 年 12 月 4 日の増分バックアップより前に削除されたファイルはリストアされません。

サブディレクトリ dirA および dirC は、12/04/2015 にユーザーバックアップによってバックアップされていますが、リストア後のディレクトリには含まれていません。

NetBackup これらのディレクトリは、増分バックアップ実行時に存在していなかったため、リストアされていません。この増分バックアップが、True Image Restore で基準となります。

[True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore)]または[True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore)]の[移動検出を行う (with move detection)]のいずれかを使う場合、次の点を考慮します。

- NetBackup は True Image Restore 情報を収集する増分バックアップの追加情報を収集します。移動検出を使うポリシーはより多くの領域を必要とします。
- 増分バックアップは True Image Restore 情報が収集されるポリシーの場合より遅くなります。
- NetBackup が True Image Restore 情報を保持する期間を構成します。[クリーンアップ (Clean-up)]プロパティダイアログボックスの[True Image Restore (TIR) 情報を保持する (Keep true image restoration (TIR) information)]プロパティを設定します。
p.64 の「[クリーンアップ \(Clean up\) プロパティ](#)」を参照してください。
- ディレクトリのみリストに表示され、選択できます。True Image Restore モードでは、クライアントインターフェースは個々のファイルを表示しません。True Image Restore について詳しくはクライアントのバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースのオンラインヘルプを参照してください。
- True Image Restore は、現在ディレクトリに存在するが、バックアップが完了したときには存在しなかったファイルを保持します。12/04/2015 の増分バックアップ後からリストア前にファイル file5 を作成した場合、リストア後のディレクトリの内容は次のとおりです。

```
file1  
file2  
file4  
file5
```

[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)](ポリシー属性)

[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)]属性は、NetBackup が各クライアントの自動バックアップを複数のジョブに分割できるかどうかを指定します。バックアップ対象リスト内の指示句、スクリプトまたはテンプレートによって、それぞれのジョブでバックアップ対象リストの一部だけをバックアップできるかどうかを指定します。ジョブは個別のデータストリームにあるので、並列実行できます。

各クライアントに対して開始されるストリーム (バックアップジョブ) の数は、バックアップ対象リスト内の指示句、スクリプトまたはテンプレートによって決定されます。また、このリストによって、バックアップ対象リストを別々のストリームに分割する方法が決定されます。

並列して実行可能なストリームの数は、次の設定によって決定されます。

- 利用可能なストレージユニットの数
- 多重化の設定
- 最大ジョブ数パラメータ

複数ストリームジョブは、ストリームの検出を実行する 1 つの親ジョブと、各ストリームに対する複数の子ジョブで構成されます。各子ジョブは、アクティビティ 모니터の[ジョブ ID (Job ID)]列に、固有のジョブ ID を表示します。親ジョブのジョブ ID は、デフォルトでは表示されない[親ジョブ ID (Parent Job ID)]列に表示されます。親ジョブの[スケジュール (Schedule)]列には、ダッシュ (-) が表示されます。

メモ: この属性を有効にしており、ファイルシステムがクライアントのエクスクルーードリストに含まれている場合、エクスクルーードされたファイルシステムに対する NetBackup ジョブがアクティビティ 모니터に表示されます。ただし、このジョブによって、エクスクルーードされたファイルシステム内のファイルはバックアップされません。

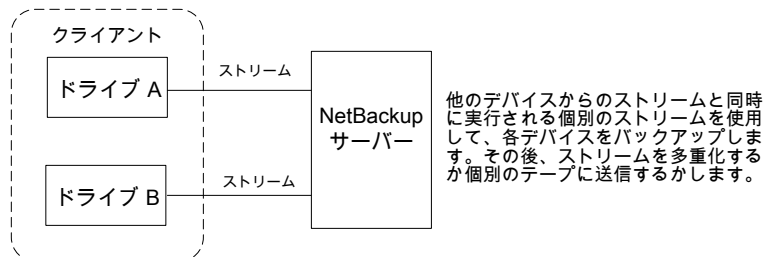
次の表では複数のデータストリームを使う理由を説明します。

表 20-20 複数のデータストリームを使用する理由

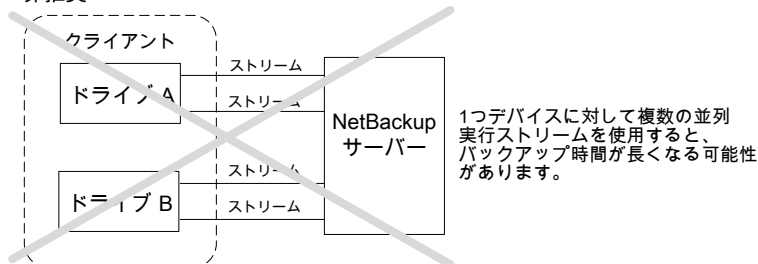
理由	説明
バックアップ時間を短縮する	複数のデータストリームを使用すると、バックアップが複数のストリームに分割されるため、大規模なバックアップのバックアップ時間を短縮できます。多重化、複数のドライブまたはこれら 2 つを組み合わせ、それらのストリームを並列して処理します。 クライアント上の各デバイスが、他のデバイスからのストリームと同時に実行される個別のデータストリームでバックアップされるように、バックアップを構成します。 最良のパフォーマンスを得るために、1 つのデータストリームだけを使用してクライアントの各物理デバイスをバックアップします。1 つの物理デバイスに対して複数の並列実行ストリームを使用すると、バックアップ時間が長くなる可能性があります。ヘッドが各ストリームのファイルを含むトラック間を何度も往復移動する必要があります。 図 20-5では、単一デバイスに対して複数の並列実行ストリームを使用することが推奨されない理由を示しています。
バックアップの失敗における再試行時間を短縮する	バックアップのストリームは独立して実行されるため、複数のデータストリームを使用すると、バックアップが失敗した場合に再試行時間を短縮できます。1 つの失敗が発生すると 1 つのストリームだけが終了されます。NetBackup 他のストリームを再開せずに、失敗が発生したストリームを再開できます。 たとえば、10 GB のパーティションのバックアップを、それぞれが 2 GB の 5 つのストリームに分割すると想定します。最後のストリームで 1.9 GB を書き込んだ後 (合計で 9.9 GB をバックアップした後) に失敗が発生すると、NetBackup では最後のストリームのみのバックアップが再試行されます。この 10 GB のパーティションを複数のデータストリームを使用せずにバックアップする場合、失敗が発生すると、10 GB 全体のバックアップを再試行する必要があります。 [グローバル属性 (Global attributes)]プロパティの[スケジュールバックアップの試行回数 (Schedule backup attempts)]プロパティは、各ストリームに適用されます。たとえば、[スケジュールバックアップの試行回数 (Schedule backup attempts)]プロパティを 3 に設定すると、NetBackup による各ストリームのバックアップが 3 回まで再試行されます。 アクティビティモニターには、各ストリームが個別のジョブとして表示されます。これらの各ジョブによってバックアップされるファイルを確認するには、ジョブ詳細表示を使用します。 p.115 の「[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ」を参照してください。
より少ないポリシーでより多くのバックアップを実行することで管理負荷を軽減する	多くのファイルシステムおよびボリュームを含む大規模なファイルサーバーが構成に含まれている場合、複数のデータストリームを使用します。複数のデータストリームを使用すると、使用しない場合に比べて、より少ないポリシーでより多くのバックアップを実行できます。

図 20-5 推奨する複数ストリームの使用方法

最適なパフォーマンスのための推奨



非推奨



次の表は、調節可能である複数のデータストリームの事項を記述したものです。

表 20-21 複数のデータストリームの調節可能な事項

項目	説明
ストリームの合計数	バックアップ対象リストは開始されるストリームの合計数を決定します。NEW_STREAM 指示句でストリームの固定数を構成できます。またはクライアントでストリームを動的に定義できます。 p.842 の「バックアップ対象リストの指示句について」を参照してください。 メモ: 最良のパフォーマンスを得るために、1 つのデータストリームだけを使用してクライアントの各物理デバイスをバックアップします。1 つの物理デバイスに対して複数の並列実行ストリームを使用すると、バックアップ時間が長くなる可能性があります。デバイスヘッドがそれぞれのストリームのファイルを含むトラック間で移動する必要があるため、バックアップ時間は影響されます。

項目	説明
並列して実行されるストリームの数	ポリシーまたはクライアントの並列して実行可能なストリームの数は、次の設定によって決定されます。 ■ 利用可能なドライブの数。 ■ ポリシーとクライアントの最大並列実行ジョブ数の設定。 ■ ストレージユニットとスケジュールの多重化の制限。 各ストレージユニットと各スケジュールに最大多重化設定があります。2 つの設定のより低いほうが特定のスケジュールとストレージユニットの制限です。最大ストリームはストレージユニットとスケジュールの組み合わせで利用可能なすべてのドライブの多重化制限の合計に制限されます。 たとえば、2 つのストレージユニットがそれぞれ 1 つのドライブを備えていると想定します。ストレージユニット 1 の多重化は 3 に設定され、ストレージユニット 2 の多重化は 5 に設定されます。多重化がスケジュールで 5 以上に設定されれば、8 つのストリームが並列して実行可能です。 p.786 の「メディアの多重化 (Media multiplexing)」(スケジュール属性)を参照してください。

最大ジョブ数の設定は次のようにストリームの最大数を制限します。

表 20-22 ストリームの最大数を制限するジョブ設定

項目	アクセスの方法
[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)](ホストプロパティ)	■ 左側で、[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。 ■ プライマリサーバーを選択し、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]を選択します。 ■ [グローバル属性 (Global attributes)]を選択します。 p.115 の「グローバル属性 (Global attributes)」プロパティを参照してください。 p.786 の「メディアの多重化 (Media multiplexing)」(スケジュール属性)を参照してください。
[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)](ポリシー属性)	■ 左ペインで、[保護 (Protection)]、[ポリシー (Policies)]の順に展開します。 ■ 変更するポリシーを開きます。 p.704 の「ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)」(ポリシー属性)を参照してください。
[データストリームの最大数を設定する (Maximum data streams)](ホストプロパティ)	■ 左側で、[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。 ■ プライマリサーバーを選択し、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]を選択します。 ■ [クライアント属性 (Client attributes)]を選択します。 p.68 の「クライアント属性 (Client attributes)」プロパティの[全般 (General)]タブを参照してください。

また、ジョブ設定はストリームの最大数に影響します。次の表はこれらの設定の相互依存を記述したものです。

表 20-23 ジョブ設定の相互依存

項目	説明
[データストリームの最大数を設定する (Maximum data streams)]プロパティが無効になっています。	NetBackup は[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]か[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)]のいずれかの値のうち低い方を使用します。
[データストリームの最大数を設定する (Maximum data streams)]プロパティが有効になっています。	NetBackup は[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]を無視します。代わりに、NetBackup は[データストリームの最大数を設定する (Maximum data streams)]か[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)]のいずれかの値のうち低い方を使用します。

p.842 の「[バックアップ対象リストの指示句について](#)」を参照してください。

複数の MSDP ノードの使用 (ポリシー属性)

NetBackup 11.0 以降、ポリシー属性[複数の MSDP ノードの使用 (Use multiple MSDP nodes)]により、MSDP クラスタストレージサーバーでのマルチストリームバックアップの負荷分散が改善されています。この機能により、複数の MSDP ノード間でバックアップストリームを分散し、スレーブットを最適化し、個々のノードで潜在的な輻輳を減らすことができます。

[複数の MSDP ノードの使用 (Use multiple MSDP nodes)]属性は、NetBackup Web UI の次のポリシー形式で利用可能です。

- Standard
- MS-Windows
- MS-SQL-Server

このポリシー属性は、次のポリシー形式では利用できません。

- Oracle
- Epic-Large-File
- Universal-Share
- MSDP-Object-Store

詳しくは、『NetBackup 重複排除ガイド』を参照してください。

クライアント側の重複排除 (ポリシー属性)

[クライアント側の重複排除 (Client-side deduplication)]属性は NetBackup Data Protection Optimization Option のライセンスがアクティブであるときのみ表示されます。

ポリシーを構成する場合は、次のオプションを使用できます。

ホストプロパティで構成された個々のクライアント設定を使用 (Use individual client settings configured in host properties)

クライアントは、ホストプロパティで構成された[重複排除 (Deduplication)]設定を使用します。

すべてのクライアントで無効 (Disable for all clients)

クライアントは自身のデータを重複排除せず、そのバックアップデータを直接ストレージサーバーに送信しません。NetBackup クライアントはそれ自身のデータを重複排除メディアサーバーに送ります。このサーバーがデータを重複排除してからストレージサーバーに送信します。

すべてのクライアントで有効 (Enable for all clients)

クライアントはそれ自身のデータを重複排除します。またストレージサーバーにデータを直接送信します。メディアサーバーの重複排除とデータ転送は行われません。

[重複排除 (Deduplication)]プロパティはクライアント側の重複排除用にクライアントを構成します。[クライアント側の重複排除 (Client-side deduplication)]属性は[重複排除 (Deduplication)]プロパティを上書きします。[重複排除 (Deduplication)]プロパティは[クライアント属性 (Client attributes)]ホストプロパティの[全般 (General)]タブにあります。

p.72 の「[重複排除の場所](#)」を参照してください。

『[NetBackup 重複排除ガイド](#)』を参照してください。

[個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)](ポリシー属性)

[個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)]属性は次のポリシー形式の場合に利用可能です。

- MS-Exchange-Server
- MS-SharePoint
- MS-Windows (Active Directory の場合)

このオプションを有効にすると、ユーザーは次のようなデータベースバックアップイメージ内に存在する個々のオブジェクトをリストアできます。

- **Active Directory** データベースバックアップのユーザーアカウント
- **Exchange** データベースバックアップの電子メールメッセージまたは電子メールフォルダ
- **SharePoint** データベースバックアップの文書

NetBackup では、個別リカバリテクノロジー (GRT) を使ったバックアップの圧縮または暗号化はサポートされません。[個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)] オプションを有効にすると、[圧縮 (Compression)] オプションと[暗号化 (Encryption)] オプションが自動的に無効になります。

個別レベルのリストアは、バックアップがディスクストレージユニットに書き込まれている場合にだけ実行できます。

個別レベルバックアップを実行するように NetBackup を構成する方法について詳しくは、次を参照してください。

- [『NetBackup for SharePoint Server 管理者ガイド』](#)
- [『NetBackup for Exchange Server 管理者ガイド』](#)
- p.868 の「[Active Directory の個別バックアップと個別リカバリ](#)」を参照してください。

[アクセラレータを使用する (Use accelerator)](ポリシー属性)

NetBackup アクセラレータは、完全バックアップを高速化します。高速化は、クライアント上の変更検出技術によって実現しています。クライアントは、この変更検出技術とクライアントの最新のファイルシステムを使用して、前回のバックアップ以降発生した変更を特定します。クライアントは、より効率のよいバックアップストリームによって、変更されたデータをメディアサーバーに送信します。メディアサーバーは、変更されたデータと、前回のバックアップで保存されたクライアントデータすべてを結合します。

ファイルまたはファイルの一部がすでにストレージに存在し、かつ変更されていない場合、メディアサーバーは、クライアントから同じ内容を読み込まず、代わりにストレージ内のコピーを使用します。結果として、完全な NetBackup バックアップとなります。

アクセラレータには次の利点があります。

- クライアントの I/O と CPU のオーバーヘッドを削減できます。その結果、クライアント上でバックアップの高速化と負荷の軽減が実現します。
- クライアントとサーバーの間に、コンパクトなバックアップストリームを作成するので、ネットワーク回線容量が少なくて済みます。
- 作成する完全イメージには、リストアに必要なすべてのデータが含まれています。

メモ: 仮想マシン、NDMP、データベースのバックアップに使われるとき、アクセラレータの動作は異なります。

VMware のアクセラレータについて詳しくは、『[NetBackup for VMware 管理者ガイド](#)』を参照してください。

NDMP のアクセラレータについて詳しくは、『[NetBackup for NDMP 管理者ガイド](#)』を参照してください。

Oracle、SharePoint、Exchange、または SQL Server のアクセラレータについて詳しくは、[該当するエージェントの NetBackup ガイド](#)を参照してください。

NetBackup アクセラレータの機能

NetBackup アクセラレータは、バックアップストリームとバックアップイメージを次のように作成します。

- 過去に一度もバックアップをしていないクライアントでは、NetBackup は完全バックアップを実行し、トラックログを作成します。トラックログはクライアントのデータに関する情報を含むため、次のバックアップでの比較参照が可能となります。
- 次のバックアップでは、NetBackup は、前回のバックアップ以降変更されたデータを識別します。そのためには、各ファイルでトラックログの情報をファイルシステムの情報と比較します。NTFS と ReFS ファイルシステムの場合、前回のバックアップ以来変更されたデータを識別するために Windows の変更ジャーナルを使います。
アクセラレータは 2 つの方法で Windows の変更ジャーナルを使います。1 つ目はファイルシステムのメタデータの変更を調べるためで、2 つ目はどのファイルが前回のバックアップ以来変更されたかを検出するためです。
p.733 の「[アクセラレータおよび Windows の変更ジャーナル](#)」を参照してください。
- NetBackup クライアントは、クライアントで変更されたブロック、前回のバックアップ ID と変更されていないブロックのデータエクステント (ブロックオフセットとサイズ) で構成される バックアップストリームをメディアサーバーに送信します。
- メディアサーバーは、クライアントで変更のあったブロック、バックアップ ID、変更されていないブロックのデータエクステントを受信します。メディアサーバーは、読み込んだバックアップ ID とファイルシステム記述子から、既存のバックアップにあるその他のクライアントデータの場所を特定します。
- メディアサーバーはストレージサーバーに対し、変更されたブロックと変更されていないブロックを新しい完全イメージに書き込むよう指示を出します。

 **図 20-6** はアクセラレータのバックアップストリームが構成される過程を示します。

図 20-6 NetBackup クライアント: アクセラレータのバックアップストリーム

バックアップ対象のファイル:

H ₁	データ	H ₂	データ	H ₃	データ	...	H ₁₀	データ
----------------	-----	----------------	-----	----------------	-----	-----	-----------------	-----

トラックログとの照合はH₂
データが新しいことを示している。■
残りは変更されていない。



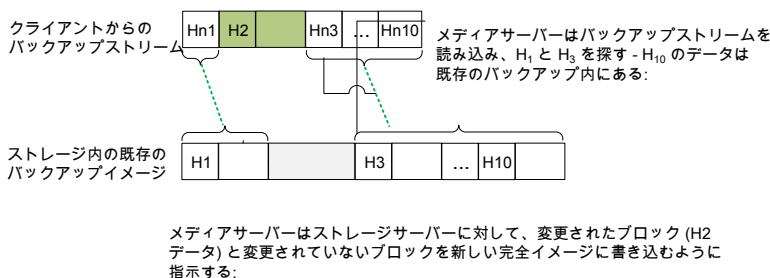
クライアントがバックアップ
ストリームを作成:

H _{n1}	H ₂	データ	H _{n3}	...	H _{n10}
-----------------	----------------	-----	-----------------	-----	------------------

N = データが変更されていないことを示す。
変更されたデータの場合、バックアップ
ID、ブロックオフセットおよびサイズが、前の
バックアップを参照するために提供される。

図 20-7 は、メディアサーバーがアクセラレータのストリームと以前のバックアップからバックアップイメージを構築する過程を示します。

図 20-7 NetBackup メディアサーバーはバックアップイメージを構築する

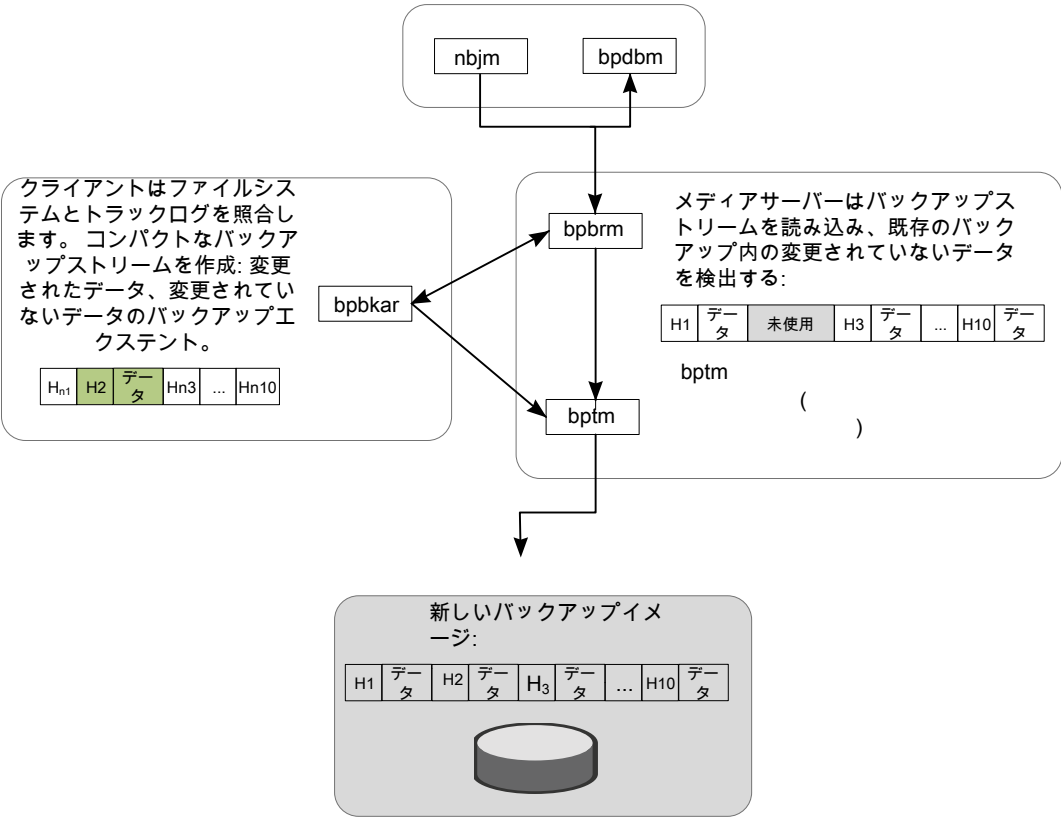


新しいバックアップ
イメージ

H ₁		H ₂		H ₃		...	H ₁₀	
----------------	--	----------------	--	----------------	--	-----	-----------------	--

図 20-8 ではアクセラレータの詳細を NetBackup の主要なプロセスとしてまとめています。

図 20-8 アクセラレータバックアップのプロセス概要



アクセラレータおよび Windows の変更ジャーナル

Windows NTFS および ReFS ファイルシステムの場合、アクセラレータは Windows の変更ジャーナルを使用して前回のバックアップから変更されたファイルを特定します。

Windows の変更ジャーナルが使われる程度は次によって決まります。

- [変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションが NetBackup クライアントに対して有効になっているか。
- [アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプションが有効化されたスケジュールがポリシーに含まれているか。

メモ: [変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]の設定または[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]の設定にかかわらず、Windows の変更ジャーナルを使用してファイルの変更が判断されます。

表 20-24 アクセラレータが Windows の変更ジャーナルを使用する仕組み

NetBackup 構成	アクセラレータによる変更ジャーナルの使用
[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションが有効になっていません。	完全バックアップおよび増分バックアップの場合、NetBackup は各ファイルのメタデータを診断してファイルが変更されているかを判断します。[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションを使用しなくても、Windows の変更ジャーナルヘルプはファイルの判断に使用されます。
[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションは有効ですが、[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプションがポリシーのいずれかのスケジュールで有効ではありません。	Windows の変更ジャーナルは、完全バックアップおよび増分バックアップ時にファイルの変更の判別に使用されます。 ■ 増分バックアップ時は、ファイルの変更の判別に Windows の変更ジャーナルが排他的に使用されます。NetBackup はファイルメタデータを診断しません。 ■ 完全バックアップ時は、NetBackup はファイルの変更の判別にすべてのファイルのメタデータを診断します。さらに、NetBackup は Windows の変更ジャーナルを使用してファイルの変更を判別します。
[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションが有効で、[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプションがポリシーの 1 つ以上のスケジュールで有効です。	Windows の変更ジャーナルは、完全バックアップおよび増分バックアップ時にファイルの変更の判別に使用されます。 ■ 増分バックアップ時は、ファイルの変更の判別に Windows の変更ジャーナルが排他的に使用されます。NetBackup はファイルメタデータを診断しません。 ■ 完全バックアップ時 ■ [アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプションを有効にしない完全バックアップスケジュールの場合 ファイルの変更の判別に Windows の変更ジャーナルが排他的に使用されます。NetBackup はファイルメタデータを診断しません。 ■ [アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプションを有効にする完全バックアップスケジュールの場合 NetBackup はファイルの変更の判別にすべてのファイルのメタデータを診断します。さらに、NetBackup は Windows の変更ジャーナルを使用してファイルの変更を判別します。

アクセラレータの注意と要件

NetBackup アクセラレータについて次の点に注意してください。

- NetBackup アクセラレータには、データ保護最適化オプション (Data Protection Optimization Option) ライセンスが必要です。ライセンスの最新情報については、NetBackup 営業部門またはパートナー企業ご相談窓口までお問い合わせください。

- ディスクストレージユニットのみをサポートします。サポート対象のストレージは、メディアアサンプター重複排除プール、NetBackup Appliance、クラウドストレージ、認定されたサードパーティの OST ストレージです。
サポート対象のストレージ形式については、次の URL にある『NetBackup Enterprise Server and Server - Hardware and Cloud Storage Compatibility List』を参照してください。
<https://support.cohesity.com/s/article/article-100040093>
- ストレージユニットグループは、グループでのストレージユニットの選択がフェールオーバーの場合にのみサポートされます。
- MS-Windows ポリシー形式と標準 (Standard) ポリシー形式をサポートします。
NetBackup 機能のうち[MS-Windows]や標準ポリシー形式と連携して動作する機能すべてをサポートします。

メモ: 仮想マシン、NDMP、または Oracle データベースのバックアップに使われるとき、アクセラレータの動作は異なります。詳しくは、次のガイドを参照してください。

『NetBackup for VMware 管理者ガイド』

『NetBackup for NDMP 管理者ガイド』

『NetBackup for Oracle 管理者ガイド』

- アクセラレータバックアップは、バックアップ後にファイルの atime をリセットするポリシー属性を無視します。
デフォルトでは、NetBackup は、バックアップする各 UNIX ファイルのファイルアクセス時刻 (atime) を記録し、ファイルがバックアップされた後に atime をリセットします。このように atime がリセットされると、変更時刻 (ctime) も更新されます。通常、[ファイルのアクセス時刻をバックアップ前の値にリセット (Reset file access time to the value before backup)]ポリシー属性によりこの動作が制御されます (デフォルトでは有効)。
NetBackup アクセラレータを使用してバックアップを実行する場合、ポリシー属性の設定に関わらず NetBackup はファイルのバックアップ後に atime をリセットしません。NetBackup は、atime の更新にはアクセラレータの最適化の損失が伴うので、ctime をリセットしません (これにより ctime の更新を回避します)。
p.77 の「UNIX クライアントの[クライアントの設定 (Client settings)]プロパティ」を参照してください。
- 完全バックアップと増分バックアップをサポートします。
p.737 の「アクセラレータバックアップおよび NetBackup カタログ」を参照してください。
- NetBackup がサポートするすべてのプラットフォーム、ファイルシステム、論理ボリュームをサポートします。

- Windows NTFS および ReFS の変更ジャーナル ([変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]) をサポートしますが、VxFS の変更ジャーナルはサポートしません。
- [アクセラレータを使用する (Use accelerator)] オプションを有効にするすべてのポリシーに対して、少なくとも次のバックアップスケジュールをお勧めします。
[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] オプションを有効にしている完全バックアップスケジュール。
[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] オプションを有効にしていない別の完全バックアップスケジュール。
p.771 の「[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] オプション (スケジュールの属性)」を参照してください。
- ポリシーで [True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore information)] が有効になっている場合、NetBackup は通常のファイルシステムスキャンを実行し、バックアップに含めるファイルとフォルダを特定します。変更されたファイルを特定するために変更ジャーナルの問い合わせも行います。
さらに詳しくは、[変更ジャーナルを使用 (Use change journal)] オプションおよびアクセラレータを参照してください。
p.733 の「アクセラレータおよび Windows の変更ジャーナル」を参照してください。
- クライアントに前回のバックアップ履歴がない場合、NetBackup は完全バックアップを行い、クライアント上にトラックログを作成します。この初回バックアップは、通常の (加速なし) 完全バックアップの速度で実行されます。クライアントのそれ以後のアクセラレータバックアップでは、トラックログを使用してバックアップ速度を加速します。

メモ: 最初にポリシーを有効にすることによりアクセラレータを使用すると、次のバックアップ (完全または増分) は実質的に完全バックアップとなります。この場合、[バックアップ対象 (Backup Selections)] タブのすべてのファイルがバックアップされます。そのバックアップが増分としてスケジュールされていると、バックアップ処理時間帯内に完了しない場合があります。

- NetBackup は、以降のアクセラレータバックアップのためにトラックログを保持します。ポリシーのバックアップ対象リストが変更されるたびに、NetBackup はリストで変更されるか、追加された対象の (加速なし) 完全バックアップを実行します。変更されていないバックアップ対象は、通常のアクセラレータバックアップとして処理されます。
- ポリシーを作成するとき、ポリシーに関連付けられるストレージユニットを検証できない場合は、後でバックアップジョブが始まる時ストレージユニットが検証されることに留意してください。アクセラレータがストレージユニットをサポートしない場合、バックアップは失敗します。bpbarm ログに、以下のいずれかのようなメッセージが表示されます。

Storage server %s, type %s, doesn't support image include.

```
Storage server type %s, doesn't support accelerator backup.
```

- アクセラレータでは、ストレージの `OptimizedImage` 属性が有効になっている必要があります。
- [コピー後に期限切れにする (Expire after copy)]の保持を指定することにより、バックアップの実行中にイメージが期限切れになることがあります。新しい完全バックアップを合成するには、SLP バックアップで以前のバックアップイメージが必要になります。以前のイメージがバックアップの間に期限切れになった場合、バックアップは失敗します。

アクセラレータバックアップおよび NetBackup カタログ

アクセラレータを使用しても、NetBackup カタログのサイズに影響はありません。アクセラレータを使用する完全バックアップでは、アクセラレータなしで同じデータを完全バックアップする場合と同じカタログサイズになります。これは、増分バックアップでも同様です。アクセラレータを使用するとき、アクセラレータなしの同じバックアップより大きいカタログ領域を必要としません。

ただし、Web UI で[ファイルハッシュの計算 (Calculate file hash)]オプションを有効にすると、NetBackup カタログは 20% 以上増加する見込みです。このオプションは、ファイルハッシュの情報を NetBackup カタログに保存するために使用します。詳しくは、『NetBackup Web UI 管理者ガイド』を参照してください。

カタログの影響が生じる可能性は、完全バックアップにアクセラレータをどのくらい頻繁に使用するかに応じます。アクセラレータを使用する完全バックアップは、通常の完全バックアップより高速に完了します。このため、増分バックアップの代わりにアクセラレータによる完全バックアップを使いたいと考える場合もあるでしょう。ただし、完全バックアップでは増分バックアップより大きなカタログ領域が必要なので、増分バックアップを完全バックアップに入れ替えるとカタログサイズが増します。増分バックアップを完全バックアップに変更する場合、増分バックアップに比べて完全バックアップに必要なカタログ領域の大きさに対して、アクセラレータによる完全バックアップがどの程度有利かを評価する必要があります。

p.737 の「[アクセラレータの構成](#)」を参照してください。

アクセラレータの構成

NetBackup アクセラレータを使用する完全バックアップの構成方法について、次の表にまとめます。

表 20-25 完全バックアップのアクセラレータを設定する方法

作業	手順と注意点
アクセラレータをサポートするストレージユニットがあることを確認してください。	アクセラレータは、ディスクストレージユニットのみをサポートします。サポート対象のストレージユニット形式は、PureDisk (メディアサーバー重複排除ブール、NetBackup Appliance)、クラウドストレージ、認定されたサードパーティの OST ストレージです。 NetBackup のデバイスマッピングファイルには、サポート対象のストレージユニットの詳細なリストがあります (次のタスクを参照してください)。 メモ: ストレージユニットグループは、グループでのストレージユニットの選択がフェールオーバーの場合にのみサポートされます。
必要に応じ、NetBackup デバイスマッピングファイルを更新してください。	NetBackup デバイスマッピングファイルには、NetBackup が使用できるすべてのストレージデバイスの種類が含まれています。アクセラレータに対応する新規デバイスまたはアップグレードされたデバイスのサポートを加えるには、Cohesity Technical Support から最新のデバイスマッピングファイルをダウンロードします。 p.431 の「デバイスマッピングファイルについて」を参照してください。 p.431 の「デバイスマッピングファイルのダウンロード」を参照してください。
[標準 (Standard)]、[MS-Windows]、[VMware]、[NDMP]、または[Oracle]のバックアップポリシーを構成します。	ポリシーの[属性 (Attributes)]タブから次を選択します。 ■ アクセラレータをサポートするディスクストレージユニット。 ■ [アクセラレータを使用する (Use Accelerator)]オプション。 仮想マシン、NDMP、または Oracle データベースのバックアップに使われるとき、アクセラレータの動作は異なります。詳しくは、次のガイドを参照してください。 ■ 『NetBackup for VMware 管理者ガイド』 ■ 『NetBackup for NDMP 管理者ガイド』 ■ 『NetBackup for Oracle 管理者ガイド』 (オプション) ファイルハッシュを NetBackup カタログに保存するには、[ファイルハッシュの計算 (Calculate file hash)]オプションを有効にします。このオプションは、Web UI でポリシーを構成する場合にのみ利用可能です。これは、ポリシー形式が Windows、Standard、NAS-Data-Protection の場合のみ利用可能です。 構成の手順について詳しくは、『NetBackup Web UI 管理者ガイド』を参照してください。
クライアントの変更検出について定期的に新しい基準を確立するには、ポリシーの[スケジュールの属性 (Schedule Attribute)]タブの[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプションを選択します。	このオプションにより、クライアントデータのアクセラレータ変更検出のレベルは一段向上します。このオプションはアクセラレータの速度を遅くします。 p.771 の「[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプション (スケジュールの属性)」を参照してください。 p.733 の「アクセラレータおよび Windows の変更ジャーナル」を参照してください。

バックアップジョブ詳細ログのアクセラレータメッセージ

NetBackup は、アクセラレータを使用するバックアップ処理では、次のようなメッセージをジョブ詳細ログに出力します。

```
11/23/2011 10:50:27 AM - Info bpbrm(pid=412) accelerator enabled
```

NetBackup がバックアップに NTFS または ReFS の変更ジャーナルを使用する場合、ジョブ詳細ログに次のようなメッセージが表示されます。

```
9/24/2011 8:54:14 PM - Info bpbkar32(pid=7868) change journal enabled
for <C:¥>
```

```
9/24/2011 8:54:14 PM - Info bpbkar32(pid=7868) using change journal
data for <C:¥>
```

NTFS または ReFS の変更ジャーナルを使用できない場合、ジョブ詳細ログに次のようなメッセージが表示されます。

```
not using change journal data for <backup selection>: <reason ...>
```

p.740 の「[\[変更ジャーナルを使用 \(Use Change Journal\)\] オプションとアクセラレータについてのログメッセージ](#)」を参照してください。

[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] オプションが選択されている時は、ジョブ詳細ログに次のようなメッセージが表示されます。

```
9/25/2011 5:46:52 PM - Info bpbrm(pid=4136) Accelerator enabled
backup with checksum based change detection needs to read each file
and
calculate the checksum, and will have longer backup time.
```

p.740 の「[\[変更ジャーナルを使用 \(Use Change Journal\)\] オプションとアクセラレータについてのログメッセージ](#)」を参照してください。

アクセラレータの NetBackup ログ

アクセラレータに関するログメッセージについては、次の NetBackup ログディレクトリを参照してください。

表 20-26 アクセラレータに関する NetBackup ログ

ログディレクトリ	場所
Windows の場合: <code>install_path¥NetBackup¥logs¥bpbrm</code>	NetBackup プライマリサーバーまたはメディアサーバー
UNIX の場合: <code>/usr/opensv/netbackup/logs/bpbrm</code>	

ログディレクトリ	場所
Windows の場合: <code>install_path¥NetBackup¥logs¥bptm</code> UNIX の場合: <code>/usr/opensv/netbackup/logs/bptm</code>	NetBackup メディアサーバー
Windows の場合: <code>install_path¥NetBackup¥logs¥bpbkar</code> UNIX の場合: <code>/usr/opensv/netbackup/logs/bpbkar</code>	NetBackup クライアント

ログディレクトリを作成するには、NetBackup サーバーおよびクライアントで、次のコマンドを実行します。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥logs¥mklogdir.bat
```

UNIX の場合:

```
/opt/opensv/netbackup/logs/mklogdir
```

[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションとアクセラレータについてのログメッセージ

アクセラレータは Windows クライアントでのデータ変更を識別するために NTFS または ReFS の変更ジャーナルを使います。次の表はアクティビティモニターの NetBackup ジョブの詳細ログに表示される可能性のある変更ジャーナルメッセージを説明したものです。左の列はメッセージを示します。

アクセラレータバックアップの場合、これらのメッセージは Windows の変更ジャーナルの使用にさまざまな障害があることを示します。一般に、メッセージは次のいずれかを示します:

- アクセラレータはバックアップのために変更ジャーナルを使うことができないこと。変更ジャーナルを使うためには、ポリシーの再構成が必要である可能性があること。
- ファイルシステムの変更を検出するのにアクセラレータは排他的に変更ジャーナルを使うことができないこと。NetBackup は、各ファイルでファイルシステムのメタデータを調べて、どのファイルが変更されたか検出します。また、どのファイルが変わったか検出するために変更ジャーナルを使います。

メモ: 以下のメッセージでは、変数 `<%%s>` はバックアップ対象リストの項目を表します。

変更ジャーナルのメッセージの多くはペアで表示されます。最初のメッセージは変更ジャーナルをなぜ使うことができないか示します。たとえば、

```
not using change journal data for <%%s>: forced rescan requested
```


第2メッセージは、それにもかかわらずアクセラレータが変更ジャーナルを使用して変更されたファイルを検出できることを示します:

```
not using change journal data for enumeration for <%%s> but will use  
it for change detection
```

表 20-27 Windows の[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプション (ジョブ詳細ログ) のアクセラレータメッセージ

NetBackup ジョブ詳細の メッセージ	説明
not using change journal data for enumeration for <%%s> but will use it for change detection	NetBackup はどのファイルが変わったか検出するために変更ジャーナルを使います。NetBackup はまた、各ファイルシステムのメタデータを調べて、どのファイルが変更されたか検出します。 メモ: このメッセージが表示される前に、別のメッセージ表示されて、変更されたファイルを検出するために NetBackup が変更ジャーナルデータになぜ完全に依存しないのか説明します。
not using change journal data for <%%s>: forced rescan requested	[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプションが、ポリシーの完全バックアップスケジュールで有効に設定されています。その結果、変更されたファイルを検出するために NetBackup は変更ジャーナルデータに完全に依存することができません。NetBackup はまた、各ファイルシステムのメタデータを調べて、どのファイルが変更されたか検出します。
not using change journal data for <%%s>: filter checksum calculation failed	バックアップは複数のフィルタを使用し、どのファイルおよびディレクトリをバックアップに含めるかを判断します。このフィルタには、NetBackup のエクスクルードリストおよびインクルードリスト、シャドウコピーコンポーネントおよびシステム状態のバックアップに含まれるファイルおよびディレクトリなどがあります。 バックアップの間に、フィルタに対するチェックサムの計算が実行されます。新しいバックアップが実行されると、現在のバックアップのチェックサムが前回のバックアップのチェックサムに対して比較されます。チェックサムが一致しなければ、変更ジャーナルのデータを使用できません。代わりに、アクセラレータは通常のファイルシステムスキャンを実行し、バックアップに含めるためのファイルおよびフォルダを判断します。 処置は必要ありません。バックアップごとにフィルタが変わらない場合は、変更ジャーナルのデータが次のバックアップで使用されます。

NetBackup ジョブ詳細のメッセージ	説明
not using change journal data for <%%s>: unable to validate change journal usage <reason=%%s>	アクセラレータは、以下の場合[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションを使用できません。 ■ 以前のバックアップがなく、基準となる更新シーケンス番号 (USN) が NTFS の変更ジャーナルから確立されていない。 ■ 前回のバックアップが正常に実行されなかった。 このような場合、[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションを使用できません。アクセラレータは、通常のファイルシステムスキャンを実行し、バックアップに含めるためのファイルおよびフォルダを判断します。 処置は必要ありません。すべての条件を満たす場合、アクセラレータは次のバックアップで[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションを使用します。
not using change journal data for <%%s>: unable to initialize change journal usage <reason=%%s>	アクセラレータは、以下の場合[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションを使用できません。 ■ あまりに多数のアクティビティがシステムで発生しました (レコードが処理される前に変更ジャーナルデータベースからパージされました)。 ■ データ破損が発生しました。 代わりに、アクセラレータは通常のファイルシステムスキャンを実行し、バックアップに含めるためのファイルおよびフォルダを判断します。 処置は必要ありません。レコードがパージされた場合は、現在のバックアップの完了とともに、新たな基準が作成されます。破損がある場合、その破損が検出されるとデータベースが再作成されます。アクセラレータは、次のバックアップで[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションを使用します。
not using change journal data for <%%s>: hard link or reparse point change detected	変更がハードリンクまたは再解析ポイントに相当する場合、アクセラレータは[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションを使用できません。なお、変更に対応するファイルおよびディレクトリの数にはかぎりがなく、NTFS の変更ジャーナルはそれらすべてを追跡しません。 処置は必要ありません。ハードリンクまたは再解析ポイントに新たな変更が発生しなければ、次のバックアップで[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションを使用できます。
not using change journal data for <%%s>: not supported with true image backups	[True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore information)]または[True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore information)]の[移動検出を行う (with move detection)]がポリシーで指定されています。ファイル処理しどのファイルが変更されたかを判断するため、NetBackup は通常のファイルシステムスキャンを実行し、バックアップに含めるファイルとフォルダを判断します。変更されたファイルを特定するために変更ジャーナルの問い合わせも行います。

NetBackup ジョブ詳細のメッセージ	説明
not using change journal data for <%%s>: invalid schedule type	アクセラレータは、[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)] オプションで、選択されているスケジュール形式をサポートしません。 [変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)] オプションは、増分バックアップ (累積または差分) または完全バックアップでサポートされます。完全バックアップでは、ポリシーの[属性 (Attributes)]タブで[アクセラレータを使用 (Use Accelerator)]を有効にする必要があります。
not using change journal data for <%%s>: path must be local and not contain directory junctions and/or symbolic links	バックアップ対象では、パスに再解析ポイントが含まれます (ディレクトリ接合点またはシンボリックリンク)。[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)] オプションは使用できません。NetBackup はディレクトリを正しくバックアップするために通常のファイルシステムスキャンを実行する必要があります。
not using change journal data for <%%s>: change journal setup is not complete (may still be in progress)	[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)] オプションが、最近有効に設定されました。[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]を最初に有効にした後、NetBackup クライアントが NTFS 変更ジャーナルを処理しそのデータベースを設定するために時間がかかる場合があります。 [変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)] オプションは、次のバックアップから使用できます。
not using change journal data for <%%s>: unable to locate journal data	[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)] オプションが、最近有効に設定されました。[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]を最初に有効にした後、NetBackup クライアントが NTFS 変更ジャーナルを処理しそのデータベースを設定するために時間がかかる場合があります。 [変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)] オプションは、次のバックアップから使用できます。
not using change journal data for <%%s>: invalid change journal data	1 つのボリュームに多くの変更が発生すると、NetBackup Client Service では内部データベースのサイズ増加が必要な場合があります。このため、データベースが無効になることがあります。 データベースのサイズ増加および NTFS 変更ジャーナルとの同期が行われると、データベースに有効マークが付されます。[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)] オプションは、次のバックアップで使用されます。
not using change journal data for <%%s>: unable to apply snapshot	スナップショットベースのバックアップでは、NetBackup はライブボリュームではなくスナップショットの変更ジャーナルデータベースを使用します。NetBackup がスナップショットのデータベースを開こうとしたとき、エラーが発生しました。 次回バックアップを実行するとき、NetBackup は新しいスナップショットを作成し、データベースはエラーなしで開きます。

NetBackup ジョブ詳細のメッセージ	説明
not using change journal data for <%%s>: no previous track log	アクセラレータを使用した前回の完全バックアップがありません。 NetBackup は、アクセラレータを使用した前回の完全バックアップがある場合に限り、アクセラレータ使用の完全バックアップで[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションをサポートします。
not using change journal data for <%%s>: not supported with regular full backups	[アクセラレータを使用する (Use Accelerator)]オプションは、ポリシーで有効に設定されていません。 完全バックアップでは、[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションを使用するために[アクセラレータを使用する (Use Accelerator)]が有効に設定されている必要があります。
not using change journal data for <%%s>: unable to validate change journal usage <reason=previous backup wasn't a successful backup>	バックアップが部分的に成功した場合 (状態コード 1)、次のアクセラレータによるバックアップでは[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションを使用できません。 NetBackup では、次のバックアップが成功した後で[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションを使用できます。
not using change journal data for <%%s>: not supported	ポリシーのバックアップ対象は Windows の変更ジャーナルでサポートされないリソースです。サポート外のリソースの例は FAT ボリュームや FAT32 ボリュームです。
not using change journal data for <%%s>: not supported for remote frozen images	バックアップはリモートの Frozen Image を使うように試みました。[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションはリモートの Frozen Image でサポートされません。
not using change journal data for <%%s>: not enabled	[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションが有効ではありません。
not using change journal data for <%%s>: not configured for use	[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションが有効ではありません。
not using change journal data for <%%s>: unable to determine volume guid	内部エラーが発生しました。バックアップするボリュームを調べて、ボリューム GUID が各ボリュームと関連付けられていることを確認する必要があります。

NetBackup ジョブ詳細のメッセージ	説明
not using change journal data for <%%s>: snapshot has not been applied (unable to track open files)	変更ジャーナルデータを使うためには、 NetBackup はバックアップボリュームのスナップショットを作成してオープンファイルを正しく識別して処理する必要があります。このエラーは NetBackup がボリュームのスナップショットを作成する前にバックアップが実行された場合に発生します。次のバックアップが起きる前にスナップショットが作成できれば、 NetBackup は次のバックアップで変更ジャーナルデータを使えることがあります。
not using change journal data for <%%s>: invalid policy type	[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)] オプションは標準または MS-Windows のポリシーでのみサポートされます。
not using change journal data for <%%s>: list of accelerator based backups does not match list of change journal based backups	クライアントで、 NetBackup は両方のアクセラレータバックアップと変更ジャーナルベースのバックアップを追跡します。これらのバックアップのリストが一致しなければ、次のいずれかが実行されます: ■ 変更ジャーナルを使わなかったアクセラレータバックアップが実行されました。 ■ アクセラレータを使わなかった変更ジャーナルベースのバックアップが実行されました。 どちらの場合も、次の完全バックアップを実行するまで[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションを使うことができません。
not using change journal data for <%%s>: previous backup had change journal data that was not complete (missing unscanned records)	変更ジャーナルデータベースのサイズは固定です: それらは一定数のレコードだけを格納できます。ボリュームで多くのアクティビティが行われれば、バックアップがレコードを処理する前に、レコードが変更ジャーナルデータベースからバージされる可能性があります。その場合、[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションを使用できません。処置は必要ありません。すべての条件を満たす場合、アクセラレータは次のバックアップで[変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)]オプションを使用します。
not using change journal data for <%%s>: not supported for non-local volumes / file systems	ポリシーのバックアップ対象はローカルボリュームではありません。たとえば、バックアップ対象は UNC パスを指定します。
not using change journal data for <%%s>: no forced rescan schedule configured	このメッセージはアクセラレータの完全バックアップの間にだけ表示されます。アクセラレータの完全バックアップの間に変更ジャーナルデータを使うためには、[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプションを使用するポリシーのスケジュールが必要となります。

NetBackup ジョブ詳細のメッセージ	説明
not using change journal data for <%s>: forcing rescan, each file will be read in order to validate checksums	このメッセージは完全バックアップの間だけ、ポリシーが[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプションを使用して構成されていない場合に 표시됩니다。このメッセージが表示される前に、別のメッセージが変更ジャーナルデータをなぜ使うことができないか説明します。

ネットワークを介して転送されたアクセラレータバックアップのデータ量の報告について

アクセラレータバックアップの報告では、一部の NetBackup コマンドは、各アクセラレータバックアップについて、ネットワークを介して転送されたデータ量を報告できます。通常、転送されたデータ量はアクセラレータバックアップイメージのサイズよりも大幅に小さくなります。

各アクセラレータバックアップについて、NetBackup は、クライアント(または VM)の変更されたブロックを前回のバックアップから変更されていないデータと組み合わせて、バックアップイメージを合成します。ただし、NetBackup はバックアップの発生時に変更されたデータのみをネットワーク経由で送信します。その結果として生じるバックアップイメージは、ネットワークを移動するバックアップデータの量よりも大幅に大きくなる場合があります。バックアップの報告では、バックアップイメージのサイズとネットワークを介して転送されたデータ量を区別することが重要です。

アクセラレータバックアップでは、ネットワーク転送されたデータを bpdjobs、bpimagelist、bpclimagelist という NetBackup コマンドの出力に表示させることができます。

表 20-28 には、これらのコマンドのデフォルトの場所がリストされます。

表 20-28 bpdjobs、bpimagelist、bpclimagelist のデフォルトの場所

コマンド	デフォルトの場所
bpdjobs、bpimagelist	Windows の場合: <code>install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥</code> UNIX および Linux の場合 <code>/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/</code>

コマンド	デフォルトの場所
bpclimagelist	Windows の場合: install_path¥NetBackup¥bin¥ UNIX および Linux の場合 /usr/opensv/netbackup/bin/

次の例では、bpimagelist コマンドを使って、acmevm2 のバックアップの結果を示しています。

```
bpimagelist -backupid acmevm2
```

出力例は次のとおりです。

```
IMAGE acmevm2 0 0 12 acmevm2 accl_vmware 40 *NULL* root f 0 9 14344
79628 558 2147483647 0 0 7799632 28196 1 2 0 accl_vmware_1434479628_FULL.f *NULL
* *NULL* 0 1 0 0 0 *NULL* 0 0 1 0 0 1434479628 1434479628 *NULL* 0 0 0 *NULL* 9
0 0 3398732 0 0 *NULL* *NULL* 0 1434479620 0 0 *NULL* *NULL* 0 0 0 225792
HISTO 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
FRAG 1 -1 3319 76 0 0 0 @aaaab acmevm6.acme.com 262144 0 0 -1 102
4 1;PureDisk; acmevm6.acme.com;msdp_dp;PureDiskVolume;0 2147483647
0 65545 0 0 0 6 0 1434480186 1 1 *NULL* *NULL* 0 0
FRAG 1 1 7796313 0 0 0 0 @aaaab acmevm6.acme.com 262144 0 0 -1 10
28 1;PureDisk; acmevm6.acme.com;msdp_dp;PureDiskVolume;0 214748364
7 0 65545 0 0 0 6 0 1434480186 1 1 *NULL* *NULL* 0 0
```

この例では、キロバイト単位のバックアップイメージサイズは **7799632** で、ネットワークを介して転送されたデータ量は **225792** です。

次のコマンドを使って、アクセラレータバックアップでネットワークを介して転送されたデータ量を表示できます。

bpimagelist

```
bpimagelist -backupid backup_id [-l | -L | -json | -json_compact]
```

括弧 [] は省略可能な要素を示し、垂直線 | は括弧内のオプションのいずれか 1 つのみを選択できることを示します。

表 20-29 では、ネットワーク転送されたデータのフィールドが bpimagelist 出力でどのように表示されるかについて説明します。

表 20-29 アクセラレータバックアップでネットワーク転送されたデータ量を表示する bpimagelist オプション

bpimagelist オプション	ネットワーク転送されたデータのフィールドが表示される方法
オプションなし	このフィールドはラベル付けされていません。たとえば、225792 と入力します。 この項の前半に記載されている bpimagelist の例の出力を参照してください。
-l	このフィールドはラベル付けされていません (オプションなしと同じ)。たとえば、225792 と入力します。
-L	このフィールドはラベル付けされています。例: Kilobytes Data Transferred: 225792
-json	このフィールドはラベル付けされています。例: "kilobytes_data_transferred": 225792,
-json_compact	このフィールドはラベル付けされています。例: "kilobytes_data_transferred":225792,

bpdbjobs

```
bpdbjobs -jobid job_id -report -most_columns
```

または

```
bpdbjobs -jobid job_id -report -all_columns
```

ネットワーク転送されたデータのフィールドは出力の最後に表示されます。

bpclimagelist

```
bpclimagelist -client client_name
```

このコマンドは、通常でアクセラレータバックアップのイメージサイズを表示するフィールドにネットワーク転送されたデータのみを表示します。このコマンドを使ってネットワーク転送されたデータを表示するには、NetBackup 設定を構成する必要があります。

p.749 の「[NetBackup コマンド出力でのネットワーク転送されたデータとのアクセラレータのイメージサイズの置換](#)」を参照してください。

これらのコマンドについて詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』の該当ページを参照してください。

NetBackup コマンド出力でのネットワーク転送されたデータとのアクセラレータのイメージサイズの置換

bpimagelist、bpdjobs、bpclimagelist の出力を構成して、バックアップイメージサイズの代わりに、ネットワークを介して転送されたアクセラレータバックアップのデータの量を表示できます。

アクセラレータのイメージサイズを表示するデフォルトの bpimagelist 出力を次に示します(円で囲まれた値 **7799632** を参照)。ネットワーク転送されたデータはこの出力の終端部に表示されます (**225792**)。

```
IMAGE acmevm2 0 0 12 acmevm2 accl_vmware 40 *NULL* root f 0 9 14344
79628 558 2147483647 0 0 7799632 28196 1 2 0 accl_vmware_1434479628_FULL.f *NULL
* *NULL* 0 1 0 0 0 *NULL* 0 0 1 0 0 1434479628 1434479628 *NULL* 0 0 0 *NULL* 9
0 0 3398732 0 0 *NULL* *NULL* 0 1434479620 0 0 *NULL* *NULL* 0 0 0 225792
HISTO 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
FRAG 1 -1 3319 76 0 0 0 @aaaab acmevm6.acme.com 262144 0 0 -1 102
4 1;PureDisk; acmevm6.acme.com;msdp_dp;PureDiskVolume;0 2147483647
0 65545 0 0 0 6 0 1434480186 1 1 *NULL* *NULL* 0 0
FRAG 1 1 7796313 0 0 0 0 @aaaab acmevm6.acme.com 262144 0 0 -1 10
28 1;PureDisk; acmevm6.acme.com;msdp_dp;PureDiskVolume;0 214748364
7 0 65545 0 0 0 6 0 1434480186 1 1 *NULL* *NULL* 0 0
```

NetBackup コマンド出力を構成して、イメージサイズフィールドにネットワーク転送されたデータを表示できます。出力で、イメージサイズの値がネットワーク転送されたデータの値に置換されます(次の例を参照)。これで、コマンド出力からイメージサイズを読み取るスクリプトによって、ネットワーク転送されたデータの量が読み取られるようになります。

次の bpimagelist 出力では、イメージサイズフィールドにネットワーク転送されたデータ (**225792**) が表示されます。

```
IMAGE acmevm2 0 0 12 acmevm2 accl_vmware 40 *NULL* root f 0 9 14344
79628 558 2147483647 0 0 225792 28196 1 2 0 accl_vmware_1434479628_FULL.f *NULL
* *NULL* 0 1 0 0 0 *NULL* 0 0 1 0 0 1434479628 1434479628 *NULL* 0 0 0 *NULL* 9
0 0 3398732 0 0 *NULL* *NULL* 0 1434479620 0 0 *NULL* *NULL* 0 0 0 225792
HISTO 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
FRAG 1 -1 3319 76 0 0 0 @aaaab acmevm6.acme.com 262144 0 0 -1 102
4 1;PureDisk; acmevm6.acme.com;msdp_dp;PureDiskVolume;0 2147483647
0 65545 0 0 0 6 0 1434480186 1 1 *NULL* *NULL* 0 0
FRAG 1 1 7796313 0 0 0 0 @aaaab acmevm6.acme.com 262144 0 0 -1 10
28 1;PureDisk; acmevm6.acme.com;msdp_dp;PureDiskVolume;0 214748364
7 0 65545 0 0 0 6 0 1434480186 1 1 *NULL* *NULL* 0 0
```

メモ: これらのコマンドのラベル付き出力 (たとえば、bpimagelist の -L オプション) でも同じ変更が発生します。たとえば、Kilobytes フィールドには、アクセラレータバックアップのイメージサイズではなく、転送データ値 (この例では **225792**) が表示されます。

bpimagelist、bpdbjobs、bpclimagelist のアクセラレータのイメージサイズフィールドのネットワーク転送されたデータの報告を有効にする方法

- ◆ bpsetconfig コマンドを使って、出力の変更を有効にします。

bpclimagelist コマンドに対してこの変更を有効にするには、プライマリサーバーで bpsetconfig コマンドを入力します。bpimagelist または bpdbjobs に対してこの変更を有効にするには、bpimagelist または bpdbjobs を実行するサーバー上で bpsetconfig コマンドを入力します。

報告対象のアクセラレータバックアップの形式に基づいて使う bpsetconfig コマンドについては、表 20-30 を参照してください。

表 20-30 bpimagelist、bpclimagelist、bpdbjobs 出力のアクセラレータのイメージサイズフィールドのネットワーク転送されたデータの報告を有効にする方法

報告対象のバックアップ形式	入力するコマンド
アクセラレータ仮想マシンの増分バックアップ (VMware と Hyper-V)	Windows の場合 <pre>echo REPLACE_IMAGE_SIZE_WITH_DATA_TRANSFERRED = REPLACE_IMAGE_SIZE_FOR_ACCL_INC_VIRTUAL install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpsetconfig</pre> UNIX および Linux の場合 <pre>echo "REPLACE_IMAGE_SIZE_WITH_DATA_TRANSFERRED = REPLACE_IMAGE_SIZE_FOR_ACCL_INC_VIRTUAL" /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpsetconfig</pre>
アクセラレータ仮想マシンのすべてのバックアップ (VMware と Hyper-V、完全と増分)	Windows の場合 <pre>echo REPLACE_IMAGE_SIZE_WITH_DATA_TRANSFERRED = REPLACE_IMAGE_SIZE_FOR_ACCL_ALL_VIRTUAL install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpsetconfig</pre> UNIX および Linux の場合 <pre>echo "REPLACE_IMAGE_SIZE_WITH_DATA_TRANSFERRED = REPLACE_IMAGE_SIZE_FOR_ACCL_ALL_VIRTUAL" /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpsetconfig</pre>

報告対象のバックアップ形式	入力するコマンド
アクセラレータのすべての増分バックアップ (物理クライアントと仮想マシン)	Windows の場合 <pre>echo REPLACE_IMAGE_SIZE_WITH_DATA_TRANSFERRED = REPLACE_IMAGE_SIZE_FOR_ACCL_INC_ALL install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpsetconfig</pre> UNIX および Linux の場合 <pre>echo "REPLACE_IMAGE_SIZE_WITH_DATA_TRANSFERRED = REPLACE_IMAGE_SIZE_FOR_ACCL_INC_ALL" /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpsetconfig</pre>
すべてのアクセラレータバックアップ (完全と増分、物理クライアント、仮想マシン)	Windows の場合 <pre>echo REPLACE_IMAGE_SIZE_WITH_DATA_TRANSFERRED = REPLACE_IMAGE_SIZE_FOR_ACCL_ALL_ALL install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpsetconfig</pre> UNIX および Linux の場合 <pre>echo "REPLACE_IMAGE_SIZE_WITH_DATA_TRANSFERRED = REPLACE_IMAGE_SIZE_FOR_ACCL_ALL_ALL" /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpsetconfig</pre>

コマンド出力をデフォルト設定にリセットする方法

- ◆ アクセラレータイメージサイズフィールドのネットワーク転送されたデータの報告を無効にする(デフォルトに戻る)には、次を入力します。

Windows の場合

```
echo REPLACE_IMAGE_SIZE_WITH_DATA_TRANSFERRED =  
REPLACE_IMAGE_SIZE_DISABLED |  
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpsetconfig
```

UNIX および Linux の場合

```
echo "REPLACE_IMAGE_SIZE_WITH_DATA_TRANSFERRED =  
REPLACE_IMAGE_SIZE_DISABLED" |  
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpsetconfig
```

[Windows 重複排除ボリュームの最適化バックアップを有効化 (Enable optimized backup of Windows deduplicated volumes)]

Microsoft データ重複除去ファイルシステムで最適化されたファイルの最適化されたバックアップを有効にするには、この属性を選択します。

p.752 の「[Microsoft データ重複除去ファイルシステムのバックアップとリストアについて](#)」を参照してください。

クライアントが **Microsoft** データ重複除去ファイルシステムを設定している場合、**NetBackup** は最適化されたファイルの最適化されたバックアップを実行します。(最適化されていないファイルは、完全なそのままのファイルとしてバックアップされます)。クライアントが **Microsoft** データ重複排除ファイルシステムを持たない場合、通常のファイルバックアップが行われます。

このオプションを選択していない場合でも、**NetBackup** はファイルをバックアップしますが、そのままのファイルとしてバックアップします。最適化されたファイルの最適化されていないバックアップは効率的ではありません。各ファイルを再構築するために、余分や時間や余分なディスクアクティビティが必要となるためです。ただし、**NetBackup** はファイルを再構築しないため、リストアは高速です(バックアップの種類に関係なく、リストアは最適化されません)。

メモ: 管理しやすくするため、重複排除ボリュームをバックアップするために別のポリシーを作成することを推奨しています。

完全バックアップのみが最適化されます。増分バックアップやユーザーバックアップは、完全なそのままのファイルとしてバックアップされます。

このオプションは、データ重複除去ファイルシステムをサポートする **Microsoft** オペレーティングシステムでサポートされます。サポート対象の **Microsoft** オペレーティングシステムについては、**Microsoft** 社のマニュアルを参照してください。

p.755 の「[Microsoft データ重複除去ファイルシステムのバックアップの設定](#)」を参照してください。

p.687 の「[ポリシーの\[属性 \(Attributes\)\]タブ](#)」を参照してください。

Microsoft データ重複除去ファイルシステムのバックアップとリストアについて

Microsoft データ重複除去ファイルシステムは、次の 2 つの状態のいずれかのファイルに保存します。

最適化されていないファイル	最適化(つまり、ファイルシステム内のデータ重複排除)の対象ではないファイル。
---------------	--

最適化されたファイル	解体されたファイル、およびそれらの一意のデータセグメントのみがファイルシステムに格納されます。
------------	---

NetBackup は、次に示すように、**Microsoft** データ重複除去ファイルシステムの最適化されたバックアップまたは最適化されていないバックアップのいずれかを実行できます。

表 20-31 Microsoft データ重複除去ファイルシステムのバックアップの種類

型	説明
最適化されていない バックアップ	最適化されていないバックアップは、[Windows の重複排除されたボリュームの最適化バックアップを有効化する (Enable optimized backup of Windows deduplicated volumes)]ポリシー属性が選択されていないバックアップです。 NetBackup は最適化されたファイルを再構築し、完全なそのままのファイルとしてバックアップします。データ複製ファイルシステムのストレージの保存はバックアップで保持されません。最適化されたファイルはデータ重複排除ファイルシステムで最適化されたまま保持されます。最適化されていないファイルは、完全なそのままのファイルとしてバックアップされます。 NetBackup では、Microsoft データ重複除去ファイルシステムの最適化されていないバックアップのあらゆる種類のストレージの宛先がサポートされます。

型	説明
バックアップの最適化	最適化されたバックアップは、[Windows の重複排除されたボリュームの最適化バックアップを有効化する (Enable optimized backup of Windows deduplicated volumes)]ポリシー属性が選択されているバックアップです。完全バックアップのみが最適化されます。増分バックアップおよびユーザーバックアップの場合、バックアップされる各ファイルが再構築され、完全な形式でバックアップされます。 最適化されたファイルの場合、NetBackup ではチャンクストアおよびチャンクストア内のセグメントにファイルをマップするメタデータがバックアップされます。チャンクストアとは、ファイルを構成するデータセグメントが保存されるファイルシステム内の場所のことです。最適化されていないファイルの場合、NetBackup では完全なそのままのファイルとしてバックアップされます。 次に、Microsoft データ重複除去ファイルシステムの最適化されたバックアップの属性を示します。 ■ ポリシーは MS-Windows のポリシー形式である必要があります。 ■ ストレージの宛先には、個別バックアップ機能でサポートされる任意のディスクストレージを指定できます。 ■ [サポートされている Windows ファイルシステムで最適化バックアップを有効にする (Enable Optimized Backup for supported Windows File Systems)]ポリシー属性が選択されている必要があります。 p.751 の「[Windows 重複排除ボリュームの最適化バックアップを有効化 (Enable optimized backup of Windows deduplicated volumes)]」を参照してください。 ■ C: システムドライブはバックアップできません。Microsoft データ重複除去ファイルシステムはシステムドライブに使用できません。 ■ [True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore information)]ポリシー属性がこのポリシーに対し選択されていないことを確認します。DDodge added 8/8/16 per Laraine/Robert Mencini email per Knowledge Management feedback TIR と最適化バックアップは混在することはできません。このオプションを選択すると、バックアップのデフォルトは最適化されていないバックアップになります。 Microsoft データ重複除去ファイルシステムのバックアップには次の手順をお勧めします。 ■ 重複排除ボリュームの完全バックアップを実行する前に、Microsoft 最適化ジョブおよび Microsoft ガーベジコレクションジョブを実行する。これを行うための 1 つの方法は、Windows サーバーマネージャで重複排除スケジュールを設定することです。 ■ ボリューム全体をリストアする場合は、ボリュームのディスクイメージバックアップを設定してください。ディスクイメージバックアップは時間を節約し、ストレージ要件が既存のボリュームによって確実に満たされます。 p.829 の「Windows ディスクイメージ (raw) バックアップのパス規則」を参照してください。 最適化されたバックアップは、データ重複除去ファイルシステムをサポートする Microsoft オペレーティングシステムでサポートされます。サポート対象の Microsoft オペレーティングシステムについては、Microsoft 社のマニュアルを参照してください。

最適化されたバックアップをリストアするには、バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースの[最適化バックアップからリストア (Restore from Optimized Backup)]オプションを使います。FID3264; 7.6; Siva; Mike Gferrer

最適化バックアップからのリストアに関する以下の項目に注意してください。

- **Microsoft** データ重複除去ファイルシステムのみにリストアできる。
- **Microsoft** の重複排除 API の使用による **Microsoft** データ重複除去ファイルシステムの最適化されたバックアップからのリストアは低速です。まず、イメージは **NFS** を通してマウントする必要があります。その後、イメージには不十分かもしれない量でデータを要求する **Microsoft** の重複排除 API によってアクセスする必要があります。ドライブ全体をリストアする処理には非常に長い時間がかかる可能性があります。
したがって、**NetBackup** ではすべてのファイルが完全なそのまのファイルとしてリストアされます(つまり、最適化されない)。その後、ファイルシステムの次にスケジュールされた最適化ジョブでファイルが最適化されるか、または手動で最適化を開始できます。最適化されていない状態でリストアされるファイルに適切なストレージがあることを確認する必要があります。

Microsoft データ重複除去ファイルシステムのバックアップの設定

NetBackup で **Microsoft** データ重複除去ファイルシステムの最適化されたバックアップを実行するには、次のように **Windows** の特定のソフトウェアをインストールして設定する必要があります。

- **Microsoft Server for NFS** を **NetBackup** メディアサーバーにインストールする必要があります。**Windows** サーバーマネージャを使用してロールを追加します。**NFS** サービスを有効にします。(デフォルトでは、**NFS** サービスは有効になっていません。)
- **Microsoft Client for NFS** をバックアップ対象の **Windows** ホストにインストールする必要があります。**Windows** サーバーマネージャを使用してロールを追加します。**Client for NFS** がないと、リストアを実行できません。
- 重複排除ロールは、**Windows** サーバーマネージャインターフェースを使用して **Windows** ホストにインストールする必要があります。

また、**NetBackup Client Service** が管理者として実行されるように構成されているかを確認してください。そうでない場合、最適化バックアップからのリストアは失敗します。

[キーワード句 (Keyword phrase)](ポリシー属性)

[キーワード句 (Keyword phrase)]属性は、**NetBackup** がポリシーに基づくすべてのバックアップまたはアーカイブに関連付けられる句です。キーワード句がサポートされているのは、**Windows** および **UNIX** クライアントインターフェースだけです。

クライアントは複数のポリシーに同じキーワード句を使用できます。同じキーワード句を使用することで、複数の関連するポリシーのバックアップを結び付けることができます。たとえば、別々のポリシーを必要としながらも類似のデータが含まれている複数のクライアントのバックアップに、キーワード句「legal department documents」を使用します。

このキーワード句の最大長は 128 文字です。空白やピリオドを含め、すべての印字可能な (printable) 文字 (ASCII) を使用できます。デフォルトでは、キーワード句は空白です。

また、クライアントでは、ユーザーバックアップまたはユーザーアーカイブ用のキーワード句も指定できます。ユーザー定義のキーワード句は、ポリシー句より優先されます。

[Snapshot Client]および[Replication Director](ポリシー属性)

Snapshot client の属性は NetBackup Enterprise Client ライセンスがインストールされているときに利用可能です。スナップショットとは、ある特定の時点の、クライアントボリュームの読み取り専用のディスクベースコピーです。

スナップショットの設定について詳しくは、次のガイドを参照してください。

- [NetBackup NAS 管理者ガイド](#)
- 『[NetBackup Snapshot Manager for Data Center 管理者ガイド](#)』
- 『[NetBackup Replication Director ソリューションガイド](#)』
- 『[NetBackup for VMware 管理者ガイド](#)』
- 『[NetBackup for Hyper-V 管理者ガイド](#)』

Block Level Incremental (BLI) バックアップを実行する (ポリシー属性)

[Block Level Incremental (BLI) バックアップを実行する (Perform block level incremental backups)]属性を使用すると、NetBackup は VMware 仮想マシンと Oracle または DB2 データベースのファイルの変更されたデータブロックのみをバックアップできます。

詳しくは、該当する NetBackup データベースのエージェントガイドまたは『[NetBackup for VMware 管理者ガイド](#)』を参照してください。

レプリケーションディレクタを使用 (ポリシー属性)

レプリケーションディレクタのバックアップポリシーを構成する場合は、[レプリケーションディレクタを使用 (Use Replication Director)]属性を有効にします。このポリシー属性を有効にすることによって、NetBackup はレプリケーションディレクタが必要とするその他のポリシー属性を有効にします。

- スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)
ポリシーがディスクアレイのスナップショットを作成できるようにします。
- インスタントリカバリ用または SLP 管理用にスナップショットを保持する (Retain snapshot for Instant Recovery or SLP management)
バックアップが完了した後にポリシーがスナップショットを保持できるようにします。
- オフホストバックアップを実行する (Perform off-host backup)
このオプションは NDMP ポリシーに対し、次の項目とともに自動的に選択されます。
 - [データムーバー (Data Mover)]の使用

- マシンの選択としての NDMP
- [レプリケーションディレクタ (Replication Director)]のオプション
[オプション (Options)]ボタンをクリックして、[レプリケーションディレクタオプション (Replication Director Options)]ダイアログボックスとデフォルトの[構成パラメータ (Configuration Parameters)]が次のように表示されていることを確認します。
 - [スナップショット形式 (Snapshot Type)]
 - [自動 (Auto)](デフォルト): OpenStorage パートナーは、利用できる最適なスナップショットテクノロジーを使用してスナップショットを作成します。
 - [差分 (Differential)]: OpenStorage パートナーは、ソースに完全に依存するスナップショットを作成します。このパラメータはコピーオンライトテクノロジーに基づいています。ブロックが修正されると、デバイスはキャッシュオブジェクトを作成して、スナップショットのオリジナルのブロックを保持します。
 - [Plex (Plex)]: OpenStorage パートナーは、ソースのスナップショットから完全に独立しているスナップショットを作成します。このオプションは、ミラー中断テクノロジーに基づいています。ミラーデバイスがソースに接続されている場合は、ミラーデバイスの内容はソースデバイスと同一です。2 つのデバイス間の関係を断つと、ミラーデバイスはソースデバイスから分離されます。ミラーデバイスは特定の時点のコピーとして機能します。
 - [クローン (Clone)]: OpenStorage パートナーはボリュームの独立したコピーを作成します。このコピー処理は、全体をコピーする必要があるため、多少時間がかかることがあります。作成されるスナップショットはソースから独立しています。
 - 最大スナップショット数 (Maximum Snapshots)
 - 一度に保持されるインスタントリカバリスナップショットの最大数を設定します。最大数に達すると、新しいスナップショットが作成されるたびに一番古いスナップショットが削除される、スナップショットのローテーションが発生します。
 - [SLP 保持による管理 (Managed by SLP retention)]は、[固定 (Fixed)]または[コピー後に期限切れにする (Expire after Copy)]の保持が現在 SLP で選択されている場合に自動選択されます。

レプリケーションディレクタの構成に関する追加情報については、『[NetBackup Replication Director ソリューションガイド](#)』を参照してください。

p.1043 の「[NetBackup Replication Director について](#)」を参照してください。

[ポリシーの検証 (Validate Policy)]ダイアログボックス

[ポリシーの検証 (Validate Policy)]ダイアログボックスは、レプリケーションディレクタに構成されている Exchange、Oracle、VMware のポリシーではないバックアップポリシーに表示されます。ダイアログボックスは、ポリシーを保存して閉じるために[OK]を選択したときに表示されます。

バックアップポリシーが正常に動作することを確認するために、NetBackup は選択する検証レベルに従ってポリシーを検証します。

ポリシーの検証レベルを選択します。

- [完了 (Complete)]
プロビジョニングを使用して下位ストレージの完全トポロジー検証を実行する (Performs full topology validation on underlying storage with provisioning)
プロビジョニングは、データが書き込まれるときに NetApp ストレージ領域を各ボリュームまたは LUN に動的に割り当てます。
NetBackup は、リソースプールメンバーのストレージ領域を調べ、SnapVault と SnapMirror のアクセスを確認します。
- 基本 (Basic)
プロビジョニングを使わずに下位ストレージでトポロジー検証のサブセットを実行する (Performs a subset of topology validation on underlying storage without provisioning)
NetBackup は、[バックアップ対象 (Backup Selections)]リストに示されるデータのスナップショットをクライアントが確実に実行できるように、すべてのポリシーを確認します。
NetBackup は、ライセンスの確認、SnapVault と SnapMirror のアクセス状態の確認、CIFS/NFS の状態の確認を行います。
- なし
トポロジー検証もプロビジョニングも実行しない (No topology validation or provisioning)
NetBackup はトポロジーの確認も下位ストレージのプロビジョニングも実行しません。

ポリシー検証で問題が見つからなければ、ポリシーを保存して閉じます。検証で問題が見つかり、NetBackup はエラーコードと説明を含むメッセージを表示します。

スナップショットバックアップを実行する (ポリシー属性)

[スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)]属性は、ポリシーに示されるボリュームのスナップショットをポリシーが確実に作成できるようにします。

[Microsoft Exchange 属性 (Microsoft Exchange Attributes)](ポリシー属性)

Microsoft Exchange の属性では、Exchange データベース可用性グループのために使用するデータベースバックアップソースを指定できます。

『[NetBackup for Exchange Server 管理者ガイド](#)』を参照してください。

[スケジュール (Schedules)] タブ

[スケジュール (Schedules)] タブで定義するスケジュールは、選択したポリシーでバックアップを行うタイミングを決定します。また、各スケジュールには、バックアップが保持される期間などのさまざまな条件も含まれます。

ポリシーの [スケジュール (Schedules)] タブから次の操作を実行できます。

- 新しいスケジュールを作成する場合、[新規 (New)] をクリックします。
- スケジュールを編集する場合、そのスケジュールを選択して [変更 (Change)] をクリックします。
- スケジュールを削除する場合、そのスケジュールを選択して [削除 (Delete)] をクリックします。

スケジュールの属性は、次のタブに表示されます。

[属性 (Attributes)] タブ

作業を実行する時刻および間隔を、スケジュールの他の属性とともにスケジュールします。

p.759 の「[スケジュールの \[属性 \(Attributes\)\] タブ](#)」を参照してください。

[開始時間帯 (Start Window)] タブ

作業を実行する時刻を曜日ごとにスケジュールします。

p.793 の「[\[開始時間帯 \(Start Window\)\] タブ](#)」を参照してください。

[日のエクスクルード (Exclude Days)] タブ

ジョブを実行できない日付を指定します。

p.796 の「[スケジュールからの日付の除外](#)」を参照してください。

[含める日 (Include Dates)] タブ

特定の日付、毎週の特定の曜日または毎月の特定の日を指定して、作業の実行日をスケジュールします。(このタブは、スケジュール形式に [カレンダー (Calendar)] を選択した場合にだけ表示されます。)

p.797 の「[\[含める日 \(Include Dates\)\] タブ](#)」を参照してください。

スケジュールの [属性 (Attributes)] タブ

スケジュールの [属性 (Attributes)] タブは、ジョブの実行時以降のスケジュール情報とその他の構成オプションを両方とも含んでいます。

図 20-9 スケジュールの[属性 (Attributes)]タブ

The screenshot shows the 'Add Schedule - Policy Test_Pol_1' dialog box. The 'Attributes' tab is selected. The 'Name' field is empty. The 'Type of backup' is set to 'Full Backup'. The 'Destination' section has several options: 'Multiple copies' (unchecked), 'Override policy storage selection' (unchecked), 'Override policy volume pool' (unchecked, set to 'NetBackup'), and 'Override media owner' (unchecked). The 'Retention' is set to '2 weeks (Retention Level 1)'. The 'Media multiplexing' is set to '1'. The 'Schedule type' is set to 'Frequency' with a value of '1' and 'weeks'. The 'Instant Recovery' section has 'Snapshots and copy snapshots to a storage unit' selected. The 'Add', 'OK', 'Cancel', and 'Help' buttons are at the bottom.

次の項では、スケジュールの[属性 (Attributes)]タブのオプションについて説明します。

[名前 (Name)](スケジュール属性)

[名前 (Name)]属性にスケジュールの名前を入力して指定します。スケジュール名は、画面上およびスケジュールに関するメッセージで表示されます。

p.1096 の「[NetBackup 命名規則](#)」を参照してください。

スケジュールが、ベーシックディスクステージングストレージユニットの一部として作成された再配置スケジュールである場合、スケジュール名は変更できません。スケジュール名は、デフォルトでストレージユニットの名前になります。

p.597 の「[ステージングバックアップについて](#)」を参照してください。

[バックアップ形式 (Type of backup)](スケジュール属性)

[バックアップ形式 (Type of backup)]属性は、そのスケジュールが制御するバックアップ形式を指定します。リストからバックアップ形式を選択します。リストには、現在のポリシーに適用されるバックアップ形式だけが表示されます。

スケジュールが、ベーシックディスクステージングストレージユニットの一部として作成された再配置スケジュールである場合、バックアップ形式を選択する必要はありません。

表 20-32 は、NetBackup で標準のバックアップの形式を記述します。表 20-33 および「データベースエージェントのバックアップ形式」は NetBackup で利用可能なその他のバックアップ形式を記述します。

表 20-32 標準のバックアップ形式

項目	説明
完全バックアップ (Full Backup)	ポリシーのバックアップ対象リストで指定されたすべてのファイルをバックアップします。ファイルは、それらのファイルが最後に変更またはバックアップされたタイミングに関係なくバックアップされます。完全バックアップは、スケジュールの条件に従って自動的に行われます。増分バックアップを実行する場合、完全なリストアを行うには、完全バックアップもスケジュールする必要があります。raw パーティションのバックアップ (フォーマットされたパーティションのみ) のポリシーを構成する場合は、このオプションを使います。
累積増分バックアップ (Cumulative Incremental Backup)	バックアップ対象リストで指定されたファイルのうち、最後の完全バックアップ以降に変更されているファイルをバックアップします。バックアップが 1 度も行われていない場合、すべてのファイルのバックアップが行われます。累積増分バックアップは、スケジュールの条件に従って自動的に行われます。完全なリストアを行うには、最後の完全バックアップおよび最後の累積増分バックアップが必要です。 アーカイブビットに基づいて増分バックアップを行う場合 (デフォルト)、同じ Windows ポリシー内で、差分増分バックアップと累積増分バックアップの組み合わせを使用しないでください。 デフォルトでは、ファイル作成と完全バックアップまたは差分増分バックアップの時間差が 5 分未満の場合、差分増分バックアップまたは累積増分バックアップは予想外の結果となることがあります。バックアップは正常ですが、追加ファイルがバックアップされます。 p.763 の「増分バックアップについて」を参照してください。
差分増分バックアップ (Differential Incremental Backup)	最後の正常な増分 (差分または累積) バックアップまたは完全バックアップ以降に変更されているファイルをバックアップします。バックアップが 1 度も行われていない場合、すべてのファイルのバックアップが行われます。差分増分バックアップは、スケジュールの条件に従って自動的に行われます。完全なリストアを行うには、最後の完全バックアップ、最後の累積増分バックアップ、および最後の完全バックアップ以降に行われたすべての差分増分バックアップが必要です。 デフォルトでは、ファイル作成と完全バックアップまたは差分増分バックアップの時間差が 5 分未満の場合、差分増分バックアップまたは累積増分バックアップは予想外の結果となることがあります。バックアップは正常ですが、追加ファイルがバックアップされます。 p.763 の「増分バックアップについて」を参照してください。

項目	説明
ユーザーバックアップ (User Backup)	ユーザーバックアップは、クライアントの[バックアップ、アーカイブおよびリストア (Backup, Archive, and Restore)]インターフェース経由でユーザーによって開始されます。ユーザーバックアップでは、ユーザーが指定したすべてのファイルをバックアップします。ユーザーは、スケジュールの[開始時間帯 (Start Window)]タブで許可されている時間帯だけにバックアップを開始できます。 ユーザーがバックアップを開始するには、ポリシーにユーザーバックアップ形式のスケジュールが含まれている必要があります。 カタログアーカイブにはこのバックアップ形式を使います。 p.768 の「ユーザースケジュールについての考慮事項」を参照してください。 p.921 の「カタログアーカイブポリシーの作成」を参照してください。
ユーザーアーカイブ (User Archive)	ユーザーアーカイブは、クライアントの[バックアップ、アーカイブおよびリストア (Backup, Archive, and Restore)]インターフェース経由でユーザーによって開始されます。ユーザーアーカイブバックアップでは、まずユーザーが指定したファイルのバックアップが行われます。バックアップが正常に完了すると、アーカイブによってファイルがローカルディスクから削除されます。アーカイブバックアップは、将来使用できるようにコピーを保持したまま、ディスク領域を解放します。コピーは、保持期間が満了するまで保存されます。ユーザーは、スケジュールの[開始時間帯 (Start Window)]タブで指定されている時間帯だけにアーカイブを開始できます。 ユーザーがアーカイブを開始するには、ポリシーにユーザーアーカイブ形式のスケジュールが含まれている必要があります。 メモ: NetBackup 管理者は、ユーザーがクライアントのファイルをアーカイブする前に、クライアントの完全バックアップが存在することを確認する必要があります。

表 20-33 は NetBackup Vault をインストールすると利用可能なバックアップ形式を記述します。

表 20-33 NetBackup Vault バックアップ形式

項目	説明
自動 Vault (Automatic Vault)	Vault ポリシーにのみ適用されます。このオプションではバックアップは実行されません。Vault ポリシーのバックアップ対象リストに指定されたコマンドが実行されます。これによって、スケジュールされた自動 Vault セッション、または Vault 取り出し操作が開始されます。Vault のライセンスを取得済みの場合だけ使用できます。 p.864 の「Vault ポリシーの作成」を参照してください。

項目	説明
Vault カタログバックアップ (Vault Catalog Backup)	Vault で使用されるカタログバックアップポリシーのスケジュールに使用します。Vault のライセンスを取得済みの場合だけ使用できます。 この形式を選択する場合、次の 2 つのスケジュール属性の組み合わせのうち、いずれか 1 つを構成する必要があります。この構成を行わない場合、スケジュールを保存できません。 ■ [コピーを複数作成する (Multiple copies)]をチェックして構成する。 ■ [ポリシーストレージの選択を上書きする (Override policy storage selection)]および[ポリシーボリュームプールを上書きする (Override policy volume pool)]をチェックし、[保持 (Retention)]を指定する。 メモ: ストレージユニットの選択項目として[任意 (Any_available)]を選択しないでください。

データベースエージェントのバックアップ形式

各データベースエージェントにはスケジュール用に一意のバックアップ形式の専用セットがあることが多いです。詳しくは、エージェントに付属する [NetBackup のガイド](#)を参照してください。

[NetBackup のマニュアルセット](#)

増分バックアップについて

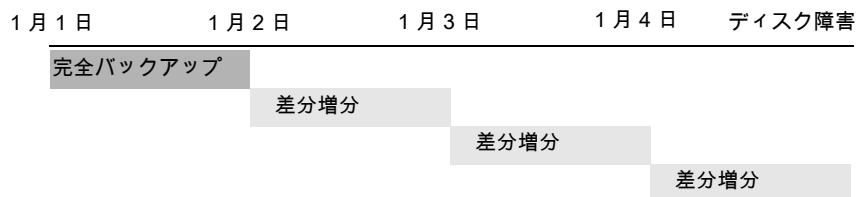
次の例では、一連の完全バックアップおよび増分バックアップに含まれるデータを示します。

差分増分バックアップでは、最後の完全バックアップまたは差分増分バックアップから変更されたデータをバックアップします。

メモ: 増分バックアップの前に完全バックアップを実行してください。完全バックアップが動作しなければ、増分バックアップが完全バックアップの役割を果たします。

図 20-10 に、1 月 1 日から 1 月 4 日の間に実行された一連の完全バックアップおよび差分増分バックアップに含まれるデータを示します。

図 20-10 完全バックアップおよび差分増分バックアップの例



リカバリ = 1 月 1 日 (完全) + 1 月 2 日 (増分) + 1 月 3 日 (増分) + 1 月 4 日 (増分)

1 月 1 日の完全バックアップには、ポリシーのバックアップ対象リストに存在するすべてのファイルおよびディレクトリが含まれています。後続の差分増分バックアップには、最後の完全バックアップまたは差分増分バックアップから変更があったデータだけが含まれています。1 月 4 日のバックアップ後にディスク障害が発生した場合、完全バックアップおよび後続の 3 つの増分バックアップがリカバリのために必要になります。

累積増分バックアップでは最後の完全バックアップ以後に変更されたデータをバックアップします。図 20-11 に、1 月 1 日から 1 月 4 日の間に実行された一連の完全バックアップおよび累積増分バックアップに含まれるデータを示します。1 月 1 日の完全バックアップにはポリシーのバックアップ対象リストに存在するすべてのファイルとディレクトリが含まれています。それぞれの累積増分バックアップには、最後の完全バックアップから変更されたデータが含まれています。1 月 4 日のバックアップ後にディスク障害が発生した場合、完全バックアップおよび最後の累積増分バックアップがリカバリのために必要になります。

図 20-11 完全バックアップおよび累積増分バックアップの例

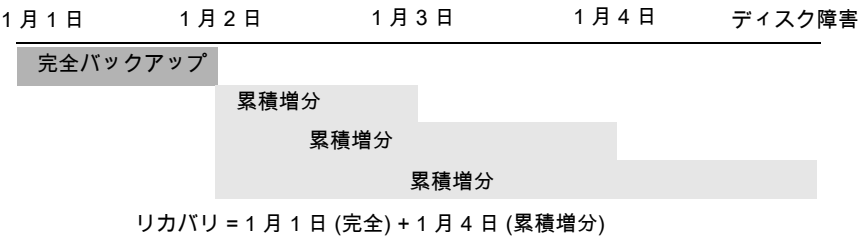


表 20-34 はバックアップ適用範囲の漏れを防ぐために差分増分バックアップと累積増分バックアップの保持期間を判断する方法を記述します。

表 20-34 増分バックアップの保持要件

形式	保持要件	コメント
差分	長い	すべてのファイルをリストアするには、最後の完全バックアップおよび最後の完全バックアップ以降に行われたすべての差分増分バックアップが必要。このため、すべての差分増分バックアップは、次の完全バックアップまで保管が必要。
累積	短い	累積増分バックアップには、最後の完全バックアップから変更された内容がすべて含まれる。このため、完全にリストアするには、最後の完全バックアップおよび最後の累積増分バックアップだけが必要。

表 20-35 は、可能性のあるバックアップ時間とリストア時間に基づいて差分増分バックアップまたは累積増分バックアップの使用の利点と欠点を比較します。

表 20-35 増分バックアップのバックアップ時間とリストア時間の比較

形式	バックアップ時間	リストア時間	コメント
差分	短い	長い	各バックアップのデータ量は少ないが、最後の完全バックアップ後のすべての差分増分バックアップがリストアに必要。このため、リストア時間が長くなる。
累積	長い	短い	各バックアップのデータ量は多くなるが、完全なリストアには完全バックアップおよび最後の累積増分バックアップだけが必要。

累積および差分の増分バックアップの両方の利点を利用できるように、両者の組み合わせを使用することも可能です。たとえば、次のバックアップ間隔と保持期間のスケジュールを想定します。(差分増分バックアップの方が頻繁に実行される。)

表 20-36 バックアップ間隔および保持期間の例

バックアップ形式	間隔 (Frequency)	保持期間
完全	6 日	2 週間
累積増分	2 日	4 日
差分増分	1 日	2 日

表 20-36 に記述されているスケジュールでは、次の一連のバックアップが実行されます。

1 日目	2 日目	3 日目	4 日目	5 日目	6 日目	7 日目	8 日目
完全	差分	累積	差分	累積	差分	完全	差分

この例では次のような結果になります。

- 1 日おきの差分増分バックアップの日は、バックアップ時間が最小です。
- 交互に訪れる累積増分バックアップの日は、差分増分バックアップより時間がかかりますが、完全バックアップよりも短いバックアップ時間になります。このとき、差分増分バックアップの期限は切れています。
- すべてのファイルのリカバリする場合、最後の完全バックアップおよび (最大で) 2 つの増分バックアップが必要になる場合があります。通常、バックアップを組み合わせると、すべての差分増分バックアップを使用する場合よりも、リストア時間が少なく済みます。増分バックアップのデータ量が少ない場合、完全バックアップの間隔を長くできます。

NetBackup による Windows ファイルにいつバックアップが必要かの判断

Windows クライアントでは、[アーカイブビットに基づいて、増分バックアップを実行する (Perform incrementals based on archive bit)]設定を有効にすると NetBackup は増分バックアップを実行します。この設定は、クライアントのバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースの[ファイル (File)]>[NetBackup クライアントのプロパティ (NetBackup Client Properties)]の[一般 (General)]タブにあります。

[アーカイブビットに基づいて、増分バックアップを実行する (Perform incrementals based on archive bit)]を有効にしている場合、クライアントに対する増分バックアップは、各ファイルのアーカイブビットの状態に基づきます。ファイルが変更されるとオペレーティングシステムによって必ずアーカイブビットが設定され、NetBackup によって消去されるまでアーカイブビットは設定されたままになります。NetBackup がアーカイブビットを消去する条件は、実行するバックアップ形式に依存します。

完全バックアップ (Full Backup) NetBackup はアーカイブビットの状態に関係なくファイルをバックアップします。完全バックアップ後にアーカイブビットは必ず消去されます。

差分増分バックアップ (Differential Incremental Backup)

NetBackup は、アーカイブビットが設定され、変更されているファイルをバックアップします。クライアントがサーバーからバックアップが成功したこと(または一部が成功したこと)を示す応答を受け取ったとき、アーカイブビットが消去されます。アーカイブビットの消去によって、次の差分増分バックアップでは、その前の完全バックアップまたは差分増分バックアップ後に変更されたファイルだけがバックアップの対象となります。

累積増分バックアップ (Cumulative Incremental Backup)

NetBackup はアーカイブビットが設定されているファイルをバックアップします。ただし、NetBackup はバックアップの後にアーカイブビットを消去しません。アーカイブビットが消去されないため、次の累積増分バックアップでは、変更されたファイルと、この累積増分バックアップに含まれていたファイルがバックアップされます。

[アーカイブビットに基づいて、増分バックアップを実行する (Perform incrementals based on archive bit)]を無効にしている場合、NetBackup では、最後のバックアップ以降にタイムスタンプが変更されたファイルだけが増分バックアップに含まれます。タイムスタンプは、そのファイルが最後に変更された日時を示します。バックアップ形式はタイムスタンプを異なる方式で使います。

完全バックアップ (Full Backup) NetBackup はタイムスタンプに関係なくファイルをバックアップします。

差分増分バックアップ
(Differential Incremental
Backup)

NetBackup は最後の完全バックアップまたは増分バックアップ
に対してファイルのタイムスタンプを比較します。

累積増分バックアップ
(Cumulative Incremental
Backup)

NetBackup は最後の完全バックアップに対してファイルのタイム
スタンプを比較します。

ファイルをインストールしたり、他のコンピュータからコピーした場合、新しいファイルでも
元のタイムスタンプが保持されます。ファイルの元のタイムスタンプが最後のバックアップ
の日時より前の場合、ファイルは次の完全バックアップまでバックアップの対象になりませ
ん。

NetBackup による UNIX ファイルにいつバックアップが必要かの 判断

UNIX クライアント上で増分バックアップを行う場合、参照する日時に基づき、バックアッ
プを行うかどうかを判断するために、すべてのファイルおよびディレクトリが考慮されます。
(ある日時から変更されたすべてのファイルがバックアップされます。)

次の時間の種類が UNIX のファイルとディレクトリに関連付けられます。

mtime	ファイルが変更された時刻。ファイルまたはディレクトリの mtime は、ファイルが 変更されるときにファイルシステムによって更新されます。ファイルを変更する前 に、ファイルの mtime をアプリケーションで保存できます。その後、アプリケーション は utime (2) システムコールを使用して、mtime を再設定します。
atime	ファイルがアクセスされた時刻。ファイルまたはディレクトリの atime は、そのファ イルがアクセスされるときに (読み込みまたは書き込み時)、ファイルシステムによっ て更新されます。ファイルにアクセスする前に、ファイルの atime をアプリケーショ ンで保存できます。その後、アプリケーションは utime (2) システムコールを使 用して、mtime を再設定します。
ctime	i ノードが変更された時刻。ファイルまたはディレクトリの ctime は、ファイルまた はディレクトリの i ノードが変更されるときに更新されます。(たとえば、権限、所有 権、リンク数の変更によって変更が加えられた場合などです)。ファイルまたはディ レクトリの ctime は、変更前に保存できず、変更後にリセットされます。ファイル またはディレクトリの ctime は、mtime システムコールによる変更で atime お よび utime (2) が再設定されるときに変更されます。

NetBackup が、バックアップに含まれるファイルのデータを読み込んでも、そのファイル
の変更時刻には影響しません。ただし、アクセス時刻には影響します。このような理由の
ため、NetBackup では、ファイルを読み込む前にそのファイルの atime および mtime
を保存します。その後、NetBackup は atime システムコールを使用して mtime および
utime (2) を再設定します。NetBackup では、ファイルのアクセス時刻 (atime) を操作

の条件として使用するストレージマイグレーション製品または管理者スクリプトの使用による問題を回避できます。このような利点がありますが、ファイルの ctime を更新する問題があります。

メモ: NetBackup アクセラレータを使用してバックアップを実行する場合、**NetBackup** はファイルのバックアップ後に atime をリセットしません。ctime の更新にはアクセラレータの最適化の損失が伴うので、これにより ctime の更新を回避します。

p.734 の「**アクセラレータの注意と要件**」を参照してください。

ファイルを読み込んだ後にファイルのアクセス時刻を再設定しないように **NetBackup** を構成できます。増分バックアップでバックアップを行うファイルが判断される際に、**NetBackup** でファイルの ctime および mtime を使用するように選択できます。通常、これらの 2 つのオプションは併用しますが、どちらか一方だけを使用する場合もあります。デフォルトでは、**NetBackup** では、ファイルの mtime だけを使用して、バックアップ対象のファイルまたはディレクトリが判断されます。

ファイルがある場所から別の場所に移動される場合、ファイルの ctime は変更されますが、mtime は変更されません。これらの移動されたファイルは、**NetBackup** が増分バックアップ時に mtime だけを使用してバックアップ対象のファイルを判断する場合、検出されません。mtime の使用が問題となる可能性がある場合、ctime を使用して、増分バックアップの対象とするファイルを判断します。ctime は、bp.conf ファイルに USE_CTIME_FOR_INCREMENTALS エントリおよび DO_NOT_RESET_FILE_ACCESS_TIME エントリが含まれる場合に使用されます。

ディレクトリがある場所から別の場所に移動された場合、ディレクトリの ctime は変更されますが、mtime は変更されません。移動されたディレクトリ内のファイルまたはディレクトリの mtime と ctime のどちらも変更されません。ファイルのタイムスタンプを利用して、移動されたディレクトリ内のファイルを増分バックアップに含めるかどうかを判断する場合、その信頼性は低くなります。

いずれの場合も、これらの移動されたファイルおよびディレクトリは、次の完全バックアップでバックアップ対象になります。

ユーザースケジュールについての考慮事項

ユーザーがバックアップおよびアーカイブを行うには、管理者がユーザーバックアップを許可するスケジュールを作成する必要があります。

ユーザーバックアップスケジュールとユーザーアーカイブスケジュールは、自動バックアップスケジュールを含んでいるポリシーに含めることができます。ユーザーバックアップおよびユーザーアーカイブ用に個別のポリシーを作成する場合の考慮事項は、自動バックアップの場合と同様です。ただし、ユーザーバックアップスケジュールでは、バックアップまたはアーカイブの開始前にユーザーがオブジェクトを選択するため、バックアップ対象リストが不要です。

ユーザーバックアップまたはユーザーアーカイブに特定のポリシーかスケジュールを使うには、各クライアント形式に指定されたタスクを実行します。

表 20-37 ユーザーバックアップかユーザーアーカイブにポリシーかスケジュールを指定するためのタスク

クライアント形式	作業
Microsoft Windows クライアント	■ クライアントのバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを起動します。 ■ [ファイル (File)]メニューから[NetBackup クライアントのプロパティ (Client Properties)]を選択します。 ■ [バックアップ (Backups)]タブを選択し、バックアップポリシーとバックアップスケジュールを指定します。
UNIX クライアント	bp.conf ファイル内の BPARCHIVE_POLICY、BPARCHIVE_SCHED、BPBACKUP_POLICY または BPBACKUP_SCHED オプションによって、ポリシーおよびスケジュールを指定します。

リストアはいつでも行うことができ、スケジュールは使用されません。

メモ: アーカイブは、バックアップとは異なります。アーカイブ中に NetBackup では、まず選択したファイルのバックアップが行われ、バックアップが正常に完了すると、ファイルがローカルディスクから削除されます。この項では、特に指定しないかぎり、バックアップに関する記述は、アーカイブ操作中のバックアップ処理にも該当します。

ユーザーバックアップおよびユーザーアーカイブのスケジュール作成方法

ユーザーバックアップおよびユーザーアーカイブのスケジュールを計画するときは、次の事項を考慮してください。

自動バックアップ	できるかぎり、自動バックアップの実行中にユーザーバックアップおよびユーザーアーカイブを許可しないでください。ユーザーがバックアップ要求またはアーカイブ要求を送信したときに自動バックアップが実行中であった場合、通常、NetBackup ではそのユーザージョブはキューに投入されます。制限が設定されている場合、ジョブはキューに投入されません。(たとえば、[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)]ポリシー属性や、[グローバル属性 (Global attributes)]の[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]ホストプロパティ。) p.704 の「[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)] (ポリシー属性)」を参照してください。 p.115 の「[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ」を参照してください。 自動バックアップが継続して実行されると、制限設定の構成方法によっては、バックアップ処理時間帯にユーザージョブが実行されないことがあります。一方では、ユーザージョブによって自動バックアップが遅延し、そのバックアップ処理時間帯中に自動バックアップが実行できなくなる可能性があります。
ストレージユニット	異なるストレージユニットを使用すると、自動バックアップとの競合を回避できます。
ボリュームグループ	自動バックアップメディアとは別のメディアを管理する場合、異なるボリュームグループを使用します。
保持期間	アーカイブの場合、ファイルのディスクコピーが削除されるため、保持期間を無制限に設定することを検討してください。 メモ: バックアップの保持期間が満了すると、アーカイブまたはバックアップのリストアを行うことが困難または不可能になる場合があります。

[合成バックアップする (Synthetic backup)](スケジュール属性)

[合成バックアップ (Synthetic backup)]スケジュール属性を使うと、以前のバックアップからのバックアップ処理が可能となります。合成バックアップの場合は、合成完全バックアップまたは合成累積増分バックアップのいずれかとなります。このバックアップには、前回行われた従来の完全バックアップと、それ以降の差分増分バックアップおよび累積増分バックアップが含まれます。(従来の完全バックアップとは、合成でない完全バックアップを意味します)。クライアントは、合成バックアップを使用して、従来のバックアップからリストアを行う場合と同じ方法で、ファイルおよびディレクトリをリストアできます。

合成バックアップは、テープまたはディスクストレージユニット、あるいはその両方を使用して書き込むことができます。

p.876 の「[合成バックアップについて](#)」を参照してください。

[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプション (スケジュールの属性)

ポリシーの[スケジュール (Schedules)]タブは[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]と呼ばれるオプションを含んでいます。このオプションを使うと、バックアップ時に各ファイルの内容にチェックサムを作成します。このチェックサムを使って変更箇所を検出できます。次のアクセラレータバックアップの新たな基準を確立することで、セーフティネットの役割を果たします。

メモ: 次の情報は、ファイルとフォルダ (Unix/Windows) のバックアップと NDMP のバックアップにのみ適用されます。VMware や Hyper-V などのその他のバックアップ形式では、アクセラレータ強制再スキャンスケジュールは必要ありません。

[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプションは、次の状況を検出します。

- ファイルのデータが変更されているのに、ファイルのメタデータが変更されていない。
- ファイルのメタデータが壊れていて、ファイルが変更されたことが示されていない。
- 悪意のあるユーザーまたはアプリケーションがファイルのメタデータを変更し、ファイルが変更されたことが示されていない。

メモ: [アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]を有効にすると、NetBackup は Windows の変更ジャーナルを使ってファイルが変更されているかどうかを判断します。NetBackup はまた、各ファイルシステムのメタデータを調べて、どのファイルが変更されたか検出します。

アクセラレータを最も効率的に使用するには、アクセラレータのポリシーに少なくとも 2 つの完全バックアップスケジュールを含める必要があります。[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]オプションを無効にした完全スケジュールと、[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]を有効にした別の完全スケジュールです。「表 20-38」を参照してください。

表 20-38 アクセラレータの各ポリシーに必要な完全バックアップスケジュール

完全バックアップスケジュール	スケジュールの間隔に関する注意事項
最初のスケジュール [アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)]が無効	このスケジュールを、アクセラレータの完全バックアップの大半を実行するように構成する。

完全バックアップスケジュール	スケジュールの間隔に関する注意事項
2 番目のスケジュール [アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] が有効	このスケジュールを、最初の完全バックアップスケジュールより長い間隔で実行するように構成する。 たとえば、最初の完全バックアップスケジュールを毎週実行する場合は、2 つ目のスケジュール ([アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] オプションが有効) を数カ月ごとに実行する。ただし、このスケジュールに最適な間隔は、環境によって異なる。 メモ: ポリシーに [アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] オプションを有効にするスケジュールがない場合、すべての完全バックアップでこのオプションが自動的に有効になり、バックアップのパフォーマンスが低下します。

[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] オプションについて、次のことに注意してください:

- [アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] オプションは、[属性 (Attributes)] タブの [アクセラレータを使用する (Use accelerator)] オプションが選択されていない場合はグレー表示されます。
- このオプションを選択すると、クライアント上でチェックサム処理が遂行するため、自身のシステム上で [アクセラレータを使用する (Use accelerator)] オプションと比較すると、バックアップ速度が遅くなります。バックアップ速度の減速度は、クライアントの構成やクライアント上の現行処理の負荷により異なります。アクセラレータバックアップが開始される時点で、クライアントが多くのジョブでビジーになっている場合は、チェックサムの処理によりバックアップ速度が遅くなることがあります。
- Windows ボリュームが NTFS または ReFS ではない場合で、ボリュームに [アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] オプションを有効にした完全バックアップスケジュールが設定されていない場合、NetBackup はあらゆる完全バックアップで [アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] を使う点に注意してください。[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] オプションはスケジュールで有効になりませんが、NetBackup のログメッセージに示すように、実際は使われます。このオプションを使うと、[アクセラレータ強制再スキャン (Accelerator forced rescan)] を使わなかった以前のバックアップと比べてバックアップの速度が遅くなる可能性があります。
推奨される完全バックアップスケジュールについては、「表 20-38」を参照してください。
- (ファイルとフォルダをバックアップための) MS-Windows または標準ポリシーの場合、クライアントのすべてのデータは読み込まれます。ただし、NetBackup はバックアップイメージに含めるべき変更されたデータだけをネットワーク経由で送信します。変更されたデータだけ送信することは通常のアクセラレータの完全バックアップに類似して

います。したがって、アクセラレータ強制再スキャンのバックアップの場合、最適化の割合は通常のアクセラレータの完全バックアップに類似しています。バックアップ時間は、アクセラレータを使わない完全バックアップ時間と通常のアクセラレータを使った完全バックアップ時間の間に収まる点に注意してください。

[カレンダー (Calendar)](スケジュール属性)

カレンダーベースのスケジュールにより、管理者はカレンダービューに基づいてジョブスケジュールを作成できます。[カレンダー (Calendar)]をクリックして[含める日 (Include Dates)]タブを表示します。

p.797 の「[含める日 (Include Dates)]タブ」を参照してください。

カレンダーを基準とした再配置スケジュールでは、ディスクステージングストレージユニットから最終的な宛先ストレージユニットにイメージが移動される日付が決定されます。(再配置スケジュールは、ベーシックディスクステージングストレージユニットの構成の一部として作成されます。)

[実行日後の再試行を許可する (Retries allowed after runday)]を有効にすると、バックアップが正常に完了するまで、**NetBackup** によってスケジュールが試行されます。この属性を有効にした場合、指定した実行日以降もスケジュールの実行が試行されます。

[間隔 (Frequency)](スケジュール属性)

[間隔 (Frequency)]属性を使用すると、スケジュールされた作業が正常に完了してから次の作業が再試行されるまでの間隔を指定できます。

たとえば、1 週間に 1 度の間隔で完全バックアップを行うスケジュールを設定すると想定します。**NetBackup** では、月曜日にすべてのクライアントの完全バックアップを正常に完了した場合、次の月曜日までこのスケジュールによる別のバックアップが試行されません。

間隔を設定するには、リストから間隔の値を選択します。間隔は秒、分、時間、日、または週単位で指定できます。

間隔を基準とした再配置スケジュールでは、ベーシックディスクステージングストレージユニットから最終的な宛先ストレージユニットにイメージが移動される間隔が決定されます。(再配置スケジュールは、ベーシックディスクステージングストレージユニットの構成の一部として作成されます。)

NetBackup はジョブが毎日実行されない場合も日数に基づいてスケジュールを示す間隔を認識します。たとえば、間隔が 48 時間の場合、**NetBackup** は 1 日おきの同じ時刻にジョブを実行しようとします (**NetBackup** は間隔が 24 時間で割り切れるかどうかを確認します)。間隔が 24 で割り切れない場合、**NetBackup** はジョブを同じ時刻に実行しようとはしません。その代わりに、**NetBackup** は最後の正常なバックアップの後、示された間隔でジョブを実行することを試みます。(たとえば、52 時間後。)

メモ: ユーザーバックアップまたはユーザーアーカイブのスケジュールの場合、バックアップまたはアーカイブは時間帯内の任意の時間にユーザーによって実行されるため、[間隔 (Frequency)]は適用されません。

バックアップ間隔について

バックアップ間隔を決定するには、データを変更する頻度を考慮します。たとえば、ファイルを 1 日に数回、1 日に 1 回、毎週、または毎月変更するかどうかを判断します。

通常は、日々の作業内容を保護するために、毎日バックアップを行います。毎日バックアップを行う場合、ディスク障害が発生した場合に失われるのは、1 日分だけです。1 日の間に重要なデータの変更が頻繁に発生し、変更を再度構築することが難しい場合は、バックアップ間隔をさらに短くする必要があります。

毎日のバックアップは、通常、最後の増分バックアップまたは完全バックアップからの変更を記録している増分バックアップです。増分バックアップでは、完全バックアップに比べてストレージの使用量が少なく、時間がかからないため、リソースの節約になります。

完全バックアップは、通常は増分バックアップよりも間隔が長くなりますが、増分バックアップの蓄積を回避するためにも、完全バックアップをある程度の頻度で実行する必要があります。完全バックアップ間の増分バックアップの回数が増えると、ファイルのリストアに時間がかかるようになります。時間がかかるのは、ファイルおよびディレクトリのリストア時にこれらの増分バックアップをまとめる必要があるためです。

完全バックアップの間隔を設定する場合、次の点を考慮します。

- 変更の頻度が少ないファイルの完全バックアップの間隔は空けるようにします。間隔を長くすると、使用するシステムリソースが少なくて済みます。また、このようなファイルの完全バックアップ間の増分バックアップのサイズは小さいため、リストア時間が長くなることはありません。
- 頻繁に変更されるファイルの完全バックアップの間隔は短くします。間隔を短くすると、リストア時間が短くなります。完全バックアップの間隔を短くすると、使用するリソースも少なくなります。ファイル内の頻繁な変更に対応するのに必要な長時間増分バックアップの累積の影響が軽減されます。

リソースを最も効果的に使用するために、現在のポリシーに含まれるほぼすべてのファイルが、同じ頻度で更新されていることを確認します。たとえば、ポリシーのバックアップ対象リスト内の半分のファイルが毎週の完全バックアップが必要となる程頻繁に変更されるとします。ただし、残り半分のファイルは変更の頻度が少なく、毎月の完全バックアップで十分であるとしてします。この場合、すべてのファイルが同じポリシー内にあると、すべてのファイルに対して毎週完全バックアップが実行されます。半分のファイルは毎月の完全バックアップで十分であるため、システムリソースを浪費することになります。バックアップを 2 つのポリシーに分けて、それぞれに適切なバックアップスケジュールを設定するか、または合成バックアップを使用すると改善されます。

ポリシー内のクライアントに対して複数の自動スケジュールが実行される予定である場合、バックアップ間隔によって、NetBackup に使用されるスケジュールが次のように決定されます。

- 常に、バックアップ間隔が長いスケジュールのジョブほど、優先度が高くなります。たとえば、バックアップ間隔が 1 カ月のスケジュールはバックアップ間隔が 2 週間のスケジュールより優先度が高くなります。
- 2 つのスケジュールをそれぞれ実行する必要がある場合、アルファベット順で最初のスケジュール名を持つスケジュールが最初に実行されます。アルファベット順の優先度は次の両方が該当する場合に適用されます。
 - 各スケジュールが定義されている時間帯内にある。
 - 各スケジュールが同じ間隔で構成されている。

NetBackup では、スケジュール例に対して次に示す順の優先度が設定されます。

表 20-39 スケジュールの間隔と優先度の例

スケジュール名	間隔	優先度 (Priority)
monthly_full	1 カ月	1 番目
weekly_full	1 週間。	2 番目
daily_incremental	1 日	3 番目

[インスタントリカバリ (Instant Recovery)](スケジュール属性)

[インスタントリカバリ (Instant Recovery)]属性は、次の条件を満たしている場合に使用できます。

- Snapshot Client オプションがインストールされ、ライセンスを取得している。
『[NetBackup NAS 管理者ガイド](#)』および『[NetBackup Snapshot Manager for Data Center 管理者ガイド](#)』を参照してください。
- [スナップショットバックアップを実行する (Perform snapshot backups)]が選択されている。
- [インスタントリカバリ用にスナップショットを保持する (Retain snapshots for instant recovery)]が選択されている。

p.756 の「[\[Snapshot Client\]](#)および[\[Replication Director\]](#)(ポリシー属性)」を参照してください。

この属性に 2 つのオプションがあります。

スナップショットを作成し、さらに スナップショットはクライアントボリューム上に保持され、メディア
スナップショットをストレージユ サーバーのストレージユニットにバックアップコピーが作成されま
ニットへコピー (Snapshots and す。
copy snapshots to a storage
unit)

スナップショットのみ作成
(Snapshots only)

テープまたは他のストレージへのスナップショットのバックアップ
は行われません。NetBackup によってディスク上でのみスナップ
ショットが作成されます。このオプションは、NAS_Snapshot 方式
で必要です。

VxFS_Checkpoint 方式が使用されているか、または VxVM 方
式で領域が最適化されている場合、スナップショットは、元のデー
タが存在するデバイスと同じデバイス上に作成されます。この場
合、他のデバイスにデータをバックアップするために、別のポリ
シーを使用できます。

トランザクションログはバックアップの終了時に切り捨てられませ
ん。

ポリシーの[属性 (Attributes)]タブの[ポリシーストレージ (Policy storage)]オプションで
ストレージライフサイクルポリシーが参照されている場合、[インスタントリカバリ (Instant
Recovery)]属性はグレー表示されます。それが事実の場合には、ストレージライフサイク
ルポリシーの構成が[インスタントリカバリ (Instant Recovery)]属性を抑制します。

ただし、スケジュールの[属性 (Attributes)]タブの[ポリシーストレージの選択を上書きす
る (Override policy storage selection)]属性は、[ポリシーストレージ (Policy storage)]
オプションを上書きします。スケジュールの[属性 (Attributes)]タブでストレージユニット
が選択されると、[インスタントリカバリ (Instant Recovery)]属性は有効になります。

p.694 の「[ポリシーストレージ (Policy storage)] (ポリシー属性)」を参照してください。

p.781 の「[ポリシーストレージの選択を上書きする (Override policy storage selection)]
(スケジュール属性)」を参照してください。

複数のコピー (スケジュール属性)

[コピーを複数作成する (Multiple copies)]属性を有効にした場合、NetBackup によっ
て最大 4 つのバックアップのコピーを同時に作成できます。ストレージユニットが同じメ
ディアサーバー上に存在し、コピーごとに利用可能なリソースが十分に存在する必要が
あります。たとえば、Media Manager ストレージユニットで 4 つのコピーを同時に作成す
るには、4 台のテープドライブが必要です。(このオプションはインラインコピー、インライン
テープコピー、または ITC とも呼ばれます。)

4 つを超えるコピーを作成する場合、後で複製を使用して追加のコピーを作成できます。

複数の元のイメージを同時に作成する場合、バックアップにかかる時間は 1 つのコピー
を作成する場合よりも長くなることがあります。また、Media Manager ストレージユニットと

ディスクストレージユニットの両方を指定すると、ディスクの書き込み操作にかかる時間は、より低速なリムーバブルメディアの書き込み操作の時間と同じになります。

複数のコピーの構成について

複数のコピーを作成するには、次の条件を満たしている必要があります。

- バックアップ先が同じメディアサーバーを共有し、コピーごとに利用可能なリソースが十分に存在する必要があります。
- 複数のコピーで使用されるストレージユニットは、並列実行コピーをサポートするのに十分な数の並列実行ジョブが実行されるように構成する必要があります。関連するストレージユニット設定は、[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]および[最大並列書き込みドライブ数 (Maximum concurrent write drives)]です。
p.582 の「[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]ストレージユニット設定」を参照してください。
p.582 の「最大並列書き込みドライブ数のストレージユニット設定」を参照してください。

複数のコピー操作では次のサポートはありません。

- NDMP ストレージユニット
- 合成バックアップ
- ストレージライフサイクルポリシー
ストレージライフサイクルポリシーは複数のコピーを作成するために独自の方式を提供します。
p.662 の「ストレージライフサイクルポリシーを使った複数コピーの書き込みについて」を参照してください。

[複数コピーの構成 (Configure Multiple Copies)]ダイアログボックス

[複数コピーの構成 (Configure Multiple Copies)]ダイアログボックスには次のオプションがあります。

表 20-40 [複数コピーの構成 (Configure Multiple Copies)]ダイアログボックス

フィールド	説明
コピー (Copies)	NetBackup はバックアップの 4 つまでのコピーを同時に作成できます。ストレージユニットが同じメディアサーバー上に存在し、コピーごとに利用可能なリソースが十分に存在する必要があります。 4 つを超えるコピーを作成するには、複製の使用によって追加コピーを後で作成します。

フィールド	説明
プライマリコピー (Primary copy)	コピー 1 はプライマリコピーです。コピー 1 がなんらかの理由で正常に生成されなかった場合、正常に生成された最初のコピーがプライマリコピーです。 p.964 の「 コピーのプライマリコピーへの昇格 」を参照してください。
ストレージユニット (Storage Unit)	各コピーが格納されるストレージユニットを指定します。Media Manager ストレージユニットに複数のドライブが含まれている場合、そのユニットをソースと宛先の両方に使用できます。[任意 (Any Available)]を選択すると、実行時に NetBackup によって決定されます。
ボリュームプール (Volume pool)	各コピーがどこに保存されるかを示します。
保持 (Retention schedule)	NetBackup がバックアップをどの位の期間保持するかを指定します。 p.783 の「 [保持 (Retention)](スケジュール属性) 」を参照してください。
このコピーに失敗した場合 (If this copy fails)	コピーが正常に生成されなかった場合、ジョブ全体を中止するか ([すべてのコピー処理に失敗 (fail all copies)]), または残りのコピーを継続するかを選択します。 失敗フラグまたは継続フラグの設定に関係なく、リソースがすべてのコピーで利用可能になるまで、すべてのコピージョブはキューで待機します。1 番目のジョブは、コピーでリソースが使用可能になるまで開始されません。 コピーが失敗したときに他のコピーでジョブを続行するように構成しており、そのポリシーで[バックアップジョブのチェックポイントからの再開 (Checkpoint restart for backup jobs)]が選択されている場合、チェックポイントが設定されている最後に失敗したコピーだけが再開することができます。 p.700 の「 [チェックポイントの間隔 (分) (Take checkpoints every __ minutes)](ポリシー属性) 」を参照してください。
メディア所有者 (Media Owner)	NetBackup によるイメージの書き込み先となるメディアの所有者を選択します。 利用可能なオプションは次のとおりです。 ■ 任意 (Any) NetBackup によって、メディアサーバーまたはサーバーグループのいずれかからメディア所有者が選択されます。 ■ なし (None) メディアに書き込みを行うメディアサーバーがそのメディアの所有者として指定されます。メディアサーバーを明示的に指定しなくても、メディアサーバーがメディアを所有するように設定されます。 ■ サーバーグループ (Server group) メディアサーバーグループを指定して、そのグループ内のメディアサーバーのみが、このポリシーのバックアップイメージが書き込まれるメディアに対して書き込みを行うことができるようにします。NetBackup 環境に構成されているすべてのメディアサーバーグループが、ドロップダウンリストに表示されます。 p.385 の「サーバーグループの追加」を参照してください。

ポリシースケジュールでの複数のコピーの構成

複数コピーを作成するようにポリシースケジュールを構成するには、次の手順を実行します。

複数のコピーを作成するスケジュールを構成する方法

- 1 NetBackup 管理コンソール の左ペインで、[NetBackup の管理]> [ポリシー (Policies)] を展開します。
- 2 次のいずれかを実行します。
 - 既存のポリシーを変更する方法
 - 変更するポリシーを選択します。
 - [編集 (Edit)]メニューで、[変更 (Change)]をクリックします。
 - 新しいポリシーを作成する方法
 - [処理 (Actions)]メニューで[新規 (New)]>[ポリシー (Policy)]をクリックします。
 - ポリシーを指定して、[OK]をクリックします。
- 3 [スケジュール (Schedules)]タブを選択します。
- 4 既存のスケジュールをダブルクリックするか、または[新規 (New)]をクリックして新しいスケジュールを作成します。
- 5 表示されるダイアログボックスで、[属性 (Attributes)]タブをクリックし、[コピーを複数作成する (Multiple copies)]を選択して[構成 (Configure)]をクリックします。

このポリシーの宛先がストレージライフサイクルポリシーなら、[コピーを複数作成する (Multiple copies)]チェックボックスのチェックが外されます。NetBackup では、複数のコピーを作成するための 2 つの方法を同時に有効にできません。

p.694 の「[\[ポリシーストレージ \(Policy storage\)\] \(ポリシー属性\)](#)」を参照してください。

p.662 の「[ストレージライフサイクルポリシーを使った複数コピーの書き込みについて](#)」を参照してください。

- 6 [コピー (Copies)]フィールドに、同時に作成するコピーの数を指定します。数字は 1 から 4 の間である必要があります。

	Primary:	Storage unit:	Volume pool:	Retention:	For each image if this copy fails:	Media Owner:
Copy 1:	✓	ADV_DISK-master-stu	NetBackup	2 weeks (Retention ...)	continue	Any
Copy 2:		MSDP-media-stu	NetBackup	2 months (Retention...)	continue	Any
Copy 3:						
Copy 4:						

Buttons: OK, Cancel, Help

コピー 1 はプライマリコピーです。コピー 1 が正常に生成されなかった場合、正常に生成された最初のコピーがプライマリコピーです。

通常、NetBackup では、イメージのプライマリコピーからリストアが行われます。ただし、プライマリコピー以外の特定のバックアップからリストアを行うこともできます。これを行うには、コマンドを使用します。bprestore

4 つを超えるコピーを作成するには、複製の使用によって追加コピーを後で作成します。

p.777 の「[複数コピーの構成 (Configure Multiple Copies)]ダイアログボックス」を参照してください。

p.777 の「複数のコピーの構成について」を参照してください。

- 7 各コピーが格納されるストレージユニットを指定します。[任意 (Any Available)]を選択すると、ストレージユニットは、実行時に NetBackup によって選択されます。

Media Manager ストレージユニットに複数のドライブが含まれている場合、そのストレージユニットを元のイメージとコピーの両方に使用できます。

- 8 各コピーが格納されるボリュームプールを指定します。

- 9 各コピーに保持レベルを選択します。

p.783 の「[保持 (Retention)](スケジュール属性)」を参照してください。

- 10** [このコピーに失敗した場合 (If this copy fails)]リストから次のいずれかを選択します。

続行 (continue)

残りのコピーの作成を続行します。

メモ: [チェックポイントの間隔 (分) (Take checkpoints every __ minutes)]がこのポリシーに対して選択されている場合、チェックポイントが設定されている最後に失敗したコピーだけを再開できます。

p.700 の「[チェックポイントの間隔 (分) (Take checkpoints every __ minutes)](ポリシー属性)」を参照してください。

すべてのコピー処理に失敗 (fail all copies) ジョブ全体が失敗します。

- 11** テープメディアの場合、NetBackup によってイメージが書き込まれるメディアの所有者を指定します。

任意 (Any)

NetBackup によって、メディアサーバーまたはサーバーグループのいずれかからメディア所有者が選択されます。

なし (None)

メディアに書き込みを行うメディアサーバーをそのメディアの所有者として指定します。メディアサーバーを明示的に指定しなくても、メディアサーバーがメディアを所有するように設定されます。

サーバーグループ (Server group)

メディアサーバーグループで、このポリシーのバックアップイメージの書き込み先メディアに対して書き込みできるのが、グループ内のメディアサーバーのみになるように指定します。NetBackup 環境に構成されているすべてのメディアサーバーグループが、リストに表示されます。

この設定は、ディスク上に存在するイメージには影響しません。1 つのメディアサーバーは共有ディスクに存在するイメージを所有しません。ディスクの共有プールにアクセス可能なすべてのメディアサーバーがイメージにアクセスできます。

- 12** ポリシーが保存されるまで[OK]をクリックします。

[ポリシーストレージの選択を上書きする (Override policy storage selection)](スケジュール属性)

[ポリシーストレージの選択を上書きする (Override policy storage selection)]属性は次のように機能します。

無効

ポリシーの[属性 (Attributes)]タブで指定された[ポリシーストレージ (Policy storage)]を使うようにスケジュールに指示します。

有効	ポリシーの[属性 (Attributes)]タブで指定された[ポリシーストレージ (Policy storage)]を上書きするようにスケジュールに指示します。 以前に構成されたストレージユニットとストレージライフサイクルポリシーのリストからのストレージを選択します。リストが空なら、ストレージは構成されていません。
----	---

p.694 の「[[ポリシーストレージ \(Policy storage\)](#)] (ポリシー属性)」を参照してください。
ポリシーにデータの分類が指定されている場合、同じデータの分類のストレージライフサイクルのみがリストに表示されます。

p.694 の「[[データの分類 \(Data classification\)](#)] (ポリシー属性)」を参照してください。

メモ: ストレージライフサイクルポリシーは、[複数コピーの構成 (Configure Multiple Copies)]ダイアログボックスでは選択できません。

p.777 の「[複数のコピーの構成について](#)」を参照してください。

[ポリシーボリュームプールを上書きする (Override policy volume pool)] (スケジュール属性)

[ポリシーボリュームプールを上書きする (Override policy volume pool)]属性は次のように機能します。

無効	スケジュールにポリシーの[属性 (Attribute)]タブで[ポリシーボリュームプール (Policy volume pool)]として指定されたボリュームプールを上書きするように指示します。ポリシーのボリュームプールが指定されていない場合、 NetBackup では、デフォルトで「 NetBackup 」が使用されます。 NetBackup カタログ用のポリシーの場合、 NBU-Catalog ポリシーで「 CatalogBackup 」が使用されます。
----	--

有効	スケジュールにポリシーの[属性 (Attribute)]タブで[ポリシーボリュームプール (Policy volume pool)]として指定されたボリュームプールを上書きするように指示します。構成済みのボリュームプールのリストからボリュームプールを選択します。
----	---

p.698 の「[[ポリシーボリュームプール \(Policy volume pool\)](#)] (ポリシー属性)」を参照してください。

[メディア所有者を上書きする (Override media owner)] (スケジュール属性)

[メディア所有者を上書きする (Override media owner)]属性はテープメディアにのみ適用されます。スケジュールにポリシーのメディア所有者か他の所有者のどちらを使うかを

指定します。共有ディスクメディアの規則はより柔軟であるため、ディスクメディアに上書き設定は必要ありません。

属性は次のように機能します。

- | | |
|----|---|
| 無効 | ポリシーの[属性 (Attribute)]タブで[メディア所有者 (Media Owner)]として指定されたメディア所有者を使うようにスケジュールに指示します。 |
| 有効 | ポリシーの[属性 (Attribute)]タブで[メディア所有者 (Media Owner)]として指定されたメディア所有者を上書きするようにスケジュールに指示します。
リストから新しいメディア所有者を選択します。 <ul style="list-style-type: none">■ 任意 (Any)
NetBackup によって、メディアサーバーまたはサーバーグループのいずれかからメディア所有者が選択されます。■ なし (None)
メディアに書き込みを行うメディアサーバーをそのメディアの所有者として指定します。メディアサーバーを明示的に指定しなくても、メディアサーバーがメディアを所有するように設定されます。■ サーバーグループ (Server group)
メディアサーバーグループで、このポリシーのバックアップイメージの書き込み先メディアに対して書き込みできるのが、グループ内のメディアサーバーのみになるように指定します。NetBackup 環境に構成されているすべてのメディアサーバーグループが、リストに表示されます。 |

p.707 の「[メディア所有者 (Media Owner)](ポリシー属性)」を参照してください。

[保持 (Retention)](スケジュール属性)

[保持 (Retention)]属性は、NetBackup がバックアップが保持される期間を指定します。保持期間を設定するには、リストから保持期間 (またはレベル) を選択します。保持期間が満了すると、NetBackup は期限が切れたバックアップの情報が削除します。バックアップの期限が切れると、そのバックアップ内のファイルをリストアに利用できなくなります。たとえば、保持期間が 2 週間の場合、そのスケジュールによって行われたバックアップのデータをリストアできるのは、バックアップ後 2 週間だけです。

ストレージライフサイクルポリシーにバックアップを行うようにポリシーを構成している場合、スケジュールの[保持 (Retention)]属性は無視されます。ライフサイクルが示す保持期間が代わりに適用されます。

p.625 の「ストレージライフサイクルポリシーの作成」を参照してください。

p.163 の「[保持期間 (Retention periods)]プロパティ」を参照してください。

保持期間の割り当てについて

データの保持期間は、一定期間後にメディアから情報をリストアする可能性によって決まります。財務の記録などのデータ形式には、法律で定められた保持レベルがあります。また、作成途中の文書などのデータの場合は、文書の最終版の完成後は必要がなくなります。

バックアップの保持期間は、そのバックアップからリカバリする必要性にも依存します。たとえば、毎日の変更内容が重要である場合、そのデータが必要な間は、完全バックアップに加えてすべての増分バックアップを保持します。増分バックアップが毎月のレポートで処理中の作業だけをトラッキングする場合、増分バックアップをすぐに期限切れにします。長期間のリカバリには完全バックアップを使用します。

保持期間を決定する場合、ほぼすべてのデータに適用するガイドラインを作成することが必要です。ガイドラインと異なる保持要件があるファイルまたはディレクトリに注意します。保持要件のガイドラインと異なるデータには、別のポリシーを作成することを計画します。たとえば、より長い保持要件のあるファイルおよびディレクトリを別のポリシーに配置します。すべてのポリシーに長い保持期間を設定するのではなく、別のポリシーでより長い保持期間をスケジュール設定します。

次の表は、さまざまなバックアップ形式の推奨の保持期間を記述したものです。

表 20-41 さまざまなバックアップ形式の推奨の保持期間

バックアップ形式	説明
完全バックアップ (Full Backup)	スケジュールに対する間隔の設定より長い期間を指定します。(この間隔は、バックアップの実行間隔です。)たとえば、間隔が 1 週間である場合、2 週間から 4 週間の保持期間を指定します。保持期間を 2 週間から 4 週間にすると、十分な時間的余裕が確保され、次に完全バックアップが行われる前に、現行の完全バックアップの有効期限に達しないことが保証されます。
差分増分バックアップ (Differential Incremental Backup)	完全バックアップ間の間隔より長い期間を指定します。たとえば、完全バックアップが毎週実行される場合、差分増分バックアップを 2 週間保存します。
累積増分バックアップ (Cumulative Incremental Backup)	スケジュールに対する間隔の設定より長い期間を指定します。(この間隔は、バックアップの実行間隔です。)たとえば、間隔の設定が 1 日である場合、1 週間の保持期間を指定します。保持期間を 1 週間にすると、十分な時間的余裕が確保され、次に正常な累積増分バックアップが行われる前に、現行の累積増分バックアップの有効期限に達しないことが保証されます。完全なリストアを行うには、前回の完全バックアップおよび前回の累積増分バックアップが必要です。

次の表は、要求するよりも早くバックアップが期限切れになることを防ぐことができる複数の方法を提案します。

表 20-42 早く期限切れになるバックアップを防ぐための提案

項目	説明
保持期間	適切な保持期間を割り当てます。保持期間が満了した後は、 NetBackup によるバックアップのトラッキングは行われません。保持期間が満了した後は、ファイルをリカバリすることは困難または不可能です。 1 年以上保持する必要があるバックアップの場合、保持期間を無制限に設定します。
完全バックアップと増分バックアップ	ポリシーでは、増分バックアップより長い保持期間を完全バックアップに割り当ててください。完全なリストアを行うには、前回の完全バックアップ、およびそれ以降のすべての差分増分バックアップが必要です。増分バックアップの前に完全バックアップの期限が切れると、すべてのファイルをリストアできない場合があります。
アーカイブスケジュール	保持期間を無制限に設定します。
テープ	保持期間を無制限に設定します。 NetBackup データベースの領域制約のため無制限に設定できない場合、データを保存する必要がある期間と一致する保持期間を設定します。

データの保持については、バックアップメディアのオフサイトでの保管も考慮します。オフサイトに保管することによって、プライマリサイトで発生する災害からデータを保護できます。

ディザスタリカバリの注意事項として、次のオフサイト保管方式を考慮します。

- 複製機能を使用してオフサイト保管用にセカンダリコピーを作成します。
- 毎月または毎週行われる完全バックアップをオフサイトの保管施設に送付します。データをリストアするには、保管施設からメディアを要求します。増分バックアップを使用してディレクトリまたはディスク全体のリストアを行うには、最後の完全バックアップとすべての増分バックアップが必要です。
- バックアップ用の特別なスケジュールを構成して、オフサイト保管用に複製を作成します。

オフサイトでの保管方法に関係なく、十分な保持期間を構成することが必要です。期限切れのバックアップを取得するには、**NetBackup** のインポート機能を使用します。

デフォルトでは、**NetBackup** によって、同じ保持レベルのバックアップがすでに存在するテープボリュームに、各バックアップが格納されます。バックアップの保持レベルが 2 である場合、**NetBackup** は保持レベルが 2 の、他のバックアップを含むテープボリュームにこのバックアップを格納します。保持レベルが異なるバックアップが発生すると、**NetBackup** によって適切なボリュームに切り替えられます。テープボリュームは、自身が格納するすべてのバックアップが有効期限に達するまで **NetBackup** に割り当てられたままであるため、ボリューム上の保持レベルを一致させることによって、メディアの使用が

効率化されます。ボリューム上に保持期間が無制限の小さなバックアップが 1 つでもあると、他のすべてのバックアップが有効期限に達してもボリュームは再利用されません。

ボリューム上で保持レベルを混在させるには、ホストプロパティの[メディア (Media)]で[1 つのメディアに対する複数の保持設定を許可する (Allow multiple retentions per media)]を選択します。

各ボリューム上に 1 つの保持レベルだけを保存する場合、必要以上の保持レベルを使用しないでください。複数の保持レベルを使用すると、必要なボリュームの数が増加します。

p.126 の「[メディア (Media)]プロパティ」を参照してください。

メモ: ディスクボリューム上では、制限なしに保持レベルを混在できます。

p.164 の「保持期間の変更」を参照してください。

[メディアの多重化 (Media multiplexing)](スケジュール属性)

[メディアの多重化 (Media multiplexing)]属性は、NetBackup が 1 台の任意のドライブ上へ多重化可能な、スケジュールのジョブの最大数を指定します。多重化とは、1 台または複数のクライアントから 1 つのドライブに並列して複数のバックアップジョブを送信し、バックアップをメディア上に多重化することです。

1 から 32 の数値を指定します。1 を指定すると、多重化されません。スケジュールが次回実行されるときに変更が有効になります。

メモ: 一部のポリシー形式およびスケジュール形式ではメディアの多重化がサポートされません。その場合、メディアの多重化オプションを選択できません。

注意: MS-SQL-Server ポリシーの場合、複数のストライプを使用したバックアップにも構成されるスケジュールの多重化を有効にしないでください。多重化を 1 つ以上のストライプを使用するスケジュールで有効にすると、リストアに失敗します。

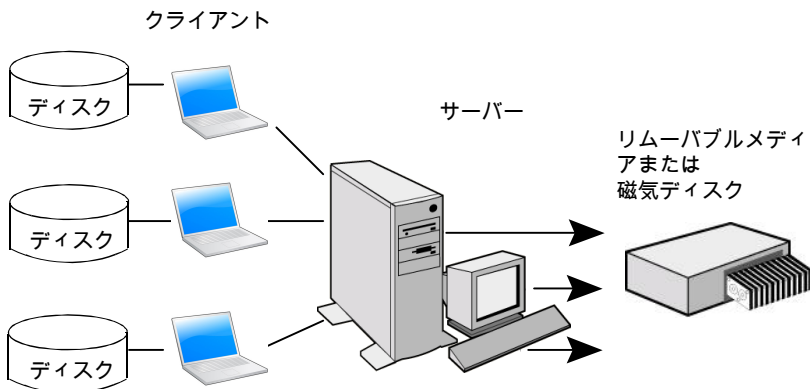
多重化されたバックアップを構成するには、ストレージユニット ([ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)]設定) とスケジュール ([メディアの多重化 (Media multiplexing)]設定) の両方の構成で多重化を指定する必要があります。[メディアの多重化 (Media multiplexing)]設定に関係なく、NetBackup によって開始される最大ジョブ数は、ストレージユニットの[ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)]の値を超えることはありません。

NetBackup の多重化では、1 つ以上のクライアントから 1 つのストレージデバイスに並列実行バックアップが送信されます。NetBackup によって、バックアップがメディアに対して順に多重化されます。多重化されたバックアップと多重化されていないバックアップ

は、同じボリュームに存在可能です。個別のボリュームプールまたはメディア ID は必要はありません。

図 20-12 は、サーバーへのクライアントデータの多重化の流れを示しています。

図 20-12 多重化されたバックアップ



多重化について

多重化は、通常、バックアップの完了に必要な時間を削減するために使用します。次の表は、多重化の使用によってパフォーマンスが向上する状況を記述したものです。

表 20-43 多重化によってパフォーマンスが向上する状況

項目	説明
低速のクライアント	NetBackup によってソフトウェアの圧縮が使用されているインスタンス (通常、クライアントのパフォーマンスが低下します) も向上します。
複数の低速ネットワーク	並列実行データストリームによって、利用可能なネットワーク容量が効率よく利用されます。
多数の短いバックアップ (増分バックアップなど)	多重化によって、並列実行データストリームが提供されるだけでなく、デバイスが利用可能になるまでの各ジョブの待機時間が削減されます。そのため、ストレージデバイスの転送速度が最大になります。

多重化バックアップのリストアを行うために、特別な操作は必要ありません。**NetBackup** によってメディアが検索され、要求されたバックアップのリストアが行われます。多重化を使用する場合、イメージの読み込み時間が長くなるため、リストアのパフォーマンスが低下する場合があります。

多重化がリストア時間に与える影響を小さくするには、ストレージユニットの最大フラグメントサイズを、指定可能な最大値より小さい値に設定します。また、UNIX では、使用中のテープドライブに適用する場合、高速テープ位置設定 (ブロックの検索) を有効にしてください。

多重化を使用するときは次の構成の設定を考慮してください。

表 20-44 多重化に影響するプロパティと属性

項目	説明	参照場所
[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)](ポリシー属性)	ポリシーの実行時に NetBackup によって並列して実行されるジョブの数を制限します。指定したレベルの多重化をサポートするには、この属性を十分に高く設定します。 p.704 の「[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)](ポリシー属性)」を参照してください。	■ ポリシー属性内。

項目	説明	参照場所
[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)](ホストプロパティ)	任意の NetBackup クライアントで同時に実行できるバックアップジョブの数を制限します。このプロパティは[グローバル属性 (Global attributes)]ホストプロパティの一部です。 p.115 の「[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ」を参照してください。 通常、クライアントの設定値が多重化に影響を与えることはありません。ただし、同一のクライアントに存在する異なるスケジュールからのジョブが同一のストレージユニットに送信される場合を考えてみます。この場合、ストレージユニットで最大多重化数に達する前に、クライアントで許容される最大ジョブ数に達することがあります。クライアントで最大ジョブ数に達した場合、NetBackup ではストレージユニットの多重化機能を十分に活用することができません。 値は、CPU の並列実行ジョブ処理能力に基づいて選択します。追加バッファが必要なため、メモリも重要です。サーバーが他のタスクを実行できないか、またはメモリやプロセスが不足している場合、ストレージユニットの[ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)]の設定値を小さくします。 多重化による CPU への潜在的な負荷を予測する場合、次の制限を考慮します。 ■ NetBackup によって試行可能な並列実行ジョブの最大数は、すべてのストレージユニットで実行可能な並列実行バックアップジョブを合計した数と同じです。 ■ 1 つのストレージユニットで実行可能な並列実行ジョブの最大数は、[ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)]の値とドライブ数を掛けた値です。 p.585 の「[ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)]ストレージユニット設定」を参照してください。	■ [ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 > [グローバル属性 (Global Attributes)]。

項目	説明	参照場所
[データストリームの最大数を設定する (Maximum data streams)] (ホストプロパティ)	他のクライアントに影響を与えることなく、特定のクライアントで許容される最大ジョブ数を設定します。このプロパティは[クライアント属性 (Client Attributes)]ホストプロパティの一部です。 p.68 の「[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティの[全般 (General)]タブ」を参照してください。	■ [ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 > [クライアント属性 (Client attributes)]。 ■ プロパティは[全般 (General)]タブの右ペインに表示されます。
[多重化リストアの遅延 (Delay on multiplexed restores)] (ホストプロパティ)	同じテープ上の多重化イメージセット内に存在するファイルおよび raw パーティションに対して、サーバーが追加のリストア要求を待機する時間を指定します。このプロパティは[一般的なサーバー (General server)]ホストプロパティの一部です。 p.68 の「[クライアント属性 (Client attributes)]プロパティの[全般 (General)]タブ」を参照してください。	■ [ホスト (Hosts)]>[ホストプロパティ (Host properties)]> プライマリサーバーを選択 > [一般的なサーバー (General server)]。
[メディアの多重化 (Media Multiplexing)] (ポリシーのスケジュール属性)	あるドライブで最大値に達すると、NetBackup は別のドライブへジョブが送信されます。 NetBackup がジョブを多重化する場合、ドライブのジョブ数が[メディアの多重化 (Media Multiplexing)]制限または[ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)]制限に一致するまで、ジョブの追加が継続されます。 p.786 の「[メディアの多重化 (Media multiplexing)](スケジュール属性)」を参照してください。	■ ポリシーを開きます。 ■ [スケジュール (Schedules)]タブを選択します。 ■ [追加 (Add)]を選択して新しいスケジュールを作成し、[メディアの多重化 (Media multiplexing)]オプションを構成します。
[ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)] (ストレージユニットの設定)	NetBackup では、1 台のドライブに対して複数のスケジュールのジョブを追加できます。 NetBackup がジョブを多重化すると、ドライブのジョブ数が[ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)]制限または[メディアの多重化 (Media multiplexing)]制限に一致するまで、ジョブの追加が継続されます。 p.585 の「[ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)]ストレージユニット設定」を参照してください。	■ [ストレージ (Storage)]、[ストレージユニット (Storage units)]の順に選択します。 ■ ストレージユニットを開きます。 ■ この設定は、ストレージユニットの[基本プロパティ (Basic properties)]で利用可能です。

多重化をスケジュールと使用する例

図 20-13 は、多重化がアクティブな場合にスケジュールがどのように影響されるかについての例を提供します。

図 20-13 多重化処理のシナリオ

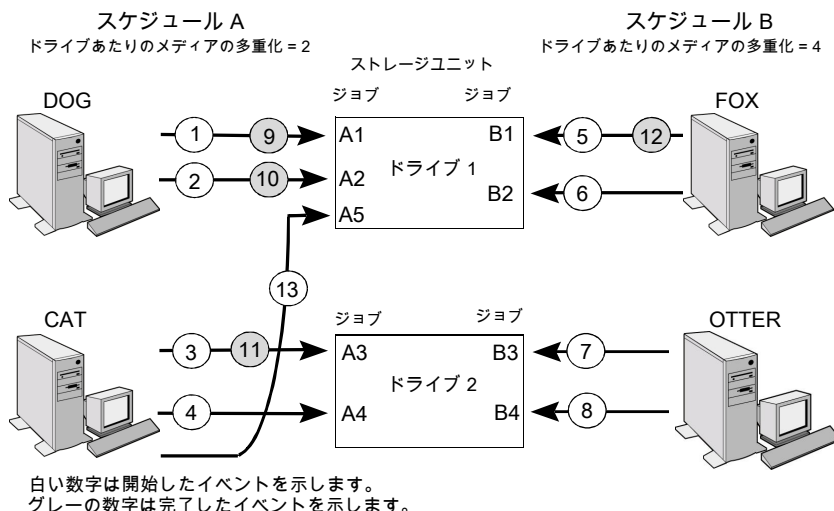


図 20-13 については次の点を前提としています。

- スケジュール A が最初に始まります。
スケジュールは同じポリシーまたは異なるポリシーにある場合があります。
- 「複数のデータストリームを許可する (Allow Multiple Data Streams)」が有効になっています。
その結果、クライアントは複数のデータストリームを持つ場合があります。
p.724 の「[\[複数のデータストリームを許可する \(Allow multiple data streams\)\]\(ポリシー属性\)](#)」を参照してください。

表 20-45 多重化処理のシナリオの説明

イベント	説明
1 と 2	■ ドライブ 1 でクライアント DOG のジョブ A1 と A2 が開始されました。 ■ ドライブ 1 で、スケジュール A の[メディアの多重化 (Media Multiplexing)]制限の「2」に達しました。
3 と 4	■ ドライブ 2 でクライアント CAT のジョブ A3 と A4 が開始されました。 ■ ドライブ 2 で、スケジュール A の[メディアの多重化 (Media Multiplexing)]制限の「2」に達しました。

イベント	説明
5 と 6	- ドライブ 1 でクライアント <i>FOX</i> のジョブ B1 と B2 が開始されました。 - ドライブ 1 で[ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)]ストレージユニット設定に達しました。
7 と 8	- ドライブ 2 でクライアント <i>OTTER</i> のジョブ B3 と B4 が開始されました。 - 現在、すべてのジョブがスケジュール B で実行されています。 - ドライブ 2 で[ドライブあたりの最大ストリーム数 (Maximum streams per drive)]ストレージユニット設定に達しました。
9 と 10	- ドライブ 1 でクライアント <i>DOG</i> のジョブ A1 と A2 が終了しました。 - ただし、クライアント <i>FOX</i> のジョブ B1 と B2 は継続して実行されます。 - スケジュール A の[メディアの多重化 (Media Multiplexing)]制限の「2」により、ジョブ A5 がドライブ 1 で開始されません。
11 と 12	- クライアント <i>CAT</i> のジョブ A3 がドライブ 2 で終了しました。 - クライアント <i>FOX</i> のジョブ B1 がドライブ 1 で終了しました。 - ジョブ B2 は現在ドライブ 1 で実行されている唯一のジョブです。
13	- ドライブ 1 でクライアント <i>CAT</i> のジョブ A5 が開始されました。 - ジョブ A5 はスケジュール A の最後のジョブです。 - スケジュール A の[メディアの多重化 (Media Multiplexing)]制限の「2」により、ジョブ A5 がドライブ 2 で開始されません。 - したがって、ジョブ A5 はドライブ 1 で開始されます。

NetBackup によって、すでに多重化を使用しているドライブへの多重化ジョブの追加が試行されます。多重化ジョブを特定のドライブに限定すると、多重化を行わないジョブのために他のドライブを使用できます。

NetBackup によって多重化セットのすべてのジョブが開始される前にバックアップ処理時間帯が終了した場合、NetBackup では、開始したジョブだけが完了します。

たとえば、[図 20-13](#) において、ジョブ A1 から A5 がすでにキューに投入され有効状態であることが、アクティビティモニターに表示されていると想定します。

バックアップ処理時間帯が終了する前に開始したジョブが A1 および A2 だけである場合、NetBackup ではセット内の他のジョブは実行されません。ジョブが 1 つも開始していない状態でバックアップ処理時間帯が終了した場合、最初にキューに投入され有効状態になったジョブだけが開始および完了します。この例では、ジョブ A1 です。

非多重化について

非多重化は、将来のリストアを高速化し、オフサイトでの保管用のコピーの作成に有効です。バックアップを非多重化するためにカタログユーティリティの複製処理を使います。

複製を使用すると、ソースメディアからターゲットメディアに、一度に 1 つの多重化バックアップをコピーできます。複製が完了すると、ターゲットには複製した各バックアップの 1 つの非多重化コピーが含まれます。(ターゲットには他のバックアップも含まれる場合があります)。複製コピーをプライマリコピーにすることもできます。バックアップを複製する際に、[複数コピーの構成 (Configure Multiple Copies)]ダイアログボックスで[多重化を維持する (Preserve Multiplexing)]を選択しないでください。

メモ: bpduplicateの代わりに NetBackupbpduplicate コマンドを実行する場合、コマンドに -mpx オプションを含めないでください。

p.965 の「[バックアップイメージの複製](#)」を参照してください。

[開始時間帯 (Start Window)]タブ

[開始時間帯 (Start Window)]タブはスケジュールの使用時に NetBackup でジョブを開始可能な期間を設定するための制御を提供します。この期間を、時間帯と呼びます(開始時間帯あるいはバックアップ処理時間帯ともいいます)。ジョブを完了するために必要な要件を満たすように、時間帯を構成します。

たとえば、異なる時間帯を作成します。

- 毎日特定の時間にバックアップを開始可能な時間帯
- 1 週間いつでもバックアップを開始可能な時間帯

ポリシースケジュールでの時間帯の追加、変更、削除

時間帯を追加、変更、または削除するには、次のいずれかの手順を使います。

版 NetBackup 管理コンソールで時間帯を追加または変更する方法

- 1 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]>[ポリシー (Policies)]を展開します。
- 2 中央ペインでポリシー名を展開し、[スケジュール (Schedules)]を選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。

- 時間帯を追加する方法
- [処理 (Actions)]>[新規 (New)]>[スケジュール (Schedule)]をクリックします。
 - [スケジュールの追加 (Add Schedule)]ダイアログボックスで、スケジュールの名前を入力します。

- 時間帯を変更する方法
- 右ペインで、変更するスケジュールをダブルクリックします。[スケジュールの変更 (Change Schedule)]ダイアログボックスが表示されます。

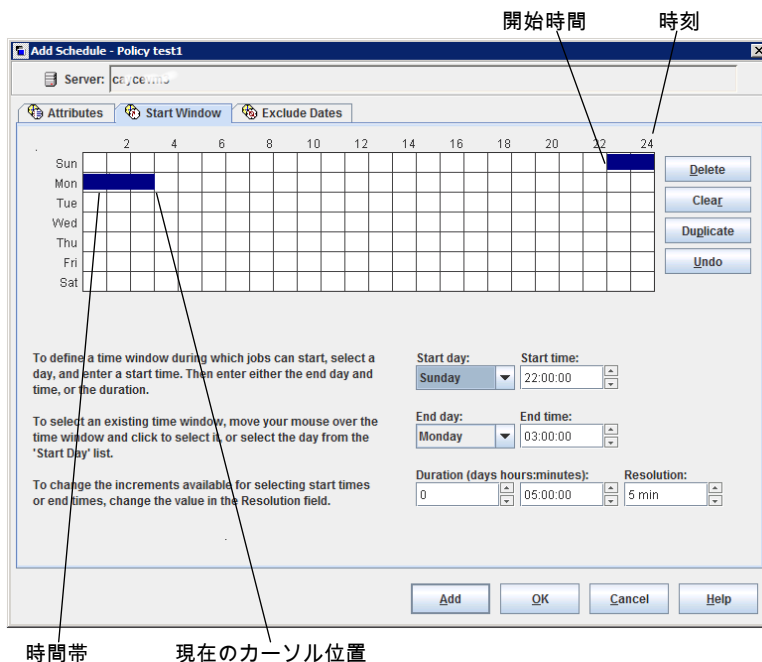
- 4 [開始時間帯 (Start Window)]タブをクリックします。
- 5 開始時刻か終了時刻を選択するために利用可能な増分を変更するには、[間隔 (Resolution)]フィールドの値を変更します。5、10、15、30 分を選択できます。たとえば、間隔を 10 分に設定すると、時間帯を 10 分単位で調整できます。
- 6 時間帯の開始を指定するには、次の操作を実行します。

時間テーブルでカーソルをドラッグする

その時間帯を開始する日時をクリックし、それを終了する日時までドラッグします。

ダイアログボックスの設定を使用する

- [開始日 (Start day)]フィールドで、時間帯を開始する最初の日を選択します。
- [開始時刻 (Start time)]フィールドで、時間帯の開始時刻を選択します。



- 7 時間帯の終了を指定するには、次の操作を実行します。

時間テーブルでカーソルをドラッグする

その時間帯を開始する日時をクリックし、それを終了する日時までドラッグします。

時間帯の期間を入力します。

[期間 (日 時:分) (Duration (days hours: minutes))]フィールドに期間を入力します。

- 時間帯の終わりを指定します。
- [終了曜日 (End day)] リストで日を選択します。
 - [終了時刻 (End time)] フィールドで時間を選択します。

時間帯は、スケジュール表示にバーで表示されます。

ポリシー内のすべてのクライアントのバックアップが完了できるように、十分な時間を指定します。

また、**NetBackup** 以外の要因でスケジュールの開始が遅れる場合のために、スケジュールに時間的余裕を持たせておきます。(たとえば、利用不能なデバイスが原因で遅延が発生します)。そうしないと、一部のバックアップが開始されない可能性があります。

8 必要に応じて、次のいずれかを実行します。

[削除 (Delete)] をクリックして 選択した時間帯を削除します。

[消去 (Clear)] をクリックして スケジュール表示からすべての時間帯を削除します。

[複製 (Duplicate)] をクリックして 選択した時間帯を週全体にレプリケートします。

[元に戻す (Undo)] をクリックして 最後の操作を取り消します。

9 次のいずれかを実行します。

[追加 (Add)] をクリックして 時間帯を保存し、ダイアログボックスを開いたままにする場合。

[OK] をクリックして 時間帯を保存し、ダイアログボックスを閉じる場合。

スケジュールの期間の例

図 20-14 に、2 つの完全バックアップスケジュールにスケジュールの期間が与える影響を示します。スケジュール B の開始時刻が、前のスケジュール A の終了時刻の少し後に設定されています。どちらのスケジュールにも、バックアップが予定されている 3 つのクライアントが含まれています。

図 20-14 期間の例

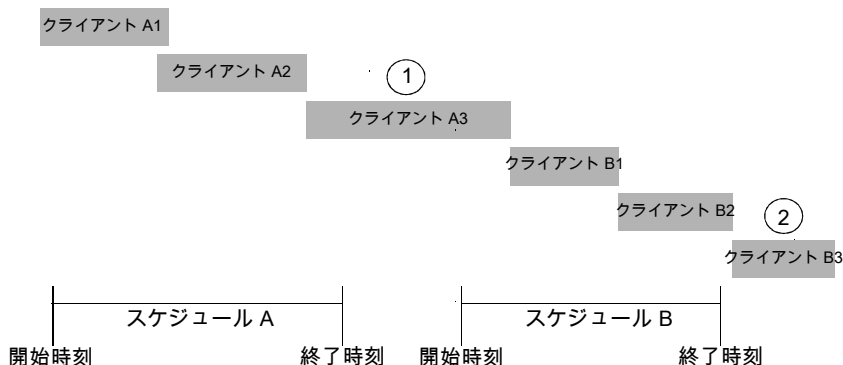


図 20-14 は次の点を示しています。

- ポイント 1 クライアント A3 はスケジュール A の時間帯内に開始しますが、スケジュール B の開始時刻の後まで完了しません。ただし、バックアップが実行されている間に時間帯が終了しても、クライアント A3 は完了するまで実行されます。スケジュール B のクライアント B1 は、クライアント A3 が完了するとすぐ開始します。
- ポイント 2 スケジュール A により、スケジュール B のすべてのクライアントをバックアップするための十分な時間が残されません。その結果、時間帯が終了したため、クライアント B3 は開始できません。クライアント B3 は、次に NetBackup がスケジュール B を実行するときまで待機する必要があります。

スケジュールからの日付の除外

バックアップポリシーのスケジュールから特定の日付を除外するには、[日のエクスクルード (Exclude Days)] タブを使います。日付がスケジュールから除外されると、その日にジョブは実行されません。タブは連続した 3 カ月のカレンダーを表示します。表示される最初の月または年を変更するには、カレンダー上部のリストを使用します。

スケジュールから曜日を除外する方法

- 1 次のいずれか、または複数の方法を使用して、除外する曜日を指定します。
 - 除外する曜日を 3 カ月カレンダーで選択します。月または年を変更するには、カレンダーの上部にあるドロップダウンリストを使います。
 - [週/曜日設定 (Recurring Week Days)] を指定する方法
 - 毎年毎月のすべての曜日を選択するには、[すべてを選択 (Select All)] をクリックします。

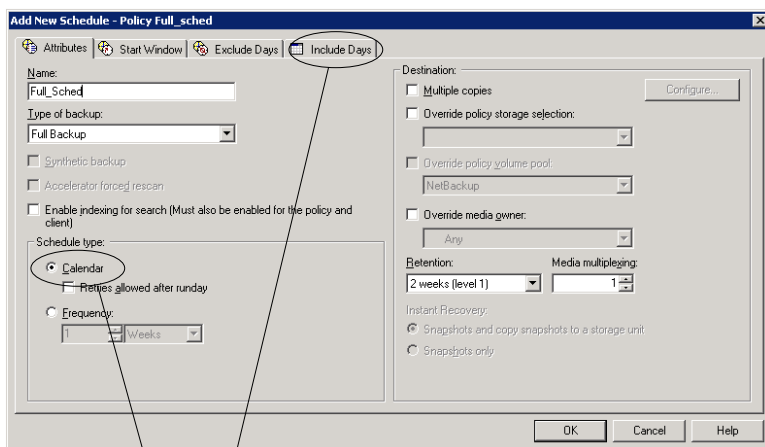
- 既存のすべての選択を削除するには、[すべて消去 (Deselect All)]をクリックします。
- 毎月の特定の曜日を除外するように選択するには、マトリックスのボックスにチェックマークを入れます。
- 毎月の特定の曜日を除外するには、曜日の列ヘッダーをクリックします。
- 毎月の特定の週を除外するには、[1 番目 (1st)]、[2 番目 (2nd)]、[3 番目 (3rd)]、[4 番目 (4th)]、または[最終週 (Last)]の行ラベルをクリックします。
- [日付指定 (Recurring Days of the Month)]を指定する方法:
 - 毎月のすべての日付を選択するには、[すべてを選択 (Select All)]をクリックします。
 - 既存のすべての選択を削除するには、[すべて消去 (Deselect All)]をクリックします。
 - 毎月の特定の曜日を除外するように選択するには、マトリックスのボックスにチェックマークを入れます。
 - 毎月の最終日を除外するには、[最終日 (Last Day)]をクリックします。
- [特定日付指定 (Specific Dates)]を指定する方法:
 - [新規 (New)]をクリックします。[日付の選択 (Date Selection)]ダイアログボックスに月、日および年を入力します。[OK]をクリックします。
その日付が[特定日付指定 (Specific Dates)]リストに表示されます。
 - 日付を削除するには、リストの日付を選択します。[削除 (Delete)]をクリックします。

2 必要に応じてさらに日付を追加し、[OK]をクリックして変更を保存します。

[含める日 (Include Dates)]タブ

[含める日 (Include Dates)]タブは[新しいスケジュールの追加 (Add New Schedule)]または[スケジュールの変更 (Change Schedule)]ダイアログボックスに表示されます。タブを表示するには、[属性 (Attributes)]タブで[スケジュール形式 (Schedule type)]として[カレンダー (Calendar)]オプションを選択する必要があります。カレンダーを基準としてスケジュールを設定すると、作業の実行日付を決定するときに、複数の実行日付オプションを指定できます。

図 20-15 ポリシーの[属性 (Attributes)]タブでの[カレンダー (Calendar)]の選択



[カレンダー (Calendar)] 属性で [日のインクルード (Include Days)]
タブを有効にする

タブは連続した 3 カ月のカレンダーを表示します。表示される最初の月または年を変更するには、カレンダー上部のリストを使用します。

[含める日 (Include Dates)] タブを使ったスケジューラー一覧

ポリシーの[属性 (Attributes)]タブの[カレンダー (Calendar)]オプションを使用して、カレンダービューに基づいてジョブスケジュールを作成します。[含める日 (Include Dates)]タブを使うと、管理者は特定の日付、特定の曜日、月の特定の日に実行されるようスケジュールを設定できます。

メモ: スケジューラー一覧を使用しているときに緑のチェックマークが日付に表示されていない場合、その日付はスケジュールに含まれていません。

[実行日後の再試行を許可する (Retries allowed after runday)]を有効にすると、スケジュールに含まれていない日にジョブが実行される可能性があります。

新しいカレンダーのスケジュールが[実行日後の再試行を許可する (Retries allowed after runday)]で作成されると、バックアップウィンドウが開く次の日に最初のジョブがスケジュールにより実行されます。その日はスケジュールに含まれている最初の実行日の前になることもあります。

カレンダーを使用して実行日をスケジュール設定する方法

- 1 [属性 (Attributes)]タブで[カレンダー (Calendar)]属性を有効にします。
- 2 [含める日 (Include Dates)]タブを選択します。
- 3 1 つ以上の方法でジョブが実行される日付をスケジュール設定します。
 - ジョブを実行する日付を 3 カ月分のカレンダー上で選択します。月または年を変更するには、カレンダーの上部にあるドロップダウンリストを使います。
 - [週/曜日設定 (Recurring Week Days)]を指定する方法
 - 毎年の毎月のすべての曜日を選択するには、[すべてを選択 (Select All)]をクリックします。
 - 既存のすべての選択を削除するには、[すべて消去 (Deselect All)]をクリックします。
 - 毎月特定の日を選択するには、表にあるその日のチェックボックスにチェックマークを付けます。
 - 毎月特定の曜日を含めるには、その曜日の列ヘッダーをクリックします。
 - 毎月特定の週を含めるには、[1 番目 (1st)]、[2 番目 (2nd)]、[3 番目 (3rd)]、[4 番目 (4th)]、[最後 (Last)]の行ラベルをクリックします。
 - [日付指定 (Recurring Days of the Month)]を指定する方法:
 - 毎月のすべての日付を選択するには、[すべてを選択 (Select All)]をクリックします。
 - 既存のすべての選択を削除するには、[すべて消去 (Deselect All)]をクリックします。
 - 毎月特定の日付を選択するには、表にあるその日付のチェックボックスにチェックマークを付けます。
 - 毎月の最終日を含めるには、[最終日 (Last Day)]をクリックします。
 - [特定日付指定 (Specific Dates)]を指定する方法:
 - [新規 (New)]をクリックします。[日付の選択 (Date Selection)]ダイアログボックスに月、日および年を入力します。[OK]をクリックします。
その日付が[特定日付指定 (Specific Dates)]リストに表示されます。
 - 日付を削除するには、リストの日付を選択します。[削除 (Delete)]をクリックします。
- 4 必要に応じてさらに日付を追加し、[OK]をクリックして指定した日付を保存します。

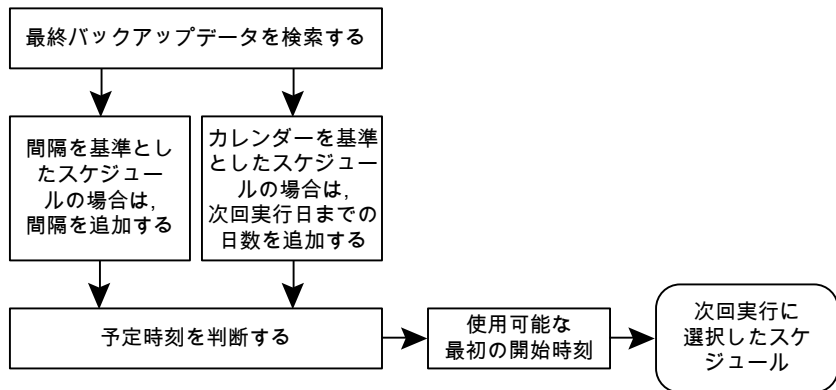
次に動作するスケジュールを NetBackup が判断する方法

ポリシーが 1 つのスケジュールを含んでいるとき、次に実行するスケジュールの選択は簡単です。しかしポリシーが複数のスケジュールを含んでいるとき、次に実行するスケジュールの選択はより複雑になることがあります。

NetBackup は次に実行するスケジュールを判断するために 2 つのタスクを実行します。

- NetBackup は各スケジュールの予定時刻を判断します。予定時刻は次によって決まります。
 - 比較対象スケジュールに基づく各スケジュールの最後のバックアップデータ。
 - 次に実行される予定のスケジュールを決定するために各スケジュールに追加される間隔。
- NetBackup は各スケジュールの開始時間を調べます。最も近い開始時間のスケジュールが次に実行されます。つまり、次の有効な処理時間帯があるスケジュールです。

図 20-16 スケジュールの選択の概要



次のいずれかのイベントが発生すると、NetBackup はポリシーで次に実行するスケジュールを再計算します。

- バックアップジョブが終了する。
- クライアントのバックアップのイメージが期限切れになる。
- Policy Execution Manager (nbpem) が起動する。
- 管理者がポリシーを変更する。

NetBackup は 10 分毎に更新済みポリシーを検索します。ポリシーが更新されたばかりの場合、NetBackup は変更が現在進行中ではないことを確実にするためにさら

に少しの間待機します。[グローバル属性 (Global Attributes)]ホストプロパティの[ポリシーの更新間隔 (Policy update interval)]を変更することで、NetBackup が更新を検索する間隔を変更できます。

p.115 の「[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ」を参照してください。

各スケジュールの予定時刻は、スケジュールの間隔とスケジュールの最後のバックアップデータを足した値に等しくなります。

予定時刻 = 最後のバックアップデータ + 間隔

「最後のバックアップデータ」は、比較対象スケジュール間で最も最近に実行されたスケジュールを指します。NetBackup はそのスケジュールの日時を使用して、そのスケジュールを最後のバックアップデータとして使うすべてのスケジュールの予定時刻を判断します。

場合によっては、スケジュールの最後のバックアップデータとしてそのスケジュール自体が指定されます。また、スケジュールの最後のバックアップデータは別の比較対象スケジュールである場合もあります。

NetBackup は比較対象スケジュールを識別するために次の比較をします。

完全スケジュール 同じまたはより長い間隔の完全スケジュールと比較されます。

累積増分スケジュール 次と比較されます。

- 同じまたはより長い間隔の完全スケジュール。
- 同じまたはより長い間隔の他の累積増分スケジュール。

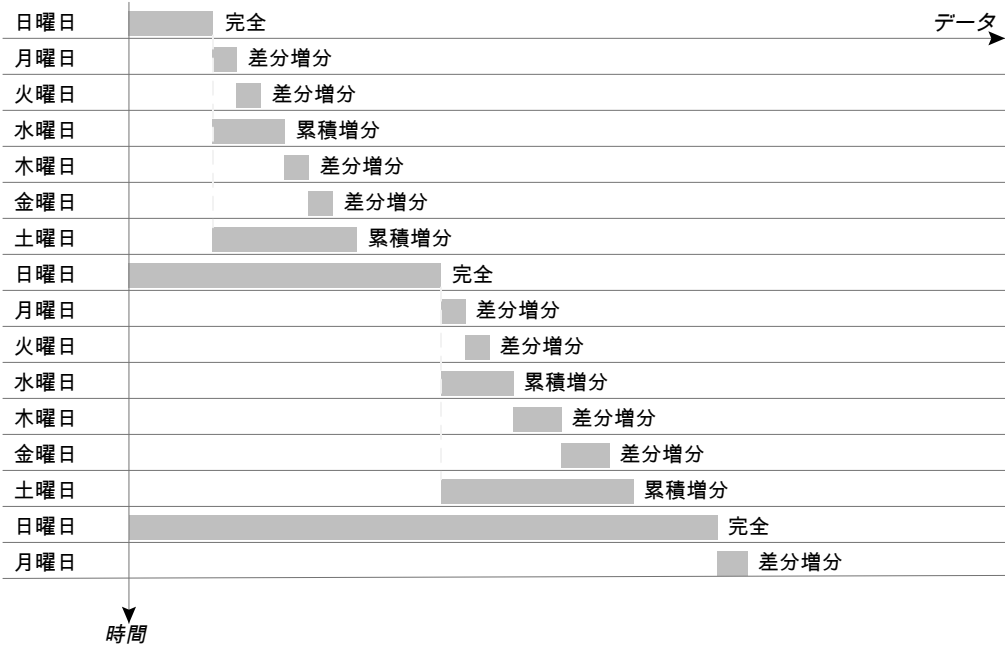
差分増分スケジュール 次と比較されます。

- 同じまたはより長い間隔の完全スケジュール。
- 同じまたはより長い間隔の累積増分スケジュール。
- 同じまたはより長い間隔の他の差分増分スケジュール。

メモ: より長い間隔があるということは、実行頻度がより少なくなるようにスケジュールが設定されることを意味します。

比較ルールは、スケジュールの考慮で見落とされるスケジュールがないようにし、バックアップの適用範囲の漏れを防ぎます。

図 20-17 スケジュールの適用範囲



次のジョブはスケジュールにおいてさらに複雑さを増します。

- 複数ストリームのジョブ
- 各ストリームは独自にスケジュールされます。データはストリームバックアップの間に変更されることがあります。同じバックアップに基づく 2 つのリストアは、異なるストリームから作成された場合は同一ではないことがあります。
- 合成バックアップのジョブ
- NetBackup は次の合成ジョブを実行するタイミングを判断する基準として前の合成ジョブを使います。

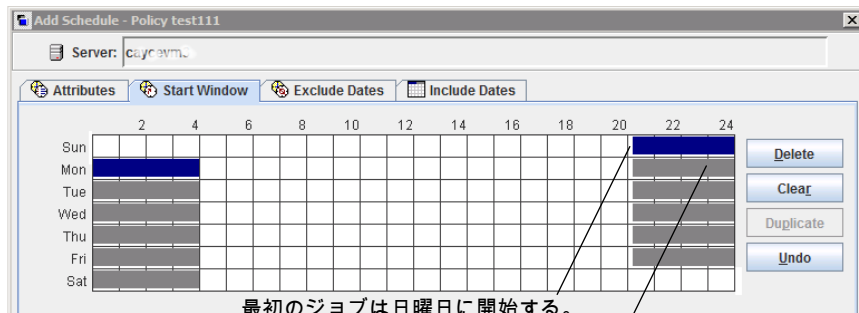
午前 0 時をまたぐスケジュール時間帯について

バックアップ処理時間帯は、ある日に始まり、別の日に終了することがあります。この種類のポリシーが毎日実行されるようにスケジュールされている場合、NetBackup は午前 0 時直後にジョブを再実行しません。代わりに、時間帯が次の日にまたがっていても、NetBackup はそれが 1 つの時間帯であるとみなします。NetBackup は、通常の場合管理者は前回のバックアップ後すぐにジョブを再実行しないと認識します。

図 20-18 に、午前 0 時をまたぐ時間帯を示します。

ポリシーが毎日実行されるようにスケジュールされている場合、NetBackup は後からその日に別の時間帯を開くかどうかを確認します。別の時間帯が後から開始されるように設定されていると、NetBackup は待機してからそのジョブを実行します。

図 20-18 午前 0 時をまたぐスケジュール



最初のジョブは日曜日に開始する。

このジョブは、月曜日にも予定されている。午前 0 時を過ぎた直後にジョブを再度実行する代わりに、NetBackup はその日内で遅い時間帯を探してジョブを実行する。

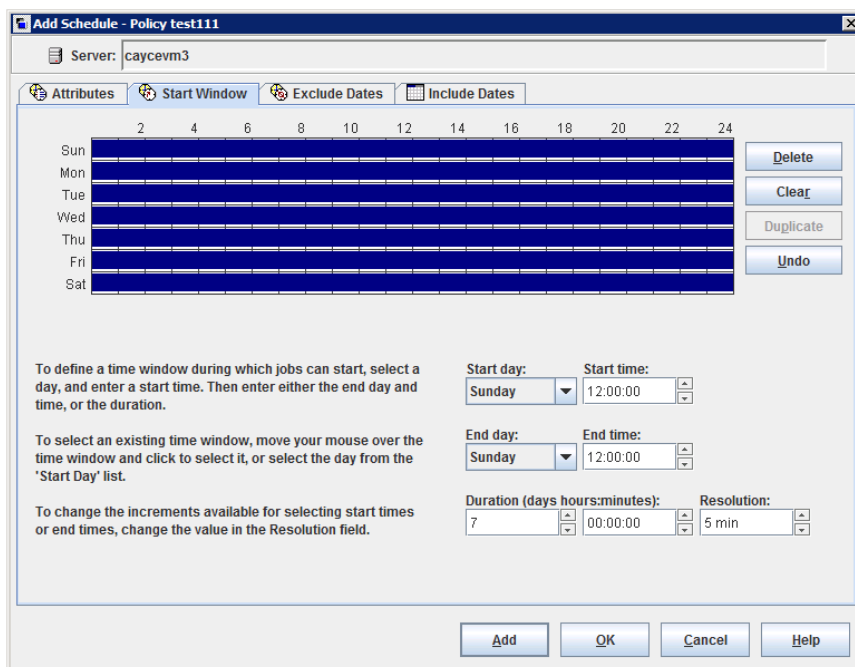
他の時間帯が後からその日に開始されるようにスケジュールされていない場合、NetBackup は待機しません。ジョブの間隔が毎日であれば、毎日のバックアップ間隔要求に合わせて午前 0 時の後にジョブが再実行されます。

開放スケジュールがカレンダーを基準としたスケジュールと間隔を基準としたスケジュールに与える影響

単一のバックアップ処理時間帯が週全体に及ぶことがあります。この種類のスケジュールは、ジョブが週の昼夜いつでも実行されることがあるため、開放スケジュールと呼ばれます。開放スケジュールは、カレンダーを基準としたスケジュールと間隔を基準としたスケジュールに異なる影響を及ぼします。

図 20-19 に、開放スケジュールを示します。

図 20-19 開放スケジュール



開放スケジュールは、カレンダーを基準としたスケジュールと間隔を基準としたスケジュールに異なる影響を及ぼします。

カレンダーを基準としたスケジュール

カレンダーを基準としたスケジュールは、スケジュール一覧で示される任意の日時に実行されます。**NetBackup** は、その環境ではスケジュール一覧で選択されたそれぞれの日にバックアップが 1 回必要であると想定します。開放スケジュールの場合、毎日のバックアップ要件を満たすように午前 0 時直後にバックアップが実行されます。

間隔を基準としたスケジュール

間隔を基準としたスケジュールは、間隔設定が示すときに実行されます。たとえば、1 日の間隔設定の場合、**NetBackup** は開始時刻に基づいて 24 時間間隔でバックアップを実行します。

図 20-20 はカレンダーを基準としたスケジュールのバックアップが月曜日から金曜日まで実行されることを示します。

図 20-20 カレンダーを基準とした開放スケジュール

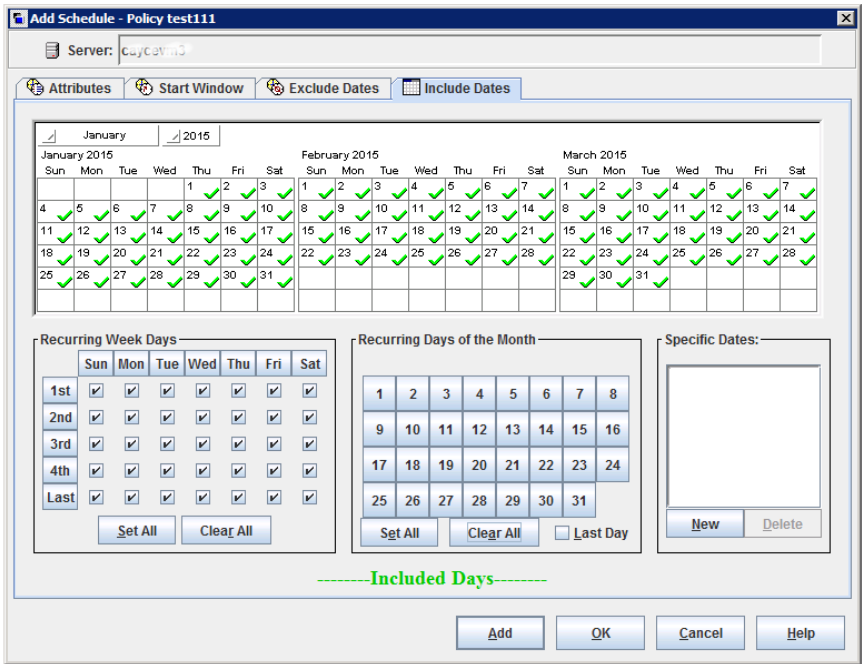


図 20-21 と図 20-22 は、間隔を基準としたスケジュールに基づくバックアップが土曜日と日曜日を含む、週の毎日実行される必要があることを示します。

図 20-21 間隔を基準とした開放スケジュール

Add Schedule - Policy test111

Server: c:\program

Attributes | Start Window | Exclude Dates

Name: freq_daily_sched

Type of backup: Full Backup

☐ Synthetic backup

☐ Accelerator forced rescan

☐ Enable indexing for search
(Must also be enabled for the policy and client)

Schedule type:

☐ Calendar

☐ Retries allowed after runday

☒ Frequency: 1 days

Destination:

☐ Multiple copies [Configure...](#)

☐ Override policy storage selection:

☐ Override policy volume pool: NetBackup

☐ Override media owner:

Retention: 2 weeks (Retention Level 1)

Media multiplexing: 1

Instant Recovery:

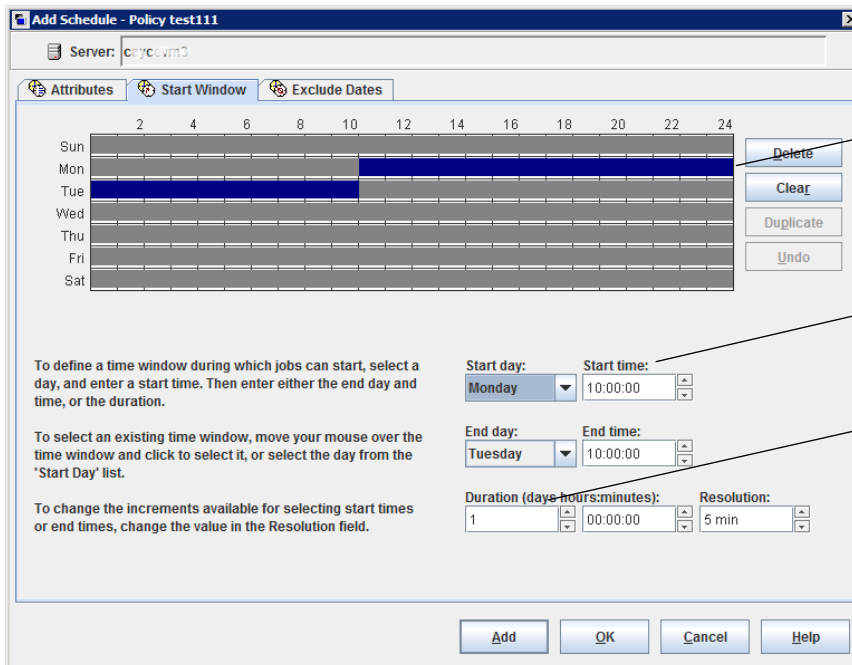
☒ Snapshots and copy snapshots to a storage unit

☐ Snapshots only

[Add](#) [OK](#) [Cancel](#) [Help](#)

図 20-22 では、開始時刻に基づいて午後 10 時に毎夜バックアップが実行されます。

図 20-22 開放スケジュールでの間隔を基準としたスケジュールの例



時間帯をクリックして、日ごとの開始時間と終了時間を確認する。

開始時間は、いつバックアップを実行できるかを示す。

時間帯の期間として、1日が指定されている。開放スケジュールを作成するため、それぞれの日の時間帯は重複する。

NetBackup 管理コンソールでの開放スケジュールの作成

次の手順は、既存のポリシーに開放スケジュールを作成する方法を記述します。この手順では、開放スケジュールは午後 10 時に始まるように構成されます。

NetBackup 管理コンソールで開放スケジュールを作成する方法

- 1 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]> [ポリシー (Policies)]を展開します。
- 2 中央ペインで、開放スケジュールを作成するポリシー名をダブルクリックします。
- 3 [スケジュール (Schedules)]タブを選択します。
- 4 [新規 (New)]または[追加 (Add)]をクリックして新しいスケジュールを作成します。
- 5 [属性 (Attributes)]タブで情報を入力します。
- 6 [開始時間帯 (Start Window)]タブを選択します。
- 7 [開始曜日 (Modify Day)]として日曜日、[開始時刻 (Start time)]として[22:00:00 (10:00:00 PM)]を選択します。

- 8 [終了曜日 (End Day)]として月曜日、[終了時刻 (End time)]として[22:00:00 (10:00:00 PM)]を選択します。[期間 (Duration)]は自動的に 1 日に設定されます。
- 9 週の各曜日にこの時間帯をコピーするために[複製 (Duplicate)]をクリックします。
- 10 [OK]をクリックして、ポリシーにスケジュールを追加します。

バックアップ間隔に影響する実行時の注意事項

次の項目は、想定よりも頻繁に NetBackup ジョブが実行されたり、ジョブがバックアップ間隔要件に合わなくなったりする原因になることがあります。

表 20-46 バックアップ間隔に影響する可能性がある項目

項目	説明
ポリシーの変更によるポリシーの実行	管理者がポリシーを変更するか有効にすると、その変更により NetBackup は可能なかぎり早くジョブを実行するように要求されます。カレンダーを基準としたスケジュールの場合でも間隔を基準としたスケジュールの場合でも同じです。
時間帯の可用性	カレンダーを基準としたスケジュールの場合も間隔を基準としたスケジュールの場合も、ジョブは構成された実行日の時間帯が開始されていないと実行できません。 ■ カレンダーを基準としたスケジュールの場合、時間帯はスケジュール一覧が示す特定の日付、週の特定の曜日または月の特定の日に開始される必要があります。 メモ: 間隔は、カレンダーを基準としたスケジュールに対しては設定できません。このスケジュール形式の場合、NetBackup は毎日のバックアップ間隔を想定します。 ■ 間隔を基準にしたスケジュールの場合は、毎日の間隔により時間帯を毎日開始する必要があります。
バックアップ試行の制限	[グローバル属性 (Global Attribute)]ホストプロパティの設定は、失敗したジョブの実行を何回試行できるかを決定します。[スケジュールバックアップの試行回数 (Schedule backup attempts)]プロパティには、試行回数と試行できる期間が含まれます。 デフォルトでは、失敗したジョブは開始されている時間帯が利用可能な場合 12 時間ごとに 2 回試行されます。この設定は他の間隔要件よりも優先され、開始されている時間帯がスケジュールでスキップされる場合があることに注意してください。 たとえば、ジョブがジョブ試行の最大数に一致した場合、NetBackup は示された再試行期間にジョブの再実行を試行しません。開始されている時間帯であっても、その日に毎日のバックアップ間隔に一致していない場合でも試行しません。 p.115 の「[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ」を参照してください。

[クライアント (Clients)] タブについて

[クライアント (Clients)] タブには、選択したポリシーによってバックアップ (または処理) されるクライアントのリストが表示されます。バックアップするクライアントは、1 つ以上のバックアップポリシーのリストに含まれている必要があります。

クライアントを複数のバックアップポリシーに含めると有効な場合があります。たとえば、1 つのクライアント名を 2 つのポリシーに指定し、クライアント上の異なるファイルセットを別々のポリシー規則に従ってバックアップできます。

[クライアント (Clients)] タブは、Vault またはカタログポリシー形式の場合は表示されません。

ポリシー内のクライアントの追加、変更、または削除

クライアントは少なくとも 1 つの有効なバックアップポリシーのバックアップ対象リストに含まれる必要があります。既存の NetBackup ポリシーのクライアントを追加、変更、削除するには次の手順を使います。

ポリシーのクライアントを追加、変更または削除する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]、[ポリシー (Policies)] の順に展開します。
- 2 変更するポリシーを開きます。
- 3 [クライアント (Clients)] タブを選択して次のいずれかの処理を実行します。

新しいクライアントを追加
する方法

既存のクライアントを変更
する方法

変更するクライアントをダブルクリックするか [変更 (Change)] をクリックします。[クライアントの変更 (Change Client)] ダイアログボックスが表示されます。

[OK] をクリックして変更を受け入れ、[クライアントの変更 (Change Client)] ダイアログボックスを閉じます。または、変更を保存しないでダイアログボックスを閉じるには [キャンセル (Cancel)] をクリックします。

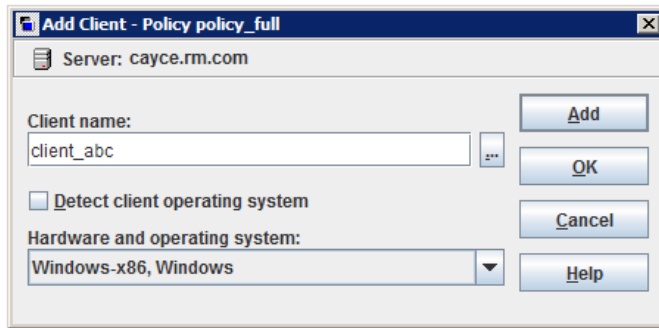
クライアントを削除する方
法

クライアントを選択して [削除 (Delete)] をクリックします。複数のクライアントを選択するには Shift を押し続けます。削除するクライアントがリストされた確認ダイアログボックスが表示されます。[はい (Yes)] をクリックするとクライアントを削除します。[いいえ (No)] をクリックするとダイアログボックスからエスケープします。

- 4 新しいクライアントを追加するには、[新規 (New)] をクリックします。[クライアントの追加 (Add Client)] ダイアログボックスが表示されます。

[クライアントの追加 (Add Client)] ダイアログボックスで、追加するホスト名を入力します。または[コンピュータの参照 (Browse for Computer)] ボタンをクリックし、ネットワークツリーからホストを選択して、[OK] をクリックします。

メモ: [クライアントを参照 (Browse for clients)] と [クライアントのオペレーティングシステムの検出 (Detect client operating system)] オプションは、BigData ポリシー形式では利用できません。BigData ポリシーを使用してクライアントを追加するには、手動でクライアントの名前を入力します。



クライアント名を割り当てるときは、次の規則に従ってください。

- サーバーがクライアントを認識する名前 (クライアントへの ping または telnet を実行するためにサーバー上で利用可能な名前) を使用します。

メモ: ユニバーサル共有データをバックアップするクライアントを追加するには、ユニバーサル共有がマウントされているクライアントのホスト名を入力します。この名前はカタログ作成に使用されます。任意の名前を入力できますが、ベストプラクティスとしては、ユニバーサル共有をマウントする権限を持つホストの短縮名、完全修飾ドメイン名 (FQDN)、または IP アドレスを入力します。データベースシステムの場合、ホストのネットワーク ID を入力できます。

メモ: Nutanix Acropolis クラスタのクライアントを追加するには、仮想マシンの表示名を入力します。仮想マシンの表示名では大文字と小文字が区別されます。

Hadoop クラスタのクライアントを追加するには、Hadoop クラスタまたは名前ノードの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を入力します。

- 同一の名前のクライアントは 1 つのポリシーに 2 回追加できません。ただし、クライアント名として `client_1` と `Client_1` を指定してポリシーを作成すると、NetBackup はポリシーの保存を許可します。

bpsetconfig コマンドを使用して bp.conf ファイルを更新します。

CASE_INSENSITIVE_HOSTNAME_VALIDATION = YES を設定すると、NetBackup は大文字と小文字が異なるクライアント名もチェックします。チェックは NetBackup がポリシーを保存する前に実行されます。ポリシーはクライアント名の問題が修正されるまで保存されません。

- クライアントを複数のポリシーに追加する場合、各ポリシーで同じ名前を使用します。
- ネットワーク構成に複数のドメインが含まれている場合、より明確な名前を使用します。たとえば、client1 のみではなく、client1.null.com や client1.null を使用します。
- そのポリシーがサポートするハードウェアおよびオペレーティングシステムを搭載したクライアントだけを追加します。たとえば、UNIX クライアントは MS-Windows ポリシーに追加しないでください。1 つのクライアントを複数のポリシーに追加する場合、それらの各ポリシーで同じハードウェアおよびオペレーティングシステムを指定します。

該当するハードウェアおよびオペレーティングシステムがリストに含まれていない場合、関連するクライアントソフトウェアがサーバー上にインストールされていません。インストールしようとしているクライアントに対応するディレクトリおよびソフトウェアが、/usr/opensv/netbackup/client ディレクトリ内に存在するかどうかを確認してください。対応するディレクトリまたはソフトウェアが存在しない場合、サーバー上でインストールスクリプトを再実行し、クライアントソフトウェアをインストールするオプションを選択します。

- ユニバーサル共有データをバックアップするクライアントを追加するには、ユニバーサル共有がマウントされているクライアントのホスト名を入力します。
- ポリシーのクライアント名として IP アドレスを使わなければ、バックアップが失敗する可能性があります。代わりにホスト名を指定してください。

5 [クライアントのオペレーティングシステムを検出する (Detect client operating system)] チェックボックスにチェックマークを付けるか、ドロップダウンメニューでクライアントに適切なハードウェアとオペレーティングシステムを選択できます。

6 次のいずれかを実行します。

- [追加 (Add)] をクリックしてクライアントをリストに追加し、ダイアログボックスを開いたままにして他のクライアントを追加します。
- [OK] をクリックして、クライアントをリストに追加し、ダイアログボックスを閉じます。
- クライアントの追加なしでダイアログボックスを閉じるには [キャンセル (Cancel)] をクリックします。

7 [クライアント (Clients)] タブで完了した場合には次を実行します。

- [OK] をクリックしてポリシーを閉じて保存します。

- 追加または変更を保存しないでポリシーを閉じるには[キャンセル (Cancel)]をクリックします。

Hyper-V 仮想マシンの参照

Hyper-V 仮想マシンを参照する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 仮想マシンを追加するポリシーを開きます。
- 3 [クライアント (Clients)] タブで、[サーバー名 (Server name)]を入力します。
- 4 [手動で選択 (Select manually)]を選択します。
- 5 [追加 (Add)]ボタンを選択します。

次の表では、Hyper-V 仮想マシンの選択に使うことができるオプションを説明します。

表 20-47 Hyper-V 仮想マシンを選択するためのオプション

オプション	説明
VM 表示名を入力 (Enter the VM display name)	メモ: 入力する名前の種類は、ポリシーの[Hyper-V]タブにある[プライマリ VM 識別子 (Primary VM identifier)]設定に応じて変わります。 仮想マシンのホスト名、表示名、または GUID を入力します。ホスト名または表示名の形式はシステムによって異なります。仮想マシン名は、ネットワーク構成およびゲスト OS での名前の定義方法に応じて、完全修飾名またはその他の名前になります。入力した名前または GUID が NetBackup で見つからない場合、ポリシー検証は失敗します。 [仮想マシンの参照 (Browse virtual machines)]オプションにチェックマークが付いていないことを確認します。
仮想マシンの参照 (Browse virtual machine)	Hyper-V Server またはクラスターノードを検出するためにこのオプションをクリックします (左ペインに表示)。リストから仮想マシンを選択できます (右ペインで)。 表示される仮想マシン名は、キャッシュファイルから導出されている可能性があります。使用するサイトに仮想マシンが多数存在する場合は、ネットワーク上で仮想マシンを再検出するよりもキャッシュファイルを使用する方が高速に処理できます。仮想マシンの電源が入っていない場合でも、キャッシュファイルを最後に作成したときに電源が入っていたなら、その名前がリストに表示されます。 仮想マシンの表示名が Hyper-V マネージャで最近変更された場合は、バックアップで使用された仮想マシン名は変更されないことに注意してください。 NetBackup が仮想マシンの IP アドレスを入手できない場合、IP アドレスは[NONE]と表示されます。

[バックアップ対象 (Backup Selections)]タブ

[バックアップ対象 (Backup Selections)]ページには、NetBackup が完全バックアップなどの自動スケジュールを実行するときに各クライアント、ホスト、インスタンスでバックアップを作成する対象のリストが含まれます。ユーザーバックアップまたはユーザーアーカイブの場合、操作を開始する前にユーザーがバックアップを作成するオブジェクトを選択するため、このリストは適用されません。

ポリシー形式はリストに表示されるバックアップ対象の形式を確定します。バックアップ対象リストには次を追加できます。

- ファイルまたはディレクトリの場所を識別するパス
- 対象リストの処理時に NetBackup に特定の事前定義済みの処理を実行するように知らせる指示句
- スクリプト
p.820 の「[NetBackup データベースのスクリプトベースポリシーで使用する承認を受けた場所の登録](#)」を参照してください。
- データベースオブジェクト
- ワイルドカード
特定のワイルドカードを対象リストで使えます。
p.1097 の「[NetBackup でのワイルドカードの使用](#)」を参照してください。
Windows クライアントが[バックアップ対象 (Backup Selections)]タブ上で有効なワイルドカードとしてサポートするのはアスタリスク (*) と疑問符 (?) のみです。
データベースエージェントと他のオプションのバックアップ対象を設定するときにワイルドカードを使う方法については、そのエージェントまたはオプションのガイドを参照してください。

バックアップ対象リストの適用方法

リストはポリシーの各クライアント (またはホスト、インスタンス、データベース) に適用されます。バックアップ対象リスト内のすべてのファイルがすべてのクライアント上に存在する必要はありません。NetBackup では、バックアップ対象リスト内の検出されたファイルがバックアップされます。ただし、各クライアントにはバックアップ対象リストにあるファイルが少なくとも 1 つ必要です。ファイルがない場合には、バックアップは状態コード 71 (ファイルリストにファイルが存在しません) で失敗します。

ポリシーへのバックアップ対象の追加

ポリシーのタブビューを開かずに NetBackup ポリシーにバックアップ対象を追加するには、次の手順を使います。

ポリシーにバックアップ対象を追加する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (Management)]>[ポリシー (Policies)]を展開します。
- 2 バックアップ対象を追加するポリシーを開きます。
- 3 [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブを選択して次のいずれかを実行します。

ディレクトリへのパスの入力

[参照 (Browse)]をクリックして特定のクライアントを参照し、バックアップするディレクトリのパスを指定します。または[パス名または指示句 (Pathname or directive)]フィールドにパス名を直接入力します。

選択すると[参照 (Browse)]ボタンが[追加 (Add)]ボタンに切り替わります。[追加 (Add)]をクリックしてパスを対象リストに追加します。

最大 1023 文字のパスを指定できます。

p.826 の「[Windows クライアントバックアップのパス規則](#)」を参照してください。

p.834 の「[UNIX クライアントバックアップのパス名規則](#)」を参照してください。

指示句セットまたは指示句の選択

[パス名または指示句セット (Pathname or Directive set)]ドロップダウンメニューで指示句または指示句セットを選択または入力します。

[追加 (Add)]をクリックして指示句を対象リストに追加します。

p.842 の「[バックアップ対象リストの指示句について](#)」を参照してください。

スクリプトの選択

- [スクリプト (Script)] ドロップダウンメニューでスクリプトを選択または入力します。
スクリプトではフルパスを指定する必要があります。指定するスクリプトが、[クライアント (Clients)] タブで指定した各クライアントにインストールされていることを確認します。
- Oracle ポリシーまたは DB2 ポリシーの場合、[参照 (Browse)] ボタンを使用して [スクリプト (Script)] リストのスクリプトを検索するか、スクリプト名を入力します。
UNIX での Oracle スクリプトの例:
`install_path/netbackup/ext/db_ext/oracle/samples/rman/cold_database_backup.sh`
UNIX での DB2 スクリプトの例:
`/myscripts/db2_backup.sh`
[追加 (Add)] をクリックし、スクリプトを選択リストに追加します。

バックアップ対象の複数のディレクトリおよびファイルを選択できます。ポリシー形式によって、バックアップ対象リストにパス、指示句、スクリプト、テンプレート、またはこれらの組み合わせを含めることができるかどうかが決まります。

- 4 [OK] をクリックするとポリシーの [バックアップ対象 (Backup Selections)] タブに対象リストを追加します。
- 5 [バックアップ対象 (Backup Selections)] タブで完了した場合:
 - [OK] をクリックしてポリシーを閉じて保存します。
 - 追加または変更を保存しないでポリシーを閉じるには [キャンセル (Cancel)] をクリックします。

NetBackup Appliance のユニバーサル共有の保護ポイントを作成する

ユニバーサル共有では、データの保護ポイントを作成して共有内のデータを管理および保護できます。保護ポイントの作成は、Universal-Share バックアップポリシーを作成して行います。

NetBackup Appliance が複数のユニバーサル共有で構成されている場合、一部またはすべての共有に対して 1 つのポリシーを作成できます。また、共有ごとに 1 つずつ個別のポリシーを作成することもできます。複数のアプライアンスがユニバーサル共有で構成されている場合、各アプライアンスのユニバーサル共有を保護するために、各アプライアンスを独自のポリシーで構成する必要があります。

たとえば、あるアプライアンスの NFS エクスポートのパス (ユニバーサル共有) が /shares/EXPORTED であるとして、NFS クライアントサーバーで、ユニバーサル共有のマウントパスは /mounted/MOUNTED です。

ここで、/shares/EXPORTED はユニバーサル共有データのネットワークパスで、/mounted/MOUNTED は共有がマウントされる NFS クライアント上のネットワークパスです。

/mounted/MOUNTED ユニバーサル共有上のデータをバックアップします。

NetBackup Appliance のユニバーサル共有の保護ポイントポリシーを作成するには

- 1 NetBackup Appliance Web コンソール、NetBackup Appliance シェルメニュー、または NetBackup Web UI を使用して、アプライアンス上にユニバーサル共有を作成します。

ユニバーサル共有機能とサポート対象のアプライアンスバージョンについては、NetBackup Appliance のマニュアルを参照してください。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100040135>

- 2 NFS クライアントサーバーで、ユニバーサル共有のエクスポートパスをマウントします。
- 3 アプリケーションデータをユニバーサル共有にコピーします。
- 4 NetBackup の [属性 (Attributes)] タブで、Universal-Share ポリシーを作成します。

ポリシーストレージの場合は、ユニバーサル共有をホストするストレージユニットを使用する必要があります。それがない場合は作成する必要があります。

複数のストレージサーバーがユニバーサル共有で構成されている場合は、各ストレージサーバーをそれぞれ独自のポリシーで構成する必要があります。この構成により、そのストレージサーバーのユニバーサル共有が保護されます。

- 5 [スケジュール (Schedule)] タブで、[完全 (FULL)] または [増分 (INCR)] を選択します。

メモ: ユニバーサル共有では、アクセラレータバックアップはサポートされておらず、必要ありません。

- 6 [クライアント (Clients)]タブで、ユニバーサル共有が存在する NetBackup Appliance の名前を入力します。

メモ: ユニバーサル共有がマウントされているクライアントのホスト名を入力します。この名前はカタログ作成に使用されます。任意の名前を入力できますが、ベストプラクティスとしては、ユニバーサル共有をマウントする権限を持つホストの短縮名、完全修飾ドメイン名 (FQDN)、または IP アドレスを入力します。データベースシステムの場合、ホストのネットワーク ID を入力できます。

- 7 [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブを選択し、示されている順序で次の操作を実行します。

- (オプション) 複数ストリームのバックアップが必要な場合、NEW_STREAM 指示句を追加します。
p.851 の「NEW_STREAM 指示句」を参照してください。

- NFS クライアントサーバーのマウントパスと、ユニバーサル共有のエクスポートパスを追加します。

BACKUP /

- [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブに BACKUP X USING Y 指示句を入力します。例: BACKUP /mounted/MOUNTED USING /shares/EXPORTED

Windows システム C:¥mounted¥MOUNTED でマウントされたユニバーサル共有の場合は、BACKUP パスに /C:/mounted/MOUNTED 形式を使用します。ポリシーには複数の共有を追加できます。いくつかの共有を 1 つのバックアップジョブにグループ化する場合は、NEW_STREAM 指示句を使用します。
p.851 の「NEW_STREAM 指示句」を参照してください。

- 8 ユニバーサル共有がマウントされているクライアントのホスト名を入力します。

- 9 Universal-Share ポリシーを実行します。

バックアップの作成後、リストア、複製、自動イメージレプリケーションなどの NetBackup の機能でバックアップを管理できます。

NetBackup インスタントアクセス API を使用して、バックアップに即座にアクセスできます。

NetBackup API について詳しくは、次の Web サイトを参照してください。

<https://sort.veritas.com/netbackup/documents>

NetBackup を選択し、ページの下部でバージョンを選択します。

ユニバーサル共有の保護ポイントの作成

ユニバーサル共有では、データの保護ポイントを作成して共有内のデータを管理および保護できます。保護ポイントの作成は、**Universal-Share** バックアップポリシーを作成して行います。

MSDP ストレージサーバーが複数のユニバーサル共有で構成されている場合、一部またはすべての共有に対して 1 つのポリシーを作成できます。また、共有ごとに 1 つずつ個別のポリシーを作成することもできます。複数のストレージサーバーがユニバーサル共有で構成されている場合、各ストレージサーバーのユニバーサル共有を保護するために、各ストレージサーバーを独自のポリシーで構成する必要があります。

詳細情報を参照できます。

p.595 の「[ユニバーサル共有の概要](#)」を参照してください。

ユニバーサル共有の保護ポイントポリシーを作成するには

- 1 既存の MSDP ストレージサーバーでユニバーサル共有を作成します。
詳しくは、『[NetBackup Web UI 管理者ガイド](#)』の「ユニバーサル共有の作成」を参照してください。
- 2 ストレージサーバーで、ユニバーサル共有のエクスポートパスをマウントします。
[エクスポートパス (Export path)]は、NetBackup Web UI のユニバーサル共有の詳細ページにあります。[ストレージ (Storage)]、[ディスクストレージ (Disk storage)]、[ユニバーサル共有 (Universal shares)]の順にクリックしてユニバーサル共有を選択し、その詳細を表示します。
- 3 アプリケーションデータをユニバーサル共有にコピーします。
- 4 NetBackup Web UI を使用してポリシーを作成します。
- 5 [属性 (Attributes)]タブで、[ポリシー形式 (Policy type)]の[Universal-Share]を選択します。

メモ: ユニバーサル共有では、アクセラレータバックアップはサポートされておらず、必要ありません。

- 6 [宛先 (Destination)]で、[ポリシーストレージ (Policy storage)]のリストからストレージユニットを選択します。

ポリシーストレージの設定について詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』のポリシーストレージ (ポリシー属性) に関する説明を参照してください。

[ポリシーストレージ (Policy storage)]で、ユニバーサル共有をホストするストレージユニットを使用する必要があります。それがない場合は作成する必要があります。

複数のストレージサーバーがユニバーサル共有で構成されている場合は、各ストレージサーバーをそれぞれ独自のポリシーで構成する必要があります。この構成により、そのストレージサーバーのユニバーサル共有が保護されます。

ユニバーサル共有ポリシーのストレージユニットは、ユニバーサル共有が作成されるのと同じディスクプールボリュームに配置する必要があります。

メモ: プライマリサーバーまたは MSDP ストレージサーバーが NetBackup 10.0.1 以降を実行している場合、メディアサーバーも 10.0.1 以降である必要があります。

- 7 [スケジュール (Schedules)]タブでスケジュールを作成します。
- 8 [クライアント (Clients)]タブで、目的のクライアントの名前を入力します。

ユニバーサル共有はエージェントレステクノロジーであるため、指定したクライアント名はカタログ作成目的にのみ使用されます。NetBackup Appliance、NetBackup 仮想アプライアンス、Flex Appliance サーバーアプリケーションインスタンス、MSDP BYO サーバー名、またはユニバーサル共有がマウントされているホストを入力できます。クライアント名には、短縮名、完全修飾ドメイン名 (FQDN)、または IP アドレスを使用できます。

- 9 [バックアップ対象 (Backup selections)]タブにユニバーサル共有のパスを入力します。

エクスポートパスは、NetBackup Web UI のユニバーサル共有の詳細ページ ([ストレージ (Storage)]、[ディスクストレージ (Disk storage)]、[ユニバーサル共有 (Universal shares)]) で確認できます。たとえ

ば、/mnt/vpfs_shares/3cc7/3cc77559-64f8-4ceb-be90-3e242b89f5e9 です。

複数ストリームのバックアップが必要な場合は、NEW_STREAM 指示句を使用できます。

p.851 の「NEW_STREAM 指示句」を参照してください。

また、BACKUP X USING Y 指示句を使用して、ユニバーサル共有パスとは異なるディレクトリにカタログを作成できます。たとえば、BACKUP /demo/database1 USING /mnt/vpfs_shares/3cc7/3cc77559-64f8-4ceb-be90-3e242b89f5e9 のようにします。この例では、バックアップは /demo/database1 でカタログ化されます。

- 10 Universal-Share ポリシーを実行します。

バックアップの作成後、リストア、複製、自動イメージレプリケーションなどの NetBackup の機能でバックアップを管理できます。

Web UI または NetBackup インスタントアクセス API を使用すると、ローカル LSU またはクラウド LSU からのバックアップコピーに即座にアクセスできます。

NetBackup API について詳しくは、次の Web サイトを参照してください。

<https://sort.veritas.com/netbackup/documents>

NetBackup を選択し、ページの下部でバージョンを選択します。

NetBackup データベースのスクリプトベースポリシーで使用する承認を受けた場所の登録

NetBackup は、バックアップ中にスクリプトがデフォルトのスクリプト格納場所および承認を受けた場所にあるかを確認します。スクリプトの承認を受けたデフォルトの格納場所は、UNIX の場合は `usr/openv/netbackup/ext/db_ext`、Windows の場合は `install_path¥netbackup¥dbext` です。スクリプトがデフォルトのスクリプト格納場所または承認を受けた場所でない場合、ポリシーのジョブは失敗します。スクリプトをデフォルトのスクリプト格納場所または追加の承認を受けた場所に移動すれば、NetBackup はスクリプトを認識します。スクリプトの格納場所を変更した場合、その変更をポリシーに反映する必要があります。ディレクトリの承認を受けることも可能で、承認されたディレクトリに格納されたスクリプトは NetBackup に認識されるようになります。ディレクトリ全体の承認が必要な場合は、承認を受ける場所をスクリプトの絶対パスにすることもできます。

デフォルトのスクリプト格納場所がお使いの環境で機能しない場合、次の手順に従ってスクリプト格納のための承認を受けた場所を 1 つ以上入力します。nbsetconfig を使用

してスクリプトを格納する、承認を受けた場所を入力します。bpsetconfig を使用することもできますが、このコマンドはプライマリサーバーまたはメディアサーバーでのみ利用可能です。

メモ: すべてのユーザーにスクリプトの書き込み権限を与えることは推奨しません。

NetBackup は、ネットワークまたはリモートの場所からスクリプトを実行することを許可しません。すべてのスクリプトは、ローカルに格納してローカルで実行する必要があります。

NetBackup をアンインストールする際は、**NetBackup** の db_ext (UNIX の場合) または dbext (Windows の場合) に格納されている作成済みのスクリプトを保護する必要があります。

承認を受けた場所とスクリプトについて詳しくは、ナレッジベースの記事を参照してください。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100039639>

承認を受けた場所を追加するには

- 1 クライアントでコマンドプロンプトを開きます。
- 2 nbsetconfig を使って承認を受けた場所の値を入力します。これらのコマンドは、クライアントの特権ユーザーが実行する必要があります。

以下に、**Oracle** エージェントに設定できるパスの例を示します。エージェントに適したパスを使用します。

- UNIX の場合:

```
[root@client26 bin]# ./nbsetconfig
nbsetconfig>DB_SCRIPT_PATH = /Oracle/scripts
nbsetconfig>DB_SCRIPT_PATH = /db/Oracle/scripts/full_backup.sh
nbsetconfig>
<ctrl-D>
```

- Windows の場合:

```
C:\Program Files\Cohesity NetBackup\NetBackup\bin>nbsetconfig
nbsetconfig> DB_SCRIPT_PATH=c:\db_scripts
nbsetconfig> DB_SCRIPT_PATH=e:\oracle\fullbackup\full_rman.sh
nbsetconfig>
<ctrl-Z>
```

メモ: テキストファイルからの読み取りや、bpsetconfig を使用した NetBackup サーバーからのクライアントのリモート設定などのオプションについては、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。スクリプトの格納場所や承認を受けた場所を一覧にしたテキストファイルがある場合、nbsetconfig または bpsetconfig を使用すると、そのテキストファイルから読み込むことができます。

DB_SCRIPT_PATH=none のエントリは、クライアント上でのスクリプトの実行を許可しません。none エントリは、スクリプトを実行できないように管理者がサーバーを完全にロックダウンする場合に便利です。

- 3 (該当する場合)これらの手順は、バックアップの実行が可能なクラスタ化されたデータベースまたはエージェントノードで実行します。
- 4 (該当する場合) スクリプトの格納場所がデフォルトの場所または承認を受けた場所に変更された場合、ポリシーを更新します。

バックアップ対象リストの検証

バックアップ対象リストを検証して、ポリシーのクライアントのファイルパスが正しいことを確認します。

表 20-48 バックアップ対象リストを検証する手順

手順	処理	説明
手順 1	指示句の構文とファイルパス規則を確認します。	次の手順を実行します。 ■ リストに指示句が含まれている場合、指示句の構文が正しいことを検証します。 ■ すべてのエントリを確認して、ポリシーのクライアントのファイルパス規則が順守されていることを確認します。 p.826 の「Windows クライアントバックアップのパス規則」を参照してください。 p.829 の「Windows ディスクイメージ (raw) バックアップのパス規則」を参照してください。 p.830 の「Windows レジストリバックアップのパス名規則」を参照してください。 p.834 の「UNIX クライアントバックアップのパス名規則」を参照してください。 別ライセンス製品のオプションを実行している NetBackup クライアントのパス規則については、その製品用の NetBackup マニュアルを参照してください。(たとえば、Snapshot Client や NetBackup for MS-Exchange です)。

手順	処理	説明
手順 2	警告メッセージを確認します。	次の手順を実行します。 ■ 一連のバックアップを実行します。 ■ [問題 (Problems)]レポートまたは[すべてのログエントリ (All log entries)]レポートに警告メッセージが含まれていないかどうかを確認します。[すべてのログエントリ (All log entries)]レポートは NetBackup Web UI でも利用できます。 バックアップの状態コードから、必ずしもバックアップ対象リストのエラーを検出できるわけではありません。NetBackup ではバックアップ対象リストのすべてのパスがすべてのクライアントに存在する必要はないため、エラーはあまり有効ではありません。 p.1084 の「レポートユーティリティについて」を参照してください。
手順 3	[ファイルシステムバックアップのレポート (File System Backup Coverage Report)]を作成します。	check_coverage スクリプトを実行して、[ファイルシステムバックアップのレポート (File System Backup Coverage Report)]を作成します。 スクリプトは、install_path¥NetBackup¥bin¥goodies (Windows の場合) または /usr/opensv/netbackup/bin/goodies (UNIX の場合) に存在します。このスクリプトによって、NetBackup でファイルが見つからない原因となる、バックアップ対象リストの問題を明らかにできます。対象リストに間違いがあると、バックアップでファイルがスキップされることがあります。 Windows の場合: パスが見つからない場合、NetBackup は軽度の (TRV) メッセージまたは警告 (WRN) メッセージをログに書き込みます。ただし、同じジョブがバックアップの状態コード 0 (ゼロ)(成功) で終了する場合があります。すべてのファイルがすべてのクライアント上に存在する必要はないため、通常、バックアップ対象リストに存在しないファイルが通知されてもあまり有効ではありません。ただし、ログを確認したり、check_coverage スクリプトを使用して、不適切なエントリやバックアップ対象リストのエントリ漏れから、バックアップファイルが欠落していないかを調べる必要はあります。 p.823 の「[ファイルシステムバックアップのレポート (File System Backup Coverage Report)]のログメッセージ例 (check_coverage)」を参照してください。

[ファイルシステムバックアップのレポート (File System Backup Coverage Report)]のログメッセージ例 (check_coverage)

[ファイルシステムバックアップのレポート (File System Backup Coverage Report)]は check_coverage スクリプトを実行することによって作成されます。check_coverage については、スクリプト内のコメントを参照してください。

Windows の場合: クライアントにあると想定されるファイルが見つからない場合に表示されるログメッセージの例を次に示します。

一部のクライアント上だけに存在する `c:\worklist` というパスを含むバックアップ対象リストが存在すると想定します。**NetBackup** は、`C:\worklist` が存在するクライアントでこのパスをバックアップします。

その他のクライアントについては、[問題 (Problems)]レポートまたは[すべてのログエントリ (All log entries)]レポートに次のようなメッセージが表示されます。

```
9/1/14 8:28:17 AM carrot freddie Info from client freddie: TRV
- object not found for file system backup: C:\worklist
```

このメッセージは、`c:\worklist` が不適切なパス名である場合も表示されます。ディレクトリ名が `c:\worklists` である場合に、`c:\worklist` と入力した場合などです。

メモ: 正しいと思われるパス名を入力してもこのメッセージが表示される場合、パスの最後に空白を入れていないかを確認してください。

UNIX の場合: クライアントにあると想定されるファイルが見つからない場合に表示されるログメッセージの例を次の表に示します。

表 20-49 [ファイルシステムバックアップのレポート (File System Backup Coverage Report)]のログメッセージ例

例	説明
正規表現またはワイルドカード	バックアップ対象リストに次のような正規表現が含まれていると想定します。 <pre>/home1[0123456789]</pre> <code>/home10</code> から <code>/home19</code> が存在する場合、NetBackup によってそれらのパスのバックアップが実行されます。 これらのパスが存在しない場合、[問題 (Problems)]レポートまたは[すべてのログエントリ (All log entries)]レポートに次のようなメッセージが表示されます。 <pre>02/02/14 20:02:33 windows freddie from client freddie: TRV - Found no matching file system for /home1[0123456789]</pre>

例	説明
一部のクライアント上だけに存在するパスまたは不適切なパスの指定	一部のクライアント上だけに存在する /worklist というパスを含むバックアップ対象リストが存在すると想定します。NetBackup は、/worklist が存在するクライアントでこのパスをバックアップします。 その他のクライアントについては、[問題 (Problems)]レポートまたは[すべてのログエントリ (All log entries)]レポートに次のようなメッセージが表示されます。 <pre>02/02/14 21:46:56 carrot freddie from client freddie: TRV - cannot process path /worklist: No such file or directory. Skipping</pre> このメッセージは、/worklist が不適切なパス名である場合也表示されます。ディレクトリ名が /worklists である場合に、/worklist と入力した場合などです。 メモ: 正しいと思われるパス名を入力してもこのメッセージが表示される場合、パスの最後に空白を入れていないかを確認してください。
シンボリックリンク	バックアップ対象リストでシンボリックリンクが指定されていると想定します。NetBackup ではシンボリックリンクをたどらず、[問題 (Problems)]レポートまたは[すべてのログエントリ (All log entries)]レポートに次のようなメッセージが表示されます。 <pre>02/02/14 21:46:47 carrot freddie from client freddie: WRN- /src is only being backed up as a symbolic link</pre> そのシンボリックリンク自体のバックアップを実行しないときは、シンボリックリンクを解決します。

バックアップ時間を短縮する方法

クライアントを複数のポリシーに追加して、異なるバックアップ対象リスト間でクライアントのファイルを分割できます。複数のポリシーを使用すると、ファイルのバックアップを並行して行うことができるため、そのクライアントのバックアップ時間を減らすことができます。

次の場合は、複数のクライアントを並列してバックアップできます。

- 複数のストレージデバイスが利用可能である (またはポリシーで多重化を使用している)。
- [1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)] ([グローバル属性 (Global Attributes)]ホストプロパティ) と [ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)]ポリシー属性で、許可するように設定されている。
p.115 の「[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ」を参照してください。
p.704 の「[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)](ポリシー属性)」を参照してください。

メモ: クライアントを複数のポリシーに含めるように構成する前に、ディスクおよびコントローラ入出力の制限を確認しておいてください。たとえば、2 つのファイルシステムのバックアップが並列して行われるとクライアントでオーバーロードが発生する場合、これらのシステムを同じポリシーに設定します。異なる時間にバックアップが行われるようにスケジュールするか、または[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]を 1 に設定します。

バックアップ時間を短縮する別の方法は、ポリシーに[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)]を選択して、NEW_STREAMS 指示句をバックアップ対象リストに追加することです。

次に例を示します。

```
NEW_STREAM
file_a
file_b
file_c
NEW_STREAM
file_d
file_e
file_f
```

この例では、2 つの並列実行データストリームが生成されます。最初のデータストリームには、file_a、file_b および file_c が含まれます。2 つ目のデータストリームには、file_d、file_e および file_f が含まれます。

p.724 の「[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)](ポリシー属性)」を参照してください。

メモ: 最良のパフォーマンスを得るために、1 つのデータストリームだけを使用してクライアントの各物理デバイスをバックアップします。1 つの物理デバイスに対して複数の並列実行ストリームを使用すると、バックアップ時間が長くなる可能性があります。ディスクヘッドが各ストリームのファイルを含むトラック間を何度も往復移動する必要があるためです。

指示句によって、バックアップ対象リストに含まれるファイルの処理時に特定の操作を実行するように NetBackup に指示します。

Windows クライアントバックアップのパス規則

Windows クライアントをバックアップするには、次の規則に従って、バックアップ対象リストのエントリを設定してください。

表 20-50 Windows クライアントバックアップのパス規則

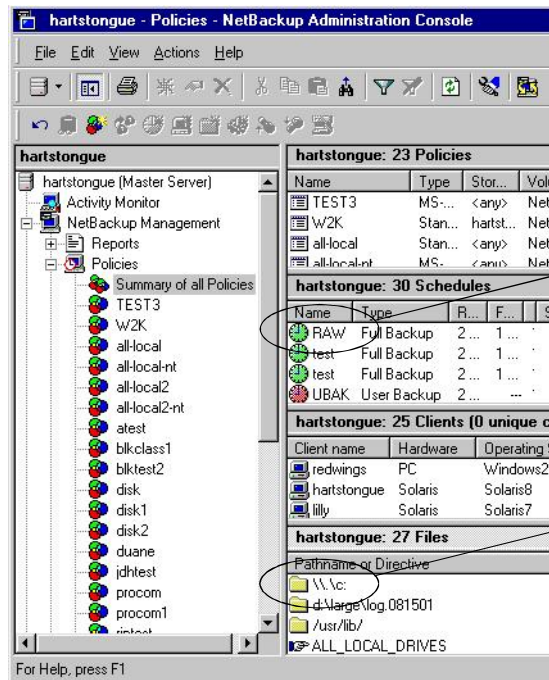
項目	説明
行ごとのパス	1 行に 1 つのパスを入力します。
コロンと円記号	すべてのパスの先頭をドライブ文字にし、その後ろにコロン (:) および円記号 (¥) を付けます。 ボリューム全体を指定する場合、そのボリューム上のすべてのデータが保護されるように、エントリの後に円記号 (¥) を付けます。 正しいエントリ: c:¥ 不適切なエントリ: c:
大文字と小文字の区別	ドライブ文字とパスでは大文字と小文字は区別されません。 次のエントリ例では、同じディレクトリが正常に指定されます。 c:¥Worklists¥Admin¥ C:¥worklists¥admin¥ c:¥WORKLISTS¥Admin¥ C:¥Worklists¥ADMIN¥ メモ: [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブに同じパスが 2 回以上設定されていると、データは 2 回以上バックアップされます。
ワイルドカード	アスタリスク (*) と疑問符 (?) は、Windows クライアント用のバックアップ対象リストで許可される唯一のワイルドカード文字です。 角カッコと波カッコは Windows クライアントでは無効です。使用すると、状態 71 でバックアップが失敗します。 Windows クライアントでは、ワイルドカードは、パス末尾にファイル名またはディレクトリ名で指定されている場合のみ正しく機能します。例: C:¥abc¥xyz¥r*.doc ワイルドカード文字は、パスの他の場所では機能しません。たとえば、アスタリスクは次の例では通常の文字として (ワイルドカードとしてではなく) 機能します。 C:¥*¥xyz¥myfile C:¥abc¥*¥myfile p.1097 の「NetBackup でのワイルドカードの使用」を参照してください。

項目	説明
すべてのローカルドライブ	リムーバブルメディアを使用するドライブを除くすべてのローカルドライブのバックアップを行うには、次のパス名を指定します。 ¥¥ または *:¥¥ または ALL_LOCAL_DRIVES フロッピーディスク、CD-ROM、リモートシステム上に存在し、システムにネットワーク経由でマウントされているドライブなどはバックアップされません。
マッピング済みドライブの利用	Windows の[ネットワークドライブの割り当て]オプションを使用して CIFS 共有にマッピングされているローカルドライブパスは指定しないでください。 これは、複数のクライアントを含むポリシーにも適用されます。異なる CIFS 共有を指すパスは設定しないでください。 例: P: Q: R:
UNC パスの利用	バックアップ対象として UNC パスを指定する複数のクライアントがバックアップポリシーに含まれている場合、異なるクライアントからの同じデータを基に冗長なバックアップコピーが作成されます。 バックアップ対象クライアントとしてホストをポリシーに含めることを検討してください。 例: ¥¥host_name¥dir1
省略またはエクスクルードされるファイル	デフォルトでは、一部のファイルは NetBackup によってバックアップされません。 p.855 の「デフォルトでバックアップからエクスクルードされているファイル」を参照してください。 クライアントにエクスクルードリストを作成することによって、特定のファイルをバックアップからエクスクルードします。 p.857 の「自動バックアップからのファイルのエクスクルードについて」を参照してください。 次のバックアップ対象リストでは、Windows 規則が使用されています。 c:¥¥ d:¥workfiles¥ e:¥Special¥status c:¥tests¥*.exe

Windows ディスクイメージ (raw) バックアップのパス規則

Windows クライアント上では、論理ディスクドライブをディスクイメージとしてバックアップを行うことができます。これによって、論理ドライブ全体がディレクトリ単位やファイル単位ではなくビット単位でバックアップされます。NetBackup ディスクイメージのバックアップを実行する場合、[完全バックアップ (Full Backup)] バックアップ形式を使用します。

図 20-23 ディスクイメージのバックアップ



バックアップ形式には
[完全バックアップ
(Full Backup)] を
選択する必要がある。

論理ドライブ名を
バックアップ対象
リストに追加する。

ディスクイメージバックアップを指定するには、ドライブの論理名をポリシーのバックアップ対象リストに追加します。ディスクイメージは、他のバックアップと同じバックアップ対象リストに含めることができます。次のバックアップ対象リストの例では、最初のエントリ(¥¥.¥c:)によって、論理ドライブ C のディスクイメージバックアップが作成されます。

¥¥.¥c:

d:¥workfiles¥

e:¥Special¥status

HKEY_LOCAL_MACHINE:¥

バックアップのリストアを行うには、ユーザーが[リストアの選択 (Select for Restore)]>[通常バックアップからリストア (Restore from Normal Backup)]をクリックします。

バックアップのリストを表示する場合、ディスクイメージは、バックアップ対象リストで指定した名前と同じ名前を持つファイルとして表示されます。前の例では、ファイル名は次のとおり表示されます。

¥¥.¥c:

ファイルをリストアするための宛先を入力するときは、次の形式を使います。

¥¥.¥drive:

ここで、*drive* は、パーティションのリストアを行う場所です。

ディスクイメージバックアップを使用して作業するときは、次を考慮します。

Windows Open File Backup 方式	NetBackup では、最初に Windows Open File Backup 方式を使用してバックアップを試行します。そのバックアップに失敗すると、NetBackup では、バックアップ中に変更が加えられないように論理ドライブがロックされます。論理ドライブ上に開いた状態のファイルが存在すると、ディスクイメージバックアップは行われません。
開いた状態のファイル	ディスクイメージのバックアップまたはリストアを行う前に、パーティションに開いた状態のファイルがあるすべてのアプリケーションを停止する必要があります。アプリケーションを停止しないと、操作に失敗する可能性があります。そのようなアプリケーションには、Windows エクスプローラや Norton AntiVirus などがあります。
コピーオンライトスナップショット	COW (コピーオンライト) スナップショットが実行されていないことを確認してください。COW スナップショットが実行されている場合、スナップショット処理自体がボリュームに対するオープンハンドルを所有します。
raw パーティション	NetBackup では、フォーマットされていない raw パーティションでの raw パーティションのバックアップはサポートされていません。
ページングファイル	ページングファイル (pagefile.sys) を含むようにボリュームが構成されている場合、そのボリュームの raw パーティションバックアップは失敗することがあります。そのボリュームの raw パーティションバックアップを正常に実行するには、ページングファイルが含まれないようにボリュームを再構成する必要がある場合があります。ボリュームでスナップショットを正しく作成できる場合、そのボリュームの raw パーティションバックアップは再構成しなくても機能することがあります。

Windows レジストリバックアップのパス名規則

Windows レジストリをディザスタリカバリのためにバックアップしたり、個々の HKEY をバックアップしたりできます。Windows レジストリバックアップを構成するときは次の項目を考慮してください。

ディザスタリカバリ

ディスク障害発生時の正常なリカバリを保証するために、常にレジストリ全体のバックアップを行ってください。すなわち、レジストリ全体を含むディレクトリのバックアップを行います。

多くの Windows システム上では、このディレクトリは次のとおりです。

```
%systemroot%\system32\config
```

ここで、%systemroot% は、Windows がインストールされているディレクトリです。

メモ: レジストリのリカバリするには、レジストリ全体のバックアップに使用されるバックアップ対象リストに個々のレジストリファイルまたは HKEY エントリを含めないでください。クライアントに NetBackup のエクスクルードリストを使用する場合、どのレジストリファイルもバックアップからエクスクルードしないでください。

ディスク障害が発生した場合のレジストリのリストア手順について詳しくは、『[NetBackup トラブルシューティングガイド](#)』のディザスタリカバリに関する章を参照してください。

個々の HKEY

ディザスタリカバリ用に個々の HKEY をバックアップしないでください。HKEY のリストアを行っても、ディザスタリカバリは実行できません。レジストリ全体のバックアップに使用されるポリシーのバックアップ対象リストと同じバックアップ対象リストに HKEY エントリを含めないでください。ただし、レジストリ内の個々のキーをリストアする場合は、別のポリシーを作成し、そのポリシーのバックアップ対象リストに対応する HKEY を指定します。

ポリシーのバックアップ対象リスト内の HKEY エントリの例を次に示します。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE:\
```

バックアップおよびリストアは、レジストリ全体のバックアップよりも低速になります。

ファイルおよびディレクトリへのハードリンクについて

ハードリンクは、ファイルのディレクトリエントリです。すべてのファイルに、1つ以上のハードリンクが存在します。ハードリンクは、別のファイルへのポインタではないという点でシンボリックリンクとは異なります。ハードリンクは、同じ i ノード番号を指す 2 つのディレクトリエントリです。

バックアップでは、ハードリンクされたファイルがバックアップ対象リストに含まれていた場合、そのデータは 1 回だけバックアップが行われます。NetBackup ディレクトリ構造内にある最初のファイル名参照が使用されます。後続のファイル名参照が見つかると、そのファイル名参照は、最初のファイル名へのリンクとしてバックアップが行われます。リンクのバックアップを行うということは、ハードリンクの数に関係なく、データのバックアップコピー

は 1 つだけ作成されることを意味します。データへのあらゆるハードリンクが有効に動作します。

多くの UNIX システムにおいて、ディレクトリへのハードリンクを作成できるのは root ユーザーだけです。一部のシステムではハードリンクを使用できず、多くのベンダーはハードリンクを使用しないことを推奨しています。NetBackup では、ハードリンクされたディレクトリは、ファイルとは異なる方法でバックアップとリストアが行われます。

ハードリンクされたファイルとハードリンクされたディレクトリは、次の点で異なります。

- バックアップでは、NetBackup によって複数のハードリンクされたディレクトリが検出されると、ハードリンクごとに 1 回ずつそれらのディレクトリのバックアップが行われます。
- リストアでは、ハードリンクされたディレクトリがディスク上に存在しない場合、NetBackup によってそれらのディレクトリ内容の複数のコピーがリストアされます。ハードリンクされたディレクトリがディスク上に存在する場合、NetBackup によって、その内容がディスク上の同じ場所に複数回リストアされます。

NTFS ボリュームまたは UNIX システム上では、各ファイルに複数のハードリンクが含まれている場合があります。そのため、1 つのファイルが多くのディレクトリ内に表示される場合があります (または、同じディレクトリ内に異なる名前が表示される場合もあります)。ボリューム上の実際の一意のファイルは、ボリュームシリアル番号 (VSN) およびファイルインデックスによって示されます。VSN とファイルインデックスを総称してファイル ID と呼びます。

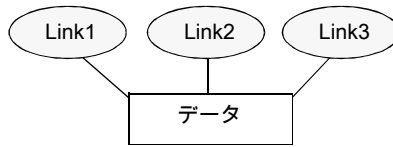
バックアップでは、ハードリンクされたファイルがバックアップ対象リストに含まれていた場合、そのデータは 1 回だけバックアップが行われます。NetBackup ディレクトリ構造内にある最初のファイル名参照が使用されます。後続のファイル名参照が見つかり、そのファイル名参照は、最初のファイル名へのリンクとしてバックアップが行われます。後続のファイル名参照のバックアップでは、ハードリンクの数が複数あっても関係なく、データのバックアップコピーは 1 つだけ作成されます。

すべてのハードリンク参照のリストアが行われた場合、ハードリンクされたファイルは、継続してそれらのリンク先である他のファイルと同じファイル ID を指します。ただし、一部のハードリンクのリストアが行われなかった場合、次の例に示すとおり、問題が発生する可能性があります。

Link2 と Link3 のリストア

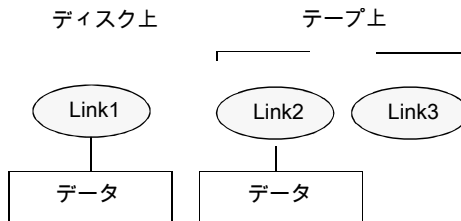
3 つのハードリンクが同じデータを指していると想定します。Link2 および Link3 のバックアップ中、最初に Link2 が見つかり、バックアップが実行されます。次に Link3 が Link2 へのリンクとしてバックアップされます。3 つのファイルは、すべて同じデータにハードリンクされています。

図 20-24 同じデータへのハードリンクの例



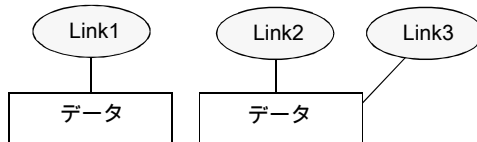
Link2 および Link3 の元のコピーがテープにバックアップされた後で削除されます。Link1 だけがディスク上に残されます。

図 20-25 テープおよびディスクにバックアップされたハードリンクの例



後続のリストア中、Link2 および Link3 のリストアが行われます。ただし、リストア後のファイルは、Link1 と同じファイル ID を指しません。代わりに、リストア後のファイルには新しいファイル ID または i ノード番号が割り当てられ、データはディスク上の新しい位置に書き込まれます。新しい場所へ書き込まれたデータは、Link1 内のデータの完全なコピーです。バックアップでは Link2 および Link3 が Link1 に関連付けられないため、重複が発生します。

図 20-26 リストアされたハードリンクの例



例 2: Link3 のリストア

今回は Link3 だけのリストアを試行すると想定します。ただし、Link2 は存在しないため、NetBackup は Link3 を Link2 にリンクさせることができません。リストアは Link2 にリンクさせることができる場合だけ完了できます。Link2 は、データを含む NetBackup サーバーへのセカンダリリストア要求によって自動的にリストアされます。これで、Link2 のリストアを正常に行うことが可能となります。

UNIX クライアントバックアップのパス名規則

UNIX クライアントをバックアップするには、バックアップ対象リストのエントリに次の規則を使用します。

表 20-51 UNIX クライアントバックアップのパス名規則

項目	説明
行ごとのパス名	1 行に 1 つのパス名を入力します。 NetBackup では、UNIX クライアントで最大 1023 文字のパス名をサポートします。
スラッシュ	すべてのパス名の先頭をスラッシュ (/) にします。
ワイルドカード文字	次のワイルドカード文字を使用できます。 * ? [] { } UNIX クライアントの場合、ワイルドカードはパスのどこでも表示できます。 p.1097 の「NetBackup でのワイルドカードの使用」を参照してください。
末尾の空白	バックアップ対象リストエントリの末尾に空白があり、一致するエントリが見つからない場合、NetBackup は空白を削除し、再検索を行います。一致するエントリが見つからない場合、NetBackup ではそのエントリの検索が省略され、[問題 (Problems)]レポートまたは[すべてのログエントリ (All log entries)]レポートに次のようなメッセージが記録されます。 TRV - cannot process path pathname: No such file or directory. Skipping TRV - Found no matching file system for pathname
マウントポイント	マウントポイントを越えるパス名またはクライアントが NFS を介してマウントするパス名を使用すると、バックアップ構成に影響する場合があります。バックアップ対象リストを作成する前に、[NFS をたどる (Follow NFS)]属性および[クロスマウントポイント (Cross mount points)]属性について確認しておいてください。 p.708 の「[NFS をたどる (Follow NFS)](ポリシー属性)」を参照してください。 p.712 の「[クロスマウントポイント (Cross mount points)](ポリシー属性)」を参照してください。
ブートテープ	オペレーティングシステムファイル、カーネルファイルおよびブートファイルは、 NetBackup によってバックアップできます。ただし、 NetBackup ではブートテープは作成できません。ブートテープを作成する場合、ご使用のシステムのマニュアルを参照してください。

項目	説明
省略またはエクスクルードされるファイル	デフォルトでは、一部のファイルは NetBackup によってバックアップが行われません。 p.855 の「デフォルトでバックアップからエクスクルードされているファイル」を参照してください。 クライアントにエクスクルードリストを作成することによって、特定のファイルをバックアップからエクスクルードします。 p.857 の「自動バックアップからのファイルのエクスクルードについて」を参照してください。
ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)	UNIX クライアントの[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]ホストプロパティは、ビジー状態のファイルおよびロックされたファイル进行处理するための選択肢を提供します。 p.61 の「[ビジー状態のファイルの設定 (Busy file settings)]プロパティ」を参照してください。
ACL (アクセス制御リスト)	NetBackup は、アクセス制御リスト (ACL) をバックアップします (サポートされる場合)。 次の URL で『NetBackup Enterprise Server と Server OS のソフトウェア互換性リスト』を参照してください。 https://support.cohesity.com/s/article/article-100040093
Sun PC NetLink	NetBackup では、Sun PC NetLink ファイルのバックアップおよびリストアを実行できます。
拡張ファイル属性と名前付きデータストリーム	NetBackup は、拡張属性ファイルおよび名前付きデータストリームをバックアップします (サポートされる場合)。 NetBackup ソフトウェア互換性リストを参照してください。 p.839 の「拡張ファイル属性および名前付きデータストリームのバックアップおよびリストアについて」を参照してください。
VxFS エクステンション属性	Hewlett Packard および Solaris SPARC のプラットフォーム上では、NetBackup によって VxFS エクステンション属性のバックアップが行われます。
シンボリックリンク	NetBackup はシンボリックリンクオブジェクトをバックアップしますが、リンクをたどって指し示せる対象をバックアップしようとしません。シンボリックリンクの対象のバックアップを行うには、ファイルリストにその対象を含めます。 シンボリックリンクオブジェクトをリストアしてもオブジェクトだけがリストアされ、それがポイントしている可能性のあるデータはリストアされません。ターゲットデータをリストアするには、バックアップイメージからそのデータを選択します。 p.831 の「ファイルおよびディレクトリへのハードリンクについて」を参照してください。 メモ: NetBackup では、NetBackup が root ユーザーでシンボリックリンクのリストアを行う場合、その所有者およびグループが元の所有者およびグループに変更されます。NetBackup が root 以外のユーザーでシンボリックリンクのリストアを行う場合、所有者およびグループが、そのリストアを行うユーザーの所有者およびグループに設定されます。所有者およびグループの再設定による問題は発生しません。UNIX システムで権限を確認するとき、NetBackup はシンボリックリンクが指すファイルの所有者およびグループを使用します。

項目	説明
ディレクトリ接合点	NetBackup はディレクトリ接合点オブジェクトをバックアップしますが、指し示せるディレクトリへの走査は試みません。ディレクトリ接合点の対象のバックアップを行うには、ファイルリストにその対象を含めます。 ディレクトリ接合点リンクオブジェクトをリストアしてもオブジェクトだけがリストアされ、それがポイントしている可能性のあるデータはリストアされません。ターゲットデータをリストアするには、バックアップイメージからそのデータを選択します。

p.1084 の「レポートユーティリティについて」を参照してください。

UNIX raw パーティション

raw パーティションバックアップが実行される前にパーティションテーブルのコピーを保存します。参照用にコピーを保持します。**raw** パーティションをリストアするには、デバイスファイルが存在することを確認します。また、テーブルがリストアされるパーティションは十分に大きい必要があります。そうでない場合、リストアの結果は予測不能です。

UNIX raw パーティションバックアップを作成するときは、次の項目を考慮してください。

バックアップ中のファイル 変更	raw パーティションのバックアップは、バックアップ中にファイルが変更されないことが確実な場合だけ使用してください。また、データベースの場合は、トランザクションログファイルを使用してデータベースを一貫した状態にリストアできる場合だけ、raw パーティションのバックアップを使用してください。
アーカイブ	raw パーティションのアーカイブは、どのクライアント上でも行わないでください。アーカイブを行うと、raw パーティションのバックアップが実行された後、その raw パーティションに関連付けられたデバイスファイルが削除されます。その raw パーティションが使用した領域は、ファイルシステムによってリカバリされません。
ファイルシステム	ファイルシステムを raw パーティションとしてバックアップする前に、そのファイルシステムのマウントを解除してください。ファイルシステムのマウントを解除することで、バッファリングされた変更をディスクに書き込むことができるようになります。また、バックアップの間にファイルシステムが変更されるのを回避できます。bpstart_notify スクリプトおよび bpend_notify スクリプトを使用すると、バックアップされたファイルシステムのマウントを解除および再実行できます。

マウントポイント [クロスマウントポイント (Cross mount points)]ポリシー属性は、**raw** パーティションには影響しません。ルートパーティションが **raw** パーティションとしてバックアップされ、他のファイルシステムへのマウントポイントを含んでいる場合、そのような他のファイルシステムはバックアップされません。[クロスマウントポイント (Cross mount points)]を選択しても、他のファイルシステムはバックアップされません。

p.712 の「[クロスマウントポイント (Cross mount points)] (ポリシー属性)」を参照してください。

[NFS をたどる (Follow NFS)]ポリシー属性の場合も同様です。**raw** パーティションにマウントした **NFS** ファイルシステムはバックアップされません。また、**NFS** マウントを使用して他のコンピュータから **raw** パーティションにアクセスし、それらの **raw** パーティションのバックアップを行うことはできません。他のコンピュータ上では、**NFS** を介してそれらのデバイスにアクセスできません。

p.708 の「[NFS をたどる (Follow NFS)](ポリシー属性)」を参照してください。

ディスクのボリュームマネージャ ディスクのボリュームマネージャが管理する任意のディスクの論理パーティション名を指定します。(たとえば、Veritas Volume Manager (VxVM) です。)

FlashBackup ポリシー FlashBackup ポリシーに含まれるクライアントの場合、Standard ポリシーと FlashBackup ポリシーの相違点について詳しくは、『NetBackup NAS 管理者ガイド』と『NetBackup Snapshot Manager for Data Center 管理者ガイド』を参照してください。

Windows Server フェー
ルオーバークラスター
(WSFC) 環境 WSFC (Windows Server Failover Clustering) 環境での FlashBackup の使用がサポートされます。ただし、**raw** パーティションのリストアは、リストアされるディスクが拡張メンテナンスモードで配置されているか、または WSFC リソースグループから削除されているときにのみ実行できます。

メモ: WSFC の以前のバージョンでは拡張メンテナンスモード機能が使用できません。クラスターが拡張メンテナンスモードでのディスクの配置をサポートしていなくても、代替の共有されていないディスクに **raw** パーティションのリストアを実行することは可能です。

バックアップする必要があるファイルシステムが存在せず、ディスクが **raw** モードで使用されている場合は、ディスクパーティションを **raw** パーティションとしてバックアップします。たとえば、データベースは **raw** モードで使用される場合があります。データベースを **raw** パーティションとしてバックアップすると、bpstart_notify スクリプトおよび bpend_notify スクリプトを使用して、そのデータベースで必要な前処理および後処理を実行できます。

また、ファイルシステム用に使用されるディスクパーティションも **raw** パーティションとしてバックアップできます。この方法を使用する欠点は、1 つのファイルをリカバリするためにパーティション全体のリストアを行う必要があることです (FlashBackup を使用しない場

合)。パーティション全体の上書きを回避するには、リダイレクトリストア機能を使用し、同じサイズの別の **raw** パーティションに対して **raw** パーティションのリストアを行います。次に、元のファイルシステムに個々のファイルをコピーします。

raw パーティションのバックアップは、ディスク全体のバックアップを行う場合にも有効です。ファイルシステムのオーバーヘッドが回避されるため、通常、**raw** パーティションのバックアップの方が高速です。**raw** パーティションのバックアップのサイズは、ディスク全体が使用されているかどうかに関係なく、ディスク全体のサイズになります。

UNIX raw パーティションをポリシーのバックアップ対象リストで指定するには、デバイスファイルのフルパス名を入力します。

たとえば、**Solaris** システム上では次のように入力します。

```
/devices/sbus@1,f8000000/esp@0,800000/sd@2,0:1h
```

メモ: **raw** パーティションをバックアップするためのパス名には、ワイルドカード (`/dev/rsd*` など) を指定しないでください。ワイルドカードを指定すると、異なるデバイスファイル用のメモリパーティションが重複している場合、デバイス全体が正常にリストアされない可能性があります。

raw パーティションは、他のバックアップと同じバックアップ対象リストに含めることができます。次に例を示します。

```
/home  
/usr  
/etc  
/devices/sbus@1,f8000000/esp@0,800000/sd@2,0:1h
```

メモ: **NetBackup** は **raw** パーティションをバックアップするときに完全バックアップと増分バックアップを識別しません。どちらの場合も、パーティション全体のバックアップが行われます。

raw パーティションのバックアップは、バックアップ対象リスト内の絶対パス名がブロック型特殊デバイスファイルまたは文字型特殊デバイスファイルである場合だけ実行されます。ブロック型特殊デバイスファイルまたは文字型特殊デバイスファイルのどちらも指定できます。多くの場合、文字型特殊デバイスファイルの方が、ディスクデータへのアクセス時にバッファキャッシュを使用しないため高速です。ご使用のプラットフォームで最適なバックアップ速度を得るために、ブロック型特殊デバイスファイルと文字型特殊デバイスファイルの両方をテストしてください。

実際のブロック型デバイスファイルまたは文字型デバイスファイルを指定していることを確認してください。場合によっては、実際のデバイスファイルへのリンクが存在します。リンクを指定すると、そのリンクだけがバックアップされます。`/dev` のバックアップ中にデバイス

ファイルに到達すると、**NetBackup** はそのデバイスファイル自体ではなく、デバイス用 i ノードファイルのみをバックアップします。

raw パーティションのバックアップを実行する場合、[スケジュール (Schedules)]タブの [バックアップ形式 (Type of backup)]で[Full backup]を選択します。その他のバックアップ形式は、**raw** パーティションのバックアップでは無効です。

p.760 の「[バックアップ形式 (Type of backup)](スケジュール属性)」を参照してください。

拡張ファイル属性および名前付きデータストリームのバックアップおよびリストアについて

NetBackup では、次のファイル属性のバックアップおよびリストアを実行できます。

- **Solaris** の **UNIX** ファイルシステム (UFS) および一時ファイルシステム (tmpfs) の拡張ファイル属性
- **VxFS** ファイルシステムの名前付きデータストリーム

NetBackup は、拡張ファイル属性および名前付きデータストリームのバックアップを、通常のファイルシステムのバックアップの一部として行います。

拡張ファイル属性および名前付きデータストリームは、特定の基本ファイルに関連付けられている隠し属性ディレクトリ内の通常のファイルとして表されます。隠しディレクトリはファイルシステム内に格納されていますが、そのディレクトリに関連付けられた基本ファイルからだけアクセスできます。**Solaris 9** (以上) のシステムで拡張属性が存在するファイルを表示するには、`ls -@` と入力します。

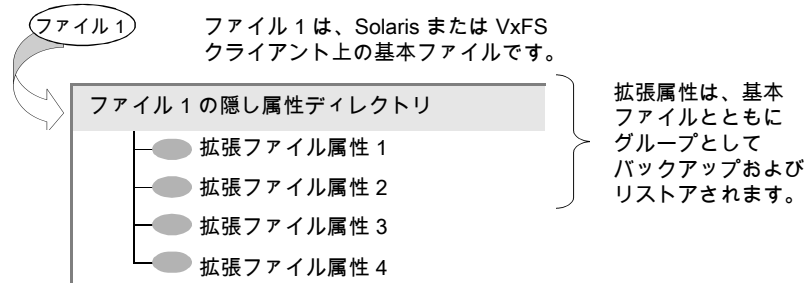
拡張属性のファイルや名前付きデータストリームを個別にバックアップしたりリストアしたりすることはできません。すなわち、ファイルは基本ファイルと同時に、バックアップされ、リストアされます。

多数の拡張ファイル属性または名前付きデータストリームが存在する場合は、バックアップおよびリストアの速度が低下する可能性があります。基本ファイルおよび関連するすべてのファイルのバックアップが行われるため、速度が影響を受けます。

特に、増分バックアップの場合、**NetBackup** によって各ファイルの `mtime` または `ctime` が個別に確認されるため、速度が影響を受ける可能性が高くなります。

UNIX の場合:

図 20-27 基本ファイルおよび拡張属性ディレクトリとファイルの例



名前付きデータストリームおよび拡張属性のバックアップまたはリストアを実行するには、クライアント、メディアサーバーおよびプライマリサーバーで次のバージョンが実行されている必要があります。

- NetBackup クライアント
 - VxFS 4.1 以上を実行している HP 11.23。

メモ: アクセス制御リスト (ACL) は、VxFS 5.0 以上が実行されていないとバックアップされません。

- VxFS 4.0 以上を実行している AIX。

メモ: アクセス制御リスト (ACL) は、VxFS 5.0 以上が実行されていないとバックアップされません。

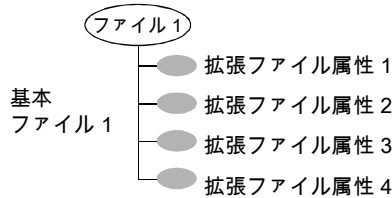
- VxFS 5.0 以上を実行している Solaris 10
- VxFS 4.0 以上を実行している Solaris SPARC 9 または 10。
- VxFS 5.0 以上を実行している Linux。
- NetBackup プライマリサーバー

任意のバージョンの NetBackup プライマリサーバーで、名前付きデータストリームおよび Solaris の拡張属性のバックアップおよびリストアを実行できます。

クライアントのバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースで[既存のファイルの上書き (Overwrite existing files)]が選択されている場合、既存のファイルが、リストアされた属性ファイルおよび名前付きデータストリームで置き換えられる場合があります。

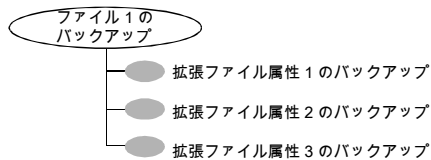
UNIX の場合: 次の例では、ファイル 1 のリストアを行います。現在、基本ファイル 1 には、4 つの拡張ファイル属性が存在します。

図 20-28 基本ファイル 1 の拡張ファイル属性



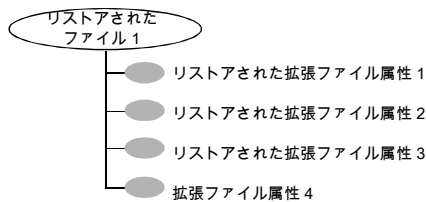
UNIX の場合: ファイル 1 に拡張ファイル属性が 3 つだけ存在していたときに作成されたバックアップから、ファイル 1 のリストアを実行します。

図 20-29 ファイル 1 のバックアップ



UNIX の場合: リストアオプションとして[既存のファイルの上書き (Overwrite existing files)]が選択されているため、ファイル 1 をリストアすると、拡張ファイル属性 1、2、3 はすべて上書きされます。拡張ファイル属性 4 は、上書きされず、保持されます。

図 20-30 ファイル 1 のリストア



以下の項目のリストアが試行されると、エラーメッセージが[リストアモニター (Restore Monitor)]に表示されます。エラーメッセージは拡張属性か名前付きデータストリームがリストアされないことをユーザーに知らせます。

- Solaris 9 (以上) でないクライアントへの拡張ファイル属性のリストア
- VxFS 4.0 以外のクライアントへの名前付きデータストリームのリストア

その後、NetBackup では、リストアジョブが続行されます。

拡張ファイル属性と名前付きデータストリームのリストアを無効にするには、クライアントに空ファイルを追加します。ファイル に名前を付けて、次のディレクトリに配置します。

IGNORE_XATTR

```
/usr/opensv/netbackup/
```

このファイルを追加した場合、Solaris 9 または VxFS 4.0 クライアントだけに影響があります。

IGNORE_XATTR ファイルは、以前の IGNORE_XATTR_SOLARIS です。

UNIX の場合: クライアントに拡張属性または名前付きデータストリームのリストアは、に付属の のみで行えます。nbtarthe modified GNU tarNetBackup

UNIX の場合: 詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』を参照してください。

メモ: 拡張属性および名前付きデータストリームを圧縮することはできません。

拡張製品を実行するクライアントのパス規則

別ライセンス製品のオプションを実行している NetBackup クライアントのパス規則については、その製品用の NetBackup マニュアルを参照してください。(たとえば、Snapshot Client や NetBackup for MS-Exchange です)。

バックアップ対象リストの指示句について

[バックアップ対象 (Backup Selections)] リストは対象リスト上のファイルの処理時に NetBackup に特定の事前定義済み処理を実行するように知らせます。

利用可能な指示句は、ポリシー形式およびそのポリシーに対して [複数のデータストリームの許可 (Allow multiple data streams)] 属性が有効になっているかどうかによって異なります。NEW_STREAM 指示句を含むバックアップ対象リストの例を次に示します。

[MS-Windows] ポリシー形式が選択され、[複数のデータストリームの許可 (Allow multiple data streams)] が有効になっています。

```
NEW_STREAM
D:¥Program Files
NEW_STREAM
C:¥Winnt
```

メモ: 最良のパフォーマンスを得るために、1 つのデータストリームだけを使用してクライアントの各物理デバイスをバックアップします。1 つの物理デバイスに対して複数の並列実行ストリームを使用すると、バックアップ時間が長くなる可能性があります。ヘッドが各ストリームのファイルを含むトラック間を何度も往復移動する必要があるためです。

次の表はバックアップ対象リストで利用可能な指示句の多数の概略を示したものです。

表 20-52 バックアップ対象リストの指示句の概略

指示句	説明	適用可能なオペレーティングシステム
ALL_LOCAL_DRIVES	リムーバブルメディアを使うドライブを除くすべてのローカルドライブをバックアップするように NetBackup に指示します。この指示句には、重要なシステム関連コンポーネントも含まれています。 p.846 の「 ALL_LOCAL_DRIVES 指示句 」を参照してください。	サポートされているすべてのシステム
System State:¥	システムに関係した重要なコンポーネントをバックアップするように NetBackup に指示します。バックアップされるシステムコンポーネントの厳密なセットはオペレーティングシステムのバージョンとシステム構成によって決まります。 p.848 の「 System State:¥ 指示句 」を参照してください。	サポートされているすべての Windows システム
Shadow Copy Components:¥	ボリュームシャドウコピーコンポーネントのすべてのライターをバックアップするように NetBackup に指示します。System State:¥ が同時に選択されていない場合、この指示句の意味も暗黙的に含まれているとみなします。 p.849 の「 Shadow Copy components:¥ 指示句 」を参照してください。	サポートされているすべての Windows システム
Active Directory Application Mode:¥	Active Directory Application Mode (ADAM) はユーザーのサービスとして動作する Lightweight Directory Services です。この指示句がインストールされるコンピュータの ADAM のデータをバックアップするのに使うことができます。ただし、 Active Directory 自体はバックアップされません。	サポートされているすべての Windows システム
ポリシー固有の指示句	特定のポリシー形式だけに適用され、それらのポリシーのバックアップ対象リスト内でだけ使用できます。 p.850 の「 特定のポリシー形式用の指示句 」を参照してください。	ポリシー形式固有
UNSET と UNSET_ALL	ポリシー固有の指示句のストリームを中断します。これらの指示句を使用する前に、[複数のデータストリームの許可 (Allow multiple data streams)] ポリシー属性を有効にする必要があります。 p.854 の「 UNSET 指示句と UNSET_ALL 指示句 」を参照してください。	すべて

指示句	説明	適用可能なオペレーティングシステム
NEW_STREAM	NEW_STREAM がバックアップ対象リストの最初の行にあるときには、この指示句は次のモードでバックアップする方法を確定します。 ■ 管理者定義ストリーム ■ 自動検出ストリーム この指示句を使用する前に、[複数のデータストリームの許可 (Allow multiple data streams)]ポリシー属性を有効にする必要があります。 p.851 の「NEW_STREAM 指示句」を参照してください。	すべて
USHARE	ユニバーサル共有データをバックアップするように NetBackup に指示します。 この指示句を使用する前に、[複数のデータストリームの許可 (Allow multiple data streams)]ポリシー属性を有効にする必要があります。 p.850 の「USHARE 指示句」を参照してください。	

ALL_FILESYSTEMS 指示句と VOLUME_EXCLUDE_LIST 指示句

ALL_FILESYSTEMS 指示句は、NDMP バックアップポリシーに NDMP ファイラのすべてのファイルシステムおよびボリュームを含める方法を提供します。

NDMP ファイラの一部のボリュームをバックアップしない場合は、ALL_FILESYSTEMS バックアップ選択項目から特定のボリュームを除外できます。VOLUME_EXCLUDE_LIST 指示句はこのために使います。VOLUME_EXCLUDE_LIST 文の有効なワイルドカード文字を使うことができます。

メモ: 次の例では、NetApp Data ONTAP 7-Mode に固有の選択項目を使います。他の構成のバックアップ選択項目についての具体例は、該当するマニュアルを参照してください。

VOLUME_EXCLUDE_LIST 文は ALL_FILESYSTEMS 文に先行する必要があります。次に例を示します。

```
VOLUME_EXCLUDE_LIST=/vol/Hr_allfiles_vol01
ALL_FILESYSTEMS
```

または


```
VOLUME_EXCLUDE_LIST=/vol/testvol*  
ALL_FILESYSTEMS
```

VOLUME_EXCLUDE_LIST 文で複数の値を指定するには、値をカンマで区切ります。例:

```
VOLUME_EXCLUDE_LIST=/vol/Hr_allfiles_vol01,/vol/testvol*  
ALL_FILESYSTEMS
```

また、ALL_FILESYSTEMS 指示句で複数の VOLUME_EXCLUDE_LIST 文を指定することもできます。例:

```
VOLUME_EXCLUDE_LIST=/vol/Hr_allfiles_vol01  
VOLUME_EXCLUDE_LIST=/vol/testvol*  
ALL_FILESYSTEMS
```

VOLUME_EXCLUDE_LIST 文には最大で 256 文字を含めることができます。256 文字の限度を超えないようにする必要がある場合は、複数の VOLUME_EXCLUDE_LIST 文を作成します。256 文字を超えて指定すると、ボリュームリストは切り捨てられます。切り捨てられた文がバックアップジョブのエラーになる可能性があり、その場合はエラーメッセージ Invalid command parameter (20) が表示されます。

バックアップ選択項目に読み取り専用のボリュームまたは空きのないボリュームが含まれている場合、NDMP バックアップジョブは状態コード 20 (Invalid command parameter (20)) で失敗します。同じような NDMP バックアップジョブエラーが発生した場合は、ostfi ログを確認してエラーが発生したボリュームを特定します。読み取り専用のボリュームや領域不足のボリュームを除外するには、VOLUME_EXCLUDE_LIST 文と ALL_FILESYSTEMS 文を使うことができます。

スナップショットがセカンダリファイラに複製される NetBackup Replication Director 環境では、セカンダリファイラでのバックアップの制御にストレージライフサイクルポリシーを使用することをお勧めします。

7-mode の NetApp ストレージシステムでは、ボリュームがファイラのシステムファイルが含まんでいるためユーザーがファイルを /vol/vol0 に格納することは一般的にお勧めできません。このため、ALL_FILESYSTEMS 指示句がバックアップポリシーで使われない場合は、vol0 をバックアップから除外してください。次に示すのは /vol/vol0 を除外するバックアップ対象リストです。

```
VOLUME_EXCLUDE_LIST=/vol/vol0  
ALL_FILESYSTEMS
```

- セカンダリファイラでのすべてのボリュームのバックアップには ALL_FILESYSTEMS を使用しないでください。自動的に作成された NetApp FlexClone ボリュームをバックアップまたはリストアすると不整合が発生する場合があります。そのようなボリュームは一時的なものであり、仮想コピーまたは実際のボリュームへのポイントとして使われるため、バックアップする必要はありません。

- セカンダリファイラのすべてのボリュームをバックアップする必要がある場合は、レプリケートされたボリュームに加えて **FlexClone** ボリュームも除外することをお勧めします。例:

```
VOLUME_EXCLUDE_LIST=/vol/Clone_*  
VOLUME_EXCLUDE_LIST=/vol/*_[0-9]  
VOLUME_EXCLUDE_LIST=/vol/*_[0-9][0-9]  
VOLUME_EXCLUDE_LIST=/vol/*_[0-9][0-9][0-9]  
ALL_FILESYSTEMS
```

この例では、すべての **FlexClone** ボリュームを想定しており、**FlexClone** ボリュームのみが /vol/Clone_ から始まります。環境に合わせてボリュームの指定を適切に調整します。

- VOLUME_EXCLUDE_LIST は ALL_FILESYSTEMS に適用されます。明示的なバックアップ対象項目またはワイルドカードベースのバックアップ選択項目には適用されません。

Clustered Data ONTAP のための **NDMP** ポリシーの ALL_FILESYSTEMS 指示句を使う場合は、選択した各 **SVM** のルートボリュームを VOLUME_EXCLUDE_LIST 指示句を使って除外する必要があります。それ以外の場合、バックアップは失敗します。

論理ユニット番号 (**LUN**) が割り当てられているボリュームで、スナップショットのインポートが状態コード **4213** (Snapshot import failed) で失敗した場合、**NDMP** ポリシーのスナップショットからのバックアップは失敗します。このエラーを避けるためには、VOLUME_EXCLUDE_LIST 指示句を使って、**Storage Area Network (SAN)** を通してアクセスされる **LUN** の作成に使われるすべてのボリュームを除外します。

ALL_LOCAL_DRIVES 指示句

リムーバブルメディアを使用するドライブを除くすべてのローカルドライブのバックアップを行うには、ALL_LOCAL_DRIVES 指示句を使用します。この指示句は、ポリシーのバックアップ対象リストに含まれる唯一のエントリとして使用する必要があります。他のファイルや指示句はバックアップ対象リストに含めることができません。指示句は、次のポリシー形式にのみ適用されます。

- MS-Windows
- Standard

ALL_LOCAL_DRIVES によって得られる結果は、「複数のデータストリームを許可する (**Allow multiple data streams**)」がポリシーに対して有効になっているかどうかによって異なります。

[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)]が有効

標準ポリシー形式と MS-Windows ポリシー形式にのみ適用されます。NetBackup クライアント全体のバックアップが行われ、それぞれのドライブ (Windows) またはファイルシステム (UNIX) のデータが独自のバックアップストリームに分割されます。NetBackup クライアント上で定期的に前処理が実行され、必要な変更がストリームに加えられます。

[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)]が無効

NetBackup はクライアント全体をバックアップし、同じストリームにすべてのドライブとファイルシステムを含めます。

p.724 の「[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)](ポリシー属性)」を参照してください。

注意: ALL_LOCAL_DRIVES 指示句が使用されているポリシーでは、ALL_LOCAL_DRIVES を選択しないでください。

p.847 の「ALL_LOCAL_DRIVES の例: 自動検出モード」を参照してください。

p.848 の「ALL_LOCAL_DRIVES の例: 複数のデータストリームを使用しない場合」を参照してください。

ALL_LOCAL_DRIVES の例: 自動検出モード

[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)]が自動検出モードで有効になっていると想定します。また、クライアントが C:¥ および D:¥ という 2 つのドライブボリュームを含む Windows システムであると想定します。バックアップ対象リストは次の指示句を含んでいます。

ALL_LOCAL_DRIVES

このバックアップ対象リストの場合、NetBackup によって次のストリームが生成されます。

- C:¥ 用に 1 つのストリーム
- D:¥ 用に 1 つのストリーム

UNIX クライアントの場合、NetBackup によってファイルシステムごとに 1 つのストリームが生成されます。

ALL_LOCAL_DRIVES 指示句に SYSTEM_STATE が含まれているため、SYSTEM_STATE もバックアップされます。

p.848 の「ALL_LOCAL_DRIVES の例: 複数のデータストリームを使用しない場合」を参照してください。

p.724 の「[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)](ポリシー属性)」を参照してください。

ALL_LOCAL_DRIVES の例: 複数のデータストリームを使用しない場合

[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)]が無効になっていると想定します。また、クライアントが C:¥ および D:¥ という 2 つのドライブボリュームを含む Windows システムであると想定します。バックアップ対象リストは次の指示句を含んでいます。

```
ALL_LOCAL_DRIVES
```

このバックアップ対象リストの場合、NetBackup によって、クライアント全体が C:¥ と D:¥ の両方のデータを含む 1 つのデータストリームにバックアップされます。

ALL_LOCAL_DRIVES 指示句に SYSTEM_STATE が含まれているため、SYSTEM_STATE もバックアップされます。

p.724 の「[\[複数のデータストリームを許可する \(Allow multiple data streams\)\]\(ポリシー属性\)](#)」を参照してください。

System State:¥ 指示句

はサポートされているすべての Windows システムで使うことができます。System State:¥

System State:¥ 指示句は、シャドウコピーコンポーネントをサポートしないオペレーティングシステムに必要です。

System State:¥ 指示句は、重要なシステム関連コンポーネント用のバックアップを作成します。バックアップされるシステムコンポーネントの厳密なセットはオペレーティングシステムのバージョンとシステム構成によって決まります。

バックアップ済み項目のリストには次を含めることができます。

- Active Directory
- COM+ クラスデータベース
- クラスタデータベース
- IIS データベース
- レジストリ
- ブートファイルと保護ファイル
- SYSVOL
- 証明書サーバー

レジストリを構成するファイルは、次の場所に存在します。

```
%SystemRoot%\¥SYSTEM32¥Config
```

レジストリの一部として、少なくとも次のファイルのバックアップが行われます。

- デフォルト (DEFAULT)

- SAM
- SOFTWARE
- SECURITY
- SYSTEM

Shadow Copy components:¥ 指示句

Shadow Copy Components:¥ 指示句は、すべてのボリュームシャドウコピーコンポーネントライターをバックアップすることを指定します。この指示句は次のクライアントのバックアップに影響します。

- ボリュームシャドウコピーコンポーネントを使う Windows Server 2003 コンピュータ。
- EFI システムパーティション付きの Windows IA64 システム。

メモ: IA64 プラットフォーム上の Windows クライアントをバックアップするポリシーでは、System_State:¥ 指示句の代わりに、Shadow Copy components:¥ 指示句を使います。Shadow Copy components:¥ 指示句は、バックアップにシステム状態コンポーネントと EFI システムパーティションを自動的に含めます。

シャドウコピーコンポーネントはシステム状態情報を含んでいるので、シャドウコピーコンポーネントは完全バックアップによってバックアップする必要があります。

ボリュームシャドウコピーコンポーネントには、次のものが含まれます。

- | | |
|-------------------|---|
| システム状態のライ
ター | <ul style="list-style-type: none"> ■ システムファイル ■ COM+ クラス登録データベース ■ SYSVOL ■ Active Directory ■ クラスタクォーラム ■ 証明書サービス ■ レジストリ ■ Internet Information Service |
| システムサービスの
ライター | <ul style="list-style-type: none"> ■ リムーバブル記憶域マネージャ ■ イベントログ ■ Windows Internet Name Service ■ Windows Management Instrumentation ■ Remote Storage ■ 動的ホスト構成プロトコル ■ ターミナルサーバーのライセンス ■ Background Intelligent Transfer Service |

ユーザーデータ	コンピュータの実行には不要な項目。たとえば、Active Directory Application Mode および Microsoft 社の分散ファイルシステムレプリケーション (DFSR) フォルダ。 p.678 の「 Microsoft 社 DFSR バックアップおよびリストアについて 」を参照してください。
その他データ	今後の NetBackup リリース用のカテゴリ。

特定のポリシー形式用の指示句

一部の指示句は、特定のポリシー形式だけに適用され、それらのポリシーのバックアップ対象リスト内だけで使用できます。NetBackup によって、バックアップ対象リストとともにポリシー固有の指示句がクライアントに渡されます。その後、クライアントは、その指示句に従って適切な操作を実行します。ストリームでクライアントに渡されたすべてのポリシー固有の指示句は、それ以降のすべてのストリームで渡されます。

メモ: ポリシー固有の指示句は、その指示句をサポートするポリシーのバックアップ対象リストだけに含めてください。それ以外のバックアップ対象リストに含めると、エラーが発生する可能性があります。

独自の指示句を持つポリシー形式は次のとおりです。

- FlashBackup
- NDMP
- Lotus-Notes
- MS-Exchange-Server

他のポリシー形式とそれらに関連するバックアップ対象リスト内の指示句について詳しくは、そのオプション用の NetBackup のマニュアルを参照してください。

USHARE 指示句

USHARE 指示句は、[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)] が標準ポリシーに対して設定されている場合だけ認識されます。[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)] が設定されていない場合、USHARE 指示句は無視されます。NEW_STREAM が追加されていない場合、USHARE は 1 行目である必要があります。

NEW_STREAM が追加されている場合、USHARE は 2 行目である必要があります。バックアップ対象リストの 1 行目または 2 行目に USHARE が存在すると、バックアップ形式が USHARE バックアップに決まります。

NEW_STREAM 指示句

NEW_STREAM 指示句は、[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)] がポリシーに対して設定されている場合だけ認識されます。NEW_STREAM 指示句は、[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)] が設定されていない場合は無視されます。

この指示句をバックアップ対象リスト内で使用する場合、最初の 1 行目に使用する必要があります。この指示句を 1 行目で使用すると、そのリスト内の他の場所でも使用できます。

バックアップ対象リストの 1 行目で NEW_STREAM が使用されているかどうかによって、バックアップが管理者定義ストリームモードまたは自動検出ストリームモードでどのように実行されるかが決まります。

管理者定義ストリームモードについて

NEW_STREAM がバックアップ対象リストの 1 行目で使用されている場合、バックアップは管理者定義ストリームモードで実行されます。

このモードでは、次の処理が実行されます。

- NEW_STREAM 指示句が存在する、バックアップ対象リストのそれぞれの箇所、バックアップが別々のストリームに分割されます。
- NEW_STREAM 指示句間のすべてのファイルパスが、同じストリームに含まれます。
- 新しいストリームの開始 (他の NEW_STREAM 指示句) によって、それまでのストリームは終了します。
- バックアップ対象リスト内の最後のストリームは、そのバックアップ対象リストの終わりによって終了します。

次の例では、各ストリームがクライアント上の別々の物理デバイスからのものであると想定しています。1 つの物理デバイスに対して複数の並列実行ストリームを使用すると、バックアップ時間が長くなる可能性があります。ヘッドが各ストリームのファイルを含むトラック間を何度も往復移動する必要があるため、バックアップ時間が長くなります。

たとえば、次のバックアップ対象リストについて考えてみます。

Windows の場合:

```
NEW_STREAM
D:¥Program Files
C:¥Winnt
NEW_STREAM
C:¥Users
D:¥DataFiles
```

このバックアップ対象リストには 2 つのデータストリームが含まれます。

- リストの最初にある `NEW_STREAM` 指示句によって、管理者定義ストリームが起動され、最初のデータストリームが開始されます。このストリームによって、`D:¥Program Files` および `C:¥Winnt` のバックアップが行われます。
- 2 番目の `NEW_STREAM` によって `C:¥users` と `D:¥DataFiles` をバックアップする 2 番目のデータストリームが開始されます。
`C:¥users` および `D:¥DataFiles`.

UNIX の場合:

```
NEW_STREAM
/usr
/lib
NEW_STREAM
/home
/bin
```

このバックアップ対象リストには 2 つのデータストリームが含まれます。

- リストの最初にある `NEW_STREAM` 指示句によって、管理者定義ストリームが起動され、最初のストリームが開始されます。このストリームによって、`/usr` および `/lib` のバックアップが行われます。
- 2 番目の `NEW_STREAM` によって、`/home` および `/bin` のバックアップを行う 2 番目のデータストリームが開始されます。

バックアップ対象リストエントリをストリームに追加した場合、そのポリシーのスケジュールが実行されるまで、このエントリはバックアップされません。次に予定されているバックアップが増分バックアップである場合、変更されたファイルだけのバックアップが行われます。新しいエントリの完全バックアップを最初に確実に実行するには、そのエントリを新しいストリームに追加します。**NetBackup** では、バックアップ対象リストに追加された新しいストリームに対しては完全バックアップが行われます。

前の例では、次のように追加することを想定します。

Windows の場合:

```
D:¥Utilities
```

UNIX の場合:

```
/var
```

このパスを、次のパスの後に追加したと想定します。

Windows の場合:

```
D:¥Datafiles
```

UNIX の場合:

/bin

その夜に増分バックアップが予定されている場合、D:¥Utilities (Windows) または /var (UNIX) 内の変更されたファイルのみがバックアップされます。D:¥Utilities (Windows) または /var (UNIX) の前に NEW_STREAM 指示句を追加すると、それらのファイルが最後に変更されたタイミングに関係なく、D:¥Utilities (Windows) または /var (UNIX) 内のすべてのファイルの完全バックアップが行われます。

自動検出ストリームモードについて

自動検出ストリームモードは、NEW_STREAM 指示句がバックアップ対象リストの 1 行目で使用されていない場合に起動されます。そのリストには 指示句またはワイルドカードのどちらかが含まれている必要があります。ALL_LOCAL_DRIVES

このモードでは、バックアップ対象リストがクライアントに送信されます。クライアントでは、リストが前処理され、バックアップが次のとおりストリームに分割されます。

- バックアップ対象リストに ALL_LOCAL_DRIVES 指示句が含まれている場合、NetBackup によってクライアント全体のバックアップが行われます。ただし、NetBackup はそれぞれのドライブボリューム (Windows) またはファイルシステム (UNIX) を独自のバックアップストリームに分割します。

p.846 の「ALL_LOCAL_DRIVES 指示句」を参照してください。

- ワイルドカードが使用されている場合、ワイルドカードを拡張すると、ワイルドカードの拡張ごとに 1 つのストリームが作成されます。ワイルドカードの使用方法は、Windows クライアントの場合と同様です。

p.1097 の「NetBackup でのワイルドカードの使用」を参照してください。

バックアップ対象リストに ALL_LOCAL_DRIVES 指示句またはワイルドカードのどちらも含まれていない場合、自動検出モードは使用されません。クライアントではなくサーバーが前処理を実行します。バックアップ対象リスト内の各ファイルパスは個別のストリームになります。

自動検出ストリームモードは、標準ポリシー形式と MS-Windows ポリシー形式に適用されます。

バックアップの開始前に、クライアントは、自動検出を使用してバックアップ対象リストを前処理することによって、必要なストリームの数を判断します。ポリシーによって実行される最初のバックアップでは、バックアップ対象リストは前処理されます。前処理間隔の長さによっては、一部のバックアップの前に前処理が実行されないことがあります。

自動検出の前処理間隔の設定について

前処理間隔は、自動検出モードだけに適用され、前処理が実行される間隔を指定します。スケジュールの満了時に、NetBackup で自動検出が使用される場合、NetBackup によって前回の前処理セッションが前処理間隔内に実行されているかどうかを確認されます。

NetBackup は次のいずれかの操作を実行します。

- 前処理セッションが前処理間隔内で実行されると、NetBackup はクライアント上の前処理を実行しません。
- 前処理セッションが前処理間隔内で実行されない場合、NetBackup はクライアントを前処理して、ストリームに必要な変更を行ないます。

必要に応じて、bpconfig コマンドを実行して間隔を変更できます。デフォルトは **4 時間** であり、バックアップを毎日実行する大多数のサイトに適した値です。

前処理間隔が長すぎたり、短すぎる場合、次の問題が発生する可能性があります。

間隔が長すぎる場合 新しいストリームが十分に早く追加されないため、バックアップが実行されない場合があります。たとえば、前処理間隔が **4 時間** に設定され、スケジュールの実行間隔が **4 時間未満** であると想定します。この場合、次のバックアップが実行されるときに前処理間隔が経過していないため、新しいストリームが次のバックアップから省かれる可能性があります。

間隔が短すぎる場合 前処理が頻繁に実行され、許容できないレベルまでスケジュール時間が増加する場合があります。前処理を実行するためにサーバーが多数のクライアントと通信する必要がある場合、間隔が短いときに、問題が発生する可能性が最も高くなります。

次の形式の bpconfig コマンドを使用して間隔を変更します。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpconfig [-prep hours]
```

UNIX の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpconfig [-prep hours]
```

bpconfig コマンドについて詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

UNSET 指示句と UNSET_ALL 指示句

UNSET および UNSET_ALL 指示句はポリシー固有の指示句のストリームを中断します。

ストリームでクライアントに渡されたすべてのポリシー固有の指示句は、それ以降のすべてのストリームで渡されます。UNSET 指示句および UNSET_ALL 指示句によって、この動作が変更されます。これらの指示句は、[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)] オプションがポリシーに対して設定されている場合だけ認識されます。

p.850 の「[特定のポリシー形式用の指示句](#)」を参照してください。

p.724 の「[複数のデータストリームを許可する (Allow multiple data streams)](ポリシー属性)」を参照してください。

UNSET

UNSET 指示句は、ポリシー固有の指示句が追加のストリームで渡されないように、指示句を設定解除します。設定解除された指示句は、後でバックアップ対象リストで再定義し、現行および後続のストリームに含めることができます。

次のバックアップ対象リストでは、set コマンドは、最初のストリームおよびそれ以降のすべてのストリームに渡される、クライアント固有の指示句です。

```
NEW_STREAM
set destpath=/etc/home
/tmp
/use
NEW_STREAM
/export
NEW_STREAM
/var
```

set コマンドを最初の 2 つのストリームだけに渡す場合、3 番目のストリームの始めに UNSET または UNSET_ALL を使用します。この場所に指定することで、SET が最後のストリームに渡されることを防ぐことができます。

```
NEW_STREAM
set destpath=/etc/home
/tmp
/use
NEW_STREAM
/export
NEW_STREAM
UNSET set destpath=/etc/home [or UNSET_ALL]
/var
```

UNSET_ALL

にはと同じ効果がありますが、この指示句は、バックアップ対象リストでその箇所までに定義されているすべてのポリシー固有の指示句を設定解除します。UNSET_ALLUNSET

デフォルトでバックアップからエクスクルードされているファイル

ファイルとファイルの状態によっては、デフォルトで NetBackup によってバックアップが行われない場合があります。

また、特定のファイルまたはディレクトリをクライアント上のエクスクルードリストで指定すると、それらのファイルまたはディレクトリを自動バックアップからエクスクルードできます。

p.857 の「[自動バックアップからのファイルのエクスクルードについて](#)」を参照してください。

デフォルトでは、次のファイルは **NetBackup** によってバックアップが行われません。

- **NFS** ファイルまたは **NFS** ディレクトリ。NFS ファイルをバックアップするには、[**NFS をたどる (Follow NFS)**]を有効にします。
- 別のファイルシステム内のファイルまたはディレクトリ。別のファイルシステム内のファイルをバックアップするには、[**クロスマウントポイント (Cross mount points)**]を有効にします。
- パスの長さが **1023** 文字を超えるファイルおよびディレクトリ。
- オペレーティングシステムによって i ノード情報が戻されない (lstat システムコールが正常に実行されない) ファイルまたはディレクトリ。
- **NetBackup** からアクセスできない (cd コマンドを使用してアクセスできない) ディレクトリ。
- ソケット特殊ファイル。(ただし、名前付きパイプはバックアップされます。)
- 現在ファイルを開いているアプリケーションによってロックされたファイル。
- ビジー状態のファイル。ファイルが開いている場合、**NetBackup** はそのファイルの最後に保存されたバージョンのバックアップを行います。
- bind マウント (**Linux**) の下のファイルかディレクトリ。

多くのプラットフォームにおいて、**NetBackup** によって自動的にエクスクルードされるファイルシステム形式は次のとおりです。

- **cdrom** (すべての **UNIX** プラットフォーム)
- **cacheefs** (**AIX**、**Solaris**、**UnixWare**)
- **devpts** (**Linux**)
- **mntfs** (**Solaris**)
- **proc** (**UNIX** プラットフォーム)
/proc は **AIX** では自動的にエクスクルードされないため、エクスクルードリストに手動で追加する必要があります。/proc を手動で追加しない場合、**AIX** で **ALL_LOCAL_DRIVES** 指示句を使用すると、バックアップが部分的にしか正常終了しない場合があります。
- **tmpfs** (**Linux**)
- **usbdevfs** (**Linux**)

p.708 の「[\[NFS をたどる \(Follow NFS\)\]\(ポリシー属性\)](#)」を参照してください。

p.712 の「[\[クロスマウントポイント \(Cross mount points\)\] \(ポリシー属性\)](#)」を参照してください。

ホスト ID 固有のファイルのバックアップからの除外について

脆弱性を事前に回避するには、特定のホスト ID 固有のファイルをバックアップから除外します。

- バックアップされないファイルを識別するには、次のいずれかのコマンドを実行します。
 - `nbgetconfig -private_exld_list`
 - `bpgetconfig -private_exld_list`コマンドについて詳しくは『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。
- バックアップにファイルを含める方法:
バックアップから特定のファイルを除外しない場合は、インクルードリストにそれらのファイルを含める必要があります。
詳しくはp.857の「[自動バックアップからのファイルのエクスクルードについて](#)」を参照してください。を参照してください。
- バックアップされなかったファイルを再作成する方法:
バックアップされないファイルはリストアされません。ファイルは元の場所に存在することが理想的です。ただし、ファイルを再作成する場合、一部のキーファイルと証明書は **NetBackup** サービスを再起動することで再作成できます。キーまたは証明書に関連するエラーが発生した場合は、**NetBackup** サービスを再起動し、キーファイルまたは証明書が再作成されるかどうかを確認します。
キーファイルまたは証明書が作成されない場合は、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』で提供されている証明書とキーの再生成手順に進みます。

自動バックアップからのファイルのエクスクルードについて

多くの **NetBackup** クライアント上では、特定のファイルをクライアント上のエクスクルードリストで指定すると、それらのファイルを自動バックアップからエクスクルードできます。

インクルードリストを作成して、エクスクルードするファイルを追加することもできます。たとえば、インクルードリストは、インクルードリストにある 1 つのファイルを除いてディレクトリ全体をエクスクルードする場合などに有効です。

メモ: エクスクルードリストおよびインクルードリストは、ユーザーバックアップおよびユーザーアーカイブには適用されません。

エクスクルードリストおよびインクルードリストでファイルを指定する方法は、次のようにクライアントの種類によって異なります。

Microsoft Windows クライアント クライアントの[バックアップ、アーカイブおよびリストア (Backup, Archive, and Restore)]インターフェースで、エクスクルードリストとインクルードリストを指定します。[バックアップ、アーカイブおよびリストア (Backup, Archive, and Restore)]インターフェースを起動します。[ファイル (File)]メニューから[NetBackup クライアントのプロパティ (Client Properties)]を選択します。[エクスクルードリスト (Exclude List)]タブまたは[インクルードリスト (Include List)]タブを選択します。詳しくは、該当するクライアントの NetBackup マニュアルを参照してください。

[エクスクルードリスト (Exclude List)]または[インクルードリスト (Include List)]は、プライマリサーバー上の NetBackup 管理コンソールを介しても指定できます。

p.99 の「[エクスクルードリスト (Exclude list)]プロパティ」を参照してください。

UNIX クライアント エクスクルードリストおよびインクルードリストをクライアント上の次のファイルで作成します。

- /usr/opensv/netbackup/include_list
- /usr/opensv/netbackup/exclude_list

特定のポリシー 特定のポリシーや、ポリシーとスケジュールの組み合わせに対するエクスクルードリストを作成します。*.polycname* または *.polycname.schedulename* という接尾辞が付いた *exclude_list* ファイルを作成します。*wkstations* というポリシーに対する 2 つのファイルの例を次に示します。このポリシーは、*fulls* というスケジュールを含みます。

```
/usr/opensv/netbackup/exclude_list.wkstations
/usr/opensv/netbackup/exclude_list.wkstations.fulls
```

最初のファイルは、*wkstations* というポリシーに含まれるすべてのスケジュールバックアップに影響します。2 番目のファイルは、スケジュールの名前が *fulls* である場合だけバックアップに影響します。

NetBackup では、特定のバックアップに対しては、その目的が最も明確な名前の付いた 1 つのエクスクルードリストが使用されます。たとえば、次の名前のファイルが存在すると想定します。

```
exclude_list.wkstations および
exclude_list.wkstations.fulls
```

NetBackup 次のファイルのみを使用します。

```
exclude_list.wkstations.fulls
```

Microsoft Windows Backup によってエクスクルードされるファイル

Microsoft Windows Backup を使用してファイルをバックアップするときは、Windows によって、エクスクルードされるファイルとフォルダのリストが保持されます。このリストは [FilesNotToBackup] リストと呼ばれます。NetBackup では、これらのファイルおよびディレクトリは、クライアントの NetBackup エクスクルードリストに含まれていない場合でも自動バックアップからエクスクルードされます。また、これらの項目は、NetBackup エクスクルードリストの項目とは異なり、ユーザー主導バックアップからもエクスクルードされます (エクスクルードリストの項目は、ユーザー主導の操作でバックアップできます)。

Windows は、リストアされないレジストリキーのリストも保持します。NetBackup では、Windows の KeysNotToRestore リストに表示されているレジストリキーはリストアされません。

[ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] タブ

[ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] タブは、NBU-Catalog ポリシー形式の場合に表示されます。[ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] タブには、カタログデータのディザスタリカバリ保護方式を構成するためのオプションが含まれています。

メモ: ディザスタリカバリ情報をローカルコンピュータに保存しないでください。イメージファイルは、ネットワーク共有またはリムーバブルデバイスに保存することをお勧めします。

図 20-31 [ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] タブ

The screenshot shows a Windows-style dialog box titled "Add New Policy - catalog_backup". It has three tabs: "Attributes", "Schedules", and "Disaster Recovery", with the latter being the active tab. The "Disaster Recovery" tab contains the following elements:

- A "Path:" label followed by a text input field and a "Browse" button.
- "Logon:" and "Password:" labels, each followed by a text input field.
- An unchecked checkbox labeled "Send in an e-mail attachment (recommended)".
- An "Email address:" label followed by a text input field.
- A list box labeled "Critical policies" which is currently empty.
- Three buttons to the right of the "Critical policies" list box: "Add", "Change", and "Delete".
- An information icon (i in a circle) next to a text block that reads: "The disaster recovery file generated for each catalog backup contains information needed to recover the NetBackup catalog. This file also contains media necessary to recover critical policies. Record the location of this file so that the NetBackup catalog can be recovered if necessary."
- At the bottom right, there are "OK", "Cancel", and "Help" buttons.

表 20-53 では、[ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] タブのオプションについて説明します。

表 20-53 [ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] タブのオプション

オプション	説明
パス (Path)	ディザスタリカバリ情報が保存されるディレクトリを参照して指定します。ディザスタリカバリ情報をローカルコンピュータに保存しないでください。イメージファイルは、ネットワーク共有またはリムーバブルデバイスに保存することをお勧めします。 共有はホットカタログバックアップを実行する前に確立して利用可能にする必要があります。 NFS 共有または UNC パス (CIFS Windows 共有) を指定します。 メモ: パスには非 ASCII 文字を含めることができません。 UNC パスを指定するときは、次の点に注意してください。 ■ Windows プライマリサーバーは Windows コンピュータへの UNC パスを指定できます。 ■ UNIX プライマリサーバーは Windows コンピュータへの UNC パスを指定できません。 ■ UNIX プライマリサーバーは UNIX コンピュータへの UNC パスを指定できません。これを行うには、最初にプライマリサーバーにその UNC の場所をマウントしてから、UNIX コンピュータへの UNC パスを指定します。 UNIX の場合: ディザスタリカバリ情報のパスは、/usr/opensv/netbackup と同じパーティション上のディレクトリに指定できません。パスが /usr/opensv/netbackup と同じパーティション上の場所を指している場合には、NetBackup が状態コード 20 のエラーメッセージを表示します。メッセージはディスクのパスが無効であることを示しています。異なるパーティション上のディレクトリを示すように [ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] タブでパスを変更します。
ログオン (Logon)	確立された Windows または NFS 共有へのアクセスに必要なログオンおよびパスワードの情報を指定します。 ログオン情報が無効な場合は、NetBackup メッセージが表示されます。メッセージでは、ログオンおよびパスワードの情報を再入力するか、または代替位置オプションの選択を解除して続行するように求められます。
パスワード (Password)	共有へのログオンに必要なパスワードを指定します。

オプション	説明
電子メールに添付して送信する (Send in an email attachment)	ディザスタリカバリレポートを送信する電子メールアドレスを指定します。1 つ以上の電子メールアドレスにディザスタリカバリレポートを送信することをお勧めします。複数のアドレスに情報を送信するには、次のように電子メールアドレスをカンマで区切ります。 <code>email1@domain.com,email2@domain.com</code> Windows の場合: nbmail.cmd または mail_dr_info.cmd スクリプトを構成する必要があります (<code>Install_path¥NetBackup¥bin¥goodies¥</code>)。加えて、[ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] タブで電子メールアドレスを指定します。 Windows の場合: NetBackup は電子メールアドレス、件名、メッセージを nbmail.cmd または mail_dr_info.cmd に渡すことによって通知を実行します。スクリプトは、スクリプトに指定したメールプログラムを使用して、電子メールをユーザーに送信します。構成方法については、スクリプト内のコメントを参照してください。 Windows の場合: 次のポイントでは、mail_dr_info.cmd と nbmail.cmd の対話方法について説明します。 ■ <code>Install_path¥NetBackup¥bin¥mail_dr_info.cmd</code> が構成されると、ディザスタリカバリレポートが [ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] タブで示される管理者の電子メールアドレスに送られます。NetBackup の管理者はスクリプトを設定して、代替の場所にディザスタリカバリ情報を送信できます。 ■ mail_dr_info.cmd が構成されておらず、<code>Install_path¥NetBackup¥bin¥goodies¥nbmail.cmd</code> が構成されている場合には、nbmail.cmd により [ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] タブに表示されている管理者にディザスタリカバリレポートが送信されます。 ■ どちらのファイルも構成されていない場合、NetBackup では、Microsoft の IMAPI 内部サービスの使用が試行されます。 メモ: Windows の場合: デフォルトでは、nbmail.cmd または mail_dr_info.cmd のどちらも電子メールを送信するように構成されていません。 p.1090 の「Windows ホストでの nbmail.cmd スクリプトの構成」を参照してください。 Windows の場合: mail_dr_info.cmd について詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』を参照してください。
クリティカルポリシー (Critical policies)	障害発生時にサイトをリカバリするために不可欠であると見なされるポリシーが表示されます。NetBackup [ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] レポートには、クリティカルポリシーのバックアップ (最後の完全バックアップを含む) に使用されたすべてのメディアが表示されます。クリティカルポリシーのメディアを利用できない場合、NetBackup [ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] ウィザードで警告メッセージが表示されます。 メモ: [ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] レポートには、クリティカルポリシーで増分または完全バックアップスケジュールのみが使用されるように、増分および完全バックアップスケジュールのメディアのみがリストされます。Oracle や Microsoft SQL Server などの特定のデータベースバックアップスケジュールでは、アプリケーションバックアップおよび自動バックアップのスケジュール形式のみが使用されます。スケジュール形式のため、これらのバックアップのメディアリストは [ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] レポートに表示されません。

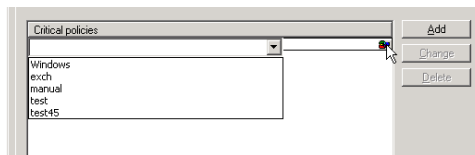
メモ: Vault がディザスタリカバリデータを Vault レポートの電子メールの添付ファイルとして Vault サイトに送信し、保護します。

カタログバックアップポリシーの[クリティカルポリシー (Critical policies)]リストへのポリシーの追加

カタログバックアップポリシーの[クリティカルポリシー (Critical Policies)]リストにポリシーを追加するには次の手順を実行します。

[クリティカルポリシー (Critical policies)]リストにポリシーを追加する方法

- 1 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)] > [ポリシー (Policies)] を展開します。
- 2 次のいずれかを実行します。
 - 構成されたカタログバックアップポリシーをダブルクリックします。
 - カatalogバックアップポリシーを作成します。
- 3 [ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] タブを選択します。
- 4 [クリティカルポリシー (Critical Policies)] リストの近くで、[追加 (Add)] をクリックします。有効なフィールドがリストに表示されます。



- 5 有効なフィールドの右端にあるアイコンをクリックして、構成されたポリシーのリストを表示します。[クリティカルポリシー (Critical policies)] リストに追加するポリシーを選択します。
- 6 次のいずれかを実行します。

別のポリシーを追加する [追加 (Add)] をクリックします。
方法

ポリシーを変更する方法 ポリシーを選択し、[変更 (Change)] をクリックします。

ポリシーを削除する方法 ポリシーを選択し、[削除 (Delete)] をクリックします。

- 7 [OK] をクリックして、[ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)] タブの [クリティカルポリシー (Critical policies)] リストとその他の設定を保存します。

Vault ポリシーの作成

Vault ポリシーは、他のポリシーとは次の点で異なります。

- ポリシー形式に[Vault]を指定する必要があります。
- Vault ポリシーではクライアントを指定しないため、[クライアント (Clients)]タブが表示されません。
- バックアップ対象リストには、ファイルではなく Vault コマンドを指定します。

Vault ポリシーを作成する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (Management)]>[ポリシー (Policies)]を展開します。
- 2 [処理 (Actions)]メニューで[新規 (New)]>[ポリシー (Policy)]をクリックします。
- 3 新しいポリシー用の一意の名前を[新しいポリシーの追加 (Add a New Policy)]ダイアログボックスに入力します。[OK]をクリックします。
- 4 [属性 (Attributes)]タブで、ポリシー形式に[Vault]を選択します。
- 5 [スケジュール (Schedules)]タブで[新規 (New)]をクリックして、新しいスケジュールを作成します。バックアップ形式は、デフォルトで[自動 (Automatic)]に設定されます。
[クライアント (Clients)]タブは、Vault ポリシー形式の場合は表示されません。
- 6 スケジュールの作成を完了します。
- 7 [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブで、2 つの Vault コマンドのいずれかを入力します。

`vltrun` ジョブに対してロボット、Vault 名およびプロファイルを指定するには、`vltrun` を使用します。`vltrun` コマンドでは、メディアの選択、コピーおよび取り出しを行うために必要なすべての手順を行うことができます。Vault プロファイルの名前が一意である場合は、次の形式を使用します。

```
vltrun  
profile_name
```

Vault のプロファイル名が一意でない場合、次の形式でコマンドを実行します。

```
vltrun  
robot_number/vault_name/profile_name
```

vlteject 完了済みの Vault セッションに対して、メディアの取り出しまたはレポートの生成を行うには、vlteject コマンドを使用します。次に例を示します。

```
vlteject -eject -report [-vault  
vault_name  
  
[-sessionid  
id  
]] [-auto y|n] [-eject_delay  
seconds  
]
```

どちらのコマンドも次のディレクトリに存在します。

- Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin
```

- UNIX の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/bin/
```

Vault 名、プロファイル名およびコマンドの実行方法について詳しくは、『Vault 管理者ガイド』を参照してください。

- 8 [OK]をクリックします。

BigData ポリシーの作成

大量データのアプリケーションまたは特定のハイパーコンバージドシステムをバックアップするには BigData ポリシーを使用します。それぞれ、たとえば Hadoop または Nutanix Acropolis Hypervisor です。

BigData ポリシーは、他のポリシーとは次の点で異なります。

- ポリシー形式として BigData を指定する必要があります。
- [クライアント (Clients)]タブと[バックアップ対象 (Backup Selections)]タブで提供されるエントリは、バックアップを作成するアプリケーションによって異なります。
- [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブで、特定のパラメータとその適切な値を指定する必要があります。

BigData ポリシーを作成するには

- 1 NetBackup 管理コンソール の左ペインで、[NetBackup の管理]> [ポリシー (Policies)]を展開します。
- 2 [処理 (Actions)]メニューで[新規 (New)]>[ポリシー (Policy)]をクリックします。

- 3 新しいポリシー用の一意の名前を[新しいポリシーの追加 (Add a New Policy)]ダイアログボックスに入力します。[OK]をクリックします。
- 4 [属性 (Attributes)]タブで、ポリシー形式に[BigData]を選択します。
- 5 [スケジュール (Schedules)]タブで[新規 (New)]をクリックして、新しいスケジュールを作成します。バックアップ形式は、デフォルトで[自動 (Automatic)]に設定されます。

メモ: 現在、特定の大量データのアプリケーションは、すべてのスケジュール形式をサポートしません。たとえば、Nutanix では、完全バックアップのみをサポートしています。

- 6 スケジュールの作成を完了します。
- 7 [クライアント (Clients)]タブで、アプリケーションの種類に従って適切な値を入力します。
- 8 [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブで、アプリケーションの種類に従って適切なパラメータを入力します。
- 9 [OK]をクリックします。

NetBackup は、次のアプリケーションのバックアップをサポートします。

- Nutanix Acropolis クラスタ
- Hadoop

Nutanix Acropolis クラスタをバックアップするには

- 1 NetBackup 管理コンソール の左ペインで、[NetBackup の管理]> [ポリシー (Policies)] を展開します。
- 2 [処理 (Actions)]メニューで[新規 (New)]>[ポリシー (Policy)]をクリックします。
- 3 新しいポリシー用の一意の名前を[新しいポリシーの追加 (Add a New Policy)]ダイアログボックスに入力します。[OK]をクリックします。
- 4 [属性 (Attributes)]タブで、ポリシー形式に[BigData]を選択します。
- 5 [スケジュール (Schedules)]タブで[新規 (New)]をクリックして、新しいスケジュールを作成します。現在、NetBackup では、Nutanix Acropolis クラスタの完全バックアップのみをサポートします。
- 6 [クライアント (Clients)]タブで、仮想マシンの表示名を入力します。
- 7 [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブで、次のようにパラメータとその値を入力します。
 - Application_Type=Nutanix-AHVこれらのパラメータ値では、大文字と小文字が区別されます。

- Backup_Host=<IP address or the hostname of the backup host>
バックアップ ホストは、Linux マシンである必要があります。バックアップホストには、NetBackup クライアントまたはメディアサーバーを指定できます。
- Application_Server=<IP address or the hostname of the Nutanix cluster>

8 [OK]をクリックして、変更を保存します。

Hadoop クラスタをバックアップするには

- 1 NetBackup 管理コンソール の左ペインで、[NetBackup の管理]> [ポリシー (Policies)] を展開します。
 - 2 [処理 (Actions)]メニューで[新規 (New)]>[ポリシー (Policy)]をクリックします。
 - 3 新しいポリシー用の一意の名前を[新しいポリシーの追加 (Add a New Policy)]ダイアログボックスに入力します。[OK]をクリックします。
 - 4 [属性 (Attributes)]タブで、ポリシー形式に[BigData]を選択します。
 - 5 [スケジュール (Schedules)]タブで[新規 (New)]をクリックして、新しいスケジュールを作成します。
 - 6 [クライアント (Clients)]タブで、Hadoop クラスタまたは名前ノードの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を入力します。
 - 7 [バックアップ対象 (Backup Selections)]タブで、次のようにパラメータとその値を入力します。
 - Application_Type=hadoop
これらのパラメータ値では、大文字と小文字が区別されます。
 - Backup_Host=<IP address or hostname>
バックアップ ホストは、Linux マシンである必要があります。バックアップホストには、NetBackup クライアントまたはメディアサーバーを指定できます。
 - バックアップを作成するファイルのパスまたはディレクトリです。
- 8 [OK]をクリックして、変更を保存します。

手動バックアップの実行

手動バックアップは、ユーザーが開始する、ポリシーに基づくバックアップです。

手動バックアップは、次の状況で効果的です。

- 構成をテストするとき
- 通常のバックアップを行うことができなかったクライアントのバックアップを行うとき

- 新しいソフトウェアをインストールする前にクライアントをバックアップするとき (古い構成を保存しておくため)
- 会社の合併や分社化といった重大事の前に、記録を残すとき
- 四半期または年間の財務情報をバックアップするとき

手動バックアップだけで使用するポリシーおよびスケジュールを作成するのが有効な場合もあります。手動バックアップのポリシーを作成するには、バックアップ処理時間帯が定義されていない 1 つのスケジュールが含まれるポリシーを作成します。バックアップ処理時間帯が定義されていないため、ポリシーが自動で実行されることはありません。

手動バックアップを実行する方法

- 1 左側で[保護 (Protection)]、[ポリシー (Policies)]の順に選択します。
- 2 ポリシーのチェックボックスにチェックマークを付けます。
- 3 [手動バックアップ (Manual backup)]を選択します。(手動バックアップを行うには、[有効にする開始日時の設定 (Go into effect at)] 属性を有効にする必要があります。)

p.707 の「[開始日時の設定 (Go into effect at)](ポリシー属性)」を参照してください。

[開始日時の設定 (Go into effect at)]属性が将来の日時に設定されている場合、バックアップは実行されません。

- 4 スケジュール、およびバックアップを行うクライアントを選択します。

スケジュールを選択しない場合、NetBackup では保持レベルが最も高いスケジュールが使用されます。クライアントを選択しない場合、NetBackup はすべてのクライアントをバックアップします。

ユーザースケジュールは、スケジュールリストに表示されません。また、バックアップ対象リストを含まない (ユーザーがファイルを選択する) ため、手動バックアップは実行できません。

- 5 [バックアップ (Backup)]を選択してバックアップを開始します。

Active Directory の個別バックアップと個別リカバリ

管理者は NetBackup を使用して、Active Directory 全体のリストアではなく、Active Directory の個々のオブジェクトおよび属性をリストアできます。また、管理者は Active Directory から削除されたオブジェクト (廃棄標識のオブジェクト) もリストアできます。

次のトピックは Active Directory オブジェクトのリカバリを実行するためにポリシーを構成する方法を説明します。

- Active Directory の個別バックアップおよびリストアを実行するのに必要なシステムの要件。

- 個別リストアを可能にする Active Directory バックアップのポリシーを構成する方法。
- Active Directory の個々のオブジェクトそして属性をリストアする方法。

Active Directory の NetBackup の個別バックアップと個別リカバリのシステム要件

Active Directory の個別リストアをサポートするオペレーティングシステムのバージョンとメディアサーバープラットフォームのリストについては、次の URL で『NetBackup Enterprise Server and Server - Software Compatibility List』を参照してください。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100040093>

Active Directory の個別バックアップおよびリストアを実行するには、次の要件を満たすことを確認します。

- **Network File System (NFS)** はメディアサーバーとすべての Active Directory ドメインコントローラまたは ADAM/LDS ホストにインストールされている必要があります。
p.1182 の「[Active Directory 個別リカバリテクノロジー用 Network File System \(NFS\) のインストールおよび構成](#)」を参照してください。
p.1183 の「[Network File System \(NFS\) 用サービスの構成について](#)」を参照してください。
- **NetBackup Client Service** はドメインの特権付きアカウントとしてログオンするように構成されなければなりません。
Active Directory の個別バックアップおよびリストアを実行するには、NetBackup Legacy Client Service (bpineta) は Active Directory ドメインコントローラまたは ADAM サーバーのドメイン管理者アカウントで動作する必要があります。デフォルトでは、bpineta はローカルシステムアカウントで動作します。
p.1094 の「[NetBackup Client Service の構成](#)」を参照してください。

Active Directory の個別リストアを可能にするポリシーの作成

Active Directory をバックアップする NetBackup ポリシーは Active Directory のオブジェクトと属性のリストアを許可するように構成できます。オブジェクトと属性はリストアが実行されるドメインコントローラの再起動による中断なしでローカルまたはリモートでリストアできます。

Microsoft 社の VSS (ボリュームシャドウコピーサービス) がスナップショットプロバイダとして使用される場合、Active Directory ホストプロパティによって、NetBackup が一貫性チェックを実行するかどうかが判定されます。

p.57 の「[\[Active Directory\]プロパティ](#)」を参照してください。

Active Directory のリストアを許可するようにポリシーを作成する方法

- 1 NetBackup Legacy Client Service (bpineta) が Active Directory ドメインコントローラのドメイン管理者のアカウントで動作していることを確認します。この場合には、Active Directory ドメインコントローラが NetBackup クライアントです。

p.1094 の「[NetBackup Client Service の構成](#)」を参照してください。
- 2 [ポリシー (Policy)] ダイアログボックスの [属性 (Attributes)] タブで、ポリシー形式として [MS-Windows] を選択します。必要に応じて他のポリシー属性を指定します。
- 3 [個別リカバリを有効化する (Enable granular recovery)] オプションを有効にします。このオプションが有効でなくてもバックアップは動作しますが、バックアップは個別リストアを生成できません。
- 4 [スケジュール (Schedules)] タブで、必要に応じてスケジュールを作成します。

ポリシーのその他の項目は差分または累積増分バックアップ形式を使いますが Active Directory 項目は常に完全バックアップです。

p.870 の「[Active Directory バックアップは完全バックアップです](#)」を参照してください。
- 5 [バックアップ対象 (Backup Selections)] タブで、[指示句の選択 (Select Directive)] ダイアログボックスを開きます。
- 6 [指示句セット (Directive set)] で、[Windows 2003] または [Windows 2008] を選択します。
- 7 Active Directory をバックアップするには、次の指示句からいずれかを選択します。
 - p.848 の「[System State:¥ 指示句](#)」を参照してください。
 - p.849 の「[Shadow Copy components:¥ 指示句](#)」を参照してください。
 - p.846 の「[ALL_LOCAL_DRIVES 指示句](#)」を参照してください。

メモ: Active Directory Application Mode (ADAM) はユーザーのサービスとして動作する Lightweight Directory Services です。この指示句がインストールされるコンピュータの ADAM のデータをバックアップするのに使うことができます。ただし、Active Directory 自体はバックアップされません。

- 8 [クライアント (Clients)] タブで、必要に応じてクライアントを選択します。
- 9 ポリシーを保存します。

Active Directory バックアップは完全バックアップです

Active Directory のバックアップは、個別バックアップであるかどうかに関係なく常に NetBackup の完全バックアップです。

Active Directory がポリシーのバックアップ対象リストにあるときは、バックアップ形式が増分、差分または累積の場合でも Active Directory 部分は常に完全にバックアップされます。バックアップ対象リストの他の項目では、指定されたように差分か累積増分バックアップ形式が使われることがあります。Active Directory バックアップに完全バックアップが強制されても、ポリシーファイルリストの非 Active Directory 項目には通常の増分ルールが適用されます。

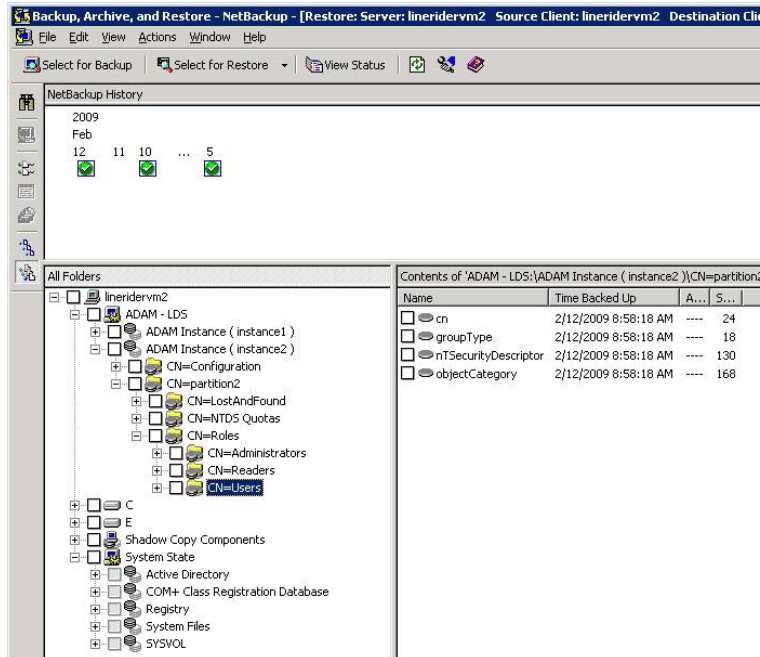
Active Directory オブジェクトのリストア

次の手順はディザスタリカバリ以外の状況で Active Directory バックアップからオブジェクトをリストアする方法を記述します。

Active Directory バックアップから個々のオブジェクトをリストアする方法

- 1 NetBackup のバックアップ、アーカイブおよびリストアクライアントインターフェースを開きます。
- 2 [ファイル (Files)]>[リストアするファイルおよびフォルダの選択 (Select Files and Folders to Restore)]を選択します。
- 3 [Active Directory]ノードを展開し、参照します。

- 4 リストアされるべきオブジェクトを選択します。個別オブジェクトと非個別オブジェクトの両方を選択しないでください。ユーザーが選択項目を探索して展開するとき、**NetBackup** サーバーとの通信に遅延が発生する場合があります。メディアサーバーのイメージから動的に内容が判断されるためにこの遅延が生じます。この方法では、多くの個別エントリが原因で **NetBackup** カタログが予想外に大きくなるのを防ぐことができます。



- 5 [処理 (Action)]>[リストア (Restore)]を選択します。
- 6 Active Directory のオブジェクトが選択されれば、[マークされたファイルのリストア (Restore Marked Files)]ダイアログボックスは 2 つのタブを含んでいます。
 - [一般 (General)]タブ
Active Directory のオブジェクトが選択されるとき、[リストア先の選択 (Restore Destination Choices)]は[全般 (General)]タブで無効になります。必要に応じて他のリストアオプションを構成します。
 - [Active Directory]タブ
[Active Directory]タブには、削除済みオブジェクトを作成し直すための[Active Directory Deleted Object コンテナからリストアできない削除済みオブジェクトの再作成 (Recreate deleted objects that cannot be restored from the Active Directory Deleted Objects container)]オプションがあります。

[Active Directory] タブは管理者が廃棄標識の有効期間が経過したオブジェクトを作成し直すことを可能にするオプションを含んでいます。また、オブジェクトは Active Directory Deleted Object コンテナからパージされています。

この機能を有効にするには、[Active Directory Deleted Object コンテナからリストアできない削除済みオブジェクトの再作成 (Recreate deleted objects that cannot be restored from the Active Directory Deleted Objects container)] というラベルのオプションを有効にします。

- 7 [マークされたファイルのリストア (Restore Marked Files)] ダイアログボックスの [リストアの開始 (Start Restore)] をクリックします。

一部のリストアの状況ではリストアされるものによっては追加手順が必要です。

p.873 の「[個別リストアに関する問題のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

個別リストアに関する問題のトラブルシューティング

一部の個別リストアの状況では十分にオブジェクトをリストアするには追加手順が必要です。また、別の状況では、Active Directory の一部の個別リストアは可能ではありません。

表 20-54 に、個別リストアの潜在的な問題を示します。

表 20-54 リストアの問題のトラブルシューティング

状況	推奨事項
無効になるリストア	Active Directory の個別リストアからリストアされるとき、時々、ユーザーとコンピュータアカウントが無効になります。 次の項目は、アカウントが無効になる理由として考えられるものです。 ■ Active Directory のオブジェクトは削除されるとき、それらの現在の Active Directory または ADAM/AD LDS のコンテナから削除されます。それらは廃棄標識に変換され、それらの廃棄標識の有効期間が監視される Active Directory Deleted Object コンテナに配置されます。デフォルトでは、NetBackup は廃棄標識の有効期間が経過していなければこのコンテナから削除済みオブジェクトをリストアします。 廃棄標識の有効期間が経過した後、廃棄標識は Active Directory Deleted Object コンテナからパージされます。廃棄標識をパージすると、Active Directory と ADAM/AD LDS のデータベースからオブジェクトが永続的に削除されます。 ■ ユーザーオブジェクトをリストアした場合、オブジェクトのユーザーパスワードをリセットし、オブジェクトのユーザーアカウントを有効にする必要があります。 ■ Active Directory のユーザオブジェクトについては、Microsoft の[Active Directory ユーザーとコンピュータ]アプリケーションを使います。 ■ ADAM/AD LDS のユーザオブジェクトについては、ADSI Edit を使用します。 Active Directory では、コンピュータオブジェクトはユーザーオブジェクトから導出されます。コンピュータオブジェクトと関連付けされる一部の属性は、削除されたコンピュータオブジェクトをリストアするときリストアできません。それらはコンピュータオブジェクトが最初に削除されたときに属性がスキーマの変更を通して保存された場合にのみリストアできます。 ■ コンピュータオブジェクトのクレデンシャルは 30 日毎に変更され、バックアップからのクレデンシャルは実際のコンピュータに保存されるクレデンシャルと一致しないことがあります。userAccountControl のプロパティが削除済みオブジェクトに保持されなければ、コンピュータオブジェクトはリストアされるとき無効になります。 コンピュータオブジェクトのアカウントをリセットするには Microsoft の[Active Directory ユーザーとコンピュータ]アプリケーションを使います。 ■ ドメインからコンピュータを削除します。 ■ ドメインにコンピュータを再結合します。コンピュータオブジェクトが削除されるとき保持されるのでコンピュータのセキュリティ識別子 (SID) は変わりません。但し、廃棄標識が期限切れになり、新しいコンピュータオブジェクトが作成し直されたら、SID は異なっています。

状況	推奨事項
グループとメンバーのオブジェクト	Active Directory のグループメンバーシップのリンクをリストアするにはリストアジョブが二度実行される必要があることがあります。 たとえば、グループとメンバーのオブジェクトが削除されるケースを考慮します。 リストアジョブがグループのオブジェクトとメンバーのオブジェクトの両方を含んでいれば、ジョブはオブジェクトをアルファベット順にリストアします。ただし、リストアされるグループはまだ存在していないメンバーへのリンクの依存があります。グループがリストアされる時、リンクはリストアできません。 すべての前方と後方のリンクをリストアするためにリストアを再び実行します。
グループポリシーのオブジェクト	NetBackup はグループポリシーのオブジェクトの個別リストアをサポートしません。

合成バックアップ

この章では以下の項目について説明しています。

- [合成バックアップについて](#)
- [合成バックアップとリストアの推奨事項](#)
- [合成完全バックアップ](#)
- [合成累積増分バックアップ](#)
- [合成バックアップのポリシーに表示される必要があるスケジュール](#)
- [合成バックアップ用のポリシーへのクライアントの追加](#)
- [変更ジャーナルおよび合成バックアップ](#)
- [True Image Restore および合成バックアップ](#)
- [アクティビティモニターでの合成バックアップの表示](#)
- [合成バックアップの実行時に生成されるログ](#)
- [合成バックアップとディレクトリおよびファイルの属性](#)
- [複数コピー合成バックアップ方式を使用する場合](#)
- [最適化された合成バックアップ](#)
- [重複排除の最適化合成バックアップ](#)

合成バックアップについて

従来の完全バックアップでは、すべてのファイルがクライアントからプライマリサーバーまたはメディアサーバーにコピーされます。最後の増分バックアップ以降にファイルが変更されなかった場合でも、ファイルはコピーされます。

NetBackup が合成完全バックアップを作成する場合、最後の増分バックアップの際に新しいファイルまたは変更されたファイルがメディアサーバーへコピーされているかどうか NetBackup によって検出されます。メディアサーバー上で完全バックアップと増分バックアップを結合して新しい完全バックアップを作成する際に、クライアントが実行中である必要はありません。新しい合成完全バックアップには、最新の完全バックアップが実行された時点のクライアントのファイルシステムが正確に反映されます。

クライアントではなくプライマリサーバーおよびメディアサーバー上で処理が実行されるので、合成バックアップはネットワークトラフィックを減らすのに役立ちます。ファイルはネットワーク経由で 1 回だけ送信されます。バックアップイメージを合成バックアップに結合した後で、コンポーネントイメージが存在するテープまたはディスクを再利用することができます。合成バックアップによって、使用するテープの数またはディスク領域を削減できます。

合成バックアップは、テープストレージユニットまたはディスクストレージユニット、あるいはその両方のメディアを使用して書き込むことができます。バックアップでテープを使用する場合、バックアップの合成は、ドライブをあまり使用していない時間帯に実行できます。たとえば、バックアップを主に夜間に実行する場合、日中は完全バックアップの合成にドライブを使用できます。

[合成バックアップする (Synthetic backup)] オプションは、次の条件を満たしている場合に使用できます。

- ポリシー形式は、標準 (Standard) または MS-Windows のいずれかである必要があります。
- ポリシーの [属性 (Attributes)] タブで、[True Image Restore 情報を収集する (Collect True Image Restore Information)] とともに [移動検出を行う (With Move Detection)] を選択している必要があります。
p.720 の「[True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore information)] (ポリシー 属性) (移動検出を行う場合と行わない場合)」を参照してください。
- 合成バックアップ用に作成されたスケジュールでは、[合成バックアップする (Synthetic backup)] を選択している必要があります。
p.770 の「[合成バックアップする (Synthetic backup)] (スケジュール属性)」を参照してください。
- 次のいずれかが利用可能である必要があります。
 - 利用可能な領域が十分にあるディスクストレージユニット
 - 読み込みおよび書き込み用の複数のドライブが存在するテープライブラリ。
p.878 の「合成バックアップとリストアの推奨事項」を参照してください。
 - ディスクストレージユニットとテープライブラリの組み合わせ。

合成バックアップとリストアの推奨事項

合成完全バックアップは、データ量が適度で毎日の変更の割合が低いリモートオフィスのバックアップを行うスケーラブルなソリューションです。

クライアントで行われる毎日の変更の割合が高い場合、増分バックアップのサイズが大きくなりすぎます。この場合、従来の完全バックアップの代わりに合成バックアップを作成する利点が失われます。

合成バックアップは、すべてのメディアサーバープラットフォームおよび第 1 層のプライマリサーバープラットフォームでサポートされています。

この項では、合成バックアップを十分に活用するための推奨事項と、合成バックアップがサポートされない状況について説明します。

バックアップに関する推奨事項:

- 合成対象のバックアップの多重化は効率的でないため、行わないでください。多重化されたクライアントイメージを合成するには、ソースメディアを複数回 (クライアントごとに 1 回) 読み込む必要があります。

合成バックアップに複数のストリームを選択した場合、パフォーマンスに関する問題も発生することがあります。この問題は、合成バックアップを多重化する場合に発生する問題と類似しています。複数ストリームのパフォーマンスに関する問題を改善するため、可能なかぎりディスクにバックアップを行ってください。

- アクセラレータまたは合成バックアップのいずれかの SLP と共に使用されるあらゆるストレージユニットに対して、[コピー後に期限切れにする (Expire after copy)] の保持を有効にしないことをお勧めします。[コピー後に期限切れにする (Expire after copy)] の保持を指定することにより、バックアップの実行中にイメージが期限切れになることがあります。新しい完全バックアップを合成するには、SLP バックアップで以前のバックアップイメージが必要になります。以前のイメージがバックアップの間に期限切れになった場合、バックアップは失敗します。

- 最後の増分バックアップと合成バックアップ間の期間を短縮します。合成バックアップではクライアントと直接作用しないため、合成バックアップは、最後の増分バックアップの時点のイメージとなります。これが問題になる場合、バックアップの対象となる期間の差を短縮するために、合成バックアップの前に増分バックアップを実行します。

- 複数コピー合成バックアップ方式を使って合成バックアップによる複数コピーを作成できます。

合成バックアップではストレージライフサイクルポリシーを使うことができますが、複数コピー合成バックアップ方法では SLP を使うことができません。

p.887 の「[複数コピー合成バックアップ方式を使用する場合](#)」を参照してください。

- いずれかのコンポーネントイメージが暗号化されている場合、合成バックアップはサポートされません。
- ユーザーによって生成されたバックアップを使用して、合成イメージを生成することはできません。ユーザーバックアップスケジュールまたはユーザーアーカイブスケジュール

ルで生成されたバックアップは、合成バックアップのコンポーネントとして使用できません。

- 合成バックアップおよび最適化された合成バックアップは自動イメージレプリケーションをサポートしません。

リストアに関する推奨事項:

- 合成バックアップからのリストアの実行に必要な時間は、時間の経過とともに大幅に増加することはありません。
- 合成バックアップ全体のリストア時間および 1 つのファイルのリストア時間は、同じです。この時間は、従来のバックアップと合成バックアップのどちらからリストアする場合でも同じです。
- 1 つのディレクトリのリストア時間は、合成バックアップからリストアする場合、時間の経過とともに増加する場合があります。リストア時間は、そのディレクトリ内のファイル変更のパターンに依存します。
- 従来の完全バックアップ (ファイルシステムの順にファイルを格納) と合成完全バックアップ (最後にアクセスされた順にファイルを格納) を比較すると、次のような違いがあります。合成完全バックアップでは、最新のファイルがメディアの先頭に配置され、変更されていないファイルは最後に配置されます。そのため、時間が経過すると、処理順序により、合成完全バックアップイメージ内で 1 つのディレクトリのフラグメンテーションが発生する場合があります。
- この例は、1 つのディレクトリのリストアの場合だけに適用されます。合成完全バックアップからの 1 つのファイルのリストアおよび完全イメージのリストアは、前述の項目に示したように、従来の完全バックアップからのリストアと同じ時間、またはそれより短い時間で済みます。
- ポリシーで「チェックポイントから再開」機能を指定していても、合成バックアップスケジューラを使用して生成されたバックアップにはチェックポイントが設定されません。「チェックポイントから再開」機能は、ポリシーの[属性 (Attributes)]タブの[チェックポイントの間隔 (Take checkpoints every)]設定が有効な場合に、有効になります。合成バックアップで[チェックポイントの間隔 (Take checkpoints every)]オプションを有効に設定しても、このプロパティは無効です。

表 21-1

合成バックアップでディスクストレージかテープストレージを使う場合の推奨事項

ストレージユニット形式	推奨事項
ディスクストレージユニット	ディスク上のイメージを使用すると、合成が効率化されます。NetBackup 合成バックアップでは、まず最新のコンポーネントイメージが処理された後に、古いイメージが順に処理されます。複数のコンポーネントイメージが同じテープに書き込まれている場合、テープの動作が、ディスク上のイメージの場合に比べて非効率的になる場合があります。 合成完全バックアップの生成にかかる時間は、ディスクを使用した増分バックアップから生成すると短縮することができます。また、合成完全バックアップをディスク上に生成すると、実行時間をさらに短縮できます。生成したディスクコピーは、テープに複製することができます。
テープストレージユニット	テープがディスクの代わりに使われる場合、合成イメージ用のテープはコンポーネントイメージが存在するテープとは別のテープである必要があります。 使用可能なドライブの最大数は、合成バックアップの書き込みに必要なドライブだけに適用されます。コンポーネントイメージがテープ上に存在する場合、読み込み用に追加ドライブが必要です。 1 つのテープドライブデバイスを使用して合成イメージを生成する場合は、まずコンポーネントイメージをハードドライブに配置します。これによって、1 つのテープドライブデバイスを使用して、合成イメージを作成することができます。

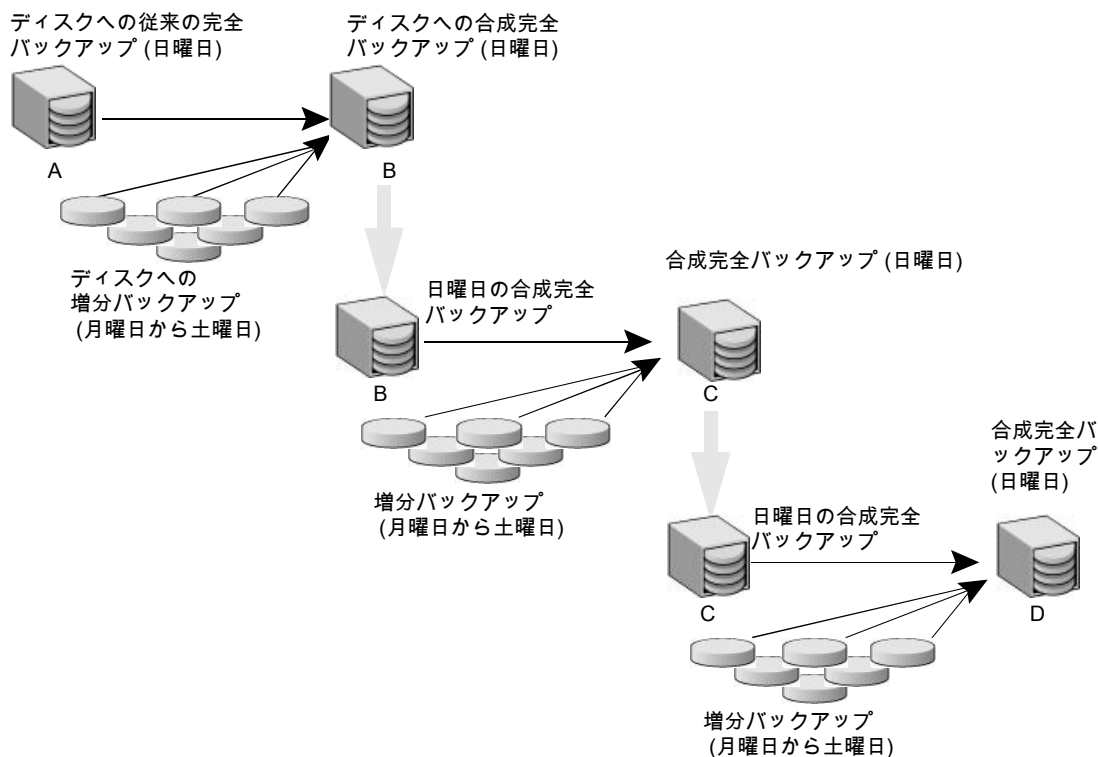
合成完全バックアップ

合成バックアップは合成完全バックアップまたは合成累積増分バックアップの場合があります。

合成イメージの作成に使用されるイメージは、コンポーネントイメージと呼ばれます。たとえば、合成完全バックアップのコンポーネントイメージは、前回の完全バックアップのイメージおよびその後の増分バックアップのイメージです。

図 21-1 は、既存の完全バックアップ (A) からの合成完全バックアップ (B、C、D) の作成と完全バックアップ間の増分バックアップを示しています。

図 21-1 合成完全バックアップの作成



従来の完全バックアップ (A) および増分バックアップは、従来の方法 (データのスキャン後、クライアントのファイルシステムからバックアップメディアにデータをコピーする方法) で作成されます。合成バックアップは、クライアントシステムと情報交換せず、メディアサーバー上で合成されます。

p.882 の「[合成累積増分バックアップ](#)」を参照してください。

次に示すのは合成完全バックアップの例です。

- バックアップの対象となるクライアント用に、標準 (Standard) ポリシーまたは MS-Windows ポリシーを作成します。次のスケジュールを指定します。
 - 1 回以上実行される従来の完全バックアップ用のスケジュール
 - 毎日 (月曜日から土曜日) の差分増分バックアップ用のスケジュール
 - 毎週の合成完全バックアップ用のスケジュール
- 従来の完全バックアップが実行されたことを確認します。バックアップが完了しなかった場合、バックアップを手動で実行します。

- スケジュールに従って、クライアントに対する差分増分バックアップが 1 週間毎日実行されます。1 週間の最後の増分バックアップは、土曜日に実行されます。
- スケジュールに従って、クライアントに対する合成完全バックアップが、その後の日曜日に毎週実行されます。

メモ: この例では、合成完全バックアップは、土曜日の増分バックアップの時点のイメージとなります。

合成累積増分バックアップ

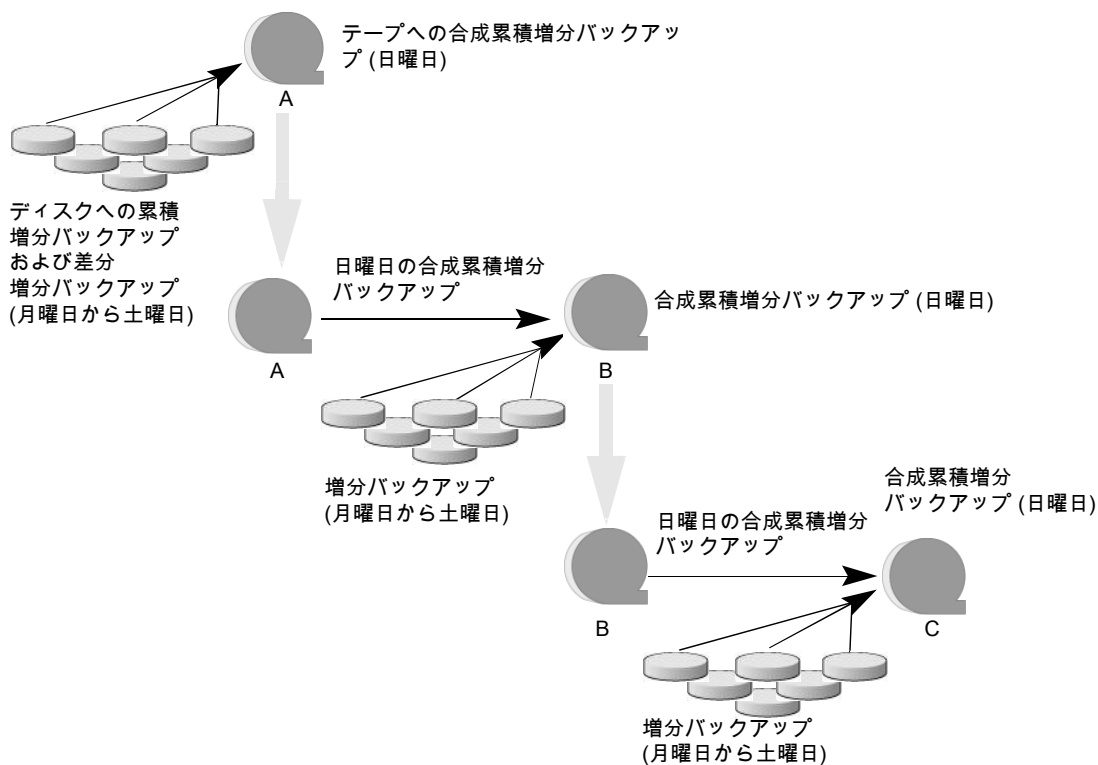
合成累積増分バックアップを作成する例は、合成完全バックアップを作成する例と類似しています。累積増分バックアップには、最後の完全バックアップ以降のすべての変更が含まれることに注意してください。

最後の完全バックアップよりも新しい累積増分バックアップが存在する場合、次のコンポーネントバックアップイメージが統合されて合成累積増分バックアップイメージが生成されます。

- 最後の累積増分バックアップ以降に取得されたすべての差分増分バックアップ。
- 最後の累積増分バックアップ。利用可能な累積増分バックアップが存在しない場合、差分増分バックアップだけが合成イメージに使用されます。

図 21-2 は、最新の累積増分バックアップからの合成累積増分バックアップ (A、B、C) の作成と、以降の差分増分バックアップを示しています。

図 21-2 合成累積増分バックアップの作成



次に示すのは合成累積増分バックアップの例です。

- バックアップの対象となる 5.0 以上のクライアント用に、標準 (Standard) ポリシーまたは MS-Windows ポリシーを作成します。次のスケジュールを指定します。
 - 1 回以上実行される従来の完全バックアップ用のスケジュール
 - 毎日 (月曜日から土曜日) の差分増分バックアップ用のスケジュール
 - 毎週の合成累積増分バックアップ用のスケジュール
- 従来の完全バックアップが実行されたことを確認します。バックアップが完了しなかった場合、バックアップを手動で実行します。
- スケジュールに従って、クライアントに対する差分増分バックアップが 1 週間毎日実行されます。1 週間の最後の増分バックアップは、土曜日に実行されます。
- スケジュールに従って、クライアントに対する合成累積増分バックアップが、その後の日曜日に毎週実行されます。

メモ: この例では、合成累積増分バックアップは、土曜日の増分バックアップの時点のイメージとなります。

合成バックアップのポリシーに表示される必要があるスケジュール

合成バックアップのポリシーには、次のいずれかの形式のスケジュールが存在する必要があります。

- 完全イメージを作成するために従来の完全バックアップが 1 回以上正常に実行されるスケジュール。1 つ以上の前の完全イメージが存在しない場合、合成バックアップジョブは失敗します。
- 増分バックアップ用のスケジュール。
最後の完全バックアップまたは増分バックアップ以降にファイルシステムで行われた変更を捕捉するために、増分バックアップが必要です。完全または増分合成バックアップのスケジュールは存在するが、増分バックアップのスケジュールは存在しないポリシーでは、合成バックアップジョブの状態コードが 1 になります。
合成バックアップでは、すべての増分バックアップを合成して、1 つの新しい完全または累積増分バックアップイメージが作成されます。そのため、合成バックアップは、最後の増分バックアップの時点のイメージです。

メモ: (デフォルトの) アーカイブビットに基づくクライアントの合成累積増分バックアップを構成する場合、従来の合成でないバックアップに対しては、差分増分バックアップだけを使用してください。

- [合成バックアップする (Synthetic backup)] オプションが選択されている 1 つの完全バックアップおよび累積増分バックアップ用のスケジュール。
p.770 の「[合成バックアップする (Synthetic backup)](スケジュール属性)」を参照してください。

合成バックアップ用のポリシーへのクライアントの追加

合成バックアップポリシーにクライアントを追加した後、ポリシーの従来の完全バックアップを実行します。合成バックアップを作成するには、従来のバックアップが必要です。

合成バックアップではポリシー属性として [True Image Restore 情報を収集する (Collect true image restore information)] と [移動検出を行う (with move detection)] が必要であるため、ポリシーのすべてのクライアントで TIR がサポートされている必要があります。

p.720 の「[\[True Image Restore 情報を収集する \(Collect true image restore information\)\]](#)(ポリシー属性) (移動検出を行う場合と行わない場合)」を参照してください。

変更ジャーナルおよび合成バックアップ

Windows クライアントの「変更ジャーナルを使用 (Use Change Journal)」ホストプロパティは、有効に設定されている場合も、合成バックアップスケジュールを使用するクライアントのバックアップでは有効ではありません。

p.81 の「[Windows クライアントの \[クライアントの設定 \(Client settings\)\] プロパティ](#)」を参照してください。

True Image Restore および合成バックアップ

合成バックアップでは、ポリシーのプロパティとして「[True Image Restore 情報を収集する \(Collect true image restore information\)](#)」と「[移動検出を行う \(with move detection\)](#)」を有効にする必要があるため、ポリシーに含まれるすべてのクライアントで TIR がサポートされている必要があります。

p.720 の「[\[True Image Restore 情報を収集する \(Collect true image restore information\)\]](#)(ポリシー属性) (移動検出を行う場合と行わない場合)」を参照してください。

「[True Image Restore \(TIR\) 情報を保持する \(Keep true image restoration \(TIR\) information\)](#)」プロパティは、イメージカタログの TIR 情報を削除するまでに保持しておく期間を示します。このプロパティは、プライマリサーバーの「[クリーンアップ \(Clean-up\)](#)」ホストプロパティに表示されます。

p.64 の「[\[クリーンアップ \(Clean up\)\] プロパティ](#)」を参照してください。

ただし、合成完全バックアップまたは合成累積増分バックアップのスケジュールがポリシーに定義されている場合、その後の (従来または合成) 完全バックアップまたは累積増分バックアップのイメージが正常に生成されるまで、TIR 情報はコンポーネントイメージから削除されません。

TIR 情報がカタログから 2 日後に削除されるように「[True Image Restore \(TIR\) 情報を保持する \(Keep true image restoration \(TIR\) information\)](#)」ホストプロパティで指定していると想定します。この場合、従来の完全バックアップまたは合成完全バックアップのイメージが生成されたときだけ、TIR 情報が 3 日目に削除されます。

TIR 情報がコンポーネントイメージから削除された後で、誤って最新の合成イメージを期限切れにしてしまった場合、その合成バックアップジョブを再試行すると、TIR 情報はカタログに自動的にリストアされます。メディアが不適切であるか、不明であるか、または Vault 処理されているために TIR 情報をリストアできない場合は、合成バックアップジョブが失敗して、エラーコード 136 (「TIR 情報はイメージファイルから削除されました (tir info

was pruned from the image file)]) が表示されます。問題を修正できる場合、合成バックアップを再度実行します。

アクティビティモニターでの合成バックアップの表示

合成ジョブと従来の完全バックアップを区別するには、アクティビティモニターの[データ移動 (Data movement)]フィールドの表示を確認します。合成ジョブは[データ移動 (Data movement)]形式が[合成 (Synthetic)]と表示され、従来のバックアップは[標準 (Standard)]と表示されます。

合成バックアップの実行時に生成されるログ

合成バックアップがスケジュールされている場合、**NetBackup** によって、合成バックアップ処理を管理する bpsynth プログラムが起動されます。bpsynth では、それ以前のバックアップイメージから合成バックアップを作成する方法が計画されます。

bpsynth では、必要に応じて合成バックアップに必要なテープドライブリソースがスケジュールされます。必要なリソースを利用できない場合、ジョブは失敗し、リソースが必要であることを示す状態コードが表示されます。

リソースをすぐに取得できないが、後で取得できる場合、合成ジョブはリソースが利用可能になるまで待機します。合成ジョブは、バックアップ、リストア、または別の合成バックアップジョブがドライブを使っている間待機する場合があります。

bpsynth によって、情報が bptm および bpdm プログラムに渡され、テープおよびディスクのイメージに対して読み込みまたは書き込みが可能になります。カタログ情報は、bpdm を使用して管理されます。これらの各プログラムには、ログディレクトリ内にデバッグログファイルが存在します。

合成バックアップで問題が発生した場合、問題を診断するには次のデバッグログが必要です。

- プライマリサーバー上: bpsynth、bpdm、vnetd。
- メディアサーバー上: bpcd、bptm (イメージの読み込みおよび書き込みがテープデバイスに対して行われる場合)、bpdm (イメージの読み込みおよび書き込みがディスクに対して行われる場合)。
コンポーネントイメージが異なるノード上に存在する場合、複数のメディアサーバーが使用される可能性があることに注意してください。

合成バックアップのログファイルについて詳しくは、『[NetBackup ログリファレンスガイド](#)』を参照してください。

ただし、各ストリームまたはクライアントに対しては、bpsynth が使用されます。新しいイメージを書き込むには、bpsynth でテープドライブが必要となるため、bpsynth を使うとテープイメージの場合に効率が低下する可能性があります。また、bpsynth で、同じコン

ポーネントイメージボリュームが使用される場合もあります。1 つずつ順に処理を終了することが必要となる場合もあります。

合成バックアップとディレクトリおよびファイルの属性

ディレクトリおよびファイルの属性の変更を合成バックアップに含めるには、まずコンポーネントの増分バックアップによってその変更を取得する必要があります。(たとえば、アクセス制御リスト (ACL) の変更。)

UNIX では、オブジェクトの ACL を変更すると、そのオブジェクトの ctime (i ノード変更時刻) は変更されますが、mtime (データ変更時刻) は変更されません。増分バックアップは mtime に基づいて開始されるため、ACL の変更は増分バックアップには反映されず、合成完全バックアップにも反映されません。

ACL の変更をバックアップに含めるには、各 UNIX クライアントの `bp.conf` ファイルに `USE_CTIME_FOR_INCREMENTALS` を指定します。

各 Windows クライアントで、([増分 (Incrementals)] 設定の) [アーカイブビットベース (Based on archive bit)] を有効にします。このプロパティは、[Windows クライアント (Windows client)] の [クライアントの設定 (Client settings)] ホストプロパティにあります。

p.81 の「[Windows クライアントの \[クライアントの設定 \(Client settings\)\] プロパティ](#)」を参照してください。

複数コピー合成バックアップ方式を使用する場合

複数コピー合成バックアップ方式は、通常の合成バックアップジョブ時にリモートサイトで合成バックアップの 2 つ目のコピーを生成する機能を導入しています。

この方式には、次の利点があります。

- 合成完全バックアップを別のサイトにコピーする帯域幅コストが削減されます。ローカルの合成完全バックアップをリモートのサイトに複製して 2 つ目のコピーを作成するのではなく、リモートサイトでのみデータ移動を実行して 2 つ目のコピーを作成の方が効率的です。
- NetBackup バックアップイメージの二重コピーのディザスタリカバリスキーマを確立する効率的な手段が提供されます。

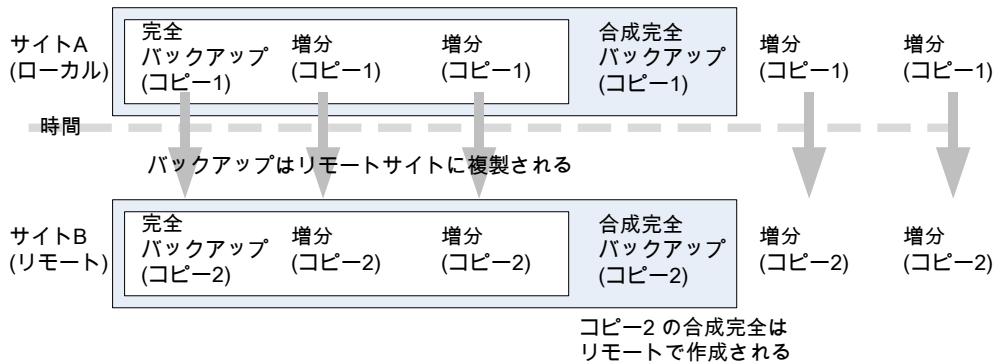
「表 21-2」では、リモートサイトで作成される合成完全バックアップが、ローカルサイトで作成された 1 つ目のコピーのクローン (2 つ目のコピー) である点を強調して示しています。

表 21-2 方式を有効にする場合と有効にしない場合の合成コピー処理の比較

手順	複数コピー合成バックアップ方式を使用しない場合:	複数コピー合成バックアップ方式を使用する場合:
1	ローカルサイト (サイト A) で完全バックアップが実行される。	手順 1 は同じまま。
2	完全バックアップがリモートサイト (サイト B) に複製される。	手順 2 は同じまま。
3	サイト A で増分バックアップが実行される。	手順 3 は同じまま。
4	増分バックアップがサイト B に複製される。	手順 4 は同じまま。
5	増分スケジュールが実行されるたびに、手順 3 と手順 4 が繰り返される。	手順 5 は同じまま。
6	サイト A で完全合成バックアップが作成される。	手順 6 は同じまま。
7	完全バックアップがサイト B に複製される。	サイト B のイメージを使用してサイト B に合成完全バックアップが作成される。 リモートサイトのこの合成完全バックアップは、ローカルサイトの合成バックアップの 2 つ目のコピーになる。
8	バックアップのスケジューリングで必要になるたびに、必要手順 2 から手順 7 が繰り返される。	手順 8 は同じまま。

「図 21-3」は、追加の帯域幅を使用しないで合成完全バックアップをサイト A からサイト B にコピーする方法を示しています。

図 21-3 合成完全バックアップのリモート作成



複数コピー合成バックアップの構成

複数コピー合成バックアップを構成するには、2 つ目のコピー作成用の合成バックアップポリシーごとに、プライマリサーバー上に構成ファイルを作成します。

構成ファイルは、ポリシーとスケジュールの名前が付加されるテキストファイルです。

```
multi_synth.policy.schedule
```

次の場所にファイルを作成します。

- Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥db¥config¥multi_synth.policy.schedule
```

- UNIX の場合:

```
/usr/openv/netbackup/db/config/multi_synth.policy.schedule
```

複数コピー合成バックアップの構成変数

このファイル形式では、構成設定の設定に従来の名前と値のペアのスキーマを使用しています。各設定では、キーの名前と設定値を等号で区切り、名前と値のペアは 1 行に 1 つとします。

例:

```
NAME=VALUE
```

すべての値を整数で入力します。

表 21-3 で、構成ファイルに記述できる構成エントリについて説明します。

表 21-3 構成エントリ

エントリ	目的
SRC_COPY	2 つ目の合成バックアップ用のソースコンポーネントのそれぞれのコピー番号を指定します。SRC_COPY_FALLBACK を指定しない場合、どのソースバックアップにもこの番号のコピーを持つ必要があります。デフォルトは 2 です。
TARGET_COPY	作成される 2 つ目の合成バックアップのコピー番号を指定します。TARGET_COPY 値は、1 つ目の合成バックアップのコピー番号 (1) とは異なる必要があります。デフォルトは 2 です。
COPY	COPY は、SRC_COPY および TARGET_COPY の代替指定です。 COPY を指定して、SRC_COPY と TARGET_COPY の両方を指定しない場合、COPY の値が使用されます。

エントリ	目的
TARGET_STU	2 目目のコピーの合成バックアップを書き込む、ストレージユニット名またはストレージユニットグループ名を指定します。オンデマンドのみと構成されていない、任意の利用可能なストレージユニットを使用できることを示すには、特別な識別子 __ANY__ を使用します。ANY の前後に 2 つの下線文字があることに注意してください。 TARGET_STU= __ANY__
FAIL_MODE	2 目目の合成バックアップは、1 目目のコピーの作成中にエラーが発生しなかった場合に 1 目目のコピーの合成バックアップの直後に作成されます。2 目目のコピー中にエラーが発生した場合、FAIL_MODE 値は、1 目目のコピージョブとイメージのその後の処理を指定します。 次のいずれかを指定します。 ■ FAIL_MODE=ALL ALL は、2 目目のコピーが失敗した場合に、1 目目のコピーとそのジョブも失敗することを示します。(デフォルト) ■ FAIL_MODE=ONE ONE は、2 目目のコピーが失敗した場合でも、1 目目のコピージョブには影響しないことを示します。
ENABLED	2 目目のコピーの作成を有効と無効のどちらにするかを指定します。このエントリは機能をオンにします。 次のいずれかを指定します。 ■ ENABLED=YES 2 目目のコピーの作成が有効になります。(デフォルト) ■ ENABLED=NO 2 目目のコピーの作成が無効になります。
SRC_COPY_FALLBACK	SRC_COPY または COPY で指定した番号のコピーが存在しない場合、合成バックアップでプライマリバックアップを使用することを指定します。 有効な値は、次の 1 つだけです。 SRC_COPY_FALLBACK=PRIMARY
VOLUME_POOL	テープメディアのボリュームプールを指定します (使用されている場合)。ボリュームプールを指定しない場合、NetBackup はポリシーで指定されているボリュームプールを使用します。ボリュームプールをディスクに関して入力すると、このエントリは無視されます。

複数コピー合成バックアップの構成の例

次の複数コピー合成の構成例では、デフォルト値を利用して 2 目目の合成コピーを作成しています。

TARGET_STU=disk_stu

デフォルトのソースのコピー 2、およびデフォルトのターゲットのコピー 2 が使用されます。この例では、2 つ目のコピーのターゲットをテープライブラリ (tape_stu) にしています。この構成では、ターゲットコピーに対してボリュームプール (Synthetics) を指定しています。

この複数コピー合成バックアップのコピー番号は、コピー 3 です。SOURCE_COPY_FALLBACK は、コピー 3 が使用できない場合に、プライマリコピーを使用してコピー 3 を作成できることを示しています。

コピー 3 が失敗した場合は、コピー 3 のみが失敗し、プライマリコピーのジョブは失敗しません。

```
TARGET_STU=tape_stu
VOLUME_POOL=Synthetics
SOURCE_COPY_FALLBACK=PRIMARY
COPY=3
ENABLED=YES
FAIL_MODE=ONE
```

最適化された合成バックアップ

Data Protection Optimization Option のライセンスを使う NetBackup 環境では、最適化された合成バックアップ方式から利点を得ることができます。Ref. content first appears in Admin Guide 7.0. key 最適化された合成バックアップは、OpenStorage API の機能を利用します。

この方式はメディアサーバーからストレージサーバーへの呼び出しを使用して、合成イメージを構築します。メディアサーバーは、どの完全および増分イメージを使用して合成バックアップを作成するかをストレージサーバーに通知します。次に、ストレージサーバーはストレージサーバー上で直接合成イメージを構築 (または合成) して、ネットワークトラフィックを軽減します。

詳しくは、次のガイドを参照してください。

- 『NetBackup Deduplication ガイド』
- 『ディスクの NetBackup OpenStorage のソリューションガイド』

重複排除の最適化合成バックアップ

NetBackup Data Protection Optimization Option のライセンスを使う NetBackup 環境では、最適化合成バックアップ方式から利点を得ることができます。

この方式はバックアップサーバーからストレージサーバーへの呼び出しを使用して、合成イメージを構築します。バックアップサーバーは、どの完全および増分イメージを使用して合成バックアップを作成するかをストレージサーバーに通知します。次に、ストレージ

サーバーはストレージサーバー上で直接合成イメージを構築 (または合成) して、ネットワークトラフィックを軽減します。

詳しくは、次のガイドを参照してください。

- [『NetBackup Deduplication ガイド』](#)
- [『NetBackup ディスクの OpenStorage のソリューションガイド』](#)

NetBackup カタログの保護

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup カatalogについて](#)
- [NetBackup カatalogの構成要素](#)
- [カatalogバックアップ](#)
- [カatalogのリカバリ](#)
- [ディザスタリカバリ電子メールおよびディザスタリカバリファイル](#)
- [ディザスタリカバリパッケージ](#)
- [ディザスタリカバリ設定について](#)
- [ディザスタリカバリパッケージを暗号化するパスフレーズの設定](#)
- [カatalogのアーカイブとカatalogアーカイブからのリストア](#)
- [カatalog領域の要件の見積もり](#)

NetBackup カatalogについて

NetBackup カatalogは、NetBackup バックアップおよび構成の情報を含む内部データベースです。バックアップ情報には、バックアップされたファイルのレコード、およびファイルが格納されているメディアの情報が含まれます。また、カatalogには、メディアデバイスおよびストレージデバイスの情報も含まれます。

通常のバックアップを実行する前に、ディザスタリカバリのパスフレーズとカatalogバックアップを構成します。NetBackup では、ファイルのバックアップの場所を判断するためにカatalogの情報が必要です。カatalogが存在しない場合、NetBackup ではデータをリストアできません。

p.911 の「[ディザスタリカバリパッケージを暗号化するパスフレーズの設定](#)」を参照してください。

p.903 の「[カタログバックアップの構成](#)」を参照してください。

カタログの保護を強化するため、カタログをアーカイブすることを検討してください。

NetBackup カタログの構成要素

NetBackup カタログは NetBackup プライマリサーバー上に存在します。NetBackup カタログは次の形式のデータへのアクセスを管理、制御します。

- イメージのメタデータ (バックアップイメージとコピーについての情報)。
- バックアップコンテンツのデータ (バックアップ (.f ファイル) のフォルダ、ファイル、オブジェクトについての情報)。
- NetBackup バックアップポリシー。
- NetBackup ライセンスデータ。
- NetBackup エラーログ。
- クライアントデータベース。
- クラウド構成ファイル。

p.899 の「[クラウド構成ファイルのカタログバックアップについて](#)」を参照してください。

カタログの構成要素は次のとおりです。

- NetBackup は NetBackup データベース (NBDB) に情報を格納します。メタデータには、バックアップ済みのデータと、データの保存場所についての情報が含まれます。
p.895 の「[NetBackup データベースおよび構成ファイル](#)」を参照してください。
- イメージデータベース。
バックアップが実行されたデータに関する情報が含まれます。
p.897 の「[NetBackup イメージデータベースについて](#)」を参照してください。
- NetBackup 構成ファイル。
- KMS (Key Management Service) 構成ファイル
KMS の構成について詳しくは、『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。

NetBackup は、プライマリサーバーコンポーネントの位置に影響を受けやすくなっています。ネットワーク共有 (NFS など) で NetBackup の一部 (バイナリ、ログ、データベース、イメージ) を実行すると、通常操作のパフォーマンスにも影響することがあります。平均 I/O サービス時間が 20 ミリ秒未満であるかぎり、NetBackup は SAN または NAS ストレージに CIFS マウントすることができます。

また、NetBackup カタログのデータ整合性を確保するため、ストレージは特定の条件も満たす必要があります。

- ファイル書き込みの順序が保証されている必要があります。
 - 書き込み要求が発行されるとき、書き込みは物理ストレージに完了する必要があります。書き込み要求は、SAN または NAS が書き込みコールから戻るときにバッファリングされるだけであってはなりません。
- 詳しくは、次の記事を参照してください。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100023390>

NetBackup データベースおよび構成ファイル

NetBackup カタログバックアップには、次のように NetBackup データベースと構成ファイルが含まれます。

データベース

NetBackup データベースには、NBDB データベースと NetBackup 認可データベース (NBZDB) が含まれます。Bare Metal Restore がインストールされている場合 (オプションでライセンス付与)、BMRDB データベースも存在します。

これらのデータベースは次のディレクトリ内にあります。

```
install_path¥NetBackupDB¥data  
  
/usr/opensv/db/data/
```

これらのディレクトリには次のサブディレクトリが含まれます。

¥bmrdb¥ または /bmrdb/ (BMR がインストールされている場合)

¥nbazdb¥ または /nbazdb/ (NetBackup 認可)

¥nbdb¥ または /nbdb/ (NBDB データベースと EMM データベースの両方を含む)

構成ファイル

警告: 構成ファイルは編集しないでください。NetBackup は、これらのファイルを変更すると起動しない場合があります。

メモ: カタログバックアップ処理では、このデータが /usr/opensv/db/staging にコピーされ、そのコピーがバックアップされます。

次の構成ファイルが作成されます。

```
pgbouncer.ini  
pg_hba.conf  
pg_ident.conf  
postgresql.auto.conf  
postgresql.conf  
userlist.txt  
vxdbms.conf  
web.conf
```

ほとんどの構成ファイルは次のディレクトリ内にあります。

```
install_path¥NetBackupDB¥data¥instance  
  
/usr/opensv/db/data/instance
```

web.conf は次のディレクトリに作成されます。

```
/usr/opensv/var/global/wsl/config  
  
install_path¥NetBackup¥var¥global¥wsl¥config
```

Enterprise Media Manager (EMM) について

Enterprise Media Manager (EMM) は NetBackup のデバイスとメディアの情報を管理する NetBackup サービスです。Enterprise Media Manager は管理下の情報をプライマリサーバーに存在するデータベースに格納します。NetBackup Resource Broker は EMM にクエリーしてストレージユニット、ドライブ (ドライブパスを含む)、メディアを割り当てます。

EMM には次の情報が含まれています:

- デバイスの属性
- ロボットライブラリおよびスタンドアロンドライブの位置情報の属性
- NDMP の属性
- バーコード規則の属性
- ボリュームプールの属性
- テープの属性
- メディアの属性
- ストレージユニットの属性
- ストレージユニットグループの属性
- テープドライブが割り当てられたホスト

- メディアエラーおよびデバイスエラー
- ディスクプールおよびディスクボリュームの属性
- ストレージサーバーの属性
- ストレージサーバー、ディスクアレイ、NDMP ホストのログオンクレデンシャル
- ファイバートランスポートの属性

EMM によって、複数のサーバー間でドライブ、ロボットライブラリ、ストレージユニット、メディアおよびボリュームプールの一貫性が確実に保持されます。EMM には、複数のサーバー構成でデバイスを共有するすべてのメディアサーバーの情報が格納されます。

NetBackup のスケジュールコンポーネントは、EMM の情報を使用して、ジョブで使用するサーバー、ドライブパスおよびメディアを選択します。

NetBackup イメージデータベースについて

イメージデータベースには、NetBackup によってバックアップされた各クライアント (プライマリサーバーとすべてのメディアサーバーを含む) 用のサブディレクトリが含まれます。

イメージデータベースは次の場所にあります。

- Windows の場合: %Program Files%\Cohesity NetBackup\NetBackup\db\images
- UNIX の場合: /usr/opensv/netbackup/db/images

イメージデータベースは次のファイルを含んでいます。

イメージファイル	バックアップセットの概略情報のみを保存するファイル。
.lck ファイル	イメージの同時更新を避けるために使用します。
イメージ .f ファイル	各ファイルバックアップに関する詳しい情報を保存するために使用します。
db_marker.txt	NetBackup Database Manager の起動時に db ディレクトリへのアクセスが有効であることを確認するために使用します。このファイルは削除しないでください。

イメージデータベースは、NetBackup カタログで最大の領域を占めます。NetBackup カタログに必要な領域の約 99% を使用します。NetBackup カタログのほぼすべてのサブディレクトリのサイズが比較的小さいのに対して、%images (Windows) または /images (UNIX) は数百 GB にもなることがあります。プライマリサーバー上のイメージデータベースは、1 つのテープに格納できなくなるほどサイズが大きくなる場合があります。イメージデータベースの増加率は、クライアントの数、ポリシースケジュールおよびバックアップを行うデータの量によって異なります。

p.925 の「[カタログ領域の要件の見積もり](#)」を参照してください。

現在の場所に対してイメージカタログのサイズが大きくなりすぎた場合は、十分な領域が存在するファイルシステムまたはディスクパーティションにイメージカタログを移動することを検討します。

p.927 の「[イメージカタログの移動](#)」を参照してください。

カタログ変換ユーティリティ (cat_convert) を使用して、.f ファイルを判別できる形式に変換できます。

cat_convert コマンドについては、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

NetBackup イメージの .f ファイルについて

バイナリカタログには、1 つ以上のイメージ .f ファイルが含まれています。この種のファイルは、「files」ファイルとも呼ばれます。イメージ .f ファイルには各ファイルバックアップの詳細なバックアップ対象リストが格納されているため、大きくなる場合があります。通常、イメージ .f ファイルのサイズは 1 KB から 10 GB です。

メモ: インテリジェントカタログアーカイブ (ICA) を使用して、特定の保持期間やファイルサイズに基づいてカタログ .f ファイルの数を減らすことができます。

p.917 の「[インテリジェントカタログアーカイブ \(ICA\) を有効にして .f ファイルの数を減らす](#)」を参照してください。

ICA は、NetBackup 11.2 以降を実行し、MSDP または MSDP クラウドストレージを使用するサーバーにのみ適用されます。

.f ファイルは次の場所にあります。

Windows: `install_path\NetBackup\db\images\clientname\ctime`

UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/db/images/clientname/ctime/`

カタログに 1 つの .f ファイルが含まれるか、複数の .f ファイルが含まれるかは、ファイルレイアウトによって決定されます。NetBackup では、バイナリカタログのサイズに基づいて、ファイルレイアウトが自動的に構成されます。NetBackup では、単一ファイルレイアウトまたは複数ファイルレイアウトのいずれかが使用されます。

- イメージ .f ファイルの単一ファイルレイアウト

NetBackup では、カタログのファイル情報が 100 MB 未満である場合、この情報は 1 つのイメージ .f ファイルに格納されます。

NetBackup では、1 つのカタログバックアップのバックアップファイルのサイズが 100 MB 未満の場合、この情報は 1 つのイメージ .f ファイルに格納されます。イメージ .f ファイルは、常に 72 バイト以上 100 MB 未満です。

次に、単一ファイルレイアウトでの .f ファイルの UNIX の例を示します。

```
-rw----- 1 root other 979483 Aug 29 12:23 test_1030638194_FULL.f
```

- イメージ .f ファイルの複数ファイルレイアウト

1つのカタログバックアップのファイル情報のサイズが **100 MB** を上回った場合、この情報は複数の .f ファイルに格納されます。1つのメインイメージ .f ファイルと 9つの追加 .f ファイルです。

イメージ .f ファイルと追加 .f ファイルを切り離して catstore ディレクトリに格納することによって、カタログへの書き込み時のパフォーマンスが向上します。

メインイメージ .f ファイルは、常に **72** バイトです。次に、複数ファイルレイアウトでの .f ファイルの例を示します。

```
-rw- 1 root other 72 Aug 30 00:40 test_1030680524_INCR.f
-rw- 1 root other 804 Aug 30 00:08 catstore/test_1030680524_INCR.f-list
-rw- 1 root other 1489728 Aug 30 00:39 catstore/test_1030680524_INCR.f_imgDir0
-rw- 1 root other 0 Aug 30 00:40 catstore/test_1030680524_INCR.f_imgExtraObj0
-rw- 1 root other 1280176 Aug 30 00:39 catstore/test_1030680524_INCR.f_imgFile0
-rw- 1 root other 192 Aug 30 00:40 catstore/test_1030680524_INCR.f_imgHeader0
-rw- 1 root other 0 Aug 30 00:40 catstore/test_1030680524_INCR.f_imgNDMP0
-rw- 1 root other 9112680 Aug 30 00:39 catstore/test_1030680524_INCR.f_imgRecord0
-rw- 1 root other 2111864 Aug 30 00:39 catstore/test_1030680524_INCR.f_imgStrings0
-rw- 1 root other 11 Aug 30 00:40 catstore/test_1030680524_INCR.f_imgUserGroupNames0
```

クラウド構成ファイルのカタログバックアップについて

NetBackup のカタログバックアッププロセスの間に次のクラウド構成ファイルがバックアップされます。

中間測定データを含んでいる、meter ディレクトリのすべての .txt ファイル

- CloudInstance.xml
- cloudstore.conf
- libstspienencrypt.conf
- libstspimetering.conf
- libstspithrottling.conf
- libstspicloud_provider_name.conf

NetBackup がサポートするクラウドプロバイダに固有のすべての .conf ファイル

カタログバックアップのプロセス中にバックアップされるクラウド構成ファイルは次の場所にあります。

Windows の場合 `install_path¥Veritas¥NetBackup¥var¥global¥wmc¥cloud`

UNIX の場合 /usr/opensv/var/global/wmc/cloud

CloudProvider.xml と cacert.pem ファイルは次の場所にあります。

Windows の場合 <installed-path>%NetBackup%\var\global\cloud

UNIX の場合 /usr/opensv/var/global/cloud/

メモ: NetBackup カatalogバックアップのプロセスでは、cacert.pem ファイルのバックアップは作成されません。

この cacert.pem ファイルはクラウドプロバイダに固有のファイルです。このファイルは NetBackup インストールの一部としてインストールされます。このファイルには、NetBackup が使用する既知のパブリッククラウドベンダーの CA 証明書が含まれています。

カタログバックアップ

カタログは NetBackup 環境で非常に重要な役割を果たすため、通常のクライアントバックアップとは異なる特殊なバックアップ形式でカタログを保護します。カタログバックアップポリシーでは、カタログ固有のデータがバックアップされるとともに、ディザスタリカバリ情報が作成されます。カタログは、さまざまなメディアに格納できます。

カタログバックアップは、バックアップ処理が継続的に行われているアクティブな環境向けに設計されています。必要なすべてのカタログファイル、データベース (NBDB、NBAZDB、および BMRDB)、すべてのカタログ構成ファイルが含まれます。カタログバックアップは、通常のバックアップ処理が行われる間に実行できます。大きいカタログの増分バックアップを行うと、バックアップ時間を大幅に減らすことができます。

通常のバックアップを実行する前に、カタログバックアップを構成してください。NetBackup では、ファイルのバックアップの場所を判断するためにカタログの情報が重要です。カタログが存在しない場合、NetBackup ではデータをリストアできません。

p.903 の「[カタログバックアップの構成](#)」を参照してください。

カタログの保護を強化するため、カタログをアーカイブすることを検討してください。

カタログバックアップから、管理者はカタログの全体または一部をリカバリできます。(たとえば、データベースを構成ファイルから個別にリカバリできます。) カタログリカバリのシナリオと手順について詳しくは、『NetBackupトラブルシューティングガイド』を参照してください。

カタログバックアップ処理

カタログバックアップは、次のタスクを実行します。

- 継続的なクライアントバックアップの実行中にカタログをバックアップする。
- 完全または増分カタログバックアップを実行する。
- スケジュールカタログバックアップを実行する
- データベースをステージングディレクトリにコピーし、次にそのディレクトリをバックアップします。
- ディザスタリカバリパッケージを作成します。
- テープへのカタログバックアップには次の項目も含まれます。
 - 複数のテープにまたがるカタログバックアップを実行する。
 - カatalogテープのプールの柔軟に使用できる。
テープへのカタログバックアップでは、CatalogBackup ボリュームプールのメディアのみが使われます。
 - テープ上の既存のデータに追記する。
 - マルチストリーム設定に 4 を指定してオンラインカタログバックアップを実行すると、次の 7 つのジョブが生成されます。
 - 1 つの親ジョブ
 - リレーショナルデータベースステージング用の 1 つの子ジョブ
 - それらの表のバックアップ用の 1 つの子ジョブ
 - 構成データのバックアップ用の 1 つの子ジョブ
 - NetBackup イメージデータベース用の 3 つの子ジョブ子ジョブには実際のバックアップデータが含まれます。バックアップを複製、検証または期限切れにする際には、すべての子ジョブの存在を考慮してください。

カタログバックアップの構成方法について詳しくは、次のトピックを参照してください。

p.902 の「[NetBackup カatalogをバックアップするための前提条件](#)」を参照してください。

p.903 の「[カタログバックアップの構成](#)」を参照してください。

NetBackup カatalogバックアップを正常に行うための方針

カタログバックアップを正常に行うために次の方法を使ってください。

- カatalogバックアップは、この項で説明する方法で行ってください。NetBackup のすべての関連する動作のトラッキングを行い、カatalogファイル間の一貫性を確保できるのは、これらの方法だけです。
- カatalogのバックアップは頻繁に行ってください。カatalogバックアップファイルが失われると、最後のカatalogバックアップからディスククラッシュの発生時までに行った変更が失われます。

- カタログをディスクにバックアップする場合、必ずカタログファイルが存在するディスク以外のディスクにバックアップしてください。カタログを実際のカatalogが存在するディスクにバックアップしている場合にこのバックアップディスクに障害が発生すると、既存のカatalogとバックアップ中のCatalogの両方が失われます。Catalogのリカバリが非常に困難になります。また、ディスク領域がCatalogに対して十分であることを確認してください。空きのないディスクへのバックアップは失敗します。
- カatalogバックアップの所要時間を短縮するには、動的マルチストリームを使用します。ストリームの数が最適化され、Catalogバックアップ全体の所要時間を短縮できます。

メモ: Catalogバックアップをテープで行う場合は、バックアップが完了した時点でテープを取り外す必要があります。そうしないと、通常のバックアップが実行されません。

NetBackup では、Catalogバックアップと通常のバックアップは同じテープに格納されません。

NetBackup カatalogをバックアップするための前提条件

Catalogバックアップには次の前提条件があります。

- ディザスタリカバリパッケージのパスフレーズを設定します。
p.909 の「[ディザスタリカバリパッケージ](#)」を参照してください。
p.911 の「[ディザスタリカバリパッケージを暗号化するパスフレーズの設定](#)」を参照してください。
パスフレーズが設定されていない場合、Catalogバックアップは失敗します。
- Web UI の[ホストプロパティ (Host Properties)]の[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]設定、ポリシー属性 UI の[ポリシーごとにジョブ数を制限する (Limit jobs per policy)]設定、およびストレージユニット UI の[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]設定は、Catalogバックアップに必要な最大ストリーム数以上の値に構成する必要があります。
- プライマリサーバーとメディアサーバーの両方が同じ NetBackup バージョンである必要があります。
バージョン混在のサポートについて詳しくは、『[NetBackup インストールガイド](#)』を参照してください。
- Catalogバックアップは CatalogBackup ボリュームプールのメディアにのみ書き込みます。ストレージデバイスを構成済みで、CatalogBackup ボリュームプールに利用可能なメディアが存在している必要があります。
- 特権のないユーザー (またはサービスユーザー) アカウントを使用するようにプライマリサーバーが構成されている場合は、次の要件があります。この種類のアカウントについて詳しくは、『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。

- サービスユーザーアカウントには、DR (ディザスタリカバリ) パスに対する書き込みアクセス権限が必要です。
- サービスアカウントのクレデンシヤルを使用してカタログポリシーを構成します。(これは[ディザスタリカバリ (Disaster recovery)]タブで設定できます。)
- DR パスへのアクセス権を持つアカウントであっても、別のユーザーアカウントを使うことはできません。NetBackup 管理者は、コンテキストを別のユーザーに切り替えることなく、サービスユーザーが任意のネットワーク共有に書き込みを行えることを確認する必要があります。
Windows では、DR パスがネットワーク共有の場合、この要件は適用されません。

カタログバックアップの構成

NetBackup カタログを保護するには、カタログバックアップに固有のバックアップポリシーを作成します。

Windows クラスタ環境でカタログバックアップを構成する方法については、『[NetBackup プライマリサーバーのクラスタ化管理者ガイド](#)』を参照してください。

カタログバックアップを構成するには

- 1 カatalogバックアップを実行するための前提条件を確認します。
p.902 の「[NetBackup カatalogをバックアップするための前提条件](#)」を参照してください。
- 2 NetBackup Web UI にサインインします。
- 3 [保護 (Protection)]、[ポリシー (Policies)]の順にクリックします。[追加 (Add)]をクリックします。
- 4 [属性 (Attributes)]タブで、次のエントリを設定します。
 - 一意のポリシー名を入力します。
p.1096 の「[NetBackup 命名規則](#)」を参照してください。
 - [ポリシー形式 (Policy type)]に[NBU-Catalog]を選択します。
このポリシーを使用して、カタログバックアップジョブの動的ストリームを構成します。
 - ポリシーストレージ (Policy storage)
ディスクストレージユニットの場合、[最大並列実行ジョブ数 (Maximum Concurrent Jobs)]ストレージユニット設定値を増やし、通常のバックアップ処理中でもカタログバックアップが確実に続行されるようにします。
ストレージユニットをカタログバックアップおよびカタログ以外のバックアップに使用する場合、カタログポリシーで構成されている[最大ストリーム数 (Maximum number of streams)]設定に応じて、[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]設定を大きくします。この設定を大きくすることにより、通常のバックアップ処理の実行中でも、カタログバックアップが確実に実行されます。

p.582 の「[\[最大並列実行ジョブ数 \(Maximum concurrent jobs\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。

メモ: インストールにさまざまなバージョンのメディアサーバーが含まれている場合は、宛先のポリシーストレージに対して特定のメディアサーバーを選択できません。[任意 (Any Available)]は選択しません。

- ポリシーボリュームプール (Policy volume pool)
デフォルトで NBU-Catalog ポリシー形式に対してのみ選択されている CatalogBackup ボリュームプールが、NetBackup によって自動的に作成されます。
 - 他のポリシー属性の説明については、次の項を参照してください。
p.687 の「[ポリシーの\[属性 \(Attributes\)\]タブ](#)」を参照してください。
- 5** [スケジュール (Schedules)]タブで、カタログバックアップに必要なスケジュールを構成します。
- p.905 の「[カタログバックアップと他のバックアップの同時実行](#)」を参照してください。
- p.906 の「[カタログポリシースケジュールの注意事項](#)」を参照してください。
- p.759 の「[スケジュールの\[属性 \(Attributes\)\]タブ](#)」を参照してください。
- 6** [ディザスタリカバリ (Disaster Recovery)]タブをクリックします。
- このタブには、ディザスタリカバリに不可欠なデータの場所に関する次の情報が表示されます。
- 各ディザスタリカバリイメージファイルを保存できるディスク上のパスを指定します。必要に応じて、[ネットワーク共有のユーザー名 (Network share username)] と [ネットワーク共有パスワード (Network share password)] を入力します。
ネットワーク共有またはリムーバブルデバイスを使用することをお勧めします。ディザスタリカバリ情報をローカルコンピュータに保存しないでください。
- 7** [ディザスタリカバリ電子メールを送信 (Send disaster recovery email)]を選択し、NetBackup 管理者の 1 つ以上の電子メールアドレスを入力します (カンマ区切り)。
- 各カタログバックアップの後、NetBackup では、ここに示した管理者にディザスタリカバリ情報が送信されます。
- ご使用の環境で電子メール通知が有効になっていることを確認します。
- p.908 の「[ディザスタリカバリ電子メールおよびディザスタリカバリファイル](#)」を参照してください。

- 8 重要なデータをバックアップするポリシーを[クリティカルポリシー (Critical policies)]リストに追加します。

これらは、障害発生時にサイトをリカバリするために不可欠であると考えられるポリシーです。ディザスタリカバリレポートには、重要なポリシーのバックアップに使用されるメディアのリストが表示されます。レポートには、増分および完全バックアップスケジュール専用のメディアが表示されます。したがって、クリティカルポリシーでは、増分または完全バックアップスケジュールだけを使う必要があります。

- 9 [作成 (Create)]をクリックします。

NetBackup カタログの手動バックアップ

カタログバックアップは、通常、NBU-Catalog ポリシーごとに自動的に実行されます。カタログバックアップを手動で開始することもできます。

手動カタログバックアップは、次の状況で効果的です。

- 緊急バックアップを実行する場合。たとえば、システムの移行がスケジュールされており、次のスケジュールカタログバックアップまで待てない場合です。
- 1つのスタンドアロンドライブのみが存在してそのスタンドアロンドライブがカタログバックアップに使われる場合。この状況では、自動バックアップは効率的ではありません。カタログバックアップ用のテープは、各カタログバックアップを行う前に挿入し、バックアップ完了時に取り外す必要があるためです。(NetBackup ではカタログバックアップと通常のバックアップが同じテープに格納されないため、テープ交換が必要です。)

手動カタログバックアップを実行する方法

- 1 NetBackup Web UI にサインインします。
- 2 [保護 (Protection)]、[ポリシー (Policies)]の順にクリックします。
- 3 実行するカタログバックアップポリシーを選択します。
- 4 [手動バックアップ (Manual backup)]をクリックします。
p.867 の「[手動バックアップの実行](#)」を参照してください。
- 5 (オプション) 使用するスケジュールを選択します。
- 6 [バックアップ (Backup)]ボタンをクリックします。

カタログバックアップと他のバックアップの同時実行

カタログバックアップをプライマリサーバーの他のバックアップ形式と同時に実行されるようにスケジュールできます。

通常のバックアップ処理の実行中でもカタログバックアップが確実に実行されるように、次の調整を行います。

- [1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]を、プライマリサーバーのカタログポリシーに構成されている[最大ストリーム数 (Maximum number of streams)]より大きい値に設定します。たとえば、[最大ストリーム数 (Maximum number of streams)]が 4 に設定されている場合、[1 クライアントあたりの最大ジョブ数 (Maximum jobs per client)]は 5 以上の値に設定する必要があります。
p.115 の「[\[グローバル属性 \(Global attributes\)\]プロパティ](#)」を参照してください。
 - カatalogポリシーで構成されている[最大ストリーム数 (Maximum number of streams)]設定に応じて、[最大並列実行ジョブ数 (Maximum concurrent jobs)]設定を大きくします。この設定を大きくすることにより、通常のバックアップ処理の実行中でも、カタログバックアップが確実に実行されます。
p.582 の「[\[最大並列実行ジョブ数 \(Maximum concurrent jobs\)\]ストレージユニット設定](#)」を参照してください。
- p.907 の「[カタログバックアップが成功したか否かの判断](#)」を参照してください。
- p.901 の「[NetBackup カatalogバックアップを正常に行うための方針](#)」を参照してください。

カタログポリシースケジュールの注意事項

カタログポリシーのスケジュールと連携させる場合は次を考慮してください。

- カatalogバックアップが定期的に行われるようにスケジュールを設定します。定期的に行うバックアップを実行しないと、カタログを含むディスクに問題が発生した場合、通常のバックアップが失われる危険性があります。
- 次のバックアップ形式がサポートされます。
 - 完全
 - 差分増分
この増分スケジュールは、完全スケジュールに基づきます。
 - 累積増分
- 複数のスケジュールが同時に実行すべき状態になった場合、実行間隔が最も長いスケジュールが実行されます。
- 1 つのカタログバックアップポリシーはセッションに基づく複数の増分スケジュールを含む場合があります。
 - 1 つのスケジュールが累積で、その他のスケジュールが差分の場合、バックアップセッションが終了すると、累積スケジュールが実行されます。
 - すべてのスケジュールが累積または差分の場合は、バックアップセッションが終了すると、最初に検出されたスケジュールが実行されます。
- 同じポリシーのカタログバックアップジョブが実行中である場合、キューに投入されたスケジュールカタログバックアップはスキップされます。

- セッションの終了とは、実行中のジョブが存在しないことを意味します。(これには、カタログバックアップジョブは含まれません。)
- 同じポリシーのカタログバックアップジョブが実行中であっても、Vault カatalogバックアップは、Vault から起動されると常に実行されます。

UNIX での増分カタログバックアップと標準のバックアップの相互作用

カタログバックアップポリシーには完全カタログバックアップと増分カタログバックアップの両方を含めることができます。ただし、増分カタログバックアップは標準の増分バックアップとは異なります。カタログバックアップでは、mtime と ctime の両方を使用して変更されたデータを識別します。標準の増分バックアップでは、mtime のみを使用して変更されたデータを識別します。

このような違いがあるため、/usr/opensv/netbackup/db/images/ ディレクトリを含む標準ポリシー形式のバックアップを実行すると、増分カタログバックアップ時間が長くなる可能性があります。標準のバックアップが実行されると、ファイルのアクセス時刻 (atime) がリセットされます。つまり、リセットによってファイルとディレクトリの ctime が変更されます。増分カタログバックアップが動作すれば、ctime が変わっていることが確認され、ファイルをバックアップします。バックアップはファイルが最新のカタログバックアップから変わらないことがあるので不必要なことがあります。

カタログバックアップ時における追加処理を回避するには、次の方法をお勧めします。

増分カタログバックアップが構成されている場合には、標準のバックアップから NetBackup の /usr/opensv/netbackup/db/images/ ディレクトリを除外します。

このディレクトリを除外するには、プライマリサーバー上に /usr/opensv/netbackup/exclude_list ファイルを作成します。

カタログバックアップが成功したか否かの判断

レポートユーティリティから表示可能な[すべてのログエントリ (All Log Entries)]レポート、[問題 (Problems)]レポートおよび[メディアのログ (Media Logs)]レポートに、NetBackup カatalogバックアップの情報が表示されます。[すべてのログエントリ (All log entries)]レポートは NetBackup Web UI でも利用できます。

電子メールメッセージは、カタログバックアップの[ディザスタリカバリ (Disaster recovery)]設定で指定されたアドレスに送信されます。

mail_dr_info.cmd (Windows の場合) または mail_dr_info スクリプト (UNIX の場合) でこの電子メールを構成します。

このスクリプトのセットアップについて詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 2』を参照してください。

カタログのリカバリ

カタログリカバリについて詳しくは、『[NetBackup トラブルシューティングガイド](#)』を参照してください。

ディザスタリカバリ電子メールおよびディザスタリカバリファイル

カタログバックアップポリシーで、電子メールアドレスにディザスタリカバリ情報を送るよう
にポリシーを構成できます。この情報は[ディザスタリカバリ (Disaster recovery)]タブに
表示されます。

送信されるディザスタリカバリ電子メールおよびその添付ファイルには、次のような、正常
にカタログリカバリするための重要な情報が含まれます。

- カatalogバックアップを格納するメディアのリスト
- クリティカルポリシーのリスト
- カatalogのリカバリ手順
- イメージファイル (添付ファイル)
カタログバックアップポリシーに完全バックアップと増分バックアップの両方が含まれ
る場合、添付されるイメージファイルは、完全カタログバックアップまたは増分カタログ
バックアップのいずれかです。

ウィザードパネルで[NetBackup カatalog全体を自動的にリカバリする。(Automatically
recover the entire NetBackup catalog.)] オプションを選択した場合、増分カタログ
バックアップからリカバリを行うと、カatalog全体のリカバリが実行されます。これは、増
分カタログバックアップでは、最後の完全バックアップの情報が参照されるためです。
最後の完全カタログバックアップをリカバリしてから、後続の増分バックアップをリカバ
リする必要はありません。

- 動的マルチストリームバックアップの場合、電子メールで送信されるディザスタリカバ
リファイルは、すべてのストリームのイメージファイルの統合です。

ディザスタリカバリファイル名は、ストリーム 1 のイメージファイル名に接尾辞 _DMS を
付けたものです。

ファイルの内容は次のようになります (必ずしも示されたストリーム番号の順番である
とは限りません)。

```
====NBCATALOGDRDELIMITERSTART: ストリーム 1 のイメージファイル名  
=====
```

ストリーム 1 のイメージファイルの内容

```
====NBCATALOGDRDELIMITEREND: ストリーム 1 のイメージファイル名=====
```

```
====NBCATALOGDRDELIMITERSTART: ストリーム 2 のイメージファイル名  
=====
```


ストリーム 2 のイメージファイルの内容

====NBCATALOGDRDELIMITEREND: ストリーム 2 のイメージファイル名====

...

====NBCATALOGDRDELIMITERSTART: ストリーム *n* のイメージファイル名

====

ストリーム *n* のイメージファイルの内容

====NBCATALOGDRDELIMITEREND: ストリーム *n* のイメージファイル名====

- 添付ファイルとしてのディザスタリカバリパッケージ (.drpkg ファイル)

メモ: ディザスタリカバリの電子メールの設定後も電子メール経由でディザスタリカバリパッケージを受信できない場合は、次を確認します。

電子メール交換サーバーで添付ファイルのサイズがディザスタリカバリパッケージサイズ以上に設定されている。パッケージのサイズ (.drpkg ファイルのサイズ) は、カタログバックアップポリシーで指定したディザスタリカバリファイルの場所で確認できます。

環境内のファイアウォールとウイルス対策ソフトウェアが、.drpkg 拡張子 (ディザスタリカバリパッケージファイルの拡張子) を持つファイルを許可します。

NetBackup は、次のイベント発生時にディザスタリカバリファイルを電子メールで送信します。

- カタログがバックアップされた場合。
- カタログバックアップが重複している、または複製された場合。
- プライマリカタログバックアップまたはコピーの期限が自動的に切れた、または手動で期限切れにした場合。

Windows の場合: mail_dr_info.cmd ディレクトリに

install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin スクリプトを配置することによって、ディザスタリカバリ電子メールの処理をカスタマイズできます。このスクリプトは、nbmail.cmd スクリプトに類似しています。使用方法については、nbmail.cmd スクリプト内のコメントを参照してください。

ディザスタリカバリパッケージ

セキュリティ向上のため、各カタログがバックアップされる際にディザスタリカバリパッケージが作成されます。ディザスタリカバリパッケージファイルの拡張子は .drpkg です。

ディザスタリカバリ (DR) パッケージには、プライマリサーバーホストの識別情報が保存されます。このパッケージは、災害発生後にプライマリサーバーの識別情報を NetBackup

に再取得させるために必要です。ホストの識別情報をリカバリすると、カタログリカバリを実行できます。

ディザスタリカバリパッケージには、次の情報が含まれます。

- プライマリサーバー証明書と NetBackup 認証局 (CA) 証明書の、NetBackup CA が署名した証明書と秘密鍵
- ドメイン内のホストについての情報
- セキュリティ設定
- 外部 CA が署名した証明書
外部 CA が署名した Windows 証明書ストアからの証明書 (該当する場合)
- 外部 CA が署名した証明書に固有の NetBackup 構成オプション
- キーマネージメントサービス (KMS) 構成

メモ: デフォルトでは、KMS 構成はカタログバックアップ時にバックアップされません。カタログバックアップ時に、KMS 構成をディザスタリカバリパッケージの一部として含めるには、KMS_CONFIG_IN_CATALOG_BKUP 構成オプションを 1 に設定します。

メモ: カatalogバックアップが成功するようにディザスタリカバリパッケージのパスフレーズを設定する必要があります。

ディザスタリカバリ設定について

セキュリティ向上のため、各カタログがバックアップされる際にディザスタリカバリパッケージが作成されます。

p.909 の「[ディザスタリカバリパッケージ](#)」を参照してください。

ディザスタリカバリパッケージは、各カタログのバックアップの際に作成され、ユーザーが設定するパスフレーズで暗号化されます。災害発生後に NetBackup をプライマリサーバーにディザスタリカバリモードでインストールする際は、この暗号化パスフレーズを入力する必要があります。

[ディザスタリカバリ (Disaster recovery)] タブには以下のオプションが表示されます。

表 22-1 ディザスタリカバリの設定

設定	説明
パスフレーズの入力 (Enter passphrase)	ディザスタリカバリパッケージを暗号化するパスフレーズを入力します。 - デフォルトでは、パスフレーズを 8 ～ 1024 文字で指定する必要があります。 <code>nbseccmd -setpassphraseconstraints</code> コマンドオプションを使用して、パスフレーズの制約を設定できます。 - 既存のパスフレーズと新しいパスフレーズは異なるものにする必要があります。 - パスフレーズでサポートされる文字は、空白、大文字 (A-Z)、小文字 (a-z)、数字 (0-9)、および特殊文字のみです。特殊文字には、<code>~ ! @ # \$ % ^ & * () _ + - = ` { } [ ]   : ; ' , . / ? < > " ' `</code> が含まれます。
パスフレーズの確認 (Confirm passphrase)	確認のため、パスフレーズを再入力します。

注意: パスフレーズにサポート対象の文字のみが含まれていることを確認します。サポートされていない文字を入力した場合、ディザスタリカバリパッケージのリストア中に問題が発生する可能性があります。パスフレーズは検証されないことがあり、ディザスタリカバリパッケージをリストアできなくなる可能性があります。

ディザスタリカバリパッケージの暗号化パスフレーズを変更する際の注意

- パスフレーズ変更以降のディザスタリカバリパッケージは、ユーザーが設定した新しいパスフレーズで暗号化されます。
- パスフレーズを変更しても、以前のディザスタリカバリのパッケージでは変更されません。新しいディザスタリカバリパッケージのみが新しいパスフレーズに関連付けられます。
- 災害発生後に NetBackup をプライマリサーバーにディザスタリカバリモードでインストールする際に入力するパスフレーズは、プライマリサーバーのホスト ID のリカバリ元であるディザスタリカバリパッケージのパスフレーズに対応する必要があります。

ディザスタリカバリパッケージを暗号化するパスフレーズの設定

ディザスタリカバリパッケージは、各カタログのバックアップの際に作成され、ユーザーが設定するパスフレーズで暗号化されます。

p.909 の「[ディザスタリカバリパッケージ](#)」を参照してください。

ディザスタリカバリパッケージの暗号化パスフレーズの設定および災害後の使用のワークフロー

災害リカバリパッケージのリストアについて理解するには、次のワークフローを確認します。

1. ディザスタリカバリパッケージの暗号化パスフレーズを設定します。
2. カタログポリシーを作成します。

p.903 の「[カタログバックアップの構成](#)」を参照してください。

次のシナリオを検討します。

- 以前にパスフレーズを設定したことがない場合、**NetBackup** で新しいカタログバックアップポリシーを構成することはできません。
- カタログバックアップポリシーを以前のバージョンからアップグレードする場合、パスフレーズを設定するまでカタログのバックアップは失敗します。

メモ: パスフレーズが設定されていても、カタログバックアップが失敗し、状態コード 144 が表示される場合があります。この問題は、パスフレーズが壊れている可能性があるために発生します。この問題を解決するには、パスフレーズをリセットする必要があります。

3. 災害発生後に **NetBackup** をプライマリサーバーにディザスタリカバリモードでインストールする際は、以前に設定した暗号化パスフレーズを入力します。インストール中、**NetBackup** は、このパスフレーズを使用してディザスタリカバリパッケージを復号し、プライマリサーバーの識別情報を再取得します。

注意: 災害発生後にプライマリサーバーに **NetBackup** をインストールするときに適切なパスフレーズを指定できない場合は、特別な処理が必要です。すべての **NetBackup** ホストでのセキュリティ証明書の再配備が必要になる場合があります。詳しくは、次の記事を参照してください。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100033743>

4. プライマリサーバーの識別情報が再取得されると、プライマリサーバーとメディアサーバーの間で安全な通信が確立し、カタログリカバリを実行できるようになります。
5. カタログリカバリが正常に完了したら、ディザスタリカバリパッケージのパスフレーズを再度設定する必要があります。これは、パスフレーズがカタログリカバリ中にリカバリされないためです。パスフレーズを設定しないかぎり、新しい **NetBackup** インスタンスに構成したカタログバックアップは失敗し続けます。

パスフレーズの設定または変更

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 右上で、[設定 (Settings)]、[グローバルセキュリティ (Global security)]の順に選択します。
- 3 [ディザスタリカバリ (Disaster recovery)]を選択します。

p.910 の「[ディザスタリカバリ設定について](#)」を参照してください。

- 4 パスフレーズを入力して確認します。

次のパスワードのルールを確認してください。

- 既存のパスフレーズと新しいパスフレーズは異なるものにする必要があります。
- デフォルトでは、パスフレーズを 8 ～ 1024 文字で指定する必要があります。
nbseccmd -setpassphraseconstraints コマンドオプションを使用して、パスフレーズの制約を設定できます。
- パスフレーズでサポートされる文字は、空白、大文字 (A-Z)、小文字 (a-z)、数字 (0-9)、および特殊文字のみです。特殊文字には、~ ! @ # \$ % ^ & * () _ + - = ` { } [] | : ; ' , . / ? < > " が含まれます。

注意: サポートされていない文字を入力した場合、ディザスタリカバリパッケージのリストア中に問題が発生する可能性があります。パスフレーズは検証されないことがあり、ディザスタリカバリパッケージをリストアできなくなる可能性があります。

- 5 [保存 (Save)]を選択します。パスフレーズがすでに設定されている場合、既存のパスフレーズは上書きされます

コマンドラインインターフェースを使用して、パスフレーズを設定または変更するには

- 1 このタスクを実行するためには、NetBackup 管理者が NetBackup Web 管理サービスにログインしている必要があります。次のコマンドを使ってログオンします。

```
bpnbat -login -loginType WEB
```

- 2 次のコマンドを実行して、ディザスタリカバリパッケージを暗号化するパスフレーズを設定します。

```
nbseccmd -drpkgpassphrase
```

- 3 パスフレーズを入力します。

パスフレーズがすでに存在する場合、既存のパスフレーズは上書きされます。

カタログのアーカイブとカタログアーカイブからのリストア

カタログアーカイブは、管理者が大量のカタログデータが原因で発生する問題を解決するのに有効です。大規模なカタログが存在する場合、必要なディスク容量が増大し、バックアップに時間がかかることがあります。

カタログアーカイブでは、大規模なカタログの .f ファイルをセカンダリストレージに移動することによって、オンラインカタログデータのサイズを縮小します。カタログバックアップを定期的にスケジュールして **NetBackup** を引き続き管理する必要がありますが、大量のオンラインカタログデータが存在しなくなるため、バックアップにかかる時間が短縮されます。

インテリジェントカタログアーカイブ (ICA) を使用して、セカンダリストレージからカタログ .f ファイルの数を減らすこともできます。ICA を有効にすると、指定した保持期間の値より古いカタログ .f ファイルがカタログディスクから削除されます。サイズの値を指定して、その値以上のサイズのカタログ .f ファイルをカタログディスクから削除することもできます。

p.917 の「[インテリジェントカタログアーカイブ \(ICA\) を有効にして .f ファイルの数を減らす](#)」を参照してください。

カタログアーカイブは、カタログファイルシステムの空きがないときにディスク容量を再利用する方法として使用しないでください。その状況では、カタログの圧縮を調査するか、ディスク容量を追加してファイルシステムを拡張します。

カタログアーカイブの追加の注意事項については、次の項を参照してください。

p.924 の「[カタログアーカイブの注意事項](#)」を参照してください。

カタログをアーカイブしてカタログアーカイブからリストアする方法

- 1 `bpcatlist` を実行してどのイメージをアーカイブできるかを判断します。

`bpcatlist` だけを実行した場合、カタログイメージは変更されません。`bpcatlist` の出力がパイプを介して `bpcataarc` に渡されるときにのみ、`.f` ファイルがバックアップされ、出力がパイプを介して `bpcatrm` に渡されるときにのみ、`.f` ファイルがディスクから削除されます。

どのイメージがアーカイブできる `.f` ファイルをディスク上に持つかを判断するには、次のコマンドを実行します。`catarcid` 列は `.f` ファイルが現在バックアップされていないこと (0) を示すか、イメージのバックアップの `catarcid` を示します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpcatlist -online
```

どのイメージが以前にアーカイブされてディスクから削除されたかを判断するには、次のコマンドを実行します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpcatlist -offline
```

カタログコマンドについては次の項で詳しく説明されています。

p.922 の「[カタログアーカイブコマンド](#)」を参照してください。

メモ: カatalogアーカイブが以前に実行されていない場合、このコマンドは `No entity was found` を返します。

たとえば、2017 年 1 月 1 日より前の特定のクライアントのイメージをすべて表示するには、次のコマンドを実行します。

```
bpcatlist -client name -before Jan 1 2017
```

`bpcatlist` コマンドのヘルプを表示するには、このコマンドを実行します。

```
bpcatlist -help
```

`bpcatlist` の出力にアーカイブまたは削除を行うすべてのイメージが正しく表示されたら、別のコマンドを追加できます。

2 カatalogアーカイブの実行。

カタログアーカイブを実行する前に、**catarc** という名前のバックアップポリシーを作成します。このポリシーは **bpcatarc** コマンドが正常にイメージを処理するために必要です。ポリシーの名前は、スケジュールの目的がカタログアーカイブであることを示しています。

catarc ポリシーの構成について詳しくは、次の項を参照してください。

p.921 の「[カタログアーカイブポリシーの作成](#)」を参照してください。

カタログアーカイブを実行するには、最初に **bpcatlist** コマンドを手順 1 で使用したのと同じオプションで実行し、イメージを表示します。次に、出力を **bpcatarc** と **bpcatrm** にパイプを介して渡します。

```
bpcatlist -client all -before Jan 1 2017 | bpcatarc | bpcatrm
```

新しいジョブがアクティビティモニターに表示されます。コマンドはバックアップが完了するまで待機し、その後、プロンプトを戻します。このコマンドはカタログアーカイブが失敗した場合にのみエラーを報告します。成功した場合には、プロンプトに戻ります。

アクティビティモニターの[ジョブの詳細 (Job Details)]の[ファイルリスト: (File List:)]セクションには、処理されたイメージファイルのリストが表示されます。ジョブの完了状態が 0 (ゼロ) の場合、**bpcatrm** コマンドによって、対応する **.f** ファイルが削除されます。ジョブが失敗した場合、カタログ **.f** ファイルは削除されません。

bpcatlist が **bpcatarc** にパイプを介して渡されていて、結果が **bpcatrm** にパイプを介して渡されていない場合、バックアップは実行されますが、**.f** ファイルはディスクから削除されません。同じ **bpcatlist** コマンドを再実行し、**bpcatrm** にパイプを介して渡すことで **.f** ファイルを削除できます。

3 カatalogアーカイブのリストア。

カタログアーカイブをリストアするには、まず **bpcatlist** コマンドを実行して、リストアを行う必要があるファイルを一覧表示します。**bpcatlist** によってリストア対象のファイルが適切に表示されたら、**bpcatres** コマンドを実行して、ファイルを実際にリストアします。

手順 2 から、すべてのアーカイブファイルをリストアするには、次のコマンドを実行します。

```
bpcatlist -client all -before Jan 1 2017 | bpcatres
```

このコマンドを実行すると、2017 年 1 月 1 日より前のすべてのカタログアーカイブファイルがリストアされます。

インテリジェントカタログアーカイブ (ICA) を有効にして .f ファイルの数を減らす

メモ: インテリジェントカタログアーカイブ (ICA) は、NetBackup 11.2 以降を実行し、MSDP ストレージを使用するサーバーにのみ適用されます。

インテリジェントカタログアーカイブ (ICA) を使用して、特定の保持期間やファイルサイズに基づいてカタログ .f ファイルの数を減らすことができます。ICA を有効にすると、指定した保持期間の値より古いカタログ .f ファイルがカタログディスクから削除されます。ファイルサイズの値を指定して、そのサイズ以上のカタログ .f ファイルをカタログディスクから削除することもできます。

ICA の主な利点は、以下の必要条件を満たした場合に、バックアップが必要な .f ファイルの数を減らすことで、カタログバックアップの時間を短縮できることです。

- バックアップイメージが、構成された ICA の保持期間より古いこと
- .f ファイルのサイズが、構成された ICA の最小サイズ以上であること
- バックアップイメージの少なくとも 1 つのコピーが MSDP ストレージに格納され、1 つ以上の TIR (True Image Restore) フラグメントがあること
- イメージカタログの .f ファイルが、過去 24 時間以内に下げられていないこと
- バックアップイメージが、完了した SLP からのイメージであるか、SLP によって管理されていないバックアップからのイメージであること
- バックアップイメージがカタログバックアップからのイメージではないこと
- イメージカタログがアーカイブされていないこと

ICA が有効になると、次の動作を確認できます。

- ICA を有効にした後の初期イメージクリーンアップは、通常より時間が長くなる場合があります。
- 関連する .f ファイルがインテリジェントアーカイブに含まれている場合、カタログバックアップが高速になります。
- 関連する .f ファイルがインテリジェントアーカイブに含まれている場合、参照およびリストア機能にかかる時間が長くなります。

カタログ .f ファイルのリストアを行うために、追加の操作は必要ありません。カタログ .f ファイルは、次のような場合に自動的にイメージからリストアされます。

- ICA イメージが参照された場合。
- ICA の対象となるコピーが ICA イメージから期限切れになった場合。カタログ .f ファイルをリストアすることで、そのイメージの残りのコピーに確実にアクセスして使用できるようになります。

- ICA の対象となるイメージが見つかったが、そのカタログ .f ファイルがない場合。
.f ファイルについての詳しい情報を参照できます。

p.898 の「[NetBackup イメージの .f ファイルについて](#)」を参照してください。

インテリジェントカタログアーカイブ (ICA) を有効にして保持とファイルサイズの値を指定するには

- 1 プライマリサーバーで次のコマンドを実行します。

```
bpconfig -ica_retention seconds
```

seconds の値が 1 から 2147472000 の場合、ICA は有効になります。この値よりも古いイメージが ICA で処理されます。ICA の対象となるイメージのカタログ .f ファイルが、カタログディスクから削除されます。この値を 0 (ゼロ) に設定すると ICA が無効になります。NetBackup Flex Scale 環境および Cloud Scale 環境のデフォルト値は 2,592,000 (30 日) です。他のすべての NetBackup 環境のデフォルト値は 0 (無効) です。

アクセラレータ対応のバックアップの場合は、完全バックアップスケジュールよりも長い ICA 保持値を指定して、ICA イメージからの .f ファイルのリストア数が少なくなるようにします。

たとえば、ICA 保持値を 30 日に設定するには、bpconfig -ica_retention 2592000 と入力します。

bpconfig -U を使用して変更を確認します。

```
# bpconfig -U
Admin Mail Address:          sasquatch@wapati.edu
Job Retry Delay:             10 minutes
Max Simultaneous Jobs/Client: 1
Backup Tries:                1 time(s) in 12 hour(s)
Keep Error/Debug Logs:      3 days
Max drives this master:      0
Keep TrueImageRecovery Info: 24 days
Compress DB Files:           (not enabled)
Media Mount Timeout:         30 minutes
Display Reports:             24 hours ago
Preprocess Interval:         0 hours
Image DB Cleanup Interval:   12 hours
Image DB Cleanup Wait Time:  10 minutes
Policy Update Interval:      10 minutes
Intelligent Catalog Archiving: Files file larger than 1024 KB
Intelligent Catalog Archiving: Images older than 30 day(s)
```

2 メモ: ICA を有効にすると、.f ファイルの最小ファイルサイズはデフォルト値の 1024 KB に設定されます。その値を変更するには、この手順を使用します。

最小ファイルサイズを指定するには、プライマリサーバーで次のコマンドを実行します。

```
bpconfig -ica_min_size size
```

size の値が 0 から 2097151 の場合は、そのサイズ以上のカタログ .f ファイルがカタログディスクから削除されます。デフォルト値は 1024 です。

たとえば、ICA の最小ファイルサイズを 2048 KB に設定するには、bpconfig -ica_min_size 2048 と入力します。

bpconfig -U を使用して変更を確認します。

```
# bpconfig -U
Admin Mail Address:          sasquatch@wapati.edu
Job Retry Delay:             10 minutes
Max Simultaneous Jobs/Client: 1
Backup Tries:                1 time(s) in 12 hour(s)
Keep Error/Debug Logs:      3 days
Max drives this master:      0
Keep TrueImageRecovery Info: 24 days
Compress DB Files:           (not enabled)
Media Mount Timeout:         30 minutes
Display Reports:             24 hours ago
Preprocess Interval:         0 hours
Image DB Cleanup Interval:   12 hours
Image DB Cleanup Wait Time:  10 minutes
Policy Update Interval:      10 minutes
Intelligent Catalog Archiving: Files file larger than 2048 KB
Intelligent Catalog Archiving: Images older than 30 day(s)
```

インテリジェントカタログアーカイブ (ICA) を無効にするには

- ◆ プライマリサーバーで次のコマンドを実行します。

```
bpconfig -ica_retention 0

bpconfig -U を使用して変更を確認します。

# bpconfig -U
Admin Mail Address:          sasquatch@wapati.edu
Job Retry Delay:             10 minutes
Max Simultaneous Jobs/Client: 1
Backup Tries:                1 time(s) in 12 hour(s)
Keep Error/Debug Logs:      3 days
Max drives this master:      0
Keep TrueImageRecovery Info: 24 days
Compress DB Files:           (not enabled)
Media Mount Timeout:         30 minutes
Display Reports:             24 hours ago
Preprocess Interval:         0 hours
Image DB Cleanup Interval:   12 hours
Image DB Cleanup Wait Time:  10 minutes
Policy Update Interval:      10 minutes
Intelligent Catalog Archiving: (not enabled)
```

カタログアーカイブポリシーの作成

カタログアーカイブ機能でカタログアーカイブコマンドを正常に実行するには、**catarc** という名前のポリシーが必要です。このポリシーは、カタログアーカイブに再利用できます。

カタログアーカイブポリシーを作成する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[保護 (Protection)]、[ポリシー (Policies)]の順にクリックします。次に[追加 (Add)]をクリックします。
- 3 [ポリシー名 (Policy name)]に **catarc** と入力します。
catarc ポリシーは、**bpcatarc** によって有効にされるまで待機します。このポリシーは、ユーザーが実行するものではありません。代わりに、この特別なポリシーは **bpcatarc** によって有効になり、カタログバックアップジョブが開始されます。その後、ジョブが終了すると、ポリシーは無効になります。
- 4 [属性 (Attributes)]ポリシーのタブで、プライマリサーバーのプラットフォームに従って、[ポリシー形式 (Policy type)]を[標準 (Standard)]または[MS-Windows]に設定します。

- 5 [属性 (Attributes)] ポリシーのタブで、[有効になる日時 (Go into effect at)] ボックスを空にすることによってカタログアーカイブポリシーを無効にします。
 p.707 の「[開始日時の設定 (Go into effect at)] (ポリシー属性)」を参照してください。
- 6 [スケジュール (Schedules)] タブを選択し [追加 (Add)] をクリックして、スケジュールを作成します。
 [属性 (Attributes)] スケジュールタブで、スケジュールの [名前 (Name)] は制限されませんが、[バックアップ形式 (Type of backup)] は、[ユーザーバックアップ (User backup)] である必要があります。
- 7 カタログアーカイブの [保持 (Retention)] を選択します。保持レベルを、アーカイブされるバックアップの最長の保持期間以上に設定します。カタログアーカイブの保持レベルの期間が不十分であると、データが失われる可能性があります。
 カタログアーカイブイメージ用に設定した特別な保持レベルを指定すると有効な場合があります。
- 8 [開始時間帯 (Start window)] タブを選択し、catarc ポリシーのスケジュールを定義します。
 スケジュールの時間帯には、bpcatarc コマンドが実行される時間を含める必要があります。bpcatarc コマンドがスケジュール以外で実行された場合、操作は正常に実行されません。
- 9 [追加 (Add)] をクリックして、スケジュールを保存します。
- 10 [クライアント (Clients)] タブで、NetBackup サーバーのリストに表示するプライマリサーバーの名前を入力します。
- 11 [バックアップ対象 (Backup selections)] タブで、カタログバックアップイメージが存在する、次のディレクトリを参照して選択します。
 Windows の場合: `install_path¥NetBackup¥db¥images`
 UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/db/images`
- 12 [作成 (Create)] をクリックして、ポリシーを保存します。

カタログアーカイブコマンド

カタログアーカイブオプションでは、3 つのコマンドを使用して、まずカタログ .f ファイルのリストを指定し、次にファイルのアーカイブを行います。4 つ目のコマンド bpcatres は、ファイルのリストアを行うために必要に応じて使用します。
 カタログアーカイブは次のコマンドを使います。

表 22-2 カタログアーカイブコマンド

コマンド	説明
	bpcatlist コマンドでは、カタログデータの問い合わせが行われます。次に、bpcatlist は選択したパラメータに基づいてカタログの一部を表示します。たとえば、日付、クライアント、ポリシー、スケジュール名、バックアップ ID、バックアップイメージの作成日時、バックアップイメージの日付範囲などを選択できます。bpcatlist では、一致したイメージのイメージ概略情報が、書式化されて標準出力に出力されます。 他のすべてのカタログアーカイブコマンド (bpcataarc、bpcatrm および bpcatres) は、パイプコマンドを介した bpcatlist からの入力に依存します。 たとえば、2012 年 1 月 1 日より前に作成されたすべての .f ファイルのアーカイブ (バックアップおよび削除) を行うには、次のように入力します。 <pre>bpcatlist -client all -before Jan 1 2012 bpcataarc bpcatrm</pre> bpcatlist は、状態情報を取得する場合にも使用します。 この場合、次の情報がカタログごとに表示されます。 ■ バックアップ ID (Backupid)。 ■ バックアップ日付 (Backup Date)。 ■ カタログアーカイブ ID (catarcid)。.f ファイルのバックアップが正常に行われると、イメージファイルの [catarcid] フィールドにカタログアーカイブ ID が入力されます。イメージがアーカイブされていない場合、このフィールドは 0 (ゼロ) です。 ■ アーカイブ状態 (S)。カタログがアーカイブされている場合は 2、アーカイブされていない場合は 1 が表示されます。 ■ 圧縮状態 (C)。カタログが圧縮されている場合は <i>positive_value</i>、圧縮されていない場合は 0 が表示されます。 ■ カタログファイル名 (Files file)。 次の bpcatlist 出力の例では、10 月 23 日以降に行われた、クライアント alpha のすべてのバックアップが示されます。 <pre># bpcatlist -client alpha -since Oct 23 Backupid Backup Date ...Catarcid S C Files file alpha_097238 Oct 24 10:47:12 2012 ... 973187218 1 0 alpha_097238_UBAK.f alpha_097233 Oct 23 22:32:56 2012 ... 973187218 1 0 alpha_097233_FULLL.f alpha_097232 Oct 23 19:53:17 2012 ... 973187218 1 0 alpha_097232_UBAK.f</pre> 詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

コマンド	説明
bpcatarc	bpcatarc コマンドでは、bpcatlist からの出力が読み込まれ、.f ファイルの選択されたリストのバックアップが行われます。.f ファイルのバックアップが正常に行われると、イメージファイルの[catarcid]フィールドにカタログアーカイブ ID が入力されます。.f ファイルのアーカイブを行うには、catarc という名前のポリシーが必要です。このポリシーは、[ユーザーバックアップ (User Backup)]形式のスケジュールに基づいたものです。catarc のスケジュールの時間帯には、bpcatarc コマンドが実行される時間を含める必要があります。 p.921 の「カタログアーカイブポリシーの作成」を参照してください。
bpcatrm	bpcatrm コマンドでは、bpcatlist または bpcatarc からの出力が読み込まれます。イメージファイルに有効な catarcid エントリが存在する場合、bpcatrm では、選択されたイメージ .f ファイルがオンラインカタログから削除されます。 bpcatrm では、以前に .f ファイルが catarc ポリシーを使用してバックアップされていない場合、このファイルは削除されません。
bpcatres	bpcatres コマンドを使用してカタログをリストアします。bpcatres コマンドでは、bpcatlist からの出力が読み込まれ、アーカイブ済みの選択された .f ファイルがカタログにリストアされます。例: <pre>bpcatlist -client all -before Jan 1 2012 bpcatres</pre>

カタログアーカイブの注意事項

カタログアーカイブの前に次の項目を考慮します。

- カatalogアーカイブ操作は、NetBackup が動作していない状態 (ジョブが実行されていない状態) のときに実行します。
- カatalogアーカイブを実行すると、既存のカタログイメージが変更されます。そのため、カタログファイルシステムが 100% 使用されているときには実行しないでください。
- カatalogバックアップイメージがユーザーバックアップと同じテープ上に存在することを避けるために、カタログアーカイブ用に別のメディアプールを作成します。
- カatalogアーカイブイメージ用に設定した特別な保持レベルを指定すると有効な場合があります。
 保持レベルを指定するには、NetBackup Web UI を開きます。左側で、[ホスト (Hosts)]、[ホストプロパティ (Host Properties)]の順にクリックします。プライマリサーバーを特定し、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]をクリックします。次に、[保持期間 (Retention periods)]をクリックします。
 p.163 の「[\[保持期間 \(Retention periods\)\]プロパティ](#)」を参照してください。
- テープをマウントし、アーカイブされた .f ファイルをリストアするために追加の時間が必要になります。

- カタログがどのテープにアーカイブされたかを簡単に判断する方法はありません。
`bpcatlist -offline` コマンドがどのイメージがアーカイブされたかを判断するための唯一の管理コマンドです。このコマンドではアーカイブにどのテープが使用されたかはリストされません。そのため、カタログアーカイブに使用されたテープが、アーカイブされたカタログイメージのリストアに使用できることを確認するように注意してください。カタログアーカイブ専用の別のボリュームプールを作成するか、またはテープをカタログアーカイブテープとしてラベル付けする方法を考えてください。

カタログアーカイブからのイメージの抽出

ストレージプロバイダが特定のクライアントのすべての記録を抽出することが必要となる場合があります。この場合、クライアント名に基づいたアーカイブを作成することによって、カタログアーカイブからカスタマのイメージを抽出できます。

特定のクライアント名に基づいてカタログアーカイブからイメージを抽出する方法

- 1 特定のクライアント用のボリュームプールを作成します。
- 2 カタログアーカイブポリシーを作成します。[属性 (Attributes)] タブで、そのクライアント用のボリュームプールを指定します。
- 3 そのクライアントの `.f` ファイルだけが表示されるように `bpcatlist` を実行します。次に例を示します。

```
bpcatlist -client clientname | bpcatarc | bpcatrm
```
- 4 そのクライアント用のボリュームプールへのイメージの書き込みをこれ以上行わない場合、次にカタログのアーカイブを実行する前に、ボリュームプールを変更します。

カタログ領域の要件の見積もり

NetBackup には、エラーログおよびバックアップされるファイルの情報を格納するディスク領域が必要です。

NetBackup で必要とされるディスク領域は、次の要素によって異なります。

- バックアップするファイルの数
- 完全バックアップおよび増分バックアップの間隔
- ユーザーバックアップおよびユーザーアーカイブの数
- バックアップの保持期間
- ファイルのフルパスの長さの平均
- ファイル情報 (所有者権限など)
- ある特定の時点で存在するエラーログ情報の平均量
- データベース圧縮オプションを有効にしているかどうか

カタログバックアップに必要なディスク領域を見積もる方法

- 1 すべてのクライアントの 1 回のバックアップ中に、各ポリシーのスケジュールごとにバックアップされるファイルの最大数を見積もります。
- 2 完全バックアップおよび増分バックアップの間隔および保持期間を、ポリシーごとに決定します。
- 3 手順 1 および手順 2 の情報を使用して、ある特定の時点に存在するファイルの最大数を計算します。

例:

完全バックアップを 7 日ごとにスケジュールしている場合を想定します。完全バックアップの保持期間は 4 週間です。差分増分バックアップを毎日実行します。保持期間は 1 週間です。

領域を確保する必要があるファイルの数は、1 回の完全バックアップファイル数の 4 倍です。この数に、1 週間分の増分バックアップファイル数を加えます。

次の式は、それぞれの種類 (毎日、毎週など) のバックアップに存在する可能性があるファイルの最大数を表します。

バックアップあたりのファイル数 × 保持期間あたりのバックアップ数 = 最大ファイル数

例:

差分増分バックアップスケジュールによって、毎日 1200 ファイルがバックアップされ、保持期間が 7 日間であるとします。この場合、同時に存在する可能性があるファイルの最大数は、次のとおりです。

$$1200 \times 7 \text{ 日} = 8400$$

週単位の完全バックアップのスケジュールは 3000 のファイルをバックアップします。保持期間は 4 週です。同時に存在する可能性があるファイルの最大数は、次のとおりです。

$$3000 \times 4 \text{ 週} = 12,000$$

サーバー上のファイル数の合計は、すべてのスケジュールのファイルの最大数を足すことによって得られます。それぞれの合計を足して、同時に存在する可能性があるファイルの最大数を求めます。この例では、20,400 です。

True Image Restore 情報を収集するポリシーの場合、増分バックアップによって (完全バックアップと同様に) すべてのファイルのカタログ情報が収集されます。増分バックアップの計算は、 $1200 \times 7 = 8400$ から $3000 \times 7 = 21,000$ に変更されます。完全バックアップの 12,000 を足すと、2 つのスケジュールの合計は 20,400 ではなく 33,000 になります。

- 4 ファイル数にファイルレコードあたりの平均バイト数を掛けることによって、バイト数が得られます。

ファイルレコードあたりの平均バイト数が不明な場合、132 を使用します。手順 3 の結果を使用すると、計算は次のとおりです。

$$(8400 \times 132) + (12,000 \times 132) = 2692800 \text{ バイト (または約 2630 KB)}$$

- 5 手順 4 で計算した合計に 10 MB から 15 MB を足します。この追加のバイト数は、エラーログに必要な平均領域です。問題が予見される場合、この値を大きくしてください。
- 6 すべてのデータが 1 つのパーティション内に存在するように、領域を割り当てます。

UNIX システムにおける NetBackup ファイルサイズの注意事項

UNIX のファイルシステムには次の制限事項があります。

- UNIX システムには、大規模なファイルのサポートフラグが存在する場合もあります。フラグをオンにすると、大規模なファイルをサポートできます。
- 大規模なファイルをサポートするために、root ユーザーアカウントのファイルサイズ制限を無制限に設定します。

イメージカタログの移動

現在の場所に対してイメージカタログのサイズが大きくなりすぎる場合があります。利用可能な領域が十分に存在するファイルシステムまたはディスクパーティションにイメージカタログを移動することを検討します。

イメージカタログの移動についてのメモ

- NetBackup では、リモート NFS 共有へのカタログの保存はサポートされていません。CIFS は SAN または NAS ストレージでサポートされています。
p.894 の「[NetBackup カatalogの構成要素](#)」を参照してください。
- NetBackup は異なるファイルシステムまたはディスクパーティションへのイメージカタログの移動のみをサポートします。NetBackup カatalog全体を構成する他のサブディレクトリを移動することはできません。
たとえば、Windows で、`install_path¥NetBackup¥db¥error` を移動するために ALTPATH 機能を使わないでください。
たとえば、UNIX で、`/usr/openv/netbackup/db/error` を移動しないでください。
カタログバックアップは `/images` ディレクトリをバックアップするときのみシンボリックリンクをたどります。したがって、シンボリックリンクが NetBackup カatalogの他の部分に使われている場合、それらの部分のファイルはカタログバックアップに含まれません。

- ALTPATHファイルで指定されたディレクトリは、NetBackup がアンインストールされても、自動的に削除されません。NetBackup がアンインストールされたら、このディレクトリの内容を手動で削除してください。

Windows ホスト間でのイメージカタログの移動

Windows でイメージカタログを移動する方法

- 1 NetBackup カatalogのバックアップを手動で行います。

カタログをバックアップしておく、移動中にイメージ情報が誤って消失した場合、そのイメージ情報のリカバリできます。

p.905 の「[NetBackup カatalogの手動バックアップ](#)」を参照してください。
- 2 アクティビティ 모니터の[ジョブ (Jobs)]タブを調べて、クライアントのバックアップまたはリストアが実行中でないことを確認します。

ジョブが実行中である場合は、ジョブが終了するまで待つか、アクティビティ 모니터の[ジョブ (Jobs)]タブを使用してこれらを停止します。
- 3 アクティビティ 모니터の[デーモン (Daemons)]タブを使用して、Request Manager デーモンおよび Database Manager デーモンを停止します。これらのサービスは、ジョブの開始を回避するために停止します。この手順が実行される間、データベースを修正しないでください。
- 4 イメージカタログディレクトリに ALTPATH という名前のファイルを作成します。

たとえば、NetBackup がデフォルトの場所にインストールされており、クライアント名が **mars** である場合、イメージカタログへのパスは、次のようになります。

```
C:\Program Files\Cohesity  
NetBackup\NetBackup\db\images\mars\ALTPATH
```
- 5 イメージ情報の移動先のディレクトリを作成します。次に例を示します。

```
E:\NetBackup\alternate_db\images\client_name
```
- 6 ALTPATH ファイルの 1 行目にクライアントのイメージ情報の移動先ディレクトリへのパスを指定します。次に例を示します。

```
E:\NetBackup\alternate_db\images\client_name
```

このパスが、ALTPATH ファイルの唯一のエントリになります。

- 7 現在のクライアントディレクトリに存在するすべてのファイルおよびディレクトリを新しいディレクトリに移動します (ALTPATH ファイルを除く)。

たとえば、イメージが現在、次の位置に存在すると想定します。

```
C:\¥Program Files¥Cohesity NetBackup¥NetBackup¥db¥images¥mars
```

また、ALTPATH ファイルで、次のパスが指定されていると想定します。

```
E:\¥NetBackup¥alternate_db¥images¥mars
```

この場合、すべてのファイルおよびディレクトリ (ALTPATH ファイルを除く) を次の位置に移動します。

```
E:\¥NetBackup¥alternate_db¥images¥mars
```

- 8 [デーモン (Daemons)] タブで、NetBackup Request デーモン、NetBackup Job Manager、NetBackup Policy Execution Manager を起動します。

クライアントのバックアップおよびリストアを再開できます。

UNIX ホストの間でのイメージカタログの移動

UNIX でイメージカタログを移動する方法

- 1 次のコマンドを実行して、実行中のバックアップがないことを確認します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bpps
```

- 2 次のコマンドを実行して、bprd を停止します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bprdrege -terminate
```

- 3 次のコマンドを実行して、bpdbm を停止します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bpdbm -terminate
```

- 4 新しいファイルシステムにディレクトリを作成します。次に例を示します。

```
mkdir /disk3/netbackup/db/images
```

- 5 新しいファイルシステム内に、イメージカタログを移動します。

- 6 /usr/opensv/netbackup/db/images から新しいファイルシステムに、シンボリックリンクを作成します。

p.927 の「UNIX システムにおける NetBackup ファイルサイズの注意事項」を参照してください。

イメージカタログ圧縮について

イメージカタログにはすべてのクライアントのバックアップ情報が含まれています。これはユーザーがファイルを一覧表示またはリストアするときに使用されます。NetBackup では、カタログの全部または古い箇所のみを圧縮することができます。

イメージカタログの圧縮を制御するには、[グローバル属性 (Global Attributes)]ホストプロパティの[カタログ圧縮の間隔 (Compress catalog interval)]を設定します。この間隔は、圧縮をするためにはバックアップ情報がどのくらい古くなければならないかを指定します。情報の圧縮を遅らせる日数を指定することで、最新のバックアップからファイルのリストアを行うユーザーに影響を与えないようにできます。デフォルトでは、[カタログ圧縮の間隔 (Compress catalog interval)]は 0 (ゼロ) に設定され、イメージの圧縮は使用されません。

p.115 の「[グローバル属性 (Global attributes)]プロパティ」を参照してください。

メモ: Cohesity では、bpimage -[de]compress コマンドなどの方法を使用して、手動によるカタログバックアップの圧縮または解凍を行わないことをお勧めします。通常のバックアップまたはカタログバックアップを実行しているときにカタログバックアップを手動で圧縮または解凍すると、イメージカタログエントリの一貫性が失われます。ユーザーがファイルの一覧表示およびリストアを行うときに不適切な結果になる場合があります。

NetBackup でバックアップセッションが成功したかどうかにかかわらず実行されます。この操作は、NetBackup によりバックアップの期限切れ処理がされている間で、かつ session_notify スクリプトおよび NetBackup カタログのバックアップが実行される前に実行されます。

圧縮を実行するタイミングは、サーバーの処理速度および圧縮するファイルの数とサイズによって異なります。同じパーティション内に一時作業領域が必要です。

大量のイメージカタログファイルを圧縮処理する必要がある場合、圧縮が完了するまでバックアップセッションが延期されます。追加のバックアップ時間は、初めて圧縮を実行するときに特に長くなります。最初のセッションの影響を最小限に抑えるには、ファイルを数段階に分けて圧縮することを検討します。たとえば、121 日以上経過したバックアップのレコードを圧縮することから開始します。この日数を徐々に適切な値まで減らします。

イメージカタログを圧縮することで、次の目的が達成されます。

- 消費されるディスク領域を大幅に削減する。
- カタログをバックアップするために必要なメディアを削減する。

削減される領域の量は、実行するバックアップ形式によって異なります。完全バックアップは増分バックアップよりもカタログが圧縮される割合が大きくなります。通常、完全バックアップではカタログファイルデータの重複が多いためです。カタログの圧縮を実行することで、80% の削減が可能な場合もあります。

この方法で、必要なディスク領域およびメディアを削減すると、ユーザーがファイルの一覧表示またはリストアを行うときのパフォーマンスが低下します。情報が参照されるたびに解凍されるため、参照される圧縮ファイルの数とサイズに比例してパフォーマンスが低下します。リストアで大量のカタログファイルを解凍する必要がある場合、一覧表示要求に関連付けられた[ファイル参照のタイムアウト (File browse timeout)]の値を大きくします。(クライアントの[タイムアウト (Timeouts)]ホストプロパティを参照してください。)

NetBackup カタログの解凍

特定のクライアントに関連付けられたすべてのレコードを、一時的に解凍することが必要な場合があります。たとえば、大規模なまたは大量のリストア要求が予想される場合にそれらのレコードを解凍することがあります。

Windows で NetBackup カタログを解凍する方法

- 1 イメージカタログが存在するパーティションに、カタログを解凍するために十分な領域があることを確認します。

p.925 の「[カタログ領域の要件の見積もり](#)」を参照してください。
- 2 NetBackup Request デーモンのサービス bprd を停止します。
- 3 NetBackup Database Manager (bpdbm) が実行中であることを確認します。
- 4 NetBackup Web UI で、[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。
- 5 プライマリサーバーを選択して[接続 (Connect)]をクリックします。サーバーを選択し、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]をクリックします。
- 6 [グローバル属性 (Global attributes)]を選択します。

p.115 の「[\[グローバル属性 \(Global attributes\)\]プロパティ](#)」を参照してください。
- 7 [カタログ圧縮の間隔 (Compress catalog interval)]チェックボックスのチェックマークをはずします。次に、[保存 (Save)]をクリックします。
- 8 コマンドプロンプトを起動します。次のディレクトリに移動します。

```
install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin¥admincmd
```

次のいずれかのコマンドを実行します。

特定のクライアントのレコードを解凍するには、次のように入力します。

```
bpimage -decompress -client_name
```

すべてのクライアントのレコードを解凍するには、次のように入力します。

```
bpimage -decompress -allclients
```

- 9 NetBackup Request デーモンを再起動します (bprd)。
- 10 クライアントからファイルをリストアします。
- 11 [カタログ圧縮の間隔 (Compress catalog interval)]を以前の値に設定します。

このクライアント用に解凍されたレコードは、次のバックアップスケジュールが実行された後で圧縮されます。

UNIX で NetBackup カタログを解凍する方法

- 1 NetBackup カタログを解凍するには、プライマリサーバー上で root ユーザーとして次の手順を実行します。

イメージカタログが存在するパーティションに、クライアントのイメージレコードを解凍するために十分な領域があることを確認します。

- 2 次のコマンドを実行して、Request デーモン bprd を停止します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bprdreq -terminate
```

- 3 bpdbm が実行中であることを確認します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bpps
```

- 4 NetBackup Web UI で、[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)]の順に選択します。

- 5 プライマリサーバーを選択して[接続 (Connect)]をクリックします。サーバーを選択し、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]をクリックします。

- 6 [グローバル属性 (Global attributes)]を選択します。

p.115 の「[\[グローバル属性 \(Global attributes\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

- 7 [カタログ圧縮の間隔 (Compress catalog interval)]チェックボックスのチェックマークをはずします。次に、[保存 (Save)]をクリックします。

- 8 作業ディレクトリを /usr/opensv/netbackup/bin に変更して、次のコマンドを実行します。

```
admincmd/bpimage -decompress -client name
```

- 9 Request デーモンを再起動します (bprd)。次のコマンドを実行します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/initbprd
```

- 10 クライアントからファイルをリストアします。

- 11 [カタログ圧縮の間隔 (Compress catalog interval)]を以前の値に設定します。

このクライアント用に解凍されたレコードは、次のバックアップスケジュールが実行された後で圧縮されます。

NetBackup データベースについて

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup データベースのインストールについて](#)
- [インストール後の作業](#)
- [Windows での NetBackup データベース管理ユーティリティの使用](#)
- [UNIX での NetBackup データベース管理ユーティリティの使用](#)

NetBackup データベースのインストールについて

一般に、NetBackup カタログへの NetBackup データベースの実装は透過的です。NetBackup プライマリサーバーには、NetBackup データベース (NBDB) 用の非共有プライベートデータベースサーバーが含まれます。

このときインストールされる NetBackup データベースは、別ライセンス製品の BMR (Bare Metal Restore) とその関連データベース (BMRDB) 用としても使用されます。BMR データベースは、BMR のインストール処理によって作成されます。

デフォルトでは、NetBackup データベース (NBDB) はプライマリサーバーにインストールされます。また、プライマリサーバーは、Enterprise Media Manager (EMM) のデフォルトの場所でもあります。NBDB は主に EMM によって使用されるため、NetBackup データベースは常に Enterprise Media Manager と同じコンピュータに存在します。

p.896 の「[Enterprise Media Manager \(EMM\) について](#)」を参照してください。

NetBackup プライマリサーバーがインストールされるディレクトリおよびファイルについて

NetBackup Scale-Out Relational Database は次のディレクトリにインストールされます。

Windows

```
install_path¥Veritas¥NetBackupDB
```

```
install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin
```

```
install_path¥Veritas¥NetBackupDB¥data¥instance
```

データベースは次のサブディレクトリにインストールされます。

```
install_path¥Veritas¥NetBackupDB¥data¥nbdb¥
```

```
install_path¥Veritas¥NetBackupDB¥data¥nbazdb¥
```

```
install_path¥Veritas¥NetBackupDB¥data¥bmrdb¥ (BMR がインストールされている場合)
```

UNIX の場合

```
/usr/opensv/db
```

```
/usr/opensv/var/global
```

```
/usr/opensv/db/data/instance/
```

データベースは次のサブディレクトリにインストールされます。

```
/usr/opensv/db/data/nbdb/
```

```
/usr/opensv/db/data/nbazdb/
```

```
/usr/opensv/db/data/bmrdb/
```

bin ディレクトリについて

bin は次の場所にあります。

```
install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin
```

警告: ここで説明する、このディレクトリに含まれるユーティリティとコマンドは慎重に使用してください。

NetBackup サービスを実行および管理するためのユーティリティとバイナリが含まれています。詳しくは、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

NetBackup データベース管理ユーティリティ (NbDbAdmin.exe または dbadm) の使用について詳しくは、次のトピックを参照してください。

p.945 の「[Windows での NetBackup データベース管理ユーティリティの使用](#)」を参照してください。

p.952 の「[UNIX での NetBackup データベース管理ユーティリティの使用](#)」を参照してください。

NetBackupDB および db ディレクトリの内容について

次の表は、次のディレクトリの内容を記述したものです。

Windows の場合: `install_path¥Veritas¥NetBackupDB¥`

UNIX の場合: `/usr/opensv/db/`

表 23-1 NetBackupDB および db ディレクトリの内容

ディレクトリ	説明
bin	NetBackup データベースサービスを管理するためのユーティリティとコマンドが含まれています。
data	NetBackup データベース (NBDB、NBAZDB、BMRDB) および特定の構成ファイルのデフォルトの場所です。
lib	UNIX の場合: NetBackup Scale-Out Relational Database のすべての共有ライブラリが含まれています。このディレクトリには、NBDB および BMRDB への接続に使用される ODBC ライブラリも含まれます。
scripts	警告: このディレクトリにあるスクリプトを編集しないでください。 NetBackup データベースの作成に使用されるスクリプトが格納されます。また、EMM とその他のスキーマの作成に使用されるスクリプトも格納されます。
share	NetBackup データベースサーバーに必要な PostgreSQL 文書とモジュールファイルが含まれます。
staging	カタログバックアップとリカバリの実行中に、一時的なステージング領域として使用されます。
WIN64	(Windows) NetBackup Scale-Out Relational Database の .dll ファイルが含まれます。

data ディレクトリについて

次のディレクトリは NetBackup データベース (NBDB) のデフォルトの場所です。

Windows の場合: `install_path¥NetBackupDB¥data`

UNIX の場合: `/usr/opensv/db/data`

`¥data¥` ディレクトリには次のサブディレクトリとファイルが含まれています。

- bmrdb
BMR がインストールされている場合、このディレクトリには BMR データベースが含まれます。
- nbdb
メイン NetBackup データベース (EMM を含む)。
- nbazdb
NetBackup 認可データベース。
- vxdbms.conf
NetBackup データベースのインストールに固有の構成情報が格納されるファイル。
p.936 の「[vxdbms.conf](#)」を参照してください。
- nbdbinfo.dat
NetBackup DBA パスワードのバックアップ。

vxdbms.conf

Windows の場合:

```
VXDBMS_NB_SERVER = NB_server_name
VXDBMS_NB_DATABASE = NBDB
VXDBMS_BMR_DATABASE = BMRDB
VXDBMS_AZ_DATABASE = NBAZDB
VXDBMS_NB_STAGING = C:\Program Files\Cohesity
NetBackup\NetBackupDB\staging
VXDBMS_NB_PORT = 13785
VXDBMS_NB_DATA = C:\Program Files\Cohesity NetBackup\NetBackupDB\data
VXDBMS_NB_PASSWORD = encrypted_password
AZ_DB_PASSWORD = encrypted_password
VXDBMS_POSTGRESQL_POOLER_ODBC_PORT = 13787
```

UNIX の場合:

```
VXDBMS_NB_SERVER = NB_server_name
VXDBMS_NB_PORT = 13785
VXDBMS_NB_DATABASE = NBDB
VXDBMS_AZ_DATABASE = NBAZDB
VXDBMS_BMR_DATABASE = BMRDB
VXDBMS_NB_DATA = /usr/opensv/db/data
VXDBMS_NB_STAGING = /usr/opensv/db/staging
VXDBMS_NB_PASSWORD = encrypted_password
AZ_DB_PASSWORD = encrypted_password
VXDBMS_POSTGRESQL_POOLER_ODBC_PORT = 13787
```

`vxdbms.conf` には、DBA アカウントにログインするために使用される暗号化されたパスワードが格納されます。これらのアカウントには、NBDB、NBAZDB、BMRDB およびその他のデータアカウントが含まれます。

NetBackup 構成エントリ

VXDBMS_NB_DATA レジストリエントリ (Windows) または `bp.conf` エントリ (UNIX) は必須エントリで、インストール時に作成されます。このエントリは、NetBackup データベース、認可データベース、BMR データベースおよび `vxdbms.conf` ファイルが存在するディレクトリへのパスを示します。

Windows の場合:

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Veritas\NetBackup\CurrentVersion\
Config\VXDBMS_NB_DATA
```

UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/bp.conf`

```
VXDBMS_NB_DATA = /usr/opensv/db/data
```

NetBackup データベースサーバー管理

このトピックでは、NetBackup データベースの管理に利用可能なコマンドについて説明します。

次のいずれかの方法で NetBackup データベースを開始および停止します。

- アクティビティ 모니터の[デーモン (Daemons)]タブで、NetBackup Scale-Out Relational Database Manager サービス (`vrtsdbsvc_psqli`) を選択します。
- (Windows) Windows サービスマネージャから、NetBackup Scale-Out Relational Database Manager サービス (`vrtsdbsvc_psqli`) を選択します。

- (Windows) 次のコマンドを使います。

```
install_path\Veritas\NetBackup\bin\bpdown -e vrtsdbsvc_psqli
```

- `install_path\Veritas\NetBackup\bin\bpup -e vrtsdbsvc_psqli`

- (UNIX) 次のコマンドを使います。

```
/usr/opensv/db/bin/nbdbms_start_server -start
```

オプションを指定しない場合は、NetBackup Scale-Out Relational Database サーバーを起動します。

```
/usr/opensv/db/bin/nbdbms_start_server -stop -f
```

サーバーが停止されます。`-f` オプションを使用すると、有効な接続も強制的に停止されます。

NetBackup Scale-Out Relational Database Manager デーモンは、`stop` コマンドまたは `start` コマンドに含まれます。これは、すべての NetBackup デーモンを開始および停止します。

NetBackup Scale-Out Relational Database Manager サービスを実行したまま、個別のデータベースを起動または停止できます。NetBackup データベース管理ユーティリティを使うか、次のコマンドを使用します。

- `nbdb_admin [-start | -stop]`

NetBackup Scale-Out Relational Database サーバーを停止せずに、NBDB が起動または停止されます。

データベースが起動しているかどうかを表示するには、`nbdb_ping` コマンドを入力します。

- `nbdb_admin [-start | -stop BMRDB]`

NetBackup Scale-Out Relational Database サーバーを停止せずに、BMRDB が起動または停止されます。

BMRDB データベースが起動しているかどうかを表示するには、`nbdb_ping -dbn BMRDB` コマンドを入力します。

NetBackup データベース環境とクラスタ環境

NetBackup データベースはクラスタ環境でサポートされます。フェールオーバーは、NetBackup サーバーのフェールオーバーソリューションに含まれています。ソフトウェアはクラスタ内のすべてのコンピュータにインストールされます。

データベースと構成ファイルは次の共有場所にインストールされます。

Windows の場合

NetBackup データベース:

`shared_drive¥VERITAS¥NetBackupDB¥data`

構成ファイル:

`shared_drive¥VERITAS¥NetBackupDB¥data¥instance`

UNIX の場合

NetBackup データベース:

`shared_drive/db/data`

構成ファイル:

`/usr/opensv/var/global`

`shared_drive/db/data/instance`

インストール後の作業

次のトピックで説明されている作業は省略可能で、初期インストール後に実行できます。

- データベースパスワードを変更します。
p.939 の「[NetBackup データベースパスワードの変更](#)」を参照してください。
- NetBackup データベースを (パフォーマンスのチューニングなどのため) 移動します。
p.940 の「[インストール後のデータベースの移動](#)」を参照してください。
- NBDB を再作成します。
p.942 の「[手動による NBDB データベースの作成](#)」を参照してください。

NetBackup データベースを管理するためのコマンドおよびユーティリティ

メモ: NetBackup データベースを管理するためにデータベース管理ユーティリティを使うと、NetBackup カタログとデータベース間の一貫性が損なわれる可能性があります。一貫性が損なわれると、データが損失する可能性があります。これらのユーティリティとコマンドは、Cohesity Technical Support のアドバイスの基づいてのみ使用してください。

次のユーティリティを使用してデータベースを管理できます。

p.945 の「[Windows での NetBackup データベース管理ユーティリティの使用](#)」を参照してください。

p.952 の「[UNIX での NetBackup データベース管理ユーティリティの使用](#)」を参照してください。

『NetBackup コマンドリファレンスガイド』で次のコマンドとも参照してください。

```
create_nbdb  
  
nbdb_backup  
  
nbdb_restore  
  
nbdb_unload
```

NetBackup データベースパスワードの変更

パスワードはインストール時にランダムに生成されたパスワードに設定されます。このパスワードは、NBDB と BMRDB、およびすべての DBA アカウントとアプリケーションアカウントに使用されます。この手順を使用し、既知のパスワードにそれを変更できます。

パスワードは暗号化され、vxdbms.conf ファイルに格納されます。vxdbms.conf ファイルの権限は、Windows 管理者または root ユーザーにのみこのファイルの読み取りまたは書き込みを許可します。

NBAC が有効な場合の必要条件については、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

データベースのパスワードを変更する方法

- 1 Windows 管理者または root ユーザーでサーバーにログオンします。
- 2 インストール後に初めてパスワードを変更するには、次のコマンドを実行します。このコマンドは新しい暗号化文字列で `vxdbs.conf` ファイルを更新します。

Windows の場合: `install_path\NetBackup\bin\nbdb_admin -dba new_password`

UNIX の場合: `/usr/opensv/db/bin/nbdb_admin -dba new_password`

パスワードは ASCII 文字列である必要があります。パスワード文字列では ASCII 文字以外は許可されていません。

- 3 既知のパスワードを新しいパスワードに変更するには、`nbdb_admin` コマンドまたは NetBackup データベース管理ユーティリティのいずれかを使用します。NetBackup データベース管理ユーティリティにログインするには、現在のパスワードを知っている必要があります。

p.945 の「[Windows での NetBackup データベース管理ユーティリティの使用](#)」を参照してください。

p.952 の「[UNIX での NetBackup データベース管理ユーティリティの使用](#)」を参照してください。

インストール後のデータベースの移動

NetBackup データベース (NBDB) と NetBackup 認可データベース (NBAZDB) は、デフォルトではプライマリサーバーに作成されます。パフォーマンスを向上させるために、NetBackup データベース管理ユーティリティまたはコマンドラインオプションを使用してデータベースファイルの場所を変更できます。

次の点に注意してください。

- BMR がインストールされ、そのデータベースを移動する場合、BMR はプライマリサーバーに存在する必要があります。
- パフォーマンスの問題のため、データベースは別のディスクまたはボリュームにのみ移動できます。ディスクまたはボリュームはローカル接続されている必要があります。NetBackup は NetBackup データベース (EMM を含む NBDB)、NBAZDB または構成ファイルのリモート NFS 共有への保存をサポートしていません。CIFS は一部の SAN ストレージおよび NAS ストレージでサポートされています。
- データベースを移動する前後に NBDB と BMRDB の両方をバックアップするためにカタログバックアップを実行してください。

Windows での NetBackup データベースの移動

次の手順では、データベース管理ユーティリティを使用してデータベースを移動する方法について説明します。

次のコマンドを使用することもできます。

```
install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin¥nbdb_move.exe
```

データベースは削除および再作成されないのので nbdb_move コマンドをいつでも実行できます。したがって、すべてのデータが保持されます。

Windows で NetBackup データベースを移動する方法

- 1 カタログバックアップを実行します。
- 2 次のコマンドを入力することによってすべての NetBackup サービスを停止します。

```
install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin¥bpdwn
```

- 3 NetBackup Scale-Out Relational Database Manager サービスを起動します。

```
install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin¥bpup -e vrtsdbsvc_psql
```

- 4 NetBackup データベース管理ユーティリティを開始し、データベースログオンパスワードを入力します。[OK]をクリックします。
- 5 [データベース (Database)]リストから、移動するデータベースを選択します。
- 6 [ツール (Tools)]タブを選択します。
- 7 [移動 (Move)]をクリックします。
- 8 [データの移動先 (Move data to)]を選択し、新しい場所を参照します。
- 9 NetBackup では、データベースディレクトリが World Writable である必要はありません。新しいデータベースディレクトリ (data_directory) に、適切な権限があり、ディレクトリが World Writable でないことを確認してください。
- 10 次のコマンドを入力することによってすべてのサービスを起動します。

```
install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin¥bpup
```

- 11 カタログバックアップを実行します。

UNIX での NetBackup データベースの移動

UNIX で NetBackup データベースを移動する方法

- 1 カタログバックアップを実行します。
- 2 次のコマンドを入力することによってすべての NetBackup デーモンを停止します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bp.kill_all
```

3 NetBackup Scale-Out Relational Database Manager デーモンを起動します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/nbdbms_start_stop start
```

4 既存のデータベースを移動するために、次のいずれかの方法を使用します。

- **NetBackup データベース管理ユーティリティの[データベースの移動 (Move Database)]オプションを使用します (dbadm)。**

- 次のコマンドを入力します。

```
/usr/opensv/db/bin/nbdb_move
```

```
-data data_directory
```

データベースは削除および再作成されないので `nbdb_move` コマンドをいつでも実行できます。そのため、すべてのデータは保持されます。

```
/usr/opensv/db/bin/nbdb_move -data data_directory
```

メモ: NetBackup では、データベースディレクトリが **World Writable** である必要はありません。新しいデータベースディレクトリ (`data_directory`) に、適切な権限があり、ディレクトリが **World Writable** でないことを確認してください。

5 次のコマンドを入力することによって NetBackup のすべてのデーモンを起動します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bp.start_all
```

6 カタログバックアップを実行します。

NetBackup データベースのコピー

保護を強化するために NBDB、NBAZDB、BMRDB データベースの一時バックアップを行ってから、データベースの移動や再編成などのデータベース管理操作を実行できます。また、カスタマサポートの状況によっては、NetBackup データベースのコピーを作成する必要がある場合もあります。

NetBackup データベース管理ユーティリティまたは `nbdb_backup` コマンドを使用して、この種類のバックアップを作成します。

手動による NBDB データベースの作成

NBDB データベースは、NetBackup のインストール時に自動的に作成されます。ただし、カタログリカバリの状況によっては、コマンドを使用して手動で作成することが必要になる場合があります。`create_nbdb`

注意: 多くの場合、データベースを手動で再作成しないことをお勧めします。

メモ: NBDB データベースがすでに存在する場合に、`create_nbdb` コマンドを実行しても、データベースは上書きされません。データベースを移動する場合は、`nbdb_move` コマンドを使用して移動してください。

Windows で NBDB データベースを手動で作成する方法

- 1 次のコマンドを入力することによってすべての NetBackup サービスを停止します。

```
install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin¥bpdown
```

- 2 NetBackup Scale-Out Relational Database Manager サービスを、次のコマンドを使用して起動します。

```
install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin¥bpup -e vrtsdbsvc_psql
```

- 3 次のコマンドを実行します。

```
install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin¥create_nbdb.exe
```

- 4 次のコマンドを入力して NetBackup のすべてのサービスを起動します。

```
install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin¥bpup
```

- 5 新しい NBDB データベースは空で、通常のインストール中にロードされる EMM データは含まれていません。

このデータを再移行する前に、新しいデバイスに対する最新のサポート情報を適用します。新しいデバイスは、約 2 カ月ごとに追加されます。

- 6 `tpext` ユーティリティを実行して、EMM データを再移行します。`tpext` によって、新しいデバイスマッピングおよび外部属性ファイルで NetBackup データベースが更新されます。

```
install_path¥Veritas¥Volmgr¥bin¥tpext.exe
```

通常のインストールでは、`tpext` は自動的に実行されます。

`create_nbdb` コマンドを使用してデータベースを手動で作成する場合、`tpext` ユーティリティも実行する必要があります。`tpext` によって、データベースに EMM データがロードされます。

UNIX で NBDB データベースを手動で作成する方法

- 1 次のコマンドを入力することによってすべての NetBackup デーモンを停止します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bp.kill_all
```

- 2 NetBackup Scale-Out Relational Database Manager サービスを、次のコマンドを使用して起動します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/nbdbms_start_stop start
```

- 3 次のコマンドを実行します。

```
/usr/opensv/db/bin/create_nbdb
```

- 4 次のコマンドを入力することによって NetBackup のすべてのデーモンを起動します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bp.start_all
```

- 5 新しい NBDB データベースは空で、通常のインストール中にロードされる EMM データは含まれていません。

このデータを再移行する前に、新しいデバイスに対する最新のサポート情報を適用します。新しいデバイスは、約 2 カ月ごとに追加されます。

- 6 tpext ユーティリティを実行して、EMM データを再移行します。tpext によって、新しいデバイスマッピングおよび外部属性ファイルで NetBackup データベースが更新されます。

```
/usr/opensv/volmgr/bin/tpext
```

通常のインストールでは、tpext は自動的に実行されます。

create_nbdb コマンドを使用してデータベースを手動で作成する場合、tpext ユーティリティも実行する必要があります。tpext によって、データベースに EMM データがロードされます。

create_nbdb の追加オプション

create_nbdb コマンドは、NBDB データベースの作成に使用するほかに、次の処理の実行にも使用できます。各コマンドで、**NB_server_name** は次のファイルの名前と一致します: postgresql.conf

- 既存の NBDB データベースを削除し、デフォルトの場所に作成し直す場合:

```
create_nbdb -drop
```

UNIX で、現在の NBDB データディレクトリの場所は、bp.conf ファイルから自動的に取得されます。

- 既存の NBDB データベースを削除し、作成し直さない場合:

```
create_nbdb -drop_only
```

- 既存の NBDB データベースを削除し、**data** ディレクトリに作成し直す場合:

```
create_nbdb -drop -data data_directory
```

nbdb_move を使用して NBDB データベースをデフォルトの場所から移動している場合は、このコマンドを実行して NBDB データベースを同じ場所で再作成します。

current_data_directory を指定します。BMRDB も再作成する必要があります。BMRDB データベースは、NetBackup データベースと同じ場所に存在する必要があります。

Windows での NetBackup データベース管理ユーティリティの使用

NetBackup 管理者は、NetBackup データベースを構成したり、データベースの操作を監視したりするために、データベース管理ユーティリティを使うことができます。ユーティリティを使うには、管理者に管理者のユーザー権限がなければなりません。

NetBackup データベース管理ユーティリティはスタンドアロンアプリケーション (NbDbAdmin.exe) であり、次のディレクトリにあります。

```
install_path¥NetBackup¥bin¥NbDbAdmin.exe
```

ユーティリティを使うには、管理者権限の管理者である必要があります。

NetBackup データベース管理ユーティリティを開始するときに DBA パスワードを入力します。パスワードはインストール時にランダムに生成されたパスワードに設定されます。nbddb_adminコマンドを使用し、既知のパスワードに変更します (まだ変更していない場合)。

p.939 の「[NetBackup データベースパスワードの変更](#)」を参照してください。

NetBackup データベース管理ユーティリティでは、次の情報が表示されます。

表 23-2 NetBackup データベース管理のプロパティ

プロパティ	説明
データベース名と状態 (Database name and status)	管理するデータベースを選択します。 可能なデータベースのリストは vxdbms.conf ファイルから導出されます。vxdbms.conf ファイルは、Windows のレジストリパラメータ VXDBMS_NB_DATA で指定されているディレクトリにあります。 データベースは NetBackup データベース管理ユーティリティを実行する同じコンピュータに存在する必要があります。 選択したデータベースの次のいずれかの状態レポートが表示されます。 ■ データベースが利用可能なら、画面には[正常に実行されています。(Alive and well.)]と表示されます。 ■ データベースが利用不能なら、画面には[使用できません。(Not available.)]と表示されます。
停止 (Stop)	選択したデータベースを停止します。
起動 (Start)	選択したデータベースを起動します。
一般 (General)	データベース表領域についての情報が含まれています。 p.946 の「 NetBackup データベース管理ユーティリティの[一般 (General)]タブ 」を参照してください。

プロパティ	説明
ツール (Tools)	選択したデータベースを管理する各種ツールを含んでいます。 p.948 の「NetBackup データベース管理ユーティリティの[ツール (Tools)]タブ」を参照してください。
ドライブ領域 (Drive Space)	ドライブ上の空き領域および使用領域の容量を表示します。 [ドライブ領域 (Drive Space)]ダイアログボックスには、次の情報が表示されます。 ■ ドライブ (Drive) ■ 容量 (Capacity) ■ 使用済み領域 (Used space) ■ 空き領域 (Free space) ■ % 使用済み (% Utilized) ■ 領域 (Space)

NetBackup データベース管理ユーティリティの[一般 (General)]タブ

[一般 (General)]タブはデータベース表領域についての情報を含んでいます。このタブは、管理者がフラグメント化されたデータベースオブジェクトを再編成し、データベースを検証し、再構築することを可能にするツールを含んでいます。

表 23-3 [一般 (General)]タブのオプション

オプション	説明
更新 (Refresh)	最新の情報を表示します。
すべてを再編成 (Reorganize All)	このオプションでは、フラグメント化された表領域を自動的にデフラグします。

オプション	説明
検証 (Validate)	このオプションでは、選択したデータベースのデータベース表領域すべてのデータベース検証が実行されます。 ■ データベースのすべての表でインデックスおよびキーを検証します。 ■ 各表をスキャンします。行ごとに、適切なインデックスに存在するかどうかのチェックが行われます。表の行数は、インデックス内のエントリ数と一致する必要があります。 ■ 各インデックスで参照される行が、いずれも対応する表に存在することが確認されます。外部キーのインデックスに対しては、対応する行がプライマリ表に存在することも確認されます。 検証チェックを実行した後、[結果 (Results)] 画面に各データベースオブジェクトがリストされます。各エラーは検出されたデータベースオブジェクトの横にリストされます。エラーの合計数はデータベースオブジェクトのリストの端にリストされます。エラーが検出されなかった場合は、それが示されます。 検証エラーが報告されたら、次のタスクを実行します。 ■ NetBackup (すべてのデーモンとサービス) を停止します。 ■ NetBackup データベースサーバー (vrtsdbsvc_psqli) のみを起動します。 ■ [検証 (Validate)] をクリックして検証の検査を繰り返すか、または nbdb_admin.exe コマンドラインユーティリティを使用します。 検証エラーが解決しない場合は、Cohesity Technical Support にお問い合わせください。管理者は、[再作成 (Rebuild)] オプションまたは nbdb_unload.exe コマンドラインユーティリティを使用して、データベースを再構築するように求められる場合があります。
再作成 (Rebuild)	このオプションは、データベースをアンロードし、再ロードします。新しいデータベースは、すべてのオプションが同じ状態で所定の場所に構築されます。 [検証 (Validate)] オプションを使用して検証エラーがレポートされた場合、[データベースの再構築 (Database Rebuild)] が必要になることがあります。 メモ: データベースを再構築する前に、[ツール (Tools)] タブからバックアップを実行してデータベースのコピーを作成することをお勧めします。 データベースの再構築は、一時的に NetBackup 操作を中断し、データベースのサイズによっては長時間かかることがあります。

フラグメンテーションについて

表のフラグメンテーションはパフォーマンスを妨げることがあります。行が連続して保存されていない場合、または行が複数のページに分割される場合、これらの行が追加のページアクセスを必要とするのでパフォーマンスが低下します。

行への更新により最初に割り当てられた領域を越えて増加するとき、行は分かれます。初回の行の場所は全体の行が保存される別のページへのポインタを含んでいます。多くの行が別のページに保存されるほど、追加のページにアクセスするのに、より多くの時間が必要になります。

再編成により表とインデックスを保存するために使われるページの合計数が減ることもあります。インデックスツリーのレベル数が減ることがあります。再構成はデータベースの合計サイズを減少させないことに注意してください。

[一般 (General)] タブの [再作成 (Rebuild)] オプションは、データベースを完全に再構築し、フラグメンテーションと空き領域を削除します。このオプションはデータベースの合計サイズを減少させることがあります。

p.925 の「[カタログ領域の要件の見積もり](#)」を参照してください。

NetBackup データベース管理ユーティリティの [ツール (Tools)] タブ

NetBackup データベース管理ユーティリティの [ツール (Tools)] タブは、選択したデータベースを管理する各種ツールを含んでいます。

パスワード	p.948 の「 NetBackup データベース管理ユーティリティを使用して DBA パスワードを変更する 」を参照してください。
データベースの移動	p.949 の「 NetBackup データベースの移動 」を参照してください。
アンロード	p.949 の「 データベースのスキーマおよびデータのエクスポート 」を参照してください。
バックアップ	p.950 の「 データベースのコピーまたはバックアップ 」を参照してください。
リストア	p.951 の「 バックアップからのデータベースのリストア 」を参照してください。

NetBackup データベース管理ユーティリティを使用して DBA パスワードを変更する

データベース管理ユーティリティにログインするには、現在の DBA パスワードを知っている必要があります。

インストール後に初めてパスワードを変更するには、nbdb_admin コマンドを使用します。このコマンドは新しい暗号化文字列で vxdbms.conf ファイルを更新します。

p.939 の「[NetBackup データベースパスワードの変更](#)」を参照してください。

既知のパスワードを新しいパスワードに変更するには、nbdb_admin コマンドまたは NetBackup データベース管理ユーティリティのいずれかを使用します。

DBA パスワードを既知のパスワードからの新しいパスワードに変更する方法

- 1 NetBackup データベース管理ユーティリティを開始し、データベースログオンパスワードを入力します。[OK] をクリックします。
- 2 [ツール (Tools)] タブを選択します。

- 3 [パスワード (Password)] セクションで、[変更 (Change)] をクリックします。
- 4 新しいパスワードを入力し、新しいパスワードを確認します。パスワードの変更では、BMR データベースがある場合、NBDB と BMRDB の両方に対して変更されます。
- 5 パスワードを記録するには [新しい DBA パスワードのバックアップファイルを作成する (Create a backup file of your new DBA password)] を有効にします。
- 6 [OK] をクリックします。
ユーティリティで、パスワードを覚えておくように警告が表示されます。パスワードが利用できないと、NetBackup データベース内の情報をリカバリできません。
- 7 パスワードの変更を有効にするには、データベースを再起動します。

NetBackup データベースの移動

NetBackup データベース管理ユーティリティを使用して、データベースの場所を変更します。

データベースを移動する方法について詳しくは、次のトピックを参照してください。

p.940 の「[インストール後のデータベースの移動](#)」を参照してください。

データベースのスキーマおよびデータのエクスポート

NetBackup データベースからスキーマまたはスキーマとデータをアンロードするには NetBackup データベース管理ユーティリティを使用します。

データベースのスキーマおよびデータをエクスポートする方法

- 1 NetBackup データベース管理ユーティリティを開始し、データベースログオンパスワードを入力します。[OK] をクリックします。
- 2 [ツール (Tools)] タブを選択します。
- 3 [アンロード (Unload)] セクションで、[エクスポート (Export)] をクリックします。
- 4 宛先ディレクトリを参照します。

5 次の 1 つ以上のオプションを選択します。

スキーマ (Schema)	データベースのスキーマのみをアンロードします。スキーマは、名前を指定したディレクトリに <code>database.sql</code> という名前のファイルとしてアンロードされます。NBDB データベースの場合、スキーマは、指定したディレクトリに <code>NBDB.sql</code> という名前のファイルとしてアンロードされます。他のデータベースの場合は、同様のファイルが作成されます。たとえば、BMRDB の場合、ファイルは <code>BMRDB.sql</code> です。NBAZDB の場合、ファイルは <code>NBAZDB.sql</code> です。
スキーマとデータ (Schema and data)	データベースのスキーマおよびデータの両方をアンロードします。データは、カンマ区切り形式のファイルセットとしてアンロードされます。データベース表ごとに 1 つのファイルが作成されます。

6 [OK]をクリックします。

データベースのコピーまたはバックアップ

指定されたディレクトリにデータベースをバックアップするには、NetBackup データベース管理ユーティリティを使用します。

データベースのバックアップコピーを以下の場合に作成することをお勧めします。

データベースを移動する前。	p.949 の「 NetBackup データベースの移動 」を参照してください。
データベースを再構築する前。	p.946 の「 NetBackup データベース管理ユーティリティの[一般 (General)]タブ 」を参照してください。

メモ: NetBackup データベースのバックアップとリストアを行うために NetBackup データベース管理ユーティリティを使うと、NetBackup カタログとデータベース間の一貫性が損なわれる可能性があります。一貫性が損なわれると、データが損失する可能性があります。データベース管理ツールを使うと、予防措置として NetBackup カタログのみのバックアップとリストアを実行できます。

データベースをコピーまたはバックアップする方法

- 1 NetBackup データベース管理ユーティリティを開始し、データベースログオンパスワードを入力します。[OK]をクリックします。
- 2 [ツール (Tools)]タブを選択します。
- 3 [コピー (Copy)]をクリックします。

4 宛先ディレクトリを参照します。

データベースのコピーはこのディレクトリに作成されます。また、このディレクトリは[リストア (Restore)]オプションによって使われるデータベースの場所です。

メモ: このバックアップは、通常の NetBackup 操作の一部として実行されるカタログバックアップではありません。

p.951 の「バックアップからのデータベースのリストア」を参照してください。

5 [OK]をクリックします。

バックアップからのデータベースのリストア

バックアップコピーからデータベースをリストアするには、NetBackup データベース管理ユーティリティを使います。

リストアは現在のデータベースを上書きします。データベースは停止され、リストアが完了した後に再起動されます。

データベースのリストアにより NetBackup アクティビティが中断されます。したがって、アクティブなバックアップまたは他のリストアが実行されている間は、データベースのリストアを実行しないでください。

メモ: NetBackup データベースのバックアップとリストアを行うためにデータベース管理ユーティリティを使うと、NetBackup カタログとデータベース間の一貫性が損なわれる可能性があります。一貫性が損なわれると、データが損失する可能性があります。データベース管理ツールを使うと、予防措置として NetBackup データベースのみのバックアップとリストアを実行できます。

バックアップからデータベースをリストアする方法

- 1 NetBackup データベース管理ユーティリティを開始し、データベースログオンパスワードを入力します。[OK]をクリックします。
- 2 [ツール (Tools)]タブを選択します。
- 3 [リストア (Restore)]をクリックします。
- 4 バックアップデータベースを含んでいるディレクトリを参照します。
- 5 [OK]をクリックします。

UNIX での NetBackup データベース管理ユーティリティの使用

NetBackup データベース管理ユーティリティ (dbadm) は、NBDB と BMRDB でサポートされるスタンドアロンアプリケーションです。これは、次の場所にインストールされます。

```
/usr/opensv/db/bin
```

NetBackup データベース管理ユーティリティを使うには、root ユーザー権限の管理者である必要があります。NetBackup データベース管理ユーティリティを開始するときに DBA パスワードを入力します。パスワードはインストール時にランダムに生成されたパスワードに設定されます。nbdb_admin コマンドを使用し、既知のパスワードに変更します (まだ変更していない場合)。

p.939 の「[NetBackup データベースパスワードの変更](#)」を参照してください。

ログオンした後、NetBackup データベース管理ユーティリティは現在のデータベースについての次の情報を表示します。

表 23-4 NetBackup データベース管理ユーティリティのプロパティ

プロパティ	説明
選択されたデータベース (Selected Database)	選択されたデータベース: NBDB または BMRDB
状態	選択されたデータベースの状態: UP または DOWN
一貫性 (Consistency)	選択されたデータベースの検証の状態: OK、NOT_OK または DOWN

初期画面は次のデータベース管理メインメニューも表示します。

表 23-5 データベース管理のメインメニューオプション

オプション	説明
データベースの選択/再起動とパスワードの変更 (Select/Restart Database and Change Password)	このオプションは、データベースを開始するか、または停止するために選択したり、データベースパスワードを変更したりするためのメニューを表示します。 p.953 の「[データベースの選択/再起動とパスワードの変更 (Select/Restart Database and Change Password)]メニューオプション」を参照してください。
データベース領域管理 (Database Space Management)	このオプションは次の処理を実行できるメニューを表示します。 ■ データベース領域利用率のレポートの生成 ■ フラグメント化されたデータベースオブジェクトの再編成 p.954 の「[データベース領域管理 (Database Space Management)]メニューオプション」を参照してください。

オプション	説明
トランザクションログの管理 (Transaction Log Management)	このオプションはサポートされていません。
データベースの検証チェックおよび再構築 (Database Validation Check and Rebuild)	このオプションは選択したデータベースを検証し、再構築できるメニューを表示します。 p.955 の「 [データベースの検証チェックおよび再構築 (Database Validation Check and Rebuild)] メニューオプション 」を参照してください。
データベースの移動 (Move Database)	このオプションはデータベースの表領域の場所を変更できるメニューを表示します。 p.956 の「 [データベースの移動 (Move Database)] メニューオプション 」を参照してください。
データベースのアンロード (Unload Database)	このオプションはデータベースからスキーマ、またはスキーマとデータをアンロードできるメニューを表示します。 p.957 の「 [データベースのアンロード (Unload Database)] メニューオプション 」を参照してください。
バックアップおよびリストアデータベース (Backup and Restore Database)	このオプションはデータベースのバックアップとリストアオプションを選択できるメニューを表示します。 p.957 の「 [バックアップおよびリストアデータベース (Backup and Restore Database)] メニューオプション 」を参照してください。
データベース状態の更新 (Refresh Database Status)	このオプションはメインメニューの「状態 (Status)」と「一貫性 (Consistency)」を更新します。

[データベースの選択/再起動とパスワードの変更 (Select/Restart Database and Change Password)] メニューオプション

[データベースの選択/再起動とパスワードの変更 (Select/Restart Database and Change Password)] メニューは次のオプションを含んでいます。

表 23-6 [データベースの選択/再起動とパスワードの変更 (Select/Restart Database and Change Password)] オプション

オプション	説明
NBDB	NBDB を選択し、他の dbadm メニューオプションを使ってデータベースを表示するか、または修正します。
BMRDB	BMRDB を選択し、他の dbadm メニューオプションを使ってデータベースを表示するか、または修正します。

オプション	説明
選択されたデータベースの起動 (Start Selected Database)	選択したデータベースを起動します。
選択されたデータベースの停止 (Stop Selected Database)	選択したデータベースを停止します。
パスワードの変更 (Change Password)	データベースのパスワードを変更します。適用可能な場合、パスワードは NBDB および BMRDB の両方で変更されます。パスワードの変更を有効にするには、データベースを再起動します。 データベース管理ユーティリティにログインするには、現在の DBA パスワードを知っている必要があります。 インストール後に初めてパスワードを変更するには、nbdb_admin コマンドを使用します。このコマンドは新しい暗号化文字列で vxdbms.conf ファイルを更新します。 p.939 の「NetBackup データベースパスワードの変更」を参照してください。 既知のパスワードを新しいパスワードに変更するには、nbdb_admin コマンドまたは NetBackup データベース管理ユーティリティのいずれかを使用します。

[データベース領域管理 (Database Space Management)]メニューオプション

次の機能を実行するために[データベース領域管理 (Database Space Management)]オプションを使うことができます。

- データベース領域の使用状況のレポート
- フラグメント化されたデータベースオブジェクトの再構成

表 23-7 [データベース領域およびメモリ管理 (Database Space and Memory Management)]オプション

オプション	説明
データベース領域についてのレポート (Report on Database Space)	レポートには、データベースの表領域および物理パス名が含まれます。 レポートには、各表領域の、名前、KB 単位の空き領域の量、KB 単位のファイルサイズが表示されます。また、レポートには、データベースに使用されている各ファイルシステムの空き領域の残量が表示されます。

オプション	説明
データベースの再構成 (Database Reorganize)	フラグメント化した状態のデータベース表領域を再編成するにはこのオプションを選択します。 [データベースの再構成 (Database Reorganize)]メニューから実行される処理は、次のとおりです。 ■ 1) Defragment All このオプションでは、フラグメント化される表領域が自動的に決定されます。 ■ 2) Table Level Defragmentation このオプションでは、データベースの各表のフラグメンテーションレポートが生成されます。レポートには、各表の TABLE_NAME、ROWS の数、ROW_SEGMENTS の数および SEGS_PER_ROW が示されます。 また、[すべてをデフラグ (Defragment All)]オプションで再構成が自動的に選択された個々の表の ! 列には、* が表示されます。 行セグメントは、1 ページに含まれる 1 行の全体またはその一部分を指します。1 行に、1 つ以上の行セグメントがある場合があります。ROW_SEGMENTS 値は、表の行セグメントの合計数を示します。SEGS_PER_ROW 値は、行ごとのセグメントの平均数を表示し、表がフラグメント化されているかどうかを示します。 SEGS_PER_ROW 値は、1 が最適で、1 より大きい値はフラグメンテーションが進行した状態を示します。たとえば、値 1.5 は、行の半分で分割が行われていることを意味します。 p.947 の「フラグメンテーションについて」を参照してください。

[データベースの検証チェックおよび再構築 (Database Validation Check and Rebuild)]メニューオプション

[データベースの検証チェックおよび再構築 (Database Validation Check and Rebuild)]オプションを使用すると、現在選択されているデータベースを検証および再構築できます。

表 23-8 [データベースの検証チェックおよび再構築 (Database Validation Check and Rebuild)]メニューオプション

オプション	説明
標準検証 (Standard Validation)	標準タイプの検証はサポートされません。このオプションでは完全検証が実行されます。

オプション	説明
完全検証 (Full Validation)	このオプションでは、選択したデータベースのデータベース表領域すべてのデータベース検証が実行されます。 ■ データベースのすべての表でインデックスおよびキーを検証します。 ■ 各表をスキャンします。行ごとに、適切なインデックスに存在するかどうかのチェックが行われます。表の行数は、インデックス内のエントリ数と一致する必要があります。 ■ 各インデックスで参照される行が、いずれも対応する表に存在することが確認されます。外部キーのインデックスに対しては、対応する行がプライマリ表に存在することも確認されます。 メモ: データベースの完全検証を実行するには、NetBackup を停止し、データベースサービスのみを起動します。 検証エラーが報告されたら、次のタスクを実行します。 ■ NetBackup (すべてのデーモンとサービス) を停止します。 ■ NetBackup データベースサーバー (vrtsdbsvc_psqli) のみを起動します。 ■ このツールまたは nbdb_admin コマンドラインユーティリティを使用して、検証チェックを繰り返します。 検証エラーが解決しない場合は、Cohesity Technical Supportにお問い合わせください。管理者は、[データベースの再構築 (Database Rebuild)]オプションまたは nbdb_unload.exe コマンドラインユーティリティを使用して、データベースを再構築するように求められる場合があります。
データベースの再構築 (Database Rebuild)	このオプションはデータベースを再構築することを可能にします。[データベースの再構築 (Database Rebuild)]により、データベースが完全にアンロードおよび再ロードされます。新しいデータベースは、すべてのオプションが同じ状態で所定の場所に構築されます。[標準検証 (Standard Validation)]または[完全検証 (Full Validation)]オプションを使用してデータベースの検証エラーがレポートされた場合、[データベースの再構築 (Database Rebuild)]が必要になる場合があります。 [データベースの再構築 (Database Rebuild)]の実行中に、すべての NetBackup 操作は一時停止されます。 このオプションを選択した場合、データベースを再構築する前に、操作を終了してから[データベースのバックアップ (Backup Database)]オプションによるバックアップを作成することを推奨するメッセージが表示されます。その後、続行するかどうかを選択します。 p.957 の「[バックアップおよびリストアデータベース (Backup and Restore Database)]メニューオプション」を参照してください。

[データベースの移動 (Move Database)]メニューオプション

[データベースの移動 (Move Database)]メニューオプションを使用すると、データベースの場所を変更できます。[データベースの移動 (Move Database)]を選択すると、データベースを移動するディレクトリ名の入力を求められます。

データベースを移動する方法について詳しくは、次のトピックを参照してください。

p.940 の「[インストール後のデータベースの移動](#)」を参照してください。

[データベースのアンロード (Unload Database)]メニューオプション

NBDB または BMRDB データベースからスキーマまたはスキーマとデータをアンロードするには[データベースのアンロード (Unload Database)]メニューオプションを使用します。

データベースの再構築に使用できるファイルが作成されます。アンロードにデータも含まれている場合、カンマ区切り形式のデータファイルセットが作成されます。

[データベースのアンロード (Unload Database)]メニューのオプションは、次のとおりです。

表 23-9 [データベースのアンロード (Unload Database)]メニューオプション

オプション	説明
スキーマのみ (Schema Only)	このオプションはデータベーススキーマのみアンロードすることを可能にします。NBDB データベースの場合、スキーマは、指定したディレクトリに NBDB.sql という名前のファイルとしてアンロードされます。BMRDB の場合、ファイルは BMRDB.sql です。
データおよびスキーマ (Data and Schema)	このオプションを使用すると、データベースのスキーマおよびデータの両方をアンロードできます。データは、ファイルセットとしてアンロードされます。データベース表ごとに 1 つのファイルが作成されます。
ディレクトリの変更 (Change Directory)	このオプションを使用すると、アンロードオプション (1) または (2) で作成されるファイルのディレクトリの場所を変更できます。

[バックアップおよびリストアデータベース (Backup and Restore Database)]メニューオプション

[バックアップおよびリストアデータベース (Backup and Restore Database)]メニューオプションは指定されたディレクトリに NetBackup データベースをバックアップすることを可能にします。以前に作成されたバックアップからリストアできます。

データベースのバックアップコピーを以下の場合に作成することをお勧めします。

- データベースを移動する前。
- データベースを再構築する前。

メモ: NetBackup データベースのバックアップとリストアを行うために NetBackup データベース管理ユーティリティを使うと、NetBackup カタログとデータベース間の一貫性が損なわれる可能性があります。一貫性が損なわれると、データが損失する可能性があります。データベース管理ツールを使うと、予防措置として NetBackup データベースのみのバックアップとリストアを実行できます。

表 23-10 [バックアップおよびリストアデータベース (Backup and Restore Database)]メニューオプション

オプション	説明
オンラインバックアップ (Online Backup)	このオプションを使用すると、データベースの実行中にデータベースのコピーを作成できます。この間、他の NetBackup アクティビティが一時停止されることはありません。
リストアバックアップ (Restore Backup)	このオプションを使用すると、オプション 1 または 2 を使用して、以前に作成したデータベースのコピーからリストアを実行できます。現在実行中のデータベースは上書きされて、データベースは停止され、リストアの完了後に再起動されます。
ディレクトリの変更 (Change Directory)	このオプションを使用すると、バックアップオプション (1) または (2) で作成するデータベースのディレクトリの場所を変更できます。このディレクトリには、リストアオプション (3) で使用されるデータベースが格納されています。

バックアップイメージの管理

この章では以下の項目について説明しています。

- [カタログユーティリティについて](#)
- [カタログユーティリティの検索条件とバックアップイメージの詳細](#)
- [バックアップイメージの検証](#)
- [コピーのプライマリコピーへの昇格](#)
- [バックアップイメージの複製](#)
- [バックアップイメージを期限切れにする場合](#)
- [イメージの依存関係の期限切れのクリーンアップについて](#)
- [バックアップイメージのインポートについて](#)

カタログユーティリティについて

カタログユーティリティを使用して、カタログバックアップの作成と構成を行います。カタログバックアップは、NetBackup で NetBackup 内部データベースを保護するために必要です。カタログには、クライアントのバックアップに関する重要な情報とともに、設定情報が含まれます。カタログバックアップは、サーバーがクラッシュした場合に確実にリカバリできるように、他のバックアップとは別にトラッキングが行われます。

カタログユーティリティは、次の操作を実行するためにも使用できます。

- バックアップイメージを検索して、NetBackup カタログに記録された内容でメディアの内容を検証する場合
p.960 の「[カタログユーティリティの検索条件とバックアップイメージの詳細](#)」を参照してください。
- バックアップイメージを複製する場合
p.965 の「[バックアップイメージの複製](#)」を参照してください。

- バックアップイメージのコピーをプライマリバックアップコピーに昇格する場合
p.964 の「[コピーのプライマリコピーへの昇格](#)」を参照してください。
- バックアップイメージを期限切れにする場合
p.970 の「[バックアップイメージを期限切れにする場合](#)」を参照してください。
- 期限切れのバックアップイメージまたは別の NetBackup サーバーからのイメージをインポートする場合
p.973 の「[期限切れイメージのインポートについて](#)」を参照してください。

カタログユーティリティの検索条件とバックアップイメージの詳細

NetBackup Web UI でカタログユーティリティを使用すると、カタログイメージでさまざまな処理を実行できます。たとえば、イメージを検証または複製します。カタログユーティリティは次のように構成されます。

- [検索 (Search)] タブ
バックアップイメージの検索に使用できる検索条件を提供します。詳しくは、「[表 24-1](#)」を参照してください。
これらの処理と、NetBackup 環境での移動中のデータの暗号化 (DTE) について詳しくは、『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 1](#)』および『[NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド](#)』を参照してください。
バックアップイメージを検索すると、イメージのリストがページの下部に表示されます。[列を表示または非表示 (Show or hide columns)] をクリックすると、イメージに関する追加情報が表示されます。検索結果に表示される追加のプロパティについては、「[検索結果のプロパティ](#)」を参照してください。
- [アクティビティ (Activity)] タブ
イメージの検証、複製、期限切れ設定、またはインポートといった要求の処理状況が表示されます。

検索条件

カタログイメージを検索する場合、次の処理と検索条件を使用できます。

表 24-1 カタログの検索条件

プロパティ		説明
処理 (Action)		イメージの作成時に実行された操作を、[検証 (Verify)]、[複製 (Duplicate)]、[インポート (Import)]から指定します。 p.963 の「バックアップイメージの検証」を参照してください。 p.965 の「バックアップイメージの複製」を参照してください。 p.970 の「バックアップイメージを期限切れにする場合」を参照してください。
メディア (Media)		
	メディア ID (Media ID)	ボリュームのメディア ID。すべてのメディア上を検索するには、[<すべて> (<All>)]を選択します。
	メディアホスト (Media host)	元のバックアップを生成したメディアサーバーのホスト名。すべてのホストを検索するには、[すべてのメディアホスト (All media hosts)]を選択します。
	ディスク形式 (Disk Type)	ストレージユニットのディスク形式。
	ディスクプール (Disk Pool)	ディスクプールの名前。ディスク形式が BasicDisk の場合は無効になります。
	メディアサーバー (Media server)	元のイメージを生成したメディアサーバーの名前。すべてのメディアサーバーを検索するには、[すべてのメディアホスト (All media hosts)]を選択します。
	ボリューム (Volume)	ディスクプールに含まれるディスクボリュームの ID。ディスク形式が BasicDisk ではない場合に有効になります。
	パス (Path)	パスが入力されれば、ディスクストレージユニットのイメージを検索します。または[すべて (All)]を選択したら、指定済みのサーバーのすべてのディスクストレージを検索します。ディスク形式が BasicDisk の場合に有効になります。
日付/時刻範囲 (Date/Time Range)		検索する日時の範囲。デフォルトの範囲は、[グローバル属性 (Global Attributes)]プロパティの[ポリシーの更新間隔 (Policy update interval)]によって決定されます。
コピー、ポリシー、クライアント		
	コピー	検索するコピー。[プライマリコピー (Primary Copy)]またはコピー番号のいずれかを選択します。
	ポリシー名 (Policy name)	選択したバックアップが実行された際のポリシー。すべてのポリシーを検索するには、[すべてのポリシー (All policies)]を選択します。
	ポリシー形式 (Policy type)	ポリシーの目的。

プロパティ		説明
	バックアップ形式 (Type of backup)	バックアップを作成したスケジュールの形式。すべての形式のスケジュールを検索するには、[すべてのバックアップ形式 (All backup types)] を選択します。特定の[ポリシー形式 (Policy type)] を選択する場合に有効にします。
	クライアント (ホスト名) (Client (host name))	バックアップを生成したクライアントのホスト名。すべてのホストを検索するには、[すべてのクライアント (All clients)] を選択します。
ジョブの優先度 (Job priority)		
	デフォルトのジョブの優先度を上書き (Override default job priority)	カタログ操作 (検証、複製、またはインポート) のジョブ優先度。 デフォルトを変更するには、[デフォルト優先度を上書きする (Override default priority)] を有効にします。次に、[ジョブの優先度 (Job priority)] の値を選択します。 このオプションが有効でない場合、ジョブは[デフォルトのジョブの優先度 (Default job priorities)] ホストプロパティで指定されているデフォルトの優先度で実行されます。 変更は選択したジョブの優先度によりのみ影響します。
	ジョブの優先度 (Job priority)	カタログジョブの優先度。デフォルトの優先度を上書きする場合に有効にします。

検索結果のプロパティ

検索に選択できるプロパティに加えて、イメージの他のプロパティも表示されます。

表 24-2 カタログ検索結果のプロパティ

プロパティ	説明
DTE モードのコピー (Copy DTE mode)	現在のイメージコピーの作成時に、セキュアなチャネルを介してデータを転送するかどうかを指定します。
階層 DTE モードのコピー (Copy hierarchy DTE mode)	現在のイメージコピーと、階層内にあるすべての親コピーの作成時に、セキュアなチャネルを介してデータを転送するかどうかを指定します。
有効期限 (Expiration date)	イメージの期限が切れる日付。 このオプションは、管理コンソールでは選択できません。
イメージ DTE モード (Image DTE mode)	バックアップイメージの移動中のデータの暗号化 (DTE) モードを示します。
変更不可 (Immutable)	バックアップイメージが読み取り専用になり、変更、破損または暗号化されないかどうかを示します。

プロパティ	説明
削除不可 (Indelible)	バックアップイメージが期限切れになる前に削除されないように保護されているかどうかを示します。
マルウェアスキャンの状態 (Malware scan status)	バックアップイメージのスキャン状態。
感染状態	バックアップイメージのマルウェア感染状態を表示します。感染は、マルウェアスキャンまたはファイルハッシュ検索によって検出できます。
ミラーコピー (Mirror copy)	イメージがミラーレプリカかコピーかを示します。
保留中 (On hold)	イメージのコピーが保留状態であるかどうかを示します。 はい (Yes): イメージにはコピーは 1 つだけ存在し、コピーには保留が設定されます。 いいえ (No): コピーには保留は設定されません。 保留は、nbholdutil コマンドで設定されます。
時間 (Time)	バックアップが実行された時間。
WORM のロック解除時間 (WORM unlock time)	イメージを変更または削除できる時刻を示します。 WORM 対応のストレージユニットに適用されます。

バックアップイメージの検証

NetBackup では、ボリュームを読み込み、NetBackup カタログに記録されたものと内容を比較することによって、バックアップの内容を検証できます。

この操作では、ボリュームのデータとクライアントディスクの内容は比較されません。ただし、イメージの各ブロックが読み込まれ、そのボリュームが読み込み可能かどうかを検証されます。(ただし、ブロック内のデータは破損している場合があります。) NetBackup は、メディアマウントと位置設定時間を最小化するために、1 回につき 1 つのバックアップのみを検証します。

バックアップイメージを検証する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側の[カタログ (Catalog)]をクリックします。
- 3 [処理 (Action)]リストで[検証 (Verify)]を選択します。
- 4 検証するイメージの検索条件を選択します。[検索 (Search)]をクリックします。

指定されたボリュームにバックアップの一部が存在していれば、他のボリューム上にフラグメントが存在するバックアップも含まれます。

- 5 検証するイメージを選択します。次に、[検証 (Verify)]をクリックします。
- 6 [アクティビティ (Activity)]タブをクリックしてジョブの結果を表示します。

コピーのプライマリコピーへの昇格

各バックアップには、プライマリコピーが割り当てられています。NetBackup では、リストア要求に対してプライマリコピーが使用されます。NetBackup ポリシーによって正常に作成された最初のバックアップイメージが、プライマリバックアップです。プライマリコピーが利用できず、複製コピーが存在する場合、バックアップのコピーを選択してプライマリコピーに設定します。

NetBackup では、プライマリバックアップからリストアが行われ、Vault では、プライマリバックアップから複製が行われます。Vault プロファイルによって複製が実行される場合、いずれかの複製をプライマリコピーとして指定できます。通常、ロボット内に保持されているコピーはプライマリバックアップです。プライマリバックアップの期限が切れた場合、次のバックアップ (存在する場合) が自動的にプライマリコピーに昇格します。

コピーをプライマリコピーに昇格させるには、次の方式のいずれかを使用します。

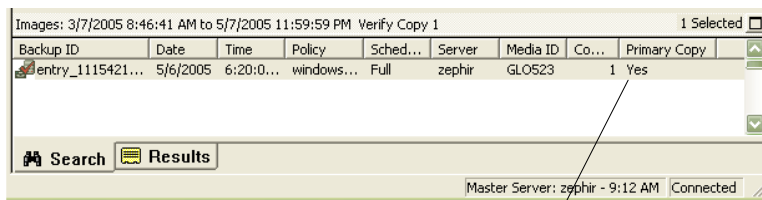
バックアップコピーのプライマリコピーへの昇格

p.964 の「バックアップコピーのプライマリコピーへの昇格」を参照してください。

bpchangeprimary コマンドを使って多くのバックアップのコピーをプライマリコピーに昇格します。

p.965 の「複数のバックアップのコピーのプライマリコピーへの昇格」を参照してください。

図 24-1 プライマリコピーの状態



Backup ID	Date	Time	Policy	Sched...	Server	Media ID	Co...	Primary Copy
entry_1115421...	5/6/2005	6:20:0...	windows...	Full	zephir	GLO523	1	Yes

プライマリコピーの状態はイメージが現在プライマリコピーであることを示します

バックアップコピーのプライマリコピーへの昇格

バックアップコピーをプライマリコピーへ昇格する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側の[カタログ (Catalog)]をクリックします。
- 3 [処理 (Action)]リストから[複製 (Duplicate)]を選択します。

- 4 昇格するイメージを検索するための検索条件を選択します。コピーが[コピー (Copies)]フィールドに表示され、[プライマリコピー (Primary copy)]には表示されないことを確認します。
- 5 [検索 (Search)]をクリックします。
- 6 昇格するイメージを選択します。次に、[プライマリコピーの設定 (Set primary copy)]をクリックします。
イメージがプライマリコピーへ昇格すると、[プライマリコピー (Primary copy)]列にすぐに[はい (Yes)]と表示されます。
- 7 [アクティビティ (Activity)]タブをクリックしてジョブの結果を表示します。

複数のバックアップのコピーのプライマリコピーへの昇格

`bpchangeprimary` について詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

複数のバックアップのコピーをプライマリコピーへ昇格する方法

- ◆ `bpchangeprimary` コマンドを使用すると、複数のバックアップのコピーをプライマリコピーに昇格することもできます。たとえば、次のコマンドで `b_pool` ボリュームプールに属するメディアのすべてのコピーを昇格します。コピーは 2022 年 8 月 1 日より後に作成されたものです。

```
bpchangeprimary -pool b_pool -sd 08/01/2022
```

次の例では、コマンドは `client_a` のすべてのバックアップのコピー 2 を昇格します。コピーは 2022 年 1 月 1 日より後に作成されたものです。

```
bpchangeprimary -copy 2 -cl client_a -sd 01/01/2022
```

バックアップイメージの複製

NetBackup では、複製操作に必要なストレージユニットおよびドライブが利用可能かどうかは、事前に検証されません。NetBackup は宛先ストレージユニットが存在することを確認します。ストレージユニットは、同じメディアサーバーに接続されている必要があります。

表 24-3 は複製できる例と複製できない例を一覧表示します。

表 24-3 バックアップの複製の例

複製可能	複製不可能
■ あるストレージユニットから別のストレージユニットへの複製。 ■ ある密度のメディアから異なる密度のメディアへの複製。 ■ あるサーバーから別のサーバーへの複製。 ■ 多重化形式から非多重化形式への複製。 ■ 多重化形式からの複製で多重化形式を保持する場合。複製には、元の多重化グループに含まれていたバックアップのすべてまたは一部を含めることができます。複製は、テープを 1 回渡すことによって作成されます。(多重化グループとは、1 つのセッション中に多重化されたバックアップの集合です。)	■ バックアップの作成中 (複数のコピーを並列して作成する場合を除く)。 ■ バックアップの期限が切れている場合。 ■ NetBackup を使用して複製を自動的にスケジュールする場合 (Vault ポリシーを使用して複製をスケジュールする場合を除く)。 ■ 次の形式の多重化複製の場合。 ■ FlashBackup ■ NDMP バックアップ ■ ディスク形式のストレージユニットからのバックアップ ■ ディスク形式のストレージユニットへのバックアップ ■ 非多重化バックアップ

バックアップを複製する手順の代替方法として、バックアップ時に最大 4 つのコピーを同時に作成できます。(このオプションは、インラインコピーとも呼ばれます)。別の方法として、ストレージライフサイクルポリシーを使用できます。

p.662 の「[ストレージライフサイクルポリシーを使った複数コピーの書き込みについて](#)」を参照してください。

バックアップイメージを複製する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側の[カタログ (Catalog)]をクリックします。
- 3 [処理 (Action)]リストから[複製 (Duplicate)]を選択します。
- 4 複製するイメージを検索するための検索条件を選択します。
p.960 の「[カタログユーティリティの検索条件とバックアップイメージの詳細](#)」を参照してください。
- 5 複製するイメージを選択し、[複製 (Duplicate)]をクリックします。

カタログバックアップを複製する場合は、カタログバックアップを作成するために使用されたすべての子ジョブを選択します。カタログバックアップを複製するには、すべてのジョブを複製する必要があります。

- 6 作成するコピーの数を指定します。**NetBackup** では、期限が切れていないバックアップのコピーを最大 10 個作成できます。

利用可能なドライブが十分存在する場合、コピーが同時に作成されます。それ以外の場合、たとえばドライブを 2 台だけ使用してコピーを 4 つ作成する場合などに、オペレータの操作が必要になる場合があります。

- 7 プライマリコピーは、リストアが実行されるコピーです。通常、元のバックアップがプライマリコピーです。

複製されたコピーの 1 つをプライマリコピーにする場合、ドロップダウンからコピー番号を選択します。それ以外の場合は、[現在のプライマリコピーを保持する (Keep current primary copy)]を選択します。

プライマリコピーの期限が切れた場合、別のコピーが自動的にプライマリコピーになります。(プライマリコピーとして選択されるコピーは、コピー番号が最小のコピーです。期限が切れたプライマリコピーがコピー 1 である場合、コピー 2 がプライマリコピーになります。期限が切れたプライマリコピーがコピー 5 である場合、コピー 1 がプライマリコピーになります。)

- 8 各コピーが格納されるストレージユニットを指定します。ストレージユニットに複数のドライブが存在する場合、ソースと宛先の両方に使用できます。

すべてのストレージユニットが複数のコピーを作成するための条件に一致している必要があります。

p.777 の「複数のコピーの構成について」を参照してください。

- 9 各コピーが格納されるボリュームプールを指定します。

次のボリュームプールの選択項目は、問い合わせに使用されたポリシー形式の設定に基づいています。

[ポリシー形式 (Policy type)]が[すべてのポリシー形式 (All policy types)](デフォルト)に設定されている場合。	すべてのボリュームプールがドロップダウンリストに含まれることを指定します。カタログとカタログ以外の両方のボリュームプールが含まれます。
--	---

[ポリシー形式 (Policy type)]が[NBU-カタログ (NBU-Catalog)]に設定されている場合。	カタログボリュームプールのみドロップダウンリストに含まれることを指定します。
--	--

[ポリシー形式 (Policy type)]が[NBU-Catalog]と[すべてのポリシー形式 (All policy types)]以外のポリシー形式に設定されている場合。	非カタログボリュームプールのみドロップダウンリストに含まれることを指定します。
--	---

NetBackup では、複製コピーに選択されたメディア ID が、元のバックアップが含まれるメディア ID と異なることは検証されません。これによってデッドロックが発生する可能性があるため、異なるボリュームプールを指定し、異なるボリュームが確実に使用されるようにします。

10 コピーに対する保持レベルを選択するか、[変更なし (No change)]を選択します。

複製コピーは、バックアップ ID を含むプライマリコピーの属性の多くを共有しています。(経過時間などの) その他の属性は、プライマリコピーだけに適用されます。

NetBackup は復元要求を満たすのにプライマリコピーを使います。

保持レベルを選択する場合次の項目を考慮します。

- 保持期間に対して[変更なし (No change)]を選択する場合、有効期限は、複製コピーおよびソースコピーの有効期限と同じです。複製の有効期限は、`bpexpdate` コマンドを使用して変更できます。
- 保持期間が指定されている場合、コピーに対する有効期限は、バックアップの日付に保持期間を足した値になります。たとえば、**2022 年 11 月 14 日**にバックアップが作成され、保持期間が **1 週間**である場合、新しいコピーの有効期限は **2022 年 11 月 21 日**になります。

11 指定したコピーが失敗した場合、残りのコピーを続行するか、失敗させるかを指定します。

12 イメージを複製しているメディアの所有者を指定します。

次のいずれかを選択します。

任意 (Any)

NetBackup がメディア所有者 (メディアサーバーまたはサーバーグループ) を選択するように指定します。

なし

メディアに書き込みを行うメディアサーバーをそのメディアの所有者として指定します。メディアサーバーを明示的に指定しなくても、メディアサーバーがメディアを所有するように設定されます。

サーバーグループ (Server group)

グループ内のメディアサーバーのみが、このポリシーのバックアップイメージが書き込まれるメディアに対して書き込みを行うことができることを指定します。**NetBackup** 環境で構成されているすべてのメディアサーバーグループがドロップダウンメニューに表示されます。

- 13** 選択に多重化バックアップが含まれ、複製でバックアップの多重化を維持する場合、[多重化を維持する (Preserve multiplexing)]を選択します。多重化グループのバックアップの一部を複製しない場合、その複製には異なるレイアウトのフラグメントが含まれます。(多重化グループとは、1 つのセッション中に多重化されたバックアップの集合です。)

デフォルトでは、複製は、メディアのマウントおよび位置設定にかかる時間を最小限に抑えるように逐次実行されます。一度に処理されるバックアップは 1 つだけです。[多重化を維持する (Preserve multiplexing)]がチェックされている場合、NetBackup では、多重化されたバックアップの複製の前に、多重化複製を行わないすべてのバックアップが最初に複製されます。

宛先がディスクストレージユニットの場合、[多重化を維持する (Preserve multiplexing)]設定は適用されません。ただし、ソースがテープで、宛先がディスクストレージユニットの場合、[多重化を維持する (Preserve multiplexing)]を選択すると、テープが 1 回だけ読み込まれるように確実に指定できます。

- 14** [はい (Yes)]をクリックして複製を開始します。
- 15** [アクティビティ (Activity)]タブをクリックし、複製ジョブを選択してジョブの結果を表示します。

p.969 の「[多重化複製の注意事項](#)」を参照してください。

多重化複製の注意事項

多重化複製に関する次の項目を考慮します。

表 24-4 多重化複製の注意事項

注意事項	説明
多重化の設定は無視されます。	多重化されたバックアップを複製する場合、宛先ストレージユニットおよび元のスケジュールの多重化設定が無視されます。ただし、複数の多重化グループを複製する場合、各多重化グループ内のグループ分けは保持されます。すなわち、複製されたグループの多重化因数は、元のバックアップ中に使用された因数より大きくなることはありません。

注意事項	説明
多重化グループのバックアップは複製され、複製されるグループは同一です。	多重化グループのバックアップがストレージユニットに複製される場合、同一のグループが複製されます。ただし、複製先のストレージユニットが、最初にバックアップが実行されたストレージユニットと同じ特性を持っている必要があります。次の場合は例外です。 ■ EOM (end of media) が、ソースメディアか宛先メディアのいずれかで発生した場合。 ■ ソースバックアップのフラグメントのいずれかの長さが 0 (ゼロ) の場合、複製中にこれらのフラグメントが削除されます。長さが 0 (ゼロ) のフラグメントは、複数の多重化バックアップが同時に開始された場合に発生します。

複数のコピー作成中に表示されるジョブ

複数のコピーを並列して作成すると、親ジョブおよび各コピーのジョブが表示されます。

親ジョブでは全体の状態が表示され、コピージョブでは単一のコピーの状態が表示されます。各ジョブの状態を表示することで、ジョブ別にトラブルシューティングを行うことができます。たとえば、1 つのコピーが失敗して他のコピーが正常に行われた場合や、各コピーがそれぞれ異なる理由で失敗した場合などです。1 つ以上のコピーが正常に行われると、親ジョブの状態は正常になります。親ジョブの ID を表示するには、[親ジョブ ID (Parent Job ID)] フィルタを使用します。特定のコピーのコピー番号を表示するには、[コピー番号 (Copy number)] フィルタを使用します。

バックアップイメージを期限切れにする場合

バックアップイメージの期限切れとは、保持期間を強制的に期限切れにすること、あるいはバックアップの情報が削除されることです。保持期間が満了すると、NetBackup はバックアップの情報を削除します。そのバックアップ内のファイルをリストアに利用するには、インポートの実行が必要になります。

バックアップイメージを期限切れにする方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側の[カタログ (Catalog)]をクリックします。
- 3 複製するイメージを検索するための検索条件を選択します。
p.960 の「[カタログユーティリティの検索条件とバックアップイメージの詳細](#)」を参照してください。
- 4 期限切れにするイメージを選択し、[期限切れ (Expire)]、[期限切れ (Expire)]の順にクリックします。

イメージの依存関係の期限切れのクリーンアップについて

イメージの依存関係の期限切れのクリーンアップは、他のバックアップイメージが期限切れのバックアップイメージに依存しているかどうかを確認します。これは、イメージのクリーンアップジョブの一部として実行されます。この機能は、後続の依存バックアップイメージがある場合、バックアップイメージの期限が切れるのを防ぎます。

たとえば、新しい完全バックアップイメージを期限切れにすると、**NetBackup** は完全イメージに依存するバックアップイメージがあるかどうかを確認します。これらの依存イメージには、差分増分 (**INCR**) イメージまたは累積増分 (**CINCR**) イメージが含まれます。期限が切れる完全イメージに依存関係がある場合、そのイメージは保留され、すべての依存関係が期限切れになるか、または削除されるまで期限切れになりません。同様に、バックアップイメージの依存関係が含まれた期限切れになる増分バックアップイメージは、すべての依存関係が期限切れになるか削除されるまで保留状態になります。この処理によって、一連の依存イメージが保持される可能性があります。依存コピーに対して一連の **10** 個の期限切れイメージが保持される例を考えてみます。その場合、一連のイメージをすべて処理および削除するために **10** 個のイメージクリーンアップジョブが必要です。

明示的な期限切れ (`bpexpdate` または **Web UI** の [期限切れ (**Expire**)] 操作による) では、このチェックは実行されないため、イメージの期限切れはブロックされません。

イメージの依存関係の期限切れのクリーンアップは、次のいずれかのサポート対象ポリシーで作成された新しいバックアップイメージにのみ適用されます。

- Cloud
- CloudStorage
- Kubernetes
- MS-Windows
- NDMP
- Hyper-V
- HyperScale
- Hypervisor
- NAS-Data-Protection
- Standard
- VMware
- Nutanix-AHV
- MongoDB Ops Manager

メモ: スケジュールを構成するときは、「永久」増分バックアップによって、各イメージが他のイメージに依存するため、すべてのイメージが永続的に保持される可能性があることに注意してください。このため、完全スケジュールと組み合わせてスケジュールを構成することをお勧めします。

イメージが「依存コピー用に保持」されるかどうかの確認

イメージの依存関係の期限切れのクリーンアップのために保留になっているイメージは、[依存コピー用に保持 (Held for dependent copy)]とマーク付けされ、コピーレベルで報告されます。

イメージコピーが保持されているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
bpimagelist -backupid <backup_ID> -[-l|-L|-json]
```

次の文の出力を確認します。

```
Held For Dependent Copy: yes
```

また、NetBackup Web UI ([カタログ (Catalog)], <backup_image>) を調べて、イメージコピーが保持されているかどうかを確認することもできます。

機能の有効化と無効化

メモ: イメージの依存関係の期限切れのクリーンアップはデフォルトで有効になっています。機能が有効になっている場合、無効になっている場合と比べると、イメージクリーンアップジョブの実行速度が最大 2.5 倍低下する場合があります。

イメージの依存関係の期限切れのクリーンアップが有効かどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
bpconfig -U
```

次の文の出力を確認します。

```
Image Expiry Dependency Check: (enabled)
```

イメージの依存関係の期限切れのクリーンアップを無効にするには、次のコマンドを入力します。

```
bpconfig -image_expiry_dependency_check 0
```

機能を有効にするには、次のコマンドを入力します。

```
bpconfig -image_expiry_dependency_check 1
```

REST API を使用して、機能をオフまたはオンにすることもできます。詳しくは、API のマニュアルを参照してください。

バックアップイメージのインポートについて

NetBackup は期限切れのバックアップ、または別の NetBackup サーバーからのバックアップをインポートできます。

インポート操作中、NetBackup では、インポートされたボリューム上のバックアップに対する NetBackup カタログエントリが再作成されます。インポート機能は、あるサイトから別のサイトへボリュームを移動させる場合、および NetBackup カタログエントリを再作成する場合に有効です。

イメージのインポートは、次の 2 つのフェーズで構成されます。

表 24-5 イメージをインポートするフェーズ

フェーズ	説明
フェーズ I: インポートの開始	NetBackup はインポートされたボリューム上のバックアップに対する期限切れのカタログエントリのリストが作成されます。フェーズ I では、実際のインポートは実行されません。 p.974 の「バックアップイメージのインポート: フェーズ I」を参照してください。
フェーズ II: インポート	フェーズ I で作成した期限切れのイメージのリストから、インポートするイメージを選択します。 p.975 の「バックアップイメージのインポート: フェーズ II」を参照してください。

期限切れイメージのインポートについて

インポートされた項目の有効期限は、現在の日付に保持期間を足したものです。たとえば、バックアップが 2021 年 11 月 14 日にインポートされ、保持期間が 1 週間である場合、新しい有効期限は 2021 年 11 月 21 日です。

バックアップイメージをインポートする場合次の項目を考慮します。

- NetBackup は NetBackup バージョン 6.0 (以降) が書き込むディスクイメージをインポートできます。
- サーバーに、期限が切れていないバックアップのコピーがすでに存在する場合、そのバックアップはインポートできません。
- NetBackup では、インポートされたボリュームはバックアップの宛先に指定できません。
- カタログバックアップをインポートする場合は、カタログバックアップを作成するために使用されたすべての子ジョブをインポートします。カタログバックアップをインポートするには、すべてのジョブをインポートする必要があります。
- サーバーの既存のボリュームと同じメディア ID のボリュームをインポートするには、メディア ID A00001 のボリュームをインポートする次の例を参考にします。(サーバーには、メディア ID が A00001 であるボリュームがすでに存在します。)

- サーバー上の既存のボリュームを別のメディア ID (たとえば B00001) に複製します。
- 次のコマンドを実行して、メディア ID A00001 に関する情報を NetBackup カタログから削除します。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpexpxdate
-d 0 -m mediaID
```

UNIX の場合:

```
/usr/openv/netbackup/bin/admincmd/bpexpxdate -d 0 -m
media_ID
```

- サーバー上の Media Manager からメディア ID A00001 を削除します。
 - サーバー上の Media Manager にもう一方の A00001 を追加します。
- 今後、この問題を回避するには、すべてのサーバー上のメディア ID に対して一意の接頭辞を使用します。

p.970 の「バックアップイメージを期限切れにする場合」を参照してください。

バックアップイメージのインポート: フェーズ I

インポート処理のフェーズ I では、イメージのリストが作成されます。このリストから、フェーズ II でインポートするイメージを選択します。フェーズ I では、インポートは実行されません。

バックアップイメージをインポートする際は、次の点に注意してください。

- テープが使用されている場合、各テープをマウントして読み込む必要があります。カタログの読み込みおよびイメージのリスト作成には時間がかかる場合があります。
- 開始時のバックアップ手順で処理されなかったメディア ID を使ってバックアップを開始した場合、バックアップはインポートされません。
- 開始時のバックアップ手順で処理されなかったメディア ID を使ってバックアップを終了すると、不完全なバックアップとなります。
- カatalogバックアップをインポートする場合は、カatalogバックアップを作成するために使用されたすべての子ジョブをインポートします。

フェーズ I: バックアップイメージのインポートの開始を実行するには

- 1 テープからイメージをインポートする場合は、そのイメージをインポートできるように、メディアのメディアサーバーへのアクセスを確立します。
- 2 NetBackup Web UI を開きます。
- 3 左側の [カタログ (Catalog)] をクリックします。
- 4 [処理 (Actions)] メニューで [フェーズ I (Phase I)] インポートを選択します。

- 5 [メディアサーバー (Media server)]でインポートするボリュームを含むホスト名を入力します。このメディアサーバーがメディアの所有者になります。
- 6 イメージの場所を指定します。[イメージ形式 (Image type)]で、インポートするイメージが、テープまたはディスクのどちらに存在するかを選択します。

次の表はイメージの場所に依存して行う処理を示したものです。

イメージがテープ上に存在する場合	[メディア ID (Media ID)]フィールドには、インポートするバックアップを含むボリュームのメディア ID を入力します。
イメージがディスク上に存在する場合	[ディスク形式 (Disk type)]フィールドで、バックアップイメージを検索するディスクストレージユニットの形式を選択します。ディスク形式は、ライセンスを取得済みの NetBackup オプションによって異なります。 ディスク形式でディスクプールが参照されている場合は、ディスクプールおよびディスクボリューム ID を入力するか選択します。 BasicDisk 形式の場合は、表示されるフィールドにイメージへのパスを入力するか、参照して選択します。 その他のディスク形式については、[<すべて> (<All>)]または特定のボリュームを選択します。

- 7 [インポート (Import)]をクリックして、ソースボリュームからのカタログ情報の読み込みを開始します。
- 8 **NetBackup** がテープ上の各イメージを確認している状態を表示するには、[アクティビティ (Activity)]タブをクリックします。**NetBackup** は、各イメージの期限が切れているかどうか、インポートが可能であるかどうかを判断します。このジョブは、[イメージのインポート (Image Import)]形式としてアクティビティモニターにも表示されます。インポートジョブのログを選択して、ジョブの結果を表示します。

バックアップイメージのインポート: フェーズ II

バックアップをインポートする場合は、まず[インポートの開始 (Initiate Import)]操作 (インポートのフェーズ I) を実行します。最初のフェーズではカタログを読み込み、カタログバックアップイメージを含むメディアをすべて特定します。フェーズ I が完了したら、インポート操作 (フェーズ II) を開始します。フェーズ I の前にフェーズ II を実行すると、メッセージが表示されインポートが失敗します。たとえば、[予期しない EOF です (Unexpected EOF)]や[バックアップのインポートに失敗しました。フラグメントが連続していません。(Import of backup id failed, fragments are not consecutive.)]のようなメッセージが表示されます。

バックアップイメージをインポートする方法: フェーズ II

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側の[カタログ (Catalog)]をクリックします。
- 3 [処理 (Actions)]メニューで[フェーズ II (Phase II)]インポートを選択します。
- 4 インポート可能なイメージを検索するための検索条件を設定します。インポートするイメージを含む日付範囲を選択する必要があります。[検索 (Search)]をクリックします。
- 5 インポートするイメージを選択します。[インポート (Import)]をクリックして、選択したイメージをインポートします。
- 6 インポートしたイメージで見つかったすべてのファイルの名前をログに記録するかどうかを選択します。[OK]をクリックします。
- 7 インポートフェーズ II の進捗を表示するには[アクティビティ (Activity)]タブをクリックします。

NetBackup でのデータの変更不可と削除不可の設定

この章では以下の項目について説明しています。

- 変更不可データと削除不可データについて
- 変更不可データと削除不可データを構成するためのワークフロー
- `bpexpdate` コマンドを使用したストレージからの変更不可イメージの削除
- `bpexpdate` コマンドを使用したカタログからの変更不可イメージの削除

変更不可データと削除不可データについて

NetBackup では、WORM プロパティを使用して、データが暗号化、変更、削除されないように保護します。

WORM は、Write Once Read Many の略語です。

WORM プロパティには、バックアップイメージに対する 2 つの追加のセキュリティレベルがあります。

- 変更不可: この保護により、バックアップイメージは読み取り専用になり、バックアップ後に変更、破損、または暗号化できなくなります。
- 削除不可: このプロパティにより、バックアップイメージが期限切れになる前に削除されないように保護されます。データは悪質な削除から保護されます。

これらの WORM プロパティを構成すると、ランサムウェアなどの特定のマルウェア攻撃からデータをある程度保護できます。

NetBackup は、データが破損しないように WORM ストレージデバイスにバックアップを書き込む機能を提供します。さらに、ストレージベンダーが提供する高度なオプションを

利用して、規制やコンプライアンス要件を満たすために、バックアップをストレージプラットフォーム上で変更できないようにして保持します。

すべての **NetBackup** イメージコピーには有効期限があります。この期限は、スケジュールに設定されている保持レベルとバックアップジョブの開始時刻を使用して計算されます。

NetBackup イメージが **WORM** 対応のストレージユニットに書き込まれると、そのイメージの **WORM** のロック解除時間が過ぎるまでデータを変更することも削除することもできません。バックアップジョブの開始時刻から計算されるコピーの有効期限とは異なり、**WORM** のロック解除時間は **WORM** ストレージに関連付けられます。**WORM** のロック解除時間の値は、保持レベルと、**WORM** ストレージへのバックアップイメージの書き込み完了タイムスタンプを使用して計算されます。

`bpimagerlist` を使用して **WORM** ストレージに書き込まれたイメージを表示する場合、コピーの有効期限に関連付けられたタイムスタンプは、バックアップイメージのコピーの **WORM** のロック解除時間より前になります。実行時間が長いバックアップや複製ジョブの場合、コピーの有効期限と **WORM** のロック解除時間の差が大きくなります。

通常の操作の一環として、**WORM** ストレージのバックアップイメージのコピーは、コピーの有効期限と **WORM** のロック解除時間の両方のタイムスタンプが経過するまでカタログとストレージから削除されません。**WORM** ストレージに書き込まれるコピーの **WORM** のロック解除時間は、延長のみが可能で、短縮できません。有効期限を延長するには、`bpexpdate -extend_worm_locks` コマンドを使用します。

特殊な状況では、`bpexpdate -try_expire_worm_copy` オプションを使用して **NetBackup** カタログから **WORM** 削除不可イメージの試行を強制的に実行できます。このオプションは、ストレージデバイスで **WORM** ロックを直接削除した後のみ使用することをお勧めします。このオプションは、**Cohesity** テクニカルサポートのサポートのもとで使用してください。

WORM ストレージにイメージを複製する場合は、**NetBackup 10.1** で導入された `-worm_unlock_match_expiration` オプションを使用して `bpduplicate` コマンドを実行し、**WORM** のロック解除時間をコピーの有効期限と一致するように設定します。

このコマンドオプションを使用せずに古いバックアップイメージを **WORM** ストレージに複製する場合、複製したコピーの **WORM** のロック解除時間は、設定した保持レベルと、複製ジョブの完了時のタイムスタンプを使用して計算されます。

`bpduplicate -worm_unlock_match_expiration` コマンドオプションは **SLP** に基づいた複製には使用しません。**SLP** に基づいた複製の場合、保持期間を複製ジョブの終了時点から適用して、新しいコピーの **WORM** のロック解除時間が計算されます。新しいコピーの有効期限は、(コピー 1 の) バックアップ時間に適用される保持期間から計算されます。

A.I.R. ジョブの場合、保持期間がインポートジョブの終了時点から適用され、インポートされたコピーの **WORM** のロック解除時間が計算されます。コピーの有効期限は、インポートジョブの開始時点から適用される保持期間によって計算されます。

bpduplicate コマンドおよび bpexptime コマンドについて詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

メモ: bpduplicate -worm_unlock_match_expiration および bpexptime -extend_worm_locks コマンドオプションを使用する場合、NetBackup プライマリサーバーのクロックの精度に依存します。これは、WORM のロック解除時間がそのコピーのイメージの有効期限のタイムスタンプをミラー化するためです。

WORM のロック解除時間を元のバックアップ時間に基づいて計算する方法について詳しくは、次のナレッジベースの記事を参照してください。

[Images duplicated to WORM storage have unlock time calculated from duplication date not backup date](#)

変更不可データと削除不可データを構成するためのワークフロー

変更不可と削除不可を構成してデータを保護するには、次の手順を指定された順序で実行します。

表 25-1 変更不可データと削除不可データを構成するためのワークフロー

手順	説明
1	ストレージサーバーで、次の WORM 設定を構成します。ストレージ管理者は、NetBackup の外部でこれらの設定を構成します。 ■ [WORM 対応 (WORM capable)]: バックアップイメージの作成時に WORM プロパティを使用するようにストレージユニットおよび関連付けられたディスクプールを有効にした場合、バックアップイメージは変更不可および削除不可に設定されます。 ■ [ロックの最小時間 (Lock Minimum Time)]: バックアップイメージのデータが削除不可になる最小時間を指定します。ストレージ管理者は、NetBackup が検出した論理ストレージユニット (LSU) またはドメインボリューム (DV) でこの時間を設定します。 ■ [ロックの最大時間 (Lock Maximum Time)]: バックアップイメージのデータが削除不可になる最大時間を指定します。ストレージ管理者は、NetBackup が検出した論理ストレージユニット (LSU) またはドメインボリュームでこの時間を設定します。 OST ベンダーのプラグインのマニュアルを参照してください。
2	WORM 対応ボリュームを使用してディスクプールを構成します。 p.418 の「 ディスクプールストレージの構成について 」を参照してください。
3	[WORM を使用 (Use WORM)] オプションが有効になっているストレージユニットを構成します。 p.595 の「 WORM 設定の使用 」を参照してください。

手順	説明
4	WORM 対応ストレージユニットを使用してバックアップポリシーを構成します。 p.681 の「バックアップポリシーの作成」を参照してください。

メモ: ストレージの変更またはサードパーティの OST ベンダーソフトウェアのアップグレードの場合は、ストレージサーバーとディスクプールを手動で更新する必要があります。
『[NetBackup アップグレードガイド](#)』の「アップグレード後のシステム更新の完了」セクションを参照してください。

bpexptime コマンドを使用したストレージからの変更不可イメージの削除

変更不可イメージの削除は、ロックの削除を許可するストレージが使用されている場合にのみ可能です。ロックの削除は、**Flex Appliance**、**Flex Scale Appliance**、**Access Appliance** の **Enterprise** モードまたはロックの削除をサポートするサードパーティ製のストレージデバイスを使用して実行できます。変更不可イメージを削除する際は、使用中のストレージがロックの削除を担当し、**NetBackup** がイメージの削除を担当します。

Flex Appliance、**Flex Scale Appliance**、**Access Appliance** を使用する場合は、コマンドラインまたは **SSH** セッションを使用して、イメージのロックを解除する必要があります。サードパーティ製のストレージデバイスを使用している場合は、そのベンダーのマニュアルで、ロックされたイメージを削除する手順を参照してください。

アプライアンスで変更不可イメージを削除する方法

- 1 アプライアンスが **Enterprise** モードであることを確認します。
- 2 **NetBackup** コマンドラインから、bpimagelist コマンドを使用してイメージ ID を見つけます。

この手順では、次のイメージ ID の例を使用します。

Backup ID: server123.veritas.com_1234567890

- 3 コマンドラインオプションまたは **SSH** セッションオプションを使用して、ストレージ上にあるイメージのロックを削除します。
 - **Flex Appliance** の場合: 次のオプションを実行するには、デフォルトの msdpadm ユーザーを使用する必要があります。
 - **Flex Scale Appliance** と **Access Appliance** の場合: アプライアンス管理者の役割を持つアプライアンスユーザーを使用する必要があります。

コマンドラインオプション:

- /usr/opensv/pdde/pdcr/bin/ ディレクトリを開きます。
- 次のコマンドを使用して、指定したバックアップ ID のカタログデータベースを問い合わせ、変更します (例: server123.veritas.com_1234567890)。-worm disable オプションは、バックアップ ID を使用してイメージの保持ロックを無効にします。

```
sudo -u msdpsvc /usr/opensv/pdde/pdcr/bin/catdbutil -worm
disable -backupid
```

SSH セッションオプション:

- **WORM** ストレージサーバーインスタンスへの SSH セッションを開きます。
- retention policy disable コマンドを使用して、指定したポリシーのカタログデータベースを問い合わせ、変更します。policydisable 引数は、保持ロックが設定されているイメージ保持に使用されるポリシー ID を使用してイメージの保持ロックを無効にします。

この手順のコマンドオプションについて詳しくは、『[NetBackup Deduplication ガイド](#)』を参照してください。

- 4 -try_expire_worm_copy オプションを使用して、イメージ ID を bpexpdate に追加します。

```
bpexpdate -d 0 backupid server123.veritas.com_1234567890
-try_expire_worm_copy -copy 1
```

- 5 y または n を使用して削除を確認します。

ストレージロックが削除されない場合、NetBackup は WORM ロックエラーがあることを示すエラーを返します。

p.981 の「[bpexpdate コマンドを使用したカタログからの変更不可イメージの削除](#)」を参照してください。

p.977 の「[変更不可データと削除不可データについて](#)」を参照してください。

bpexpdate コマンドを使用したカタログからの変更不可イメージの削除

変更不可イメージを NetBackup カタログから削除し、そのイメージをストレージに残すことができます。

カタログから変更不可イメージを削除するには

- 1 NetBackup コマンドラインインターフェース (CLI) を開きます。
- 2 `-try_expire_worm_copy` オプションと `-nodelete` オプションを指定した `bpexptime` コマンドを使用して、カタログからイメージを削除します。

```
bpexptime -d 0 -backupid server123.veritas.com_1234567890  
-copy 1 -try_expire_worm_copy -nodelete
```

`-try_expire-worm_copy` オプションと `-nodelete` オプションを同時に使用すると、カタログからイメージが削除されるだけで、ストレージには影響しません。

- 3 y または n を使用して削除を確認します。

p.980 の「[bpexptime コマンドを使用したストレージからの変更不可イメージの削除](#)」を参照してください。

p.977 の「[変更不可データと削除不可データについて](#)」を参照してください。

配備の管理

- [第26章 配備の管理](#)

配備の管理

この章では以下の項目について説明しています。

- [配備ポリシーユーティリティについて](#)
- [配備ポリシーの管理](#)
- [配備ポリシーのコピーによる新しい配備ポリシーの作成](#)
- [\[配備の管理 \(Deployment management\)\]の\[属性 \(Attributes\)\]タブ](#)
- [\[配備の管理 \(Deployment management\)\]の\[スケジュール \(Schedules\)\]タブ](#)
- [\[配備の管理 \(Deployment management\)\]の\[セキュリティオプション \(Security options\)\]タブ](#)
- [配備ポリシーの手動配備](#)
- [VxUpdate を使用したクライアントから開始するアップグレードの実行](#)
- [配備ジョブの状態](#)

配備ポリシーユーティリティについて

配備ポリシーは、クライアントまたはホストのアップグレードツールとして機能する VxUpdate の主要なコンポーネントです。配備ポリシーを使用すると、配備アクティビティをスケジュールに従って構成および実行したり、ホストの所有者が、必要に応じてアップグレードを実行したりすることを可能にします。事前チェック、ステージング、インストールのタスクを、それぞれに固有の配備時間帯を設定した異なるスケジュールを持つ個別のアクティビティとしてスケジュール設定できます。

VxUpdate について詳しくは、『[NetBackup アップグレードガイド](#)』の VxUpdate に関するセクションを参照してください。

配備ポリシーは、NetBackup Web UI の[ホスト (Hosts)]、[配備の管理 (Deployment Management)]にあります。これらのポリシーは、NetBackup がクライアントまたはホスト

をアップグレードするときに従う指示を提供します。このユーティリティを使用して、クライアントまたはホストのアップグレードに関する次の指示を提供します。

アップグレード対象のクライアントまたはホストの種類 p.990 の「[\[配備の管理 \(Deployment management\)\]](#)」の「[属性 \(Attributes\)](#)」タブを参照してください。

アップグレードするクライアントまたはホスト

VxUpdate を実行するタイミング p.992 の「[\[配備の管理 \(Deployment management\)\]](#)」の「[スケジュール \(Schedules\)](#)」タブを参照してください。

クライアントまたはホストに使用するセキュリティオプション

配備ポリシーの管理

以下に示す手順を使用して、配備ポリシーを作成、変更、削除します。

配備ポリシーの作成

メモ: 作業用配備ポリシーを作成する前に、VxUpdate リポジトリにパッケージを追加する必要があります。リポジトリ内にパッケージを追加せずに配備ポリシーを作成できますが、このようなポリシーは正常に実行できません。

パッケージの追加について詳しくは、『[NetBackup アップグレードガイド](#)』の「リポジトリの管理」セクションを参照してください。

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[\[配備の管理 \(Deployment Management\)\]](#)、[\[配備ポリシー \(Deployment Policies\)\]](#)の順に選択します。
- 2 [\[処理 \(Actions\)\]](#)メニューで[\[新しい配備ポリシー \(New Deployment Policy\)\]](#)を選択します。
- 3 新しいポリシー用の一意の名前を[\[新しい配備ポリシーの追加 \(Add a New Deployment Policy\)\]](#)ダイアログボックスに入力します。
- 4 [\[OK\]](#)をクリックします。
- 5 [\[配備ポリシーの変更 \(Change Deployment Policy\)\]](#)ウィンドウの[\[属性 \(Attributes\)\]](#)タブに表示されている情報を指定します。
 - [\[パッケージ \(Package\)\]](#): 配備するパッケージをドロップダウンメニューから選択します。[\[準備完了 \(Ready\)\]](#)状態のパッケージのみを使用できます。

メモ: 外部認証局の証明書をサポートするパッケージを指定すると、[セキュリティ (Security)] という追加タブが表示されます。このタブについては、この手順で後ほど説明します。

- [メディアサーバー (Media server)]: メディアサーバーをドロップダウンメニューから指定します。指定したメディアサーバーは、ポリシーに含まれている NetBackup ホストに接続してファイルを転送するために使用します。メディアサーバーは NetBackup リポジトリからファイルのキャッシュも行います。リポジトリはプライマリサーバーに存在するため、メディアサーバーフィールドのデフォルト値はプライマリサーバーになります。
- Java BAR GUI および JRE: ターゲットシステムで Java BAR GUI と JRE をアップグレードするかどうかを指定します。3 つのオプションがあります。
 - [含める (INCLUDE)]: 指定したコンピュータで Java BAR GUI と JRE コンポーネントをインストールまたはアップグレードします。
 - [除外する (EXCLUDE)]: 指定したコンピュータから Java BAR GUI と JRE コンポーネントを除外します。既存の NetBackup Java BAR GUI および JRE パッケージがすべて削除されます。
 - [一致 (MATCH)]: Java BAR GUI と JRE コンポーネントの現在の状態を保持します。アップグレード前のシステムにコンポーネントが存在する場合、コンポーネントはアップグレードされます。アップグレード前のシステムにコンポーネントが存在しない場合、コンポーネントはインストールされません。
- NetBackup DirectIO: ターゲットシステムで NetBackup DirectIO パッケージをアップグレードするかどうかを指定します。3 つのオプションがあります。
 - [含める (INCLUDE)]: 指定したコンピュータで NetBackup DirectIO パッケージをインストールまたはアップグレードします。
 - [除外する (EXCLUDE)]: 指定したコンピュータから NetBackup DirectIO パッケージを除外します。既存の NetBackup DirectIO パッケージバイナリがすべて削除されます。
 - [一致 (MATCH)]: NetBackup DirectIO パッケージの現在の状態を保持します。アップグレード前のシステムにプラグインが存在する場合、プラグインはアップグレードされます。アップグレード前のシステムにプラグインが存在しない場合、プラグインはインストールされません。
- (該当する場合): [同時ジョブ数の制限 (Limit simultaneous jobs)] オプションを選択し、[ジョブ (Jobs)] の値を指定して、一度に実行できる同時ジョブの合計数を制限します。最小値は 1 で、最大値は 999 です。
チェックボックスにチェックマークが付いている場合、デフォルト値は 3 です。
チェックボックスのチェックマークをはずした場合は、アップグレードの同時ジョブに制限は適用されません。

コマンドラインインターフェースで値を **0** に設定すると、同時アップグレードジョブを無制限に設定できます。

- **[ホストを選択 (Select hosts)]**: [利用できるホスト (Available hosts)]リストからホストを選択し、**[追加 (Add)]**を選択して配備ポリシーにホストを追加します。リストは、ホストデータベースとバックアップポリシーのホストから生成されます。**[追加 (Add)]**を選択すると、**[選択したホスト (Selected hosts)]**にホストが表示されます。

6 **[配備ポリシーの変更 (Change Deployment Policy)]**ウィンドウの**[スケジュール (Schedules)]**タブを選択します。

そのポリシー内の、すべてのスケジュールの概略を確認できます。

7 **[新規 (New)]**を選択します。

8 **[配備スケジュールの追加 (Add Deployment Schedule)]**ウィンドウに表示される情報を指定します。

- **[名前 (Name)]**: 新しいスケジュールの名前を入力します。
- **[形式 (Type)]**: 作成するスケジュールの形式を指定します。

スケジュール形式:

- **事前チェック**
更新のための十分な領域がクライアントにあるかどうかの確認など、さまざまな事前チェック操作を実行します。事前チェックのスケジュール形式は、EEB パッケージ向けには存在しません。
- **段階**
更新パッケージをクライアントに移動します。インストールは行いません。事前チェック操作も実行します。
- **インストール**
指定したパッケージをインストールします。また、事前チェック操作とステージパッケージ操作も実行します。ステージパッケージ操作を実行済みの場合、インストールスケジュールによってパッケージが再度移動されることはありません。

メモ: 複数の異なるスケジュール形式を、同じ配備スケジュール時間帯に追加すると、予測できない結果が生じることに注意してください。**VxUpdate** には、最初にどのスケジュール形式を実行するかを判断するための動作が定義されていません。単一の配備スケジュール時間帯に事前チェック、ステージ、およびインストールのジョブがある場合、それらの実行順序を指定する方法はありません。事前チェックまたはステージのスケジュールが失敗することはありませんが、インストールは正常に完了します。事前チェック、ステージ、インストールのスケジュールを使うことを計画している場合は、それぞれに個別のスケジュールと時間帯を作成することをお勧めします。

- **[開始 (Starts)]:** ポリシーの開始日時を、テキストフィールドに、または日時のスピナを使用して指定します。カレンダーアイコンをクリックして表示されるウィンドウで、日時を指定することもできます。ウィンドウ下部に表示される **3** カ月のカレンダー上でクリックおよびドラッグすると、スケジュールを選択できます。
- **[終了 (Ends)]:** 開始時刻を指定したように、ポリシーを終了する日時を指定します。
- **[期間 (Duration)]:** 必要に応じて、ポリシーの終了時刻ではなく、日、時間、分、秒で期間を指定できます。最小値は **5** 分で、最大値は **99** 日です。
- **[追加 (Add)]** または **[OK]** を選択すると、スケジュールが作成されます。**[OK]** を選択して、ポリシーを保存して作成します。

- 9** **[セキュリティ (Security)]** タブは、外部認証局のサポートを含む配備パッケージを選択すると表示されます。

デフォルトでは、[可能な場合は既存の証明書を使用します。 (**Use existing certificates when possible**)] オプションが選択されています。このオプションは、既存の **NetBackup CA** 証明書または外部 **CA** 証明書が利用可能な場合はそれを使用するように **NetBackup** に指示します。

メモ: このオプションを指定した状態で証明書が使用できない場合、アップグレードは失敗します。

[可能な場合は既存の証明書を使用します (**Use existing certificates when possible**)] オプションを選択解除すると、**UNIX/Linux** コンピュータおよび **Windows** コンピュータの外部認証局情報の場所を指定できます。

このオプションを選択解除すると、ユーザーはアップグレード中にセキュリティ構成の設定を変更できません。

- 10** **Windows** クライアントはデフォルトで、[**Windows** 証明書ストアの使用 (**Use Windows certificate store**)] が選択されています。

証明書の場合は、*Certificate Store Name¥Issuer Distinguished Name¥Subject Distinguished Name* のように入力する必要があります。

メモ: 証明書ストアを指定するときは、任意の名前に対して `$hostname` 変数を使用できます。実行時に `$hostname` 変数はローカルホストの名前を評価します。このオプションを使用すると、**NetBackup** ソフトウェアを多数のクライアントにプッシュインストールするときに柔軟性が高まります。

あるいは、**Windows** 証明書の場所をカンマ区切りのリストで指定できます。たとえば、`MyCertStore¥IssuerName1¥SubjectName,`
`MyCertStore¥IssuerName2¥SubjectName2,`
`MyCertStore4¥IssuerName1¥SubjectName5` のように指定できます。

次に、表示されるラジオボタンから、証明書失効リスト (CRL) オプションを選択します。

- [CRL は使用しない (Do not use a CRL)]: 追加の情報は不要です。
 - [証明書に定義されている CRL を使用する (Use the CRL defined in the certificate)]: 追加の情報は不要です。
 - [次のパスにある CRL を使用する (Use the CRL at the following path)]: CRL のパスを入力するように求められます。
- 11** ■ [証明書ファイル (Certificate file)]: このフィールドには、証明書ファイルへのパスと証明書のファイル名を指定する必要があります。
- [トラストストアの場所 (Trust store location)]: このフィールドには、トラストストアへのパスとトラストストア名を指定する必要があります。
 - [秘密鍵のパス (Private key path)]: このフィールドには、秘密鍵ファイルへのパスと秘密鍵のファイル名を指定する必要があります。
 - [パスフレーズファイル (Passphrase file)]: このフィールドでは、パスフレーズファイルへのパスとパスフレーズのファイル名を指定する必要があります。このフィールドは必要に応じて指定します。
 - お使いの環境の正しい CRL オプションを指定します。
 - [CRL は使用しない (Do not use a CRL)]: 追加の情報は不要です。
 - [証明書に定義されている CRL を使用する (Use the CRL defined in the certificate)]: 追加の情報は不要です。
 - [次のパスにある CRL を使用する (Use the CRL at the following path)]: CRL のパスを入力するように求められます。

配備ポリシーを変更するには

- 1 配備ポリシーを右クリックして、[変更 (Change)]を選択します。
- 2 配備ポリシーの各タブを参照して、ポリシーに必要な変更を加えます。
- 3 [OK]を選択すると、ポリシーが更新されます。

配備ポリシーの削除

- 1 配備ポリシーを右クリックして、[削除 (Delete)]を選択します。
- 2 [OK]を選択します。
- 3 ポリシーの削除を確認します。

配備ポリシーのコピーによる新しい配備ポリシーの作成

ポリシーを作成する時間を節約するために[ポリシーのコピー (Copy policy)]オプションを使います。このオプションは、多数の同じポリシー属性、スケジュール、またはホスト対象を含んでいるポリシーの場合に特に有用です。

配備ポリシーをコピーするには

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Hosts)]、[配備の管理 (Deployment management)]の順に選択します。
- 3 コピーするポリシーを選択します。
- 4 [ポリシーのコピー (Copy policy)]を選択します。
- 5 新しいポリシーの名前を入力します。
- 6 [コピー (Copy)]を選択します。新しいポリシーとコピーされたポリシーの唯一の違いは名前です。

新しいポリシーに必要な変更を加えます。次に[コピー (Copy)]を選択します。

[配備の管理 (Deployment management)]の[属性 (Attributes)]タブ

ポリシーの[属性 (Attributes)]タブを使用して、新しい配備ポリシーを追加するときまたは既存の配備ポリシーを変更するときに、配備の管理設定を行えます。

設定	説明
パッケージ (Package)	配備するパッケージを選択します。 メモ: 作業用配備ポリシーを作成する前に、VxUpdate リポジトリにパッケージを追加する必要があります。リポジトリ内にパッケージを追加せずに配備ポリシーを作成できますが、このようなポリシーは正常に実行できません。 パッケージの追加について詳しくは、『NetBackup アップグレードガイド』の「リポジトリの管理」セクションを参照してください。
メディアサーバー	メディアサーバーを指定します。このメディアサーバーは、ポリシーに含まれている NetBackup ホストに接続してファイルを転送するために使用します。メディアサーバーは、NetBackup 8.1.2 以降のバージョンでなければなりません。リポジトリはプライマリサーバーに存在するため、メディアサーバーフィールドのデフォルト値はプライマリサーバーになります。
同時ジョブ数の制限 (Limit simultaneous jobs)	[同時ジョブ数の制限 (Limit simultaneous jobs)]オプションを選択し、[ジョブ (Jobs)]の値を指定して、一度に実行できる並列実行ジョブの合計数を制限します。 デフォルトは 3 です。最小値は 1 で、最大値は 999 です。 同時アップグレードジョブを無制限に設定する場合は、アップグレードのために選択されたホストの数と同じかそれより大きい値を指定する必要があります。 たとえば、50 台のホストを選択した場合は、[同時ジョブ数の制限 (Limit simultaneous jobs)]の値が 50 以上で、最大値 999 より少ない値に設定されるようにします。
Java GUI および JRE (Java GUI and JRE)	NetBackup 管理コンソールと JRE をターゲットシステムでアップグレードするかどうかを指定します。3 つのオプションがあります。 ■ [一致 (Match)]: NetBackup 管理コンソールと JRE コンポーネントの現在の状態を保持します。アップグレード前のシステムにコンポーネントが存在する場合、コンポーネントはアップグレードされます。アップグレード前のシステムにコンポーネントが存在しない場合、コンポーネントはインストールされません。 ■ [含める (Include)]: 指定したコンピュータで NetBackup 管理コンソールと JRE コンポーネントをインストールまたはアップグレードします。 ■ [除外する (Exclude)]: 指定したコンピュータから NetBackup 管理コンソールと JRE コンポーネントを除外します。既存の NetBackup 管理コンソールおよび JRE パッケージがすべて削除されます。

[配備の管理 (Deployment management)]の[スケジュール (Schedules)]タブ

次のタスクに、[配備の管理 (Deployment management)]の[スケジュール (Schedules)]タブを使用します。

- そのポリシー内のすべてのスケジュールの概略を表示する場合。
- 新しいスケジュールを作成する場合。
- 既存のスケジュールを編集または削除する場合。

[スケジュール (Schedules)]タブで定義するスケジュールは、選択した配備ポリシーで **VxUpdate** を行うタイミングを決定します。カレンダーには、すべてのスケジュールの概略が表示されます。

[スケジュール (Schedules)]タブは、ジョブがいつ実行されるか以外に、スケジュール情報とその他の構成オプションの両方が含まれます。

設定	説明
名前 (Name)	新しいスケジュールの名前を入力します。
操作 (Operation)	スケジュールに関連付ける操作の種類を指定します。 事前チェック - 更新のための十分な領域がクライアントにあるかどうかの確認など、さまざまな事前チェック操作を実行します。事前チェックのスケジュール形式は、EEB パッケージ向けには存在しません。 ステージ - 更新パッケージをクライアントに移動しますが、インストールは行いません。この操作では、事前チェック操作も実行します。 インストール - 指定したパッケージをインストールします。この操作では、事前チェック操作とステージパッケージ操作も実行します。ステージパッケージ操作を実行済みの場合、インストールスケジュールによってパッケージが再度移動されることはありません。 メモ: 複数の異なるスケジュール形式を同じ配備スケジュール時間帯に追加すると、予測できない結果が生じることに注意してください。 VxUpdate には、最初にどのスケジュール形式を実行するかを判断するための動作が定義されていません。単一の配備スケジュール時間帯に事前チェック、ステージ、およびインストールのジョブがある場合、それらの実行順序を指定する方法はありません。事前チェックまたはステージのスケジュールが失敗することはありませんが、インストールは正常に完了します。事前チェック、ステージ、インストールのスケジュールを使うことを計画している場合は、それぞれに個別のスケジュールと時間帯を作成することをお勧めします。

設定	説明
開始日 (Start date)	ポリシーの開始日時を、テキストフィールドに、または日時のスピナを使用して指定します。カレンダーアイコンをクリックして表示されるウィンドウで、日時を指定することもできます。ウィンドウ下部に表示される 3 カ月のカレンダー上でクリックおよびドラッグすると、スケジュールを選択できます。
終了日 (End date)	開始時刻を指定したように、ポリシーを終了する日時を指定します。

[配備の管理 (Deployment management)]の[セキュリティオプション (Security options)]タブ

ポリシーの[セキュリティオプション (Security options)]タブを使用して、外部セキュリティ証明書の設定を行います。これらの設定は、選択したホストが外部証明書 (NetBackup CA 以外の CA に署名された証明書) を使用するように構成されている場合にのみ使用できます。

属性	説明
可能な場合は既存の証明書を使用します (Use existing certificates when possible)	このオプションは、既存の NetBackup CA 証明書または外部 CA 証明書が利用可能な場合はそれを使用するように NetBackup に指示します。デフォルトでは、[可能な場合は既存の証明書を使用します (Use existing certificates when possible)]オプションが選択されています。 [可能な場合は既存の証明書を使用します (Use existing certificates when possible)]オプションを選択解除すると、UNIX および Linux コンピュータ、Windows コンピュータの両方の外部認証局情報の場所を指定できます。 メモ: このオプションを指定した状態で証明書が使用できない場合、アップグレードは失敗します。
Windows 証明書ストアから (From Windows certificate store) (Windows のみ)	Windows 証明書ストアにある証明書を使用するように指定します。[証明書の場所 (Certificate location)]に指定した、ストア名、発行者名、サブジェクト名の詳細を使用して証明書が検索されます。
証明書ファイル (Certificate file)	ホストの外部証明書へのパスを指定します。
トラストストアの場所 (Trust store location)	認証局の pem バンドルへのパスを指定します。

属性	説明
秘密鍵ファイル (Private key file)	ホストの外部証明書の秘密鍵へのパスを指定します。
パスフレーズファイル (Passphrase file)	外部証明書の秘密鍵のパスフレーズが格納されているテキストファイルのパスを指定します。
CRL の確認レベル (CRL check level)	外部証明書の失効確認レベルを指定します。外部証明書の失効の確認を無効にすることもできます。ホストとの通信時に、確認レベルに基づいて証明書失効リスト (CRL) で証明書の状態が検証されます。 NetBackup 構成ファイルまたは CRL 配布ポイント (CDP) で指定されているディレクトリの CRL を使用することを選択できます。
証明書ファイルパスから (ファイルベースの証明書の場合) (From certificate file path (for file-based certificates)) (Windows のみ)	カンマ区切りの句のリストを指定します。句の各要素には、問い合わせが含まれています。句は、<Store name>¥<Issuer Name>¥<Subject Name> の形式になっています。\$hostname は、ホストの完全修飾ドメイン名に置換されるキーワードです。Windows 証明書ストアから証明書を選択する場合、NetBackup は、Windows ホスト上のどのローカルマシン証明書ストアからでも証明書を選択できます。 ■ ストア名 - 証明書が存在する証明書ストア ■ 発行者名 (省略可能) - 証明書の発行者名 ■ サブジェクト名 - 証明書のサブジェクト名 発行者名を指定しない場合、サブジェクト名に基づいて証明書が検索されます。

配備ポリシーの手動配備

既存のポリシーに基づいて、配備ポリシーを手動で開始できます。ローカルでサーバーにログインし、即時に更新を強制実行する必要がある場合は、配備ポリシーを手動で開始します。または、緊急バイナリ用に、即時のアップグレードを開始できます。

配備ジョブを手動で開始するには、[今すぐ配備 (Deploy now)] オプションを使用します。

配備ポリシーを手動で配備するには

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 [ホスト (Hosts)]、[配備の管理 (Deployment management)] の順に移動します。次に、[配備ポリシー (Deployment policies)] タブをクリックします。
- 3 開始するポリシーを選択し、[今すぐ配備 (Deploy now)] を選択します。

- 4 実行する操作とアップグレードするホストを選択します。
ホストを選択しないと、NetBackup はすべてのホストをアップグレードします。
- 5 [今すぐ配備 (Deploy now)]をクリックして、配備ジョブを手動で開始します。

VxUpdate を使用したクライアントから開始するアップグレードの実行

ローカルでサーバーにログインし、即座に更新を強制実行するには、配備ジョブを手動で開始します。また、配備ジョブを使用して、緊急バイナリ用に即時のアップグレードを開始することもできます。

VxUpdate を使用してクライアントからアップグレードを開始する理由には、特定の保守期間が設けられたミッションクリティカルシステムがあります。このようなシステムの一例として、停止時間が限られるデータベースサーバーがあります。

クライアントから開始するアップグレードを管理コンソールから手動で実行する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (Management)]、[ホストプロパティ (Host Properties)]、[クライアント (Clients)]の順に移動します。
- 2 右ペインで、アップグレードするクライアントを右クリックします。[ホストをアップグレード (Upgrade Host)]を選択します。
- 3 [ホストをアップグレード (Upgrade Host)]ダイアログボックスで、次のフィールドを更新します。
 - [パッケージ (Package)]: 配備するパッケージをドロップダウンメニューから選択します。
 - [形式 (Type)]: 配備形式をドロップダウンメニューから選択します。
 - 事前チェック

メモ: 事前チェックのスケジュール形式は、EEB パッケージ向けには存在しません。

- 段階
- インストール (Install)
- [メディアサーバー (Media server)]: メディアサーバーをドロップダウンメニューから指定します。
メディアサーバーは、NetBackup バージョン 8.1.2 以降でなければなりません。リポジトリはプライマリサーバーに存在するため、メディアサーバーフィールドのデフォルト値はプライマリサーバーになります。

- [選択したホスト (Selected hosts)]: 選択したホストのリストを表示します。

コマンドラインオプションを使用して、クライアントから開始するアップグレードを実行することもできます。詳しくは、『NetBackup アップグレードガイド』の「VxUpdate を使用したクライアントから開始するアップグレードの実行」セクションを参照してください。

配備ジョブの状態

アクティビティモニターで、配備ジョブの状態を監視および確認します。配備ジョブ形式は、VxUpdate ポリシーの新しい形式です。状態コード 0 (ゼロ) で終了する配備ポリシーの親ジョブは、すべての子ジョブが正常に完了したことを示します。状態コード 1 で終了する親ジョブは、1 つ以上の子ジョブが成功し、少なくとも 1 つが失敗したことを示します。その他の状態コードは、エラーを示します。子ジョブの状態を確認して、失敗した理由を判断します。それ以外は、配備ジョブとその他の NetBackup ジョブとの間に違いはありません。

配備コードの状態コードが 224 になる場合もあります。このエラーは、クライアントのハードウェアとオペレーティングシステムが誤って指定されていることを示します。このエラーは、次の場所にある `bpplclients` コマンドを使用して配備ポリシーを変更することで修正できます。

Linux の場合: `/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd`

Windows の場合: `install_path¥netbackup¥bin¥admincmd`

次の構文を使用します。

```
bpplclients deployment_policy_name -modify client_to_update -hardware  
new_hardware_value -os new_os_value
```

配備ポリシーは、オペレーティングシステムとハードウェアの値に、簡素化した命名スキームを使用します。bpplclients コマンドに示すように値を使用します。

表 26-1 配備ポリシーのオペレーティングシステムとハードウェア

オペレーティングシステム	ハードウェア
debian	x64
redhat	x64
suse	x64
redhat	ppc64le
suse	ppc64le
redhat	zseries

オペレーティングシステム	ハードウェア
suse	zseries
aix	rs6000
solaris	sparc
solaris	x64
windows	x64

[証明書配備のセキュリティレベル (Security level for certificate deployment)]が[最高 (Very High)]に設定されている場合、セキュリティ証明書は VxUpdate アップグレードの一環としては配置されません。この設定は、[グローバルセキュリティ (Global security)]設定にあります。

クライアントのアップグレードに VxUpdate を使用した後で、クライアントと通信できなくなった場合は、アップグレード中に適切なセキュリティ証明書が発行されたことを確認してください。証明書の手動配備が必要な場合があります。詳しくは、次の記事を参照してください。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100039650>

レプリケーションの構成

- 第27章 [NetBackup](#) のレプリケーションについて

NetBackup のレプリケーションについて

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup レプリケーションについて](#)
- [NetBackup 自動イメージレプリケーションについて](#)
- [NetBackup Replication Director について](#)

NetBackup レプリケーションについて

NetBackup では、次の 2 つの形式のレプリケーションが提供されます。

バックアップ 自動イメージレプリケーション

1 つの NetBackup ドメインから別のドメインの NetBackup メディアサーバーにバックアップをレプリケートする場合は、この形式のレプリケーションを使います。

p.1000 の「[NetBackup 自動イメージレプリケーションについて](#)」を参照してください。

スナップショット NetBackup Replication Director

この形式のレプリケーションでは、NetBackup OpenStorage を使用してプライマリストレージのスナップショットを OpenStorage パートナーのディスクアレイにレプリケートします。

p.1043 の「[NetBackup Replication Director について](#)」を参照してください。

詳しくは、『[NetBackup Replication Director ソリューションガイド](#)』を参照してください。

NetBackup 自動イメージレプリケーションについて

1 つの NetBackup ドメインで生成されたバックアップは、1 つ以上のターゲット NetBackup ドメインのストレージにレプリケートできます。この処理は自動イメージレプリケーションと呼ばれます。

さまざまな地理的なサイトにまたがる場合が多い、他の NetBackup ドメインのストレージにバックアップをレプリケートする機能は、次のようなディザスタリカバリのニーズへの対応を容易にするのに役立ちます。

- 1 対 1 モデル
単一の本番データセンターは 1 つのディザスタリカバリサイトにバックアップできます。
- 1 対多モデル
単一の本番データセンターは複数のディザスタリカバリサイトにバックアップできます。
p.1002 の「[1 対多の自動イメージレプリケーションモデル](#)」を参照してください。
- 多対 1 モデル
複数のドメインのリモートオフィスは単一ドメインのストレージデバイスにバックアップできます。
- 多対多モデル
複数のドメインのリモートデータセンターは複数のディザスタリカバリサイトをバックアップできます。

NetBackup では、次のストレージ形式の自動イメージレプリケーションをサポートします。

表 27-1 NetBackup 自動イメージレプリケーションのストレージ形式

ストレージ形式	詳細情報へのリンク
メディアサーバー重複排除プール (Media Server Deduplication Pool)	『 NetBackup 重複排除ガイド 』を参照してください。
OpenStorage ディスクアプライアンス	ストレージベンダーの製品がレプリケーションをサポートしている場合、異なるプライマリサーバードメインの類似のデバイスに自動的にバックアップイメージをレプリケートできます。 『 ディスクの NetBackup OpenStorage のソリューションガイド 』を参照してください。

自動イメージレプリケーションに関する注意事項

- 自動イメージレプリケーションは合成バックアップまたは最適化された合成バックアップをサポートしません。
- 自動イメージレプリケーションでは、ディスクプールのスパンボリュームはサポートされません。NetBackup では、バックアップジョブがレプリケーション操作も含むストレージライフサイクルポリシー内にある場合は、ボリュームをスパンするディスクプールへのバックアップジョブが失敗します。

- 自動イメージレプリケーションは、ストレージユニットグループからのレプリケートをサポートしません。つまり、ソースコピーはストレージユニットグループにはありません。
- NetBackup の異なるバージョン間で自動イメージレプリケーションを実行する機能は、ベーシックイメージの互換性ルールを却下しません。たとえば、ある NetBackup ドメインで取得されたデータベースバックアップは、以前のバージョンの NetBackup ドメインにレプリケートできます。ただし、古いサーバーでは、新しいイメージから正常にリストアできない場合があります。
バージョンの互換性と相互運用性について詳しくは、次の URL で NetBackup Enterprise Server とサーバーソフトウェアの互換性リストを参照してください。
<http://www.netbackup.com/compatibility>
- 準備ができたらずちにターゲットドメインのプライマリサーバーがイメージをインポートできるように、ソースドメインとターゲットドメインのプライマリサーバーの時計を同期します。ターゲットドメインのプライマリサーバーは、イメージの作成日時になるまでイメージをインポートできません。イメージは協定世界時 (UTC) を使うので、タイムゾーンの違いを考慮する必要はありません。

処理の概要

表 27-2 は、発生ドメインとターゲットドメインのイベントの概要を説明する処理の概要です。

NetBackup は、自動イメージレプリケーション操作を管理するソースドメインとターゲットドメインでストレージライフサイクルポリシーを使います。

p.1016 の「[自動イメージレプリケーションに必要なストレージライフサイクルポリシーについて](#)」を参照してください。

表 27-2 自動イメージレプリケーション処理の概要

イベント	イベントが発生するドメイン	イベントの説明
1	元のプライマリサーバー (ドメイン 1)	クライアントは[ポリシーストレージ (Policy storage)]の選択としてストレージライフサイクルポリシーを示すバックアップポリシーに従ってバックアップされます。SLP には、ターゲットドメインの類似ストレージに少なくともレプリケーション操作を 1 つ含める必要があります。
2	ターゲットプライマリサーバー (ドメイン 2)	ターゲットドメインのストレージサーバーはレプリケーションイベントが起きたことを認識します。ストレージサーバーはターゲットドメインの NetBackup プライマリサーバーに通知します。
3	ターゲットプライマリサーバー (ドメイン 2)	NetBackup は、インポート操作を含んでいる SLP に基づいてイメージをすぐにインポートします。NetBackup は、メタデータがイメージの一部としてレプリケートされるので、イメージをすばやくインポートできます。(このインポート処理は、[カタログ (Catalog)]ユーティリティで利用可能なインポート処理とは異なります。)

イベント	イベントが発生するドメイン	イベントの説明
4	ターゲットプライマリサーバー (ドメイン 2)	イメージがターゲットドメインにインポートされた後、NetBackup はそのドメインのコピーを管理し続けます。構成によっては、ドメイン 2 のメディアサーバーはドメイン 3 のメディアサーバーにイメージをレプリケートできます。

1 対多の自動イメージレプリケーションモデル

この構成では、すべてのコピーが並行して作成されます。コピーは 1 つの NetBackup ジョブのコンテキスト内で作成されるのと同時に、レプリケート元のストレージサーバーのコンテキスト内でコピーが作成されます。1 つのターゲットストレージサーバーが失敗すると、ジョブ全体が失敗し、後で再試行されます。

すべてのコピーには同じ[ターゲットの保持 (Target Retention)]が設定されます。ターゲットのプライマリサーバードメインごとに異なる[ターゲットの保持 (Target Retention)]を設定するには、複数のソースコピーを作成するか、ターゲットのプライマリサーバーに複製をカスケードします。

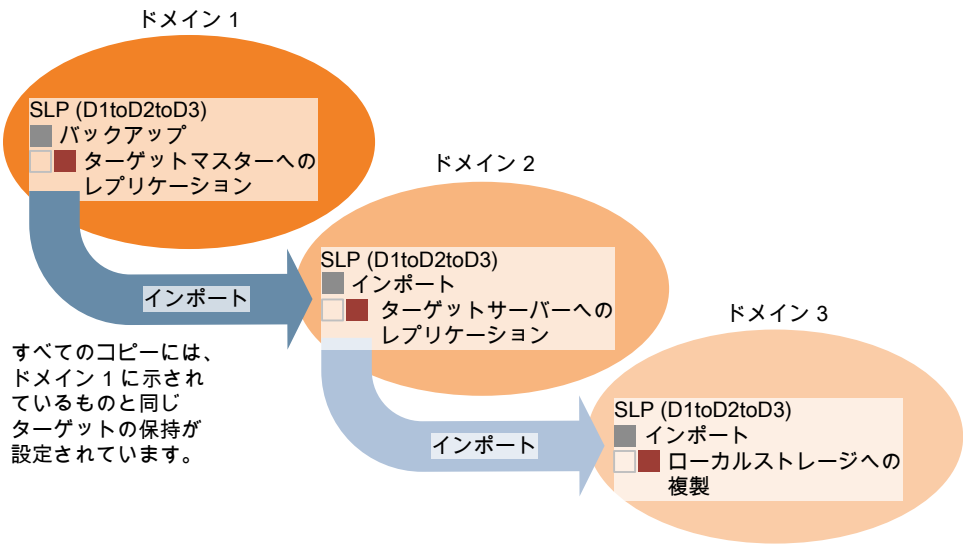
自動イメージレプリケーションモデルのカスケード

レプリケーションはレプリケート元のドメインから複数のドメインにカスケードできます。ストレージライフサイクルポリシーをドメインごとにセットアップして、レプリケート元のイメージを予想し、それをインポートしてから次のターゲットプライマリにレプリケートするようにします。

 **27-1** は、3 つのドメインに渡る次のようなカスケード構成を表します。

- イメージはドメイン 1 で作成されたのち、ターゲットのドメイン 2 にレプリケートされます。
- イメージはドメイン 2 でインポートされてから、ターゲットドメイン 3 にレプリケートされます。
- 次に、イメージはドメイン 3 にインポートされます。

図 27-1 自動イメージレプリケーションのカスケード



このカスケードモデルでは、ドメイン 2 とドメイン 3 の元のプライマリサーバーはドメイン 1 のプライマリサーバーです。

メモ: イメージがドメイン 3 にレプリケートされると、レプリケーション通知イベントはドメイン 2 のプライマリサーバーが元のプライマリサーバーであることを示します。ただし、イメージがドメイン 3 に正常にインポートされると、NetBackup は元のプライマリサーバーがドメイン 1 にあることを正しく示します。

カスケードモデルは、ターゲットプライマリにインポートされたコピーをレプリケートするインポート SLP の特殊な例です。(このプライマリサーバーは、ターゲットプライマリサーバーの文字列の先頭でも末尾でもありません。)

インポート SLP には、[固定 (Fixed)] の保持形式を使う 1 つ以上の操作と、[ターゲットの保持 (Target Retention)] 形式を使う 1 つ以上の操作が含まれている必要があります。したがって、SLP のインポートがこれらの要件を満たすように、レプリケート操作は[ターゲットの保持 (Target Retention)]を使う必要があります。

表 27-3 にインポート操作のセットアップの違いを示します。

表 27-3 インポートされたコピーをレプリケートするように構成された SLP におけるレプリケート操作の違い

インポート操作の基準	カスケードモデルでのインポート操作
最初の操作はインポート操作である必要がある。	同じ、相違なし。

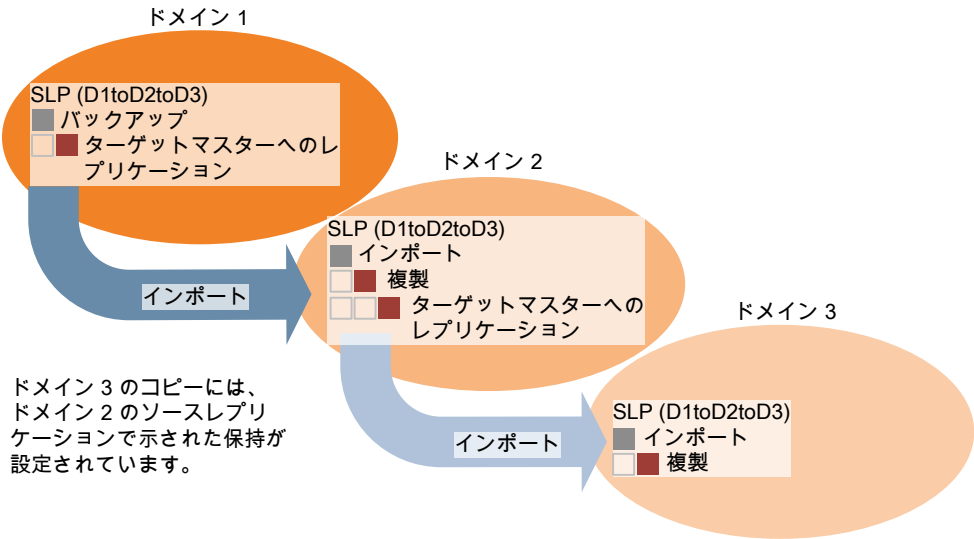
インポート操作の基準	カスケードモデルでのインポート操作
ターゲットプライマリへのレプリケーションは[固定 (Fixed)]の保持形式を使う必要がある。	同じ、相違なし。
1 つ以上のレプリケート操作が[ターゲットの保持 (Target retention)]を使う必要がある。	違いは次のとおりです。 基準を満たすには、レプリケート操作は[ターゲットの保持 (Target retention)]を使う必要があります。

ターゲットの保持はレプリケート元のイメージに埋め込まれます。

図 27-1 に示されているカスケードモデルでは、ドメイン 1 に示されている[ターゲットの保持 (Target Retention)]と同じ[ターゲットの保持 (Target Retention)]が設定されています。

ドメイン 3 のコピーが異なるターゲット保持を持つようにするには、ドメイン 2 のストレージライフサイクルポリシーに中間レプリケート操作を追加します。中間レプリケート操作は、ターゲットプライマリへのレプリケーションのソースとして機能します。ターゲットの保持がレプリケート元のイメージに埋め込まれているので、ドメイン 3 のコピーは中間レプリケート操作に設定されている保持レベルを優先します。

図 27-2 さまざまなターゲットの保持によるターゲットのプライマリサーバーへのレプリケーションのカスケード



複製用のドメインの関係について

以下の表では、NetBackup 自動イメージレプリケーションに使用されるデバイスによって異なる、構成の重要な相違点を説明します。

表 27-4 レプリケーション関係

ストレージ	ドメインの関係
NetBackup 管理下のストレージ	NetBackup 管理下のストレージの場合、元のドメインと (1 つ以上の) ターゲットドメイン間の関係は、ソースストレージサーバーにプロパティを設定することで確立されます。 レプリケーションの条件に合っている NetBackup 管理下のストレージは[メディアサーバー重複排除プール (Media Server Deduplication Pool)]ストレージです。 『NetBackup 重複排除ガイド』を参照してください。 レプリケーション関係を設定する前に、信頼できるホストとしてターゲットプライマリサーバーを追加できます。 p.1012 の「自動イメージレプリケーションの信頼できるプライマリサーバーについて」を参照してください。
サードパーティベンダーのディスクアプライアンス	OpenStorage API によって開示されるサードパーティベンダーのストレージ装置の場合、ディスク装置がストレージを管理します。元のドメインと (1 つ以上の) ターゲットドメイン間の関係はストレージベンダーのツールを使用して構成されます。 元の NetBackup ドメインは、ターゲットドメインのストレージサーバーを知りません。装置が正しく構成されると、元のディスク装置の NetBackup イメージはターゲットのディスク装置に自動的にレプリケートされます。そのディスク装置は OpenStorage API を使用して、レプリケーションイベントが起きたことを NetBackup に通知します。次に NetBackup はそれらのイメージをインポートします。 NetBackup は、バックアップイメージのライフサイクルは管理しますが、ストレージは管理しません。 ディスク装置のレプリケーション関係の設定は、NetBackup のマニュアルの範囲を超えています。

注意: ターゲットストレージサーバーは慎重に選択してください。ターゲットストレージサーバーは元のドメインのストレージサーバーにならないようにする必要があります。

自動イメージレプリケーションのレプリケーショントポロジについて

自動イメージレプリケーションの場合は、ディスクボリュームにボリューム間のレプリケーション関係を定義するプロパティがあります。ボリュームプロパティの認識が、デバイスのレプリケーショントポロジです。ボリュームに含めることができるレプリケーションのプロパティは、次のとおりです。

- ソース
(Source)

ソースボリュームには、クライアントのバックアップが含まれます。このボリュームは、**NetBackup** のリモートドメインにレプリケートされるイメージのソースです。元のドメインの各ソースボリュームでは、ターゲットドメインに 1 つ以上のレプリケーションパートナーのターゲットボリュームがあります。
- ターゲット
(Target)

リモートドメインのターゲットボリュームは、元のドメインにあるソースボリュームのレプリケーションパートナーです。
- なし (None)

ボリュームにレプリケーション属性がありません。

次に、サポート対象のストレージ形式のレプリケーショントポロジを説明します:

表 27-5 ストレージ形式ごとのレプリケーショントポロジ

ストレージ形式	レプリケーショントポロジ
メディアサーバー重複排除プール (Media Server Deduplication Pool)	NetBackup は、[メディアサーバー重複排除プール (Media Server Deduplication Pool)]のストレージを単一ボリュームとして表示します。そのため、MSDP では常に 1 対 1 のボリューム関係があります。 ソースドメインのレプリケーション関係を構成します。 『NetBackup 重複排除ガイド』 を参照してください。
レプリケーションをサポートし、Cohesity OpenStorage API にも準拠するディスクストレージデバイス。	ストレージ管理者は、ストレージデバイス内でボリュームのレプリケーショントポロジを構成します。ボリュームプロパティに基づいて、同質なディスクプールを作成します。つまり、ディスクプール内のすべてのボリュームには同じプロパティが必要なため、そのトポロジと一致するディスクプールを作成します。ディスクプールは、ユーザーがそれに追加するボリュームからレプリケーションのプロパティを継承します。 トポロジを理解して適切なディスクプールを作成するには、ストレージ管理者と連携してください。また、レプリケーショントポロジに対する変更を理解するためにも、ストレージ管理者と連携してください。 NetBackup はディスクプールの構成時にボリュームのトポロジを検出します。

レプリケーション関係を設定すると、**NetBackup** はレプリケーショントポロジを検出します。**NetBackup** は、[ストレージ (Storage)]、[ディスクストレージ (Disk storage)]、[ディスクプール (Disk pools)]の順に移動して、[更新 (Refresh)]オプションを使うときにトポロジの変更を検出します。

NetBackup には、レプリケーショントポロジを理解するうえで役に立つコマンドが含まれます。次の状況では、このコマンドを使ってください。

- レプリケーションターゲットを構成した後。

- ストレージサーバーを構成した後、ディスクプールを構成する前。
- ストレージを構成するボリュームに変更を加えた後。

p.1007 の「[自動イメージレプリケーションのレプリケーショントポロジーの表示](#)」を参照してください。

自動イメージレプリケーションのレプリケーショントポロジーの表示

レプリケーションのソースであるボリュームは、レプリケーションのターゲットである少なくとも 1 つ以上のレプリケーションパートナーが必要です。NetBackup では、ストレージのレプリケーショントポロジーを表示できます。

p.1005 の「[自動イメージレプリケーションのレプリケーショントポロジーについて](#)」を参照してください。

自動イメージレプリケーションのレプリケーショントポロジーを表示するには

- ◆ bpstsinfo コマンドを実行し、ストレージサーバー名とサーバーの形式を指定します。コマンドの構文は次のとおりです。
 - Windows の場合: `install_path\NetBackup\bin\admincmd\bpstsinfo -lsuinfo -storage_server host_name -stype server_type`
 - UNIX の場合: `/usr/openv/netbackup/bin/admincmd/bpstsinfo -lsuinfo -storage_server host_name -stype server_type`

コマンドのオプションおよび引数は次のとおりです。

<code>host_name-storage_server</code>	ターゲットストレージサーバーの名前。
<code>server_type-stype</code>	■ メディアサーバー重複排除プールのターゲットの場合は、PureDisk を使います。 ■ OpenStorage のディスク装置の場合、ベンダーは server_type に文字列を提供します。

出力をファイルに保存して、現在のトポロジーを前のトポロジーと比較して変更箇所を判断できるようにします。

p.1007 の「[MSDP レプリケーション用ボリュームプロパティのサンプル出力](#)」を参照してください。

p.1009 の「[OpenStorage バックアップレプリケーション用ボリュームプロパティのサンプル出力](#)」を参照してください。

MSDP レプリケーション用ボリュームプロパティのサンプル出力

次の 2 つの例は、2 つの NetBackup 重複排除ストレージサーバーに対する bpstsinfo-lsuinfo コマンドの出力を示します。最初の例は、元のドメイン内にあるソー

ディスクプールからの出力です。2 番目の例は、リモートプライマリサーバドメイン内にあるターゲットディスクプールからの出力です。

2 つの例では、次の情報を示します。

- 重複排除ディスクプール内にあるすべてのストレージが、1 つのボリュームとして表示されます。PureDiskVolume。
- 重複排除ストレージサーバ `bit1.datacenter.example.com` の PureDiskVolume は、レプリケーション操作のソースです。
- 重複排除ストレージサーバ `target_host.dr-site.example.com` の PureDiskVolume は、レプリケーション操作のターゲットです。

```
> bpstsinfo -lsuinfo -storage_server bit1.datacenter.example.com -stype PureDisk
```

LSU Info:

Server Name: PureDisk:bit1.datacenter.example.com

LSU Name: PureDiskVolume

Allocation : STS_LSU_AT_STATIC

Storage: STS_LSU_ST_NONE

Description: PureDisk storage unit (/bit1.datacenter.example.com#1/2)

Configuration:

Media: (STS_LSUF_DISK | STS_LSUF_ACTIVE | STS_LSUF_STORAGE_NOT_FREED |
STS_LSUF_REP_ENABLED | STS_LSUF_REP_SOURCE)

Save As : (STS_SA_CLEARF | STS_SA_IMAGE | STS_SA_OPAQUEF)

Replication Sources: 0 ()

Replication Targets: 1 (PureDisk:target_host.dr-site.example.com:PureDiskVolume

)

Maximum Transfer: 2147483647

Block Size: 512

Allocation Size: 0

Size: 74645270666

Physical Size: 77304328192

Bytes Used: 138

Physical Bytes Used: 2659057664

Resident Images: 0

```
> bpstsinfo -lsuinfo -storage_server target_host.dr-site.example.com -stype PureDisk
```

LSU Info:

Server Name: PureDisk:target_host.dr-site.example.com

LSU Name: PureDiskVolume

Allocation : STS_LSU_AT_STATIC

Storage: STS_LSU_ST_NONE

Description: PureDisk storage unit (/target_host.dr-site.example.com#1/2)

Configuration:

Media: (STS_LSUF_DISK | STS_LSUF_ACTIVE | STS_LSUF_STORAGE_NOT_FREED |

```
STS_LSUF_REP_ENABLED | STS_LSUF_REP_TARGET)
Save As : (STS_SA_CLEARF | STS_SA_IMAGE | STS_SA_OPAQUEF)
Replication Sources: 1 ( PureDisk:bit1:PureDiskVolume )
Replication Targets: 0 ( )
Maximum Transfer: 2147483647
Block Size: 512
Allocation Size: 0
Size: 79808086154
Physical Size: 98944983040
Bytes Used: 138
Physical Bytes Used: 19136897024
Resident Images: 0
```

OpenStorage バックアップレプリケーション用ボリュームプロパティのサンプル出力

次の例は、2 台の OpenStorage デバイスに対する `bpstsinfo` コマンドからのサンプル出力を示します。最初の例は、クライアントバックアップを含むソースディスクプールからの出力です。2 番目の例は、リモートプライマリサーバードメイン内にあるターゲットディスクプールからの出力です。

2 つの例では、次の情報を示します。

- ストレージサーバー `pan1.example.com` のボリューム `dv01` は、`pan2.example.com` のボリューム `dv01` のレプリケーションソースです。
- ストレージサーバー `pan1.example.com` のボリューム `dv02` は、`pan2.example.com` のボリューム `dv02` のレプリケーションソースです。
- 両方のデバイスのボリューム `dv03` には、レプリケーションプロパティがありません。

```
>bpstsinfo -lsuinfo -storage_server pan1.example.com -stype Pan
```

LSU Info:

```
Server Name: pan1.example.com
LSU Name: dv01
Allocation : STS_LSU_AT_STATIC
Storage: STS_LSU_ST_NONE
Description: E:¥
Configuration:
Media: (STS_LSUF_DISK | STS_LSUF_STORAGE_FREED | STS_LSUF_REP_ENABLED |
STS_LSUF_REP_SOURCE)
Save As : (STS_SA_IMAGE)
Replication Sources: 0 ( )
Replication Targets: 1 ( Pan:pan2.example.com:dv01 )
Maximum Transfer: 2147483647
Block Size: 512
```

Allocation Size: 0
 Size: 80525455360
 Physical Size: 0
 Bytes Used: 2285355008
 Physical Bytes Used: 0
 Resident Images: 0

LSU Info:

Server Name: pan1.example.com
 LSU Name: dv02
 Allocation : STS_LSU_AT_STATIC
 Storage: STS_LSU_ST_NONE
 Description: E:¥
 Configuration:
 Media: (STS_LSUF_DISK | STS_LSUF_STORAGE_FREED | STS_LSUF_REP_ENABLED |
 STS_LSUF_REP_SOURCE)
 Save As : (STS_SA_IMAGE)
 Replication Sources: 0 ()
 Replication Targets: 1 (Pan:pan2.example.com:dv02)
 Maximum Transfer: 2147483647
 Block Size: 512
 Allocation Size: 0
 Size: 80525455360
 Physical Size: 0
 Bytes Used: 2285355008
 Physical Bytes Used: 0
 Resident Images: 0

LSU Info:

Server Name: pan1.example.com
 LSU Name: dv03
 Allocation : STS_LSU_AT_STATIC
 Storage: STS_LSU_ST_NONE
 Description: E:¥
 Configuration:
 Media: (STS_LSUF_DISK | STS_LSUF_STORAGE_FREED)
 Save As : (STS_SA_IMAGE)
 Replication Sources: 0 ()
 Replication Targets: 0 ()
 Maximum Transfer: 2147483647
 Block Size: 512
 Allocation Size: 0
 Size: 80525455360
 Physical Size: 0
 Bytes Used: 2285355008

Physical Bytes Used: 0

Resident Images: 0

>bpstsinfo -lsuinfo -storage_server pan2.example.com -stype Pan

LSU Info:

Server Name: pan2.example.com

LSU Name: dv01

Allocation : STS_LSU_AT_STATIC

Storage: STS_LSU_ST_NONE

Description: E:¥

Configuration:

Media: (STS_LSUF_DISK | STS_LSUF_STORAGE_FREED | STS_LSUF_REP_ENABLED |
 STS_LSUF_REP_TARGET)

Save As : (STS_SA_IMAGE)

Replication Sources: 1 (Pan:pan1.example.com:dv01)

Replication Targets: 0 ()

Maximum Transfer: 2147483647

Block Size: 512

Allocation Size: 0

Size: 80525455360

Physical Size: 0

Bytes Used: 2285355008

Physical Bytes Used: 0

Resident Images: 0

LSU Info:

Server Name: pan2.example.com

LSU Name: dv02

Allocation : STS_LSU_AT_STATIC

Storage: STS_LSU_ST_NONE

Description: E:¥

Configuration:

Media: (STS_LSUF_DISK | STS_LSUF_STORAGE_FREED | STS_LSUF_REP_ENABLED |
 STS_LSUF_REP_TARGET)

Save As : (STS_SA_IMAGE)

Replication Sources: 1 (Pan:pan1.example.com:dv02)

Replication Targets: 0 ()

Maximum Transfer: 2147483647

Block Size: 512

Allocation Size: 0

Size: 80525455360

Physical Size: 0

Bytes Used: 2285355008

Physical Bytes Used: 0

```

Resident Images: 0
LSU Info:
  Server Name: pan2.example.com
  LSU Name: dv03
  Allocation : STS_LSU_AT_STATIC
  Storage: STS_LSU_ST_NONE
  Description: E:¥
  Configuration:
  Media: (STS_LSUF_DISK | STS_LSUF_STORAGE_FREED)
  Save As : (STS_SA_IMAGE)
  Replication Sources: 0 ( )
  Replication Targets: 0 ( )
  Maximum Transfer: 2147483647
  Block Size: 512
  Allocation Size: 0
  Size: 80525455360
  Physical Size: 0
  Bytes Used: 2285355008
  Physical Bytes Used: 0
  Resident Images: 0

```

自動イメージレプリケーションの信頼できるプライマリサーバーについて

NetBackup は、レプリケーションドメイン間の信頼関係を確立する機能を備えています。メディアサーバー重複排除プールをターゲットストレージにする場合、信頼関係の確立は省略できます。ストレージサーバーをターゲットストレージとして構成するには、まずソースの **A.I.R.** 操作とターゲットの **A.I.R.** 操作間に信頼関係を確立します。

以下の項目は、信頼関係が自動イメージレプリケーションにどのように影響するかを示します。

信頼関係なし

NetBackup は、定義されたすべてのターゲットストレージサーバーにレプリケートします。特定のホストをターゲットとして選択することはできません。

信頼関係

信頼できるドメインのサブセットは、レプリケーションのターゲットとして選択できます。**NetBackup** は、構成されたすべてのレプリケーションターゲットよりもむしろ指定されたドメインのみにレプリケートします。この種類の自動イメージレプリケーションは「ターゲット型 **A.I.R (Targeted A.I.R)**」として知られます。

NetBackup CA が署名した証明書を使用した信頼できるプライマリサーバーの追加について

ターゲット型 A.I.R. では、ソースサーバーとリモートターゲットサーバー間で信頼を確立するときに、両方のドメインで信頼を確立する必要があります。

1. ソースプライマリサーバーで、信頼できるサーバーとしてターゲットプライマリサーバーを追加します。
2. ターゲットプライマリサーバーで、信頼できるサーバーとしてソースプライマリサーバーを追加します。

メモ: NetBackup Web UI は、外部 CA が署名した証明書を使用した、信頼できるプライマリサーバーの追加をサポートしていません。

p.175 の「[信頼できるプライマリサーバーの追加](#)」を参照してください。

p.174 の「[信頼できるプライマリサーバーを追加するときに使用する証明書について](#)」を参照してください。

次の図は、NetBackup CA が署名した証明書 (またはホスト ID ベースの証明書) を使用してソースプライマリサーバーとターゲットプライマリサーバー間の信頼を確立する場合に、信頼できるプライマリサーバーを追加する際のさまざまなタスクを示しています。

図 27-3 NetBackup CA が署名した証明書を使用して、ターゲット型 A.I.R. でプライマリサーバー間の信頼関係を確立するタスク

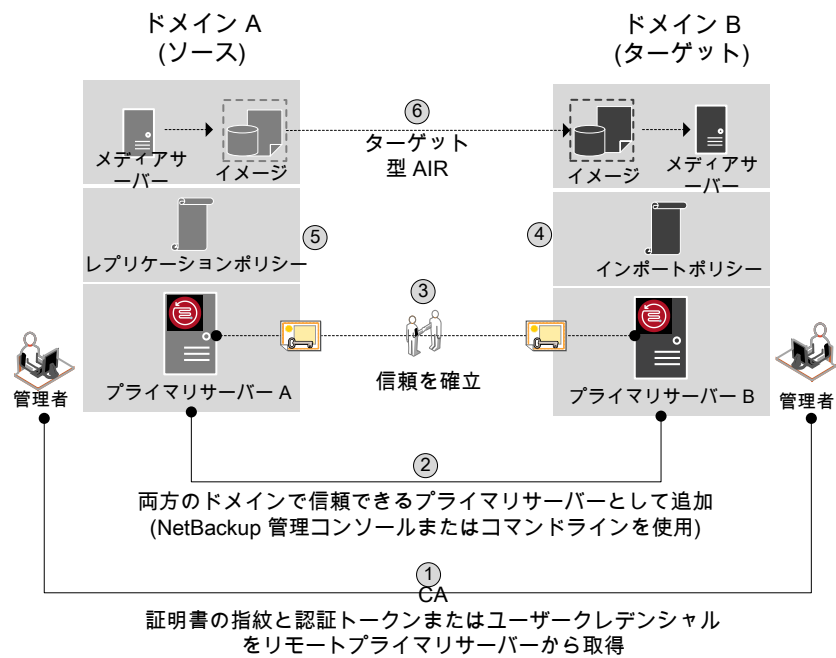


表 27-6 ターゲット型 A.I.R. でプライマリサーバー間の信頼関係を確立するタスク

手順	タスク	手順詳細
手順 1	ソースとターゲットの両方のプライマリサーバーの管理者は、お互いの CA 証明書指紋と認証トークンまたはユーザークレデンシャルを取得する必要があります。このアクティビティはオフラインで実行する必要があります。 メモ: 認証トークンを使用してリモートプライマリサーバーに接続することをお勧めします。認証トークンは制限付きアクセスを提供し、両方のホスト間のセキュア通信を可能にします。ユーザークレデンシャル (ユーザー名とパスワード) の使用はセキュリティ違反となることがあります。	認証トークンを取得するには、bpnbat コマンドを使用してログインし、nbcertcmd で認証トークンを取得します。 root 証明書の SHA1 指紋を取得するには、nbcertcmd -displayCACertDetail コマンドを使用します。 このタスクを実行するには、『 NetBackup コマンドリファレンスガイド 』を参照してください。 メモ: コマンドを実行するときは、ターゲットをリモートサーバーとして保持します。

手順	タスク	手順詳細
手順 2	ソースドメインとターゲットドメイン間の信頼を確立します。 ■ ソースプライマリサーバーで、信頼できるサーバーとしてターゲットプライマリサーバーを追加します。 ■ ターゲットプライマリサーバーで、信頼できるサーバーとしてソースプライマリサーバーを追加します。	NetBackup Web UI でこのタスクを実行するには、次のトピックを参照してください。 p.175 の「信頼できるプライマリサーバーの追加」を参照してください。 nbseccmd を使用してこのタスクを実行するには、『NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。
手順 3	ソースとターゲットの信頼できるサーバーを追加したら、お互いのホスト ID ベースの証明書を持ちます。証明書は、それぞれの通信時に使用されます。 プライマリサーバー A はプライマリサーバー B が発行した証明書を持ち、その逆も同様になります。通信を行う前に、プライマリサーバー A はプライマリサーバー B が発行した証明書を提示します (その逆も同様です)。これで、ソースとターゲットのプライマリサーバー間の通信がセキュリティで保護されます。	ホスト ID ベースの証明書の使用について詳しくは、『NetBackup セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。
手順 3.1	セキュリティ証明書とホスト ID の証明書をターゲットプライマリサーバーから取得するようにソースメディアサーバーを構成します。	『NetBackup 重複排除ガイド』を参照してください。 https://support.cohesity.com/s/article/article-100040135
手順 4	ターゲットドメインにインポートストレージライフサイクルポリシーを作成します。 メモ: インポートストレージライフサイクルポリシー名は 112 文字以下である必要があります。	p.624 の「ストレージライフサイクルポリシーについて」を参照してください。
手順 5	ソース MSDP サーバーで、ターゲットストレージサーバーのクレンジンシャルを追加します。	『NetBackup 重複排除ガイド』を参照してください。 https://support.cohesity.com/s/article/article-100040135
手順 5.1	特定のターゲットプライマリサーバーとストレージライフサイクルポリシーを使用してソースドメインにレプリケーションストレージライフサイクルポリシーを作成します。 1 つの NetBackup ドメインで生成されたバックアップは、1 つ以上のターゲット NetBackup ドメインのストレージにレプリケートできます。	p.624 の「ストレージライフサイクルポリシーについて」を参照してください。
手順 6	1 つの NetBackup ドメインで生成されたバックアップは、1 つ以上のターゲット NetBackup ドメインのストレージにレプリケートできます。この処理は自動イメージレプリケーションと呼ばれます。	p.1000 の「NetBackup 自動イメージレプリケーションについて」を参照してください。

自動イメージレプリケーションに必要なストレージライフサイクルポリシーについて

ある NetBackup ドメインから別の NetBackup ドメインにイメージを複製するには、2 つのストレージライフサイクルポリシーが必要です。次の表は、ポリシーおよび必要条件を記述したものです:

表 27-7 自動イメージレプリケーションの SLP 要件

ドメイン	ストレージライフサイクルポリシーの要件
ドメイン 1 (ソースドメイン)	ソースドメインの自動イメージレプリケーションの SLP は、次の基準を満たす必要があります: ■ 最初の操作は、NetBackup がレプリケーションをサポートしているストレージへのバックアップ操作である必要があります。 ドロップダウンリストから正確なストレージユニットを指定してください。[任意 (Any Available)]は選択しません。 ■ メモ: イメージをインポートするためには、ターゲットドメインに同じストレージ形式が含まれている必要があります。 ■ 少なくとも 1 つの操作は、NetBackup がソースストレージからレプリケーションをサポートしているストレージへの [レプリケーション (Replication)] 操作である必要があります。 自動イメージレプリケーションの SLP で、複数のレプリケーション操作を設定できます。[レプリケーション (Replication)] 操作の設定で、バックアップがすべてのプライマリサーバードメインのすべてのレプリケーションターゲットで複製されるか、特定のレプリケーションターゲットのみに複製されるかを決定します。 ■ この SLP はドメイン 2 のインポート SLP と同じデータ分類である必要があります。
ドメイン 2 (ターゲットドメイン)	すべてのドメインのすべてのターゲットに複製する場合、各ドメインで、必要なすべての条件を満たすインポート SLP が NetBackup で自動的に作成されます。 メモ: 特定のターゲットに複製する場合、元のドメインで自動イメージレプリケーションの SLP を作成する前にインポート SLP を作成します。 インポート SLP は次の基準を満たす必要があります。 ■ SLP の最初の操作は[インポート (Import)]操作である必要があります。NetBackup は、ソースストレージからの複製のターゲットとして宛先ストレージをサポートしていなければなりません。 ドロップダウンリストから正確なストレージユニットを指定してください。[任意 (Any Available)]は選択しません。 ■ SLP には、[ターゲットの保持 (Target retention)]が指定された操作が 1 つ以上含まれている必要があります。 ■ この SLP はドメイン 1 の SLP と同じデータ分類である必要があります。データ分類の一致により、分類に対して一貫した意味が保たれ、データ分類によるグローバルな報告が促進されます。

元のプライマリサーバードメインからのイメージがターゲットドメイン上の SLP 設定によってレプリケーションされる例を図 27-4 に示します。

図 27-4

自動イメージレプリケーションに必要なストレージライフサイクルポリシーのペア

Edit Storage Lifecycle Policy

Storage lifecycle policy

Validation report

Storage lifecycle policy name

SLP-MSDP-Rep

Data classification

No data classification

Priority for secondary operations

0

+ Add

Operation	Window	Storage	Volume pool	Media owner	Retention type	Retention period
☐ Backup		stu_local			Fixed	2 weeks
☐ Replication	Default_24x7_Window	SLP-MSDP-Rep			Fixed	2 weeks

2 Records

State of secondary operation processing

To find impact on policies associated with this SLP due to change in configuration click here.

Cancel

Save

Edit Storage Lifecycle Policy

Storage lifecycle policy

Validation report

Storage lifecycle policy name

SLP-MSDP-Rep

Data classification

No data classification

Priority for secondary operations

0

+ Add

Operation	Window	Target primary	Storage	Storage type	Volume pool	Media owner
☐ Import	Default_24x7_Window		stu_local_sad60vm00	PureDisk		

1 Records

State of secondary operation processing

To find impact on policies associated with this SLP due to change in configuration click here.

Cancel

Save

メモ: SLP で操作をする場合には、基になるストレージへ変更を加えた後で nbstserv を再起動してください。

すべてのドメイン間ターゲットまたは特定ターゲットへのレプリケーション

自動イメージレプリケーションを使うと、設定したすべてのレプリケーションターゲット、または設定したすべてのレプリケーションのサブセットにバックアップをレプリケートできます。

特定のプライマリサーバードメインにレプリケートするには、最初に、信頼できるプライマリサーバーを構成する必要があります。

p.1012 の「[自動イメージレプリケーションの信頼できるプライマリサーバーについて](#)」を参照してください。

表 27-8 すべてのドメイン間ターゲットまたは特定ターゲットへのレプリケーションの構成の違い

レプリケーションの目的	自動イメージレプリケーション SLP の構成	インポート SLP の構成
すべての構成済みプライマリサーバードメインにバックアップをレプリケートします。	ソースドメインに SLP を作成します。 ■ 最初の操作は[バックアップ (Backup)]操作である必要があります。 ■ SLP は[レプリケーション (Replication)]操作を含む必要があります。 すべてのドメインにコピーするには、[ストレージサーバーのすべてのドメイン間レプリケーションターゲット (All inter-domain replication target(s) for the storage server)]を選択します。	すべてのドメインでインポート SLP が自動的に作成されます。 このシナリオの表現については、 図 27-5 を参照してください。
特定の NetBackup プライマリサーバードメインのターゲットに、バックアップをレプリケートします。	この場合、ソースドメイン内の SLP より先に、まずインポート SLP を作成します。 ■ 最初の操作は[バックアップ (Backup)]操作である必要があります。 ■ SLP は[レプリケーション (Replication)]操作を含む必要があります。 [特定のマスターサーバー (A specific Master Server)]を選択し、ターゲットプライマリサーバーのドメインを示します。	インポート SLP は自動的に作成されません。 メモ: ソースドメイン内で自動イメージレプリケーション SLP を作成する前に、インポート SLP を作成します。 各ターゲットドメイン内にインポート SLP を作成します。 インポート SLP は、最初の操作として[インポート (Import)]操作を行う必要がありますが、必要に応じて他の操作を含むこともあります。 図 27-6 は、このシナリオを表します。

自動イメージレプリケーション SLP のための追加要件について、次のトピックで説明します。

p.1016 の「[自動イメージレプリケーションに必要なストレージライフサイクルポリシーについて](#)」を参照してください。

図 27-5 1つのドメインからすべてのドメイン間プライマリサーバーへのレプリケーション

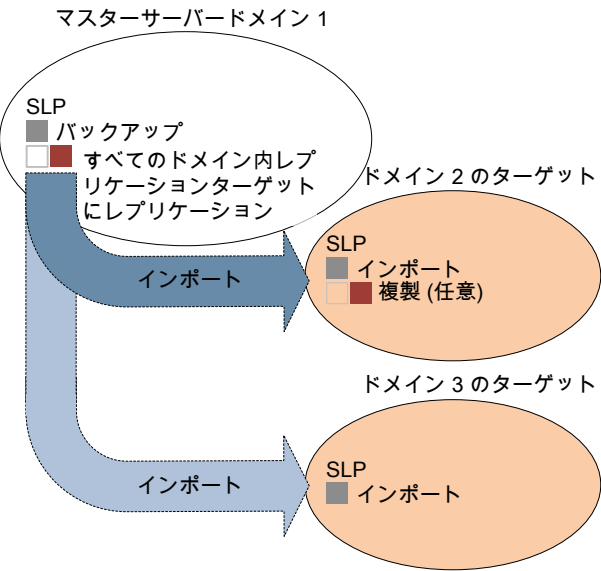
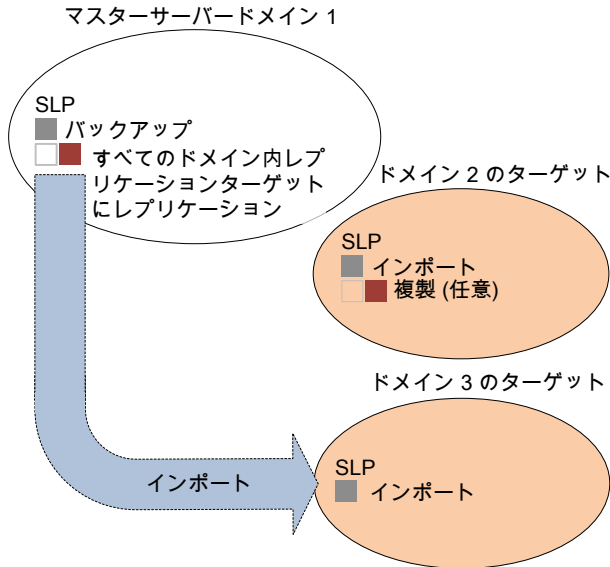


図 27-6 は、特定のプライマリドメインターゲットへのレプリケーションを表します。

図 27-6 1 つのドメインから特定のドメイン間プライマリサーバーへのレプリケーション



特定のドメインに複製をレプリケートするには、ターゲットドメインのプライマリサーバーがソースドメインの信頼できるプライマリサーバーであることを確認する必要があります。

p.175 の「[信頼できるプライマリサーバーの追加](#)」を参照してください。

nbstserv による複製ジョブおよびインポートジョブ実行のカスタマイズ

NetBackup の Storage Lifecycle Manager (nbstserv) はレプリケーション、複製、インポートジョブを実行します。Storage Lifecycle Manager サービスとインポートマネージャサービスの両方が nbstserv 内で実行されます。

NetBackup の管理者は、特定の SLP 関連の構成オプションのデフォルトを変更することで、nbstserv がジョブをどのように実行するかをカスタマイズできます。

p.179 の「[\[SLP 設定 \(SLP settings\)\]プロパティ](#)」を参照してください。

自動イメージレプリケーションのインポートの確認について

対象設定された自動イメージレプリケーション (A.I.R.) を使用すると、レプリケートされた各イメージのストレージライフサイクル (SLP) 処理が、イメージが正常にインポートされたことを確認するメッセージをターゲットドメインから受信するまで、ソースドメインで一時停止します。そのイメージが確認されるまで、SLP 処理は再開されません。インポートの確

認によって、少なくともターゲットドメインにイメージが安全にインポートされるまで、ソースドメインイメージがそのまま残ります。

ソースドメインでは、**NetBackup** は 24 時間を超えてインポート保留中の状態にあるイメージコピーを追跡します。このようなイメージが発生するたびに、**NetBackup** により、メッセージが生成されて[問題 (Problems)]レポートに出力されます。このメッセージは、インポート保留中のイメージが存在することを示します。確認メッセージが生成されるのに必要な、別の時間しきい値を設定することもできます。[問題 (Problems)]レポートに送信された情報と同じ情報を受信する電子メールアドレスを設定することもできます。

p.179 の「[SLP 設定 (SLP settings)]プロパティ」を参照してください。

イメージがインポート保留中の状態にあるという通知を受信するには、nbstlutil コマンドを実行します。このコマンドは、そのようなイメージの詳細を記載したレポートを生成します。これを使用してインポートの問題の原因を調査し、見つかった問題に対処する必要があります。インポートが完全に成功した場合は、インポート保留中の状態は自動的に更新されます。または、ターゲットドメインでのインポート操作が不要になったと判断することもできます。その場合には、ソースドメインのイメージの SLP 処理をキャンセルできます。この処理によってもインポート保留中の状態が解除されますが、そのようなイメージに対しては後続の SLP 処理は行われません。

nbstlutil について詳しくは『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

自動イメージレプリケーションのセットアップ概要

次の表は、自動イメージレプリケーションのセットアップ処理を概説し、必要な操作を説明しています。

表 27-9 自動イメージレプリケーションのセットアップ概要

手順	処理	説明
1	ストレージサーバーを構成します。	ストレージ形式に応じてストレージサーバーを構成します。 『NetBackup Deduplication ガイド』 または『 ディスクの NetBackup OpenStorage ソリューションガイド 』を参照してください。
2	ディスクブールを構成します。	ストレージ形式に応じてディスクブールを構成します。 1 つのドメインから別のドメインへイメージをレプリケートするには、各ドメインに適切なストレージを構成する必要があります。 NetBackup はレプリケーションでストレージをサポートしている必要があります。 『NetBackup Deduplication ガイド』 または『 ディスクの NetBackup OpenStorage ソリューションガイド 』を参照してください。

手順	処理	説明
3	ストレージユニットを構成します。	レプリケート元のドメインとターゲットのドメインの両方でストレージユニットを構成します。 p.565 の「 ストレージユニットの作成 」を参照してください。
4	ドメイン間の関係を定義します。	データの送信先がレプリケート元のドメインにわかるようにドメイン間の関係を定義します。 p.1005 の「 複製用のドメインの関係について 」を参照してください。 p.1012 の「 自動イメージレプリケーションの信頼できるプライマリサーバーについて 」を参照してください。
5	ストレージライフサイクルポリシーを構成します。	必要なストレージライフサイクルポリシーを構成します。 p.1016 の「 自動イメージレプリケーションに必要なストレージライフサイクルポリシーについて 」を参照してください。 p.625 の「 ストレージライフサイクルポリシーの作成 」を参照してください。
6	レプリケート元のドメインのバックアップポリシーを構成し、実行します。	バックアップポリシーは[ポリシーストレージ (Policy storage)]の選択として、構成された SLP を示す必要があります。 p.681 の「 バックアップポリシーの作成 」を参照してください。

自動イメージレプリケーションのボリューム変更を解決する方法

ディスクプールを編集するとき、NetBackup はディスクプールのプロパティをカタログからロードします。NetBackup は、[ディスクプール (Disk pools)] タブの[更新 (Refresh)] ボタンをクリックするか、[ディスクボリュームの更新 (Update disk volume)] オプションを選択すると、ストレージサーバーに変更の問い合わせを行います。

ボリュームのトポロジーが変化したときに次の処置をとることを推奨します。

- ストレージ管理者と変更について話し合います。必要に応じてディスクプールを変更して NetBackup がディスクプールを使い続けることができるようにするために、変更を把握する必要があります。
- NetBackup に変更が計画されていなかった場合、NetBackup が正しく機能するように変更を元に戻すようにストレージ管理者に依頼します。

NetBackup は次のボリュームプロパティへの変更を処理できます。

- レプリケーションソース (Replication source)
- レプリケーションターゲット (Replication target)
- なし

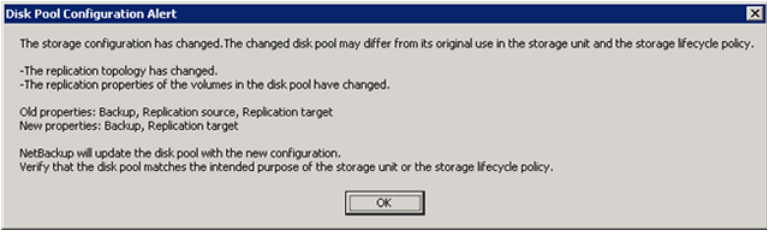
これらのボリュームプロパティが変化した場合、NetBackup はその変化と一致するようにディスクプールを更新できます。NetBackup はそのディスクプールを使い続けることがで

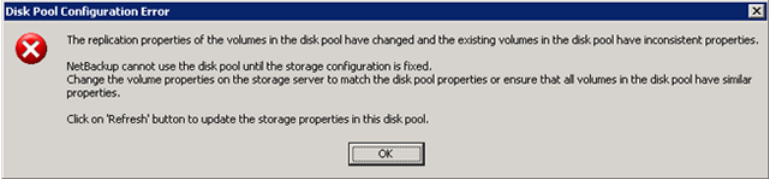
きますが、ディスクプールはストレージユニットまたはストレージライフサイクルの目的に合
わなくなっている可能性があります。

次の表で、考えられる結果と、それらを解決する方法を説明します。

表 27-10 更新の結果

結果	説明
変更は検出されません。	変更は必要ありません。
NetBackup はディスクプールに追 加できる新しいボリュームを検出しま す。	新しいボリュームは、そのディスクプールのプロパティに表示されます。

結果	説明
すべてのボリュームのレプリケーションプロパティは変わりましたが、一貫性はまだ維持されています。	[ディスクプール構成の警告 (Disk Pool Configuration Alert)]ポップアップには、ディスクプール内のすべてのボリュームのプロパティが変わったが、プロパティがすべて同じ (同質) であることを知らせるメッセージが表示されます。 A screenshot of a Windows-style dialog box titled "Disk Pool Configuration Alert". The text inside reads: "The storage configuration has changed. The changed disk pool may differ from its original use in the storage unit and the storage lifecycle policy." followed by two bullet points: "-The replication topology has changed." and "-The replication properties of the volumes in the disk pool have changed." Below this, it lists "Old properties: Backup, Replication source, Replication target" and "New properties: Backup, Replication target". At the bottom, it says "NetBackup will update the disk pool with the new configuration. Verify that the disk pool matches the intended purpose of the storage unit or the storage lifecycle policy." and has an "OK" button. [ディスクプールの変更 (Change Disk Pool)]ダイアログボックスのディスクプールプロパティが新しいボリュームプロパティと一致するように更新された後は、警告ダイアログボックスで[OK]をクリックする必要があります。 新しいプロパティと一致する新しいプロパティが利用可能になると、NetBackup は[ディスクプールの変更 (Change Disk Pool)]ダイアログボックスにそれらのプロパティを表示します。ディスクプールにそれらの新しいボリュームを追加できます。 [ディスクプールの変更 (Change Disk Pool)]ダイアログボックスでは、次の 2 つの選択肢から 1 つを選択してください。 ■ OK。 ディスクプールの変更を受け入れるには、[OK]を[ディスクプールの変更 (Change Disk Pool)]ダイアログボックスでクリックします。NetBackup はディスクプールの新しいプロパティを保存します。 NetBackup はディスクプールを使うことができますが、このディスクプールはストレージユニットまたはストレージライフサイクルポリシーの意図した目的と合わなくなっている可能性があります。レプリケーション操作で正しいソースとターゲットのディスクプール、ストレージユニット、ストレージユニットグループが使われるようにするために、ストレージライフサイクルポリシー定義を変更してください。あるいは、管理者と協力してボリュームプロパティを元の値に戻します。 ■ キャンセル (Cancel)。 ディスクプールの変更を破棄するには、[キャンセル (Cancel)]を[ディスクプールの変更 (Change Disk Pool)]ダイアログボックスでクリックします。NetBackup は新しいディスクプールプロパティを保存しません。NetBackup はディスクプールを使うことができますが、このディスクプールはストレージユニットまたはストレージライフサイクルポリシーの意図した目的と合わなくなっている可能性があります。

結果	説明
ボリュームのレプリケーションプロパティが変更され、今は一貫性が失われています。	[ディスクプール構成エラー (Disk Pool Configuration Error)]ポップアップボックスには、ディスクプール内の一部のボリュームのレプリケーションプロパティが変わったことを知らせるメッセージが表示されます。ディスクプールのボリュームのプロパティが同質ではありません。 A screenshot of a Windows-style error dialog box titled "Disk Pool Configuration Error". It features a red "X" icon in a circle. The text inside reads: "The replication properties of the volumes in the disk pool have changed and the existing volumes in the disk pool have inconsistent properties. NetBackup cannot use the disk pool until the storage configuration is fixed. Change the volume properties on the storage server to match the disk pool properties or ensure that all volumes in the disk pool have similar properties. Click on 'Refresh' button to update the storage properties in this disk pool." At the bottom right is an "OK" button. 警告ダイアログボックスの[OK]をクリックする必要があります。 [ディスクプールの変更 (Change Disk Pool)]ダイアログボックスでは、ディスクプールのプロパティは変更されないままで、プロパティを選択することができません (つまり淡色表示されます)。ただし、個々のボリュームのプロパティは更新されます。 ボリュームプロパティが同質ではないので、NetBackup はストレージ構成が修正されるまでディスクプールを使うことができません。 NetBackup はディスクプール内の既存のボリュームが同質ではないので、(新しいボリュームがあったとしても) 新しいボリュームを表示しません。 変更されたボリュームを特定するには、ディスクプールプロパティとボリュームプロパティを比較します。 p.1007 の「自動イメージレプリケーションのレプリケーショントポロジの表示」を参照してください。 ストレージ管理者と協力して、変更点とその変更を行った理由を把握します。レプリケーション関係の再確立は必要な場合と不要な場合があります。関係がエラーで削除された場合、関係の再確立は必要であると考えられます。レプリケーションターゲットデバイスを廃止中または交換中の場合、関係の再確立はおそらく必要ではありません。 ディスクプールは、ディスクプール内の各ボリュームのプロパティが同種になるまで使用できません。 [ディスクプールの変更 (Change Disk Pool)]ダイアログボックスで[OK]または[キャンセル (Cancel)]をクリックすると、[ディスクプールの変更 (Change Disk Pool)]ダイアログボックスが終了します。

結果	説明
NetBackup はディスクプール内にあったボリュームを検出できません。	[ディスクプール構成の警告 (Disk Pool Configuration Alert)]ポップアップボックスには、1 つまたは複数の既存のボリュームがストレージデバイスから削除されたことを知らせるメッセージが表示されます。 Disk Pool Configuration Alert  An existing volume in this disk pool cannot be found on the storage device and is no longer available to NetBackup. The volume might be offline or deleted. If deleted, any data on that volume is lost. Volume(s) deleted: dv02 Refer to documentation for information on how to resolve this issue. OK NetBackup はディスクプールを使うことができますが、データが失われる可能性があります。手違いによるデータ損失を避けるために、NetBackup ではディスクプールからボリュームを削除することはできません。 ディスクプールを使い続けるには、次のことを実行してください。 ■ bpimmediaコマンドまたは[ディスク上のイメージ (Images On Disk)]レポートを使用して、特定のボリュームのイメージを表示する。 ■ ボリューム上のイメージを期限切れにする。 ■ nbdevconfig コマンドを使用して、ボリュームを停止状態に設定する。そうすることで、NetBackup では使われません。

自動イメージレプリケーション構成でのレプリケーション関係の削除または置換

自動イメージレプリケーションでは、ソースドメインのストレージサーバーから 1 つ以上のターゲット NetBackup ドメインにバックアップがレプリケートされます。このような関係からストレージサーバーを削除または置換する必要がある場合は、関与するドメインでレプリケーションの停止またはリダイレクトを行うための適切な準備を行う必要があります。すなわち、レプリケーション関係の削除を行う必要があります。

たとえば、3 つのドメインでカスケード式の自動イメージレプリケーションが使われているシナリオを想定します。ドメイン 1 からのインポートの宛先として機能するドメイン 2 を削除するには、3 つすべてのドメインで準備を行う必要があります。この準備では、ストレージライフサイクルポリシーの変更、レプリケーショントポロジからのストレージサーバーの削除が含まれます。

図 27-7 ターゲットストレージサーバーを削除する例

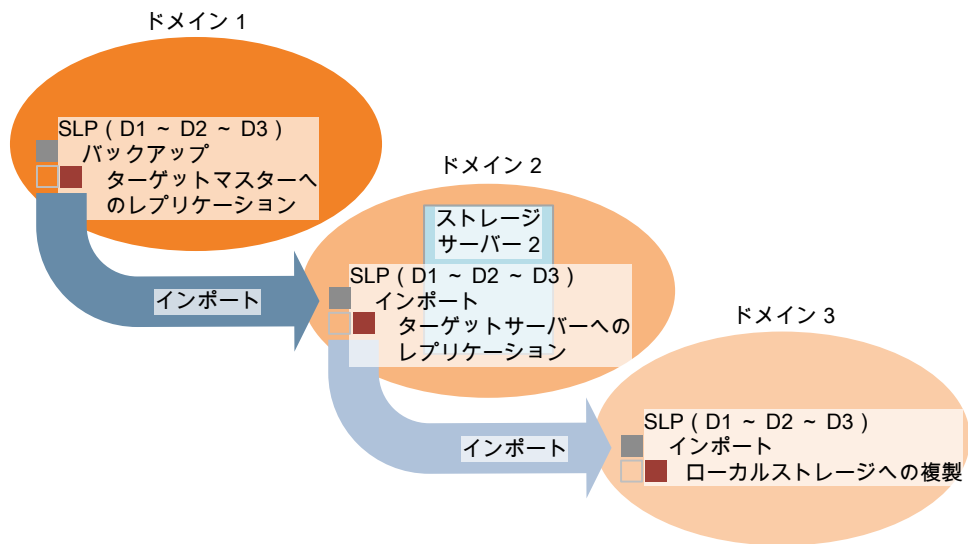


表 27-11 には、自動イメージレプリケーション構成の関係を削除または置換するための手順を説明する項が記載されています。

表 27-11

トピック	参照先
2 つのストレージサーバー間のレプリケーション関係の追加。	p.1028 の「2 つのストレージサーバー間でのレプリケーション関係の追加または削除」を参照してください。
2 つのストレージサーバー間のレプリケーション関係の削除。	
ドメインとストレージサーバー間のレプリケーション関係の削除。	p.1028 の「ドメインとストレージサーバー間のすべてのレプリケーション関係の削除」を参照してください。
ドメインとストレージサーバー間のレプリケーション関係の置換。	p.1030 の「ドメインとストレージサーバー間のすべてのレプリケーション関係の置換」を参照してください。
すべてのストレージサーバー間のレプリケーション関係の削除。	p.1034 の「ストレージサーバーが関与するすべてのレプリケーション関係の削除または置換」を参照してください。
すべてのストレージサーバー間のレプリケーション関係の置換。	

2つのストレージサーバー間でのレプリケーション関係の追加または削除

レプリケーション関係を追加する前に、この操作がもたらす結果を理解する必要があります。

- ソースドメインストレージサーバーからレプリケートする標準(または非ターゲット)の自動イメージレプリケーションのストレージライフサイクルポリシーは、ターゲットドメインストレージサーバーにレプリケートします。

レプリケーション関係を削除する前に、この操作がもたらす結果を理解する必要があります。

- ソースドメインストレージサーバーからレプリケートする標準(または非ターゲット)の A.I.R. SLP は、ターゲットドメインストレージサーバーにレプリケートしなくなります。
- ソースドメインストレージサーバーからターゲットドメインストレージサーバーにレプリケートするターゲット A.I.R. SLP は失敗します。これらの SLP については、削除または変更して、ターゲットドメインにレプリケートしないようにする必要があります。

次の手順を実行して、2つのストレージサーバー間でレプリケーション関係の追加または削除を行います。

レプリケーション関係を変更(追加または削除)する方法

- 1 この手順は、OpenStorage または MSDP ストレージを使うかどうかによって異なります。
 - OpenStorage ストレージの場合は、ベンダーによって手順が異なるため、ストレージ管理者に問い合わせしてからレプリケーション関係を変更してください。
 - MSDP ストレージの場合は、NetBackup 管理者がソースドメインで関係を変更できます。
- 2 関係を変更した後に、両方のドメインのディスクプールを更新して、トポロジーの変更を反映させます。

[ストレージ (Storage)]、[ディスクストレージ (Disk storage)]の順に選択します。次に、[ディスクプール (Disk pools)]タブを選択します。ディスクプールを選択して更新します。nbdevconfig -updatedp コマンドを使うこともできます。(自動イメージレプリケーションのレプリケーショントポロジーについては、『OpenStorage ソリューションガイド』を参照してください。)

ドメインとストレージサーバー間のすべてのレプリケーション関係の削除

2つのドメイン間のすべてのレプリケーション関係を削除するには、次の手順を実行します。この手順では、ドメイン D2 のストレージサーバーとドメイン D1 を参照します。

ドメインとストレージサーバー間のすべてのレプリケーション関係を削除する方法

1 ドメイン D1:

プライマリサーバーで次のコマンドを実行します。

```
nbdecommission -list_ref -oldserver  
storage_server_name-machinetype replication_host
```

出力リスト:

- 非推奨のストレージサーバーをレプリケーションターゲットまたはレプリケーションソースとして参照する、ドメインのすべてのストレージサーバー。
- 非推奨のストレージサーバーにインポートを実行する SLP を参照するすべてのターゲット A.I.R. レプリケーション SLP。

メモ: SLP に処理中のイメージが存在する場合は、それらのイメージが完了するまで待機するか、ストレージサーバーが廃止される前に取り消します。これは、すべてのバージョンの SLP が該当することに注意してください。既存の SLP 管理対象の処理を取り消すには、SLP ユーティリティコマンド (nbstlutil) を使います。

p.628 の「[nbstlutil コマンドを使用したライフサイクル操作の管理](#)」を参照してください。

2 手順 1 で検出されたターゲット A.I.R. ストレージライフサイクルポリシーからレプリケーション操作を削除します。

これらの SLP が不要である場合は、ここで削除できます。

3 手順 1 で検出されたレプリケーション関係を削除します。

p.1028 の「[2つのストレージサーバー間でのレプリケーション関係の追加または削除](#)」を参照してください。

両方のドメインで不要になった残りの A.I.R. ストレージライフサイクルポリシーはここで削除できます。

4 次のコマンドを実行して、ストレージサーバーを廃止します。

```
nbdecommission -oldserver storage_server_name-machinetype  
replication_host
```

ドメインとストレージサーバー間のすべてのレプリケーション関係の置換

メモ: 置換されるストレージサーバーが標準(非ターゲット)の自動イメージレプリケーションの構成の一部である場合は、置換ストレージサーバーに追加のレプリケーションターゲット関係があつてはなりません。

この手順では、D1 と D2 という 2 つのドメインを参照します。自動イメージレプリケーションを D1 のストレージサーバーから D2 のストレージサーバーに発生するように構成します。また、D2 から D1 に発生するようにも構成します。

新規ストレージサーバー (S2) を D2 に追加して、D2 が 2 つのストレージサーバー (S1 と S2) を含むようにします。S1 との関係性を S2 との関係性に置換する必要があります。

表 27-12 は、D2 に切り替える前の構成を示しています。表 27-13 は、変更を加えた後の構成を示しています。

表 27-12 変更前の構成例

ドメイン	ストレージサーバー	ストレージライフサイクルポリシー
D1	いくつかのストレージサーバーを含んでいますが、これらのサーバーはこの例では不要です。	■ BACKUP_D1_REPLICATE_D2 この SLP では、ターゲットインポート SLP IMPORT_S1 を使って D2 の S1 にレプリケートされます。 ■ IMPORT_D1 この SLP では、D1 のストレージサーバーにインポートされます。
D2	S1 (非推奨) S2 (D2 での新規)	■ BACKUP_D2_REPLICATE_D1 この SLP では、ターゲットインポート SLP IMPORT_D1 を使って D1 にレプリケートされます。 ■ IMPORT_S1 この SLP では、D2 にインポートされ、S1 に格納されます。

図 27-8 変更前のトポロジー

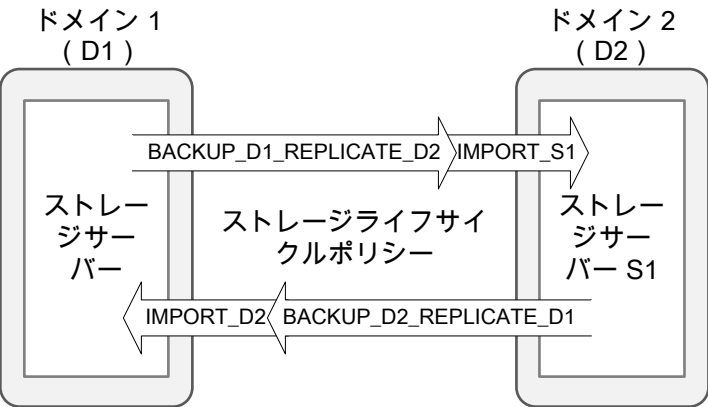
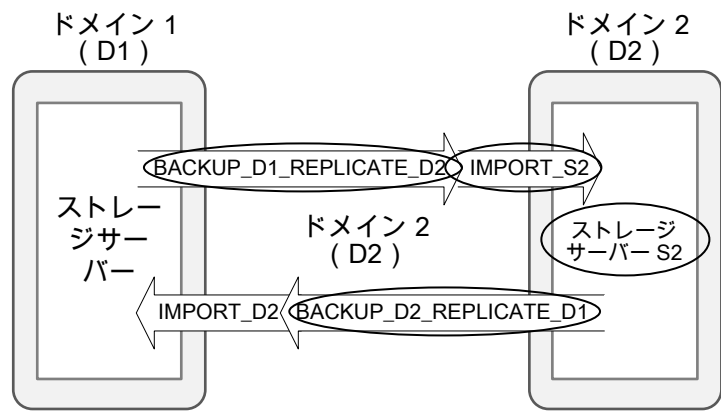


表 27-13 変更後の構成例

ドメイン	ストレージサーバー	ストレージライフサイクルポリシー
D1	いくつかのストレージサーバーを含んでいますが、これらのサーバーはこの例では不要です。	■ BACKUP_D1_REPLICATE_D2 この SLP では、ターゲットインポート SLP IMPORT_S2 を使って D2 の S2 にレプリケートされます。 ■ IMPORT_S1 この SLP では、D1 のストレージサーバーにインポートされます。
D2	S1 (非推奨) S2 (D2 での新規)	■ BACKUP_D2_REPLICATE_D1 この SLP では、ターゲットインポート SLP IMPORT_D1 を使って D1 にレプリケートされます。 ■ IMPORT_S2 この SLP では、D2 にインポートされ、S2 に格納されます。

図 27-9 変更後のトポロジー



円で囲まれた項目は変更されています。

次の手順では、特定のドメインで手順を実行する必要があることに注意してください。

表 27-14 ドメインとストレージサーバー間のすべてのレプリケーション関係の置換

ドメイン	手順	説明
ドメイン D2:	1	次のコマンドを実行して、ストレージサーバー S1 のレプリケーション関係を判別します。 bpstsinfo -lsuinfo -storage_server storage_server_name -stype storage_server_type たとえば、 bpstsinfo -lsuinfo -storage_server S1 -stype replication_host
	2	手順 1 で検出した各レプリケーションターゲット関係について、ストレージサーバー S2 と D1 のターゲット間に対応する関係を追加します。 p.1028 の「2 つのストレージサーバー間でのレプリケーション関係の追加または削除」を参照してください。
	3	ストレージサーバー S1 へのインポートを実行するすべてのインポート SLP をコピーします。ストレージサーバー S2 にインポートするように新規 SLP を変更します。 たとえば、IMPORT_S1 をコピーします。ストレージサーバー S2 にインポートするようにこの SLP を変更します。S2 にインポートすることを示すため、SLP 名を IMPORT_S2 に変更します。 メモ: 既存のインポート SLP はまだ削除しないでください。すでに機能を実行しなくなっているすべての SLP は、この手順の後半で削除できます。

ドメイン	手順	説明
ドメイン D1:	4	プライマリサーバーで次のコマンドを実行します。 <pre>nbdecommission -list_ref -oldserver storage_server_name-machinetype replication_host</pre> たとえば、 <pre>nbdecommission -list_ref -oldserver S1 -machinetype replication_host</pre> 出力リスト: ■ 非推奨のストレージサーバーをレプリケーションターゲットまたはレプリケーションソースとして参照する、ソースドメイン(S1)のすべてのストレージサーバー。 ■ 非推奨のストレージサーバーにインポートを実行する SLP を参照するすべてのターゲット A.I.R. レプリケーション SLP。 メモ: SLP に処理中のイメージが存在する場合は、それらのイメージが完了するまで待機するか、ストレージサーバーが廃止される前に取り消します。これは、すべてのバージョンの SLP が該当することに注意してください。既存の SLP 管理対象の処理を取り消すには、SLP ユーティリティコマンド (nbstlutil)を使います。 p.628 の「nbstlutil コマンドを使用したライフサイクル操作の管理」を参照してください。
ドメイン D2:	手順 4 でレプリケーションソース関係がリストされた場合にのみ手順 5 から 6 までを実行します。	
	5	S1 からドメイン D1 にレプリケートするレプリケーション SLP を S2 からレプリケートするように変更します。この操作は、非ターゲットとターゲット A.I.R. SLP の両方に該当します。 たとえば、BACKUP_D2_REPLICATE_D1 でのレプリケーション操作を変更します。バックアップストレージの宛先を S1 から S2 に変更します。
	6	手順 4 で検出されたレプリケーションソース関係を削除します。 p.1028 の「2 つのストレージサーバー間でのレプリケーション関係の追加または削除」を参照してください。

ドメイン	手順	説明
ドメイン D1:		手順 4 でレプリケーションターゲット関係がリストされた場合にのみ手順 7 から 10 までを実行します。
	7	ストレージサーバー S2 に対してレプリケーションターゲット関係を持つ、手順 2 でリストされた各ストレージサーバーからレプリケーション関係を追加します。 p.1028 の「2 つのストレージサーバー間でのレプリケーション関係の追加または削除」を参照してください。
	8	手順 4 で検出されたレプリケーション操作を変更します。ターゲットインポート SLP を手順 3 で作成した対応インポート SLP に変更します。 たとえば、BACKUP_D1_REPLICATE_D2 のレプリケーション操作を変更します。[ターゲットインポート SLP (Target import SLP)]設定を IMPORT_S1 から IMPORT_S2 に変更します。
	9	手順 4 で検出されたレプリケーションターゲット関係を削除します。 p.1028 の「2 つのストレージサーバー間でのレプリケーション関係の追加または削除」を参照してください。
ドメイン D2:	10	次のコマンドを実行して、ストレージサーバーを廃止します。 nbdecommission -oldserver storage_server_name -machinetype replication_host 例: nbdecommission -oldserver D1 -machinetype replication_host
	11	不要になった S1 へのインポート SLP をここで削除できます。 たとえば、IMPORT_S1 をここで削除できます。

ストレージサーバーが関与するすべてのレプリケーション関係の削除または置換

ストレージサーバーが関連するすべてのレプリケーション関係を削除または置換するには、ドメインとストレージサーバー間のすべてのレプリケーション関係を完全に削除または置換します。この操作は、ストレージサーバーとのレプリケーション関係に関与する各ドメインで実行する必要があります。

次のコマンドは、レプリケーションターゲット関係とレプリケーションソース関係をリストします。このコマンドは、ストレージサーバーとレプリケーション関係を持つドメインを判別するときに役に立ちます。

```
bpstsinfo -lsuinfo -storage_server storage_server_name -stype  
storage_server_type
```

例: 非ターゲット自動イメージレプリケーション構成でのストレージサーバーの置換

この例では、標準(非ターゲット)の自動イメージレプリケーション構成のストレージサーバーを置換するために必要な手順について説明します。

具体的には、ドメイン D2 の MSDP ストレージサーバー (D2_MSDP_1)を別の MSDP ストレージサーバー (D2_MSDP_2)に置換します。

表 27-15 構成例

ドメイン	ストレージサーバー	ストレージライフサイクルポリシー
D1	D1_MSDP	BACKUP_D1
D2	D2_MSDP_1 D2_MSDP_2	レプリケーションに関連する SLP なし

この例では、レプリケーションとストレージライフサイクルのトポロジが全体をとおして追跡されます。

図 27-10 処理前のレプリケーショントポロジの例

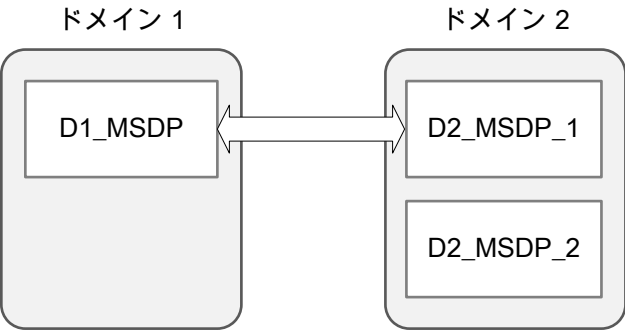
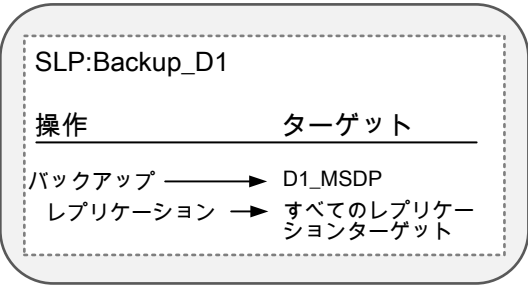


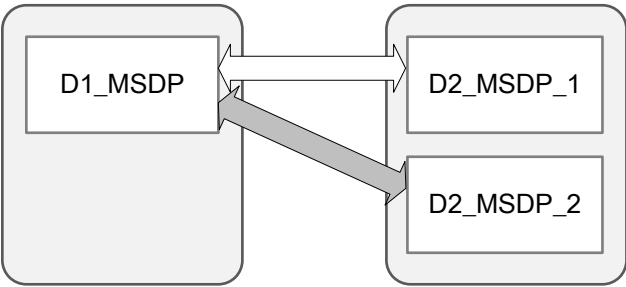
図 27-11 ストレージライフサイクルポリシーのトポロジーの例

ドメイン 1



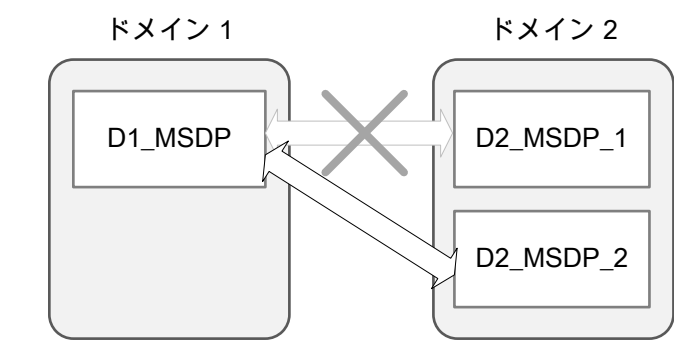
ストレージサーバー **D2_MSDP_1** を **D2_MSDP_2** に置換する方法

- 1 D1_MSDP から D2_MSDP_2 へのレプリケーションターゲット関係を追加します。
- 2 両方のドメインでディスクプールを更新します。



- 3 D1_MSDP と D2_MSDP_1 間のレプリケーションターゲット関係を削除します。

4 両方のドメインでディスクプールを更新します。



5 D1 で、次のコマンドを実行して MSDP_D2_1 を廃止します。

```
nbdecommission -oldserver MSDP_D2_1 -machinetype replication_host
```

例: カスケード式のターゲット自動イメージレプリケーション構成の
ストレージサーバーの置換

この例では、カスケード式のターゲット自動イメージレプリケーション構成の MSDP ストレージサーバーを置換するために必要な手順について説明します。この例では、レプリケーションとストレージライフサイクルのトポロジが全体をとおして追跡されます。

環境には 3 つのドメインが存在します。各ドメインには、1 つ以上の MSDP ストレージサーバーがあります。

表 27-16 構成例

ドメイン	ストレージサーバー	ストレージライフサイクルポリシー
D1	D1_MSDP	BACKUP_D1
D2	D2_MSDP D2_MSDP_2	IMPORT_D2
D3	D3_MSDP	IMPORT_D3

図 27-12 レプリケーショントポロジの例

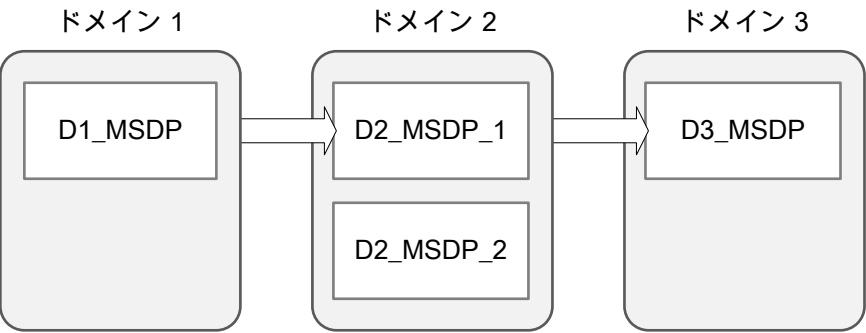
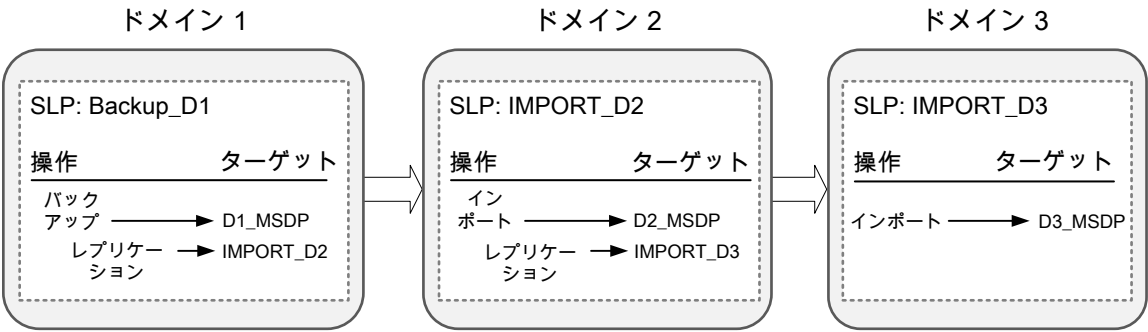
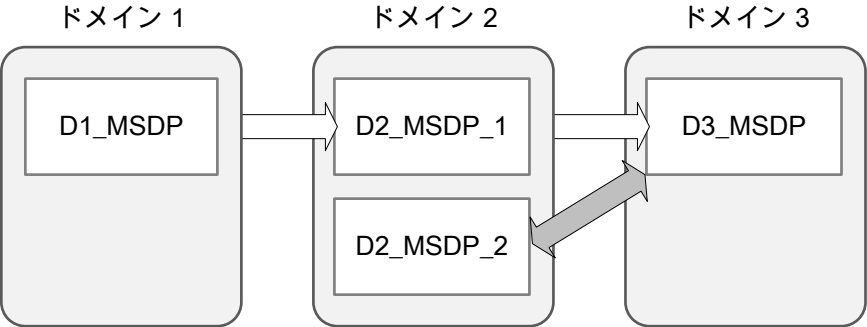


図 27-13 ストレージライフサイクルポリシーのトポロジの例

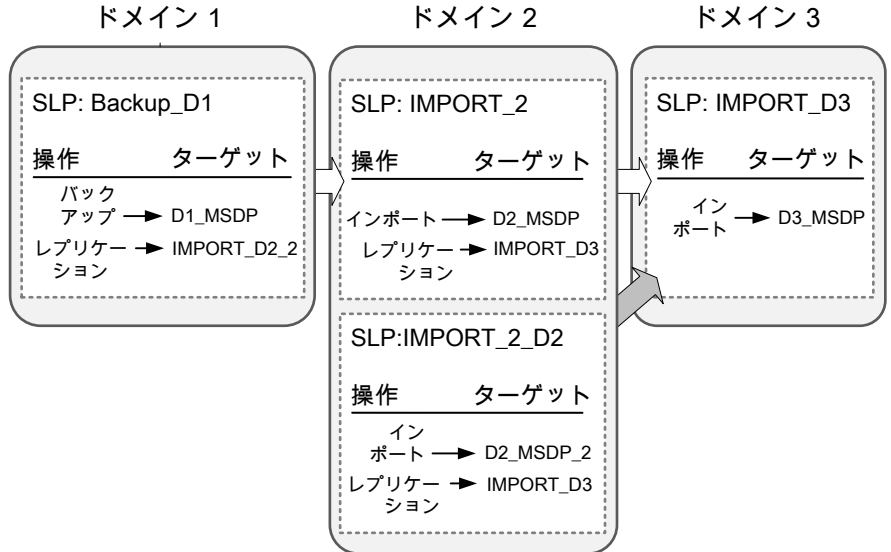


ストレージサーバー **D2_MSDP** を **D2_MSDP_2** に置換する方法

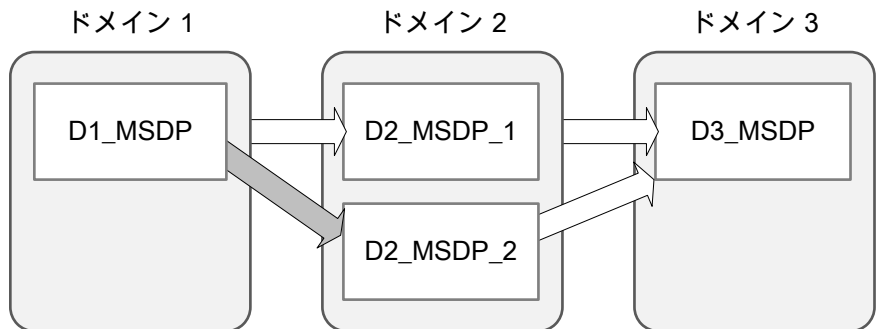
- 1 D2_MSDP_2 から D3_MSDP へのレプリケーションターゲット関係を追加します。
- 2 ドメイン D2 とドメイン D3 の両方でディスクプールを更新します。



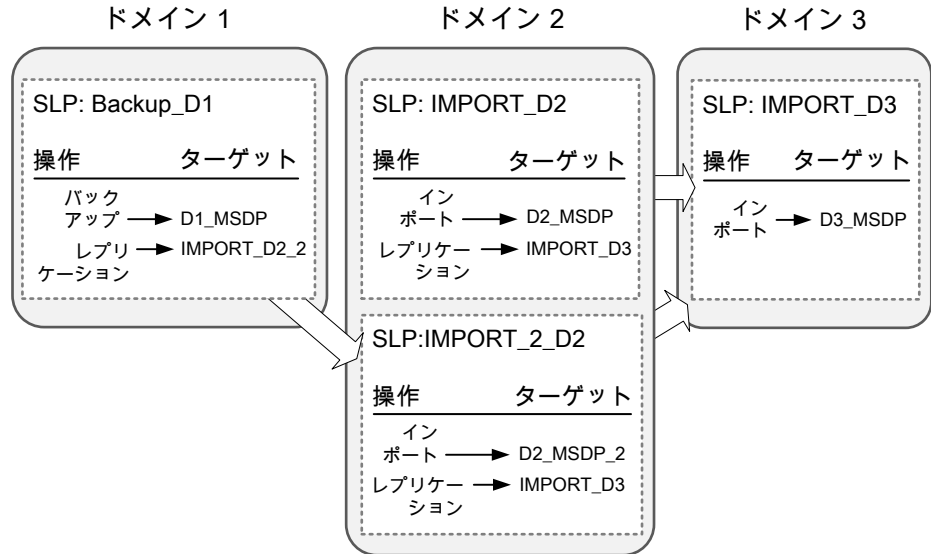
- 3 IMPORT_D2 をコピーし、名前を IMPORT_2_D2 に変更して、宛先ストレージを D2_MSDP_2 上のストレージユニットに変更します。



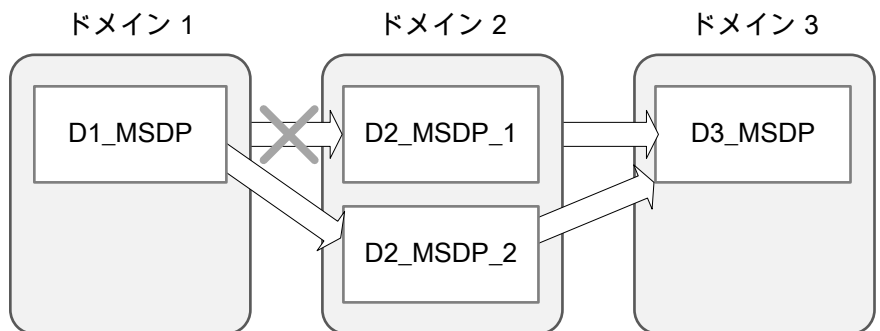
- 4 D1_MSDP から D2_MSDP_2 へのレプリケーションターゲット関係を追加します。
- 5 両方のドメインでディスクプールを更新します。



- 6 BACKUP_D1 レプリケーション操作ターゲットインポート SLP を IMPORT_2_D2 に変更します。



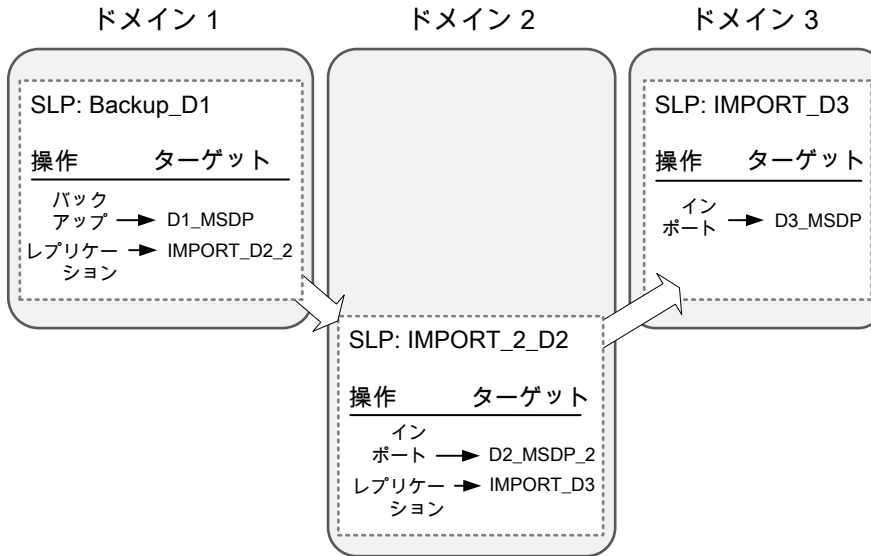
- 7 D1_MSDP から D2_MSDP_1 へのレプリケーションターゲット関係を削除します。
- 8 両方のドメインでディスクプールを更新します。



- 9 D1 で次のコマンドを実行します。

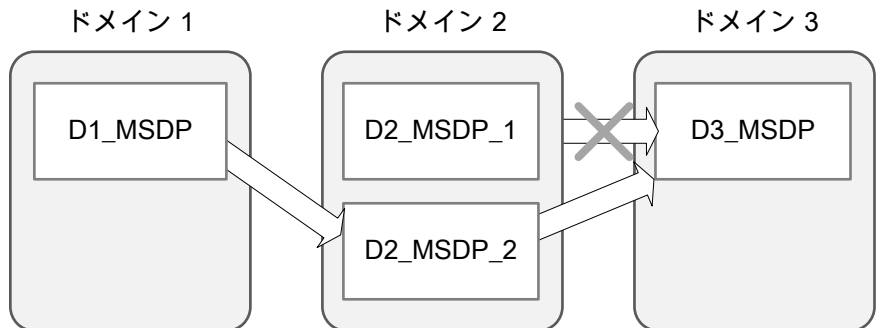
```
nbdecommission -oldserver MSDP_D2 -machinetype replication_host
```

10 IMPORT_D2 を削除します。



11 D2_MSDP_1 から D3_MSDP へのレプリケーションターゲット関係を削除します。

12 両方のドメインでディスクプールを更新します。



ターゲットプライマリドメインでのバックアップからのリストアについて

ターゲットプライマリドメインでイメージを使用してクライアントを直接リストアすることはできませんが、これは、ディザスタリカバリ時にのみ行ってください。ここでは、ディザスタリカバリは元のドメインがもはや存在せず、クライアントをターゲットのドメインからリカバリする必要があるという状況でのリカバリをいいます。

表 27-17 ディザスタリカバリの例でのクライアントのリストア

ディザスタリカバリの例	クライアントが存在するか	説明
例 1	はい	別のドメインでクライアントを構成し、そのクライアントに直接リストアします。
例 2	なし	リカバリドメインにクライアントを作成し、そのクライアントに直接リストアします。これは可能性が最も高い例です。
例 3	なし	リカバリドメインで代替クライアントへのリストアを実行します。

クライアントをリカバリする手順は他のクライアントのリカバリと同じです。実際の手順はクライアントの形式、ストレージの形式、およびリカバリが代替クライアントのリストアであるかどうかによって異なります。

個別リカバリテクノロジー (GRT) を使うリストアの場合は、アプリケーションインスタンスがリカバリドメインに存在する必要があります。アプリケーションインスタンスは、NetBackup がリカバリ先を持つために必要となります。

個別リカバリの情報については、次のトピックとガイドを参照してください。

- p.868 の「[Active Directory の個別バックアップと個別リカバリ](#)」を参照してください。
- p.729 の「[\[個別リカバリを有効化する \(Enable granular recovery\)\] \(ポリシー属性\)](#)」を参照してください。
- p.1194 の「[個別リカバリテクノロジー \(GRT\) を使用するバックアップおよびリストアのための UNIX メディアサーバーおよび Windows クライアントの構成](#)」を参照してください。
- [『NetBackup for Microsoft SharePoint Server 管理者ガイド』](#)
- [『NetBackup for Microsoft Exchange Server 管理者ガイド』](#)

自動イメージレプリケーションジョブに関するレポート

アクティビティモニターは、ターゲットのプライマリサーバードメインにレプリケートする構成の[レプリケーション (Replication)]ジョブと[インポート (Import)]ジョブの両方を表示します。

表 27-18 アクティビティモニターに表示される自動イメージレプリケーションジョブ

ジョブ形式	説明
レプリケーション (Replication)	ターゲットプライマリへのバックアップイメージをレプリケートするジョブは、[レプリケーション (Replication)] ジョブとしてアクティビティモニターに表示されます。[ターゲットマスター (Target Master)] ラベルは、この形式のジョブの [ストレージユニット (Storage Unit)] 列に表示されます。 他の [レプリケーション (Replication)] ジョブと同様に、ターゲットプライマリにイメージをレプリケートするジョブは 1 つのインスタンス内の複数のバックアップイメージで実行できます。 このジョブの詳しい状態には、レプリケートされたバックアップ ID リストが含まれています。
インポート (Import)	ターゲットプライマリドメインにバックアップコピーをインポートするジョブは、[インポート (Import)] ジョブとしてアクティビティモニターに表示されます。[インポート (Import)] ジョブは、1 つのインスタンスの複数コピーをインポートできます。この [インポート (Import)] ジョブの状態の詳細には、処理されたバックアップ ID のリストと失敗したバックアップ ID のリストが含まれます。 レプリケーションが成功しても、ターゲットプライマリにイメージがインポートされたかどうかはわかりません。 データの分類が両方のドメインで異なる場合、[インポート (Import)] ジョブは失敗し、NetBackup はイメージを再びインポートしていません。 [インポート (Import)] ジョブが状態 191 で失敗し、ターゲットのプライマリサーバーで実行された時点で [問題 (Problems)] レポートに表示されます。 イメージは [イメージクリーンアップ (Image Cleanup)] ジョブの間に期限切れになり、削除されます。レプリケート元のドメイン (ドメイン 1) は失敗したインポートを追跡しません。

NetBackup Replication Director について

レプリケーションディレクタは NetBackup OpenStorage の管理対象スナップショットおよびスナップショットレプリケーションの実装であり、スナップショットはパートナー企業のストレージシステムに格納されます。OpenStorage は、Cohesity API に準拠するストレージの実装との NetBackup の通信を可能にする API です。

レプリケーションディレクタは OpenStorage パートナーの関数を使用して次のタスクを実行します。

- ディスクを共有し、複数の異質メディアサーバーが同じディスクボリュームに同時にアクセスできるようにします。
- 負荷を分散し、パフォーマンスを調整します。NetBackup では、メディアサーバーとディスクプール間でバックアップジョブとストレージの使用率が分散されます。
- 高速なストレージのプロビジョニングやほとんど無制限のストレージなど、ディスクアレイの機能をフルに活用します。

- オフサイトの **Vault** 処理の代わりに使用します。ストレージの複製技術はディザスタリカバリ計画の一部としてオフサイトのストレージにユーザーのデータ(ファイル、アプリケーション、データベース)の複製を送る効率的な手段を提供します。

NetBackup は、ストレージサーバーに利用可能なボリュームにあるクライアントデータのスナップショットを格納します。

スナップショットは、ストレージハードウェアによってキャプチャされた特定時点のプライマリストレージデータを表します。**NetBackup** はその後、プライマリボリュームにあるスナップショットを、ストレージサーバーに利用可能な他のボリュームにレプリケートするよう、ストレージサーバーに指示できます。スナップショットは、ストレージサーバー内の複数ボリュームにレプリケートするか、テープデバイスやその他のディスクストレージのような DFM サーバー以外のストレージにレプリケートできます。レプリケーションディレクタでは、組織の特定のデータ保護ニーズを満たすためにさまざまなシナリオを取り扱うことができます。

レプリケーションディレクタは次のタスクのエンドツーエンドのデータ保護管理のための単一の **NetBackup** インターフェースを提供します:

- 統一されたポリシーの管理。
データのライフサイクル全体を管理する 1 つの集中バックアップインフラとして、**NetBackup Web UI** を使います。
- スナップショットコピーの管理。
NetBackup を使用してスナップショットのライフサイクル全体を管理します。レプリケーションディレクタでは、**OpenStorage** とメディアサーバーを使用して、ストレージサーバーのボリュームにアクセスします。**NetBackup** がストレージサーバーに指示しないかぎり、ディスクアレイからイメージを移動、削除、または期限切れにすることはできません。
初期スナップショットを実行する手順は、**NetBackup** のストレージライフサイクルポリシー (SLP) の操作に従います。初期スナップショットを作成してそのスナップショットを複数の場所にレプリケートし、各レプリケーションに異なる保持期間を指定するよう **NetBackup** に指示する 1 つの SLP を作成できます。スナップショットからのバックアップの作成、スナップショットへのインデックス付けなどを行う追加の指示 (または操作) を SLP に含めることができます。
- グローバルな検索とリストア。
リカバリは **NetBackup** に定義済みの環境で任意のストレージデバイスから利用可能です。このリカバリにはディスクのプライマリコピーまたは複製されたコピー、またはディスクまたはテープの任意の複製コピーからのリカバリが含まれます。

詳しくは、『**NetBackup Replication Director ソリューションガイド**』を参照してください。

監視とレポート

- [第28章 NetBackup アクティビティの監視](#)
- [第29章 NetBackup のレポート](#)
- [第30章 電子メール通知](#)

NetBackup アクティビティの監視

この章では以下の項目について説明しています。

- [アクティビティモニターについて](#)
- [アクティビティモニターオプションの設定](#)
- [\[ジョブ \(Jobs\)\]タブについて](#)
- [\[デーモン \(Daemons\)\]タブについて](#)
- [\[プロセス \(Processes\)\]タブについて](#)
- [\[ドライブ \(Drives\)\]タブについて](#)
- [\[エラーログ \(Error Logs\)\]タブについて](#)
- [ジョブデータベースについて](#)
- [デバイスモニターについて](#)
- [メディアマウントエラーについて](#)
- [保留中の要求および操作について](#)

アクティビティモニターについて

NetBackup 管理コンソールのアクティビティモニターを使って、NetBackup の次の側面を監視および制御します。

ジョブ (Jobs)

p.1050 の「[\[ジョブ \(Jobs\)\]タブについて](#)」を参照してください。

ジョブの詳細はヘルプに記述されています。

サービスまたはデーモン (Services or Daemons)	p.1054 の「 [デーモン (Daemons)]タブについて 」を参照してください。
プロセス (Processes)	p.1065 の「 [プロセス (Processes)]タブについて 」を参照してください。
ドライブ (Drives)	p.1071 の「 [ドライブ (Drives)]タブについて 」を参照してください。
エラーログ (Error Logs)	p.1072 の「 [エラーログ (Error Logs)]タブについて 」を参照してください。

- アクティビティモニターが NetBackup 管理コンソールで実行されている間、bpjobd デーモンによってアクティビティモニターにジョブの動作状態が送信されます。ジョブの開始、更新および完了に伴ってアクティビティモニターが更新されます。更新サイクルはありません。ただちに更新が行われます。ステータスバーは、[\[ジョブ \(Jobs\)\]](#) タブ上のアクティビティモニターの詳細ペインの上部に表示されます。

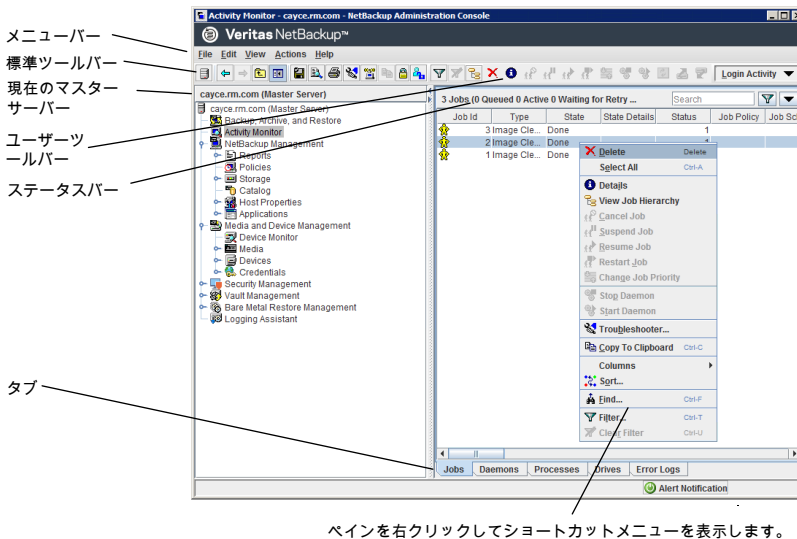
メモ: [\[表示 \(View\)\]](#) メニューの [\[フィルタ \(Filter\)\]](#) オプションは、指定した状態のジョブだけをアクティビティモニターに表示する場合に有効です。たとえば、特定の日付の前に開始されたジョブ、キューに投入された状態のジョブ、指定した範囲内の状態完了コードを持つジョブなどを表示できます。

このステータスバーには、次の情報が表示されます。

- ジョブが存在するプライマリサーバー
- ジョブの合計数
- ジョブの状態 ([\[実行中 \(Active\)\]](#))、[\[キューへ投入済み \(Queued\)\]](#)、[\[再試行を待機中 \(Waiting for Retry\)\]](#)、[\[一時停止 \(Suspended\)\]](#)、[\[未完了 \(Incomplete\)\]](#)、[\[完了 \(Done\)\]](#) ごとのジョブの数
- 現在選択されているジョブの数
- 実行中の NetBackup サービスまたはデーモンの数
- ドライブの数および各ドライブの状態 ([\[有効 \(Active\)\]](#))、[\[無効 \(Down\)\]](#))

フィルタが使用されている場合でも、数値には常に実際のジョブ数が反映されます。

図 28-1 アクティビティモニター



アクティビティモニターオプションの設定

NetBackup 管理コンソールでアクティビティモニターに関するオプションを設定するには、次の手順に従ってください。

アクティビティモニターのオプションを構成する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールのメニューバーで、[表示 (View)] > [オプション (Options)] をクリックし、[アクティビティモニター (Activity Monitor)] タブを選択すると、アクティビティモニターの構成可能なオプションにアクセスできます。
- 2 次のオプションで確認の警告を受信できます。

ジョブの削除を確認 (Confirm job deletions)

ジョブを削除するときに、確認のダイアログボックスが表示されます。

ジョブの取り消しを確認 (Confirm job cancellations)

ジョブを取り消すときに、確認のダイアログボックスが表示されます。

デーモンの停止を確認 (Confirm stop daemons)

デーモンを停止するとき、確認のダイアログボックスが表示されます。

今後、ジョブの削除および取り消し確認、またはデーモンの停止確認の表示を停止するには、[今後、この警告を表示しない (In the future, do not show this warning)] オプションを有効にします。

詳細ウィンドウの最大数 (Maximum details windows)	一度に表示可能なアクティビティモニターのジョブの詳細、デーモンの詳細およびプロセスの詳細のウィンドウの最大数を指定します。
自動更新を使用する (Automatically refresh display every)	[自動更新を使用する (Automatically refresh display)]を有効にすると、[デーモン (Daemons)]タブと[プロセス (Processes)]タブのデータ、およびジョブの詳細の経過時間が更新されます。他の[ジョブ (Jobs)]タブのデータは、[自動更新 (Auto refresh)]の設定に関係なく更新されません。 間隔 (秒)には、[デーモン (Daemons)]タブおよび[プロセス (Processes)]タブでデータが更新される間隔 (秒単位)を入力します。
アクティビティモニターでのエラーログの表示 (Show error logs in Activity Monitor)	これを使用すると、NetBackup のエラーログを[アクティビティモニター (Activity Monitor)]の[エラーログ (Error Logs)]タブに表示できます。 次のオプションを構成することで、[アクティビティモニター (Activity Monitor)]でのエラーログの表示をカスタマイズできます。 ■ ドロップダウンメニューからオプションを選択して、何についてのエラーログを表示するかを構成します。デフォルトでは、すべてのエラーと重要ログを一覧表示する[エラーとそれ以上のすべて (Error and above)]が選択されています。重要ログ、情報ログ、エラー、警告など、特定のログを選択して表示することもできます。 ■ [エラーログの表示期間 (Show error logs for last)]の横にある時間帯を選択すると、何時間前までのログを表示するかを構成できます。デフォルトの時間帯は 24 時間前に設定されています。 ■ [表示更新間隔 (Refresh display every)]オプションを指定すると、自動更新する間隔 (分) を設定できます。デフォルトの更新間隔は 15 分に設定されています。
[ジョブの詳細 (Job Details)]ウィンドウでのエラーログの表示 (Show error logs in Job details window)	[ジョブの詳細 (Job Details)]ウィンドウにエラーログを表示できます。このオプションにチェックマークを付けた場合は、特定のジョブ ID をクリックすると[ジョブの詳細 (Job Details)]ウィンドウのログエントリを、別途生成される[エラーログ (Error Logs)]タブに表示できます。[ジョブの詳細 (Job Details)]ウィンドウには、選択したジョブエントリ固有のエラーと重要なログが表示されます。

3 [OK]をクリックしてこのダイアログボックスを閉じ、変更を適用します。

[ジョブ (Jobs)] タブについて

アクティビティ 모니터の[ジョブ (Jobs)]タブには、現在選択されているプライマリサーバーで処理中または完了したすべてのジョブが表示されます。これらのジョブの詳細は[ジョブ (Jobs)]タブにも表示されます。ジョブの詳細はヘルプに記述されています。

バックアップジョブによっては、前処理および後処理の実行に親ジョブが使用される場合があります。親ジョブの[スケジュール (Schedule)]列には、ダッシュ (-) が表示されます。

親ジョブによって開始および終了の通知スクリプト (PARENT_START_NOTIFY、PARENT_END_NOTIFY) がプライマリサーバーから実行されます。このスクリプトは次のディレクトリに存在します。

Windows の場合: `install_path¥NetBackup¥bin`

UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/bin/`

親ジョブの役割は、要求された作業を子ジョブの形式で開始することです。

作業の内容は、次のようにバックアップ環境によって異なります。

表 28-1 親ジョブによって開始される作業

作業	説明
Snapshot Client	親ジョブによって、スナップショットが作成されて子ジョブが開始され、完了後のスナップショットが削除されます。 Snapshot Client の設定で、インスタントリカバリ用にスナップショットを保持し、スナップショットをストレージユニットにコピーするように構成している場合、子ジョブが作成されます。([スナップショットを作成し、さらにスナップショットをストレージユニットへコピー (Snapshots and copy snapshots to a storage unit)] がポリシーの[スケジュールの属性 (Schedule Attributes)] タブで、選択されている場合)。 Snapshot Client の設定で、インスタントリカバリ用にスナップショットを保持し、スナップショットだけを作成するように構成している場合、子ジョブは作成されません。つまり、スナップショットがストレージユニットにバックアップされないため、子ジョブは作成されません。([スナップショットのみ作成 (Snapshots only)] がポリシーの[スケジュールの属性 (Schedule Attributes)] タブで、選択されている場合)。
Bare Metal Restore	親ジョブによって、<code>brmsavecfg</code> が実行された後、バックアップが子ジョブとして開始されます。複数ストリームと BMR が併用されている場合は、親ジョブによって複数の子ジョブが開始される場合があります。
カタログバックアップ	カタログバックアップの親ジョブは複数の子バックアップジョブを開始するために <code>bpdgm</code> と連携して動作します。 ■ NetBackup データベースのバックアップ ■ プライマリサーバーのファイルシステムのバックアップ ■ BMR データベースのバックアップ (必要な場合)

作業	説明
複数コピー	複数のコピーを生成するジョブでは、1 つの親ジョブと複数の子ジョブが生成されます。複数のコピーを生成する親ジョブの一部である子ジョブを、個別に再度実行することはできません。再度実行できるのは、親ジョブ (およびそのすべての子ジョブ) だけです。 p.776 の「 複数のコピー (スケジュール属性) 」を参照してください。
複数データストリーム	親ジョブによって、ストリームの検出が実行され、子ジョブが開始されます。アクティビティモニターでは、親ジョブのスケジュールは表示されません。親ジョブのスケジュールは使用されず、子ジョブ間のスケジュールは異なる可能性があるため、代わりにダッシュ (-) が表示されます。アクティビティモニターでは、子ジョブに親ジョブの ID が表示されます。
SharePoint	親ジョブによって、解決処理が実行され、その間に子ジョブが開始されます。この処理は、複数のデータストリームに対するストリームの検出に類似しています。複数のデータストリームが有効になっていると、いくつかの子ジョブが複数のストリームに分割される場合があります。
Vault	親ジョブによって Vault プロファイルが開始されます。次に、この Vault プロファイルによって複製がジョブとして開始されます。この複製は、アクティビティモニターでは子ジョブとして表示されません。

アクティビティモニターでのジョブの詳細の表示

NetBackup 管理コンソールでアクティビティモニターにジョブの詳細を表示するには、次の手順に従ってください。

アクティビティモニターでジョブの詳細を表示する方法

- ◆ NetBackup 管理コンソールでアクティビティモニターをクリックします。
[ジョブ (Jobs)]タブのペインに表示されるジョブをダブルクリックします。

アクティビティモニターにおける完了済みのジョブの削除

次の手順では完了したジョブを削除する方法について説明します。

アクティビティモニターで完了済みのジョブを削除する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、アクティビティモニターを開き、[ジョブ (Jobs)]タブを選択します。
- 2 削除するジョブを選択します。
- 3 [編集 (Edit)]、[削除 (Delete)]の順に選択します。

親ジョブが削除されるとすべての子ジョブも削除されます。子ジョブを持たない子ジョブを削除する場合、その子ジョブのみが削除されます。

アクティビティモニターにおける未完了のジョブの取り消し

次の手順では完了していないジョブを取り消す方法について説明します。

アクティビティモニターで未完了のジョブを取り消す方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、アクティビティモニターを開き、[ジョブ (Jobs)]タブを選択します。
- 2 未完了のジョブから、取り消すジョブを選択します。未完了のジョブの状態は、[キューへ投入済み (Queued)]、[キューへ再投入済み (Requeued)]、[実行中 (Active)]、[未完了 (Incomplete)]または[一時停止 (Suspended)]のいずれかです。
- 3 [処理 (Actions)]、[ジョブのキャンセル (Cancel Job)]の順に選択します。

選択したジョブが親ジョブであった場合、その親ジョブのすべての子ジョブも取り消されます。

通常、子ジョブを取り消した場合は、選択した子ジョブだけが取り消され、その他の子ジョブはそのまま継続されます。ただし、ポリシーまたはストレージライフサイクルポリシーの一部として複数のコピーが作成されている場合は例外で、子ジョブを取り消すと、その親ジョブとすべての子ジョブが取り消されます。

- 4 ジョブリストに含まれる、未完了のすべてのジョブを取り消すには、[処理 (Actions)]、[すべてのジョブのキャンセル (Cancel All Jobs)]の順に選択します。

アクティビティモニターにおける失敗した (完了した) ジョブの再度実行

次の手順では完了したジョブを再度実行する方法について説明します。失敗したジョブを再試行するには、この手順を使います。

アクティビティモニターで完了したジョブを再度実行する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、アクティビティモニターを開き、[ジョブ (Jobs)]タブを選択します。
- 2 再度実行するジョブを選択します。
- 3 [処理 (Actions)]、[ジョブの再起動 (Restart Job)]の順に選択します。この場合、ジョブに対して新しいジョブ ID が作成されます。元のジョブの[ジョブの詳細 (Job Details)]では、新しいジョブのジョブ ID が参照されます。

アクティビティモニターにおけるジョブの一時停止および再開

次の手順ではリストアまたはバックアップジョブを一時停止する方法について説明します。

アクティビティモニターでリストアジョブまたはバックアップジョブを一時停止する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、アクティビティモニターを開き、[ジョブ (Jobs)] タブを選択します。
- 2 一時停止するジョブを選択します。
一時停止できるのは、チェックポイントが設定されているバックアップおよびリストアジョブだけです。
- 3 [処理 (Actions)]、[ジョブの一時停止 (Suspend Job)] の順に選択します。

次の手順では一時停止状態のジョブまたは未完了のジョブを再開する方法について説明します。

アクティビティモニターで一時停止状態のジョブまたは未完了のジョブを再開する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、アクティビティモニターを開き、[ジョブ (Jobs)] タブを選択します。
- 2 一時停止状態のジョブまたは未完了のジョブから、再開するジョブを選択します。
一時停止できるのは、チェックポイントが設定されているバックアップおよびリストアジョブだけです。
- 3 [処理 (Actions)]、[ジョブの再開 (Resume Job)] の順に選択します。

アクティビティモニターからのジョブの優先度の動的な変更

ジョブの優先度を動的に変更するには、リソースを待機している、キューに投入されたジョブまたは実行中のジョブを 1 つ以上選択します。その後、[処理 (Actions)] メニューを使用するかまたはジョブを右クリックして、[ジョブの優先度の変更 (Change Job Priority)] を選択します。

ジョブの優先度を変更するには、次のいずれかの方法を選択します。

表 28-2 [ジョブの優先度の変更 (Change job priority)] オプション

オプション	説明
ジョブの優先度の設定 (Set the Job Priority to)	選択したジョブに対してジョブの具体的な優先度を入力します。
ジョブの優先度の引き上げ (Increment the Job Priority by)	選択した間隔でジョブの優先度を高くします。
ジョブの優先度の引き下げ (Decrement the Job Priority by)	選択した間隔でジョブの優先度を低くします。

[ジョブの優先度の変更 (Change job priority)]ダイアログボックスへの変更は、選択したジョブの優先度에만影響し、その種類の他のジョブには影響しません。

ジョブ優先順位のデフォルトを変更するには、[デフォルトのジョブの優先度 (Default Job Priorities)]ホストプロパティを使用します。

p.90 の「[デフォルトのジョブの優先度 (Default job priorities)]プロパティ」を参照してください。

[デーモン (Daemons)]タブについて

アクティビティモニターの[デーモン (Daemons)]タブには、プライマリサーバーとメディアサーバー上の NetBackup デーモンの状態が表示されます。

表 28-3 に、NetBackup デーモンを示します。

表 28-3 NetBackup のデーモン

デーモン	説明
NetBackup Agent Request Server (nbars または nbars.exe)	データベースのエージェントメタデータを NetBackup カタログデータベースに追加し、エージェントへのサービス要求を処理します。このサービスは、「Oracle クロウンのジョブ開始」のような特定処理の開始にも関わっています。
NetBackup Audit Manager (nbaudit または nbaudit.exe)	Audit Manager は監査情報に対する問い合わせおよびレポートのための機構を提供します。
NetBackup Authentication (nbatd または nbatd.exe)	NetBackup Product Authentication は識別情報を検証し、NetBackup の認可とアクセス制御の基盤となります。認証サービスは NetBackup のさまざまなコンポーネントが使用するセキュリティ証明書も生成します。 p.38 の「NetBackup ホスト用のセキュリティ証明書について」を参照してください。
NetBackup Authorization (nbazd または nbazd.exe)	NetBackup Product Authorization は NetBackup アプリケーションのアクセス制御を行います。
NetBackup Bare Metal Restore ブートサーバーサービス (bmrbd または bmrbd.exe)	Bare Metal Restore ブートサーバーがインストールされている場合に表示されます。BMR ブートサーバーがシステムの再構築に使用されるリソースを管理および提供します。
NetBackup Bare Metal Restore Master Server (bmrmd または bmrmd.exe)	Bare Metal Restore がインストールされている場合に表示されます。リストアデータ、オブジェクト、サーバーを管理します。
NetBackup BMR MTFTP Services (PXEMTFTP または PXEMTFTP.exe)	Bare Metal Restore がインストールされている場合に表示されます。Bare Metal Restore クライアントに TFTP プロトコルサービスを提供します。

デーモン	説明
NetBackup BMR PXE Service (bmrpxeserver または bmrpxeserver.exe)	Bare Metal Restore がインストールされている場合に表示されます。Bare Metal Restore クライアントに PXE プロトコルサービスを提供します。
NetBackup クライアントサービス (bpcd または bpcd.exe)	NetBackup Client デーモン。リモートホストのプログラムを開始するために、プライマリサーバーおよびメディアサーバー間で要求の送受信を行います。 UNIX クライアントの場合、bpcd はスタンドアロンモードでだけ実行できます。 Windows の場合、bpcd は常時 bpinetd.exe の監視下で実行されます。NetBackup では、bpcd 固有の構成パラメータが用意されています。NetBackup 構成内でポート番号が変更された場合、ソフトウェアによって、services ファイルのポート番号も更新されます。
NetBackup Compatibility Service (bpcompatd または bpcompatd.exe)	レガシー NetBackup サービスと通信します。
NetBackup Database Manager (bpdbm または bpdbm.exe)	NetBackup の内部データベースおよびカタログを管理します。BPDBM は、NetBackup のすべての通常操作の実行中、NetBackup プライマリサーバー上で実行されている必要があります。
NetBackup Deduplication Engine (spoold または spoold.exe)	重複排除されたクライアントデータを保存および管理するために、NetBackup 重複排除ストレージサーバーのホスト上で実行します。spoold はストレージプールデーモンを表します。印刷スプーラのデーモンと混同しないでください。 NetBackup Data Protection Optimization Option のライセンスを取得済みで、メディアサーバーが重複排除ストレージサーバーとして構成されている場合にのみ有効になります。
NetBackup Deduplication Manager (spad または spad.exe)	NetBackup の重複排除構成を保守し、重複排除の内部処理を制御し、レプリケーションを制御し、セキュリティを制御し、イベントの昇格を制御するために、NetBackup 重複排除ストレージサーバーのホスト上で実行します。 NetBackup Data Protection Optimization Option のライセンスを取得済みで、メディアサーバーが重複排除ストレージサーバーとして構成されている場合にのみ有効になります。
NetBackup Device Manager (ltid または ltid.exe)	Volume Manager (vmd)、自動ボリューム認識プロセス (avrd) およびロボットプロセスを起動します。ロボット制御プロセスを介して、ロボット制御されたデバイスでのテープのマウント要求およびマウント解除要求を処理します。ユーザーの要求に応答して、テープデバイスにボリュームをマウントします。
NetBackup Enterprise Media Manager (nbemm または nbemm.exe)	メディアおよびデバイスの構成情報が格納されるデータベース (EMM_DATA.db) にアクセスし、管理します。ジョブを実行するには、nbemm.exe が実行されている必要があります。

デーモン	説明
NetBackup Event Management Service (nbvtmgr または nbvtmgr.exe)	分散 NetBackup コンポーネント間で情報およびイベントを渡すための通信インフラストラクチャを提供します。NetBackup Enterprise Media Manager と同じシステム上で実行されます。
NetBackup Indexing Manager (nbim または nbim.exe)	保留サービスを管理します。
NetBackup Job Manager (nbjm または nbjm.exe)	Policy Execution Manager (nbpem または nbpem.exe) から送信されたジョブを受け取り、必要なリソースを取得します。その後、ジョブを開始し、ジョブが完了したことを nbpem に通知します。
NetBackup KMS (nbkms または nbkms.exe)	メディアサーバーの BPTM プロセスに暗号化キーを提供する、プライマリサーバーベースの対称キー管理サービスです。
NetBackup Legacy Client Service (bpinetd または bpinetd.exe)	ネットワーク内の NetBackup サーバーからの接続を待機します。認証された接続が確立されると、必要な NetBackup プロセスが起動され、接続が処理されます。 メモ: Windows の場合、Client Service は、管理者アカウントまたはローカルシステムアカウントのいずれかで実行する必要があります。Client Service のログオンアカウントが、NetBackup を使用するユーザーのログオンアカウントと異なる場合、次のような問題が発生する可能性があります。NetBackup で Client Service への接続が試行されると、不適切なログオン情報のためにサービスが起動されなかったというメッセージが表示されます。このイベントは Windows システムのイベントログに記録されます。ログには、アカウント名が無効または存在しない、あるいはパスワードが無効であると記録されます。 CIFS を使う BasicDisk ストレージユニットを設定するには、nbrmms はメディアサーバーで bpinetd と同じログオンクレデンシャルを共有する必要があります。 p.574 の「CIFS ストレージおよびディスクストレージユニットの NetBackup サービスクレデンシャルの構成」を参照してください。
NetBackup Policy Execution Manager (nbpem または nbpem.exe)	ポリシーまたはクライアントタスクを作成し、ジョブの実行予定時間を決定します。ポリシーが変更されていたり、イメージの期限が切れていた場合は、nbpem に通知され、ポリシーまたはクライアントのタスクオブジェクトが更新されます。
NetBackup Proxy Service (nbostpxy または nbostpxy.exe)	ホスト上の OpenStorage (OST) の呼び出しを実行し、プロキシプラグイン側に結果を返します。プラグイン側はその結果をアプリケーションに返します。プロキシサーバー (およびプラグイン) は異なるサーバー間のネットワーク接続を提供して、OpenStorage の呼び出しを中継します。

デーモン	説明
NetBackup Remote Manager and Monitor Service (nbrmms または nbrmms.exe)	NetBackup メディアサーバー上のディスクストレージを検出および監視します。また、NetBackup SAN クライアントオプションで、メディアサーバーおよびクライアント上のファイバートランスポート (FT) 接続を検出、監視および管理します。NetBackup メディアサーバー上で実行されます。 CIFS を使う BasicDisk ストレージユニットを設定するには、nbrmms はメディアサーバーで bpinetd と同じログオンクレデンシャルを共有する必要があります。 p.574 の「CIFS ストレージおよびディスクストレージユニットの NetBackup サービスクレデンシャルの構成」を参照してください。
NetBackup Remote Network Transport Service (nbrntd または nbrntd.exe)	耐性がある通信を確保するよう構成されているクライアントと NetBackup メディアサーバーとの間のソケット接続を管理します。このサービスは NetBackup プライマリサーバー上、NetBackup メディアサーバー上、クライアント上で動作します。NetBackup は、耐性が高い接続がホスト間に必要な場合にこのサービスを開始します。耐性のある接続が必要でなくなった場合は、このサービスは停止します。 このサービスのインスタンス 1 つで 256 の接続を処理できます。サービスの複数のインスタンスを同時に稼働できます。 p.275 の「NetBackup サーバーの NBRNTD_IDLE_TIMEOUT オプション」を参照してください。 p.155 の「[耐性ネットワーク (Resilient network)] プロパティ」を参照してください。
NetBackup Request Daemon (bprd または bprd.exe)	NetBackup クライアントとサーバーからの要求を処理します。また、bprd は、自動スケジュールバックアップを実行するように NetBackup に要求します。バックアップまたはリストアを実行するには、NetBackup プライマリサーバーで bprd が実行中である必要があります。
NetBackup Resource Broker (nbrb または nbrb.exe)	ストレージユニット、テープドライブおよびクライアントをジョブ用に予約するための割り当てを行います。nbrb は Enterprise Media Manager (NBEMM) と連動して動作します。 nbrbutil ユーティリティを使用して、Resource Broker 設定を追加または変更できます。 p.1059 の「nbrbutil ユーティリティを使用して、NetBackup Resource Broker を構成します。」を参照してください。
NetBackup SAN Client Fibre Transport Service (nbftclnt.exe)	NetBackup SAN クライアントで実行します。クライアント側のファイバートランスポート (FT) 機能を実装します。クライアントの FT サービスでは、FT 接続の開閉と共有メモリデータ転送用の FT 接続を管理します。
NetBackup Relational Scale-Out Database Manager (pg_ctl.exe)	NetBackup リレーショナルデータベースを管理します。このサービスは、NetBackup のすべての通常操作の実行中、NetBackup プライマリサーバー上で実行されている必要があります。 Windows のサービス名は vrtsdbsvc_psql です。

デーモン	説明
NetBackup Scale-Out Relational Database 接続プールサービス	PgBouncer が提供する NetBackup Scale-Out Relational Database 接続プールを管理します。このサービスは、NetBackup のすべての通常操作の実行中、常に NetBackup プライマリサーバー上で実行されている必要があります。
NetBackup Service Layer (nbsl または nbsl.exe)	NetBackup グラフィカルユーザーインターフェースと NetBackup ログック間の通信を支援します。 このサービスは、クラウドストレージの次の処理も行います。 ■ 測定プラグインの測定情報の生成 ■ スロットルプラグインを利用したネットワーク帯域幅の使用率の制御 メモ: メディアサーバーの場合、測定サービスとスロットルサービスの機能は、NetBackup CloudStore Service Container (nbcssc) サービスが処理します。
NetBackup Service Monitor (nbsvcmon または nbsvcmon.exe)	ローカルコンピュータで実行中の NetBackup サービスを監視します。サービスが異常終了した場合、このサービスによって、異常終了したサービスの再起動が試行されます。nbsvcmon で NetBackup がクラスタ用に構成されていると判断された場合、このサービスは停止し、クラスタで監視が行われるようになります。
NetBackup Storage Lifecycle Manager (nbstserv または nbstserv.exe)	ストレージライフサイクルポリシー操作を管理し、複製ジョブのスケジュールを設定します。また、容量管理対象ボリュームのディスク容量を監視し、必要に応じて古いイメージを削除します。 SLP Manager とインポートマネージャは nbstserv 内で実行されます。 ■ SLP Manager は、SLP の名前とストレージデバイス (ディスクメディア ID またはロボット番号) に基づいてインポートされる複数のイメージを作成します。 ■ インポートマネージャは、インポートされるイメージの作業リストを EMM で監視し、これらのイメージに対して bpimport ジョブを開始します。 メモ: SLP のあらゆる操作のための基本のストレージへ変更を加えた後で nbstserv を再起動してください。
NetBackup Vault Manager (nbvault または nbvault.exe)	NetBackup Vault を管理します。NBVAULT は、すべての NetBackup Vault の実行中、常に NetBackup Vault サーバー上で実行されている必要があります。
NetBackup Volume Manager (vmd または vmd.exe)	バックアップまたはリストアに必要なボリューム (テープ) を管理し、ローカルデバイス管理デーモンおよびプロセスを起動します。
NetBackup Web 管理コンソール (nbwmc または nbwmc.exe)	NetBackup Web Management Console のプロセス。証明書とホスト管理、およびクラウドストレージ構成の要求を管理します。 NetBackup Web サービスのポートを構成するには、『NetBackup ネットワークポートリファレンスガイド』の「NetBackup Web サービスのためのポート構成」を参照してください。

デーモン	説明
Veritas Private Branch Exchange (pbx_exchange.exe)	NetBackup サービスに接続するファイアウォールの外にいるクライアントへの単一ポートアクセスを提供します。サービス名は VRTSpbx です。 メモ: このサービスはアクティビティモニターには表示されませんが、 Windows の[サービス]ユーティリティに表示されます。

nbrbutil ユーティリティを使用して、NetBackup Resource Broker を構成します。

NetBackup Resource Broker (nbrb) は、リソースを割り当て、ジョブキュー内のジョブのリソースの要求を保持します。nbrbutil ユーティリティを使用して、**Resource Broker** を構成します。

nbrbutil ユーティリティは、次のディレクトリに存在します。

- **Windows** の場合: `install_path\NetBackup\bin\admincmd\nbrbutil`
- **UNIX** の場合: `/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/nbrbutil`

nbrbutil の詳しい説明については、『**NetBackup コマンドリファレンスガイド**』を参照してください。

表 28-4 に、nbrbutil コマンドで利用可能なオプションを示します。

表 28-4 nbrbutil オプション

オプション	説明
<code>-cancel requestID</code>	指定された識別子内の割り当て要求を取り消します。
<code>-changePriority requestID</code>	要求の優先度を変更します。
<code>-changePriorityClass requestID</code> <code>-priorityClass priorityClass</code>	要求の優先度のクラスを変更します。
<code>-changeSettings parameterparameter_value</code>	nbrb 構成設定を追加または変更します。 表 28-5 に、構成設定の詳細を示します。
<code>-deleteSetting settingname</code>	<code>settingname</code> によって特定される Resource Broker 構成設定を削除します。
<code>-dump</code>	Resource Broker の割り当てと要求のリストをすべてダンプします。
<code>-dumptables [-f filename]</code>	Resource Broker がその内部状態を指定されたファイル名に記録できるようにします。
<code>-help</code>	このコマンドのヘルプを表示します。

オプション	説明
<code>-listActiveDriveJobs [driveName]</code>	ドライブで実行中のジョブをすべて表示します。
<code>-listActiveJobs</code>	すべての実行中のジョブを表示します。
<code>-listActiveMediaJobs mediaId</code>	メディア ID (ディスクまたはテープ) で実行中のジョブをすべて表示します。
<code>-listActivePoolJobs poolName</code>	ボリュームプールで実行中のジョブをすべて表示します。
<code>-listActiveStuJobs stuName stugroup</code>	ストレージユニットまたはストレージユニットグループで実行中のジョブをすべて表示します。
<code>-listOrphanedDrives</code>	EMM で予約されているが、対応する割り当てが Resource Broker がないドライブを表示します。
<code>-listOrphanedMedia</code>	EMM で予約されているが、対応する割り当てが Resource Broker がないメディアを表示します。
<code>-listOrphanedPipes</code>	孤立したファイバートランスポートパイプを表示します。
<code>-listOrphanedStus</code>	EMM で予約されているが、対応する割り当てが Resource Broker がないストレージユニットを表示します。
<code>-listSettings</code>	Resource Broker の構成設定を表示します。
<code>-priority priority</code>	要求の優先度を変更します。
<code>-release allocationID</code>	指定の識別子を持つ割り当てを解放します。
<code>-releaseAllocHolds</code>	ドライブとメディアの割り当てエラーによって引き起こされた割り当ての予約を解除します。
<code>-releaseDrive drivename</code>	指定されたドライブのすべての割り当てを解放します。
<code>-releaseMDS mdsAllocationKey</code>	指定の識別子で MDS によって割り当てられた EMM と MDS の割り当てを解放します。
<code>-releaseMedia mediaid</code>	指定されたボリュームのすべての割り当てを解放します。
<code>-releaseOrphanedDrive drivekey</code>	EMM で予約されているが、対応する割り当てが Resource Broker がないドライブを解放します。
<code>-releaseOrphanedMedia mediakey</code>	EMM で予約されているが、対応する割り当てが Resource Broker がないメディアを解放します。
<code>-releaseOrphanedPipes</code>	孤立したファイバートランスポートパイプを解放します。
<code>-releaseOrphanedStu stuName</code>	EMM で予約されているが、対応する割り当てが Resource Broker がないストレージユニットを解放します。

オプション	説明
-reportInconsistentAllocations	Resource Broker と MDS 間の一貫性のない割り当てを報告します。
-resetAll	Resource Broker の割り当て、要求と持続状態をすべてリセットします。
-resetMediaServer <i>mediaserver</i>	メディアサーバーの <i>ltid</i> と関連している、Resource Broker の EMM と MDS の割り当てをすべてリセットします。
-resume	Resource Broker の処理を再開します。
-setDriveGroupUnjoinable	今後のジョブがこのドライブのグループに追加されないようにします。
-setMediaGroupUnjoinable	今後のジョブがこのメディアのグループに追加されないようにします。
-suspend	Resource Broker の処理を一時停止します。
-syncAllocations	Resource Broker と MDS 間の割り当ての相違をすべて同期します。

表 28-5 に、`nbrbutil -changesettings` オプションのパラメータ、およびそれぞれの使用法を示します。

`-changesettings` オプションを指定して `nbrbutil` コマンドを使用し、Resource Broker の構成設定を追加または変更します。

表 28-5 nbrbutil -changesettings パラメータ

パラメータ	説明
RB_DO_INTERMITTENT_UNLOADS	RB_DO_INTERMITTENT_UNLOADS パラメータが true (デフォルト) に設定されている場合、<code>nbrb</code> は、メディアアンロードの遅延を超えたドライブのアンロードを開始します。ドライブは、最後にドライブを使用したジョブより、異なるメディアサーバーか異なるメディアが必要であるジョブでよりすばやく利用可能になります。ただし、ロードされたメディアまたはドライブのペアは、アンロードなしでドライブかメディアを使う可能性がある優先度付けされた評価キュー内の優先度の低いジョブでは使用できないことがあります。 RB_DO_INTERMITTENT_UNLOADS=true
RB_ENABLE_OPTIMIZATION	RB_ENABLE_OPTIMIZATION パラメータが true (デフォルト) に設定されている場合、このエントリは、リソースの要求の状態をキャッシュするように <code>nbrb</code> に指示します。 RB_ENABLE_OPTIMIZATION=true

パラメータ	説明
RB_RESPECT_REQUEST_PRIORITY	RB_RESPECT_REQUEST_PRIORITY パラメータが false (デフォルト) に設定されている場合、nbrb は、優先度付けされたジョブキュー内のジョブの評価を続行します。その結果、ドライブが解放された後によりすばやくジョブでドライブが再利用される可能性が高くなります。ただし、優先度が低いジョブが、優先度が高いジョブよりも前にドライブを使用する場合もあります。 RB_RESPECT_REQUEST_PRIORITY パラメータが true に設定されている場合、nbrb は優先度付けされたジョブキューの先頭にある評価キューをリソースの解放後に再起動します。 RB_RESPECT_REQUEST_PRIORITY=false
RB_BREAK_EVAL_ON_DEMAND	優先順位が高い要求 (テープをまたがる要求、合成ジョブや複製ジョブの後続の要求、または最適化された複製の読み込み要求) が表示されると、nbrb はすぐに評価サイクルを中断します。nbrb は必要に応じて、新しい評価サイクルが開始される前にドライブを解放し、アンロードします。 RB_BREAK_EVAL_ON_DEMAND パラメータが true (デフォルト) に設定されている場合は、優先順位が高い要求によって評価サイクルが中断される場合があります。 RB_BREAK_EVAL_ON_DEMAND=true
RB_MAX_HIGH_PRIORITY_QUEUE_SIZE	実行中の複製ジョブのスパン要求と追加のリソースは、優先度の高い処理のための特別なキューに配置されます。RB_MAX_HIGH_PRIORITY_QUEUE_SIZE パラメータは、NetBackup がそのキューで許可する最大の要求数を設定します。(デフォルトは 100 です。) RB_MAX_HIGH_PRIORITY_QUEUE_SIZE=100
RB_RELEASE_PERIOD	RB_RELEASE_PERIOD パラメータは、NetBackup がリソースを解放するまでの待機期間を示します。(デフォルトは 180 秒です。) RB_RELEASE_PERIOD=180
RB_CLEANUP_OBSOLETE_DBINFO	RB_CLEANUP_OBSOLETE_DBINFO パラメータは、nbrb データベース内の古い情報のクリーンアップ間隔の秒数を示します。(デフォルトは 60 秒です。) RB_CLEANUP_OBSOLETE_DBINFO=60

パラメータ	説明
RB_MPX_GROUP_UNLOAD_DELAY	RB_MPX_GROUP_UNLOAD_DELAY パラメータは、テープをアンロードする前に、nbrb が新しいジョブが表示されるのを待機する秒数を示します。(デフォルトは 10 秒です。) RB_MPX_GROUP_UNLOAD_DELAY=10 この設定によってテープの不要な再ロードを回避できます。また、この設定はすべてのバックアップジョブに適用されます。ユーザーバックアップの実行時、nbrb でテープをマウント解除する場合、nbrb ではRB_MPX_GROUP_UNLOAD_DELAY の最大値および[メディアのマウント解除の遅延 (Media unmount delay)]ホストプロパティの設定が使用されます。 リストア時には、RB_MPX_GROUP_UNLOAD_DELAY ではなく、[メディアのマウント解除の遅延 (Media unmount delay)]が使用されます。 p.186 の「[タイムアウト (Timeouts)]プロパティ」を参照してください。
RB_RETRY_DELAY_AFTER_EMM_ERR	RB_RETRY_DELAY_AFTER_EMM_ERR パラメータは、EMM エラーの発生後に NetBackup が再試行するまでに待機する時間を示します。エラーは、再試行が可能なエラーである必要があります。たとえば、メディアサーバーが停止している場合などです(デフォルトは 60 秒です。) RB_RETRY_DELAY_AFTER_EMM_ERR=60
RB_REEVAL_PENDING	RB_REEVAL_PENDING パラメータは、保留中の要求のキューを評価する間隔の秒数を示します。保留中の要求のキューには、リソースを待機しているジョブなどが含まれます。(デフォルトは 60 秒です。) RB_REEVAL_PENDING=60
RB_REEVAL_PERIOD	RB_REEVAL_PERIOD パラメータは、未処理の要求が存在し、他の要求が行われていない場合またはリソースが解放されていない場合の評価間隔を示します。(デフォルトでは、最初の要求が再評価されるまでに 5 分が経過している必要があります。) RB_REEVAL_PERIOD=300

NetBackup デーモンの種類

次の表に、UNIX プラットフォーム上にある NetBackup デーモンについての追加情報を記述します。

スタンドアロンデーモン	接続を受け入れるために常時実行されており、待機しています。 たとえば、bpdbm、bprd、bpjobjd、vmd などがあります。
マルチプロセススタンドアロンデーモン	要求を処理するために子プロセスを分割または fork します。たとえば、bpdbm、bprd などがあります。

シングルプロセススタンドアロン 接続の受け入れと要求の処理を同じプロセスで行います。
デーモン

inetd デーモン 通常 inetd (1m) か bpinetd がこれらの NetBackup デーモンを起動します。たとえば、bpcd、bpjava-msvc、vnetd などがあります。

アクティビティモニターまたはコマンドを使用してデーモンを再起動した後、NetBackup 管理コンソールのすべてのインスタンスを終了することをお勧めします。次に、jnbSA コマンドを実行してコンソールを再起動します。

jnbSA コマンドについては、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

NetBackup デーモンの監視

次の手順は NetBackup のデーモンを監視する方法を記述します。

NetBackup デーモンを監視する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[アクティビティモニター (Activity Monitor)]を選択します。
- 2 [デーモン (Daemons)]タブを選択します。
- 3 詳細を表示するデーモンの名前をダブルクリックします。
- 4 [デーモンの詳細 (Daemon Details)]ダイアログボックスで、上矢印または下矢印をクリックして、リストに含まれる前または次のデーモンの詳細を確認します。

デーモンについて詳しくは、ダイアログボックスの[ヘルプ (Help)]をクリックしてください。

デーモンの起動または停止

次の手順では NetBackup デーモンを起動または停止する方法について説明します。

NetBackup デーモンを起動または停止する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[アクティビティモニター (Activity Monitor)]を選択します。
- 2 [デーモン (Daemons)]タブを選択します。
- 3 起動または停止するデーモンを選択します。
- 4 [処理 (Actions)]>[選択したサービスの停止 (Stop Selected)]または[処理 (Actions)]>[選択したサービスの開始 (Start Selected)]を選択します。

または、[処理 (Actions)]>[デーモンの起動 (Start Daemon)]または[処理 (Actions)]>[デーモンの停止 (Stop Daemon)]を選択します。

デーモンを起動または停止するには、デーモンが実行されているシステムにおいて適切なユーザー権限が必要です。

アクティビティモニターでのすべてのメディアサーバーの表示

[アクティビティモニター (Activity Monitor)] は、追加されたメディアサーバーをすぐに [デーモン (Daemons)] タブに表示しない場合があります。また、[ストレージサーバー (Storage Server)] ダイアログの [メディアサーバー (Media Servers)] タブは、クラウド環境のすべての有効なメディアサーバーをすぐに表示しない場合があります。

メディアサーバーが表示されない場合でも、既存のメディアサーバーまたは別の NetBackup 操作は影響されません。

すべてのメディアサーバーを表示するには次の手順を実行します。

- プライマリサーバーで NetBackup 管理コンソールを閉じます。
- NetBackup Service Layer (NBSL) を停止して再起動します。NBSL の再起動は進行中のバックアップまたはリストアジョブに影響しません。
- NetBackup 管理コンソールを開きます。新たに追加されたメディアサーバーのサービスは、NetBackup 管理コンソールで表示されます。

この状況は Windows の [リモート管理コンソール (Remote Administration Console)] にのみ影響します。

[プロセス (Processes)] タブについて

アクティビティモニターの [プロセス (Processes)] タブは、プライマリおよびメディアサーバーで実行される NetBackup プロセスを表示します。

表 28-6 に、NetBackup プロセスの一覧とその説明を示しています。

表 28-6 NetBackup プロセス

プロセス	ポート	説明
acsd	13702	acsd (自動カートリッジシステム) デーモンは、NetBackup メディアサーバー上で実行され、ACS ロボットを制御するホストにマウントおよびマウント解除要求を送信します。
acsssel	なし	UNIX の場合: NetBackup ACS ストレージサーバーインターフェース (SSI) のイベントログ採取 acsssel はイベントを記録します。
acsssi	なし	UNIX の場合: NetBackup ACS ストレージサーバーインターフェース (SSI) acsssi は ACS ライブラリソフトウェアホストと通信します。acsssi は、acsd または ACS ライブラリソフトウェア用の ACS ロボットテストユーティリティからのすべての RPC 通信を処理します。

プロセス	ポート	説明
avrd	なし	自動ボリューム認識およびラベルのスキャンを処理する自動ボリューム認識プロセス。このプロセスによって、 NetBackup では、ラベル付けされたテープを読み込み、関連付けられたリムーバブルメディア要求をドライブに割り当てることができます。
bmrtd	8362	NetBackup Bare Metal Restore Master Server サービスのプロセス。
bpcd	13782	NetBackup Client デーモンは、リモートホストのプログラムを開始するために、プライマリサーバーおよびメディアサーバー間で要求の送受信を行います。 UNIX クライアントの場合、bpcd はスタンドアロンモードでだけ実行できます。 Windows の場合、bpcd は常時 bpinetd.exe の監視下で実行されます。 NetBackup では、bpcd: 固有の構成パラメータが用意されています。 NetBackup 構成内でポート番号が変更された場合、ソフトウェアによって、 services ファイルのポート番号も更新されます。
bpcompatd	なし	NetBackup Compatibility Service のプロセス。
bpdbm	13721	NetBackup Database Manager サービスのプロセス。 NetBackup カタログに対する問い合わせに応答するプロセス。 NetBackup の内部データベースおよびカタログを管理します。このサービスは、 NetBackup のすべての通常操作の実行中、常に NetBackup プライマリサーバー上で実行されている必要があります。
bpinetd	なし	Windows の場合: NetBackup Legacy Client Service のプロセス。 接続要求に対する待機サービスを提供するプロセス。 メモ: CIFS を使う BasicDisk ストレージユニットを設定するには、メディアサーバーと次の処理で同じログオンクレデンシャルを持っている必要があります。bpinetd、nbrmms および vnetd。 p.574 の「CIFS ストレージおよびディスクストレージユニットの NetBackup サービスクレデンシャルの構成」 を参照してください。
bpjava-msvc	なし	NetBackup Java アプリケーションサーバーの認証サービスプログラム。bpinetd は NetBackup Java アプリケーションの起動の間にプログラムを開始し、 NetBackup Java アプリケーションを開始したユーザーを認証します。
bpjava-susvc	なし	NetBackup サーバー上における、 NetBackup Java アプリケーションサーバーのユーザーサービスプログラム。bpjava-msvc は、 NetBackup のログインダイアログボックスでログインに成功すると、プログラムを起動します。bpjava-susvc は、 NetBackup Java アプリケーションサーバーが実行されているホスト上の、管理操作およびエンドユーザー操作を行う NetBackup Java アプリケーションから送信されるすべての要求を対処します。
bpjobd	13723	NetBackup Jobs Database Management デーモン。ジョブデータベースの問い合わせと更新を行います。

プロセス	ポート	説明
bprd	13720	NetBackup Request デーモンのプロセス。 クライアントの自動バックアップを開始し、ファイルのリストアおよびユーザーのバックアップおよびアーカイブに関するクライアントからの要求に応答するプロセス。 NetBackup では、bprd: 固有の構成パラメータが用意されています。NetBackup 構成内でポート番号が変更された場合、ソフトウェアによって、services ファイルのポート番号も更新されます。
ltid	なし	NetBackup Device Manager サービスのプロセス。
nbatd	13783	NetBackup 認証サービスは、認証とアクセスを検証、識別して、その基盤を構成します。
nbaudit	なし	NetBackup Audit Manager はプライマリサーバーで動作します。EMM (Enterprise Media Manager) は、NetBackup データベースの監査レコードを保持します。監査機能が無効になっていても、nbaudit の起動と停止は監査されます。
nbazd	13722	NetBackup 認可サービスは、識別情報に特定のタスクを実行する権限があるかを検証します。
nbars	なし	NetBackup Agent Request Server サービスは、データベースのエージェントメタデータを NetBackup カタログデータベースに追加し、エージェント要求を処理します。このサービスは、「Oracle クローンのジョブ開始」のような特定処理の開始にも関わっています。
nbemm	なし	NetBackup Enterprise Media Manager サービスのプロセス。 メディアおよびデバイスの構成情報が格納されるデータベースへのアクセスおよび管理を行うプロセス。ジョブを実行するには、nbemm.exe が実行されている必要があります。
nbEvtMgr	なし	NetBackup Event Manager Service のプロセス。 NetBackup デーモン間の通信用のイベントチャネルとオブジェクトを作成および管理するプロセス。Event Manager デーモンは、プライマリサーバー上でのみ Enterprise Media Manager (nbemm) とともに実行されます。
nbfdrv64	なし	メディアサーバー上のファイバートランスポートターゲットモードドライバを制御するプロセス。 nbfdrv64 は NetBackup ファイバートランスポート用に構成されたメディアサーバー上で実行されます。
nbftsrvr	なし	ファイバートランスポート (FT) サーバードライバ。NetBackup ファイバートランスポート用に構成されたメディアサーバー上で実行されます。FT 接続のサーバー側で、データフローの制御、SCSI コマンドの処理、データバッファの管理、およびホストバスアダプタのターゲットモードドライバの管理を行います。
nbjm	なし	NetBackup Job Manager サービスのプロセス。 Policy Execution Manager (NBPEM) から送信されたジョブを受け取り、必要なリソースを取得するプロセス。その後、ジョブを開始し、ジョブが完了したことを nbpem に通知します。

プロセス	ポート	説明
nbpem	なし	NetBackup Policy Execution Manager サービスのプロセス。 ポリシーまたはクライアントのタスクを作成し、ジョブの実行予定時間を決定します。ポリシーが変更されていたり、イメージの期限が切れていた場合は、NBPem に通知され、適切なポリシーまたはクライアントタスクが更新されます。
nbproxy	なし	マルチスレッド NetBackup プロセスで、既存の安全でないマルチスレッドライブラリを安全に使用できるようにするプロセス。
nbrb	なし	このプロセスはストレージユニット、テープドライブおよびクライアントをジョブ用に予約するための割り当てを行います。nbrb は Enterprise Media Manager (NBEMM) と連動して動作します。
nbrmms	なし	NetBackup Remote Manager と Monitor Service のプロセス。NetBackup で、バックアップに使用する (またはバックアップ処理の影響を受ける) システム上のリソースをリモートで管理および監視できるようにします。 メモ: CIFS を使う BasicDisk ストレージユニットを設定するには、メディアサーバーと次の処理で同じログオンクレデンシャルを持っている必要があります。bpnetd、nbrmms および vneta。 p.574 の「CIFS ストレージおよびディスクストレージユニットの NetBackup サービスクレデンシャルの構成」を参照してください。
nbsl	9284	NetBackup Service Layer サービスのプロセス。 nbsl は、このポートでローカルプロセスからの接続を待機して、グラフィカルユーザーインターフェースと NetBackup ロジック間の通信を簡易化します。このポートは従来は visd によって使われていました。
nbstserv	なし	NetBackup Storage Lifecycle Manager のプロセス。ストレージライフサイクルポリシー操作を管理し、複製ジョブのスケジュールを設定します。また、容量管理対象ボリュームのディスク容量を監視し、必要に応じて古いイメージを削除します。 メモ: SLP のあらゆる操作のための基本のストレージへ変更を加えた後で nbstserv を再起動してください。
nbsvcmon	なし	NetBackup Service Monitor のプロセス。NetBackup サービスを監視します。サービスが異常終了した場合、nbsvcmon によって、異常終了したサービスの再起動が試行されます。
nbvault	なし	Vault がインストールされている場合、NetBackup Vault Manager サービスのプロセス。
nbwmc	なし	NetBackup Web Management Console のプロセス。証明書とホスト管理、およびクラウドストレージ構成の要求を管理します。 メモ: NetBackup 8.1.2 以前のリリースバージョンでは、クラウドストレージ構成に NetBackup CloudStore Service Container (nbcssc) サービスを使用します。 NetBackup Web サービスのポートを構成するには、『NetBackup ネットワークポートリファレンスガイド』の「NetBackup Web サービスのためのポート構成」を参照してください。

プロセス	ポート	説明
ndmp	10000	NDMP は、ネットワークデータ管理プロトコル (Network Data Management Protocol) の頭文字です。NDMP サーバーは、このプロトコルに準拠し、ポート 10000 で NDMP クライアントからの接続を待機します。
oprdr	なし	NetBackup Volume Manager (vmd) は、oprdr オペレータ要求デーモンを起動します。このプロセスは、ボリュームのマウントおよびマウント解除要求を受信し、NetBackup Device Manager の ltid にこれらの要求を送信します。NetBackup Device Manager は、SCSI インターフェースを介してロボットにこれらの要求を送信します。
pgbouncer	13787	PgBouncer が提供する NetBackup Scale-Out Relational Database 接続プールを管理します。このサービスは、NetBackup のすべての通常バックアップ操作の実行中、NetBackup プライマリサーバー上で実行されている必要があります。Windows のサービス名は vrtspgpoolncersvc です。
postgres	13785	NetBackup リレーショナルデータベースのプロセス。 一部のユーザーに表示される可能性のある、NetBackup サーバーで実行される postgres インスタンスの数。インスタンスの 1 つは、データベースクラスタを実行するプライマリサーバーのプロセスです。これは、最初に開始されるプロセスで、リカバリ操作を実行し、共有メモリを初期化し、バックグラウンドプロセスを実行します。 PostgreSQL は、クライアントプロセスからの接続要求がある場合、追加のプロセスも生成します。(詳しくは、PostgreSQL のマニュアル https://www.postgresql.org/docs/current/app-postgres.html を参照してください。) 各バックグラウンドインスタンスは、特定の目的専用です。例: データベースの自動保守、エラーメッセージのログ記録、統計情報の更新と収集、データベースアクティビティを実行するさまざまなプログラムからのクライアント接続の処理。
spad	10102	NetBackup Deduplication Manager は PureDisk Deduplication Engine を管理します。 NetBackup の重複排除構成を保守し、重複排除の内部処理を制御し、レプリケーションを制御し、セキュリティを制御し、イベントの昇格を制御するために、NetBackup 重複排除ストレージサーバーのホスト上で実行します。
spooldd	10082	NetBackup Deduplication Engine サービスのプロセス。重複排除ストレージサーバーで動作します。 NetBackup Data Protection Optimization Option のライセンスを付与され、その設定がされている場合にのみアクティブになります。
tladd tldcd	13711	tladd プロセスは、DLT テープライブラリのドライブを管理する NetBackup サーバー上で実行されます。このプロセスは、NetBackup Device Manager からボリュームのマウントおよびマウント解除要求を受信し、ロボット制御プロセス (tldcd) にこれらの要求を送信します。 tldcd プロセスは、SCSI インターフェースを介して DLT テープライブラリロボットと通信します。 テープライブラリを共有する場合、tldcd はロボットを制御する NetBackup サーバー上で実行されます。
vmd	13701	NetBackup Volume Manager サービスのプロセス。

プロセス	ポート	説明
vnetd	13724	Cohesity ネットワークデーモンのプロセスは、シングルポートによる接続時に実行されるすべてのソケット通信を可能にします。次の vnetd プロセスとプロキシタイプは、NetBackup ホスト上に配置できます。 ■ スタンドアロン。スタンドアロンプロセスが 1 つ必要です。複数のプロセスも可能です。 ■ インバウンドプロキシ。インバウンドプロキシが 1 つ必要です。複数のプロキシも可能ですが、その場合は異なる番号でそれぞれを識別します。 ■ アウトバウンドプロキシ。アウトバウンドプロキシが 1 つ必要です。複数のプロキシも可能ですが、その場合は異なる番号でそれぞれを識別します。 ■ HTTP トンネルプロキシ。デフォルトでは、HTTP トンネルプロキシが NetBackup メディアサーバーで実行しているはずですが、NetBackup クライアントでは実行されません。 p.340 の「NetBackup サーバーの WEB_SERVER_TUNNEL_ENABLE オプション」を参照してください。 vnetd プロセスとプロキシタイプは次のように確認できます。 ■ UNIX および Linux の場合は、NetBackup bpps コマンドを使用できます。 ■ Windows の場合は、[タスクマネージャー]の[プロセス]タブ ([コマンドライン]列の表示が必要)を使用できます。 メモ: CIFS を使う BasicDisk ストレージユニットを設定するには、メディアサーバーと次の処理で同じログオンクレデンシャルを持っている必要があります。bpineta、nbrmms および vnetd。 p.574 の「CIFS ストレージおよびディスクストレージユニットの NetBackup サービスクレデンシャルの構成」を参照してください。
veritas_pbx	1556 1557	Veritas Private Branch Exchange。シングルポートによる接続時に実行されるすべてのソケット通信を可能にします。NetBackup への接続は veritas_pbx ポートを使用します。

[プロセスの詳細 (Process Details)] ダイアログボックスでの NetBackup プロセスの監視

次の手順ではプロセスの詳細を表示する方法について説明します。

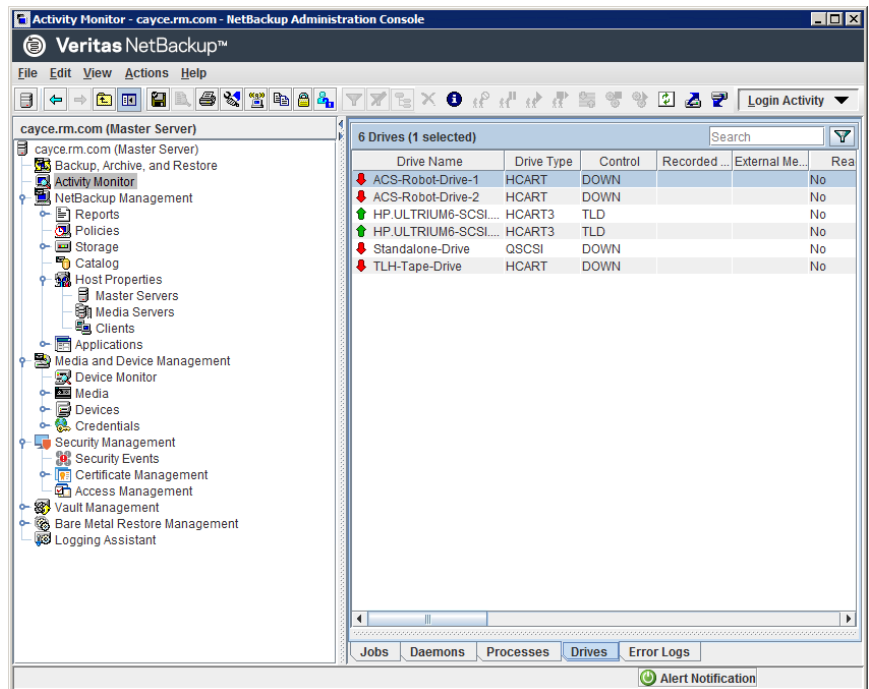
プロセスの詳細を表示する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールでアクティビティモニターをクリックします。
- 2 特定のプロセスの詳細を表示するには、表示するプロセスを[プロセス (Processes)] タブでダブルクリックします。選択したプロセスの[プロセスの詳細 (Process Details)] ダイアログボックスが表示されます。
- 3 [プロセスの詳細 (Process Details)] ダイアログボックスで、上矢印または下矢印をクリックして、リストに含まれる次のプロセスの詳細を確認します。

[ドライブ (Drives)] タブについて

アクティビティモニターの[ドライブ (Drives)]タブには監視対象のサーバーの NetBackup ドライブが表示されます。[ドライブ (Drives)]タブを使用すると、ドライブ、デバイスパス、オペレータのサービス要求を管理できます。[デバイス モニター (Device Monitor)]の[メディアおよびデバイスの管理 (Media and Device Management)]を利用し、ドライブの状態を変更し、テープドライブを消去し、実行できるその他の操作を実行します。

図 28-2 アクティビティモニターの[ドライブ (Drives)]タブ



ドライブの詳細を表示するには、[ドライブ (Drives)]タブペインでドライブをダブルクリックします。ドライブについて詳しくは、[ドライブの詳細 (Drive Details)]ダイアログボックスの[ヘルプ (Help)]をクリックしてください。

テープドライブの監視

次の手順では NetBackup テープドライブを監視する方法について説明します。

テープドライブを監視する方法NetBackup

- 1 NetBackup 管理コンソールでアクティビティモニターをクリックします。
- 2 右ペインで、[ドライブ (Drives)]タブを選択します。ドライブリストで、状態の詳細を表示するドライブをダブルクリックします。
- 3 選択したドライブに対する[ドライブの詳細 (Drive Details)]ダイアログボックスが表示されます。前のドライブまたは次のドライブの状態を表示するには、上矢印または下矢印をクリックします。

アクティビティモニターからのテープドライブのクリーニング

ドライブクリーニング機能は、デバイスモニターからも実行できます。

テープドライブのクリーニングを実行する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[アクティビティモニター (Activity Monitor)]を選択します。次に、詳細ペインで[ドライブ (Drives)]タブを選択します。
- 2 クリーニングを実行するドライブを選択します。
- 3 [処理 (Actions)]>[ドライブクリーニング (Drive Cleaning)]を選択し、次のドライブクリーニング操作のいずれかを選択します。

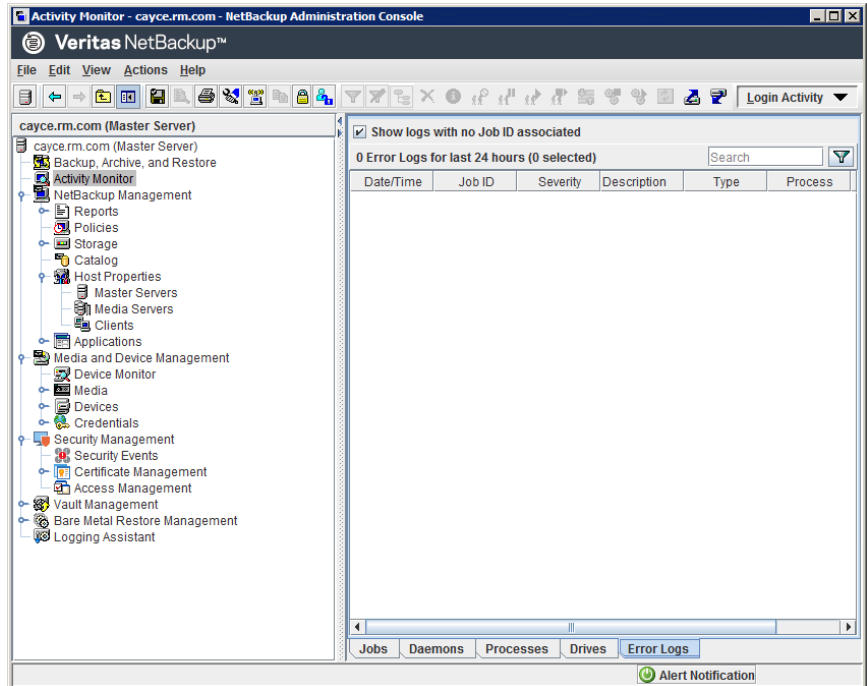
処理	説明
今すぐクリーニング (Clean Now)	クリーニングの間隔または累積マウント時間に関係なく、選択したドライブでオペレータによるクリーニングを開始します。ドライブがスタンダアロンドライブの場合にマウント要求を発行するには、ドライブにクリーニングテープが入っている必要があります。[今すぐクリーニング (Clean Now)]を実行すると、マウント時間は 0 (ゼロ) にリセットされます。クリーニングの間隔の値は変更されません。
マウント時間のリセット (Reset Mount Time)	選択したドライブのマウント時間を 0 (ゼロ) にリセットします。[マウント時間のリセット (Reset Mount Time)]は、ドライブの手動クリーニングを実行した後でマウント時間をリセットする際に使用します。
クリーニングの間隔の設定 (Set Cleaning Frequency)	ドライブクリーニングの間隔 (マウント時間) を時間単位で設定します。

[エラーログ (Error Logs)]タブについて

アクティビティモニターの[エラーログ (Error Logs)]タブには、監視対象サーバー上での NetBackup のエラーログの状態が表示されます。アクティビティモニターの[エラーログ (Error Logs)]タブの表示を有効化するには、[表示 (View)]に移動し、[オプション

(Options)]を選択します。エラーログの表示を有効化するオプションを選択します。アクティビティ 모니터の[エラーログ (Error Logs)]タブを使用して、過去「n」時間に生成された、重要なログ、情報ログ、エラー、および警告を表示します。この時間数は[エラーログ (Error Logs)]タブで構成できます。

図 28-3 アクティビティモニターの[エラーログ (Error Logs)]タブ



ログエントリをクリックすると、そのログエントリと関連する詳細情報が別個の[ログの詳細 (Log details)]ダイアログボックスに表示されます。ドライブについて詳しくは、[ログの詳細 (Log Details)]ダイアログボックスの[ヘルプ (Help)]をクリックしてください。

ジョブデータベースについて

NetBackup では完了したジョブを定期的に削除するために `bpdjobs -clean` コマンドを使用します。

デフォルトでは、`bpdjobs` プロセスによって、3 日前より古いすべての完了済みのジョブが削除されます。デフォルトでは、`bpdjobs` プロセスによって、それより新しい完了済みのジョブが 3 日間の保持期間が切れるまで保持されます。

ジョブデータベースのジョブを、デフォルトの 3 日間より長い期間保持するには、デフォルト値を変更する必要があります。

bprd NetBackup Request デーモンが実行中である場合、bprd によって、他のクリーンアップ作業の実行時に bpdjobs プロセスが自動的に開始されます。このプロセスは、午前 0 時を過ぎて最初に bprd が起動したときに開始されます。自動スタートアップは、cron または代替の方法を使用して bpdjobs を他の時間に実行するように選択するかどうかにかかわらず、行われます。

bpdjobs -clean は、次のディレクトリに存在します。

Windows の場合: `install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bpdjobs -clean`

UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpdjobs -clean`

デフォルトの bpdjobs_options 値の変更

永続的に bpdjobs_options のデフォルト値を変更するには、次の方法のいずれかを使います。

注意: 次の手順では、値の例として、8 日に相当する 192 を指定しています。この値は、必要な時間数に置き換えることができます。

Windows

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Veritas¥NetBackup¥CurrentVersion¥Config に新しいレジストリキーを追加するには、次の手順を実行します。

Windows で bpdjobs_options のデフォルト値を変更する方法

- 1 次のディレクトリに移動します。

```
install_path¥Veritas¥NetBackup¥bin¥admincmd¥
```

- 2 正常に終了しなかったジョブがジョブデータベースまたはアクティビティモニターの表示に保持される時間を設定するには、次を実行します。

```
echo KEEP_JOBS_HOURS = 192 | bpsetconfig
```

- 3 正常に終了したジョブがジョブデータベースまたはアクティビティモニターの表示に保持される時間を設定するには、次を実行します。

```
echo KEEP_JOBS_SUCCESSFUL_HOURS = 192 | bpsetconfig
```

UNIX

/usr/opensv/netbackup/bp.conf に新しい構成を追加するには、次の手順を実行します。

UNIX で bpdjobs_options のデフォルト値を変更する方法

- 1 次のディレクトリに移動します。

```
cd /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/
```

- 2 正常に終了しなかったジョブがジョブデータベースまたはアクティビティモニターの表示に保持される時間を設定するには、次を実行します。

```
echo KEEP_JOBS_HOURS = 192 | bpsetconfig
```

- 3 正常に終了したジョブがジョブデータベースまたはアクティビティモニターの表示に保持される時間を設定するには、次を実行します。

```
echo KEEP_JOBS_SUCCESSFUL_HOURS = 192 | bpsetconfig
```

注意事項

デフォルト値を変更する場合は次の注意事項を考慮してください。

- オプション KEEP_JOBS_SUCCESSFUL_HOURS および KEEP_JOBS_HOURS のデフォルト値は 78 時間です。
- 保持期間の値は、ジョブが終了した時刻に対して測定されます。
- 正常終了したジョブに関する情報は、正常に終了しなかったジョブに関する情報より長く保持できません。KEEP_JOBS_SUCCESSFUL_HOURS が KEEP_JOBS_HOURS を上回る場合、bpdjobs によって KEEP_JOBS_SUCCESSFUL_HOURS が KEEP_JOBS_HOURS と同じ値に設定されます。
- KEEP_JOBS_SUCCESSFUL_HOURS が 0 (ゼロ) に設定されている場合、bpjobd では、正常終了したジョブに対して KEEP_JOBS_HOURS bpdjobs の値が使用されます。KEEP_JOBS_SUCCESSFUL_HOURS が 0 (ゼロ) より大きく KEEP_JOBS_HOURS, KEEP_JOBS_HOURS より小さい値である場合、KEEP_JOBS_HOURS は正常に終了しなかったジョブに対してのみ使用されます。

BPDBJOBS_OPTIONS 環境変数について

BPDBJOBS_OPTIONS 環境変数では、スクリプトを使用してジョブの保持オプションを設定するための便利な方法が提供されています。bpdjobs プロセスが BPDBJOBS_OPTIONS 環境変数を確認することによって、ジョブを保持する期間が決定されます。

Windows に存在する場合: BPDBJOBS_OPTIONS は、レジストリキーの設定より優先されます。

UNIX に存在する場合: BPDBJOBS_OPTIONS は、bp.conf の設定より優先されます。bpdjobs の出力をカスタマイズするには、bp.conf ファイル内の出力に表示させる列にそれぞれ BPDBJOBS_COLDEFS エントリを追加します。

次に示すオプションを使用すると、NetBackup がジョブを保持する期間を指定できます。これらのオプションは、BPDBJOBS_OPTIONS 環境変数に小文字で入力する必要があります。

表 28-7 BPDBJOBS_OPTIONS 環境変数のオプション

オプション	説明
-keep_hours hours	このオプションを -clean オプションと同時に使用して、正常に完了しなかったジョブを bpdjobs で保持する時間数を指定します。デフォルトは 78 時間です。 正常終了したジョブと失敗したジョブをデフォルトの 78 時間より長く保持するには、keep_hours とともに keep_successful_hours を指定する必要があります。
-keep_successful_hours hours	このオプションを -clean オプションと同時に使用して、正常に完了したジョブを bpdjobs で保持する時間数を指定します。時間数は keep_hours 以下である必要があります。 範囲外の値は無視されます。デフォルトは 78 時間です。
-keep_days days	このオプションを -clean オプションと同時に使用して、完了済みのジョブを bpdjobs で保持する日数を指定します。デフォルトは 3 日です。
-keep_successful_days days	この値は、-keep_days より小さい数である必要があります。 このオプションを -clean オプションと同時に使用して、正常に完了しなかったジョブを bpdjobs で保持する日数を指定します。デフォルトは 3 日です。

次の例では、バッチファイル (cleanjobs.bat) が Windows サーバーで使用されています。このスクリプトは、このマニュアルから直接コピーし、必要に応じて変更することができます。

- 1 行目では、正常に終了しなかったジョブを保持する時間 (24 時間) および正常終了したジョブを保持する時間 (5 時間) を指定しています。
- 2 行目では、bpdjobs コマンドへのパスを指定しています。.bat ファイルに、bpdjobs の正しい場所を指定します。この例では、NetBackup はデフォルトの場所にインストールされています。

```
set BPDBJOBS_OPTIONS= -keep_hours 24 -keep_successful_hours 5  
C:\%progra~1%\VERITAS\NetBackup\bin\admincmd\bpdjobs -clean
```

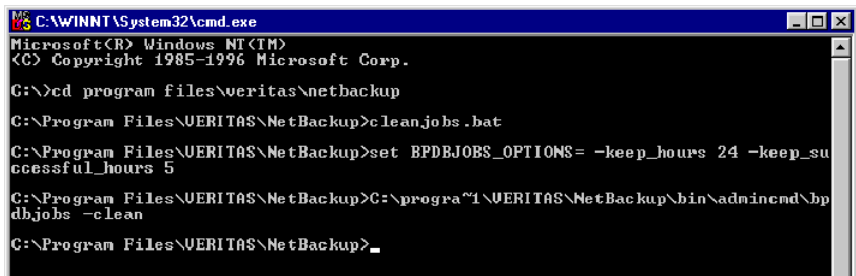
UNIX サーバーでの同じスクリプトは次のようになります。


```
setenv BPDBJOBS_OPTIONS "-keep_hours 24 -keep_successful_hours 5  
-clean"  
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bpdbjobs ${*}
```

.bat ファイルは、適切なディレクトリから実行するかぎり、どのような場所に格納されていてもかまいません。

次の例では、管理者が cleanjobs.bat を作成して、C:\Program Files\VERITAS\NetBackup に格納しています。

図 28-4 Windows での cleanjobs.bat の実行



bpdbjobs コマンドラインオプション

bpdbjobs コマンドは、ジョブデータベースと相互作用し、完了したジョブのファイルを削除または移動します。コマンドラインオプションは、ジョブの保持に関する他のすべての指示より優先されます。

-clean オプションを次のように指定すると、bpdbjobs によって指定された期間より古い完了済みのジョブが削除されます。

```
bpdbjobs -clean [ -M <master servers> ]  
[ -keep_hours <hours> ] or [ -keep_days <days> ]  
[ -keep_successful_hours <hours> ] or  
[ -keep_successful_days <days> ]
```

たとえば、次のコマンドを実行すると、72 時間を経過した正常に終了しなかったジョブが削除されます。

```
bpdbjobs -clean -keep_hours 72
```

詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

bpdbjobs デバッグログの有効化

bpdbjobs 動作の詳細情報が必要な場合は、次の手順を実行します。

bpdbjobs デバッグログの有効化

- ◆ 次のディレクトリを作成することによって、bpdbjobs デバッグログを有効にします。

Windows の場合: `install_path¥NetBackup¥logs¥bpdbjobs`

UNIX の場合: `/usr/opensv/netbackup/logs/bpdbjobs`

メモ: デバッグログを使用する前に、『[NetBackup ログリファレンスガイド](#)』でレガシーログのガイドラインをお読みください。

デバイスモニターについて

[デバイスモニター (Device monitor)]を使用して、テープドライブ、ディスクプール、オペレータのサービス要求を次のように管理します。

メディアのマウント	p.1079 の「 メディアマウントエラーについて 」を参照してください。
保留中の要求および操作	p.1080 の「保留中の要求および操作について」を参照してください。 p.1080 の「ストレージユニットに対する保留中の要求について」を参照してください。 p.1082 の「保留中の要求の再送信」を参照してください。 p.1082 の「保留中の操作の解決」を参照してください。 p.1083 の「保留中の要求の拒否」を参照してください。
テープドライブ	p.458 の「ドライブコメントの変更」を参照してください。 p.458 の「停止したドライブについて」を参照してください。 p.459 の「ドライブの操作モードの変更」を参照してください。 p.463 の「デバイスモニターからのテープドライブのクリーニング」を参照してください。 p.464 の「ドライブのリセット」を参照してください。 p.465 の「ドライブのマウント時間のリセット」を参照してください。 p.465 の「ドライブをクリーニングする間隔の設定」を参照してください。 p.466 の「ドライブの詳細の表示」を参照してください。 p.1083 の「保留中の要求の拒否」を参照してください。

ディスクブール ディスクブールについての詳細は、お使いのディスクストレージオプションの **NetBackup ガイド**を参照してください。

- 『NetBackup AdvancedDisk ストレージソリューションガイド』
- 『NetBackup クラウド管理者ガイド』
- 『NetBackup Deduplication ガイド UNIX、Windows および Linux』
- 『ディスクの NetBackup OpenStorage ソリューションガイド』
- 『NetBackup Replication Director ソリューションガイド』

メディアマウントエラーについて

NetBackup ジョブのためにメディアがマウントされているときに、エラーが発生する場合があります。**NetBackup** は、エラーの種類に応じて次のように保留中の要求キューにマウント要求を追加するか、またはマウント要求を取り消します。

保留中の要求キュー **NetBackup** がマウント要求をキューに追加する場合、**NetBackup** によってオペレータによる保留中の処理が作成されます。処理は、[デバイスモニター (Device monitor)]に表示されます。マウント要求がキューに投入されると、次の動作のいずれかが発生します。

- この状態が解決されるまで、マウント要求が保留される。
- オペレータによって要求が拒否される。
- メディアマウントでタイムアウトが発生する。

要求をキャンセルする マウント要求が自動的に取り消された場合、**NetBackup** によって、バックアップに使用するために他のメディアの選択が試行されます。(選択は、バックアップ要求の場合だけに適用されます。)

ほぼすべての場合、マウント要求はキューに投入されず、自動的に取り消されます。メディアのマウントが取り消されると、バックアップに待ち状態が発生しないように **NetBackup** によって別のメディアが選択されます。

NetBackup によって別のメディアが選択された場合

次の状態の場合、自動的に別のメディアが再度選択される可能性があります。

- 要求されたメディアが停止状態のドライブに存在する場合
- 要求されたメディアが誤って配置されている場合
- 要求されたメディアが書き込み禁止の場合
- 要求されたメディアがメディアサーバーにアクセスできないドライブに存在する場合
- 要求されたメディアがオフライン ACS LSM (Automatic Cartridge System Library Storage Module) に存在する場合 (ACS ロボット形式のみ) (ACS ロボット形式のみ)
- 要求されたメディアのバーコードが読み込めない場合 (ACS ロボット形式のみ)

- 要求されたメディアがアクセスできない ACS に存在する場合 (ACS ロボット形式のみ)
- 要求されたメディアがマウントできないと判断された場合

保留中の要求および操作について

NetBackup Web UI で、[ストレージ (Storage)]、[デバイスモニター (Device Monitor)] の順に選択します。次に、[デバイスモニター (Device monitor)] タブをクリックします。要求が操作を待機している場合、または要求に基づいて NetBackup で処理が実行されている場合、その要求が [保留中の要求 (Pending requests)] ペインに表示されます。たとえば、テープのマウントで特定のボリュームが必要な場合、その要求が [保留中の要求 (Pending requests)] ペインに表示されます。NetBackup のリストア操作で特定のボリュームが必要になった場合、NetBackup はそのボリュームをロードまたは要求します。

メディア固有のマウント要求を NetBackup で自動的に処理できない場合、要求または操作は保留状態に変更されます。

表 28-8 保留状態

保留状態	説明
保留中の要求	保留中の要求が、NetBackup で自動的に処理できないテープのマウント要求であることを指定します。この要求を完了するにはオペレータの補助が必要です。NetBackup の [保留中の要求 (Pending requests)] ペインに要求が表示されます。 NetBackup で次の問題が発生した場合、マウント要求に保留中の状態が割り当てられます。 ■ ジョブで使用するスタンドアロンドライブを特定できない。 ■ ロボットのどのドライブが自動ボリューム認識 (AVR) モードになっているか特定できない。
保留中の操作	テープのマウント操作で問題が発生し、テープをマウントできない場合、そのテープのマウント要求は保留中の操作になることを指定します。要求を完了するにはオペレータの操作が必要であるため、NetBackup では [保留中の要求 (Pending requests)] ペインに要求が表示されます。通常、保留中の操作は、ロボットライブラリ内のドライブで発生します。

ストレージユニットに対する保留中の要求について

NetBackup Web UI で、[ストレージ (Storage)]、[デバイスモニター (Device Monitor)] の順に選択します。次に、[デバイスモニター (Device monitor)] タブをクリックします。

次のテープのマウント要求は、[保留中の要求 (Pending requests)] ペインには表示されません。

- バックアップの要求

- 複製操作の対象として必要なテープを要求します。

これらの要求はストレージユニットのリソースに対して行われるため、特定のボリュームには使用されません。NetBackup は、あるストレージユニットのマウント要求を、別のストレージユニットのドライブに自動的に割り当てることはありません。また、このようなマウント要求を手動で他のストレージユニットに再割り当てすることもできません。

ストレージユニットが利用できない場合、NetBackup ロボットが機能している他のストレージユニットの選択が試行されます。NetBackup がジョブ用のストレージユニットを検出できない場合、NetBackup はそのジョブをキューに投入します ([アクティビティモニター (Activity Monitor)] に [キューへ投入済み (Queued)] という状態が表示されます)。

ロボットまたはドライブが停止している場合は、ストレージユニットのマウント要求が [デバイスモニター (Device monitor)] で表示されるように NetBackup を構成できます。保留中の要求は [デバイスモニター (Device monitor)] に表示されるため、これらのマウント要求は手動でドライブに割り当てることができます。

保留中の要求の解決

保留中の要求を解決するために次の手順を使います。

保留中の要求を解決する方法

- 1 要求されたボリュームの密度と一致するドライブに要求されたボリュームを挿入します。
- 2 NetBackup Web UI を開きます。
- 3 左側で [ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)] の順に選択します。次に、[デバイスモニター (Device monitor)] タブをクリックします。
- 4 [保留中の要求 (Pending requests)] ペインで要求を選択し、要求の次の列の内容に注意します。
 - 密度 (Density)
 - 記録されたメディア ID (Recorded media ID)
 - モード (Mode)
- 5 保留中の要求の密度に一致するドライブ形式を検索します。
- 6 ドライブが起動状態であり、他の要求に割り当てられていないことを確認します。
- 7 ドライブを見つけてます。続いて、ドライブおよび保留中の要求が同じホスト上に存在することを確認してください。
- 8 必要に応じて、メディアを用意し、そのメディアを書き込み可能にして、ドライブに挿入します。
- 9 各ベンダーが提供する、ドライブ装置のマニュアルに記載されているとおり、ドライブが準備完了状態になるまで待機します。

- 10 要求を見つけます。次に、[処理 (Actions)]、[要求の割り当て (Assign request)]の順に選択します。
- 11 [保留中の要求 (Pending requests)] ペインから要求が削除されたことを確認します。
- 12 ドライブ名をクリックし、[ドライブ状態 (Drive status)] タブをクリックします。
ドライブの[要求 ID (Request ID)] 列にジョブの要求 ID が表示されているかどうかを確認します。

保留中の操作の解決

保留中の操作は、保留中の要求に類似しています。保留中の操作に対しては、NetBackup で問題の原因が特定され、問題を解決するために必要な手順がオペレータに通知されます。

保留中の操作を解決するために次の手順を使ってください。

保留中の操作を解決する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に、[デバイスモニター (Device monitor)] タブをクリックします。
- 3 [保留中の要求 (Pending requests)] ペインで保留中の操作を見つけます。
- 4 [処理 (Actions)]、[保留している処理の表示 (Display pending action)]の順にクリックします。
- 5 可能な処理のリストを確認し、[OK]をクリックします。
- 6 エラー状況を修正し、要求を再送信するか、要求を拒否します。
p.1082 の「[保留中の要求の再送信](#)」を参照してください。
p.1083 の「[保留中の要求の拒否](#)」を参照してください。

保留中の要求の再送信

保留中の操作に関する問題を修正した後に、要求を再送信することができます。

ロボットでボリュームを認識できない問題が発生している場合は、まずボリュームを検索してロボットに挿入し、ボリューム構成を更新します。通常、認識できないボリュームはロボットから取り外されており、このボリュームに対して NetBackup から要求が行われました。

p.556 の「[ロボットインベントリオプション](#)」を参照してください。

要求を再送信する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に、[デバイスモニター (Device monitor)]タブをクリックします。
- 3 [保留中の要求 (Pending requests)]ペインで要求を見つけます。
- 4 [処理 (Actions)]、[要求の再送信 (Resubmit request)]の順に選択します。

保留中の要求の拒否

状況によっては、サービス要求を拒否することが必要となる場合があります。たとえば、ドライブが利用できない場合、ボリュームが検出されない場合、ユーザーがボリュームの使用権限を所有していない場合などです。要求を拒否すると、NetBackup は該当する状態メッセージをユーザーに送信します。

要求を拒否する方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で[ストレージ (Storage)]、[テープストレージ (Tape storage)]の順に選択します。次に、[デバイスモニター (Device monitor)]タブをクリックします。
- 3 [保留中の要求 (Pending requests)]ペインで要求を見つけます。
- 4 次に、[処理 (Actions)]、[要求の拒否 (Deny request)]の順に選択します。

NetBackup のレポート

この章では以下の項目について説明しています。

- [レポートユーティリティについて](#)
- [レポートの実行](#)
- [別の文書へのレポートテキストのコピー](#)
- [レポートの保存またはエクスポート](#)
- [レポートの印刷](#)

レポートユーティリティについて

管理コンソールのNetBackup[レポート(Reports)]ユーティリティを使用すると、NetBackup 操作の検証、管理、トラブルシューティングのためのレポートを生成できます。NetBackup レポートには、ジョブの状態、クライアントのバックアップ、メディアの内容に応じた情報が表示されます。[トラブルシュータ (Troubleshooter)]を使用して、NetBackup レポートに表示されたエラーの原因を分析します。

[レポート (Reports)]ウィンドウの右ペインで、レポートデータの管理または実行するレポートの選択を行います。

NetBackup の各種レポートを利用し、ジョブアクティビティとメディアに関する情報を多種多様に表示できます。

表 29-1 NetBackup レポート

レポート名	説明
バックアップの状態 (Status of Backups)	[バックアップの状態 (Status of Backups)]レポートには、指定された期間に完了したジョブの状態およびエラー情報が表示されます。エラーが発生した場合、エラーについての簡単な説明がレポートに含まれます。

レポート名	説明
クライアントバックアップ (Client Backups)	[クライアントバックアップ (Client Backups)]レポートには、指定された期間に完了したバックアップの詳細な情報が表示されます。
問題 (Problems)	[問題 (Problems)]レポートでは、指定された期間にサーバーが記録した問題のリストが生成されます。このレポートの情報は、[すべてのログエントリ (All log entries)]レポートから取得する情報の一部です。
すべてのログエントリ (All log entries)	[すべてのログエントリ (All log entries)]レポートは NetBackup Web UI でも利用できます。 [すべてのログエントリ (All log entries)]レポートでは、指定された期間におけるすべてのログエントリのリストが生成されます。このレポートには、[問題 (Problems)]レポートおよび[メディアのログ (Media Logs)]レポートからの情報が含まれます。このレポートには、転送速度も表示されます。転送速度は、将来バックアップを行うときに、速度を判断してバックアップ時間を予測するために有効です。(転送速度は、多重化されたバックアップでは表示されません。)
メディア上のイメージ (Images on Media)	[メディア上のイメージ (Images on Media)]レポートでは、NetBackup のイメージカタログに記録されるメディアの内容のリストが生成されます。このレポートはすべての形式のメディア (ディスクを含む) に対して作成でき、クライアント、メディア ID またはパスによってフィルタリングできます。
メディアのログ (Media Logs)	[メディアのログ (Media Logs)] レポートには、NetBackup のエラーカタログに記録されるメディアのエラーメッセージまたは情報メッセージが表示されます。
テープ上のイメージ (Images On Tape)	[テープ上のイメージ (Images On Tape)]レポートでは、NetBackup のイメージカタログに記録されるテープベースのメディアの内容が生成されます。このレポートは[メディア上のイメージ (Images on Media)]レポートの一部です。
テープのログ (Tape Logs)	[テープのログ (Tape Logs)]レポートには、テープを使用したバックアップおよびリカバリに関連するすべてのエラーログが表示されます。このレポートは[メディアのログ (Media Logs)]レポートの一部です。
テープの内容 (Tape Contents)	[テープの内容 (Tape Contents)]レポート (以前の[メディアの内容 (Media Contents)]レポート) では、メディアヘッダーおよびバックアップヘッダーから直接読み込んだときのボリュームの内容のリストが生成されます。このレポートには、1 つのボリューム上に存在する (個々のファイルではなく) バックアップ ID のリストが表示されます。テープをマウントする必要がある場合、レポートが表示されるまでに時間がかかります。 このレポートを実行する前に、ジョブのデフォルトのジョブ優先順位を上書きすることを選択できます。デフォルトの優先度は[デフォルトのジョブの優先度 (Default Job Priorities)]ホストプロパティで指定します。

レポート名	説明
テープの概略 (Tape Summary)	[テープの概略 (Tape Summary)]レポートには、指定されたメディアの所有者の有効なボリュームおよび無効なボリュームの概略が、有効期限に従って表示されます。各保持レベルのボリュームの数も表示されます。詳細モードでは、レポートにはメディア ID および有効期限が表示されます。 無効なメディアの状態は、[空きなし (Full)]、[凍結 (Frozen)]、[一時停止 (Suspended)]または[インポート済み (Imported)]です。他のボリュームは有効と見なされます。 [空きなし (Full)]、[一時停止 (Suspended)]または[インポート済み (Imported)]状態の期限切れのボリュームはレポートに表示されません。ただし、[凍結 (Frozen)]状態の期限切れのボリュームはレポートに表示されます。NetBackup はバックアップを実行するときに、他の期限切れのボリュームをメディアカタログから削除します。他の状態の期限切れのボリュームは、ボリュームの期限が切れてから次のバックアップを実行するまでにレポートを実行した場合に表示できます。
書き込み済みテープ (Tape Written)	[書き込み済みテープ (Tape Written)]レポートには、指定された期間にバックアップに使用されたボリュームが表示されます。また、指定された期間より前に元のボリュームが作成されている場合は、ボリュームの複製に使用したボリュームも表示されません。
テープリスト (Tape Lists)	[テープリスト (Tape Lists)]レポートは、選択したメディアの所有者またはメディア ID のバックアップに対して割り当てられているボリュームの情報を生成します。 このレポートはディスク形式のストレージユニットのメディアを示しません。ディスクストレージユニットに保存されるバックアップの場合は、[メディア上のイメージ (Images on Media)]レポートまたは[ディスク上のイメージ (Images On Disk)]レポートを使用します。
ディスク上のイメージ (Images on Disk)	[ディスク上のイメージ (Images on Disk)]レポートでは、メディアサーバーに接続されているディスクストレージユニットに存在するイメージリストが生成されます。このレポートは[メディア上のイメージ (Images on Media)]レポートの一部で、ディスク固有の列だけが表示されます。
ディスクのログ (Disk Logs)	[ディスクのログ (Disk Logs)]レポートには、ディスクを使用したバックアップおよびリカバリに関連するすべてのエラーログが表示されます。このレポートは[メディアのログ (Media Logs)]レポートの一部です。
ディスクストレージユニットの状態 (Disk Storage Unit Status)	[ディスクストレージユニットの状態 (Disk Storage Unit Status)]レポートには、NetBackup の現在の構成におけるディスクストレージユニットの状態が表示されます。(たとえば、ディスクストレージユニットの合計容量および使用済み容量が表示されます。) 複数のストレージユニットが同じディスクプールを指している場合があります。レポートの問い合わせによる検索がストレージユニット別に行われる場合、このレポートでは、ディスクプールのストレージの容量が複数回計算に入れられます。 ディスクグループを参照するストレージユニットでは、容量の値が表示されません。
ディスクプールの状態 (Disk Pool Status)	[ディスクプールの状態 (Disk Pool Status)]レポートでは、1 つ以上のディスクプールの詳細が生成されます。

p.1087 の「[別の文書へのレポートテキストのコピー](#)」を参照してください。

Vault レポートについて詳しくは、『[NetBackup Vault 管理者ガイド](#)』を参照してください。

レポートの実行

次の手順は [レポート (Reports)] ユーティリティから NetBackup レポートを実行する方法を記述します。

レポートを実行する方法

- 1 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)] > [レポート (Reports)] を展開します。

NetBackup では、現在選択されているプライマリサーバーに対してレポートが実行されます。異なるプライマリサーバーでレポートを実行するには、[ファイル (File)] メニューで[サーバーの変更 (Change Server)]をクリックします。

p.1102 の「[リモートサーバーへのアクセス](#)」を参照してください。

- 2 左ペインで、実行するレポートの名前をクリックします。
一部のレポートでは、最初にレポートグループを展開し、次にレポートの名前をクリックする必要があります。
- 3 レポートに何を含めるか、または除外するかの基準を選択します。例:
 - レポートの対象とする期間を選択します。
 - レポートを実行するメディアサーバーとクライアントを選択します。
- 4 [レポートの実行 (Run report)]を選択します。

別の文書へのレポートテキストのコピー

次の手順は NetBackup レポートから文字列をコピーして、表計算ワークシートや他の文書に貼り付ける方法を記述します。

レポートの文字列を他の文書にコピーする方法

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (Management)] > [レポート (Reports)] を展開します。
- 2 左ペインで、実行するレポートの名前をダブルクリックします。
一部のレポートでは、最初にレポートグループを展開し、次にレポートの名前をクリックする必要があります。
- 3 レポートに何を含めるか、または除外するかの基準を選択して、[レポートの実行 (Run report)]を選択します。
- 4 Shift キーまたは Ctrl キーを押したまま、コピーするレポートの行を選択します。

- 5 [編集 (Edit)]メニューで、[クリップボードにコピー (Copy To Clipboard)]をクリックします。
- 6 表計算ワークシートか他の文書に、選択した行を貼り付けます。

レポートの保存またはエクスポート

次の手順は NetBackup レポートを保存またはエクスポートする方法を説明します。

レポートを保存またはエクスポートする方法

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (Management)] > [レポート (Reports)] を展開します。
- 2 左ペインで、実行するレポートの名前をクリックします。
一部のレポートでは、最初にレポートグループを展開し、次にレポートの名前をクリックする必要があります。
- 3 レポートに何を含めるか、または除外するかの基準を選択して、[レポートの実行 (Run Report)]をクリックします。
- 4 [ファイル (File)]メニューで、[エクスポート (Export)]をクリックします。
- 5 [名前を付けて保存 (Save As)]ダイアログボックスで、レポートを保存する場所を選択して、ファイル名を指定します。
- 6 [保存 (Save)]をクリックします。

p.1087 の「[別の文書へのレポートテキストのコピー](#)」を参照してください。

レポートの印刷

次の手順は NetBackup レポートを印刷する方法を説明します。

レポートを印刷する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールの左ペインで、[NetBackup の管理 (Management)] > [レポート (Reports)] を展開します。
- 2 左ペインで、実行するレポートの名前をクリックします。
一部のレポートでは、最初にレポートグループを展開し、次にレポートの名前をクリックする必要があります。
- 3 レポートに何を含めるか、または除外するかの基準を選択して、[レポートの実行 (Run Report)]をクリックします。
- 4 [ファイル (File)]メニューで、[印刷 (Print)]をクリックします。

電子メール通知

この章では以下の項目について説明しています。

- [失敗したバックアップについてのバックアップ管理者への通知の送信](#)
- [バックアップについてホスト管理者に通知を送信する](#)
- [Windows ホストでの nbmail.cmd スクリプトの構成](#)
- [KMS 証明書の有効期限についての通知を送信](#)

失敗したバックアップについてのバックアップ管理者への通知の送信

0 (ゼロ) 以外の状態のバックアップについてバックアップ管理者に通知を送信できます。

UNIX の場合、NetBackup では、メール転送エージェント `sendmail` を使用して電子メール通知が送信されます。Windows の場合、NetBackup では、SMTP を使用してメッセージを転送するアプリケーションがインストールされ、通知を送信する Windows ホストで `nbmail.cmd` スクリプトが構成されている必要があります。

p.1090 の「[Windows ホストでの nbmail.cmd スクリプトの構成](#)」を参照してください。

NetBackup ホストのバックアップ管理者の通知を構成するには、次のトピックを参照してください。

p.1090 の「[バックアップについてホスト管理者に通知を送信する](#)」を参照してください。

失敗したバックアップについてバックアップ管理者に通知を送信するには

- 1 左側で、[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host Properties)]の順に選択します。
- 2 プライマリサーバーを選択します。
- 3 必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)]をクリックします。

- 4 [グローバル属性 (Global attributes)]をクリックします。
- 5 管理者の電子メールアドレスを入力します。(複数のアドレスはカンマで区切ります。)
- 6 [保存 (Save)]をクリックします。

バックアップについてホスト管理者に通知を送信する

特定のホストの正常に完了および失敗したバックアップについてホスト管理者に通知を送信できます。

UNIX の場合、NetBackup では、メール転送エージェント **sendmail** を使用して電子メール通知が送信されます。**Windows** では、**SMTP** でメッセージを転送するアプリケーションがインストールされている必要があります。また、通知を送信する **Windows** ホストで **nbmail.cmd** スクリプトを構成する必要があります。

p.1090 の「[Windows ホストでの nbmail.cmd スクリプトの構成](#)」を参照してください。

特定のホストのバックアップの通知を送信するには

- 1 左側で、[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host Properties)]の順に選択します。
- 2 クライアントを選択します。
- 3 必要に応じて、[接続 (Connect)]をクリックします。次に、[クライアントの編集 (Edit client)]をクリックします。
- 4 [ユニバーサル設定 (Universal settings)]をクリックします。
- 5 電子メール通知の送信方法を選択します。
 - クライアントから電子メール通知を送信するには、[クライアントが電子メールを送信する (Client sends email)]を選択します。
 - サーバーから電子メール通知を送信するには、[サーバーが電子メールを送信する (Server sends email)]を選択します。
- 6 ホスト管理者の電子メールアドレスを入力します。(複数のアドレスはカンマで区切ります。)
- 7 [保存 (Save)]をクリックします。

Windows ホストでの nbmail.cmd スクリプトの構成

バックアップについての電子メール通知を送受信する **Windows** ホストの場合、該当するホストで **nbmail.cmd** スクリプトを構成する必要があります。

Windows ホストで nbmail.cmd スクリプトを構成するには

1 nbmail.cmd のバックアップコピーを作成します。

2 プライマリサーバーで、次のスクリプトを見つけます。

```
install_path¥NetBackup¥bin¥goodies¥nbmail.cmd
```

3 該当するホストの次のディレクトリにスクリプトをコピーします。

```
install_path¥NetBackup¥bin¥
```

プライマリサーバー 次の設定を構成すると、NetBackup はサーバーから通知を送信します。
とメディアサーバー

- グローバル属性の管理者の電子メールアドレス。
- [ユニバーサル設定 (Universal Settings)]の[サーバーが電子メールを送信する (Server sends email)]オプション。

クライアント 次の設定を構成すると、NetBackup はクライアントから通知を送信します。

- [ユニバーサル設定 (Universal Settings)]の[クライアントが電子メールを送信する (Client sends email)]オプション。

4 テキストエディタを使用して nbmail.cmd を開きます。

次のオプションがスクリプトで使われます。

```
-s          電子メールの件名の行です。

-t          電子メールの受信者を表します。

-i          電子メールのオリジネータです。メールサーバーに登録されている必要はありません。デフォルト (-i Netbackup) は、電子メールが NetBackup からのものであることを示します。

-server     電子メールを受け取り、中継するように構成されている SMTP サーバーの名前です。

-q          すべての出力を画面に表示しません。
```

5 行を次のように調整します。

- BLAT の実行に必要なセクションを有効にするには、5 行のそれぞれから @REM を削除します。
- SERVER_1 をメールサーバーの名前に置き換えます。次に例を示します。

```
@IF "%~4"==" " (  
blat %3 -s %2 -t %1 -i Netbackup -server emailserver.company.com -q  
) ELSE (  
blat %3 -s %2 -t %1 -i Netbackup -server emailserver.company.com -q -attach %4  
)
```

6 nbmail.cmd を保存します。

KMS 証明書の有効期限についての通知を送信

この通知は、キーマネージメントサービス (KMS) サーバーとの通信に使用される証明書が期限切れになるときに生成されます。

通知の例を次に示します。

```
The certificate that is used to communicate with the KMS server  
example,server.com is about to expire in 10 days. If the certificate  
is not renewed on time, communication with the KMS server fails.
```

次に、電子メールの内容の例を示します。

Subject: CN=testuser, O=Veritas, OU=safenet

Issuer: CN=InterCA, O=Veritas,OU=safenet

Server: gemalto

Expiry: Wed Sep 21 16:41:32 IST 2022

Days: 973

NetBackup の管理

- [第31章 管理トピック](#)
- [第32章 リモートサーバーへのアクセス](#)
- [第33章 NetBackup リモート管理コンソールの使用](#)
- [第34章 代替サーバーを使用したリストア](#)
- [第35章 クライアントのバックアップとリストアの管理](#)
- [第36章 NetBackup サーバーの電源切断および再ブート](#)
- [第37章 個別リカバリテクノロジーについて](#)

管理トピック

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup Client Service](#) の構成
- [NetBackup](#) で使用される測定単位
- [NetBackup](#) 命名規則
- [NetBackup](#) でのワイルドカードの使用

NetBackup Client Service の構成

デフォルトでは、**NetBackup Client Service** はローカルシステムアカウントで Windows 上に構成されます。ローカルシステムアカウントには、ある特定のバックアップおよびリストア操作を実行するのに十分な権限がありません。

たとえば、の場合、**CIFS** ボリュームにアクセスするには、アカウントを[ローカルシステム (Local System)]から **CIFS** 共有へのアクセス権を持つアカウントに変更する必要があります。**NetBackup**

Windows コンピュータで **NetBackup Client Service** のログオンアカウントを変更する方法

- **Windows** のサービスアプリケーションを開始します。
- ログオンアカウントを変更するには、**NetBackup Client Service** を停止します。
- **Client Service** のプロパティを開きます。**NetBackup**
- 必要なアクセス権を持つアカウントの名前およびパスワードを入力します。たとえば、ログオンを管理者のアカウントに変更します。
- サービスを再起動します。

NetBackup Client Service のログオンのプロパティが変更されていない場合、ポリシーの検証は状態コード **4206** で失敗します。

NetBackup Client Service のログオンアカウントを変える必要がある状況

次のリストには、NetBackup Client Service のログオンアカウントを変える必要がある状況が含まれています。

- ストレージユニットの CIFS ストレージにアクセスするため。
- UNC パスを使用するには、NetBackup Client Service がスタートアップ時にログインするサービスアカウントで、ネットワークドライブを利用可能にする必要があります。別のコンピュータと共有しているデータのバックアップを行う各 Windows クライアント上で、このアカウントを変更する必要があります。
- スナップショット中: バックアップ目的における共有への読み取りアクセス許可、および復元中の書き込みアクセス許可を得るため。
アカウントは、共有へのアクセスと書き込みが許可されているドメインユーザーのものであることが必要です。アカウントを検証するには、ドメインユーザーとしてログオンし、UNC パスにアクセスを試みてください。例: \\¥¥server_name¥share_name。
- データベースエージェントやオプションについては、必要なアクセス権または権限があるログオンアカウントでサービスを構成します。詳しくはエージェントまたはオプションのマニュアルを参照してください。
- NetApp ディスクアレイ上で VMware バックアップをサポートするデータベースエージェントについては、ディスクアレイへのアクセス権があるログオンアカウントを構成します。

NetBackup で使用される測定単位

ほとんどのデータの測定単位で、NetBackup はキロバイト (KB)、メガバイト (MB) などの用語と略語を使用し、各用語はバイナリ (ビット単位) の値を意味します。NetBackup は、KB に 1,000、MB に 1,000,000 など、10 の累乗値を使用しません。

NetBackup で表示および報告された値を計算するとき、単位のバイナリ値と 10 の累乗値の違いを理解することが重要です。たとえば、1.5 TB と表示された値は、実際には 1,649,267,441,664 バイト (バイナリ値) を意味します。1,500,000,000,000 バイト (10 の累乗値)ではありません。約 1,500 億バイトの違いがあります。

次の表に、一般的に表示される測定単位の数と、対応するビット単位名、バイナリの乗数、実際の値を示します。

表 31-1 NetBackup で使用される測定単位

表示された単位	ビット単位	バイナリの乗数	実際の値 (バイト単位)
キロバイト (KB)	キビバイト (KiB)	2 ¹⁰	1024
メガバイト (MB)	メビバイト (MiB)	2 ²⁰	1048576

表示された単位	ビット単位	バイナリの乗数	実際の値 (バイト単位)
ギガバイト (GB)	ギビバイト (GiB)	2 ³⁰	1073741824
テラバイト (TB)	テビバイト (TiB)	2 ⁴⁰	1099511627776
ペタバイト (PB)	ペビバイト (PiB)	2 ⁵⁰	1125899906842624
エクサバイト (EB)	エクスピバイト (EiB)	2 ⁶⁰	1152921504606846976

米国電気電子学会 (IEEE) と国際電気標準会議 (IEC) は、これらの値の標準を採用しています。詳しくは、次の記事を参照してください。

- <https://standards.ieee.org/standard/1541-2002.html> (IEEE 有料サブスクリプション)
https://en.wikipedia.org/wiki/IEEE_1541-2002
- https://en.wikipedia.org/wiki/ISO/IEC_80000

NetBackup 命名規則

NetBackup には、クライアント、ディスクプール、バックアップポリシー、ストレージライフサイクルポリシーなどの論理構成を命名するための規則があります。一般的に、名前では大文字と小文字は区別されます。次の文字セットはユーザー定義の名前とパスワードに使うことができます。

- アルファベット (A から Z、a から z) (名前では大文字と小文字が区別されます)
- 数字 (0 から 9)
- ピリオド (.)
WORM ボリューム名にピリオドを使用しないでください。
- プラス (+)
- ハイフン (-)
最初の文字にはハイフンを使用しないでください。
- アンダースコア (_)

これらの文字はまた外国語のためにも使われます。

メモ: スペースは許可されません。

論理ストレージユニット (LSU) 名またはドメインボリューム名は、ハイフン (-) とアンダースコア (_) を含む 50 文字未満の ASCII 文字にする必要があります。空白を含めることはできません。

NetBackup でのワイルドカードの使用

NetBackup では、ワイルドカードを使用できる領域で、次のワイルドカード文字が認識されます。(たとえば、インクルードファイルリストやエクスクルードファイルリストのパスなどで使用できます。)

次の表に、NetBackup の各種のダイアログボックスとリストで使うことができるワイルドカードを示します。

表 31-2 NetBackup でのワイルドカードの使用

ワイルドカード	使用方法
*	アスタリスクは、0 (ゼロ) を含めて任意の数の文字のワイルドカードとして使用できます。 アスタリスクは Windows と UNIX のクライアントのバックアップ対象リスト、インクルードリスト、エクスクルードリストで使うことができます。 例: r* は、r で始まるすべてのファイルを示します。 r*.doc は、r で始まり .doc で終わるすべてのファイルを示します。 .conf で終わるすべてのファイルのバックアップを行うには、次のパス名を指定します。 /etc/*.conf
?	疑問符は、任意の 1 文字 (A から Z、0 から 9) のワイルドカードとして使用できます。 疑問符は Windows と UNIX のクライアントのバックアップ対象リスト、インクルードリスト、エクスクルードリストで使うことができます。 例: file? は、file2、file3、file4 を示します。 file?? は、file12、file28、file89 を示します。 log01_03 や log02_03 などの名前を持つすべてのファイルのバックアップを行うには、次のパス名を指定します。 c:¥system¥log??_03

ワイルドカード	使用方法
[]	1 対の角カッコは、任意の 1 文字、またはダッシュを使用した文字の範囲を示します。 次に例を示します。 file[2-4] は file2、file3、file4 を示します。 file[24] は、file2、file4 を示します。 *[2-4] は file2、file3、file4、name2、name3、name4 を示します。 角カッコはすべてのクライアントのすべての場合に有効なワイルドカードではありません。 ■ インクルードリストやエクスクルードリストのワイルドカードとして使われる角カッコ: Windows クライアント: 許可 UNIX クライアント: 許可 ■ ポリシーのバックアップ対象リストのワイルドカードとして使われる角カッコ: Windows クライアント: ポリシーバックアップ対象リストで角カッコを使用すると、状態コード 71 でバックアップが失敗します。 UNIX クライアント: 許可
{ }	波カッコは UNIX クライアントのみのバックアップ対象リスト、インクルードリスト、エクスクルードリストで使うことができます。 1 対の波カッコは、複数のファイル名パターンを示します。パターンはカンマだけで区切ります。空白は使用できません。いずれかまたはすべてのエントリに対して一致が試行されます。 例: {*1.doc,*.pdf} は、file1.doc、file1.pdf、file2.pdf を示します。 メモ: 波カッコは Windows ファイル名の有効な文字であり、Windows プラットフォームではワイルドカードとして使うことができません。円記号は波カッコの文字のエスケープ文字として使うことはできません。

ワイルドカード文字を通常の文字として使用するには、その文字の前に円記号 (¥) を入力します。

円記号 (¥) は、特殊文字またはワイルドカード文字の前に入力された場合だけ、エスケープ文字として機能します。円記号はパスに利用可能な有効な文字であるため、NetBackup では通常、円記号は通常の文字として解釈されます。

次の例の角カッコは通常の文字として使用する必要があると想定します。

C:¥abc¥fun[ny]name

エクスクルードリストでは、次のように角カッコの前に円記号を入力します。

C:¥abc¥fun¥[ny¥]name

表 31-3 バックアップ対象のパスのワイルドカードの配置

クライアント形式	例
Windows クライアントの場合、ワイルドカードはパスの終わり、ファイル内、ディレクトリ名に配置されるときのみ正しく機能します。 p.826 の「Windows クライアントバックアップのパス規則」を参照してください。	次に許可されている例を示します。 C:¥abc¥xyz¥r*.doc ワイルドカード文字は、パスの他の場所では機能しません。たとえば、アスタリスクは次の例では通常の文字として (ワイルドカードとしてではなく) 機能します。 C:¥*¥xyz¥myfile C:¥abc¥*¥myfile
UNIX クライアントの場合、ワイルドカードはパスのどこでも表示できます。 p.834 の「UNIX クライアントバックアップのパス名規則」を参照してください。	次に許可された例を示します。 /etc/*/abc/myfile /etc/misc/*/myfile /etc/misc/abc/*.*

p.813 の「[\[バックアップ対象 \(Backup Selections\)\]タブ](#)」を参照してください。

リモートサーバーへのアクセス

この章では以下の項目について説明しています。

- [リモートサーバーにアクセスするための前提条件](#)
- [リモートサーバーへのアクセス](#)
- [リモートサーバー管理のトラブルシューティング](#)

リモートサーバーにアクセスするための前提条件

NetBackup 環境では、複数の NetBackup サーバーを使ってさまざまな管理タスクを実行できます。

たとえば、2 つの NetBackup ドメインを含む NetBackup 環境があると仮定します。一方のドメインのサーバーを **Server1**、もう一方のドメインのサーバーを **Server2** とします。

Server1 の NetBackup 管理コンソールにログインし、次に **Server2** に変更して **Server2** を管理できます。別のサーバーに変更する前に次のタスクを実行する必要があります。

- 一方のサーバーから、もう一方のサーバーへのアクセスを許可する。p.1101 の「[別のサーバーへのアクセスを許可する](#)」を参照してください。
- 一方のサーバーのユーザーがもう一方のサーバーにアクセスすることを承認する。p.1101 の「[一方のサーバーのユーザーがもう一方のサーバーにアクセスすることを承認する](#)」を参照してください。

別のサーバーに変更する場合は、ログイン画面でリモートサーバーを指定するか、または NetBackup 管理コンソール内部から別のサーバーに変更できます。p.1102 の「[リモートサーバーへのアクセス](#)」を参照してください。

別のサーバーへのアクセスを許可する

ローカルホストからリモートサーバーを管理するには、ローカルホスト名がリモートサーバーのサーバーリストに表示されている必要があります。同様に、リモートホストはサーバーリストにローカルホストを含める必要があります。

サーバーリストにサーバーを追加する方法

- 1 NetBackup 管理コンソールで、[ホストプロパティ (Host Properties)]>[マスターサーバー (Master Server)]を展開します。
- 2 プロパティを表示するサーバーの名前をダブルクリックします。
- 3 [サーバー (Servers)]タブを選択して、サーバーリストを表示します。
リモートサーバーが[追加サーバー (Additional Servers)]リストに表示されない場合は、現在のサーバーによって無効と見なされます。
- 4 サーバーリストにサーバーを追加するには、[追加 (Add)]をクリックします。
- 5 [新しいサーバー (New Server)]ダイアログボックスのフィールドにサーバー名を入力します。
- 6 [追加 (Add)]をクリックすると、対象のサーバーがリストに追加されます。次に、[閉じる (Close)]をクリックして、ダイアログボックスを閉じます。サーバーリストにサーバーが表示されます。
すべての UNIX サーバー上の `bp.conf` ファイルには、`SERVER` および (場合によっては) `MEDIA_SERVER` エントリが含まれています。[サーバー (Servers)]プロパティダイアログボックスのサーバーリストは、これらのエントリを反映しています。メディアサーバーとして表示されているホストは、管理権限が制限されます。
- 7 [OK]をクリックして、変更を保存します。

一方のサーバーのユーザーがもう一方のサーバーにアクセスすることを承認する

一方のサーバーのユーザーがもう一方のサーバーにアクセスすることを明示的に承認する必要があります。一方のサーバーのユーザーを、アクセスを承認するもう一方のサーバーの `auth.conf` ファイルに追加します。この例では、**Server1** のユーザーを **Server2** にアクセスできるように承認します。このタスクは、**Server2** で実行する必要があります。

メモ: あるサーバーで管理権限を持たないユーザーのみを別のサーバーの `auth.conf` ファイルに追加します。

UNIX の場合には、`auth.conf` ファイルは `/usr/opensv/java` にあります。

Windows の場合には、`C:\Program Files\Veritas\Java` にある `auth.conf.win.template` ファイルから `auth.conf` を作成します。

一方のサーバーのユーザーがもう一方のサーバーにアクセスすることを承認するには

- ◆ **Server2** の `auth.conf` ファイルに、**Server2** へのアクセスを承認する **Server1** のユーザーを追加します。

Server1 が Windows ホストである場合は、次の行を `auth.conf` ファイルに追加します。

例: `username ADMIN=ALL JBP=ALL`

Server1 が UNIX ホストである場合は、次の行を `auth.conf` ファイルに追加します。

例: `root ADMIN=ALL JBP=ALL`

リモートサーバーへのアクセス

NetBackup サイトに複数のプライマリサーバーが存在する場合、1 つの NetBackup 管理コンソールから複数のサーバーにアクセスできるようにシステムを構成できます。

アクセスするサーバーがメディアサーバーまたはクライアントの場合、メディアサーバーまたはクライアントにセキュリティ証明書がプロビジョニングされている必要があります。

p.38 の「[NetBackup ホスト用のセキュリティ証明書について](#)」を参照してください。

リモートサーバーにアクセスするには、次の手順を実行します。

リモートサーバーにアクセスする方法

- 1 リモートサーバーがローカルサーバーからアクセスできることを確認します。
p.1101 の「[別のサーバーへのアクセスを許可する](#)」を参照してください。
- 2 次のいずれかの方法でリモートサーバーにアクセスします。
 - [サーバーの変更 (Change Server)] オプションを使用します。
 - NetBackup 管理コンソールの左ペインでいずれかのメインノードを選択します。(このオプションは、メインノードが選択されていなければ、[ファイル (File)] メニューに表示されません。)
 - [ファイル (File)]>[サーバーの変更 (Change Server)]メニューコマンドを選択します。

- [OK]をクリックして新しいコンソールを起動します。
- 別のサーバーのホスト名を入力します。
ユーザー名とパスワードを入力して、[ログイン (Login)]をクリックします。
ユーザーは、両方のサーバーで必要な権限を所有している場合、信頼関係の設定を行わずにサーバー間を移動できます。
server_1 が **server_2** のサーバーリストに表示されていない場合、**server_1** はサーバーを **server_2** に変更しようとするエラーメッセージを受信します。
ユーザーに 1 つのサーバーの管理権限および別のサーバーの異なる権限がある場合、ユーザーは再度認証を行う必要があります。
- ログイン画面でリモートサーバーを指定します。
リモートサーバーのホスト名を入力します。
認可済みの NetBackup 管理者のユーザー名およびパスワードを入力して、[ログイン (Login)]をクリックします。

別のサーバーにログインするには、ログイン画面でリモートホストの名前を指定します

リモートサーバー管理のトラブルシューティング

他のプライマリサーバーからサーバーを管理するには、次の条件が満たされているかどうかを確認します。

- 宛先のサーバーが動作中である。
- NetBackup デーモンが両方のホスト上で実行中である。
- ネットワーク接続が有効である。
- 宛先ホストの管理権限がユーザーに付与されている。
- [サーバーの変更 (Change Server)]操作を行うには、すべてのサーバーが同じバージョンである必要があります。

- 現在のホストが宛先ホストのサーバーリストに表示されている。
p.1101 の「[別のサーバーへのアクセスを許可する](#)」を参照してください。
ホストは、メディアサーバーまたはクライアントなら表示される必要はありません。また、メディアとデバイス管理または監視のみを実行する場合も、表示される必要はありません。
プライマリサーバーリストを変更した場合は、該当するすべての **NetBackup** プロセスで新しいサーバーエントリが使われるように、**NetBackup Database Manager** デーモン (bpdbm) と **NetBackup Request** デーモン (bprd) を停止して再起動します。
- 認証が正しく設定されている (使用されている場合)。
- メディアサーバーまたはクライアントに対して[サーバーの変更 (Change Server)]操作を実行するには、メディアサーバーまたはクライアントにセキュリティ証明書がインストールされている必要があります。
- メディアやデバイスの構成時またはデバイスの監視時に、サーバーを変更すると問題が発生する場合、そのサーバー上で **NetBackup Volume Manager** が実行されていることを確認します。
- リモートホストのデバイスにアクセスできない場合、そのホストの `vm.conf` ファイルに `SERVER` エントリを追加する必要がある可能性があります。
手順については、『[NetBackup 管理者ガイド Vol. 2](#)』を参照してください。
- アクティビティモニターを介してプロセスあるいはサービスを起動または停止できない場合、次の条件が該当するかどうかを確認します。
 - リモートサーバーが **Windows** システムである。他の **Windows** システムのプロセスだけを監視および制御できます。
 - リモートサーバーに対する必要な権限を所有している。アクティビティモニターを実行しているユーザーは、**Windows** セキュリティによってアクセスを許可される必要があります。

NetBackup リモート管理コンソールの使用

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup リモート管理コンソールについて](#)
- [NetBackup 管理コンソールの実行時構成オプション](#)
- [NetBackup のパフォーマンスの向上について](#)
- [NetBackup 管理コンソールでのタイムゾーンの調整について](#)

NetBackup リモート管理コンソールについて

NetBackup リモート管理コンソールはスタンドアロンの Java ベース管理コンソールです。このコンソールは NetBackup サーバーソフトウェアのないホストにインストールされます。NetBackup サーバーをリモートで監視するために使用されます。

このコンソールをインストールすると、NetBackup 管理コンソールのみがインストールされます。クライアントソフトウェアがインストールされると、他のクライアントと同様にコンピュータをバックアップできるようになります。プライマリサーバーソフトウェアまたはメディアサーバーソフトウェアはインストールされません。

管理者は、次のいずれかの方法を使用して、まず NetBackup 管理コンソールを起動します。

- NetBackup のリモート管理コンソールがインストールされている Windows コンピュータで、[スタート]、[プログラム]、[Veritas NetBackup]、[NetBackup version 管理コンソール (Administration Console)]の順に選択します。
- NetBackup がインストールされている UNIX コンピュータ上で、jnbSA コマンドを実行します。

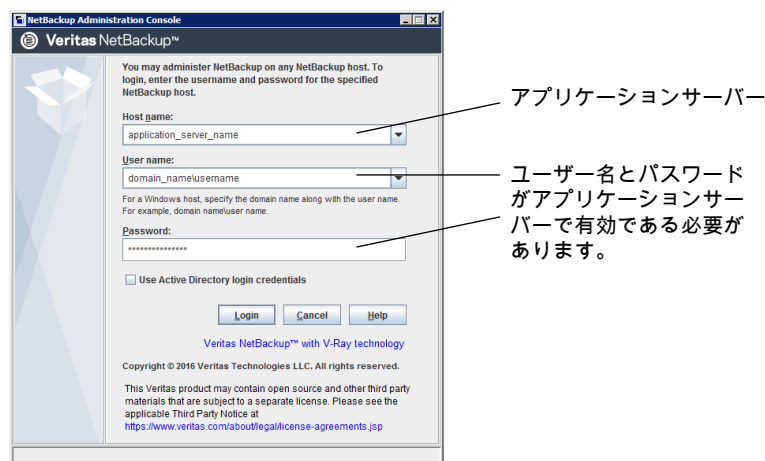
次に、管理者は、ログオンダイアログボックスで指定するホストのアプリケーションサーバーにログオンします。

NetBackup 管理コンソールのログオンダイアログボックスで指定するホストのアプリケーションサーバーによって、ユーザーのログオンクレデンシャルが認証されます。クレデンシャルは、標準の UNIX ユーザーのアカウントデータおよび関連する API を使用して認証されます。

メモ: ログオンダイアログボックスで指定するホストでは、NetBackup 管理コンソールを実行するシステムと同じバージョンの NetBackup が実行されている必要があります。

メモ: NetBackup 管理コンソールにログオンするには、ログオンクレデンシャルが接続するプライマリサーバーまたはメディアサーバーから認証されている必要があります。

図 33-1 NetBackup のログオンダイアログボックス



通常、すべての管理作業の対象となるサーバーを、NetBackup 管理コンソールのログオンダイアログボックスでホストとして指定します。

NetBackup 管理コンソールで[ファイル (File)]>[サーバーの変更 (Change Server)]機能を使用する場合には、これは該当しません。[サーバーの変更 (Change Server)]機能を使用すると、リモートサーバー (NetBackup 管理コンソールのログオンダイアログボックスで指定するサーバー以外のサーバー) を管理できます。

メモ: [サーバーの変更 (Change Server)]操作を行うには、すべてのサーバーが同じバージョンである必要があります。

管理しているサーバーにかかわらず、NetBackup 管理コンソールで実行するすべての管理作業では、アプリケーションサーバーに対して要求が行われます。すべての作業は、サーバーがリモートサーバーであるかログオンダイアログボックスで指定されたサーバーであるかに関係なく、アプリケーションサーバーホスト上で実行されます。

リモートサーバーから管理するには、アプリケーションサーバーホストがリモートサーバーのサーバーリストに含まれる必要があります。

p.1101 の「別のサーバーへのアクセスを許可する」を参照してください。

p.1102 の「リモートサーバーへのアクセス」を参照してください。

NetBackup 管理コンソールの実行時構成オプション

Windows コンピュータでは、`install_path¥java¥setconf.bat` に、NetBackup 管理コンソールの構成オプションが含まれています。

UNIX コンピュータでは、`/usr/opensv/java/nbj.conf` ファイルに、NetBackup 管理コンソールの構成オプションが含まれています。ファイル用の構文規則に従って、1 行に 1 つのオプションを入力します。`bp.conf`

`nbj.conf` および `setconf.bat` には、以降の項で説明する各構成オプションのコマンドが格納されています。変更を行う場合は、該当する設定コマンドで、等号の後に続く値を変更します。

BROWSER_BINARY_PATH

[Web UI からシングルサインオン、証明書、スマートカードを使用 (Single sign-on, Certificates, or Smart Cards through the Web UI)]オプションを使用して NetBackup 管理コンソールにログイン中は、NetBackup が認証用のブラウザを起動できない場合があります。このようなエラーが発生した場合、ブラウザを起動するには

BROWSER_BINARY_PATH オプションを設定します。

このオプションでは、次の形式を使用します。

```
BROWSER_BINARY_PATH=browser_executable_path
```

例:

```
BROWSER_BINARY_PATH=/usr/bin/firefox
```

DYNAMIC_STREAMING_START_CHILD_BACKUP_JOBS_TIMEOUT

DYNAMIC_STREAMING_START_CHILD_BACKUP_JOBS_TIMEOUT 構成オプションでは、NAS データ保護ポリシーの動的データストリーミングの子ジョブに対して、デフォルトのタイムアウト値を指定します。スナップショットジョブの親バックアップジョブがトリガされた後、NetBackup は、子バックアップジョブを前処理する NBCS プロセスを開始します。前処

理が完了すると、NBCS はすべての子ジョブが開始されるまで待機してから、バックアップの子ジョブにファイルリストを割り当てます。すべての子ジョブが開始されてファイルリストを受信できる状態になるまで、NBCS はこのアクティビティを開始しません。デフォルトでは、NBCS プロセスはすべての子ジョブが開始するのを 600 秒間待機します。NAS データ保護ポリシーに設定されているボリュームごとのストリーム数と、指定した時刻にバックアップするボリュームの合計数に応じて、子ジョブの開始に時間がかかることがあります。

表 33-1 DYNAMIC_STREAMING_START_CHILD_BACKUP_JOBS_TIMEOUT オプション

名前	DYNAMIC_STREAMING_START_CHILD_BACKUP_JOBS_TIMEOUT
型	整数
デフォルト値	600 秒
最小値	300 秒
最大値	3600 秒

スケジュールの構成によってこのようなタイムアウトが発生した場合は、構成パラメータ DYNAMIC_STREAMING_START_CHILD_BACKUP_JOBS_TIMEOUT を使用してタイムアウト値を変更できます。この変数の値は、bpsetconfig コマンドを使用して変更できます。この変数の値を表示するには、bpgetconfig CLI を使用します。NetBackup プライマリサーバーでこの構成パラメータを設定できます。

FIREWALL_IN

FIREWALL_IN 構成オプションは、信頼できるネットワークの外側にある NetBackup 管理コンソールを使用して信頼できるネットワーク内の NetBackup プライマリサーバーを管理する方法を実現します。

このオプションでは、次の形式を使用します。

Windows の場合:

```
SET FIREWALL_IN=
HOST1:PORT1=HOST2:PORT2;IP_ADDR1:PORT3=IP_ADDR2:PORT4
SET FIREWALL_IN >> "%NBJDIR%"¥nbjconf
```

UNIX の場合:

```
FIREWALL_IN= HOST1:PORT1=HOST2:PORT2[;...;HOSTn:PORTn=HOSTm:PORTm]
```

ここで、*HOST* は、ホスト名または IP アドレスです。

この構成オプションを使用すると、管理者は、次のいずれかの方法でファイアウォールを回避できます。

- 信頼できる内部ネットワークの `bpjava` サービスのポート番号を入力します。次に、`bpjava` サービスが実行されているプライベートインターフェースを、ファイアウォールの外側からアクセスできるパブリックインターフェースにマッピングします。
- ローカルホストからファイアウォール内のシステムへのセキュアシェル (SSH) トンネルを設定します。

この例では、次のことを想定しています。

- プライマリサーバー `NBPrimary.abc.com` は信頼できるネットワーク内にあり、ファイアウォールの保護を受けています。
- `NBPrimary.abc.com` の IP アドレスは、`10.221.12.55` です。
- NetBackup 管理コンソールは、`localhost` にインストールされています。
- 次のように `localhost` から `NBPrimary.abc.com` まで通じる SSH トンネルが存在します。

`bpjava-msvc` ポート (デフォルト `13722`) `localhost: port1`

`vnetd` ポート (デフォルト `13724`) `localhost:port2`

`pbx` ポート (デフォルト `1556`) `localhost:12345`

ここで、`localhost` はホスト名で、`port1` は IP ポートです。

`bpjava-msvc` と `vnetd` への接続に関連した変更を行うには、次の項を参照してください。

p.1115 の「[VNEDT_PORT](#)」を参照してください。

Windows システムでは、`setconf.bat` を使用してオプションを追加します。

```
SET FIREWALL_IN=
NBMaster.abc.com:1556=localhost:12345;10.221.12.55:12345=localhost:12345
SET FIREWALL_IN >> "%NBJDIR%"¥nbjconf
```

UNIX システムでは、次の行を `nbj.conf` ファイルに追加します。

```
FIREWALL_IN=NBPrimary.abc.com:1556=localhost:12345;10.221.12.55:12345=localhost:12345
```

このエントリは次の内容を示します。

- `NBPrimary.abc.com:1556` への接続は、`localhost:12345` にリダイレクトされます。
- `10.221.12.55:1556` への接続は、`localhost:12345` にリダイレクトされます。

メモ: NBPrimary.abc.com にインターネットからアクセスできるパブリックインターフェース (NBPrimarypub.abc.com) が存在する場合、同じオプションが使われます。この場合、localhost を NBPrimaryPub.abc.com に置き換えます。

FORCE_IPADDR_LOOKUP

FORCE_IPADDR_LOOKUP 構成オプションでは、2 つのホスト名の文字列が同じホストであるかどうかを判断するために、NetBackup によって IP アドレスの照合を行うかどうかを指定します。このオプションでは、次の形式を使用します。

```
FORCE_IPADDR_LOOKUP = [ 0 | 1 ]
```

ここで示された文字列については、次のとおりです。

- 0 2 つのホスト名の文字列が同じホストかどうかを判断する、IP アドレスの照合が行われないことを示します。この場合、ホスト名の文字列が完全に一致すると、同じホストであると見なされます。または、短縮名が部分修飾ホスト名か完全修飾ホスト名の短縮名と一致すると、同じホストであると見なされます。
- 1 2 つのホスト名の文字列が一致しない場合に、IP アドレスの照合が行われることを示します。照合によって、これらの文字列が同じホストのものかどうか判断されます。デフォルトでは、ホスト名を比較し、解決するために IP アドレスの照合が行われます。ホスト名の文字列が完全に一致する場合、IP アドレスの照合は行われません。

メモ: 2 つの異なるドメインで同じホスト名を使用する場合、このオプションの値に 1 を指定します。eagle.abc.xyz と eagle.def.xyz を使用する場合や、ホスト名のエイリアスを使用する場合などが該当します。

NetBackup 管理コンソールでは、2 つのホストが同じホストであるかどうかを判断するためにホスト名を比較する箇所が多数あります。たとえば、[ファイル (File)]>[サーバーの変更 (Change Server)]コマンドを実行する場合などが該当します。

IP アドレスの照合は時間を消費し、応答時間がより長くなる結果になることがあります。ただし、正確な比較は重要です。

NetBackup 管理コンソールのログオンダイアログボックスで常に同じホスト名が指定される場合、IP アドレスの照合を行う必要はありません。そのホスト名は、NetBackup で構成されているホスト名と一致する必要があります。ホスト名は、サーバーのホストプロパティに表示されるサーバーリストで確認できます。UNIX システムの場合、ホスト名は bp.conf ファイル内にも示されます。

ホスト名 *eagle* と *hawk* を使用して、このオプションの動作について次に示します。

```
FORCE_IPADDR_LOOKUP = 0
```

次の比較では、IP アドレスの照合は行われません。どちらも同じホストであると見なされます。

```
eagle and eagle
eagle.abc.def and eagle.abc.def
eagle.abc and eagle.abc.def
eagle and eagle.abc.def
eagle and eagle.anything
```

eagle と **hawk** については、短縮ホスト名、部分修飾ホスト名または完全修飾ホスト名のいずれを使用した比較においても、エイリアスにかかわらず、これらのホストは異なるものとして見なされます。

```
FORCE_IPADDR_LOOKUP = 1
```

次の比較では、IP アドレスの照合は行われません。どちらも同じホストであると見なされます。

```
eagle and eagle
eagle.abc and eagle.abc
eagle.abc.def and eagle.abc.def
```

eagle と **hawk** のすべてについて比較する場合、次の比較では、IP アドレスの照合が行われます。比較によって、ホストが同じであるかどうか判断されます。

```
eagle.abc and eagle.abc.def
eagle and eagle.abc.def
eagle and eagle.anything
```

INITIAL_MEMORY、MAX_MEMORY

およびでは、Java Virtual Machine (JVM) のメモリ使用量を構成できます。

INITIAL_MEMORYMAX_MEMORY

すべてのインターフェース (NetBackup リモート管理コンソール、NetBackup 管理コンソール、または NetBackup の[バックアップ、アーカイブおよびリストア (Backup, Archive, and Restore)]ユーザーインターフェース) を 1 GB 以上の物理メモリを搭載するシステムで実行することをお勧めします。アプリケーションで 512 MB のメモリを利用できることを確認してください。

INITIAL_MEMORY には、JVM の起動時にヒープに割り当てられるメモリの量を指定します。通常は、この値を変更する必要はありません。推奨のメモリ量を搭載するシステムでは、jnbSA、リモート管理コンソールまたは jbpsA の簡易初期化を行うには、デフォルト値で十分です。

UNIX システムでは、初期メモリの割り当ては、jnbSA または jbpsA コマンドでも指定できます。たとえば、

```
jnbSA -ms 256M
```

デフォルトは、256M (MB) です。

MAX_MEMORY には、JVM が、動的に割り当てられたオブジェクトおよび配列に使用する最大ヒープサイズを指定します。データの量が多い場合は、最大ヒープサイズの指定を検討してください。たとえば、アクティビティ 모니터のジョブ数が多い場合などが該当します。

UNIX システムでは、最大メモリの割り当ては、jnbSA または jbpSA コマンドでも指定できます。たとえば、

```
jnbSA -mx 512M
```

デフォルトは、512M (MB) です。

MEM_USE_WARNING

MEM_USE_WARNING 構成オプションは、MAX_MEMORY に対して使用されているメモリの割合が、一定の割合に達した時点で警告ダイアログボックスをユーザーに表示するよう設定値を指定します。デフォルトは 80% です。このオプションでは、次の形式を使用します。

```
MEM_USE_WARNING=80
```

NB_FIPS_MODE

NB_FIPS_MODE オプションを使用して、NetBackup ドメインで FIPS モードを有効にします。

デフォルトでは、NB_FIPS_MODE オプションは無効になっています。

このオプションを有効にするには、次の形式を使用します。

```
NB_FIPS_MODE = ENABLE
```

NBJAVA_CLIENT_PORT_WINDOW

NBJAVA_CLIENT_PORT_WINDOW 構成オプションでは、NetBackup- アプリケーションサーバーへの接続に使用される、このコンピュータ上の予約なしポートの範囲を指定します。また bpjobd 管理コンソールのアクティビティモニターから NetBackup デーモンに接続するために使うポートの範囲を指定します。

このオプションでは、次の形式を使用します。

```
NBJAVA_CLIENT_PORT_WINDOW = n m
```

ここで示された文字列については、次のとおりです。

- n* NetBackup- アプリケーションサーバーの `bpjava` プロセスへの接続に使用される、予約なしポートの範囲内の最初のポートを指定します。またリモート管理コンソールのアクティビティモニターから `bpjobd` デモンまたは Windows サービスに接続するために使うポートの範囲を指定します。
- n* を 0 (ゼロ) に設定する場合、使用される予約なしポートはオペレーティングシステムによって決定されます (デフォルト)。
- m* NetBackup 管理コンソールまたはリモート管理コンソールへの接続に使用される予約なしポートの範囲内の最後のポートを指定します。
- n* および *m* を 0 (ゼロ) に設定する場合、使用される予約なしポートはオペレーティングシステムによって決定されます (デフォルト)。

各ユーザーに許容される最小範囲は 120 です。追加の並列実行ユーザーごとに、120 を追加する必要があります。たとえば、3 人の並列実行ユーザーを追加する場合のエントリは次のとおりです。

```
NBJAVA_CLIENT_PORT_WINDOW = 5000 5360
```

十分な範囲が設定されていない場合、初期化中に無効な値が存在したことを示すエラーメッセージが表示され、`jnbSA` が終了されます。

メモ: `NBJAVA_CLIENT_PORT_WINDOW` を使用すると、パフォーマンスが低下します。

NBJAVA_CORBA_DEFAULT_TIMEOUT

構成エントリでは、管理コンソールで実行される多くの CORBA 操作で使用されるデフォルトのタイムアウトを指定します。NBJAVA_CORBA_DEFAULT_TIMEOUTNetBackup
このオプションはデフォルトで存在し、次の形式を使用します。

```
NBJAVA_CORBA_DEFAULT_TIMEOUT=60
```

デフォルトは 60 秒です。

NBJAVA_CORBA_LONG_TIMEOUT

構成エントリでは、管理コンソールの次の領域で使用されるタイムアウト値を指定します。
NBJAVA_CORBA_LONG_TIMEOUTNetBackup

- デバイスの構成ウィザード
- ディスクプールの構成ウィザード
- ディスクプールのインベントリ

このオプションはデフォルトで存在し、次の形式を使用します。

```
NBJAVA_CORBA_LONG_TIMEOUT=1800
```

デフォルトは 1800 秒です。

NETBACKUP_API_CLIENT_CONNECTION_TIMEOUT

NETBACKUP_API_CLIENT_CONNECTION_TIMEOUT 構成オプションは、NetBackup 管理コンソールが NetBackup Web API サーバーとの接続を確立するときに使用するデフォルトのタイムアウト値を指定します。

このオプションはデフォルトで存在し、次の形式を使用します。

```
NETBACKUP_API_CLIENT_CONNECTION_TIMEOUT=180
```

デフォルトは 180 秒です。

p.1114 の「[NETBACKUP_API_CLIENT_READ_TIMEOUT](#)」を参照してください。

NETBACKUP_API_CLIENT_READ_TIMEOUT

NETBACKUP_API_CLIENT_READ_TIMEOUT 構成オプションは、NetBackup 管理コンソールが NetBackup Web API サーバーのデータを要求するときに使用するデフォルトのタイムアウト値を指定します。

このオプションはデフォルトで存在し、次の形式を使用します。

```
NETBACKUP_API_CLIENT_READ_TIMEOUT=1800
```

デフォルトは 1800 秒です。

p.1114 の「[NETBACKUP_API_CLIENT_CONNECTION_TIMEOUT](#)」を参照してください。

PBX_PORT

構成エントリは ポートを指定します。PBX_PORTpbx

このオプションはデフォルトで存在し、次の形式を使用します。

```
PBX_PORT=1556
```

USE_URANDOM

NetBackup 環境で暗号上安全なランダム出力を提供する文字型デバイスとして /dev/urandom オプションを指定するには、USE_URANDOM を有効にします。

USE_URANDOM オプションのデフォルト値は 0 です。USE_URANDOM オプションにデフォルト値が設定されている場合、使用される文字型デバイスは、NB_FIPS_MODE オプションの値に基づきます。

NB_FIPS_MODE が有効な場合は、dev/random が使用されます。

NB_FIPS_MODE が無効な場合は、dev/urandom が使用されます。

USE_URANDOM オプションを有効にするには、次の形式を使用します。

```
USE_URANDOM = 1
```

USE_URANDOM が 2 に設定されている (または無効になっている) 場合は、暗号上安全なランダム出力を提供するために dev/random 文字型デバイスが使用されます。

VNETD_PORT

VNETD_PORT は vnetd デーモンプロセス用に構成されたポートで、Internet Assigned Number Authority (IANA) に登録済みです。

このオプションでは、次の形式を使用します。

```
VNETD_PORT=13724
```

このポートを変更することはお勧めしません。変更が必要な場合、関連する NetBackup クラスタのすべての NetBackup ホストで変更を行います。

このオプションは 7.0 NetBackup サーバーとの通信に 7.0.1 NetBackup 管理コンソールが使われるときの後方互換用に保存されます。

詳しくは、『[NetBackup インストールガイド](#)』を参照してください。

対応する setconf.bat (Windows) または nbj.conf (UNIX) の構成オプションに値を設定する必要があります。

NetBackup のパフォーマンスの向上について

次のインターフェースでパフォーマンスの問題に関して考慮すべき最も重要な要素は、コンソールを実行しているプラットフォームです。

- リモート管理コンソール
- NetBackup 管理コンソール
- NetBackup バックアップ、アーカイブおよびリストアユーザーインターフェース

管理コンソールは、プラットフォームの種類に関係なく、次のいずれかの場所から実行できます。

- (サポートされている Windows および UNIX プラットフォームの) デスクトップホストでローカルに実行する
- (サポートされている UNIX プラットフォームから) リモートで実行し、デスクトップホストに表示する

最良のパフォーマンスを得るために、これらのコンソールを使用する場合は、デスクトップホストでローカルに実行することをお勧めします。コンソールをローカルに実行すると、リモートディスプレイバックの構成によって発生する可能性があるフォントおよび表示に関する問題を回避できます。

NetBackup 管理コンソールをローカルで実行することについて

Windows プラットフォームで、[スタート (Start)]、[プログラム (Programs)]、[Cohesity NetBackup]、[NetBackup 8.x 管理コンソール (8.x Administration Console)] の順に選択して、コンソールを起動します。

サポートされている UNIX プラットフォームで `jnbSA` または `jbpSA` を実行すると、コンソールは、コンソールが表示されているホストと同じホストでローカルに実行されます。すなわち、`DISPLAY` 環境変数は、`jnbSA` または `jbpSA` コマンドを実行したホストに設定されています。

Java テクノロジーの向上によって、いくつかのプラットフォームでは、リモート X ディスプレイの機能が改善されています。ただし、コンソールの特定のコントロールでは問題が解消されていません。たとえば、ボックスでの操作結果が不適切である、スクロールがスムーズでない、多くの行が含まれる表で表示の問題が発生する、などの問題があります。さらに深刻な問題も発生しています。このモードでの実行中に **Java Virtual Machine (JVM)** のエラーによってコンソールがいくつかのプラットフォームで異常終了およびハングアップする可能性があります。したがって、コンソールをリモート X ディスプレイ構成で実行しないことをお勧めします。

コンソールをローカルで実行してリモートサーバーを管理することについて

NetBackup 管理コンソールおよびバックアップ、アーカイブおよびリストアユーザーコンソールは、分散アプリケーションです。どちらのアプリケーションも、異なるコンピュータ上で実行可能な、2 つの主要な独立したシステムプロセスから構成されます。たとえば、あるコンピュータで NetBackup 管理コンソールを実行し、別のコンピュータでコンソールのアプリケーションサーバー (`- bpjava`) プロセスを実行するとします。

NetBackup サーバーホストで NetBackup 管理コンソールを実行する必要はありません。ただし、NetBackup を管理するには、そのホストでアプリケーションサーバーを実行する必要があります。

NetBackup 管理コンソールは、NetBackup でサポートされているすべてのプラットフォーム上で実行可能ではありませんが、このコンソール用のアプリケーションサーバーは、サ

ポートされているすべてのプラットフォーム上で実行されます。この分散アプリケーションアーキテクチャによって、コンソール自体は **NetBackup** でサポートされているプラットフォームの一部だけでしか実行されなくても、すべての **NetBackup** プラットフォームの直接管理を実行できます。

NetBackup 管理コンソールにログインするには、ホスト名を指定します。ホスト名はアプリケーションサーバー (bpjava) が動作するコンピュータです。(たとえば **NetBackup** プライマリサーバーです)。コンソールで開始されたすべての要求または更新は、このホストで実行されているアプリケーションサーバーへ送信されます。

コンソールパフォーマンスの向上

NetBackup アプリケーションのパフォーマンスは、アプリケーションが実行される環境 (利用可能なリソースおよびネットワークのスループットを含む) によって異なります。

NetBackup のデフォルト構成 (特に `INITIAL_MEMORY` および `MAX_MEMORY` 構成オプション) では、コンソールが実行されるコンピュータ上に十分なメモリリソースが存在すると想定しています。コンソールが実行されるマシンには、jnbSA コマンドが実行されるマシンや **NetBackup** 管理コンソールが起動されるマシンなどが該当します。

次に、パフォーマンスを改善するためのガイドラインを示します。

- ネットワークの通信速度および転送されるデータ量について検討します。
- 関連するコンピュータ上で実行される処理の量について検討します。
稼働率の低いコンピュータ上で、**NetBackup** を実行します。たとえば、メモリを集中的に使用する他のアプリケーションがコンピュータ上で実行されている場合、応答時間に大幅な違いが生じる場合があります。(たとえば、**Web** ブラウザ) 同じコンピュータ上に複数の **NetBackup** インスタンスが存在する場合も、同じ影響を受けます。
- アプリケーションに対して **256 MB** 以上の **RAM** を利用可能な **1 GB** のコンピュータ上で **NetBackup** を実行します。メモリが不十分であるため、アプリケーションを起動できない場合もあります。これらの障害は、jnbSA コマンドが実行された **xterm** ウィンドウに表示されるさまざまなメッセージから確認できます。また、メッセージは、アプリケーションログファイルに示されます。次のようなメッセージが表示されます。

```
Error occurred during initialization of VM
Could not reserve enough space for object heap
Out of Memory
```

p.1111 の「[INITIAL_MEMORY、MAX_MEMORY](#)」を参照してください。

- 関連するコンピュータの物理メモリの量について検討します。必要に応じて、管理されるホスト (コンソールのアプリケーションサーバーホスト) にメモリを追加します。
- 次の関連するコンピュータのスワップ領域を増やすことを検討します。
 - コンソールホスト (コンソールが起動されたホスト)
 - 管理されているホスト

パフォーマンスを改善するには、アプリケーションが実行されているシステムに利用可能なスワップ領域の量を増やします。これは特に、コンピュータ上で他の多数の動作が実行されている場合に効果があります。スワップ領域の量を増やすと、アプリケーションのメモリ不足に関連するハングアップや他の問題が軽減されます。

- 次の関連するコンピュータの CPU を追加または高速化することを検討します。
 - コンソールホスト (コンソールが起動されたホスト)
 - 管理されているホスト
- 長期間保持されている NetBackup データを必要な期間だけ保持するようにして、データの量を制限することを検討します。たとえば、正常に完了したジョブは数時間以上保持しないようにします。

p.1073 の「[ジョブデータベースについて](#)」を参照してください。

ローカルでの実行時とリモートディスプレイバック機能の使用時におけるパフォーマンスの比較

パフォーマンスは次の要素に依存します。

- ネットワークの速度
- コンソールコンピュータとアプリケーションサーバーコンピュータのリソース
- コンソールの作業負荷
- アプリケーションサーバーホスト
- NetBackup データの量 (アクティビティ 모니터のジョブの数または NetBackup ポリシーの数)

最初にコンソールのアプリケーションサーバーホストでコンソールを起動してデスクトップホストに表示する方が、高いパフォーマンスを得られる場合があります。ただし、どのような場合にこの構成でコンソールのパフォーマンスが改善されるかは把握していません。また、前述のように、パフォーマンスの問題以外の問題が発生する場合があるため、この構成を使用しないことをお勧めします。

次の例を参照して、構成で最良のパフォーマンスを得る方法を判断してください。

NetBackup パフォーマンスシナリオ 1

コンソールホストのリソースとアプリケーションサーバーホストのリソースにはどちらも不足がないものと想定します。コンソールホストに転送される NetBackup 構成データの量は、X Windows のピクセル表示データの量を大きく上回っていると想定します。ピクセル表示データの量とは、リモートホストから送信される実際のコンソール画面のデータ量のことです。

このような状況が発生しているかどうかを判断するには、実際に構成を行う以外にありません。NetBackup の各構成は、ネットワークの環境および 2 つのホストの物理的な距離に影響されます。

NetBackup パフォーマンスシナリオ 2

アプリケーションサーバーホストで利用可能なリソースが、コンソールホストのリソースを大きく上回っていると想定します。

管理される NetBackup プライマリサーバーと比較して、コンソールホストの CPU の性能が非常に低く、メモリが非常に少ないと想定します。(コンソールホストは、コンソールが起動されるコンピュータです)。プライマリサーバー上でコンソールを起動してデスクトップホストで表示すると、パフォーマンスが向上する場合があります。

デスクトップホストが Windows コンピュータの場合、Exceed や VNC などの X 端末エミュレーションツールまたはリモート表示ツールが必要です。

これらの例では、NetBackup コンソールのリモート表示をパフォーマンスの面から説明しています。他の理由によって、デスクトップホストへリモート表示を行うことが必要となる場合もありますが、行わないことをお勧めします。NetBackup 管理コンソールおよびクライアントのバックアップ、アーカイブおよびリストアコンソールに関する他の問題については、リリースノートを参照してください。

表 33-2 に構成エントリを含んでいるファイルを示します。

表 33-2 構成エントリが含まれるファイル

ファイル	説明
/usr/opensv/java/auth.conf	認可オプション。
/usr/opensv/netbackup/bp.conf	構成オプション (サーバーおよびクライアント)。
/usr/opensv/java/nbj.conf	NetBackup 管理コンソールの構成オプション。
/usr/opensv/volmgr/vm.conf	メディアおよびデバイスの管理の構成オプション。
\$HOME/bp.conf	ユーザーの構成オプション (クライアント上)。

NetBackup 管理コンソールでのタイムゾーンの調整について

地理的に離れて配置されている NetBackup 構成のサイトでは、NetBackup のリモートホストを管理するために、NetBackup 管理コンソールでのタイムゾーンの調整が必要な

場合があります。(NetBackup のリモートホストは、管理コンソールのログオンダイアログボックスで指定されたホストか、またはコンソールの [ファイル (File)]、[サーバーの変更 (Change Server)] 機能によって参照されているホストのいずれかです。)

コンソールのデフォルトのタイムゾーンは、コンソールのログオンダイアログボックスで指定されたホストではなく、コンソールが起動されたホストのタイムゾーンです。

NetBackup 管理コンソールまたはクライアント上で実行されているバックアップ、アーカイブおよびリストアアプリケーションからバックアップ、リストアまたはアーカイブの操作を実行する場合、タイムゾーンは、クライアントがファイルのリストアを行う NetBackup サーバーに対して設定します。

異なるタイムゾーンに存在するサーバーを管理する場合、NetBackup 管理コンソールのインスタンス別にタイムゾーンを設定します。

たとえば、NetBackup 管理コンソールを開き、ローカルサーバーのタイムゾーンを中央標準時に設定します。同様に、太平洋標準時のタイムゾーンに存在するサーバーのタイムゾーンを設定するには、別の NetBackup 管理コンソールを開きます。

サーバーを変更([ファイル (File)]>[サーバーの変更 (Change Server)])してから、太平洋標準時タイムゾーンのサーバーのタイムゾーンを設定します。この場合、中央標準時に設定されているサーバーのタイムゾーンも変更されます。

メディアサーバーまたはクライアントに対して[サーバーの変更 (Change Server)]操作を実行するには、メディアサーバーまたはクライアントにセキュリティ証明書がインストールされている必要があります。

NetBackup 管理コンソールまたはバックアップ、アーカイブおよびリストアコンソールでのカスタムタイムゾーンの調整

タイムゾーンを調整するか夏時間を使用するために、次の手順を実行します。

タイムゾーンを調整する方法

- 1 NetBackup 管理コンソール、または[バックアップ、アーカイブおよびリストア (Backup, Archive, and Restore)]コンソールで、[ファイル (File)]>[アプリケーションのタイムゾーンを調整 (Adjust Application Time Zone)]を選択します。
- 2 [標準 (Standard)]タブを選択します。
- 3 [カスタムタイムゾーンの使用 (Use custom time zone)]チェックボックスのチェックを外します。
- 4 タイムゾーンを選択します。
- 5 夏時間 (DST) の場合は、[夏時間の使用 (Use daylight savings time)]を選択します。

- 6 設定内容を現行のセッションおよび今後のすべてのセッションに適用するには、[デフォルトのタイムゾーンとして保存する (Save as default time zone)]を選択します。
- 7 [OK]をクリックします。

NetBackup 管理コンソールまたはバックアップ、アーカイブおよびリストアコンソールでのカスタムタイムゾーンの構成

管理コンソールまたはクライアントコンソールでカスタムタイムゾーンを構成するには、次の手順を実行します。

カスタムタイムゾーンを構成する方法

- 1 NetBackup 管理コンソール、または[バックアップ、アーカイブおよびリストア (Backup, Archive, and Restore)]コンソールで、[ファイル (File)]>[アプリケーションのタイムゾーンを調整 (Adjust Application Time Zone)]を選択します。
- 2 [カスタムタイムゾーンの使用 (Use custom time zone)]チェックボックスをチェックします。
- 3 [カスタム (Custom)]タブを選択します。
- 4 バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースの時間の基となるタイムゾーンを選択します。
- 5 [グリニッジ標準時 (GMT) からのオフセット (Offset from Greenwich Mean Time)]設定では、サーバーのタイムゾーンと GMT との時差を反映するように、時間を調整します。
- 6 [夏時間の使用 (Use daylight savings time)]チェックボックスにチェックマークを付けます。
- 7 ダイアログの[夏時間の開始日 (Daylight savings time start)]セクションで選択を行うには、次の表で各オプションの説明を参照します。

特定の日付で夏時間を開始する	[絶対日付 (Absolute date)]を選択し、月と日を指定します。
月の最初の特定の曜日に夏時間を始める	[指定日以降の最初の特定の曜日を指定 (First day of week in month)]を選択します。特定の日曜日および月を指定します。
指定日以降の最初の特定の曜日に夏時間を始める	[指定日以降の最初の特定の曜日を指定 (First day of week in month after date)]を選択します。曜日および月日を指定します。
月の最後の特定の曜日に夏時間を始める	[最終週の特定の曜日を指定 (Last day of week in month)]を選択します。特定の日曜日および月を指定します。
指定日以前の最初の特定の曜日に夏時間を始める	[指定日以前の最後の特定の曜日を指定 (Last day of week in month before date)]を選択します。曜日および月日を指定します。

- 8 前述の手順に示したいずれかの方法を使用して、夏時間の終了日を指定します。
- 9 設定内容を現行のセッションおよび今後のすべてのセッションに適用するには、[デフォルトのタイムゾーンとして保存する (Save as default time zone)]を選択します。
- 10 [OK]をクリックします。

タイムゾーン表

このトピックは NetBackup-Java 管理コンソールを実行する NetBackup ホストに当てはまります。地理的に離れて配置されている NetBackup 構成のサイトでは、NetBackup のリモートホストを管理するために、NetBackup-Java 管理コンソールでのタイムゾーンの調整が必要な場合があります。

次の表に、利用可能なタイムゾーンを ID 名のアルファベット順にリストします。

表 33-3 タイムゾーン

ID 名	表示名
ACT	中央オーストラリア標準時 (ノーザンテリトリー)
AET	東部オーストラリア標準時 (ニューサウスウェールズ)
Africa/Abidjan (アフリカ/アビジャン)	グリニッジ標準時
Africa/Accra (アフリカ/アクラ)	グリニッジ標準時
Africa/Addis_Ababa (アフリカ/アジスアベバ)	東アフリカ時間
Africa/Algiers (アフリカ/アルジェ)	中央ヨーロッパ時間
Africa/Asmera (アフリカ/アスマラ)	東アフリカ時間
Africa/Bamako (アフリカ/バマコ)	グリニッジ標準時
Africa/Bangui (アフリカ/バンギ)	西アフリカ時間
Africa/Banjul (アフリカ/バンジュール)	グリニッジ標準時
Africa/Bissau (アフリカ/ビサウ)	グリニッジ標準時
Africa/Blantyre (アフリカ/ブランタイア)	中央アフリカ時間
Africa/Brazzaville (アフリカ/ブラザビル)	西アフリカ時間

ID 名	表示名
Africa/Bujumbura (アフリカ/ブジュンブラ)	中央アフリカ時間
Africa/Cairo (アフリカ/カイロ)	東ヨーロッパ時間
Africa/Casablanca (アフリカ/カサブランカ)	西ヨーロッパ時間
Africa/Ceuta (アフリカ/セウタ)	中央ヨーロッパ時間
Africa/Conakry (アフリカ/コナクリ)	グリニッジ標準時
Africa/Dakar (アフリカ/ダカール)	グリニッジ標準時
Africa/Dar_es_Salaam (アフリカ/ダルエスサラーム)	東アフリカ時間
Africa/Djibouti (アフリカ/ジブチ)	東アフリカ時間
Africa/Douala (アフリカ/ドゥアラ)	西アフリカ時間
Africa/El_Aaiun (アフリカ/エルアイウン)	西ヨーロッパ時間
Africa/Freetown (アフリカ/フリータウン)	グリニッジ標準時
Africa/Gaborone (アフリカ/ガボローネ)	中央アフリカ時間
Africa/Harare (アフリカ/ハラレ)	中央アフリカ時間
Africa/Johannesburg (アフリカ/ヨハネスバーグ)	南アフリカ標準時
Africa/Kampala (アフリカ/カンパラ)	東アフリカ時間
Africa/Khartoum (アフリカ/ハルツーム)	東アフリカ時間
Africa/Kigali (アフリカ/キガリ)	中央アフリカ時間
Africa/Kinshasa (アフリカ/キンシャサ)	西アフリカ時間
Africa/Lagos (アフリカ/ラゴス)	西アフリカ時間
Africa/Libreville (アフリカ/リーブルビル)	西アフリカ時間

ID 名	表示名
Africa/Lome (アフリカ/ロメ)	グリニッジ標準時
Africa/Luanda (アフリカ/ルアンダ)	西アフリカ時間
Africa/Lubumbashi (アフリカ/ルブンバシ)	中央アフリカ時間
Africa/Lusaka (アフリカ/ルサカ)	中央アフリカ時間
Africa/Malabo (アフリカ/マラボ)	西アフリカ時間
Africa/Maputo (アフリカ/マプト)	中央アフリカ時間
Africa/Maseru (アフリカ/マセル)	南アフリカ標準時
Africa/Mbabane (アフリカ/ムババネ)	南アフリカ標準時
Africa/Mogadishu (アフリカ/モガディシュ)	東アフリカ時間
Africa/Monrovia (アフリカ/モンロビア)	グリニッジ標準時
Africa/Nairobi (アフリカ/ナイロビ)	東アフリカ時間
Africa/Ndjamena (アフリカ/ンジャメナ)	西アフリカ時間
Africa/Niamey (アフリカ/ニアメー)	西アフリカ時間
Africa/Nouakchott (アフリカ/ヌアクショット)	グリニッジ標準時
Africa/Ouagadougou (アフリカ/ワガドゥグ)	グリニッジ標準時
Africa/Porto-Novo (アフリカ/ポルトノボ)	西アフリカ時間
Africa/Sao_Tome (アフリカ/サントメ)	グリニッジ標準時
Africa/Timbuktu (アフリカ/トンブクトゥ)	グリニッジ標準時
Africa/Tripoli (アフリカ/トリポリ)	東ヨーロッパ時間
Africa/Tunis (アフリカ/チュニス)	中央ヨーロッパ時間

ID 名	表示名
Africa/Windhoek (アフリカ/ウィントフーク)	西アフリカ時間
AGT	アルゼンチン時間
America/Adak (アメリカ/エイダック)	ハワイ-アリューシャン標準時
America/Anchorage (アメリカ/アンカレジ)	アラスカ標準時
America/Anguilla (アメリカ/アンギラ)	大西洋標準時
America/Antigua (アメリカ/アンティグア)	大西洋標準時
America/Araguaina (アメリカ/アラグアイナ)	ブラジル時間
America/Aruba (アメリカ/アルーバ)	大西洋標準時
America/Asuncion (アメリカ/アスンシオン)	パラグアイ時間
America/Atka (アメリカ/アトカ)	ハワイ-アリューシャン標準時
America/Barbados (アメリカ/バルバドス)	大西洋標準時
America/Belem (アメリカ/ベレン)	ブラジル時間
America/Belize (アメリカ/ベリーズ)	中部標準時
America/Boa_Vista (アメリカ/ボアビスタ)	アマゾン標準時
America/Bogota (アメリカ/ボゴタ)	コロンビア時間
America/Boise (アメリカ/ボイシ)	山地標準時
America/Buenos_Aires (アメリカ/ブエノスアイレス)	アルゼンチン時間
America/Cambridge_Bay (アメリカ/ケンブリッジベイ)	山地標準時
America/Cancun (アメリカ/カンクン)	中部標準時

ID 名	表示名
America/Caracas (アメリカ/カラカス)	ベネズエラ時間
America/Catamarca (アメリカ/カタマルカ)	アルゼンチン時間
America/Cayenne (アメリカ/カイエンス)	仏領ギアナ時間
America/Cayman (アメリカ/ケイマン諸島)	東部標準時
America/Chicago (アメリカ/シカゴ)	中部標準時
America/Chihuahua (アメリカ/チワワ)	山地標準時
America/Cordoba (アメリカ/コルドバ)	アルゼンチン時間
America/Costa_Rica (アメリカ/コスタリカ)	中部標準時
America/Cuiaba (アメリカ/クヤバ)	アマゾン標準時
America/Curacao (アメリカ/キュラソー島)	大西洋標準時
America/Danmarkshavn (アメリカ/デンマークスハウン)	グリニッジ標準時
America/Dawson (アメリカ/ドーソン)	太平洋標準時
America/Dawson_Creek (アメリカ/ドーソンクリーク)	山地標準時
America/Denver (アメリカ/デンバー)	山地標準時
America/Detroit (アメリカ/デトロイト)	東部標準時
America/Dominica (アメリカ/ドミニカ)	大西洋標準時
America/Edmonton (アメリカ/エドモントン)	山地標準時

ID 名	表示名
America/Eirunepe (アメリカ/エイル ネップ)	アクレ時間
America/El_Salvador (アメリカ/エル サルバドル)	中部標準時
America/Ensenada (アメリカ/エン セナダ)	太平洋標準時
America/Fort_Wayne (アメリカ/ フォートウェイン)	東部標準時
America/Fortaleza (アメリカ/フォル タレザ)	ブラジル時間
America/Glace_Bay (アメリカ/グ レースベイ)	大西洋標準時
America/Godthab (アメリカ/ゴット ホープ)	西グリーンランド時間
America/Goose_Bay (アメリカ/グー スベイ)	大西洋標準時
America/Grand_Turk (アメリカ/グラ ンドターク)	東部標準時
America/Grenada (アメリカ/グレナ ダ)	大西洋標準時
America/Guadeloupe (アメリカ/グ アドループ)	大西洋標準時
America/Guatemala (アメリカ/グア テマラ)	中部標準時
America/Guayaquil (アメリカ/グア ヤキル)	エクアドル時間
America/Guyana (アメリカ/ガイア ナ)	ガイアナ時間
America/Halifax (アメリカ/ハリファッ クス)	大西洋標準時
America/Havana (アメリカ/ハバナ)	中部標準時
America/Hermosillo (アメリカ/エル モシージョ)	山地標準時

ID 名	表示名
America/Indiana/Indianapolis (アメリカ/インディアナ/インディアナポリス)	東部標準時
America/Indiana/Knox (アメリカ/インディアナ/ノックス)	東部標準時
America/Indiana/Marengo (アメリカ/インディアナ/マレンゴ)	東部標準時
America/Indiana/Vevay (アメリカ/インディアナ/ビベアー)	東部標準時
America/Indianapolis (アメリカ/インディアナポリス)	東部標準時
America/Inuvik (アメリカ/イヌヴィック)	山地標準時
America/Iqaluit (アメリカ/イカルイット)	東部標準時
America/Jamaica (アメリカ/ジャマイカ)	東部標準時
America/Jujuy (アメリカ/フフイ)	アルゼンチン時間
America/Juneau (アメリカ/ジュノー)	アラスカ標準時
America/Kentucky/Louisville (アメリカ/ケンタッキー/ルイビル)	東部標準時
America/Kentucky/Monticello (アメリカ/ケンタッキー/モンティセロ)	東部標準時
America/Knox_IN (アメリカ/インディアナ/ノックス)	東部標準時
America/La_Paz (アメリカ/ラパス)	ボリビア時間
America/Lima (アメリカ/リマ)	ペルー時間
America/Los_Angeles (アメリカ/ロサンジェルス)	太平洋標準時
America/Louisville (アメリカ/ルイビル)	東部標準時
America/Maceio (アメリカ/マセイオ)	ブラジル時間

ID 名	表示名
America/Managua (アメリカ/マナグア)	中部標準時
America/Manaus (アメリカ/マナウス)	アマゾン標準時
America/Martinique (アメリカ/マルティニク)	大西洋標準時
America/Mazatlan (アメリカ/マサトラン)	山地標準時
America/Mendoza (アメリカ/メンドサ)	アルゼンチン時間
America/Menominee (アメリカ/メノミニー)	中部標準時
America/Merida (アメリカ/メリダ)	中部標準時
America/Mexico_City (アメリカ/メキシコシティ)	中部標準時
America/Miquelon (アメリカ/ミクロン)	サンピエールエミクロン標準時
America/Monterrey (アメリカ/モンテレー)	中部標準時
America/Montevideo (アメリカ/モンテビデオ)	ウルグアイ時間
America/Montreal (アメリカ/モントリオール)	東部標準時
America/Montserrat (アメリカ/モントセラト島)	大西洋標準時
America/Nassau (アメリカ/ナッソー)	東部標準時
America/New_York (アメリカ/ニューヨーク)	東部標準時
America/Nipigon (アメリカ/ニピゴン)	東部標準時
America/Nome (アメリカ/ノーム)	アラスカ標準時
America/Noronha (アメリカ/ノローニャ)	フェルナンドデノローニャ島時間

ID 名	表示名
America/North_Dakota/Center (アメリカ/ノースダコタ/中部)	中部標準時
America/Panama (アメリカ/パナマ)	東部標準時
America/Pangnirtung (アメリカ/パンナタング)	東部標準時
America/Paramaribo (アメリカ/パラマリボ)	スリナム時間
America/Phoenix (アメリカ/フェニックス)	山地標準時
America/Port_of_Spain (アメリカ/ポートオブスペイン)	大西洋標準時
America/Port-au-Prince (アメリカ/ポルトープランス)	東部標準時
America/Porto_Acre (アメリカ/ポルトアクレ)	アクレ時間
America/Porto_Velho (アメリカ/ポルトヴェリエ)	アマゾン標準時
America/Puerto_Rico (アメリカ/プエルトリコ)	大西洋標準時
America/Rainy_River (アメリカ/レイニーリバー)	中部標準時
America/Rankin_Inlet (アメリカ/ランキンインレット)	東部標準時
America/Recife (アメリカ/レシフェ)	ブラジル時間
America/Regina (アメリカ/レジヤナ)	中部標準時
America/Rio_Branco (アメリカ/リオブランコ)	アクレ時間
America/Rosario (アメリカ/ロサリオ)	アルゼンチン時間
America/Santiago (アメリカ/サンティアゴ)	チリ時間

ID 名	表示名
America/Santo_Domingo (アメリカ/サントドミンゴ)	大西洋標準時
America/Sao_Paulo (アメリカ/サンパウロ)	ブラジル時間
America/Scoresbysund (アメリカ/スコアズビー湾)	東グリーンランド時間
America/Shiprock (アメリカ/シップロック山)	山地標準時
America/St_Johns (アメリカ/セントジョンズ)	ニューファンドランド標準時
America/St_Kitts (アメリカ/セントキッツ島)	大西洋標準時
America/St_Lucia (アメリカ/セントルシア)	大西洋標準時
America/St_Thomas (アメリカ/セントトマス島)	大西洋標準時
America/St_Vincent (アメリカ/セントヴィンセント島)	大西洋標準時
America/Swift_Current (アメリカ/スウィフトカレント)	中部標準時
America/Tegucigalpa (アメリカ/テグシガルパ)	中部標準時
America/Thule (アメリカ/テューレ)	大西洋標準時
America/Thunder_Bay (アメリカ/サンダーベイ)	東部標準時
America/Tijuana (アメリカ/ティファナ)	太平洋標準時
America/Tortola (アメリカ/トルトラ島)	大西洋標準時
America/Vancouver (アメリカ/バンクーバー)	太平洋標準時
America/Virgin (アメリカ/バージン諸島)	大西洋標準時

ID 名	表示名
America/Whitehorse (アメリカ/ホワイトホース)	太平洋標準時
America/Winnipeg (アメリカ/ウィニペグ)	中部標準時
America/Yakutat (アメリカ/ヤクタット)	アラスカ標準時
America/Yellowknife (アメリカ/イエローナイフ)	山地標準時
Antarctica/Casey (南極/ケーシー)	西オーストラリア標準時
Antarctica/Davis (南極/デービス)	デービス時間
Antarctica/DumontDURville (南極/デュモンデュルヴィール)	デュモンデュルヴィール時間
Antarctica/Mawson (南極/モーソン)	モーソン時間
Antarctica/McMurdo (南極/マクマード)	ニュージーランド標準時
Antarctica/Palmer (南極/パーマー)	チリ時間
Antarctica/South_Pole (南極/南極点)	ニュージーランド標準時
Antarctica/Syowa (南極/昭和基地)	昭和基地時間
Antarctica/Vostok (南極/ボストーク)	ボストーク時間
Arctic/Longyearbyen (北極/ロングイールビュアン)	中央ヨーロッパ時間
ART	東ヨーロッパ時間
Asia/Aden (アジア/アデン)	アラビア標準時
Asia/Almaty (アジア/アルマトウイ)	アルマアタ時間
Asia/Amman (アジア/アンマン)	東ヨーロッパ時間
Asia/Anadyr (アジア/アナディル)	アナディル時間
Asia/Aqtau (アジア/アクタウ)	アクタウ時間
Asia/Aqtobe (アジア/アクトベ)	アクトベ時間

ID 名	表示名
Asia/Ashgabat (アジア/アシュガバード)	トルクメニスタン時間
Asia/Ashkhabad (アジア/アシハバード)	トルクメニスタン時間
Asia/Baghdad (アジア/バグダード)	アラビア標準時
Asia/Bahrain (アジア/バーレーン)	アラビア標準時
Asia/Baku (アジア/バクー)	アゼルバイジャン時間
Asia/Bangkok (アジア/バンコク)	インドシナ時間
Asia/Beirut (アジア/ベイルート)	東ヨーロッパ時間
Asia/Bishkek (アジア/ビシケク)	キルギスタン時間
Asia/Brunei (アジア/ブルネイ)	ブルネイ時間
Asia/Calcutta (アジア/カルカッタ)	インド標準時
Asia/Choibalsan (アジア/チョイバルサン)	チョイバルサン時間
Asia/Chongqing (アジア/重慶)	中国標準時
Asia/Chungking (アジア/重慶)	中国標準時
Asia/Colombo (アジア/コロンボ)	スリランカ時間
Asia/Dacca (アジア/ダッカ)	バングラデシュ時間
Asia/Damascus (アジア/ダマスカス)	東ヨーロッパ時間
Asia/Dhaka (アジア/ダカ)	バングラデシュ時間
Asia/Dili (アジア/ディリ)	東ティモール時間
Asia/Dubai (アジア/ドバイ)	湾岸標準時
Asia/Dushanbe (アジア/ドゥシャンベ)	タジキスタン時間
Asia/Gaza (アジア/ガザ)	東ヨーロッパ時間
Asia/Harbin (アジア/ハルビン)	中国標準時
Asia/Hong_Kong (アジア/香港)	香港時間

ID 名	表示名
Asia/Hovd (アジア/ホブト)	ホブト時間
Asia/Irkutsk (アジア/イルクーツク)	イルクーツク時間
Asia/Istanbul (アジア/イスタンブール)	東ヨーロッパ時間
Asia/Jakarta (アジア/ジャカルタ)	西部インドネシア時間
Asia/Jayapura (アジア/ジャヤプラ)	東部インドネシア時間
Asia/Jerusalem (アジア/エルサレム)	イスラエル標準時
Asia/Kabul (アジア/カブール)	アフガニスタン時間
Asia/Kamchatka (アジア/カムチャツカ)	ペトロパヴロフスク-カムチャツキ時間
Asia/Karachi (アジア/カラチ)	パキスタン時間
Asia/Kashgar (アジア/カシュガル)	中国標準時
Asia/Katmandu (アジア/カトマンズ)	ネパール時間
Asia/Krasnoyarsk (アジア/クラスノヤルスク)	クラスノヤルスク時間
Asia/Kuala_Lumpur (アジア/クアラルンプール)	マレーシア時間
Asia/Kuching (アジア/クチン)	マレーシア時間
Asia/Kuwait (アジア/クウェート)	アラビア標準時
Asia/Macao (アジア/マカオ)	中国標準時
Asia/Macau (アジア/マカオ)	中国標準時
Asia/Magadan (アジア/マガダン)	マガダン時間
Asia/Makassar (アジア/マカッサル)	中央インドネシア時間
Asia/Manila (アジア/マニラ)	フィリピン時間
Asia/Muscat (アジア/マスカット)	湾岸標準時
Asia/Nicosia (アジア/ニコシア)	東ヨーロッパ時間

ID 名	表示名
Asia/Novosibirsk (アジア/ノヴォシビルスク)	ノヴォシビルスク時間
Asia/Omsk (アジア/オムスク)	オムスク時間
Asia/Oral (アジア/オラル)	オラル時間
Asia/Phnom_Penh (アジア/プノンペン)	インドシナ時間
Asia/Pontianak (アジア/ポンティアナク)	西部インドネシア時間
Asia/Pyongyang (アジア/平壤)	韓国標準時
Asia/Qatar (アジア/カタール)	アラビア標準時
Asia/Qyzylorda (アジア/クジルオルダ)	クジルオルダ時間
Asia/Rangoon (アジア/ラングーン)	ミャンマー時間
Asia/Riyadh (アジア/リヤド)	アラビア標準時
Asia/Riyadh87	GMT+03:07
Asia/Riyadh88	GMT+03:07
Asia/Riyadh89	GMT+03:07
Asia/Saigon (アジア/サイゴン)	インドシナ時間
Asia/Sakhalin (アジア/サハリン)	サハリン時間
Asia/Samarkand (アジア/サマルカンド)	トルクメニスタン時間
Asia/Seoul (アジア/ソウル)	韓国標準時
Asia/Shanghai (アジア/上海)	中国標準時
Asia/Singapore (アジア/シンガポール)	シンガポール時間
Asia/Taipei (アジア/台北)	中国標準時
Asia/Tashkent (アジア/タシケント)	ウズベキスタン時間
Asia/Tbilisi (アジア/トビリシ)	グルジア時間

ID 名	表示名
Asia/Tehran (アジア/テヘラン)	イラン時間
Asia/Tel_Aviv (アジア/テルアビブ)	イスラエル標準時
Asia/Thimbu (アジア/ティンブー)	ブータン時間
Asia/Thimphu (アジア/ティンブー)	ブータン時間
Asia/Tokyo (アジア/東京)	日本標準時
Asia/Ujung_Pandang (アジア/ウ ジュンパンダン)	中央インドネシア時間
Asia/Ulaanbaatar (アジア/ウラン バートル)	ウランバートル時間
Asia/Ulan_Bator (アジア/ウランバ ートル)	ウランバートル時間
Asia/Urumqi (アジア/ウルムチ)	中国標準時
Asia/Vientiane (アジア/ヴィエンティ アン)	インドシナ時間
Asia/Vladivostok (アジア/ウラジオ ストク)	ウラジオストク時間
Asia/Yakutsk (アジア/ヤクーツク)	ヤクーツク時間
Asia/Yekaterinburg (アジア/エカテ リンブルグ)	エカテリンブルグ時間
Asia/Yerevan (アジア/イエレヴァン)	アルメニア時間
AST	アラスカ標準時 (米国)
Atlantic/Azores (大西洋/アゾレス諸 島)	アゾレス諸島時間
Atlantic/Bermuda (大西洋/バー ミュータ諸島)	大西洋標準時
Atlantic/Canary (大西洋/カナリア諸 島)	西ヨーロッパ時間
Atlantic/Cape_Verde (大西洋/カボ ヴェルデ)	カボヴェルデ時間

ID 名	表示名
Atlantic/Faeroe (大西洋/フェロー諸島)	西ヨーロッパ時間
Atlantic/Jan_Mayen (大西洋/ヤンマイエン島)	東グリーンランド時間
Atlantic/Madeira (大西洋/マデイラ島)	西ヨーロッパ時間
Atlantic/Reykjavik (大西洋/レイキャビク)	グリニッジ標準時
Atlantic/South_Georgia (大西洋/サウスジョージア島)	サウスジョージア島標準時
Atlantic/St_Helena (大西洋/セントヘレナ島)	グリニッジ標準時
Atlantic/Stanley (大西洋/スタンリー)	フォークランド諸島時間
Australia/ACT (オーストラリア/ACT)	東部オーストラリア標準時 (ニューサウスウェールズ)
Australia/Adelaide (オーストラリア/アデレード)	中央オーストラリア標準時 (サウスオーストラリア)
Australia/Brisbane (オーストラリア/ブリスベン)	東部オーストラリア標準時 (クイーンズランド)
Australia/Broken_Hill (オーストラリア/ブローケンヒル)	中央オーストラリア標準時 (サウスオーストラリア/ニューサウスウェールズ)
Australia/Canberra (オーストラリア/キャンベラ)	東部オーストラリア標準時 (ニューサウスウェールズ)
Australia/Darwin (オーストラリア/ダーウィン)	中央オーストラリア標準時 (ノーザンテリトリー)
Australia/Hobart (オーストラリア/ホーバート)	東部オーストラリア標準時 (タスマニア)
Australia/LHI (オーストラリア/ロードハウ島)	ロードハウ島標準時
Australia/Lindeman (オーストラリア/リンデマン島)	東部オーストラリア標準時 (クイーンズランド)
Australia/Lord_Howe (オーストラリア/ロードハウ島)	ロードハウ島標準時

ID 名	表示名
Australia/Melbourne (オーストラリア/メルボルン)	東部オーストラリア標準時 (ヴィクトリア)
Australia/North (オーストラリア/北部)	中央オーストラリア標準時 (ノーザンテリトリー)
Australia/NSW (オーストラリア/ニューサウスウェールズ)	東部オーストラリア標準時 (ニューサウスウェールズ)
Australia/Perth (オーストラリア/パース)	西オーストラリア標準時
Australia/Queensland (オーストラリア/クイーンズランド)	東部オーストラリア標準時 (クイーンズランド)
Australia/South (オーストラリア/南部)	中央オーストラリア標準時 (サウスオーストラリア)
Australia/Sydney (オーストラリア/シドニー)	東部オーストラリア標準時 (ニューサウスウェールズ)
Australia/Tasmania (オーストラリア/タスマニア)	東部オーストラリア標準時 (タスマニア)
Australia/Victoria (オーストラリア/ヴィクトリア)	東部オーストラリア標準時 (ヴィクトリア)
Australia/West (オーストラリア/西部)	西オーストラリア標準時
Australia/Yancowinna (オーストラリア/ヤンコウィナ)	中央オーストラリア標準時 (サウスオーストラリア/ニューサウスウェールズ)
BET	ブラジル時間
Brazil/Acre (ブラジル/アクレ)	アクレ時間
Brazil/DeNoronha (ブラジル/フェルナンドデノローニャ島)	フェルナンドデノローニャ島時間
Brazil/East (ブラジル/東部)	ブラジル時間
Brazil/West (ブラジル/西部)	アマゾン標準時
BST	バングラデシュ時間
Canada/Atlantic (カナダ/大西洋沿岸部)	大西洋標準時

ID 名	表示名
Canada/Central (カナダ/中部)	中部標準時
Canada/Eastern (カナダ/東部)	東部標準時
Canada/East-Saskatchewan (カナダ/東部サスカチュワン)	中部標準時
Canada/Mountain (カナダ/山岳部)	山地標準時
Canada/Newfoundland (カナダ/ニューファンドランド)	ニューファンドランド標準時
Canada/Pacific (カナダ/太平洋沿岸部)	太平洋標準時
Canada/Saskatchewan (カナダ/サスカチュワン)	中部標準時
Canada/Yukon (カナダ/ユーコン)	太平洋標準時
CAT	中央アフリカ時間
CET	中央ヨーロッパ時間
Chile/Continental (チリ/大陸部)	チリ時間
Chile/EasterIsland (チリ/イースター島)	イースター島時間
CNT	ニューファンドランド標準時
CST	中部標準時 (米国)
CST6CDT	中部標準時 (米国)
CTT	中国標準時
Cuba (キューバ)	中部標準時
EAT	東アフリカ時間
ECT	中央ヨーロッパ時間
EET	東ヨーロッパ時間
Egypt (エジプト)	東ヨーロッパ時間
Eire (アイルランド)	グリニッジ標準時
EST	東部標準時 (米国)

ID 名	表示名
EST5EDT	東部標準時 (米国)
Etc/GMT	GMT+00:00
Etc/GMT	GMT+00:00
Etc/GMT+0	GMT+00:00
Etc/GMT+1	GMT-01:00
Etc/GMT+10	GMT-10:00
Etc/GMT+11	GMT-11:00
Etc/GMT+12	GMT-12:00
Etc/GMT+2	GMT-02:00
Etc/GMT+3	GMT-03:00
Etc/GMT+4	GMT-04:00
Etc/GMT+5	GMT-05:00
Etc/GMT+6	GMT-06:00
Etc/GMT+7	GMT-07:00
Etc/GMT+8	GMT-08:00
Etc/GMT+9	GMT-09:00
Etc/GMT-0	GMT-00:00
Etc/GMT-1	GMT+01:00
Etc/GMT-10	GMT+10:00
Etc/GMT-11	GMT+11:00
Etc/GMT-12	GMT+12:00
Etc/GMT-13	GMT+13:00
Etc/GMT-14	GMT+14:00
Etc/GMT-2	GMT+02:00
Etc/GMT-3	GMT+03:00
Etc/GMT-4	GMT+04:00

ID 名	表示名
Etc/GMT-5	GMT+05:00
Etc/GMT-6	GMT+06:00
Etc/GMT-7	GMT+07:00
Etc/GMT-8	GMT+08:00
Etc/GMT-9	GMT+09:00
Etc/Greenwich (Etc/グリニッジ)	グリニッジ標準時
Etc/UCT	協定世界時
Etc/Universal	協定世界時
Etc/UTC	協定世界時
Etc/Zulu (Etc/ズールー)	協定世界時
Europe/Amsterdam (ヨーロッパ/アムステルダム)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Andorra (ヨーロッパ/アンドラ)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Athens (ヨーロッパ/アテネ)	東ヨーロッパ時間
Europe/Belfast (ヨーロッパ/ベルファースト)	グリニッジ標準時
Europe/Belgrade (ヨーロッパ/ベオグラード)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Berlin (ヨーロッパ/ベルリン)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Bratislava (ヨーロッパ/ブラティスラヴァ)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Brussels (ヨーロッパ/ブリュッセル)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Bucharest (ヨーロッパ/ブカレスト)	東ヨーロッパ時間
Europe/Budapest (ヨーロッパ/ブダペスト)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Chisinau (ヨーロッパ/キシニョフ)	東ヨーロッパ時間

ID 名	表示名
Europe/Copenhagen (ヨーロッパ/コペンハーゲン)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Dublin (ヨーロッパ/ダブリン)	グリニッジ標準時
Europe/Gibraltar (ヨーロッパ/ジブラルタル)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Helsinki (ヨーロッパ/ヘルシンキ)	東ヨーロッパ時間
Europe/Istanbul (ヨーロッパ/イスタンブール)	東ヨーロッパ時間
Europe/Kaliningrad (ヨーロッパ/カリーニングラード)	東ヨーロッパ時間
Europe/Kiev (ヨーロッパ/キエフ)	東ヨーロッパ時間
Europe/Lisbon (ヨーロッパ/リスボン)	西ヨーロッパ時間
Europe/Ljubljana (ヨーロッパ/リュブリャナ)	中央ヨーロッパ時間
Europe/London (ヨーロッパ/ロンドン)	グリニッジ標準時
Europe/Luxembourg (ヨーロッパ/ルクセンブルク)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Madrid (ヨーロッパ/マドリッド)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Malta (ヨーロッパ/マルタ)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Minsk (ヨーロッパ/ミンスク)	東ヨーロッパ時間
Europe/Monaco (ヨーロッパ/モナコ)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Moscow (ヨーロッパ/モスクワ)	モスクワ標準時
Europe/Nicosia (ヨーロッパ/ニコシア)	東ヨーロッパ時間
Europe/Oslo (ヨーロッパ/オスロ)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Paris (ヨーロッパ/パリ)	中央ヨーロッパ時間

ID 名	表示名
Europe/Prague (ヨーロッパ/プラハ)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Riga (ヨーロッパ/リガ)	東ヨーロッパ時間
Europe/Rome (ヨーロッパ/ローマ)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Samara (ヨーロッパ/サマラ)	サマラ時間
Europe/San_Marino (ヨーロッパ/サンマリノ)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Sarajevo (ヨーロッパ/サラエボ)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Simferopol (ヨーロッパ/シムフェロポリ)	東ヨーロッパ時間
Europe/Skopje (ヨーロッパ/スコピエ)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Sofia (ヨーロッパ/ソフィア)	東ヨーロッパ時間
Europe/Stockholm (ヨーロッパ/ストックホルム)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Tallinn (ヨーロッパ/タリン)	東ヨーロッパ時間
Europe/Tirane (ヨーロッパ/ティラネ)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Tiraspol (ヨーロッパ/ティラスポリ)	東ヨーロッパ時間
Europe/Uzhgorod (ヨーロッパ/ウジゴロド)	東ヨーロッパ時間
Europe/Vaduz (ヨーロッパ/ヴァドゥーツ)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Vatican (ヨーロッパ/バチカン)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Vienna (ヨーロッパ/ウィーン)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Vilnius (ヨーロッパ/ビリニュス)	東ヨーロッパ時間
Europe/Warsaw (ヨーロッパ/ワルシャワ)	中央ヨーロッパ時間

ID 名	表示名
Europe/Zagreb (ヨーロッパ/ザグレブ)	中央ヨーロッパ時間
Europe/Zaporozhye (ヨーロッパ/ザポロージェ)	東ヨーロッパ時間
Europe/Zurich (ヨーロッパ/チューリッヒ)	中央ヨーロッパ時間
GB	グリニッジ標準時
GB-Eire (GB-アイルランド)	グリニッジ標準時
GMT	グリニッジ標準時
GMT0	GMT+00:00
Greenwich (グリニッジ)	グリニッジ標準時
Hongkong (香港)	香港時間
HST	ハワイ標準時
Iceland (アイスランド)	グリニッジ標準時
IET	東部標準時
Indian/Antananarivo (インド洋/アンタナナリボ)	東アフリカ時間
Indian/Chagos (インド洋/チャゴス諸島)	インド洋地域時間
Indian/Christmas (インド洋/クリスマス島)	クリスマス島時間
Indian/Cocos (インド洋/ココス諸島)	ココス諸島時間
Indian/Comoro (インド洋/コモロ)	東アフリカ時間
Indian/Kerguelen (インド洋/ケルゲレン諸島)	仏領南方および南極地域時間
Indian/Mahe (インド洋/マヘー島)	セーシェル時間
Indian/Maldives (インド洋/モルディブ)	モルディブ時間
Indian/Mauritius (インド洋/モーリシャス)	モーリシャス時間

ID 名	表示名
Indian/Mayotte (インド洋/マヨット島)	東アフリカ時間
Indian/Reunion (インド洋/レユニオン島)	レユニオン島時間
Iran (イラン)	イラン時間
Israel (イスラエル)	イスラエル標準時
IST	インド標準時
Jamaica (ジャマイカ)	東部標準時
Japan (日本)	日本標準時
JST	日本標準時
Kwajalein (クアジャリン)	マーシャル諸島時間
Libya (リビア)	東ヨーロッパ時間
MET	中央ヨーロッパ時間
Mexico/BajaNorte (メキシコ/バハノルテ)	太平洋標準時
Mexico/BajaSur (メキシコ/バハスル)	山地標準時
Mexico/General (メキシコ/中部)	中部標準時
Mideast/Riyadh87	GMT+03:07
Mideast/Riyadh88	GMT+03:07
Mideast/Riyadh89	GMT+03:07
MIT	西サモア時間
MST	山地標準時 (米国)
MST7MDT	山地標準時 (米国)
Navajo (ナヴァホ)	山地標準時 (米国)
NET	アルメニア時間
NST	ニュージーランド標準時
NZ	ニュージーランド標準時

ID 名	表示名
NZ-CHAT	チャタム諸島標準時
Pacific/Apia (太平洋/アピア)	西サモア時間
Pacific/Auckland (太平洋/オークランド)	ニュージーランド標準時
Pacific/Chatham (太平洋/チャタム諸島)	チャタム諸島標準時
Pacific/Easter (太平洋/イースター島)	イースター島時間
Pacific/Efate (太平洋/エファエテ島)	バヌアツ時間
Pacific/Enderbury (太平洋/エンダーベリー島)	フェニックス諸島時間
Pacific/Fakaofu (太平洋/フオカオフオ島)	トケラウ諸島時間
Pacific/Fiji (太平洋/フィジー)	フィジー時間
Pacific/Funafuti (太平洋/フナフティ島)	ツバル時間
Pacific/Galapagos (太平洋/ガラパゴス諸島)	ガラパゴス諸島時間
Pacific/Gambier (太平洋/ガンビア諸島)	ガンビア諸島時間
Pacific/Guadalcanal (太平洋/ガダルカナル島)	ソロモン諸島時間
Pacific/Guam (太平洋/グアム島)	チャモロ標準時
Pacific/Honolulu (太平洋/ホノルル)	ハワイ標準時
Pacific/Johnston (太平洋/ジョンストン島)	ハワイ標準時
Pacific/Kiritimati (太平洋/キリティマティ島)	ライン諸島時間
Pacific/Kosrae (太平洋/コスラエ島)	コスラエ島時間

ID 名	表示名
Pacific/Kwajalein (太平洋/クアジャリン)	マーシャル諸島時間
Pacific/Majuro (太平洋/マジュロ)	マーシャル諸島時間
Pacific/Marquesas (太平洋/マルケサス諸島)	マルケサス諸島時間
Pacific/Midway (太平洋/ミッドウェー諸島)	サモア標準時
Pacific/Nauru (太平洋/ナウル)	ナウル時間
Pacific/Niue (太平洋/ニウエ島)	ニウエ島時間
Pacific/Norfolk (太平洋/ノーフォーク島)	ノーフォーク島時間
Pacific/Noumea (太平洋/ヌメア)	ニューカレドニア時間
Pacific/Pago_Pago (太平洋/パゴパゴ)	サモア標準時
Pacific/Palau (太平洋/パラウ諸島)	パラウ諸島時間
Pacific/Pitcairn (太平洋/ピトケルン島)	ピトケルン島標準時
Pacific/Ponape (太平洋/ポナペ島)	ポナペ島時間
Pacific/Port_Moresby (太平洋/ポートモレスビー)	パプアニューギニア時間
Pacific/Rarotonga (太平洋/ラロトンガ島)	クック諸島時間
Pacific/Saipan (太平洋/サイパン島)	チャモロ標準時
Pacific/Samoa (太平洋/サモア)	サモア標準時
Pacific/Tahiti (太平洋/タヒチ島)	タヒチ島時間
Pacific/Tarawa (太平洋/タラワ島)	ギルバート諸島時間
Pacific/Tongatapu (太平洋/トンガタブ)	トンガ時間
Pacific/Truk (太平洋/トラック諸島)	トラック諸島時間
Pacific/Wake (太平洋/ウェーク島)	ウェーク島時間

ID 名	表示名
Pacific/Wallis (太平洋/ワリーエフトゥーナ諸島)	ワリーエフトゥーナ諸島時間
Pacific/Yap (太平洋/ヤップ)	ヤップ時間
PLT	パキスタン時間
PNT	山地標準時
Poland (ポーランド)	中央ヨーロッパ時間
Portugal (ポルトガル)	西ヨーロッパ時間
PRC	中国標準時
PRT	大西洋標準時
PST	太平洋標準時 (米国)
PST8PDT	太平洋標準時
ROK	韓国標準時
Singapore (シンガポール)	シンガポール時間
SST	ソロモン諸島時間
SystemV/AST4	大西洋標準時
SystemV/AST4ADT	大西洋標準時
SystemV/CST6	中部標準時
SystemV/CST6CDT	中部標準時
SystemV/EST5	東部標準時
SystemV/EST5EDT	東部標準時
SystemV/HST1	ハワイ標準時
SystemV/MST7	山地標準時
SystemV/MST7MDT	山地標準時
SystemV/PST8	ピトケルン島標準時
SystemV/PST8PDT	太平洋標準時
SystemV/YST9	ガンビア諸島時間

ID 名	表示名
SystemV/YST9YDT	アラスカ標準時
Turkey (トルコ)	東ヨーロッパ時間
UCT	協定世界時
ユニバーサル設定 (Universal Settings)	協定世界時
US/Alaska (米国/アラスカ)	アラスカ標準時
US/Aleutian (米国/アリューシャン)	ハワイ-アリューシャン標準時
US/Arizona (米国/アリゾナ)	山地標準時
US/Central (米国/中部)	中部標準時
US/Eastern (米国/東部)	東部標準時
US/East-Indiana (米国/インディアナ/東部)	東部標準時
US/Hawaii (米国/ハワイ)	ハワイ標準時
US/Indiana-Starke (米国/インディアナ/スターク)	東部標準時
US/Michigan (米国/ミシガン)	東部標準時
US/Mountain (米国/山岳部)	山地標準時
US/Pacific (米国/太平洋沿岸部)	太平洋標準時
US/Pacific-New (米国/太平洋沿岸部)	太平洋標準時
US/Samoa (米国/サモア)	サモア標準時
UTC	協定世界時
VST	インドシナ時間
WET	西ヨーロッパ時間
W-SU	モスクワ標準時
Zulu (ズールー)	協定世界時

代替サーバーを使用したリストア

この章では以下の項目について説明しています。

- [代替サーバーを使用したリストアについて](#)
- [代替サーバーを使用したリストアをサポートする構成について](#)
- [代替サーバーを使用したリストアの実行について](#)

代替サーバーを使用したリストアについて

この項では、バックアップの書き込みに使用されるサーバー以外のサーバーを使用したファイルのリストア方法について説明します。この形式のリストア操作を、代替サーバーを使用したリストアまたはサーバーに依存しないリストアと呼びます。このリストアでは、プライマリサーバークラスタおよびメディアサーバークラスタに存在するリストア用のデータに簡単にアクセスでき、より高度なフェールオーバーおよびディザスタリカバリ機能が提供されます。

NetBackup のアーキテクチャでは、複数のサーバー上にストレージデバイスを配置できます (個別のストレージデバイスか共有ロボットのいずれか)。プライマリサーバー上の **NetBackup** イメージカタログには、各バックアップが書き込まれたサーバー (プライマリサーバーまたはメディアサーバー) を定義するエントリが含まれます。バックアップメディア固有の情報が、(各バックアップの属性ファイルの) プライマリサーバーイメージカタログに格納されます。この情報は、プライマリサーバー上に配置される **NetBackup** データベースにも格納されます。

別のサーバー上のデバイスを介したデータのリストアは、他のリストアより複雑です。バックアップのリストアは、この項で説明する方法で行ってください。これらの方法では、バックアップイメージを期限切れにしたりインポートする必要はありませんが、そうの方が効果的な場合もあります。

この項の情報は、バックアップコピーからリストアする場合にも関連します。バックアップのコピーを複数作成した場合、プライマリコピー以外の特定のバックアップコピーからリストアを行うことができます。これを行うには、bprestore コマンドを使用します。

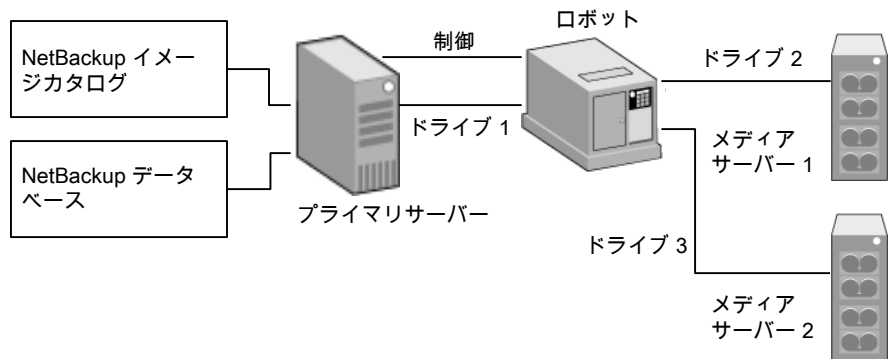
詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』を参照してください。

代替サーバーを使用したリストアをサポートする構成について

図 34-1 と 図 34-2 に、NetBackup が代替サーバーのリストアをサポートする構成を示します。

代替サーバーを使用したリストアを行うすべての方法で、リストアに使用するサーバーが、元のバックアップを行ったサーバーと同じクラスタに存在する必要があります。また、このサーバーは、同じ NetBackup データベースを共有している必要もあります。

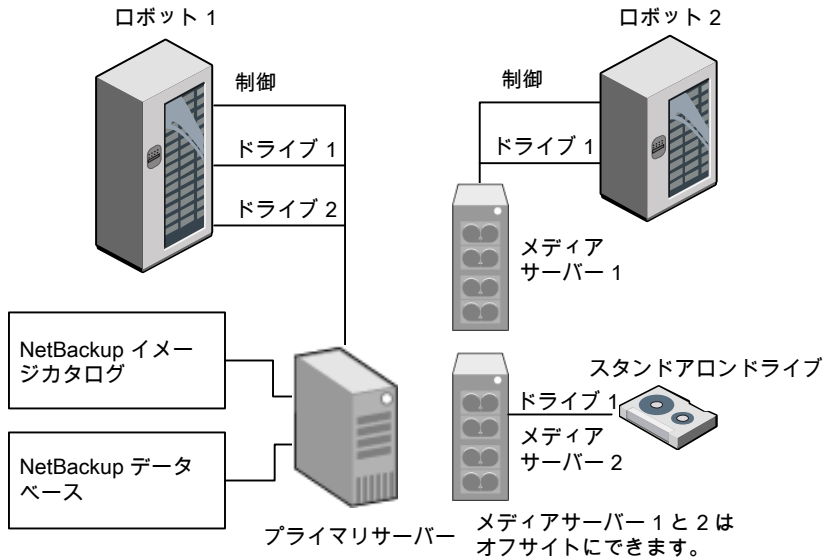
図 34-1 ロボットの周辺機器を共有する NetBackup サーバー



NetBackup サーバーがロボットの周辺機器を共有する場合、次の点を前提としています。

- 1 つの共有 NetBackup データベースが、NetBackup プライマリサーバー上に存在します。
- NetBackup プライマリサーバーは、リストア時に利用可能です。
- ロボット制御は、リストア時に利用可能な NetBackup サーバー上に存在します。

図 34-2 個別の非共有周辺機器を使用する NetBackup サーバー



NetBackup が共有されない個別のロボットの周辺機器を使用する場合、次の点を前提としています。

- メディアには、利用可能な NetBackup サーバーを介して物理的にアクセスできます。NetBackup データベースは、この移動を反映するように更新されます。
- 1 つの共有 NetBackup データベースが、NetBackup プライマリサーバー上に存在します。
- NetBackup プライマリサーバーは、リストア時に利用可能です。
- ロボット制御 (適用可能な場合) は、リストア時に利用可能な NetBackup サーバー上に存在します。

代替サーバーを使用したリストアの実行について

NetBackup 管理者が、代替サーバーを使用したリストアを行うために利用可能な方法は、構成および状況によって異なります。管理者は、次の 1 つ以上の方法を使用できます。

- NetBackup カタログの修正。
p.1153 の「[NetBackup カタログの変更について](#)」を参照してください。
- リストアでの元のサーバーの上書き。
p.1154 の「[リストアでの元のサーバーの上書き](#)」を参照してください。

- 代替サーバーへの自動フェールオーバーの有効化
p.1156 の「代替サーバーへの自動フェールオーバーの有効化について」を参照してください。

NetBackup カタログの変更について

NetBackup カタログを修正して代替サーバーを使用したリストアを実行するには、NetBackup カタログの内容を変更します。この方法は、サーバーの再割り当てが永続的である場合だけ使用します。

次に、この方法を使用する状況の例を示します。

- メディアを遠隔地の保管場所に移動し、そこにメディアサーバーが存在する場合。
- ロボットが、あるサーバーから別のサーバーに移動された場合。
- 2 つ以上のサーバーがロボットを共有し、それぞれに接続されたドライブがあり、いずれかのサーバーが切り離されるかあるいは別のものと交換される予定にある場合。
- 2 つ以上のサーバーにそれぞれ固有のロボットが存在し、一方のサーバーのロボットでは、今後バックアップで必要とされるメディアの容量が不足しているが、別のサーバーのロボットには複数の空のスロットが存在している場合。

使用される実際の手順は、元のサーバーがまだ利用可能かどうかによって異なります。

メディアを書き込んだサーバーが利用可能である場合の NetBackup カタログの変更

メディアを書き込んだサーバーが利用可能である場合にカタログを変更するには、次の手順を実行します。

メディアを書き込んだサーバーが利用可能である場合に **NetBackup** カタログを変更する方法

- 1 必要に応じて、物理的にメディアを移動します。
- 2 Media Manager 管理ユーティリティの[ボリュームの移動 (Move Volumes)]オプションを使用して、NetBackup データベースを更新します。
- 3 プライマリサーバー上の NetBackup イメージカタログを更新します。
- 4 元の NetBackup サーバー (oldserver) と宛先 NetBackup サーバー (newserver) の両方に存在する NetBackup メディアカタログを更新します。

任意の NetBackup サーバーの 1 つから、次のコマンドを実行します。

admincmd コマンドを、改行せずに 1 行で入力します。

- Windows 版 NetBackup サーバーの場合 (管理者で)

```
cd install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd
bpmedia.exe -movedb -m media_id
-newserver hostname -oldserver hostname
```

■ UNIX 版 NetBackup サーバーの場合 (root ユーザーで)

```
cd /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd
bpmedia -movedb -m media_id -newserver hostname
-oldserver hostname
```

メディアを書き込んだサーバーが利用できない場合の NetBackup カタログの変更

メディアを書き込んだサーバーが利用できない場合にカタログを変更するには、次の手順を実行します。

メディアを書き込んだサーバーが利用できない場合に NetBackup カタログを変更する方法

- 1 必要に応じて、物理的にメディアを移動します。
- 2 ボリュームの移動オプションを使用して NetBackup データベースを更新します。
- 3 プライマリサーバー上の NetBackup イメージカタログだけを更新します。

NetBackup プライマリサーバーから次のコマンドを使用します。

admincmd コマンドを、改行せずに 1 行で入力します。

■ Windows 版 NetBackup サーバーの場合 (管理者で)

```
cd install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd
bpimage.exe -id media_id -newserver hostname
-oldserver hostname
```

■ UNIX 版 NetBackup サーバーの場合 (root ユーザーで)

```
cd /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd
bpimage -id media_id -newserver hostname
-oldserver hostname
```

リストアでの元のサーバーの上書き

NetBackup では、ファイルのバックアップが行われた場所にかかわらず、管理者が特定のサーバーへ強制的にリストアを行うことができます。たとえば、サーバー A 上でファイルのバックアップが行われた場合、リストア要求で強制的にサーバー B を使用させることができます。

次に、この方法を使用する状況の例を示します。

- 2 つ以上のサーバーがロボットを共有しつつ、さらにこのサーバーにドライブが接続されていて、リストアは、サーバーの 1 つが一時的に利用できないか、バックアップ処理中でビジー状態である場合に要求される。
- サーバーが NetBackup の構成から削除され、利用できない。

リストアで元のサーバーを上書きするには、次の手順を使用します。

リストアで元のサーバーを上書きする方法

- 1 NetBackup Web UI を開きます。
- 2 左側で、[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)] の順に選択します。上書きするサーバーの種類に応じて、プライマリサーバーまたはメディアサーバーを選択します。次に、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)] または [メディアサーバーの編集 (Edit media server)] を選択します。

p.112 の「[\[一般的なサーバー \(General server\)\] プロパティ](#)」を参照してください。
- 3 [一般的なサーバー (General server)] を選択します。
- 4 [メディアホストの上書き (Media host override)] に移動し、[追加 (Add)] ボタンを選択します。元のバックアップサーバーとリストアサーバーのエントリを追加し、[追加 (Add)] を選択します。
- 5 [保存 (Save)] を選択します。

リストアで元のサーバーの手動上書き

リストアで元のサーバーを手動で上書きするには、次の手順を実行します。

リストアで元のサーバーを手動で上書きする方法

- 1 必要に応じて、物理的にメディアを移動し、Enterprise Media Manager データベースを更新して移動を反映します。
- 2 プライマリサーバー上の NetBackup 構成を次のように変更します。
 - NetBackup Web UI を使用する場合:
左ペインで、[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)] の順に選択します。プライマリサーバーを選択し、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)] を選択します。[一般的なサーバー (General Server)] ホストプロパティを開きます。
[メディアホストの上書き (Media host override)] に移動し、[追加 (Add)] を選択します。元のバックアップサーバーとリストアサーバーのエントリを追加し、[追加 (Add)] を選択します。次に、[保存 (Save)] を選択します。
 - UNIX 版 NetBackup サーバーの bp.conf ファイルを変更する場合
root として、次のエントリを /usr/opensv/netbackup/bp.conf ファイルに追加します。

```
FORCE_RESTORE_MEDIA_SERVER = fromhost tohost
```

ここで、**fromhost** は、元のバックアップを書き込んだサーバーで、**tohost** はリストアに使用するサーバーです。

今後のリストアのために元の構成に戻すには、この手順で行われた変更を元に戻します。

- 3 プライマリサーバー上で、**NetBackup Request** デーモンを停止して、再起動します。

優先は、元のサーバー上のすべてのストレージユニットに適用されます。**fromhost** 上のすべてのストレージユニットのリストアの宛先は、**tohost** となります。

代替サーバーへの自動フェールオーバーの有効化について

NetBackup では、元のサーバーに一時的にアクセスできない場合、管理者が代替サーバーへのリストアの自動フェールオーバーを構成できます。一度構成すると、この方法では管理者による操作は必要ありません。

p.161 の「[\[リストアのフェールオーバー \(Restore failover\)\] プロパティ](#)」を参照してください。

次に、この方法を使用する状況の例を示します。

- 2 つ以上のサーバーがロボットを共有しつつ、さらにこのサーバーにドライブが接続されていて、
リストアが要求されたときに、サーバーの 1 つが一時的にアクセス不能である。
- 複数のサーバーに同じ形式のスタンドアロンドライブがある。
リストアが要求されたときに、サーバーの 1 つが一時的にアクセス不能である。

これらの場合において、アクセス不能とは、プライマリサーバー上の `bprd` と元のサーバー上の `bptm` (`bpcd` を経由) の接続が失敗したことを意味します。

失敗の原因として、次のことが考えられます。

- 元のサーバーが停止している。
- 元のサーバーは稼働しているが、サーバー上の `bpcd` が応答しない。(たとえば、接続が拒否されている場合やアクセスが許可されていない場合。)
- 元のサーバーが稼働し、`bpcd` は正常であるが、`bptm` に問題が存在する。(たとえば、`bptm` で必要なテープが検出されない場合)。

メモ: フェールオーバーでは、**NetBackup** 構成に一覧表示されているフェールオーバーホストだけが使用されます。デフォルトではリストが空であるため、**NetBackup** による自動フェールオーバーが実行されません。

代替サーバーへのフェールオーバー

代替サーバーへの自動フェールオーバーを有効にするには、次の手順を実行します。

代替メディアサーバーへの自動フェールオーバーを有効にする方法

- 1 プライマリサーバー上の NetBackup 構成を次のように変更します。
 - NetBackup Web UI を使用する場合:
左ペインで、[ホスト (Host)]、[ホストプロパティ (Host properties)] の順に選択します。プライマリサーバーを選択し、[プライマリサーバーの編集 (Edit primary server)] を選択します。[リストアのフェールオーバー (Restore failover)] ホストプロパティを開きます。
[追加 (Add)] を選択します。メディアサーバーとフェールオーバーリストアサーバーのエントリを追加し、[追加 (Add)] を選択します。次に、[保存 (Save)] を選択します。
 - UNIX 版 NetBackup サーバーの bp.conf ファイルを変更する場合
root として、次のエントリを /usr/openv/netbackup/bp.conf ファイルに追加します。

```
FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVERS =  
failed_host host1 host2 ... hostN
```

ここで示された文字列については、次のとおりです。

failed_host は、操作できないサーバーです。

host1 ... hostN は、フェールオーバー機能を提供するサーバーです。

任意のサーバーに対して自動フェールオーバーが必要な場合、NetBackup によって、関連する FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVERS のリストが検索されます。

NetBackup はリストを左から右に検索し、リストアの実行に適した最初のサーバーを使用します。

FAILOVER_RESTORE_MEDIA_SERVERS エントリは複数追加することができ、各エントリには複数のサーバーを指定できます。ただし、**failed_host** として NetBackup サーバーを指定できるのは、1 つのエントリだけです。

- 2 プライマリサーバー上で、NetBackup Request デーモンを停止して、再起動します。

代替サーバーを使用したリストアにおけるメディアの期限切れおよびインポート

代替サーバーを使用したリストア機能を使用する場合でも、メディアを期限切れにしてインポートすることが必要な場合があります。

メディアスパングループの識別に関しては、代替サーバーを使用したリストア操作では、メディアにまたがったバックアップイメージが存在するメディア ID を含めることができます。

メディアにまたがったイメージのフラグメントを含むメディア ID の識別が必要な場合があります。関連するメディアのグループを、メディアスパングループと呼びます。

Windows の場合: 特定のメディアスパングループのメディアを識別するには、NetBackup プライマリサーバー上で、コマンドプロンプトから管理者で次のコマンドを実行します。

```
cd install_path¥NetBackup¥bin  
bpimmedia.exe -spangroups -U -mediaid media_id
```

UNIX の場合: 特定のメディアスパングループのメディアを識別するには、NetBackup プライマリサーバー上で、**root** ユーザーで次のコマンドを実行します。

```
cd /usr/opensv/netbackup/bin/admincmd  
bpimmedia -spangroups -U -mediaid media_id
```

すべてのスパングループのすべてのメディアを表示するには、`-mediaid media_id` を指定せずにコマンドを実行します。

クライアントのバックアップとリストアの管理

この章では以下の項目について説明しています。

- [サーバー主導リストア](#)
- [クライアントによるリダイレクトリストアについて](#)
- [アクセス制御リスト \(ACL\) があるファイルのリストアについて](#)
- [UNIX でのリストア中のファイルの元の `atime` の設定について](#)
- [システム状態のリストア](#)
- [VxFS ファイルシステムの圧縮ファイルのバックアップとリストアについて](#)
- [ReFS のバックアップとリストアについて](#)

サーバー主導リストア

管理者の役割または同様の権限を持つ **NetBackup** ユーザーは、**NetBackup** プライマリサーバーからリストアを実行できます。この形式のリストアは、次のポリシー形式の **Web UI** で利用可能です。

BigData	Lotus-Notes	NBU-Catalog
Cloud-Object-Store	MongoDB Ops Manager	NDMP
Datastore	MS-Exchange-Server	Nutanix-AHV
FlashBackup	MS-SharePoint	Standard
FlashBackup-Windows	MS-Windows	Universal-Share

Hyper-V	MSDP-Object-Store	VMware (エージェントベースのリカバリ)
Hypervisor – Nutanix	NAS-Data-Protection	
BigData	Hypervisor – Nutanix	NBU-Catalog
Cloud-Object-Store	Lotus-Notes	NDMP
Datastore		Nutanix-AHV
FlashBackup	MS-Windows	Standard
FlashBackup-Windows	MSDP-Object-Store	Universal-Share
Hyper-V	NAS-Data-Protection	VMware (エージェントベースのリカバリ)

その他のリストア形式は、特定のポリシー形式に利用可能です。

リストア形式	サポート対象のポリシー形式
アーカイブバックアップ	MS-Windows、Standard
最適化バックアップ	MS-Windows
指定した時点へのロールバック	MS-Windows、NAS-Data-Protection、Standard
raw パーティションのバックアップ	FlashBackup、FlashBackup-Windows、Standard
True Image Backup	MS-Windows、NAS-Data-Protection、NBU-Catalog、Standard
仮想ディスクリストア	VMware
仮想マシンのバックアップ	Hyper-V、Hypervisor-Nutanix

クライアントに対するサーバー主導リストアの回避 (バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェース)

NetBackup クライアントのデフォルトの構成では、プライマリサーバーの NetBackup 管理者がリストア先を任意のクライアントに指定できます。

クライアントに対するサーバー主導リストアを防止するには、次の手順を実行します。

- **Windows** クライアントの場合:
[バックアップ、アーカイブおよびリストア (Backup, Archive, and Restore)]インターフェースを開きます。

[ファイル (File)]>[NetBackup クライアントのプロパティ (Client Properties)]>[全般 (General)]を選択し、[サーバー主導リストアを許可する (Allow server-directed restores)]チェックボックスのチェックをはずします。

- UNIX クライアントの場合:

クライアントの次のファイルに DISALLOW_SERVER_FILE_WRITES を追加します。

```
/usr/opensv/netbackup/bp.conf
```

メモ: UNIX システム上では、UID または GID が長すぎると、リダイレクトリストアによって UID または GID が不適切に設定される場合があります。あるプラットフォームから別のプラットフォームにリストアされたファイルの UID および GID が、宛先システムよりもソースシステムの方がより多くのビットを使用して表される場合があります。対象の UID または GID の名前が両方のシステム間で一致していない場合、元の UID または GID が宛先システムでは無効である可能性があります。この場合、UID または GID は、リストアを実行するユーザーの UID または GID と置き換えられます。

UNIX での進捗ログの生成

UNIX の場合: 要求元サーバーの bp.conf ファイルにリストアを実行するサーバーのエントリが含まれていなければ、進捗ログは生成されません。そのエントリがない場合、リストアを実行するサーバーは、要求元サーバーにアクセスしてログファイルを書き込むことができません(進捗ログは、クライアントのバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースの[タスクの進捗 (Task Progress)]タブのエントリです)。

次の解決方法を検討してください。

- 進捗ログを生成するには、サーバーリストに要求元サーバーを追加します。
要求元サーバーにログオンします。NetBackup Web UI で、プライマリサーバーのホストプロパティを開きます。[サーバー (Servers)]を選択します。サーバーリストにリストアを実行するサーバーを追加します。
- リストアを実行するサーバーにログオンします。アクティビティモニターに移動して、リストア操作が正常に実行されたかどうかを確認します。

ソフトリンクとハードリンクを含む UNIX バックアップをリストアするには、クライアントのバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースを UNIX マシンから実行します。

クライアントによるリダイレクトリストアについて

クライアントのバックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースには、他のクライアントによりバックアップされたファイルをクライアントにリストアするためのオプションが含まれています。この操作を、リダイレクトリストアと呼びます。

次のバックアップサービス API (XBSA) エージェントでは、異なるバージョンのエージェントへのリダイレクトリストアはサポートされません。

- MariaDB
- MySQL
- PostgreSQL

root 以外のサービスユーザーアカウントを使用している場合

に、/usr/opensv/netbackup/db/altnames ディレクトリにファイルを追加する際は、そのユーザーに対して特定のアクセスを許可する必要があります。サービスユーザーアカウントにはこれらのファイルへのフルアクセス権が必要で、これは所有権またはグループと権限を使用して行います。たとえば、サービスユーザーが svcname で、そのグループが svrgp の場合、ファイルの権限は 400 になります。ファイル所有者が別のユーザーとグループに対するものである場合、ファイルの権限でサービスユーザーへのアクセスが許可されている必要があります。たとえば、777 です。Windows 環境では、同等の権限設定を使用する必要があります。

リストアの制限について

NetBackup では、デフォルトで、ファイルのバックアップを行ったクライアントだけ、バックアップしたファイルのリストアが許可されます。NetBackup では、要求元クライアントのクライアント名と NetBackup サーバーへの接続に使用されたピアネームとが一致することが確認されます。

クライアントが IP アドレスを共有しないかぎり、ピアネームはクライアントのホスト名と同じです。クライアントは、ゲートウェイとトークンリングの組み合わせまたは複数の接続の使用によって IP アドレスを共有できます。クライアントがゲートウェイを介して接続する場合、ゲートウェイは自身のピアネームを使用して接続できます。

NetBackup クライアント名は、通常、client1.null.com のような長い形式ではなく、client1 のようなクライアントのホストの短縮名です。

クライアント名は、次の場所で確認できます。

[ファイル (File)]、[バックアップ、アーカイブおよびリストア (Backup, Archive, and Restore)] インターフェースを開きます。[ファイル (File)]、[NetBackup マシンおよびポリシー形式の指定 (Specify NetBackup Machines and Policy Type)] の順に選択します。[リストアのソースクライアント (Source client for restores)] で選択されたクライアント名が、リストアするバックアップのソースになります。

すべてのクライアントによるリダイレクトリストアの実行の許可

NetBackup 管理者は、クライアントによるリダイレクトリストアの実行を許可できます。これによって、すべてのクライアントが、他のクライアントに属するバックアップをリストアできるようになります。

これを行うには、最初に `altnames` ディレクトリをクライアントのバックアップポリシーが存在する **NetBackup** プライマリサーバー上で作成します。ディレクトリに空の `No.Restrictions` ファイルを配置します。

■ **Windows** の場合:

```
install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥No.Restrictions
```

`altnames` ディレクトリ内のファイルには、接尾辞を追加しないでください。

■ **UNIX** の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/db/altnames/No.Restrictions
```

要求元クライアントの **NetBackup** クライアント名の設定は、バックアップが作成されたクライアント名と一致する必要があります。要求元のクライアントのピアネームは、**NetBackup** クライアント名の設定と一致していなくても構いません。

メモ: `altnames` ディレクトリを作成すると、セキュリティに関する問題が発生する可能性があります。そのため、このディレクトリは限られた状況でのみ使用してください。他のクライアントのファイルをリストアすることを許可されているユーザーが、バックアップ内に存在するファイルをローカルに作成する権限も所有している場合があります。

注意: セキュリティ上の理由から、`No.Restrictions` ファイルの方法は使用しないことを強くお勧めします。この方法を使用すると、セキュリティ上の脅威となる可能性がある他のクライアントのバックアップを任意のクライアントでリストアできるようになります。

メモ: `No.Restrictions` ファイルの方法を使用すると、デフォルトで、**NetBackup Web UI** で通知が 7 日ごとに生成されます。`NOTIFY_SNOOZE_PERIOD_IN_DAYS` オプションを使用して、この通知の頻度をデフォルト値から 1 から 90 までの任意の値に変更します。

p.295 の「**NetBackup** サーバーの `NOTIFY_SNOOZE_PERIOD_IN_DAYS` オプション」を参照してください。

代替クライアントによるリストアの代替方法について詳しくは、次のトピックを参照してください。

p.1163 の「**1 つのクライアントによるリダイレクトリストアの実行の許可**」を参照してください。

p.1164 の「**特定クライアントのファイルに対するリダイレクトリストアの許可**」を参照してください。

1 つのクライアントによるリダイレクトリストアの実行の許可

NetBackup 管理者は、他のクライアントに属するバックアップのリストアを 1 つのクライアントに許可できます。

これを行うには、他のクライアントをバックアップしたポリシーが存在する NetBackup プライマリサーバー上で `altnames` ディレクトリを作成します。`peername` がリストア権限を所有するクライアントである `altnames` ディレクトリの内部に、空の `peername` ファイルを配置します。

- Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥peername
```

- UNIX の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/db/altnames/peername
```

この場合、要求元クライアント (`peername`) は、他のクライアントによってバックアップされたファイルにアクセスできます。`peername` の NetBackup クライアント名の設定が、バックアップを行ったクライアント名と一致する必要があります。

特定クライアントのファイルに対するリダイレクトリストアの許可

NetBackup 管理者は、別の特定のクライアントに属するバックアップのリストアを 1 つのクライアントに許可できます。

これを行うには、要求元クライアントの NetBackup プライマリサーバー上で `altnames` ディレクトリを次の場所に作成します。

- Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥peername
```

- UNIX の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/db/altnames/peername
```

それから、`peername` がリストア権限を所有するクライアントであるディレクトリの内部に `peername` ファイルを作成します。`peername` ファイルに、要求元クライアントでリストアするファイルが存在するクライアントの名前を追加します。

次の両方の条件を満たす場合に、要求元クライアントは他のクライアントによってバックアップされたファイルをリストアできます。

- 他のクライアント名が、`peername` ファイルに示されている。
- 要求元クライアントの NetBackup クライアント名が、リストアするファイルが存在するクライアント名と一致するように変更されている。

リダイレクトリストアの例

この項では、他のクライアントによってバックアップされたファイルのリストアをクライアントに許可するための構成例について説明します。これらの方法は、クライアントがゲートウェイを介して接続する場合、または複数のイーサネット接続が存在する場合に有効です。

いずれの場合も、要求元のクライアントがプライマリサーバーのイメージデータベースのディレクトリにアクセスできるか、要求元のクライアントが既存の **NetBackup** ポリシーのメンバーになる必要があります。

- **Windows** の場合: `install_path¥NetBackup¥db¥images¥client_name`
- **UNIX** の場合: `/usr/opensv/netbackup/db/images/client_name`

メモ: すべてのコンピュータ上のすべてのファイルシステムが同じ機能をサポートしているわけではありません。ある種類のファイルシステムから他の種類のファイルシステムへファイルをリストアする場合、問題が発生する可能性があります。たとえば、**SCO** コンピュータ上の **S51K** ファイルシステムは、シンボリックリンクや、15 文字以上の名前をサポートしていません。リストア元のコンピュータの機能の一部をサポートしていないコンピュータへファイルをリストアする必要がある場合があります。この場合、一部のファイルがリカバリされない可能性があります。

次の例では、次の条件を想定します。

- **client1** は、リストアを要求するクライアントです。
- **client2** は、要求元のクライアントがリストアを行うバックアップを作成したクライアントです。
- **Windows** の場合、`install_path` は、**NetBackup** ソフトウェアをインストールしたパスです。デフォルトでは、このパスは `C:¥Program Files¥Cohesity NetBackup` です。

メモ: **Windows** の場合: 次の手順を実行するには、必要な権限を所有している必要があります。

UNIX の場合、**NetBackup** サーバー上で実行するすべての手順は、**root** ユーザーで行う必要があります。また、クライアント上での変更も、**root** ユーザーで行う必要があります。

リダイレクトされたクライアントをリストアする例

client2 でバックアップされたファイルを **client1** へリストアする必要があると想定します。**client1** および **client2** の名前は、クライアント上の **NetBackup** クライアント名の設定で指定される名前です。

Windows の場合:

- 1 **NetBackup** サーバーにログオンします。
- 2 **client2** を次のファイルに追加し、次のいずれかを実行します。

- `install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥client1` を編集し、***client2*** の名前を追加します。
- 次に示す空のファイルを作成します。
`install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥No.Restrictions`

UNIX の場合:

- 1 NetBackup サーバーに **root** ユーザーとしてログオンします。
- 2 次のいずれかの操作を実行します。
 - `/usr/opensv/netbackup/db/altnames/client1` を編集して、***client2*** の名前を含めます。または
 - 次のファイルに対して `touch` コマンドを実行します。
`/usr/opensv/netbackup/db/altnames/No.Restrictions`

メモ: `No.Restrictions` ファイルを作成すると、すべてのクライアントが ***client2*** のファイルをリストアできるようになります。

- 3 ***client1*** にログオンし、NetBackup クライアント名を ***client2*** に変更します。
- 4 ファイルのリストアを行います。
- 5 サーバーおよびクライアントに対して行われた変更を元に戻します。

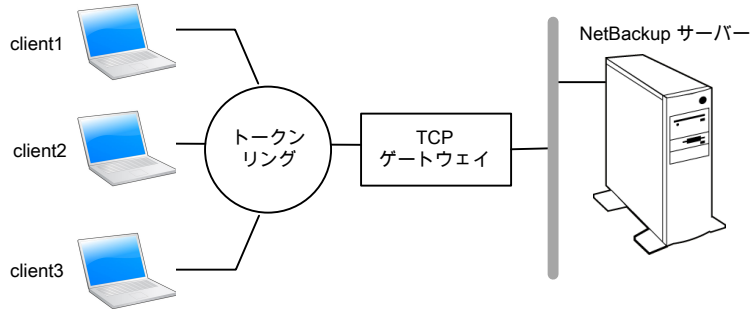
altnames ファイルを使用したクライアントによるリダイレクトリストアの例

この例では、NetBackup サーバーへ接続するときに自身のホスト名を使用しないクライアントに対して、`altnames` ファイルによってリストア機能を提供する方法について説明します。

デフォルトでは、要求元クライアントの NetBackup クライアント名は、NetBackup サーバーへの接続に使用されるピアネームと一致する必要があります。NetBackup クライアント名がクライアントのホスト名で、ピアネームと一致する場合 (通常の場合)、この要件は満たされています。

ただし、クライアントが複数のイーサネットに接続する場合、またはゲートウェイを介して NetBackup サーバーに接続する場合、問題が発生します。

図 35-1 トークンリングクライアントからのリストア例



この例では、**client1**、**client2** および **client3** からのリストア要求は、TCP ゲートウェイを介してルーティングされます。ゲートウェイは、NetBackup サーバーへの接続にクライアントのホスト名ではなく自身のピアネームを使用するため、要求は NetBackup から拒否されます。クライアントは、自身のファイルもリストアできません。

問題を解決するには、次の手順を実行します。

- 1 ゲートウェイのピアネームを判断します。
 - 問題があるクライアントからリストアを試行します。この例では、次のようなエラーメッセージが表示され、要求が失敗する場合があります。


```
client is not validated to use the server
```
 - NetBackup の[問題 (Problems)]レポートを調べて、要求で使用されたピアネームを識別します。レポートのエントリは、次のようになります。


```
01/29/12 08:25:03 bpserver - request from invalid server or client client1.dvlp.null.com
```

 この例では、ピアネームは `client1.dvlp.null.com` です。

- 2 次のいずれかを実行します。

Windows の場合、ピアネームを判断した後、NetBackup プライマリサーバー上に次のファイルを作成します。

```
install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥peername
```

この例では、このファイルは次のとおりです。

```
install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥client1.dvlp.null.com
```

UNIX の場合: 次のファイルに対して touch コマンドを実行します。

```
/usr/opensv/netbackup/db/altnames/peername
```

この例では、このファイルは次のとおりです。

```
/usr/opensv/netbackup/db/altnames/client1.dvlp.null.com
```

3 *peername* ファイルを編集して、クライアント名を含めます。

たとえば、`client1.dvlp.null.com` ファイルを空のままにした場合、***client1***、***client2***、***client3*** はすべてそれぞれの NetBackup クライアント名の設定に対応するバックアップにアクセスできます。

p.1163 の「[1 つのクライアントによるリダイレクトリストアの実行の許可](#)」を参照してください。

このファイルに ***client2*** および ***client3*** という名前を追加すると、これらの 2 つのクライアントに NetBackup ファイルのリストアへのアクセス権が付与されますが、***client1*** には付与されません。

p.1164 の「[特定クライアントのファイルに対するリダイレクトリストアの許可](#)」を参照してください。

この例では、クライアントでの変更は必要ありません。

4 ファイルのリストアを行います。

altnames ファイルを使用したクライアントによるリダイレクトリストアをトラブルシューティングする方法の例

クライアントへのリダイレクトリストアで、`altnames` ファイルを使用してファイルのリストアを実行できない場合、次の手順でトラブルシューティングを行います。

Windows の場合:

1 NetBackup Request デーモンの次のデバッグログディレクトリを作成します。

```
install_path¥NetBackup¥logs¥bprd
```

2 プライマリサーバー上で、NetBackup Request デーモンを停止して、再起動します。サービスを再起動すると、このサービスは詳細モードで実行され、クライアント要求に関する情報が確実にログに記録されるようになります。

3 ***client1*** (要求元クライアント) 上で、ファイルのリストアを試行します。

4 プライマリサーバー上で、***client1*** によって使用されるピアネーム接続を識別します。

5 NetBackup Request デーモンの次のデバッグログを調べて、失敗した名前の組み合わせを識別します。

[すべてのログエントリ (All log entries)] レポートに記録されたエラーを調べます。または、NetBackup Request デーモンの次のデバッグログを調べて、失敗した名前の組み合わせを識別します。

```
install_path¥NetBackup¥logs¥bprd¥mmdyy.log
```

6 プライマリサーバーで、次のいずれかを実行します。

- `install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥No.Restrictions` ファイルを作成します。このファイルを作成すると、クライアントが NetBackup クライアント名の

設定を **client2** に変更することで、すべてのクライアントが **client2** のバックアップにアクセスできるようになります。

- `install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥peername` ファイルを作成します。このファイルを作成すると、**client1** が NetBackup クライアント名の設定を **client2** に変更することで、**client1** が **client2** のバックアップにアクセスできるようになります。
 - **client2** の名前を `install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥peername` ファイルに追加します。
 - **client1** は、**client2** のバックアップだけにアクセスできるようになります。
- 7 **client1** 上で、NetBackup クライアント名の設定を変更して、**client2** で指定されているクライアント名と一致させます。
 - 8 **client1** からファイルをリストアします。
 - 9 次の処理を実行します。
 - `install_path¥NetBackup¥logs¥bprd` とその内容を削除します。
 - NetBackup Web UI で、プライマリサーバーのホストプロパティを開きます。[ログ (Logging)] をクリックします。[ログを保持する日数 (Keep logs for days)] 設定のチェックマークをはずします。
 - 10 変更を永続的な設定にしない場合、次の操作を実行します。
 - `install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥No.Restrictions` を削除します (存在する場合)。
 - `install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥peername` を削除します (存在する場合)。
 - **client1** 上で、NetBackup クライアント名を元の値に戻します。

UNIX の場合:

- 1 NetBackup プライマリサーバー上で、VERBOSE エントリおよびログレベルを `bp.conf` ファイルに追加します。たとえば、

```
VERBOSE = 3
```

- 2 次のコマンドを実行して、`bprd` のデバッグログディレクトリを作成します。

```
mkdir /usr/openv/netbackup/logs/bprd
```

- 3 NetBackup サーバー上で、NetBackup Request デーモン `bprd` を停止し、次のコマンドを実行して、`bprd` を詳細モードで再起動します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bprdrege -terminate  
/usr/opensv/netbackup/bin/bprd -verbose
```

`bprd` を再起動すると、クライアント要求に関する情報が `bprd` によって確実にログに記録されるようになります。

- 4 *client1* 上で、ファイルのリストアを試行します。

- 5 NetBackup サーバー上で、*client1* によって使用されるピアネーム接続を識別します。

`bard debug` のログを調べて、失敗した名前の組み合わせを識別します。

[すべてのログエントリ (All log entries)] レポートに記録されたエラーを調べるか、または `bard debug` ログを調べて、失敗した名前の組み合わせを識別します。

```
/usr/opensv/netbackup/logs/bprd/log.date
```

- 6 NetBackup サーバーで、次のコマンドを入力します。

```
mkdir -p /usr/opensv/netbackup/db/altnames touch  
/usr/opensv/netbackup/db/altnames/No.Restrictions
```

このコマンドを実行すると、*client2* を指定するように NetBackup クライアント名の設定を変更することで、*client2* バックアップへのすべてのクライアントアクセスが許可されます。

- 7 次のファイルに対して `touch` コマンドを実行します。

```
/usr/opensv/netbackup/db/altnames/peername
```

このコマンドを実行すると、*client2* を指定するように NetBackup クライアント名の設定を変更することで、*client1* がすべての *client2* のバックアップにアクセスできるようになります。

- 8 *client2* を `/usr/opensv/netbackup/db/altnames/peername` ファイルに追加します。`peername` ファイルに追加すると、*client1* は、*client2* に作成されたバックアップだけにアクセスできるようになります。

- 9 *client1* 上で、ユーザーインターフェースの NetBackup クライアント名の設定を変更して、*client2* で指定されているクライアント名と一致させます。

- 10 *client1* にファイルをリストアします。

- 11 次の手順を実行します。

- VERBOSE エントリを、プライマリサーバー上の `/usr/opensv/netbackup/bp.conf` ファイルから削除します。

- `/usr/opensv/netbackup/logs/bprd` およびその内容を削除します。
- 12** リストアを実行する前の構成に戻します。
- `/usr/opensv/netbackup/db/altnames/peer.or.hostname` を削除します (存在する場合)。
 - `/usr/opensv/netbackup/db/altnames/No.Restrictions` を削除します (存在する場合)。
 - `client1` 上で、NetBackup クライアント名の設定を元の値に戻します。

アクセス制御リスト (ACL) があるファイルのリストアについて

アクセス制御リスト (ACL) とは、ファイルまたはディレクトリにアクセス権を付与する表です。それぞれのファイルまたはディレクトリには、ユーザーのアクセスを拡張または制限するためのセキュリティ属性を指定できます。

デフォルトでは、`nbtar (/usr/opensv/netbackup/bin/nbtar)` によって、ファイルおよびディレクトリデータとともに ACL もリストアされます。

ただし、次の場合は、ACL がファイルデータへリストアされません。

- クロスプラットフォームでリストアを行う場合。
- `nbtar` 以外のリストアユーティリティ (`tar`) がファイルをリストアするために使用される場合。

このような場合、NetBackup では、ACL 情報が、`root` ディレクトリ内に生成される一連のファイルに格納されます。これらのファイルでは、次の命名形式が使用されます。

`.SeCuRiTy. nnnn`

これらのファイルに対して削除または読み込みを実行し、ACL を手動で再生成できます。

メモ: 元のディレクトリが ACL 有効になった代替の復元を実行する場合、代替の復元のディレクトリも ACL 有効である必要があります。代替の復元のディレクトリが ACL 有効でなければ、復元は成功しません。

ACL をリストアせずにファイルをリストア

NetBackup Web UI を使用して、ACL をリストアせずにデータをリストアできます。宛先クライアントとバックアップ元のシステムの両方が Windows である必要があります。

ACL をリストアせずにファイルをリストアするには、次の条件を満たしている必要があります。

- クライアントのバックアップ時のポリシー形式が、MS-Windows である。

- リストアがサーバーから実行されている。このオプションは、スタンドアロンクライアント (NetBackup サーバーソフトウェアがインストールされていないクライアント) では利用できません。
- RBAC の管理者の役割または同様の権限を持つ役割が必要です。
RBAC の管理者もしくはデフォルトの物理クライアントの役割または同様の権限を持つ役割が必要です。
- バックアップの宛先クライアントとソースは、どちらもサポート対象の Windows OS レベルを実行するシステムである必要がある。このオプションは、UNIX クライアントでは無効です。

ACL をリストアせずにファイルをリストアするには、次の手順を使用します。

ACL をリストアせずにファイルをリストアする方法

- 1 NetBackup Web UI を使用して、プライマリサーバーにサインインします。
- 2 左側の[リカバリ (Recovery)]を選択します。
- 3 [標準 (Regular)]リカバリカードで[リカバリの開始 (Start recovery)]を選択します。
- 4 ポリシー形式[MS-Windows]を選択します。
- 5 リストア形式[通常バックアップ (Normal backups)]を選択します。
- 6 [ソースクライアント (Source client)]で、バックアップされたクライアントを選択します。
- 7 (オプション) 別のクライアントにリストア先を変更するには、[宛先クライアント (Destination client)]に名前を入力します。
- 8 [次へ (Next)]を選択します。
- 9 最新版以外のバックアップからファイルをリストアするには、次の手順を使用します。
最新のバックアップからリストアするか、特定のバックアップを選択できます。
 - クライアントのバックアップが、指定した日付範囲内である場合、NetBackup によって最新のバックアップに関する情報が右ペインに入力されます。左側でファイルを選択します。
 - 最新版以外のバックアップからファイルをリストアするには、次の手順を使用します。
 - [日付範囲 (Date range)]の横にある[編集 (Edit)]を選択します。次に、[バックアップ履歴の使用 (Use backup history)]を選択します。
 - 目的のバックアップを選択し、[適用 (Apply)]を選択します。
- 10 リストアするファイルを選択します。その後、[次へ (Next)]を選択します。
- 11 [リカバリオプション (Recovery options)]で、[アクセス制御属性なしでリストアする (Restore without access-control attributes)]を選択します。

- 12 リストアジョブのその他の選択を行います。その後、[次へ (Next)]を選択します。
- 13 [リカバリの開始 (Start recovery)]を選択します。

UNIX でのリストア中のファイルの元の **atime** の設定について

リストア中、各ファイルの **atime** は、**NetBackup** によってデフォルトで現在の時刻に設定されます。リストアされた各ファイルの **atime** を、**NetBackup** によって、そのファイルのバックアップが行われたときの値に設定されるようにすることができます。そのためには、次のファイルをクライアント上に作成します。

```
/usr/opensv/netbackup/RESTORE_ORIGINAL_ETIME
```

システム状態のリストア

システム状態には、レジストリ、COM+ クラス登録データベース、ブートファイルおよびシステムファイルが含まれます。サーバーがドメインコントローラである場合、データには **Active Directory** サービスデータベースおよび **SYSVOL** ディレクトリも含まれます。

メモ: 最適なリカバリ手順は、サーバーとその環境に関連するハードウェアおよびソフトウェアの多くの要因によって異なります。**Windows** の完全なリカバリ手順については、**Microsoft** 社のマニュアルを参照してください。

システム状態のリストアを行う前に、次の注意事項を確認してください。

- システム状態全体をリストアしてください。選択したファイルだけのリストアは行わないでください。
- システム状態のリダイレクトリストアを実行しないでください。システム状態はコンピュータごとに異なるため、システム状態を代替コンピュータへリストアすると、システムが使用できなくなる可能性があります。
- システム状態のリストア操作を取り消さないでください。この操作を取り消すと、システムが使用できない状態のままとなる可能性があります。
- システム状態をドメインコントローラにリストアする場合、**Active Directory** を終了しておく必要があります。

システム状態のリストア

システム状態をリストアするには、次の手順を使用します。

システム状態をリストアする方法

- 1 **Active Directory** をリストアするには、システムを再起動して、ブート処理中に **F8** キーを押します。**F8** キーを押すと、起動オプションのメニューが表示されます。リストア先のシステムが **Windows** ドメインコントローラの場合、再起動時に **F8** キーを押します。それ以外の場合は、手順 4 から始めてください。
- 2 起動オプションから[ディレクトリサービス復元モード]を選択して、ブート処理を続行します。
- 3 **NetBackup Client Service** (**Windows** の場合は **bpinetd**、**UNIX** の場合は **inetd**) が起動していることを確認します。アクティビティモニターまたは **Windows** サービスアプリケーションを使用します。
- 4 **NetBackup Web UI** を使用して、プライマリサーバーにサインインします。
- 5 左側の[リカバリ (**Recovery**)]を選択します。
- 6 [標準 (**Regular**)]リカバリカードで[リカバリの開始 (**Start recovery**)]を選択します。
- 7 ポリシー形式[**MS-Windows**]を選択します。
- 8 リストア形式[通常バックアップ (**Normal backups**)]を選択します。
- 9 [ソースクライアント (**Source client**)]で、バックアップされたクライアントを選択します。
- 10 (オプション) 別のクライアントにリストア先を変更するには、[宛先クライアント (**Destination client**)]に名前を入力します。
- 11 [次へ (**Next**)]を選択します。
- 12 最新版以外のバックアップからファイルをリストアするには、次の手順を使用します。
最新のバックアップからリストアするか、特定のバックアップを選択できます。
 - クライアントのバックアップが、指定した日付範囲内である場合、**NetBackup** によって最新のバックアップに関する情報が右ペインに入力されます。左側でファイルを選択します。
 - 最新版以外のバックアップからファイルをリストアするには、次の手順を使用します。
 - [日付範囲 (**Date range**)]の横にある[編集 (**Edit**)]を選択します。次に、[バックアップ履歴の使用 (**Use backup history**)]を選択します。
 - 目的のバックアップを選択し、[適用 (**Apply**)]を選択します。
- 13 [システム状態 (**System State**)]を選択します。その後、[次へ (**Next**)]を選択します。

- 14 [リストアターゲット (Restore target)]で、[元の位置にすべてをリストア (Restore everything to its original location)]を選択します。

異なるホストに対してシステム状態のリダイレクトリストアを実行しないでください。システム状態はコンピュータごとに異なります。システム状態を異なるコンピュータへリストアすると、システムが使用できなくなる可能性があります。
- 15 [リカバリオプション (Recovery options)]で、[既存のファイルの上書きを許可 (Allow overwrite of existing files)]を選択します。
- 16 リストアジョブのその他の選択を行います。その後、[次へ (Next)]を選択します。
- 17 [リカバリの開始 (Start recovery)]を選択します。
- 18 ネットワーク内に複数のドメインコントローラが存在する場合があります。Active Directory を他のドメインコントローラにレプリケートするには、NetBackup リストアジョブの完了後に、Active Directory の Authoritative Restore を実行します。

Active Directory の Authoritative Restore を実行するには、システム状態のデータをリストアした後で、サーバーを再起動する前に、ntdsutil ユーティリティを実行します。Authoritative Restore によって、データはすべてのサーバーに確実にレプリケートされます。

Authoritative Restore と ntdsutil ユーティリティについての追加情報が利用可能です。

詳しくは、Microsoft 社のマニュアルを参照してください。
- 19 後続のリストア操作を実行する前に、システムを再起動します。

ドメインコントローラで[ディレクトリサービス復元モード(Directory Services Restore Mode)]でブートしている場合、リストアの完了後に通常モードで再起動します。

VxFS ファイルシステムの圧縮ファイルのバックアップとリストアについて

ターゲットボリュームがファイルシステムの圧縮をサポートするとき、NetBackup は圧縮状態を維持しながら VxFS 圧縮ファイルのバックアップとリストアを行うことができます。

VxFS ファイルシステムでのファイルのバックアップ時には、NetBackup が圧縮ファイルを検出するたびに、[アクティビティモニター (Activity monitor)]にメッセージが表示されます。

```
Compress flag found for 'file_name'.
```

リストア時に、NetBackup は圧縮された形式で VxFS ファイルシステムにファイルをリストアします。

リストア先が VxFS 以外のファイルシステムの場合、NetBackup は解凍された形式でファイルをリストアします。ジョブの[詳細 (Details)]タブに次のメッセージが表示されます。

File '*file_name*' will not be restored in compressed form.

このメッセージは圧縮された形式でリストアすることができない最初のファイルにのみ表示されます。

メモ: 詳細レベルが 1 以上の場合に圧縮メッセージが表示されます。

ReFS のバックアップとリストアについて

NetBackup での Microsoft Resilient File System (ReFS) のサポートは自動的に行われ、追加の構成を必要としません。

最適化されたバックアップをリストアするには、バックアップ、アーカイブおよびリストアインターフェースの[最適化バックアップからリストア (Restore from Optimized Backup)]を使います。リストア対象としてファイルを個別に選択できます。

NetBackup では、Microsoft Resilient File System (ReFS) ファイルシステムのリダイレクトリストアがサポートされません。

[表 35-1](#) に、ReFS から NTFS へのバックアップとリストアの組み合わせと、それぞれの可否を示します。

表 35-1 ReFS のバックアップとリストア

ファイルシステムの組み合わせ	バックアップ	リストア
ReFS から ReFS	成功する場合	成功する場合
ReFS から NTFS	成功する場合	成功する場合
NTFS から ReFS	成功する場合	限定的に成功 リストアを成功させるには - NTFS バックアップを NTFS ファイルシステムへリストアします。 - サポートしていない ReFS アイテムをすべて削除します。 - ファイルを ReFS ファイルシステムにコピーします。

既知の問題

ReFS ベースのスナップショットがあるファイルのバックアップに関するエラーを含む既知の問題があります。現時点では、Microsoft 社では、API の互換性がないため、ReFS ベースのスナップショットを持つファイルのバックアップをサポートしていません。Microsoft 社はこの動作の文書化とサポートの提供に取り組んでおり、これは次の問題 ID で追跡されます。

- 文書化の問題#: 42324557
- バックアップ読み取りの問題#: 42295538

NetBackup サーバーの電源切断および再ブート

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup サーバーの停止と再起動](#)
- [すべての NetBackup サービスとデーモンの停止と起動](#)
- [NetBackup サーバーの再起動](#)
- [NetBackup メディアサーバーの再起動](#)

NetBackup サーバーの停止と再起動

NetBackup サーバーを停止および再起動する場合、次の手順で行うことをお勧めします。

サーバーを停止する方法

- 1 左側で、[アクティビティモニター (Activity monitor)]を選択します。[ジョブ (Jobs)] タブを選択し、ジョブが実行中でないことを確認します。
- 2 実行中のデーモンを選択し、[処理 (Actions)]、[停止 (Stop)]の順に選択します。
- 3 コマンドラインでは、次のコマンドを実行します。

Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥admincmd¥bprdreq -terminate
```

UNIX の場合:

```
/usr/opensv/netbackup/bin/admincmd/bprdreq -terminate
```

bprdreq は、メディアサーバーでは実行されません。

4 システム停止コマンドを実行します。

インストール処理中に、適切な起動および停止スクリプトが
`/usr/opensv/netbackup/bin/goodies` から `/init.d` にコピーされ、適切な `/rc`
ディレクトリからのリンクが作成されます。

システムの起動スクリプトを使用して、システムが起動する際に **Media Manager** および **NetBackup** デーモンを起動します。停止スクリプトを使用して、システムを停止する際にデーモンを終了します。

『[NetBackup インストールガイド](#)』には、起動スクリプトおよび停止スクリプトについて詳しい情報が含まれています。

5 Windows の場合:

```
install_path¥NetBackup¥bin¥bpdwn
```

6 サーバーを停止します。

すべての NetBackup サービスとデーモンの停止と起動

NetBackup のすべてのサービスとデーモンの停止と起動を行うには、コマンドラインで次のコマンドを入力します。

Windows の場合:

■ すべての サービスを停止する方法NetBackup

```
install_path¥NetBackup¥bin¥bpdwn
```

■ すべての サービスを起動する方法NetBackup

```
install_path¥NetBackup¥bin¥bpup
```

UNIX の場合:

■ すべての デーモンを停止する方法NetBackup

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bp.kill_all
```

■ すべての デーモンを起動する方法NetBackup

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bp.start_all
```

NetBackup サーバーの再起動

NetBackup サーバーを再起動するには、次の手順を実行します。

NetBackup プライマリサーバーを再起動する方法

- 1 システムを再起動します。
- 2 Windows の場合: 必要な NetBackup サービスが自動的に起動するように設定されていない場合、次の手順を実行します。
 - Windows デスクトップで、Windows の[サービス]アプレットを起動します。
 - NetBackup Client Service を起動します。
 - NetBackup Device Manager サービスを起動します。NetBackup Volume Manager サービスも自動的に起動されます。
 - NetBackup Request デーモンサービスを起動して、NetBackup Database Manager サービスを起動します。
- 3 UNIX の場合: 次のスクリプトを実行して、bprd、bpdbm、vmd が実行されていることを確認します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bpps -a
```

- 4 UNIX の場合: すべての NetBackup デーモンを起動します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bp.start_all
```

NetBackup メディアサーバーの再起動

NetBackup メディアサーバーを再起動するには、次の手順を実行します。

NetBackup メディアサーバーを再起動する方法

- 1 システムを再起動します。
- 2 Windows の場合: 必要な NetBackup サービスが自動的に起動するように設定されている場合、サービスが起動します。
必要な NetBackup サービスが自動的に起動するように設定されていない場合、次のとおり実行します。
 - Windows デスクトップで、Windows の[サービス]アプレットを起動します。
 - NetBackup Client Service を起動します。
 - NetBackup Device Manager サービス (ltid) を起動します。NetBackup Volume Manager サービス (vmd) も起動されます。

- 3 UNIX の場合: `ltid` が実行されていない場合は、起動します。
 - 左側で、[アクティビティモニター (Activity monitor)]を選択して、次に[プロセス (Processes)]タブを選択します。
 - `ltid` を選択し、[開始 (Start)]を選択します。
- 4 UNIX の場合: コマンドラインから、次のコマンドを実行します。

```
/usr/opensv/volmgr/bin/ltid
```

個別リカバリテクノロジーについて

この章では以下の項目について説明しています。

- **Active Directory** 個別リカバリテクノロジー用 **Network File System (NFS)** のインストールおよび構成
- **Network File System (NFS)** 用サービスの構成について
- 個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用するバックアップおよびリストアのための **UNIX** メディアサーバーおよび **Windows** クライアントの構成
- **NBFS** 用の個別のネットワークボートの構成

Active Directory 個別リカバリテクノロジー用 Network File System (NFS) のインストールおよび構成

NetBackup では、個別リカバリテクノロジー (GRT) および Network File System (NFS) を使用して、データベースのバックアップイメージに存在する次のような個々のオブジェクトをリカバリします。

- **Active Directory** データベースバックアップのユーザーアカウント
- **Exchange** データベースバックアップの電子メールメッセージまたは電子メールフォルダ
- **SharePoint** データベースバックアップの文書

NetBackup クライアントは、NetBackup メディアサーバーへの安全な接続を介して、マッピングされたドライブをマウントしてドライブにアクセスします。クライアント要求は、NetBackup File System (NBFS) サービスまたは NBFS 介して NetBackup メディアサーバーで処理されます。

GRT をサポートする複数の NetBackup エージェント (Exchange、SharePoint、Active Directory など) は、同じメディアサーバーを使用できます。

Network File System (NFS) 用サービスの構成について

Active Directory から個別の項目をリストアするには、NetBackup メディアサーバーとすべての Active Directory ドメインコントローラまたは ADAM/LDS ホストで NFS 用サービスを構成する必要があります。

表 37-1 Windows 2012、2012 R2 以降での NFS の構成

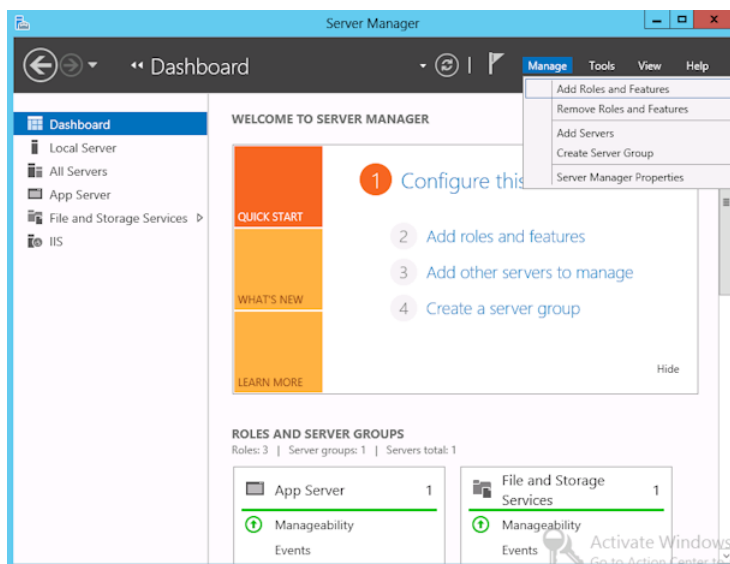
手順	処理	説明
手順 1	メディアサーバーで NFS を構成します。	メディアサーバーで次の操作を実行します。 ■ ONC/RPC Portmapper サービスが存在する場合は停止して無効にします。 ■ NFS を有効にします。 p.1184 の「メディアサーバーでの Network File System (NFS) 用サービスの有効化」を参照してください。 ■ Server for NFS サービスを停止します。 p.1192 の「Server for NFS の無効化」を参照してください。 ■ Client for NFS サービスを停止します。 p.1190 の「メディアサーバーでの Client for NFS の無効化」を参照してください。 注意: Active Directory ドメインコントローラまたは ADAM/LDS ホストがメディアサーバーに存在する場合、Client for NFS を無効にしないでください。 ■ サーバーの再起動時にポートマップサービスが自動的に起動するように構成します。 コマンドプロンプトから次のコマンドを実行します。 <code>sc config portmap start= auto</code> このコマンドは [SC] ChangeServiceConfig SUCCESS という状態を返します。
手順 2	すべての Active Directory ドメインコントローラまたは ADAM/LDS ホストで NFS を構成します。	すべての Active Directory ドメインコントローラまたは ADAM/LDS ホストで次の手順を実行します。 ■ クライアントで NFS を有効にします。 p.1187 の「クライアントでの Network File System (NFS) 用サービスの有効化」を参照してください。 ■ Server for NFS サービスを停止します。 p.1192 の「Server for NFS の無効化」を参照してください。

メディアサーバーでの Network File System (NFS) 用サービスの有効化

個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用したバックアップから個々の項目をリストアするには、メディアサーバーで NFS 用サービスを有効にする必要があります。この構成が完了すると、不要な NFS サービスを無効にできます。

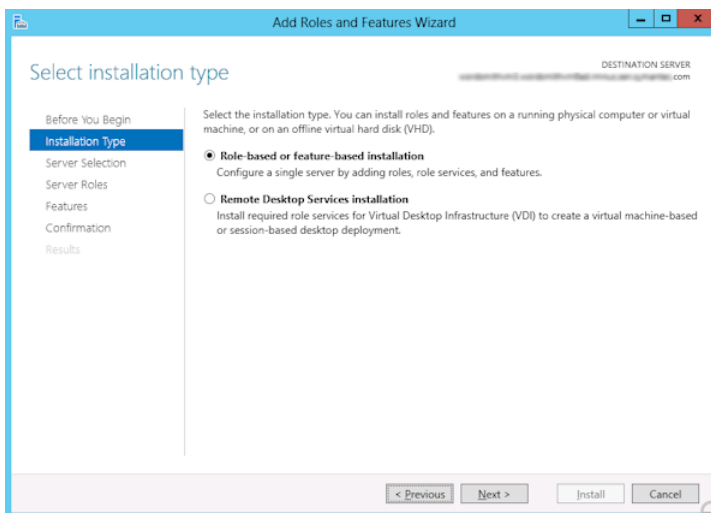
メディアサーバーで **Network File System (NFS)** 用サービスを有効にするには

- 1 サーバーマネージャを開きます。
- 2 [管理 (Manage)]メニューから、[役割と機能の追加 (Add Roles and Features)]をクリックします。

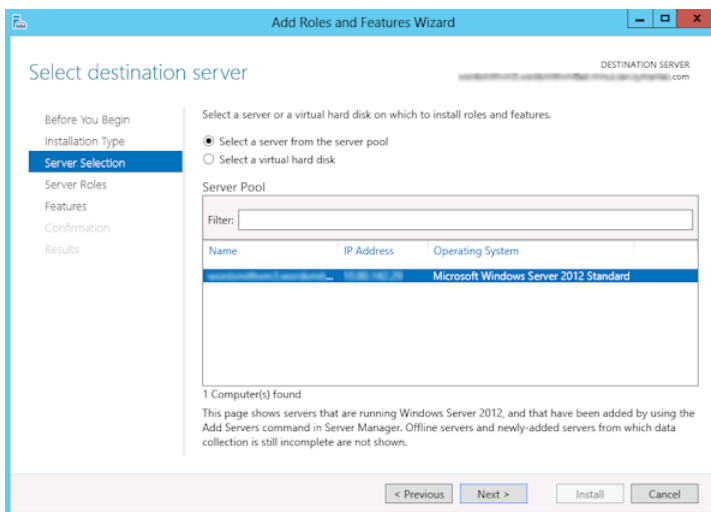


- 3 [役割と機能の追加ウィザード (Add Roles and Features Wizard)]の[開始する前に (Before You Begin)]ページの[次へ (Next)]をクリックします。

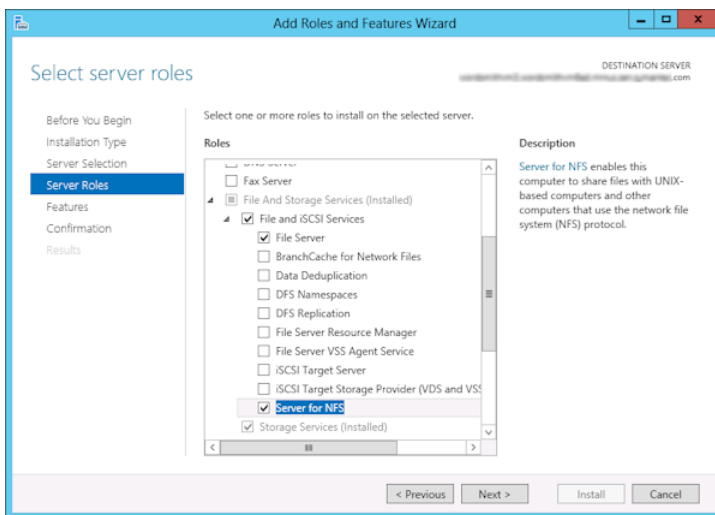
- 4 [インストールの種類を選択 (Select installation type)] ページで、[役割ベースまたは機能ベースのインストール (Role-based or feature-based installation)] を選択します。



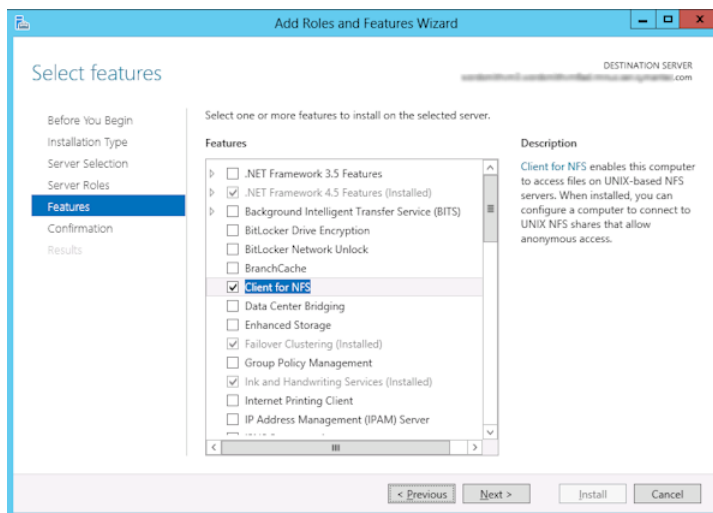
- 5 [次へ (Next)] をクリックします。
- 6 [サーバーの選択 (Sever Selection)] ページで、[サーバープールからサーバーを選択 (Select a server from the server pool)] をクリックし、サーバーを選択します。
[次へ (Next)] をクリックします。



- 7 [サーバーの役割 (Server Roles)] ページで、[ファイルとストレージサービス (File and Storage Services)] および [ファイルと iSCSI サービス (File and iSCSI Services)] を展開します。
- 8 [ファイルサーバー (File Server)] および [NFS のサーバー (Server for NFS)] をクリックします。メッセージが表示された場合、[機能の追加 (Add Features)] をクリックします。[次へ (Next)] をクリックします。



- 9 メディアサーバーが **Active Directory** のドメインコントローラまたは **ADAM/LDS** ホストでもある場合、**機能 (Features)** のページで、**[NFS クライアント (Client for NFS)]** をクリックします。**[次へ (Next)]** をクリックします。



- 10 **[確認 (Confirmation)]** ページで、**[インストール (Install)]** をクリックします。

- 11 次のように、不要なサービスを無効にします。

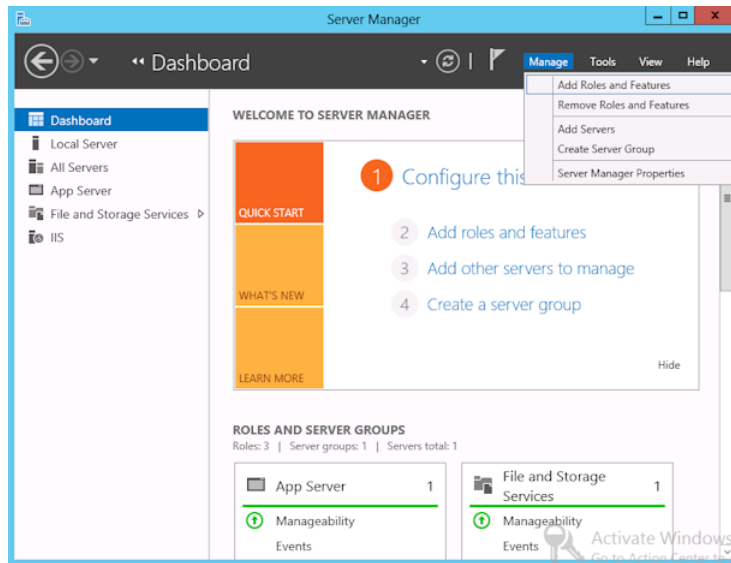
- メディアサーバーおよび **Active Directory** ドメインコントローラまたは **ADAM (LDS)** ホストとして機能する 1 つのホストを使用している場合は、**Server for NFS** サービスを無効にすることができます。
p.1192 の「[Server for NFS の無効化](#)」を参照してください。
- **NetBackup** メディアサーバーとしてのみ機能するホストについては、**Server for NFS** および **Client for NFS** サービスを無効にすることができます。
p.1192 の「[Server for NFS の無効化](#)」を参照してください。
p.1190 の「[メディアサーバーでの Client for NFS の無効化](#)」を参照してください。

クライアントでの Network File System (NFS) 用サービスの有効化

個別リカバリテクノロジー (GRT) を使ったバックアップから個々の項目をリストアするには、**NFS** 用サービスを有効にする必要があります。この構成をすべての **Active Directory** ドメインコントローラまたは **ADAM/LDS** ホストで完了すると、不要な **NFS** サービスを無効にすることができます。

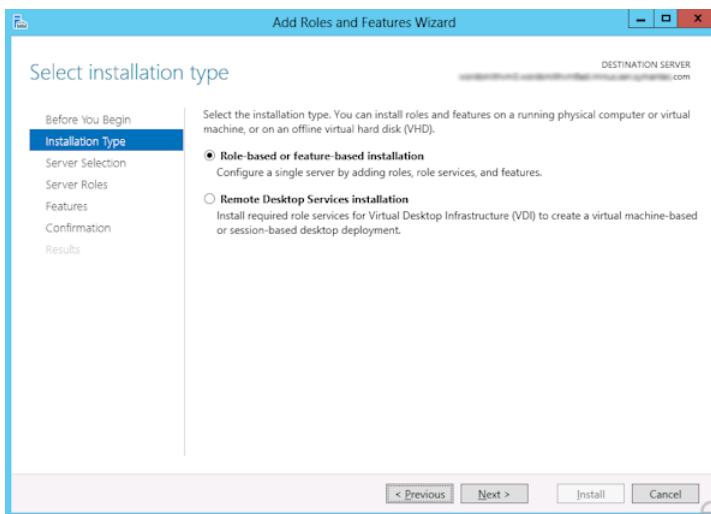
Windows クライアントで Network File System (NFS) 用サービスを有効にするには

- 1 サーバーマネージャを開きます。
- 2 [管理 (Manage)]メニューから、[役割と機能の追加 (Add Roles and Features)]をクリックします。

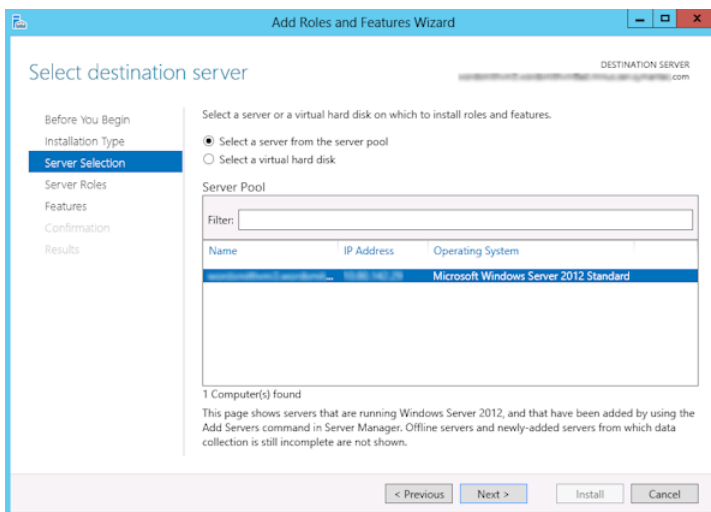


- 3 [役割と機能の追加ウィザード (Add Roles and Features Wizard)]の[開始する前に (Before You Begin)]ページの[次へ (Next)]をクリックします。

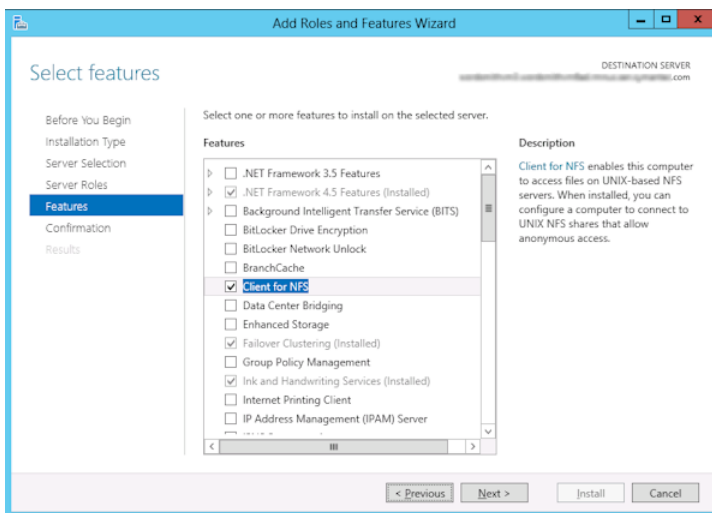
- 4 [インストールの種類を選択 (Select installation type)] ページで、[役割ベースまたは機能ベースのインストール (Role-based or feature-based installation)] を選択します。



- 5 [次へ (Next)] をクリックします。
- 6 [サーバーの選択 (Sever Selection)] ページで、[サーバープールからサーバーを選択 (Select a server from the server pool)] をクリックし、サーバーを選択します。
[次へ (Next)] をクリックします。



- 7 [サーバーの役割 (Server Roles)] ページで、[次へ (Next)] をクリックします。
- 8 [機能 (Features)] ページで、[NFS のクライアント (Client for NFS)] をクリックします。[次へ (Next)] をクリックします。



- 9 [確認 (Confirmation)] ページで、[インストール (Install)] をクリックします。

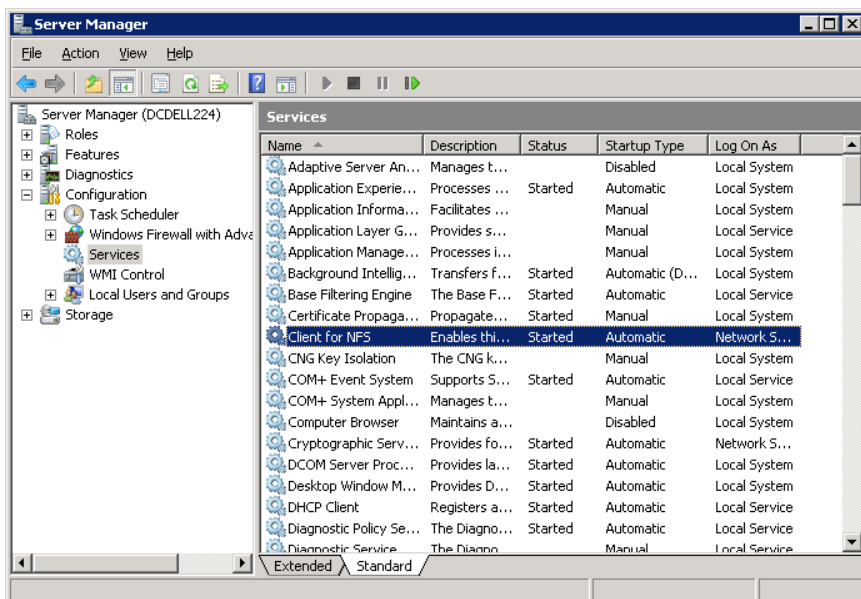
メディアサーバーでの Client for NFS の無効化

NetBackup メディアサーバーとしてのみ機能するホストで NFS 用サービスを有効にした後、Client for NFS を無効にできます。

NetBackup メディアサーバーで Client for NFS を無効にする方法

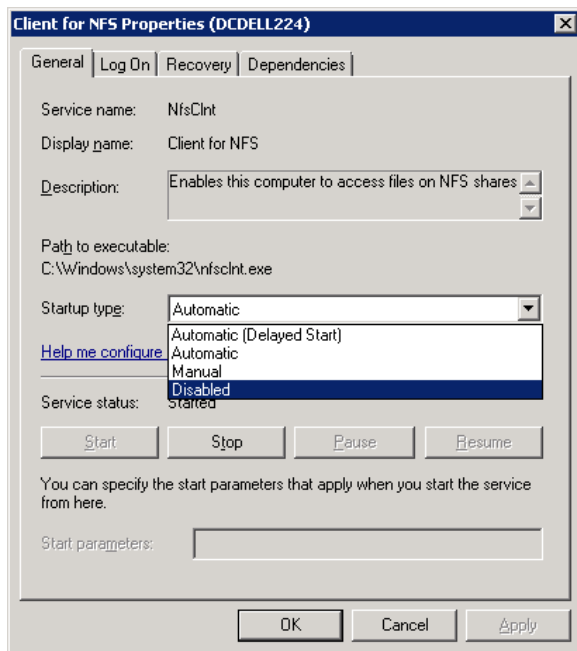
- 1 サーバーマネージャを開きます。
- 2 左ペインで、[構成] を展開します。

- 3 [サービス]をクリックします。



- 4 右ペインで、[Client for NFS]を右クリックして、[停止]をクリックします。
- 5 右ペインで、[Client for NFS]を右クリックして、[プロパティ]をクリックします。

- 6 [Client for NFS のプロパティ]ダイアログボックスの[スタートアップの種類]リストで[無効]をクリックします。



- 7 [OK]をクリックします。

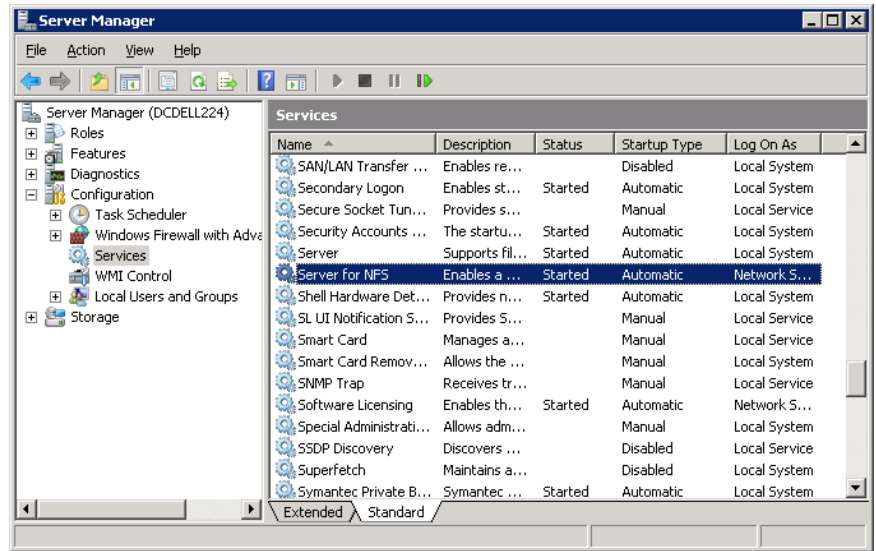
Server for NFS の無効化

メディアサーバーおよび Active Directory ドメインコントローラまたは ADAM (LDS) ホストで NFS 用サービスを有効にすると、Server for NFS を無効にすることができます。

Server for NFS を無効にする方法

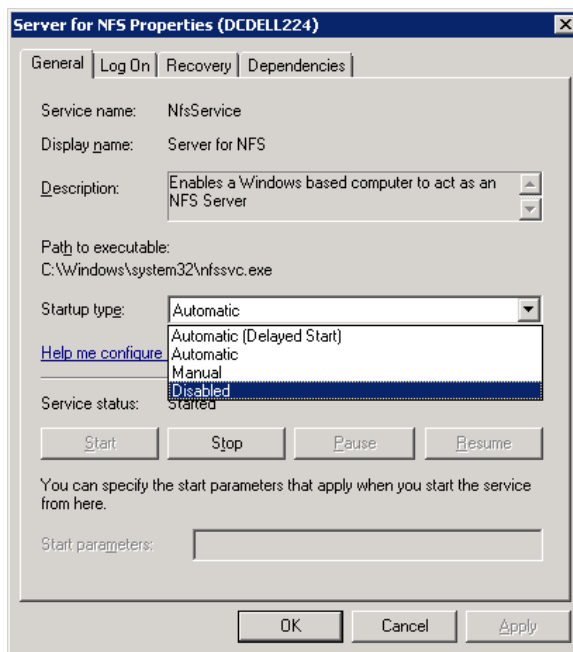
- 1 サーバーマネージャを開きます。
- 2 左ペインで、[構成]を展開します。

- 3 [サービス]をクリックします。



- 4 右ペインで、[Server for NFS]を右クリックして、[停止]をクリックします。
- 5 右ペインで、[Server for NFS]を右クリックして、[プロパティ]をクリックします。

- 6 [Server for NFS のプロパティ] ダイアログボックスの[スタートアップの種類]リストで[無効]をクリックします。



- 7 [OK]をクリックします。
- 8 メディアサーバーおよびすべての Active Directory ドメインコントローラまたは ADAM (LDS) ホストに対してこの手順を繰り返します。

個別リカバリテクノロジー (GRT) を使用するバックアップおよびリストアのための UNIX メディアサーバーおよび Windows クライアントの構成

UNIX メディアサーバーと Windows クライアントを使う場合に個別リカバリテクノロジー (GRT) を使うバックアップとリストアを実行するには、次の構成を実行します。

- メディアサーバーが個別リカバリをサポートするプラットフォームにインストールされていることを確認します。
サポート対象プラットフォームについて詳しくは、次の URL にある『NetBackup Enterprise Server and Server - OS Software Compatibility List』を参照してください。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100040093>

- UNIX メディアサーバーには、他の構成は必要ありません。
- すべての Active Directory ドメインコントローラまたは ADAM/LDS ホストで NFS を有効にするか、インストールします。
p.1184 の「メディアサーバーでの Network File System (NFS) 用サービスの有効化」を参照してください。
p.1187 の「クライアントでの Network File System (NFS) 用サービスの有効化」を参照してください。
- NBFSD 用に個別のネットワークポートを構成できます。
p.1195 の「NBFSD 用の個別のネットワークポートの構成」を参照してください。

NBFSD 用の個別のネットワークポートの構成

NBFSD はポート 7394 で実行されます。社内で別のサービスが標準 NBFSD ポートを使用している場合は、別のポートにサービスを構成できます。次の手順では、デフォルト以外のネットワークポートを使用するように NetBackup サーバーを構成する方法について説明します。

NBFSD 用の個別のネットワークポートを構成する方法 (Windows サーバー)

- 1 NetBackup サーバーがインストールされているコンピュータに管理者 (Administrator) としてログオンします。
- 2 レジストリエディタを開きます。
- 3 次のキーを開きます。:

HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Veritas¥NetBackup¥CurrentVersion¥Config

- 4 FSE_PORT という名前で DWORD 値を新規作成します。
- 5 新しい値を右クリックして、[修正]をクリックします。
- 6 [値のデータ]ボックスに、1 から 65535 のポート番号を入力します。
- 7 [OK]をクリックします。

NBFSD 用の個別のネットワークポートを構成する方法 (UNIX サーバー)

- 1 NetBackup サーバーがインストールされているコンピュータに root ユーザーとしてログオンします。
- 2 bp.conf ファイルを開きます。
- 3 次のエントリを追加します。XXXX には、1 から 65535 のポート番号を整数で指定します。

FSE_PORT = XXXX